
Raison d'etre

シール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R a i s o n d ' e t r e

【Nコード】

N 7 3 2 4 J

【作者名】

シール

【あらすじ】

女性しか発現しない筈の超能力に目覚めた少年、桜井優は超能力者だけで構成された部隊、特殊戦術中隊に入隊を果たす。彼を待ち受けていたのは、過酷な戦闘と甘い誘惑だった!？異形の怪物と果てのない闘争を続ける近未来の日本を舞台にした現代戦記風のSFアクションです。

シヨタ主人公、主人公最強、ハーレム要素を強く含みます。

プロローグ

柊沙織ひいらぎ さおりは、その華奢な身体に不釣り合いな小銃を抱え、半壊した街を駆けていた。

「私しか、いない。私が、やらなくちゃ」

荒い息の中、呪文のように同じ言葉が繰り返される。

不意に沙織は足を止め、上空を見上げた。粉塵で霞む青空に浮かんだ数多の影が瞳に映る。

沙織は湧きあがる恐怖に耐えて、天を駆ける影の群れに小銃を向けた。銃声とともに翠の光条が空に吸い込まれていく。沙織は着弾を確認せず、再び死んだ街を駆け始めた。

前方に見える瓦礫の影で何かが動く。

生存者。

沙織は上空を旋回する影のことも忘れ、無我夢中でその場に向かった。瓦礫の山を登り、息を切らせながら叫ぶ。

「大丈夫ですか！」

影はまだ若い女と、煤だらけの赤ん坊だった。

「あ……」

女の疲れ切った瞳が、沙織の姿を認めた途端恐怖に揺れる。それを見て、沙織は差し伸べかけた手をゆつくりと下ろした。

「このまま南へ真つすぐ行けば、展開中の自衛軍と合流できます。早く避難してください」

拒絶されたことに耐えられなくて、沙織は事務的な口調で告げ、背中に装着した機械翼を展開させた。足が地を離れ、重力から解き放たれる。

『感傷に浸っている場合ではない』

通信機から、上官である女性の冷淡な言葉が届く。沙織は涙をこらえて頷いた。

「はい」

沙織は震える身体を無理やり抑えつけ、空を支配する侵略者達に
たった一人で立ち向かっていった。

1章 1話 神条奈々

物心ついた時から、僕の国は戦争を続けている。

正確には、戦争という表現は妥当ではないらしい。だって、相手は国家ではないから。それどころか、人間ですらもない。亡霊と呼ばれる怪物を相手に、僕の国は八年もの間闘いを続けている。学校の教科書では「闘争」という言葉が使われていた。

この亡霊との闘争について、僕は良く知らない。そして、それは僕だけじゃない。皆、詳しい事は何も知らない。もしかしたら誰も知らないのかもしれない、とたまに思う。

「日本固有の領土である白流島を長期に渡って不法占拠し続ける生命体」

教科書では、亡霊について簡素にそう説明されていた。それ以上の説明は、誰もしてくれない。多分、亡霊が何なのか、誰もわかっていないんだと思う。でも、わかってなくても問題なかった。僕達には関係のない事だから。

僕が小さい頃は、テレビの向こうに燃える街がよく映し出されていた。煤だらけの瓦礫の山。空を覆う怪物の群れ。対空砲の咆哮。叫ぶリポーター。

でも、僕が大きくなるにつれて、そうした報道は減っていった。亡霊対策室と呼ばれる情報機関が設立されて、亡霊による被害が急速に収まっていったから。

その機関のトップは若い女性だった。とても綺麗な人だった。設立された当初は毎日のように彼女がカメラの前に立って、フラッシュを浴びていた。その女性はいつも仮面のような笑顔を浮かべていて、それが僕にはとても寂しそうに見えた。

その女性が、今、僕の目の前に立っている。記憶の中とは違う、柔らかな笑みを浮かべて。

「はじめまして、桜井優君。特殊戦術中隊への入隊を歓迎します」

彼女はそう言っつて、手を差し出した。僕は迷わず、その手を取った。

とても長い闘いが、ここから幕を開けます。

1章 救世主

「桜井優と言いますっ！ よろしくお願ひしますっ！」

清潔感のある白を基調とした部屋に、僅かに上擦った桜井優の声が響いた。それに呼応するように数多の拍手が室内に木霊する。優は安堵の笑みを浮かべ、深々と下げていた頭を勢いよく上げた。

優の目の前には、彼と同世代と思わしき高校生くらいの少女達が整列している。およそ三十人。その全てが女性だった。

「前期初級訓練課程を終え、今日から正式に第一小隊に配属される事になってる。合同訓練にも参加してもらおうから、何かあったら率先して手を貸してあげるように」

優の隣で、神条奈々（しんじょう なな）がよく通る声で補足する。

亡霊対策室・総司令官、神条奈々。女性にしては背が高く、腰まで届く黒髪と人形のように整った鼻筋が印象的な女性だった。

対照的に、奈々の隣に立つ桜井優は十六歳という年齢の割に身長が低く、奈々と顔一つ分ほどの身長差がある。幼さを多分に残した彼の身体は酷く華奢で、顔も身体に比例するように中性的な造形をしている。加えて、遠目に見れば少女と見間違えるような雰囲気があった。

奈々は一度だけ隣の優をチラリと見た後、すぐに少女たちに向き直った。

「今は簡単な紹介だけ。これから彼には後期初級訓練課程のカリキュラムを消化してもらおう予定がある。後日正式な歓迎の場を設けるけど、何か質問があれば今のうちに済ませて」

奈々がそう言うと、室内が僅かにざわめく。そして、部屋の後方にいた一人の少女が手をあげた。肩まで届く茶髪に、活発な雰囲気纏っている。

「歳はいくつ？」

優は一度だけ隣の奈々に視線を向けてから、その質問に答えた。

「十六歳です」

途端、室内に驚きの声が反響する。

「二回り年下と思ってた……」

ざわめきの中からそんな呟きが聞こえ、優は引きつった笑みを浮かべた。

「彼女はいますかあ？」

前列にいた長身の女性がからかうように言う。同時に、周囲から黄色い声があがった。

「そういう質問はしないように」

奈々が横から口を出す。その援護射撃に優は安堵の息をついた。

「大した質問がないようなら、これで切りあげましょう。そういう質問は後日、個人的にしなさい。今日はこれで解散。優君だけ、私と一緒に来てくれる？」

「はい」

優が頷くと、奈々はさつさと戸口に向かって歩き始めた。室内の騒音が増大する。優は室内を一度だけ眺めてから、奈々の後を追って廊下に出た。廊下も白で統一され、どこか無機質な印象を受ける。「少し、うるさいでしょう？」

廊下に出て早々、奈々が言う。優は曖昧な笑みを浮かべた。

「女子が静かすぎると、怖いです」

「それは言える。君以外は全員女性だから、色々とやりづらいかもしれない。何か困った事があつたら遠慮なく言ってちょうだい」

「はい」

頷きながら、エレベーターに乗る。奈々が黙り込んだ為、優も口を閉ざした。

エレベーターが動き出す。

微かな駆動音。

優は奈々の綺麗な横顔をじつと見上げた。その地位に反して異常とも言える若さと美貌。整いすぎた鼻筋からはどこか冷徹な印象を受け、奇妙な威圧感を覚える。周囲の空気を変えるほどの容姿は、人を従える立場の人間として非常に恵まれた素質と言えるだろう。神奈奈々は生まれながらにしての統率者だった。

奈々の顔を見惚れていた事にふと気づき、優はそつと奈々から視線を外した。

奈々と出会ってから一週間経ったというのに、一向に慣れる様子がない。そこまで考えて、もう一週間経ったのか、と優は感嘆に浸った。

桜井優には、超感覚的知覚（ESP）と呼称される能力がある。その能力を持った者だけが集められる特殊戦術中隊に勧誘を受けたのが、一週間前の事だった。

特殊戦術中隊の目的は亡霊の排除である。つまり、それに属した優は軍人の卵ということになる。もちろん、まだ十六歳である彼は法的には軍人として扱われないし、そもそも彼の国の憲法は軍隊の存在を認めていない。故に、建前上は公務員という立場が与えられていた。解釈に政治的判断が多分に反映される国家は、往々にしてまともではない。彼の国もその例に漏れず、まともな国ではなかった。長期に渡って戦争が続くことよって、憲法は形骸化し、先軍的な思想が広がり始めていた。古い体制のまま、新しい解釈で誤魔化されていく歪。ただ、桜井優はまだ十六歳の子どもに過ぎず、そうした背景などは一切考慮せず、入隊を決意した。幸い、彼の国はまだ完全に腐り落ちてはいなくて、入隊に関しては本人の意思が尊重されることになっていた。

入隊してから一週間で前期初級訓練カリキュラムと呼ばれる過程を修了し、今日から配属される所属部隊への挨拶を行ったのが数分前の出来事。そして、今から後期初級訓練カリキュラムに入るところだった。

エレベーターの扉が横に開く。奈々が一步踏み出したのを確認してから、優もそれに続いた。

エレベーターの外は吹き抜けになったエントランス・ホールだった。そのホールを奈々が真っすぐ横断していく。取り残されないように、優は足を速めて奈々の後を追った。

エントランス・ホールの裏から外に出る。そこは、野外の射撃訓練場だった。冷たい秋風が頬を撫でる。

「今日から、実際に火器を扱って貰う事になる。安全の為、指示通りに行動すること」

「はい」

射撃場の奥にいた男が二挺の小銃を抱えてやってくる。奈々は男から小銃を受け取り、一挺の小銃を優に渡した。ずっしりとした重さが両腕にかかる。その小銃は驚くほど手に馴染んだ。そして、奇妙な懐かしさを覚える。その不思議な感覚に、優は首を傾げた。

「どうしたの？」

小銃をじっと見つめたまま固まる優に、奈々が心配そうな声をかける。優は顔をあげて、何でもありません、と答えた。

「前期過程で習ったはずだけど、これがフレイニングと呼ばれる小銃。実弾は利用しないから暴発の心配はいらないし、装填する必要もない。初心者向けの火器と言える」

奈々が安全装置を外す。

「まず、安全装置を外して」

優は奈々の動作を真似て、小銃の安全装置を外した。カチャリと小気味良い音が響く。

「それで、構える時はこう。ここを肩に当てて、安定を図る。」
奈々が遠くの的に向かって小銃を構える。優もそれに続いた。

「そう、それで、頬をストックに密着させて。そう。そのまま的を狙って撃ってみて」

優は思わず奈々を見た。

「あの、どうやって撃つんですか？」

「エネルギーを込めて、引き金を引く。それだけ。小銃に取り付けられた供給機構が勝手にESPに反応するから、少し力を込めるだけで良い」

言われた通り、優は力を込めて引き金を引いた。発砲音とともに小銃から翡翠の閃光が走る。そして、小さな反動。優は反射的に目を瞑った。

「……初めはこんなものだから、気にしないように。訓練を重ねるうちに上手くなるから、頑張ってね」

微かに落胆の色が混じった奈々の声。

目を開けると、的から何メートルも離れた位置から煙があがっていた。

優は素直に頷いて、もう一度小銃を構えた。

よくの的を狙って引き金を引くと、銃声とともに的が弾け飛んだ。

「良い狙いだわ」

後ろから僅かに弾んだ奈々の声。優は小銃を下ろして、首を振った。

「……二つ隣の的を狙ったんです」

神奈奈々には、病的とも言つべき思想的方向性がある。彼女は幼い頃から雑音に対して異常なまでの嫌悪感を抱いていた。雑音^{ノイズ}。

観測という行為に隷属する物理的なノイズ。認知という行為に隷属する認知的なノイズ。そうした雑音に対して、ある種の恐怖感さえ抱いていた。そうした恐怖感から逃れる為、ある種の強迫観念に駆られて奈々は少しでもノイズをキャンセルする方法を探し、実践

した。その価値観が、奈々という人格を作り上げていった

故に、はじめてそれが観測された時、奈々はそれをそのまま認めた。友人のように不必要に笑い飛ばしたり、大袈裟に騒いだりしなかった。それらは正しい認識の障害にしかならなかったし、有効的な方法ではなかった。奈々は、それを常識的な価値基準によって解釈しようとはせず、そういうものだとのまま認識することにした。

亡霊。人ではない、異形の侵略者。

当時、奈々は防衛大学の二年生だった。故にそれが現れた時、彼女は自衛隊の今後の在り方が変わる事を早くに予期した。それは彼女の友人達も同様だったようで、防衛大学から多くの退学者が出た。奈々は親の反対を押しきってそのまま残留した。

あらゆる経済活動が新たな対応策に追われた。警察・消防・保険・宗教・医療・軍事、数えきれない変化が日本を覆った。奈々は激動の時代で青春を送った。

そうやって、人々は徐々にそれに馴染んでいった。誰もがそれを現実と認めざるをえなかった。そうした間に奈々は防衛大を首席で卒業した後、亡霊対策室の司令官として迎え入れられた。

「彼は普通の男の子よ」

司令官としての立場に就いて六年経った今、奈々は組織を運用する立場にいる。奈々は廊下を歩きながら、隣を歩く副司令官の長井加奈に向けてそう言った。

「彼の持つESPは平均を僅かに上回っているだけ。加えて、射撃も人並み。メディアが騒ぐほど、特異な点は見当たらない」

「皆、きっかけを待ってるんですよ。彼をきっかけだと思いたいです」

加奈がそう言う。奈々は憂鬱そうに首を振った。

「性別が変わっただけで、何かが変わる訳じゃない。過度な期待は彼の負担にしかない」

「そうですね。でも、希望を捨てる必要もありません」

「……そうね」

奈々は頷いてから、加奈の言う希望とは何に対する希望だろう、と考えた。

闘争が終わる希望？

まさか、と思う。八年間にも渡る闘争は、未だ終わる兆しを見せない。

八年間。それだけ闘争が続けば、経済的な疲弊は隠しきれない。貿易に依存した産業は深刻な影響を受け、莫大な失業者を生み出している。輸出国家である日本国の体力は、闘争を続ける上で低下し続けている。闘争が続けば続くほど、不利な状況に追い込まれていくのだ。

奈々は憂鬱な気持ちで、薄暗い廊下を進んだ。

桜井優は、ポツンと野原に立っていた。ふと、晴れ渡る空を見上げる。どこまでも透き通る蒼。優は視線を落とし、後ろを振り返った。少し離れた所に、同じ第一小隊の少女たちが集まっている。そして、彼女たちの背中には巨大な翼が生えていた。機械翼。亡霊との空戦を実現する為の戦術兵器。

早く小隊に慣れる為にも集団の少女たちへ積極的に話しかけた方がいいのかもしれないが、はじめての正式な訓練である為、緊張してそれどころではなかった。

「桜井くん、これを」

後ろから、落ちついた男性の声。振り返ると、作業服を着たエンジニア・スタッフが機械翼を両手で抱え、前に差し出していた。優は黙ってそれを受け取った。

機械翼を用いた飛行訓練。それが今日のカリキュラムだった。空を飛ぶという事に子どものような期待を覚える一方で、墜落したらどうなるのだろう、と現実的な不安が押し掛かってくる。

「ねえ、一人で付けられる？ 手伝おつか？」

横から女の声。顔を上げると、ニコニコと人懐っこい笑みを浮かべる一人の少女がいた。

「前期過程で取り扱い方だけは習ったから大丈夫。ありがとう」

優は笑みを返してそう言った。少女は、そっかそっか、と呟いてから逃げるように少し離れた地点に固まるグループの元に戻っている。その後ろ姿を見送りながら、少女の言葉に甘えた方が仲良くなるきっかけになったかもしれない、と今更ながらに思っただけで後悔した。

周囲には、エンジニアスタッフを除けば女性しかいない。機械翼を取りつけて訓練に臨んでいる男性は、優一人だった。どうも馴染める気がしない。

優は思考を切り変えて、機械翼の装着を再開した。何個ものベルトで機械翼を身体に固定し、金具をはめていく。作業を続けていくうちに、頭の中が急速に冷えていくのがわかった。飛ぶ事への不安が薄れ、気分が落ちついていく。背中にかかる重みが心地よくさえ感じられた。

「チェックします」

近くで待機していたエンジニアスタッフがそう言って、機械翼が正常に装着できているかを確認し始める。優は両手をあげて、エンジニアスタッフが作業しやすいようにした。

「問題ありません。ゆっくりと、ESPを送ってください」

エンジニアスタッフが三步下がる。優は目を瞑り、ゆっくりと意識を集中させた。背後から僅かな駆動音。

「試しに一メートルほど上がってみましょう。飛行方法は覚えていきますか？」

「はい、大丈夫です」

優は頷いて、機械翼を展開させた。強い風が吹き、足がゆっくりと地上から離れていく。浮遊感。足場がない為、どこに重心をおけば分からない。飛行姿勢が崩れ、高度が不安定になる。

「姿勢の制御に移ってください。重心を前に倒さないと機械翼の重さで後ろに倒れます」

エンジニアスタッフに言われた通りに前傾姿勢をとると、幾分か高度が安定し始めた。すぐにコツを掴み、高度を僅かにあげてみる。地上のエンジニアスタッフが僅かに不安そうな表情を浮かべるのが見えた。

「あまり高度を上げないでください。はじめは三メートル辺りが限界です」

優は頷いて、高度を維持したまま旋回を繰り返した。考えなくても、次にどう動けばいいのか不思議と理解できた。風が気持ち良い。充分に飛び回ってから、高度を下げ始める。足が大地に触れると、優は大きく息を吐き、エンジニアスタッフに視線を向けた。

「これ、どれくらいの速度まで出せるんですか？」

「彼、飛行は初めて？」

神条奈々は、エンジニアの指示に従ってカリキュラムを消化する桜井優の姿を遠方から眺めた後、思わず隣の長井加奈に視線を向けた。

「ええ。機械翼の概要や基本的な姿勢制御については既に前期初級訓練過程で学んでいます、実際に機械翼を利用するのは初めてです」

加奈の答えを聞いてから、奈々はもう一度視線を遠方の優に向けた。優はずっと低空飛行を続け、原っぱを何周も回っている。

「射撃に関しては成長を見送るしかないけれど、飛行に関しては既に及第点に達している。一度、実戦を体験させた方が良いかもしれない」

奈々の言葉に、加奈が僅かに驚いた顔をする。

「少し、急ぎすぎいませんか？」

「もちろん、投入はしない。部隊の後ろから実戦を見せるだけ。本物の戦闘を間近で見れば訓練に対するやる気も変わってくるでしょう」

そう言うって、奈々は早くも頭の中で新たなスケジューリングを組み立て始めた。

その予兆が記録上に初めて現れたのは二〇一〇年六月十二日の正午過ぎだった。日本海に浮かぶ人口八二〇人の小さな白流島を中心とした半径一〇キロメートルに謎の霧が発生し、突如島と本土の連絡が途絶えた。白流島を取り巻いたこの濃霧はグロテスクな紫色をしていたという。翌日、海上保安庁は住民の無事と不可解な霧の原因を調べる為に三隻の調査船団を送り出した。しかし、調査船団は濃霧に入った途端連絡が途絶え、そのまま行方不明となる。

同年六月二十日、白流島から調査船団の代わりに数百の影が飛び出した。濃霧と同じ紫色の光を纏い、巨大な二対の翼を持った異形のそれは統率のとれた動きで本土を目指し高速で飛翔した。

その姿から後に亡霊と呼称される怪物は、数時間後に日本海沿岸に点在するいくつかの集落を消し去った。それが未知の生命体、亡霊との長い戦いの幕開けとなる。

「ここでの暮らしはどう？」

第一小隊に配属されてから三日目。司令室に呼び出された優は、目の前で柔らかい笑みを浮かべる奈々を見上げて、曖昧な笑みを浮かべた。

「広すぎて、未だによく迷います」

そう言いながら、司令室をチラリと見渡す。定期的にディスプレイ

イが並び、電子オペレーターが暇そうにしている。壁にはランプやスイッチが並び、機械的な雰囲気になっている。

奈々はクスリと笑って、それから話を進めた。

「第一小隊の子たちとは仲良くなれそう？」

「まだわかりません。数人と少し言葉を交わしたただけで、顔も名前も覚えてないです」

「やはり、周りが女ばかりというのは嫌？」

その言葉に、優は僅かばかり考え込んだ。

「……嫌ではないです。でも、やっぱり馴染みづらいです」

それを聞いた奈々は頷いて、優から目を離れた。

「齋藤、こつちに来て」

奈々が奥にいた若い男性を呼び付ける。

齋藤と呼ばれた男がディスプレイの並んだデスクの間を縫って近づいてきた。

「この人は、情報部の齋藤準さいとう じゅんという人。何か困った事があったら、これからこの人を頼るといいわ」

「紹介に預かった齋藤準だ。対策室のシステム運用に携わっている。よろしく」

齋藤準は友好的な笑みを浮かべて、手を差し伸べた。優は慌ててその手をとった。

「桜井優です。よろしくおねがいますっ」

「今日は生憎これから仕事が入ってるんだが、今度一緒に飯でもどくだ。周りが女ばかりだと、落ちつかないだろう」

気さくに誘ってくる準に、優は満面の笑みを浮かべた。

「はい。是非、お願いしますっ」

「さて。紹介はこれで終わり。齋藤は持ち場に戻って。優君と話があるから」

奈々の言葉に準は頷いて、司令室から出ていった。それを確認した奈々が優に向き直る。

「ここからが本題」

優は黙って先の言葉を待った。

「十日以降に亡霊が出たら、実際に出撃してもらおうと思ってるのもちろん、戦闘ではなく見学の意味で。戦闘記録は何度か見た事があるっだろうけど、実戦は全く違うから、それを肌で感じ取ってもらいたい」

「実戦、ですか……」

自然とトーンが落ちる。

「心配しなくても大丈夫。君が直接戦う必要は絶対はないから」

奈々が断言する。

優は頷く事しかできなかった。

1章 2話 篠原華

翌日、優は準に案内されながら、訓練の為に寮棟から離れた施設に向かっていた。

本部の敷地は山奥にある為か、必要以上に広大だ。一人では目的地まで行けそうになかった為、奈々が準を案内人として起用してくれている。教育部隊の人間を利用せずに、無関係な準を案内人に起用したのは、交友関係が薄い優に対する配慮だろう。一人でも親密な人間がいれば、人はそれだけで新しい環境に溶け込みやすくなる。「今日は、何をするんですか？」

前を歩く準に声を投げかける。

「室内プール使っちゃって言ったから、着水訓練だろうな」

「……プールですか？」

優は秋風で乱れる髪を押さえながら、微かに嫌そうな表情を浮かべた。

その様子を見た準が小さく笑う。

「水温は低いだろうが、戦闘服の下にウェットスーツを着こむから、冷たいのは一瞬だ」

話しているうちに、大型の施設に辿りつく。中に入ると、真っ先に受付が見えた。しかし、人影はなく、照明も半分以上が落ちていた。

「受付、誰もいないんですか？」

「ああ。中隊員の生活環境改善を名目に建てられた施設なんだが、利用者が少なすぎて週に二回しか開放されていない。今日みたいな訓練の時だけ特別に開放されている」

こつちだ、と準が奥の階段を上り始める。優はその後を追いながら、薄暗い施設の内装を不思議そうに眺めた。

「何だか、勿体ないですね。予算、余ってるんですか？」

「余ってるとかの問題じゃなくて、必要だったんだ。中隊の離脱率

は高い。入って三年経てば特別年金が出て生活も保障されるから、中隊の中心だった古参がどんどん抜けていく。繰り返される戦闘で精神的に参って抜けていく奴も多い。中隊へ定着させるために、極力居心地の良い空間を提供する必要があった。ただ、この施設は稼働率が低すぎて、一時期はかなり叩かれたよ」

「学校の授業で聞いた事があります。予算を使い切らないと次から減らされるから、必要なくても使っちゃうんだって」

「そうだな。そういう面もある。学校はどこに行ってたんだ？」

「花公院です」

「……驚いたな。名門じゃないか。確か、最近共学になったばかりだったな……お、ついたここだ」

目の前で準が立ち止まった為、その背中に優はぶつかりそうになった。

「中に着替えが用意されてるはずだ。着替えてきてくれ」

「はい」

頷いて、部屋に入る。

中は普通の更衣室だった。棚の一つに戦闘服とウエットスーツが綺麗に畳まれて置かれている。優は早々に着替えを済ませて、外に出た。

「早かったな」

そういう準の隣には、知らない少女がいた。肩まで届く茶色に染められた髪に、どこかふわふわとした雰囲気纏う少女は、優と同様に黒い戦闘服を着ていた。

優が困惑した様子で少女を眺めていると、少女はにこりと笑って小さく頭を下げた。

「第一小隊長の篠原華しのはなです。後期課程の訓練は複数人でやるものもあるから、私がお手伝いすることになりました」

「よろしくおねがいますっ」

慌てて優も頭を下げる。

第一小隊長ということは、優の直属の上官ということだ。

「確か同い年だったかな？ よろしくね！」

華と名乗った少女はそう言っ、手を後ろ手で組んで、えへへ、と前かがみに笑った。普通ならわざとらしく見えるその仕草も、不思議と自然な動作に見える。

「じゃあ、俺は戻らないと。頑張れよ」

準がそう言っ、引き返していく。

ありがとうございました、と優が声を投げかけると、準はひらひらと手を振っ、そのまま階段の方へ消えていった。

「それじゃあ、桜井くん、こっちに来て」

華が歩き出す。

「はい」

頷くと、ぴたりと華の足が止まった。そして、不満そうな顔で優の方を振り返る。

「えつとね、敬語はいらんないよ。上下関係とか、気にしなくていいから」

優は微かに躊躇した後、素直に華の言葉を受け入れた。

「うん。わかった。よろしくね」

華がにこりと笑い、再び歩き始める。優は黙っ、その後を追った。歩いてすぐに華はある扉の前で立ち止まり、それを横に開いた。

扉の先には広大な空間が広がっている。華が中に入っ、た為、優も後に続いて扉をくぐった。

そこには、五十メートルほどのプールがあつた。天井が高く、外と違っ、照明が強い。プールサイドには黒い制服を着込んだ二人の男と一人の女が雑談して、優達が入った途端に慌てて話を止めた。

「これを」

男の一人が機械翼を持って近づいてくる。優と華はそれを受け取っ、装着を始めた。

優が慣れない作業に手こずっているうちに、華はすぐに機械翼の装着を終えたようだった。

「手伝おうか？」

にこにこ華が声をかけてくる。それで、先日の飛行訓練時に同じように声をかけてきたのが華であることに気付いた。

「うん。ちよっと、お願い」

素直に華の好意に甘える事にする。

華が手早く後ろに回り、機械翼の装着を手伝い始める。

「はい、できたよ」

あっという間に作業が終わり、華が一步下がる。

「ありがとう。篠原さん、本当に早いね」

「桜井くんも慣れたらこれくらい楽にできるよ」

にこにこ笑う華の肩越しに、プールサイドの向こうに立つ女が手招きするのが見えた。

「準備が出来たら、こちらへ」

華と並んで、女の方へ向かう。

その間、残った男が反対のプールサイドで三脚とカメラを用意していた。訓練記録を撮るのだろう。

「よし。じゃあ、簡単に説明しようか。今日やるのは着水訓練。基本的に亡霊の迎撃は洋上で行われるから、墜落した場合の対処方です。って口で言うより、実物見た方が早いかな。篠原さん、お手本を見せてみて」

女の言葉に華が頷いて、機械翼を展開させる。翼が大きく広がり、華の足がゆっくりと床から離れていった。そして、そのままプールの上空に移動していく。

何をするつもりなのかと優がじっと華を見ていると、高度五メートルほどまで上がった華の身体が不意に落下を始めた。

優が何か行動を起こす前に、華の身体がプールに落ちて水柱がある。

「……篠原さん？」

優が心配そうな声をかけた直後、水面から華の顔が飛び出した。戦闘服の両肩部分が膨れ上がっているのが見える。前期訓練過程で

戦闘服の構造は理解していたが、実物を見るのは初めてだった。

「戦闘服にはああいう浮き袋がついています。着水直後にこのベルトを引き抜いてください」

女が近づいてきて説明する。優はベルトの部分を確認して頷いた。「では、一度やってみましょう。あ、ちょっと水が深いけど泳ぎは大丈夫ですか？」

「人並みには、大丈夫です」

優はそう言って、機械翼を展開させた。駆動音。

以前行った飛行訓練通りに浮き上がり、高度を上昇させる。そして、そのまま華のいるプールの上空にゆっくりと移動した。機械翼の動作は酷く安定していて、空を飛ぶという行為への恐怖感を払拭してくれる。この調子なら、高度一〇〇メートルでも大丈夫そうだった。

「落下する時は、背中からが理想的。君達はちょっと衝撃に強いみたいだから、首の骨を折る事はないだろうけど、姿勢制御には気をつけるように」

プールサイドから女が叫ぶ。優はチラリと女を確認してから、機械翼の動作を完全に停止させた。次の瞬間、ぐらり、と身体が後ろに傾く。そして、強烈な浮遊感。

「……………あー！」

姿勢制御などする暇もなく、優の身体は水面に叩きつけられた。水とは思えないほどの衝撃を受けると同時に、視界が気泡で覆われパニックを起こしそうになる。そして、プールが予想以上に深い事に初めて気づいた。

考える余裕もなく、優は右手で肩のベルトを手探りで見つけ出し、それを力の限り引き抜いた。途端に両肩が膨れ上がり、上半身が急速に水面へ浮上を始め、身体が勝手に半回転する。

「……………っは！」

頭が水面から飛び出すと同時に、優は大きく息を吐きだした。それから、何度も大きく息を吸う。

「だ、大丈夫？」

前方から、華が両手で水を掻いて近づいてくる。

「……大丈夫。ちょっと、驚いただけ」

優はそう言っつて、下に目を向けた。

深い。三メートルは超えていそうだった。実際の洋上は更に深く、波も高いのだろうと思うと、憂鬱な気分になる。

「次、連結ベルトいこうか」

プールサイドから女の声。

「先に手本、見せて上げて」

「わ、私ですか？」

華が動揺した様子を見せた後、おずおずと優の元に泳いでくる。

「あの、ちょ、ちょっと、ごめんね」

華の手が腰のベルトを引き延ばし、優の腰に巻きつけ始める。自然と抱きつくような格好になり、優はついと視線を外した。

「終わりました」

ほのかに顔を赤くした華がプールサイドの女に向かって声をあげる。女は満足そうな表情を浮かべて、口を開いた。

「前期過程で習っただろうけど、それが連結ベルト。機械翼が破損したり、負傷して動けなくなった味方を身体に固定して、引き上げる為のもの。大事なことから恥ずかしがってないで、しっかり締めるように。そのまま、桜井くんを引き上げてみて」

華が微かに躊躇した様子を見せた後、腰に両腕を回してくる。肩から腰までぴったりと密着する為、自然と二つの柔らかいものが押しつけられる。優はあまりの気まずさに視線を逸らし続けた。

「ちょっと持ちあげるね」

華が告げた次の瞬間、優の身体が華に引っ張られるようにして浮いた。身体に纏わりついていた水が下に落ちていく。連結ベルトでしっかりと固定されている上に華の腕がしっかりと回されている為、予想以上に安定していた。

「オッケー。降ろして」

女の声とともに、華がゆっくりと高度を下げて再び着水する。直後、再び華が腰に回した手をこそごと動かし、連結ベルトが外れていくのがわかった。

「よし。じゃあ、今度は桜井くん、やってみて」

女の声に優は頷いて、自らの腰に装備された連結ベルトを引き延ばした。それから、華の腰に手を回そうとした直前、優は僅かに動きを止めて、顔を赤くした華をチラリと見やった。中隊には女性しかいない為、異性が苦手なのかもしれない。

「ごめんね。出来るだけ早く終わらせるから」

そう言って、華の腰に手を回す。

華の腰は折れそうなほど細かった。女性の腰に手を回すという行為に慣れていない為に緊張はしたが、慣れない訓練である為、連結ベルトの固定に意識の大部分が持っていたいかれた。それに十日後には実戦が待っている為、恥ずかしがっている余裕などなかった。

黙々と連結ベルトを戦闘服の持つ機構に固定させて、最後に連結ベルトを軽く引っ張り、しっかりと繋がっている事を確認してから優は顔を上げた。

「終わりました」

プールサイドの女に向かって報告する。女は遠目から連結ベルトの様子を確認するように目を細めて、満足そうに頷いた。

「オッケー。相手の腰に手を回して、それから機械翼を展開させてみて。あ、腰つてのはウエストじゃなくて、骨盤の辺りね。上に手を回すと痛いから」

女の言葉通り、優は華の腰に手を回した。華の身体が硬くなるのが分かる。

「持ちあげるね」

華の耳元で告げてから、機械翼を展開させる。身体が浮き上がり、周りの水面が微かに盛り上がった。ざばあ、と水の落ちる激しい音が響き、身体が完全にプールから浮かび上がる。前方に華を抱えている為か、身体が前に傾きそうになり、優は慌てて姿勢制御に移っ

た。

姿勢が安定すると、優が予想した通り、プールサイドから女の声が届いた。

「オツケー。それじゃ、休憩入れながら後二〇セットやってみよう。身体が覚えるまでやらないと意味ないからね」

二〇セットという言葉に、華の身体がピクリと反応する。優は奇妙な罪悪感に苛まれながら、華を抱いたままゆっくりと高度を下げ始めた。

「ごめんね」

訓練が終わってプールサイドに上がった優は、華に向かって一番に軽い謝罪の言葉を口にした。

「え？ な、なにが？」

ウエットスーツだけになって戦闘服の袖を絞っていた華が不思議そうに振り返る。

「連結ベルト繋ぐ時、結構くっついたから。それと、篠原さんには関係ない訓練なのに、手伝ってくれてありがとう」

「そ、そんな、謝らなくても大丈夫だよ！」

華が全身で否定するように両手をぶんぶん胸の前で振る。先程まで手に持っていた戦闘服が地面に落ちるが、気づいていないようだった。

「あの、ほら、中隊は女の子ばかりだから、あまり慣れてなくて！ 嫌とか、そういうのじゃないから、その、ね！」

一生懸命フォローしてくれる華に優はクスリと笑って、ありがとう、と繰り返した。

それから、背後を振り返る。一人の男が三脚とカメラを回収し、残った男と女が何やら紙に記録をつけている。

「これ、帰っていいのかな？」

「うん。戸締りも、あっちの仕事。早く着替えて戻ろ！」

華が駆けだす。優はその後をゆっくりと追いながら、戸口へ向か

った。

桜井優が初めて実戦を経験する九日前の話である。

「装備の点検を怠らないで。焦らなくていいからしっかりと。華、準備が出来た人をまとめて」

慌ただししい室内で、神条奈々は歩きながら部下に声をかけ回っていた。

「神条司令、優君の準備が整ったようです」

「そう。男の子は準備が早くて助かるわね。こっちはまだかかりそうだから待たせとして」

「はい」

副司令である長井加奈の報告に頷き、奈々は部屋を見渡した。部屋、というよりも倉庫のような薄暗い出撃準備室であり、室内にいる部下全員が装備の点検途中だった。その部下は大半が未成年の少女である。彼女たちは、これから戦場へと送りだされる。数年前の社会通念に照らし合わせれば、子どもを戦場に送り出すなど異常な事だったが、長引く闘いの影響で奈々のそうした倫理観は変質を遂げていた。

「第一小隊、準備完了。これより待機」

慌ただししい集団から報告があがる。奈々は壁に備え付けられたコントロールパネルを操作してハッチを開いてから第一小隊に出撃命令を出した。続いて、第二小隊から報告が上がる。

「第二小隊、準備完了。指示を」
「待機」

第一小隊とは違う命令を出してから、奈々は部屋を飛び出した。長い廊下を歩きながら腕時計に視線を向ける。一四二七。亡霊の一次発見から既に八分経過していた。

司令室に入ると電子・解析オペレーターが亡霊の侵攻ルートを補

足する作業に入っていた。壁に埋め込まれた巨大なディスプレイには出撃準備室の様子が写し出されている。全員の準備ができたようだった。

奈々はコンソールを叩いてディスプレイを切り替えた。大きな部屋に一人だけ佇む少年の姿が映る。まだ幼く、中性的で整った顔は緊張で強張っていた。カメラがもう少し離れていれば、華奢な身体も相まって少女と見間違えたかもしれない。そして、その華奢な背中には不釣り合いな巨大な機械の翼を有している。

随分と絵になる、と奈々は画面を見ながらぼんやりと思った。照明を上手く利用すれば、翼を休める天使のようにも見えるかもしれない。

「優君、気分はどう？」

「緊張してます」

奈々は優を安心させようと笑顔を作った。向こうにもこちらの姿が映るディスプレイが存在する。

「大丈夫。訓練通りにやれば何も問題ない」

「……はい」

優は不安を隠すように硬い笑顔を浮かべた。

奈々は少し思案してから、コンソールを叩いた。ディスプレイが二分割され、新たにマップ情報が写し出される。第一小隊は既に本部から三キロメートル離れた地点まで進んでいた。

「第二小隊出撃」

出撃ハッチから、第二小隊長の姫野雪を先頭に少女たちが飛び出した。その数およそ三十。第一小隊を追いかけるように青空の中を飛ばたいていく。

「優君、続いて」

「はい」

少女たちの後から少年が飛び出す。今回が桜井優の初陣だった。

他にも一人、今回が初陣の少女がいる。初陣と言っても実際に戦闘には参加させず、部隊の後方から戦場を見せるだけだ。

奈々は再びコンソールを叩いた。画面が三分割される。一つは高機動ヘリが部隊の背後から撮影した中継映像。他はESPリーダーと彼らの機械翼につけられた識別信号を映す俯瞰マップだった。高機動ヘリには医師や高度な医療器具が用意されており、負傷者の応急処置・輸送などにも利用される。これは、実際の役割よりも中隊員のメンタル面に多大な貢献をしていた。

「衝突予測地点まで残り三〇キロメートルを切りました」

「全隊員に通達。後十分で接触する。第一小隊、速度を落とし、第二小隊との距離を詰めなさい」

奈々の命令とともに、識別リーダーに映る先頭集団の速度が徐々に落ちる。機動ヘリから中継された映像では、第一小隊長の篠原華（はな）が指揮をとって、小隊の動きを制御している。華は亡霊対策室に入ってから二年目の中堅組であり、第一小隊員たちから多大な信頼を得ていた。

第一小隊、第二小隊の距離は順調に縮み、衝突予測点の五キロメートル前で二つの小隊は横に並んだ。奈々は停止を命じ、ヘッドセットに向かって叫んだ。

「優君、柚子ちゃん」

奈々は少し碎けた喋り方で、今回が初陣の優と柚子を安心させようと語りかけた。

「亡霊は、外見ほど恐ろしいものではない。訓練通りに行動すれば難なく倒すことができます。大事なのは、パニックに陥って状況判断が狂う危険を絶対に避けること。限界だと思ったらすぐに戦線から離脱しなさい。それは恥ずべきことではありません」

「はい」

二人の新人が緊張した声で答えた。奈々は少し思案して、時計を見た。衝突予測点まで後三分。

「時間よ。各自、兵装チェック。高度維持。敵右翼突出。構え」

青空の彼方に影が現れる。奈々はESPリーダーを見て、淡々と情報を伝達させた。

「敵数二十三。依然として敵右翼突出。敵左翼、更に外側へ移動。敵右翼は囷の可能性が大きい。敵左翼の迂回に気をつけて」

中継映像に亡霊の姿がはつきりと浮かんだ。紫丹の巨大な羽を大きく揺らし、醜悪な顔にぱっくりと開いた巨大な口。その悪魔的な姿は、まだ戦闘に慣れていない隊員たちの気力を急速に奪っていく。

第一小隊が小隊長の篠原華の指揮で敵右翼を迎え撃つように前進していく。第二小隊は第一小隊の側面を守るよう、左側に旋回した。「距離三〇〇……二〇〇……一五〇……一〇〇」

解析オペレーターがカウントを開始する。トップとの相対距離が百メートルを切った時、第一小隊長、篠原華が片手をあげて叫んだ。「撃て！」

第一小隊、総勢三十二名の構えた銃口が弾けた。一拍遅れて大気が爆発し、凄まじい振動が周囲を包む。一斉に放たれたESPエネルギーの塊は巨大な奔流となって敵亡霊軍の突出した右翼へと吸い込まれていった。

「命中を確認。一体ロスト」

ESPリーダーから影が一つ消える。あれだけの大規模な攻撃を受けても、大多数の亡霊は依然として無傷のままだ。敵は人間ではない。怪物なのだ。

「距離五〇」

第一小隊長、篠原華が頭上上げた右腕を大きく回した。それを合図に第一小隊の一部が銃剣を構える。

「第一分隊突撃！」

華が先頭に立って飛び出す。それにならって、第一分隊に所属する八人の少女が続いた。

「敵左翼、接近」

長井加奈が緊張した声で報告する。

第二小隊長がそれを聞いて、第一小隊の側面を取ろうとする敵左翼への射撃を部下に命じた。先ほどの大規模な砲撃とは異なる、散発的な攻撃が始まる。

第一分隊の突撃を皮切りに場は一気に混沌としたものへと変化した。近接戦闘によって味方と亡霊が入り乱れ、それを突破した亡霊たちが背後の分隊に襲いかかる。

「第一分隊、後退。後退して！」

奈々がESPレーダーを見て叫ぶ。敵左翼が第二小隊の攻撃を無視して、第一小隊の左側面をとった。その距離、僅か六十メートル。第一小隊の中でも前線を支える為に突出した第一分隊が孤立しかけている。

「呑みこまれる！ 後退！」

ようやく、状況に気付いた第一分隊が後退を始める。が、敵右翼は第一小隊を逃がすまいと執拗な追撃を繰り返す。第一分隊の後退速度が急速に落ちた。その間に敵左翼が左側面から急接近を始める。奈々は小さく息を吐いた。数は勝っている。しかし、それだけだ。相手の出方は分かっていたのに、それを止める事が出来ない。それは亡霊対策室の保持する実働部隊、特殊戦術中隊の厄介な性質の為だった。

亡霊は、あらゆる物理干渉を受けない。銃撃も、弾道ミサイルも、亡霊の前には意味をなさない。少なくとも、経験的にそう解釈されている。

亡霊の身体はESPエネルギーと名づけられた未知のエネルギーで構成されていると仮定され、それに干渉できる事が判明しているのは同じESPエネルギーだけだった。

ESPエネルギーを正確に観測する事はできないが、ESPエネルギーが存在する場所には空間の揺らぎのようなものが確認される。比較的初期に判明した亡霊の探知方法によって、ESPエネルギーを捕捉することが可能となった。

その後、亡霊以外にESPエネルギーを保持している人間が発見された。後に超感覚的知覚能力者、ESP能力者と称される人間を特殊戦術中隊に組み込む事によって、日本国は亡霊との闘争を開始した。だが、ESPエネルギーを保有する人間の数は圧倒的に少な

く、亡霊に対抗する為の十分な戦力を確保することができなかった。加えて、戦闘経験のない一般人を利用する事、従来の戦争とは異なる為に必要な運用ノウハウが蓄積されていない事が重なり、軍隊としての錬度が著しく低いのだ。

「第三分隊、第一分隊の援護を」

第一分隊の後退を支援しようと第三分隊が前進する。

「司令、間に合いません」

長井加奈の焦燥感の混じった声が横から届く。

中継映像には、追撃をしかける亡霊を何とか抑える第一小隊長、篠原華の姿が映っていた。そして、その側面を奪った亡霊が死角から迫っているのが中継映像に映る。華は目の前の亡霊の相手に必死で気付いていない。

第三分隊と第一小隊の距離は四十メートル。とても間に合わない。

「華、離脱しなさい」

奈々の言葉に華がようやく死角を取られたことに気づいて、攻撃を中断する。しかし、この時既に亡霊との距離は致命的なまでに詰められ、最早回避行動が何の意味も成さない状況に陥っていた。

負傷は避けられない。奈々が機動ヘリに回収命令を出そうと口を開きかけた時、中継映像を一つの影がよぎった。次の瞬間、華の側面から接近していた亡霊の体が消し飛ぶ。淡い霧のようなものが空中に拡散した。

「ロスト！」

解析オペレーターが叫ぶ。

奈々は中継映像に映る影を見て、目を大きく見開いた。影の正体は後方で待機している筈の桜井優だった。優が華に肉薄していた亡霊を片づけた後、近くにいた二体の亡霊の反応がロストした。その後も、ESPリーダーから次々と亡霊の反応が消えていく。

奈々は桜井優の様子を眺めながら、得体の知れない高揚感が湧きあがってくるのを感じた。

神奈奈々が若くして亡霊対策室の総司令官に抜擢されたのには、いくつかの特殊な経緯がある。亡霊の出現は日本の国防を脅かす存在であり、日本は防衛関係費を拡大させる必要があった。しかし、日本にとつて、軍拡は非常にデリケートな問題である。第二次世界大戦における敗戦国としてのイデオロギー。加えて、中国、ロシアを中心とした経済統合体であるユーラシア連合を刺激する恐れがあるとして、慎重論が根強く展開された。

つまり、人類史上初となる人間以外の外的な脅威である亡霊よりもユーラシア連合における軍拡競争への配慮、屈折した平和主義を優先する者が数多くいた。そうした世論を背景に創設された亡霊対策室は少しでも「軍」といったイメージを和らげるため、亡霊対策室の司令官に女性を起用することが決定された。後にこれは軍の予想以上の効果をあげることになる。

また、トップに女性を起用することにはもう一つ利点があった。亡霊に対抗できる唯一の存在である超感覚的知覚を保持したESP能力者がどういふわけか全て女性だったのだ。亡霊対策室が設立された際に確認されていたESP能力者は二百三十一人。その全てが女性で、九割が未成年だった。

亡霊対策室の前途は多難だった。戦闘経験も人生経験もない少女たちをまとめあげ、過酷な戦闘によつて傷つく少女たちの精神もケアしなければならぬ。それには、当時最も若く、能力的にも高かった同性の奈々が最も適していた。

そうやって、奈々は司令の座についた。前例がないことの連続ではあったが、奈々はよくやった。思春期の少女たちをまとめあげ、最低限の防衛を可能とした。

そうやって、今まで何年も持ちこたえてきた。自分の指揮に国防の全てがかかっている、というプレッシャーに耐えてずっとやってきた。こうやって、死ぬまで戦い続けるのだからと漠然と思つていった。

しかし、その予測は三週間前に破られた。青天の霹靂と言える。

亡霊の出現からはじめて、男のESP能力者が確認されたのだ。それが桜井優だった。

奈々は奇妙な高揚感に包まれながら、ディスプレイをじっと眺めた。訓練で見た動きとは違う、熟練した兵士の動き。才覚か、はたまた土壇場の偶然か。

それは、今考えるべき事ではない。

奈々は思考を振り払い、急遽転がり込んできた好機に飛びついた。「後退を！」

奈々の声で、第一分隊が再び後退を始める。第二小隊の後方支援が激しさを増し、亡霊群が散開に移る。

ひとまず危機は脱した。しかし、油断はならない。両翼に大きく展開する亡霊の布陣を見て、奈々は逡巡した。

距離が開いた。これは、遠距離攻撃に長ける 近接戦闘と比べれば 特殊戦術中隊にとって有利だ。暫くは現状を維持し、相手を削っていくのが一番か、と考える。

「押しています。追撃をしかけますか？」

中央部の亡霊が後退を始めた。それを受けて、第二小隊長の姫野雪が追撃の有無を問いかけてくる。確かに中継映像を見た限りでは押しているようにも見える。しかし、ESPリーダーと識別子マップを見て奈々は顔を曇らせた。中央部は特に相手の戦力が薄い訳でも、味方の戦力が集中しているわけでもない。加えて、両者の密度が中央部と殆ど変わらない両翼は拮抗したままだ。つまり、中央部は押している訳ではなく、誘われているだけ、と考えられる。

「……第二小隊・第二、三分隊と第一小隊第一分隊、一〇〇前進後、両翼に展開。両翼、突撃待機」

奈々は慎重に指示を出した。後退する亡霊に合わせて、特殊戦術中隊の中央部が僅かに突出する。そして、奈々の合図とともに、両翼が突撃を開始。同時に、中央部が敵両翼の側面から襲いかかる。両翼に戦力を集中し、相手中央部が慌てて前進してくるが既に遅か

った。敵両翼は側面と正面からの集中砲火を浴び、無残に四散していく。

加速度的に減っていく亡霊の数を見て、奈々は安堵の息をついた。戦いは終息に向かっている。しかし、気は抜けない。亡霊は人間と違い、戦略的な撤退をしない。戦術的な後退はあっても、亡霊は全滅するまで襲いかかってくる。降参という概念を持たないのかもしれないし、死に対する恐怖や価値観が人間のそれとは恐ろしく異なるのかもしれない。

全滅を辞さない亡霊に対し、逆に特殊戦術中隊 更に言えば亡霊対策室は一人の犠牲者も出すことが許されない。未成年ばかりで構成され、なおかつ少数で構成された特殊戦術中隊にとって、一人の死がもたらす影響は物理的にも、精神的にも計り知れない。戦術的敗北が戦略的敗北に直結する恐れさえある。奈々は経験的にそれを嫌というほど知っていた。

しかし、今回は大きな被害が出ずに済んだようだった。亡霊は既に残り四体。間もなく戦闘は終わりを迎えるだろう。だが、闘争は終わらない。これが終わっても仮初の一時的な平和が流れるだけだ。また近いうちに白流島から亡霊が飛びだし、亡霊対策室はその対応に追われる。何度も何度も繰り返してきたことだ。そしてこれからも。いつ、この戦いの連鎖は終わりを迎えるのだろうか。それかと思うと、気分が沈む。

「司令、気分がすぐれないように見えますが、大丈夫ですか？」

副司令、長井加奈の言葉に、奈々は顔を強張らせた。

「いえ……」

言葉を濁す奈々に加奈が笑いかける。

「心配、ですか？」

「……ええ」

加奈は鋭い。何年も横にいるだけある。奈々は諦めたように頷いた。

「正直焦ってる。いくら戦術的勝利を重ねても、戦略的勝利には近

づけない。このままじゃ、亡霊には勝てない。この闘争は一体いつまで続くのかしら…」

「攻めるだけの戦力ができるまで待つしかありません。そしてそれは遠くない未来かもしれないかもしれませんよ」

奈々はその言葉に顔をあげた。

「彼、は何かのきっかけになると思います」

そういつて、加奈は中継映像を見やった。ディスプレイにはまだ幼さを残す唯一の少年が映っている。桜井優、史上初の男性ESP能力者。

奈々はさきほどの戦闘を思い出し、頷いた。

その時、ESPリーダーから全ての反応が消えた。思考を切り換える。

「亡霊群の殲滅を確認。これより帰投しなさい」

中継映像に歓声をあげる少女たちの姿が映る。それを見て、奈々は頬を緩めた。

確かに戦争は続く。際限ない戦闘を経て、少女たちは傷ついていくだろう。しかし、奈々はその少女たちを守る立場にある。それは喜ぶべきことだ。自らの手で、運命に干渉できる。それは素晴らしいことだ。

第一小隊、第二小隊を合わせた六十四名が綺麗に隊列を組んで、空をいく。

負傷者二十二人。死者〇人。戦いが終わり、仮初の平和が訪れる。そして、この戦いが後に救世主と呼ばれる桜井優の最初の小さな一歩となった。

1章 3話 長居加奈

「申し訳ありませんでした」

司令室の一角に、桜井優の言葉が反響する。

帰投後、優は司令室に呼び出され、つい先ほどの戦闘について厳重注意を受けていた。

「……全てを私が指揮する訳ではないし、多くの判断は現場の中隊員に委ねられる。だけど、今回は君に戦闘の許可自体を与えていなかった。ここは建前上軍ではないけれど、実際には自衛軍よりも厳しい状況に置かれてるの。これからは命令を絶対に遵守しなさい」

「はい……」

優が頷くと、奈々は厳しい表情を緩めた。

「お説教はこれでお終い。誰かが危なければ、自然と体が動くのは当然だと思う。でも、可能な限りは許可を求めてから行動するように。良い？」

「はい。申し訳ありませんでした」

深々と頭を下げる。

「華を助けてくれてありがとう。もう行っていいわ」

「はい。失礼します」

優は最後にもう一度頭を下げてから、司令室を後にした。

廊下に出て、大きく息を吐きだす。

何故、あんな事をしてしまったのだろう、と優は後悔の表情を浮かべた。

部隊の後方から戦闘を観察するだけの予定が、気がつけば敵陣の中に突っ込んでしまっていた。

パニックに陥っていた訳ではない。頭の中は、極めて冷静だった。それなのに、身体が勝手に動いてしまっていた。戦う事が自然な事であるように思えた。奈々からすれば、調子に乗った新人にしか見えないだろう。

脳裏に、亡霊を銃剣で突き刺した時の感覚が蘇る。亡霊の咆哮が、何度も再生される。

優は小さく首を振って、寮棟に戻る為に長い廊下を歩き始めた。寮棟前の廊下にいた数人から視線が投げ掛けられるが、意図的に無視する。

やりづらい、と思った。優以外の中隊員は全員女性で、亡霊対策室のメンバーも女性が多い。情報部などは男性が多いようだが、特殊戦術中隊の寮棟などでは他の男性の姿を見た事がない。

優が亡霊対策室に拾われたのは三週間前の事だった。高校に入学してからまだ五月月しか経っておらず、特殊戦術中隊への入隊に悩んだが、小さい頃に見た奈々の仮面のような笑みが酷く気になって入隊を決意した。奈々に対し、憧れを持っていたといってもいい。

しかし、現実は甘くなかった。女性だらけの集団に男一人で生活する厳しさを優は想像していなかった。見えない壁があり、物珍しさで話しかけてくる人はいたが、知り合い止まりといった感じで、友人と呼べる人は一人もいない。

厳しい訓練、過酷な実戦、孤独な生活。先は暗い。

唯一の救いは、優にESPエネルギーの扱いに対して平均以上の才能があったことだろう。入隊時に測定したESPエネルギー出力値はどうやら特殊戦術中隊の平均値を上回っているらしかった。先程の実戦でも大きな怪我はなく、撃墜数九という大きな戦果をあげることができた。少なくとも足手まといになる危険性は回避できたようである。しかし、増長していると見られても仕方がない行動をとってしまったことで、信用も失墜した気がする。

自室前に着いた時、優は暗い思考を停止した。自室のドアに誰かがもたれかかっている。着水訓練でお世話になった篠原華だった。

華も優の存在気付き、もたれかかっていたドアから離れる。

「久しぶり。さっきはありがとう」

そう言って、華は笑った。まだ幼いながらも整った顔立ちで、顔をあげた拍子に茶色く染められたセミロングの髪が空を舞う。十日

前に会った時よりも、落ち付いているように見えた。

「十日ぶりかな？」

「うん。ねえ、今、時間あるかな？」

少女はそう言って、小首をかしげた。仕草と雰囲気は妙に合っていて、頬が緩む。

「時間？」

「うん。良かったら、ご飯一緒に食べない？」

思わぬ言葉に、優は目を瞬いた。

「ご飯？」

「そう。さつき助けてもらったし、お礼に！」

優はじつと華を見つめた後、不思議そうに首を傾げた。

「ぼくが、助けた？」

「あれ？ 戦闘時、桜井くんが突っ込んだから私助かったんだけど、あれ、私を助ける為じゃなかったの？」

優は記憶を振り返って、再び首を傾げた。よく覚えていない。勝手に身体が動いて、よくわからないままに全てが終わった。味方を見ている余裕などなかった。

「えっと、必死だったからよく覚えてなくて……ごめんね」

申し訳なさそうに優が言つと、華は微かに残念そうな表情を浮かべた。

「うん。初陣だもんね。私も初めは周り見る余裕なかったよ」

華がフォローするように両手を振る。

「それでね、お礼に夕食ご馳走したいんだけど、どうかな？」

それは、優にとってありがたい誘いだった。友好的な誘いを断る理由などない。優は迷わず頷いた。

「じゃあ遠慮なくお願いします」

「本当？ じゃ、こっち来て！」

華が嬉しそうに駆け出す。その時、警報が鳴り響いた。

華の足が止まる。優は何もない天井を見上げた。

「亡霊……？」

自然と眩きが漏れた後、ポケットに入っていた端末からも激しいアラームが鳴り響いた。出撃命令。

「うそ。また？」

華の困惑した声。

優と華は顔を見合わせた後、同時に頷いて、出撃ゲージ目指して駆け出した。

亡霊対策室司令官、神条奈々は対ESPレーダーに映る無数の影を見て戦慄した。

「八九、九〇、九四……」

上擦った解析オペレーターの声がぼんやりと耳に入る。

通常、亡霊は一度襲撃を仕掛けてくれば、次の襲撃までに二、三日の空白期間があつた。にも関わらず、今回は三時間前に迎撃したばかりであるにも関わらず、白流島から新たな亡霊が飛び出している。亡霊がこんな短時間で再び姿を見せた前例など存在しない。しかも、百を超える大群だ。

まるで、と奈々は思った。まるで次の襲撃を待ちきれなかったようだ。そう考えて、すぐにそれを打ち消す。亡霊を擬人化し、人の行動特性に当てはめる事は危険だ。古来より人は理解できない事象に神や妖怪を結びつけ、表向きの納得と安心を得てきた。しかし、それは何も解決しないどころか、正しい知識や理解を得る為の障害にもなりうる。奈々は、そうした馬鹿げた理由付けをしたくなかつた。「無知の知」と言う言葉が頭をよぎる。

亡霊の活動には謎な部分が多い。その一つに戦力一定の法則と呼ばれるものがある。数が多い場合は個々の戦闘能力が低く、数が少なければそれを補うように個の力が強大となる。そういった経験的な法則を軍はいくつも分析してきたが、その理由や原因はいまだに判明しない。価値基準自体が人間と大きく異なるのだろうか。戦略目

的が不明な以上、亡霊の行動特性が絞り込めない。

そうした中、唯一理解しうる可能性があるのは戦術・戦闘の分野だ。刹那的な亡霊の戦術は人間のそれと同様に見える。戦闘といった一点に絞れば、動物などを観察してもある程度の理解ができるのと同じだ。奈々の仕事はそうした理解できる部分から対応策を練り、迎撃することにある。亡霊の思想や考え方などは哲学者が考えればいい。

奈々は余計な思考を振り払って、出撃メンバーの選択に取り組んだ。特殊戦術中隊は六つの小隊からなる。しかし、第五、第六小隊は休暇中で前線に送り込める状態ではない。第一、第二小隊も昼過ぎの戦闘による消耗が激しく、負傷者も多い為出撃は見送るべきだろう。ならば、スケジューリングを前倒しにし、第三、第四小隊を同時に選択するのが自然だ。

しかし、と奈々は思った。手元にあつた書類をチラリと見やる。唯一の男にして、先程の戦闘で驚くべき能力を見せ付けた桜井優。その腕を再び確認したい、と強く感じた。

救世主。かつて、ESP能力者がはじめて実戦に投入された際、そう叫ばれた。残された最後の希望。しかし、現実は違った。ESP能力者である少女たちは非力で、臆病で、不安定な存在だった。多くの死者を出し、多額の資本を投入し、経験を重ね、そうやってやっと戦える、実用に耐えうる段階まで昇華した。そうした時代の流れを間近で見続けてきた奈々は救世主などいないことを知っていた。

しかし、だからこそ、奈々は特異点を意識せざるをえないのだ。幾度も期待と失望を積み重ねてもなお、救世主を心の奥で望み続けている。これは、我が儘だ。それを奈々は自覚していたが、その欲求を止める気はなかった。

「第三、第四小隊……また、第一小隊第一分隊のみを投入する。なお、桜井優を当案件より第三分隊から第一分隊に異動」

電子オペレーターは少し驚いた顔をした後、急いで各個人端末へ

通達を送った。その様子を背後で見ていた副官の加奈が咎めるように口を開いた。

「司令、あの、それは」

「念の為、リソースは多く設定しているし、亡霊の個別能力は低いと予測される。彼の動きをもう一度確かめるにはちようどいい」

奈々の言葉に、加奈は渋々といった様子で頷いた。

「もしかしたら亡霊も司令と同じ考えなのかもしれませんね。優君の能力を再確認したいのではないでしょうか」

奈々は何も答えなかった。代わりにコンソールを操作する。画面に映る膨大な亡霊の数を見て、ただ苦々しい顔をした。

もしかしたら、今までの戦いは序章に過ぎなかったのかもしれない。ふと、そう思った。

桜井優という新たな要素は何をもたらすのだろうか。

救世主。使い古された言葉を奈々は恋人の名前のように、大事に大事に小さく呟いた。

1章 4話 佐藤詩織

「本当、凄かったよ！ 機械翼の性能自体が違うんじゃないかと思っただけだし！」

「あんだ、帰ってきてからその話ばかり……」

「確かに、初陣には有り得ない動きだったよね。正直うちの隊長より強いんじゃない？」

寮棟の廊下の隅で騒ぐ数人の会話を聞いて、第三小隊長、佐藤詩織は足を止めた。

桜井優。史上初の男性ESP能力者。どうやら初陣で成功をおさめたらしい。

男。その存在が詩織には別の世界のものであるかのように、遙か遠くに感じられた。

ESP能力の発現に性差がある事は初期の段階から指摘されていた。それは年を追うごとに懐疑の必要すら感じさせない統計的事実として受け入れられ、ESP能力の発現原因を探る数少ない手がかりとなった。ESPエネルギーは女性性器で生成されるなどと言っただけならない噂も流行った。染色体などに起因する先天的な能力であるとして一時期活発な研究も行われた。故に、優が発見された時世間の目は男である点に注がれた。研究者も優に性的な欠陥がないか、精神的な性反転がないか、遺伝的変異が見られないか、に重点をおいた。

性、というものはある種の人々にとっては重要なアイデンティティとなりうる。平等主義の皮を被った女権主義者に、根拠なき優位性に浸る男権主義者。そうした自立した精神を持たず、自分が帰属すべきものの価値を唱えば、まるで自らの価値があがるのだと錯覚しているような人間たちは、超感覚的知覚能力を広告塔に利用しようとする事もある。

そうした帰属先と自身を同化させる行為は詩織の忌み嫌うもので

はあったが、詩織もまた、優が男性であると言っ点に注目せざるをえなかった。

詩織は、軽度の男性恐怖症を患っていた。故に、特殊戦術中隊への招待を受けた時、詩織は迷わず入隊を決めた。男性恐怖症を患う彼女にとって、女性比が突出した特殊戦術中隊は最後の逃げ場だった。

そうした経緯を持つ詩織にとって、桜井優の登場は好ましいものではなかった。故に彼が別の小隊に配属されたことと、優が詩織の思い描く一般的な男性像に合致しなかった事は唯一の救いと言える。整った中性的な顔立ちに、手入れの行き届いたさらさらと流れる琥珀色の髪。背が低く小柄なのも相まって、遠くから見れば少女のようにも見える。その容貌は男性恐怖症を患う詩織にとって、比較的抵抗感が少ないものと言えた。

しかし、それでも桜井優が男であることに変わりない。できれば接触は避けたいが、純粹に戦力として期待ができるなら、そのうち小隊長格である詩織との接触回数は嫌でも増加するだろう。

小さくため息を吐き、訓練室へと足を進める。その時、携帯端末から警報が鳴り響いた。

今日二度目の警報。誤報かと思って、周囲を見渡す。廊下にいる中隊員も、困惑した様子を見せていた。

司令部に問い合わせようかと迷った直後、端末が鳴る。出撃命令。詩織は硬い表情を浮かべ、出撃準備室へと向かった。

出撃準備室の中、優は慣れない手付きで戦術飛行に利用する機械翼を装着していた。それが終わると機械翼の両翼端についた識別ライトの点灯を確認し、武装のチェックに移る。

手伝ってくれる人はいない。唯一の男性である優は他と区別されている。優は訓練を思い出しながら、武装のチェックを丁寧に終え

た。

「異常ありません。準備完了しました」

『指示があるまで待機してて』

出撃準備室の隅に設置されたカメラに向かって報告すると、奈々の命令が返ってくる。

騒音とともに、ハッチが開き始める。その向こうに広がる夜空に優は息を呑んだ。

夜間飛行の訓練は片手で数えるほどしかやっていない。正直に言えば不安だった。

『第四小隊出撃完了。次のカウント開始。二十、十九……』

解析オペレーターの言葉に合わせ、機械翼に動力源であるESP エネルギーを送る。機械翼が展開し、横に大きく広がった。腰を落とし、飛行準備態勢を取る。

『八、七……』

深く息を吸って、吐き出す。不安はあるが迷いはない。

『三、二、一、出撃！』

一拍おいて、優は地を蹴った。同時に機械翼が翡翠の光を纏い、輝きを放つ。重力から解き放たれ、優は勢いよく夜空に舞い上がっていった。

秋の夜風が少し肌寒い。前方には光の群れ。衝突を防ぐための識別ライト。更に小隊長格や分隊長格はサインを出す為、腕に独自のライトを装備している。

『速度、高度ともに問題なし。そのまま真っ直ぐ。衝突だけはしないように注意してね』

奈々の言葉に優は前後の距離を確かめた。問題ない。

そのまま優たちは隊列を乱さず夜空を飛び続けた。何も無い夜空を飛び続けると時間間隔が麻痺していく奇妙な感覚に襲われた。一時間近く飛んだ気がした頃には、流星に緊張感や不安感が薄れてきた。訓練で教わったことを一つ一つ丁寧に、冷静に思いだし、整理する。何も不安に思うことはない。ただいつも通りにやるだけだ。

『衝突予測点まで後五分。各員、兵装確認』

奈々の言葉に、全員が一斉に小銃や連結ベルトの状態を確認する。優もその例にもれず、淡々と規定通りの確認を行った。

『数は向こうの方が上よ。相手は大きく横に広がってる。呑まれないように細心の注意を払って』

夜空の彼方に敵影が見える。闇夜の中、不気味に紫色の光を放つ姿は、亡霊という名に相応しいものだった。

『構え。射程まで五〇〇……四〇〇……三〇〇……』

小銃を持つ手に汗が滲む。しかし、不思議と頭の中は冷静で冴えていた。恐怖はない。意識を集中させ、奈々のカウントに耳を傾ける。

『二〇〇……一〇〇……撃て！』

奈々の命令と同時に引き金を引く。次の瞬間、辺り一帯から同じようにESPエネルギーが放たれるのがわかった。轟音が轟き、大気が震える。凄まじいESPエネルギーの奔流が亡霊たちに向かって雪崩れ込んだ。

ESPエネルギーの波から逃れようと亡霊が散開を始める。しかし、間に合わない。中央部の逃げ遅れた亡霊が巨大なESPエネルギーの波に吞まれて消し飛ぶのが肉眼でも分かった。だが、相手は百を越える大群であり、依然として速度を緩める気配はない。

『第二射用意！』

慌ててESPエネルギーを小銃に装填する。その間にも亡霊たちは恐るべき速度で距離を詰めてくる。

『撃て！』

周囲の空気が膨張するかのような錯覚とともに、再び膨大なエネルギーが放出される。しかし、亡霊群が回避行動をとる様子がない。

『後退！ 後退！』

奈々の命令とともに、やや前方の上空にいた華が小さな指揮ライトをつけた右手を振り、単純後退を命じた。それに合わせて一斉に第一分隊が後退を始める。

優はその時、先程放たれた第二射が亡霊の群れに風穴を空けるのを見た。しかし、亡霊群は止まらない。死を恐れない亡霊の行進を見て、恐怖を覚えるより先に頭の中が急速に冷え切っていく。

『散開！』

亡霊の群れから紫色に光る小さな弾が高速で飛び出した。ESP エネルギ―を凝縮した弾丸だ。当たればただではすまない。

悲鳴があがり、隊列が僅かに乱れる。混乱が広がる中、最前列に位置する華が散発的な攻撃を命じる合図を送ったのが見えて、優は引き金に指をかけた。

『後退！ 両翼が吞まれかけてる。中央部は全力で後退して！』

亡霊との相対距離が五十メートルを切る。隊列が大幅に乱れ始め、秩序だった攻撃が難しくなり始めるのが分かった。新たな判断を仰ぐと華に目を向けるも、いまだに散発的な攻撃命令が解かれる様子はない。優は前方に迫りくる亡霊に向かって銃撃を加え続けた。

『敵両翼が中央部に集中！ 中央更に下がって！』

奈々の言葉に、中央部に位置する優は牽制を諦めて更に後退を始めた。視界に映る亡霊の数が加速度的に増えていく。

まずい。そう考えて、距離を離そうと機械翼の出力を高める。だが、遅かった。亡霊群が優の位置する中央部に深く切り込み、優目指して直線的に距離を詰めてくる。

「っ！」

狙われている。そう直感し、優は考えるより先に高度をあげた。

「桜井君！」

機械翼の駆動音に紛れて、通信機から華の声が届いた。しかし、振り返る余裕はない。

優は高度を上げながら、下方から迫り来る亡霊に小銃を向け、引き金を絞った。刹那、亡霊の顔面部分が弾け飛び、残った胴体部がゆっくりと眼下の海へ落下していく。しかし、その後ろから新たに数十体の亡霊が接近してくるのを見て、優は迎撃が意味をなさない事を悟った。

迫りくる亡霊を振り払う事に集中し、機械翼へのESPエネルギーの供給量を増大させる。夜風が耳元で轟音を立て、通信機の向こうから届く誰かの声を掻き消していく。急加速のせいか、酷い頭痛がした。

チラリと、後ろを振り返る。数十体の亡霊が後ろに張り付いているのが見えた。完全に振り払う事は難しいかもしれない。そう考えて、旋回際に背後へ何発かの銃撃を加える。その全てが亡霊に着弾するのが視界の隅に映った。射撃訓練の時とは比べ物にならない命中率に微かな驚きを覚えながら、何度も銃撃を加える。

不思議な感覚だった。まだ二回目の実戦であるにも関わらず、次にどう動けば良いのか、どこを狙えば良いのか直観的に掴む事ができた。頭の中は冷え切っていて、恐怖や混乱はない。優は何度も旋回を繰り返しながら、亡霊に銃撃を加え続けた。

何度目かの旋回を開始した時、不意に激痛が全身に走った。口から苦悶の呻き声が漏れる。

視界に、鮮血が撒き散らされる。それで、被弾した事を悟った。全身から急速に力が抜け落ち、ESPエネルギーのコントロールが困難になり、身体がきりもみする。それでも、恐怖は覚えなかった。「華っ！ 援護を！」

奈々の悲鳴じみた声とともに優は鮮血を撒き散らせながら、漆黒の海に向かってゆっくりと落下を始めた。

その時、下方から迫りくる亡霊と目が合う。血のような、真っ赤な双眸。

優は最後の力を振り絞って、小銃を亡霊に向けた。銃声が響く。それを最後に、桜井優は意識を失った。

1章 5話 黒木舞

神奈奈々は、ディスプレイに映った中継映像を呆然と眺めた。夜空を背景に鮮やかな紅い華を散らせながら、空を舞う少年。それが緩やかに、美しく弧を描き、落下が始まる。

「桜井君っ！」

誰かが叫んだ。同時に悲鳴があがる。

奈々は我に返って、最も優に近い隊員に願いを託した。

「華っ！ 援護を！」

そして、亡霊の反応を示したマップ情報を見て愕然とする。先程まで大きく横に広がっていた亡霊群が、今は一つの点を目指して急速に密集し始めていた。亡霊群が向かう先には血に染まりながら落下する桜井優の姿。

「なに、これ」

奈々の口から、ぼつりと言葉が零れた。

いまだ七十以上の数を誇る全ての亡霊が負傷した桜井優、ただ一人に向かって殺到し始めていた。明確な、殺意。六年にも渡り亡霊との戦闘を見守っていた奈々でも、亡霊がここまで集中的に一人を狙った事例など経験した事がなかった。

桜井優を目指すように一団となった亡霊の群れが特殊戦術中隊の隊列に大きく切り込みを入れ、空いた穴から亡霊が次々突破していく。奈々は弾かれたように叫んだ。

「いけない。抑えこんで！ 両翼、後退！ 近接戦闘用意！」

奈々の命令を受けて、中隊が亡霊を抑えようと縮まっていく。しかし、それでも亡霊群の突撃を抑えきれず、隊列が大きく崩れ始めた。両翼のフォローも間に合わない、と判断する。

奈々はすぐに悟った。もはや崩壊は避けられない。

「華っ！」

奈々の叫び声と同時に、華が落下する優を守るように、上空から

殺到する亡霊の間に割り込んだ。直後、華の振り下ろした銃剣が亡霊の頭を吹き飛ばす。

続く銃撃で後ろに続いていた二体の亡霊が吹き飛んだ。しかし、その後から更に数体の亡霊が飛び出す。到底抑えきれぬ量ではない。

「第三小队！ 回収用意！」

奈々は力の限り、叫んだ。

その間に、華のもとへ四体の亡霊が迫る。

『ハナっち！』

ハスキーな声とともに、華の前に一つの影が飛び出し、同時に亡霊の首が弾け飛ぶ。

第四小队長、黒木舞。近接戦闘を得意とし、彼女の真価は乱戦において発揮される。

『早く、新人君拾いに行つて！』

舞が叫ぶ。

直後、華は自由落下する桜井優目指し、急降下を始めた。その間、舞が上空から迫る亡霊に向かって切り込み始める。

『桜井君！』

華の手が優の腕をしっかりと掴む。華はそのまま優を抱き寄せ、しっかりと背中腕を回した。

「意識は？」

『あります。でも、血が！』

奈々の言葉に、華が悲鳴をあげる。

「すぐに機動へりを回す。止血して！」

本部へ中継を行っている機動へりには医者と医療機材が用意されている。

奈々が機動へりに命令を与えようとした時、舞が亡霊を抑えきれずに、次々と突破されるのが見えた。

華は優を抱えている為、戦闘できるような状態ではない。

『 たすけて』

通信機の向こうで、華がそう呟いた気がした。

桜井優は既に正常な五感を得ていなかった。わき腹からの出血はもはや致命的な量に達し、感覚は麻痺し、痛みすら感じなくなっている。視覚も霧がかかったようで、ぼんやりと白濁した景色しか見えない。

このまま死ぬのだろう。そう、漠然と思った。

その時、意識の彼方から声が聞こえた。

『ちゃんと良い子にしててね』

酷く懐かしい声。暖かく、柔らかなこの声は、果たして誰の声だったのだろうか。

遠い昔に何度も何度も聞いた事がある気がする。

『すぐ帰るから』

ああ、そうだ。この人は

何故、こんな時に嫌な記憶を思い出すのだろうか。

『そう、約束。じゃあ 行くね』

約束。遠いあの日に、あの人はそう言った。結局、その約束が達成される事はなかったけれど、今でもその約束が忘れられない。

できれば、最期に会いたかったな、と思う。唯一の心残りだった。意識が闇に沈んでいく。今のが走馬灯というものだったのかもしれない、とぼんやり思った。

その時、遙か彼方から何かが聞こえた。誰かが傷ついた音。

止めないと、と思った。それが与えられた唯一の存在意義。

意識が浮上を始める。暖かった。誰かに強く抱き締められている気がした。

『助けて』

意識が覚醒する。

恐怖に震える華の顔がぼんやりと視界に映った。

戦わなくちゃ。そう思うも、手元に小銃はなかった。落下中にな

くしてしまつたらしい。

でも、問題ないと思つた。戦い方は知つている。

優は血で赤く染まつた右手を空にかざした。暖かなものが体を包み込む。震える華の頬を左手で優しく撫でると、華は驚いたように肩を一瞬大きく震わせた。直後、華の震えがとまる。それを見て優は屈託なく微笑んだ。

右手に光の粒子が収束する。次の瞬間、それは何の前触れもなく爆発した。光の衝撃が闇夜を吹き飛ばす。

それは指向性を持たず、球を描くように膨張していった。昼夜が逆転したかのように、周囲をESPエネルギーが発する光が満たしていく。

「きゃっ！」

荒れ狂うエネルギーの奔流に華がバランスを崩した。優を抱いていた腕から力が抜ける。エネルギー体の発する衝撃で気を失つた華は優とバラバラに仄暗い海を目指して頭から落下を始めた。

まずい。そう思うも力が入らない。優は薄れゆく意識の中、誰かに足を掴まれるのを感じ、そのまま意識を手放した。

奈々は中継映像を呆然と見詰める事しかできなかった。

瀕死の桜井優が放つたESPエネルギーの波が、その周囲に群がっていた亡霊群を跡形もなく消し去っていく。

「モニター！」

奈々は反射的に、電子オペレーターたちに向かって叫んだ。

解析オペレーターたちが弾き出された数値群を素早く処理し、その影響範囲を記録していく。

それから、落下を続ける桜井優と篠原華に気付いて、通信機に向かって命令を飛ばす。

「詩織！ 二人を拾つて！」

命令通り、第三小隊長の詩織が急降下を始める。数秒後、詩織が華と優を無事に拾いあげたのを見て、奈々はほっと胸を撫で下ろした。

続いて、中継映像を通して相当な怪我をしているように見えた第四小隊長、舞の様子を確認する。

「舞、傷は？」

「ちよつとヤバいかな……」

「綾、舞を連れていつて」

慌ただしく負傷者の搬送が始まった。電子オペレーターと解析オペレーターが先程の優が放ったESPエネルギーの暫定的な解析結果を弾き出し、騒ぎ始める。

奈々は椅子に深く腰かけ、安堵の息をついた。

背もたれにもたれかかり、静かに目を瞑る。

瞼の裏に優の放った最後の光が浮かんだ。夜空を照らす暖かな光。それはまるで、地上に舞い降りた神のようだった。

彼は本当に救世主なのかもしれない。

ゆっくりと瞼を開き、奈々は凜とした声で宣言した。

「負傷者十六名。死者〇名。七十二名全員の生存を確認。これより帰投しなさい」

1章 6話 佐藤詩織(2)

桜井優は消毒液の匂いで目を覚ました。重い瞼を開くと、見慣れない白い天井がぼんやりと視界に入ってくる。カーテンが閉められているらしく、かなり薄暗い。

身を起こそうとすると強い目眩を感じた。身体が酷くだるい。それに、わき腹が強く痛む。体調は最悪だった。

しかも軽い失見当識を起こしてるようで、いまいち状況が掴めない。目線を落とすと、身体中に包帯が巻かれているのが見えた。酷い怪我をしてるらしい。

なら、ここは病院だろうか。そう思って辺りを見渡すと、人影があることに気付いた。

「篠原さん……？」

壁際に備え付けられたソファに、一人の少女が眠っている。

疑問に思っても、少し嬉しかった。どうやら、心配してくれたようだ。篠原華とは友好的な関係を築けたという証拠。

痛む身体に鞭を打って、ベッドからフラフラと立ち上がる。スリッパが見当たらず、床についた素足が冷んやりとしたが気にはならなかった。目眩を我慢し、窓際へと向かう。

サツ、とカーテンを開けると、爽やかな日差しが部屋を満たした。小さく背伸びをしようとしたが、わき腹の痛みに耐えかねて断念する。

「……………んっ……………」

背後で可愛いうめき声が響き、優は申し訳なさそうに振り向いた。「ごめん、起こしたかな」

「桜井……くん……？」

ぼんやりとこちらを向いた彼女は、徐々に驚愕の色を瞳に宿し、急にソファから立ち上がった。

「わ、私先生呼んでくる！」

そう言って、彼女は慌ただしく外に出ていった。優はキョトン、とその後ろ姿を見送った。

医者の話によれば、肋骨にひびが入り、出血も酷く、三日間意識が戻らなかつたらしい。それを聞いて、華の慌てぶりに納得がいった。彼女は三日間、ずっと付き添ってくれていたらしい。きっと優しい子なのだろう、と優は一人で納得した。

暫くは安静にしなければならなかったが、最先端の医療用ナノマシンによる治療で、優はすぐに元気になっていった。非常に高価な技術であると聞いていた為、医療費を請求されればどうしようか、保険は効くのだろうか、などとビクビクしていたが、全てを亡霊対策室が負担してくれるらしく、安堵の息をついた。

六日後、優は無事治療を終え、すぐに通常の生活に戻るようになった。

しかし、医務室で過ごす最期の日、思わぬ来客があった。

「どうぞ」

ノックの音に、読んでいた漫画を横におく。

てつきり華が入ってくるのだろう、と思っていたが、入ってきたのはシャギーの入ったセミロングの黒い髪に、鼻筋の通った、凛とした雰囲気を持つ少女だった。白のブラウスに、ふわりとしたフレアスカートがよく似合っている。

「あー……えーと……」

名前が出てこない。優はバツが悪そうに頭をかいた。

それを見た少女が慌てたように助け船を出す。

「第三小隊長の佐藤詩織です」

正直、まるで覚えがなかった。返す言葉が見つからない。

気まずい沈黙が到来するのを予感して、優は適当に口を動かした。

「……えっと……久しぶり……？」

誠意の欠片もない言葉を放つてから、凄まじい後悔が襲ってきた。もし知り合いだったとしても、今の言い方では覚えていないということをお白状しているようなものだ。

詩織も困ったように、笑みを浮かべている。

「あ、やっぱり、はじめましてだよな？ ごめん、記憶力なくて」再び沈黙が落ちそうになり、慌てて言葉を重ねる。少女は言葉を選ぶように視線を泳がせながら、口を開いた。

「……すっかり挨拶したことないから、はじめましてで良いと思います」

「そっか。そういえば、そんな気がするかも」

再び訳の分からない言葉が飛び出す。

何だこの空気、と優は落ち着きなく、少女を見やった。

詩織もそわそわした様子で、一向に目を合わせようとはしない。

見た目はしっかりした感じだが、どうやら中身はそうでもないらしいようだった。

一瞬、嫌われてるのかな、と思うも訪ねてきたのは向こうだ。一体この人は何をしに来たのだろう、と首を傾げる。

「えっとさ、良かったからこれ食べる……？」

沈黙に耐えきれず、優は棚の上に置いてあったプリンを手にとった。

他に共通の話題が見当たらない以上仕方ない。会話の流れが優自身わけがわからなかったが、沈黙よりはましだと思った。

「神条司令官から貰った結構有名な店のものらしいんだけど、食べきれなくて。あ、嫌なら無理には……」

「あ……えっと、いただきます」

優はプリンの上に使い捨てのスプーンをのせ、手渡した。おずおずと手を出した詩織は、受け取った瞬間、びくりと肩を震わせた。

やっぱり嫌われているのだろうか。そう思うも、嫌われるようなことをした覚えが全くない。何せ、今日会ったばかりなのだ。

疑問に思いながら、優は自分用のプリンを手にとった。こちらも

食べないと、詩織が食べづらいだろう、と気を遣った結果だ。

座ったらどうか、と進めると、詩織はようやく来客用の椅子に腰掛けた。

「ルーライズって知ってる？」

「食べながら問いかける。」

「ルー……ライズ……ですか？」

「うん。洋菓子の専門店なんだけど、かなりおすすめ。このプリンの五倍おいしいかな」

「……甘党なんですか？」

「将来、糖尿病なりそうなくらい」

少し会話が繋がり、微笑む。

「……男の人って、そういうの駄目なんだと思ってました」

「確かにダメな人は多いね。僕がまだ子どもだから大丈夫なのかも」

食べる、という動作が会話を副次的な要素に追いやり、少し緊張がほぐれたのだろうか。今まで受け身だった詩織がぽつぽつと話すようになった。

「前に私が怪我した時、神条さん、これと同じプリン持ってきたんです。皆に配ってるのかな」

「あー、何か司令の妹さんがやってるお店のものらしいよ。商売上手だよな」

そう言って、二人して苦笑する。

その時、詩織の個人端末から小さなアラームが鳴った。訓練の知らせだ。詩織が慌てて立ち上がる。

「あ、あのっ」

「んっ？」

「プリンありがとうございましたっ！」

「どういたしまして。いつてらっしゃい」

気を付けてね。そう付け加えると、詩織は大袈裟な動作で頷き、慌ただしく部屋を出ていった。

部屋に静寂が戻る。

「……結局何だったんだろう」

もしかしたら、他に用はなく、ただお見舞いに来てくれただけだったのかもしれない。

何故かどつと疲れた。優はそのままベッドに倒れこんだ。

佐藤詩織は医務室から飛び出すと、近くの壁にもたれかかった。

全身が不自然に熱い。恐らく、自分は今耳まで真っ赤になっていることだろう。

深呼吸して、気分を落ち着かせる。

先の戦いで落下する優を最後に拾った時、不思議と拒否反応が出なかった。もしかしたら、と思って試しに来たのだが、会った瞬間頭が真っ白になってしまった。

やはり、あれは命がかかった特殊な状況に起因していたのだろう。自分の男性恐怖症はまだ治っていない。

普段から男性と一切関わり合いを持たない詩織にとって、優との会話は新鮮なものだった。異様に緊張して身体が固くなってしまったが、嫌悪感を感じなかった。少しずつマシにはなっているのかもしれない。

ただ、それは恐らく優の容姿のせいでもあるだろう。はじめて間近で見た優は想像以上に小柄で、触れれば壊れてしまうんじゃないかと危惧してしまうような儂さがあった。

たぶん、あれは年下趣味の人からしたら理想の相手ではないだろうか。整ったまだ幼い顔つきは優しく、性を感じさせない。無邪気な子どもという風だった。

思い出すと、再び顔が熱くなってくる。

詩織は妙な思考を追い払おうと顔を振り、誤魔化すように訓練室目指して駆け出した。

1章 7話 黒木舞(2)

午前十一時。亡霊対策室中枢エリアの廊下。療養から復帰して一日経過し、優は入隊後の初級訓練カリキュラムを消化する為に第二特別室に向かっていた。

「ここでの生活はもう慣れたか？」

隣を歩く齋藤準さいとう じゅんが言う。優の知り合いの中では唯一の男性で、日々の個人的な知り合いでもあるらしく、入隊当初から本部内の案内をして貰っていた。まだ本部内の構造が良く分かっていない為、今もこうして案内をして貰っている。男性の知り合いを作りづらい環境であった為、奈々が準を案内役として紹介してくれた事に内心感謝していた。

「はい。ようやく慣れてきた感じですが。でも、まだ友達とか少なくて、まだまだかも」

「やっぱり、やりづらいだろ？ 学生時代の友人に元女子高に入ってた奴がいたんだが、肩身が狭いと嘆いていたよ」

「ええ。何と言うか、場違いな気がしますね。一番困るのは男子トイレが寮棟にないことです」

準は小さく吹き出した。

「そりゃそうだ。ただ、桜井なら女子トイレに入っても誰も気づかないかもしれん」

「それ、どういう意味ですか。チビってことですか」

準の言葉に、優は不機嫌そうな表情を浮かべた。

「そのままの意味だよ。さて、着いた」

準が足を止める。第二特別室と書かれたプレートと、横開きの白い扉があった。

「頑張つてこい」

「はい。案内、ありがとうございました」

頭を下げる。次いで扉に手をかけると、音もなく扉がスーと開い

た。中にいた数人の少女から視線を向けられる。

「あ、桜井くん、入って入って！」

その中の一人、篠原華が声をあげる。知り合いがいた事にホツとして、優は第二特別室の中に足を進めた。

特別室は大学の講義室のように前方に大きな黒板があり、その前に長机が並べられてる。部屋の中には二十人ちよつとの女の子がいて、三から五人ほどのグループに分かれて疎らに座っていた。

「適当なところに座って」

華が言う。どこに座ろうかと優が部屋を見渡した時、部屋の前方に座っていた一人の少女が後ろの空いてる席を叩いた。

「ここ座ったら？ 適当にって言われても困るでしょ」

優は頷いて、示された席に向かった。その間、部屋中の視線が集中して、僅かに居心地の悪い思いをした。

優が席についた瞬間、前方の少女が身を乗り出し、口を開いた。

「私、長谷川京子。よろしく！ あんたと同じ第一小隊の、つてか、ここに居るの皆第一小隊の子だけだよ」

そう言つて、京子と名乗った少女は自身の隣にいる大人しそうな少女を指差した。

「こつちは宮城愛。ちよつと無愛想だけど、悪い子じゃないから愛と紹介された少女が振り向く。

「……よろしく」

抑揚のない声でそう言つた後、愛はすぐに前方に向き直つた。

「ね？ 無愛想だけど、誰にでもこんな感じだから気にしないで」

京子が笑いながらそう言う。隣の愛は何も言わなかった。対象的な二人の様子に思わず優はクスリと笑みを零した。

「よろしくね。えっと、長谷川さんと宮城さん」

「はい、お喋りストップ！ 説明始めるよ！」

黒板の前に立つ華が声をあげる。京子は仕方がないといった様子で前に向き直つた。

「入隊して十日間は専門の教育部隊の人が色々教えてくれたと思

いますが、それ以降は各小隊で細かなケアをする事になってます。それで、小隊長の私を実戦の細かな注意とかすることにしました。対象は桜井くんと柚子ちゃんだけなんですけど、この教室で二人だけってのは寂しいから、交流を兼ねて暇な人に来ていただきました。何か分からない事とかあれば、私だけじゃなく、周りの人にも遠慮なく聞いてください」

華はそう言つて、黒板の方にクルリと向き直った。チョークの音と共に、黒板に何か書き始める。

「まず最初は集団飛行！ 戦闘は一人では出来ません。強大な亡霊群の前には一人一人の細かな飛行技能なんて意味を成さないのです！ よつて指示された隊列を乱さず、維持する事が最も大切です。その為には」

華が説明を始める。その多くは入隊直後に教育部隊の人から教えてもらった事の復習に近いものだったが、実戦的な視点から語られるそれは無駄のないものだった。優は実戦での事を思い出しながら、華の話に真剣に耳を傾けた。

「つまり、空戦機動とは何かと言うと運動エネルギーと位置エネルギーの変換であり、このエネルギー変換に対する長期的なプランが戦闘に大きな影響を与えるのです。加えて、私達はESPエネルギーの残量とそのコストを考えていかなければいけない。飛行訓練の時には是非この話を思い出して訓練してほしい、と思う次第です。えつと、えつと、次は」

「……華、時間」

話の区切りがついたところで、優の斜め前に座っていた宮城愛が声をあげた。あまり大きな声ではなかったが、よく通る声だった。華が室内の壁にかけられた時計に目をやり、しまった、という顔をする。

「わっ、もうこんな時間……。じゃあ、今日はここまで。続きは明日、このこと同じ場所で。桜井くんと柚子ちゃん以外も暇な人は来て

ね！」

華の言葉が終わると同時に、室内が騒がしくなる。いつの間にか机に突っ伏していた京子が顔をあげ、大きく欠伸した。そこに黒板の文字を消し終えた華が駆け寄ってくる。

「ちよつと京子、堂々と寝すぎだよ」

「だって私、この話何回も聞いてるし」

京子があっけらかんと言う。華は困ったような笑みを浮かべて優に視線を移した。

「桜井くんは京子みたいにならないでね」

「がんばります」

優はそう言っただけで頷いた。

喧騒の中、京子の横に座っていた愛が立ちあがる。

「……そろそろ合同訓練の時間。早く行かないと遅刻する」

「だね。さつさと行こうよ」

京子が立ちあがる。次いで、優の方を見やった。

「桜井も一緒に来なよ。場所、わからないでしょ？」

「うん。案内してもらえると凄い助かるかな」

「オッケー」

京子が戸口に向かう。その後、愛が続き、最後に華と優が続いた。最後にここ出る人、鍵閉めて後で私に渡してね！」

第二訓練室を出る際、華が室内に残った女の子たちに向かって声を張り上げた。中からそれに了承する返事が疎らに返ってくる。

「小隊長って大変そうだね」

優が思った事をそのまま口にする、華は小さくはにかんだ。

「確かに大変だけど、信頼されてるって事だからちゃんと応えないとね。責任は果たさないと」

同い年には思えないほどしっかりとした答えが返ってきた為、優は思わず華の顔をまじまじと見つめた。

「篠原さんはここに来て結構長い？」

「もう二年目だよ。それと数ヶ月かな」

と言う事は、十四歳の頃から亡霊と戦っていたと言う事になる。

「ここに来た時は不安で一杯だったけど、周りが良い人ばかりだったからすぐ慣れちゃった。桜井くんもすぐ慣れるよ」

華はそう言つて笑みを浮かべた。釣られて頬が緩む。

「そうなるように努力します。篠原小隊長」

ふと視線を華から前方に移すと、京子が足を止めてこちらを急かすように手招きしているのが見えた。その横に立つ愛も無言で優たちが追いつくのを待っている。それを見て、優はこれから先も亡霊対策室で何とか上手くやっていける気がした。

次の日。優は野外に設置された第一訓練場の中を走っていた。訓練場と言つても、特別な訓練施設がある訳ではない。ちよつとした平地に壮大な原っぱが広がっているだけだ。本来なら大規模飛行訓練に利用するところらしいが、今日は基礎体力訓練の為に使われていた。

寒空の下、原っぱに複数の足音と荒い息遣いが静かに響く。優は背中に機械翼を広げ、両手で小銃を構えて原っぱの上を走り続けた。その後には優と同様に機械翼や小銃、通信機などを装備した少女たちが黙々と走り続けている。特殊戦術中隊の基礎体力の向上を目的としたランニングだ。陸上自衛軍ほどの厳しい訓練ではないが、特に優は男性であるという理由で他よりも厳しいノルマが課せられている。優は体力の配分に注意を払いながら、原っぱの上を走り続けた。背中に装着した機械翼がずっしりと押し掛かってくる上に、両手に持つ小銃のせいで腕がだるくなってきた。中学の時に軟式テニスをやっていた為、体力にはそこそこ自信があったのだが、予想以上に厳しい訓練だった。

『後五分』

通信機から奈々の感情の籠らない声が届く。優は荒い息を吐きながら、酷い筋肉痛になりそうだなあ、とぼんやりと考えていた時、後ろから声かけられた。

「君、結構体力あるね」

振り返ると、長い黒髪が印象的な女性が走っていた。大人じみた顔つきをしているが、親しみやすい笑みを浮かべている為、それほど歳が離れているようには見えなかった。

「えっと……」

優が困ったような表情を浮かべると、女性はクスリと笑った。

「ボク、第四小隊長の黒木舞くろぎ まい。君、新しく入った子だよね」

「はい。第一小隊に配属されました」

走りながら答える。ボク、という一人称に違和感を覚えたが、一定の速度を保つために気にしている暇がなかった。

「名前、何だっけ？」

「桜井優です」

「ユウくんか。呼びやすいな」

いきなり名前で呼ばれ、優は僅かに眉を寄せた。距離を感じさせない話し方だ。悪く言えば、馴れ馴れしい印象を受ける。新入隊員を気遣ってくれているのかな、と優は舞の態度を好意的に受け取った。『舞、マイクの電源を切り忘れていたようだけど……』

通信機の向こうから奈々の声。舞はギョツとした様子で慌ててマイクを切った。

「やっば……これ、よくやっちゃうんだよね」

慌てた様子で奈々のいる本部の方を振り返る舞の姿がおかしくて、優はクスクスと笑った。大人びた外見とは裏腹にどこか子どもっぽい人だと感じた。

それから、優は舞と小声で会話を交わしながら残りの時間を潰した。舞は優の一つ上で、今年で十七歳らしい。

「もう少し年上かと思ってました」

素直にそう言つと、舞は目を何度か瞬いて、次に意地の悪い笑みを浮かべた。

「逆にボクは君の事、もっと年下かと思ってたよ」

優は何も言わず、じっと舞の瞳を睨みつけた。舞が笑う。

「良くて十四歳くらいにしか見えないかな。ユウ君、一四〇センチくらいしかないでしょ？」

「一四五センチです」

不機嫌そうにそう言うと、舞は再び笑った。

「ごめん、ごめん。もしかして結構気にしてた？」

「気にしてません！」

そう断言した時、警音器の高い音が鳴り響いた。次いで、通信機から奈々の声が届く。

『訓練はここまで。突然止まらない事。各自、身体を解してから各小隊ごとに点呼をとって』

どうやら終わりのようだった。優は小銃を投げ捨て、その場に倒れ込んだ。背中の機械翼が重い。しかし、取り外す作業が非常に面倒である為、優は機械翼の存在を無視する事にした。

「はあ、ようやく終わった。ボク、点呼取らないといけないから行くね」

舞が乱れた息を整えながら言う。優は原っぱの上に座り込みながら舞を見上げた。

「はい。お疲れ様でした」

「じゃあね！」

舞が背を向けて本部の方に歩いていく。優は足首を何度かマツサージした後、ゆっくりと立ちあがった。まだ息があがっていたが、いつまでも休んでいられない。第一訓練場の本部側に向かい、第一小隊が集まっている場所を探した。数か所に分かれて人が集まっていたが、どれが第一小隊の輪なのかよくわからなかった。

「桜井、こっちこっち」

京子の声。優はすぐに京子の姿を見つけ、傍に駆け寄った。

「あ、桜井くんも来たね。各分隊で欠員いない？ 大丈夫？」

中心に立っていた華が周囲を見渡しながら声をあげる。数人の少女が、大丈夫、と言葉を返した。

「よし、じゃあ解散！」

華が宣言した途端に周囲が騒がしくなる。シャワーを浴びに本部へ戻ろうとした時、京子に呼び止められた。

「桜井、最後までペース落ちなかったね。何かスポーツやってたの？」

「軟式テニスを少しだけ」

ふくらはぎを片手で揉みながら答えると、京子は小さく笑みを零した。

「ロブ打たれたら終わりじゃないの？」

「……似たようなこと、黒木さんにも言われたよ」

多少不機嫌そうに答えると京子は、やっぱりね、と言った。

「体重どれくらい？」

「四十」

「うわ、反則じゃない、それ？」

京子が呻く。優はクスリと笑った。

「今日みたいなランニングって今までやった記憶ないんだけど、毎週あるの？」

「週一かな。今は地上戦とか殆どやらないから、最低限しかやってないよ。射撃訓練と飛行訓練の方が大事だしね」

基礎体力訓練を軽視しているというよりも、実戦重視という印象が強い。優は頷いて、足首を軽く回した。疲労が溜まって奇妙な脱力感が抜けない。

「京子、私先に帰ってる」

横から宮城愛の声。振り返ると、相変わらず無表情な愛と目があつた。

「あいあい。お疲れ様」

京子が言う。優も、お疲れ様、と短く言葉を返した。愛は一度だけ小さく頷いて、本部に戻っていった。それを見送ってから、京子が大きく背伸びした。

「私もそろそろ戻ろっかな。シャワー浴びたいし」

そう言うてから、京子が訓練服の首元ををパタパタと煽ぐ。

「だね。僕も戻るよ」

優も賛同し、背中に担いだ機械翼を外す為に大きく身体を捻った。それを見ていた京子が口を開く。

「外してあげよっか？」

「うーん、じゃあお願い」

一瞬だけ迷った後、優は素直に京子に背中を向けた。

「オッケー。じっとしててね」

カチャカチャと金具を外す音が背中から響く。優の何倍も手際が良かった。あつという間に背中部分の固定装置が外れる。

「ちよつと手、回すよ」

京子の手が後ろから腹部に伸びてくる。後ろから抱きつかれているような格好になり、優は僅かに気まずい思いをした。

「はい、終わり」

小気味良い金属音とともに機械翼が取り外される。身体が軽くなり、奇妙な浮遊感に襲われる。

「ありがとう」

取り外した機械翼を京子から受け取り、優は笑みを浮かべた。

「じゃ、戻ろっか」

「うん」

横に並んで本部に向かう。その時、背後から華の呼び声が届いた。「京子、待って！ 私も一緒に行く！」

振り返ると、こちらに向かつて華が走ってくるのが見えた。優と京子は立ち止まって、華が走ってくるのを待った。

「報告終わったの？」

「うん。ばっちり」

京子の問いに華が笑顔で答える。

「神条司令の注意が黒木さんに向いてたから、報告早く終わっちゃった」

「黒木さん、毎回よくやるなあ……」

京子が呆れたように呟く。マイクを切り忘れていた事に対してだ

ろう。毎回、という言葉が気になって優は首を傾げた。

「黒木さん、ああいうの良くやつちやつてるの？」

華が苦笑して頷く。

「うーん、何て言うか、結構訓練サボっちゃったりとか、会議中に寝ちやつたり色々しちゃってるから。でも、面倒見良くて凄い良い人だよ」

そんな人が第四小隊長で大丈夫なのだろうか、と微かな不安を覚える。しかし、それを補う程の要素を持っているのだろうか、と優は解釈した。

冷たい風が吹く。うう、と華が小さく呻いて身を抱いた。汗を大量にかいていた為、秋風が凍えるように冷たく感じる。優達三人は他愛のない雑談をしながら、急いで訓練場を後にした。

1章 8話 長谷川京子

「桜井君おはよう!」

「おはよう」

寮棟の廊下ですれ違う少女の挨拶に手を振って応える。

復帰してから五日経った。華たちのおかげか、最近は前までのように変に距離感を感じることなく、誰からも普通に接してもらえようになった。見知った顔をも増え、ようやく溶け込めた事が実感できるようになってきた。

あくびを抑えながら一番近い食堂に向かう。食堂に行くためにはいくつかのセキュリティゲートを抜けなければならない。セキュリティゲートはセキュリティレベルの異なる区間に存在し、それぞれのセキュリティレベルに合わなければ弾き出される。このセキュリティエリアは各下位組織のセキュリティポリシーに沿ったレベル分けをされている。例えば特殊戦術中隊の寮棟には殆どの者が入れないし、逆に中隊員は情報部や防諜部などの関係ないエリアに入れないようになってる。

寮棟から中枢エリアへ移り、一階に位置する賑やかな食堂に入る。券売機の前に数人が並んでいるのを確認し、優は最後尾に並んだ。列を待つ間を利用して華の姿をキョロキョロと探す。どうやらまだ来ていないようだった。

列が進み、優の番になる。優は迷わず朝食セットを選び、券を抜き取った。

「桜井、一緒に食べない?」

不意に後ろから話しかけられて、振りかえる。同じ第一小隊に所属する長谷川京子だった。茶色に染めたショートカットに、ぱつちりとした目から活発的な印象を受ける。京子が華の友人であったことも手伝って、最近をよく話すようになっていた。

「いいよ」

頷くと京子はにっこり笑みを浮かべ、目線で一つのテーブル席を差した。

「じゃ、席あっちでいい？」

「オッケー」

京子の後に続き、比較的奥の席に座る。

京子の前にはラーメンが置かれていた。優の顔が軽く引きつる。

「朝からラーメン？」

「そ。栄養つけないとね」

京子はそう言って笑った。ラーメンに栄養があるのかは疑問だったが、カロリーは高そうだな、と考えながら優は自身の朝食セットに箸をのばした。

「あ、華！ こっち！」

京子が不意に優の背後を見て声を張り上げる。京子の目線を追って振り返ると、華がトレイを持ってこちらに向かってきているのが見えた。

「篠原さんも朝食セット？」

「うん。大体毎朝これだよ」

「朝からラーメン選ぶ人の方が少ないよね」

そう言って、ちらりと京子に目をやる。京子は特に気にした風もなく、食事を続けている。そこから何となく視線を横に逸らすと、テーブル越しにある少女と目が合った。

肩口で揃えられた黒い髪に、ぱっちりとした瞳。第三小隊長、佐藤詩織。詩織が迷った様子を見せながら口を開く。

「あの……、ご一緒していいですか？」

「え、あ、うん！ ここ空いてるよ！」

華が意外そうな顔をした後、慌てたように答える。そんな二人を優は怪訝な目を見た。

二人はあまり仲が良くないのだろうか。そんな事を考えている間に、詩織は優の斜め向かいの席に腰を下ろした。

「佐藤さんも朝食セット？」

「は、はい」

優が声をかけると、詩織は大袈裟な程肩を震わせた。それを見て、やっぱり変わった子だな、と思う。いつも向こうから接触してくる割に、反応だけを見ると嫌われているように見える。優は小首を傾げた。

「そつえば、明日から休みだよ。何か予定ある？」

京子が顔をあげて優達を順番に眺める。優はふとある疑問を口にした。

「休み中って外に出られるの？」

京子が怪訝な顔をする。

「当たり前じゃん」

「遊んでる間に亡霊が来たらどうするの？」

「小隊ごとに休みの日がずれてるの。亡霊が出た直後だと三つくらいの小隊に同時に休みが出たりするよ」

華の補足で、優は納得したとばかりに頷いた。

「あ、でも入隊した時、勝手に外に出ないよう何度も注意された記憶が……」

「勝手に出たら駄目だよ。総務部に外出許可届出さないと」

「私達、一応特殊公務員だしね。手続きさえ踏めば殆ど何でもできるんじゃない？」

京子はそう言って、再び食事を再開した。

優は中隊に入ってから外に出てない事を思い出し、機会があれば出てみようかな、と思考を巡らせた。

「司令……？」

神奈奈々が司令室のデスクに座ってじっと考え込んでいると、副司令である長井加奈から遠慮気味に言葉を投げかけられた。奈々は我に帰って、視線を加奈に向けた。

「何か報告？」

「いえ、司令、ずっと考え込んでいるようですが、何か問題でも発生したのでしょうか？」

奈々は無言でディスプレイを指差した。不安そうな様子で加奈がディスプレイを覗きこむ。

「……これは」

奈々が示したディスプレイには、戦略情報局から送られてきた訓練カリキュラム変更の通達と広報活動に関する通達が映し出されている。加奈はそれを見て不思議そうな顔を浮かべた。

「S I Aからですか」

戦略情報局（S I A）はユーラシア連合の台頭に伴って創設された情報機関だ。統合幕僚監部から独立しながらも、各軍と連携を取りながら対外的な諜報活動も行っている。その権限は年々強化され、過ぎた干渉が問題視されている。

「そう。それで、具体的なカリキュラムがこれ」

奈々はそう言ってコンソールを叩いた。画面が切り替わり、簡素なマトリックスが表示される。途端、加奈の瞳に警戒の色が宿った。「何ですか、これ？」

ディスプレイに映し出された新しいカリキュラムは従来のカリキュラムとは違い、個人技能の習熟に焦点を当てたものだった。対亡霊戦では複数の小隊を並行して運用する為、個人技能の習熟は実戦では効果が薄い。その為、これまでは集団戦を想定した飛行訓練や隊形移動を中心にしたカリキュラムが組まれてきた。

「何の為だと思う？」

奈々はディスプレイを眺めたまま立ち尽くす加奈を見やった。加奈は何も答えない。奈々は再びコンソールは叩いた。

「次にこれが広報活動に関する通達」

画面が切り替わる。すぐに加奈の瞳に驚きの色が宿った。

「優君をメディアに露出させる？ 彼、未成年ですよ」

ディスプレイには、広報活動に桜井優を起用するという旨が長々

と表示されていた。顔写真に映像、そして本名の公開。また、その公開に関するメディアの選別も既に終わっているようだった。予算そして、期日までもが明記されている。

「たった一人の男性ESP能力なのだから情報を開示する社会的責任がある、という建て前でしよう。けど、社会的不安を取り除く為に偶像化される事は避けられない」

「プロパガンダ、ということですか？」

「そう捉えても問題ない。それとね、まだ言ってなかったけど、今朝ある報告があったの」

奈々はそう言って再びコンソールを叩いた。途端、画面にヒストグラムが表示される。

「珍しい形をしています、標本はなんですか？」

興味深そうにヒストグラムを見ながら、加奈が問う。ヒストグラムはガウス分布に近い形をとりながらも、山から遠く離れた右端に一つだけ点がある。

「中隊員の瞬間出力ESPエネルギーの分布よ。横軸はESPエネルギーの瞬間出力量、縦軸は該当人数を示す。見た通り左の山は綺麗な形をしているでしょう？ 平均的な出力量を持つ中隊員が一番多くて、ずば抜けた出力量や出力量が乏しい人は人数が減っていく。でも、この山から離れた存在が、右に一点だけある」

奈々はディスプレイの右端を指差した。そこには一人の分布を示す小さなバーが盛り上がっている。

「さつきも言った通り、横軸はESPエネルギーの出力量。つまり、一人だけ瞬間出力ESPエネルギーの突出した存在がいる」

「まさか、優君ですか？」

加奈の言葉に奈々は頷いた。加奈が混乱したように額を押さえる。「まさか、だって、最初に計った時はこんなに……」

「そう。入隊時に計った瞬間最大出力量は平均より少し高い程度だった。でも、彼が復帰してから再計測した結果がこれ」

加奈が息を呑む。

「短期間でこれだけ成長したって事ですか？」

「成長したというよりは、顕在化したただけかもしれない。これから成長する可能性は低いでしょう。でも、これで戦略情報局が干渉してきた理由が大体理解できる」

「個人技能の習熟というのは、優君を切り札にする為ですか？　そして、その戦果をプロパガンダにフィードバックする？」

加奈の推測に対して奈々は、どうかしら、と否定的な態度見せた。「その逆かもしれない。優君以外の中隊員の個人技能を上昇させる事で、彼の影響力をコントロールできる範囲に抑えようと考えている可能性が高い」

統合幕僚監部、及び戦略情報局の望みは安定した戦力の供給だ。

彼らはシステムに組み込まれた救世主を求めているが、コントロール不能な爆弾を抱え込むつもりはない。

「司令……どうするんですか？」

「カリキュラムの変更については実務に悪影響が及ぶ可能性があるとして抗議する。でも、プロパガンダに関してはこちらに拒否権はない。もう、シナオリが作られてしまっている。後は、何とか細かな要求を付け加える事しかできない」

奈々は唇を噛んだ。

「少し、風に当たってくる」

加奈に言葉を残し、奈々は司令室を出て、当てもなく無機質な白亜の廊下を進んだ。

脳裏に一人の少女の姿が浮かぶ。人前では気丈に振る舞い、陰で泣いていた孤独な少女。

柘沙織つさお織。史上初のESP能力者。そして、ESP能力者発見後の初めての戦死者。

マス・メディアに救世主としての役割を与えられ、その役割に殉じた十六歳の子ども。

当時、奈々は一切の感情を殺し、効率を求める事こそが強さだと信じていた。そして、その結果柘沙織は死んだ。奈々は、彼女を助

けられなかった。

史上初のESP能力者。そして、史上初の男性ESP能力者。一人の少女と、一人の少年の笑顔が頭の中で重なる。二人が持つ雰囲気は、酷く似通っていた。恐ろしい程までに。

過ちを繰り返してはいけない。その為に、奈々は亡霊対策室の司令官を続けているのだ。来るべき日の為に。

奈々は、どこに向かっていているのか自分でもわからないまま、長い廊下をゆっくりと歩き続けた。

1章 9話 橋本恵

優が亡霊対策室での生活によく慣れ始めた頃、司令室から呼び出しを受けた。

「司令、お話とは何でしょうか」

司令室に入って早々に、優は話を切り出した。奈々はデスクから立ち上がって、優と視線を合わせるように少し前屈みになった。黒い髪がはらりと落ちる。それを見て、本当に綺麗な人だな、と思う。奈々は少し迷うような素振りを見せた後、言葉を選ぶようにゆっくりと口を開いた。

「わざわざ司令室まで足を運ばせてごめんなさい。いきなり本題に入ると、取材を受けて欲しいの。と言っても、大袈裟なものじゃなくて、簡単な質問に答えるだけ。後、少し撮影も」

「撮影、ですか？」

優が不思議そうな顔をする。

「そう。まだ男性初のESP能力者が発見されたという情報を公表してるだけで、優君の具体的な個人情報には公には何も出してない。もちろん、それが普通なんだけど、君の立場は少し特殊だわ。どうしても一般人とは区別されてしまう。それで、情報の開示をする事になったの。君には関係ない大人の事情だけど、受けてもらえないかしら？」

本当に申し訳なさそうに奈々が言う。何となく奈々の立場を理解して、優は快諾した。

「はい。記者の方と話すだけなら大丈夫だと思います」

「ええ。質問に答えるだけ。ありがとう、助かるわ」

奈々は安心したような笑みを見せた。

「えっと、日時なんだけど、明日なの。予定とか大丈夫？」

「はい。大丈夫です」

コクリと頷く。

「良かった。場所は本部内の……」

翌日、優は奈々に指定された部屋の前に立っていた。亡霊対策室の中に備え付けられた来客用の部屋の一つだ。

取材、という言葉に緊張する。優は深呼吸してから、恐る恐るノックした。

数秒後、ガチャリと開いたドアから、まだ若い女性の顔が覗いた。「桜井優君？」

高い、ソプラノの声が響く。

もう少し先輩の人が相手だと思っていた為、優は軽く面食らった。

「はい」

「私、橋本恵。今日はよろしくね！」

「こちらこそよろしくお願ひします」

「礼儀正しいなあ。あ、入って、入って！」

恵が一步下がる。優は一礼し、中に入った。

「あ、腰おろして楽にしてて」

シンプルな部屋だった。真ん中に机と椅子があるだけ。

指示に従い、椅子に腰かける。続いて恵も腰をおろした。

恵は机の上で両手を組み、少しだけ身をのりだし、笑った。

「君、かわいいね」

予想外の言葉に、たじろぐ。その様子を見て、恵は悪戯に成功した子どものような笑みを浮かべた。

「ごめんごめん。緊張してるみたいだからほぐそうかな、と。逆効果だったかな」

でも、と恵は続けた。

「でも、可愛いのは本当。あー、何だか私犯罪者ちつくたなあ」
そう言って恵はコロコロと笑った。

対照的に、変わった人だなあ、と優の顔が引きつっていく。

「うーん、じゃあさ、ちゃちゃつと終わらせちゃおうか」

「ごそごと、恵が鞆を漁り始める。何をしているのだろうと優が首をかしげると、恵は手帳とボールペンを取り出した。

「これからいくつか質問するけど、嫌な質問には答えなくていいからな。これ、他から頼まれたもんだから、遠慮なく切っちゃって」

「他からって……代行ってことですか？」

「そう。奈々に頼まれちゃって。各新聞社とかの質問をまとめて私が聞くの。あからさまにデリカシーのない質問は私が勝手に落とすとくけど、個人的に答えたくないのもあるだろうから、ね？」

「神条司令の……」

「どうやら恵は奈々の知り合いらしく、優は少し気が楽になるのを感じた。

確かに、新聞社の人たちに質問責めされるよりはいい。裏で色々と場を整えてくれた奈々に優は感謝した。

「じゃ、一つ目。初陣で大活躍したらしいけど、怖くはなかった？」

「ええっと、もちろん怖かったです、それよりも必死な感じで……」

「何とか我慢できました」

「つつかえながら、かろうじて答える。恵はうなずいて、軽快にペンを走らせた。

「じゃ、次。特技は？」

「えっと、あの……空を飛ぶことです」

咄嗟に浮かんだことをいうと、恵がクスリと笑った。

「うん。良い答えだ。次は……」

恵の顔が曇る。少し迷っているような素振りだった。

「……戦争についてどう思う？」

亡霊との闘いは、戦争とは呼ばれない。わざわざ戦争という表現が使われている事で、十六歳の優でもその答えが政治的に利用される類いのものだとすぐ理解した。

望まれている答えはこうだろう。

『戦争はとっても悪いことです』

恐らく何かのドキュメンタリー番組で、戦争に投入される子どもの本音、として使用されるのだろう、と思った。確かに根元的な思考を放棄して、子どもを使って感情に訴えかけることは最も効果的な方法だ。

優は、頭の中が急速に冷えていくのを感じた。

第二帝国主義が終わった今、戦争というものはただの浪費でしかない。ユーラシア連合やヨーロッパ連合と多くの経済圏ごとに連携を強めている中、実際の戦争というものは起き得ない。あるのはユーラシア連合による小国の弾圧のみ。そして、ユーラシア連合は経済的解放運動と称して、これを正当化している。日本はユーラシア連合には加盟していないが、地理的な特性上、それに強く反発する事ができない。

戦争を起こすのは、経済的な疲弊から大国への反発が強くなり始めている小国でしかありえない。この質問がどういった視点から利用されるのか透けて見えた。

少し考えた後、優は恵の顔をじっと眺めた。

「戦争に突入せざるをえなくなった構造を何とかしないといけないと思います」

恵が少し驚いた顔をする。

しかし、彼女はすぐに笑顔を繕って、質問を続けた。

「じゃあ次は」

順調に三十ほどの質問に答え、ようやく優は質問責めから解放された。

思っていたよりも疲れる。背伸びすると、腰からパキッと小気味の良い音が聞こえた。

「お疲れさま、と言いたところだけど、次撮影お願いね！」

「……そういえばそんな話もありましたね」

思い出したくなかった事を言われ、げんなりする。

優はため息を吐いて、机に突っ伏した。

少し、懐かしい。学校に行っていた頃は退屈な授業中によくこうやって寝たものだ。亡霊対策室に来てからは机に座る機会が食事以外に殆んどなくなってしまうた。

普通の生活とは違うんだな、と思うと寂しいような、悲しいような何とも言えない気持ちが始まった。

「とりやつ」

「わっ！」

不意に頬に冷たいものが触れ、優は大きく飛び退いた。見ると、缶ジュースを持った恵がクスクスと笑っている。

優は無愛想に感謝の言葉を述べて、それを受け取った。

「桜井君」

突然、恵の声色が変わる。慈悲に満ちた、柔らかな声。まるで別人のようで、優は驚きの表情を隠せず、恵の顔を見つめた。

「これ」

そう言って、彼女は名刺を取り出した。反射的に受け取り、目を通す。

肩書きはフリーライターになっていた。それと連絡先が載っている。

「困った事があったら何でも相談して。これから先、外部の協力者を得るのって難しいと思うから。あ、夜なら雑談電話もオッケー」

優は、じつと恵を眺めた。そして、信頼に値する人だと確信する。もしかして、奈々は取材を理由に、優に外部とのチャネルを持たせたかったのではないか、とふと思った。

「じゃ、撮影行こうか」

恵がドアに向かって歩き出す。

優は名刺をしっかりと財布の中に入れ、「はい」と小さく返し、後を追った。

廊下には三人の男が待機していた。恵は男たちに合図した後、優

に向かつて着いてくるように手招きし、少し離れた部屋に向かった。その部屋の一角には、撮影用の照明器具や白い背景が設置されていた。男達が手際よく準備を始める。優が困ったように視線を恵に向けると、恵は手に持った布を前に差し出した。

「はい。これ、衣装」

「衣装？」

優は戸惑いながらそれを受け取った。

「撮影用のね。私は外に出てるから、その間に着替えて」

そう言つて、恵はさつさと部屋の外に出て行ってしまった。残された優は準備を進める男達を見た後、部屋の隅で邪魔にならないよう着替え始めた。

恵から受け取った衣装は、軍服のようだった。深い緑色の、コートのようなデザイン。胸元からチェーンのようなものがぶら下がり、中尉の階級章が取り付けられている。

着替え終えた後、優は外で待っている恵を呼びに廊下に出た。途端、恵が歓声をあげる。

「わぁ！ 似合ってる！ 似合ってる！」

優は曖昧な笑みを浮かべて、小さく頭を下げた。優にとっては下手なコスプレをしているようにしか思えず、複雑な気分だった。

「じゃ、始めよっか」

妙にハイテンションな恵が楽しそうに言う。優は嫌な予感を覚えながらも頷いて撮影に入った。

1章 10話 宮城愛

無事に撮影を終えた優は疲れた顔で自室に戻った。騙された。少しでも恵を信じた自分が馬鹿だった、と優は深く悔いた。

恐らく、恵の本職は記者というよりも撮影関係なのだろう。恐ろしく細かい指示を長時間出され続け、撮影に当初予定していた倍以上の時間を消費した。精神的な疲労が酷い。

ぐったりとベッドに倒れこむ。そのまま優は目を閉じた。そして、取材の時に感じたある事を思い出す。机に突っ伏した時に感じた言い知れぬ喪失感。

高校生活。

その言葉が、今は遙か遠くの別の世界の事のように思えた。寝がえりを打ち、ぼんやりと天井を見上げる。

その時、ノックが響いた。

「どうぞ」

身を起こし、返事する。

ドアが開き、ラフな格好をした京子が顔を覗かせた。

「ばんわ！」

「夜に男の部屋訪ねるのはどうかと思うんだけど」

時計を見て、優は呆れた。既に十時を超えている。

「あのねー、ここ女の子しかいないんだから、そんなこと言ったら桜井はこれからずっと一人で夜過ごすことになるよ」

「……正直、暇してました」

「素直でよろしい。で、談話室に数人で集まっているんだけど来ない？」

「あんたの知ってる人だけだから安心して、と京子が付け足す。

優は顔を綻ばせて頷いた

「是非！」

そう言つて立ちあがる。京子は笑みを浮かべ、ついてきて、と言葉を残し部屋を出た。優も慌てて京子の後に行く。

談話室は寮棟の各階にある。セキュリティゲートを通り抜けるわけではない為、認証ログからそこでの交友関係などが漏れることはない。つまり、奈々に夜に男女が会う事を注意されるような心配はしなくていい。

廊下の突き当たりにある談話室に近づくと騒がしい声が廊下まで聞こえた。京子が慣れた様子で中に入っていく。後から続いた優はそろりと顔だけ覗かせた。

かなり広い部屋にソファと円形のテーブルがいくつか設置され、十数人の女の子がグループごとに固まっている。壁際には三つの自販機が並んでいた。

女性しかいない為に少し入りづらかったが、優は意を決して中に足を踏み入れた。

「あ、桜井君！」

奥にいた華がすぐに気付き、声をあげる。優は小さく手を振って、華たちのグループへと向かった。

そこには比較的見慣れたメンバーがいた。第一小隊の篠原華、長谷川京子、そして華と京子の友人である宮城愛。それと第四小隊長の黒木舞の四人だ。時間のせいかな、全員がラフな格好をしている。

優はまだ宮城愛とまともに喋ったことがなかった。会ったことは何度もあるのだが、大人しいというより徹底した無口で話しかけづらい雰囲気を感じている。逆に舞は気さくなタイプで、今までに何度も話す機会があった。

「こんな休憩場所あったんだね」

周りをキョロキョロと見渡しながら優が言う。ソファの上で紙コップを握った舞がニヤニヤと笑った。

「まあ、とにかく座って。ちょっと聞きたい事があるから」
「聞きたい事って、なんですか？」

言われるがままに優がソファに腰をおろすと、舞がぐいと顔を近

づけてくる。

「最近、しおりんと仲が良いって聞いたけど、何かあったの？」

「え？」

予想外の問いに、優は小首を傾げた。

「しおりんって、誰ですか？」

「第三小隊長の佐藤詩織。朝にさ、わざわざしおりんが同席してきたんでしょ？」

舞が楽しそうに言う。優は舞の言っている事が理解できなくて、何度か目を瞬いた。

「食事だけなら、篠原さんとか長谷川さんとも同席した事あります」

優の言葉に、京子が何かに気付いたような顔をする。

「あ、桜井って知らないんだっけ」

「何が？」

尋ねると、京子の代わりに華が口を開いた。

「詩織ちゃんね、軽い男性恐怖症みたいなんだって」

優は驚いて、華の言葉を反芻した。

「男性恐怖症？」

「そう。だから、しおりんが自分から男の子に近づくのって珍しいなって話になってたわけ」

舞がからかうように言う。

優は詩織の今までの行動を思いだして、一人納得した。そして、小さな不安を覚える。

「知らないうちに嫌な思いさせちゃってたかも……」

「まあまあ。あまり気にし過ぎると逆効果なんじゃない？」

「そうそう。ただ、お触りはなしの方向で」

京子の言葉に舞が同意しながらからかうように言う。

それはそうかも、と考えながら優は先程から一言も発さない愛に視線を向けた。

愛は無表情のまま、紙コップに口をつけて話をじっと聞き続けている。本当に静かな女の子だ。騒がしい舞や京子を見て、ある意味

バランスが取れてるな、思う。

「そういえば」

舞がまた何か楽しそうに口を開く。

談話室の照明が落ちるのは、随分と遅くなりそうだった。

上田孝義うへだ たかよし陸上中將は暗い室内で淡い輝きを放つディスプレイを見て、ため息を吐いた。

一つは、特殊戦術中隊から、一人が異常な瞬間最大ESPエネルギー量を記録したという知らせ。上田中將が求めるのは特殊戦術中隊というシステム化された戦力であり、突出した個人的能力などは求めていなかった。

もう一つ、上田中將を悩ます出来事は、各国のパワーバランスの激変を知らせる戦略情報局からの知らせだ。欧州に於いて、急進的ポピュリズムの機運が高まりつつある。近い将来、レイシズムの嵐へと転化する可能性が高い。それは、低迷する欧州経済に致命的な亀裂を生みだすだろう。欧州の力が弱まれば、ユーラシア連合がますます増長してしまう。彼らの帝国主義は本物だ。そして、彼らは太平洋に出たがっている。日本は、ユーラシア連合にとって重要な戦略的拠点になり得るのだ。そして、十一年前に起こった金融危機で唯一の後ろ盾であったアメリカ合衆国も没落している。そんな状況でなお日本が独立を保っていられるのは、ひとえに亡霊の影響だ。白流島を取り囲む亡霊に対して、有効策、すなわちESP能力者を保有しているのは日本だけだ。亡霊は日本の独立を守りつつ、日本の壊滅に繋がりうる要因となっている。

故に、今の絶妙なパワーバランスを崩してはならなかった。亡霊を殲滅する時は、日本が単独で独立を維持できる確かな戦略を持つた時でなければ意味がない。

しかし、現在中隊に属しているESP能力者は百九十二人。対し

て亡霊の総戦力は未知数。日本は今とても不安定な危うい状況にある。

その点、管理上都合は悪いが、桜井優はそうした情勢から蒙昧な大衆の目を逸らす格好の的だった。要は、物は使いようだ。それにアレも完成しつつある。上田中将は灰色がかった髭を撫でて、小さく笑った。

「もうすぐだ……」

そう呟いた時、慌ただしく室内に男が入ってきた。

「報告します！ 東京都夢野区で民間人が三名死亡。同時刻、同所にてESPエネルギーの発生が確認されました」

上田中将は、静かに男を見つめ、機械的に詰問した。

「亡霊が東京に？ 何故、それまでに探知できなかつた？ 先制攻撃を受け、探知能力を喪失したのか？」

「いえ……。出力者は亡霊ではなく人間、ESP能力者です。これは殺人事件です」

登場人物まとめ

数が多くなってきたのでここまでの登場人物を簡単にまとめました。

桜井 優 主人公。特殊戦術中隊・第一小隊所属

柊 沙織 人類史上初のESP能力覚醒者・覚醒者発見後初

の戦死者

上田 考義 陸上自衛軍・中将

神条 奈々 亡霊対策室司令

長井 加奈 亡霊対策室副司令

篠原 華 特殊戦術中隊・第一小隊・隊長

姫野 雪 特殊戦術中隊・第二小隊・隊長

佐藤 詩織 特殊戦術中隊・第三小隊・隊長

黒木 舞 特殊戦術中隊・第四小隊・隊長

長谷川 京子 特殊戦術中隊・第一小隊所属

宮城 愛 特殊戦術中隊・第一小隊所属

橋本 恵 フリーライター

1章 11話 広瀬理沙

広瀬理沙は、血だまりに倒れる一人の同級生を無感動に見下ろした。

呆気ない。

そう考えながら、血だまりの向こうで呆然とした表情を浮かべる二人の女学生に目を向けた。二人の女学生が怯えたように震える。

「うそ、マジ、こいつ、頭やばい」

一人の女学生がポツリと呟いた後、もう一人の女学生が逃げるように走り出す。理沙はその後ろ姿に右手を向けて、攻撃したい、と願った。直後、翡翠の光が女学生に向かって放たれ、女学生の身体が大きく吹き飛ぶ。そのままビル壁に激突して動かなくなった女学生を確認してから、理沙は最後に残った女に目を向けた。

「あんたは、逃げないの？」

そう言っただけで理沙が一步前に進むと、女学生はゆっくりと首を振った。

「広瀬、違う、ほんと、あれ、安奈に命令されて、ねえ、わかるでしょ？ 逆らったら、私だって」

必死に保身を図る女をぼんやりと見つめながら、理沙は右手を女に向けた。直後、翡翠の光が進み、女の首が吹き飛ぶ。一拍おいて女学生の身体が痙攣を繰り返しながら崩れ落ちた。

理沙は三人の死体を眺めてから、奇妙な解放感を覚えていた。もう、全てがどうでもよかった。学校だって、もう行く必要がなくなつた。あの腐った家族にも会わなくて済む。

所属すべき組織がなくなったことで、生まれて初めて本当の自由を掴み取った気がした。それから、前にも同じ自由があつた事を思い出す。幼稚園に通う前の、本当に小さかつた時は全てが自由だった。それが、いつの間にか良く分からぬルールや組織、人間関係に支配されて、理沙の世界は色褪せていった。

全てから逃げ出したかった。しかし、それも叶わない。理沙がESP能力を使った事が、自衛軍、あるいは亡霊対策室、戦略情報局に知られたはずだった。ESP能力に目覚めた後、自衛軍によってESPエネルギーの波形を採取されている為、特定されるのは時間の無駄だ。

もし逃げるなら、人質が必要だ、と理沙は周囲を見渡した。夕暮れの裏通りには誰もいない。

捕まりたくない。理沙はその一心で地面を蹴った。

その日、桜井優は久しぶりに一人で街を歩いていた。心配の種だった外出許可申請書も思いのほか、あっさりと受理され、何も気負う必要がない。

大通りを適当に散策し、目に止まった本屋に寄って、前によく見ていた漫画の最新刊を数冊手に取り、次に参考書を物色する。特殊戦術中隊に入る為に高校は中退したが、高等教育レベルの勉強は一通り済ませておきたかった。

漫画の上に数学と英語の参考書を積み、レジに向かう。少し高かったが、既に給料が支払われている為に、さほど痛い出費ではなかった。

会計を済ませて本屋を出ると、既に空は薄い赤に染まっていた。

このまま帰るか、まだどこかで暇をつぶすか考えつつ、駅に向かう。

秋特有の涼しい爽やかな風が心地よい。優は人通りの多い道避け、少し遠回りしながらのんびりと歩いた。あまり知らない裏通りを歩くというのも中々面白い。

少し肌寒い。厚着してきたら良かった、と後悔した時、不意に背後に何かを感じた。

ESPエネルギー。

背後で膨れ上がるエネルギー体から逃れようと反射的に前方に跳躍し、上体を捻る。

しかし、それよりも早く優の背中を衝撃が貫き、優は地面に倒れこんだ。

衝撃で喉から奇妙な音が漏れ、痛みに身を丸める。

「動くな」

首に冷たいものが押し付けられた。すぐに包丁だと気づき、戦慄する。

その時、ふわり、と場違いな甘い香りが優を包んだ。直後、背中に柔らかな重みを感じる。

女。声と気配からそう判断してから、ESP能力者には男がいな
い事を思い出す。例外は優だけだ。

「桜井優だな？ 動いたら殺す。抵抗しないなら危害は加えない。
オーケー？」

名前を知られていることに気づき、血の気が引いた。脳裏に数日前の取材のことが蘇る。既に何らかの形で情報の公開が行われたのだろう。

優は女を刺激しないように、黙って頷いた。直後、乱暴に身を起こされる。

「手荒で悪いな。大人しくしてたら何もしないから安心しな」

チラリと女の顔を見る。

まだ若い十八歳前後の女だ。少し吊りあがった目で優をじっと睨んでいる。

「変な気起こすなよ。あたしもハーフだ。その気になればナイフなんてなくてもすぐに殺せる」

ハーフ。ESP能力者の蔑称だ。亡霊と人間の中間。

昔、同一説というものが流行った。人類史上初のESP能力者、柘沙織が発見された時に生まれ、今は廃れた風説。

柘沙織は当初、人に擬態した亡霊ではないか、と囁かれた。ESPエネルギーは当時亡霊を構成する未知のエネルギー体として、亡

霊の代名詞でもあった。故に、ESPエネルギーを持つ彼女は亡霊側の存在として誤った認識を受けてしまったのだ。

そしてこの同一説にはいくつかのバリエーションがある。曰く、ESPエネルギーは空気感染する。曰く、亡霊はESPエネルギーに呑まれた人間のなれの果て。

どれも根拠のない話だったが、圧倒的に情報が不足していた当時、この話は爆発的に広がった。

もし、ESP能力者の数が多ければ、こういったデマはすぐに消えたかもしれない。しかし、ESP能力者の数は圧倒的に不足していて、大多数の人たちにとってESPエネルギーとは酷く曖昧な、不安を煽る類のものだった。そして空想は一人歩きを始めた。

しかし、それは亡霊対策室が設立されてから急速に鎮火したはずだった。少なくとも、優が大きくなってからは、そうした馬鹿げた風説を聞いた事がない。何故、女が今はもう使われていないハーフという呼称を使ったのか、優には理解できなかった。

「ついてこい」

女が歩き出す。

どうすべきか考えながら歩を進める。そして街灯の近くに来た時、優は気付いた。

明かりに照らされた女の服に赤い染みが付着している。

思わず息を止めた優に気付いて、女は答えた。

「既に三人殺した。変な動きを見せたら、あんたも容赦なく殺す」

優は黙って女を眺めた。女の瞳の奥で、何かが揺らめく。女はその揺らめきを隠すように優から視線を外し、強い口調で再度、ついてこい、と言った。優はそれに従わず、立ち止まったまま口を開いた。

「名前、教えてもらえますか？」

女が立ちどまる。怪訝な顔で優を見て、少し迷う素振りを見せた。

「広瀬理沙」

「桜井優です」

「知っている」

理沙は特に何の反応も見せず、再び歩き出した。

チラリと周囲を見渡す。人影はない。逃げようと思えば逃げられるかもしれない。しかし、優は逃げずにそのまま黙って理沙の後を追った。漠然と、そうするべきだと思った。

右手に握られた漫画と参考書の入った袋が、時を刻むように静かに揺れ始めた。

神条奈々は焦りを覚えていた。今までに何度も繰り返したように、無意識に時計を見る。

時刻は二一〇〇。桜井優の外出を許可したのは二〇〇〇まで。既に一時間を超えている。

もう限界だった。陸自の上田中將を通してSIAから届いた一つの情報が頭をよぎる。

ESP能力者による殺人。

いつかは起こるだろう、と予測はしていた。故に全ESP能力の指紋、血液、ESPエネルギーによって生まれる独自の波形はSIAによつて厳重に記録され、悪用された場合、容疑者の特定が速やかに行えるように対策されている。

特定と追跡は容易だ。ただ、ESP能力による被害が拡大してそれが表に出れば、混乱と増長を引き起こしかねない。ESP能力者が一般人に対する優位性をはっきりと自覚するのは避けたかった。

彼女達は人間社会に依存する必要がないのだ。

彼女達は社会契約を守る必要がない。彼女達に社会的な権力は何の意味をもたない。

彼女達の力はそれを遥かに超えたところに存在する。彼女たちが何らかの社会契約を破ったとして、誰もそれを抑えることはできない。

故に、それに気づかせてはいけない。倫理や道徳で縛りつけなければならぬ。幸い、ESP能力者は生まれながらにしてESP能力者であるわけではなかった。幼少時代から深く刻み込まれた倫理観、社会感覚がそうした事に対して、彼女たちに強烈なタブー意識をもたせている。しかし、それは酷く不安定な、曖昧なものだった。少なくとも、現時点で一人の少女はタブーを侵し、ESP能力者の持つ優位性に気づいてしまった。原因はどうかであれ、彼女が自身の行動を正当化するような思想を持つ場合や、優位性に気付いて増長してしまった場合は、再びESP能力を行使する危険性がある。当面の間、警戒が必要だ。

憂鬱な表情を浮かべ、奈々は再び時計に目をやった。時間だけが過ぎていく。

現在、戦略情報局と警視庁が秘密裏に広瀬理沙を殺人の容疑で捜索している。戦略情報局はやり方が過激だ。優も一連の騒動に巻き込まれたのではないかと不安が募る。個人端末に備え付けられた測位システムも機能していない。

奈々は唇を噛んだ。優が戦略情報局ではなく、件のESP能力者と偶然接触したなら更に問題だ。ESP能力を一般人に向ける、という発想に触れること自体が危ない。思想的な汚染がないか、徹底的に洗われるだろう。自衛軍はともかく、戦略情報局は統合幕僚監部から独立した機構だ。自衛軍のように文民の監督を受けずに国内での作戦を立案する事が認められている。身内である亡霊対策室にとっても戦略情報局は脅威になりうる。

まだ優の失踪は統合幕僚本部に報告していない。今帰ってきたら何とか内部で誤魔化す事ができるのだが、これ以上長引けば隠しきれない。

奈々は時計から目を離し、目を瞑った。

時を刻み続ける針の音が司令室に、静かにこだました。

1章 12話 広瀬理沙(2)

優が理沙に連れられて辿り着いたのは、都心の片隅に取り残された廃ビルだった。

近く取り壊される予定のそれは、埃臭くてお世辞にも居心地が良いたとは言えないが、確かに身を隠すにはもってこいの場所だった。

「今日はここで寝る。じっとしてな」

理沙が慣れない手付きで優を縛り、動けないようにする。

少しきつい、という優の訴えを無視し、理沙は壁に背を預けて座り込んだ。

話せる雰囲気でもなく、二人の間に沈黙が落ちる。

優は何気なく辺りを見渡した。古い建物だ。壁には小さな亀裂が無数に走り、幾何学的な模様を描いている。そして暗い。窓は大きいが、既に空に光はない。明かりをつけることも出来ない為、窓から差し込む僅かなネオンの光が唯一の明かりだった。

逃げようと思えばいつでも逃げられる。それが優の下した判断だった。しかし、そうしなかつたのは、目の前の少女が気になったからだ。意味もなく人を殺すようには見えない。

優は理沙を見た。綺麗な黒い長髪で、大人と子どものような、まだ幼さの残る顔には疲労の色が強く浮かんでいる。

優は眉を寄せた。理沙の唇のはしに黒いものがついている。すぐに血だと気付いた。

「……口もとに血がついています。それが原因ですか？」

理沙が無言で口を拭う。良く見ると少し腫れているようだった。

「そう。これはいつものこと。けど今日はいつもより大人数で、数人は刃物を持つてた。殺される、と思った」

理沙が呟く。その声からは先程までの覇気が全く感じられず、優は息を呑んだ。

「正当防衛なら、自首すべきです」

咄嗟に、言葉が出る。理沙は唇に薄い笑みを浮かべた。

「ESP能力で人を殺めた者が公正な裁判を受けられると本気で思う？ 超能力者の犯罪なんて社会不安を煽るだけでしょ。全部、なかった事にするんじゃない」

優は何も答えられなかった。そんな事は、今まで考えた事がなかった。

「あんたさ、自分がどういう立場か知ってる？ 小さな救世主だつてさ。そういう報道がされてるんだよ。ちよつとでも社会不安を払拭する為にさ、そういう演出がされてる。それなのにさ、亡霊っていう怪物に向けられるべき強力な力が一般人に向けられました。これからもそういう事件が起こるかもしれない、なんて報道できないでしょ」

理沙は小馬鹿にしたように笑った。しかし、その笑みはどこか泣くのを我慢している子どもものようにも見えた。

「今までもさ、そういう報道なかったでしょ？ 本当になかったと思う？ ESP能力が一般人に向けられた事が、八年間一度もなかったなんて、ありえる？ 私達は、司法の外にいるんだ。司法は、人を守る為にある。私達は人じゃない。人じゃ、いられない」

そこまで言つて、理沙は突然口を閉ざした。そして、顔を伏せる。「人間が私を人間扱いたくないのならば」

憎しみの籠った声で、理沙が言う。

「私は、ハーフという新しい種として生きるしかない」

「……軍に入る気はないんですか。ESP能力者だけで構成された中隊ならば、きつと」

「ない。無理だよ。それこそ奴等の思う壺だ。もう、あたしは人間社会に関わるつもりも、従うつもりもない」

人死が出た時点で説得はもはや不可能な域に達しているのかもしれない。

優はじつと理沙を見つめた。

理沙の言う通り、恐らくESP能力は司法の加護から外れてしま

っている。司法は、彼女を保護しない。彼女は公正な裁きを受ける事ができない。それを理解して、彼女を警察機構に突き出す事が優にはできなかった。例え彼女が人を殺めていたとしても。

「……広瀬さんがここにいることは、軍にはすぐに分かります」
理沙が睨みつけてくる。

「何を言ってる」

「軍にはESPエネルギーを感知する技術があります」

「それくらい知ってる。固有の波形から人物まで特定できるんだろ。だから、すぐにあの場からは離れた」

「ESPエネルギーを使つてない状態でも、感知範囲を狭めて精度を上げれば通常状態でも感知が可能なんです。しかも、僕のESPエネルギーは平均より大きくて、感知されやすい。このまま僕といれば補足されるのは時間の問題です」

理沙の顔が警戒するように歪む。

「だから、今すぐ逃がせてわけ？」

「そうです」

「馬鹿げた事を」

理沙が毒づくのを遮って、優はにっこりと笑みを向けた。

「その代わり、逃走をお手伝いします」

奈々の指揮で自衛軍とは独立した亡霊対策室独自の桜井優の捜索が始まっていた。

奈々は何の収穫もなく司令室に向かった。保安部の者が総出で既に優を散策しており、発見され次第連絡が来るように手配されている。

ESP能力者による殺人を、奈々はどう受け止めて良いか分からなかった。それは警察の考える事であって、自分の仕事ではない、と無理矢理頭の隅に追いやる。

司令室には既に調査の中間報告が寄せられていた。首都圏からは新たなESPエネルギー反応は確認されず、少なくともESP能力による新たな被害者は出ていないという。

「進展はなし？」

「はい。桜井優の行方も掴めていません。対ESPレーダーの精度をあげて調べていますが、時間がかかるそうです」

「……独自に街頭カメラの記録も徹底的に調べて。発見した場合、戦略情報局には伝えず、こちらで処理する」

奈々はいくつかの書類を手に取った。特定された容疑者の情報が記されている。

広瀬理沙。女。十八歳。夢野高校三年生。

調査書に同封されていた写真に目をやる。恐らく高校の文化祭に撮った集合写真だろう。集団の端で一人立っている。周りがカメラに笑顔を向けている中、広瀬理沙だけがつまらなさそうにカメラの外を見ていた。

奈々は次いで被害者の情報に目を通した。

被害者は三人、いずれも女で理沙と同じ夢野高校三年生だった。卒業アルバムの為に撮ったらしい三人の写真を見てから、集合写真でその顔を探す。目立つ中央にいた為、すぐに見つかった。彼女は広瀬理沙とは対象的に明るく笑っていた。

写真から目を背け、次の書類に手を延ばす。これには、被害者達の更に詳しい情報が記載されていた。

さつと書類を眺めていた奈々の瞳が一点に止まった。

八月四日、東杏菜の父親が亡霊との上陸戦に巻き込まれ死亡。

簡素な文を、奈々は三回読んだ。東杏菜は被害者の一人である。

奈々は全てを悟って、軽い目眩を感じた。

「司令！ 報告です。白流島付近に巨大なESPエネルギーを確認しました」

不意に加奈が叫んだ。奈々が書類を置いて立ち上がる。

モニタを覗きこんだ奈々の顔が強ばった。敵反応は一つ。つまり

戦力一定の法則が裏切らなければそれは

「全小隊長を召集。六人全員をぶつける」

加奈が頷き、すぐに召集命令が流れる。

優の行方がわからないまま、新たな闘いが始まった。

1章 13話 広瀬理沙(3)

篠原華は、機械翼の生みだす揚力によって夕暮れの空を飛行しながら、背後をチラリと振り返った。五人の小隊長が一定距離を保って連いてきている。そして、洋上には哨戒艦艇みなみの影。

全小隊長が一度に出るのは、華が知っている限りこれで二度目だった。通常、連戦や本部の防御を考慮して、小隊長のうち最低一人は本部に残る。つまり、全小隊長が出るのは他では手が負えないと判断された時だけだ。自然と小銃を握る手に力が籠る。

『警戒区域に突入。各自兵装を確認』

通信機から届く奈々の命令に、小隊長たちは一斉に小銃の安全装置を解除した。そしてマニュアル通りに連結ベルト、機械翼、識別信号に異常がないかを確認していく。

第五小隊長の進藤咲が狙撃銃を構え、光学照準器を覗きこむのが華の視界の隅に映った。

『……前方海面付近に亡霊です』

通信機から咲の弱い声が届く。華はすぐに視線を落とし、海面付近を注視した。一つの影が見える。影はみるみるうちに大きくなり、次第にその姿がはっきりと視認できるほどになった。

「鳥……?」

華の口から、ぼつりと眩きが漏れる。

敵は鳥のような形をした、大型の亡霊だった。その美しいフォルムは遠目からでは戦闘機のようにも見える。過去に観測された死神のような形状の亡霊とは大きく異なっていた。

『これより目標にパーソナル・ネーム、イーグルを与える。射程に入り次第、咲の狙撃で様子を見ましよう』

奈々が命令で、華の隣まで前進した咲が絶妙なESPエネルギーのコントロールで機械翼を操り、音もなく空中で静止して狙撃銃を構える。

間を置かずに銃声が轟いた。少し遅れてイーグルの名を与えられた亡霊の身体が閃光に包まれる。

『……命中確認。目視できるダメージはなしです』

咲が報告する。華は嫌な予感を覚えて、顔を強張らせた。

『目標、移動を開始しました。接近しています』

『散開し、動きを牽制しましょう』

解析オペレーターの警告。次いで、奈々はすぐに散開を命じた。

イーグルが翼を大きく広げ高度をあげていく。与えられたパーソナル・ネームに負けないほどの速度。

『敵ESPエネルギーの増幅を確認。衝撃に備えてください』

解析オペレーターの言葉と共にイーグルの口が千切れんばかりに大きく開き、楕円形の光弾が発射される。光弾の向かう先には華の後方にある第四小隊長、黒木舞の姿があった。

回避行動を取る為に舞が右に体を傾け、射線から身を引く。その時、奇妙な事が起こった。光弾が突然、舞を追いかけるように弾道を変えたのだ。

舞は少し遅れて、光弾から逃げるように高度をあげていく。それを追跡するように光弾の弾道が再び修正され、舞の後に続いた。

「追尾システム？」

華は呟いて、他の小隊長を振り返った。誰もが、戸惑いの視線を舞に向けている。どうやら、イーグルから発射された光弾には追尾能力があるらしい。はじめて見る亡霊の力だった。

『……追い付かれる。回避行動は必要ない。速度をあげなさい』

奈々の命令に従うように、舞の速度が格段に上昇する。しかし、追尾弾は尚も舞の後ろに食らいついて離れない。

『ダメっ！ 振りきれない……！』

舞の舞が光弾を振り切ろうと何度も旋回を繰り返すが、光弾は舞の後を正確に追尾し続ける。通信機から鋭い奈々の命令が走った。

『華、援護を！ 光弾を吹き飛ばして！』

華は頷いて、舞に向かって飛翔を始めた。しかし、すぐに奈々の

命令を実行する事が困難である事に気づく。高速で舞を追尾する光弾を補足する前に、舞が被弾してしまう。

「司令、無理です！ 補足できません！」

華は震える声で報告した。一拍の間をおいて奈々の声が届く。

『舞！ 引きつけてからESPエネルギーを全包围に出力して、相手の攻撃を吹き飛ばしなさい』

回避と迎撃が共に不可能と判断したらしく、通信機から防御命令が届いた。既に光弾は舞のすぐ近くまで迫っている。

「黒木さん！」

華が叫んだ時、舞の体が光の渦に巻き込まれた。次いで、轟音と紫光が広がる。

押し寄せるESPエネルギーの波に逆らい、華は爆心地目指して加速した。

被弾した舞が緩やかに落下し始めるのが視界に映る。

「舞！」

奈々が叫ぶ。華は更に加速して、落下する舞の腕を掴んだ。そのまま速度を落とすことなく、イーグルから距離を取る。

「黒木さん、しっかりして！」

舞が焦点の合わない目で華を見る。衝撃で意識が定かではないらしい。

華は舞の傷を慎重に調べた。服が焼け焦げ、背中に軽い火傷を負っているが、それ以外に目立つ外傷はない。上手くESPエネルギーを殺したようだった。

『篠原さん、黒木さんをつれて早く離れてください！ 次が来ます！』

詩織が警告を発すると同時に、轟音が大気を揺るがした。振り返ると、イーグルから新たに数発の光弾が発射されたところだった。

射線上には第二小隊長の姫野雪の姿。

雪は落ちついた様子で即座に小銃を構え、迫り来る光弾を狙って発砲する。しかし、高速で迫る光弾に当たる筈もなく、そのまま遙

か遠方の白い雲へと吸い込まれていく。

雪は光弾を撃ち落とす事を諦めたようで、すぐ回避行動に移った。光弾の群れから余分に距離を取って海面ギリギリまで下降していく。数瞬後、海面からいくつかの水柱があがった。どうやら今の光弾に追尾能力はなかったようだ。

『突撃します！』

通信機から鋭い詩織の声が届く。振り返ると、詩織が亡霊に向かって加速したところだった。イーグルは雪に気を取られたままで、背後からの詩織の接近に気付いていない。脅威的な速度で詩織がイーグルとの距離を詰めていく。そして、イーグルが詩織の射程に入ると同時に連続した轟音が轟いた。光の雨がイーグルに降り注ぎ、その動きが鈍る。

『咲、凜。目標を包囲！』

詩織の作りだした好機を見逃すまいと通信機から奈々の命令が届く。その命令に従うように、青空に二つの影が走る。第五小隊長の進藤咲と第六小隊長の白崎凜（ましろ）がイーグルを包囲する為に、詩織の左右に散ったのだ。

華はイーグルの動きが完全に他の小隊長に向いている事を確認してから、負傷した舞を連結ベルトで自らの身体に固定し、それから洋上の哨戒艦艇に向かって降下を始めた。

艦艇の甲板に降り立つと、すぐにスタンバイしていた医療チームが集まってくる。華は治療の邪魔にならないように少し離れたところまで下がり、上空を見上げた。

詩織からの絶え間ない攻撃によってイーグルの機動が制限され、そこに至近距離から凜と咲が銃撃を加える事によってイーグルの戦闘機のような胴体が小さく炎上しているのが見える。勝てない相手ではない。華は治療中の舞をチラリを見た後、機械翼を広げて再び空に舞い上がった。いった。

神奈奈々はディスプレイの向こうで行われる激しい戦闘を眺め、表情を曇らせた。

何度も攻撃を受けているにも関わらず、イーグルは弱る気配を見せない。今まで観測された亡霊とは性能が違いすぎる。

ディスプレイの向こうで、爆炎の中からイーグルが飛び出すのが見えた。次いで、イーグルの口が大きく開かれ、そこから光弾が勢いよく放たれる。光弾は物理法則に逆らったカーブを描き、第五小隊長、進藤咲を指すように空を駆けた。

咲が直ちに攻撃を中止し、回避運動に移る。しかし、イーグルとの距離が近すぎて避けきれない。一早くそれに気付いた凜が、不自然な動きで咲を追尾する光弾に銃口を向ける。直後、数回銃声が大空に響いたが、光弾を撃墜するには至らなかった。光弾が変わらず咲の背後に張り付く。

咲はそれを振り払おうとするように何度も急旋回を繰り返す。しかし、光弾が追跡を諦める様子はない。

光弾が咲に迫る。次の瞬間、ESPエネルギーの激しい波が咲を飲み込んだ。

奈々は発光するディスプレイを見つめ、双眸を鋭く細めた。

「あの追尾能力を振り切る事が出来る手段は？」

近くの解析オペレーターに視線を向ける。解析オペレーターは小さく首を振った。

「無理です。どれだけ角度を切っても、あの光弾は大きく軌道をとって旋回するようになっています」

奈々は苦々しい表情を浮かべ、ディスプレイに視線を戻した。爆炎から、一つの影が海面に向かって落ちていくのが見える。

「みなみ、回収お願い」

洋上の哨戒艦艇みなみに向かって叫び、すぐに中隊への命令も加える。

「四人とも、イーグルから離れて。態勢を整え直しましょう」

『四人とも、イーグルから離れて。態勢を整え直しましょう』
通信機から届く奈々の命令に、第三小隊長、佐藤詩織は静かに安堵の息をついた。イーグルから慎重に反転し、適正な距離をとる。イーグルも詩織たちと積極的に交戦する気がないのか、その場をゆつくりと旋回し始める。

ひとまず膠着状態に落ちつき、詩織は思考を戦闘からより広い範囲に広げた。

「司令、援軍を……桜井さんを……」

残った四人でイーグルを撃ち落とせるとは思えない。
脅威的なESPエネルギー出力量を見せた桜井優の存在が頭をよぎり、詩織は迷わず彼の名前を口にした。司令室もこのままではイーグルを撃墜する事が難しい事を理解しているはずだ。しかし、詩織の予想とは逆の答えが通信機から返ってきた。

『……それは出来ない』

奈々からの短い答えを聞いて、詩織は胸騒ぎを覚えた。

出撃前に桜井優の姿が見えないと京子たちが騒いでいた事を思い出す。できない、とはまだ桜井優が見つからない、ということなのかもしれない。そうでなければ、桜井優の投入を渋る理由が見つからない。

既に亡霊が発見されてから一時間以上経過している。中隊員が持ち歩いてる端末には出撃を知らせる機能があり、更に有事に備えGPS機能も有している。

優と連絡が取れないということは、優が戦闘できる状態ではない、もしくは端末が機能を失っている、ということだ。つまり、新たに戦力が投入されることは期待できない。

詩織は忌々しそうにイーグルを見つめた。

『高エネルギー反応。また来ます！』

通信機の向こうで解析オペレーターが叫ぶ。直後、解析オペレーターの予測通り、イーグルから新たな光弾が飛び出した。その先には華の姿。しかし、華は動かなかった。迫りくる光弾をただじっと見つめているだけだ。

『華！』

奈々の鋭い声。

詩織は光弾を落とそうと銃を構えた。だが、光弾の速度が高すぎる為、補足ができない。

光弾が華に迫る。

それに合わせて華の銃身があがった。

光弾が着弾する寸前、華が構えた小銃の銃口から閃光が走った。発砲音と同時に、迫っていた光弾が霧散する。詩織は一拍遅れて、華の迎撃が成功した事を理解した。

詩織が呆けている間に、華はそのまま流れるようにイーグルに向かって接近していく。一瞬で距離が詰まり、華の小銃が弾けた。イーグルの身体にESPエネルギーの嵐が殺到し、それを振り切るようにイーグルの高度が急速に低下し始める。華もそれに続いて高度を下げ、イーグルの後ろをとって追撃を開始する。

「……すごい」

詩織の口から自然と呟きが漏れる。自分の動きを制限することで、イーグルの誘導弾が直線を描くよう誘導したのだ。イーグルから華に直接的に向かうならば、追尾能力は意味を為さず、撃ち落とすのは遥かに容易となる。ある種の突破口が開けた瞬間だった。

神条奈々は、ディスプレイの向こうで華が見せた迎撃手段に、感嘆の息をもらした。

そして、なるほど、と思う。誘導能力そのものを無価値にする事で、光弾は数段撃ち落としやすくなる。

「華、良い考えよ。今のは、イーグルを攻略する為の突破口になる」
『でも、避けるだけじゃ勝てません。イーグルに致命傷を与える方法を考えないと』

奈々の称賛に、華が強張った声で答える。その規範的な考えに奈々は苦笑した。

「凜、やれる？」

中隊の中で最も火力に優れる第六小隊長の白崎凜に確認の言葉を投げる。

『高い機動性が厄介です。致命傷を与えられる射程まで入る事が難しい。他の援護が必要です』

「わかった。華、雪、詩織はイーグルの動きを制限する事に専念して」

『はい』

三人から快諾の声。

ようやくイーグルの攻略に乗り出した時、司令室に一人の男が入ってきた。

「都内の街頭カメラに桜井優の姿を確認しました。これから映像を送ります」

1章 14話 広瀬理沙(4)

優の映像を見つけたと報告してきたのは情報部の主任である斎藤準だった。

奈々は素早く端末を操作し、映像を再生させた。

ディスプレイに薄暗い路地が映る。誰もいないそこに、画面左下から二つの影が現れた。影が街灯に近づき、色を帯びていく。影は優と見知らぬ少女だった。

奈々は写真を取り出し、映像と見比べた。そして断言する。

「間違いない。広瀬理沙よ」

二人の姿が画面左上に消えていく。奈々は必死に頭を働かせた。

広瀬理沙が優に接触したのは間違いない。大事なものは、現在この事実を把握している勢力が情報部と奈々、すなわち亡霊対策室だけということだ。

戦略情報局及び自衛軍はESPエネルギーの探知を続けている。探知が完了するまでに優に離脱を命じなければならない。もしくは、優が広瀬理沙を軍に引き渡す、といった事実が必要だ。そうしなければ、思想的な汚染があるとして、面倒な事になるだろう。

しかし、優への伝達手段が存在しない。端末は機能を失い、携帯も繋がらない。恐らく、そうしたものは広瀬理沙によって破壊されたのだろう。

先程の街頭カメラの映像から優の向かった方角をある程度予想できるが、いくら人員を割いても軍のESPエネルギーの探知より効率が良いとは思えない。

結局、早急に優と連絡をとることは不可能だ、と奈々は判断した。ならば、優を支援するしかない。

「桜井優が広瀬理沙と同行している映像だけを消す事はできる？」
尋ねると、準は頷いた。

「限定的であれば可能だ。街頭映像は各自治体からVPNを通して

警察機構へ送られる。VPNを破る事は不可能だが、警察機構内に張り巡らされたネットワークには、対策室に与えられた正規の手順を踏む事でアクセスする事ができる。そして、この監視システムは移動体の検出された映像だけが残るように設計されている。つまり、移動体の検出を示す別のメタファイルを書き換えれば、システムそのものによつて任意の映像を破棄させる事ができる」

「自治体の方には、データが残ってしまうということ？」

「そうだ。自治体の内部ネットワークに入りこむためのVPNを、対策室は保持していない。保持していたとしても、自治体のシステムは簡素化されたもので、穴をつく事は難しい」

奈々は少し考えた後、準を見つめた。

「戦略情報局、及び自衛軍が自治体に直接情報の提供を求める可能性はある？」

「極めて低い、と言える。警察機構から提出された情報に不審な点、つまり不審な痕跡が残っていないければ、普通は自治体からの情報提供を求める事はない」

「貴方のいう方法では、不審な痕跡が残るんじゃない？」

「ああ。痕跡は必ず残る。だが、リソースは無限じゃない。痕跡を流す事は可能だ。システムスタッフに対して異常な入力を与えて、情報を追いだせば良い」

奈々は眉を寄せた。

「その攻撃自体が、痕跡となって残るでしょう？」

「ああ。だから函をおおうと考えている。特定省庁付近のメタファイルに異常なアクセスを送って、別件のように見せかける。これで暫く連中の注意は他へ向かうだろう。その間に、防諜部を使って自治体に圧力をかければいい」

悪くない考えだ、と奈々は評価を下した。リスクはゼロではないが、最善の手に思える。

「じゃあ、後は貴方に任せましょう。慎重にね」

了解、と準が答える。

司令室から出ていく準の背中を見送りながら、奈々は優が状況を正しく把握していることを祈った。

「その代わりに、逃走をお手伝いします」

にこりと笑みを浮かべた優に、理沙の瞳に宿った警戒の光が色濃くなる。罨を疑っているのだろう。

優は理沙が何か考えるより先に、後ろ手に縛られた両手にESPエネルギーを込めてロープを切断し、立ちあがった。

立ちあがった優を見て、理沙がナイフを構えようとする。優は理沙が行動を起こすより先にポケットから財布を取り出した。不可解な優の行動に、理沙の動きが止まる。

「これ、逃走資金にどうぞ」

そう言つて、いくつかのカードだけ抜き取った財布を理沙の足もとに放り投げる。

「何のつもり？」

理沙は足元の財布を一瞥してから、警戒するように一歩下がった。「逃走資金です。それと、今から全方位にESPエネルギーを放つて、SIAの探知手段に対して攪乱を試みます。軍の探知能力が喪失している間に、遠くへ逃げてください」

その言葉で、理沙の瞳に理解の色が浮かんだ。

「私を逃がす代わりに、お前を逃がせてこと？」

優は頷いて、廃ビルの窓に目を向けた。遠くからESPエネルギーの気配。亡霊。早く戻った方が良い気がした。

「そうです。亡霊が出てきているみたいで、そろそろ戻らないといけません」

理沙はじつと優を見つめた後、小さく舌打ちした。

「ああ。オーケイ。お前の事情は理解した。嘘を言っているようにも見えない。信用してやる。ただし変な動き見せたら、殺すぞ」

理沙はそう言って、足元に転がったままだった財布を拾い、中を確認する。

「つーか、あんたはそれでいいわけ？ 逃がすだけじゃなくて、攪乱なんてしたら立場悪くなるでしょ」

「いえ、これで立場が悪くなるのは広瀬さんの方です」

優は窓の向こうを見つめたまま口を開いた。

「探知されたESPエネルギーの波形から、攪乱手段を行ったのが僕であることはすぐにわかります。ですから、攪乱手段の対象は軍ではなく広瀬さんであつたとします。つまり、僕は広瀬さんと戦闘状態に陥り、離脱するために攪乱手段を用いたというストーリーにします。ということとは、広瀬さんには僕、つまり特殊戦術中隊に対する攻撃意志があつたということになります。広瀬さんは殺人の容疑だけでなく、安全保障上の危険分子として認識されてしまうかもしれません。僕が攪乱手段を行えば、広瀬さんはもう引き返せません。社会的に死ぬんです」

どうしますか、と優は理沙に向き直った。

理沙の顔に、徐々に険が混じり始める。

「それは、脅し？」

優は首を振った。

「違います。何もしなければ、広瀬さんは見つかりません。僕が攪乱手段を取れば、この場は切り抜けられます」

理沙は何も言わない。優は言葉を続けた。

「信じてください。はじめから、本気になれば僕はすぐに逃げるこゝとが出来ました。そうしなかったのは、広瀬さんの事が気になったからです」

「何故。同情？」

「初めは、好奇心でした。僕とそれほど歳が変わらない人が、何でESP能力を人に使ったんだろうって。それで、話してるうちに、何だかよくわからなくなってきました。広瀬さんは、多分、社会的に保護されない存在です。司法では、どうする事もできない。政治

的な影響力が、強すぎる。だから、せめて、力になりたいって」

「……人を殺した」

「話を聞いていた限りでは、正当防衛に思えます。過剰防衛かもしれません。でも、それを判断する司法は、多分正常に働かないです。そんな状況で広瀬さんが捕まって、不当に裁かれるのは納得できないです。正しくないのはわかっています。状況が変わるまで逃走を支援したいです。それで、いつか今の体制が良くなったら、自首して、ちゃんと裁かれるべきです」

自分で言っていて、酷く子どもじみた考えのように思えた。

しかし、理沙はじつと優の瞳を見つめ、頬を緩めた。

「理沙、でいい」

「え？」

「私は社会的に死ぬ。人としてはもう生きられない。姓はもう必要ない」

「じゃあ……」

「私はハーフとして生きる。覚悟はできてる。だから、手伝ってくれない？」

理沙は笑っていた。迷いはもうないようだった。

優は頷き、右手をかざした。

「全方位に無数のESPエネルギーをばらまきます。その密度が薄くなる前に、逃げてください」

ESPエネルギーが右手に収束し、周囲の闇を照らし出す。

そして、その光は突然爆発するように膨張を始めた。光の渦が音も無く優と理沙を飲み込んでいく。

廃ビルのフロア全体を包むほど膨張した時、それは何の前触れもなく弾けた。無数の光の塊となって、空へと散っていく。同時に、理沙が駆け始めた。その姿が暗闇の中に溶けていく。

その日、東京の夜空を光の雨が舞った。

1章 15話 広瀬理沙(5)

第三小隊長、佐藤詩織はイーグルに向かって小銃を構えながら、円を描くようにイーグルの周りを飛翔した。同様に、第一小隊長・篠原華と第二小隊長・姫野雪もイーグルの周囲を旋回し、その動きを制限するように包囲を縮めていく。

三人の小隊長の動きによって、イーグルの機動力が瞬く間に落ち始め、そこに第六小隊長・白崎凜が突撃を始めた。すぐに凜がイーグルを射程に捉え、彼女の右手に翡翠の光が収束していく。それを見た詩織が勝利を確信した瞬間、イーグルの身体に紫電の光が迸った。

『下がって!』

通信機の向こうから奈々の叫び声。

遠くで、凜の瞳が大きく見開かれるのが見えた。

凜がイーグルに攻撃するより早くイーグルの全身が発光し、大量のESPエネルギーが迸る。

一拍遅れて、凜の右手から翡翠の光がイーグルに向かって放出される。

二つの巨大なESPエネルギーが衝突し、閃光が走った。

続いて轟音とともに、衝撃が詩織を襲う。

通信機から巨大な雑音が届く中、詩織の身体は大きく空を舞った。姿勢制御に集中し、反転する視界を何とか元に戻そうとする。

何が起こってるのか分からないまま、二度目の轟音が響いた。再び、軽い衝撃。

ようやく態勢を立て直す事に成功した詩織の視界に入ってきたものは、依然として空に浮かぶイーグルと、堕ちていく凜と雪、二人の小隊長の姿だった。

それを見て、状況を理解する。

イーグルの能力は、あの追尾能力ではなかった。

純粹な高火力。

どのような戦闘パターンにも対応できる柔軟さこそが、イーグルの持つ能力なのだろう。

詩織は残った華に視線を向けた。イーグルとまともに戦える戦力は、最早華と詩織しか残されていない。

勝てない。

その事実には、詩織は恐怖した。純粹な死への恐怖。そしてここを突破されれば、本土に莫大な被害が出ることへの恐怖。

前者の恐怖から逃れたいと願うも、それは後者の恐怖に阻害される。

『イーグルから巨大なESPエネルギーを確認』

通信機から届く加奈の声に、華が迎撃体勢をとる。詩織も遅れてそれにならった。

『来ます』

加奈の声と同時に、イーグルの口がぱっくりと開いた。

咄嗟に回避行動をとった詩織のすぐ傍を、一条の光線が駆け抜ける。

詩織は背中に冷たいものを感じながら、イーグルに向かって引き金を引いた。

銃声。

イーグルが旋回を開始し、詩織の放った光弾は虚空へ吸い込まれていく。

再び、イーグルの口がぱっくりと開かれるのが見えた。攻撃を諦め、高度を上げて回避を図る。直後、イーグルの口から放たれた光線が足元を掠めた。

『また来る！』

華の叫び声。

三条の光線が一齐に放たれ、詩織の動きを制限するように空を貫く。一齐に飛んでくる光線群を大きく避けながら、攻撃の機会を窺うも、イーグルの攻撃が止む気配はない。

マズい、と思った時には既にイーグルが動いていた。鳥の型をした亡霊の口が開き、光弾が大空に飛び出す。その数七。光線による攻撃も続いたままで、回避範囲が制限される。

避けられない。すぐに詩織はそう判断した。撃ち落とそうと、前方に小銃を構える。

全てを撃ち落とすことなんてできるわけがない、と思った。しかし、それでもやらなければならない。

引き金を絞る。

反動で揺れる視界には、依然と光弾が映ったままだ。

もう一度、人差し指に力を入れる。すぐ目の前まで迫っていた光弾が弾け飛ぶ。当たった。しかし、次の攻撃がすぐ近くまで迫っていた。

小銃にESPエネルギーを装填し、すぐに次の光弾を狙う。発砲音が響くが、変化はない。

間に合わない。小銃へのエネルギー供給を放棄し、全ての力を防御に回す。

詩織は衝撃に備え、目を瞑った。直後、轟音と衝撃が詩織を包み込んだ。

「逃げられない……」

少女達が回避を諦め、迎撃体勢をとるのを見て、奈々はぽつりと呟いた。

「司令、背後から高速で接近中のESPエネルギーを感知しました」
加奈の報告に、奈々が素早くマップを見る。加奈の報告通り、一つの反応が背後から迫っていた。

奈々は小さく呻いた。

恐らくイーグルが放った光弾だろう。確実に殲滅する為に、あら

かじめ追尾弾を後ろから回すようにセットしていたのか。

モニターを見る。少女達が懸命に戦っている姿を見ると、底知れない無力感を感じた。

安全な場所から、ただ見守ることしかできない。

少女達が光に埋もれていく。地響きのような音がスピーカーから漏れた。

「司令……」

蒼白な顔で加奈が呟いた。奈々は答えずに、閃光が溢れるモニターを見つめた。

何も考えられなかった。何か、イーグルへの対策を考えなければならぬ。しかし、奈々は動けなかった。

画面の向こうに広がる惨劇が容易に想像できた。

光が薄れ、映像が明瞭になっていく。

心臓が、大きく鼓動した。

奈々はモニターを眺めたまま、その目を見開いた。

天使だ、と詩織は思った。

目の前の、小さな背中からは巨大な翡翠の翼が飛び出し、詩織達を守るように大きく広がっている。イーグルの放った攻撃は無力化され、静寂が辺りを包んでいた。

「……桜井君？」

通信機から華の声。

それで、目の前で翼を広げる小柄な影が、桜井優であることに初めて気づいた。

優が振り向き、屈託なく笑う。

「ごめんね、遅くなって」

詩織は安堵感で胸がいっぱいになっていくのを感じた。途端、疲労が限界に達したのか視界がぐらりと揺れる。

「……………あ……………」

機械翼へのエネルギー供給が途絶え、落下を始める。しかし、すぐに誰かが優しく抱き上げてくれたのを感じた。

途方もない安心感が心を満たしていく。顔を見なくても、誰なのかわかった。嫌悪感は全くない。

この人なら

詩織は安らかな表情で意識を手放した。

「良かった……………間に合って、本当に、でも、優君、どうして……………」

奈々は戸惑った声でたずねる。

優は少し考える素振りを見せてから、口を開く。

『街で好戦的なESP能力者と戦闘状態に陥りました。亡霊の出現を感じ、攪乱手段をとって離脱したのですが、本部へ戻る時間はなし、と判断して現場に急行しました』

奈々は素早く頭を切り換え、優の言葉を反芻した。すぐに虚実であると判断する。

「拘束状態からの離脱、であると判断していいのかしら？」

『……………そうです。一時的な気絶状態に陥り、端末と携帯はその時に破壊されました』

奈々の意図を理解したように、優が補足した。

自然に、奈々と優の間で事実とは異なる話が出来上がっていく。

すぐに戦闘状態に陥ったのでは、端末の破損を説明できない。敵に破壊される状況として、奈々は拘束を提案した。優もその意図を理解したようだった。問題は起こしたくない。

優は襲撃者の不意打ちによって気絶し、襲撃者は優を利用しようと通信手段を奪って廢ビルに連れこんだ。優は目が覚めると同時に敵を攪乱し、そのまま離脱した、と奈々と優は短い通信の間に話を展開していく。通信を誰に聞かれても問題ないように、連絡と確認

という風を二人は装った。

「大体の経緯は把握した。ところで、それは機械翼？」

モニタに映る優の背中には、翡翠の光を放つ翼があった。奈々の知らない外装。

「いえ。機械翼を取りに行く時間はありませんでしたので、ESP能力を代用しました」

「ESP、能力？」

奈々はすうつと瞳を細めて、優の言葉を反芻した。

ESP能力は、未知のエネルギー体を放出するだけの力だ。少なくとも、奈々はそう解釈していた。ESP能力のこうした使い道は、過去に確認されていない。

奈々はいくらかの仮説を考えた後、すぐに状況を思い出してヘッドセットに向かって口を開いた。

「敵はイーグル。追尾能力を有し、機動性に長けている。追尾攻撃に注意なさい」

『了解です』

優が頷く。

イーグルは突然現れた優を警戒するように、距離をとって旋回を続けている。

待機状態のイーグルに対し、優がゆっくりと銃を構える。銃声と同時に光弾がイーグルめがけて飛び出した。

イーグルが回避行動に移る。同時に優の光翼が大きく羽ばたかれ、イーグルめがけて加速した。

近距離戦にもちこむのだろう、と奈々は予測した。追尾弾を撃たれる前に接近して叩くつもりだ。

奈々の予想通り、優は接近しながら銃撃を開始する。イーグルもそれを悟ったように、優から逃れようと高度を下げて速度を稼いでいく。優も同様に高度を速度に変換し、その後を追っていく。

「位置取りは問題ありません。ループ機動に注意を！」

隣で加奈が叫ぶ。

しかし、イーグルは加奈の予想とは違って、いくつかの光弾を放った。

発射直後に方向が微調整され、追尾弾が優の正面から迫る。優は方向転換を余儀なくされ、大きく下降した。

追尾弾が優の後を追って向きを変える。優はチラリと背後を確認する素振りを見せた。

逃げるのは不可能だと判断したように、優は銃口を後ろに向けた。銃声が響くが、イーグルの周囲をすり抜けていく。優の射撃精度はそれほど高くない。高速で回避行動をとるイーグルに対して、些か相性が悪いようだった。

不意に、優は突然銃を左手に持ち変えた。空いた右手を後ろにかざす。

高出力のESPエネルギーで広範囲に殲滅攻撃を行うつもりかと、と奈々は画面を見守った。

優の右手から大きな光が現れる。それが追尾弾に向かって発射されたと同時に、追尾弾の動きが変化した。まるで、優の放った光を追うような軌道を描く。

ターゲットが優から光弾に変わったのだ。

デコイ。

「人ではなく、ESPエネルギーを追尾している？」

デコイを追い続ける追尾弾を眺めながら、奈々はぼつりと呟いた。イーグルが追尾弾を操っているのではなく、はじめから、あの追尾弾に『一定量以上のESPエネルギーを追尾する』という情報が設定されているのだ。追尾弾はイーグルとは独立しているらしい。すなわち、ESPエネルギーには情報を保存、搬送する特性がある、ということなのか。

奈々の結論を裏付けるように、追尾弾が優の放ったデコイに衝突して爆発する。優は同様の手段で短時間で追尾弾を全て片付け、イーグルとの距離を縮めていく。

そして、優の小銃がゆっくりとイーグルに向けられ、銃声が響い

た。

近距離からの銃撃でイーグルの体が弾ける。

空を高速で飛び回る優と亡霊を見て、まるで戦闘機のような、と奈々は思った。追尾弾にデコイ、と優たちの戦闘は、まるで近代戦術を模倣しているようだった。

不意にイーグルの翼が消し飛んだ。

片翼を失ったイーグルはバランスを崩し、高度を下げていく。追撃を加えようと接近していく優に対し、イーグルが最後の抵抗とばかりに追尾弾を放つが、再び優が放った弾に吸い寄せられていく。奈々はその光景を眺めながら、小さな違和感を感じた。華たちが放った通常の攻撃には反応しなかったこと、優の放った大きいESPエネルギーには反応したことから、一定量のESPエネルギーを有している本体レベルに反応するように追尾弾が設定されていると予測できる。そして、優は追尾条件を満たせば弾を作れることを発見した。ならば、イーグルは追尾条件を更に引き上げる事によって、デコイ弾を無力化することができるはずだ。しかし、イーグルの追尾攻撃はまたしても優の放ったデコイに向かっっていく。

イーグルは追尾条件の設定を変更できないのだ。

あるいは、条件の設定に時間がかかる。もしくは条件に上限があるかもしれない、とも考えられる。

それは何故だろうか。

優とイーグルの戦闘を眺めながら、考える。

奈々はそこに亡霊の本質があるような気がして、不意に底知れぬ恐怖を感じた。

ESPエネルギーには情報を付与できる。しかし、イーグルは情報を設定し直せない。付与した情報は変更を受け付けられないのだろうか。

そこまで考えたところで、モニタの向こうで閃光が走った。

直後、イーグルが墜落していく。優がそれに迫る。両者が互いにESPエネルギーを放った。

イーグルの攻撃は虚空を貫き、優の攻撃がイーグルの胴体部を挟むように命中する。直後、断末魔のような叫び声が響いた。

イーグルの身体が洋上に墜落し。大きな水柱があがる。一拍遅れて、マップからイーグルの反応が消滅した。

「イーグル、ロストしました」

加奈が言う。

奈々は司令席に背中を預け、ふう、と小さく息をついた。それから頷いて、回収を命じる。

画面には、華に抱きつかれる優の姿があった。死人が出なかったのは、この二人が奮闘してくれたからだ。

安心して気を緩めたところで、タイミングを見計らったように通信が届いた。相手は上田中将だった。それを確認した奈々は不敵な笑みを浮かべた。

1章 16話 佐藤詩織(3)

詩織の変化は誰の目にも明らかだった。

機動ヘリから本部のヘリポートに降りる際、彼女は優に極自然に肩を貸したのだ。そんな事は今まで一度もなく、優よりは詩織の傷の方が酷い状態だったのだから、その光景を眺めていた奈々は思わず二人の姿を見つめてしまった。

優もはじめはキョトンとした様子だったが、素直に体重を預けた。純粹に嬉しかったのだろう。

二人の様子を眺めながら、奈々は頬を緩めた。詩織の男性恐怖症は治るものではないと思いついていたが、どうやら違ったらしい。

「全く、予想できない事ばかりやってくれる」

自然と言葉が漏れた。

入隊して一カ月のうちに奈々の常識を粉々にした桜井優が次に何を起こすのか、楽しみだった。

二人から視線を外すと、複雑そうな表情を浮かべる華の姿が視界に入った。舞はそれをからかって面白がっている。

女だらけの状況だった為に忘れがちだったが、年頃の少女たちにとっても、何らかの変化が訪れるかもしれない。

奈々は遠くから少女たちの姿を見守りながら、楽しそうな笑みを浮かべた。

詩織は白い扉をノックした。暫く待ってみるも、返事はない。ドアノブに手を延ばす。

詩織は静かに扉を開けた。薬の臭いが鼻をつく。

すぐに優の姿が目についた。白いベッドで寝息を立てている。

詩織は起こさないようにゆっくりとベッドに近づいた。持参した

果物をそばに置く。

綺麗な寝顔だった。ふと、上半身が裸であることに気付き、小さく赤面する。幸い、毛布があるので、目のやり場に困ることはなかった。

やることもないので、来客用の椅子に座る。

詩織は窓へ視線を向けた。開放的な大きな窓には、澄んだ青空がうつついている。詩織は目を瞑り、戦いとは離れた、静かな日常に身を委ねた。

こんなに安らいだ気持ちになったのはいつ以来だろう、と思う。そばに優がいるだけで、詩織は安心することができた。

以前は男、というだけで兄の姿が頭に浮かんだ。この人もアレと同じように私を傷つけるんじゃないか、と思った。

それは無意識レベルのもので、抑えようとしても何とかなるものではなかった。

だが、詩織は優に絶対的な守護を感じた。きっと、この人は私を傷つけない。きっと、私を守ってくれる。あの、翡翠の翼とともに現れた小さな背中を見た時、そう、根拠もなく信じられた。

「……っん……」

優が寝返りを打った。毛布がずれて、優の上半身が露になる。

詩織は息を呑んだ。優の体には無数の傷があった。新しい傷ではない。とても古い傷が全身に広がっている。火傷のようなものが一番多かった。まるで、煙草を押しつけられたかのような痕跡。

医療用ナノマシンによつて、自然治癒が働いている箇所は既に回復している。と言うことは、この傷は特殊戦術中隊に入る以前に出たものと推測できる。

詩織は優を見た。まだ幼い、天使のような寝顔を見て、詩織は胸が熱くなるのを感じた。

「桜井さん……」

自然と震えた声が出た。

何があったのかは分からない。しかし、きっと優は周りが期待す

るような、強い人ではない。優は、本来守られるべき存在だと確信する。そして、詩織は何故優をすんなりと受け入れられたのかわかった気がした。

私と似ているんだ。

詩織はそつと幼い少年の前髪を撫でた。

「んっ……………」

優がゆっくりと目を開ける。

「気分はいかがですか？」

「…………… 佐藤さん？」

優が驚いたように声をあげる。

「意外そうな反応、ですね」

「いやっ、そういう意味じゃなくて……………でも、何でっ？」

優が混乱したような声をあげる。詩織はその様子を見て頬を緩めた。

「騒ぐと体に障りますよ」

詩織の注意で、優が幾分かの落ち着きを取り戻す。

「でも……………大丈夫なの……………？」

遠慮がちに優がたずねる。何が言いたいかすぐに理解して詩織は、はつきりと頷いた。

「はい。もう大丈夫です」

「……………そっか」

優が安心したようにそう答えた時、ノックの音が鳴った。

優が返事する間もなく扉が開く。

出てきたのは体格の良い男だった。自衛軍の制服を着ていて、中将の階級章がある。詩織は男が上官であることに気付いて、すぐに椅子から立ち上がり、頭を下げた。

男は白色が混じる無精髭を撫でて、怪我はどうだ、と口を開く。

「もう大丈夫です。あの、どなた、ですか？」

優の困惑した声。

「中部方面隊総監の、上田だ」

上田中將はそう言ってから詩織の譲った椅子に腰かけた。詩織は恐縮したように一礼して、壁際に寄る。

「さて、疲れてるだろうが、少しききたいことがある。良いかな？」
「はい」

優の返事に上田中將は満足そうに頷いた。

「君がESP能力者と接触した、と聞いた。それは間違いないね？」
詩織が戸惑ったように優を見る。優は詩織の視線に気付かなかつたようので、ゆっくりと頷いた。

「はい」

「ESP能力者の名前は分かるかな？」

「いいえ」

そうか、と呟いて、上田は一枚の写真を取り出した。

「君が接触したのは、この女の子かい？」

詩織の位置からは写真が見えなかった。しかし、優が頷くのは見えた。

「はい。間違いありません」

「この子と何を話した？　つまり、彼女の行方の手がかりとなるようなことは」

「何も話していません」

「どんな小さなことでも何か手がかりに繋がるかもしれない。話した内容を全て教えてくれないかな？」

「話していません。何も、です。急な戦闘で、話せる雰囲気ではありませんでした」

優が繰り返す。それに対して、上田中將は粘り強く質問を重ねた。
「じゃあ、何故襲われたのかも分からずに戦闘を？」

「はい。正当防衛でした。拘束状態から逃げる時も相手の不意をついたので、本当に話す機会はありませんでした」

詩織は気付いた。これは尋問だ。優は何かを疑われている。

「そうそう、その逃げる時に君は無数のESPエネルギーを全包围に放ったね？　それが軍の持つESPエネルギーの探知手段を結果

的に無力化してしまったんだよ。君はこれを予想したかい？」

優が黙る。上田中将は口調こそ子どもを諭すような優しさを保っていたが、目は笑っていないかった。

「それについては謝罪します。しかし、ESP能力者もESPエネルギーを感知することが可能です。追撃を避ける為に、攪乱手段は必要不可欠でした」

「ふむ。では、その行為が軍のESPエネルギー探知能力をも攪乱することは予想できたんだね？」

答えをはぐらかした優に対して、上田中将が質問を繰り返す。

詩織には一連のやりとりの意味が分からなかった。一体、中将はどのような答えを求めているのだろう。上田中将は優の責任を問いたいのだろうか？

「はい。予想はしました」

「では、少し待てば軍が支援行動を取る、とも予想できた訳だ。君が気絶して拘束された時点で、相手は君に殺意を持っていない、と判断できる。しかし、君は待機しようとはしなかった。何故だ？」

上田中将の言葉に、明確な批判の色が滲み始める。

詩織は扉に目をやった。出ていくべきか考える。しかし、どのタイミングで出ていけばいいのか分からなかった。

「僕、いえ、私が遠方から強いESPエネルギーを感知したからです。同僚が苦戦しているのを感じ、軍の支援を期待している余裕がないと判断しました」

中将は何かを考えるかのように黙りこんだ。部屋に沈黙がおちる。詩織は居心地の悪さに目を伏せた。優も、緊張した様子で中将を見ている。

「そうか」

不意に、上田中将が立ち上がった。

「療養中のところ、悪かったね。参考になったよ」

そう言って、扉に歩を進める。しかし、詩織が安堵の息を吐いた瞬間、中将の足が止まった。

「最後に。君は、何だ？」

詩織は質問の意味が分からず、首を傾げた。反対に、優は質問から何かの意図を読み取ったように、真剣な顔で答えた。

「特殊戦術中隊に所属する一兵士です」

上田中將は何も言わず、扉を開けた。上田中將の姿が消え、扉が静かに閉まる。

詩織は優を見た。優も詩織を見ていた。優が苦笑する。

「何だっただらうね？」

詩織は答えに困って何も言えなかった。優もそれを感じたのか、話を続けようとはせず、ベッドに全体重を預けた。

そしてすぐ、何かに気付いたように跳ね起きる。

「あーっ！ そういえば、買ってきた本とか全部忘れたっ！」

思わず、詩織は小さく笑みをこぼした。優との会話で笑ったのは、これが初めてだった。

「あ、そうだ。前に桜井さんが言ってたルーライズのプリン買ってきました」

「覚えてくれてたんだ」

「はい。あそこ凄いですね。プリン以外にも」

医務室に笑い声が響く。

二人の間に以前のようなぎくしゃくした雰囲気はなかった。

その日、少女は生涯で見れば小さな、けれども本人にとっては大きな、かけがえのない一步を踏み出した。

そして、停滞していた世界中の時計が動き出す。亡霊が現れて八年。永遠に続くかと思われた不毛な闘いは、この時新たな局面に突入しようとしていた。

亡霊が、軍が、亡霊対策室が、そしてESP能力者　ハーフ達が、それぞれの思惑を抱いて動き出す。

世界は徐々に、だが確実に変わり始めていた。

2章 1話 宮城愛(2)

桜井優は今だかつて体験した事のない緊張感に包まれて昼食をとっていた。

目の前には無表情で定食を食べる宮城愛。同じ第一小隊に所属する同僚だ。

愛から自分の定食に視線を戻し、唐揚げを口に運ぶ。緊張で味が分からない。

「この唐揚げ、味薄くない？」

話しかけてみる。しかし、意に返さず食事を続ける愛。

会話が全く成立しない。

大人しい、ではなく、無口、という言葉がぴったりな子だ。

優は気まずそうな顔で、味が薄いどころか味のしない唐揚げを再び口に放り投げた。

はじめ、優は京子と愛の二人と昼食を食べる予定だったのだが、京子に急用ができた為、こうしたシチュエーションができてしまった。

心の中で京子を怨む。

「そついえば、宮城さんって何歳なの？」

ダメもとでもう一度話しかけてみる。すると、愛の箸の動きがピタリと止まった。

「……十六」

完全に無視する訳ではないらしい。

「……後、愛でいい。苗字で呼ばれるのは好きじゃない」

愛はそう言って、再び食事に戻った。

名前で呼ばせるくらいなら、嫌われている訳ではないようだ。優が見た限り、愛は誰にでも無愛想である。

「愛……さん？ 愛……ちゃん？ どっちがいい？」

名前で呼べと言われても逆に困る。一応、二通りの選択肢を並べ

てみるが、愛は構わず食事を続ける。

優はむっと口を結んだ。無視されればされるほど意地でも喋らせなくなってくる。

「そういえば、昨日の夜やってた洋画見た？」

「……………」

「……………昔さ、普通の椅子に普通の車輪ぶっ刺して『神』って名付けた美術家が逮捕されたらしいよ」

「……………」

「……………最近の政治ってアピールする為に、敢えて効率の悪い手段ばかり……………うん……………何でもない……………」

「……………」

心が折れた。

色々話題を変えてみるも、全く食いついてこない。

京子たちは彼女と普段どんな話をしているのだろうか。謎である。

「愛ちゃんの趣味って何？」

とりあえず、食いつきそうな話が全くわからない為、向こうの趣味に合わせる事にした。

「……………読書」

それを聞いて、優は目を輝かせた。優も読書が趣味で、読むジャンルも幅広い。

「あ、読書なら僕も好きだよ。どんなの読むの？」

「……………サイバーパンク」

「狭っ!？」

何だかもう駄目な気がしてきた。

頭を抱える。京子はまだ帰ってこない。早く帰ってきて、と心の中で悲鳴をあげる。

遂に限界を迎えた優は最終手段に出ることにした。つまり、向こうが反応せざるをえない状況を作ればいいのだ。少し罪悪感を感じるが、背に腹は変えられない。優は今、一世代の悪事に手を染めようとしていた。

箸を握り直す。そして、愛に目をやる。彼女は無表情でご飯を食べていた。その横の大皿には最後の唐揚げが一つ。

優の眼が怪しく光った。

「そおいつ！」

優の箸が高速で愛の唐揚げに向かう。訓練によって鍛えられた過去最速の動きだった。

次の瞬間、食堂中に鋭い音が響き渡った。

「なん……だと……」

優は絶句した。優の放った高速の箸は、愛の箸によって動きを封じられていたのだ。

「この僕が負けるなんて……」

割りとノリノリである。

愛はそれを無視し、澄ました顔で最後の唐揚げに箸をのばした。

その様子を悔しそうに見ていた優が何かに気付いたようにぽつりと呟く。

「あ、これって間接キス？　と言うか間接的な間接キスかな」

その瞬間、愛の顔がぼふっという擬音が似合うほど一気に赤面した。

それを見た優は、新しいおもちゃを見つけた子どものように、ぱつと目を輝かせた。

京子は急ぎ足で食堂に入った。

愛と優を二人っきりにしたのは失敗だった。きっと気まずい空気が流れているに違いない。

京子は心の中で謝り、愛たちを捜そうと席を見渡した。二人はすぐに見つかった。だが、様子がおかしい。二人はテーブルの上で手を握り合い、愛は恥ずかしそうに顔を背けていた。

不審に思いながらも近づく。しかし、不穏な言葉が流れてきた。

「愛……愛してるよ」

「あんたは何で公共の場で愛を囁いてんのっ!？」

京子が詰め寄り、首根っこを掴むと優が慌てて弁解を始める。

「ち、ちがっ! 反応が面白かったからつい悪のりして!」

「あんたねえ……っ!」

「悪気はなかったんです! ごめんなさい!」

優がおずおずと、京子の反応をうかがうようにこちらを見やる。

「愛ちゃんが無視するから相手して欲しくて……」

上目使いで寂しそうな顔をする優。優は幼い顔つきながらも、整った顔立ちをしている。少なくとも、京子の知るどんな男性よりも。

京子は優を見てうめいた。頬が僅かに赤く染まる。クリーンヒットだった。そして、京子は無意識に口を開いた。

「……許す」

桜井優。彼は人類の未来を担う最強のESP能力者である。それに加えて最強の年上キラーの称号を得る日も近いだろう。

2章 2話 白崎凜

特殊戦術中隊には、用途に応じた様々な訓練室がある。飛行訓練などは外で行うが、自主的な訓練は屋内の施設を利用するのが一般的だった。

その訓練室の一つに、いくつかの影があった。

「やあっ！」

掛け声と共に、詩織が竹刀を振りあげて突撃してくる。

優はそれを竹刀で横に弾き、詩織のバランスが崩れたところに間髪おかず、竹刀を叩きこんだ。打撃を正面から受けた詩織が後方に大きく吹き飛ぶ。受け身を取る余裕もなく、詩織が床に叩きつけられるのが視界に入った。小さく呻く詩織のもとへ、慌てたように優が駆けつける。

「ごめん！ 大丈夫？」

詩織は恥ずかしそうに打ち付けた左肩を押さえて頷いた。優がさしのべた手を詩織が遠慮気味に掴む。

「青春だねー」

第四小隊長、黒木舞がその様子を見てからかうように言った。隣には、不機嫌そうな華の姿がある。

詩織は舞の言葉を意に返さず、しなやかな動作で小隊員達の元に戻った。ただ、頬の赤らみだけは隠せなかったようだった。

「次はボクだね」

舞が竹刀を手に取り、防護服を着用する。彼女は散歩に行くような軽い足取りで、優の前に進んだ。

「行くよ！」

宣言とともに、舞が地を蹴る。早い。間合いが一瞬で詰まり、舞の竹刀が優に迫る。

咄嗟に横に飛び、舞の一撃を避ける。舞はそれを予想していたように第二撃の準備に入った。今度は避け切れないと判断し、優は咄

嗟に舞の足を払った。舞がバランスを崩し、宙を舞う。

直後、強烈な衝撃音が響いた。舞が転倒間際に竹刀を横に振り抜き、優の腹部に打撃を与えたのだ。優が奇妙な声をあげて地に落ちる。舞も優を追うように、盛大な音を立ててそのまま転倒した。

「……大丈夫かな？」

華が動かない二人を見て呟く。防護装備があるとはいえ、衝撃を全て緩和することはできない。

「桜井君！」

華が二人の元に駆け寄る。優は完全に気絶していた。

「ボクは無視？」

舞がうめきながら抗議する。

華はそれさえも無視して、優を抱えた。

「やっぱり、近接戦闘訓練は危険なんじゃないでしょうか？ 訓練で怪我をして、出撃できなくなったら元も子もないような……」

詩織が言う。それは、他の小隊長も薄々気付いていた。訓練である為、ESPエネルギーは一切使っていない。実戦で訓練の成果が出るとは到底思えなかった。しかし、ESPエネルギーを使った模擬戦闘を行うのは危険すぎる。

「とりあえずは保留ね。何かもっと効率的な方法を探してみましよう」

第二小隊長、姫野雪の言葉に他の小隊長達は頷いた。

「ん……」

優が頭を抱えて起き上がる。大丈夫か、と心配する少女達に優は笑顔を作って頷いた。

ふと、視線を感じて優の視線が壁際に移る。すぐに第六小隊長の白崎凜と目が合った。僅かな時間、優は凜の吸い込まれそうな黒い瞳に見入った。凜はすぐに視線を外し、隣にいる舞と談笑を始める。優は首を小さくかしげた。

2章 ペンフィールドのホームクルス

訓練後、優は一人で廊下に出た。他の少女たちは中でまだ雑談を続けている。

シャワーを浴びる前に渴いた喉を癒そうと自販機に向かうと、基地内では珍しい男性の姿があった。情報部の主任である斎藤準だ。優がここに来た時に本部内の案内をしてくれた人で、数少ない男性の知り合いだった。

「よっ、また新しい女の子ひっかけたんだって？」

準がからかうように話しかけてくる。優は苦笑して、曖昧に頷いた。

技術者となると、やはり男女比に偏りが出てくる。情報部は亡霊対策本部の中で最も男性の比率が高くなっていた。

「そういう、斎藤さんはどうなんですか？」

準には付き合っている女性がいた。同じ情報部の田中幸枝。過去に一度だけ会った事があって、大人びて綺麗な人だった、と優は記憶している。

「婚約したよ」

思いがけない返答に優は取り出した財布を落とした。

「おめでとうございます。田中さんも物好きですねー」

「素直に祝えよ。ところで、財布変わったんだな」

財布を拾おうとしていた優の動きが一瞬止まる。

「女の子は現金より、プレゼントを渡された方が喜ぶぞ」

その言葉を吟味し、意味をすぐに悟る。優は驚いて準を見た。

「知っていたんですか？」

「ああ。一部が街の防犯カメラにばっちり映ってた。消しといたけどな。」

準は手に持っていたコーヒーを一口飲んで、話を続けた。

「逃亡資金として財布ごと渡したんだろ？ 随分と景気がいいな」

優は返答に窮して、黙りこんだ。

「……広瀬理沙は高校でいじめに遭っていたそうだ」

準はじつとコーヒーマグの缶を見つめて、何でもない風を装いながら話を始めた。優は静かに耳を傾けた。

「いじめの原因はESP能力。ESP能力が発現するまでは普通の学生生活を送っていたらしい」

言葉を選ぶように、小さく間をおきながら準の続ける。

「それがエスカレートして事件に繋がった。現場に刃物が落ちていたことから、広瀬理沙の行動は正当防衛と考えられている」

「……未成年に正当防衛。じゃあ広瀬さんは捕まえられないってことですか？」

「……いや、正直なところそれは難しいと思う」

「ESP能力で人を殺したからですか？」

優が無表情に言う。準には、優が怒っているようにも、泣いているようにも見えた。

「そうだな。それと一つ言っておかないといけないことがある。いじめの主犯格だった少女の父親が事件の3日前に亡くなった。上陸した亡霊にやられたらしい」

優が目を伏せる。

「そんなの、ただの八つ当たりじゃないですか」

準は頷いた。

「俺たちESP能力を持たない者は亡霊に干渉出来ない。一方的に破壊されるだけだ。その怒りは、肉体とESP能力、二つを兼ね揃えたESP能力者に向かう」

「ハーフ。良く出来た言葉だと思います。人間と亡霊の間。つまり第三勢力であって、人間の味方ではない、と」

「桜井！」

自嘲めいた優らしくない発言に、準が声を荒げる。

「……すみません。自分が思う以上にイライラしていたようです」
珍しい、と準は思う。優が何かに腹を立てているところを準は見ることがなかった。それだけ、広瀬理沙の事が気になっていたのでろう。

「……怪物と闘う者は、怪物にならないよう気をつけなければならぬ、っていう名言がある」

「いきなり何ですか、それ」

優は先ほどとは違う、屈託のない笑みを浮かべた。

「広瀬理沙をいじめてた少女は、怪物と闘っているつもりだったんだろう。初めはただの八つ当たりだったかもしれないが、父親が死んでからのそれは、恐らく広瀬理沙を怪物だと本気で思い込んでいた。でも、客観的には彼女の方が怪物だ。人は、強大な敵と対峙すると、どこまでも残忍になれる可能性を持っている」

優は唇を噛んだ。小さく皮が裂け、血が滲み。

「よく覚えておきます」

準は、心配そうに優を見た。優が広瀬理沙の影響を少なからず受けているのは明白だった。

「じゃ、俺は仕事に戻るよ」

缶をゴミ箱に投げ、準が踵を返す。

優は小さく返事して、自販機のボタンを押した。大袈裟な音を立てて、缶コーヒーが落ちる。

優は緩慢な動作でそれを取り出した。

遠ざかる準の後ろ姿を見ながら、理沙の事を考える。

苦いコーヒーの味が口内を満たした。

2章 3話 姫野雪

重い金属製の扉を開けると、眩い光とともに心地良い風が吹いた。思わず目を細める。少し肌寒かった。

桜井優は亡霊対策の寮棟にある屋上に来ていた。この頃はよくここに足を運ぶ。亡霊対策室の中では比較的静かで落ち着ける数少ない場所だった。

扉が重い音を立てて閉まる。その時、思わぬところから声があがった。

「こんにちは、桜井くん」

驚いて声のした右方向に目をやる。そこにはフェンスにもたれかかるように、第二小隊長の姫野雪が立っていた。

「あ、こんにちは」

「風に当たりにきたの？」

そう言って、雪がゆっくりと近づいてくる。

「それとも……なにか悩みごと？」

「えーと、外の空気を吸いに……」

「嘘」

雪は優の目の前で立ち止まり、顔を覗きこむように腰を曲げた。顔の距離が五十センチほどに縮まる。優は思わず後ずさりそうになった。

優には今まで雪と二人つきりで話した経験がない。訓練時に少しだけ事務的な話をしたことがあるくらいだ。

優は慣れない雪の雰囲気にもまれてかいていた。

「う、嘘ってどういう意味ですか？」

「あなたは悩みがあつてここにきた。広瀬理沙の事が心配なんですよっ？」

優はの瞳が大きく開かれる。

何故、と優は混乱する頭で考えた。あれを知っているのは自衛軍

と奈々、それに情報部の一部だけのはずだ。何故、雪がそれを知っているのだろうか。

優は警戒するように雪を見た。名前を模したように、白く透き通るような肌に大人びた憂いを帯びた淡紅色の瞳。そして、光を反射する銀色の髪。

アルビノ。

非常に稀な先天的遺伝子疾患。今まで赤い瞳はカラーコンタクトだと思っていたが、間近で見ると紛れもない本物だとわかった。

優の記憶によれば、アルビノはその性質上視力が恐ろしく低いはずだ。さつきから顔が不必要に近いのはその為かもしれない。そして、アルビノにはもう一つの致命的な特性がある。

「あ、あのっ、日光を浴びるとまずいんじゃない……？」

アルビノは紫外線に弱い。過剰な紫外線を浴びれば皮膚病や癌に繋がる恐れがある。

だが、雪は優しい微笑みを浮かべた。

「ええ。でも、今はそういうお薬があるの」

「そ、そうなんですわっ」

不意に雪の手が優の頬にのびた。突然のことに固まる。

雪の淡紅色の瞳が優を瞳を射ぬいた。まるで頭の中を覗かれるような奇妙な錯覚に陥る。優は咄嗟に目を逸らせそうになって、意識的に耐えた。

「あなたはアルビノじゃないのね」

「え？」

思わぬ言葉に、気の抜けた言葉がもれる。

雪は頬から手を名残惜しそうに離し、再び微笑を浮かべた。

「広瀬さんが気になるなら、ESPに頼りなさい。ESPは攻撃手段以外にも情報体としての特性を持ちます。正しくは、そちらが本質なのですけれどね」

話が急に戻った。唐突な変化に軽く混乱する。

「情報体……？」

「そう。あなたはそれを既に知っているはず」

優の脳裏にイーグルの放った追尾弾が浮かんだ。

ESPエネルギーは情報体としての特性を持つ。

いくつもの疑問が濁流のように溢れ、雪に訊ねようとした時、彼女はくるりと背を向けた。

「あ、あの」

呼び止めると、雪は一度だけ振り返り、微笑を浮かべた。そして、滑るようにすうと出入り口へ消えていく。

いつのまにか、優はその様子に見惚れていた。

不思議な人だなあ。

そう思い、自身の右手を見つめた。表面を覆うようにして光り輝くESPエネルギー。

ESPエネルギーに頼れ、と雪は言った。彼女が何故、広瀬理沙の事やESPエネルギーの詳しい性質まで知っているのかは分からないが、デタラメではないように思えた。

強く風が吹き上げる。優は静かにESPエネルギーを纏い始めた。

その様子を階段室の中から感じた雪が暗がりです静かに微笑む。彼

女はゆっくと、暗闇に続く階段を降りていった。

2章 4話 篠原華(2)

「姫野さんって強いの?」

華、京子、愛のいつもの第一小隊のメンバーと食堂で夕食を食べていた時、優は何となく気になっていた言葉を口にした。

華と京子がキョトンとした顔をする。愛は相変わらず無表情のままだ。

「そりゃあ……小隊長だし強いんじゃない?」

「やつ、そりゃそうだけど、小隊長の中でも強い方?」

京子の答えに、質問を重ねる。

「んー、例えば黒木さんは近接戦闘に長けてるし、咲ちゃんは狙撃が飛び抜けてるし、そうやって皆戦い方が全然違うから一概には言えないけど、一番強いのは白崎さんかも」

華が悩んだように言う。小隊長である華が言うのだから、かなり信憑性が高い。

「白崎さんが?」

「うん。何て言うか、戦い方が派手だね。高出力のESPエネルギーで一気に殲滅しちゃうの。でも……」

華は何か気付いたように言葉を続けた。

「そういえば、姫野さんが怪我したところ一回も見たことないなあ。あまり目立たないけど、もしかしたら白崎さんより強いのかもかもしれないね」

「へえ……一度も怪我をしない、か……」

集団戦において、全ての敵に注意を向けることは不可能だ。必ずどこかに死角ができ、そこからの攻撃にはどんな機動力を持っていても避けることは叶わない。故に、集団戦においては側面をとることが絶対的なアドバンテージとなる。

一度も怪我をしたことがない、というのは致命的な死角をとられたことがない ということでもあるのだ。

「何でいきなりそんな事を？」

「ん、昼に会った時、やけにESPエネルギーに詳しい感じだったから、強いのかな、と」

京子の問いに少しぼかして答える。

すると、華がまた驚いた声を出す。

「え？ 姫野さんとお話したの？ あの人の、あまりお喋りしないってことで有名だよ？」

「……口説かれたの？」

愛が首を傾げて、じつと見つめてくる。

優は苦笑して、首を振った。

「違うよ。屋上に行ったら、たまたま会っただけ。愛ちゃんも屋上に行ったら、姫野さんと話せるんじゃないかな」

視界の隅で華が不思議そうな表情を浮かべる。

「そういえば、桜井くんはいつから愛の事名前で呼んでるの？ 私

なんて未だに『篠原さん』のままなのに……」

「いや、それは愛ちゃんから」

「あ、そういえば桜井って佐藤隊長のこともいつの間にか名前で呼んでなかったっけ？」

何かに気付いたように、京子がぼつりと零す。

それを聞いた華はジト目で優を見つめた。

「この差は何なんですか？」

「……なんなんでしょうね！」

視線を逸らして、誤魔化す。

「……呼び方は統一すべきだとおもいます」

「あ、じゃあ私もそれで」

抗議を続ける華と、それに便乗する京子。

優は二人をちらつと見て、首を傾げた。

「じゃあ、何て呼べばいいの？ ……華ちゃん？」

試しに言ってみると、華の顔が茹蛸のように赤く染まった。名前で呼ばれるのが恥ずかしいなら、無理に張り合わなければいいのに、

と苦笑する。

「私は？」

「……京子？」

「……何で私だけ呼び捨てな訳？」

不満そうに唸る京子。

「だって、ちゃん付けするタイプじゃないし……京子ちゃん、とかどう考えても似合わない」

そう言って、優はまだ半分以上残ってる親子丼に箸をのばした。さっきから話してばかりで一向に中身が減っていない。冷める前に食べきらなければ、とペースをあげる。

それに合わせるように華は唐揚げ定食、京子はしょうが焼き定食に手をのばした。愛はさきほどから隣で黙々とミートスパゲティを食べ続けているが、あまり量は減っていない。食べる速度が遅いのだろう。

そのまま食事を続けていると、優たちのテーブルの近くに一人の女の子が近づいてきた。華が京子の知り合いだろうか。そう思い、再び親子丼をやっつけにかかる。

「あ、あのっ！」

やはり、誰かの知り合いだったようだ。何気なく、話しかけてきた少女に目をやる。何故か、彼女の目は真っ直ぐと優に向けられていた。

「す……す、す、すす好きですっ！ わ、私と付き合ってくださいっ！」

その一言で場が凍った。視界の隅で華が石化しているのが見える。周りから見れば優も似たような状態かもしれない。

「……らぶらぶ」

愛の呟きが、妙に大きく響いた。

2章 5話 望月麗

付き合ってください。確かにそう聞こえた。

混乱したまま少女の姿を観察する。身長は優よりも小さい。一四〇センチメートルくらいだろうか。顔は整いながらもまだ幼い感じで、両サイドをリボンで結んだ金色の髪が幼さに拍車をかけている。確か同じ第一小隊に所属している女の子だ。だが、名前までは覚えていない。そして今まで話した記憶もない。

「……………あの？」

信じられなくて、無意識のうちに聞き返してしまう。

「だ、だから、私と付き合ってください！」

少女は叫ぶように繰り返した。

その慌てぶりを見て、少し冷静さを取り戻す。優は少し迷いながらも、はっきりと答えた。

「えっと……………ごめんなさい」

嫌な静寂が訪れる。伏せ目がちに沈む少女の様子を見て、優は言葉が続けた。

「……………ごめんね。正直、名前も知らないし、いきなり、そういうのは、どうかなくて……………」

「……………麗。私の名前は望月麗です」

「えっと、望月さん。今、言った通り、良く知らない人と付き合うとか、想像できなくて。だから、ごめんね。でも、そういう事言われたの初めてだったから嬉しかったです。ありがとう」

素直に自分の気持ちを伝える。はっきりと彼女が納得できるように。

優の言葉を聞いて、麗は悔しそうにぎゅっと口を結んだ。本当に悔しそうだった。何故、そんな表情ができるのだろう。まだ話したこともない間柄だというのに。

「じゃあ……………」

麗は何かを決心したように口を開いた。

「知らない人と付き合つのが嫌なら、まずお友だちとして付き合っていただけませんか？」

「え……うん、友達からなら……」

「じゃ、じゃあ、アドレス交換してください！」

麗の勢いに押され、携帯を取りだす。麗の携帯は青色の丸くて女の子らしいものだった。

「ん、いけた？」

「はい。じゃあ、私はこれで失礼します！」

アドレス交換し終えて満足したように麗が慌ただしく去っていく。

「何と言つか、積極的な子だね……」

麗の後ろ姿を見送っていた華がぼつりと呟いた。携帯に登録された新しいメールアドレスをぼんやりと眺めながら、頷く。

「桜井って結構堅いんだ。やつちやうだけやつちやうってポイって奴も少なくないじゃん。もしかして既に好きな人がいるとか？」

「いや、そういうんじゃない、やっぱりいきなり知らない人と付き合うのは抵抗あるよ」

「ふーん……知ってる人ならいいんだ？」

京子が悪戯っぽく笑う。優は、多分、と曖昧に濁した。

「てかさ、桜井って年下のほうが良いの？ 年上受けしそうな感じだけど」

「いや……あんまり年齢は気にしないかな。望月さんってやっぱり年下だったの？」

「そ。確か二つ下だったから今中二だと思う」

中二、という言葉が妙に印象的だった。通常、特殊戦術中隊に入隊した時点で高校や大学を辞めることになる。だが、義務教育である中学校を辞めることはできない為、便宜上まだ彼女は学生なのだろう。

「そつえば、詩織ちゃんも一個下だった。後輩組は積極的だなあ。華も頑張りなさいよ」

「そつえば、詩織ちゃんも一個下だった。後輩組は積極的だなあ。華も頑張りなさいよ」

「そつえば、詩織ちゃんも一個下だった。後輩組は積極的だなあ。華も頑張りなさいよ」

「ええっ！？ わ、わたしは別に」

優はまだ混乱した頭で、麗のどこか必死な表情を思い出しながら食事に戻った。親子丼は既に冷めていた。

夕食を終えた後、優たち四人は寮棟に繋がる通路に向かおうと、一階ロビーを通った。

その時、警備員と年輩の女性が入り口で言い争っているのが見えた。珍しい光景に自然と足が止まる。女性は「中に入れる」と騒いでいて、警備員は三人がかりでそれを押さえ込んでいた。

「なに、あれ？」

不思議そうにその光景を見つめながら尋ねると、京子が呆れたような声で答えた。

「第四小隊の……誰だっけ。誰かの母親らしいよ。何かね、一ヶ月に何度か娘に面会させろって乗り込んでくるの。ちよっとした名物」

「面会……？ そういえば、そういうの見た事なかったけど禁止されてるの？」

「ううん……禁止されてる訳じゃないけど、娘さんの方が会いたくないって言うって……」

華が言いづらそうに答える。優が不思議そうな顔をすると、愛が補足するように呟いた。

「……昔、虐待があった。児童相談所が何度か動いてる」

「え？」

「あー、何て言うかさ、桜井が面会とか知らなかったのは、当たり前前なんだよね」

京子が迷ったように、目を逸らしながら言う。珍しく歯切れの悪い京子に、優は戸惑いの視線を投げ掛けた。

「世間じゃさ、ESP能力者の共通点って、女としか認識されてないよね。実はさ、公式には発表されてないんだけど、もう一つ共通

点があるらしいよ」

思わぬ言葉に驚く。

初耳だった。共通点はESP能力の源を探る上で重要な研究指針となる。何故、そんな大事な事が発表されてないのだろう。そう疑問を抱いたが、その疑問は京子の続けた言葉で易々と氷解した。

「ESP能力者は全員、幼少時に虐待とか家庭環境に問題があったりして、例外なく心的外傷を抱えてるんだって」

2章 6話 秋山明日香

「全員が……？」

「そう。だから、誰も面会なんて来ないし、たまにああやって押し掛けてくる人がいても誰も会いたがらない。桜井が面会のシステムを知らなかったのは、面会が無いに等しいから当たり前な訳。私も入ってから暫く知らなかったし」

それを聞いた時、何かがびたりとはまった。

安全保障上やむを得ない事とは言え、自らの子どもを軍隊に預ける親が一体どれだけいるだろうか。常識的に考えれば、そんな親は皆無に等しいだろう。しかし、特殊戦術中隊は全ESP能力者の内、五割近くを既に確保している。

五割。未成年の子どもを死の危険に晒しても構わないと考えた親の割合にしては驚異的な数だ。つまり、彼女らは親に心配されるような立場ではなかった。もしくは、彼女らは自ら特殊戦術中隊への入隊を希望してしまうような状況に置かれていた、ということなのだろう。

優は反射的に華、京子、愛の顔を見渡した。

なら、この三人も？

「そんな顔しないでよ」

京子が困ったような笑みを浮かべた。優は意識的に何でもない風な表情を取り繕うとしたが、すぐに無理だと悟って、まだ言い争っている警備員たちの方に顔を背けた。

年輩の女性は、娘に会わせると叫び続けている。

「一見さ、必死で面会を求める娘想いの母親に見えるよね。でもさ、あれ、お金たかりに来てるんだって」

京子がぼつりと言う。

「他にもさ、色々いるみたい。暴力振るった後に、人が変わったみたいに必死で謝る奴とか」

警備員の怒鳴り声と女の甲高い声が一際大きくなる。

不意に一人の男の姿が脳裏に浮かんだ。近所では愛想の良い人と
して通っていた一人の男。

「桜井君？」

華の声に重なるように、女性の悲鳴が頭に響いた。続いて食器の
割れる音。男の叫び声。鈍い音。

世界がぶれる。目眩がした。音が二重に聞こえる。

吐き気がこみあげ、優はその場に膝をついた。口を押さえ、うず
くまる。

「桜井君？ 桜井君！」

警備員と女性の言い争う声がやけに遠く聞こえた。

得体の知れない恐怖感が全身を支配し、現実感が麻痺していく。

また誰かの悲鳴。それが現実のものか、空想のものか優には判断
がつかなかった。

息が苦しい。うまく呼吸できなかった。失見当識を起こしている、
と冷静な自分のどこかが警告する。過呼吸だ。しっかりと二酸化炭
素を吐け。息を吸うな、と誰かが言う。しかし、警告通りに体がう
まく動かない。

不意に右腕に鋭い痛みが走った。何か熱いものを押し付けられて
いるような激痛。優はうめき声をあげた。

「桜井……？」

また女性の叫び声。痛みが止み、代わりに誰かが殴られる音が響
く。そして男の怒声。

優は丸まるようにして、震える自分の肩を抱いた。

不意に、その肩を誰かが優しく包み込んだ。ほのかに甘い香りが
優を包む。震えがびたりと止まり、優の意識は急速に現実へと浮上
していった。

「華、ちゃん……？」

「大丈夫だよ」

その一言を聞いた途端、全身から力が抜けた。心地よい安心感が

全身に広がっていく。
優は柔らかな安心感に身を委ね、意識を手放した。

「フラッシュバックね。幼少時に虐待を受けたりして強い心的外傷を受けた人は何らかのトリガーでその記憶を再経験してしまう場合があるの。あなたたちも、経験した事があるかもしれないけど」

「……はい」

医務室に、主である秋山明日香あきやま あすかの言葉が響く。

ベッドには意識を失った桜井優の姿。その周囲には、華、愛、京子の三人がいた。

「原因は十中八九その母親のせいね。怒鳴り声はトリガーになりやすい。今後、こういった事がないよう、警備の方に強く言うておくわ」

そう言っつて、明日香は疲れたように椅子に腰をおろした。

明日香はまだ三十台前半で若いが、腕は確かと評判だった。中隊員にも人気だ。

特殊戦術中隊はその性質上、医務室の世話になる人が多い。それは怪我という理由にとどまらず、戦闘によつてもたらされた過度のストレスや優のような幼少時の心的外傷が原因のPTSDを患った少女たちのカウンセリングが多い為だ。それ以外にも暇つぶしに医務室にやってくる者が多い。明日香が信頼されている証拠だろう。

「桜井は大丈夫なんですか？」

京子が不安そうに言う。

「ええ。今は疲れて眠ってるだけ。安心しなさい」

その言葉に、華と京子が安心した表情を浮かべる。愛は相変わらず無表情を貫いたままだ。

「さて……もう九時半ね。消灯も近いからあなたたちは部屋に戻りなさい」

「……はい」

華は一礼して、明日香に背を向けた。京子がそれに続く。しかし、愛は動こうとはしなかった。

「愛？」

華が戸惑ったように呼び掛ける。

「……少し、残る」

無表情に言い放つ愛に、華は目を見開いた。その華の袖を京子が引っ張り、目で外を示す。華は頷いて、京子とともに医務室を後にした。

扉が閉まり、静寂が医務室を包み込む。明日香は唯一残った愛を見て小さく微笑んだ。

「どうしたの？ 何か相談事？」

「……ただ、残りたかっただけ」

明日香は、そう、と呟いて、肩を竦めた。

2章 7話 宮城愛(3)

桜井優は睡眠、という行為が好きではなかった。

時々、嫌な夢を見る。既に終わった過去を繰り返す、悪夢。思い出したくない記憶が掘り出され、現実と夢の境界が曖昧になり、終いには二つの世界が逆転してしまうのではないか、と途方もない空想が勝手に広がってしまうのだ。

その日、優は夢を見る事なく、目を覚ました。いつもと違うベッドと毛布の感触に違和感を覚え、重い瞼を開く。

「……え」

目を開けた途端見えた愛の寝顔に、優は動きを止めた。次いで、素早く壁際まで後ずさる。

「うそ！　なんで!？」

ベッドには優に抱きつくようにして愛と一緒に寝ていた。頭が真っ白になる。

「うそ、だって……違う違う、そんなはずは……」

反射的に服装が乱れていないかチェックする。しかし、それらしい痕跡は見当たらない。優は安堵の息をつき、壁にもたれかかった。

「ん……っ……う……」

その時、愛が小さきうめき、薄く目を開いた。優が一人で騒いでいたのがうるさかったのだろう。

「……おはよう」

「その第一声おかしくない!?　他に何か言うことないの!？」

思わず突っ込みをいれる。

愛は不思議そうに首を傾げた後、毛布を体に巻き付け、頬を赤く染めた。

「……汗、かいたからあまり近づかないで。……恥ずかしい」

「段々自信なくなってきたんだけど、そういうことは本当になかったんだよね!」

「……冗談」

「……愛ちゃんって結構きつい冗談言うね」
「どうやら大丈夫のようだった。」

冷や汗を流しつつ、辺りを見渡す。どうやら医務室のようだった。寝ぼけた頭を働かせ、昨夜の事を思い出す。恥ずかしいところを見られたなあ、と優はため息をついた。

「ここまで運んでくれてありがとう」

「……ん」

愛は頷いて、優の顔をじっと覗きこんだ。

「な、なに？」

「……涙の後がある」

「……あ……」

愛のひんやりとした指が優の頬を優しく撫で、次の瞬間、優の体は愛の腕の中で抱き締められていた。

「あ、愛ちゃん……？」

仄かに甘い香りが優の頭を満たした。柔らかな感触に動揺して、離れようと肩を押し返そうとする。しかし、それは次に愛が放った言葉によって遮られた。

「……昔、泣いた時に父がよくこうしてくれた」

全身から力が抜ける。

恐らく、同じベッドで寝ていたのも、愛なりの気遣いなのだろう。はじめて愛と会った時、話しづらそうな子だと思った。しかし、段々と話すうちに恥ずかしがりやな年相応の女の子であることが分かってきた。そして今回、また新たな一面を知った。

第一印象なんて当てにならないな、と苦笑する。愛は無表情ではあるが、逆に表情を偽ったりはしない。優の知るうる限りで、愛は最も純粹な存在かもしれない。

そう思った時、医務室のドアが力チャリと音を立てて開いた。

「あ」

場が凍った。ドアが開いたところには啞然とした顔の秋山明日香

がいる。優の背中を冷たい汗が伝った。

「お楽しみのところ悪いんだけど、医務室でそういうことは……」

「わっ！ わー！ 違っんです！ 誤解です！ そういうんじゃないんです！」

恐ろしい誤解が広がる前に食い止めようと、手を振り回し必死に訂正する。しかし、背中に回された愛の腕が離れない。

「ちょ、愛ちゃん！ 離して！ 誤解が！ 壮大な誤解が！」

愛が渋々といった風に抱擁を解く。その様子を見ていた明日香がクスリと笑った。

「この子、大人しいように見えて結構良い性格してるでしょう？」

明日香は笑いながら愛の額を軽く叩く。

「少しからかっただけよ。誤解なんてしてないから安心なさい。それで、体調の方はどう？」

「え、あ、もう大丈夫みたいです。ご迷惑をおかけしました」

さっきのからかいを含んだ笑みとは一転、慈悲深い聖母のような笑みを浮かべる明日香の変化に戸惑った。どうも調子が狂う。

「今日は訓練休んだほうがいいわね。一応熱だけ計っておきましょう」

明日香がゴソゴソと引き出しをいじり、体温計を差し出す。優は軽く頭を下げてそれを受けとり、わきに挟んだ。

「正直ね、心配だったの」

「え？」

ぼつりと明日香がこぼした言葉に顔をあげる。

「ここ、女の子しかいないでしょう？ 男の子がちゃんと馴染めるのかなって」

頷く。優自身、入隊前から不安で仕方がなかった。

「そうですね。やっぱりはじめの一週間とかは全然ダメでした。凄い壁を感じて、中々……」

でも、と優は愛の方を見た。

「でも、華ちゃんや愛ちゃん達のおかげで無事馴染めることができ

ました」

明日香が微笑む。

体温計が電子音を発し、優は会話を中断してそれを取り出した。

「三六・八です」

「大丈夫そうね。念のため、激しい運動は控えるように。それと愛、あなた朝食まだでしょう?」

明日香の言葉に、愛は素直に頷いて部屋から出ていった。暗に含んだ意味合いを正確に理解したようだ。

愛が出ていったのを確認して、明日香が優に向き直る。優は少し身構えた。

「さっきの話の続きだけど、ここは本当に女の子ばかりなの。男女比が外とは全く違う。思春期の年代にとって、それはつまり恋愛対象が限定されるということ。優君にはそんなつもりがなくても、嫉妬やら何やら面倒なことが生まれてくる可能性も否定できない。なにか困ったことがあったら、すぐに相談しなさい。閉じたコミュニケーションでは、そういうことが予想以上に暴走してしまう危険性がある。いいわね?」

脳裏に麗の顔がよぎった。恋愛、という二文字が頭の中をぐるぐると回る。

「はい」

「良い子ね。来てくれたのが貴方のような男の子でよかったわ」

明日香はそう言っただけで席を立った。話はこれで終わりということだろつ。

優もそれに続いて立ち上がり、短く一礼した。

医務室を出て、愛の後を追おうとする。その時、携帯が小さく振動した。震え方からメールと判断する

差出人の欄には望月麗の文字があった。件名はない。メールを開くと予想外の文字が目飛び込んで、優は固まった。

『明日デートしてください』

2章 8話 長谷川京子(2)

「デート……」

その日の夜、桜井優は自室のベッドで携帯を片手に一人唸っていた。

望月麗からのデートの誘いに優は承諾の返事を出した。しかし、具体的なプランがあるわけでもなく、建設的なプランもたないまま時間だけが無駄に過ぎていく。

「あー！ もうだめだ！」

携帯を放り出し、ベッドに倒れこむ。

その時、ノックとともにドアが開いた。

「何一人で騒いでんの？」

「ん……京子かあ。どうしたの？」

「特に用はないんだけど、暇だったから。何か悩み事？」

優は無言で液晶画面が見えるように携帯を突き出した。

京子がそれを不思議そうにのぞきこむ。

「デート？」

「そう。でも、どこ行ったらいいか分かんなくて」

「……もしかして、そういう経験ないの？」

「全く」

京子が信じられない、といった顔で優を見る。

優は少しムツとして、枕に顔をうずめた。

「この歳でそういう経験ないのがそんなにおかしい？」

「いや……そういうんじゃない、ちょっと意外だっただけ」

京子が慌てたように取り繕う。

意外、とはどういう意味だろう、と優は考えた。自分はそんなに遊んでいるように見えるのだろうか。特にそういう自覚がなかった為、少しショックを受けた。

「……京子先生、デートとはどういうところに行くべきなんでしょ

うか」

「そんなに気負わなくて良いんじゃない。変に格好つけず、友達と行くようなところで行けばいいって。けど、食事の場所には気をつけなさいよ」

「普通のところかぁ。カラオケとか映画？」

「話題が続く自信がないなら、話題に富んだ場所を選ぶべし」
なるほど、と頷く。

しかし、京子は突然困ったような顔をした。

「あー。でも、相手って中二なんだっけ？ 年上に変な幻想抱いてたらしんどいかもね」

「幻想？」

「そ。中学の時って高校生が凄い大人に見えたりするじゃん。勝手に凄いお洒落な所に連れてって貰えるとか、そういう幻想持つてるタイプだしんどいから、一応その場合のルートも決めといた方が無難かも」

「そっか。年下の子と遊ぶのも慣れてないから不安だ……」

「ま、合わなければ無理に付き合う必要ないんじゃない。気負いすぎだって」

「それはそうだけど……。やっぱりこういうのは真剣に対応したいなあと思うわけです、はい」

優は上体を起こして、何となく枕を抱えた。

その時、カシヤリと変な音が響いた。一拍遅れてシャッター音だと気づく。いつの間にか京子が優に携帯を向けていた。

「ちょ、何撮ってんの!？」

「いや、何となく」

「普通、何となくで人の写真撮らないでしょ!？」

「いいじゃん。減るもんじゃないんだから」

気にするな、とばかりに片手をひらひらさせる京子を見て、優は呆れたようにため息をついた。

「……変なことに使わないならいいけど」

「なら多分大丈夫」

「多分って何！？ 本当に怖いんだけど！」

その後も、京子との談笑は続いた。明日のことで緊張している自分を気遣ってくれたのだろうか、と頬が緩む。笑い声は、夜深くなるまで響きつつけた。

長谷川京子は優の部屋から出ると、誰もいない廊下をゆっくりと歩き始めた。

携帯を取り出し、時間を確認する。少し長居し過ぎた、と京子は反省した。

そのまま携帯を操作し、フォトフォルダからさつき撮ったフォトデータを開く。液晶に、枕を抱く優の姿が映った。

「そういう経験がない、か……」

ポツリと言葉がもれた。

優は控えめに見ても、整った顔立ちをしている。まだまだ幼い面影が残っているものの、そうした要素も人によってはプラスになるはずだ。

性格も同年代の男と比べれば、落ち着きがあり、特に欠点も見当たらない。思春期特有の斜に構えた部分もなく、戦闘では何回も他の子を庇ったりと京子の基準ではむしろ性格はかなり良い方に属する。

そんな優に中学時代言い寄る人がいなかった、というのは京子にとって解せないことだった。

一瞬、自身の感覚がずれているのではないかと疑ったが、優が正式に入隊した日、特殊戦術中隊は優の話で持ちきりだった。抜け駆けした、と言われるのが嫌で殆どの人が優に話しかけるのを躊躇ったくらいだ。小隊長の華が話しかけたことで、暗黙の解禁といった流れになったが、そのことから優は一般的に見ても整った顔立ち

をしている、というのは間違いない。

家庭の問題だろうか。ふと、昨日のことを思い出し、そう思った。例えば親が殺人を犯したなら、その子どもと関わりを持つとする人間は激減する。

そこまで考えて、京子は思考を振り払った。

勝手に人の過去を詮索するのは最低の行為だ。特に、この特殊戦術中隊の中では。

しかし、と京子は思う。知りたいと思った。

再び、携帯の液晶に視線を落とす。

屈託のない優の笑顔が胸を痛めた。デート、か。京子には無理なことだった。既に、友達というポジションにおさまってしまった。変に大人ぶって、高い競争率を誇る争いには無関心でいようと傍観者の位置におさまってしまった。

傷つかないように立ち回ってきたつもりだったが、何かが間違っていたのかもしれない。

携帯を閉じ、深いため息を吐く。ため息は、静かな廊下へと溶け込んでいった。

2章 9話 望月麗(2)

雲一つない青空の下、桜井優は駅前の噴水で望月麗を待っていた。携帯を取り出し、時間を確認する。十時十分。待ち合わせ時間より二十分ほど早い。

優はぼんやりと人混みを眺めた。まだ朝なのに、人の行き来が激しい。それを見て、平和だな、と思う。現在進行形で未知の生命体から侵略を受けている国の雰囲気ではない。亡霊対策室がしっかりと機能しているという証拠だ。先の大戦のように、無差別な空爆や飢餓があるわけではないというのも大きいだろう。亡霊の影響で貿易ルートが限られ、一時期経済麻痺を起したことはあったが、人々の暮らしは徐々にそれに合うよう変化していった。生産をあげるという方法よりも和食回帰の流れが訪れ、結果的に食料自給率もあがったりもしている。最も、熱供給量で見た当時の摂取カロリー上位項目は畜産物や油脂類、小麦などだった為、日本の国土を考えれば食料自給率をあげるには、それらの消費を抑える文化に変容するか方法がなかったのだが。亡霊の物理的被害よりも、数年前の世界恐慌の尾ひれを引いた失業率の方がよっぽど現実的で深刻な問題なのかもしれない。

「ね、君ひとり？」

不意に、女性の三人組から声がかけられた。驚いて顔をあげる。

「え、あの」

「暇だったら私たちと遊ばない？ お姉さんたち奢っちゃうよ」

女子大学生だろうか。全員が髪を茶色に染め、露出の激しい服を着ていた。

優は困ったような笑みを浮かべ、三人の女性を見上げた。

「すみません。人を待ってるんです」

「友達待ち？ よかったら、その子も一緒に遊ぼうよ」

「あの、いえ、友達というか」

明るい声で笑う女性に、優がはつきりと断りをいれようとした時、よく通る少女の声が響いた。

「先輩！ お待たせしました！」

振りかえると、麗が小走りで手を小さく振りながらこちらに向かっているのが見えた。

「あ、既に予約済みかあ。ごめんね！」

麗を見て、女子大生たちが目の前で手を合わせて残念そうに謝る。優も反射的に頭を軽く下げると、彼女たちは何事もなかったかのようにならぬと去っていった。

「今の知り合いですか？」

「いや、知らない人、かな」

そう言っていると、麗が不思議そうな顔をした。話題を切り換えようと立ち上がる。

「じゃ、行こっか」

「はい」

優たちが初めに向かったのは映画館だった。いくつもの候補を考えたが、結局無難なプランに落ち着いていた。

休日である為、映画館は僅かに混んでいた。はぐれないよう、距離に気をつけながら上映中の映画と時刻を確認するため受付の前方に回る。

「何か見たいのある？」

「特に希望はないので先輩が選んでください」

「んー、嫌いなジャンルとか好きなジャンルはある？」

念のために好みを聞くと、麗は少し考える素振りを見せてから首を振った。

「割と何でも見れるタイプです」

「じゃあ、この『夢の跡で』とかはどう？」

優が指したのは、テレビで毎日のようにCMが流れている海外で有名な小説を映画化したものだった。

「良いですね。前から気になってましたが、まだ見たことないです」

「じゃ、これでいいっか」

受付に向かおうとした時、不意に麗が、あ、と声をあげた。

「ちよつと待つてください!」

「ん。何か見たいのあった?」

「はい! これが見たいです!」

麗が嬉々とした様子で指したポスターを見て、優は顔を引きつらせた。

「妖怪物語……?」

「はい!」

ポスターには顔を緑に染め、頭に安つばい皿をのせた河童らしきものが堂々と写っている。B級映画の匂いがぶんぶんして仕方がない。

「これがいいの?」

「はい!」

念の為にもう一度確認すると麗は迷わず首を縦に振った。

釈然としないまま優は受付で二人分の料金を払った。

「早く行きましょう!」

楽しみで仕方がない、といった風に麗が駆け足で先に向かう。優は少し啞然とした様子でそれを見送ってから跡を追った。

妖怪物語は優の予想以上に酷いものだった。

まずストーリーが良く分からない。河童を少年が助け、騒動に巻き込まれていく話のようだったが、オカマの吸血鬼と元気なゾンビが街中に溢れかえったと思った次の瞬間には江戸時代にタイムスリップしたりと予想できない展開というか、何か別々の映画をいくつも無理やり継ぎ足したといった感じの映画だった。

物語は既に終盤に差し掛かり、大画面の向こう側では少年が河童の皿を叩き割っている。優はそれを無表情で眺めた。

これ、ジャンルは何になるんだろう。皿の枚数を恨めしそうに数える河童を見て優はそう思った。コメディ調ではあるが。泣けない

中途半端なシリアスな場面が多く、時々SF的要素も乱入してくる。最早意味が分からない。

優はちらりと横の麗を見やった。麗は目を潤ませ、画面に見入っている。

画面に目を戻すと、いつの間にかスタッフロールが流れていた。一体いつ終わったのか皆目見当がつかない。もやもやとした気持ち湧きあがる。

「面白かったですね！」

小声で嬉しそうに話しかけてくる麗。優は曖昧に頷いた。

「いきますか？」

「だね」

優と麗は同時に立ち上がり、出口へと向かった。

良い時間だった為、そのまま近くのファーストフード店で昼食をとることにする。少し遅めであった為か、順番待ちすることなく席につくことができた。

「妖怪物語って元々ジュブナイル小説だったんですよ」

席につくなり、麗が嬉しそうに言った。

「へえ。聞いたことないけど、古いやつ？」

ハンバーガーを小さく齧りながら聞く。

「そうですね。十年前くらいかな。私をはじめて読んだ小説で、結構思い入れがあったんです。それから結構本を読むようになって…」

初めての小説があれだと本嫌いになりそうだと優は思ったが黙って頷いた。

「普段はどんなの読むの？」

「恋愛系とかファンタジーです」

妖怪物語を面白いと評価する一方、好みは意外と普通で拍子抜けだった。愛のようにマイナージャンルがくるかと身構えていたが、十四歳の少女なら当たり前かもしれない。

「先輩も本を結構読むんですか？」

「うん。僕もファンタジーが好きだよ。あと、ミステリーとかも」
「本当ですか！ 今度お部屋にうかがってでもいいですか？ どんな本を読んでいるのか見てみたいです」

「うん。何か読みたいのあったら貸すよ」
意外と話が弾む。共通の話題が見つからなければどうしようかと思っていたが、杞憂に終わったようだった。

「麗ちゃんはトルキンとか」
話を続けようと口を開いた時、優は違和感を感じて動きを止めた。
「先輩？」

麗が不思議そうな顔をする。
しかし、優は構わずガラス張りになった店の壁から表通りを見渡した。

どこか遠くのほうで巨大なESPエネルギーが膨らんでいる。しかし、その気配は五秒ほどで消えてしまった。

嫌な汗が背中を伝う。

優は端末に目をやった。出撃命令は来ていない。

「先輩、どうしたんですか？」

「え？ あ、ごめん。店員が知り合いに似てたから、びっくりして」
「後ろ姿とかだと、私もよく見間違えます。あれ、勘違いしたまま声かけちゃうと恥ずかしいんですね」

咄嗟についた嘘に、麗が経験談を話しながら楽しそうに笑う。

優は笑みを浮かべて頷きながら、気のせいだと自分に言い聞かせた。

登場人物まとめ2

桜井 優 主人公。特殊戦術中隊・第一小隊所属
柀 沙織 人類史上初のESP能力覚醒者・覚醒者発見後初の戦死者

上田 考義 陸上自衛軍・中将
神条 奈々 亡霊対策室司令
長井 加奈 亡霊対策室副司令
秋山 明日香 亡霊対策室・医務医
斎藤 準 亡霊対策室・情報部主任
田中 幸枝 亡霊対策室・情報部所属。準の婚約者

篠原 華 特殊戦術中隊・第一小隊・隊長
姫野 雪 特殊戦術中隊・第二小隊・隊長
佐藤 詩織 特殊戦術中隊・第三小隊・隊長
黒木 舞 特殊戦術中隊・第四小隊・隊長
進藤 咲 特殊戦術中隊・第五小隊・隊長
白崎 凜 特殊戦術中隊・第六小隊・隊長

長谷川 京子 特殊戦術中隊・第一小隊所属
宮城 愛 特殊戦術中隊・第一小隊所属
望月 麗 特殊戦術中隊・第一小隊所属

橋本 恵 フリーライター
広瀬 理沙 逃亡中のESP能力者

ようやく二章折り返し地点です。後半に入る前に再度登場人物をまとめておきました。年齢とか容姿も書いておこうかと思いまし

たが、無駄に長くなりそうなので断念。こいつ何だっけという時に
ご利用ください。

2章 10話 望月麗(3)

「これ、すつごく可愛くないですか？」

昼食を終え、二人は適当に大通りを散策していた。

アクセサリーの並んだウィンドウを見て、麗が歓声をあげる。

「ん、どれ？」

「あれです。翡翠色の細工が入った指輪」

照明に照らされて明るく輝く、しかしながらあまり主張しすぎない指輪を麗が指差す。

可愛い、というよりも綺麗だと優は思った。

値段は少し高めだが払えないこともない。しかし、知り合って間もない少女に指輪をプレゼントするのは憚れた。

優は慎重に言葉を選んで、麗の意見に同意した。

麗も買ってもらおうとまでは期待していなかったようで、同意を得られた事に満足して再び足を進めた。

「つ、次は向こうのお店見たいです！」

そう言って、麗は優の手をぎこちなく取って、駆け出した。

「わっ」

急に引っ張られ、驚きの声を出す。暖かい麗の手は不自然なほど固くなっていた。

絶対無理をしてるよなあ。

映画などはただ並んで見ているだけだった為に何も感じなかったが、買い物始めてから麗は明らかに不自然な言動を繰り返している。緊張している、というよりも、無理に親密になろうとしている印象を受ける。

違和感を覚えながらも、優はそのまま何も言わず、買い物に付き合った。

「先輩、少し休みませんか？」

太陽が傾き、街が鮮やかなオレンジ色に染まった頃、不意に麗が切り出した。

「だね。少し疲れたかも」

優はこの付近の地図を思い浮かべ、休める場所を探した。しかし、優が知る休憩ポイントはどれも少し歩かなければならない。

「……あ、あの。私良い休憩場所知ってるんですが、ついてきてもらっていいですか？」

どこで休もうかと少し悩んでいると麗が歯切れの悪い口調でおずおずと提案を出してきた。

特に良い案があった訳でもなかった為、軽く頷く。

「こつちです」

麗がぎこちない動きでまた優の手を握り、駅とは逆方向へ歩き出した。

何だかずっとリードされてるなあ、と苦笑する。しかし、優自身経験が豊富な訳ではない為、無理に見栄をはることなく後に続いた。

「この辺りはよく来るの？」

歩き慣れた様子 of 麗に、疑問を投げ掛ける。

「割りと」

「もしかして地元？」

「……いえ、私は名古屋出身です」

「じゃあ、入隊してから良く来てるのかな」

「ですね」

さっきまでとは違う、少し上の空のような麗の返答に優は首をかしげた。少し歩調をあげ、麗の顔を遠慮がちにのぞきこむ。夕陽に照らされた麗の幼い瞳は憂いを帯び、どこか大人びているように見えて、優は少しドキリとした。二つ年下とは思えないほどだった。

何となく声をかけるのが憚れて、黙りこむ。風に揺れる麗のツインテールをぼんやりと眺め、優は麗の歩調に合わせ歩き続けた。

遠くからサイレンの音が響く。赤く染まった景色と、使い古されたサイレンの音が妙にノスタルジックな気分を思い起こさせた。

昔、この音を聞いた事があった。古い記憶が蘇る。血のように真っ赤な夕陽が部屋に差しこみ、その中で女が泣いていた。響くサイレンの音。喧騒。それらが優の不安を強く煽った。女はそんな優の不安を和らげようとするように優しく抱いて、大丈夫だから、と何度も囁いてくれたものだ。しかし、優しく抱き締めてくれた母の細い腕も恐怖に震えていた事を優はすっかりと覚えている。後になつて思えば、あの『大丈夫』という言葉は優に向けられたものではなく、自身に言い聞かせる為のものだったのではないかと思う。だから、私は　　私？

鋭い痛みが頭を走った。私、とは誰だ。当時幼かった自分の一人称は私だったのだろうか。思いつけない。頭の中が混濁している。遠い過去の記憶は靄がかかったように不明瞭で曖昧に満ちたものだった。

不意に喧騒が耳に入り、思考が乱れる。それをきっかけに、優の意識は現実へと急浮上していった。視界をきらびやかなネオンの光が覆う。

そこは優の知らない場所だった。テレポーションをしたような不思議な感覚に一瞬だけ襲われる。一体どれくらい歩いたのだろうか。

小さく首を横に回すと、そこにはさつきと同じように麗の顔があった。しかし、憂いを帯びた雰囲気はなりを潜め、僅かに緊張した様子の顔をしている。そこで優は繋がれた麗の手が若干汗ばんでいることに気付いた。自分も少し汗をかいているかもしれない。そう思うと少し気恥ずかしくて、優は視線を麗から背けた。辺りには20前後のカップルが目立つ。そこで優は異変に気付いた。カップルが目立つというよりも、カップルしか見当たらない。優たちはいつの間にかホテル街に迷いこんでいた。その事に気付き、ギョツとする。

「先輩」

不意に麗が歩みを止めた。

繋がれた手が離れ、手から暖かみが消える。

麗はくるりと踊るように振り返り、大きく息を吸った。

「ここで休憩しませんか？」

はつきりと、麗はそう言った。

「ここ、って」

麗が立ち止まったのは、ラブホテルの前だった。つまり、そういう意味合いなのだろう。

「……あんまり説教みたいなのは言いたくないけど、僕たち知り合って間もないよね。もう少し自分を大事にしたほうが」

年上として、やんわりと断りをいれようとした時、麗が叫んだ。

「よく考えた上での判断です。遊びとかそんなんじゃありません！

私、本気です！」

夕陽が逆光になっていて、麗の表情はよく見えない。しかし、声は決心に満ちたもので、麗が真剣なのだとわかった。

「先輩、好きな人いるんですか？」

「……いや、いないよ」

「じゃあ」

麗が一步踏み出す。

「私を好きになってください」

更に麗が一步踏み出した。二人の距離がゼロになり、甘い香りが優を包み込む。

優は驚いて目を見開いた。唇に柔らかな感触が触れる。そして、夕陽のように赤く燃える麗の顔がそっと離れた。

「私じゃ、ダメですか？」

何故、こんな顔ができるんだろう。

数日前に麗から告白された時もそう思った。断った時、彼女は本当に悔しそうな顔をして

会って間もない人に対して、果たしてここまで一生懸命になれるものだろうか。少なくとも自分には無理だ、と思う。

「先輩」

麗の透き通った声が響いた。

茶色がかった大きな瞳が優を射ぬく。その瞳に吸い込まれるような錯覚に優は陥った。

ダメだ と思う。既に流されている。拒絶する力は優に残されていなかった。

「答えを、聞かせてください」

喉がカラカラだった。

鼓動が早い。

唾を飲み込む音が妙に大きく聞こえた。

反対に、周りの喧騒は聞こえなくなっていく。

優は答えを出す為、口を開き

その時、けたたましいアラートが優と麗の両方から響いた。甘い

秀困気が一瞬で吹き飛ぶ。

優と麗は反射的に音の発生源である端末を取り出した。

緊急出動命令。

脳裏に数時間前に感じたESPエネルギーの異常な膨張がよぎる。

優は麗を見た。麗が無言で頷く。二人は一斉に赤く染まった街を

駆け出した。

2章 11話 望月麗(4)

亡霊対策室は騒然としていた。関係各所からの連絡により多大な人員が割かれ、廊下を慌ただしく職員が走り回る。

それは司令室として例外ではなく、オペレーターたちは解析結果に悲鳴をあげ続けていた。

事の始まりは数時間前に遡る。一三三五、福岡県沿岸に位置する高梨市を中心とした半径一〇kmから膨大なESPエネルギーが探知された。白流島からやってきた訳でもなく、突如現れたこのESPエネルギーに亡霊対策室は当初パニック状態に陥った。しかし、その後の調べで、このESPエネルギーは一つの亡霊を指すのではなく、純粋なESPエネルギーそのものである事が判明し、ただちに福島県沿岸部の全域に避難警報を発令した。純粋なESPエネルギーとは、何の攻撃意思も持たない、単なるエネルギー体ということである。しかし、このエネルギー体が問題だった。過去に白流島がESPエネルギーに包まれてから中に入った者で生還者は存在せず、島民全員が行方不明者扱いとなっている。高梨市一帯を覆うESPエネルギーは白流島と同様に霧状のもので、一度中に入れば生きて戻れない危険性があった。こうして避難警報が発令し、自衛軍による厳戒な警戒体制が高梨市一帯に敷かれたのが一六三〇のことだった。

ここで神条奈々は一つの決断を迫られる。つまり、特殊戦術中隊を投入するか否か、である。この時、ESPエネルギーに包まれた高梨市一帯との通信手段は全て途絶え、市民の安否が不明な状況に陥っていた。霧に包まれた街から出てきた者も存在せず、中がどうなっているかも全くわからない。

そして、神条奈々は待機を命じた。情報が不足している以上、特殊戦術中隊を投入するにはリスクが高すぎる、と判断したのだ。戦略情報局の幹部もこれを支持し、亡霊対策室は実働部隊を送らずに

情報収集に専念することとなった。

高梨市一帯に広がるESPエネルギーは白流島とほぼ同一規模のもので、第二の白流島、すなわち亡霊の活動拠点になる恐れがあった。しかも、白流島とは異なり本土に位置する為、亡霊が現れる度に大規模な被害を受ける危険性もある。それを考えて奈々は戦慄した。

侵略。

その二文字が頭の中をぐるぐると回る。

特殊戦術中隊の設立後、亡霊の上陸を九割以上阻止していた為、社会的には未知の生命体による侵略という概念が薄れ始めていた。しかし、前線基地が本土に造られたとなると侵略という意味合いが急激に現実味を帯びてくる。

この事態が引き起こす経済的損失がどれほどのものになるか想像もつかない。数年前の世界恐慌により全国の米軍基地が縮小を開始して以来、それを補う為に日本の防衛関係費は膨らみ続けている。亡霊の出現によりそれは更に肥大化し、財政を圧迫する要因となっていた。つまり、これ以上、防衛関係費の上限を引き上げる事は現実的ではない。明確な打開策を打ち出す事は難しく、逆に貿易ルートは限定されて、多くの企業が国外へ撤退を開始するだろう。国内経済への不安と、亡霊への社会不安は更に上昇し、それは

奈々はそこで溢れる思考の波を塞ぎ止めた。

自分の仕事は戦うことだ。亡霊の多方面的な影響など経済学者が考えればいい。そう思い、無理矢理嫌な想像を振り払う。全ては既
に手遅れなのだ。

一七四〇、沈黙が破られた。

高梨市一帯のエネルギー体とは独立した一つの巨大なエネルギー体、すなわち亡霊が現れ、遂に神奈奈々は特殊戦術中隊の投入を決定した。

出撃ゲージの中、桜井優は識別ライトの点検を行いながら、チラリと同じ第一小隊の望月麗に目をやった。麗は黙々と武装の点検を行っている。

端末が鳴らなければ、あの雰囲気は流されていた。

しかし、少し冷静になれば、やはりおかしいと思う。会って間もない人に対してあれほど積極的になれるものだろうか。何か、良からぬものを感じる。

「桜井、手止まってるよ」

「ん、少しばーっとしてた」

突然、京子に声をかけられ、慌てて作業を開始する。

「すっかりしなよ。今回、マジでやばそうや奴だし……」

不安そうな京子を見て、優は少し考えてから何となく京子の頭を優しく撫でた。

「なっ……!？」

一瞬気持ちよさそうに目を細めてから京子が飛び退く。その大袈裟な動きに優はクスクスと笑った。

「何かあっても僕が守るから安心しなさい」

「……桜井、前々から気付いたけど重度の天然だよね……」

茶化して言う優に、京子は赤くなった顔を背けた。それを見て、更に優がクスクスと笑う。

「みんな、装備の点検終わったー？ 異常箇所があればすぐに言うてね」

華の叫び声が前方から響いた。普段はほんわりとした華だが、こういう時は小隊長として頼もしい姿を見せる。

今回出撃するのは第一から第六小隊の第一分隊、総勢四八名である。各小隊の第一分隊には近接戦闘が可能な、ESPエネルギーに恵まれた少女たちが集められている。今回、戦力として安定しない少女たちは作戦に組み込まれていなかった。

「優」

「ん」

装備の点検を終えたらしい愛が声をかけてきた。

「……私にはやらないの？」

「何を？」

首をかしげると、愛が何も無い空間を撫でる仕草をした。どうやら、優がふざけて京子にやったのを見ていたらしい。

改めてやれ、と言われると気恥ずかしいものがあるが、愛の期待するような眼差しに根負けした。

くしゃくしゃとやや乱暴に愛の頭を撫でる。愛は小動物のように頬を緩め、気持ちよさそうにした。

「こら！　そこ、何やってるの！」

少し離れたところから華が叫ぶのが聞こえた。面倒だ、と気付かない振りをする。

「準備は整った？」

通信機から奈々の言葉が届く。華、雪、詩織、舞、咲、凜が順番に肯定の返事を出した。

それを合図に出撃ハッチが物々しい音をたてて上下に響く。騒がしかった出撃ゲージが静かになり、機械翼が一斉に展開されていく。

「第一小隊出撃」

奈々の命令とともに、優たち第一小隊・第一分隊計八名は大きく床を蹴った。

2章 12話 望月麗(5)

福岡県高梨市に隣接する貝菜市上空にきた時、優は息をのんだ。

眼下を自然のものとは到底思えないグロテスクな紫色の霧が覆い尽くしている。そして、上空にポツンと佇む異様な影。人型をしているが、顔と手だけが妙に大きい。

「なんですか、あれ？」

誰かの呟きをマイクが拾う。全員がその異様な姿に圧倒されていた。

「……ペンフィールドのホムンクルスね」

「ペンフィールド……？」

奈々の言葉に、華が聞き返す。

「ええ。脳機能局在論という、人の脳は部分ごとに違う機能を持っているという学説があるの。例えば、ここからここまでは手の領域とかみたいにね。そして、その領域の大きさは担当する体の領域から来る体性感覚の入力量や重要度のそれに比例する。ペンフィールドのホムンクルスはそれを三次元的に表現した学術的な人形で、あの亡霊はそれに酷似している」

優はそれを聞いて、もう一度異形の亡霊を観察した。口の部分が大きく飛び出し、逆に頭頂部の付近は小さくなっている。腕や胴体は今にも折れそうなくらい細く、栄養失調の子供のようだ。しかし、手はそれには釣り合わないほど大きく、その巨大な頭さえも驚掴みできるほどだった。

奈々の言葉を信じれば、人の口の部分と手の部分は入力量、そして重要度が大きいということだろうか。そして、胴体部などは入力量が小さい。自分の体を考えれば、確かにそんな感じがする。

「何だか、気持ち悪いですね」

詩織が口元を抑えているのが見えた。優自身もこの亡霊に対して、強い生理的嫌悪を感じていた。この気持ち悪さは一体何だろう。

「これより、目標をホムンクルスと呼称。咲の狙撃を合図に突撃を開始」

咲が姿勢制御に移り、スコープを覗いた。咲の身体はまるで空間に固定されたように、ピクリとも動かない。それを見て、内心舌を巻く。ESPエネルギーのコントロール力で咲の右に出る者はいない。優は瞬間的な出力量には自信があつたが、繊細なコントロールには自信がなかった。

『いきます』

咲の小さな報告と同時に、銃声が轟いた。ホムンクルスが僅かに揺らめく。

『胴体部に命中』

それに合わせて、四十八名全員が加速した。ホムンクルスとの距離が一瞬で詰まる。

集団の先頭を飛ぶ華が右手を頭上で大きく回した。それを合図に大気が爆発したかのような轟音が響き、ESPエネルギーの嵐がホムンクルス目指して降り注ぐ。

ホムンクルスの体がESPエネルギーの津波に翻弄されて、きりもみするのが見えた。照準をずらし、更なる追撃をはかる。その時、ホムンクルスの巨大な口の端が吊りあがった。笑っているように見えて、背筋に得体の知れない悪寒が走る。

「攻撃中止！ 後退し」

奈々の叫ぶ声が通信機ごしに聞こえたと同時に、ホムンクルスが物理法則を無視したかのような挙動で上昇を開始した。突然のことに、数人の後退が遅れる。隊列が乱れ、優たちは無秩序に散り散りになった。

ホムンクルスの巨大な口が人を丸のみできるほど大きく開く。その奥に広がる漆黒の闇を見て、優は本能的な恐怖を感じた。

ホムンクルスの口腔の先に広がる漆黒の闇から、紫色の何かが飛び出す。

『後退を！』

奈々の鋭い声。

ホムンクルスの口から突如放たれたのは白流島や高梨市一帯に広がる純粹なESPエネルギーと同様の霧状のものだった。優は咄嗟に高度をあげて回避に成功したものの、恐るべき速度で放たれたエネルギー体は、逃げ遅れた隊員たちを呑みこむように大気中へ広がっていく。

「ッ！」

優は回避を中止して、逃げ遅れた隊員に向かって降下を開始した。通信機の向こうで誰かがそれを咎めるのが聞こえる。しかし、優は止まらなかった。耳元で風が唸る。

優はエネルギー体から必死に逃げようとする一人の少女の腕を通りすがりざまに強引に抱いた。そのまま速度を緩めず、奥にいた二人目の逃げ遅れた少女の体を抱く。

ESPは攻撃手段以外にも情報体としての特性を持ちます。

脳裏に雪の言葉が浮かぶ。優はありつたけのESPエネルギーを胸に抱いた二人の少女にぶつけ、上空に打ち上げた。二人の悲鳴が響いたが、それを無視して、更に降下する。

既にエネルギー体が目の前まで迫っていた。逃げ遅れた数は後、五人。

間に合わない。

そう悟っても、優は速度を緩めようとはしなかった。

「桜井！」

不意に上空から京子の声が響いた。しかし、それさえも無視して急降下を続ける。

優は三人目に向かって、力一杯腕を伸ばした。かろうじて腕を掴むことに成功し、先程までの二人と同様に、赤く染まった空へ打ち上げる。

しかし、そこまでだった。既に数人がエネルギー体に呑まれてはじめている。だが、それでも優は迷わず、エネルギー体に入りを開始した。

視界が紫一色に染まる。途端、機械翼が不気味な音を立てて振動し始めた。周囲を満たす霧状のエネルギー体には何らかの妨害効果があるのだろうか。機械翼へのESPエネルギー供給が急速に滞り始める。

紫に染まる視界の一角で何かがきらめいた。識別ライトの明かりだとすぐに理解し、そちらに向けて速度をあげる。機械翼が悲鳴をあげるように軋みが、優はそれを無視した。

識別ライトの持ち主 望月麗の姿が霧の間に隠れて垣間見えた。

「麗ちゃん！」

腕を伸ばす。

「先輩！」

優の存在に気付いた麗が驚いたような顔をして、優に向かって手を向けた。

二人の手が絡まり合い、離れないよう力強く握る。

呑みこまれた数は後三人。麗を霧から打ち上げ、次の救出に向かおうとした時、機械翼が遂に機能を停止させた。

「やば」

咄嗟にESPエネルギーで光翼を作り出す。しかし、機械翼と同様に揚力が得られない。周囲のエネルギー体の干渉を受けているらしかつた。

「先輩！ 下！」

麗の声にハツとする。既に陸地が目の前まで迫っていた。

咄嗟にESPエネルギーを練り、下方に放つ。

直後、凄まじい落下音が誰もいない霧の中に木霊した。

逃げ遅れた隊員を助けようと霧の中に突入した優の姿を見て、奈々は小さく舌打ちした。直後、優を追うように京子が同じくエネルギー体目指して急降下していく。

反射的に確認した識別レーダーからは七人の反応が消えていた。エネルギー体の干渉によって探知が届かないのか、それとも「敵、高度上昇。接近」

解析オペレーターの切羽詰まった言葉に、奈々は再び中継映像に視線を戻した。ホムンクルスが後退し終えた少女たちに肉薄している。そして、再びその大きな口を開き

「高度を落として！ 撤退！ 戦闘区域から離れなさい！」

数人の姿が、ホムンクルスの撒き散らす霧の中に消える。それを助けようとした数人が更に巻き込まれるのが中継映像に映った。識別レーダーから次々と反応がロストしていく。

無事に距離をとることに成功した二〇人ほどが高度を下げて撤退を開始するが、不意に眼下に広がるエネルギー体が腕のように鞭打ち、先行していた第六小隊長の凜の足を絡め取った。第六小隊のメンバーがそれを助けようとして、更に別のエネルギー体に捕捉される。次に第四小隊長の舞に向かって新たなエネルギーが伸び始めた。隊長格だけを狙っている？

それに気付いた時には、七割以上の反応が識別レーダーからロストしていた。

もはや隊列など存在せず、散発的な反撃が繰り返され、各個撃破される最悪の状態となっていた。中継映像には、次々と霧の中に消えていく少女たちの姿が映し出される。解析オペレーターが最適な撤退ルートを指示するが、ホムンクルスの物理法則を無視したようなトリッキーな動きがそれを完膚なきまでに防いでいく。

「……オールロスト」

無情な報告が司令部に響く。勝敗はあつという間に決した。

日が落ちた空に少女の影は一つもなく、異形の亡霊が戦闘前と同じくぼつりと佇んでいるだけ。

奈々は呆然として、隣有加奈を見た。視線に気づいた加奈が、震える声で言う。

「…他の部隊を、第二分隊以降を投入しますか？」

奈々はゆっくりと首を横に振った。

2章 13話 白崎凜(2)

第六小隊長、白崎凜が目を覚まして初めに感じたのは、頬に当たる冷たいアスファルトの感触だった。気を失っていたことに気付いて、反射的に立ち上がる。強い目眩を感じたが、凜はそれを無視した。

辺り一面が紫色の霧に覆われ、見通しが悪い。僅か十メートル先さえも霞んで何も見えず、漠然とした閉塞感に襲われる。四方に民家らしき影が見えるが、動くものは何も見当たらない。

「第六小隊長、白崎。ロスト・ポジション。第六小隊長、白崎。ロスト・ポジション」

通信機に向かって呟く。しかし、反応はない。

孤立したことを理解した凜は、小銃を構えて周囲を警戒しながら、機械翼にESPエネルギーを送った。しかし、何かに阻害されているかのように、機械翼は沈黙を続ける。

凜は何度も周囲を見渡し、小銃を強く握りしめた。

自然と息が荒くなる。

まんまと誘いこまれてしまった。

そもそも、凜達が到着するまでホームクルスが高梨市の上空で待機していた時点で気付くべきだったのだ。今思えば、あれはどう考えても罠ではないか。無能な司令官め、と内心毒づく。

凜は小銃を構え、慎重に移動を開始した。視界不良な上に四方が開けているのはまずい。こんな視界の中では、簡単に不意打ちを受けてしまう。まずは死角を制限しなければならぬ。

凜は近くにあった民家の窓を銃床で叩き割り、強引に身を滑り込ませた。他人の家特有の生活臭が鼻をつく。どうやら、そこはリビングのようだった。小銃を油断なく構え、隅の方に移動する。人の気配はない。凜は壁に背を預けて、その場に座り込んだ。

深呼吸して息を落ち着かせる。考える、と凜は自分に言い聞かせ

た。

何故、ホムンクルスは殺傷能力のない攻撃手段をとった？

このエネルギー体の中に落とす為だ。戦闘区域がこの上空になったのはホムンクルスの不自然な待機が原因だったことから、それは間違いない。

何故、亡霊は私たちをこのエネルギー体の中に落としたり？

それが亡霊の戦術目的、または戦略目的を満たすもの、あるいは満たす為に必要な事だったからだ。少なくとも、亡霊の戦術目的は無闇な殺傷ではない。

では、その戦術目的、または戦略目的とは何だ？

わからない。エネルギー体に落とす必要があったということ、エネルギー体自体に何らかの仕掛けが施されている？ いや、エネルギー体の持つ霧の形自体が仕掛けという可能性もある。例えば、そう、この霧は天然の牢獄になっている。機械翼による脱出が叶わない。なら、分断、あるいは拘束自体が亡霊の戦術目的とも考えられる。

ならば、私はどうすべきだ？

亡霊の戦術目的の妨害、すなわち亡霊の目的である『エネルギー体による拘束』を破るべきだ。亡霊の戦略目的が不明な以上、亡霊の戦術目的を不用意に達成させることは危険だ。

どうやって脱出する？

機械翼による飛行が困難な以上、徒歩によるエネルギー体の突破、もしくは救出を待つ、の二択しか存在しない。しかし、外部からの救出は現実的に考えて望みが薄い。よって、自力での突破を選択する。

そこで凜は思考をとめた。様々な疑問が次から次へと溢れ出す、意図的に無視する。

凜はじつと手元の小銃を眺めた。それから小銃を構え、リビンググの上に置いてあった透明なコップに照準を合わせた。

銃声が響き、コップが吹き飛ぶ。機械翼のように動作不良を起こ

す事も考えていたが、どうやら杞憂のようだった。これなら戦闘になっても多少は大丈夫だろう。

白崎凜は突破を目指して動き始めた。

2章 14話 進藤咲

第五小隊長、進藤咲は周囲に満ちた霧をじっと見つめた後、自分の置かれた状況を正しく理解し、幼さの残る顔を恐怖に歪めた。辺り一面は自分の忌み嫌うESPエネルギーで満たされ、囲まれている。悪魔の巣窟となった高梨市に落ちてしまった事に、咲はただ震えることしかできなかった。頼りなく小銃を構え、呆然と佇む。

私が一体何をした？

咲はそう叫びたくなるのをかろうじて抑え込んだ。この世界はあまりにも残酷な悪意に満ちている。なぜ、皆私を放っておいてくれないのだろう。なぜ、皆私を放っておくのだろう。

思考の波が怒涛の勢いで咲の理性を流し始める。

その時、遙か遠くから銃声の音がした。ビクンと肩を小さく震わせる。誰かが戦っている、つまり、この中に亡霊がいるということだ。途方もない無力感と恐怖感に襲われ。涙が溢れだす。咲はその場に膝をつき、すすり泣いた。

「全師様、私をどうかお助け下さい」

咲は胸の前で手を組み、何年も前に捨てた信仰対象に小さく祈りを捧げた。そして、すぐ自己嫌悪に苛まれる。忌み嫌っていた筈のものに、都合良く縋りついている自分が情けなかった。そう思う一方で、この状況は信仰を捨てた自分への罰なのではないか、と疑う自分もいる。

悶々と考えるうちに段々と馬鹿馬鹿しくなってきた。咲は小さく掠れた声で笑った。あれほど深い信仰心を持っていた母は最後まで救われなかった。全師などいない。あるのは、ただどこまでも欲深い人間の心だけだ。

咲はゆっくりと立ち上がって、フラフラと霧の中を彷徨い始めた。

第四小隊長、黒木舞は周囲に満ちる霧をじっと眺めた後、自らの足を入念に調べた。上手く着地する事が出来たらしく、特に外傷は見当たらない。神経の昂りで痛覚が麻痺しているという事態もなさそうだった。

ふと上空を見上げ、溜め息をつく。通信機と機械翼が正常に動作しない。着地の衝撃で破損した可能性が高かった。

反射的に腰からコンバットナイフを取り出し、ESPエネルギーを注ぎ込む。こども視界が悪い状況では、小銃よりも扱いなれた近接武器の方が都合が良い。

神経を張り詰めらせ、五感全てを研ぎ澄ませる。
静かだった。

高梨市の住民は一体どうなってしまったのだろう。

この様子だと既に死んでるんだろうなあ、と溜め息を吐く。

元々、高梨市の住民の救出は舞の仕事ではない。ボクには関係ない事、とすぐに頭を切り替える。赤の他人を心配している余裕などないのだ。舞はどこか冷めた目で辺りの霧を眺めた。

とりあえずは、部下を探さないといけない。自分が無事でいるうちには、彼女たちも生きているだろう。

そう考えて、舞はゆっくりと得体のしれない霧の中を進んだ。どうやら舞が落ちたのは古びた工場の敷地内のように、周りにはいくつかの大型車が停車していた。その周囲には木材のようなものが積まれている。舞は工場らしき建造物に慎重に近づいた。巨大な口のように入り口が開かれ、中から微かな機械の駆動音が聞こえる。中に足を進めると、フォークリフトがまず目に止まった。フォークに荷物が乗ったままになっている。人の気配はどこにも感じられなかった。

「誰か、いる？」

小さく呼びかけてみるも、返事はない。舞は意を決してその奥に足を進めた。

中は薄暗く、高い天井に備え付けられた蛍光灯は不安定に明滅している。そして床に積み上げられた荷物のせいで、中は迷路のように入り組んでいた。工場というよりは、倉庫のようにも見える。一体何の工場だろう、と舞は首を捻った。

数十秒ほど歩いたところで、階段が見えてきた。あまり広い工場ではないらしい。

ゆっくりと階段を昇ると、静かな工場内に高い足音が響いた。嫌な音だった。

二階に上がると、ちょっとしたベルトコンベアが壁際に走っているのが見えた。ベルトコンベアの横にコンソールが設置され、暗い液晶画面には細かい英文字が浮かんでいた。舞がその横を通り過ぎた時、近くから鈍い回転音のようなものが響いた。舞はビクリと身体を震わせて、素早く音源の方を振り返った。ベルトコンベアがさつきとは逆の方向に回りはじめている。どうやら、何かのきっかけで逆方向に動き始めたらしい。

「ビクリした……」

心臓が早鐘を打つ。舞は軽く胸を押さえ、気味悪そうにベルトコンベアを見つめた。それから、元来た階段に戻る。これ以上この工場を探索しても得るものがないだろう。そう考えて、舞は階段を下り始めた。

かん、かん、と高い足音を響かせ、一階に戻る。その時、霧の向こうから足音が聞こえ、舞は足を止めた。足音は止まない。舞は息を呑み、足音を殺して近くの資材に身を寄せた。そして、コンバットナイフを握り直す。舞は小さな呼吸を何度も繰り返しながら思考を巡らせた。相手が中隊員であった場合、いきなり飛び出せば間違っただけで撃たれてしまうかもしれない。舞はナイフを強く握って、口を開いた。

「誰？」

足音が止まる。舞はゆっくりと資材から顔を覗かせた。通路の先で、こちらに小銃を向ける第五小隊長、進藤咲と目が合う。咲は一

瞬怯えたように瞳を揺らした。

「いやあ、人間で良かった良かった。しかも、小隊長！ これでボクらは怖いもん無しだね！」

舞は満面の笑みを浮かべて、資材の影から通路に足を進めた。対して咲は何も言わず、小銃を舞に向けたまま動かない。舞は僅かに笑みを硬くして、飄々と言葉を続けた。

「銃、下ろして欲しいな。何を警戒してるか知らないけど、ボクは亡霊じゃないよ」

そう言つて、ナイフを仕舞いこむ。咲は何かを探るように舞を見つめた後、小銃を下ろした。舞は小さく息を吐いて、咲に向かって足を進めた。

「それ以上、近づかないで」

咲が怯えたように言う。舞は怪訝な顔をして、足を止めた。

同じ小隊長でも、舞はこの第五小隊長である少女と話した事がありなかった。基本的に舞は人見知りせず誰とも話せる性格だったが、咲の方はいつも一人で行動しているようなタイプだった。特殊戦術中隊では、そうやって一人でいる事を好む者も多い。だから舞は今まで咲と積極的に関わろうとはしてこなかった。

舞は道化じみた笑みを浮かべ、何度も頷いた。

「オツケー、オツケー。まあ、非常事態の中で交友のない人と一緒にいるのは怖いかもね。うんうん、ボクにもわかるよ」

「……生存者は黒木さんだけですか？」

咲が震えた声で問う。舞は曖昧な笑みを浮かべた。

「どうかな。他には会ってないよ。多分、生きてるとは思うけど。ただ、元からこの街に住んでた人達はちょっと無理かもね」

咲は同意するように小さく頷いて、チラリと工場の入り口の方に視線を向けた。

「ここから出る方法は、何か考えてますか？」

「うーん、難しいね。方針としては、適当に歩き回ろうと思ってただけ」

舞の返事を最後に、小さな沈黙が落ちる。

やりづらいなあ、と思いつながら舞は言葉を無理矢理続けた。

「まあ、進藤さんと合流できて良かったよ。進藤さんは、これからどうしたい？」

「私は、ここに残ります」

咲が即答する。舞はその答えを聞いて小さく苦笑した。

「でも、いつ救助が来るか分からないよ」

「外を歩き回っても、霧から出られる保障はないです」

「そりゃそうだけど。でも、この霧ってちょっとヤバい感じしない？」

「外よりは霧が薄いです」

何を言っても無駄だと分かって、舞は呆れたようにゆっくりと息を吐いた、

「そういう戦略もありかもね。でも、ボクはここで待つ気はないよ」

「じゃあ、別れましょう。無理に一緒にいる必要はないです」

咲は躊躇わず、そう言った。舞は困ったように笑って首を傾げた。

咲は一人でいるのが好きというよりは、単純に人間嫌いなのかも知れない。あるいは、人間不信か。

「分かった。ボクは外の様子を見てくるよ。出られたら、準備を整えてもう一度再突入するから、ここで待ってて」

「感謝します」

機械的に小さく頭を下げる咲をチラリと見てから、舞は入口に向かって歩き始めた。咲の横を通り過ぎる際、咲の身体が小さく震える。重傷だな、と舞は心の中で呆れた。

工場の入り口から外に出ると、深い霧が再び舞の身体を包み込んだ。舞はコンバットナイフを手にして一度工場を見つめてから、霧の中に足を進めた。

そして、ふと思う。彼女は、第五小隊長、進藤咲は亡霊を恐れていたのではなく、霧の中で遭遇するかもしれない中隊員を恐れていたのかもしれない、と。

第三小隊長、佐藤詩織は深い霧の中を慎重に進みながら、一人の少年のことを考えていた。

桜井優。一つ年上の最強のESP能力者。迷う素振りさえ見せず、逃げ遅れた仲間の為に単身でエネルギー体に突入した無謀な少年は果たして無事だろうか。簡単にやられるとは考えられないが、この特殊な状況下では何が起こるかわからない。

それに、と詩織は過去のことを思い出した。桜井優が現れてから亡霊の動きが活発になっていく。優の初陣後、数時間とおかず亡霊群が現れて優一人を狙ったことや、前例のない特殊な戦闘方法を用いたイーグルの出現。そんな事が重なっていれば、今回のこの霧も優一人を狙うために作られたものではないか、と思ってしまう。この霧の中で優を分断してしまえば、他の者にはどうすることもできない。今回も亡霊が優を狙っている可能性が高い、と判断する。早く見つけなければ優が危ない、と詩織は足を速めた。

部下や他の小隊長のことも気がかりではあったが、自身の環境を考えれば問題ないと考えられる。孤立しているにも関わらず、自分が襲われていない間は、少なくとも他の心配をする必要はない。亡霊の目的は優に絞られている、と詩織は解釈した。

額を伝う汗を拭い、詩織は粗雑なアスファルトの上を進んだ。どうやら国道から離れた路地のようで、辺りには小さなマンションや古い一戸建てしか見えない。詩織の足音が霧の中に木霊する。

詩織は時々背後を振り返って、自らの安全を確認した。今までの戦闘では経験した事のない圧倒的な孤独感に不安感だけが増幅されていく。大声で生存者がいないか呼びかけたくなるも、亡霊を引き寄せる危険を侵す訳にもいかず、無理矢理衝動を抑え込む。

脳裏に、数十日前の映像が蘇る。イーグルとの闘いで自らを守るために現れた少年の後ろ姿。まるでフィクション上の救世主のよう

だった。

詩織はあの時に感じた温もりを思い出して、自らを鼓舞しながら細い路地を歩き続けた。

暫くと路地を進むと、何やら騒がしい音が前方から届いた。詩織は足を止め、耳を澄ませた。話し声でもなく、足音でもない。この音はなんだろう、と詩織は緊張した面持ちで慎重にゆっくりと前に進んだ。

足を進める度に、騒音が大きくなる。その度に、詩織の顔に落胆の色が広がっていった。

騒音の元は、パチンコ店だった。霧の中から現れた店舗を見て、詩織は何とも言えない顔をした。パチンコ店の前には自転車が並んでいるが、中に人影は見当たらなかった。詩織はそれだけを確認して、そそくさとその場から離れた。

十字路に差し掛かると、左手側に大通りが見えた。普段とは違って一台も自が通らず、騒音もしない為に、酷く不気味に思える。咲は大通りとは反対の方に足を進めた。

辺りには少し古そうな家が並んでいる。少し歩いたところで、霧の中に人影が見えた。思わず、足を止める。人影は詩織の存在に気づいていないらしく、ゆっくりと霧の中に消えていく。詩織は思わず叫んだ。

「あの一！」

人影が止まる。詩織は小走りでその影に向かった。

「しおりん？」

そこにいたのは、第四小隊長の黒木舞だった。詩織は安堵の笑みを浮かべ、舞に抱きついた。

「黒木さん！」

「おおっと、しおりん。ダメだよ、それは。吊り橋効果って言う幻想だから、一時の気の迷いで道を踏み外したら駄目だよ！」

茶化すように舞が言う。詩織はクスリと笑って、舞から離れた。

「歩き回っても誰とも会えなくて、少し不安になってきたところだ

「ったんです」

「そう考えると、ボクは運が良かったかも。二人の小隊長と連続で会うなんて思ってたよ」

舞がニコニコと笑いながら答える。詩織は舞の顔を思わずまじまじと眺めた。

「私以外の小隊長さん、いたんですか？」

「うん。第五小隊長の、ほら、進藤さん。向こう側の工場で会ったんだけど、意見の相違で別行動する事になって」

さらりと言う舞に、詩織は驚きの声をあげた。

「ええっ！ 何で一緒に行動しなかったんですか！」

「いや、うーん、進藤さんは救助を待つ気満々みたいで。ボクは一応神条司令から預かっている部下を探そうかなって」

「それは……仕方、ないですね」

詩織は何か言おうとした後に口を閉ざし、肩を落とした。

「進藤さんは一人でも大丈夫だと思っよ。それなりに戦闘経験あるし。ボクたちは早く皆と合流する事を目指そう」

「はい」

詩織が素直に答えた時、視界の上を何かを通りすぎた。反射的に上空を見上げると、霧の満ちた空に黒い影が走っていた。

舞も詩織に釣られるように空を見上げ、顔を硬くした。

「亡霊」

第二小隊長、姫野雪は静かに立ちこめる霧を眺めた。面白くない、と赤い瞳を不機嫌そうに細める。

何の変哲もないESPエネルギーで満たされたこの空間は、監獄の役割を果たしている。雪の力では、この場から脱出することは困難だった。

溜め息をついて空を仰ぐ。色の抜けた白い髪がふわりと舞いあが

った。太陽光が霧によって遮られているのが唯一の救いだろう。紫外線をカットする塗り薬を雪は常備していない。どれくらいここに滞在することになるか分からないが、これで紫外線を気にする必要はなくなった。

さて、と思う。行動指針を決めなければならない。なぜ、亡霊たちはこの霧を作り出したのか、まずはそこからだ。恐らくこれは桜井優の分断を狙った攻撃だ。既にこちらは敵の術中にある。では、桜井優を分断して何をするというのだろうか。雪はそれをはかりかねていた。もしかしたら亡霊は雪の出方を待っているのかもしれない。この状況を利用して桜井優に接触しろ、ということだろうか。亡霊の戦略目的を考えれば、それはありうる話だ。

雪は少し考えてから、その場に座り込んだ。戦闘服が汚れるが気にしない。赤い瞳が霧を切り裂くように鋭く見開かれ、何も無い虚空を見つめた。

雪が選択したのは、傍観だった。

第一小隊長、篠原華は着地に失敗して、左足を負傷していた。

骨にヒビが入っているかもしれない。しかし、その場に滞在し続ける訳にはいかなかった。既に第一小隊長からは優、京子の二人が落ちている。第六、第四小隊長が先に壊滅したことも考えれば、他のメンバーも華の後にエネルギー体に取り込まれた可能性が高い。下手をすれば、出撃した特殊戦術中隊の全員が落とされている可能性があるのだ。第一小隊長として、華にはそれをまとめあげる責務がある。

「桜井君……」

無意識に、想い人の名前がもれる。

優が自分の身を顧ず、エネルギー体に突入した時、華は第一小隊長としてその場を動けなかった。しかし、京子は躊躇なくその後

続いていった。

京子も桜井君のことが好きなのかな。

いや、京子だけではない。恐らくは、愛も。それどころか、大半の人が優に少なからず好意を抱いているように思えた。しかし、それも仕方がない。特殊戦術中隊には同年代の男が他にいないのだ。それも、一般的な基準を大きく上回る容姿と、性格ならば競争率が跳ね上がるのは当たり前だった。そう思うと、落ち着かない気持ちになる。これからは、望月麗のようにはっきりと好意を示す人も増えていくだろう。

華は自身の華奢な体を抱いた。今は、そんなことを考えている場合ではない。何もしなければ第一小隊全体の生存率がさがっていく。行動しなければならぬ。それが小隊長の義務だ。

華は左足をひきずりながら、当てもなく霧の中を彷徨った。

2章 15話 望月麗（6）

「先輩！ 先輩！」

麗の鋭い声に、意識が覚醒する。

桜井優は自身が地面に横たわっていることに気づいて、慌てて立ち上がり、辺りを見渡した。

辺り一面は紫一色で、僅かに足元のアスファルトが霞んで見えるだけ。視界が悪すぎる。こんな所で亡霊と遭遇したらどうしようもない。

「先輩。通信と機械翼が……」

横から麗の不安そうな声。優はチラリと麗に目を向けて、そのままマイクに向かって小さく呟いた。

「第一小隊・第一分隊、桜井優。望月麗。二名、墜落。外傷は見当たらず。機動ヘリによる支援を求めます」

そのまま返答を待つも、通信機は沈黙し続ける。

麗の瞳が不安そうに揺らめいた。

「司令部の支援を求めます。聞こえていますか？ 応答、お願いします。機動ヘリによる支援を求めます」

優はマイクから口を離して、ゆっくりと周囲を見渡した。一面を霧が支配し、何も見えない。それに、妙に静かだった。人の気配を全く感じない。元からいたはずの住民がどうなったのか、優は何となく理解した。

全身から嫌な汗が噴き出すのを感じた。

街が死んだ理由は何だろう。亡霊による物理的な壊滅？ 違う。

戦闘の形跡が全く見当たらない。ならば この霧？ これ自体が攻撃手段というのはありえそうな話だ。しかし、それが分かっても対処のしようがない。脱出したいのは山々だが、機械翼も光翼もエネルギー体の妨害を受けて、飛行による脱出は困難だった。この霧がESP能力者には無害であることを祈るしかない。

「先輩、どうしますか？」

麗が緊張した声で指示を乞う。

「……移動しよう。日が完全に落ちたら状況が悪化するかもしれない」

「はい」

優は二つ年下の少女の不安を拭う為に、とりあえずの移動を提案した。それは反射的に出た言葉だったが、口にしてから考えると割と理に適っているように思えた。

小銃を構え、ゆっくりと霧の中を進む。アスファルトを踏む自分たちの足音が妙に大きく聞こえた。

「とりあえず、この道を進もう。何かの目印がないと、この霧じゃ方向が分からなくなる。一方向にひたすら進んだ方が効率が良い」
「了解しました」

麗を庇うように。優は先頭に立った。それに気付いた麗が後方を警戒する。

歩いてても歩いてても、景色が変わらない。霧のせいで位置感覚が麻痺し、どれだけ進んだのか、本当に進んでいるのか不明で、それが大きな精神的負担となっていた。小銃を握った手に汗が滲む。

そうやって歩き続けるうちに、一つの不安が出てきた。水と食糧だ。対亡霊戦は今までの対人戦争のように遠征での補給を気にする必要がなかった。機械翼で現場に辿りつき、数時間で亡霊を殲滅して帰投するだけ。それは軍隊というよりは、どちらかというと警察の出勤に似ている。移動が長引いた場合も機動ヘリで水分補給が可能で、携帯食料などは飛行の負担になるとして、個人には与えられていなかった。

しかし、今回の状況では機動ヘリでの補給が望めない。人は三日間水分を補給できなければ死に至る。精神的には二日で戦闘できる状態ではなくなってしまう。

いざとなれば、その辺りの人家から補給は可能だが、エネルギー体の蔓延する空間に置かれた水や食料が安全なものなのかも分から

ない。不用意に口にするべきではなかった。

頭の中を様々な不安が渦巻く。

突如、どこかで銃声が響いた。後ろで麗がビクンと震えたのが分かった。

二人の足が止まり、緊迫した空気が流れる。今にも深い霧の奥から、あの醜悪な怪物が現れるのではないか、と空想が膨らみ始めた。「先輩……」

麗が不安そうに優の戦闘服の裾を掴む。優は、大丈夫だから、と無責任な言葉を口にするしかなかった。

そこでふと今更のように気づく。司令部は自分たちの事をどう扱っているのだろう。ESPリーダーや識別リーダーにここは引つかかるのだろうか。しっかりと自分たちの生存を知らせておいたほうがいいかもしれない。

優は小銃を空に向けて構えた。そして攻撃に用いるよりも多量のESPエネルギーを送り込む。引き金を引くと、発光体が霧に閉ざされた世界から、その先に待つ大空へと打ち出された。

「何やってるんですか？」

麗が不思議そうな顔をする。

「僕たちが生きてるってことを司令部に連絡しようと思って。識別リーダーが働いてるかわからないから」

「なるほど……。私、自分のことしか考えられなくて、そこまで気がつきませんでした」

「実際、意味があるかはわからないけどね」

「感心するような麗に優は苦笑して、考えるように視線をふらつかせた。

「んー、ちょっと冷えてきたなあ。日も落ちたみたいだけど、どうする？」

「……夜通し進んでも、この霧の中じゃ速度に限界があります。一夜で抜けられないなら、睡眠をとるのも有りだと思います」

「だね。適当に落ちつける場所を探そうか」

ESPエネルギー自体が微光を発している為に分かりづらいが、僅かに全体が暗くなっている。この季節の夜を、戦闘服だけで過ごすにはやや厳しい。

優は通りに面する小さな喫茶店を選び、古めかしい扉を手前に引いた。中にはコーヒーの香りが僅かに漂っている。数少ない客席には、飲みかけの紅茶とケーキのセットや鞆が置いていて、奇妙な違和感を受けた。人が急に消えたような景色に背筋を冷たいものが走る。

優はそれらを極力意識から外して、奥の空いたソファ一席に腰をおろした。麗もその横に続く。

ここなら、襲撃ポイントが限定できて、咄嗟に反撃できる。小銃に安全装置がかかっているか確認し、優はそれをテーブルの上に置いた。

小銃は決して軽いものではない。一晩中、小銃を構えたまま霧の中を歩き続けるなど、正規軍に入っているわけでもない十六歳の優には酷なことだった。十四歳の少女なら尚更である。

ひとまず腕が楽になり、優は大きくソファにもたれかけた。疲れがどつと溢れだす。

「じゃあ麗ちゃんは睡眠とって。僕は」

警戒しておくから、と続けようとした時、柔らかな感触とともに甘い香りが優を包んだ。

2章 16話 望月麗（7）

急にしなだれかかってきた麗に、優は驚いて何も言えなかった。

「先輩……」

ホテル街での記憶がよみがえる。麗の顔が急速に接近していた。

麗の出す甘い声が優の思考を麻痺させ、戦闘服ごしに伝わる温かみが体を麻痺させる。

しかし、優の核になる部分には不思議と冷静なままだった。

「麗ちゃん」

赤面することも、噛むこともなく、優は優しく微笑んで、麗の体をゆっくりと引き離れた。

「何をそんなに焦ってるの？」

麗が泣きそうな顔をする。

「先輩は、先輩はご自分で思ってるよりも遥かに重要な存在なんですよ」

麗の言う意味がわからなくて、優は首をかしげた。

「亡霊は無限に出てきます。少なくとも、たくさんいます。でも、私たちはたった500名弱で、しかも特殊戦術中隊に入ってるのはその半分。まともに戦えるレベルになると更に限られてきます」

優は頷いた。麗の言っていることは正しい。しかし、何を言おうとしているのか、優にはわからなかった。

「だから、過去にESP能力者を増やす為の研究がされてきました。でも、結局何も分からなかったんです。一般的な繁殖方法、つまり妊娠したESP能力者も過去にいましたが、能力が遺伝することはありませんでした。でも……」

麗の澄んだ瞳が優の瞳を真つすぐ見つめた。

「父と母、両者がESP能力者なら、どうなるかは分かりません。

ESP能力が遺伝するかさえ不明ですが、他に残された方法はないんです」

だから、と彼女は言った。

「だから、私を抱いてください。私たちは、常にいつ死んでもおかしくない状況にあるんです。これは、後延ばしにできる問題ではないんです」

望月麗の父親は自衛官だった。母は麗を産んだと同時に、息を引き取り、厳格な父の教育のもと、麗は育った。

父は決して麗を甘やかそうとはしなかった。厳しい食事制限が課され、周りの子どものようにジュースやお菓子を食えることは許されなかった。どこか遠くへ連れて行ってもらった記憶もない。しかし、麗はそれでも文句一つ言わなかった。ただ、たった一人の肉親である父に認めてもらいたくて、父の言うことを良く聞いた。

小学2年生の時、学校で親の職業について調べる宿題を出され、そこで麗は初めて自衛官という仕事の内容を知る。寡黙な父が、実は皆 この時は国という概念がよくわからなかった。しかし、麗が自衛官を守っていたと知って、麗は誇らしくなった。しかし、麗が自衛官について学校で発表した時、級友の一人がこう言った。

「お前の父ちゃん、人殺しなんだな」

子ども特有の残酷な言葉に、麗は初めて怒りに身を任せて人を殴った。その連絡を受けた父は学校へ赴き、麗の目の前で麗の殴った子の保護者に平謝りをした。そんな父の姿を見るのは初めてで、麗はとんでもないことをしてしまったと涙した。

家に帰ると、父は泣きじゃくる麗に対して、こう言った。

「力は自分の為に使うな。皆の、全体の為に使え」

それは自衛官としての父が持つ、一つの戒めだったのかもしれない。

麗は再び他人に頭を下げ続ける父の姿を見たくなくて、それを絶対的な言葉として心に深く刻んだ。

小学四年生の時、亡霊による大規模な侵攻が始まった。これまでとは規模が格段に違う亡霊の攻勢に多くのESP能力者が犠牲となり、これを機にESP能力者の不足が本格的に問題視され始める。父は連日疲れた様子で帰宅し、その事について危機感を募らせていることを漏らした。麗は、父が守ってきたこの国の先が長くないことを肌で感じ、恐怖した。だから、中学にあがって間もない時に、軍からESP能力覚醒確認の通達が来た時、麗は素直に喜んだ。これで、父と同じように戦える。これで、少しでもESP能力者不足が解消される、と。

そして特殊戦術中隊に入隊して、麗は愕然とした。ESP能力者はテレビや新聞で聞くものよりも遙かに脆弱な存在で、不安定なものだった。PTSDを患い、離脱していく人の姿を何人も見た。終わりの見えない戦いに疲弊し、消耗していく仲間たちを見て、麗の危機感は再び湧きあがる。今の亡霊を防ぎきれている状態は奇跡的なもので、とても危ういバランスの上に成り立っていると知ってしまった。

そんな時、一人のESP能力者が発見された。桜井優。史上初の男性ESP能力者。麗はその存在を知つてすぐ、父にESP能力者同士の子どもを作ればどうなるか、と尋ねた。父は、前例がなく、分からない、と答えた。麗はそこに一筋の希望の光を見た。

麗は少年に告白した。断られても、諦めなかった。幼き頃に刻まれた「全体の為に」という信念と、自衛官の親を持つ麗が肌で感じてきたESP能力者不足に対する慢性的な危機感、その二つが麗を突き動かし続けた。

桜井優が現れてから亡霊は大きく動き出している。恐らくは、亡霊にとつても桜井優の存在はイレギュラーなのだ。既に何が起こるか分からない状況にある。桜井優の存在は屋気楼のように曖昧で不安定であり、いつ失われるかもしれないものだった。もはや、時間はない。

麗は意を決して、戦闘服の胸元に手をかけた。

2章 17話 望月麗（8）

「だから、私を抱いてください。私たちは、常にいつ死んでもおかしくない状況にあるんです。これは、後延ばしにできる問題ではないんです」

麗の言葉に、優は「なぜ、こんな状況で」という言葉を呑み込んだ。こんな状況だからこそ、彼女は行動を起こしたのだろう。つまり、この霧の中に落ちた時点で、優たちの生存率は大幅に低下し、ESP能力者同士の子どもを作る機会が永遠に失われるかもしれないのだ。最悪、優が死んでも、麗が優の子どもを宿して生き延びることができれば、それはESP能力についての研究に新たな方向性を与えることができる。そもそも、そんなに都合よく子を宿すことが出来る筈はないのだが、どんなに確率が低くても、何もしないよりは遙かにましで、生産性がある。

しかし、優には麗のように割り切ることができなかった。

全体の為に自分を殺して、好きでもない相手と体を重ねることができる麗は、歪んでいる。そう思った。

麗の手が、その胸元にのびる。戦闘服が僅かにはだけ

しかし、それは予想もしない第三者の声によって遮られた。

「全く、ようやく見つけたと思ったら、とんだ修羅場のようですね。……」
いつの間にか開いていた扉に、小銃を構えた京子が背を預けて呆れた顔をしていた。麗は京子の存在に気付くと、慌てて優から身を離し、乱れた服を隠すように身を抱いた。

「て言うかさ、子ども作るだけなら、別にあんたじゃなくていいよね。あそこ、腐るほど女の子が余ってたんだからさ」

いつからそこに、と優の頭に疑問が浮かぶ。しかし、京子の双眸は真つすぐと麗に向けられていて、口を挟むべきではないと直感的に感じ取った。

「なんでさ、そうやって大義名分を背に關係迫ってんの？ そうす

れば桜井が断れないとでも思った？」

「ッ……！ 違う！ 私はそんなつもりじゃ……」

麗が顔を赤くして京子を睨む。それを京子は余裕のある笑みで受け流した。

「じゃあ、何で初めにそれを言わなかったの？ 誰かとの子どもを作ることを勧めるだけでよかったよね。本当はさ、大層な事を言ってる割に、それを盾にしたくなかったんじゃないの？」

「違うッ！ 私は……ッ！ 私は……」

「本当は普通に付き合いたくて、でも断られたから、言っちゃったんでしょ？」

「黙れ！」

麗の怒号に呼応するように、店内に充満する霧が揺らぐ。麗の体からESPエネルギーが溢れだしていた。

「そういう中途半端なの、誰も得しないよ。そうやって、その場だけ繋いでも後で後悔するだけ」

「黙れと言って」

その言葉は爆発音にかき消されて、最後まで優の耳には届かなかった。優と麗の座っていた隣のソファ席が爆炎とともに吹き飛ばす。

「亡霊ッ!？」

霧の揺らぎの原因が麗でないことを悟り、小銃をひつつかんでテーブルを乗り越える。

再び爆発。今度は通り側の壁が爆炎とともに崩れ、粉塵が店内に舞った。霧と粉塵で視界が塞がれ、位置関係が曖昧になる。

「撃つな！」

反射的に優は叫んだ。この状況で最も注意すべきは同仕打ちを防ぐこと。

優は全身にESPエネルギーを纏い、記憶を頼りに出口へと疾走した。物理的な障害物をESPエネルギーが全て弾き出す。

あつというまに粉塵を突き抜け、店外へと出た優は大通りに溢れる亡霊群の姿を見て青ざめた。霧のせいで全体は見えないが、少な

く見積もっても二十体はいる。

「桜井！」

遅れて京子と麗が出てくる。優は迷わず撤退を叫んだ。

「囲まれてる！ 下がろう！」

「いつの間に……！」

「こつちへ！」

包囲の甘い道を目指して優が走る。その後に京子と麗が続く。

小銃からESPエネルギーが迸り、前方の二体が吹き飛んだ。隣にいた亡霊が緩慢な動きで、その穴を埋めようと動き出す。しかし、再包囲が完了するまでに優はその包囲網を突破した。続く京子たちを援護しようと、小銃を残りの亡霊群に向ける。発砲音とともに一体の亡霊消し飛んだ。

弱い。

あまりの手ごたえのなさに優は眉を寄せた。

しかし、考えている暇はない。無事に突破した京子たちと共に、優は亡霊群から距離を取る為に走り続けなければならなかった。

「先輩！ 上！」

麗が叫ぶ。咄嗟に上空を見上げると、八体の亡霊が霧に紛れて降下してくるところだった。

戦力一定の法則が頭に浮かぶ。個としての亡霊の力が弱ければ弱いほど、その個体数は増加する。

またもに相手しているは、更に大多数の亡霊群に包囲される危険性がある。優は足を止めることなく、牽制に数発のESPエネルギー弾を放った。しかし、当たらない。走りながら降下してくる相手を狙うには無理があった。

「次は前！」

京子の叫び声と同時に、前方の霧の中から三体の亡霊が姿を現した。

「次から次へと……！」

射撃では殲滅しきれない、と判断し、優は小銃を投げ出してその

手に巨大な剣を作り出した。立ち塞がる亡霊に向かって横に振る回す。しかし、その剣は亡霊を切り刻むことなく、優の右腕に強い衝撃が走った。

「なっ!?!」

放った斬撃が易々と亡霊に塞がれ、優は驚愕の色を瞳に宿した。

その隙に二体目の亡霊が至近距離から光弾を放つ。それをまともに受けた優は大きく吹き飛び、アスファルトの地面に叩きつけられた。

戦力一定の法則が乱れている？

過去の統計的観測結果から導き出された法則に過ぎないことは理解していたが、こんな土壇場で裏切られるとは思わなかった。

「桜井!」

地に体をつ伏した優と、追撃を加えようとする亡霊の間に京子が割り込む。しかし、京子の腕で、あのレベルの亡霊を三体も相手する事ができるとは到底思えない。優は全身に走る苦痛を無視して、勢い良く立ちあがった。その間に亡霊が京子に向かって突進を始める。間に合わない、と優が悟った時、背後から怒声が届いた。

「伏せる!」

同時に背後から巨大なESPエネルギーの奔流が優のすぐ横を通過して亡霊へと吸い込まれていった。三体の亡霊の体が光に吞まれ、霧に溶けていく。

背後を振り返ると、長い黒髪を揺らす長身の女が優達の方に向かって近づいてくるところだった。

「白崎さん!」

霧の中から現れたのは殲滅戦を得意とする第六小隊長、白崎凜だった。凜は冷静そうに優達の様子を眺めた後、ご無事で何よりです、と口を開いた。いつか華が言っていた、最強の小隊長という言葉が脳裏をよぎる。

「亡霊の包囲網が形成されつつあり、早急な突破が必要です。私が先行しますから、援護をお願いします」

そう言って、凜が駆けだす。優は京子と麗に目配せした後、凜の

後に続いて駆けだした。

凜の後を追いなから、そういえば昔見たパニック映画で今の状況と似たようなのがあったつけ、と頭の隅で考える。怪物によって支配された街から逃げる、というありふれた話。あれはどういう結末だっただろうか。確か、最後は日が昇り、朝日とともに怪物たちが消滅する話だった。しかし、現実はその簡単にはいかない。優たちが亡霊を殲滅するか、ここから脱出するまで悪夢は続く。上映時間が終わったからといって、ハッピーエンドになるわけではないのだ。一行が大通りに出た時、空から風を切り裂いて何かが飛来してくるのを感じ、優は考えるより先に身を前方に投げ出した。直後、背後のアスファルトが爆ぜる。

「桜井！ 大丈夫！」

京子が叫ぶ。直後、先行していた優と後に続いていた京子と麗を分断するかのよう亡霊が空から舞い降りてくる。優はすぐに態勢を立てなおして迎撃態勢をとった。同時に亡霊がその鋭利な爪を優に向かって突きだし、突撃を開始する。優は咄嗟にESPエネルギーを両手に練って突撃槍を作りだし、眼前に迫る亡霊の爪を受け止めた。

「っ！」

予想以上の重い一撃に両手が痺れ、優は顔を苦痛に歪めた。そこに一瞬の間が生まれ、亡霊の空いた片腕が大きく後ろへ振り上げられる。優は反射的に突撃槍を放棄し、後ろへ飛んだ。直後、亡霊の太い腕が先程まで優がいた地点に振り下ろされ、アスファルトが粉々に砕け散る。優は背中に冷たいものを感じながら、亡霊から数メートル離れた地点に着地し、両手を亡霊にかざした。そして、攻撃直後の動きが緩慢な亡霊に向かってESPエネルギーを放つ。翡翠の光が亡霊へと吹き荒れ、それに耐えきれなくなった亡霊の身体が呑み込まれていく。

亡霊が完全に霧散したのを確認してから、優は肩で大きく息を吐いた。

「桜井、大丈夫？」

京子と麗が駆け寄ってくる。優は頷いて、息を整えようと深く息を吸った。

「先輩、先輩！ 白崎先輩もまずそうです！」

麗の慌てた声。前方に目をやると、少し離れたところで五体の亡霊を相手どっている凜の姿があった。

援護しようとしたところで再び空から二体の亡霊が舞い降りてくるのが見えた。優はそれを睨みつけ、両手にESPエネルギーで生成した突撃槍を手にし、駆けだした。

第一小隊長、篠原華は小銃を前方に向け、国道沿いの歩道を進んでいた。車道に自動車が一台も走っていないにも関わらず戦闘に不利な細い歩道を進んでいるのは、幼い頃から培われた強力な倫理観によるものだった。

負傷した左足が痛い。それに、寒かった。華は荒い息を吐きながら、その場に座り込んだ。

左足に目を向けると、赤く腫れているのが見えた。華は苦痛に顔を歪めて、小銃を胸の前に抱きかかえた。

無暗に歩き回っても体力が奪われるだけだ。頭を使わないと、と考える。しかし、良い案が思いつかない。ホムンクルスと戦っている間は眼下に注意を払わなかった為、この霧がどれくらいの範囲に広がっているのかも想像できない。この状態で華は極めて無力な存在だった。

思考がネガティブな方向へ向かった時、近くで物音がした。華は塞ぎこんでいた顔をあげて、周囲を注意深く眺めた。

足音のような、地面を踏み鳴らす音。華は物音を立てないように

ゆっくりと立ち上がり、小銃を構えた。

「誰か、いるの？」

答えるように、足音が止まる。

小銃を構える手に緊張が走った。

「……篠原、隊長？」

その言葉とともに、霧の中から三つの影が現れる。

「篠原さんだ！」

少女の一人が歓声をあげる。

華の記憶によれば、三人とも第四小隊に所属している娘だった。

華は負傷した足を三人に悟られないよう無理に動かして三人に近づき、安心させる為に柔らかい笑みを向けた。

「三人とも、怪我はない？」

「ええ、大丈夫です。あー、篠原隊長と合流できて良かった」

心底嬉しそうに一人の少女が答える。その直後、遠くから銃声が轟いた。反射的に小銃を構え、辺りに視線を素早く走らせる。

再び銃声。誰かが交戦しているようだった。

「応援に行かないと。着いてきて」

華は三人に声をかけてから走り出した。左足に激痛が走る。しかし、華は苦痛に顔を歪めながらも、決して足を止めようとはしなかった。

華たち四人が交差点に出た時、上空から咆哮が轟いた。見上げると、一体の亡霊が降下してくるところだった。無意識のうちに小銃の引き金を引く。銃声がつんざき、亡霊の身体が弾け飛ぶのが見えた。

「こっちー！」

亡霊を片づけた後、華は僅かに躊躇してからガードレールを飛び越えて車道に飛び出した。どこからか再び銃声。先程より、銃声が大きく聞こえた。

息を切らせながら、交差点を抜ける。

いたる所から銃声が響いているのが荒い呼吸音に紛れて耳に届い

た。どうやら全域で亡霊との交戦が始まっているらしい。

額に汗が滲む。痛む左足が燃えるように熱かった。息が乱れ、足がもつれそうになる。

それでも、華は三人の前に立って走り続けた。第一小隊長としての矜持が休む事を許さなかった。

通りをまたいだ時、霧に包まれた車道の真ん中で亡霊と交戦する一人の少年の姿が視界に映った。

「桜井くん！」

華は不思議な安堵感に包まれ、無意識に少年の名を叫んだ。

「桜井くん！」

耳に届いた声に、第六小隊長、白崎凜は反射的に声の方向に視線を移した。第一小隊長の篠原華と第四小隊員三人の無事な姿を確認し、安堵の息をつく。

そして、凜は再び目の前の亡霊に向き合った。ホラー映画から飛び出してきたかのような醜悪な怪物。その崩れた顔が歪み、巨大な口が開く。凜は反射的にその場につ伏し、その口から放たれたESPエネルギーの光条を避けた。同時に引き金に指をかけ、反撃に出る。亡霊の身体が数カ所弾け、その生存機能が致命的なまでに壊されたのを確認した凜は、次の亡霊に向かって走り始めた。

銃撃を加え、斬撃を避け、踊るように亡霊群を薙ぎ倒す。それでも亡霊の数は一向に減らない。むしろ、増え続けていた。

凜は数体の亡霊を片づけたところで、ちらりと頭上を見上げた。信じられない数の亡霊がこちらに向かっているのが見える。

凜は少し離れたところで戦っている少年に視線を移した。

目的は桜井優か。

凜は優の援護に回る為に、大きく地を蹴った。

霧に覆われた上空をおびただしい影が走る。第三小隊長、佐藤詩織と第四小隊長、黒木舞はそれを見て戦慄した。

「どうやら、ボク達の相手をしにきた訳じゃなさそうだね」

上空を通りすぎていく亡霊を観察しながら、舞が冷静に言う。

「一点に向かってるように見えます。どうしますか？」

詩織が二つ年上の舞に判断を仰ぐと、舞は小さく苦笑した。

「どうするって……行くしかないよね」

「はい。多分、あの亡霊達は桜井さんのもとに向かってるんだと思います。早く援護に向かわないと」

二人はお互いの意志を確認し合った後、上空を走る亡霊群を追うように走り始めた。

遠方から断続的に銃声が響く。大規模な戦闘が始まっているようだった。両手に抱える小銃を腕に自然と力が籠る。

地を駆ける二人に立ち塞がるように、空を走る影の一つ、亡霊が地上に降りてくる。詩織がすぐに数発のESPエネルギーを放ち、亡霊の動きを牽制する。そして、亡霊の動きが緩慢になったところに、舞がESPエネルギーを纏ったコンバットナイフを突き刺し、その生命活動を停止させた。

亡霊を一瞬で片づけた二人の小隊長は霧の中を疾風のように駆けた。

「しおりん、ESPエネルギー余裕ある？」

「今は余裕があります。でも、あれだけの亡霊を相手にすると……」

上空のおびただしい数の亡霊を見て、詩織は自信なさそうに答えた。ESPエネルギーは無尽蔵ではない。使えば当然枯渇し、回復には長時間の休息を必要とする。度重なる戦闘に詩織の持つESPエネルギーは急速に減少していた。

「だよね。ボクもあまり……」

そこで舞は言葉を切った。前方の霧の奥で何かが煌めいた。同時

に轟音。吹き荒れるESPエネルギーが、一面を満たす霧状のエネルギー体を吹き飛ばす。

「桜井さん！」

晴れた視界に飛び込んできたのは、数十の亡霊の波に吞まれゆく優と凜の姿だった。

2章 19話 白崎凜(3)

第五小隊長、白崎凜は裕福な家庭に次女として生を受けた。父は代議士で家庭的な人間ではなかったが、父なりに役割を果たそうと努めていたし、母も父の資産を食いつぶす様な事はせず、堅実に家事と子育てを両立させていた。平均的な家庭に比べて恵まれた家庭環境だったと言える。長女は凜の一つ歳上で、凜が成長するにつれて長女である蘭とよく比べられるようになった。

容姿・学校の成績・習字・算盤・ピアノ。全てにおいて、凜は蘭に劣っていた。別段、凜が美しさに欠けたわけでも、頭の回転が悪かった訳でもない。むしろ、凜は全てにおいて平均よりは高い位置をキープしていたが、蘭はそれを全てにおいて遙かに上回る結果を修めた。蘭は、あり体に言えば才覚に恵まれていたのだ。凜は、そうではなかった。

母はそんな凜に「蘭を見習いなさい」とよく口にした。それは凜を傷つけようと意図したものではなく、ただ発破をかけようとしただけだったのだろう。しかし、それはあまりにも無神経で、残酷な言葉だった。幼い凜にコンプレックスを植え付けるには十分すぎるほどの出来事だった。

しかし、結果的に言えば母の意図通りに事は運んだ。姉に対するコンプレックスから、凜は果てしない努力を始めたのだ。凜は決して諦めなかった。自分は凡才だから、と開き直ろうとはしなかった。それが問題を解決しないばかりか、更に惨めな将来が待っている事に気付けないほど凜は馬鹿ではなかったのだ。何故勉強しないといけないの？ と同級生のように想像力の欠如したことを言うほど無知でもなかった。凜自身は姉と比べなければ、間違いなく優秀な子どもだった。しかし、それは類稀なる才覚に恵まれた蘭の圧倒的な存在感の前では全く意味を成さないレベルで、凜は強烈な劣等感を抱え込みながら成長していく事になる。

小学三年にあがった頃、凜は姉に勝つ為、己の持つ全てを学業に注ぎ始めた。凜が幼かった頃から習っていたピアノや算盤は先天的なセンスで既に致命的な差をつけられ、凜が蘭に勝てそうなものは後天的な努力が大きく影響する勉学の世界しか残されていないかった。しかし、それでも凜は蘭に追い付けなかった。どれだけ学年でトップの成績を飾ろうと、姉の前では全てが無意味だった。周囲は蘭の持つ紛れもない才覚に興味を抱き始め、全ての人の興味をかつさらっていった。特に蘭は数学的な素養に長け、その素質を恵まれた環境で順調に伸ばしていった。影で努力を重ねていた凜には誰も興味を示さなかった。

それでも、凜は諦めなかった。彼女は蘭の背中を必死で追い続け、結果的に国内屈指の名門私立大学、聖翔院の中等部に入学することができた。凜もまた、姉とは性質の異なる才覚に恵まれていたのかもしれない。しかし、凜はそれを自覚できなかった。自覚できる環境にいなかった。凜の周りは同様に並々ならぬ努力を積み重ねてきた俊才ばかりで構成され、常にその頂点には姉である蘭がいた。凜にとって世間的な評価は最早意味をなさず、姉である蘭に勝つことのみ自己実現の価値を見出していた。両親も凜の歪みには気付かず、姉妹で競争しあう事が美德であると考え、それを奨励するかのような言動を続けた。すなわち、両親は凜を個として評価せず、常に姉と比べ続けたのだ。やがて、凜の精神は緩やかに崩壊を始めた。いつしか、凜は起床直後に原因不明の倦怠感に襲われるようになった。凜のまだ幼い精神は、確実に崩壊を始めていた。しかし、学業を疎かにすることはできなかった。この頃、凜は自らの得た知見から、蘭との距離が途方もないほど遠のいている事に気付き始め、その距離を詰める為に更なる無理を自分に強いた。長年、姉との闘争に費やしてきた莫大な時間は最早引き返すことを許さないレベルに達し、敗北は自己否定そのものを意味するようになった。白崎凜は退路を断たれ、血を吐きながらも走り続けるしかない状況にいつしか自分を追い込んでいた。

そして、凜に致命的な影響を与えたのは凜が中学一年の冬だった。凜は一つ歳上の先輩に恋をした。初恋。委員会で知り合い、同級生とは違う大人びた雰囲気**に強く惹かれた**。姉の存在など忘れて、凜は四六時中先輩のことを考えた。それだけで、凜は幸せな時間を送れた。

中学一年の終わりかけ、バレンタイ。凜は不慣れな手でチョコを作った。勉強に打ち込むことに熱心で、料理の腕に自信はなかったが、凜には中々の出来映えに思えた。

当日、凜は委員会の終わりに先輩をつかまえ、チョコを手渡した。告白も考えていたが、チョコを渡した時点で恥ずかしくなり、凜は逃げるようにその場を去ってしまった。しかし、それで凜は満足だった。幸せだった。翌日までは。

次の日、放課後に図書室へ寄ろうとした時、空き教室の一つから数人の声が聞こえてきた。その中に先輩の声が紛れていることに気が付き凜は足を止めてしまった。

「でも、お前白崎んとこのスピアにチョコもらったんだろ？」

「ああ。姉の方なら良かったんだけどな。劣化版になつかれてもねえ」

数人の笑い声。凜は頭が真っ白になり、そのままトイレに駆け込んだ。胃の中のものを全て引っくり返し、その中には赤い血が混じっていた。凜の精神的なストレスは既に許容量を遥かに超え、物理的な影響を身体に与えるまでになっていたのだ。

劣化版。

その一言は、まさしく凜が蘭に対して抱いていたコンプレックスを鋭く抉り、アイデンティティを完膚なきまでに破壊した。そして、白崎凜という個を否定する言葉を、自身の尊敬していた上級生から受けたことで、個としての存在理由を見失った。

才能への嫉妬、渴望、諦観。それらがぐちゃぐちゃに混じり、全てがよくわからなくなった。才能という亡霊に、姉という亡霊に一生憑きまとわれ、誰にも理解されることなく人生を終えるのだと、

そう悟った。

ESP能力に覚醒したのは、そんな時だった。全てがどうでもよくなり、無気力な日々を過ごしていた凜に、戦略情報局からの通達が届き、彼女は歓喜した。待ち望んだ才能。選ばれた者。突如転がりこんだ才能に凜は飛び付かざるをえなかった。

特殊戦術中隊に入隊するまでの数週間は傑作だった。凜を見る度に警戒した様子を見せる姉の姿に、凜は歪んだ優越感と、安堵感を得た。

姉は馬鹿ではない。神の力を正しく理解した彼女は私を恐れているのだ。そう、凜は思った。

ピアノ・算盤・習字・勉強・容姿？ くだらない。そんなものが真に選ばれた神の力・才能に何の影響力を持つというのだろうか。

劣化版はお前だ、姉さん。

怪物を滅する為に天から賜った才能。神に選ばれた者たち。特殊戦術中隊に入隊してから、凜の歪みは加速した。特殊戦術中隊に姉の亡霊はいなかった。誰もが凜という個体をそのまま評価してくれた。その力を、その頭脳を、その容姿を、正当に評価してくれた。ESP能力者は、他の人間とは違う。そう感じた。いつしか、ESP能力者であることが、誇りとなった。凜の中で徹底的に破壊され、からっぽになった存在理由・アイデンティティにESP能力者という言葉がびたりと納まった。

故に、桜井優が現れた時、凜は彼に多大な好奇心を抱いた。史上初の男性ESP能力者。男でありながら神から唯一選ばれた者。

訓練で優をはじめて見た時、凜はその姿に見惚れた。幼いながらも整った顔。さらさらと流れる琥珀色の柔らかな髪。憂いを帯びた優しい瞳。庇護欲をくすぐる少女のような小柄な体型。そして、目を離せば消えてしまうんじゃないかと思うような儂い雰囲気。凜の視線は釘付けになった。

それは容姿だけにとどまらなかった。ESP出力値は小隊長レベルを遥かに上回り、実戦では文句のつけようがない戦果を残した。

完璧だった。神に選ばれた者として、これ以上相応しい者はいない。恐らく、桜井優は生まれながらにして王なのだ。ESP能力者を統べる王。神に最も近い存在。選ばれし救世主。そう、直観的に感じた。

故に、白崎凜は負ける訳にはいかなかった。神に選ばれた者に敗北は許されない。矜持がそれを認めない。王を傷つけるわけにはいかない。

「こんなところで私は」

空から雪崩れ込む無数の亡霊を前にして、凜は叫んだ。

後ろには桜井優。全てを統べる者。凜が守るべき者。全てを捧ぐ者

「まだ終われない」

ESPエネルギーが全身から爆発する。

それは、いつか優が放ったESPエネルギーの嵐に似ていた。

「あああああああああつ！」

骨が軋む。筋肉が悲鳴をあげた。皮膚が弾け、血が噴き出す。それでも、凜はESPエネルギーの放出を止めなかった。

半球形に広がる光が亡霊を呑みこんでいく。断末魔のような叫び声が凜の耳に届いた。更にESPエネルギーをこめる。何かの千切れる音。何か切れる音。何か壊れる音。限界を超えた凜の身体に届くそれらは、酷く暖かいものとして聞こえた。視界がスパークし、駆け巡るエネルギーの奔流が身体機能を傷つけていく。

凜は声にならない叫びをあげた。

2章 20話 長谷川京子(3)

迫りくる亡霊の波に、優は倦怠感を振り払って立ち向かおうとしたが、ESPエネルギーをうまく練る事が出来ず、断念した。既に多量のESPエネルギーを消費したせいで、自由に扱えるESPエネルギーが底をつき始めている。目の前で凜が優を守るように必死に抗っていたが、優はそれに加勢する力を残していなかった。

優はその場に崩れ落ち、周囲の霧を見渡した。エネルギー体が身体に絡みつくように纏わりついてくる。酷く身体が重い。この霧がただのESPエネルギーではない事に気付き、優は唇を噛んだ。

残り少ないESPを攻撃に回そうとするも、上手く制御できない。優のESPエネルギーと周囲のエネルギー体が反発を繰り返し、優のコントロール下から離れていく。

ESPエネルギー同士が戦っている？

そう考えて、すぐに否定する。これは戦っているというよりも、妨害し合っていると言った方が正しい。周囲に満ちるエネルギー体は何かを調べようとするように優の身体に絡みつき、優の体内から放出されるESPエネルギーはそれを阻止するように、エネルギー体と身体の間に入り込んでくる。

ESPエネルギーの持つ未知の振る舞いに戸惑っているうちに、空から膨大な数の亡霊が舞い降りてくる。優は地に膝をついたまま、力なくそれを見つめた。

空から迫る亡霊群が、優と凜を取り込もうとするかのよう上下左右に大きく広がり、雪崩のように肉薄する。迎撃も、回避も間に合わない。

「私は、こんなところで」

不意に凜が叫んだ。同時に凜から翡翠の光が球状に広がっていき、亡霊を呑み込んでいく。

「まだ終われない」

神々しい光の波が付近の亡霊を呑み込み、その存在を誇示するよ
うに成長していく。優は固唾を飲んで、その攻撃を見守った。

亡霊の群れが崩れ始める。数十を超える亡霊が一瞬で蒸発するよ
うにその姿を消していった。亡霊だけではない。周囲に充満するエ
ネルギー体をも吹き飛ばしていく。

「凄……」

これが殲滅戦に特化した第六小隊長、白崎凜か、と優は無意識の
うちに感嘆の息を吐いた。

凜が悲鳴をあげる。そこで、優は初めて、凜の身体から血が噴き
出していることに気付いた。全方位に放出されたESPエネルギー
が、凜の身体にまで影響を与えているようだった。

糸が切れたように、凜の身体が突然崩れ落ちる。同時に、凜から
発せられていたESPエネルギーの嵐が急速に静まっていく。優は
重い身体に鞭を打って、凜のもとまで這い進んだ。そして、傷だら
けの凜を抱え上げる。三つ年上の少女は、驚くほど軽かった。

「桜井！ 上から来てる！」

後ろから届いた京子の叫び声に、優は弾かれたように上空を見上
げた。凜の攻撃で霧が吹き飛ばされて見通しがよくなった上空から、
巨大な物体が降下してくるのが見える。優はその物体を凝視した後、
自らよりも背の高い凜を抱きかかえ、力の限り地を蹴った。

「先輩！」

「桜井！」

京子と麗が、こちらを援護しようと走ってくるのが視界に映る。

しかし、距離がありすぎた。

空から舞い降りた物体を避けきれず、優は凜を抱えたままその物
体の下敷きになった。その物体はゲル状の性質を持ち、優と凜を包
みこむように広がった。

謎の物体に全身を包まれた優は、その物体を亡霊だと直観的に判
断した。その判断を肯定するように、そのアメーバのような物体は
優を呑みこもうとするようにもぞもぞと蠢き始める。全身を包む亡

霊のあまりのおぞましさに、優は寒気を感じた。

ゲル状の物体が優の身体に巻きつき、その動きを封じ込める。

「桜井さん！」

外からくぐもった詩織の声が聞こえた。優は凜の身体をしつかり抱きかかえたまま、亡霊から逃れようと足掻いた。残り少ないESPエネルギーを一点に集中し、放出する。翡翠の光条がゲル状の亡霊を撃ち抜き、僅かに外の景色が見えるほどの穴が開く。優はESPエネルギーの海の中、助けを求めるときのように空いた穴に手を伸ばした。その手が、誰かに掴まれる。

「桜井君！」

華の声がした。

途端、腕が引つ張られる。そのまま、優は凜を抱きかかえたまま外に引つ張り出された。アスファルトの上に転がり落ちる。

「大丈夫？ 怪我はない？」

手を掴んだまま、華が尋ねてくる。隣には詩織と舞もいた。優は何度も咳き込みながら、小さく頷いた。

振り返ると、先程まで優を包み込んでいたゲル状の亡霊が何かを求めるところに蠢めいているところだった。攻撃能力は殆ど持っていないらしい。

「これ、何？ 亡霊？」

駆けよってきた京子が、その物体を見て眉を寄せる。優は何も答えず、残ったESPエネルギーをゲル状の亡霊に向かってありつたけ撃ち込んだ。

司令部には重苦しい空気が流れていた。

ディスプレイには、依然として高梨市の上空に漂うホムンクルスの姿。出撃した第一から第六小隊の各第一分隊の全てがホムンクルスによって落とされてから五時間が経過した。四時間前に一度、霧

の中から発光体が打ち上げられた以外は何の変化も見られない。発光体の放つESPエネルギーの波形から、それが桜井優の打ち出したものであることが判明し、その生存は確認できたが、他は何の手がかりもないままだった。

こういう時、待機するだけというのは精神的な負担となる。奈々は、横で気分が悪そうにしている加奈の姿をちらりと見た。優秀な副官だが、奈々よりも若いせいか、精神的に脆い部分がある。

「報告です。戦略情報局より、経過報告を求める声があがっています」

司令室に入ってきた、若い男が硬い表情で言う。奈々は軽く頷き、退室を促した。

情報統制も限界に近付いている。何の予告もなく街一つが消えたなどと報道すれば、深刻なパニックが起きるだろう。頭痛の種は消えない。

「中心部から強いESPエネルギーを感知しました」

解析オペレーターの緊張した声が、奈々の意識を急浮上させた。高梨市上空に待機させていた機動ヘリから転送されてくる映像にすぐ目を向ける。

画面には、地上に広がる霧の一角が消えていくところが映し出されていった。

一体何が起きているだろう。

奈々は厳しい表情を浮かべ、機動ヘリに接近を命じた。映像が、ぼつかりと開いた霧の穴に近づく。その時、オペレーターが再び叫んだ。

「ホムンクルスのエネルギー反応低下！ 自壊を始めています！」

映像が別の機動ヘリのものに切り替わる。そこに映るホムンクルスは確かに崩壊を始めていた。

「何故……？」

物理的な攻撃を受けた形跡はない。霧の中で起こった何かが、ホムンクルスにも影響を与えたのだろうか。

それとも、既に戦術目的を達成し、存在意義を失った？

「神条司令、霧が！霧が晴れていきます！」

加奈の驚愕の色を帯びた叫びに、奈々は思考を中断した。

霧が、晴れていく。地上に高梨市の姿が薄らと浮かび上がり始める。そして、通りに映る何人かの人影。光のない街で、機動ヘリから投影されたライトを眩しそうに見上げている。

いや、戦術目的の達成が困難だと判断し、撤退した？

司令部に喜びの聲がこだまする。しかし、奈々は浮かぬ顔で、思考を続けた。

そもそも、亡霊がペンフィールドのホムンクルスを模していたのは何故だ？

亡霊に高度な知恵があることを誇示する為？ 亡霊が人間の頭脳を既に解析していることを誇示する為？ 亡霊が人間の文化を熟知していることを誇示する為？

分からない。それが、奈々にはたまらなく恐ろしかった。亡霊と戦えば戦うほど、その不可解な行動に悩まされる。そして、いつも一つの結論に辿りつくのだ。

亡霊は、人間より遥か高位の存在で、私たちにそれを理解する術はない。

空が見えた。黒く、何も映さない夜空。しかし、それが京子には酷く懐かしく思えた。

霧は既に晴れ、亡霊群の攻撃はびたりと止んでいる。全てが夢だったのではないか、と思うほどに街はひっそりとしていた。

あれは、一体何だったのだろう。亡霊が結局何をしたかったのか、京子にはよくわからなかった。優があのように分からないゲル状の物質を吹っ飛ばした途端、全てが終わった。あまりにも、突然の出来事だった。

しかし、元より亡霊はそんなものだ、と思っていた為、別段気にもならない。ただ、今は自らの力量不足に呆れていた。

「何が中途半端、なんだか」

そういう中途半端なの、誰も得しないよ。そうやって、その場だけ繋いでも後で後悔するだけ。

麗に放った言葉を思い出して、京子は苦笑した。あれは、自分自身に対して向けられた軽蔑の言葉だったのかもしれない。

無我夢中で後を追って、人に説教して、まるで第三者を装って、必死に自分の気持ちを隠して、最後は結局何も出来ず、馬鹿みたいだ。誰かのように真つすくな訳でも、誰かのように強い訳でもない。亡霊よりも、自分が一体何をしたいのかが不思議で仕方がなかった。「本当に誰も得しないなあ、これ」

機動ヘリのローター音が夜空に響く。

京子は重い身体を引きずって、傍で華に抱かれてぐったりとしている少年の元へと向かった。

「お疲れ」

優の顔を覗きこむように、その場で屈みこむ。

優は京子の存在に気付くと、疲労の混じった笑みを浮かべた。

「お疲れ様」

2章 21話 望月麗（10）

桜井優は全身を包帯でグルグル巻きにされた状態で不機嫌そうな表情を浮かべ、医務室のベッドの上で横になっていた。

不必要な包帯をグルグルと無理矢理巻いて、包帯男だ、とからかった京子と第一小隊の面々は既に退室し、既に訓練に行っている。全身が傷んで、自力で包帯をとることができない。死んだら本当に包帯男に化けて枕元に立ってやろう、と優は心の中で小さく決心した。

暇を持て余していると、コンコン、とドアをノックする音が静かに響いた。

「どうぞ」

静かにドアが開き、奈々の姿が現れる。少し疲れた顔をしていた。事後処理に追われ、忙しいのだろう。

「……どうしたの、その包帯？」

「包帯男です。がおー」

奈々は一瞬ポカンとした顔をし、すぐに破顔した。

「包帯男って喋るの？ おおーだと狼男みたいよ」

「国際化が進んでるんです」

「よくわからないわね」

奈々は優と年代代の少女のようにクスクス笑いながら、来客用の椅子に腰かけた。とても十歳以上の年齢差があるとは思えない。しかし、その美貌には疲労で陰がある。

「その様子だと、大丈夫そうね」

「ええ。ナノマシンがあれば、安心して怪我できます」

「……あまり頼りすぎないように」

「はい。善処します」

奈々は鞆から小さな袋を取り出し、優に差し出した。中身は見るまでもなく分かる。プリンだ。

「ありがとうございます」

優はそれを笑顔で受け取り、お礼を言った。

「それで、今日はどうしたんですか？」

「……察しが良いわね」

「神条司令、忙しそうです。見舞いに来るには早いな、と思いました」

わかる？ そう言って、奈々は苦笑した。

「顔色、悪いです。神条司令は働きすぎです」

「残業代がおいしいのよ」

「じゃあ、次からはもっと高級なプリンをお願いします」

「次がないようにしなさい」

「はい」

「で、本題だけど」

奈々が笑顔を引つ込める。優も、それに失礼がないように姿勢を正した。

「優君、昇進よ。おめでとう」

「……何の事ですか？」

予想外の言葉に、優はキョトンと首を傾げた。すぐに奈々が補足する。

「君は今、第一小隊に属しているでしょう？ でも、これからは特殊戦術中隊をまとめる中隊長をやってもらう事になったの」

「中隊長、ですか？ あの、今までそんなのがあった事すら知らなかったです」

奈々は苦笑を浮かべた。

「ええ。そんなものなかったもの」

「じゃあ何故今更、という疑問を口にする前に、奈々がそれに答える。」

「でもね、今回の件で、現場と司令部に大きな溝があることが判明した。現場と分断されたら、指揮系統が一瞬で壊れてしまう。これは、特殊戦術中隊の決定的な脆弱性よ。だから、現場で全ての小隊

を、中隊全体をまとめる役割を設けることにしたの」

奈々の真剣な顔に、優は必死に否定の言葉を探した。頭の中にふと、最強の小隊長の姿が浮かぶ。

「でも、そんなのまだ入ったばかりの僕には……。それに、他に適任がいます。白崎さんとかのほうが」

「これはね、凜が言い出した事なの」

優は黙るしかなかった。何故、という疑問が頭の中をぐるぐると回る。

「……白崎さんが？」

「そう。前々から優君をもっと上につけるべきだって訴えててね。今回、その意見を正式に採用する事になったの」

「でも……」

言い淀む優の手を、奈々の手が包んだ。

「君は、君自身が予想するよりも遙かに皆から頼られてるわ。皆、納得するでしょう。それに、全ての指揮を君に任せる訳じゃない。私の補助をしてもらうだけ。指揮に問題があっても、何の責任も付きまとわない。誰も君を責めない。それは約束します。だから、やってくれないかしら？」

奈々の双眸の奥で、何かが揺れるのを優は感じた。奈々も不安なのだ、と気づく。その不安を少しでも肩代わりしたい、と優は思った。

「……僕でよければ、お引き受けいたします」

「ありがとう」

突然、奈々に強く抱きしめられ、優は全身を緊張で硬くした。柔らかない感触が顔に当たる。

「し、神条司令？」

戸惑った声を出すと、すぐに抱擁は解かれた。そしてクルリと背を向ける。そのせいで、奈々が今どんな表情をしているのか、何故いきなり抱きつかれたのか、優がそれを知る機会は永遠に失われてしまった。

「後日、正式な書類が届くから、それに目を通してね。じゃあ……」
矢継ぎ早に言い残し、奈々が去っていく。ボタン、と閉じたドアを見て、優はぼかんとした。

しかし、すぐにまたノックの音が響く。忘れ物でもしたのだろうか、と思つて優は「どうぞ」と返した。しかし、予想に反して入ってきたのは望月麗だった。

「こ、こんにちは」

「こんにちは」

やたらとドアの方を気にしながら、こちらに進んでくる麗の姿に優は顔をかしげた。

「あの、神条司令と何かあったんですか？」

麗がおずおずと聞きづらそうに言う。

「何かつて？」

「い、いえ。あの……もしかして、先輩と司令はお付き合いされているんですか？」

「……はい？」

「あ、違いますよね。すみません、忘れてください！」

要領を得ない麗の言葉に、ますます顔を傾げる優だった。

顔を赤くした麗が、さつきまで奈々が使っていた来客用の椅子に座る。そして二つ年下の後輩は、片手に持っていた袋を優に差し出した。

「これ、つまらないものですが……」

「僕、何でもB級が大好きだから、全然大丈夫だよ」

受け取りながら、茶化して言う。しかし、それを聞いた麗が優の予想を上回る反応を見せた。

「本当ですか！ 私もB級映画とか大好きなんですよ！ 今度また一緒にいきませんか？」

デートの際に見た、妖怪物語が脳裏をよぎる。地雷を踏んでしまった、と優は冷や汗を流した。

「き、機会があればね」

「ところで、先輩は怪我の方が酷いんですか？」

すぐに話題が変わって、ホッと胸を撫で下ろす。そういえば、まだ包帯をグルグルと巻いたままだったな、と優は忘れかけていた事を思い出した。

「いや……これは飾り、かな」

「飾りですか？ あ、妖怪物語にも似たお化け이었습니다よね！ あれの真似ですか？」

思わぬところで話題が逆戻りし、優は内心悲鳴をあげた。

「そ、そんな感じ。ところで、今日はどうしたの？ まだ訓練あるんじゃないかったっけ？」

そう言つと、麗は真剣な表情で頷いた。

「はい。でも、お休みしました。あの、今日は謝る為に来たんです。申し訳ありませんでしたっ！」

突然、勢いよく頭を下げた麗に優は驚いて反応できなかつた。勢いよく下げられた頭についていけなかつたツインテールが遅れて空を舞う。

「私、先輩の気持ちを考えず、無視して自分勝手な理想を押しつけました。本当は、そういうやり方をするつもりではなかつたんです。が、長谷川先輩がおっしゃったように、断られてたのがショックで、あんなに卑怯な言い方を……。本当に、申し訳ありません」

真摯に謝る麗の姿は、本当に悔いているようで、優は思わずその頭を撫でた。

「気にしてないよ。でも、やっぱり自分の身体は大事にしなきゃ。

そういうのは好きな人と、ね」

「……あの、先輩は勘違いしているかもしれませんが、私、先輩と嫌々デートした訳ではないです。少し急ぎ過ぎた感は否めませんが」

「へ？」

「だから、私、諦めません。いつか、受け止めていただけたら嬉しいです」

そう言つて、麗は逃げるように部屋を出ていった。それを呆然と

見送る。ドアがバタンと音をたてて閉まった。

優はベッドに倒れこんで、回転が悪い頭をコツンと叩いた。予想以上に響いて、痛みにうずくまる。

考えるのが億劫で、優は思考を放棄して目を閉じた。

「あ」

そこで包帯を巻いたままだったことを思い出し、奈々が麗に取ってもらえば良かった、と優は激しく後悔した。

番外編 このノイズに満ちた世界で（宮城愛）

世界はノイズで溢れている。

建て前、お世辞、愛想笑い。冗長なデータを追加し、真の現実を覆い隠そうとする。それは情報理論における伝送路符号化のように、冗長ビットを付与することでノイズへの耐性を強化するのではなく、それ自体がノイズとなって、元の情報を歪ませる。この冗長化には、合理的な存在理由が見当たらない。システム化された社会が生み出した、一つの世渡り術なのだろう。システムをすり抜ける為の、無意味な手続き。システムは明確化された表層面しか取り扱えず、人はそこからノイズをキャンセルして真意を掬いとらなければならぬ。本当に無意味だ、と思う。しかしそれでも、脆弱な社会システムには有効だった。システム化に伴い生じたノイズが、更に別のノイズを発展させている。かくして加速度的にノイズが人間社会に溢れてしまった。

恐らく、人間は現実を壊したいのだ。つまり、世界は壊したい情報で溢れている、ということ。しかし、私にはよく分からなかった。歪ませて、壊した現実はそうまでして隠す必要があったのか、と。

中学一年生の時、私は担任の教師に呼び出された。

「宮城、お前はもつと大人になれ」

「……大人？」

担任の言葉に、私は首をかしげた。

「そうだ。もつとな、オブラードに包むとかな。そうしないと社会では生きていけないぞ」

ノイズで包め。そう、教師は言った。

だが、その言葉自体にノイズはなかった。それが面白くてクスリと笑いそうになる。心配、してくれているのだろう。この担任は、悪い教師ではない。

「……何故？」

「……何故つてなあ。正直すぎると、面倒な奴らの反感を買うんだよ。社会はそういうもんなんだ」

反感を買いそうな情報には、ノイズを混ぜて情報自体を壊せ、ということだろう。言いたいことはわかったが、その方法にはいくつかの疑問が残る。まず、ノイズで情報自体を歪ませたいならば、その情報自体を発信しなければいい。普段から私がよくやることだ。

私には、ノイズを混ぜる過程が酷く面倒で、苦痛で仕方がない。何故、皆ノイズを混ぜてまで情報を発信しようとするのだろう。不合理だ、と思った。もう一つの疑問は

「……私には、オブラードで包んでも、意味があるとは思えない」

その言葉は、ノイズのない本心だった。建前・お世辞・愛想笑いに騙される人間の何と少ないことか。人は、馬鹿ではない。大多数の人は、ノイズに気付く。でなければ、「含意」という言葉は生まれなかっただろう。人間は、ノイズをキャンセルすることに慣れてる。私は、親にその部分を壊されてしまったから、例外だけれども、平均的な人たちは、ノイズをキャンセルすることに時間をかけない。一瞬で、片手でキャンセルしてしまう。だから、建て前・お世辞・愛想笑いに一体何の効果があるのかわからなかった。キャンセルされる冗長な情報、すなわちノイズをわざわざ付け足すことに一体何の意味があるのだろう。情報を隠そうとした、壊そうとした、というノイズ自体に含まれた情報が大事なのだろうか。わからない。難しく、私にはよく分からなかった。

「……まあ、宮城が愛想笑いとくしても無意味かもな。それはそれで、一つの魅力と呼べるかもしれん」

教師はそう言って苦笑した。私はそのまま退室して、それから普段と変わらない日常を送った。私には結局、ノイズの必要性がわからないままだった。

「愛ちゃん……」

亡霊対策室の廊下を歩いていると、まだ声変わりしていない男子の声に呼び止められた。

振り返る。そこには、予想通り人懐っこい笑みを浮かべる桜井優の姿があった。このノイズに満ちた曖昧な世界の中で、彼の周囲だけが妙にはつきりと視界に映る。彼には、ノイズがない。少なくとも、彼は自分の為に現実の情報を壊そうとはしない。それが、私には心地良かった。

「……何？」

「明日、飛行訓練しようと思うんだけど、何か意見とかない？」

新米中隊長として、色々と試行錯誤中らしい。

「……集団飛行の錬度が低い。反復的に、前後左右の位置取りを身につけさせるべき」

「そっか。愛ちゃんは、率直に言ってくれるから助かるよ」

その言葉に、私は微笑んだ。やはり、私にはノイズの必要性がわからない。恐らく、これから先もずっと。

このノイズに満ちた世界で、必要なのは歪まない現実。そう、強く想った。

桜井優は、自室で本を読んでいた。タイトルは『グラフ理論 入門』。グラフ、と言っても折れ線グラフなどのグラフとは違う。点と線の結びつき、その集合を取り扱う数学の分野の一つだ。

点と点の結びつきのオン、オフを考えれば、これは戦闘に似ている、と優は感じた。点、すなわちノードを一人のESP能力者や亡霊と考え、線、すなわちエッジを視線や照準と考える。エッジに方向性がある有向グラフと考えれば、エッジが向かう先は集中砲火を浴び、エッジが向いていないノードはフリーな状態と言える。

集中的にエッジの向かうノードはすぐに破壊され、効率的に戦うにはどこにも線が向いていないノード、すなわち遊んでるノードを減らす必要がある。特殊戦術中隊に死者を出すことは許されない為、敵から向かってくるエッジを全体である程度分担しなければならぬ。全般的に当たり前のことではあったが、体系的に、整理して物事を考えるのに、このグラフ理論は役に立つ。元々大学の講義で使われる教科書のようなだったが、複雑な数式が出てくるわけでもない為、まだ十六歳の優にも理解ができた。「これは後々教える戦闘形態を理解しやすくさせる為のもの、軽く目を通すだけで良い」と奈々は言っていたが、優は何となく読み続けていた。

暫くそうして時間を潰していると、ドアが勢いよく開いた。

元気な声とともに現れた京子の姿を見て、優は困ったような笑みを浮かべた。

「こ、こんばんは。ごめんね、いきなり」

「……入っていい？」

続いて、申し訳なさそうな顔をする華と愛が顔を覗かせる。

「いいけど……ノックくらいしようよ」

優が許可するより早く部屋に入り込んだ京子がボフツと派手な音を立てて、優のベッドに倒れこむ。

「いいじゃん。私と優の仲なんだから」

「普通、家族でもノックするよね。それ以上ってこと!？」

京子の言葉に華が声をあげる。京子は華の言葉を無視して、ベッドの上でゴロゴロと転がり始めた。

「桜井くん、何読んでたの？」

他人のベッドでくつろぐ京子に非難の視線を送ってから、華がのぞきこんでくる。優は表紙を見せた。

「グラフ理論……？」

「神条司令に貸してもらったんだ。中々面白いよ」

「勉強が面白いとか変態だ」

ベッドから京子のくぐもった声がする。華がクスリと笑った。

「でも、こことって頭のいい人多いよね。京子みたいな方が希少かも」

「そつえば、確かに……」

麗や、詩織の顔が頭に浮かぶ。両方、まだ中学生にも関わらずすっかりしていて、頭の回転が速い。

「白崎さんとか、元々聖翔院にいたらしいし」

聖翔院は国内屈指の名門私立大学だ。この場合、聖翔院とはその高等部か中等部を指すのだろう。

最強の小隊長としてのイメージしかなかった優は、その言葉に驚きを隠せなかった。

これはね、凜が言いだした事なの。

数日前の、奈々の言葉が脳裏をよぎる。

白崎凜、という人のイメージを優はうまく掴めなかった。それほどの頭脳を持つ人が、一体何故優を中隊長に指名したのか。頭のいい人の考えることはよく分からない、と優は結論付けた。

「桜井もどつかの進学校だったよね」

「うん。あまり、勉強が嫌いじゃなかったのも大きいかも」

そう言つて、それは違うかな、と思ひ直す。ただ、勉強せざるをえなかったのだ。恐らくは、他の子たちも。ESP能力者は家庭に何らかの問題を抱えている。前に、京子はそう言った。遊んでいる余裕などは皆無で、そうした環境から脱却するには何らかの社会的な盾を手にする必要だった。それだけだった。崇高な考えがある訳でもない。ただ、現実的な問題解決として、それを用いただけに過ぎなかった。

京子は、そうした境遇ではなかったのだろうか。ぼんやりと、そう優は思いを巡らせた。

「……桜井つて何か良いシャンプーでも使つてんの？」

優の枕に顔をうずめていた京子が不意に言う。

「京子、それつて変態っぽいよ……」

華がぼそりと呟く。

「嗅いでないし！ 不可抗力だつて！」

京子も自分の失言に気付き、顔を赤くして否定した。

今までそれをボーツと見ていた愛が突然動く。

「ちょ、愛ちゃん！？」

「……確かに良い香りがする」

抱きついてきた愛に、優が抗議の声をあげる。しかし、それは易々と無視された。

「でしょ！ 別に嗅いだ訳じゃなくて、自然に鼻についたわけ！」

愛に塞がれた視界の端に、華がこちらをチラチラと見ているのが映る。

「これ、男女逆だったら確実にセクハラなんだけど！」

「……イフに意味はない。今を生きないと」

「何どさくさに紛れて良い事言ってるの!？」

「ガヤガヤと騒がしくしている間に、優の部屋は日付変更線を跨いでいった。」

2・5章 2話

手のひらを太陽にかざす。そのまま、くるりと手首を右回転。

優の放った単純後退の合図に、雲一つない大空で隊列を組んだ約二百名の中隊員が後退を開始する。

「第一小隊、第六小隊は少し横に膨らみすぎかな。第二から第五までも少し詰めて」

中央の最前面でその様子を見ていた優は、いくつかの気になる点を指摘した。それに従い、再び小さな移動が始まる。

「オツケーです。次」

次は手首を左回転。単純前進の合図だ。

激しい戦闘中では、銃声や風切り音が原因で、命令を聞き取れない場合がある。このジェスチャーは訂正信号の役割を担っていた。

「えと、単純前進は完璧です。少し早いですが、休憩にしているのですか？」

優はそう言っ、地上から訓練を見守る奈々を見た。上空からでは表情なども見えない為、わざわざ視線を移す必要はないのだが、習慣というものはそうした合理性を凌駕する。

「いいわよ。ご苦労様」

奈々の言葉に優は頷いて降下指示を出した。第一小隊から順番に芝生の上に降下していく。優が地上に降り立ったのは最後だった。

「桜井隊長！ お疲れ様でした！」

機械翼を格納しようとして四苦八苦しているところに声がかげられた。格納を諦めて顔を上げると、スポーツドリンクを差し出して微笑する詩織と目があつた。

「ありがと」

にこりと笑って、優はそれを受け取った。その時、手が僅かに触れ合って、詩織の肩がビクンと震える。やはり、まだ男性恐怖症は完全には治っていないらしい。あまり気にしすぎるのは逆効果だと

考え、優は気付かない振りをした。

「桜井さんが中隊長になるって聞いた時は驚きましたけど、凄くお似合いです」

「そうかな。白崎さんとかの方が適任だと思っただけ……」

詩織の言葉に苦笑する。

優の返事に、近くにいた凧がこちらを振り向いた。

「いえ、私は桜井くん以外に中隊長が務める人はいない、と考えている。そう卑下するものではない」

堂々と言い放つ凧。はつきりと断言され、優は戸惑いの視線を凧に向けた。目が合う。優は思わず凧の深い漆黒の双眸に見入った。前も、こんなことがあったな、と記憶を辿る。あれは、近接格闘訓練をしていた時だっただろうか。この瞳は苦手だ、と優は思った。心の奥を見透かされているかのような錯覚に陥ってしまう。

優は意識的に視線を外した。

「私も、桜井くんが中隊長であることは妥当だと考えます。恐らくは、皆さんもそうでしょう?」

いつの間に傍にいたのか、第二小隊長の姫野雪が淡紅色の双眸を樂しそうに細めて肯定の言葉を紡いだ。

屋上の一件以来、雪が話すところを見るのは初めてだった。

雪が会話に入った途端、場の空気が張り詰めたような気がした。しかし、白亜の髪と、陶器のような白い肌を持つ当人は、それに気付いていないように微笑を浮かべたままだ。对象的に、漆黒の髪と常闇の双眸を持つ凧は能面のように不気味なほどの無表情を貫いた。「や、やっぱり皆さんもそう思いますよね! 桜井さんはもっと自信を持つべきです!」

妙な雰囲気を払拭しようと、詩織が明るい声でそう言った。優もそれに合わせて頷く。

「そ、そうみたいだね。頑張ります、はい」

その言葉に、雪は微笑を浮かべたままクルリと背を向けた。それを合図に凧も興味を失った、というようにその場を後にする。残さ

れた優と詩織は互いの顔を見合って、安堵の息をついた。

「私、姫野さんが笑うところ初めて見ました。桜井さんはよく話されるんですか？」

「いや、一回しかないはずだけど……」

優はそう言って、去っていく雪の背を眺めた。一瞬、彼女の姿が揺らぐ。

優は何度か瞬きをして、再び雪に目をやった。しかし、今度は色の抜けた長い髪が風になびくのが見えるだけで、優は僅かに首を傾げた。

2・5章 3話

神条奈々は副官の長井加奈と共に書類整理に追われていた。亡霊が現れるたびに、彼女たちはその被害規模・事態の経過・戦闘記録などの細かな書類をまとめなければならぬ。

「加奈、少し休まない？」

疲れた様子で、奈々が提案をする。加奈は涼しい顔で頷いた。

「そうですね」

待つててください、と言って加奈はコーヒーを淹れに、席を外した。

誰もいなくなった部屋で、奈々は崩れるように椅子に座りこんだ。デスクワークが苦手というわけではないが、口が裂けても得意とは言えない。

椅子に座ったまま目を瞑って休んでいると、加奈がすぐに戻ってきた。

「随分とお疲れですね。どうぞ」

コーヒーカップを受け取り、奈々は加奈に向かって微笑を向けた。

「ありがとう」

カップに口をつけると、温かい液体が口腔を満たし、濁っていた思考がクリアされる。

暫くコーヒーを味わっていると、加奈がにこやかに笑いながら一つの提案をしてきた。

「司令、外、歩きませんか」

「外？」

「ええ。ずっと中にいると精神的に参ってしまうと思うんです。息抜き、しませんか」

奈々は窓の外に目をやった。冬の緩やかな日差しがブラインドの間から洩れている。

「そうですね。少し散歩しましょうか」

奈々はかけていたコートを手に取って、制服の上から羽織った。

加奈は寒さに強いのか、何も上から着込むことはしなかった。それを見て、少し羨ましい、と思う。奈々は寒さに弱く、昔から冬になれば風邪をひいて寝こむことが多かった。今でも、冬は好きではない。

本部から出ると、冷んやりとした風が奈々の頬を撫でた。普段は肌寒く思える風だが、精神的な疲労がたまっている今は心地よく感じられた。この風の彼方に亡霊がいるとは到底思えない。

「あ、優君たちですね」

加奈が正面ゲートの方を見て、言う。見ると、第一小隊のメンバーが五人、それに加えて第三小隊長の詩織、第四小隊長の舞が敷地内に入ってくるころだった。昨日、外出許可を出したことを思い出す。

「青春ですねー」

それを見た加奈がボソツと呟く。奈々は苦笑した。

「あなたもまだ若いでしょうに。さっさと恋人の一人や二人つくりなさいよ」

「出会いがないんです。司令こそ、さっさと結婚したらどうですか」
加奈が不機嫌そうに言う。

「そうね。向こうがその気なら、ね」

そう言っつて、奈々は優の方をちらりと見た。加奈が啞然とした表情になる。

「し、神条司令、流石に未成年に手を出すのは犯罪ですよ！」

「冗談よ」

加奈のオーバーな反応にクスクスと奈々は笑った。でも、と続ける。

「でも、私はあの子たちが大きくなるまで見届けたい。それまで、結婚とかは考えないことにしている」

「司令……」

「初めはね、ここに飛ばされた時、子守りを押しつけられた、と思

った。体よく、責任を押し付けられた、ってね」

加奈が複雑そうな顔で頷く。加奈も、少なからず同じ気持ちだったのかもしれない。

「でも、今はこの仕事がとても誇らしいわ。自分で、守る事が出来る。あの子たちの行く先を、この目で見届けることができる。私は、感謝している」

何に感謝しているのか、と加奈はきかなかった。賑やかに帰路につく少年と少女たちを見て、微笑む。

「さあ、ウチの撃墜王^{キース}を墮とすのは誰かしら？」

3章 1話 篠原華(3)

『敵反応接近。高度維持』

通信機から届くオペレーションに耳を傾けながら、華は背後を振りかえった。第一小隊に所属する約三十名の少女達が機械翼を広げ、ピタリと後ろに続いている。しかし、その中に見慣れた少年の姿はなかった。桜井優は中隊長という立場に移った為、これからは第一小隊として華と一緒に行動する事はない。何とも言えない喪失感が華の胸を満たした。

思えば、あつという間だった。はじめて顔合わせをした時、華は優の容姿に目を奪われた。容姿、というよりもその雰囲気惹かれたのかもしれない。塵気楼のような、うたかたの幻想のような、そんな不思議な雰囲気は纏っていた。目を離せば、もう二度と会うことができないのではないか、という根拠のない刹那的な儚さ。それが、優に対する華の第一印象だった。

優の初陣では、良いところを見せようと華は必要以上に張りきった。結果的に周囲への注意が散漫し、優に助けられることになったのだが、最終的に華は優と仲良くなるきっかけを手に入れた。名前を覚えられていなかったのはショックだったが、親しくなれたことが嬉しくて、そんなことはすぐに気にならなくなった。

あれから二ヶ月。優はあつという間に華を追い抜き、六つの小隊を束ねる中隊長の座についた。順当で妥当な結果だ、と思う。優にはそれだけの力と結果があった。

しかし、華は最近、慢性的に得体のしれない不安感に襲われる。僅か二ヶ月でこれだけの差をつけられたのならば、数年後には一体どうなっているのだろう、と。桜井優は、優秀すぎた。誰もが、その有用性に気付き始めている。

どこまで、行くんだろう。

このまま、どこか手の届かないところへ行ってしまうのではない

か。遙かなる高みへと、彼は一人で進んでいくのではないか。そう、考えてしまう。

桜井優の歩む速度は、他の追隨を許さない。以前、『救世主』と報道されていたことがあった。それは、恐らく正しい。そして、彼の隣を歩むのは自分ではない。そう、思った。

『カウントを開始。構え』

オペレーションが、どこか遠くの世界のこのように濁って聞こえる。華はゆっくりと小銃を構えた。

3章 深淵から覗くモノ

第六小隊長、白崎凜は自室でベッドに腰かけながらテレビから流れてくる音声に耳を傾けていた。

部屋は凜の性格を表すかのように物の少ない、質素なものだった。ポスターやぬいぐるみ、装飾品の類は一切見当たらない。その部屋に、スピーカーから深刻な声色をした男の声が響く。

『氏は欧州の経済崩壊は最早避けようがないとの見解を表明し、今後日本にもその影響が』

『ユーラシア連合の強硬な姿勢に米国は懸念を表明し、太平洋における静かな攻防での連携を』

『失業率は七・二パーセントまで改善しましたが、欧州の動向によつては』

場面が変わり、コメンテーターが中立の報道機関という立場を利用して、いくらかの都合の良い発言を行う。言葉に還元されて中立性を失った事象は全く別の姿をして電波を伝っていく。政治的な婉曲が続き、感情論にシフト。沈黙の螺旋。

また場面が変わる。国会の一部が切り抜かれた映像。官僚の作成した答弁書をもとに、肥大化した行政部の問題について議員が空虚な言葉を紡いでいく。

膨大なコストがかけられた人形劇を眺めながら、凜は指で膝をとんとんと叩いた。

何をテレビごときでイライラしている？

頭のどこかで冷静な声が聞こえた。急速に頭が冷えていく。

何故、こんなくだらないことでイライラしているのだろう。

姫野雪。

自己分析の結果、凜はその原因を突き止めた。あの涼しい笑みを思い出し、再び激しい感情が湧きおこる。

普段、何事にも関心を示さない彼女が、桜井優の話だけに反応したことに凜は苛立ちを感じていた。

嫉妬？

その単語が浮かび、凜は冷笑した。確かに、自分は嫉妬している。桜井優の特異性を評価しているのが自分だけではない、というのは面白くない。原因は独占欲だった。

冷笑が苦笑に変わる。くだらない。

しかし、姫野雪が何らかの脅威になりうる、という可能性は検討しておかなければならない、と凜は判断した。

口元が綻ぶ。とりあえず、桜井優を中隊長にすることは叶った。賽は投げられた。

もうテレビが放つ雑音は気にならない。凜にとって、それを気にする必要は遠の昔に失われていた。

3章 2話 鎖の少女

暗闇に、一人の幼い少女が佇んでいた。

その瞳に光はなく、一切の生気を感じさせない。しかし、少女は確かに生きていた。

ピクリ、と時折身体が痙攣し、拘束具が派手な金属音をたてる。不意にサイレンが鳴った。拘束具のたてる金属音が激しくなる。少女は震えていた。

部屋に一条の光が差す。金属性の扉が音もなく開き、そこから中肉中背の男が現れた。顔は見えない。暗闇のせいではなく、顔を真っ白な面が覆っているのだ。不自然に開いた二つの穴から、濁った瞳が少女に突き刺さる。拘束具のたてる雑音が、格段に大きくなった。

男が少女に近づく。その手には、金属製の奇妙な機械が握られていた。

何も映さなかった少女の瞳に、はじめて恐怖の色が宿る。これから始まるであろう悪夢から逃れようと、必死に抵抗しようとする。男はゆっくりと近づき、少女の恐怖心を煽った。嗚咽がもれ、掠れた声で救済を乞う。

その時、何かが切れる音がした。仮面越しに男が驚いた様子が伝わる。次の瞬間、男の顔が消し飛んだ。ねばりとした液体が少女に降り注ぐ。一拍遅れて男の身体が床に崩れ落ちた。

少女は、拘束から解き放たれた左手を見て不思議そうな表情を浮かべた。試しに右手を動かす。拘束具は簡単に破れた。

恐る恐る一步踏み出す。ぴちゃり、と右足が液体に触れた。少女の肩がビクンと小さく震える。しかし、何も危害がないことにすぐ気づき、少女は再び足を踏み出した。

男が入ってきた扉の前に立つと、それは勝手に二つに分かれ、横にスライドした。視界が光で覆われ、あまりの眩しさに目を瞑る。

意を決して、一步踏み出す。外は、光で満ち溢れていた。手を目の前にかざし、光を塞ぎながらゆっくりと辺りを見渡す。そこには、無機質な白亜の通路が延々と広がっていた。見慣れぬ光景に首を傾げる。少し考えてから、少女は出口を探してふらふらと歩き始めた。

夢を見た、という記憶がある。しかし、内容は思い出せなかった。桜井優は寝起きでスッキリしない頭を抱え、洗面台へと向かった。鏡に映った寝癖を手で押さえつけ、すぐに無駄だと悟り、ヘアアイロンの電源を入れる。アイロンを温める間に、優は冷水で顔を洗い、意識を覚醒させた。濡れた皮膚が外気に冷やされ、軽く身震いする。そろそろ温水にしたほうがいいかもしれない。

「おっはよー！」

勢いよく扉が開かれる音が響き、廊下から京子がひょっこりと顔を出す。最近は毎日のようにやってくる為、何も言う気が起きない。ノックがないことについては既に諦めている。

「今取りこんでるからちよっと待ってて」

優は温まったヘアアイロンを寝癖にあてて、丁寧に梳かした。

「……どうしたの？」

廊下から京子がじっとこちらを見ていることに気付き、優は僅かに視線を向けた。京子が慌てたように視線を逸らす。

「な、何でも無い。私より良いアイロン使ってるなあ、って思っただけ」

「ああ。これ、黒木さんに勧められて買ったんだけど、やっぱりいやつなの？」

「へえ。黒木さんと、そういう日用品の話するくらい仲良かったんだ」

僅かに棘のある口調に、優は眉を寄せた。京子の不機嫌そうな視

線が痛い。

優は問題のアイロンに視線を落とし、首を傾げた。

「えっと……アイロン使う？」

「……」

どうやら外したらしい。視線が鋭くなった。

丁度寝癖をなおし終え、アイロンの電源をオフにする。優は雰囲気を変える為に話題を探した。

「……明日、どこか遊びに行かない？」

「……許す」

一体何に対して怒っていて、何が許されたのか良くわからなかったが、優は安堵の息をついた。

「さて、朝食に行きませんか」

「ん」

二人して部屋を出る。廊下にはいくつかのグループが点在し、朝からお喋りに興じている。優はそれらのグループに軽く挨拶しながら、セキュリティゲートを通過して食堂へと向かった。

「今日は何にする？」

「うどん」

「良く飽きないね……」

京子は朝食に大体ラーメンかうどんを選ぶ。曰く、寝起きでも食べやすいとのことだったが、優には理解できなかった。

食堂に入るといつもように賑やかな雰囲気にもまれる。優は珍しく人の並んでいない券売機に電子カードをあて、素早く認証を済ませた。京子は隣の券売機で月見うどんかキツネうどんかで悩んでいる。待つのが馬鹿らしくなって、優は出てきた食券を手にカウンターへと向かった。

「華ちゃん、おはよう」

カウンター前の行列の中に華の姿を見つけて声をかける。華はパツと振り返り、笑顔を振りまいた。

「おはよう、桜井君！」

「明日、京子と遊びに行く予定なんだけど、華ちゃんも良かったら行かない？」

「行く！ 行くよ！」

嬉しそうに身体を弾ませる華を見て、頬が緩む。麺類を受け取る別のカウンターに行っていた京子の元に駆け寄り、優は一応の確認を取った。

「明日、華ちゃんも来るって」

「まあ……そうなるよね」

呆れた顔をする京子に、優は顔を傾げた。今日の京子はよくわからない。

「じゃあ、愛ちゃんも誘ってくるね」

優はにこやかに笑って、既に席に座っているだろう愛を探しにその場を去った。

残された京子は額に手を当て、深いため息をついた。

「柄じゃないなあ……」

呟きは、喧騒に紛れて消えていった。

3章 3話 鎖の少女(2)

第五小隊長、進藤咲の朝は悪夢から始まった。

上半身だけベッドから起きて、汗でびっしょりになったパジャマの袖で涙を拭う。悪夢を見るのは日常なことだった。しかし、高梨市の戦いから症状が酷くなっている事に気づいて戦慄する。咲には、それが精神的な要因によるものか、物理的な要因によるものなのか判断がつかなかった。

よろよろとベッドから立ち上がり、口元を押さえて浴室へと駆けた。シャワーから熱湯が注がれる。咲はパジャマを脱ごうともせず、それを全身に浴び、意識を無理やり覚醒させた。

スポンジを取り出し、濡れたパジャマの上から腕を擦る。何度も何度も、見えない汚れをおとそうとするかのように、繰り返す。皮膚が赤くなっても、咲は手を止めようとはしなかった。

嗚咽が漏れる。咲は泣きながら、全身を同じように皮膚が荒れるほど強く擦った。

全身がヒリヒリとする。しかし、それは咲にとって生きている事を示す重要なシグナルであり、酷く心地のいいものに感じられた。

落ち着きを取り戻し、浴室からふらふらと出る。濡れたパジャマを洗濯籠に放り投げ、震える身体をバスタオルで包みこんだ。いつものように虚脱感に襲われる。しかし、呆けている時間の余裕はない。既に時計の短針は9の数字を超えていた。慌てて、身支度を済ませる。

着替えが終わり、咲は部屋を出た。濡れたままの髪が気になったが、意図的に無視する。廊下にいた数人の部下から声をかけられ、咲は最小限の挨拶を返した。

食堂に辿りつくくと迷わず朝食セットを選ぶ。出てきた食券を手にして、咲は機械的にカウンターへと向かった。その時、一人の少年

の姿が目に入る。咲は不思議な安堵感に包まれ、全身の緊張を解いた。ESPエネルギーを恐る恐る辿り、異常がないことを確認する。咲のいつもと変わらない一日が始まった。

翌日、優は普段のように駅前で京子たちを待っていた。わざわざ現地で待ち合わせをしたのは、亡霊対策室における奇妙な慣例のせいである。街に個人的な用事がある人は先にそれを済ませ、他に迷惑をかけないことを目的とした暗黙のルールらしいが、朝から遊ぶ場合も現地で待ち合わせをする事が多く、不可解な点が多い。習慣とは恐ろしいものだ、と優はぼんやりと考えた。

携帯で時間を見る。11時40分。時間まで20分の余裕がある。少し早く来すぎた、と優は後悔した。以前に麗とデートした時はそれほど寒さを感じなかったが、最近は本格的に寒くなってきている。次からはもっと遅く来よう、と優は小さく決心した。

「お、遅くなつてすみません！」

予想していた方向とは別から話しかけられ、僅かに心臓が跳ね上がる。振り返ると、息を切らせて、少し疲れた様子を見せる詩織の姿があつた。その後ろから、軽く手を振りながらゆつくりと歩いてくる舞の姿が見える。

「いや、遅れてつてまだ時間まで20分あるよ」

「いえ！ 桜井さんを待たせたことに変わりはありません！」

大袈裟に手を振って否定する詩織に苦笑する。次に優は詩織の背後で涼しそうな顔をしている舞に視線をやった。

「黒木さん、おはようございます」

「おはよー。何分くらい待つてたの？」

ハスキーな声で舞が陽気に応える。

「10分くらいです」

「その間、何人かに声かけられたでしょ？」

含みのある笑みを浮かべて言う舞に、優は目を丸くした。

「見てたんですか？」

「……適当に言っただけなんだけど、本当だったんだ」

呆れた表情をする一つ年上の少女に、優は困った笑みを浮かべた。
「うーん、多分からかわれてるんです。二回りも歳上の方から声かけられても、素直に喜べないです」

「……多分それ、割り和本気だと思っただけど」

「だと嬉しいんですけど。ところで、黒木さんは詩織ちゃんどこか行つてたんですか？」

視線を詩織に戻す。詩織はうつ向き気味に、恥ずかしそうに口を開いた。

「はい。あの……化粧品を選ぶのを手伝っていただいて……」

詩織は15歳、舞は17歳だ。なるほど、と納得する。舞はよく見れば薄く化粧をしていることが多いが、詩織が化粧をしているところは見たことがない。色々と教わっているのだろう。

「あ、あの、桜井さんは」

「おっはよう！」

詩織の言葉は元気な挨拶に掻き消され、その続きを聞く機会は失われた。声のした方向に首を向けると、その発信源である京子が数メートル離れたところからこちらに近づいてくる場所だった。

「おはよう」

「キョウちゃんおはよー」

「おはようございます」

三者三様の挨拶を返す。

「皆早くない？ まだ15分あるよ」

「ボクたちも今来たところだよ。ユウくんはその前から逆ナン待ちしてたみたいだけ」

「なっ！ そ、そんなつもりじゃないですー！」

「……されたの？」

「……2回だけ」

「だけって時点で感性が既におかしいよね」
クスクスと笑う舞に優は何も言えなかった。

「あ、華と愛も来たみたい」

京子の視線の先を辿ると、二人仲良く並んでくる華と愛の姿が人混みの中に見えた。

「おはよう。皆早いねー」

「……おはよう」

時計を見ると時間にはまだ10分の余裕があった。

「本当に皆早いね」

「それだけ楽しみにしてたってことじゃない？」

舞が意味ありげに笑うが、優にはその意味が分からなくて、小さく首をかしげた。

「で、どこに行くんですか？」

年長者の舞に視線を向ける。

「んー、カラオケとかも飽きたし、久しぶりにビリヤードは？」

その提案に、全員が肯定の返事出す。舞は満足そうに頷いた。

「じゃ、行こっかー！」

3章 4話 鎖の少女(3)

「ここ、良く来るの?」

受付で何かを記入している舞の後ろ姿を見ながら、優は横にいた華に尋ねた。

「うん。色々あるから便利だしね」

優たちが立ち寄ったのは、階によって様々な設備が整った複合娯楽施設だった。一階が受付とロッカーになっていて、二階にネットカフェ、三階にダーツ・ビリヤード、四階に温泉と続いている。受付の上にある電子パネルに、岩風呂・水風呂・電気風呂・露天風呂などの紹介が載っていて、優はそれをぼんやりと眺めた。

「何? 混浴でもしたいの?」

優の視線に気づいた京子がニヤニヤと笑って茶々をいれてくる。

「いや、色々あるなあと思って」

「あ、そういえば桜井さんって本部の大浴場を利用できないんですか?」

何かに気づいたように、詩織が声をあげる。優は頷いた。

「男女比がここまで偏つてると、さすがに男湯を作るのは無理みたいだね。部屋に浴室があるから別に困らないけど……」

亡霊対策室はその特性からストレスを極力解消する為に、いくつかの娯楽設備が設けられている。大浴場もその設備の一つで、優が人づてに聞いた話では多様な風呂設備が用意されているらしい。しかし、現在は女湯しか存在せず、優が入った事は一度もない。本部には他にもテニスコートや図書室、ちょっとした体育館も備わっている。

「受付終わったよー」

受付から戻ってきた舞が話に加わる。ボールとテーブル番号を示す札が入ったトレイを胸に抱えていた。

「あ、持ちますよ」

少し重そうだった為、さっと受け取る。

「ありがと」

「三階でしたっけ？」

「だね」

六人は一階で止まっていたエレベーターに乗り込んだ。エレベーターが狭い為、少し窮屈に感じる。

「そついえば、何時間設定にしたんですか？」

「三時間。ユウ君はビリヤードの経験あるの？」

「一応あります。でも、全然下手です」

エレベーターが止まり、扉が横に開く。舞を先頭に六人は足を進めた。

中は黒を基調としたフロアになっていて、明かりも制限されて薄暗い雰囲気になっている。どこからともなく流れる落ちついた音楽が妙に合っていた。エレベーターの正面にダーツボードが三つ並び、休憩用のソファが置かれている。ビリヤードテーブルがあるのはフロアの奥で、台は全部で六つあった。壁際に自販機が三つ並び、フロアの端にトイレに繋がるドアがある。こういった娯楽施設はどこも同じような作りをしているな、と優は妙に感心した。何か共通規格でもあるのだろうか。

手前の台では一組の若いカップルが静かにゲームを楽しんでいる。優たちはそれを邪魔しないように、声を抑えながら番号札で指定された奥の台へと向かった。

鞆を置き、早速3つにグループ分けをする。

「ユウくんがどれくらい上手いのか分からないけど、何だか上手そうだからハナっちとね」

ということ、華は上手いのだろうか。優は華に視線を移した。

華は若いカップルのほうを見ていて、表情が見えない。

「華ちゃん？」

「え？ あ、何？」

「僕とだって。向こうの台で良い？」

「う、うん」

キユーを手にし、バンキングの為に手玉をセットする。真剣な目でキユーを構える華の姿が妙に様になっていて、優は意外な一面を見た気がした。

「テレビゲームのビリヤードみたいに射線が見えれば良いのに……」
華がぼやく。優は苦笑した。

ゲームは優の勝ちだった。優が上手い、というよりも華のミスが目立った結果だった。

「ちよつと飲み物買ってくるね」

「あ、わたしもー」

プレイ料金にドリンク代が含まれている為、自販機にコインを投入する必要がない。優は迷わずカフェオレを選んだ。続いて華が同じものを選択する。

台の方に戻ると、残りの四人はペアマッチを始めていた。優たちよりも早く終わっていたのか、進行が早い。優と華は壁際の席につき、それを眺めた。

「……愛ちゃん下手だね」

「これでも上手くなつた方なんだよ!」

率直な感想に、華がフオローを入れる。ペアの舞が上手く、残りの京子と詩織がそこそこである為にバランスが取れているが、ミスが目立つ。手玉がカラーボールと仲良くポケットインするのを見て、そっぴいえば愛は不器用だったな、と思考を巡らせた。

「ねえ、桜井君」

華の呼びかけに視線を愛から華に移す。華は四人を眺めたまま、横顔しか見えない。

「中隊長って大変?」

「前よりは大変かも。でも、神条司令が殆どやってくれるし、華ち

やんとかが小隊を統率してるから、何とかやっていけそう」

「何かあつたら言つてね。私、力になりたいから」

急に特殊戦術中隊の話を持ち出した華に優は怪訝な表情を浮かべた。何故、いきなりそんな事を言い出したのだらう。考えてみるも、答えは出ない。

「うん。遠慮なく頼るよ」

そう答えると、華こちらに向き直り、本当に嬉しそうな表情を見せた。振り向いた際に、茶色に染められた髪がはらりと舞う。

「そういえばさ、私たちが初めて自己紹介した時、夕食ご馳走しようって話あつたよね」

「ああ……何だか懐かしいね。亡霊が出てお流れになったけど」

「うん。まだお礼できてないから、今度どうかな。頑張っちゃおうよ」
「お礼つて……、そんなこと言ったら、高梨市の時とか僕も何度も助けられてるからチャラと思うんだけど」

「細かい事は気にしない！」

にこやかに笑う華に、優は釣られて笑った。

そこに、ちょうどゲームを終えた四人が戻ってくる。

「ごめんねー。こつち早く終わっちゃったから先にペアやってたよ」
申し訳なさそうに謝る舞。それに対して華が何故か逆に謝り返す。優はそのやり取りから目を離し、愛に視線のやった。

「愛ちゃん、次僕と組まない？」

「……良いの？」

「うん」

「じゃあ、次は私とキョウ。しおりんとハナっちの組み合わせでいい？」

舞の提案に三人が頷く。

華が僅かに不服そうな顔をしているのが目に入って、優は首を傾げた。

3章 5話 鎖の少女(4)

「司令、凜ちゃんから、訓練許可の申請が来てます」

加奈の言葉に、奈々はディスプレイから視線を外し、加奈の差し出した一枚の書類を受け取った。

「飛行訓練？」

「ええ。機動力に問題を感じていらっしゃるようです。熱心ですよ」

奈々はじつと書類を眺めた。自主訓練の届けを凜から受けるのは珍しい事ではない。むしろ、日常なことだった。

「最近、更に増えてるわね」

「そうですね。優君の存在が良い刺激になってるんじゃないでしょうか」

奈々は考える素振りを見せて、小さくため息をついた。

「あの子を見ると、昔の私を思い出す」

加奈が不思議そうな顔を浮かべる。

「昔の司令、ですか？」

「ええ。凜はあまりにも真っ直ぐすぎて、悲しいまでに現実的すぎる。それが、たまに怖い」

「怖い……」

「そう。現実の一つではない。抽象的な意味ではなく、人は四歳になれば仮想的な世界を作る。『いま、ここ』を離れ、表象世界を生きていく。そうやって、人の心を理解していく。それはとても重要なこと。でも、私たちは代わりに現実を見失っていく。二重化していく不条理な世界に、あの子は対応できていないんじゃないかしら」

かつて、感情を殺して最大限の効率を求めることが強く生きる事だと思った。それは、結果的に一つの世界を壊した。奈々はまだ若く、ノイズの先に待つ『真の現実』のみしか見えていなかった。現実が投影されたもう一つの現実が見えていなかった。見ようとしなかった。

「あの子は聡い。そして、まだ幼い。アンバランス過ぎるのよ。私と同じ失敗を繰り返して欲しくない」

「司令……まだあのことを気にしてるんですか？」

加奈の声が僅かに震える。奈々は加奈の顔を直視できなくて、ディスプレイに無意味な視線を向けた。

「忘れてはいけないのよ。それが、二重化した世界を生きるということ。どちらも、決して忘れてはいけない」

思春期を迎えた子どもには、ふと懐疑的になる時期がある。

何故、勉強しなければならないのか。何故、大人のいうことを聞かなければならないのか。何故、人を殺してはいけないのか。

でも、それに対する答えを出すには、あまりにも知識が乏しく、社会への不信感がたまっていく。反抗期。

しかし、凜は違う。凜は恐らくシステムが形成されていく過程を正しく理解している。彼女には、それだけの知恵と知識がある。

普遍的な思春期の課題を容易に退けた彼女は、その奥に聳え立つ更なる壁を見てしまったのではないか。そう、奈々は危惧した。

かつての自分と同じように。二重化していく世界に、剥離していく現実には、隔絶される感覚に怯えているのではないか。

故に、ノイズを消そうとする。無視しようとする。幼年期に置き忘れた真の現実を取り戻すために

しかし、ノイズと現実の違いを正しく理解していなければ、その先に待つのは現実の崩壊だ。

『桜井優を中隊長に就かせるべきです。先日の闘いで、システムの脆弱性がはつきりしました』

ふと、以前に凜に言われた言葉が脳裏に蘇る。迷いのない真つ直ぐな瞳。綺麗だった。

それを思い出して、凜と昔の自分は違うな、と考え直す。凜は、一人ではない。明確に桜井優を求めている。

羨ましいな、とふと思った。自分の学生時代には、そうした存在がいなかった。凜は恵まれている。

胸の奥で、チクリと何かが痛んだ。奈々はいつの間にかスクリーンセーバーに変わったディスプレイを意味もなく見つめ続けた。

「……疲れたあ」

ぐったりとした様子の優が呟く。ビリヤードが終わった後、女性陣の買い物に散々振り回され、肉体的にも精神的にもボロボロだった。

「さて、夕食はどうする？」

まだまだ元気な舞が、疲弊しきった優を無視して残りのメンバーに問いかけた。

既に陽は落ちて、人工的な光が街を満たしている。時刻は十九持をまわっていた。

「私は中華が食べたい気分」

京子が我先にと希望を言う。しかし、華がそれに不満を漏らした。「やだよ。京子の言う中華ってラーメン屋でしょう？ 今、無駄に値段高いし、それだったら私は洋食が良いな」

「……お寿司」

優がそれに続く。舞が詩織に視線を向けると、詩織は慌てたように優を見た。

「わ、私は何でもいいです。桜井さんは？」

視線のバトンリレーを受けた優は、投げやりに答えた。

「休めるならどこでも」

「じゃあ、中華で決定ね」

「絶対やだ！」

「……中間をとってお寿司」

「なんの中間!？」

わいわいと不毛なやり取りを続ける女性陣を眺め、とりあえず休憩したい、と優は呟いた。

視線を辺りの街並みに向ける。居酒屋、スナックが目に入るが、このメンバーではどれも適さない。

優はそのまま人混みをぼんやりと眺めた。楽しそうに笑う人々。賑やかな空気。平和な風景。その中に、優は小さな違和感を覚えた。異質な何かを感じ、無意識に足を踏み出す。

横断歩道の中に、チラリと白い何かが見えた。視線が釘付けになる。人混みの中に隠れ、フラフラと歩くそれが視界にはっきりと映った時、優は弾かれたように地を蹴った。

「じゃあイタリア料理とかは？」

「この辺りにあったっけ？　そういう食材が値上がってから殆ど潰れてるような気がする」

舞の提案に、京子が疑問を投げた時、華の視界の端で優が動いた。「桜井君……？」

何かに見入られたかのように人混みの中を見つめながら、ふらりと足を進める優を華は不思議そうに見つめた。

不意に、優が駆け始めた。驚いて名を叫ぶ。

「さ、桜井くん？」

華の声で、舞と京子も優の異変に気付いた。

「桜井？」

「ユウくん？」

すぐに京子が後を追う。華、舞愛、詩織が遅れて続く。

「いきなり何を」

京子の疑問は、開けた人混みの先を見て解消された。

割れた人混みの向こうにいたのは、汚れた白いワンピースを着た幼い少女。それを正面から抱き締める優。

華の目が大きく見開かれる。優に抱かれた少女は明らかに衰弱していた。しかも裸足で靴を履いていない。

それで、華は少女の身の上を容易に理解した。しかし、今はそんな事は気にならなかった。

少女を抱き締めて、じっと目を瞑る優の横顔が聖母のように慈悲に満ち溢れていて、ただその光景に見入った。

救世主。

その単語が、頭の中に自然と浮かんだ。

3章 6話 鎖の少女(5)

人混みの中、一人孤独に倒れていた少女を抱き、優はうまく回らない頭を必死に働かせた。

見た目は10歳前後に見える。貧血、という感じではない。明らかに衰弱している。白いワンピースを着ているだけで、靴はおろか靴下さえも履いていない。白い足は、どこかで切ったのか血が滲んでいた。

腕の中で少女が僅かに身じろぐ。抵抗しようと、逃げようとしているようだ。周りの人たちから、何かという視線が向けられるが、全く気にならなかった。

「黒木さん、救急車を」

言いかけて、止める。この少女の様子は異常だ。まるで何かから逃げてきたかのように。そう考えて、本当に逃げてきたのではないか、という考えが頭に浮かぶ。

冬の夜にワンピース一枚で、裸足で、街に出かけるなど有り得ない。

優の脳裏に、遠い過去の記憶が蘇る。

優は、救急車を呼べなかった。

もし、この少女が幼き頃の自分と同じ境遇であったならば、という不安。本当に虐待から逃げてきたのなら、救急車を呼べば親にも連絡がいくだろう。明確な虐待の証拠が上がらない限り、連れ戻されてしまう。証拠があがっても、この少女がそれを否定すれば意味がない。虐待を受けた直後の子どもは、正常な判断能力を失っている事が多々ある。虐待されていても、親を求め続ける子どもも多い。それに、今の日本はそういったケースに対する法が整備されていない。

それは、到底確率の低いイフの話。しかし、優はそれを幻想として切り捨てる事ができなかった。

優は救急車を呼ぶという選択肢を遂に放棄した。

「黒木さんタクシーを呼んでください」

「え？ 救急車のほうが」

「タクシーをお願いします」

断言する優に何かを感じ取ったのか、舞は何も聞かずに携帯を操作し始めた。

腕の中で少女が小さく震える。優は強く抱きしめ、大丈夫だから、と何度も囁いた。

「少し時間がかかるって」

電話を終えた舞が曇った表情で言う。

「ねえ、やっぱり救急車のほうが良いんじゃないの？」

京子が衰弱した少女を見て、不安そうに呟く。優は首を振った。

「亡霊対策室まで運ぼうと思ってる。時間もそんなにかからないし」

「でも、下手したら誘拐扱いされる場合だって……」

「それはないよ」

はつきりと断言する優に、京子が不思議そうな顔をする。

「僕たちは、予備のないESP能力者なんだから」

京子と華が驚いた顔をする。優は弱々しく笑った。

「あんまりそれを盾にはしたくないけどね」

それを機に、沈黙が降りた。

優は静かに、タクシーが来るまで少女を強く抱きしめ続けた。

「本当無理するわね……」

強引に警備を抜けて医務室まで少女を運んできた優に、秋山明日香はため息を吐いた。

既に少女はベッドで休ませている。カーテンで仕切られた奥から、静かな寝息が聞こえた。

「でも、救急車を呼ばなかったのは正解だった。筋力が異常なほど

まで弱ってる。どういふ環境で育てられたのか知らないけど、こんな状態まで放置した保護者と引き合わせる訳にはいかない」

「あの……筋力が弱るといふのは……？」

「最低限の運動しかしていない、ということ」

素っ気なく言う明日香に、優は顔を伏せて黙り込んだ。それを見た明日香が笑う。

「そんな顔しないの。君が悪いわけじゃない」

「……はい」

それよりも、と明日香は言った。

「それよりも、あんな状態の女の子が街中を歩いてて、誰も声をかけなかったことが驚きよ」

カーテンで仕切られたベッドの方に目をやる明日香に、優は頷いた。

「傍観者効果ってやつでしょうか？」

「……良く知っているわね。本当、人口密度が高すぎるのも困りものね。その中で、迷うことなく動けた君は本当に凄いわよ。誇っていい」

優は返事に困って、曖昧に頷いた。

逡巡して、少女の今後の扱いを尋ねようとした時、医務室の扉が開き、奈々が顔を出した。驚いて反射的に椅子から立ち上がる。

「警備を無理やり突破したんですって？」

開口一番に笑いかける奈々に、優は頭を下げた。

「申し訳ありませんでした」

「そんなに畏まらなくていいわよ。警備の件はこちらでどうにでも出来る」

警備の件は、という言葉に優は顔を強張らせた。ゆっくりと頭をあげる。奈々の表情に苦渋の色が混じっているのを見て、これから続く言葉が読めた。

「でもね、優君が運び込んだ女の子を保護する事は難しい」

予想通りの言葉に、優は唇を噛みしめた。

「ここは軍隊なの。いえ、軍隊ではないけど、それに近い扱いを受けてる。民間人、しかも未成年を保護者の許可なく勝手に保護すると大問題になる」

「……はい」

こればかりはどうしようもないのだろう。それが、社会というものだ。優もそれが分からないほど子どもではなかった。

しかし、次に奈々から発せられた言葉は優の予想を裏切るものだった。

「だけど、個人的に家出少女を匿うだけなら、私には何もできないわよ」

そう言って、悪戯っぽく笑う奈々に、優は目を丸くした。

「良いんですか？」

「まあ、全てはあの子が目を覚ましてからね。私たちが勘違いしているだけで、何も問題はないかもしれない。そうでしょう？」

「はい」

「外で、あの子たち待ってるわよ。夕食、まだ食べてないんでしょう？ 行ってきたさい」

「はい。ありがとうございます」

優は頭を下げて、廊下へとつながるドアへと向かった。

医務室を出てすぐに、外で待っていた華と愛が駆けよってくる。

「どうだった？」

「命に別条はないみたい。すぐに良くなると思う」

華の疑問に笑って答える。それを聞いて、華は心底安心した顔を見せた。

「良かったあ。凄く弱ってるように見えたから、不安で不安で……」
「にこやかに笑う華。对象的に、その横にいる愛の顔が曇っている事に気付き、優は視線を愛に向けた。」

「愛ちゃん、何か気になる事でもあるの？」

「……身元は判明したの？」

「まだまだよ。証明書の類を身につけてなかったから、そういうのは

目を覚ましてからかな」

「……そう」

何かを考える素振りを見せる愛に、優は安心させようと言葉を続けた。

「本人が希望すれば暫くここに残れるようになったから、その後については心配しなくて良いかも」

愛が僅かに驚いた表情を見せる。最近では愛の細かな表情の変化を読み取れるようになってきた。無表情というわけではなく、少し表現が下手なだけなのだろう、と思う。

「だから、安心して夕食に行こう」

「だね。京子たちも待ってるし」

優は一度だけ医務室を振り返り、食堂へと続く長い通路を進んだ。

3章 7話 鎖の少女(6)

朝方、ふと目が覚めて、桜井優はベッドから上半身だけを起こした。時計を見るとまだ七時前だった。妙に意識がはつきりしていて、二度寝も出来そうにない。優は諦めて、洗面台へと向かった。

顔を洗いながら、昨日のこと 街中を裸足でふらふらと歩いていた女の子を保護したこと が頭に浮かび、あの子はどうなったんだろう、と疑問が浮かんだ。

寝癖をなおした後、優はパジャマから普段着へと着替え、自室を出た。京子が来た時の為に、部屋に『留守中』のプレートをかけておく。向かう先は医務室。この時間に医務室が開いているか疑問だったが、他にやることもない為、優は気に留めなかった。

携帯で時間を確認する。時間はまだ7時。廊下に人影はない。この時間帯の廊下を歩くのは初めてだった為、新鮮な気分を味わえた。特に、人影のない廊下、というのは珍しい。いつもはグループごとに数人が固まっっていて、酷く賑やかなのだ。

季節は冬。静かな廊下には冷やりとした空気が漂っていて、寝起きには清々しく感じる。優は朝の空気を楽しむかのように、ゆっくりと廊下を歩いた。

寮棟と中枢エリアを繋ぐセキュリティゲートの前に来た時、優は見知った顔を見つけた。第五小隊長の進藤咲だ。こちらに気付いた咲が驚いた様子を見せる。

「進藤さん、おはよう」

「……おはよう」

出来る限りにこやかに挨拶をしてみるが、努力も虚しく、咲は酷く怯えた様子を見せ、今にも消え入りそうな挨拶を返した。初めて会った時から咲はそうだった。優を見る度に、おびえた様子を見せる。対人恐怖症、というやつなのだろうか。初めはそう思ったが、奈々や加奈と話す時は特に怯えた様子を見せない。しかし、特定の

人物、例えば他の小隊長と話す時は異様な怯えを見せる。それどころか、自分自身さえも恐れているかのように見える時さえある。優にはその基準が良くわからなかったが、咲が過去に何らかの心的外傷を受けているのは明らかだった為、出来る限り恐怖を与えないように細心の注意を払わなければならなかった。

「訓練してきたところ？」

咲が歩いてきた方向を見て、当たり障りのない話題を振る。咲は小さく頷いた。

「朝から凄いな。僕、朝はご飯食べてからじゃないと動けないよ」

「……私、部屋戻るから……」

消え入るような声で、咲が呟く。

「あ、うん。ごめんね、引きとめて」

やはり避けられているな、と思う。優は謝って、逃げるように横を通り過ぎる咲を見送った。

医務室に向かおうと再び足を踏み出す。しかし、優は数歩進んだところで足を止めた。背後から強烈な視線を感じて振り返る。

「……進藤さん？」

灰暗い廊下の先で、咲がこちらをじつと眺めていた。絡み付くような、異常な視線に自然と身体が硬くなる。

誰もいない廊下を奇妙な静寂が満ちた。咲の黒い瞳の奥に宿った何かが、優の身動きを縛る。

ふと、咲が安心したかのような笑みを見せた。そして、背中を見せて再び歩き出す。長い廊下の先に消えていく咲の後ろ姿を、優は呆然と見送った。

今のは何だったのだろうか。考えるも、答えは出ない。ひんやりとした空気に寒気を感じ、優は早足で医務室へと向かった。

「……やっぱりダメかあ」

医務室の前に着いた優はため息を吐いた。鍵がかかっている中に入れない。ドアの前には『受け付け 九時〜十八時』と表記のあるプレートがかけられていた。

どうしよう、と頭を抱える。部屋に戻って二度寝する気にはなれない。と言っても、医務室が開くまで時間を潰せる図書室や談話室などもまだ閉まっているだろう。誰かの部屋に遊びに行くのも時間的に難しい。

少し考えて、亡霊対策室の中を散歩することにした。まだ利用していない施設も多い。この機会に普段行かない所を知っておくのも悪くないだろう。そう思った。

医務室のある一階から、セキュリティゲートを何個か通って、同じ中枢エリアの二階にあがる。普段とは異なる静かな空間に足音だけが大きく響いて不思議な感じがした。

「あら、桜井くん」

二階への階段を上り終わった時、不意に上から話しかけられて優は飛び上がった。見ると、三階に続く階段に第二小隊長、姫野雪が立っていた。雪が階段を一步降りてくることに、白亜の髪がふわりと空に舞う。

「おはようございます。お風呂、入ってきましたか？」

雪の髪が僅かに湿っていることに気付き、疑問を口にする。

「ええ。この時間だと、大浴場が空いているから」

そう言っつて、雪は楽しそうに赤い瞳を細めた。

「じゃあね」

雪がぐるりと背中を向ける。

優は咄嗟的に、それを呼び止めた。

「あ、あのっ」

雪が不思議そうに振り返る。

「なあに？」

優は懸命に次の言葉を探し、うまい言葉が見つからなくて結局ストレートな疑問を口にした。

「亡霊って何なんでしょうか？」

雪の赤い瞳が鋭くなる。

「何故？」

何故、私に聞くのか。何故、そんなことを聞くのか。二重の意味を汲み取り、優は頭を必死に働かせながら答えた。

「この前、姫野さんがESPエネルギーについて詳しく話をしていたから……、それに、高梨市の闘いで亡霊が……えーと、ペンフィールドのホームクルスの形を模していました。それが凄く気になって……」

それを聞いた雪は微笑を浮かべ、ゆっくりと優に歩み寄ってきた。話すときに距離を詰めるのは、この人の癖なのだろうか、と疑問が掠める。

「では、問い返しましょう。人間とは、一体何なのですか？」

淡紅色の双眸が優を貫く。僅か五十センチメートルほどまで接近した雪の顔はいつになく真剣で、優はその瞳に見入られた。

「……わからないです」

「そう、わかりません。何なのか、という疑問は人間的な価値観に対する懐疑に過ぎない。普遍的な価値観が根付いていない対象物に、その問いは無意味です」

雪が更に一步踏み出す。異常なほど顔が近づき、雪の熱い吐息が優の頬にかかった。

「亡霊はただあるだけです。ただ、存在しているだけなのです。意味なんてありません。でも、私たち人間は時間を構造化し、事象を再構成して、離散的な空間を連続した意味のある情報として処理します。では、亡霊とは何なのでしょう。人がうたかたの時空の隙間に見た幻？ それとも、社会が産み出した共同幻想？ そして

「

「そして……？」

優はゴクリと生唾を飲んで続きを待った。その様子を見た雪が不意に破顔する。

「ふ、ふふ……っ……」

「……姫野さん？」

クスクスとおかしそうに笑う雪に、優は困惑した様子で問いかけた。

「フフ、ごめんなさい。少しからかってしまいました」

笑いを抑えながら、雪は悪戯っぽくそう言った。

「へ？」

「私なんか亡霊が何なのか分かる訳ないじゃありませんか。適当にそれっぽい事を言っただけです。それなのに、桜井くん真剣な顔で……ああ、おかしい」

からかわれたのだと知って、優は顔を真っ赤にしてそっぽを向いた。確かに、冷静に考えれば一小隊長の雪にそんな事をたずねるのはおかしい。しかし、雪なら何か知っているんじゃないかと、そう思わせる雰囲気は雪は持っていた。後悔が襲いかかってくる。

「確かに、そうですね。変な事きいてすみませんでした。ホムンクルスの事が頭から離れなくなっ……っ……っ……っ……っ……っ……」

「何か、気になることでもあるの？」

笑うのを止めた雪が一転、心配した様子で問いかけてくる。

「神条司令がペンフィールドのホムンクルスは人の脳の……ええと、入力量とかに関係するものだって言っていました。何故、亡霊はそんなのを模したのかわかって。亡霊はホムンクルスを通して何かメッセージを伝えようとしているんじゃないか、って思うんです。亡霊は本当に戦うべき相手なんでしょうか？」

雪は笑わずそれを静かに聞いてくれた。そして、最後まで聞く不安を払拭するかのよう微笑を浮かべ、こう言った。

「亡霊は紛れもない敵です」

断言する雪に、優は眉をひそめた。

「そして……ホムンクルスであることにも意味はない。ただ、そうすることに意味があった」

「……そうすること？」

意味が分からず、雪の言葉を繰り返す。雪はうなずいた。

「そう。じゃあ、まだ髪乾かしてないから」

雪はそう言っ、クルリと背を向けた。しっとりと濡れた白亜の髪がふわりと舞う。シャンプーの香りが優の鼻腔を優しく擦った。

遠ざかる雪の後ろ姿を見送りながら、優はさっきの言葉を小さく繰り返した。

「そうすることに、意味があった……」

3章 8話 長谷川京子（4）

踊り場に一人残された優は、雪の言葉を反芻して、すぐにその解
釈を放り投げた。考えても、答えが出る類のようには到底思えない。

三階へ繋がる階段をゆっくりと上りながら、優はアルビノの少女
について考えを巡らせた。少し独特の雰囲気があって話しかけづら
いが、愛想が悪いという風には見えない。しかし、他の人から聞いた
話では、雪は事務的な事以外の無駄な話は一切しないと言う。気
分屋、ということなのだろうか。

そう考えて、それは雪に限定された話ではないな、と苦笑する。

他の小隊長、第五小隊長の咲、第六小隊長の凜も相当な気分屋に見
えた。残りの小隊長である華や詩織、舞は愛想がよく交流が広いが、
雪と咲、凜の三人は孤独を好む傾向がある。中隊長という立場にな
った以上、小隊長の全員と仲良くなっておきたいとは思うが、あの
様子ではじっくりと時間をかける必要があるそうだ。

階段を上り切り、三階に辿りつく。三階の廊下には僅かに人影が
あった。携帯に目をやると時刻は既に8時をまわっていた。どうし
ようかな、と腕を組む。この時間なら食堂は既に開いている。この
まま食事を済ませてもいいのだが、この頃ほぼ毎日部屋にやってくる
京子を放置することになってしまう。

「……たまには逆パターンもありかな」

少し考えてから、今日は逆に京子を起こしに行くことに決める。
夜ならともかく、朝なら別に問題ないだろう。

更に階段を上り、京子の部屋がある四階へ向かう。四階は三階よ
りも人影が少なかった。

記憶を頼りに、昔一回だけ聞いたことのある京子の部屋番号を探
す。京子の部屋は階段から近く、すぐに見つかった。

こんこん、と二回ノックする。小気味いい音が静かな廊下に響い
た。

「京子ー！」

呼びかけるも、返事はない。まだ寝ているのだろうか。そう思い、ドアノブに手をかける。

カチャ、と小さい音が響き、ドアは簡単に開いた。少し迷ってから、優はドアの間から顔だけを覗かせ、再度呼びかけた。

「京子？」

再び呼びかけた時、部屋の奥から京子のぼんやりとした声が聞こえた。

「……桜井？」

「そうだよ」

「ちよ、ちよっと待って！」

奥からどたばたと物音が聞こえる。玄関からでは、奥で何をやっているのか全く分からない。

三分ほど経った後、ぎこちない様子の京子が出てきた。

「お、おはよう。今日早くない？」

よほど慌てていたのか、呼吸が荒い。京子はベージュのロングカーディガンに、ジーンズで身を包んでいた。良く似合っていたが、慌てて着替えた形跡がある。

「……カーディガンのボタン、掛け違えてるよ」

「あー！ー！」

指摘すると、京子は意味のない叫びをあげ、再び奥へと飛んできた。朝から元気だな、と感心する。

「で、今日はどうしたの？」

すぐに優の待つ玄関に戻ってきた京子は疲れた様子でそう尋ねてきた。

「今日は早く起きたからびっくりさせようかな、と」

「……時間あるし、中入る？」

「いいの？」

「ちよい散らかってるけどね。今食堂行っても、華たちと時間合わないし」

そう言って、京子は一步下がった。入れ、という意味だと解釈して靴を脱ぐ。

「じゃ、おじゃまします」

短い廊下にトイレ、浴室へ繋がるドアと、小さな調理スペースが設けられている。優の部屋と同じ作りだ。キッチンも殆ど使われた様子がない。あまり料理をしないのだろう。

奥にある八畳の部屋には、優の部屋に置いているものと同じベッドがあり、その上にはいくつかの巨大なぬいぐるみが飾られている。中央には円形のテーブル、壁際には小さめのテレビ、本棚、クローゼット。他には特に変わったものがない、シンプルな部屋だった。

「結構片付いてるね」

「場所をとる趣味がないから。華の部屋はゲーセンで取ったぬいぐるみが溢れかえってるよ。あ、適当に座ってて」

ぬいぐるみに囲まれた華の姿を想像して、優は頬を綻ばせた。華らしい趣味だ、と思う。

「何か飲む？」

「ん、遠慮しとく。毎朝起きたら限界まで水分補給するから、これ以上飲んだらお腹壊しそう」

「分かった。……ねえ」

優の返答に、京子は立ち上がりかけた態勢を崩し、遠慮がちに優に視線を向けた。

「ん？」

「桜井はさ、他の子の部屋とか良く行くの？」

「いや、京子の部屋が初めてかな。華ちゃんの部屋は入りかけた事はあるけど、結局入らなかつたし」

「ふーん……望月ちゃんとかの部屋も入らなかつたんだ。意外」

「何回か誘われたけど、流石にね」

優は苦笑した。高梨市でのことがある為、気軽に麗の誘いに乗るのが怖い。

「気を付けなよ、それ以外の子からも結構狙われてるんだから」

「気をつけるって、大袈裟な」

そう言った時、京子が動いた。

柔らかい衝撃を受け、カーペットに背中から倒れる。小さく呻き声が漏れた。

「京子？」

抗議の声をあげようと顔を上げた時、優は言葉を失った。倒れた優の腰上に跨ぎ、上気した顔を近づけてくる京子に身を硬くする。

「ほら」

京子の右腕が優の頬を撫でた。

熱い吐息が顔にかかる。

「桜井は無防備すぎる」

場に沈黙が落ちた。お互いの息が静かな部屋の中で妙に大きく聞こえる。優は思わず、京子のぱっちりした双眸から目を離れた。

不意に京子は優の頬から手を引き、両手で銃の形を作った。

「バン！」

先ほどとは種類の違う、奇妙な沈黙が落ちる。

「……あの、何やってるの？」

「もうちよつと警戒しましょうってこと。私が危ない人だったら桜井は一生監禁コースだよ」

京子は笑いながら、優の上から身をどけた。からかわれたのだと知って、全身から力が抜ける。

「いやいや、これ普通男女逆だから」

「男女とか関係ないって。襲われる時は襲われるんだからさ、本当に気を付けなよ」

「まあ、適当に気を付けます」

「……危機感ないなあ」

「男でそういうの警戒してる人って普通いないと思うんだけど……」

そう言つて、壁にかけられたライトブルーの小さな時計にチラリと視線を向ける。8時30分を回っていた。

「あ、そろそろ食堂行く?」

「だね。行こっか」

京子が立ち上がるのに続いて、優も立ち上がった。玄関に向かう京子の後を追う。

廊下に繋がるドアに辿りつくまで、お互い何も話さなかった。

京子がドアを開ける。いつも通りの喧騒が玄関に入ってきた。しかし、優が廊下に出た途端、それが嘘のように静りかえる。次いで視線が集中するのを感じて、優は首を傾げた。

廊下の集団の中にいた一人、佐藤詩織が恐る恐るといった様子で近づいてくる。

「あの、桜井さん……昨日は長谷川さんの部屋にお泊りしたんですか?」

その一言に、優は固まった。静まりかえった廊下が急に騒がしくなる。これはつまり、そういう勘違いを受けているのだろう。

ぎこちない動きで隣の京子に首を向けると、『やってしまった』という顔をしている京子と目が合った。

危機感がないなあ

さきほどの京子の言葉が頭の中をリフレインし、そうかもしれない、と他人事のようにぼんやりと思った。

3章 9話 鎖の少女(7)

「疲れた……」

誤解を解く為の弁明を終えて、四階から逃げるようにして食堂についた時、京子が呟いた。京子の前の席に腰をおろした華が口を尖らせて答える。

「紛らわしいことするから悪いんだよ」

「本当、迂闊だった。異性ってのは予想以上に面倒だわ」

「ごめんね。あそこまで気が回らなかった。次から時間帯に気を付けます、はい」

ぐったりとした様子の京子に、優は申し訳なさそうに缶ジュースを差し出した。

普段、京子が優の部屋に来る時は、京子が優の部屋に入るところが大多数に見られていた為問題にならなかったのだろう。今回は優が京子の部屋を訪れた時間が早すぎた為、あらぬ誤解に繋がってしまった。

「……優が気にする必要はない。何もなかったなら、勝手に勘違いする方に非がある」

ぼんやりと話を聞いていた愛が言う。

何もなかったなら、と言う言葉に優は曖昧な笑みを浮かべた。脳裏に押し倒してきた京子の上気した顔が浮かぶ。優は無意識のうち京子にチラリと視線を向けた。京子は疲れた様子で、しかし何もなかったかのようにラーメンを食べている。あの時、京子は本当に軽くからかっただけのつもりなのだろう。こちらだけ意識するのにも変だ、と思い、優は極力あの事を意識から追い出すことにした。

「んー、一応中隊長だしね。変な誤解で信用を損ねたくないなあ」

「……それは心配ない。優は、十分すぎるほどの信用を得ている、と思う」

「なら良いんだけど……」

話しながら、朝食セットに箸をのばす。先ほどから喋ってばかりで料理が全く減っていなかった。

「そつえばさ」

不意に、食事を中断した京子が思い出したかのように声をあげた。「昨日の女の子の様子、後で見に行かない？」

気になっちゃって、と言う京子に優は賛同を示した。華と愛もすくに頷く。

「後で黒木さんや詩織ちゃんにも声かけよっか」

「だね。食べたらちようど良い時間になるだろうし」

携帯で時間を確認する。9時前。そろそろ医務室が開く時間だ。

「お水、とってくるね」

「……私も」

華が立ち上がり、愛もそれに続いて席を立った。

「京子と桜井くん。お水いるならついでに持ってくるけど、どうする？」

華の問いに優は首を振った。

「いや、僕は良いよ」

「私もいらない」

二人の返事に華は頷いて、愛と並んで水を取りにいった。賑やかな食堂の中で遠ざかる後ろ姿を眺めながら、味噌汁をすすする。

「ねえ」

華と愛がいなくなったのを見計らったかのように、京子が声をかけてきた。食事を中断し、首を京子に向ける。

「私の部屋に来た時さ、早く起きたから、って言ってたよね。昨日の事が気になって寝れなかったの？」

思わぬ言葉に、優は驚いて京子を見つめた。心配そうな顔の京子と目が合う。

「クマ、できてる。何かさ、心配事があるなら相談しなよ」

「……京子先生のお悩み相談室は初診料どれくらいなの？」

優は返事に困って、茶化した答えを返した。京子がコロリと表情

を変えて笑う。

「カラオケ、一回付き合ってくれれば良いよ」

「失礼します」

医務室のドアを開けると、いつものように明日香が出迎えてくれた。

「いらっしやい。早いわねえ」

「あの、容態の方はどうでしょうか？」

詩織が真っ先にたずねる。明日香は微かに笑って、その問いに答えた。

「もう大丈夫みたい。さっき起きた時は何の問題もなかったわ。今はまた寝ちゃったけど」

「そうですか」

ホツとした表情を全員が浮かべる。優は少し躊躇して、次の疑問を問いかけた。

「えっと、事情とかは聞いたんですか？」

明日香の顔が僅かに曇る。

「聞いても全く要領を得ないのよね。家出、という訳でもないし。社会感覚が欠如しているようにも見える。少し、難儀ね」

社会感覚が欠如、という言葉に優は小さく反応した。その意味を考える。悪い想像が膨らみ、気分が悪くなった。

「それにしても、優君本当にモテモテねえ」

「へ？」

明日香のぶつ飛んだ話題の変化に、優は思考を強制中断され、間抜けな声を漏らした。

「あの子、意識を取り戻した時、真っ先に君の事探してたわよ」

優は反応に困って苦笑した。暗くなりそうな雰囲気何とかしようという気遣いなのだろう。

「桜井って年下趣味なわけ？」

京子がニヤニヤと笑って問いかけてくる。

「いや……僕は」

そこで言葉を切り、優は意味ありげな視線を愛に向けた。

少し時間を置いて、愛の顔が真っ赤に染まり、ポフツと派手に煙をあげる。相変わらずからかいがいのある性格だ。

場に和やかな雰囲気は漂い始めた時、不意に医務室の奥にあるベツドの方からカーテンごしに物音が響いた。全員の視線がベツド側に集中する。

「ごそごそ、と何やら動く音。そして、カーテンが僅かに開く。その間からひよっこりと、まだ幼い女の子の顔が覗いた。」

登場人物まとめ3

桜井 優

主人公。特殊戦術中隊・中隊長

特徴：16歳。身長145cm。琥珀色の髪

柊 沙織

人類史上初のESP能力覚醒者・覚醒者発見後初の戦死者

の戦死者

特徴：享年16歳

上田 考義

陸上自衛軍・中将

特徴：年齢不詳。中肉中背

神条 奈々

亡霊対策室司令

特徴：28歳。身長170cm。黒髪ロング

長井 加奈

亡霊対策室副司令

特徴：26歳。身長160cm。茶髪ボブ

秋山 明日香

亡霊対策室・医務医

特徴：31歳。身長170cm。黒髪セミウェーブ

斎藤 準

亡霊対策室・情報部主任

特徴：32歳。身長170cm。黒髪ソフトウルフ

田中 幸枝

亡霊対策室・情報部所属。準の婚約者

特徴：31歳。身長160cm。茶髪セミロング

篠原 華

特殊戦術中隊・第一小隊・隊長

特徴：16歳。身長150cm。茶髪セミロング

姫野 雪

特殊戦術中隊・第二小隊・隊長

特徴：18歳。身長160cm。白亜のストレート

トロング。淡紅色の瞳。アルビノ

佐藤 詩織

特殊戦術中隊・第三小隊・隊長

特徴：15歳。身長145cm。黒髪セミロング。

男性恐怖症

黒木 舞

特殊戦術中隊・第四小隊・隊長

特徴：17歳。身長160cm。黒髪ロング。ハ

スキーボイス

進藤 咲

特殊戦術中隊・第五小隊・隊長

特徴：16歳。身長145cm。黒髪サイドポニー

白崎 凜

特殊戦術中隊・第六小隊・隊長

特徴：19歳。身長160cm。黒髪ロング

長谷川 京子

特殊戦術中隊・第一小隊所属

特徴：16歳。身長155cm。茶髪ショートカ

ット

宮城 愛

特殊戦術中隊・第一小隊所属

特徴：16歳。身長150cm。黒髪セミロング

望月 麗

特殊戦術中隊・第一小隊所属

特徴：14歳。身長135cm。金髪ツインテール

橋本 恵

フリーライター

特徴：28歳。身長160cm。茶髪セミロング

広瀬 理沙

逃亡中のESP能力者

特徴：18歳。身長160cm。黒髪ロング

10話前、ということ恒例の登場人物まとめです。設定メモを紛失してしまったので、記憶を頼りに特徴を添えてみました。本編の描写と食い違ふ所がありましたらご報告いただけると助かります。

3章 10話 鎖の少女(8)

「かわいい！」

突如、舞が満面の笑みを浮かべ、叫んだ。カーテンの間から顔を出した少女がビクリと震える。

「黒木さん、怖がられてますよ……」

優が呆れたように言う。舞はそれに構わず少女に近づき、質問を始めた。

「ね、君のお名前は？」

「……響ひびき」

「響ちゃんかあ！ ボクは黒木舞！ 舞お姉ちゃんって呼んで欲しいなっ！」

子ども好きなのだろうか。いつもよりハイテンションな舞を優は微笑ましく見つめた。

しかし、響にとってそれは有りがたいことではないようで、舞に對してビクビクと怯えた様子を見せている。

可愛そうになって舞を止めようかと考えた時、響と目が合った。

途端、響が舞の横をすり抜け、優に向かって飛び込んできた。

「わっ！ ほら、怖がってるじゃないですか」

腰に抱きついてくる少女の背中を優しく叩きながら、舞に抗議の視線を向ける。舞は面白くなさそうに口を尖らせた。

その様子を見ていた華が頬を綻ばせながら口を開く。

「桜井くんって子ども受けもいいんだね」

「……あれは身長が近いから親近感覚えられただけじゃない？ 周りが大人だらけだったら不安でしょ」

京子が持論を述べる。この中では響に次いで優が一番小さい。次に詩織、愛、華、京子、舞、明日香と続く。

優は不服そうな視線を京子に送ったが、結局何も言わなかった。

「響ちゃん、あんまり騒いじゃダメよ。もう少し、睡眠をとってお

きましようね」

明日香が優しく笑いかけ、優から響を引き離す。響は僅かに抵抗したが、すぐに大人しくベッドのほうへと戻っていった。

「優君、ちよつと話があるからこつち来て」

響がベッドに戻ったのを確認して、不意に明日香が優を手招きする。優は一瞬、華達の方に視線を向け、すぐに明日香の元に向かった。

「舞ちゃんたちは少し待っててね」

明日香はそう言い残し、優を連れて医務室の奥にある小部屋に入った。中には何に使うのかわからない機材や薬品の入った箱が乱雑に積まれていた。この小部屋は倉庫に似た役割を果たしているのだろう。優が室内を観察しているうちに、明日香が横開きの扉を閉めた。ガシャン、と重い音が響く。優は緊張した面持ちで明日香を見た。扉を閉め終えた明日香がこちらを振り返り、目が合う。その瞳にはいつもの快活さはなく、強い疲労の色が宿っていた。そんな明日香を見るのは初めてで、優は微かに嫌な予感を覚えた。

「話、というのは響ちゃんの事なだけけれど」

明日香はそう切り出した。

「さつき、私は響ちゃんに社会感覚の欠如が見られる、と言ったわよね。まず、それは先天的な障害によるものではない事をはつきりと明言しておくわ。脳機能には何ら異常は見られない。もちろん、ちゃんとした検査を行わないと分からないことも多いのだけど、実生活に影響を及ぼすレベルの障害はないと断言してもいい」

そこで明日香は言葉を切った。その言葉が優に染み込むのを待っているかのようだった。

「じゃあ……響ちゃんを取り巻く環境が、彼女の社会感覚の獲得を阻害する特殊なものだった、ということですか？」

優の問いに、明日香は頷いた。

「そう。彼女からは義務教育を受けた形跡が見当たらない。親には子に教育を受けさせる義務がある。これは、明確な虐待と言って良

い

虐待、と明日香は表現した。それすらも婉曲表現である事に気づき、優は率直な疑問を口にした。

「それは、監禁ということですか？」

明日香の瞳が逸らされる。言い淀む、というよりも何かを考えているようだった。

「……私も、はじめはその線を疑った。けれど不審な点が多すぎる。断定は、できない」

まず、と明日香は続けた。

「まず、直接的な性的虐待の跡は見られない」

その言葉に、優は反応に困った。十六歳の優にとって、その種の話題に対する免疫は少ない。しかし、明日香がそうした事を一切気にしている様子ではなかった為、優は平静を無理やり保つ事が出来た。

「もう一つ、直接的な暴行を受けた形跡もない。つまり、無責任な親のストレスの捌け口にされてきた、という訳ではないということ」

その言葉に、優は安堵の息をついた。しかし、疑問が湧きあがる。

「確かに、第三者による監禁というわけではなさそうですね。じゃあ、響ちゃんは一体どんな状況に置かれていたんでしょうか？」

「確かなことは何も分からない。けど、響ちゃんは義務教育だけでなく、まともな接点を社会と持っていないということが推測される」

「推測？」

そう、と明日香は頷いた。

「君は、ごっこ遊びと言うのを昔したでしょう？ おままごと、警官ごっこ、ヒーローごっこ。子どもはね、皆そういう真似っこ遊びをするの」

「はい。確かにやりました。けど、それが響ちゃんとどんな関係があるんですか？」

「発達心理学的ではね、こうしたロールプレイは大人になる為の重要なプロセスと言われているの。私たちは成長すれば、その場面に

応じて必要な役割を演じるわ。簡単に言えば、これはその練習と言
つて良い。親の前では良い子に、友達の前では明るく、私たちは日
々何かを演じ続けている。これは社会を生きる為に便利な能力よ。
でも、響ちゃんにはそうした能力が欠如している節がある。これは、
宮城愛の症例に酷似しているわ」

突然出てきた友人の名前に優はビクリと肩を震わせた。

「愛ちゃんと酷似？」

明日香は頷いた。いつもとは違う、医師としての淡白な眼。

「ええ。こういふのは私の専門外だけどね。愛ちゃんは、自分を偽
ること、他者の偽りを見破る事がうまく出来ない。愛ちゃんの場合、
響ちゃんとは違って意図的にこうした能力を壊されたのだけれど、
響ちゃんのこれは副次的な要因によるもの、という違いがあるけど
ね」

さらりと明日香の口にした言葉に、優は戦慄した。

意図的にこうした能力を壊された？

その意味を考え、寒気が背筋を伝う。

明日香は優の様子に気づかぬように、淡々と話を続けた。

「副次的、というのは保護者にそうした意図がなかったということ。
保護者は何らかの理由で響ちゃんを家庭に縛りつける必要があった、
と推測できる。響ちゃんの状態から察するに、そこから攻撃的
な意思は全く感じられない。特に、栄養面については満点だわ。食
事には細心の注意を払っていたようよ」

明日香の言葉が頭に入らない。

優は愛の事について訊ねたい衝動に襲われた。一体、彼女の過去
に何があったのか。

しかし、本人が望まぬ間に、そうしたプライベートな事を訊ねる
のは卑怯な気がして、優はその衝動を抑えつけた。無理矢理意識を
明日香の話に傾ける。

「でも、その中でビタミンDだけが不足している。ビタミンDは通
常日光浴などを経て半分以上が体内で生成されるわ。つまり、これ

は響ちゃんが外に出る機会が殆んどなかったということを示す。他にも色々そうした傾向が見られるわ。優君にも響ちゃんが正常な環境で育たなかった、ということが分かるでしょう？　これは、明らかな虐待よ。保護者にその気がなかったとしてもね」

優は頷いた。直接的な暴力がなかったとしても、響の保護者がした事は許されるものではない。

「でも、何でそんな事になったんでしょうか？　傷つける気はないのに、家の中に閉じ込めるなんて……」

「わからない。例えば、響ちゃんという存在自体が社会的に都合の悪いものだったとも考えられる。近親婚などの、世間体の悪い出産を隠そうとしたとか。考えればキリがないわ」

そこで明日香は言葉を切り、じっと優の瞳を覗きこんだ。明日香の雰囲気が変わる。優はその変化に思わず後ずさりそうになった。

明日香は、怒っていた。さきほどまでの医師としての淡白な様子ではなく、一人の人間として、明日香は確かに怒っていた。

「ここまでは君に先入観を抱かせない為の説明に過ぎない。私は医師として、響ちゃんの様子を有りのまま君に伝えたわ。これから話す事は、私個人の愚かな推測。医官としての公式的な見解ではないことを明確に宣言しておきましょう」

優は困惑した様子で、激しい怒りの色を宿した明日香の瞳を見つめた。

優を見下ろす明日香の瞳が不意に逸らされる。明日香は背を向け、後ろに積まれていた箱の中から一枚のレントゲン写真を取り出した。

3章 11話 鎖の少女(9)

「これは……？」

目の前に差し出されたレントゲン写真を受け取り、優は困惑の眼差しを明日香に向けた。明日香は何も喋らない。優は戸惑いながら視線をレントゲン写真に落した。

レントゲン写真は大腿骨周辺を映したものだ。昔、保険の教科書で見たような、何の変哲もない白い骨が写真の上から下まで続いている。注視するうちに、優はあることに気付いた。右太股に異質な何かかが映っている。

「これ……腫瘍ですか？」

優は強張った顔で明日香を見た。

「違う。ある意味で、もつと悪いものよ」

「もつと悪いもの……？」

明日香が頷く。

「これね、発信器なの。それも恐ろしく高度な」

明日香の言う事が理解できなくて、優は黙り込んだ。しかし、徐々にその意味が頭に浸透し、得体のしれない恐怖が湧きおこる。

「発信器……？」

「情報部の主任、知ってるでしょう？ 昨日、彼にこの映像を送った時、凄い血相で飛んできたわ。どうもね、民間で簡単に手に入る代物じゃないみたいなの」

「……軍用、ということですか？」

声が震えた。明日香のいうことが信じられなくて、軽い眩暈に襲われる。

情報部の主任。斎藤準のことだろう。彼は信頼に値する人間だ。

ならば、恐らくその情報の信頼性も高い。

「あまり早とちりしてはダメよ。民間での入手が難しいだけで、入手が不可能なわけではない。それこそ、手段を選ばなければいくら

でもルートはある」

でも、と明日香は言った。

「酔狂な親が子どもに埋める為に使うようなものではない。これは、既に虐待のレベルを遥かに超えている。言っている意味、わかるわよね？」

「はい」

酷く気分が悪かった。吐き気がする。しかし、優はそれを無理やり堪えて、明日香に先を促した。

「その推測を更に強化するような裏付けもあるんですよね？」

「聡いわね。だから君に話したのよ」

これを見て、と明日香は更に別の写真を取り出した。レントゲンとは違う、発信機の精密なズーム写真。何か特殊な機器を利用して撮影したのだろうか。

「ここに番号があるでしょう？」

明日香の指した場所を見ると、発信機の上部に確かにそれらしいものがあつた。希望の光が見えて、頬が綻ぶ。

「製造番号ですか？ 購入者を特定する手がかりになりますね」

しかし、明日香は優とは反対に、顔を強張らせて首を横に振った。「いいえ。この型にそういうものはないそうよ。つまり、これは後からつけられた番号なの」

「え？」

思わぬ返答に全身が緊張する。

「これは管理コードよ。データベース上で対象を一意に絞る為のマスターキー」

希望が、絶望にすり替わった。最悪の言葉に、思わず顔を両手で覆う。信じられない、と思った。

一意に絞る為の？

馬鹿げている。現実の話だとはとても思えなかった。しかし、目の前に提示されたそれは疑いようのないもので、それを提示した明日香は信頼に値する人物だった。認めるしかないことに気づいて、

嘔吐感がこみあげる。本当に気分が悪かった。

「まだあるわ。この番号の下二桁を見て。これは本来のコードとは別に付け加えられたチェックディジットと呼ばれる誤入力を防ぐ為の番号。特定の演算を行う事でその真価を発揮する」

これは、と明日香は強調した。

「これは、斎藤君に言わせれば恐ろしく特殊な種類らしいの。ある程度の規格があるんだけど、運用される組織の規模によってその方式は変わる。斎藤君はこれを運用していたであろう組織を政府関係組織と断定した」

背筋を嫌な汗が伝った。明日香と準はその道のエキスパートだ。

明日香は響の様子からその特殊な背景を、準は一つの発信機からその背後組織を割り出した。そして、その結果は競合しない。二人の出した結論はパズルのようにぴたりと組み合わせる。つまり、そういうことなのだろう。

それを認めた時、新たな懸念が優の脳裏を掠めた。

「この発信器は響ちゃんに埋まったままなんですよね？」

「そう。けど、この発信器は既に機能を停止しているみたいよ」

明日香は優の懸念を正しく汲み取って、安心させるかのように微笑を浮かべた。

「外的損傷は見られないから、電磁的な攻撃を受けたのだと思う。

つまり、響ちゃんの逃亡を内部の誰かが助けたんじゃないかしら」

その言葉にひとまず安堵する。響に対して追跡が来ることはない
と見て良いだろう。

「さて、響ちゃんの話はここまで。彼女がどういう立場に置かれているか、わかったでしょう？次は、私たちの身の振り方を考えなければならぬ」

明日香が明るく言う。優は慌てて、それを止めた。

「ちよつと待ってください。結局、響ちゃんはこういう状態にあるんですか？ 何故、響ちゃんはそんな立場に？ しかも、そこから逃げだすなんて、内部の手助けがあっても可能なんじゃないか？」

話を聞いていた限りでは、響ちゃんを縛っていた背後関係はそんなに甘いものとは思えません」

優の言葉に、明日香は困ったような笑みを浮かべた。

「結局ね、何もわからないの。全て推測。なら、響ちゃんから聞くしかない。でも、それを聞いて何か変わるかしら？　つまり、彼女を守る為の武器に、それは成り得るのかしら？　そうね、なるかもしれない。何もわからない。でもね、今までの話から響ちゃんは保護すべき存在だと、私ははっきり断言できる。それで十分じゃないかしら？　私の目的は響ちゃんを助ける事。背後関係を探る事じゃない。それは手段に過ぎないの。君なら、わかるでしょう？」

「……はい」

「響ちゃんの後ろに得体のしれない何かがいる。それだけで十分。それ以上は知らなくて良い」

諭すように明日香は言った。それが警告なのだと気づき、静かに頷く。

踏み込むな。明日香の眼はそう言っていた。

「じゃあ話を進めるわね。先日奈々が言ったように、響ちゃんを亡霊対策室として保護する訳にはいかない。公式的な支援はできないということ。そこでいくつかの問題がある。まず、寝る場所。自室を与えることはできない。そうした支援は、期待できない」

「はい」

「このまま医務室を利用したいんだけど、この区域までは職員レベルのセキュリティチェックを抜けないと辿りつけないわ。つまり、響ちゃんは自由にここに他を移動できない。私が彼女に付き添えば、私のカードで移動する事ができるけど……色々と問題があるの」

優は頷いた。明日香は言いづらそうに話を続けた。

「でね……凄く迷ったんだけど、暫く君の部屋を利用させてほしい」
「僕の部屋、ですか？」

思わぬ提案に、優は明日香の言葉を繰り返した。

「そう。部屋の問題の他にね、食事の問題もあるの。職員や中隊員

はセキユリティカードを通せば無料で食堂を利用できるでしょう？

でも、ゲストカードにはその機能がない。だから彼女には別に食事を用意しないといけない。経済的出費は置いておくとして、誰かに食事を用意してもらう必要がある。正直に言えばこれはかなりの負担よ。安易に頼めることじゃない。響ちゃんの保護を申請した君にその責任を負ってもらうしかないの」

「……食事を用意するだけですよね？」

「それと同居。響ちゃんはまだ子どもよ。常に一緒にいるとなると簡単なことじゃない」

優は思案して、すぐに肯定の返事を出した。

「多分、大丈夫です。料理も好きですし、暇を持て余していることが多いので、そんなに負担にならないかも」

「……そう思うならいいけど。もし、無理だと思ったらすぐに言いなさい。別の方法を考えるわ」

明日香が不安そうに言う。反して、優は楽しそうに笑った。

3章 12話 鎖の少女(10)

「最後に」

響の扱いに対する大方の話し合いが終わったところで明日香は言った。

「君に響ちゃんを預けるのは、権力という点が一番大きい」

「権力？」

その真意がわからず、優は明日香に問いなおした。

「そう。司令官、副官といったシステム化された力よりも、君は実際のな力を宿している。より普遍的であり、より支配的であると言っている」

「ESP能力のことですか？」

明日香は頷いた。

「亡霊の存在がある以上、ESP能力は社会システムを維持する上で欠かせない。社会的地位を超越した、実際のな力がある。それは、響ちゃんを何かから守る上で盾になる。人間が相手である限り、君は負けない。社会システム自体がそのシステムを維持する為に君の敵を自動的に排除する。君を縛るものは事実上、何も存在しない」

頷く。

「でも、僕はそれを行使するつもりはありません」

「でしようね。君はそうした教育を受け、そうした価値観を育んでいる。後天的に、漠然としたタブーが植えつけられている。でも、抑止力が存在しない、というだけでシステムのアドミニストレーターは不安に駆られてしまう。君がそれを行使しないという保証はどこにもない。君はシステムを維持する過程に必要な因子であり、システムに致命的なダメージを与えうる因子でもある。ならば当然アドミニストレーターは、君をコントロールしようとするでしょう。でも、実際のな力で君を抑えつける事は出来ない。ではアドミニストレーターはどうやって君をコントロール下に置こうとするかしら

？」

明日香が何気なく話している内容が、現実的な脅威を示唆するものだと気づいて戦慄する。つまり、どのような攻撃が予測されるか、それを明日香は説いているのだ。頭を回転させるも、何も考えつかない。明日香はさつき優を縛る者は何も無い、と言った。そうした存在をコントロールするための方法など思いつかない。

「ヒントをあげましょう。君が現時点でシステムを壊そうせず、逆にその防火壁となっているのは過去に培われた倫理観、道徳観に他ならない」

その言葉を吟味し、慎重に口を開く。

「つまり、洗脳ですか？」

「大袈裟に言えばそう。つまり、アドミニストレーターに残された攻撃方法は心理戦しかない。そして、これは君の特性を生かせば非常に有効よ」

例えば、と明日香は続けた。

「例えば、誰かを人質にする。ちよつとスマートじゃないけど、古くからあるコントロール方法よね。まあ、こんな危険な事する人はいないから、そんな顔しないで」

顔を青ざめた優に明日香が慌てたように付け加える。

「よりスマートなのは君に気付かれずに、自然とコントロールに置く方法。人ってね、物理的な脅威を用いなくても、閉鎖的な環境においては簡単に操ることができるの」

「……簡単について言われても俄かに信じられません」

「一つ、有名な話をしましょう。アメリカの心理学者、フィリップ・ジンバルド教授が一つ変わった実験をしたことがあるの。実験監獄内で被験者21人を看守と囚人役の二組に分け、二週間に渡ってその役を演じさせた。その途中、はじめは指示に従ってただけの看守側は次第に何の命令もなく囚人役の実験者に罰則を与え始めるの。そのうち、囚人役の人達は精神的な錯乱を起こし始める。耐えきれなくなつた囚人役から離脱者が出る中、遂には一人が妄想を引き起

こし、全員がそれに引きずりこまれ始める。次第に禁止されていた暴力行為も始まり、実験では済まされなくなった。外の世界で決められたルールが破られたということは、実験的な閉鎖環境がいつも容易く現実にすり替わったということ。ジンバルド教授は、途中でこれを止めるどころか空気に吞まれ、経過を見ていた牧師から実験中止の要請を受けても実験を強行しようとした。結局、牧師が外部にこれを伝えることで実験は中止になったんだけど、外部の人間がいなかったら、この実験がどこまで暴走していたのか誰にもわからない」

明日香はそこで言葉を切った。少し考えてから、口を開く。

「人は場の雰囲気操られる、ということですか？」

「雰囲気、というよりも役割といったほうがよりの確かしら。この実験は閉鎖的環境内の権力に対する強い服従を示唆している。そしてもう一つは与えられた役割に対して忠実に従おうとする事。ここで話を戻しましょう。君に与えられた役割は特殊戦術中隊・中隊長君の社会的立場は決して強いものではない。でも、実際には君を抑えられる存在はいない。この意味がわかる？ 実際的な力と、虚飾としての社会的権力が剥離しているのよ。君は普段からこの現実と剥離した社会的地位に従っている。神条司令には敬語を使うでしょうし、命令には逆らえない。君は、既に与えられた社会的役割に従っている、とも言える。」

「それは……」

優は躊躇いがちに思った事を口にした。

「ちよつと危険な思想に思えます」

そう言うと、明日香は一瞬驚いた顔をしてクスクスと笑い始めた。「そう。君は鋭い。これは反社会的な人間の思考よ。こういう事を長い時間話すとね、『僕は社会にコントロールされていったんだ！』とか思っちゃう危ない子がたまにいるのよ。君に特殊戦術中隊の中隊長の権限が与えられているのは奈々が君をコントロールする為じゃない。ただの運用手段。そりゃね、誰でも爆弾作って自爆テロで

も何でもできる自由はある。実際のな力は、少なくとも社会的な権力を大きく上回ると言っている。その代わり、社会契約を破った相応の罰を受けるだけ。君は、本当に賢いわ」

明日香は本当に楽しそうに笑った。何がそんなに面白いのか分からなくて、反応に困る。

「今、私は君をある反社会的な戦士へ誘導しようとした。君がどれくらい影響を受けやすいか調べる為に、特定の思想を強化するだけの論証だけを述べてね。こういった思想誘導は割と簡単にできる。

与えられる情報を制限するだけで、価値観は著しく偏っていく。特に君は全ての情報の出自に気をつけなければならない、ということ」

「はい」

「それと。さっき言った監獄実験。あの効果はもちろん本物よ。君に何らかの立場を与え、コントロールする方法もある。反社会的になりなさい、というわけではないけれど、君はそれを破る事が出来る。君は、社会的罰則を受けない。誰も、君を傷つけることはできない。だから、君が何か大事なものを守りたい時、社会的な鎖を気にする必要はない」

「全力で響ちゃんを守れ、ということですか？」

明日香はクスッと笑った。

「それ以外にも、ね」

「それ以外？」

明日香はクスクスと笑い続けながら、何度も頷いた。

「話はこれで終わり。随分と皆を待たせてしまったわね。戻りましよう」

優が返事するよりも早く、明日香が医務室に繋がるドアを開く。響の休んでいるベッドを取り囲み賑やかにしていた華たちがそれに気付き、一斉に優たちの方を見る。優は手を前で合わせ、軽く謝った。

「ごめんね、待たせちゃって」

「おそーい。何やってたの？」

京子が不満を言う。それを受けて明日香が笑いながら口を開いた。「優君の恋愛相談をしてたの」

「いやいや！ 僕を呼んだの秋山さんですよっ！？」

しれつと言う明日香に優が抗議の声をあげる。明日香は僅かに肩を竦めただけで、否定しなかった。

「ね、今日つてミーティングあったよね？」

そわそわとした様子の華が言う。優は頷いた。

「何それ。隊長格だけ？」

京子が不思議そうに聞く。隣にいた舞が肯定した。

「そ。後30分だね。そろそろ行く？」

「長谷川さんと宮城さん、ごめんなさい」

詩織が申し訳なさそうにする。この場にいる大半は隊長格だった為、京子と愛しか残らない。京子は顔をしかめ、愛に視線を向けた。

「愛、どうする？ 私たちも戻る？」

「……そうした方が良い」

愛が少し迷った様子を見せ、頷く。

話の流れを聞いていた優はベッドの上で大人しくしている響に向かって笑いかけた。

「響ちゃん、またね」

コクン、と何も言わず響は小さく頷いた。

「じゃ、行こっか」

「おじゃましましたー」

舞を先頭にぞろぞろと退室を始める。廊下に出た時、医務室の扉の横でじつと佇む情報部主任、斎藤準の姿が目に入った。明日香に用があるのだろうか。向こうもこちらに気づき、軽く手を振ってくる。

「よう、桜井」

「おはようございます、斎藤さん」

優は挨拶を済ませてから逡巡し、舞に向かって申し訳なさそうに頭を下げた。

「すみません、斎藤さんと話したい事があるので、先に行ってください」

「ん、オッケー。遅刻しないようにね」

舞は何も聞かず即答した。いくよー、と華たちを引っ張っていく。華と京子が怪訝な顔を優に向けたが、結局何も言わず舞についていった。全員が声の届かないほど離れていったのを確認して、準が口を開く。

「話つてのは何だ？」

「響ちゃんの事、聞きました」

準はじつと優を見て、すぐに呆れた顔をした、

「明日香が話したのか」

明日香、という呼び名に優は内心驚いた。二人がそんなに親しい仲だったとは聞いていない。優は驚きを表面に出さないように気をつけながら、小さく頷いた。

「はい。当分、僕があずかることになりました」

準が驚いた顔をする。しかし、すぐに納得した様子を見せた。

「そりゃあ良い。世界で一番安全な場所だ」

で、と準はじつと優の目を覗きこんだ。

「で、話つてのは何だ。それが本題じゃないだろ？」

「斎藤さんは以前に、怪物と戦う者は怪物にならないように気をつけなければならぬ、と仰いました」

準の表情が凍る。

「……ああ。よく覚えてるな」

「あれは僕に対する戒めだけではなく、既にそういう存在がある、ということに対する警告だったんですか？」

準は何も答えず、静かに優を見下ろした。

沈黙が落ちる。準は狼狽するように微笑して、そっだ、と呟いた。諦めきった笑みだった。

「あの言葉な、続きがあるんだよ。」 汝が深淵を覗く時、深淵もまた汝を覗くであろう”ってな」

その言葉の意味を吟味して、何も答えられなくなる。準は諭すように続けた。

「桜井。お前を見ていると本当に危なっかしい。これは一種の伝染病なんだ。根源を絶たないと意味がない。刹那的な怒りに目を逸らされるな。感染者は敵じゃない」

準は大人だ、と思う。現実的で、効率的な考えだ。そして何より有効的と言える。準の言っている事は正しい。

「そろそろミーティングだろ？ 行け。遅れるぞ」

話は終わりだ、と準は言外に含めてそう言った。軽く頭を下げ、横を通り過ぎる。その時、準がはつきりとした警告を放った。

「踏み込むなよ」

優は足を止めず正面を向いたまま、はい、としっかりとした声で返し、ミーティングルーム目指して進んだ。

3章 13話 黒木舞（3）

「ここで問題なのは、この模倣が恣意的なものなのか、ということ」

ミーティングルームに奈々の声が響く。

優は黙って聞きながら、ちらりと長テーブルの対面に座る舞に目をやった。頭が定期的にガクリと落ち、今にも眠りそうな様子を見せている。奈々は見つめ振りをして話を続けているが、これはマズいんじゃないかと優は冷や汗を流した。

「黒木さん」

小声で呼びかけるも、反応はない。

「能力と姿形の関連はいまだにわかっていないけれど、これが何らかの」

奈々の言葉に耳を傾けながら、テーブルの脚を軽く蹴って舞に衝撃を送る。静かな部屋に鈍い音が響いた。奈々の動きが止まる。予想以上に大きく響いた音に、優は身を硬くした。奈々がチラリと優を一瞥し、再び話を再開する。優が胸を撫で下ろした時、隣の席に座る華に膝をちよんちよん、と叩かれた。目で「放っておいても問題ないよ」と合図してくる。もしかしたら、舞の居眠りは恒例行事の一つなのだろうか。第六小隊長の凜がたまに舞を睨みつける時があるが、舞がそれに気付く様子はない。優は釈然としないまま奈々に視線を向けた。

「今後、亡霊の模倣行動が確認された場合、余裕がある限り情報収集に徹し、その特性を」

「……むにゃ」

場が凍る。寝言の発信源である舞は器用に座ったまま夢の世界に旅立っていた。流石の奈々も対応に困ったように加奈に目を配らせる。加奈は静かに首を振った。奈々が諦めきったように話を続ける。「その特性をモニタすることになる。もちろん、これは理想論。危

険を冒してまでする必要はない。過去の事例を考えれば、そんな機会が回ってくるとは考えづらいけれど、亡対室の統一意見として各隊に浸透させるように」

舞以外の全員が頷く。奈々は質問や異論がないことを確認して、解散を宣言した。それを合図に第五小隊長、進藤咲が真っ先に立ち上がり、出口へと消えていく。続いて第二小隊長の姫野雪がゆったりとした動作で咲の後を追うようにミーティングルームから出ていく。優も軽く背伸びをして席を立った。華も同じように立ち上がる。二人は、幸せそうな顔で堂々と睡眠を取り続ける舞の元に向かった。「黒木さん、終わりましたよ」

「……………ん、やつとお？」

舞はそう言っただけで気だるそうに欠伸をした。まるで悪びれる様子がない事に感心する。

「いつもこんな感じなの？」

「まあ……………」

華に訊ねると、華は言葉を濁して苦笑いを浮かべた。

舞が立ち上がり、背伸びをする。その時、背後から声を投げかけられた。

「桜井中隊長、お先に失礼します」

中隊長という聞きなれない言葉に思わず振り向くと、背後で白崎凜が深々と頭を下げているのが目に入った。一応優が凜の上官という事になるが、亡霊対策室ではそうした事を無視するのが通例だ。

三歳年上の女性に頭を下げられると逆に困る。優は困ったような笑みを浮かべて、お疲れ様でした、と頭を下げ返した。

そのまま何もなかったように部屋を出ていく凜の後ろ姿をぼんやりと眺める。少し離れた席に座っていた詩織が席を立ち、優に向かつて困惑した視線を投げかけた。

「今のなんだったんですか？」

「何だったと思う？」

聞き返すと、詩織は両手をあげて降参を示した。

「桜井隊長お〜！ 隊長権限で隊長プレイ強要ですかあ？」

舞が茶化す。加奈と何やら話し合いを続けていた奈々が遂に見かねたように操作を中断して、顔を上げた。

「こちらから。ミーティングは終わったんだから早く出て行きなさい。後がつつかえてるのよ」

「後？」

不思議に思つて出入り口を見ると、見たこともない小太りの男と長身の老人、体格の良い若い男が廊下に立っているのが見えた。慌てて舞の腕を引っ張る。

「迷惑かけてます。さつさと出ましよう！」

「きゃあ！ 中隊長つたら強引！」

まだ寝ぼけてるのか、舞がふざけた事を言う。むんず、と空いたもう一つの腕を華が掴み、詩織が舞の背中を押し、三人がかりで舞を出口へと運び始める。腕を引っ張りながら、こんな人が小隊長で第四小隊は大丈夫なのだろうか、と不安がよぎった。

「子どもは元気なものですね」

ミーティングルームに小隊長たちと入れ替わりに入ってきた小太りの男がニコニコと笑いながら、奈々に話しかける。広報部部长、

山田茂雄^{やまだ しげお}。元々アジテーターとしての性質が強いが、亡霊対策室に入ってから地味な仕事を続けている有能な男だ。その後続く長身の老人は防諜部のトップ、佐々木三蔵^{ささき みぞく}。にこやかな山田茂雄とは対照的に、無愛想で有名な男だった。最後に保安部の中村俊之^{なかむら としゆき}。まだ若い、有能な男だった。

「子どもは強い。そして敏感だ。私は防諜部に子どもを入れるべきだ、と常々感じております」

山田茂雄が笑いながら椅子に腰かける。佐々木三蔵は一度だけ山田を一瞥し、何も言わずに隣の席についた。全員が席についた後、

中村が最後に腰をおろす。

「前半部分だけ同意しておきましょう。加奈、資料を」

早々に話を切り換え、奈々は本題に入った。加奈が数枚の資料を三人の男に渡す。さっと目を通した山田の目が鋭く細められた。佐々木と中村は表情を一切変えない。恐らく、この二人は事前に何らかの情報を得ていたのだろう。

「S I Aが？ これはどういうことです？」

「S I Aだけではない。陸自も不穏な動きを見せている」

そう言つて、奈々は視線で佐々木に説明を命じた。佐々木が険しい顔をして、ゆっくりと立ち上がる。

「陸自は上田中将を中心とした派閥が何やら動いているようですが、我々の脅威ではない、と判断しております」

ですが、と佐々木は表情のない骸骨のような顔を歪ませて懸念を表明した。

「S I Aは危険です。彼らの活動は亡対室の稼働率に悪影響を与える可能性が高い」

「具体的にどういった事態が考えられる？」

奈々の問いに佐々木は慎重に言葉を選ぶように資料に目を落とし、やがて諦めたように口を開いた。

「S I Aが暴走を続ければ桜井優が反旗を翻す危険がある、ということですが。これをご覧ください」

3章 14話 佐藤詩織(4)

「響ちゃんを預かる？」

ミーティングを終え、中枢エリアから寮棟に繋がる通路を渡る際、優が話した響の今後の処遇を聞いて、華と詩織は声を揃えて驚いたように訊ね返した。舞はお腹が減ったと言って、優たちとは別行動をとっている為、この場には既にいらない。

「うん。でも、二週間だけで良いんだって。秋山さんが何か良い方法考えてるみたい」

「それ、いつからの予定なんですか？」

詩織が疑問を重ねる。

「明日からだって」

「えー！」

またもや声を揃えて驚く二人を見て、優は笑みをこぼした。

「響ちゃんの衣類とかどうするの？」

「日用品とかは秋山さんが用意してくれるらしいから多分大丈夫」
話しているうちにセキュリティゲートの前に辿りついた。優が代表してセキュリティカードを通す。ゲートが静かに開き、三人は寮棟に足を踏み入れた。ゲートの近くにいた第一小隊の少女に手を振って軽く挨拶し、そのまま廊下を進む。

「ね、響ちゃんが来たら私も桜井君の部屋にお邪魔していいかな？」

多分、桜井君だけだと色々大変だと思っから」

華が良い事を考えた、というように笑みを浮かべて提案する。それを聞いて、詩織も目を輝かせた。

「もしお邪魔でなければ、私も伺いたいです」

「んー、じゃあお願いしようかな。助かるよ」

優は笑って、二人の提案を受け入れた。詩織が安心したような表情を浮かべる。

その時、ちょうど華の部屋前につき、優たちは華と別れた。その

まま詩織と肩を並べ、詩織の部屋に向かう。しかし、不意に詩織が足を止めた。優も足を止めて振り返る。詩織は迷うように目を泳がせてから、意を決したように口を開いた。

「あ、あのっ、この後お時間ありますか？」

そう言っつて不安げに俯く詩織に優は優しく笑いかけた。

「今日は何も予定ないから大丈夫だよ。どうしたの？」

「えっと、勉強を見ていただきたくて……」

思わぬ言葉に優は一瞬怪訝な顔をしたが、すぐに詩織がまだ中学生であることを思い出して納得した。学校へは通っていないはずだが、優と同様に自習を進めているのだろう。もしかしたら、高校受験だけでもするつもりなのかもしれない。

「あんまり自信ないけど、それでいいなら」

「是非お願いします！」

詩織が本当に嬉しそうな表情を浮かべる。再び歩を進める詩織の後を追いつながら、優は自分が中学三年生の時だった時の記憶を思い起こそうとした。しかし、過去の記憶は霧がかかったように曖昧なもので、詳しい事は何も思い出せない。軽い眩暈を感じ、優は思考を振り払った。

「ここです」

すぐに詩織の部屋の前に辿りつく。詩織が鍵を回してドアを開けると中からふわりと甘い香りがした。お香の類だろうか。

「どうぞ」

詩織に促され、暗い玄関に進む。後ろから続いた詩織がスイッチに触れて明かりをつけた。寮に共通する短い廊下が目に入る。背後でドアが閉まる音がして、優は急いで靴を脱いだ。

「おじゃまします」

「はい」

後ろで詩織がクスリと笑った気配がした。

詩織が優の横をすり抜け、廊下の奥にある白いドアを開ける。詩織の後に続いて中に入ると落ちついた雰囲気の一部屋が目に入った。

床にはライトブルーのカーペット。中央に小さな丸いテーブルが置かれ、奥に薄型テレビとDVDデッキ。隣にはDVDケース、小さな本棚と引き出しが並んでいる。

「適当に休んでください。飲み物もつてきます」

詩織が廊下に設置されたキッチンの方に進んでいく。優は言われた通りに小さな丸いテーブルの前に腰をおろした。本棚に視線をやると、いくつかの少女漫画が目に入った。確か、映画化もされた有名なものだ。

「お待たせしました」

本棚をぼんやりと見つめていた間に、詩織がトレイにオレンジジュースの入ったコップを乗せて、優の顔を覗きこんだ。不意をつかれ、一瞬身体がビクリと震える。詩織はくすりと笑みをこぼして、ジュースをテーブルの上に差し出した。

「あの漫画、知ってるんですか？」

詩織が優の目線の先を見て、小首を可愛らしく傾げる。優は「いや」と答えようとして、それとは逆の言葉を口にした。

「昔、見た事があるよ」

言ってから、優は自分の言葉に驚いた。不明瞭な記憶が突然はつきりとしたものになり、ストーリーが頭の中に浮かぶ。突然入りこんできた莫大な情報量に鋭い頭痛が走った。しかし、詩織は優の様子に気づかず、嬉しそうに話し始める。

「凄く面白いですよ。少し古いですけど、あれ以上のお話を読んだ事がないです」

少し古い。詩織の言葉に強烈な違和感を覚える。あれは、優の記憶では比較的新しいものだったはずだ。再び眩暈を感じ、頭がふらりと傾く。しかし、優は強い意志の力でそれを辛うじて抑えつけた。そして笑顔を浮かべ、簡単な同意の言葉を放つ。優がそれ以上その少女漫画について話を広げる気がないことに気付いた詩織は素早く話題を勉強のことに修正した。

「えっと、教えていただきたいのはここなんですけれど……」

詩織がノートと参考書をテーブルの上に広げる。優はぼんやりとする頭を必死に動かし、参考書に目を通した。

「ここは」

考えるのが酷く億劫だった。しかし、詩織に心配をかけさせまいと無理矢理平静を装う。掴みどころのない記憶の海から数学の知識を拾い出して、ノートにそれを出力していく。

「あー。そこ、今まで無駄な計算してました」

「ここは少し慣れれば随分と楽になるから、ひたすら反復練習だね」
暫くそうして教え続けると、気分が大分ましになった。貧血の類だったのかもしれない。

そのまま一時間ほど経ち、どちらともなく休憩を入れようという話になり、詩織はペンをテーブルに置いた。小さく背伸びして、凝り固まった筋肉をほぐす。

「はあ。こんなに集中して勉強できたの久しぶりです。桜井さんが教えるの上手くて助かりました」

「昔、教師を目指してたことがあるんだよ」

詩織が少し驚いた顔をする。そして、すぐに複雑そうな顔になった。特殊戦術中隊に入った以上、教師になることが叶わない事に気付いたのだろう。それを見て、優は慌てて付け加えた。

「と言っても幼稚園くらいの話だけだね。目指してたというよりも夢って感じかな。漠然となりたいたいなあ、って」

「そうなんですか。桜井さんみたいな先生に会えてたら、私もっと勉強が好きになれてたかもしれません」

詩織が少し安心した表情を見せる。優は手のつけていなかったジューズに手をのばし、一口飲んでから、気になっていた疑問を口にした。

「詩織ちゃんは高校受験するつもりなの？」

「はい。合格しても通う気はありませんが、昔から入りたかった高校を受けてみたいんです」

それを聞いて優は微笑んだ。特殊戦術中隊の15歳組は例年、通

う気はなくても受験だけする人が多いという。それは手の届かなくなつた世界への未練なのだろうか。それとも、一種の清算といえるものなのかもしれない。

「そういえば、桜井さんってどこの高校に通っていたんですか？」

「えっと、花公院って知ってるかな」

そう言つと、詩織は驚いた顔を浮かべた。そして、神妙な顔をする。

「花公院って、誰か他にも入学してた人がいませんでしたっけ？」

予期せぬ言葉に優は目を丸くした。

「他にもって、特殊戦術中隊に？ 知り合いはいないはずだけど…

…」

「誰か、有名な人がいた気がするんです。ちょっと名前は思い出せませんが」

詩織はそう言つて記憶を掘り起こそうとするかのように頭を抱えながら唸つた。優も記憶を手繰り寄せてみるも、それらしい人物は思い出せない。それどころか、短かった高校生活の記憶が全く思い出せなかった。どうも、自分が思う以上に記憶力が悪いらしい。優は記憶を手繰る作業を放棄し、早々に話を打ち切つた。

「多分、勘違いじゃないかな」

「そう、かもしれせん」

詩織が自信なさげに笑う。

「あ、結構休憩しちやつたね。そろそろ再開しようか」

「はい」

再び参考書をめくり始める詩織を見つめながら、優は静かに花公院での生活を思い出そうとしたが、遂に最後までそれが思い出されることはなかった。

3章 15話 鎖の少女(11)

朝、桜井優は自室のベッドでいつも通り目覚まし時計のアラームに眠りを阻害され、ゆっくりと身体を起こした。昨日は気分が悪かった為、早めに睡眠を取ったのが良かったのか今日は気分が優れ、清々しい朝を迎えることができた。

洗面台に向かい、髪を梳かしながら今日の予定について考えを巡らせる。今日は響を引き取る日だ。色々とやる必要がある為、特別に朝から医務室に入れてもらえることになっている。

優は身支度を素早く終わらせるとすぐに部屋を出た。ドアに『留守中』のプレートをかけ、そのまま中枢エリア目指して進む。歩きながら携帯で時間を確認するとまだ7時過ぎだった。寮棟から中枢エリアに繋がるゲートを抜け、歩きなれたルートで医務室に向かう。入隊したての頃は本部内でよく迷ったものだが、今は各施設への最短ルートが頭にぱっと浮かぶようになった。まるで、遙か昔からここに住んでいたかのような安心感を覚えることさえある。人の慣れる速度は恐ろしいものだ、と優はぼんやりと思った。

数分ほど広い本部を歩いて、ようやく医務室前に辿りつく。前にこの時間帯に来た時は鍵がかかっていたが、今日はすんなりとドアが開いた。

「おはようございます」

半身だけドアの間から覗かせ、控えめな声量で挨拶をすませる。

すぐに奥から明日香が姿を見せた。

「おはよう。入ってきていいわよ」

言われた通りに医務室の中に入る。入口から死角になっていたベツドの上で響が人形遊びをしているのが見えた。

「響ちゃん、おはよう」

声をかけると一瞬驚いたように響の身体が跳ね上がったが、優の存在に気づいてすぐに笑顔を見せる。年相応の、無邪気な子どもの

笑みだった。それを見て思わず頬が緩む。

「秋山さん、何かからやればいいですか？」

「とりあえず、響ちゃんの衣類を君の部屋に運びましょう。こっちに用意してるから着いてきて」

明日香が背中を向け、準備室の方に向かう。優は慌ててそれを追った。準備室のドアが開き、明日香が中に置いていた段ボール箱を取りだし、それを優に向かって差し出した。受け取ると予想以上の重さに一瞬落してしまいそうになり、慌てて持ち直す。

「何ですか、これ？」

「言ったでしょう？ 響ちゃん用の衣服よ」

優は腕にずっしりと押し掛かる段ボール箱をまじまじと見つめた。

「全部、ですか？」

「そう」

「よくこれだけの量を一日で集めましたね」

「スポンサーがいるのよ」

明日香はそう言って笑みを浮かべ、再び準備室の中に入って言った。スポンサーという言葉が良く分からなかったが、それを聞く機会を逃してモヤモヤとした気分が残る。準備室から再び明日香が姿を現した時、彼女は更に別の段ボール箱を持っていた。

「次は何ですか？」

「これも中は衣服よ」

啞然とした様子の優を置いて、明日香はさっさと響のもとに歩いていく。渋々後に続くのと、ベッドの横に立つ響が大きな鞆を持っていることに気付いた。恐らく、明日香が事前に用意させていたのだらう。

「さ、響ちゃん引越しょー！」

明日香が片手をあげて元気よく宣言する。それに続いて、響が無邪気な笑顔を浮かべ、明日香と同じように片手をあげた。優もそれに続いて、おー！と声をあげる。響が楽しそうに笑い声をあげた。「じゃあ行きましようか。響ちゃん、ちゃんとしてきてね」

コクンと響が頷く。それを確認した明日香は両手で軽々と段ボール箱を持ちあげ、廊下へと歩を進めた。その後、響が続き、最後に優が医務室のドアを閉め、廊下に出る。そのまま三人で横に並び、人気のない廊下を進んだ。

「これ、結構重いですね」

何気なく呟くと、明日香は不敵な笑みを浮かべた。

「君の分だけ、重たいの入れてるから」

「ええっ!?!」

「冗談よ」

さらりと涼しい顔で言う明日香に、優は懐疑的な視線を投げかけた。

「……本当ですか?」

「何なら、交換する?」

そう言われると、何も言えなくなる。しかし、明日香の口元がさきほどから緩みつばなしなのが気になって、優は、ズイ、と明日香の方に踏み込んだ。

「じゃあ、交換してください」

「仕方がないわねえ」

少し立ち止まり、お互いの運んでいた段ボール箱を交換する。明日香の段ボール箱を受け取った時、優はジト目で明日香を睨んだ。

「本当にこっちの方が軽いじゃないですかっ!」

「大人は皆汚いのよ。ああ、純粋な頃に戻りたい」

そう嘯いて、明日香は歩を速めた。呆れて、横にいた響に視線を向ける。

「響ちゃん、ああいう大人になっちゃダメだよ」

響は良く分からない、と言った風に首を傾げた。それを見て、少し焦燥感を覚える。先程から響の表情はコロコロと良く変わるが、一向に喋る様子がない。昨日も名前を聞いた時に一言喋っただけだ。心的外傷が原因の何らかの発達障害を抱えてしまっているのだろうか。ただ人見知りしているだけかもしれないが、優には判断が

つかなかった。

「早く来なさいよ！ ゲート閉まるわよ」

前方から明日香の声が届く。見ると、閉まりそうなゲートに手を挟みこみ、事故防止用のセンサーを使って無理矢理ゲートを開けたままの明日香が見えた。両腕がふさがっている今の状態では非常に助かる。優は少し歩幅を大きくして、寮棟に繋がるセキュリティゲートを抜けた。続いて、響がゲートを通る。その時、まだ幼さの残るソプラノの声が響いた。

「先輩、何やってるんですか？」

響から目を離して振り向くと、数メートル離れたところにある個室から出てきたばかりの望月麗の姿があった。手には着替えらしきものを持っている。大浴場に向かうつもりらしい。

「パシられてる途中、かな」

そう言つて、両手に抱えた段ボール箱を目で示す。麗はそれよりも、優の後ろにいる響に興味を持ったようで、優の答えは無視された。

「誰ですか、その子？」

「私の子よ」

前から明日香の声。

「秋山さんはちょっと黙つててください。話がややこしくなります」
麗が明日香と優を見て不思議そうな顔をする。

「何と言つか、暫く僕が預かることになって」

そう言つと、麗は納得したような顔をした。

「親戚の子ですか？」

「う、うん、そんなところかな」

勝手に勘違いしてくれたようだった為、そのまま流れに任せる。

「へえ。かわいいですね。私もこんな子どもが欲しいです！」

そう言つて、麗は意味ありげに優を見た。以前の高梨市の喫茶店内での麗の行動を思い出し、目を逸らす。麗はいまだにESP能力者同士による出産を諦めていないようだった。優の反応に、麗がつ

まらなさそうな顔をする。

「じゃ、私お風呂入ってくるので失礼します！」

「うん、また訓練だねー」

手を振り、優たちの入ってきたゲートから出ていく麗の姿を見送り、再び足を進めようとする。

「君、本当に頼りにされてるわね」

不意に、背後の明日香がそう言った。思わず足を止めて、振り返る。

「あの子、前はずっと焦っている感じだった。けど、最近は余裕が出てきている。多分、君のおかげね」

「僕、何もしてません」

苦笑し、再び歩き始める。

「何もしてなくても、ただ在るだけで支えになる事もある」

「まるで、神様みたいですね」

ある部屋の前で足を止め、ポケットから部屋の鍵を取り出す。

「着きました。ここです」

鍵を回し、ドアを開ける。段ボールを玄関マットの上におろし、外にいた明日香からも一つの段ボールを受け取り、さっき置いた段ボールの上に重ねる。

「これで終わりですか？」

「まだ布団とか、色々運ぶものがあるわよ」

「やっぱり……」

玄関前で手持無沙汰にしている響に目をやる。

「響ちゃんは今でゆっくりしてて良いよ。のど渴いてたら冷蔵庫から適当に飲み物とっていいからねー」

コクンと頷き、優の横を抜けて中に入っていく響を確認してから、明日香に視線を戻す。

「後何往復くらいするんですか？」

「君の頑張り次第よ」

明日香の返答に、優はげんなりとした表情を浮かべた。

3章 16話 鎖の少女(12)

「響ちゃん、さつきあまり喋りませんでしたけど、大丈夫なんですか？」

医務室に戻る途中、優は思い切って明日香に訊ねた。

「少し、発達が遅れている。正当な教育を受けていない分、自身の感情や考えを上手く言葉にできないみたい。つまり精神的な原因ではなく、ただの経験不足。訓練次第で何とかなるんじゃないかしら歩きながら、明日香は淡々とそう答えた。その答えに胸を撫で下ろす。

「でも、幼少時に受けた傷は死ぬまで癒えることはない。何らかの後遺症は少なからず残ってしまう」

「そう、ですか」

沈黙が落ちる。結局、現時点では何もわからないということだろう。二人は無言で長い廊下を歩き続けた。

死ぬまで、癒えることはない。明日香の言葉が妙に重く響いた。

無言のまま医務室に辿りつき、明日香が扉を開ける。そのまま準備室の方に向かい、明日香から圧縮された布団を受け取った。明日香は再び別の段ボールを抱えている。中から響く音からして、食器類だと推測できた。

「これ、良いダイエットになるわね」

「じゃあ、僕の分も運んでください」

「君もダイエットしなさい」

「僕、ダイエットする必要はないです」

「私もよ！」

「言ってる事が無茶苦茶です」

軽く言い争いながら医務室を出て、再び自室を目指して歩き出す。今日だけで既に三回通ったセキュリティゲートを通り抜けて寮棟につくと、廊下に数人の影があった。そろそろ皆が起きだす時間の

ようだった。数人と挨拶を交わして、自室のドアを開ける。

「響ちゃん、いる？」

玄関から声をかけると、廊下の奥にある唯一の部屋から響がひよっこりと顔を覗かせた。勝手に出歩いていなかった事に安堵し、布団を部屋の中に持ち込む。部屋の隅に置き、玄関に積んだままの段ボールも部屋の中に運び終えると、部屋の中が妙に手狭に見えた。やはり、一人暮らし用の部屋に二人分の荷物は厳しい。元々優の持ち物が少ない為、生活に影響が出る範囲ではないのが救いだっただ。

「優君、予想以上に時間がかかりそうだから、後の荷物運びは私がやっておくわ。午後から訓練もあるでしょう？ 君は休んでおきなさい」

玄関口から明日香の声が聞こえた。素直に甘えることにする。

「すみません、じゃあ後お願いします」

明日香が食器類の入った段ボールを抱え、部屋に入ってくる。

「響ちゃん、何かあったら優君に言ってね。当分は君の親みたいなものよ」

響は明日香の言葉に不思議そうな表情を浮かべた。

「オヤ？」

しやがみこみ、明日香が響の頭を優しく撫でる。

「そう。無条件で君を守ってくれる存在」

響が嬉しそうに笑い、優を見る。明日香はその様子を確認して、素早く立ちあがった。

「じゃあ、行くわね。何か困った事があったら逐一報告して頂戴」

「はい」

頷く。明日香は一瞬優しい笑みを浮かべ、すぐに踵を返した。廊下を歩く足音に続き、玄関のドアが閉まる音が室内に静かにこだました。隣の響に目をやると、響は明日香の出で行ったドアをじつと見つめていた。これからどうしようかと少し考えてから、出来る限り明るく話しかける。

「響ちゃん、お腹減ってない？ 何か作るね」

そう言うと響は嬉しそうに笑った。素直な反応に頬が緩む。

「少し時間がかかるから適当に座って楽にしてて」

そう言い残して、廊下の横に設置された調理スペースに向かう。冷蔵庫から卵とベーコンを取りだし、フライパンに火をかけた。はじめは食堂で朝食を摂るうかと考えていたが、麗に会った時の事を思い出して、気が変わった。響の存在は目立つ。あまり詮索されたり、噂がたつのは響の負担になるだろう。それに、人の多い食堂に連れていく事自体に抵抗を感じた。響と同じ年の子どもは亡霊対策室にいない。周りが年上ばかりでは、響も落ちつけないのではないのか、と思う。

ベーコンを半分に切り、フライパンに放り込んだ時、突然玄関のドアが開いた。

「おっは……何やってんの？」

ドアを開けたまま、固まる京子と目が合った。

「何って……料理だよ」

「……何で？」

京子が首を傾げると同時に、部屋の方のドアが開いた。響が顔を覗かせる。声が気になって出てきたのだろう。

「響ちゃん？」

京子が不思議そうな表情を浮かべ、視線で優に説明を求めてくる。そう言えば響を預かることについて、京子と愛には言ってなかったな、とぼんやりと思いだした。

「僕が約一週間響ちゃんを預かることになったんだ」

「何それ？ 聞いてないし！」

「まあ、言っただけだから」

そう言うと、京子はあからさまに不機嫌そうな顔をした。

「別に隠してたわけじゃないよ。ただ、言う機会がなかっただけ」
そう弁解しても、ジト目で睨みつけてくる京子に苦笑をもらす。

「あ、そうだ。京子も食べてく？ 一人分増えたところでそんなに変わらないし」

「……許す」

京子のわかりやすい反応にクスリと笑みを浮かべる。

「じゃあ、部屋の方で適当に待ってて。十分くらいで出来るから」
「わかった……あ、華とかどうする？ 食堂で待ってたらマズいし、連絡しとこうか？」

「だね。何なら、全員分作っとくよ」

「あいあい」

京子が響とともに部屋の方に入っていくの見てからフライパンに視線を戻す。ちょうどベーコンが良い具合に焼けていた為、二人分の卵を入れる。部屋の方から、京子が華たちに連絡をとっているのが聞こえた。

「うん……そう。全員分作ってくれるって。……はいはい。じゃ、またね」

続いて、通話の切れた音が微かに届く。開いたままだった部屋のドアから京子が再び顔を覗かせた。

「電話しといた。後で来るって」

「ありがとう」

適当に言葉を返し、冷蔵庫から新たに三人分のベーコンと卵を取り出す。フライパンの上で焼けている二人分のベーコンエッグを皿に移したところで、視線を感じて優は振り向いた。開いたままの部屋のドアからじっとこちらを見つめる京子と目が合う。

「どうしたの？」

「……桜井さ、エプロンとかつけないの？」

「つけたことないなあ。そんなに高い服着て料理することないし」

「今度、買って見たら？ 凄い似合う気がする」

「エプロン似合っても全然嬉しくないんだけど……」

引きつった笑みを浮かべ、優は遠回りに拒否の意思を伝えた。

空になったフライパンに新たなベーコンを三人分投入し、頃合いを見て軽く胡椒をふりかける。そのまま焼け具合をぼんやりと確認していると再び視線を感じて顔をあげる。こちらをじっと見つめる京

子と再び目が合った。

「どうしたの？」

先程と同じ問いを投げかける。

「ん。ただ、暇だから眺めてただけ。気にしないで」

「そう言われると逆に凄い気になるんだけど。暇なら本棚とか勝手に漁っていいよ」

「いや、いい。料理してるの見てるだけでも結構飽きないもんだよ」

「そういうものかなあ。京子も料理とか結構やるの？」

「全く」

その返答にクスリと笑いが漏れる。その時、玄関の方からノックの音が響いた。一拍置いてドアが開き、華と愛が姿を見せる。

「おはようー」

「おはよう」

「二人ともおはよー。適当に部屋上がってて」

おじやましますーという言葉とともに、華と愛が靴を脱いで廊下にあがる。

「桜井くん、普段から結構料理するの？」

調理スペースに並んだ調味料の数を見て、華が疑問を口にする。

優は卵を割りながら頷いた。

「中隊に入ってからあまりやってないかな。昔はよく作ったけど」

「へえ。私も最近は全然。食堂で食べる事多いから、わざわざ作る必要なくなっちゃうんだよね」

そう言いながら、華がフライパンの中を覗いてくる。フライパンに蓋をしながら、女の子は人の料理を眺めるのが好きなのだろうか、と疑問が浮かんだ。

「もう少して出来るから、部屋で待ってて」

「うん。分かった」

そう言つと、華は愛とともに奥の部屋に入ってしまった。京子もそれに倣って続く。

ようやく一人になった優はゆったりとした動作で三人分の皿を取

りだした。蒸していたフライパンの蓋を取り、焼き加減を確認する。その時、部屋の方から響の笑い声が聞こえてきた。華が何やら響の遊び相手をしているらしい。賑やかな様子に笑みが零れる。暫くは騒がしい朝を迎えそうだ、と思いながら優は最後の三人分のベーコンエッグを皿に移した。

3章 17話 鎖の少女(13)

「てかさ、何で桜井が響ちゃんを引き取るようになったわけ？」

小さめのテーブルを五人で囲みながら朝食を摂っていると京子がふと思い出したというように疑問を投げかけた。それを聞いて、華と愛からも視線を受ける。

「……京子と違って信頼されてるからかな」

少し考えてから、茶化して誤魔化す。本人の前で追及することではないと考えたのが、京子も深くは聞いてこなかった。

「まあ、響ちゃん桜井に懐いてるみたいだし、問題はなさそうだけど」

そう言つて、京子が優の隣りにいる響に目をやる。優も釣られて視線を向けるとベーコンを小さな口に運んでいるところだった。

「響ちゃん、お箸の持ち方おかしいかも。……こう」

軽く手を添えて、箸の持ち方を教える。少し持ちづらそうにしていたが、すぐにスムーズな動きになった。物覚えは早いのもかもしれない。安心して、再び食事に戻る。その時、テーブルの向こう側に奇妙なものが映った。

「……何でさつきまで普通にお箸持てた愛ちゃんが変な持ち方になつてるの？」

「……私にも教えてほしい」

「位置的に無理だつて！ 京子にパス！」

そう言つと、一瞬で愛の箸を掴む手が正しい持ち方に変わった。

「……やっぱり治ったから良い」

「愛、結構良い性格してるよね」

京子が呆れた風につ。そのやりとりを横目で眺めながら、華が口を開いた。

「ね、響ちゃんって何歳なの？」

その言葉に、響が食事を中断して首を傾げる。

「わかんない」

「見た目的には八から十歳くらい、かな」

夜の街中で初めて見た時はもう少し年上に見えたが、こうしてみると小学校低学年のように見える。再び食事を開始する響を見ながら、優は一つの事を思い出した。年齢はすぐに判別するかもしれない。そして、その周辺関係も

「ごちそうさまでしたあ」

一番早く食べ終えた華が箸を置く。同じタイミングで食べた優は空になった皿を回収しようとして、手で制止された。

「洗い物は私がやっておくよ」

「じゃあお願い。ありがとう」

「私のもお願いー」

同じく食べ終えた京子が皿を華に渡す。華は苦笑してそれを受け取った。

「食堂以外で食べるのも久しぶりだなあ。暫くローテーションで回す？」

京子の提案に、優はまだ食事を続けている愛に視線を向けた。愛が少し考えたように間をおき、答える。

「……賛成」

「僕もそっちの方がいいかな」

響をあまり目立つところに連れ出すつもりがなかった為、その提案はちょうど良かった。しかし、次の言葉に優は絶望的な気分になった。

「じゃ、明日は私の特製ラーメンを振る舞おう」

全員が朝食を食べ終えた後、訓練が始まるまでの空いた時間に響の荷物整理をすることになった。手分けして、段ボールに入った衣服を取り出し、少し余裕のあったクローゼットに入れていく。とり

あえず、全部はとも入りきらない為、汎用性の高い服を中心に詰め込んでいった。余ったものはそのまま段ボールに入れたままにする。それと響の食器類をキッチンの収納スペースに詰め込み、歯ブラシなどの生活用品も考えうる限り亡霊対策室内にあるコンビニで揃えた。最後に簡単な整理をしている時、華が何かを思い出したように「あつ！」と叫んだ。

「どうしたの？」

作業を止めて華を見ると、華は顔を赤くして首を振った。

「な、何でもない！」

そう言いながら、京子と愛を引っ張り、廊下の方へと消えていく。その一連の行動が何かあると言ってるようなものだが、優は気にしないことにした。

一人で部屋の整理を続けているとすぐに三人が部屋に戻ってきて、今度は響を連れて再び廊下の方に消えてしまった。ドアが閉まり、優一人だけ部屋に取り残される。何とも言えない気持ちになりながら、優は整理に戻った。

暫くして、四人がまた部屋に戻ってくる。優は迷いながら結局疑問を投げかけた。

「何してたの？」

「何でもない！」

間髪おかず答える華。

「まあ、二、三年後じゃない？ 心配ないって」

京子が愛に何か言ってるのが聞こえたが、優には意味がよくわからなかった。

「……個人差が大きいから何とも言えない」

「まあ、そりゃそうだけど」

「何の話か知らないけど、後頼める？ 僕、ちょっと用事あるから」
そう言って、優は整理を他に任せて部屋を出た。京子が何か言っているのが聞こえたが、意図的に無視する。そのまま玄関のドアを開け、廊下に出た。数人の影があるのを見て、人気の少ない階段の

方に向かう。誰もいない踊り場まで降りた時、優はポケットから携帯を取り出した。アドレス帳から迷わず一人の女性の名前を選択する。四コール目で繋がった。

『もしもし?』

携帯の向こう側から眠たげな声。

「もしもし。橋本さんですか? 朝早くからすみません」

『いいのいいの。何か重要な事でしょう?』

定期連絡と称して今までに雑談を何度かしたことはあるが、今回のように朝早くから連絡するのは初めてだった。恵の声から眠気がすぐに吹き飛び、真剣味を帯び始める。

「はい。総基ネットそくきについて知りたいことがあるんですが」

「ふう……」

電話を終え、深いため息をつく。踏み込むな、と態度で示していた明日香。はつきりと警告の言葉を放った準。二人の姿が脳裏を掠め、陰鬱な気分になる。

総合国民基本台帳ネットワークシステム、総基ネット。全国民を一意に絞る為のコードが与えられ、生年月日、指紋、住所などの情報が総基ネットに全て入っている。十一年前に起こった金融危機以降、外国人犯罪が急激に増加した為に電子統合されたネットワーク群だ。これを利用すれば、響の指紋から正しい生年月日や血縁関係を簡単に洗い出すことができる。と言っても、これを利用できるのは行政管理者に限られ、市民がこれを利用する事はできない。しかし、恵に聞いたところ、何とかするという答えが返ってきた。果たして何とか出来るレベルのものなのかは分からないが、とりあえず保留という形に落ちついた。恵から連絡が来るまでは何もわからない。

階段をのぼり、自室に向かう。優は気分を変え、玄関ドアを開け

た。

「さつきはいきなりどうしたの？」

玄関にあがるなり、廊下の奥から京子が出てきて心配そうな顔で訊ねてくる。

「響ちゃんの事で斎藤さんから電話があつて」

そう言つと、京子はとりあえず納得した顔をした。咄嗟に出た嘘にしては上手く出来ていた、と安堵し、そのまま部屋に入る。華が響を膝の上へのせ、仲良く子ども向けテレビを見ているところだった。その横で暇そうに本棚を眺めていた愛が優に気付いて、振り返る。

「……優、不健全な本ないの？」

「ないよっ！　というか、あつてもないとか言えないよ！」

予想外の言葉に全力で否定する。いない間、ずっと探していたのだから。

「フケンゼン？」

響が不思議そうな顔をする。この環境は教育に悪いかもれない。

「府県全つてのは東京と北海道以外の日本全国つて意味だよ！」

「……その誤魔化し方無理がない？」

誤魔化してみるも、京子にダメ押しされてしまう。しかし、響は何やら納得したような顔をしている為、成功と考えていいかもしれない。

「ねえ、そろそろ訓練じゃない？」

ふと京子が時計に視線を向けて呟く。釣られて見ると、確かに後数分で訓練の時間だった。

「響ちゃんはどうするの？」

華が膝にのせた響の頭を撫でながら口を開く。

「お留守番してもらつしかなかないかな。響ちゃん、お留守番できる？」

コクンと頷く響に笑みを零し、優は華の膝から響を抱きあげ、ベツドの上に乗せた。

「勝手に出歩いちゃダメだよ」

頭を撫でると、響は目を細めて気持ちよさそうな顔をした。小さく笑いかけ、そのまま背中を向ける。既に華、愛、京子の三人は廊下の方に集まっていた。三人の後を追おうと足を踏み出す。その時、右腕の袖が小さい力で後ろに引つ張られた。困ったような笑みを浮かべ、振り返る。

「あのね」

「どうしたの？」

少ししゃがんで視線を合わせる。

「おトイレの時って血がでないとおかしいの？」

予想外の言葉に優は固まった。さつき、三人が響を連れてコソコソと廊下に出ていた事を思い出す。男である自分に響の世話をするには限界があることを知り、華達がいて本当に良かったと、この時優は心の底からそう思った。

3章 18話 神奈奈々(2)

桜井優は閉塞感のある細い通路を小銃を抱えながら慎重に進んでいた。その後ろには宮城愛が後方を警戒しながらピタリと続いている。薄暗い通路に二人の足音が響く。

不意にどこかで銃声が響いた。そして静寂。孤立した一人に対して一方的な攻撃があったということだ。第一小隊はいまだに各分隊に三人以上の生存者がいる。つまり、やられたのは第一小隊のメンバーではない。

「優、東西から交戦の様子が見られない。敵がセンターに戦力を集中させている可能性が高いということ。後退を提案」

背後から愛の緊迫した声が届く。優は油断なく辺りを警戒しながら足を止めた。

「西が静かなのは第二小隊が戦力を北に集中させてるからだと思う。第六小隊がセンターに留まり続ければ第二小隊と僕たちに挟撃される。第六小隊もそれに気づいてるだろうから、敵センターは後退せざるをえない。このままのルートにしよう」

「了解」

愛が頷くのを確認して優は再び歩き始めた。通路が分かれる点で注意深く辺りを警戒しながら広大な迷路の中を進み続ける。

不意に銃声が轟いた。しかも一つや二つではない。何十の銃声が連続的に響きわたる。

「始まった……急ごう」

興奮で呼吸が早くなる。小銃を構え直し、優と愛は音もなく通路を駆けた。細い通路が終わり、開けた空間が視界に入る。その先で散発的に光を放つ数十の影。第二小隊と第六小隊が交戦しているのだ。優は片手で突撃合図を出すとともに、小銃を構えて広場に躍り出た。まだこちらに気づいていない少女の背中に照準を合わせ、引き金を引く。

「ごめんね」

地面に崩れ落ちる少女に謝罪の言葉をかけ、躊躇なく更に別の対象に向かって引き金を引く。ようやく優たちの存在に気づいた生存者達が小銃を構えるが、優の後ろから放たれた愛の銃弾が的確にそれらを撃ち抜く。訪れる混乱の中、広場の中で二つの影が的確な回避行動をとり、迎撃態勢をとった。

「桜井……中隊長……」

広場に残った二人の影の一つ、白崎凜が驚いた声をあげる。そして、もう一人の生存者、姫野雪に向き直る。雪は余裕のある微笑を浮かべ、優に向かって口を開いた。

「たった二人でここまで？」

その時、東の彼方から激しい戦闘音が轟いた。第一小隊の本隊と第六小隊の一部が交戦しているのだ。第一小隊がそれを破れば、すぐにここへ雪崩れ込んでくるだろう。

「東に展開した第六小隊は一個分隊といったところでしょうか。あまり時間はありませんね」

雪が小銃を構えなおす。そして、次の瞬間、地を大きく蹴る。白亜の髪が舞いあがり、銃口が優に向けられた。同時に凜も雪に向けて引き金を引く。

二つの発砲音とともに、優を庇おうと前に出た愛が崩れ落ちる。その光景を視界の隅で確認しながら、優は小銃を雪に向け、引き金を引こうと右手の人指し指に力をこめた。その瞬間、何の予告もなく全身が痺れる。雪の攻撃ではない。第三者の攻撃を受けたのだ。倒れる際に、こちらに銃を向けていた雪、そして雪に照準を合わせていた凜も同じように地面に崩れ落ちるのが見えた。無様に冷たいコンクリートの床に頬をつけ、自分を撃った襲撃者がいるであろう背後に残った力を振り絞って首を回す。戦闘服に身を包んだ神条奈々と長井加奈が静かにこちらを見下ろしているのが見えた。

「神条司令……」

全身に力が入らない中、優は最後に自らを撃った長身の女性の名

を呟いた。

『各小隊長の全滅を確認。戦闘を中止してください』

ブザーとともにアナウンスが流れる。同時に、周囲で倒れていた少女たちが一斉に立ち上がった。優も身体の痺れがなくなっている事に気づき、慌てて立ち上り、隣で起き上がるうとしている愛に手を貸す。

『訓練プログラムはこれで終了です。速やかに第一ゲートから退出してください。繰り返します。訓練プログラムは』

アナウンス通り、迷路の中を抜け、そろそろと出口へと向かう。外に出ると、冷たい風が頬を撫で、広範囲に広がる原っぱが目に入り、妙に開放的な気分を受けた。そのまま小隊別に横隊を組む。前に奈々が出て、反省点を述べ始めた。

「細かな戦術については長期的な教育プログラムが必要な以上、逐一指摘はしない。だけど、全体的に基本的な事が出来ていない。まず、死角が多すぎる。各隊長全員が私と加奈の襲撃に最後まで気付かなかった。一方向に注意を向けすぎているということ。一つの銃弾を受ければ簡単に死ぬのよ。絶対に死角をとられてはいけない。その為の警戒態勢を」

優たちは訓練の為、亡霊対策室本部から最寄りの陸上自衛軍の訓練施設に来ていた。今までは亡霊対策本部内にある訓練施設を利用して来た為、これには多数から驚きの声があがっていた。内容としては所謂サバイバルゲームに近いものだったが、最新鋭の電磁技術を利用した実戦さながらの訓練内容だった。

「それを全員が肝に銘じておくこと。次、第三・四・五小隊アップして。第一・二・六は休憩。加奈、次の準備を」

休憩と言われた途端、周りがるさくなる。便宜的に第一小隊の場所にいた優の元へ華と京子、愛の三人がすぐに近づいてきた。

「これ、精神的に疲れない？」

京子が疲れた様子で言う。

「京子、最初の衝突でアウトになっただけで寝てたような……」

華が突っ込む。

「ずっと動けないのも結構ストレス感じんの。ってか、何でこんな訓練始まったんだろ。これ、亡霊と戦う上で役に立たなくない？」

電磁拘束を受けていた関節部を手で擦りながら、愚痴をこぼす京子に華が少し不安げに答えた。

「どう考えても対人戦用の訓練だよな」

「そうそう。しかもいきなりだし。今日って射撃訓練の予定じゃなかった？」

二人の言葉に耳を傾けながら、優は思考を巡らせた。訓練自体が特殊なことに加え、今回は奈々と加奈が直々に訓練に参加し、指導している。しかも、奈々と加奈は本気で動いていた。まるで、『特殊な訓練を受けた人間には、どれだけ特殊な力があっても素人では勝てない』ということを知らしめる為のようだった。それに、今回の迷路のようなフィールドが気になる。野外フィールドではなく、屋内フィールドを利用したのは果たして偶然だろうか。まるで、本部内での対人戦闘を想定した訓練みたいだと思った。

出口付近で、次の準備をしている奈々に視線を向ける。奈々は一体何を考えて、この訓練を行ったのだろうか。

「あ、そろそろ始まるよ」

原っぱの上に設けられた簡易休憩用のテントにあるモニターを見て、華が言う。釣られて視線を向けるとちょうど第三・第四・第五小隊の訓練が始まったところだった。各員の持つ識別子がマップ上を動き、リアルタイムで戦況を確認できるようになっている。第四小隊長の舞は普段近接戦闘を、第五小隊長の咲は普段から狙撃を中心に戦っている為、そうした攻撃が許されないこの訓練ではスタンダードな戦い方を好む詩織を中心とした第三小隊が僅かに有利と言える。

モニタに映る識別子が衝突を始めた。攻撃を受けた者は画面上からロストしていく。画面上では一丸となった第四小隊が東西に分裂した第三小隊の一部を圧倒的な人数差で押しているところだった。

代わりに、その後ろから第五小隊が第四小隊向かって進行しているのが見えた。小隊長が被弾すればその時点で小隊全体がアウトになる為、挟撃による混戦状態になれば第四小隊は非常に危うい形となる。

「お、遂に司令が動くみたい」

京子が楽しそうに言う。開始から五分後経てば奈々と加奈がそれぞれの小隊とは独立したチームとして参戦する。たった二人とはいえ、防衛大学を首席で卒業したと噂される奈々と、過去に海外で実際の戦闘経験を積んだ加奈は恐ろしい脅威となる。まだ若いとはいえ、亡霊対策室の重鎮として君臨するだけの確かな能力が彼女たちにはあった。

二人の動きをモニタ上で見てみると、奈々たちは正面からぶつかわずに不意打ちを基本とした最小限の攻撃で安全かつ迅速に進行を行っていた。その動きに一切の迷いは見られない。それを見ながら、優の頭にふと根拠のない一つの考えが浮かんだ。

これは対人戦の基本技術を習得する為の訓練ではなく、躊躇なく人を撃てるようにする為の訓練ではないか。

背筋を寒気が走る。訓練とはいえ、小銃を人に向けて引き金を撃つにはそれなりの抵抗感があった。恐らく、実際に人を撃てと命令されても実行は不可能だろう。漠然とした倫理観がそれを許さない。これは、その倫理観を麻痺させる訓練としての機能も持っている。それが目的かどうかは確認しようがないが、そうした機能も内包した訓練であることは間違いない。

奈々は何故この訓練を突発的に始めたのだろうか。それが、わからない。しかし、確かなことは奈々が特殊戦術中隊のことを考えてこの訓練を行ったということだ。優は奈々に全幅の信頼を抱いていた。故に、安心できる。奈々が何を考えているかは理解できなくても、その結果は自分たちを守護するだろうといった漠然とした予感がある。

それとも、と優は思った。全ては考えすぎでしかないのかもしれない。

ない。対人戦闘技術を対亡霊戦にも応用できないかを試す試験的な運用に過ぎない可能性もある。

ブザーが鳴る。どうやらゲームが終わったらしい。アナウンスが響き、出口付近でアウトになった少女たちが早々と外に出てくる。

「神条司令強いなあ。やつぱりプロは違うね」

華が感嘆の息を吐く。どうやら、また奈々と加奈が三人の小隊長を抑え込んだらしい。

フィールドから全員が出て横隊を組むと、再び奈々が反省点を指摘していく。その様子をぼんやりと眺めながらふと空を見上げると、柔らかな初冬の太陽が大きな雲に隠れようとしているところだった。

3章 19話 長谷川京子(5)

優たちが亡霊対策室に戻ってきたのは十七時を少し過ぎた頃だった。くたくたになりながらも、長い廊下を通って寮棟へと向かう。帰宅する時、いつも本部の広大な敷地が怨めしくなる。

「しんどお……」

「ほらほら、もうすぐだから」

ふらふらの京子に華が応援の言葉をかける。その前には疲労の色を浮かべた優と愛、詩織が並んで歩いていった。

ゲートを通り寮棟に入るとそのまま優の部屋に向かう。玄関ドアを開けると、響がすぐに駆け寄ってきた。

「遅くなってごめんね。昼ごはん、ちゃんと食べた？」

「たべた！」

元気よく答える響の頭を撫で、そのまま背中を押しして部屋の方に向かわせる。その後ろから華達がぞろぞろと中に入った。はじめて優の部屋に入る詩織はキョロキョロと辺りを物珍しそうに見渡していた。

「ちよつと手狭かな。適当に座ってて」

アウターをクローゼットにかけてから、そう言い残して廊下のキツチンの方に向かう。冷蔵庫から適当にジュースを取り出し、六人分のコップを抱えて部屋の方に戻った。あまり大きくないテーブルの周りに愛、詩織、そして華と、華に抱きかかえられている響がいる。京子は何故かうベッドでうつ伏せでくたーっと寝こんでいた。

「京子寝てるの？」

「寝てる」

コップをテーブルにおきながら聞くと、すぐに答えが返ってきた。自称睡眠中の京子の首筋に冷たいジュースの入ったコップの底面を当ててみる。

「ひゃあっ……」

悲鳴をあげて飛びあがる京子に、はい、とコップを手渡す。

「京子、随分と疲れてるね」

「昨日あんまり寝てなかったから……」

あくびを噛み殺しながら京子が答える。それを聞いて、思い出したように華が口を開いた。

「前に貸した漫画読んでたの？」

「そ。読み始めたら止まらなくて……」

「でしょ！ 凄く面白いよね」

華が嬉しそうに言う。

「何の話ですか？」

「氷の城って漫画！ ちょっとマイナーなんだけど」

「あ！ それ私も知ってますよ！ ついこの間知ったばかりで少女漫画の話だろうか。盛り上がる華たちを横目で眺めながらベツドに腰かける。その時、玄関の方からドアの開く音がした。

「おっ待たせー！」

底抜けに明るい声と同時に部屋のドアが開き、コンビニの袋を両手にぶら下げた舞が姿を現せた。袋の中を順番にテーブルの上に並べていく。缶チューハイが半分を占めていた。

「アルコール類はまずくないですか？」

舞の買ってきたものを見て優が顔を引きつらせると、舞は笑ってそれを流した。

「へーきへーき。明日訓練ないし大丈夫だって。響ちゃんの歓迎会なんだからぱーっといこう！ ねー、響ちゃん！」

舞がそう言うと、響が嬉しそうに笑った。多分、意味も分からず頷いているのだろう。

「響ちゃんには飲ませないでくださいよ」

一応念を押しておく。

「大丈夫大丈夫！ ボクでもそれくらいの分別あるって！」

「不安だなあ……」

胸を張る舞を見て、本音をぼろりと漏らす。その横で京子が起き

上がり舞の買ってきたものを物色し始めた。華が時計をチラリと見て口を開く。

「少し早いけど、もう食べちゃおう?」

「じゃあ、とりあえず乾杯から!」

年長者の舞が場を取り仕切り、全員が缶を手に取る。この時、優が覚えた悪い予感を経験的な推量によるものか、ESP能力の一種か、もしくはただの偶然かは分からないが見事に命中する事になる。

「ユウくん、さっきから全然飲んでくれない?」

舞がそう言つて優のコップにドボドボと新たなアルコールを注ぎ込む。優は他人事のようにそれを一瞥し、ベッドでダウンしている京子に目をやった。元々疲れていた事もあつてか、京子は飲みはじめてから二時間ほどですぐに寝入ってしまった。詩織も眠たそうな顔で壁によりかかっている。華はそれほど酔っている風には見えないうが、普段より陽気に見えた。愛も同様に僅かに口数が増えている。「ユウくんさあ、入ってから結構経つけどまだ付き合ってる人とかいないのお?」

「いたことないです」

思考が不明瞭な中、考えるのが億劫で正直に答える。

「へえ、じゃあキスとかもまだなんだ?」

「それくらいあります」

舞の言い方にムツとして言い返すと、今まで響で遊んでいた華が驚きの声をあげた。

「えー、あるの!?」

「何でそんなに驚くかな。失礼だよ」

抗議の声をあげながら心の中で、つい最近だけと付け加える。「だって、え、いつ? 誰と?」

華がテーブルに身を乗り出す。その拍子に空き缶が二つ倒れたが、

誰も気に留めようとはしなかった。

「いつか、誰かと」

「特殊戦術中隊の人とですか？」

眠そうにしていた詩織も興味があるのか身を起こして口を開く。
優は頷いた。

「……ここにいる人？」

優が疑問を重ねる。優は重い頭を横に振った。

「えー、誰？ でも、付き合っていないんだよね？」

「うん」

「じゃあ、わたしともー！」

「……その理屈はおかしい」

華の訳がわからない理論に優が冷静に突っ込む。普段とは逆の構図に優は思わず吹き出した。ちよつとした事が妙に楽しいことのように思える。自覚している以上に酔っているのかもしれない。

「ハナつちはないのお？」

舞が華に向かって言う。華は不機嫌そうに答えた。

「黒木さん知って聞いてませんか？ 14の時に入隊したからそういう機会がないだけです」

「まあ機会って話なら全員そうだけだね。男女比がここまで偏るとちよつとねえ」

その点で言えば、と舞は優を見やった。

「その点で言えば、ユウくんは選り放題だね。良いなあ」

「割と不便な事も多いですよ。男子トイレが少なかつたりとか。それに男女比って言っても、中隊以外なら結構男性もいるじゃないですか」

「外はおじさんばかりだし。ボク、年上興味ないんだ」

お断り、といった風に舞が右手をひらひらとさせる。

「黒木さんって年下の方がいいんですか？」

詩織の疑問に舞は頷いた。

「どちらかと言えばね」

その言葉を聞いて、愛が優と舞の間に移動する。舞がけらけらと笑った。優もクスクスと笑いながらコップに手を延ばし、中の液体を飲み干す。テーブルの対面側で華が大きな欠伸をした。

「響ちゃんいつの間にか寝ちゃってるね。私もこのまま寝ちゃっていいい？」

部屋の隅で丸くなって寝息をたてている響を見て華が言う。京子が既に寝入っている為、一人も二人も変わらないだろうと考え、優は深く考えずに頷いた。

「私も……そろそろ眠りますね」

詩織も華に続いて壁に背を預け、そのまますぐに寝息をたてはじめる。ハードな訓練だった為、全員疲れているようだった。

「そろそろお開きかな。僕もこのまま寝る予定だけど、二人はどうする？」

残った愛と舞に視線を向ける

「……私も寝る」

「ボクはこのまま綾の部屋に遊びに行つてこようかな」

綾とは第四小隊の藤宮綾ふじみや あやのことだろう。舞は食事の際などは第四小隊のグループと共にする場合が多い。

「送りましょうか？」

「本部内で送られてもねえ」

「ただの社交辞令です」

舞がクスクスと笑いながら立ち上がった。そして残った缶を適当にコンビニの袋に詰め込んでいく。

「じゃーねー」

「はい。また今度」

ひらひらと手を振って舞が玄関の方に消える。ドアの閉まる音が聞こえると、急に部屋の中が静寂に包まれた。見渡すと、既に全員が意識を手放して夢の世界に旅立っている。テーブルの上に散乱したゴミをどうしようかと一瞬考え、すぐに片付けるといふ選択肢を意識の彼方に追いやった。身体が酷くだるい。今はただ眠りたかつ

た。電気を消すのさえ煩わしい。

ベッドの側面にもたれかかり、目を瞑る。すぐに眠気がやってきた。ウトウトとし始めた時、不意に頭上から声がかげられ、優は小さく飛び上がった。

「桜井、起きてる？」

ベッドの上で京子が身じろぐ気配。

「起きてるよ」

眠気を我慢し、上を見上げると、ベッドの上からこちらを見つめる京子と目があった。

「どうしたの？」

「桜井さ、誰とキスしたの？」

一瞬何のことかわからなかったが、すぐにさっきの話のことだとわかった。

「聞いてたの？ 寝てると思ってた」

そう言って、コロコロと笑う。自分でも何が面白いのかわからなかったが、自然と笑い声が出た。

「ねえ、誰と？」

京子が焦れたように質問を繰り返す。

「麗ちゃん。ホテルに誘われて、その時に」

「……やったの？」

「まさか」

そう言って笑う。対照的に、京子は真剣な顔をしていた。

「……ねえ」

「なに？」

京子がするりとベッドから降りる。ホットパンツから剥き出しになった太ももが目に入り、優は無意識に視線を逸らした。

「その格好寒くないの？」

そう言った瞬間、視界が暗くなった。蛍光灯を遮るように京子が優に覆い被さり、首に腕が絡み付く。そして伸ばしていた両足の上に心地よい重み。

「今は……凄く暑い」

首に回されていた腕に力がこもり、京子の方に引き寄せられる。身体が密着し、胸の部分に柔らかな感触が当たる。そして、唇に柔らかいものが押し付けられた。

3章 20話 長谷川京子(6) (前書き)

年齢制限をかけるほどではありませんが、若干の性的描写が存在します。ご注意ください。

3章 20話 長谷川京子(6)

「ん……っ……」

突然のことに反応が遅れる。その間に首に回された京子の腕に力がこもり、更に身体が密着する。やんわりと押し返そうとしたが、アルコールが回ってるせいかが入らなかった。

「……っ！」

不意に舌が入り込んできた。驚いて呻き声をあげる。しかし、京子は構わず舌を強引に入れてくる。流石にそれは、と今度は力づくで離そうと上体を一度後ろに傾ける。何を勘違いしたのか、その瞬間京子が体重の全てをかけて押しかかってきた。バランスが崩れ、カーペットの上に背中から倒れこむ。しかしそれでも京子は優の顔の横に手をつき、キスを続けた。

「……ん……う……」

酔いに加え、酸欠のせいか頭が働かない。なすがされるままに京子の舌の動きを感じながら、京子の頭ごしに見える蛍光灯の明かりに目を細める。

「……っはあ……」

ようやく京子の唇が離れる。銀色の唾液が糸を引き、京子は艶やかな笑みを浮かべてそれを手で拭いた。お互いに息を荒くして酸素を吸い込みながら目を見つめあう。

「京子……こういのはさ」

「好きな人同士でやるもんだ、って？」

先回りされ、黙り込む。

「じゃあ桜井の好きな人は？ って聞いたらいないって答えるでしょ？」

京子のどこか必死な雰囲気、優は返す言葉を失った。

「桜井さ、全員と一定の距離とろうとしてるよね。バランス、崩さないようにしてるでしょ？」

僅か鼻先三十センチメートル先で京子が息を整えながら言う。

「中隊長だから？ たった一人の男だから？ 一番ESP能力に優れてるから？」

「別にそんなことは」

言い返しかけたところで再び唇を塞がれる。今度は舌を入れてくることはなく、すぐに離れた。

「……はあ……っ、……前にさ、桜井は無防備すぎるって言ったよね。あれ、冗談じゃなくてさ、私、桜井がちょっとでも肯定的な行動とってたら多分止まらなかった」

京子の指がつー、と優の胸板を這う。

「私さ、桜井の事好きだよ。気付いてない振りして知ってたでしょ？ 多分さ、私だけじゃない。華も愛も。だから、動けないんだ。一人を選んだ後の、残った他の人のこと考えて」

否定しようとして口を開きかけ、優はすぐに口を噤んだ。目を逸らし、代わりに、ごめんね、と一言だけ絞り出す。

「そう言うと思った。桜井がこういうの望んでないのは分かってる。私も、それを尊重しようと思った。」

京子は俯き、でも、と続けた。

「最近さ、亡霊の侵攻が酷くなってる。数年前の大規模侵攻みたいだった秋山さんが言ってた。知ってる？ その時、十四人も死んだら。当時の中隊の一割も、だよ。信じられる？」

その時、京子の肩が震えていることに初めて気づいた。

「しかも、今回は普通の侵攻じゃない。亡霊は明らかに桜井を狙ってる。高梨市に出た、あの怪物。あの時は勝手に消えちゃってラッキーだったけど、あんなのがまた出てきたら多分、桜井でも勝てない」

京子の言葉に、優は目を瞑った。京子の言うことは正しい。

「桜井自身が一番わかってるよね。多分、無意識に死を予期してる。それで、誰とも深い仲になろうとしてないんでしょ？」

深く息を吸い込む。数秒の間を置いて、そうだよ、と優は弱々

しく笑みを浮かべた。京子が泣きそうな顔をする。多分、否定してほしかったのだろう。京子の求めている答えは分かっていたが、正直に自分の考えを言うべきだと思った。

「多分、僕は近いうちに死ぬと思う。亡霊の高度化する戦術に段々ついていけなくなっていくてる。ホムンクルスと戦って確信した。僕じゃ、亡霊には勝てない」

「そんなのって！」

京子が声を張り上げる。一転、すぐに力なくその場に崩れ落ちた。「こんなの……酷すぎる。何で、桜井だけそんな目に……ねえ、お願いだから中隊を抜けて、そのまま」

京子の口に指を当て、先を言わせないようにする。気付けば、その指も震えていた。その先を聞けば、引き戻れなくなる気がした。

「高梨市の霧に呑みこまれた市民、数千人がいまだに結局生死不明のままなんだって。多分、皆死んだんだと思う。戦うのをやめたら、もっと多くの、数えきれないくらいの死人が出ることになる。そんなの、できない」

それに、と優は言った。

「上手くいったら誰も死ななくて済む。僕は、簡単に死ぬつもりはないよ」

京子を安心させる為に、出来る限りの笑みを浮かべる。しかし、できなかった。戦うことが、本当は怖かった。どれだけ強大な力を持つても、理解の範囲を超えた亡霊を相手にすることに、純粋な恐怖を感じる。百近い亡霊に一齐に狙われた時から、常に死を意識した。しかし、退くことは許されない。退けば、自分より力のない少女が代わりに戦うことになる。強大なESP能力が鎖となって優を縛りつける。ただひたすら、確実に訪れるであろう死を待ち続けるのは耐えがたいほどの恐怖を伴う。笑おうとした顔が崩れ、自然と嗚咽が漏れる。

「桜井……」

頬に京子の手が触れる。顔を見られたくなくて、優は顔を背けた。

「ねえ、私を選んでとは言わないから」
優しい手つきで顎をあげられ、潤んだ京子の目と視線が絡む。

「今だけ」

潤んだ瞳が近づき、吐息がかかる。優は静かにそれを受け入れた。触れるだけの、年相応の子どもじみたキス。それとは反対に、背中に回された京子の手が痛いぐらい力強く締め付けられた。どちらともなく唇が離れ、自然にそのままゆっくりと横になった。二人は身寄りのない小さな幼子のように強く手を握り合い、寄り添い合いながら深い眠りに落ちていった。

3章 21話 篠原華(4)

朝が来た。いつものベッドとは違う、硬い地面の感触に篠原華は優の部屋でそのまま眠りこんだ事を思い出した。薄く目を開けると日の光とは違う、明るい人口の光が目に入り、たまらずに手で光を遮った。誰も電気を消さなかったらしい。いつの間にかかけられていた毛布をどけ、上体だけ起こす。ぼんやりと部屋を見渡すと、ベッドの横で気持ちよさそうに眠る京子、壁に背を預けて眠りこく詩織、華の横で丸まるようにして寝息をたてている愛、部屋の隅で年相応の無邪気な寝顔を見せている響の姿が見えた。全員が毛布と大きめの掛け布団などバラバラなものを被っている。多分、優が付けてくれたのだろう、と根拠もなく思う。そこで優がいないことに華は初めて気づいた。

「桜井くん？」

呟いた言葉が静かな部屋では妙に大きく聞こえた。いつの間にか昨日テーブルの上に散乱していた空き缶たちは綺麗に姿を消している。華は得体の知れない胸騒ぎを覚え、再び想い人の名前を呼んだ。

「桜井くん……？」

クローゼット。少し大きい本棚。僅かに誇りを被ったテレビ。亡霊対策室標準のベッド。部屋をぐるりと見渡し、廊下に繋がるドアを開ける。暗い廊下の横に設置されたキッチンがまず目に入り、左手にカーテンのかかった脱衣所。そこを開けるとその先に浴室に繋がるドアが見えた。中から僅かにシャワーの音がする。それを聞いて、身体の力が抜けた。安堵感が胸いっぱい広がる。

私は一体何を心配してたんだろう。

そう不思議に思った時、シャワーの音が止み、ガチャリと目の前のドアが開いた。

「あ」

「え」

目線が絡まり合い、二人から間抜けな声もれる。

「うわっ、え、ちよっ！」

「きゃああああああっ！」

申し合わせたように優がドアをバタンと閉め、華が悲鳴をあげる。「何で、華ちゃんがここにっ!？」

浴室から優のくぐもった声。同時に、部屋の方からドタバタと足音とともに京子の声が響く。

「華、どうしたの？」

「きゅっ」

京子と愛、詩織が華の悲鳴に飛び起きて脱衣所に集まった時、そこには目を回して倒れる華の姿があった。

「ごめんなさい！」

優が着替え終えて部屋に戻った時、開口一番、華がテーブルに頭をこすりつけてそう言い放った。大袈裟な華の謝り方に苦笑する。

「少し驚いたけど、そんなに気にしてないよ。男だし……」

「でもさ、何で華が脱衣所にいたの？」

京子が不思議そうに言う。もはや定位置のように、優のベッドに腰かけていた。

「何でって……」

華が答えようとして、すぐに言い詰まる。

「ちゃんと脱衣所のカーテン閉めてたんでしょ？ わざわざ開けたの？」

「……隠れ変態」

愛がポツリと言った言葉に華以外の全員が吹き出す。対して、華は顔を真っ赤にしてそれを否定した。

「ち、違うよ！ ただ、桜井くんの姿がなかったから気になって！」

「過保護な親じゃないんだから……」

京子が呆れた風に言う。華は言い返さず、そっぽを向いて黙り込んだ。

「私もシャワー浴びてきますね。毛布、ありがとうございました」
詩織が立ち上がる。

「あ、私も」

と京子。

「私もー」

華も立ち上がり、愛が無言で続く。

「またお昼頃お邪魔していいですか？」

「今日は特に予定ないから、いつでもいいよ」

詩織の言葉に笑ってそう答える。詩織は小さくはにかんだ。

「響ちゃん、よく寝てるね」

部屋を出る際、部屋の隅で眠り続ける響を見て華が微笑ましそうに言う。

「慣れない環境で疲れてるのかも」

「かな。じゃあ、また後でね」

ゾロゾロと玄関へ向かう四人を見送った後、濡れた髪を乾かそうとドライヤーを部屋のコンセントに繋げ、電源をつけようとする。しかし、眠ったままの響の姿が目に入り、優は手を止めた。髪を乾かすのは後でいいかな、と考え、優は二人分の朝食を作る為にキッチンへと向かった。

「司令、広報部より報告です。これを」

奈々がスケジューリング表を見直していた時、加奈が無表情で数枚の資料を差し出した。広報部、という言葉に奈々は怪訝な顔をした。通常、そういった事は奈々が関与することではない。

資料を受け取り、内容にさっと目を通す。どうやら良くある取材許可要請のようだった。しかし、ある点を見て、警戒するように目

を細める。

「優君を？」

「はい。二枚目以降の資料に男の調査結果があります。どうも、普通の記者とは違うようなので、ご報告に参りました」

資料をめくると、取材要請を飛ばしてきた男の経歴がまず目に入った。

「博士課程中途……？」

次の資料には更に詳しい男の情報。修士論文の概要が載っている。タイトルは『セルオートマトンによる三次元ネットワークの構成モデル』。奈々の知る分野ではなかった為に読み飛ばそうとしたが、文中に『亡霊』という単語があるのを見つけ、加奈に視線を向ける。「これは？」

「専門性が高い分野ですから、正確なことは申し上げられません。ただ、この男にはある思想的な方向性があるようです」

一枚目の資料に目を戻す。まだ29歳と若い。しかも、実家が国内有数の資産家の次男のようで、記者というのも趣味の延長上にあるようだった。

「思想的、とは？」

「何と言いますか、重度の神秘主義者でもあるようなんです。つまり、オカルトマニアです」

「……面白いわね」

資料を見て、クスリと笑みをこぼす。

「返答を延ばし続けなさい。ストックしておきましょう」

「はい」

加奈が頭を下げ、背中を向けて部屋から出ていこうとする。奈々はふと思うところがあって、それを呼びとめた。

「加奈」

「はい」

加奈が振り返る。

「あなたは、亡霊を何だと思う？」

「ゴキブリの亜種です」

その言葉に奈々はクスリと笑った。加奈も小さく笑みを浮かべる。「あなたはいつも私の期待する答えを出してくれる」

「私たちは学者じゃありません。ただの駆除事業者です。ゴキブリを全滅させて職を失わない程度に頑張りましょう」

そう冗談っぽく言い残し、加奈が部屋を出ていくのを見送りながら、奈々は背もたれに深く体重を預けた。首だけ傾けて、机の上に散らばった報告書の束に目をやる。

「亡霊に、S I A に、神秘主義者、加えて女の子たち。本当に、あの子はもてるわね」

何角関係かしら、と奈々はくだらない事を考え、途中で数えるのが面倒になって考えを放棄した。

3章 22話 鎖の少女(14)

「響ちゃん、ご飯だよ」

十時過ぎ、優は二人分の朝食をテーブルに並べて静かに寝息をたてる響の肩を優しく揺すった。

「ん……」

眠たそうに響が身を起こす。水の入ったコップを渡すと、嬉しそうに受けとった。

「ご飯できてるよ。食べられる？」

「うん！」

頷く響に笑みをこぼし、席につく。そのまま二人で朝食をとりながら、今日はどうしようかと考えを巡らせた。あまり響を外に連れ回すのは気が進まない。とりあえず、生活に慣れるまではゆっくりと過ごすのが一番だろうか。

「響ちゃん、何かしたいことある？」

食事を中断して考え込む響。それを見て、助け船を出す。

「特になければ、部屋でゆっくりしようか？」

「うん！」

食事を再開する響を見ながら、具体的に何をしようかと想像を膨らませる。明日香の話では、響はまともな教育を受けていないと話していた。文字を教えるのもいいかもしれない、と考える。一文字ずつ教えるよりも、絵本や漫画などを一緒に見ながら教えていくのが良いだろうか。色々と思いを巡らせながら、これでは過去に夢見た教師みたいだ、と思って優は小さく笑った。

朝食を済ませると、適当にテレビをつけて子ども向けのチャンネルに合わせた。響が熱心にそれを見ているのを眺め、優はベッドに腰かけて読みかけていた本を開いて、時間を潰した。

一時頃、再び華たちが部屋にやってきた。昼食をどうするか問題になり、せつかくの休日ということで本部内のコンビニ弁当で済ま

せることとなった。特に皆で何かをする訳でもなく、思い思いにゴロゴロしている詩織がふと思い出したように言った。

「最近、亡霊出てないですよね？」

そう言われて、響の為に漫画を読んでいた優はふとセリフを読むのを止めた。そして初めてその事に気づく。

「最後に出たのって……十日前かな」

華の言葉に優は頷いた。京子が不安そうに優を見る。昨日の記憶が蘇り、優は視線に気付かない振りをした。

「ボウレイ？」

響が首を傾げる。答えようとして、優は言葉に詰まった。

亡霊とは何か。改めて尋ねられると説明が難しい。

「怖いお化けのことだよ。悪いことをしたらお化けの島から出てきてね、人を食べちゃうの。だから悪いことをやっちゃだめだよ！」

優が説明に困っているうちに華がそう答えた。響が納得したように頷く。そして、漫画の続きを急かすように優の方に首を向ける。

優は再び、セリフを読み始めた。

「何、この私が敗れただと……しかし、私より強い者が後十二人控えているのだ。ふははは」

「……さつきから気になってたんだけどさ、桜井何読んでるの？」

「魔法大戦って少年漫画」

「響ちゃんには合わなくない？」

呆れた風に言う京子に、優は首を傾げた。

「そうかな……」

「あ、私が少女漫画持ってきましようか？」

詩織の提案に、優は逡巡してから頷いた。少年漫画よりはマシだろう。

「じゃあお願いしようかな」

「はい！」

詩織が慌てたように部屋を出ていく。詩織とは比較的部屋が近い為、三十秒ほどですぐに戻ってきた。

「何が良いか分からなかったので、色々と持ってきました！」

そう言って、十冊ほどの少女漫画をテーブルの上に積む。表紙やタイトルが如何にも、といった感じだった。適当に一番上のものを選んで、ページを開く。どうやら、中学生の主人公の成績が悪く、家庭教師をつけられる事になるが、担当の家庭教師が美形の男性で……という恋愛物のようだった。とりあえず響の前にページを開き、セリフを読んでいく。しかし、三分の一ほどまで読んだところで雲行きが怪しくなってきた。

「由美、俺はお前の事が……。じ、実は私も……」

告白シーンのようなものに入り、段々と声を出して読むのが苦痛になってくる。失敗したなあ、と思うながら次のページを捲るとベッドに押し倒される主人公の姿と、覆いかぶさる美形家庭教師の絵が大きく飛び込んできた。それを見て、すぐに本を閉じる。ベッドの方で京子がクスクスと笑っているのが聞こえた。こういうシーンがあることを知ってて今まで黙っていたのだらう。華も顔を赤くして俯いている。

「つづきはー？」

響が先を急かす。優は少し考えてから、問題のページを適当に飛ばすことにした。もう一度先程のページを響に見えないように開き、ページを捲る。さっきのページより過激な絵が堂々と出てきて、優は思わず詩織をジト目で見た。

「これ、ただのエロ本じゃないの？」

「ええ！？ 普通の漫画ですよ！」

詩織が慌てたように言う。優は先を読むのを諦めて、本をテーブルの上に置いた。

「つづきはー」

響が急かしてくる。どうしようかと考えた時、愛が積まれた本の中から一つの少女漫画をとりだした。

「……これなら大丈夫」

「助かるよ」

安堵して本を受け取る。表紙には武士のような一人の男の姿が載っていた。多分、これなら大丈夫だろうと表紙を捲る。

「えーと……若様、賊がもうそこまで来ております。どうか、何やら江戸時代の話らしい。少女漫画っぽくないなあ、と考えながら順番にページを捲っていく。何やら賊の襲撃があつて、一人の男にまだ若い大名が追い詰められていく流れのようだった。

「バシユツ！ フツ、この私から逃げ切れるなどと思うなよ……」

最後の家臣が切り捨てられ、遂に大名が斬られようとした時、今まで大名の顔を覆っていた仮面が外れ、素顔が明らかになり

そこをページを捲る。大きいコマで、二人の視線が合うシーンが出てくる。何故か、二人の背後に煌びやかな花模様があつた。何故か、二人とも頬を赤く染めている。もちろん、両方男である。

「ねえ、愛ちゃん。これ、そういうのじゃないよね？」

一応確認をとるため、愛に視線を向ける。愛はすぐに頷いた。

「ならいいけど……お前、紫苑か？……京？久しぶりだな」

何やら二人は古い知り合いだったらしい。情に流されて、大名を斬れない賊が、駆けつけた家臣たちに捕まえられ、牢に放り込まれる。しかし、その夜に大名が密かに賊を逃がし、二人は再開を誓い合う。

「……お前は昔から俺の憧れだった……そんなことはない、俺こそお前がいつも……」

別にそういつた描写は存在しないのだが、どうも二人から同性愛者の匂いがしてならない。友情とかそういうのを超越した何かを感じる。別に同性愛はどのこの言うつもりはなかったが、一般的には教育に悪いものといった気がしてきた。

「ねえ……、他にこう、普通はないの？」

本を再び閉じて、意見を乞う。響が続きを催促してるのが聞こえたが、黙殺した。

「じゃあ、これとかお勧めだよ」

次は華が本の山から一つを取り出し差し出してくる。あらかじめ

適当にページを捲って危険な描写がないことを確認する。安全を確認してから優は一から読み始めた。

初々しい主人公たちがドタバタと騒ぎに巻き込まれていくラブコメのようだった。

だが、妙に甘い。過激な表現があるわけでもなかったが、次第に声を出して読むのが恥ずかしくなってきた。

「……私、圭一くんの事が好きだよ……俺はお前の事がもっともつと……じゃあ、私はもっともつと……」

「桜井、声小さくて聞こえないー」

京子のダメ出しが飛んでくる。優は静かに本を開いたままテープルの上に置き、昼に明日香から借りてきた電子あいうえお表を響に手渡した。タッチすれば、音声が出てくるようになっていいる。

「後はこれ使って自習してね」

「じしゅー？」

「……優、教育放棄？」

「桜井さいつてー！」

騒ぐ優と京子を見無視して、ぐったりとその場で横になる。背後で電子的な声が甘い言葉を囁くの聞きながら、優は僅か十六歳にして子育ての大変さを垣間見た気がした。

「おじやましたましたー」

十時半頃、それぞれの部屋に戻っていく四人を見送ってから、優はようやく一息ついた。

ベッドにうつ伏せで倒れこみ、ため息をつく。妙に疲れた。

首だけ回し、布団を敷いている響の様子を見る。昨日は使わなかった為、この布団が使われるのはこれが初めてだ。さきほど華にお風呂にいれてもらった為、僅かに髪が濡れている。

「響ちゃん、歯磨きできる？」

「はみがき？」

苦笑し、ベッドから起き上がって響を洗面台につれていく。

「これを歯に当てて……こう、あんまり強くしすぎないようにね」
歯ブラシを握らせて、軽く手を添えて大体の動きを教える。歯磨き粉を使うかどうか悩んだが、結局今回は使わないことにした。

歯磨きを終えて部屋に戻ると響は一目散に布団にもぐりこんだ。その様子に小さく笑みをこぼし、優もベッドに入る。

「響ちゃん、電気消すよ」

「……うん」

「おやすみ」

そう言つて、ベッドわきのスイッチに手を延ばす。明かりが消え、静寂が部屋を満たした。毛布をかぶり、目を瞑る。しかし、中々眠気がこなかった。脳裏に昨日の京子とのやり取りが浮かぶ。

あんなのがまた出てきたら多分、桜井でも勝てない。

ベッドの中、優は震える自分の身体を抱きしめた。

以前、亡霊は何かを伝えようとしているのではないか、と考えた事がある。人の脳に対する体性野の入力量を三次元的に表現した、ペンフィールドのホムンクルス。亡霊がそれを模したのは、何かを伝えようとする為だと思った。そう、思いたかった。コミュニケーションをとれるのだ、と。戦いを回避できるかもしれない、と。そう考える事で、漠然とした死の予感から目を背ける事ができた。しかし、それが不可能な事を優は知っている。既に何万の人間が亡霊の犠牲になった。もう、この戦争はどちらかが全滅するまで終わらない。亡霊の思惑など、大多数にとってどうでもいいことだった。亡霊は敵だ。戦いは避けられない。

ならば、ホムンクルスのような圧倒的な機動力、想定外の攻撃を繰り返してくる亡霊に対して何らかの対策を考え出せなければ、先はない。イーグルの時は直感的に罠を使うことでその能力を無効化することができた。しかし、ホムンクルスに弱点らしきものは見られない。特定の能力に依存する訳でもなく、基礎能力自体が格段に

違ったのだ。毎晩、こうした対策を考え続けた。しかし、何も名案は思いつかない。明日、再びホームクルスが現れたら、と思うと堪らなく怖かった。いまだに全貌を見せない強大な亡霊に対して、優に与えられたESP能力はあまりにも頼りないものに思えた。死は、確実に近づきつつある。

不意に、暗闇の向こうで響が身じろぎした気配がした。思考を中断し、身を起こす。

「響ちゃん、まだ起きてるの？」

「……うん」

一拍おいて、響の小さな声が返ってくる。優は少し考えてから口を開いた。

「眠れない？」

「……うん」

「一緒に寝る？」

そう言うと響が起き上がる気配がした。響が転ばないように、電気のスイッチを入れる。

「おいで」

両手を広げる。ベッドをよじ登って、響が腕の中に飛び込んできた。抱きしめ、背中を撫でてやる。

「なんでないてるの？」

「え？」

言われて、初めて自分が泣いている事に気付いた。泣き顔を見られないように、響を深く抱きしめて、泣いてないよ、と優は小さく言った。

「電気、点けたままの方がいい？」

「……うん」

「わかった。さ、早く寝よう。夜更かしすると、ボウレイが出てくるよ」

腕の中で、響がビクリと震えたのが分かった。慌てて付け足す。

「大丈夫だよ。ボウレイが出て僕がすぐ倒しちゃうから」

大丈夫、と言った時、ふと昔の記憶が蘇った。サイレンが響く中、怖がる自分を抱きしめて、大丈夫だからと繰り返した母。強烈な既視感。遠いあの日、優しく抱きしめてくれたあの人の温もりを思い出し、優は響を抱きしめた。

「大丈夫だから」

そう言う度に、不思議と先程まで感じていた漠然とした恐怖感が薄れていった。

「きつと、大丈夫」

暫くそうやって抱きしめっていると、響の静かな寝息が聞こえ始めた。

そう。無条件で君を守ってくれる存在。

不意に、親について響に説明した明日香の言葉が脳裏をよぎった。響の身体を優しくベッドの上に横たえさせる。寝返りを打った時に落ちないように響を壁際に寝かせつけて、優は静かに目を瞑った。狭いベッドが心地良く思える。いつの間にか、震えは消えていた。

3章 23話 橋本恵(2)

「じゃ、行ってくるから、ちゃんとお留守番しててね」

玄関で靴を履きながら、見送りに来ていた響の頭を撫でる。

響が優の部屋に来てから三日目。その日は訓練が朝からあった為、優は朝食を食べた後にすぐ部屋を出た。

セキュリティゲートをいくつか抜けて、本部の外にある野外射撃訓練場に向かう。一般的にここでは機械翼を利用した実際的な射撃訓練が行われ、一度に三個小隊まで訓練できるほどの広さを持っている。

野外射撃訓練場に着くなり、奥の方にいた奈々に手招きされた。その横には加奈と咲、雪、華の姿がある。隊長格未満は分隊長も含めて、そこから少し離れたところに集まっている。時間まで少し余裕があるが、既に八割ほどが整列済みのようだった。簡単な謝罪をして、奈々たちの方に向かう。奈々は時間をチラリと確認してから説明を始めた。

「今日はまず飛行訓練を一時間。それから実射訓練に移る予定よ。逐次指示を出すからそれに従うように。いいわね？」

「はい」

「じゃあ、まずは第一小隊準備して」

優と華は頷いて、部下の集まっている場所へと向かった。

「各員、機械翼展開！ 第一分隊、ショートスタンバイ！」

華の号令とともに、全員の機械翼が大きく展開する。同時に第一分隊が飛行準備態勢をとった。

「オン！」

その言葉を合図に一斉に第一分隊の八名がゆっくりと天空を目指して上昇を始める。

「第二分隊ショートスタンバイ！」

順番に各分隊が大空に飛び出していく。最後の第四分隊が跳び終

えた後、優と華は一度だけ目線で確認し合い、機械翼を展開した。そして示し合わせたかのように見事なタイミングで大空へと舞い上がっていった。少し肌寒かったが、こうして亡霊の存在しない自由な空を飛ぶのは気持ちが良い。怒られない程度に空を飛びまわり、束の間の自由を満喫する。高度をあげると野外射撃訓練場どころか、広大な亡霊対策室本部の全容、更には周りに広がる大自然の要塞が一望できた。

眼下の野外訓練場から数人が上昇してくるのが見える。第二小隊だ。次々と空の上に顔馴染みの少女たちが上がってくる。優はバラバラに滞空する第一小隊のメンバーに視線をやって、整列信号を送った。それを受けて各分隊ごとに横隊を組み始める。

『とりあえず、制御運動から』

通信機から聞こえる奈々の指示通り、制御姿勢をとる。現座標に機械翼を固定させながら、身体の向きや姿勢を規定通りの順番に変えていく。姿勢制御にはESPエネルギーの精密なコントロールが不可欠な為、入隊したての頃に一度は誰もがぶつかる難関課題となっている。

一通りの姿勢制御運動を終えると次は集団飛行訓練に移った。指示通りに密集隊形や散開を繰り返し、前後左右の距離感覚を掴んでいく。昔に味方間での衝突事故が何件かあった為、これに割く時間は他の訓練よりも多くなっている。

一連の飛行訓練を終えたのは、優が機械翼を展開させた時から二時間経った後だった。一度全員が地に降りて射撃訓練に移る。機械翼を用いてメートルだけ地上から浮き上がり、姿勢制御を行いなから実戦で用いられる小銃での的を狙う。火器を使う為、念のために医療チームが控えているが過去に悲惨な事故に繋がったことはない。第五小隊から順番に射撃を行うのをぼんやりと眺めていると、同じく待機していた京子が話しかけてきた。

「ね、この後どこか遊びに行かない？ 愛とかも誘ってさ」

「んー……ごめん、今日はやめとく」

「……どこか体調悪いの？」

不安げに顔を覗きこんでくる京子に首を振る。

「今日はゴロゴロする日なんだ」

何それ、と京子が吹き出す。その時、周りから静かな歓声が上がった。反射的に、顔をあげると第五小隊長の進藤咲が空中でピタリと静止しているのが見えた。咲の構える小銃の彼方では亡霊を模した的の頭部が綺麗に吹き飛んでいた。

「相変わらず、進藤さんは凄いなあ」

思わず感嘆の息が飛び出す。咲が引き金を引く度に亡霊の身体が正確に撃ち抜かれていく。特殊戦術中隊随一のESPエネルギーコントロール力と豊富な経験によって形成された咲の射撃技術は他のそれとは一線を画している。優でもあれば真似できそうになかった。「何ジロジロ見てんの？ やらしー」

横から京子が茶化してくる。仕方なく大袈裟に視線を咲から外すと、京子が顔を寄せて囁いた。

「……私ならいくら見てもいいよ」

予想外の言葉に固まる。顔が赤くなるのを感じて、優は顔を背けた。京子の抑えた笑い声が聞こえる。どうもこの前の夜から京子の悪乗りが酷くなっている気がする。小さく吐いた溜め息は空気を白く濁らせて、本格的な冬の到来を知らせていた。

射撃訓練を終えると、優は一人で本部に戻った。華、愛、京子は三人で街に遊びに行くらしい。同じように遊びに出て行った人が多いいいか、本部内の廊下はいつもより人影が少なかった。寮棟に辿りつき、自室付近まで来た時、自室のドアに一人の女性がもたれかかっているのが見えた。黒いスーツに、肩までかかるシャギーの入った黒髪。見覚えのないその姿に優は一瞬怪訝な顔をしたが、女性がこちらに気づいて笑みを浮かべるとすぐに誰なのかわかった。

「こんばんは、優君」

「お久しぶりです。髪、黒くしたんですね」

そう言うと、女性、橋本恵は子どもっぽい笑みを浮かべて口を開いた。

「こっちの方が年配受けが良いの。手入れが面倒なんだけどね」

そう言っつて、恵は片手で前髪をいじった。本人的には気に入ってないらしい。

「一見するとキャリアウーマンみたいですよ」

「みたいじゃなくて、そうなの！」

子どものように言い張る恵に苦笑する。

「さて、早速本題に移るね。電話の件、何とかなりそうよ」

「本当にいけるんですか？」

思わず驚きの声をあげる。総基ネットの情報に民間人が触れるのは難しいだろうと考えていた為、こんな短期間で良い答えが返ってくるとは思わなかった。

「うん。だから今日は早速指紋いただきに来たって訳。問題の子、今いる？」

「ええ、います。どうぞ」

優は急いで部屋のドアを開け、中に恵を通した。

3章 24話 神奈奈々(3)

「この子が？」

部屋に入るなり、恵は響を見てそう言った。突然の来訪者に警戒しているのか、響は壁際に寄っている。

「そうです」

「キミ、名前は？」

「……ひびき」

「響ちゃんかあ。少し協力してほしい事があるんだけど、いいかな？」

恵はそう言っつて、響の答えを待たずに鞆から一つの透明なシートのようなものを取り出した。シールのように表面の皮を捲つて、それを響に差し出す。

「これに人差し指を当ててくれないかな。大丈夫。痛くないよ！」

響が困つたように優を見る。優は安心させる為に笑つて頷いた。恐る恐るといった様子で響がそれに触れる。その上から恵が手を優しく添えてシートに押しつけた。一秒ほど触れたところで恵が明るい声で、はい、と宣言する。

「終わったよ。協力ありがとう！」

恵が透明なシートを大事そうに別の布で包んで鞆にしまうのを眺めながら、優は気になつていたことを訊ねた。

「総基ネットにどうやってアクセスするんですか？ 確かe-JAPANプロジェクトの基幹システムですよ。いくらそういった事に詳しい人とかでも無理なんじゃ……」

「そ。総基ネットへの不正アクセスは物理的に不可能になつてるけど、正規の手順を踏めば簡単なんだよ。当たり前だけどね」

そう言つて恵は悪戯っぽく笑つた。

「正規？」

「こつこつという仕事はね、コネが大事なんだよ。私みたいな可憐な女性

にはアクセス権限を持つてる女日照りのお友達が大勢いるの。今回は中身を改竄する訳でもないから、誰も嫌がらないしね」

今回は、という言葉が気になったが、気付かなかった振りをする。可憐な女性という表現も意識的に無視した。

「なるほど。えっと、それでお礼の方なのですが……こういう事の相場がわからないのでご希望金額を言っただけ頂きたいんですが……一応かなりのお給料をいただいているので、ある程度までは出せるはずですよ」

ずっと気になっていた事を言う。思いつきで恵に電話をしたまでは良かったが、相応の対価が優には分からなかった。法外な行為でもある為、見当もつかない。内心ビクビクしながら恵の様子を窺うと、恵はキョトンとしていた顔で優を見て、すぐにクスリと笑った。「別に私はこれを仕事と思ってないから大丈夫だよ。何て言うのかな、そう、人助け」

「わざわざここまで来ていただいているんですから、そんな訳には……」

予想外の言葉に逆に慌てる。恵は困ったような笑みを浮かべて、バツが悪そうに目線を逸らした。

「私ね、防衛大にいたことがあるの」

「え？」

突然の言葉に疑問の声が漏れる。恵は目線を逸らしたまま話を続けた。

「二年の夏だったかな。いきなり亡霊が出てきて両親に凄い反対されてさ、結局中退しちゃったけどね」

でも、と恵は言った。

「でも、奈々は残った。当時はESP能力者なんて見つかってなかったからさ、防衛大に残留するってことは自分で武器を手にとって得体の知れない化け物と戦う覚悟があったってこと。私には、そんな覚悟なかった」

そこで初めて恵と奈々が同級生であることに気付いた。元々、優

と恵は奈々の紹介で知り合ったのだ。随分と深い付き合いだったの
だろう。

「奈々だけじゃない。キミも亡霊と戦う事を覚悟した。私は個人的
な感情からキミを支援したい。それが、安全な場所でぬくぬくと暮
らしている私に唯一できること」

「そんなこと」

優がそれを否定しようとした時、恵は横に置いていた鞆を手にと
った。そして、子どものように無邪気な笑みを浮かべる。

「じゃあ、お代として一つお願いしようかな」

「はい。僕にできることなら
頷く。」

「奈々を支えてあげて」

「神条司令を、ですか？」

予想外のお願いに困惑する。

「そう。奈々はね、昔から他とは違ってた。全てから独立していた」
「独立？」

「そう。集団極性化っていう言葉を知ってるかな。その名前の通り
極性化、極端に偏っていくの。例えば異なるスポーツ団体のファン
の間での流血沙汰、例えば仮想ゲーム内での仮想国家間による異常
な憎悪感情、例えば信仰対象に対する異常な執着と他宗教への異常
な攻撃性。リスキーシフトと言っただけだね、閉鎖的な環境でこれ
が起こりやすい。一般的にそれがどんなにくだらないことでも、そ
の集団自体が一つの意思を持つように動き始める」

視界の隅で響が動いたのが見えた。ベッドに潜る様子をチラリと
見てから恵に視線を戻す。

「洗脳みたいですね」

「似たようなものかな。多くの政治団体、宗教団体、企業までもが
この状態に陥っている。こういった現象が起こるとね、もう手遅れ
なの。その集団の持つ思想に反する事は一切許されない。論理的な
思考が出来なくなる。論理の上に思想を選ぶんじゃない、思想の上

に論理を選ぶ。思想を強化する材料しか受け入れなくなる。相互に依存しあつて、強化しあつて、一切の懐疑を許さない。色々な取材をやつてるとね、こうした状態に陥っている団体の多さに驚いちゃうよ。自集団の正当性を疑わない人達、逆に自集団を貶す事によって自身を知識人だと勘違いしている連中。誰も、正当な評価を下そうとはしない」

「さっきの神条司令が全てから独立しているとは、神条司令だけは例外ということですか？」

「そ。奈々は本当に頭が良かった。奈々だけは常に正確な評価をくだして、常にそれを再評価していた。防衛大つてね、そもそもがエリートしかいないの。私みたいな、ね」

そこで恵は笑った。優も困つたように笑みを浮かべる。

「そんな中で奈々だけが飛び抜けてた。全てから独立していた。あそこは女が少なくなつてね、女つてだけですぐに声をかけられるんだけど、奈々だけは全然声かけられないの。あれだけの容姿なのにさ、凄く話しかけづらい雰囲気だね。ああいうのを孤高つていうんだらうなあ」

恵は懐かしむように上を見上げながら、奈々の事を自慢げに話した。それで、恵が奈々の事を本当に尊敬していることがわかった。

「たまに馬鹿が声かけてもね、奈々は波風をたてない程度の言葉でキツパリとそういうのを断り続けた。でね、奈々はよくノイズという言葉を使った。少しでも現実を不明瞭にする要素があれば、奈々は全力でそれを排除した。奈々にとつて、そこら辺の男はノイズでしかなかったんだらうね」

でも、と恵は言った。

「最近会う度にね、奈々は君の事を楽しそうに喋るの。常に自身の思考を懐疑し続けて、更新し続けて、ノイズのキャンセルに心的リソースを注ぐのを惜しまなかった奈々が、君の事を少し盲目的と言えるくらいに評価していた。奈々は、現実を見抜く力に長けている。彼マスコミ対策のお飾り司令官なんて揶揄されることがあるけど、彼

女以上に有能な人間を私は知らない。多分、キミは奈々の言う通りの人柄なんだと思う」

そこで恵は言葉を切って、じつと優の目を覗きこんだ。

「だからお願い。奈々を支えてあげて」

「……はい」

真剣な恵の雰囲気には優は静かに頷いた。途端、恵が屈託のない笑みを浮かべる。

「ありがとう。キミならそう言うと思った」

じゃあ、行くね。そう言って、恵は背を向けた。

「明日か明後日にまた連絡するよ。バイバイ」

「はい。ありがとうございました」

一度だけ恵がこちらを振り返り、玄関ドアが閉まる。優は恵の言葉を反芻した。

奈々を支えてあげて。

それがどういう意味なのか、優には良く分からなかった。恵の話聞いた限りでは、奈々を支える必要を感じられない。それに今の奈々のイメージとは随分違うようだった。奈々が孤高であるとは思えない。クールな印象はあっても、奈々は基本的に優しくかった。性格が変わるほどの何かがあったということなのだろうか。

考え事をしながらベッドに腰かける。既にベッドの中に潜り込んでいた響の頭を撫でながら、集団極性化について思考を巡らせる。亡霊にも集団極性化という現象は起こり得るのだろうか。亡霊の見整合性を欠く一連の行動は何らかの特性が極端に現れたものなのかもしれない、とぼんやりと思った。

それから再び奈々の事が頭に浮かぶ。集団極性化が起きるのは、多分精神的に楽だからだろうと思う。絶対的な何かがあるのは、それだけで心の拠り所になる。正しいとか悪いとかではなく、楽なのだ。そして全てを懷疑し続けるのは膨大なリソースを必要とする。リソースの節約と心の拠り所。しかし、奈々はそれを拒絶した。何故、奈々はノイズをキャンセルする事に固執したのだろうか。わか

らない。ただ、ノイズの先に待つものを見たかっただけなのかもしれない。それとも、奈々はその先に待つものを既に見たのだろうか。

奈々は全てから独立していた。

恵の言葉を思い出して、優は身震いした。奈々は何も見なかったのかもしれない。そこに、奈々以外は何も存在しなかったのかもしれない。

支えてあげて。恵の言葉が、今の優には計り知れない重みを持った言葉のように思えた。そして、ふと思う。自分が死を恐れるように、奈々は何年もの間、敗北の恐怖に耐え続けてきたのだ。戦術的敗北が戦略的敗北に直結するこの戦争で、最高司令官である奈々はたった一人で全てを運用してきた。奈々もまた、優と同様に高度化していく亡霊の戦術に脅威を感じている筈だ。あるいは、優よりも遙か上のレベルでそれを直に感じているのだと思う。そう思うと亡霊に対する恐怖感が薄れていった。自分の死よりも、奈々の抱える不安を少しでも和らげたいと思った。恵の言っていた意味が少しわかった気がする。

桜井優は自分の右手から溢れるESPエネルギーをじっと見つめ、強くそれを握った。

3章 25話 宮城愛(3)

「桜井、何か面白い事やってよ」

響を預かってから四日目。何故か当たり前のように優のベッドの上でゴロゴロしていた京子がそんな事を言い出した。対して、テールで詩織に勉強を教えていた優が呆れたように口を開く。

「滑る前提の一発芸ほど絶望的な事はないと思うんだけど」

「退屈すぎて死にそう。響ちゃんも暇だよなー」

そう言っただけ京子は電子あいうえお表を使いながら漫画を読んでいる響に視線をやった。しかし、漫画に夢中な響は反応を返さない。京子は諦めたように枕に顔を埋めた。その様子を見て、少し考えを巡らせる。響を預かるのは一週間の約束だ。その間ずっと部屋の中で過ごすのも味気がない。と言っても、街へ連れて行くのも気が引ける。

「んー、テニスか何かやる？」

亡霊対策室は軍事組織でありながら多くの娯楽施設を保持している。その職務上、過度の精神負荷がかかること、加えて実働部隊である特殊戦術中隊の大半が未成年で構成されている事から、離脱者を少しでも減らす為に娯楽施設に巨額の資本が投入され、テニスコートだけでなく屋内プールなども完備されている。

「私は良いけどさ、華とかはどうする？」

「テニスやったことないんだけど……」

部屋のドア付近で愛と一緒に何か携帯を覗きこんでいた華が困ったように答えた。

「愛ちゃんは？」

華の横の愛に目を向ける。愛はすぐに首を振った。

「私も……」

詩織も勉強の手を止めて、申し訳なさそうに言う。未経験者が3人では球拾いゲームになってしまう。別の何かの方が良いだろう。

「じゃあ、バドミントンとかは？」

「それなら……」

響でもやりやすいだろうと考え、代案を出すとあっさりと全員が承諾した。決まりとばかりに全員でソロソロと部屋を出て屋内コートへと向かう。中枢エリアとは逆の方にスポーツ施設が固まっている構造になっているが、あまりそちらへは足を運んだ経験がなかった為、新鮮な気分だった。

施設内に入ってカウンターで優が人数分のラケットとシューズ、そしてシャトルを借りる。コートに人はいなかった。優たち同様、あまりここに来る人は少ないのだろう。ラケットとシューズを全員に配る時、ある懸念を覚えた。京子は黒のクルーネックセーターにジーンズ、華は淡い水玉模様のチュニックにレギンスといった格好だったが、詩織はブラウスにフレアスカート、愛もタートルネックにVネックを重ね着して、下に珍しくプリーツスカートといった姿だった。つまり、あまり動くと思えない。注意しようと思ったが、本人たちが気にしていないようだった為、完全に言うタイミングを見失った。響もデニムスカートだったが、それは置いておく。

「で、ダブルス？」

シューズを履きながら京子が疑問を口にする。

「かな。負けた方で順番に交代していいこうか」

「オッケー」

「響ちゃん、このラケットでシャトルを打って、相手の陣地にシャトルを落せば勝ち。こっちの陣に落ちたら負け。オッケー？」

「おっけー！」

簡単に響に説明すると響は無邪気にはしゃいだ。あまりこういったゲームをしたことがないのだろう。少し心配になりながら、打ち方も教えておく。

「腕で振るんじゃなくて、手首で振る感じ……そうそう。もうちょっと短く持った方がいいかな」

全員がシューズに履き換えた後には、響はシャトルを相手コート

へ打ち返せるようになっていた。本当に物覚えの良い子だ、と感心する。華も響の様子をにこやかに眺めながら優に向かって疑問を投げた。

「はじめのチーム分けはどうする？」

「適当に響ちゃんに決めてもらったら？」

横から京子が言う。優は頷いて響に視線をやった。

「響ちゃん、誰とチーム組みたい？」

「さくらい！」

「わかった。じゃあ、対戦相手は？」

そういうと、響は少し悩んだ様子で、京子と愛を指差した。

「ふふん、私を対戦相手に選んだこと、後悔させてあげる」

京子が不適な笑みを浮かべる。

「愛、いくよ！ チビチビコンビに負けられない！」

京子と愛がコートに入る。チビ、と僅かばかり気にしていた事を言われ、優はムツとした顔で響とともにコートへと入った。

「いくよー」

まずは優から愛に向かってサーブ。愛が響に向かって緩やかな山なりの軌道でシャトルを撃つ。響はよたよたと移動しながら、一生懸命にラケットを振ってシャトルを京子に返した。見ていて微笑ましいものがある。しかし、京子は響の打ったシャトルを大人げなく優の方に向かって叩きつけた。突然の速度変化についていけず、拾い損ねてシャトルが地に落ちる。優はそれを見て、不適な笑みを浮かべてからラケットを左手に持ちかえた。コート外で見ていた華が驚きの声をあげる。

「えっ！ 桜井くん左利き？」

「ごめんなさい。やってみたかっただけです」

結局、優・響チームはストレート負けした。

「いやあ、久しぶりに健康的なことやった感じ」

軽く汗をかいて、全員で少し休憩することになった時、京子がそう言った。確かに、と華が頷く。

「スポーツとか久しぶりだね。訓練は何だか違う感じだし」

「訓練は爽やかな汗って感じじゃないよね」

優も苦笑して頷いた。

「こういうの、学校に通っていた頃以来かもしれない」

詩織も笑いながら同調する。

「本当。体育とか懐かしいなあ」

「もう一回、チーム組み直してやりませんか？」

その提案に全員が頷く。華が具体的な決め方について口を開いた。

「分け方どうする？」

「ジャンケンでよくない？」

と京子。結局、京子の言う通りにジャンケンで決めることになり、次は優と愛。響と華。京子と詩織の組み合わせになった。はじめに優と華、京子と詩織の対戦となる。全員がコートに入った後、京子のサーブから始まった。愛が難なくシャトルを拾い、詩織の方へと返す。詩織も特に問題なくそれを優たちのコートに飛ばした。しかし、その位置が優と愛の間であった為、一瞬どちらが取るか迷いが出た。結局、両方がシャトルのもとに走ったが、愛がラケットを振る様子がなかった為、優が地面スレスレまで来ていたシャトルを下から拾い上げた。その時、シャトルの横にいた愛のプリーツスカートが風圧でふわりと舞い上がった。

「あ」

優の口から思わず間抜けな言葉が飛び出す。シャトルがネットに引っ掛かって空しく地面に転がった。

「う、ごめん！」

顔を真っ赤にして俯く愛にとりあえず謝る。愛がスカートだったことをすっかり失念していた。

「……嫌じゃないから気にしなくて良い」

「あ、愛、その言い方はまずいよ！」

愛がポツリと言う。華が外から何か叫ぶが、京子のからかう声で優には届かなかった。

「桜井やるねー。スカート捲りとか見たの小学生以来だわ」

その京子の横には足元を気にする詩織。ようやくスカートを履いていることが気になり始めたらしい。こうなると優も妙に気になってしまう。

先ほど京子はバドミントンを健康的なスポーツで評していたが、急に不健康なスポーツに思えてきた。

それから三十分後、あまりにも服装が合っていないということでは中止を提案しようとはしなかった。最後まで当の愛と詩織

3章 26話 秋山明日香(2)

その日、優は朝から明日香に呼び出されていた。優が医務室に入るなり、デスクの前で作業をしていた明日香はにっこりと立ち上がって話を切り出した。

「響ちゃんはどう?」

「元気だと思います。最近は漫画にはまったようで、あいうえお表を片手に頑張って読んでます」

「漫画ねえ。あまり変なの読ませないように」

釘を刺され、答えに困る。既に過激なものを読ませてしまった。返事を返さない優に明日香は一瞬怪訝な顔をしたが、追及はしてこなかった。

「特に問題ないならいいわ。後三日間よろしくね。あ、ここに座って」

明日香が椅子を目で差す。優は頷いて腰をおろした。

「前から気になっていたんですが、三日後から先はどうするんですか?」

前から気になっていた疑問を口にする。響を預かるのは一週間の約束だったが、その間に明日香が何をして、それから響がどうなるのか優には一切知らされていなかった。

「まあ、任せなさいって。全て順調だから」

答えをはぐらかせて笑う明日香に優は何も言わなかった。明日香がそう言うのならは何も問題ないだろうといった信頼がある。

「それで、話とは何ですか?」

「君のカウンセリングをしようと思って」

思わぬ言葉にまじまじと明日香を見る。明日香は優の反応をうかがように微笑を浮かべた。

「僕の、ですか?」

「そう。君の」

何と返せば分からず沈黙が落ちる。明日香がため息をついた。

「話したいこと、ない？」

再び沈黙が落ちる。優は俯いて、明日香から目線を外した。優が話す気がない事が分かったのか、明日香が優しく口調で口を開く。

「話したくないならいいわ。話したくなったら、いつでも来なさい」

「……僕は大丈夫です。何も心配はいりません」

そう言っつて、優は立ち上がった。いつもと変わらない、屈託のない笑みを浮かべて。

「ご心配おかけしてすみませんでした」

「ご心配おかけしてすみませんでした」

頭を下げて、そのまま医務室から出ていく優の姿を、明日香は複雑そうな顔で見送った。ドアが閉まり、医務室に静寂が満ちる。明日香は、自分の学生時代の記憶を探り、それを桜井優と重ね合わせた。違いすぎる、と結論付ける。少なくとも、自分はあれほど大人ではなかった。ずっとわがままで、感傷的だった。多分、それがあの年代では普通のことなのだと思う。

社会的な猶予期間を奪われた子どもは、ああして大人のように振る舞うことを強制されるのだろうか。

脳裏に一人の少女の姿が浮かぶ。もうこの世界にはいない、最初のESP能力者。彼女もそうだった。それから、数人のESP能力者の顔が浮かぶ。全員がそうだった。そして、最後に一人残らず限界がきてしまった。

自然とため息が出る。その時、ドアが突然開いた。情報部の主任、斎藤準がいつもの疲れたような顔を見せる。

「よお」

そう言っつて、中に入ってくる準を明日香は一瞥した。

「今、桜井とそこで会った。何を話してたんだ？」

「……響ちゃんの様子を聞いただけ」

「それだけか？」

「……それと明日香先生による人生相談の予定だったんだけど、結局何も出来なかった」

「そうか」

準が先を促すように言う。明日香は溜め息をついた。

「大丈夫だから心配いらない、ですって。最近、亡霊の動きが不安定になってる。彼がそれを一番理解してるでしょう。それで何かあった時、彼が真っ先に投入される。とても大丈夫とは思えないわ」
ねえ、と明日香はそれまでの投げやりな態度を変えて、準に向き直った。

「ESP能力者は全員心的外傷を引きずっている。皆、どこかしら危うい部分がある。でも、優君にはそうした傷がはつきりと見られない。怖いと思わない？」

「多分、それが許されない環境で育ったんだ。桜井は、甘え方を知らない」

「もしくは、甘える対象を早くに失った？」

「だろうな。一つ、手がある」

「どんな？」

「甘えられる対象を作る」

その言葉に、明日香は目をすつと細めて準を睨んだ。

「子ども達の関係に大人が口を挟むべきではない」

そう言つと、準は苦笑を浮かべた。

「違う。そんなんじゃない。もっと上の階層での話だ」

準の言う意味を吟味して、明日香は懐疑の目を準に向けた。準が僅かにバツの悪そうな顔をして考えを話し始める。

「桜井はまだ子どもだ。それに、響も桜井に懐いている。悪くない考えだと思っただが……」

「幸枝には話したの？」

「もちろん。賛成だそうだ」

「……本気？」

明日香の言葉に、準はいよいよバツが悪そうに顔を背けた。

「昔、ESP能力についてこう考えた事がある。ESP能力者は心に空いた傷から命の源とも言える何か大事なものを流し続けているんじゃないかって」

「……心的外傷の度合いとESPエネルギーの保有量に相関関係は存在しない」

「そんなのはわかってる。若い時にふと考えただけだ。データを元に真剣に考えた訳じゃない。でもな、ずっとこの考えが頭から離れないんだ。ESP能力者は全員若い。そんな奴らが俺達より早く次々と散つてくんだぞ。生きることに必要な、致命的な何かをESPエネルギーとして燃やし続けてるようにしか思えん」

「つまり、ESPエネルギー出力量が突出してる優君は、他とは比較にならない心的外傷を抱えていると？」

「そうだ。非科学的だと言われようが、俺はそう思ってる。少なくとも、あいつはまだ子どもだ。あいつには が必要だ。違うか？」

「本気で言ってるの？ ただの思いつきで言ってるならぶっ飛ばすわよ」

「本気だ。俺はもう三十二歳だ。経済的な余裕もある。それに幸枝の事はお前も知ってるだろ？」

「でも……」

「いいか。お前は女だ。桜井は男だ。お前じゃ考えつかない色々な問題がある。しかも、ここは女だらけだ。何でも相談できる相手が 必要だ」

「……そうかもしれない。でも、本気で？ もし、途中で放棄したら」

そこで明日香は準を睨み付けた。準が苦笑する。

「何にせよ、最終的な決定を下すのは桜井だ。俺はただ道を示すだけだよ。俺もガキじゃない。桜井もだ。そんなに心配するな」

「そう、ね」

「それと響のことだが、既に書類は全て作った。後は審査待ち。全て順調だ。それだけ言いに来たんだが……長話になったな」

そう言っつて、準は背を向けた。お互い最後に短い言葉を交わして、準が医務室から出ていく。明日香はそれを見送ってから、デスクに突っ伏して準の言葉を反芻した。

命の源とも言えるような大事な何かを燃やして、か。比喻としてそれは正しいと思った。ESP能力者は文字通り命を賭けて戦っている。肉体的にも、精神的にも摩擦が激しい場においでしている。いつかは擦りきれきって限界がくる。現実は何十人もの子どもが死んでいった。

そこまで考えて、明日香はあることに気づいた。桜井優が特殊戦術中隊に入隊してから三ヶ月近く経つが、その間に離脱者は一人も出ていない。肉体的な怪我によるものも、精神的な負荷に耐えきれなくなった者は一人も存在しない。準の比喻を使えば、桜井優は他の子どもたちから流れ出る重要な何かを塞ぎ止めているということなのだろうか。ただ在るだけで、その傷を塞いでいる。

ならば、桜井優の傷を、溢れ出る重要な何かを塞ぎ止める存在は？

そこまで考えて、明日香は身震いした。そんなものは、ない。ただ、流れ続け、擦りきれ去っていくだけだ。優の持つ比類ないESPエネルギー出力量が、今の明日香には頼りに思えるどころか、ただ恐ろしく思えた。

3章 27話 鎖の少女(15)

医務室を出てから真つすぐと寮棟に帰ると、その廊下で優は珍しい光景を目にした。廊下の先に響と、響と楽しそうに喋る第五小隊長、進藤咲の姿があつたのだ。咲の笑う姿を見るのは初めてで、優は自然と頬を緩ませた。子ども好きなのだろうか。話しかけようと一歩踏み出した時、咲がゆっくりと顔をあげた。自然と目が合う。

「おはよう」

言葉をかけると、咲は怯えたようにビクリと肩を震わせた。そして、おずおずと頭を下げる。

「……この子は？」

ポツリと咲が言う。

「少しの間うちで預かってるんだ。名前は響ちゃん」

そう、とだけ返して咲は立ち上がった。そして踵を返す。その後の姿に優は思わず声をかけた。

「良かったらまた遊んであげてくれないかな。響ちゃん、ここに知り合い少なくなつて」

そう言つて、横にいた響の頭を撫でる。咲は一度だけ振り返つて、何も言わずそのまま廊下の向こうへと姿を消した。それを見送った後、優はしゃがみこんで、響の顔を覗きこんだ。

「あんまり外を勝手に出歩いちゃダメだよ」

「うん！」

頷く響の頭を優しく撫でてから、二人は自室に戻った。

「これ、一緒に見ない!？」

夜、響に簡単な算数を教えていると、京子、華、愛のいつもの三人が一つのDVDを手に部屋にやってきた。すっかり溜まり場にな

つてしまっている。

「何それ？」

「去年何か凄い賞とったやつ！」

パッケージには夜の湖から頭だけを覗かせる女の顔が映っていた。タイトルは深淵から覗くモノ。

「ホラー？」

「そ！」

優はチラリと華に目をやった。

「華ちゃんこういうの弱そうだけど、大丈夫なの？」

「だ、大丈夫！」

噛みながら頷く華に一抹の不安を覚えながら、三人分のジュースをコップに入れてテーブルに置く。

「と言うか、何でホラー？ 季節外れじゃない？」

「元々何でも良かったんだけど、たまたま貸出コーナーで目に止まっつてさ。桜井、ホラー無理なの？」

ニヤニヤとテーブルに身を乗り出して優を挑発するように言う京子。

「そんな事ないけど……響ちゃんは大丈夫？」

「だいじょうぶ！」

そもそもホラー映画が何なのか良く分かってなさそうだったが、本人に大丈夫と言われれば仕方がない。

「……せっかくだから、電気消して見たい」

「あ、それいいね」

珍しく乗り気の発言をする愛。それに京子が同意する。その横で華が顔を引きつらせているのは見なかったことにした。

とりあえずDVDをセットして、テレビの電源を点けてから部屋の明かりを消す。テレビ画面の発する光だけが部屋を僅かに照らし、見慣れた部屋が全く別のものに見えた。

「おー。雰囲気出るね」

京子のはしゃいだ声を出す。暗闇の中、優が慎重にテーブルの方

に戻ると響が抱きついてきた。膝の上に乗せて、リモコンを手にする。

「じゃ、始めるよ」

再生ボタンを押す。制作会社のログが流れて、映像が流れ始めた。ついでに僅かに音量を上げておく。

「……私がそこに引つ越したのは全くの偶然だった。妻を亡くしたばかりの私にはあの街で暮らし続ける事に耐えきれず、この静かな湖の畔に逃げるようにやってきた」

ナレーションが始まる。初老の男が一人で田舎に引つ越してきたところから物語は始まった。男は長年連れ添った妻を亡くしたばかりで、悲しみを癒す為に人里離れたところにやってきたらしい。テレビ画面には、豊かな自然に囲まれた古い二階建ての屋敷が映っていた。

不意に誰かが優の右袖をギュッと掴んだ。チラリと振り向くとテレビの明かりで照らされる華の不安そうな顔があった。何も言わず、再びテレビに視線をやる。場面が切り替わり、新しい生活を始める男の姿が映し出された。

「そこに私を傷つける者はいなかった。ただ静かな日々が私を満たしてくれた。しかし、そこは静かすぎた。不気味なほど鳥や虫の姿が見られなかった。まるで、全ての生命がこの静かな湖の畔を恐れているようだった」

カメラが誰もいない屋敷を這いまわる。誰かが唾を飲み込む音。膝の上の響が僅かに身じろぐのが分かった。

「暫くは静かな日々が続いたが、ある日、私はふと湖に釣りをしに」

不意に優の携帯から着信音が流れた。華が短い悲鳴をあげる。

「あ、ごめん」

携帯の液晶には橋本恵の文字。優は慌てて携帯を持って部屋を出た。廊下に人がいないことを確認して電話に出る。

「もしもし」

「響ちゃんのこと分かったわよ」

前置きのない恵の言葉に優を全身を緊張させた。

「それで、どうでしたか？」

「えっとね。姓は伊藤。伊藤、響。七月六日生まれ。歳は八。登録されている住所は埼玉県田名市。両親は響ちゃんが二歳の時に両方亡くなってる」

「他に血縁関係は？」

「調べてみたんだけど、身寄りが全然ないみたい。でね、一番問題な事があるんだけど」

そこで恵は言葉を切った。言いつらそうな恵の様子に不安を覚える。

「問題？」

「そう……響ちゃん、総基ネット上では死亡扱いになってる」

その言葉に優は何と言っているかわからず、ただ恵の言葉を繰り返すのが限界だった。

「死亡、扱い？」

「そう。両親と同じ日にね」

では死亡扱いとなってからの六年間、身寄りのない響は

寒気がした。まだ二歳の子どもに発信機を埋め込み、それからずっと？

電話の向こうで恵が何かを言っているのが聞こえたが、優の頭には入らなかった。そのまま呆然と通話を切り、ふらふらと自室に戻る。気分が悪かったし、今は何も考えたくなかった。部屋に入った途端、暗闇の中から京子の非難の色を帯びた声が飛んできた。

「おそーい！」

「ごめん、急に電話かかってきたから」

とりあえず声が震えなかったことに安堵する。そして、部屋の明かりがついていない事にも。優はさっきと同じ位置に腰をおろして、再び響を抱え上げた。京子がリモコンを手に取り、テレビに向ける。停止していた映像が再び息を吹き返した。

青い空。静かな湖畔。老人が湖で静かに釣りをする映像。暫くのどかな様子が映し出される。それから、湖の中で蠢く影。老人が家路についた後、湖から黒い影が浮かび上がり、老人の屋敷へと近づいていく。

「欧米風だね」

京子がポツリと言う。確かに日本的な演出ではない。文化圏によって恐怖を感じるメカニズムが異なるという話をどこかで聞いたのを思い出した。

老人が寝室に入り、ベッドに腰かける。そして、亡くなった妻の写真を手にとって眺めた。その時、部屋の外で足音。老人がビクリと肩を震わせ、恐る恐るドアの方に向かって歩き始める。もう廊下から物音はしない。老人は迷うような手つきでドアノブを回し、ゆっくりとドアを開けた。古びたドアの軋む音とともに、老人が開いた隙間から顔を覗かせて、暗い廊下を見渡す。しかし、何もいない。老人は一人小さく首を振り、ドアを閉めてベッドに向き直った。ベッドの奥にある窓からこちらを覗く顔。

「きゃっ！」

途端、華が優に思い切り抱きついた。

「今のはちよつとびびった」

と京子。そして誰かが左袖を掴む気配、愛だろつか。

画面の向こうで立ち尽くす老人。カメラがもう一度窓に向くと、そこには何もなかった。老人は自分の健康を疑うような仕草を見せた後、ベッドに入りそのまま寝入った。

「……華、いつまで抱きついてんの？」

場面転換の間に、優に抱きついたままの華を見て、京子がかからかうように言う。

「え？ あ、ごめんなさい！」

華もようやく自分の行動に気付いたのか、大袈裟な動作でパツと離れる。

「いや、別に良いけど……」

そう言つと、暗闇の向こうで京子からジト目で見られた。

「何デレデレしてんの。やらしー」

「してないって！ あ、ほら、また大事な場面に」

そう言つて、無理矢理話題を変える。渋々といった様子でテレビに向き直る京子。そして、闇の中で手に京子の指が触れる。事故を装つたような、怖々としたその動きに京子が何を求めているのか察して、優は苦笑してその手を優しく握った。そしてすぐに握り返される。京子はテレビを見たまま表情を変えず、何を考えているのか分からなかった。

『この日から奇妙な事が立て続けに起こるようになった』

ナレーションとともに老人が浴室の掃除をしている場面が流れる。そして、老人は排水管に絡まる黒色の長い髪を見つけた。老人は白髪である為、老人は奇妙な顔して、すぐにそれをゴミ箱へと捨て去った。

「うう……うういうの見たら、お風呂掃除できなくなっちゃう」

華が泣きごとを言う。

「久しぶりに大浴場行く？」

と京子。

「そうしようかな……」

二人が話を交わしている間に、再び場面が変わり、老人の湖で釣りをするシーンが映し出される。それをぼんやりと眺めながら、優は握った手の温もり、そして膝に乗せた響の暖かさでウトウトと始めた。暗闇の中、奇妙な安心感に満たされて目を瞑る。酷く心地がよくて、懐かしい感じがした。そのまま、ゆっくりとまどろみの中に落ちていく。

桜井優は混濁する意識の中、遠い過去の夢を見た。

『ちゃんと良い子にしててね』

女性の声が聞こえる。柔らかない声。

前もこの夢を見た。確か、二度目の出勤で死にかけた時の、微かな記憶。

『すぐ帰るから』

少し、長いよ。曖昧な意識の中、そう笑う。

女性がその言葉を紡いでから、一体何年経っただろうか。

『そう、約束。じゃあ 行くな』

掴んだ手がゆっくりと離れる。去っていくあの人の後ろ姿が今も忘れられない。優は、離れゆくその姿に手を伸ばした。そして、虚しく空を切る。

「桜井？」

不意に、京子の小さな声がした。その拍子に意識が急浮上する。

そして、自分が京子の手を強く握っていることに気がついて、優は慌てて力を緩めた。一瞬、闇の向こうで華が怪訝な顔をしたのが見えただが、テレビから流れた悲鳴にすぐ意識を奪われたようだった。

「少し、ウトウトしてた」

心配そうな顔をする京子に笑って言う。

「ホラー映画見ながらウトウトするって結構神経図太くないと難しいよね」

安心したように京子が茶化す。

「桜井君、疲れてるの？」

「いや……いくら睡眠とっても眠れるタイプ」

「なあに、それ」

暗闇の中でクスリと華が笑う気配。

響を預かってからの五日間はこうして亡霊も現れることなく緩やかに過ぎ去っていった。

3章 28話 鎖の少女(16)

その日は雨が降っていた。朝、どんよりと曇った空を窓から眺め、桜井優はため息をついた。

響を預かってから六日目。今日は少し響を外に連れて行くことと考えていたが、この悪天候では風邪をひかせてしまうことになるかもしれない。上手くないかないなあ、と雨雲を不機嫌そうに睨む。雨は優に反発するかのように時間が経つにつれて雨足を強めていった。午後を過ぎると雷が鳴り始め、時折響が大袈裟なほど怯えた為、カーテンを閉め切って大音量で音楽を流し、雷を意識させないようにした。

午後三時。優は飛行訓練の為に響を部屋に残して部屋を出た。こうした悪天候のもとで飛行訓練をするのは初めてだった。あまり気が進まなかったが、雨の中、経験もなく実戦に放り込まれることを考えれば、こうして経験を積む機会に恵まれたのは運が良いと無理矢理前向きに考える。しかし、訓練場に着いた時、そんな前向きな考えは吹き飛んだ。雨は予想以上に強く、訓練場は水たまりだらけになっていて、力強く降りつける雨が戦闘服に染み込んで気持ちが悪かった。視界も悪く、果たしてこんな状況で訓練ができるのかと優は疑った。

訓練場には既に五割ほどの隊員が集まっていた。第一から第三小隊の合同訓練である為、あまり多くはない。そして、そこから少し離れたところに奈々と加奈の姿。全員が雨の中、憂鬱そうに訓練が始まるのを待っている。

優が第一小隊の輪の中に入ると、びしょ濡れの華がすぐに話しかけてきた。いつもの少しふわふわとした髪が雨で崩れて、随分と雰囲気が変わるように見える。

「天候最悪だね。昨日はあんなに晴れてたのに……」

「だね。本当に大丈夫かな……」

そう言って、目を細めて雨空を見上げる。雨は当分止みそうになかった。

暫く二人で話している間に奈々が訓練の開始を告げた。

「時間よ。各小隊長の指示に従って第一小隊からオン。さっさと終わらせてしましましょう」

雨の音に負けまいと叫び奈々の言葉に華が頷いて、部下に向かって叫ぶ。

「ショートスタンバイ！」

機械翼の展開する音が雨音に紛れて響く。機械翼の両翼につけられた識別ライトが一斉に発光し、訓練場を光が覆った。

「オン！」

号令とともに次々と第一小隊のメンバーが地を離れて、雨に逆らうように高度をあげていく。優も少し遅れてESPエネルギーを機械翼に送り込んで浮力を得た。視界が悪い為、細心の注意を払って高度を徐々にあげていく。いつもより三割ほど時間をかけて、第一小隊全員が一定の高度まで上昇した。

「まずは単純後退！」

華が大きく叫んで識別ライトのついた左手を回す。声が聞こえづらいことに加え、識別ライト以外も雨で全く見えず、漠然とした不安感がわきあがってくる。雨の中の飛行は予想以上に厄介なものだった。

「次、単純前進から鶴翼隊形！」

両翼が特に前に飛び出して、Vの字に似た形を作り出す。ぱつと見た限りでは隊列が大きく崩れていた。やはり、この悪天候の中ではまともに動けない。

「鶴翼維持！ アップ！」

次に隊列を維持したまま高度をあげていく。これも動きにバラツキがあった。現在の特殊戦術中隊の錬度では天候の影響をもろに受けてしまうということだろう。次に亡霊が出る時は晴れている事を願うしかない。

結局、悪天候の為に訓練はいつもの半分の時間で終わり、優たちは全身ずぶ濡れになりながら地上に降り立った。これ以上濡れようがないほど濡れている為か、最早いくら雨に打たれようが気にならない。

「あー、もう最悪」

地上に降りた途端、京子が不満を撒き散らせながら近寄ってくる。その後ろには愛と華。

「慣れてくると何か逆に清々しくない？ シャワー浴びてるみたい」
そう言つと京子は露骨に嫌な顔をした。

「冷水シャワーは勘弁」

「……少し寒い」

「戻ろうか。シャワー浴びたほうがよさそう。もちろん、熱いのを」
四人はそのまま歩いて本部に戻った。エントランス前には同じように訓練から帰ってきたばかりの少女たちが集まってい賑わっていた。総務部の人々がタオルを配ってくれているようだった。優たちも受け取り、濡れた髪をさっと拭く。水を含んだ戦闘服がずっしりと重く、本部門に入った途端に酷く冷たく感じた。

「あー、気持ち悪い。シャワー室いっぱいだろうし、部屋のシャワー使っしかないか」

京子が不機嫌そうに言う。一階に備え付けられたシャワー室の前には行列ができていた。

「この格好で寮棟まで行くのはしんどいね」

戦闘服の裾をギョツと握って水を絞りながら優が言う。軽く捻っただけで大量の水が床に落ちた。

「うー、寒い。早く行こう」

華が震えながら言った。その意見に三人は頷いて、渋々といった様子で寮棟に繋がる通路を通っていく。最後のセキュリティゲートを通って寮棟に辿りついた時にはすっかり身体は冷えていた。

「じゃあ、私こっちだから」

途中で京子と分かれ、そのまま愛、華とも順番に分かれて部屋に

戻る。玄関に入った瞬間、響がドタバタと近寄ってきて、優は慌ててそれを止めた。

「今は濡れてるから触っちゃダメだよ。シャワー浴びてくるから部屋で待ってて」

そう言うつと、響は渋々といった様子で部屋に戻っていった。部屋からは訓練に行く前に響の為に付けっぱなしだった有名な男性アイドルグループの曲が流れている。ドアごしにそれを聞きながら脱衣所で濡れた戦闘服を洗濯籠の中に放り込み、浴室に入った。ノズルを回すと熱いシャワーが身体を包み、疲れが流されていくような感覚を覚える。

何も考えず、そのまま優は数分間頭からシャワーを被って、冷えきった身体を暖めた。欲を言えば湯に浸かりたかったが、湯を張るのに時間がかかる為に断念する。そしてふと半身浴という言葉を出した。あれならすぐに入れるかもしれない。しかし、身体が暖まるのかは疑問だ。肩までしっかりと浸かるのが好きだった為、半身浴という行為に若干の抵抗があった。しかし、体験したこともないものを無闇に嫌うのも良くないかもしれない。今度、試してみようか。そう考えた時、廊下の方からけたたましい警報が鳴り響いた。「亡霊！」

慌ててシャワーを止める。そして、浴室から出ようとしたところで違和感を覚えた。これはいつもの出撃警報ではない。聞いたことのない警告音だった。

「避難警報？」

ようやく警報の種類に思い当たった時、浴室の明かりが消えた。

3章 29話 鎖の少女(17)

「避難警報……?」

通常の警報とは違う事に気付いた時には既に遅く、浴室の明かりが何の前触れもなく消えた。同時に警報も止む。

シャワーの水音だけが静かに反響する真つ暗な浴室の中で、優は息を止めた。背筋に冷たいものを感じながら手探りでシャワーを止め、ゆつくりと脱衣所に出る。

「響ちゃん!」

近くにかけてあったタオルを引っ掴んで、脱衣所から響を呼ぶ。

「さくらい!」

響の恐怖に染まった声。

「じつとして。今行くから」

ESPエネルギーを練って、指先から光球を作り出す。辺りが翡翠の光に照らされて、見慣れた脱衣所が視界に入った。身体を拭く時間も惜しく、そのまま服を着て廊下に出る。廊下の明かりも、洋室の明かりも消えていた。

右手の明かりを頼りに部屋のドアを慎重に開けるとすぐに響が抱きついてきた。怖がらせないように頭を優しく撫でて、部屋の中を見渡す。酷く静かだった。かけていた音楽も止まっている。

「停電?」

窓を開けて外を覗くと一面が闇に包まれていた。雨の音だけが静かに響く。亡霊対策室本部の周りには他の住居がないため、これが辺り一帯の停電なのか亡霊対策室のシステム上のトラブルなのか判断がつかない。

「響ちゃん、ここでじつと待ってて。いい? 動いちゃだめだよ」

そう言っただけで寮棟の廊下の様子を見に行こうとしたが、響に服の裾を強く引っ張られて、すぐに断念する。

「いやぁ……おいてかないで」

「……わかった。おいで。絶対に僕から離れないでね」

響の手を左手でしっかりと握り、右手にESPエネルギーで作出した光球を掲げながら部屋のドアを開け、玄関に向かう。ドアノブを回そうとして、優は僅かに躊躇した。今は小銃も機械翼も何もない。対亡霊戦を想定して作られた標準装備が一つも手元がないというのは優の不安を強く煽った。響の手を強く握って、慎重に廊下に繋がる玄関ドアを開ける。恐る恐る顔だけ覗かせるとそこには深い闇が広がっていた。廊下に窓がない為、明かりが消えればそこを照らすものは何もないのだ。得体の知れない恐怖を感じながら、ゆつくりと廊下を光球で照らし出す。見慣れたはずの長い廊下が今は朽ちた廃墟のように見えた。そして、昨日見た映画のことを思い出す。本当に幽霊が出てきてもおかしくない雰囲気だった。

「誰か……いないの？」

声を抑えて呼びかける。返事はない。優は右手に宿した光球で先を照らしながら、ゆつくりと廊下を進んだ。

ガチャ、と小さな音がすぐ近くから届く。反射的に響を後ろに庇い、優は右手を音源に向かってかざした。

「待て。撃つなよ」

優が右手を向けた先には、ドアから半身を覗かせた一人の少女の姿があった。第一小隊の川上沙耶^{かわかみ さや}。優は安堵の息をついて、光の宿った右手を下げた。

沙耶に続くように廊下の至るところから次々とドアの開く音ともに特殊戦術中隊のメンバーが顔を見せる。全員がこの事態に困惑しているようだった。暗闇の中、優の明かりに釣られるようにして続々と集まってくる。次第にざわめきが大きくなり、暗い廊下の中で妙に大きく反響した。

「桜井、これどうなってるんだ？」

川上沙耶が不機嫌と不安を混ぜ合わせたような口調でたずねてくる。沙耶は第一小隊の第二分隊長を務めているはずだった。何かあった時、頼りになる存在と言って良い。優と同様に直前までシャワ

「を浴びていたのか、沙耶の鮮やかな金色の髪はしつとりと濡れている。」

「わからない……けど、あまり良い雰囲気じゃないね」

その時、廊下の向こうから一人の少女が走ってきた。第三小隊長、佐藤詩織。

「桜井さん！ さつき避難警報が流れましたけど何か連絡ありましたか？」

息を切らせながら詩織が口を開く。優は首を振った。

「残念だけど、何も聞いてないよ。僕も何が何だか……これからどうしようか？」

「私は桜井さんに従います」

信頼の眼差しで見られて、困ったように辺りを見渡す。いつの間にか、優の周りに全員が集まっていた。中隊長という責任がずしりとのしかかる。

優はひとまず司令部と連絡を取ろうと、携帯を取り出した。そして、画面に表示された「圏外」の文字に眉を寄せる。

「圏外になってる……」

「え？」

詩織が驚いたように自らの携帯を取り出す。そして、すぐに顔を上げて困惑した顔を見せた。周囲にいた少女たちも次々と携帯を取り出し、同様の反応を見せた。困惑の波が広がっていく。

「本部が電磁的な攻撃を受けてるって事か？」

沙耶がぼやくように言う。その言葉に、全員が顔を硬くした。沙耶が慌てたように付け加える。

「それは流石にないか。たまたま近くの中継所に雷が落ちたのかもな。こういうのって、区域ごとに中継してんだろ？」

優は何も言わず、周囲を見渡した。全員が不安そうな表情を浮かべている。

経緯がどうであれ、司令部と分断されて指揮系統が破壊されてしまっている。誰かが引っ張らなければ、混乱が大きくなってしま

かもしれない。優は小さく深呼吸してから口を開いた。

「とりあえず、全員の無事を確認しない？ 皆、各小隊ごとに並んで」

その言葉にざわめきが収まり、廊下に集まっていた二十人ほどの少女たちが素早く小隊ごとに固まる。優は右手に持つ光球にESPエネルギーを更に注入して、全員の顔が良く見えるようにした。

「第一小隊四人。第二小隊二人。第三小隊六人。第四小隊三人。第五小隊二人。第六小隊三人、かな」

「全然足りねーな。拾ってまわるか？ いや、やっぱりこのまま司令室まで直行した方が早いかな？」

沙耶が尋ねてくる。優は少し考えた後、チラリと詩織の方に目を向けた。

「非常時のマニュアルみたいなものってあったっけ？」

「いえ、聞いていません。避難訓練はずっと昔にやった事がありますが、こういう事態は想定されていませんでした」

「うーん。じゃあ、ここにいる人達だけでとりあえず司令室に向かうか。それから、神条司令の指示を仰ごう」

全員が小さく頷く。優はそれを確認してから言葉を続けた。

「僕が先頭を歩くから、詩織ちゃんは最後尾を見て」

途中で優は突然黙り込んだ。優だけでなく、全員が息を止めた。場が静まりかえる。

闇に包まれた廊下の先で、何かが蠢く気配。

「……何かいる」

優が呟いた瞬間、廊下の先に淡い紫色の光が浮かび上がった。

周囲の気温がぐんと下がったような錯覚に囚われる。

背筋を悪寒が走った。

頭の奥で警鐘が鳴り響く。

廊下に先に浮かぶ不気味な光が不安定に瞬き、近づいてくる。

「下がって！」

優は叫び、一歩前に出た。

後方から小さな悲鳴があがる。

暗闇から、ぬつつと何かが姿を現す。小さな赤い瞳。鋭利な爪。

巨大な翼。

「亡霊……」

優は迎撃態勢をとることも忘れて、ぽつりと呟いた。

どこかぼんやりとした輪郭だったが、それは紛れもない亡霊の姿だった。

亡霊は静かに揺らめきながら、徐々に優たちのもとへ寄ってくる。

「嘘……」

誰かが呟く。

同時に亡霊が動いた。

亡霊の翼が大きく広がり、一カ所に固まった優達のもとへ突進を始める。

優は反射的に響を抱きしめ、その場に伏せた。

「伏せて！」

詩織の叫び声。

同時にESPエネルギーの波が優の頭上を通りすぎて、亡霊に直撃する。一瞬で亡霊の姿が吹き飛び、後には詩織の荒い呼吸音だけが残された。

優は抱きかかえていた響から腕を離し、ゆっくりと立ちあがった。それから、警戒するようにゆっくりと周囲を見渡す。他に亡霊の姿は見当たらない。

「何で亡霊がこんなところに……」

呆然と沙耶が呻く。

「桜井さん……」

詩織が周りを警戒しながら口を開く。

「さっきの避難警報……本部が亡霊に攻められてるってことですか？」

「……どうやら、そうみたいだね」

優は否定の材料が見つけれられず、肯定した。

「でも、何で……出撃命令も来てないのに……」

詩織の言葉に沙耶は小さく首を横に振する。

「私たちが思ってるほど、対策室のESPエネルギーに対する探知精度は高くないかもしれない」

優は同意するように頷いた。

「今の亡霊、存在が何だか希薄だったよね。対策室の探知能力を下回る分のESPエネルギーしか持ってないのかも」

広瀬理沙の時に強く実感したことだったが、亡霊対策室の探知能力は完璧ではない。実際にESP能力を使わなければ、ESP能力者を探知することも難しいと言われている。亡霊がその脆弱性を利用して、最小限の戦力で気付かれないように本部まで辿りついたという可能性は十分に考えられる、と思った。

「でも、ESPエネルギーを最小限にしか持たない亡霊で本部を落とせるとは……」

「そう。だからこれは多分足止め用なんだと思う。僕たちに勝つ事が目的じゃなくて、他に何か目的があるんだ」

「他の目的、ですか？」

「例えば、この間に沿岸部が攻撃されてるのかも」

詩織が顔を硬くする。

優は闇に包まれた廊下をじっと見つめ、歩き始めた。

「とりあえず、司令室まで急ごう」

優を先頭に約二十人の少女たちが後に続く。

右手に宿した光球はそれほど強い明かりを放っていない為、前方には全てを呑みこむような漆黒の闇が広がっている。先程の亡霊の姿が脳裏をよぎり、自然と歩幅が小さくなった。

ようやく寮棟の中を仕切るセキュリティゲートに着いた時、新たな問題が発生した。電子カードを通してゲートが開かないのだ。

「……システムが完全にダウンしてるみたい」

「そんな……閉じ込められたってことですか？」

詩織が不安そうに言う。

「いや……皆、ちょっと下がって」

響を詩織に預け、全員がゲートから離れたのを確認すると優は光球を持った右手に更にESPエネルギーを送りこんだ。光球が膨れ上がり、輝きを増していく。充分に膨れ上がったのを確認して、優はそれをセキュリティゲートに向かつて放出した。エネルギーの奔流がセキュリティゲートに衝突し、爆音とともにゲートが吹き飛ぶ。「きゃっ」

強い風と共に粉塵が舞いあがり、誰かが小さく悲鳴をあげる。

優はもう一度右手にESPエネルギーを集めて明かりをつけた。その明かりに照らされて、空気中に漂う粉塵が煌めく。そして、その粉塵の向こう。吹き飛ばされたゲートの奥に数人の人影が浮かび上がった。

「桜井くん？」

粉塵の中から篠原華、と数人の姿が次々と現れる。優たちと同じようにセキュリティゲートの前で立ち往生していたようだった。

「良かったあ。無事だったんだ！」

いきなり抱きついてくる華を受けとめながら、華の後ろに立つ数人の影に目を向ける。

「京子と愛ちゃんも無事だったんだ」

「はじめの停電時に少し怪我人が出たみたいだけど、一応全員無事だよ」

抱擁を解いて、華が答える。その後ろから京子が不安そうに口を開いた。

「これ、どうなってるの？」

「わからない。僕も何が何だか……」

その時、周囲の空気がざわりと波打った。

寒気を感じて、優、華、詩織は一斉に臨戦態勢をとった。その動きで異変に気付いたのか、他の中隊員も一斉に周囲を警戒する。

「……質より量ってことなのかな」

闇の中から淡い光を放つ亡霊が次々と姿を見せる。優たちのやつ

てきた方向から七体、華達のやってきた方向から六体。狭い廊下で優たちは背中を合わせるようにして亡霊に向き直った。

「僕はこっちをやる。華ちゃんと詩織ちゃんは向こうを」

そう言つて、優は地を蹴った。同時に右手の光球を先頭の亡霊に投げ飛ばす。そして着弾を確認する前に新たな光弾を後方の亡霊群に打ち込む。二つの爆発に亡霊群が巻き込まれ、六体の亡霊が一瞬で吹き飛んだ。そして最後列で生き残った一体の亡霊に向かってそのまま跳躍し、ESPエネルギーを込めた右腕をその胴体に叩きこんだ。何の手応えもなく亡霊の身体が吹き飛び、霧のように闇の中へ消えていく。振り返ると華と詩織も反対側の亡霊を殲滅し終えていた。やはり弱い。予想通り、足止めの線が濃くなってきた。では、目的は何だろう。そう考えた時、優と華達の間には残りの中隊員達の頭上爆ぜた。轟音とともに粉々になった瓦礫の山が天井から落ちてくる。

「きゃあつ！」

悲鳴。予想外の事態に身動きが取れなくなる。

粉塵が舞い、優の放つ光が阻害されて、更に視界が悪くなった。

反射的に四方に視線を走らせる。

そして、優は見た。

天井に開いた穴からこちらを見下ろす不気味な二つの双眸を。

「上！」

叫ぶ。

直後、穴から亡霊がゆっくりと這い出てくる。

「伏せて！」

咄嗟にESPエネルギーを練って迎撃しようとするが間に合わない。最悪の事態が頭をよぎった瞬間、横方から何の予告もなくESPエネルギーの波が周囲一帯に吹き荒れた。亡霊とは別の方向からの衝撃に、全員が不意を突かれて床に投げ飛ばされる。優も受け身をとる暇もなく、背中から壁に叩きつけられた。

優は小さく呻き声をあげた後、苦痛を無視して顔をあげた。そし

て、視界に飛び込んできた光景に目を見開く。吹き荒れるESPエネルギーの中心に、響がいたのだ。怯えるように亡霊に向かって手をかざし、そこから中隊員でも滅多に持つ人がいないほどの高エネルギー波が溢れ出している。

ESP能力。

亡霊は響の放つ高出力の波に呑みこまれて既に姿を消していた。しかし、響の放つESPエネルギーは依然として収まらない。

「響ちゃん、落ちついて！」

叫ぶ。すると響は驚いたように肩を震わせ、その場に崩れ落ちた。優と同様に壁際に投げ出されていた詩織が信じられないといった様子で呟く。

「ESP能力者……？」

優は弾かれたように起き上がって、響のもとに駆け寄った。

「響ちゃん！」

抱え起こすと、響はすぐに笑って反応を返した。困惑しながら、華に目を向けると華もどう反応していいか分からない様子だった。

「響ちゃんがESP能力者だったなんて……」

「確認されてる中では最年少かな。女の子だし別におかしいことじゃないけど……」

ESPエネルギーを大量に放出した影響のせいか、響は身体に力が入らないようだった。

「桜井、さつきから気になってたんだけど、そのガキは？」

川上沙耶が不思議そうに尋ねてくる。

「ちよつとややこしいから後で説明するよ。それより、これからどうするか決めないと」

再び右手に光球を宿して、辺りを照らす。全員が不安そうな顔をしていた。その中で、詩織が思い出したように口を開く。

「……寮棟以外はどうなってるんでしょうか」

その言葉に優は戦慄した。探知能力を下回るほどのESPエネルギーしか持たない亡霊であっても、ESP能力者以外では一切太刀

打ちできない。

「……詩織ちゃん、響ちゃんをお願い。華ちゃんと一緒に寮棟の全員と合流して、絶対に誰も孤立しないようにして」

ぐったりとした響を詩織に預けると、詩織は困惑したようにそれを受け取った。事態のなりゆきを見ていた京子が慌てたように言う。

「ちょ、ちよっと。桜井はどうすんの？」

「僕は中枢エリアの様子を見てくる」

その言葉と同時に優の背中からESPエネルギーで造られた光翼が現れる。高出力のESPエネルギーが周囲を明るく照らし、暗かった廊下が暖かい光に包まれた。その光を眩しそうに見ながら、詩織が頷く。

「わかりました。気をつけてください」

そのやり取りを見て、京子が信じられないといった様子で叫んだ。

「こんな状況で一人で行くつもり？ 馬鹿じゃないの！ せめて他にも数人連れて」

「長谷川さん、今、私たちは機械翼を持たないです。私たちの機動力だと、足手まといにしかありません」

詩織が静かに言う。その言葉に、京子は悔しそうに口を噤んだ。

その横で愛がいつになく表情を曇らせて優のもとに一步踏み出した。

「……優、あまり無理しないで」

光の中心で優は申し訳なさそうに笑って、光翼を広げた。そして、中枢エリア目指して走り出す。数歩走った後、地を蹴ると同時に光翼が羽ばたいた。そして、狭く暗い廊下の中を翡翠の光で照らしながら、高速で駆けた。

3章 30話 神奈奈々(4)

情報部主任、斎藤準は明かりの消えた情報処理室の中、呆然と立ち尽くしていた。

通常、何らかの障害でシステムがダウンした場合、中枢システムは自動で非常電源に切り替わる手筈になっている。しかし、情報処理室にはバッテリーで駆動し続ける数多の端末のディスプレイが放つ淡い光しか存在しない。一向に非常電源に切り替わる気配がなかった。外に繋がる扉も電子ロックされたままで、正常なフェールセーフ処理が行われていない。

「準、ネットワークも切断されている。外部と連絡がつかない」
薄暗い部屋の中、準の婚約者、田中幸枝の声が響く。

この部屋の中には準の他に幸枝と二人の部下しかいなかった。全員がシステム障害の原因を探ろうとしているが、この状況下では例え原因を突き止める事ができたとしても手の打ちようがなかった。
「糞ッ」

小さく悪態をついて、電子ロックされた扉を蹴りあげるがビクともしない。準は忌々しそうに強固な扉を睨み、必死にシステムの構成を考えた。

「物理的トポロジを考えれば、亡霊対策室のネットワークが死ぬなんて考えられない。論理的な攻撃があつたということだ。一体どこから侵入された？」

「論理的な攻撃があつたとしても、こんな障害を起こせるなんて考えられない。中継器に対して物理的な破壊工作も同時に行われた可能性が高い」

準の呟きに幸枝が淡々と規範的な答えを返す。それを聞いて準は落ち着きを取り戻した。淡白な婚約者の態度が今はありがたかった。「さっきの避難警報が気になります。火事で一部のシステムが物理的に死んだ可能性も」

「有り得ない。分散された全てのデュアル、デュプレックスシステムが物理的に焼け死んでいるのなら、俺たちはとつくの昔に骨になっっている。論理システムだけが狙い撃ちされているということだ。あるいは、幸枝の言う通り中継器に対して物理的な攻撃があったと見るべきだ。システムそのものはトポロジを考えれば物理的な破壊など意味を為さない」

部下の考えを一蹴し、諦めたように空いた椅子に座りこむ。暗闇の中淡い光を放ち続けるディスプレイをぼんやりと眺め、準は深い溜め息をついた。

準は混乱する頭で侵入経路について必死に考えを巡らせた。ウィザードの集団であれど、亡霊対策室のネットワークに侵入することは本来不可能な筈だった。ネットワークという構造的な脆弱を考えれば確率的にはあり得る話ではあったが、それは本当に偶発的な場合に限る。故意的に侵入するなど有り得ない。そうなれば内部の手助けがあつたと思えない。そもそもネットワークは内部に敵がないことを前提として作られる。故に嘘に弱い。偽の応答、偽の情報があれば計算機は簡単に騙される。どんなに強固なシステムもネットワークシステムに潜在的なセキュリティホールを抱えている。

では、内部から手引きした者は誰だ？　そして攻撃者は誰だ？　目的は？

全てが分からない。そして、攻撃はいまだに続いている。システムを落とされた以上、準に打つ手はなかった。

「……コネクションが張られている。来て」

不意に幸枝が呟く。計算機の駆動音で満たされていた部屋でそれは妙に大きく響いた。幸枝の珍しく切羽詰まった様子に準は椅子から立ち上がって、幸枝の操作する端末を後ろから覗きこんだ。通信ログを洗い出していたようだったが、その中に不可解なコネクションと現在進行形で異常なパケットが流れていた。ヘッド情報がプロトコルで規定されたものではない。しかし、システムはそれに正常

な応答を返し、再送要求を送ろうとはしなかった。

「ネットワークは死んだんじゃないのか」

呆然と言葉が漏れる。信じられないといった様子で準はそれを眺め、ふと慌てて隣の端末を操作した。

その端末でも、幸枝の調べている端末と同じように異常な通信が行われている事がすぐに分かった。そして、モニタリングソフトウェアに表示された通信相手を見て、目を見開く。

” 127.0.0.1 ”

それは、有り得ない値だった。ループバックアドレスと呼ばれる値で、自らの論理住所を示すもの。つまり、このマシンは自らと通信している事になる。

準は別の端末に向かい、急いで通信ログを開いた。そして、そこにも異常なデータのやりとりが示されている事を確認した後、準は青ざめた顔で叫んだ。

「全てのケーブルを切断しろ！ 攻撃を受けているぞ！」

「まさか。そんな訳が」

「亡霊だ！ 亡霊がシステムに侵入している！」

部下が反論する前に更に大きく叫ぶ。同時に、準は目の前の端末から延びるケーブルを引き抜いた。その瞬間、ケーブルから紫電が迸り、薄暗い情報処理室が激しい光の波に包まれる。そして、準は信じられないものを見た。引き抜かれたケーブルから迸る紫電がそのまま端末に吸い込まれていく光景を。

その時、斎藤準は生まれて初めて亡霊と対峙した。亡霊対策室に勤務してもう六年になるが、実際に亡霊と戦う訳でもなく、準の仕事は突き止めれば特殊戦術中隊のサポートでしかなかった。亡霊対策室にいなながら、亡霊と戦っているという実感を持った事は今までになかった。準にとって亡霊とはテレビ越しに見るSF映画の架空の怪物と同等のものでしかなかった。故に、突如目の前に現れた亡霊を見て準は未知の恐怖を感じた。

論理的な多層防御システムも、物理的な障害も亡霊の前では何の

意味を成さないことを、目の前で繰り広げられる光景を前にして準は理解した。亡霊に人間は勝てない。亡霊は遙か高位の存在なのだ。自分が無力であることを一瞬で悟り、呆然とする。準がこれまでの人生で積み上げてきた知識、技術は亡霊の前ではあまりにも無力なものだった。

しかし、だからと言って諦める訳にはいかない。自分より年下のまだ人生の四分の一も全うすることなく死んでいったESP能力者達の事が頭をよぎり、準は意を決してマシンに手を延ばした。マシンを両手で掴み、力の限り床に叩きつける。破裂音とともに破片が飛び散り、マシンはその機能を停止させた。遮断できないならば、アクセス先を物理的に壊すしかない。

「全てのマシンを破壊しろ！ 復旧の事は考えるな！ 亡霊の求めている何かを絶対に渡すな！」

叫ぶ。その時、引き抜かれたケーブルからマシンに流れていた紫電が突然準の身体に絡みついた。

「準！」

幸枝の悲鳴。それに被さるように準の苦痛の叫びが情報処理室に響いた。

神条奈々は明かりの消えた司令室で呆然と立ち尽くしていた。室内にはバッテリー運転に切り替わった端末が漏らす光と不気味なほどの静寂が満ちている。

中枢システムが攻撃を受ける直前、対ESPエネルギーリーダーが反応を示した。そして、その反応した場所は亡霊対策室の本部が位置する山中、つまりここだった。かろうじて避難警報を出すことには成功した直後、全システムがダウンした。この大規模システム障害は亡霊の攻撃と見て間違いない。

「司令、やはり電子ロックがかかったままです。私たちはここに閉

じ込められました」

扉を調べていた加奈が戻ってきて、緊張した様子で報告する。奈々は頷いて、広い司令室を見渡した。メインモニタは電力供給を断たれて沈黙し、バッテリー駆動で生き残った端末の前には不安そうな電子・解析オペレーター達が奈々の指示を待ち続けている。

「……待つしかないわね」

そう言って奈々は司令席に腰をおろした。あまり動じていない奈々の様子にオペレーター達が安心したような様子を見せる。

奈々は携帯を取り出し、電波状況を確認した。何らかの妨害を受けているのか、ディスプレイには圏外の文字が浮かんでいる。

目を瞑り、奈々は今後のことについて考えを巡らせた。過去の行動を考えれば亡霊の狙いは間違いなく桜井優だ。高梨市の戦いで佐藤詩織、黒木舞、白崎凜、篠原華の四人から桜井優がゲル状の亡霊に取り込まれそうになったと報告がある。それ以前の戦いでも桜井優を意識した動きが見られた。亡霊が何を考えているかは分からないが、今回も桜井優に的を絞った戦術であると考えて良い。そう仮定すれば中枢システムを攻撃したのは桜井優を他と分断させる為と推測できる。

しかし何故、亡霊は桜井優に固執するのだろうか。桜井優が入隊する前は白崎凜と姫野雪が特殊戦術中隊の中で特に飛び抜けていたが亡霊に狙われるようなことはなかった。つまり、亡霊が桜井優に固執するのは単純に脅威だからという理由とは考えづらい。となると他とは決定的に違う点、唯一の男であることに拘っている可能性がある。桜井優が男性でありながら唯一ESP能力に目覚めた原因はいまだに良く分かっていない。亡霊がそれを特異点として意識せざるを得ない特性がESPエネルギーにはあるのだろうか。

もしくは、と奈々はふとある考えを思いついた。もしかすれば、亡霊は全てがメスなのかもしれない。人間であるESP能力者がそうである以上、亡霊にもESP能力の発現に性差があってもおかしくはない。例えば、繁殖行為の為に男である優が必要だった？

そこまで考えて、奈々は身震いした。そしてすぐにその考えを破棄する。そもそも人間と亡霊では身体構造が大幅に違うのだ。繁殖の為に人間のオスを利用するなどあり得ない。そもそも、亡霊がそうした行為をするかさえ疑問だ。亡霊の繁殖のメカニズムはまだ分かっていないが、少なくとも生殖器官は発見されていない。ESPエネルギーの塊であることから、白流島に漂うESPエネルギーを元に製造されるという考え方が一般的だ。そもそも、亡霊がそうした繁殖行為の為に優を必要としているのならば、これまでの亡霊が一体どうやって生まれたのが疑問になる。

そこまで考えた時、司令室の空気が突然ざわめきたった。電子オペレーターの悲鳴。

「司令！ 司令室のネットワーク内に何かが侵入しています！」

馬鹿な。そう考えると同時に再び電子オペレーターが叫ぶ。

「司令……こんなの、人間には不可能なんです」

途端、全ての電子・解析オペレーターが端末から飛びのいた。逆に奈々は事実を確認する為に端末の前に走る。ディスプレイ上には通信モニタ用のソフトウェアが示す異常なデータのやり取りが映っていた。

「人間ではない。なら、亡霊ね？」

電子オペレーターに視線を向けると、彼女は無言で何度も頷いた。すぐに拳銃を取り出して、目の前のディスプレイに向かって躊躇なく引き金を引く。突然の銃声に誰かが悲鳴をあげた。それに構わず、全ての銃弾を端末に叩きこむ。

「司令！」

後ろから加奈の悲鳴。同時に奈々は背中から強い衝撃を受けて目の前のデスクに叩きつけられた。全身に走る苦痛に顔を歪めて振り返る。背後に並んでいた端末の一つから何かが空气中に溢れ出し始めていた。慌てて身を起こし装填する。その間に溢れ出した何かは亡霊の姿を形どり、奈々の元へ一歩踏み出した。

突然現れた亡霊の姿に悲鳴がこだまする。亡霊に戦闘員・非戦闘

員の区別は存在しない。この場にいる全員がそれを正しく理解していた為、亡霊から少しでも距離を取ろうと全員が壁際に集まった。混乱の中、奈々と加奈だけが亡霊に向き合うように銃を構える。

「司令、ここは私にお任せください」

加奈が震える手で亡霊に向けた拳銃の引き金を引いた。銃声と同時に銃弾が亡霊に吸い込まれていくが、亡霊の存在を無視するように貫通し、そのまま背後の端末から火花が散る。亡霊に物理的な攻撃は意味を成さない。それでも、奈々と加奈は拳銃を下ろそうとはしなかった。亡霊を睨みつけ、その注意を引きつけようとする。亡霊の注意を非戦闘員に向ける訳にはいかなかった。

亡霊が一步踏み出す。奈々と加奈はゆっくりと後ずさった。

「近くで見るとワイルドですね。」

加奈が軽口を叩く。しかし、その声は震えていた。

「ええ。立派な羽もあつて本当にゴキブリみたい」

また亡霊が一步踏み出す。奈々と加奈は慎重に二歩下がった。耐えかねて、再び引き金を引く。しかし、それは予想通り亡霊に当たることなく、亡霊の背後に並ぶ司令室の強固な壁に傷をつけるだけとなった。

亡霊が巨大な口を開け、威嚇するように翼を大きく広げる。奈々は竦みそうになる足に力を込め、必死にその場に留まった。亡霊との距離は僅か二メートル。長年亡霊対策室の司令官をやっている、この至近距離で亡霊と対峙した経験はなかった。

「来ます」

加奈が呟く。その直後、亡霊が動いた。地を蹴り、その容姿から想像できないほど機敏な動きで突っ込んでくる。亡霊の進行方向には加奈の姿。

「くっ！」

加奈は咄嗟に身を床に投げて、亡霊の突進を辛うじて回避した。態勢を崩した加奈に対して再び亡霊が追撃を加えようとする。奈々は拳銃を放り投げて、亡霊に向かって渾身の足蹴りを放った。しか

し、それさえも亡霊の身体をすり抜けて、虚しく空を切る。亡霊が疎ましそうに振り返り、奈々に向かって腕を振り回した。避ける事も叶わず、まともに直撃を受けて奈々の身体が大きく後ろに吹き飛ぶ。

「司令！」

加奈の悲鳴。受け身を取る余裕もなく床に叩きつけられた奈々は苦悶の表情を浮かべて亡霊を睨みつけた。向こうの攻撃だけ一方的に当たるなど、一体どういう原理なんだ、と内心毒づいて、フラフラと立ち上がる。防衛大時代、体術では男にも劣りを見せたことはなかったのに、それが亡霊相手では全く意味を成さない。息を荒げ、回避準備態勢をとる。今は時間を稼ぐしかなかった。

亡霊の姿が再び揺らめく。直後、咆哮とともに突進が始まった。今度は奈々の方へ真つすぐ突っ込んでくる。全身の筋肉が悲鳴をあげるのを無視して、奈々は力の限り大きく横に飛び込んだ。さつきまで奈々のいたところに亡霊の鋭利な爪が振り下ろされる。そして、奈々が立ち上がる間もなく、亡霊が奈々を見下ろして口を大きく開いた。そこからエネルギーの奔流が進る。不可視の衝撃を受け、奈々は大きく床を転がった。

ESPエネルギーをまともに受けた衝撃で意識が朦朧とした。霞む視界の向こうから亡霊がゆっくりと近づいてくる。加奈の叫ぶ声。苦痛に呻きながら、必死に立ち上がろうと腕に力を込める。しかし、激しい眩暈に襲われて奈々は床に突っ伏した。霞む視界の先で、亡霊が徐々に距離を詰めてくる。奈々は忌々しそうにそれを睨みつけた。そして、静かに目を瞑る。酷く疲れていた。ここまでか、と諦めかけた時、爆音が響いた。驚いて顔だけを起こす。司令室の閉ざされた扉が粉々に吹き飛んでいた。そして、そこから光り輝く翼を持った一人の少年が亡霊目指して飛び込んでくる。奈々は信じられない思いでそれを見つめた。闇に包まれていた司令室に翡翠の光が満ち溢れる。そして、少年、桜井優の放った一際光り輝くESPエネルギーの塊が奈々のすぐ近くまで迫っていた亡霊の身体を跡形も

なく吹き飛ばした。

「神条司令！ 大丈夫ですか！」

そう言って、駆け寄ってくる優を奈々は思わず抱きしめた。

「し、神条司令？」

優が上ずった声をあげる。奈々は抱擁を解こうとはせず、更に背中に回した腕に力を込めた。

「良かった。無事だったのね」

「え？ はい。怪我とかはしてないです」

困惑した様子の優に笑みをもらし、奈々は優を放してゆっくりと立ち上がった。

「亡霊は本部ネットワーク内の何かを探している。情報部に向かいましょう」

3章 31話 鎖の少女(18)

優と奈々に加奈、それに電子・解析オペレーター達一行は暗い廊下を慎重に進んだ。明かりは優の灯した光球しかない為、後方を照らしきれず、自然と進む速度が遅くなった。何度も後ろを振り返り、亡霊に囲まれていないか確認しながら地道に長い廊下を歩いていく。「優君、他の子たちは？」

「寮棟にいます。全員の無事を確認してからこちらと合流する予定です」

奈々の質問に警戒を怠ることなく答える。加奈が驚いたような声をあげた。

「一人でここまで？」

「はい」

「怪我人は？」

奈々が不安そうに言う。優は僅かに疲労の色が混じった笑みを浮かべ、全員無事です、と返した。奈々が安心した表情を見せる。そして、ふと時計に目を落した。

「そろそろ異常に気付いた陸自が応援に駆けつけてくれるはず」

奈々の言葉で、以前に陸上自衛軍の訓練施設を利用したことを思い出す。陸上自衛軍の駐屯地と亡霊対策室の本部は車で数時間ほどの距離しか離れていない。陸上自衛軍が来ても亡霊と戦える訳ではないが、セキリテイゲートが全てロツクされ、あらゆる電力供給が停止している以上、外部からそれを破壊できる戦力が到着するのはありがたかった。

情報部を中心とした施設があるノースエリアに繋がるセキリテイゲートの前に辿りつき、全員が立ち止まる。

「今更なんですが、これ壊しちゃっても大丈夫でしょうか？」

優の不安そうな言葉に奈々は笑って頷いた。

「ええ。そういうことは気にしなくていいわよ。思い切りやっちゃ

つて」

「はい」

一步踏み出し、セキュリティゲートに向かって手をかざす。周囲の空気がうねり、手のひらに光の粒子が収束し始める。そして、膨張しきつたエネルギーの塊をゲートに向かって放出する。強風が吹き荒れ、セキュリティゲートがあつという間に吹き飛ばす。後に残った瓦礫の山を見て、加奈が小さく感嘆の言葉を呟いた。

「ちよつとした爆弾みたいですね」

「それも、より汎用的な」

奈々が同意の言葉を返し、前方の床に散らばった瓦礫を乗り越えてノースエリアに踏み込む。全員がその後続いた。

「サーバ室は……こつちね」

二つに分かれた通路のうち、奈々は迷わず一つを選択し、そちらに進んだ。その時、廊下の天井に備え付けられた蛍光灯が突然チカチカと瞬いた。一斉に全員が立ち止まる。数秒後、全ての明かりが正常に点灯した。廊下がいつもの明るさを取り戻し、暗闇に慣れていた優は思わず目を細めた。その横で奈々が辺りを見渡しながら呟く。

「システムが復旧した……？」

途端、廊下に並んでいた扉が次々と横に開き、閉じ込められていた人たちが出てくる。電力の回復とともにフェールセーフ処理が働き、全ての電子ロックが外れたのだ。情報部という特性からか、全員が廊下に出た途端、障害中の情報について話し合い始め、すぐに数人がサーバ室の方に向かって走り始めた。その様子を見る限り、今までのシステム障害をただの停電と思いきみ、まだ亡霊の襲撃に気付いていない人が大半のようだった。奈々の存在に気付いた情報部員の数人が顔を青ざめて、先程のシステム障害の原因が不明であり、これから調査する予定である事を長々と伝えようとしたが、奈々はすぐにそれを止め、混乱が起きないように今は待機するように命じた。

「……司令室に戻りましょう。とりあえず、被害状況を確認しないと。優君、一緒に来て」

「はい」

歩いてきた道を急いで戻り始める。通りすがりに状況の説明を求めてくる人々を上手く避けながら、中枢エリアまで戻った時、正面から明日香が走ってくるのが見えた。

「奈々！ 何が起こっているの？」

「亡霊の襲撃があった」

周りに聞こえないように奈々がそう返す。明日香は狼狽した様子で質問を重ねた。

「亡霊？ 本体内に？ 一体どこから？」

「わからないわ。とりあえずシステムは復旧した。これから混乱を鎮める為に放送を流すつもりよ」

明日香は混乱した様子で奈々から優に視線を移した。

「怪我はない？」

「はい。僕以外の人も、戦闘で被害を受けた人はいないです」

「そう。なら良いわ。奈々、でも、これは一体……」

明日香が混乱したよう言葉を濁す。何から話せばいいのか分からないのだろう。奈々は足を止めず、早足で廊下を進みながら淡々と命令を出した。

「明日香、あなたはすぐに持ち場に戻りなさい。被害の全容がまだ掴み切れていない。他に負傷者がいる可能性がある」

「わかった。すぐに外部の医療チームに連絡を。ここの設備だけじゃどうにもならないかもしれないわ」

それだけ言うと、明日香は優達とは反対の方へ走っていった。それを一瞥してから、奈々は更に足を速めた。

司令室に着くと、奈々は真つすぐにESPエネルギー探知能力を持つコンソールの前に向かった。コンソールを操作して、範囲を狭めて最大まで精度を高めたサーチを本部に対して行う。反応は百九十二。特殊戦術中隊員の人数分しか見当たらない。特殊戦術中隊か

ら死者が出ていなければ、既に亡霊は本部内にいないことになる。高梨市の戦いが脳裏によみがえった。あの時も亡霊は何の前触れもなく撤退を開始した。では、今回も　？

奈々はいくつかの可能性を検討し、最良と思われる手段をとった。ヘッドセットを手にして、コンソールを叩く。

『各員に告ぐ。大規模システム障害の発生により、本部全体の安全が保証できなくなっている。速やかに規定通りの避難手順を踏み、本部外へ移動することを命ずる。また、システムが完全に復旧するまで本部に入る事を禁止する。復旧活動にはE-2タスクフォースが当たる。他の者は情報部所属であっても規定通りの避難手順に従い、速やかに本部外へ移動すること。迅速な避難を行う為、何らかの混乱が起きうると予想される行動は許可しない。繰り返す。何らかの混乱が起きうると予想される行動は許可しない。また、特殊戦術中隊の所属構成員は全員司令室前に集まり、別途指示を待て』

奈々の命令が本部中のスピーカーから一斉に響きわたる。とりあえず亡霊の残存勢力の有無がはっきりするまでは非戦闘員を早く外に逃がさなければならぬ。システムが再びいつダウンしてもおかしくないのだ。

「E-2タスクフォースって何ですか？」

少し離れたところで奈々の行動を見守っていた優が疑問を投げる。奈々は顔だけ振り向いて、笑みを浮かべた。

「今作ったタスクフォースよ。誰も組織の全容を掴み切れていないからバレル心配もない」
「なるほど」

復旧作業と言う名目上の避難である為、情報部の人が残ってしまった可能性を完全に潰したかったのだろう。さて、と奈々が立ち上がる。

「特殊戦術中隊員以外は全て避難して。まだ脅威が残っていないとは言いきれない」

その言葉に、数十名の電子・解析オペレーターが司令室から出て

いく。司令室には奈々と加奈、それに優だけが取り残された。何かを考え込むような素振りを見せていた奈々が加奈に視線を向ける。

「亡霊は完全に撤退したと思う？」

「はい。中枢システムを抑えつけていたのは間違いなく亡霊です。

そうした論理支配は亡霊の侵入行動を補助するものであり、論理支配が解けた以上、亡霊は当初の目的を達成し、既に撤退したものであると思います」

「私もそう考えてる。では、中枢システムを抑えつけた手段は？」

「わかりません。ただ一つ言えるのは、電磁的手段によるものではないということです。ESPエネルギーを用いた侵入の線が濃い為、再発防止は難しいでしょう」

「……ESPの万能性は想像以上に厄介ね」

奈々が溜め息をつく。二人のやり取りを聞いていた優は訳が分からず、首を傾げた。

「論理支配とか電磁手段って何の事ですか？」

「本部ネットワーク内に亡霊が入り込んでいたの。これは特殊戦術中隊の処理範囲を大きく逸脱している。優君は何も心配しなくて大丈夫よ」

「ネットワークに、ですか……」

奈々の言葉に優は更に首を傾げた。いまいち奈々の言った意味を正確に理解できなかつたが、攻撃の種類が変わってきているということだろうと見当をつけて納得した。

廊下の方から複数の足音。放送を聞いて、特殊戦術中隊員が集まってきたのだろう。そして、廊下に繋がる扉があったところ。優が破壊した為に、今は不自然な穴が開いている。から特殊戦術中隊の面々が顔を覗かせた。先頭に各小隊長が立っている。司令室内にいる優の姿を確認して、華と詩織がはつきりと安堵の表情を浮かべた。そして、詩織に手を繋がれていた響が優のもとへ駆け寄ってくる。響が無事だったことに安心し、優しく抱きしめた。奈々はチラリとその様子を見てから、廊下で待機している他の中隊員に目を

向けた。

「入ってきて。全員揃ってる？」

奈々の言葉に、約二百名近い中隊員が司令室に入ってくる。司令室はかなり広い作りになっているが、流石に全員は入りきれない為、各小隊長、分隊長までが司令室の中に入った。廊下は混雑を極め、完璧な点呼は不可能だと判断し、奈々はすぐに説明に入った。

「率直に言いましょう。約二時間前、本部の中核システムは亡霊の攻撃を受けてダウンした」

僅かなどよめき。

「しかも、物理的な攻撃ではない。論理的な、つまり情報的な攻撃の可能性が高い。亡霊はネットワークに直接アクセスする力を持っているということ。復旧と同時にサーチをかけた結果、現時点で亡霊の反応は全て消えている。既に何らかの展開目的を達成し、撤退したと思われる。ただ、予断は許さない状況であることは変わらず、これより各分隊ごとに本部内を見回り、安全の確保に努める。安全が確保でき次第、システムの復旧作業、詳細な被害状況の確認に移る」

亡霊は既に撤退した可能性が高い、という奈々の言葉に、場の空気がはつきりと分かるほど柔らかくなった。突然の停電に始まり、常に情報を遮断された状態が続いていた為、緊張の糸が切れたのだろう。

「これより、各小隊の担当エリアを説明する。その後、各小隊ごとに分隊単位で分かれて安全の確保に努めるように。第一小隊、中枢エリア。第二小隊、ノースエリア、第三小隊」

奈々が淡々と各小隊の担当エリアを決めていく。全ての割り当てが終わった時、ずっと奈々に話しかけるタイミングを見計らっていた優は響を抱えて奈々の元に駆け寄った。

「神条司令、ご報告があります」

「どうしたの？」

「響ちゃんはどうやらESP能力者のようなんです」

奈々はまるでそれを予想していたかのように驚く様子を一切見せず、僅かに目を細めた。

「それは確か？」

「はい。先程亡霊に襲われた時」

その時、廊下から男の叫ぶ声が聞こえた。何かを怒鳴っている様子で、段々と司令室の方に近づいてくるのがわかった。誰かが廊下を塞いでいた大勢の中隊員に立ち退くよう叫んでいる。奈々は怪訝な顔をして、優に待機を命じてから廊下の方に出ていった。優と同じく司令室内で待機していた華、詩織は不安そうな表情を見せ、凜や雪は動じる様子なく、廊下の方を静かに眺めていた。

「これは、中将自ら来ていただけなのは……」

廊下から奈々の声。それに唸るような男の声が答える。

「挨拶は良い。それより、ここを通せ」

「亡霊は既に撤退したと見られ、システムも復旧し、非戦闘員は既に本部外へ避難して」

「通せ、といった。准将、私は報告など求めていない」

「では、銃器を下ろしてください。中隊員に不必要な不安を抱かせています」

奈々の抗議の声。

「それは不可能だ。代わりにここにいる中隊員を全員移動させる」

「不可能です。本部内に亡霊が残っている可能性があり、これより安全の確保を」

「重要な案件だ。安全の確保とやらは後回しにする」

その声と同時に、巨大な穴の開いた扉から上田中将が姿を現した。その後ろには部下らしい数十人の屈強な男たち。全員が小銃を両手に抱え、異様な空気を放っている。上田中将の横には深刻な様子の奈々の姿。司令室内に入ってきた上田中将は響を抱きあげた優の姿を認めると、真っすぐそちらに向かってきた。

「久しぶりだね。突然で悪いんだが、その娘をこちらに渡して欲しい」

その娘、と言った時に上田中将は響に視線を向けた。先程の奈々に接する態度とは別人であるかのような振る舞い。

優は響をしっかりと抱きなおし、上田中将を睨みつけた。

「渡す？ 何故ですか？」

「その娘は無登録のESP能力者だ。約二時間前、戦略情報局のESP探知手段が反応をみせ、発覚した。君も知っている通り、ESP能力者はその波形を登録しなければならない。その手続きを遂行する為、我々が戦略情報局までの護送を任されたのだ」

優は疑いの目を上田中将に向けた。

「中将自らがたった一人のESP能力者の護送に、ですか？」

「ああ。ESP能力者は国の宝だからね」

上田中将はそう言って和やかに笑った。そして響を抱えた優の元へ一歩踏み出す。その時、奈々の底冷えするような声が横から響いた。

「中将、貴方はSIAと密接な関係にあるのですか？」

上田中将の歩みが止まる。上田中将は笑いを止め、奈々に視線を移した。

「准将、それはどういう意味だ？」

「そのままの意味です。戦略情報局が何をやっているのか、未だ存じていないのですか？」

上田中将は感情の伴わない目でじつと奈々を見つめ、僅かに首を傾げた。その動きが奇妙なほど機械染みていて、優は寒気を感じた。「言わんとしている事がよくわからない。准将は何かを勘違いしておられるのではないかな。戦略情報局の意向など私には関係ない。私はただ無登録のESP能力者を引き取りに来ただけだ」

奈々が一歩後ずさる。奈々の瞳には強い警戒の色が宿っていた。

「なら何故、その響ちゃんが無登録のESP能力者だと分かったのですか。無登録なのだから、波形に対応する個人情報がない。顔も、名前もわからない。でも、中将は真っ先に響ちゃんをESP能力者だと判断しました。中将、あなたは事前に響ちゃんの情報を所

持っていたのではないですか」

上田中将は何も言わない。ただ、無表情に奈々を見つめるだけ。

奈々は一瞬躊躇うような素振りを見せた後、たたみかけるように言葉を続けた。

「中将、響ちゃんのデータをどこから入手したのですか？ S I A から受け取ったとしたか、考えられません」

「准将、言っている事が矛盾している。その娘は無登録の E S P 能力者だ。何故、S I A が娘のデータを所持しているなどと突飛な考えをするのか、私には理解できません？」

上田中将は諭すように言う。しかし、奈々は納得した様子を見せるどころか、静かに首を振った。

「S I A が元々、響ちゃんに関わっていたからです。まさか中将も関与していたのですか？ 戦略情報局だけではなかった。まさか、他の陸自も？ あるいは、背広組が？」

奈々の声は震えていた。上田中将は奈々の言葉を受けても表情を変えず、静かに優から奈々に視線を移した。抑揚のない、低い声が響く。

「それも知っていたのか」

「六年前から総基ネットの不可解な改竄跡が連続して残っていました。正当な死亡届が出ていない者が次々と死亡扱いになっています。不自然なナノマシンの流通もある」

奈々の言葉を聞いて、優の中で全てが繋がった。

響は生きているにも関わらず総基ネット上では死者として扱われていた。

響は何らかの監禁状態にあった可能性が高い、と明日香が言っていた。

響に埋め込まれていた発信器のコード末尾に備え付けられたチエックデバイスは政府関係機関のものである、と準が断定していた。「……E S P 能力者を、人工的に創りだそうとしたんですか？ 響ちゃんの置かれていた環境は、E S P 能力者の発現前の傾向そのも

のです」

優の言葉に、奈々が微かに驚いた表情を浮かべ、振り返る。その様子を見る限り、明日香は奈々に相談せず、独断で優に響の事を話したらしかった。

奈々が息を深く吸い込み、気を落ちつかせるようにゆっくりと言葉を吐き出す。

「中将、どれだけ綺麗な言葉で取り繕うと、これは史上稀に見る最悪の人体実験です。極めて非人道的な、許されざるものです」

そこではじめて上田中将が不快感らしい表情を浮かべた。唸るような低い声が響く。

「勘違いするな。私は実験に関与していない。これを主導したのは戦略情報局だ。私は後始末を頼まれたに過ぎん」

響が腕の中で小さく震えた。大丈夫、と耳元で囁く。

「私も戦略情報局のやり方は好きではない。だが、それとこれとは話が別だ。桜井、その娘を渡せ」

「……他の子どもは？ 発信機には対象を一意に絞る主キーが与えられていたと聞きました。響ちゃん以外にも実験対象がいたはずですよ」

「そうだ。全部で四十三人いたと聞く。だが、全員が死んだ。実験による死ではなく、その娘の放ったESPエネルギーに呑みこまれたのだ。その娘に宿ったESP能力は不幸なことに強力すぎた。戦略情報局の用意したコントロール方法のキャパシティを大きく上回り、研究施設一つがたった一人の小娘によって壊滅し、何十人もの関係者が死んだ。小僧、お前も子どもではない。その娘を放っておくことができないのは分かっているはずだ。さあ、渡せ」

上田中将が繰り返す『渡せ』という言葉を頑なに無視して、優は上田中将の鋭い視線を真っ向から受け止め、睨み返した。戦略情報局。それが、響を長年に渡って縛りつけていた鎖の正体なのだろう。戦略情報局の人間が何人も亡くなったと聞いても、それに対して優は特に何の感慨も抱かなかった。

「……中将、実験者に倫理教育を施したんですか？ していませんか？ たはずです。響ちゃんの言語獲得能力は特別劣っている訳でもないのに、簡単なひらがなさえ読むことができませんでした。社会性を獲得できなかったESP能力者を一体どうやってコントロールするつもりだったんですか？」

「あれはESP能力の人工的な発現が可能か調べる実験であり、実用的な兵器を開発するためのものではなかったのだ。教育プログラムは不完全で、実用に耐えなかった」

兵器、と何の躊躇いもなく上田中将が表現したことに強い憤怒を感じたが、そこに異論を唱えようとは思わなかった。恐らく、上田中将はESP能力者だけでなく、軍人全てを兵器としてしか見ていないのだ。そして中将自身さえも。優と響を見下ろす感情の籠らぬ目に、一切の迷いはなかった。準の言葉を思い出す。

あの言葉な、続きがあるんだよ。” 汝が深淵を覗く時、深淵もまた汝を覗くであろう” ってな。

これは一種の伝染病なんだ。根源を絶たないと意味がない。刹那的な怒りに目を逸らされるな。感染者は敵じゃない。

「小僧、こちらに渡せ。その娘に不必要な苦痛は一切与えない事を約束しよう。我々が始めた事だ。責任をもって処分する。お前が抱え込む必要はない」

伝染病、と言った準の表現が今は酷く的を得ている気がした。根源を断たないと意味がない、という意味がようやくわかった気がする。

皆、そうだった。ESP能力者不足を解消する為の実験対象に選ばれた響。亡霊の影響で防衛大を中退した橋本恵。僅か十四歳にして、自身を犠牲にESP能力者を自然に作り出そうとした望月麗。亡霊と同じESPエネルギーを保持してただけで迫害にあった広瀬理沙。全ては亡霊が根源であって、それらによって誘発された問題を解決しても意味がない。桜井優はその時はじめて、自分にそれを補う力がある事を意識した。

「小僧、他に手はない。選択肢はないのだ」

一つの決意を胸に、優ははつきりと答えた。

「嫌です。絶対に、響ちゃんは渡しません」

「選択肢はないと言った筈だ。その娘は人を殺めた。刑事責任能力がないとしても、司法の裁きを受けなければならぬ。年齢から考えれば重い罰は受けずに、何らかの保護処分が下されるはずだ。酷い目には合わない」

「司法の裁き、ですか。なら、響ちゃんが問題を起こした経緯も全て表沙汰になるといふことですか？ 戦略情報局の動きの全てが表に？ 信じられません。なら、戦略情報局の誰かが責任を取った後に、響ちゃんの身柄を引き渡します」

優の言葉に、上田中将の顔が小さく歪んだ。そして、右手が静かに挙げられる。それを合図に、後ろに控えていた陸上自衛軍の男たちが小銃を構え、前に出た。

「繰り返す。渡せ」

「嫌です。僕を、殺しますか？」

優はそう言っ、微笑んだ。

「……大きな勘違いをしているようだ。小僧、お前は対亡霊戦略における貴重な戦力だ。だが、それも戦術的なレベルでしかない。

より大局的な事柄に関して、お前の影響力は皆無だ。私は、お前が社会秩序の障害となると判断すれば、躊躇なく処分するだろう。交渉材料には成りえない」

「交渉材料ではありません。物理的な障害として、の話です。僕から、響ちゃんを奪い取れると本気で思っているんですか？」

優の放った言葉に、上田中将は黙り込んだ。そして、唸るように優の言葉を反芻する。

「物理的な障害、か。ただの超能力者が火器を装備した軍人相手に勝てると思っているのか。この距離において、銃に勝る攻撃方法はあるまい」

上田中将の右腕が再び拳がった。同時に、小銃を構える男たちが

一斉にセーフティを外す。

場に沈黙が落ちる。上田中将は冷徹な目で優と響をじっと見下ろしたまま動かない。上田中将に折れる気は一切ないのだ、と気づかされる。

司令官、副官といったシステム化された力よりも、君は実際的な力を宿している。より普遍的であり、より支配的であると言っている。いい。

人間が相手である限り、君は負けない。

明日香の言葉を思い出し、弱気になりそうな自分の心を鼓舞する。上田中将の態度には、優の立場を酷く弱いものとして錯覚させる力があった。そして、それは一部に於いて事実でもあった。訓練された人間に、ESP能力者では勝つ事ができない。ESP能力は、自動小銃に勝る攻撃方法ではない。

それに、と優は思った。この場を武力で抑えても、それで終わるわけではない。長期的に見れば、この小さな抵抗は意味を成さないだろう。だが、それは上田中将においても同じだ。この場を武力で抑えたとしても、後々大きな禍根を残すことになる。結局、お互いに動くことはできないのだ。故に、相手に譲歩させなければならぬ。その為には、自分が退く気がないことを態度ではっきりと示す必要があった。そして上田中将はそれを理解し、実行している。微動だにせず、ただ優たちを見下ろし、屈服するのを待っている。その横には小銃を構えた男たち。状況を優たちに不利なものとして認識させようとしているのだ。

この実験は閉鎖的環境内の権力に対する強い服従を示唆している。

そしてもう一つは与えられた役割に対して忠実に従おうとする事。

再び、明日香の言葉が頭をよぎる。

つまり、アドミニストレーターに残された攻撃方法は心理戦しかない。

上田中将には、他に手が残されていないのだ、と気づく。優は気持ちが悪くなるのを感じた。そして、その時、司令室の隅でじつと場を観察していた人影が動いた。

「桜井中隊長、ご指示を」

第六小隊長が白崎凜が優の前に立ち、ESPエネルギーを込めた右腕を構えた。優は驚いて、凜に視線をやった。凜が一瞬こちらに目をやり、言葉を続ける。

「私は貴方に従います。中隊に指示を」

その言葉に、凜と同じく司令室の隅で場の心配そうに眺めていた詩織が動いた。凜と同じように優の前へ進み出て、ESPエネルギーをこめた右腕を上田中将に向かって構える。

「桜井さん、ご命令をお願いします」

「……ありがとうございます」

自然と感謝の言葉が漏れる。優の前に立った凜が上田中将に向き直り、冷やかな視線を送る。

「ただの人間が、ESP能力者に勝てるでも本気で思っているのか」

「では、同じESP能力者に対してはどうか」

上田中将はそう言って、隅に固まっていた各小隊長たちに目を向けた。

「篠原、桜井を拘束しろ。命令だ」

その言葉に、華の肩が小さく揺れる。そして、華はゆっくりと上田中将の前に進み出た。

「華ちゃん……？」

ESPエネルギーの込められた華の手が、こちらに向かって上げるのを見て、優は呆然と呟いた。

3章 32話 篠原華（5）

篠原華の生まれた家庭には罵声が絶えなかった。神経質な父とだらしのない母は毎日のように喧嘩を繰り返していた。二人はお互いを憎しみ合い、まるで相手の人格を破壊しようとするかのようにお互いの難点を誇張し、あるいはでっち上げて、持てるエネルギーの全てを攻撃に注ぎ込んだ。そんな状況で、華はいつも両親の仲を取り繕おうと幼いながらに必死だった。

華が成長するにつれて、その矛先は華にも向けられるようになってきた。何かがある度に、母はストレスの捌け口として、華の起こした小さなミスに対して異常に激怒した。そのうち母の行動はエスカレートしていき、華を叱りつける口実を作り出そうと、家事を華に押し付け始めた。それに対して、華は素直に従い、認められようとした。華のそんな様子に母は気を良くし、小学三年生になる頃には家事の殆んどを押し付けられ、躰という大義名分の下に使用人のように扱われた。慣れない料理を少しでも焦がしたり、掃除し忘れた箇所があれば、母は徹底的に華を責めた。母は華を完璧な管理下におこうと、まだ幼い華に対して過剰な罰則を施し、自主性を封じ込めた。母にとって、華は娘ではなく単なる便利屋、もしくはストレスの捌け口に過ぎなかったのだ。

次第に華は与えられた仕事・立場・責任に対して、絶対的な従順を見せるようになった。与えられた責任を果たせば、母は何も言わず、それだけで認められた気がした。華には、それしか母に対する対抗手段が存在しなかった。

母は、段々と華を叱る口実を失っていった。この時になると、だらしのない母の代わりに華が全ての家事を完璧にこなしていた為、喧嘩の原因だった家事の放置はなくなり、父が母と喧嘩することはなくなった。父は家事をやっているのが誰か、には固執しなかった。母が怠け、華が忙しく働いている姿を見ても何も言わなかった。父

にとつても、華は使用人に過ぎなかった。それでも、華は構わなかった。自分が与えられた仕事をこなせば、全てが上手くいく。華は、それ以外の問題解決手段を知らなかった。

華の従順性は家庭外でも発揮された。従順であれば、大抵の厄介事は回避できた。それは華にとつて最も現実的で、ストレートな問題解決手段となった。幼い頃に刻まれた、責任を放棄した時の母の徹底的な心理的抑圧。そして後に確立された合理的な問題解決手段としての従順さが篠原華という人格を形作っていった。

特殊戦術中隊に入隊後、そうした性質は華の存在を思わぬ形で周りに印象付けた。いくつかの危機的な場面で、華は自身の安全よりも他の安全を優先し、周囲からの信頼を得た。華のそうした、自己犠牲的な、与えられた任務への忠実さは特殊戦術中隊の中でも目立ち、周囲の信頼も相まって、第一小隊長に抜擢される事となる。白崎凜のようにESP能力に特別恵まれた訳でも、黒木舞や進藤咲のようにある戦術に特化した訳でもなく、その性格自体が華を上まで押し上げた。

故に、これまで篠原華は自らの従順性を問題視するようなことはなかった。それは優れた問題解決手段であり、それが周囲に認められる唯一の手段だった。しかし、目の前に広がる光景に、華は初めて恐怖を感じた。

「篠原、桜井を拘束しろ」

上田中将の放った言葉は、華が最も望まない問題解決方法としての命令だった。

手が震えた。

足が竦んだ。

息苦しくなり、世界が色を失う。

それでも、華は与えられた命令に逆らうことなく、両手にESPエネルギーを集め、それを数メートル先にいる桜井優に向けた。優の顔を直視できず、深く目を瞑る。

「華ちゃん……？」

優の言葉に、胸が締め付けられるかのような苦痛を受ける。華は震える手を必死で抑えつけて、両手にESPエネルギーを更に集中させた。

「篠原、何を考えている！」

凜の怒声。誰も動けない中、真っ先に動いた凜の声が、今は聞きたくなかった。

桜井優の歩む速度は、他の追隨を許さない。以前にそう考えた時、優の隣を歩くのは自分ではないだろう、と思った。そして多分、彼の横を歩くのは彼女だ。聖翔院の才女。全てに於いて、彼女は他を突き放している。

それでも、華は何かを信じていた。根拠のない信頼を優に託していた。もしかしたら、という希望的観測が常に頭の中にあっただ。しかし、このESPエネルギーを優に向かって放てば、そうした夢も全て消え去るだろう。

上田中将の命令に従っても、従わなくても、結果は華にとって良くないものとなる。そしてそれは奇しくも華の母が長年に渡って娘に行ってきた虐待行動と同様のものだった。そして、母は自分の命令に従わなかった場合において、命令に従った場合よりも辛い思いをする罰則を必ず与えた。そして母の命令に従った場合には、家庭内の不和が解消されるというプラスの現象が起こった。それは母が意図したものではない強化子だったが、そうした要素が組み合わせられて華の人格は母の意図通りに決定され、形作られてきた。華の身体には母の備え付けた強固な鎖が巻きついていていた。

上田中将の強烈な眼光が華を打ちぬき、命令の遂行を催促する。しかし、華はESPエネルギーを放出しようとはしなかった。この時、篠原華は生まれて初めて命令に逆らった。完全な反逆ではなくても、命令の遂行に躊躇するということは、華の人生においてこれまでに経験のないものだった。桜井優に嫌われるという結果は、華にとって大方想像できる上で最悪の結果であり、自らその引き金を引くことは、華にとって有り得ないことだった。

それでも、長年に渡って篠原華という人格を形成してきた行動指針、習慣、思考手段、あらゆるものが命令への反抗を許さなかった。篠原華の中で、いくつかの行動指針、願望、感情、論理思考が分裂を起こし、対立を生んだ。対立は膠着を生み、華は何も出来ず、ESPエネルギーが膨れ上がっていく両手を優に向けたまま立ちつくした。

「篠原、何を考えている！」

白崎凜は、目の前でESPエネルギーを練る篠原華に怒声を浴びせた。華は一瞬だけ肩を震わせたが、ESPエネルギーの収束する両手を下ろそうとはしなかった。

明らかに様子がおかしい。篠原華は桜井優に好意を寄せている筈だった。予想を超えた華の行動に、凜は上田中将を睨みつけた。

こいつは、と凜は思った。こいつは間違いなくただの軍人ではない。人をコントロールする術を心得ている。上田中将の優への命令の態度を思い出し、確信する。自分が優位にいることを示し、相手に心理的屈服を求めることに長けている。恐らくはそうした訓練を受けているのだろう。中将の後ろにいる小銃を構えた男たちもそうだ。この状況自体が、上田中将の攻撃となっている。

上田中将が大勢の人間を連れてきたのは、物理的な障害、護衛としての役割よりも多元的無知、責任分散、評価懸念を与える為のものだろう。上田中将はその三つの要素により桜井優以外のESP能力者を抑えようとしている。特別な知識、訓練が施されていない限り、人間の本能的な防衛機制を利用したこの攻撃に対抗する事は難しい。凜は状況拘束を破る為、その中でも拘束力の大きい評価懸念を吹き飛ばす為に率先して動いたまでは良かったが、結果は思うようにいかなかった。

チラりと横の佐藤詩織に目をやる。顔色が悪い。すぐに凜は詩織

が男性恐怖症であることを思い出した。上田中将、そして後ろに控える男たちの存在自体が、詩織への圧力となっている。

そして、一番の問題は他の小隊長たちだった。司令室の隅に集まる、他の三人の小隊長へ目をやる。

黒木舞。自分が動けば、篠原華に加え、佐藤詩織と黒木舞は最低でも動くだろうと考えていた。中隊長だけでなく、小隊長格四人を相手することは例え軍事教育を施された人間でも難しい。それで、この混乱は収束すると考えていた。

だが、実際は篠原華が敵に回り、黒木舞はじつと事態を静観している。そして予想通り、進藤咲は一切動く様子を見せない。一人だけ予想のつかなかった姫野雪も涼しい顔で事態を観察している。

「桜井、最後の警告だ。その娘を渡せ。そうすればお前たちの行いは全て不問にしてやる」

上田中将が余裕の笑みを浮かべ、そう言い放つ。その時、前方でESPエネルギーの込められた両腕をこちらに向けていた華の瞳が大きく揺れた。次いで、両腕に込められたESPエネルギーが不安定な光を放つ。様子がおかしい。

凜は咄嗟に優の方へ振り向いた。優の身体から、ESPエネルギーが溢れ出していた。薄く、弱いものではあったが、それが華に向かって真つすぐ放たれている。華に何らかの干渉を行っているのだと気づいて凜は目を見開いた。見た限り、ただの物理攻撃ではない。拘束攻撃でもない。凜の見知らぬ、ESPエネルギーの波が次々と溢れ出している。そして、優の目には強い意思の光が浮かんでいた。

華ちゃん。

不意に聞こえた優の声に、華は肩を震わせた。驚き、瞑っていた目を開けて、優を見る。真つすぐにこちらを見つめる優と目が合った。淀みのない、澄みきった目に吸い込まれるような錯覚に陥る。

聞こえる？

優の口は何の言葉も紡いではいなかった。しかし、華の頭にしっかりと優の音が響く。華は混乱して、ただ優の目を見つめ続けた。

華ちゃんは、どうしたい？

これは、幻聴だろうか。しかし、優の声は優しく、確かな現実感を伴っていて、何より酷く心地のいいものだった。

僕は、華ちゃんの全てを肯定するよ。だから、怖がらないで。華は、不意に泣きそうになった。これが幻聴でも、構わないと思った。現実を忘れ、この温かい言葉に身を任せたい、と願う。

華ちゃんは、どうしたい？

再び、優の声が先程の問いを繰り返す。華は首を振った。わからないよ、と心の底で答える。

じゃあ、どういう結果を望む？

誰も傷つかない結果を。

なら、僕に任せてくれないかな。できないよ。私は、命令に逆らえない。

どうして？

どうしても。

じゃあ、その命令に従いたい？

華は、その問いに答えられなかった。

もし、華ちゃんが命令に従いたくないなら、僕はそれを支援するよ。

ほんとう？

約束する。華ちゃんがそれを望むのならば。

私は あの手順に従いたくない。

華は一瞬躊躇った後、心の中で強くそう叫んだ。生まれて初めての、命令の明確な拒否。

桜井くん。だから、私の背中を、少しだけ押してください。

その直後、過去に繰り返されてきた母の罰則は訪れず、代わりに優の温かい音が響き渡った。

特殊戦術中隊長として、篠原華に命令します。望むのならば、僕についてきてください。

その時、長年に渡り華の身体に巻きついていた一つの冷たい鎖が音を立てて砕け散った。上田中将の与えた命令が、優の新たな命令に書き換えられる。それは問題解決方法としての従順としてはなく、篠原華の願望として待ち望んだ、心の拠り所に対する従順だった。

精神拘束が崩壊し、閉じた世界から、広大な世界へ解き放たれる。上田中将の命令を拒否した結果として望んだ結果を手に入れた華は、この時、本当の自由という意味を初めて知った。真の解放感に包まれ、華はESPエネルギーの籠っていた両腕を下ろした。エネルギーが空気中に霧散する。そして、華は優の元へ駆け寄った。響を抱えていた優に抱きつく。

「篠原、何をしている。桜井を拘束しろ。命令だ」

上田中将の怒声。その声に被さるように、耳元で優が囁いた。

「何もしなくていいよ。あんな命令に従わなくても、何も悪い事は起きないから大丈夫」

さつきまでの頭の中に響く声ではなく、耳元で小さく囁かれた言葉に華は顔を赤くしてコクリと頷いた。

「五人のESP能力者相手に、ただの人間が勝てると思うな」

凜が一步、前に出る。小銃が一斉に凜に向けられるが、凜はそれを一瞥しただけで、上田中将を睨みつけた。上田中将も動じる様子なく、凜を静かに見返す。

「一体どうするつもりだ。その娘は人を殺しのだぞ。何らかの処分を与えねば、收拾がつかない」

「何に対しての收拾？」

凜は間を置かず、そう返した。その言葉に上田中将が黙り込む。

「その人体実験は神条司令にも知らされていなかった。大多数の軍部がその事実を知らないはず。主導した戦略情報局の極一部しか知らないはずだ」

そこで初めて華はその事に気付かされた。人体実験があつたなど、戦略情報局が公表できる訳がない。つまり、社会的な制裁を与えなければ済まない、というのは戦略情報局が作り出したESP能力者の暴走を恐れた故の結果なのだろう。

凜を見下ろしていた上田中将が不意に手を挙げた。後ろで小銃を構えていた男たちが一斉に小銃を下ろす。

「逃亡したESP能力者は亡霊との交戦で死んだ。我々が感知した波形は、最後の交戦跡だった」

上田中将はそう言つて、奈々に目を向けた。

「准将、無登録のESP能力者を本部で匿つていたことについて、後日査問会が開かれるだろう。覚悟しておけ」

「はい」

奈々は、はつきりと頷いた。上田中将が背を向ける。それに呼応して、陸上自衛軍の男たちが一斉に司令室から廊下に出て行つた。

廊下が集まつていた中隊員たちが道を開ける。その様子を呆然と眺めながら、華は首を傾げた。

「え？ 退くの？ どういうこと？」

凜は手に込めていたESPエネルギーを霧散させ、華の疑問に答えた。

「戦略情報局と上田中将の立場は大きく違うということ。軍部は、一枚岩ではない。上田中将は元より、交渉の材料としてあの子を見ていた。一見戦略情報局に従っているように見えて、その実、自分の目的の為にしか動いていない」

優と華は顔を見合わせた。凜は優に対して小さく頭を下げ、第六小隊の固まつている廊下の一角へ向かつた。そのまま、何事もなく安全確保の為の探索命令を出し始める。華も自分の役割を思い出したのか、慌てて第一小隊の元へ走っていく。残された優は困つたように奈々の方へ目を向けた。奈々は何かを考え込んでいるようで、何も言わなかつた。周りが慌ただしく動き始める。復旧作業に向け、亡霊対策室は何事もなかつたかのように、あるいは先程の出来事を

忘れようとするかのように、いつもの活気を取り戻しはじめていた。

「中将、あれで本当に良かったのですか？」

亡霊対策室本部の廊下で、上田中将の一步後ろを歩いていた山中やまなか宏少佐ひろしが口を開いた。上田中将は振り向かず、前を見て足を進めたまま答える。

「私はS I Aのように完璧主義でも潔癖症でもない。ESP能力者の脱走責任が私にある訳でもない。構わん」

「しかし、S I Aはその説明に納得しません。中将への不信感が…」

「構わん。私には、それだけの後ろ盾があるのだ」

山中少佐が戸惑った顔を見せる。上田中将は薄笑いを浮かべ、言葉が続けた。

「元より、私はESP能力者を処理することに関して反対だったのだ。娘を戦略情報局に渡すつもりもなかった。あの小僧は想像以上に特殊戦術中隊への影響力を強めている。今のうちに恩を売っておく方が得策だ、と思ったのだが引き際を誤った。失態だ」

「失態、ですか」

「そうだ。優位性を見せてから退く予定だったのだが、結果的に白崎に邪魔をされた。あいつは、頭が切れる。やがて、あいつは桜井優を上へと押し上げていくだろう。我々のイデオロギーと、白崎のそれは反発しない。思いもよらない収穫だった。悪くない結果だ」

上田中将は遙か前方に見える壊れたセキュリティゲートを見据え、今後のことについて考えを巡らせた。

戦略情報局の策は潰えた。問題は、亡霊対策室だ。医療用ナノマシンの発注記録から、戦略情報局の動きがバレていたということは、同じくナノマシンを大量に発注した陸自にも同様の疑いがかかっているだろう。

しかし、と上田中将は思った。医療用ではないナノマシンについて、誰がその用途について推察できるだろうか。もう少しで、全てが変わる。そして、その時長く続いたこの闘争が終わりを迎えるのだ。

3章 33話 斎藤響

亡霊の襲撃から二日後、桜井優は医務室を訪れていた。ベッドで寝ていた患者、斎藤準が優の訪問に気付いて笑顔を見せる。

「よう」

「こんにちは。怪我、酷いんですか？」

「いや、ちよいと痺れが残っててな。数日経てば治るらしいから心配ない」

準が右腕をひらひらと振る。亡霊の攻撃を受けたと聞いた時は驚いたが、大丈夫そうな様子に優は安堵した。結局、あれだけの混乱があっても死者は一人も出なかったらしい。亡霊の目的がますます良く分からなくなってきたが、今は不必要な死人を出さなかった亡霊に感謝したかった。

「桜井、響の保護先について何か聞いているか？」

優は首を振った。昨日、優が響を預かる予定だった一週間が終わり、明日香に引き渡したのだが、一体明日香が何をするつもりなのか聞いていなかった。

「実はな、俺が養子として引き取ったんだ」

「思わぬ言葉に、優は準の言葉を反芻した。」

「斎藤さんの養子、ですか？」

「ああ。明日、幸枝と籍を入れる予定だったんだ。俺たちにはまだ子どもがいらない。それで、明日香から持ちかけられてな」

「初耳だった。何から言えば分からず、とりあえず祝辞を述べる。」

「えっと、ご結婚おめでとうございます。でも、あの、せつかくの新婚生活に、その、大丈夫なんですか？」

「言いづらそうに優は言葉を濁した。準が小さく笑う。」

「幸枝な、子どもを産めない身体なんだ」

「あ……」

その一言で、準の言いたい事が分かった。簡単に、気にしていな

い風に準は軽く言っただが、準と幸枝はその事について酷く苦悩したのだらう。

「だから、元から養子をとるつもりだった。こんなに早くとる予定ではなかったが……これも何かの縁だ。響には親が必要だ。俺たちは、子どもが欲しかった。明日香からこの話を聞いた時、迷わず決めたよ」

「斎藤さんたちなら、安心です」

優は笑みを浮かべ、頷いた。響はまだ子どもだ。その成長には親が必要だと、実際に生活して分かった。自分では、親の代わりにならない。きちんとした教育を、躰を、そして家庭を理解させてくれる人間が必要だ。子どもは勝手に成長するものではない。その道を示してくれる大人が必要だ、と強く思う。

「それでだ……」

不意に準はバツが悪そうに目を逸らした。その様子に首を傾げる。「何と言っかな、響は女の子だ。俺はな、子どもが二人欲しかったんだよ。男と女、一人ずつ」

「はい。兄弟がいることは、響ちゃんにとっても良い刺激になると思います」

「ああ。でな、桜井、お前……」

そこで準は言葉を切った。そして視線を逸らしたまま、髪をかきあげる。いかにもバツが悪そうな様子に、優は怪訝な視線を送った。目を逸らしていた準が何かを決心したように振り向き、優の目を真っ向から覗きこんだ。

「あー、……………斎藤、優になるつもりはないか」

「……………」

思わぬ言葉に一瞬ポカンとした後、優は盛大に笑いだした。準が後悔したように手で額を覆う。

「それ、プロポーズですか？」

笑いながら、疑問を投げかける。準は溜め息をついた後、首を振った。そして真剣な目を優に向けた。

「似たようなものだが、違う。養子にならないか、と聞いているんだ。響の兄にならないか、という誘いでもある。お前には親がいないと聞いた。もう十六歳だし、遅すぎるかもしれん。だが、お前を見ていると危なっしくて放っておけないんだ」

優は笑うのをやめて、準をじつと見つめた。

「本気なんですか？」

「ああ。幸枝ともよく話し合った。快く賛成してくれたよ。響には話してないが、多分喜ぶだろう。後はお前の意思だけだ。響はお前に懐いている。俺も桜井、お前のことは良く見てきたつもりだ。別にお父さんと呼べ、なんて言うつもりはない。響の兄として、一緒に暮さないか。初めは抵抗があるかもれんが、時間が経てば」

「ごめんなさい。せつかくの提案ですが、僕には無理です」
準の言葉を遮るようにして、優はきつぱりと拒否の言葉を口にした。沈黙が落ちたが、それは準の言葉によってすぐに破られた。

「……理由を聞いていいか？ 何となくとか気が乗らないと言う理由で簡単に断られたくない。俺は本気だ。桜井にも、よく考えて欲しい」

「そんな理由じゃありません。さつき斎藤さんは僕に親がないと仰いました。でも、僕にはずっと待っている人がいるんです」

優の瞳に映った、強い希望の色を見て準は口を噤んだ。

「だから、斎藤さんの、響ちゃんの家族になることはできません。でも、ありがとございました。斎藤さんの言葉、嬉しかったです」

「桜井」

準は何かを言いかけて、すぐに黙り込んだ。優は手に持っていた果物の入った袋を横にあった台の上に乗せ、頭を下げた。そして、踵を返す。

医務室から逃げるように廊下に出て、優はすぐにドアを後ろ手に閉めた。そのまま廊下を歩きます。今は誰にも会いたくなかった。人気が少ないルートを選び、寮棟に向かう。角を曲がった時、華とばったり出会った。思わぬ遭遇に自然と足が止まる。向こうも驚い

たように足を止めた。

「桜井くん、医務室に行ってたの？」

「うん。斎藤さんのお見舞いに」

「そっか……」

そう言つて、華が何かを考え込むように黙り込む。

「華ちゃん、どうしたの？」

「二日前の、上田中将に桜井君を拘束しろって命令された時、桜井くんの声が聞こえたの。何と言うか、耳に響くんじゃなくて、頭に響く感じの、何ていうんだろ、えっとね」

必死に説明しようとする華に優は笑みを浮かべ、助け船を出した。

「テレパシーみたいなの？」

「そうそう！ そんな感じ！ 桜井君、何も喋ってなかったよね？」

「うん。喋ってなかったよ。ねえ、そのテレパシーみたいなのって

「

こんな感じ？」

華が驚いた顔をする。優は悪戯に成功した子どものような、無邪気な笑みを浮かべて笑った。

「ESPエネルギーは情報を搬送するんだって。だから、通信みたいな事ができないかな、と思つて色々と試してみたら、こつこつのが出来る」

「すごい！ 桜井君、自分で考えついたの？」

華が歓声をあげる。

「まだ距離に制限があるけどね」

「それでも凄いよ！ 神条司令にも言つたの？」

「それなんだけどね、この使い方のこと、他に話さないでほしいんだ。できれば、京子にも、愛ちゃんにも」

華がキョトンとした顔をする。

「これ、亡霊との戦いじゃ役に立ちづらいし、あまり不用意に知られていない方が良く思うんだ。上田中将もこの事知らなかったから華ちゃんと連絡できたわけだし」

「……うん。私たち二人だけの秘密だね」

華はそう言っただけほほ笑んだ。そして思い出したように言う。

「ね、桜井くん。あの時、『望むのならば、僕についてきてください』って言ってくれたよね。私は、それを望みます。だから」

華は足を進め、優との距離をゼロにした。驚いたように優が一步下がるが、華が背中に両腕を回し、それを阻止する。抱きしめられる形となった優は困惑しながら至近距離でこちらを見つめる華の澄んだ目を見つめ返した。

「だから、私は桜井くんの後ろにずっとついていきたい」

唇に柔らかなものが触れた。直後、背中に回されていた腕が解かれる。そして、華は優からすぐに離れた。恥ずかしそうにはにかみながら、華が笑う。

「じゃあね！」

華が赤い顔を隠すように廊下の向こうへ走り去っていくのを、優は啞然と眺めながら、自分の唇を指先でなぞった。

「青春してるね」

不意に背後から声をかけられる。驚いて振り返ると、そこには田中幸枝が微笑を浮かべ、立っていた。そして、幸枝の隣には手を繋いだ響の姿。

「さくらいー！」

響が舌足らずな声で優の名前を嬉しそうに呼ぶ。優は小さく笑みを返した。

「こんにちは、響ちゃん。田中さんとお散歩？」

響への問いに、幸枝が代わりに答えた。

「今から準のお見舞いに。暇、してるみたいだから」

「僕は今行ってきたばかりです。入れ替わりですね」

「……話は、聞いた？」

幸枝が一度響に目を向けて、言った。

「はい。お断りしました。せっかくの申し出を申し訳ありません」

「そう」

幸枝は理由を聞かず、ただそれだけ返した。そして、ふっと笑みを見せる。

「君にはすぐ別の家族が出来そうだしね」

さきほどの華との一連の流れをバツチリを見ていたのだろう。優が何も言えず黙り込む。幸枝は、薄い笑みを見せながら言葉を続けた。

「同じ本部内だし、いつでも遊びに来て。響も喜ぶから」

「はい」

優が頷くと、幸枝は今までの笑みとは違う、柔らかい笑みを見せた。優にはそれが、母親の子どもに向けるそれと同様のものに見えた。幸枝が、響の手を引いて一歩踏み出す。

「じゃあね」

「さくらい！ バイバイ！」

「うん。バイバイ」

優が返事を返すと、響は無邪気な笑みを見せて、幸枝の手を引っ張るように廊下を走りだした。

「ママ！ はやく！」

ママ、という言葉聞いて、思わず笑みが零れる。遠ざかる、どこにもありそうな二人の親子の後ろ姿を見送ってから、優は一人、静かな、長い無機質な廊下を歩き始めた。

「優君のパーソナルデータが、ない？」

司令室で部下の報告を受けた奈々は思わず声をあげた。

亡霊がネットワークに忍び込み何をしていたのか、情報部はあれから二日間休まず調べ続けていたのだが、その時に桜井優のパーソナルデータだけが消えている事が発覚した。

「はい。亡霊は恐らくこれを探していたのではないかと」

「いつから」

「は？」

部下の言葉を遮る形で奈々が呟く。要領を得ないその言葉に、部下は間抜けな声を漏らした。

「いつから優君のデータがないの？ 亡霊が盗んだ、という決定的な証拠はある？」

奈々の言葉に、部下は冷や汗を流しながら首を振った。

「い、いえ、亡霊が盗んだという根拠はありません。どのバックアップファイルにも桜井優のパーソナルデータは存在しなかったため、亡霊が来る前から存在しなかった可能性が高いです。ただ、亡霊のやることなので、バックアップファイルにも何らかの細工があった可能性は捨てきれません」

「はじめから桜井優のパーソナルデータは存在しなかった、ということ？」

「の、残されたデータ上ではそうなります」

奈々は少し考え込む素振りを見せ、すぐに次の指示を出した。

「優君のパーソナルデータを打ちこんだ人を洗い出さない」

「発覚してからすぐに情報部の全てに連絡を送りました。しかし、誰も名乗り出ていません。本当に何らかの手違いで元からデータが存在しなかったのかもしれませんが」

「そんなことが……いえ、いいわ。ありがとう。下がりなさい」

奈々の言葉に、部下が慌てたように司令室から出ていく。その様子を眺めながら、奈々は今の報告について考えを巡らせた。

また、桜井優。パーソナルデータなど探って、亡霊は一体何をしようとしているのだろう。それが戦略、または戦術に繋がるとは考えづらい。理解不能な亡霊の行動に奈々は頭を抱え、その長い黒髪をかきあげた。

亡霊の目的が全くわからない。そして、今回は亡霊対策室の完敗だった。亡霊に対して、対策室はあまりにも無力だ。実働部隊、特殊戦術中隊がなければ本当に何もできない。故に今回のような、ESP能力者の人工的な製造に踏み切ったのだろう。そしてそれは戦

略情報局だけではない。奈々は机の上に積まれた一つの書類に目を向けた。そこには、ナノマシンの不自然な流通が記されている。

敵は、亡霊だけではない。それとも、と奈々は思った。これも亡霊の攻撃手段なのかもしれない。亡霊と人間の思考には大きな剥離がある。そして、亡霊は高位の存在だ。それは認めなければならぬ。住んでいる世界が、あるいは階層が違うのだ。どれが亡霊の攻撃なのか見極めなければならぬ。亡霊は物理的な脅威に留まらない。論理的な脅威でもある。それが今回はつきりとわかった。闘争が始まって八年。終わりが見えないどころか、段々と激化していつているように思える。亡霊の全容はまだ掴みきれない。そして恐らくはこれからも。でも、と奈々は思った。それは亡霊も同じなのかもしれない。恐らくは亡霊も桜井優という特異点の全容を掴み切れていないのだ。乱雑に戦っていた二つの陣営は、一人の少年を中心に動き始めている。流れの見えなかつた闘争に、一つの道が見え始めた。闘争が終わるのはそう遠い未来ではない。奈々は、そう予感した。

キャラクター人気投票集計結果と加筆修正のお知らせ

31話、32話に修正、33話に加筆を施しました。33話加筆分は華のシーンの後に挿入されています。以下、アンケート集計結果になります。

好きなキャラクターは？（複数回答可）

1位	桜井優	54票	69.2%
2位	宮城愛	44票	56.4%
3位	長谷川京子	32票	41.0%
4位	姫野雪	27票	34.6%
5位	佐藤詩織	26票	33.3%
6位	條原華	25票	32.1%
7位	黒木舞	21票	26.9%
8位	白崎凜	19票	24.4%
9位	望月麗	12票	15.4%
10位	広瀬理沙	11票	14.1%
10位	神条奈々	11票	14.1%
12位	長井加奈	4票	5.1%
12位	進藤咲	4票	5.1%
14位	橋本恵	3票	3.8%
15位	秋山明日香	2票	2.6%

最も好きなキャラは？（複数回答不可）

1位	宮城愛	21票	26.9%
2位	桜井優	10票	12.8%
3位	白崎凜	8票	10.3%
4位	條原華	7票	9.0%
5位	長谷川京子	6票	7.7%

6位	姫野雪	5票	6.4%
6位	佐藤詩織	5票	6.4%
6位	広瀬理沙	5票	6.4%
9位	黒木舞	4票	5.1%
10位	神条奈々	3票	3.8%
11位	進藤咲	1票	1.3%
11位	秋山明日香	1票	1.3%
11位	望月麗	1票	1.3%
14位	長井加奈	0票	0.0%
14位	橋本恵	0票	0.0%

以上、78もの回答をいただきました。全部で20いけば良い方かな、と思っていたのですが、予想を上回る投票をしてくださった方々に感謝です。

予想していた結果と恐ろしく違うかったので、大変参考になりました。特に、全然出番のない姫野雪が佐藤詩織と篠原華を蹴落としたことに驚きを禁じ得ません。アルビノ補正ということでしょうか（汗）

とりあえず、一位の桜井優は大人の事情により見送り、二位の宮城愛は既に番外編があるので三位の長谷川京子の番外編を書く予定です。多くのご投票ありがとうございました。

番外編 膨大なノイズの狭間で（佐藤詩織）

思えば、母は弱い人間だった。一人では生きていけず、常に誰かにしがみつこうと必死だった。だから母が再婚すると言った時も別段驚きはしなかったし、反対もしなかった。

新しい父には子どもがいた。一つ年上の障害を持った男の子だった。障害とは具体的に言えば染色体異常による中度の知的障害で、私には詳しいことが知らされなかったが、彼の話している事は支離滅裂で、当時幼かった私は兄に本能的な恐怖を感じた。理解できない者への恐怖。私は露骨に兄から距離をとろうとした。

しかし、母はそれを許さなかった。それは差別だ、仲良くしなさい、と毎日何度も繰り返し返した。母なりに、父から愛されようと必死だったのだと思う。差別、という意味がよく分からなかったけれど、母の言う通りに私は兄と普通に接するように心がけた。

私が小学三年生の時、学校で差別について学んだ。部落問題や人種差別など、色々な差別があるのだと知った。けれど、この頃の私は兄に対して明確な苦手意識を感じていた。これは差別なのだろうか。そう悩んだが、兄の私に対する粘りつくような視線が純粹に怖かった。私は、兄が好きではなかった。嫌いだったと言い換えても良い。少なくとも、私が兄を好きになる要素は皆無だったのだから。小学四年生の時、数年前の世界恐慌の影響を遅れて受けて、父の帰りが遅くなり始めた。それに合わせて母は兄に異様な愛情を注ぐようになる。兄という父との接点を大事にすれば全てが上手くいくと思い込んでいたのだろう。母は、弱い人間だった。父からの愛情に飢えていた。

いつしか母は全てに於いて兄に過保護になった。私と兄が喧嘩をすれば、私に非がなくとも私が責められた。『兄に悪意はない。善悪の区別がちょっとつかないだけ』と母は口癖のようにそう言った。私に味方はいなかった。

私は次第に兄に関わるのをやめた。何かがある度に責任が私の方に転がり込み、その不条理さに耐えきれなくなったのだ。この頃になると母は兄に何かがある度に『障害があるのだから』と『差別だ』という言葉を頻りに使用した。近所や学校で兄がトラブルを起こすと、母は必ずそれを口にした。しかもそうした言葉を口にするの大抵の場合、相手は黙りこむのだ。幼いながらも、それに何らかのタブー性、すなわち合理性を凌駕し、それを阻害する力がある事が理解できた。母はそのタブー性を理解し、盾として使っていた。母は、弱い人間だった。

そして中学一年生の時、私の人生に致命的な亀裂が入った。その日は母が友人との旅行に行っていて、父も会社泊りこんでいた為、家には兄と私しかいなかった。その日の夜、シャワーを浴びた後、私はいつも通り自室で音楽を聴きながら漫画を読んでいた。その時、兄が突然部屋に入ってきた。そんなことは初めてで、私は本能的な恐怖を感じた。しかし、私はいつも通り兄を無視して再び漫画に目をやった。努めて恐怖を押し殺し、平静を装った。けれど、兄は私が怖がっているのを分かっているかのように、ゆっくりと接近し、突然私を力づくで床に押し倒した。はじめ、何が起きたのか分からなかった。しかし、私を押さえつける兄の眼に宿る欲望の色を確認して、事態を理解した。兄の身体は同学年の男子と比べて大きい。純粹な恐怖というものを、私は初めて知った。

結果的に言えば、それは未遂で終わった。私は必死に抵抗して兄から逃げ出し、友人の家に駆け込んで、それっきり兄と会う事はなくなった。一度だけ意を決して電話で母にその事を話したけれど、母はいつものように『障害があるのだから』や『悪意があるわけではない』と繰り返した。母は、弱い人間だった。

私が男性に対して異常な恐怖心を感じるようになったのはそれからだった。兄の濁った瞳に宿ったあの色が今も忘れられない。きつと、これから先も忘れることはないだろう。

今こうして振り返れば、差別を受けていたのは兄ではなく私だっ

たのではないか、と思う。何かが起きれば、不当に私が責められた。差別をするな、と言っていた母が一番強く差別をしていたのではないか。そう思わざるをえない。いつの間にか、差別をするな、という言葉が暴走し、優遇しろ、という意味にすり替わっていたのだ。何故、そんな現象が起こってしまったのだろう。それはきっと、母がカテゴリーに対して、異常な執着を見せた為だと思う。母は、兄を「障害者」というカテゴリーでしか見ていなかった。兄という個体を直視していなかった。更に言えば、「人間」というカテゴリーで兄を見ていなかったのではないか、と思う。だから、何が起きても『障害があるのだから』という言葉を口にした。母は、父との繋がりとしての兄を大切にしていた。人間としての兄は、母の中に存在しなかった。

結局は、兄も被害者だったのだと思う。歪んだ愛は『障害だから』という言葉で教育を放棄し、刹那的な自己防衛の為にそれを利用した。結果的に兄は正当な教育を受ける機会を失った。個として見る以前に、カテゴリー全体の評価をそのまま個に適用した。母は、兄を差別していた。母は、弱い人間だった。

このカテゴリーと個の評価の剥離は大きい。私は少なくとも兄が個として嫌いだった。好きになる要素がなかった。しかし、母は兄を障害者というカテゴリーで評価していた。このカテゴリーとは、つまり量子化だ。カテゴリーという用意されたステップに合わせ、近似化する。結果として当然、情報的な損失が発生する。つまり、兄という個体の情報は歪み、ノイズに塗りつぶされてしまう。しかも量子化という手段は不可逆的だ。失われた情報は再生できない。故に兄と言う個体が何をしても、母のカテゴリーに対する評価は揺らがない。母は、情報を受信する事ができなかった。すなわち母には兄と言う存在が見えないのだ。兄は母の中で情報的に死んでいた。母は、弱い人間だった。

特殊戦術中隊に入り、私はこうしたカテゴリーライズ、あるいは量子化に対して考えさせられることが多くなった。私はESP能力者に

カテゴリーにされ、個として見られる機会が少ない。カテゴリーというノイズに阻まれ、個が見えない。どうも大人になるにつれてこうした傾向が大きくなっていくように見える。神条司令は『安易な分類をするようになるのは思考力の低下を示す初期症状』と評していた。多分、それは正しいのだと思う。

最近、私はこのカテゴリーについて考える時、一人の少年を思い浮かべる。唯一の男性ESP能力者とカテゴリーにされた少年。そのカテゴリーには彼一人しかいないにも関わらず、個として評価するとカテゴリーとして評価するのでは不思議なことに全く別の評価に分かれることがある。どうもカテゴリー化する過程で致命的なノイズが混入してしまうようだ。そして、彼は大体においてカテゴリーに対しての評価しか貰えない。彼を個として評価する人間は少ない。そして私もまた、彼を『男』にカテゴリー化していた。私の男性恐怖症はいまだに治らない。私は、桜井優が怖かった。私は弱い人間だった。けれど、いつしか桜井優を怖いとは思わなくなった。彼に絶対的な守護を感じたあの時、彼をカテゴリー化するのを止めて、個として彼を評価したからだと思う。詳しい事は何もわからない。しかし、私は一つ年上の可愛い先輩を好きになった。私は、彼が好きだ。彼がESP能力者でなくなっても、更に言えば男でなくなっても、人間でなくなっても多分好きなままだろうと思う。私は彼と言う個が好きなのだ。

けれど、彼を個として評価する人間は少ない。多分、彼がESP能力者としての影響力を強めていくうちに、それは酷くなっていくだろう。彼をESP能力者として利用しようとする人間はあまりにも多い。彼の持つカテゴリーのノイズはあまりにも大きすぎて、彼の存在を曖昧なものにする。しかも社会は影響力の大きいカテゴリーに対していくつものタブー性、すなわち合理性を凌駕し、それを阻害する力を付与する習性があるようで、更にノイズが拡大していく。彼を個として見るのは次第に難しくなっていくだろう。加速度的に肥大化していくエントロピーの波が彼を覆い隠していく。私は、

それが堪らなく怖い。いつしか、彼はノイズの渦の中に消えていくのではないか。根拠もなく、そう思ってしまう。だから、膨大なノイズの狭間で私は彼の手を離さずに、しっかりと掴んでいたい。彼がノイズの波に吞まれないように、流されないように。そして、彼がこれ以上傷つかないように。

番外編 世界は、可能性に満ちていた（長谷川京子）

人は、自己を守る為に人格、あるいは行動特性を作り替えていく。それは、愛のように極端な感情の損傷として現れることもあれば、華のように自らの利用価値をあげることで攻撃を回避しようとしたり、詩織のように脅威そのものから逃避することもある。人は誰もが影響の大小はあれど、こうして自己保存の為に環境に合わせた人格を築き上げていくのだと思う。

私の場合、それは華と詩織を合わせたような形として現れた。

元来、私は大人しい子だった。人見知りで、常に母の後ろに隠れているような、家に籠りがちな性格だった。その狭い世界で私は母と父の温もりと優しさを受け、毎日新しい喜び、あるいは驚きを発見し、女の子らしい静かな遊びをして過ごした。数ある遊びの中、特に人形遊びが好きで、架空の世界で生きる人形たちになりきり、その小さな世界を遍く探検した。そうやって架空の世界を楽しむ私を、両親は想像力豊かだ、と評価して、様々な人形を買い与えてくれた。私はそうした人形たちを使い分け、様々な世界を作り上げていった。絵本に出てくるような希望に満ちた世界、テレビで見たドラマの世界、現実をモチーフにした平和な世界。そうした無限に広がる世界で、私は住人として毎日のように架空の世界を渡り歩いた。世界は、可能性に満ちていた。

幼少期の私は幸せな時を生きていた、と思う。けれど、それは容易く崩れ去った。交通事故。その日はよく雪が降っていて、路面が凍っていたらしい。両親は、私を残して呆気なく逝ってしまった。本当に突然だった。まだ幼かった私は死というものについて正しい理解はできていなかったけれど、両親と二度と会えないということには理解できていた。突然訪れた日常の崩壊に、幼かった私はよく状況を理解できないまま母方の祖母の家に引き取られることになった。祖母は偏屈な人間だった。より正しく記述するならば、共有され

た理屈、つまり常識を軽視し、自らの考えを無条件に信じ込んでいくような人だった。その自己肯定の根拠が一体どこから出ているのか私にはわからなかったが、とにかく祖母は自身の信条を曲げず、しかし他者の一般的な信条、つまり常識を尊重することはなかった。そんな祖母と共に過ごすことになった私は、当然祖母の思考・思想・信条そのものを押し付けられ、祖母の思うように振る舞うことを要求された。そして私は自身の居場所を守る為、祖母の言う事を良く聞いた。

祖母は、学校での勉強という行為を嫌っていた。科学を嫌っていたと言い換えてもいい。知識は視野を狭める、と口癖のように言っていた。そして、何の役にも立たない、ともよく口にした。祖母は既に年金暮らしで、若い頃は専業主婦だった。既に亡くなっていた祖父は田舎で農業をやっていたらしく、それは人生経験に基づいた価値観だったのかもしれない。もしくは、その時代の価値観。女性蔑視の時代で生きてきた祖母にとって、それは不必要なものだったのだと思う。あるいは、高度経済成長期を経験した祖母にとって、科学は公害や自然破壊の代名詞であったのかもしれない。祖母に何故勉強を嫌うのか聞いたことはなかったから、結局それらは私の予想でしかないのだけど、とにかく祖母はそういう人間だった。代わりに、祖母は活発な子どもが好きだった。それは土地的な価値観に起因するものだったのかもしれない。

このように祖母の望んだ理想的な子供像と、内向的な私の性格はあまりにもかけ離れていた。祖母の望む子どもになることは苦痛で、多大な心的労力を必要とした。けれど、人は自然と周囲の影響を受ける生き物らしく、徐々にではあったが、私は活発な、元気な子どもへと変わっていった。祖母は喜び、多くの愛情を注いでくれた。偏屈な人ではあったけれど、祖母は決して悪い人間ではなかった、と記憶している。

でも、私の核とも呼べる意識の層は何も変わらないままだった。意識の核を包む曖昧な何か、殻と呼ぶべきような意識の層だけが祖

母の望む人格に変化していった。それは不思議な体験だった。自己が二つの層に分裂し、明確に剥離していく感覚。やがて私は、表面上だけ明るく活発な子供として振る舞うようになった。けれど、それとは異なる明確な価値観が私の中に保存され、残された。この剥離は成長するにつれ、次第に激しくなっていく。殻は年齢とともに段々と社交的な人格を勝手に作り上げていったが、殻の中に残された私という核はお人形さんたちと一緒に架空の世界を生きる内気な幼い女の子のままだった。私はこのギャップに戸惑いを感じたが、核をいくつもの殻が覆い隠していく過程こそが成長というものなのだろう、と結論付けて納得した。

小学四年生の冬、祖母が静かに息を引き取った。両親を亡くした時と同じく雪の舞う日で、何の前触れもなかった。雪の中、祖母の広い屋敷で叔父の手伝いを借り、葬式を執り行った。そして親族が見守る中、祖母は冷たい土の中へ埋められた。私はそのまま叔父の家に引き取られることになった。

二度目の新たな生活が始まった。新しい学校。新しい家庭。けれど、辛いことは何もなかった。この時、私の外に広がる殻はまるで強固な壁のように外的環境と私という核を隔て、守ってくれた。そして、殻はその社交的な性格で、周りとすぐに打ち解け、居場所を作り出した。私はそのまま何もなく成長し、中学三年の春、特殊戦術中隊に入隊した。

今年も、冬が巡ってきた。両親を亡くし、祖母が息を引き取った季節。この季節になると、不思議と帰ってきた気分になる。奇妙な郷愁感。多分、遠いあの日に置き忘れてきた何かを、私は探し続けているのだろう。私という核は、両親を亡くした時から少しも成長していない。核から剥離した殻だけが成長を続けている。私は殻を通してでしか世界を見れない。まるで、人形遊びのようだ。演じている訳ではない。ただ、操っていた。たまに、今も架空の世界で人形遊びに興じているような錯覚を覚えることがある。この人形遊び

をやめたら、両親のいた幸福だったあの頃へ戻れるのではないだろうか、と根拠のない考えが浮かぶこともある。私という核は、分厚い殻に覆われて現実感が麻痺し始めているのかもしれない。

でも、最近その麻痺が解けかかっている。私をはじめて桜井優を見た時、彼は空を飛んでいた。初陣の前の飛行訓練だったと思う。機械翼をひろげ、空を舞う桜井は綺麗だった。殻を通して見ても、その輝きは褪せることがなかった。私という核は、はじめて殻の外に興味をもった。すぐに話しかけ、彼の友人としての立場に収まった。でも、すぐにそれだけでは我慢できなくなった。殻を通さず、直接彼に触れたいと思った。そんな感情を抱くのは初めてで、だからこそ桜井の特性に気づいた。彼は、殻だった。特殊戦術中隊という核、更に言えば亡霊対策室という核を守る為の殻だった。そして、桜井という殻に守られ、大多数の人が現実感を麻痺させ始めている。それに気づいた時、背筋がゾツとした。誰も、桜井の消耗に気づいていない。あの華奢な身体に全ての負荷がかかっていることに大多数の人が気づいていない。死への恐怖を吐露してくれたあの夜、私は確信した。桜井は本来核であるべきなのだ。彼には殻が必要で、しかし私には殻になれるほどの強さがない。だから、私にできることは彼という殻の周りに更に別の殻を用意することなのだと思う。

季節は冬。両親、祖母に続き、またしても大事な人が死にゆく運命にある。けれど、今回は猶予期間がある。そして、逆らう意思があった。

かつて渡り歩いた世界と、現実が違う。架空の世界のように、希望に満ち溢れているわけではない。けれど、そこには架空の世界にはない一人の男の子がいた。そして、可能性があった。いつか、殻を、壁を、ノイズを除いた私が彼に触れることができるように、私が入形遊びを卒業する日が訪れるだろう。そしてその時、遠い雪の日から失われていた時が再び動き出すのかもしれない。十六年目の冬は、暖かかった。

4章 1話 宮城愛(4)

亡霊対策室本部の所有する広大な敷地から、裏手の森に繋がる細い道があった。その道は周りの自然に溶け込むようにひっそりと、目立つ事を嫌うかのように静かに存在し、ある小さな墓地に繋がっていた。それほど広くない広場に二十四の墓石。神奈奈々はそのうちの一つ、柊沙織の名を刻まれた墓石の前でしゃがみこみ、両手を合わせ俯いていた。

風が吹き、葉を失った木々が揺れる。

反対に奈々はじっと動かず、静かに祈りを捧げ続けた。

不意に奈々は閉じていた両目を開き、ゆっくりと立ちあがった。

そして、柊沙織の墓石に背を向ける。朝露に濡れた草木が日の光を浴び、輝いて見えた。そして、草木を貫くようにして出来た小さな小道を戻り始める。僅かに湿った土がしゃりしゃりと小気味良い音を立てた。

寒空の下、奈々が亡霊対策室の裏手に戻ると、敷地内の木陰に見知った少年、桜井優の姿を認めた。幹に背を預け、朝露に濡れた草の上にお尻をついている。どうやら眠っているようだった。木漏れ日がまだ幼くあどけない天使のような寝顔を照らし出し、風に吹かれて琥珀色の髪がさらさらと流れる。その光景に奈々は思わず息を呑んだ。時を忘れ、その一瞬に魅入られて、自然と足が一步踏み出す。そこで、奈々は急に我に帰り、慌てて辺りを見渡した。近くにあるテニスコートはまだ開いておらず、裏手である為に他の人の姿は見えない。しかし、ランニングコースの一部になっている為、人が来る可能性もある。奈々はこんなに朝早くからここにいるということは優もランニング中だったのだろう。奈々はもう一度優の方に向き直り、その寝顔を眺めた。そして、ふと一人の女の子を思い出す。彼女もこうして木陰でよく休んでいたな、と奈々は昔を懐かしんだ。

4章 死の記憶

まどろみから醒め、優が重い瞼を開けると真っ先に愛の顔が視界に飛び込んできた。顔を覗きこむようにしゃがみこんでいる。優が起きたことに気付くと、愛は抑揚のない声で口を開いた。

「……おはよう」

「……愛ちゃん、そんなところで何やってるの？」

「……寝顔を眺めてた」

「……もしかして、ずっと起きるの待ってた？」

コクリと頷く愛に、優は申し訳なさそうに謝った。

「起こしてくれたら良かったのに。寒くなかった？」

そう言っ、立ちあがろうとした時、自分の身体に見慣れないコートがかかっていることに気付いた。

「これ、愛ちゃんの？」

「……違う。私のはそっち」

そう言っ、愛はコートの上にあったハンカチを指した。

「……何これ？」

「……寒いと思っ」

優はハンカチを手に取り、まじまじと眺めた。寒さを凌げるほどの大きさも厚さも無い。僅かに沈黙が流れる。優は何も言わず、礼だけいうことにした。

「あ、ありがとう。ところで、愛ちゃんは何でここに？」

「……優が部屋にいないっ京子が言ったから、皆で探してた」

「あー……すぐ帰る予定だったから留守中のプレート出してなかったかも」

携帯で時間を確認して呻く。軽くランニングするだけのつもりだったのが、途中で一休みしようとしてそのまま寝入ってしまった。軽い後悔に襲われる。

優は立ちあがって小さく背伸びした。そして手に持ったコートに目をやる。

「これ、確か神条司令のだったかな」

首を傾げる優に愛は何も言わず、突然空いたほうの手をとった。

「……手、冷えてる。早く帰ろう」

「だね」

手を引かれ、優は愛に連れられるように敷地内を歩いた。繋いだ愛の手がとても温かい。一步前を歩く愛の姿を見て、優はふと懐かしい感覚に包まれた。遠い昔の、母に手を引かれた記憶。その記憶はふと意識野を掠め、すぐに記憶の海に沈んでいった。

「桜井くん！」

本部の入り口前でこちらに手を振る華の姿が見えた。その横には不機嫌そうな京子の姿。

「こんな朝早くからどこいったてた訳？」

「ごめん、ちよつと寝ちゃってて」

「まあまあ、早く朝食食べようよ！」

華が京子を抑えて明るく言う。愛はコクリと頷いて、優の手を引っ張ったまま歩き出した。

「食堂？」

引っ張られたまま後ろの華に聞く。華は頷いた。響がいた時は優の部屋に集まって食べていた為、食堂に行くのは久しぶりだった。

セキュリティゲートを通り、食堂に入ると券売機でいつも通り朝食セットのボタンを押した。華と愛も同じで、京子だけがラーメンだった。

カウンターでトレイを受け取り、そのまま空いている席へ適当に座る。今日は第一・第三・第六小隊に訓練がない為、まだ寝ている人が多いのかあまり混んでいなかった。

「今日さ、どこか行かない？」

全員が席につくと、京子が提案した。晴れてるし、と付け加える。「どこか行きたいところがあるの？」

と華。

「特にないけどさ……本部に籠ってるのも、もったいなくない？」

「んー。適当にブラブラする？」

優がそう言った時、後ろから声がかげられた。

「桜井中隊長」

驚いて振り返る。そこには第六小隊長、白崎凜が立っていた。切れ長の強い意思を放つ双眸が優を射抜く。

「本日、よろしければ訓練を手伝って頂けませんか？」

「訓練、ですか？」

予想外の言葉に優は思わず聞き返した。

「はい。この後すぐを予定しています。訓練許可届は既に申請してあります」

「えっと、それは僕だけですか？」

優が遠慮がちに他の三人をチラリと見る。凜は首を振った。

「桜井中隊長がいらっしやってくれば何人でも構いません」

「わかりました。食べ終わったら連絡しますね」

肯定の返事を出すと凜は小さく笑みを浮かべ、頭を下げてから他の空いている席へと向かった。凜が去つたのを確認してから京子が不機嫌そうに口を開く。

「桜井中隊長は遊びに行かないんですか？」

「……ごめんね」

「あ、別に責めてる訳じゃないって。立場的に仕方ないし、大変だよね」

優が申し訳なさそうに謝ると、逆に京子が慌てたように言いなおした。

「華ちゃんたちはどうする？」

「んー、今日は休みたいから私は訓練パスかな」

「……私も」

優は残った京子に目を向けた。

「……たまには、訓練頑張ろうかな」

京子が渋々といった様子で言う。華が意外そうな顔をしたが、結局何も言わなかった。

4章 2話 白崎凜(4)

良く晴れた空の下、優は京子とともに飛行訓練場に来ていた。広大な原っぱの中央に数人のエンジニアと凜の姿がある。優と京子の来訪に気付いた凜が顔を上げた。目が合い、ペコリと頭を下げる。

小走りで凜の元へ駆け寄ると、機械翼の安全点検をしているエンジニアがちょうど作業を終えたところだった。エンジニアが規定通りの注意事項を言い残し、機械翼を原っぱの上に置いて立ち去っていく。記録と緊急時の為に遠くから訓練の様子をそのまま観察することになっているが、一般的にエンジニアは訓練の内容自体には干渉しない。

「訓練って、具体的に何をやるんですか？」

エンジニアが離れていく姿を見送りながら、優は凜に疑問を投げた。

「模擬戦闘にお付き合ひして頂きたいのです」

「模擬戦闘、ですか」

優が首を傾げると、凜は頷いて詳しい説明を始めた。

「はい。実際に機械翼を用いて、上空での高速戦を再現します。小銃で攻撃する代わりに後ろを取り、三秒維持できればセット終了。位置取りに重点をおいた模擬戦闘です」

珍しい、と思った。通常、優たちは集団戦を意識した訓練を行う。こうした個人の能力・判断に依存する訓練は行われない。

「では、機械翼をどうぞ。そちらの部下の方も」

凜が機械翼を差し出す。優と京子は素直にそれを受け取った。部下、と表現された京子は僅かに不服そうな表情を浮かべていたが、結局何も言わなかった。

凜が慣れた様子で素早く機械翼を取りつけていく。遅れて、優と京子も準備を終えた。それぞれとの距離をとりあい、機械翼を展開する。飛行準備態勢。強い風が吹き、凜の長い髪が乱れるのが見え

た。

「オン！」

優の出した合図とともに、三人は一斉に空へと舞い上がっていった。

高度を上げ続けながら、他の二人の姿を探す。京子は優から僅かに離れた同じ高度に、凧は下から上がってきているところだった。その時、凧の黒い双眸が優の視線と絡みあった。瞬間、背筋を悪寒が走る。凧が突然高度をあげ、その距離を詰めてきた。訓練とは思えないほどの速度。凧が本気であることを悟り、優も全力で加速し、雲の切れ間を縫い、振り切ろうとする。急加速と無理な旋回が身体に大きな負担をかけ、頭がクラクラした。それでも、凧を振り切れない。ピタリと後ろについた凧が照準を合わせるジェスチャーを見せた。

不意に、イーグルとの攻防が脳裏をよぎる。

持てる限りのESPエネルギーを機械翼に注ぐこみ、インメルマントーン 上方向へのUターン すると、ようやく凧と優の軸がぶれ、振り切る事に成功した。ターンした後、高度をあげていく凧の後を追いつ、逆にその後ろ姿を捉える。凧は一度だけ後ろを振り返り、小さな笑みを浮かべた。

「すごい疎外感……」

見たこともないような空中戦闘機動を繰り返す優と凧を見て、京子は溜め息をついた。普段の特殊戦術中隊が行っている飛行訓練とは様相が異なりすぎる。

そして、普段から集団戦の訓練をしていた意義が理解できた。このように完全な個人技能を重視したこの訓練内容では、大多数の隊員には何の实りにもならないだろう。他と突出した優と凧だからこそ意味がある訓練なのだ、と思い知らされる。京子には二人の間

に入っただけの自信が全くなかった。しかし、このまま無視され続けるのも面白くない。京子は渋々といった様子で機械翼の出力をあげ、高度を上げ始めた。

寒風を受けながら、青空を駆ける二つの影を追い続ける。凜の長い髪が遠くからでも目印となり、肉眼でも二人の判別が楽にできた。どうやら凜の後ろに優が張り付いているようだった。二人の激しい格闘戦を見ながら、遙か昔に聞いた格闘戦の理論を思い出す。格闘戦における空中戦闘機動の要点は運動エネルギーと位置エネルギーの効率的な変換にあるという。すなわち、高度と速度の変換だ。そして、このエネルギーリソースの管理が変換効率に多大な影響を与える。有限であるエネルギーの消費を如何に抑え、全体の空中戦闘機動を計画的に組み立てていくか、が鍵となるのだ。つまり、ただ早く、相手を振り切ろうと大ぶりの動きを続ければ良いというものではない。エネルギーを失う、ということは自身の次の動きを自ら封じるということと同義であり、格闘戦に入った場合は常に次の動きを意識して行動しなければならない。しかし、凜と優の動きはそうした理論を凌駕していた。二人の持つ膨大なESPエネルギーがエネルギーリソースの管理を容易にし、常識を超越した機動を可能としているのだろう。しかも、凜の場合は経験的に得た空中戦闘機動を繰り出しているのに比べ、優のそれは先天的な才能によるものが大きいのが明らかだった。ループやインメルマンターンなどは思いつきや真似で出来るものではない。空戦機動を実現する為には概念や知識だけでなく物理的な機械翼への操作、つまり出力制御が不可欠であり、この制御には通常、豊富な経験が必要とされる。しかし、まだ特殊戦術中隊に入隊してまだ三カ月余りの優はそれらに加えてシザース 左右に急旋回を繰り返す を平然と行っていた。優はESPエネルギーの保有量、出力量に突出しているだけでなく、空戦機動における才能があると見て間違いない。

京子は十分ほど飛び続けた後、遂に二人を追いかけることを諦めた。ゆっくりと高度を下げ、地上に舞い降りる。息をついて空を見

上げると、高速で動きまわる二つの影が霞んで見えた。自然と溜め息が出る。京子は原っぱに腰をおろし、その様子を面白くなさそうに眺めた。

優が地上に降り立ったのは、京子が地上に戻ってから約十分後のことだった。格闘戦が一段落をつくくと、二人はどちらからともなく地上に向かった。

柔らかい草の上に降り立ち、息を切らせながら機械翼を取り外す。それから京子の元へ行こうと足を運びかけたところで、後ろから疲れた様子の凜に声をかけられた。

「今日はお付き合いしていただき、ありがとうございます」

振り返ると、息を切らせた凜が律儀に頭を下げていた。屈託のない笑みを浮かべ、優も頭を下げる。

「こちらこそです。全力で飛べる機会が少なかったので、凄く為になりました」

そう言うと、凜は柔らかい笑みを見せた。

「よろしければ、また機会があれば一緒にしていただけませんか？」

「はい。喜んで！」

優が快諾すると、凜は深く頭を下げた。

「機械翼の方は私が片づけておきます」

一瞬断りかけたが、京子の事を思い出し、結局片づけは凜に任せることにした。お願いします、と言葉を残して優たちから離れたところで腰を下して待っている京子の元へと駆けよる。

「本当ごめん！ 白崎さんの相手するので必死で」

「私のこと、忘れてた？」

言葉を引き継がれ、黙り込む。もう一度、ごめん、と言いそうになるが、京子は手でそれを制した。

「別にいいよ。私が勝手についてきただけだし。それより、疲れた

でしょ。戻ろっか」

そう言つて、京子は笑いながら立ち上がったからジーンズについた草を払い落した。あまり怒つていない様子に優は一瞬意外そうな顔を浮かべたが、素直に頷いた。

「ね。桜井つて白崎さんと親しかったの？」

飛行訓練場から出る際に、京子が前方を見ながら言つ。質問の意図がよくわからなくて、優は首を小さく傾げた。

「んー。あんまり、かな。そんなに話した事はないと思う」

「そっか。なら良いや」

京子が笑つて腕を絡ませてくる。慌てて解こうとするが、割と本気でしがみついているようで、中々離れない。

「誰も見てないし良いじゃん！」

慌てる優を見て、京子がクスクスと笑い声をあげた。それに、と言葉を続ける。

「それに、今朝部屋に桜井がいなかったから凄く焦つたんだよね。誰かの部屋に泊つたんじゃないか、つて。これはその罰。本当、心臓に悪いからやめてよね」

そう言つて、絡めた腕にギュツと力をこめる京子を、優は振り払う事ができなかった。

「それで朝、機嫌悪かったの？」

バツが悪そうに目を背けながら、気になつてた事を訊ねる。まあね、と京子は答えた。

「機嫌、悪くさせないでよね」

「なにそれ」

京子の言い方がおかしくて、クスリと笑みがこぼれる。

「割と切実なお願ひなんだけどな」

拗ねたように呟いた京子の言葉は、唐突に吹いた寒風にかき消され、優には届かなかつた。

4章 3話 神条奈々(5)

「まずは、この場に残った諸君に感謝を」

亡霊対策室定例会議が始まるとともに奈々は深い感謝の言葉を述べ、会議室内の長机に座る顔ぶれを眺めた。

広報部長、山田茂雄。防諜部長、佐々木三蔵。保安部長、はまなか ひ浜中博人。ろこ同じく保安部の中村俊之。総務部長、たけい ひとみ武井瞳。情報部長、うちやま内山隆司。たかし医療チームリーダー、くろい のりこ倉井紀子。そして、それぞれの後ろに各部の実力者が数人並んでいる。情報部長、内山隆司の後ろには齋藤準、医療チームリーダー、倉井紀子の後ろには医務医である秋山明日香など、奈々が古くから個人的な交流を持っている者も数多くいた。

「まず、各部の離脱者数について」

奈々がそう言うと、横にいた加奈が端末を操作した。会議室の巨大なスクリーンに棒グラフが表示される。

「各部の離脱者は次の通り。全体の数は三十七名。亡対室の稼働率に僅かながら支障が出ている。補充には時間がかかる見通しで、後日通達する特定プロジェクトのクリティカルパスの遅延を認める。」

また、その影響についての責任は問わない」

数日前の亡霊の襲撃が引き起こした二次的影響は深刻だった。探知能力をすり抜けて本部が襲撃されたことが伝えられた後、各部から大勢の離脱者が出たのだ。多くの者は実際に亡霊の脅威に晒されることを今まで真剣に考えた事がなかったのだらう。本部への襲撃は、そうした者たちが今まで意識にあげることがなかった亡霊への恐怖心を強く刺激した。彼らは亡霊対策室に籍をおきながらも、実際に亡霊と戦っているという感覚が欠如していたのかもしれない。

けれど、と奈々が思った。それは責められることではない。命がかかっているのだ。使命感や責任感を盾に、それを強要する事はできない。それに三十七名もの離脱は深刻な問題でもあったが、代わ

りに本部全体の雰囲気がここ数日は引き締まっていた。総務部の集計した一人辺りの仕事量などでは顕著にその影響が出ている。実際の脅威を目の当たりにし、誰もが与えられた仕事に対して積極的に動くようになっていた。激化する亡霊との闘争を考えれば、それほど悪い事ではないのかもしれない。本当に亡霊と戦う気がある者でなければ、この先も戦い続けることは難しいだろう。選別は、早い方が良い。

「次。襲撃の再発防止について。何か意見のある者は？」
情報部長、内山隆司が資料に目を落としながら立ち上がる。

「全ての通信ログを洗い出した結果、亡霊が変則的な通信を行っていた事がわかりました。通常、亡霊対策室のネットワークはセキュリティポリシーが異なるネットワークを細かく区切っています。この区切った各ネットワークを一つの組織ネットワークとして繋げる中継装置には通信状態をモニタする機能が存在します。この中継装置は我々の利用している通信プロトコルの第三層、ネットワーク層で用いられるヘッダ、つまり事前に決められた約束事に従い形成されたデータの単位を分析し、経路制御を行います。ですが、中継装置に記録された情報、そして各ホストが記録した情報によれば、亡霊の侵入活動において、何らかの信号が中継器の経路制御機能、及びプロトコルを無視して、そのまま各ホストへ流れ込んでいるのです。全ての防壁が、亡霊対策室の誇る論理防御システム、多層防御システムが無視され、直接流れ込んでいる。神条司令もご存じの通り、亡霊は全ての物理的影響を無視します。我々の持つ情動的、論理的手段も、突き止めれば物理的なものでしかありません。我々には、亡霊に対抗する手段がないのです。これを阻止する為には新たにESPエネルギーを用いた何らの論理防御システムを構築する必要があります」

「そのESPエネルギーを用いた論理防御システムには既に構想が？」

奈々の言葉に内山は首を振った。

「申し訳ながら、我々はESPエネルギーの特性について詳しく知りません。まずは、物理的な制御が可能になってから、ということになります。ですが、そうした技術が実装される気配は今のところありません。防御手段が存在しない以上、対ESPレーダーの新たな開発を進言いたします」

やはり、と思う。結局、亡霊に対する選択肢は限られているのだ。「我々にできることは亡霊の早期発見を以ってして、特殊戦術中隊による殲滅を行うこと、ということかしら。他はESPエネルギー自体に対する新たな知見が得られない限りはどうしようもないわね」
奈々の言葉に広報部長、山田茂雄が立ち上がった。

「それ以外に、我々には対人活動における優位性があります。話が逸れますが、高梨市の異変以降、国民の亡霊への注目が高まっています。今のところ、これが収まる気配はありません。何らかのガス抜きを行うべきです」

「具体的には？」

「亡霊への恐怖から目を逸らさせるには錬度を示すしかありません。特殊戦術中隊による曲技飛行によるパフォーマンスを行います。また、特殊戦術中隊の中でも桜井優を前面に押し出し、救世主性を演出します。既に企画として概要がまとめあげられているので、詳しくはこちらをご覧ください」

山田茂雄がにこにこ笑いながら左綴じされた資料を奈々に差し出す。奈々は表情を変えずにそれを受け取り、さっと中に目を通した。

桜井優をトップに据えた曲技飛行。具体的なプログラム、そして開催場所、各種メディアの選別、費用の見積もりが既に決定されていた。奈々の目がすっと細まる。

「特殊戦術中隊は見せものではない」

「ええ、理解しております。ですが、陸・海・空軍も同様のパフォーマンスを行っております。これは、国民の支持を得る為に必要な事とご理解ください。桜井優の容姿は、その、悪くありません。他

の小隊長についても同様です。想像以上の効果をあげることをお約束します」

桜井優の容姿は、の件で奈々の目がますます剣呑なものになった。それを素早く感じ取った明日香が立ち上がり、異議を申し立てる。

「待ってください。過剰な注目は中隊員の精神的負担になります。彼らはアイドルではない。特に、第三小隊長の佐藤詩織は男性恐怖症を、第五小隊長の進藤咲は対人恐怖症に近いものを持っています。くだらないパフォーマンスの為に、彼女たちに多大な負荷をかけることには賛成できません」

「では、桜井優だけを引き続き登用しましょう。戦略情報局の広報戦略により、彼は既に多くのメディアに露出しています。無知は恐怖を、恐怖は攻撃性を生みます。これを機会に同一説などという馬鹿げた俗説を一蹴できるかもしれません」

山田茂雄はニコニコと笑みを絶やさず、尚も食い下がった。それに対して、防諜部長の佐々木三蔵が冷たく言い放つ。

「その馬鹿げた俗説はS I Aの恐ろしく高度な作戦がもたらせた結果だろう。S I Aの恐ろしく高度な高度すぎて私のような凡人にはその戦略的価値がわからないような戦略に加担して、良い結果が帰ってくるとは思えん」

佐々木三蔵の言葉に保安部の浜中博人が続く。

「大衆は蒙昧で、無責任だ。社会に不満を持つ多くの者たちは自らの社会貢献に興味がなく、如何に他者を社会貢献に参加させ、その甘い汁を吸うか、にしか興味がない。このパフォーマンスは無駄だ。子どもが必死で戦っている姿を見ても、そういった層は何の感慨も抱かないだろう。彼らは評価する側に立つこと自体に意義を見出しているのだ」

流れが偏りそんなことを感じ取り、総務部長の武井瞳が努めて中立性を意識した意見を上げる。

「確かに、そうした亡霊対策室への反感を持つ者の意見がこのパフォーマンスで変わることはないでしょう。ですが、この効果は大衆

の不安を払拭することにあります。データとして、何らかの行動を起こしていない層の変化は掴みづらいますが、ある程度の露出は安心感を得る為に必要なことではないでしょうか？」

大体の意見を聞いた奈々が加奈に目をやる。加奈は少し考える素振りを見せてから口を開いた。

「子ども、つまり社会的弱者を前面に出すことで多くの同情、同調を得る事ができると思いますが、そうした盾に本能的な嫌悪感を抱く人も少なからず存在し、それを無視することはできません。我々が回避すべきは曖昧な反感ではなく、明確な攻撃意思です。明確な敵を作り得るこの企画には賛同できません」

奈々は頷いてから、山田茂雄に目を向けた。

「とりあえずは保留にしましょう。ただ、亡霊への恐怖感が広がっているのは事実。何らかの手は必要のようね。ただし、特殊戦術中隊に負担をかけるような企画は認めない」

「はい」

山田茂雄はにこにこ頷き、特に不服そうな様子は見せずに着席した。それを確認してから奈々は次の問題についての資料を取り出し、無感動に読み上げた。

「奈々！」

定例会議が終わり、全員が会議室から出ていった後、明日香が険しい顔をして話しかけてきた。

「どうしたの？」

「今の会議、どういうこと？」

「何の話かしら？」

資料をまとめながら訊ね返す。明日香は声を抑えて答えた。

「特殊戦術中隊の曲技飛行パフォーマンズについて話が出た時の態度があらさすぎる。わかっているでしょう？」

奈々は手を止めて、明日香に向き直った。明日香が言葉を続ける。「我が司令官様は十六歳の子どもに熱を浮かせてる、って噂になるわよ」

「そんなつもりは……」

「あなたにそういうつもりがなくても、周りは違う。優くんの話や山田さんが出した時、すつごく怖い顔してたわよ。あれじゃあ、勘違いされても仕方ない」

そう言っつて、明日香はため息をついた。反論できず、黙り込む。

「沙織ちゃんと優くんを重ねるのはやめなさい。それは、二人に対して失礼よ」

「……明日香には関係ないでしょう」

「カテゴリーエラー。らしくないわね。自覚があるのに、認めようとしするのは何故？」

奈々はため息をついて、諦めたように笑った。

「わかった。だからそうやって分析するのはやめてちょうだい」

奈々はそう言っつてから少し考え込み、明日香を睨みつけた。

「……優君を特別視している、というのは認めましょう。でも、彼に沙織を重ねているわけじゃない。彼は私にとっての希望なのよ。それは多分、私だけじゃない」

明日香が何か言いそうになった時、二人の懐から亡霊の探知を知らせるアラームが鳴った。お互いにチラリと目を合わせ、溜め息をつく。

「話はまた今度」

「ええ。別に、奈々が持つ感情については言及しないから安心して」
去り際に残した明日香の言葉に、奈々は小さく肩を竦めた。

4章 4話 奥村音々

廊下中に響き渡る警報で桜井優は我に帰った。反射的に端末を取り出し、出撃命令が来ていないか確認する。出撃命令が下ったのは第二・第五小隊だけのようで、優には関係がないようだった。端末をポケットにしまい、辺りを見渡す。寮棟の廊下のようなだったが、人影はない。どうやってここまで来たのか記憶がなかった。本部内の本屋へ用があるという京子と別れたところまでは覚えていたが、それからの記憶が欠如していた。

混濁する記憶に戸惑いながら、自分が何をしようとしていたのか考える。目の前には一つのドアがあった。ネームプレートはなく、どうやら空き部屋のようなだった。それを意識した途端、言いようのない郷愁感に囚われ、無意識のうちに足を踏み出した。

優はまるで何かに導かれるようにドアノブに手を延ばした。冷たい金属の感触。それをゆっくりと回すと、カチリと小さな音を立てて呆気なくドアは開いた。

僅かに躊躇した後、優は思い切ってドアを手前に引き、中を覗きこんだ。玄関と寮棟の部屋に共通の暗く短い廊下が見える。ドアを押さえながら、優は中に一步踏み出した。埃の匂いが鼻をつく。長い間、誰もこの部屋を使っていないようだった。

ドアを押さえていた手を離し、もう一步踏み出す。後ろでドアの閉まる音。そして静寂が訪れる。廊下の一角に備え付けられた調理スペースには調味料が並び、この部屋を使っていた主が料理好きだったことがわかった。

靴を脱ぎ、何かに怯えるようにゆっくりと暗い廊下を進む。突き当たりの白いドアを開けると、優の部屋と同じ六畳の洋室が広がっていた。

大きめの本棚。勉強机。クローゼット。ベッド。そして中央に円形のテーブル。窓際には淡いピンク色のカーテンがかかっている、

太陽光を遮っている。優は部屋の中をゆっくりと見渡しながら、熱に浮かされたようにフラフラと室内を歩き回った。

女の子の部屋にしてはシンプルな部屋だった。あまり装飾の類に興味がなかったのだらう。生活感を感じづらい部屋だった。そして、ある事に気づく。この部屋は世界から独立していた。テレビ、ラジオ、パソコン、電話。外部との繋がりが示すあらゆる物が一つも存在しなかった。この部屋は、逃げ場だったのだらう。部屋の主にとって、世界は脅威でしかなかった。それに気付き、背中に寒気が走る。

頭の中で警鐘が響いた。

この部屋にはいけない、と意識の奥に潜む明確な何かが叫び声をあげる。

しかし、それに反して優は勉強机にゆっくりと近づいた。

耳鳴りが響く。

それさえも無視して、何かを求めるように机上に散らばったノートと参考書に注視する。勉強の途中で休憩を入れ、そのまま放っておいた様子だった。

死んだのだ。

そう、理解する。恐らくは、亡霊との戦闘で命を落としたのだらう。部屋の主は、明日この続きを勉強するつもりで出撃し、そのまま帰らぬ人となったのだ。

震える手で、机上に広げられたノートに手を延ばす。綺麗な字だった。数式と注釈が復習しやすいように上手くまとめられている。パラパラと捲ってから、それを元の場所に戻す。それから、優は立てかけられた別のノートに手を延ばした。数多くあるノートの中から、迷わず一つを選択する。

R a i s o n d ' e t r e .

ノートの表紙には、小さく綺麗な字でそう書かれていた。

心臓がとくとんと跳ねる。

耳鳴りが激しくなり、眩暈を感じた。

得体の知れない懐かしさを覚え、ノートの表紙を指先でそつと撫でる。

優は不意に泣きそうになった。

うまく息ができなくなり、思考が混濁する。混濁した思考の中に引き込まれそんな錯覚を覚え、頭を振る。そして、震える指先で表紙を捲ろうと

「誰だ！ 何をやっている！」

背後から届いた激しい誰何の声に、優は驚いて振り返った。開いたドアから半身を覗かせた若い女が優の顔を見た途端驚いた表情を見せる。

「さ、桜井？」

女は部屋の中に一步踏み出し、困惑したように優をみつめた。慌てて頭を下げる。

「ごめんなさい。空き部屋と思って、興味本位で入ってしまいました」

「そ、そうか。大声をあげてすまなかった。私は隣の部屋で暮らしてるんだが、隣から物音が聞こえて驚いてな」

優は手にしていたノートを机の上において、女の顔をじつと眺めた。肩までかかる黒髪に金色のメッシュが混じっている。

「えっと、第六小隊の……」

「奥村音々（おくむら ねね）だ」

音々はそう言って、不器用そうな笑みを浮かべた。

「ここ、何なんですか？」

「昔、柘沙織が使っていた部屋だ。最初のESP能力者。神条司令の意向で、彼女が亡くなった時のままの状態で保存されている」

「柘、沙織の……」

音々の言葉を反芻し、室内を見渡す。最初の希望となった彼女の部屋。そこは、あまりにも冷たい印象を受ける場所だった。

「桜井は、沙織の知り合いだったのか？」

「え？」

不意に投げかけられた問いに、優は首を傾げた。

「昔な、沙織がユウと呼ぶ友人の事を話していたんだ。私自身はユウと会ったことはなかったんだが、話を聞く限り沙織とは親しい仲間だったらしい。もしかしたら、と思っただけだが違うようだな」

残念そうに言う音々に、優は戸惑ったように尋ねた。

「奥村さんは柊沙織と話した事があるんですか？」

「ああ。私は三番目のESP能力者なんだ。生きている中では、私が最古参になる」

そう言っ、音々は寂しそうな笑みを見せた。生きている中では、と音々は言った。一番目のESP能力者である沙織だけでなく、二番目のESP能力者も既に亡くなったのだらう。

「出よう。ここは私たちが勝手に入って良い領域ではない」

音々はそう言っ、顎で玄関の方を指した。そのまま背を向ける音々の後を追おうとして、勉強机の方を一度だけ振り返る。Randretreと題されたノートの事が酷く気になった。しかし、それは生者が見るべきものではない気がして、優はノートから目を背け、再び音々の後ろを追っ部屋を後にした。

二人して廊下に出てドアを閉めた時、音々が思い出したように口を開いた。

「そういえば桜井が部屋に入った時、鍵はかかってなかったのか？」

「はい。簡単に空きました」

「総務部の人がかけて忘れたのか。杜撰な管理だな」

音々は溜め息をつき、腕時計に目をやった。

「それじゃあ、私はこれで失礼するよ。空き部屋だからって、勝手に入るんじゃないぞ」

子どもに言い聞かせるような口調で音々はそう言っ。事実、音々にとって優はまだまだ子どもなのだらう。三番目、と音々は自称した。亡霊が初めて現れたのは八年前。亡霊対策室が誕生したのはそれから二年後、つまり六年前だ。二十歳を超えていると見て間違いない。そしてその長い間、彼女は最も多くの死を間近で見てきた

のだ。そう考えると、去り行く音々の後ろ姿が酷く弱々しいものに見えた。

死を回避する為には、強くなるしかない。それが自己と周りを守る唯一の方法。不意に、凜との訓練を思い出す。特殊戦術中隊の訓練は、集団戦を想定したものだ。あの訓練だけでは、イーグルやホムンクルスのような格闘戦を仕掛けてくる亡霊を相手にする事は難しい。何が来ても負けないようにするなら、凜との訓練のように個人技能を最大限に生かして戦う為の訓練が必要不可欠だ。

死、を象徴する柊沙織の部屋のドアに目を向け、優は寒気を感じた。残されたノートと参考書を思い出す。言いよりの知れない恐怖感が湧きおこり、優はそれを振り払おうとするかのように、柊沙織の部屋に背を向けて歩き出した。

4章 5話 宮城愛(5)

十二月に入り、日本中が寒さに震えていた。

北の方では既に雪が積もり、いくつかの交通機関が麻痺しているという。街はクリスマススの到来を歓迎する装飾に彩られ、鮮やかなイルミネーションに包まれていた。

その日、桜井優は華、京子、愛の三人とともに夜の街を歩いていた。

「もうすぐクリスマスかあ」

マフラーに口を埋めた華が独り言のように言う。

「桜井はさ、クリスマスに何か予定あんの？」

京子が並木を彩る光の粒子を眺めながら、何気なさを装って言った。その途端、華、愛の視線が優に集中する。何とも言えないプレッシャーを感じ、優は無難な答えを選んだ。

「何も無いよ。皆でどこか遊びに行く？」

「……優、本当に予定ないの？」

「……悲しくなるから聞き直さないでほしいんだけど」

愛の問いに軽いシヨックを受けながら、溜め息を吐く。空气中に白く具現化された溜め息を眺めながら、優は横目で愛を見た。

「もしかして愛ちゃんは予定あるの？」

「……ない」

何故か少し嬉しそうに言う愛に苦笑しながら優は他の二人に目を向けた。

「華ちゃんと京子は？」

「私もないよ」

「つてかさ、予定ないの知って聞いてるでしょ」

華は特に気にした風もなく頷き、京子は僅かに不機嫌そうな答えを返した。優はそれを意に返さず、屈託のない笑みを浮かべた。

「じゃあ、皆で過ごせるね」

その笑顔があまりにも裏表のない無邪気なものに見えて、華は一瞬その笑顔に見とれてしまった。

「……雪」

不意に愛が呟く。一瞬、姫野雪の事かと優は思ったが、イルミネーションに照らされて夜空を舞う光の粉を見て、すぐに天気の話だとわかった。

雑路の中、自然と足が止まる。四人は空を見上げ、暫くその光景に見入った。周りを歩く人々も優たちと同じようにその場で立ち止まって、じつと夜空を見上げた。

「すつごく綺麗だね」

華が白い吐息を漏らしながら歓声をあげる。優は頷いて、手のひらを体の前に差し出した。雪が手のひらに落ち、溶けて消えていく。そこで、優はあることを思いついた。

「ねえ、ちよつと向こうの方向かない？」

「え？ さ、桜井くん？」

突然大通りから離れた人気の少ない路地に向かって歩きだした優に、華が戸惑ったような表情を見せる。愛も困惑したように小首を傾げたが、すぐにその後を追った。それに釣られるように華と京子が続く。

三人が優に追いつくと、優は足を止めて振り向き、周りを気にするよつな素振りを見せた後、無邪気な笑みを浮かべた。

「少し早いけど、クリスマスプレゼント」

優は楽しそうに笑いながら、右の手のひらを体の前に差し出した。突然、その周囲が淡い光に包まれる。それに呼応するように周囲に舞い降りる雪が翡翠の光を纏い始めた。暫くは優の手のひらの周辺にしか効果がなかったのが、時間とともに上空に雪が発光する範囲が広がっていく。優の差しだした右手の上にも光の柱が現れたようだった。

「ESP能力？」

京子が呟くように言う。優は頷いて、残った左手を光の柱に向け

た。輝きながら舞い降りていた雪が不意にふわりと舞い上がり始める。

「すーいー！」

空に昇っていく光の粒子を見て、華がはしゃいだ声をあげる。優が左手を動かすと、それに合わせるように光り輝く雪が頭上に集まり始めた。やがて、それは蝶々の形を作り出し、周囲の雪を光の粒子に変えながら、ひらひらと夜空を舞い踊った。

「うそ……。どうやってるの？」

京子が信じられないといった様子で蝶々を見上げる。優はクスリと笑って、光の蝶々に向けていた左手を僅かに下した。蝶々が京子の元へゆっくりと降りてくる。京子が右手を差しのべると、蝶々は指先にとまり、休むようにゆっくりと羽を閉じた。京子が恐る恐る左手を蝶々にのばすと、蝶々は優雅にその手から逃れ、横にいた愛の周りをひらひらと舞った。

「……綺麗」

愛が両手を延ばす。その時、蝶々の輪郭が曖昧になり、それを構成していた光の粒子となって愛の差しだした両手の上にふわりと舞った。やがて、それは次第に輝きを失っていき、元の雪となって柔らかに溶けた。

「桜井……今の何だったの？」

「年末用の隠し芸、かな」

優の言葉に、華がクスリと笑った。

「私、あんな使い方初めて見たよ」

「……私にも出来る？」

愛の問いに優は考え込むように首を捻った。あれは、ここ数日の間に毎日行っている凜との訓練中に考えついたものだ。何の訓練もなしに、ああいった細かな制御を実行することは難しいだろう、と考える。

「んー……、ちょっと難しいかも。失敗すると悲惨なことになるし」さらっと恐ろしい事を言って、優は夜空を見上げた。

「雪、強くなりそうだね。そろそろ戻る？」

「だね。時間的にも遊びづらいだね」

優の提案に華が頷く。京子と愛もあっさりと賛同し、四人は雪の降る街を仲良く歩き始めた。

「……これだけ降ると別に綺麗でも何でもないなあ」

本部から寄越されたバスに乗りながら、京子が窓の外を眺めて呟いた。バスには優たち四人の他に警護の為に同乗している保安部の人間が三人しかいない為、空席が目立っている。優たちは最も後ろの広い席に京子、優、華、愛の順で座っていた。

「明日は雪合戦ができそうだね」

京子の肩越しに外を覗いた優が楽しそうに言う。

「でも、寒いのは嫌だなあ」

と華。優は頷いて、華を挟んだ窓際にいる愛に目を向けた。目を瞑り、じつと下を向いている。

「愛ちゃん、寝てるの？」

「……起きてる」

愛が顔を起こし、優を見返した。眠気はあるが、寝れないといった感じだった。優は少し考えて、華を視線を移した。

「ごめん、華ちゃん、席代わってくれる？」

「ん、いいけど……」

華が不思議そうな顔をしながら立ち上がる。優は空いた席に一つずれて、華と席を交換した。そして、アウターとマフラーを脱いで膝にかけた。

「愛ちゃん、良かったらここで寝る？」

急ごしらえで作った枕をのせた膝を叩き、愛に話しかける。華越しに京子はその行動を見て、呆れたように言った。

「膝枕って、バカップルじゃないんだから」

「でも、バスって寝づらくない？ 本部までまだかかるし、眠ったほうがスッキリするんじゃないかな」

優がそう答えているうちに、愛が優に抱きつくようにして頭を膝に乗せた。そして、すぐにスースーと静かな寝息を立て始める。

「疲れてたのかな」

そう言って、優は愛のしなやかな髪を優しく撫でた。

「一番疲れてるのは桜井じゃないの？」

複雑そうな目で愛を見ながら京子が言う。優は愛の髪を撫でながら、不思議そうに京子を見た。京子が僅かにイラついたように言葉を続けた。

「最近、毎日白崎さんの訓練に付き合ってるでしょ。あまり、無理しないでよね」

「……桜井くん、人には優しいのに、あまり自分を労わらないよね。もう少し、周りを頼っても良いんだよ？」

京子の言葉に合わせるように華がどこか悲しそうに笑いながら口を開いた。優は僅かに口ごもって、眠っている愛に視線を落した。

「無理はしてないし、誰も見てないところでサボってるから大丈夫だよ」

優が僅かに茶化してそう言った時、狭いバスの中に電子音が響いた。そしてポケットの中で震える端末。その場にいた全員の動きが固まった。膝の上で愛が僅かに身じろぐ。

優が無意識に窓の外を見ると、バスはちょうど本部の敷地に入っただとところだった。雪は、当分止みそうになかった。

4章 6話 望月麗（11）

出撃ゲージの中、優は冷たい床にしゃがみこみ、黙々と慣れた手つきで機械翼の点検を行っていた。今回出撃命令が下ったのは第一、第三、第六の三個小隊。確認されている亡霊の数が百を超えている為、それなりの戦力で迎え撃つ事になっている。

「先輩、帰ってきたばかりって聞いたんですけど、お疲れじゃないんですか？」

優が機械翼を点検していた時、第一小隊の望月麗が心配そうに顔を覗きこんできた。

「僕よりも愛ちゃんの方がまずいんじゃないかな。さっき少し眠ってたから」

そう言って愛を見る。しかし、愛は既に眠気が飛んだらしく、真剣な表情で小銃の点検を始めていた。

「宮城先輩は切り換え早いんですから」

「僕は切り換え遅いってこと？」

そう返すと、麗は慌てたように手を振った。

「あ、いや、違います！ そう言う意味じゃなくて！」

優はクスリと笑みをこぼし、立ち上がった。

「わかってるよ。心配してくれてありがとう」

機械翼を装着し、小銃を抱える。そして、ゲージの中を見渡した。既に五割ほどが準備を完了している。壁際に集まっている華、詩織、凜の三人の小隊長のもとへ足を運んだ。

「雪強そうだけど大丈夫かな。こういう日の戦闘経験ってあるの？」

「少しの雪なら何回か経験があります……」

詩織はそう言って、口を噤んだ。今日みたいな大雪の日での戦闘は殆ど経験がないのだろう。横にいた凜が僅かに考える素振りを見せて、口を開いた。

「……念のため、普段より間隔を大きくとりましょう」

「そうですね。衝突だけは絶対に避けないと」

頷いて、もう一度全体を見渡す。かなりの割合で準備が整っているようだった。各小隊長が前に出て、整列を促す。準備完了を確認できた小隊から順に通信機で奈々に報告をあげた。

通信機の向こうから奈々の応答が届く。次いで、ハッチが開き、その奥から深い闇が姿を現した。雪が吹き込み、出撃ゲージ内の気温が急速に低下する。

『第一小隊、飛行準備態勢を。カウント開始』

機械翼が一斉に展開し、第一小隊の全員が腰を低く落とす。ハッチの外から届く風切り音と電子オペレーターのカウント音だけが出撃ゲージを満たした。

カウントが終わると同時に優と華を先頭にして、第一小隊がハッチから冬の夜空に飛び立つ。そのすぐ後に第三小隊、第六小隊が続いた。

冬の夜。戦闘服の下に耐寒スーツを着込んでいたが、それでも寒さを凌ぐ事はできない。加えて、大雪による視界不良とコンディション是最悪だった。ESP能力者は普通の人と比べ、環境適応力が強いという。しかし、これも悪条件が重なると、ESP能力者であってもどうしようもない。

優は寒さを紛らわそうと、眼下に広がる人工的な光の群れに目をやった。雪に紛れて霞む街明かりは言葉では言い尽くせないほどの壮麗さを誇っていた。それがあまりにも温もりに溢れたものに見えて、優たちが生きる世界とは別物のように見えた。空と陸を隔てる何かが存在し、それが二つの距離を致命的なまでに遠ざけている。凍える身を抱き、優は温かな街明かりから視線を逸らして後ろを見渡した。降り付ける雪の間から識別ライトの放つ輝きが覗いている。眼下に広がる明かりとは種類の異なる強い光。その中、一際明るく輝く三つの光が他の光を統率し、寒風を切り裂いて健気に付き従うように優の後を追い続けている。

『広範囲で上昇気流の発生を確認。積乱雲の成長に従い、雪足が強

くなることが予想されます。ご注意ください』

解析オペレーターの報告が風切り音に混じって届いた時、優たちは海上に出た。大量の雪が黒く染まった海に呑みこまれていく光景は圧巻だった。どれだけ雪が降っても、黒に染まった海が白く染まる事はない。白と黒。大自然の壮大な闘いを眺めながら、亡霊も似たようなものかもしれない、と考える。台風のように次々と現れ、人々に混乱を振りまくその特性はまさしく自然のものだ。亡霊にとって、ESP能力者は海に沈んでいく雪と同程度のものでしかないのかもしれない。どれだけESP能力者をつぎ込んでも、亡霊はあの闇に染まった海のようにそれを呑み込み、何事もなかったようにその存在を誇示し続けるだろう。

『予測衝突点まで後五分です』

解析オペレーターの報告。次いで、奈々の命令が飛ぶ。

『各自、兵装チェック。高度……維持。横陣運動。……敵数、百十
二。同じく横陣』

兵装の確認の終え、それぞれの小隊ごとに一列に並ぶ。兵を遊ばせる事がない為、横陣は最も効率的な隊形と言える。何より、味方の射線を意識する必要が薄い為、味方が多い場合は非常に融通が効く隊形でもある。

『構え』

降り付ける雪の向こうからぼんやりと紫色に光る何かが見え始める。じつと滞空を続けながら、優は命令通りに小銃をゆつくりと構えた。

亡霊との距離が狭まっている事を物語るように、その輪郭が徐々にをはっきりとしてくる。強い風の音が聴覚を支配し、雪の降る夜空の中に浮かぶ異質な怪物の姿が視覚を支配した。

『距離、五〇〇……四〇〇……三〇〇……』

電子オペレーターのカウントに耳を傾けながら引き金に指をかける。

『三〇〇……四〇〇……亡霊が、後退を始めています』

思わぬ報告に優は引き金から指を外し、亡霊に目を向けた。悪天候と夜であることも相まって肉眼では確認しづらかったが、確かに亡霊の姿が遠ざかっているように見えた。

『前進。畏である可能性が高い。反転に注意する事。何があっても隊形を乱さないように』

奈々の命令に従って、横陣を組んだまま第一、三、六小隊は慎重に前進を始めた。

『距離、五〇〇……………六〇〇……………距離を離されていきます』

『……………戦う気がないなら放っておきましょう。全軍、反転』

奈々が迷うように決断を下す。殲滅が目的ではない為、優も特に意見することなく素直に本土目指して帰路についた。しかし、再び通信機から届いた電子オペレーターの声に優は動きを止めざるをえなかった。

『亡霊群、再び前進を始めました。距離、六〇〇……………五〇〇。追いつかれます』

『……………反転、前進を命ずる』

奈々の命令で再び優たちは亡霊に向かい合って小銃を構えることになった。しかし、それに合わせるように再び亡霊が後退を始める。この一連の不毛な前進と後退を何度か続けるうちに、特殊戦術中隊全体に困惑の波が広がり始めた。

『……………現座標を維持。相手の出方を見ましよう』

奈々も判断に困っているようで、珍しく歯切れの悪い声で新たな命令を出した。積乱雲の下、優たちは止む気配のない雪に濡れながら小銃を構えてじっと亡霊の次の動きを見守った。

『……………亡霊も動きを停止したようです』

電子オペレーターの報告に、優は遙か遠方に浮かぶ亡霊たちを睨みつけた。

一体何のつもりなのだろう。雪の中、無駄に時間を消費させて体力を奪うことが目的なのだろうか。しかし、それはあまりにも亡霊

らしくない戦術だった。

『……全速前進。隊形を維持したまま、亡霊群を射程におさめるまで前進を続けなさい』

奈々も優と同じ考えに至ったようだった。体力の消耗を考えれば早いうちに殲滅しなければならぬ。優たちは反撃に合う危険性を無視して雪の中を飛翔し始めた。前方から受ける風圧が大きくなり、体感温度が急激に下がる。

『ダメです。追いつけません。距離五〇〇を維持したまま亡霊は後退を続けています』

電子オペレーターの声に焦燥の色が混じり始める。

下方には海。上空には積乱雲。左右には味方。前方には亡霊。変わらぬ景色の中、自然と焦りだけが膨らんでいく。数キロメートル進んだところで切りがないと判断し、優は通信機に向かって叫んだ。「神条司令！ このままでは埒があきません。僕が斬りこみに入り、足止めをします。その後、全軍で叩きましょう」

横陣を組む以上、速度を他に合わせなければならぬ。その為、優や小隊長各はかなりの速度を落としている。亡霊に追いつけない以上、速度を出せない隊員を無視して、可能な限りの最大戦力で亡霊に追撃を入れ、後退を妨害するしか方法がなかった。恐らくは奈々もその戦術しか選択がないことを承知しているのだろう。しかし、百を超える亡霊群に少数で突撃するのは危険性が高すぎる。通信機から迷うような奈々の声が届いた。

『……認めましょう。ただし、君一人で行かせることはできない。

華、詩織、凜、異論は？』

『ありません！』

『行きます』

『問題ありません』

三者三様の答えが通信機から届く。

『これより、各隊長を中心に全力で亡霊に追撃をいれる。人数差を可能な限り埋める為、他に速度に自信がある者もそれに続きなさい。

危険が伴う為、自信のない者は隊形を維持したまま前進を続けること』

奈々の言葉に通信機から返事の声が多数届く。

『攻撃の開始を命ずる。機動ヘリの速度と天候により、こちらからのオペレートには制限がある。各自、細心の注意を払うように』

奈々の許可が下りるとともに、優は横陣から弾かれたように飛び出した。それに華、詩織、凜が続く。他にも多数の少女が横陣から飛び出して後を追い始めた。

『トップとの相対距離……五〇〇……四〇〇……徐々に距離を詰めることに成功しています』

電子オペレーターの報告に安堵する。亡霊が更に速度を出した場合はどうしよう、という不安があったが、どうやら杞憂に終わったようだった。

雪で塞がれた視界の彼方に浮かぶ亡霊の姿が徐々に近づいてくる。優は小銃を構え、それに狙いをつけた。

『三〇〇……二〇〇……一〇〇！』

射程に入ると同時に引き金を引く。光弾が飛び出し、亡霊の群れの中に吸い込まれていく。着弾を確認する前に優は更にESPエネルギーを装填し、次々と引き金を引いた。光の嵐が亡霊の群れに降り注ぐ。

『亡霊に新たな動きを確認！ 方陣に移行！』

『距離八〇……六〇……四〇』

今まで横陣をとっていた亡霊が徐々に密集を始めるのが肉眼でもはっきりと分かった。小銃を放り捨て、両手のグローブを外し、ESPエネルギーを練って槍を形作る。

『距離三〇……二〇……一〇』

亡霊の最後尾を駆ける亡霊に向かって、優は槍を構えて突撃を開始した。最も近い亡霊に向かって槍を突き刺す。何の手応えもなく、攻撃を受けた亡霊は崩壊を始めた。呆気なく散った亡霊から槍を引きぬいて、残った亡霊からの反撃に備えようと高度を下げる。

亡霊群の下方に回りながら優は槍を作り出してESPエネルギーの供給をとめ、空いた手から上方の亡霊群に向かって光弾を撃ち込み始めた。高速で飛行し続ける亡霊には中々命中しないが、数体の亡霊が回避行動をとった為に陣形が乱れ始める。遂に一体の亡霊が群れから飛び出して優に迫ってきた。しかし、他の亡霊は依然として後退を続けている。優は襲ってきた亡霊を振り切るような空戦機動をとり、速度をあげて亡霊群の下方から先頭集団目指して飛翔を始めた。その間、亡霊群はまるで優の存在を無視するように何の攻撃も加えてこなかった。沈黙を守り続ける亡霊群に得体の知れない不安を感じたものの、優は好機と見て攻撃の手を緩めようとはしなかった。移動と共に光弾を群れに撃ち込み続ける。優が亡霊群の下方から戦闘集団に追いついた時、亡霊群の側面から優と同じように凜が回りこんできているのが見えた。上方からは華と詩織が回りこんでいるようだった。亡霊の前方で合流し、後方の亡霊に四人で攻撃を加える。しかし、それでも亡霊群は速度を緩める気配を見せなかった。

『亡霊は何をするつもりなんでしょう？』

通信機から詩織の声。その問いに誰も答えることはできなかった。亡霊群からESPエネルギーの増幅を確認。攻撃に備えてください』

電子オペレーターの報告。同時に四人は無言で頷き合い、四方に散った。直後、亡霊群から凄まじいESPエネルギーの嵐が一斉に吐きだされる。直撃は免れたものの、強烈な気流変化を受け、四人は大きくバランスを崩した。妨害を諦めて、機械翼の制御に集中する。その間、亡霊は追撃を試みようとはせず、ただ一定の方向を指して飛行を続けた。

「亡霊に積極的な攻撃の意思はなく、本隊から距離をとり続けることに集中しているようです。予想以上に足止めは難しいかもしれませんが」

亡霊群の側面に回り、僅かに距離をとりながら通信機に向かって

叫ぶ。

相手は百を超える大群だ。優たちが数体倒したところで何の影響も出ない。その動きを止め、本隊と合流して叩かない限り、亡霊を殲滅することは難しい。負ける要素はないと言っても過言ではないが、勝てる要素も見つからない闘いと言え。悪天候による体力の消耗を加味すれば、時間が経つにつれ優たちが不利になっていく。

優は通信機からの新たな命令を待った。しかし、奈々からの新たな命令は届かない。恐らくは奈々にも打つ手がないのだろう。優たちがここで引き返したところで、亡霊群は再び反転して距離を詰めてくると予想できる。消耗しきる前にこちらから追いかけて殲滅するしか方法がないのだ。

優は少し考えてから、ある覚悟を決めた。本隊が追いつけないならば優たちだけで亡霊を殲滅するしかない。ありつたけのESPエネルギーを手のひらに集め、攻撃の準備を整え始める。

「誰も亡霊群に近づかないください。攻撃に巻き込まれる危険性があります」

通信機に向かって叫んだ後、優は手のひらに集まったESPエネルギーの塊を亡霊群に向かって放出した。反動でバランスを崩し、上体が大きく後ろに傾く。姿勢制御に移りながら着弾を確認しようと顔だけ向けると、一条の光が亡霊群の中央に吸い込まれていくところだった。

『三体の亡霊のロストを確認』

電子オペレーターの報告。単純に考えれば、後三十数回今の攻撃を繰り返せば殲滅が可能ということになる。優は再びESPエネルギーを練り、全身からESPエネルギーを手のひらに集め、一つの光球を作りだした。その間、凜が亡霊群の前方から攻撃を加えているのが見えたが、致命的なダメージは与えられていないようだった。手のひらを亡霊群に向けて狙いをつける。先程放った攻撃よりも遥かに高エネルギーの、持てる限りのESPエネルギーを以って、優は新たなエネルギー波を撃ち出した。放たれたESPエネルギー

の奔流が暗闇を切り裂き、数体の亡霊を呑み込んでいく。

『七体のロストを確認』

電子オペレーターの淡々とした報告に、優は息を切らせ、何事もなかったように飛び続ける亡霊群を睨みつけた。

殲滅は不可能だ、と判断する。持てる限りの全ての力を注ぎこんでも、僅か十体しか削る事ができなかった。これでは体力が持たない。既に二発の攻撃を放っただけで優の身体には無視できないほどの疲労感が募っていた。唇を噛んだ時、通信機から電子オペレーターの切迫した声が響いた。

『このまま亡霊に続けば後十分で白流島に到着する事になります』

思わぬ言葉に、優は反射的に亡霊の進行方向に目を向けた。降り付ける雪の更に向こう。水平線の彼方。そこに紫色に光る何かがあった。亡霊の本拠地、白流島。

優は背筋に冷たいものを感じて、夜の海で不気味に光る白流島を呆然と眺めた。

4章 7話 神条奈々(6)

全ての根源、白流島。

それが目前まで迫っていた。亡霊との戦いが始まって八年。過去にここまで白流島に接近した事例は存在しない。不思議な高揚感に包まれ、桜井優は水平線の遙か彼方に浮かぶ白流島をじっと見つめた。強く降り付ける雪も、百を超える亡霊の大群も、最早気にならなかつた。あの島がなくなれば、全てが終わる。訳の分からないままに開始された闘争が、終息する。優は熱に浮かされたように、白流島向かって優はフラフラと飛行を始めた。

『亡霊が白流島に着くまでに可能な限りの攻撃を！ これ以上白流島に近づいたら何が起こるか分からないわ！』

通信機から響く奈々の声で、優は我に帰った。亡霊の目的は間違はなく優たちを白流島に誘き寄せることだ。

ここにきて、ようやく優は選択肢がない事に気付いた。亡霊が現れた時点で、あるいは雪が降った時点で優たちに選択肢は与えられていなかった。

全ては、亡霊のシナリオ通りに動いていると見て間違いない。亡霊の動きは戦術的な範囲を超え、戦略的なものになっていることを悟る。百体以上の亡霊を投入してきたのは、攻撃の為ではない。ただ白流島に着くまで耐える為だけに、それだけの数を投入してきたのだ。優は体力の温存といった考えを放棄して、再びESPエネルギーを練り始めた。こうなれば、亡霊の用意したシナリオを崩すしかない。亡霊群の側面を飛び続けながら、優は慎重に狙いをつけて三度目のエネルギー波を放った。空間がうねり、側面を守っていた数体の亡霊が吹き飛んでいく。それでも、亡霊群は依然として何事もなかったかのように白流島への行進を続けている。

休む暇もなく、優は更なる攻撃の為に新たなESPエネルギーを亡霊に向けた両手に集中させ始めた。しかし、亡霊もただ耐えるだ

けのつもりではないようで、群れから散発的な光弾が飛んできた。攻撃を諦め、回避行動に専念する。高度を上げて大きく攻撃を回避しながら亡霊群の上方に回りこむと、優と同じように回避行動をとっている識別ライトの明かりが見えた。それを見て、亡霊群に攻撃を加えているのは何人くらいだろう、と考える。優と小隊長格に加え、各分隊長の半分くらいが亡霊群の足を止めようと周囲を取り囲んでいるようだった。それでも膨大な数を誇る亡霊群の動きを鈍らせることさえ叶わない。

亡霊の攻撃が止んだところを見計らって再び攻撃を仕掛けようと上方から亡霊に接近する。その時、強い下降気流が優に襲いかかった。バランスを崩し、木の葉のように下方に叩きつけられる。優は慌てず、機械翼へのエネルギー供給を増幅させ、姿勢制御に専念した。しかし、安定しかけたところで再び上昇気流が吹いた。機械翼がその影響をもろに受けて、強烈な浮遊感に襲われる。降水セルの成熟期。上昇気流と下降気流の共存が始まり、飛行に強い影響を及ぼし始める。優はこれ以上の攻撃は無理だ、と判断して亡霊から大きく距離をとろうと機械翼への制御を強めた。その間にも激しい気流変化が発生し、華奢な優の身体は雪とともに、いとも容易く空を舞った。

『乱気流が……異常な乱気流を確認しました。白流島の影響を何らかの形で受けているもだと思われます』

解析オペレーターへの報告が遅れて入る。白流島はすぐそこまで迫っていた。亡霊群は激しい気流変化を気にする風もなく、白流島を目指し続けている。亡霊は、あらゆる物理的な影響を受けない。それは、天候や気流も例外ではない、ということだろう。

風が冷たい。下降気流は高空の冷えた空気を運び、それは更に昇華によって冷却される。急速に奪われゆく体力と、白流島が近付いていることへの焦燥感が、心身ともに多大な負担となっていた。

白流島は既に肉眼でもはっきりと分かるほどすぐ近くにあった。

正確には、島の姿は一切見えない。島を取り巻く霧、不気味に紫色

の光を放つエネルギー体が数キロメートル先の眼下に広がっていた。亡霊の進行を妨害する事も出来ず、優は徐々に近づきつつある白流島を睨みつけ続けた。あの中は一体どうなっているのだろうか、と考える。あの中に、まだ白流島はあるのだろうか。もしかしたら亡霊が出撃準備終えて整列していたりするのだろうか。

『……停止。これ以上白流島に近づくのは危険すぎる』

白流島まで三百メートルを切った時、奈々が停止命令を下した。姿勢制御に移り、風で乱れる髪を抑えつける。亡霊群が白流島の上空を旋回する様子を見てから、優は後ろを振り返った。数メートル離れたところに華、詩織、凜が散らばっている。その後ろには第一小隊・第二分隊長の川上沙耶。同じく第一小隊の望月麗。加えて第六小隊の奥村音々の姿もあった。他にも分隊長クラスの特種戦術中隊の中核とも言える少女たちが集まっている。

『亡霊は何をしようとしているんでしょうか？』

通信機を通して詩織の声が届く。雪の中、優たちは白流島の上空を飛びまわる亡霊群をじっと眺めた。

頬を冷たい風が撫でる。白い息を吐きながら、優は自らの華奢な身体を抱いた。比較的緩やかな下降気流が周囲を満たし、周囲の気温を下げ続けている。既に指先の感覚がなくなりかけていた。

『本隊が到着するまで待機。合流後、可能であれば最大射程からの攻撃を行う』

奈々の新たな命令が届く。亡霊群から距離を離され続けていた本隊とはかなりの距離が開いていた。遠方に浮かぶ識別ライトの小さな明かりの群れを見て、深い息をつく。その時、強い突風が上方から吹きつけた。

『きゃああああっ！』

通信機の向こうから誰かの悲鳴。しかし、優もそれに構う余裕がなく、突風に攫われてきりもみしながら高空を舞った。積乱雲と黒い海が何度もひっくり返る。平衡感覚が奪われ、上下の境界が曖昧になる。必死に機械翼への制御運動を行うが、再び激しい気流変化

が発生し、新たな混乱が拡散する。それに拍車をかけるように、電子オペレーターの声が風切音に混じって届いた。

『白流島から新たに一体の亡霊が飛び出しました!』

回転する視界の中、鈍い輝きを放ち続ける白流島に視線を向ける。白流島から飛び出す一体の影。

ペンフィールドのホームクルス。

異形のそれと瞬間的に目が合う。それは醜悪な口端を釣りあげて、確かに笑った。

4章 8話 神条奈々(7)

ホムンクルスと目があつた瞬間、桜井優は気流に流されている事を忘れ、機械翼への出力を強めた。それは結果的に優に強力な推進力を与え、激しい気流のうねりから離脱する事に成功した。

「新たな亡霊はホムンクルスです！ 本隊を全て後退させてください！」

轟々と耳元でうなる風切り音に逆らい、優は力の限り叫んだ。それで、司令部はようやくホムンクルスの存在に気付いたようだった。機動ヘリは本隊の後ろに控えている為、前線の細かな様子を把握しきれていないのだ。

白流島から飛び立ったホムンクルスは既に十分な高度に達したよう、優に向かつて高速で迫ってきていた。眼下には霧に包まれた白流島。これが高梨市の状況の再現であることにすぐに気づく。ホムンクルスはある時と同じように優たちを白流島へ落としに来ていると見て間違いない。

「僕が足止めします！ その間に後退を！」

そう言っている間にもホムンクルスが迫ってくる。通信機の向こうで奈々が何かを叫んでいるのが聞こえたが、優はそれを無視して空戦機動に移った。格闘戦を仕掛けてくるホムンクルスに対して、正面から迎え撃つような軌道を描く。同高度から向かってくるホムンクルスに向かつて数発の光弾を放つも、その全てが呆気なく避けられた。無理だと悟ってすぐに高度を上げ、ホムンクルスとの軸をずらす。その直後、真下をホムンクルスの放った紫弾が過ぎ去った。速い。それが、ホムンクルスへの評価だった。

上空の積乱雲目指して高度を上げ続けながら、下方から追い上げてくるホムンクルスをチラリと見やっつて、高梨市の戦いを思い出す。ホムンクルスの脅威は純粹な速度に留まらない。物理法則を無視したかのような独特の空戦機動が最も脅威なのだ。

背後からホムンクルスが徐々に距離を詰めてくる。優は頃合いを見計らって、急角度のターンを繰り返して、下方のホムンクルス目指して急降下を始めた。

「僕が足止めします！ その間に後退を！」

ヘッドセットから届いた優の声に奈々は啞然とした。解析オペレーターが新たに現れた亡霊のESP波形を過去のそれと照合しているところだが、優の報告通り、ホムンクルスが現れたと見て間違いない。

「許可できない。白流島の付近で戦うのは危険すぎる。一旦、全ての先行隊とともに退避しなさい」

叫ぶ。しかし、その言葉は優には届かなかったようで、識別子レーダーに映る一つの点が白流島目指して進んでいくのが見えた。小さく呻いて、すぐにヘッドセットに向かって次の命令を飛ばす。

「本隊に通告。ホムンクルス発見の報告があった。これより、こちらで安全を確認するまで無期限に後退を命ずる」

そしてすぐに通信チャネルを変更する。

「先行隊に通告。本隊との合流を目指し、可及的速やかに白流島から離れなさい」

しかし、その命令に反するように識別子レーダーの映る先行隊の群れから一つの光点が飛び出した。次いで、それに続くようにいくつもの光点が奈々の命令とは逆にホムンクルス目指して前進を始める。

「何してるの！ 早く下がらなさい！ 白流島の付近で戦う必要はない！」

「その命令には従えません！ ホムンクルスが……桜井さんが死んじゃいます……」

詩織の悲鳴。珍しく声を張り上げる詩織の様子に奈々は一瞬たじ

るいだ。機動ヘリからの中継映像がない為、奈々には何が起こっているのか詳しい事がわからない。優は足止めをする、と言っていた。しかし、詩織の言葉から判断するに、足止めさえも難しい、ということだろうか。

死。戦場にいる詩織が身近に感じてしまったであろうその言葉は無視できないほどの重みを持っていた。逡巡した後、奈々は近くの解析オペレーターに向かって声を張り上げた。

「機動ヘリを先行隊へ向かわせることは可能？」

「できません。気流が不安定すぎます。時間が経てば更に強い下降気流が訪れる可能性が高く、後退を進言します」

奈々はすぐにESPレーダーに向き合い、それをじっと眺めた。

ホムンクルスが相手であれば、数で押す事は難しい。むしろ、高梨市の時は分隊長格未満の隊員は足手まといになっていた。深く息をつき、決断を下す。

「先行隊の指揮権を桜井優に譲渡する」

ホムンクルス目指して急降下を始める優。対して、迎え撃つように下方から高度を上げてくるホムンクルスは失速し始めていた。二人の距離は僅か百メートルにも満たない。優がその間を詰めるのに要する時間は三秒。その短い間に、優は持てる限りの光弾をホムンクルスに向けて叩きこんだ。高速で駆ける景色の向こう側で、ホムンクルスの身体が爆ぜるのが視界に映る。それを確認した後、優はすぐに片翼の出力をあげ、ホムンクルスとの軸を大きくずらせた。僅か三秒の攻防が終わり、お互いの高度が入れ替わる。優はそのまま急降下を続け、ホムンクルスは優とすれ違った後、優を追うようにすぐ急降下を始めた。

焦燥感が募る。先程の攻撃でホムンクルスがダメージを負った様子はない。後ろをとられている現状を考えれば、ホムンクルスに圧

倒的なアドバンテージがあると断言している。

背後から轟音。優は振り返る間もなく、バレルロールを繰り返した。ロールしながらピッチをあげ、螺旋を描くような軌道をとる。その直後、優が作った螺旋機動の中心を高空から放たれたホムンクルスの紫弾が貫通した。それを視界の隅で確認して鳥肌が立つ。ホムンクルスの狙いは恐ろしく正確なものだった。

再び高空から轟音とともに強力なプレッシャーが訪れる。バレルロールは危険だ、と判断してブレイクを選択。急旋回し、海面に向かって一直線に落ちていた軌道を水平に立て直す。しかし、その後ろに続くホムンクルスも容易く同じ機動をとり、優との距離を更に詰めてきた。

ホムンクルスの旋回率は、優の経験に照らし合わせれば異常なものだった。あの速度であれだけの角度をつけて旋回するのは物理的にありえない。

すぐに背後からESPエネルギーが膨張する気配。バレルロールはおろか、ブレイクも間に合わないかと判断する。

「っ！」

不意に周囲が明るくなった。それが、ホムンクルスの放ったエネルギー体の放つ微光だと気づいた時、既に優の身体はエネルギー体の中に取り込まれていた。同時に機械翼が停止する。みるみるうちに失速し、優の身体はゆっくりと落下を始めた。

視界が霧に包まれ、何も見えなくなる。強烈な落下感を覚えながら、優は上体を捻って上方を見上げた。僅か数メートル。そこに、ホムンクルスはいた。優に向かって口からエネルギー体を吐きながら、落下に合わせて一定の距離を保っている。やはり、目的は殺傷ではなく、白流島へ優たちを落とすことのようにだった。

エネルギー体の中、機械翼への出力を強める。しかし、予想通りエネルギー体の干渉が働いているらしく、機械翼が息を吹き返す様子はない。

ならば、取る道は一つしかない。

優は落下姿勢を制御し、ホムンクルスに向け両手を広げた。両の掌にESPエネルギーが集中し始める。

優は自らの生存可能性を迷わず放棄し、残された少女たちの強敵となるであろうホムンクルスを片づけるべく、持てる限りの全てを異形の怪物に注ぎ込んだ。

4章 9話 佐藤詩織(5)

光の螺旋が優の両の掌から溢れ、ホムンクルスに襲いかかる。ホムンクルスの身体が光の渦に呑みこまれていき、異形の怪物はそれに逆らうように身の毛のよだつような咆哮をあげた。

「っ！」

ホムンクルスの叫び声は耳をつんざき、視界が激しく振動した。栄養失調の子どもを沸騰とさせるホムンクルスの細い胴体が光の中に消える。胴体と反比例するかのような巨大な口が開き、ただ意味のない叫び声を上げ続ける。

歯を食いしばり、優は更に出力をあげた。身体の奥で何かが軋む音。全身を激しい苦痛が駆け、優は苦悶の声をもらした。

霞む視界の向こう。ホムンクルスは、まだ消えない。
腕が痺れる。

苦痛で気が遠くなった。

ホムンクルスの左腕が螺旋の中に消える。

それが限界だった。

無理だ、と悟る。

至近距離による攻撃でもホムンクルスを完全に吹き飛ばすことは叶わない。

限界が訪れ、出力が途切れる。片腕を失ったホムンクルスがにたりと笑みを浮かるのが見えた。

その笑みが、次の瞬間には轟音と共に優の視界から消え去った。

一瞬、何が起こったのか分からなかった。エネルギー体に突入してきた何かはホムンクルスに向かって突撃し、エネルギー体から弾き出したようだった。

続いて、再び何かがエネルギー体の中に飛び込んできた。佐藤詩織。エネルギー体に飛び込んだ時点で詩織の機械翼は優と同様に出力を失っているようだったが、そのまま慣性に任せて優の元へ飛び

込み、抱きしめられた。落下していた優の身体が詩織に抱えられ、そのままエネルギー体から飛び出す。視界が夜の闇に染まり、目の前に白流島が見えた。詩織がすぐに機械翼の出力を再開し、落下感が消える。

「お怪我はありませんか？」

その場で滞空し、詩織が顔を覗きこんでくる。優は息を切らせ、大丈夫、とだけ返した。詩織の肩を優しく押し、もう支えがいらぬことを伝える。詩織は躊躇ったように優を抱きしめていた腕を緩めた。そのタイミングに合わせて機械翼にESPエネルギーを供給し、自力で高度を維持する。

亡霊群への攻撃に加え、ホムンクルスとの高機動戦、高出力攻撃が重なり、短時間でかなりのESPエネルギーを消費した為、に全身が酷い倦怠感に包まれていた。しかし、それだけだ。深い傷を追っている訳でもない。優ははつきりと頷いた。

「大丈夫。おかげで助かったよ。ホムンクルスは？」

「上です」

詩織の言葉に高空を見上げる。数十メートル先。そこには二つの識別ライトがホムンクルスと激しい衝突を繰り返している光景があった。

あれは？ と尋ねようと詩織に視線を移すと、優が口を開く前に詩織が答えた。

「白崎さんと篠原さんです」

その言葉に、もう一度高空を見上げる。二人がかりでもホムンクルスを抑えきることは難しいようだった。

「僕たちも行く」

「桜井さんは少しお休みになられるべきです」

闇の中、詩織の表情は優には見えなかったが、その声は僅かに震えていた。

雪の中、優は詩織を安心させるように微笑んだ。例えそれが暗闇で見えないとしても、軋む自分の身体を騙すように、優は精いっぱい

いの笑みを浮かべた。

「さっさと終わらせて、皆で休憩しよう」

「……はい」

詩織が頷く気配。優はそれを確認して、高空で争い続ける華たちの元へ加速した。その後には詩織が続く。

優たちの接近に気付いたホムンクルスが華と凜の相手をやめ、優目指して飛翔を始めた。正面から相手する必要はない、と判断してループ。ホムンクルスとの軸を大きくずらす。視界が激しく回転し、強い遠心力を受けて頭がクラリとした。

射撃音。華と凜が追撃を加えているのだろう。囷を続けるべきか悩み、すぐに攻撃に移ることに決める。ループが終わると同時にホムンクルスの姿を探すと、下方に逃れるホムンクルスの姿がすぐに目に止まった。

急降下。ホムンクルス目がけて光弾を放つ。ホムンクルスは回避行動に移り、変則的なブレイクを繰り返し始めた。

「普通に戦ったら勝てない。とにかく高度を抑え込もう」

通信機に向かって叫ぶ。返事の代わりに、散開していた凜と詩織が上方からホムンクルス目がけて射撃を開始するのが見えた。ホムンクルスが更に高度を下げる。

海面付近まで一気に下降したホムンクルスが不意に軌道を水平に修正する。上方から追いかけながら光弾を放つも、その全てが外れ、ホムンクルスの後方で大きな水柱があがった。

ホムンクルスは失速を始めていた。攻撃がホムンクルス上方へ集中している為、無暗に高度を稼げなくなり、速度に変換するものになくなったのだ。

ホムンクルスの動きが鈍り始める。そして、更にホムンクルスの行方にくつもの識別ライトの明かりが立ち塞がった。先行隊として亡霊群の足止めに参加した分隊長たちだ。その数、八。

ホムンクルスが遂に上昇を始める。突破は無理と判断したのだろう。ホムンクルスが更に失速し、総勢十二人からの猛攻が始まる。

いくつもの光弾が着弾し、ホムンクルスの身体が小爆発を繰り返した。

それでも、ホムンクルスは墮ちない。数多の攻撃を受けながらも、それを無視するように高度を稼いでいく。包囲が解け、十二人はホムンクルスの後を追って高度を上げ始めた。

ホムンクルスの後ろ姿を追いながら、ある事に気づく。片腕を失い、度重なる攻撃を受けたホムンクルスの動きは当初に比べて明らかに鈍っていた。ホムンクルスは、決して勝てない相手ではない。その事に安堵する。そして、それは油断へと繋がった。

突然ホムンクルスが優たちのほうに向きなおった。次の瞬間、ホムンクルスが巨大な口を開き、エネルギー体を吐きだした。突然の事に誰も反応できず、十二人全員がホムンクルスの吐きだした霧の中に突入した。視界が霧に覆われ、失速を始める。続いて爆音。それも、一度や二度ではない。何度も立て続けに轟音が響き、その度に霧の向こうで閃光が走った。

霧を抜ける。開かれた視界の向こうには、ひたすら高度を上げていくホムンクルスの姿。そして、下方には墜落していく識別ライトの光。エネルギー体に突入して失速したところを狙い撃ちされたのだろう。落ちていく三つの光と、それを拾いに向かう五つの光を視界の隅に収め、助けに行く必要はない、と判断する。優はホムンクルス目指して更に高度を上げ始めた。

光弾を放ち、牽制する。攻撃を察知したホムンクルスがループ機動をとる。ホムンクルスの姿が視界から消え、優は咄嗟にインメルマントーンを選択した。ループの頂点でロールし、水平飛行に移る。ホムンクルスからの攻撃に備えて更にブレイクに入る。しかし攻撃は来ない。そこで優はようやく辺りを見渡してホムンクルスの姿を探した。優と逆方位の遙か彼方に紫色の発光体。上手く撒かれた事に気づき、旋回する。ホムンクルスも同じように旋回し、二人は正面から相手に向かって突撃を始めた。

4章 10話 篠原華(6)

向かい風を切り裂いて、正面から迫るホムンクルスに突撃する。既に余裕のないESPエネルギーを燃費の良い近接武器として固定し、四メートルにも及ぶ突撃槍を作り出す。

ホムンクルスが巨大な口を開けて、突撃槍を恐れることなく射程に入った。突撃槍をホムンクルス目がけて突き出す。鈍い手応えとともに、衝突による凄まじい衝撃が全身を襲い、視界が大きくぶれた。意識が飛びそうになるも、優は突撃槍をしっかりと握り、意識を必死に繋ぎとめた。そして、目の前の光景に息を呑む。

ホムンクルスの細い胴体に突き刺さった突撃槍は、見事に貫通していた。

ホムンクルスと目が合う。小さな、赤い瞳に憎悪の色はなかった。怨嗟も、喜色も、苦痛も、その赤い瞳からは何の感情も読み取れなかった。ただ無感動に、ホムンクルスのやせ細った腕が突撃槍に延びる。そして、突撃槍を強く握りしめた。

突撃槍が、震えだす。呆気にとられる優を無視して、ホムンクルスは突撃槍を強く握りしめ続けた。

何かが割れる音。続いて突撃槍が真つ二つに折れ、断面からESPエネルギーが大気中に霧散していく。

「そんな……」

圧倒的な脅力を前に、自然と眩きもれる。予想もつかなかったホムンクルスの行動に、優は暫く身動きをとる事ができなかった。その間に、ホムンクルスが動く。細い腕が横に薙ぎ、優の右肩に直撃した。防御が遅れ、横に吹き飛ばす。態勢が崩れ、揚力を失う。落下しながら姿勢制御に移る途中、上方からホムンクルスが急降下してくるのが見えた。

牽制に光弾を放つも、バレルロールで難なく避けられる。螺旋軌道を描きながら迫ってくるホムンクルスの胴体には巨大な風穴が開

き、機動に僅かなブレが見られたが、致命的なものではないように見えた。

姿勢制御が完了し、水平飛行に移る。ホムンクルスの突撃をギリギリで回避し、下方へそのまま落ちていくホムンクルスを見やる。遙か下方に識別ライトの明かり。どうやらホムンクルスは狙いを変えたようだった。

息を切らせ、その場で滞空する。打撃を受けた右肩が異常な熱を持っていた。骨が折れているかもしれない。苦痛に呻きながら、周リを見渡す。かなり離れたところに識別ライトの明かりがポツポツと散らばって見えた。どうやら大部分の先行隊がホムンクルスの姿を見失っているようだった。下方では、一つの識別ライトがホムンクルスと激しい衝突を繰り返している。戦い方で識別ライトの主が華だとわかった。

激しい疲労感に耐えて、優は援護の為に急降下を始めた。直後、識別ライトの光が墜落を始める。やはり、華一人ではホムンクルスを抑えきれないようだった。墜落する華へ追撃に入ろうとするホムンクルスの上方から三発の光弾を放つ。すぐに優の接近に気づいたホムンクルスが回避行動に移る。シザーズ。ブレイクを繰り返し、ホムンクルスの失速が始まる。危うく追い越しそうになり、優は急上昇を行い、無駄な速度を高度に変換した。急激な失速が発生し、ホムンクルスの後ろにつくことに成功する。そしてぶれた軸を戻す為に、再び降下。高度が速度に変換され、ホムンクルスに向かって加速する。ハイ・ヨーヨーと呼ばれる空戦機動だったが、優は意識せずにそれを実行し、迫るホムンクルスの後ろ姿に光弾を叩きこんだ。着弾とともにホムンクルスの身体が爆ぜる。

着弾の影響でホムンクルスの身体が揺らめく。そして下方への半ループ。突然の方位転換に着いていけず、ホムンクルスの姿を見失う。

優は咄嗟にループを選択した。回避運動を兼ねて、回転する視界の中からホムンクルスの姿を探す。水平飛行で優から離れていくホ

ムンクルスの姿が確認できた。追撃は行わず、下方に見える一つの識別ライト目指して急降下を開始する。

「華ちゃん！」

叫ぶ。暗闇の中、その姿がはつきりと見える距離まで近づくと成功した。腕を延ばし、落下する華の身体を抱きしめる。腕に急激な負担がかかり、負傷した右肩に激痛が走った。それでも華を抱きしめる腕に力をこめ、しっかりと抱きかかえる。

「桜井くん！」

華が背中に腕を回してしがみついてくる。

「華ちゃん、大丈夫？」

「うん。機械翼が破損しただけだから」

その言葉に、華の機械翼に視線を移す。片翼の一部が欠け、内部構造が剥き出しになっていた。それ以外には何も怪我がない事を確認し、安堵する。

「桜井くん！ 上！」

不意に華が叫んだ。反射的に降下し、位置エネルギーを運動エネルギーに変換する。十分な速度を得てからバレルロールに移行。しかし、華を抱えている為か、バランスを崩し、軌道が大きくずれた。きりもみ。安定させようと姿勢制御に移り、水平飛行を再開する。その横を上から落ちてきた紫弾がよぎった。反射的に上方を見上げる。いつの間にか回ってきたのか、ホムンクルスが背後の上方に迫っていた。ループで振り切ろうとするが、華がいることを思い出して断念する。普段と重心が大きく違う為、激しい空戦機動を取れば先程のようにバランスを崩してきりもみする危険性がある。次いで失速したところをホムンクルスに狙われればひとたまりもない。

優は結局急降下を選択した。位置エネルギーをロスし、速度を得る。振り返ると、ホムンクルスも優に倣うように急降下を始めていた。それを確認して急上昇。次いで、シザーズ。運動エネルギーを殺し、意図的な失速を起こす。急激な速度変化についていけず、遂にホムンクルスが下方から優を追い越した。後ろを取る事に成功す

ると同時に、急上昇から急降下に移る。ホムンクルスと同様の速度を取り戻し、華を左腕で抱きかかえながら右手をかざし、光弾を放つ。しかし、当たらない。

ESPエネルギーを放つ度に頭がクラクラした。機械翼へのエネルギー供給も落ち始めている。息を切らせ、優は必死に遠ざかつていくホムンクルスの後ろ姿を追った。一定の距離が離れると同時にホムンクルスが高度を上げ始める。

格闘戦では、勝てない。絶望的な体力差を感じ取り、優は機械翼の出力を緩めた。速度を落とし、離れていくホムンクルスの姿を睨みつける。

「桜井くん……」

腕の中で華が不安そうに名前を呼ぶ。優は何も言わず、積乱雲目指して上っていく紫色の発光体を眺めた。その軌道を見て、不意にある考えが浮かぶ。

「いけるかも……」

「呟きが漏れる。」

「桜井くん？」

華が不思議そうな顔をする。優はそれを無視して、痛み右肩をあげた。

ESPエネルギーが手のひらに集まり始める。目を瞑り、そのESPエネルギーの統制に意識を集中する。残り少ないESPエネルギーを惜しみなく使い、ゆっくりと巨大な光弾を作り出していく。そして十分な大きさまで膨張したESPエネルギーの塊を放つ。エネルギー弾はかなりの距離が開いたホムンクルス目がけて飛翔した。

「あれは」

「華が息を呑む気配。」

エネルギー弾が、突然ホムンクルス目がけてぐんと曲がった。そして、そのまま回避運動をとろうとするホムンクルスに追隨する。

「誘導弾？」

ESPエネルギーは情報を搬送する。かつて、姫野雪に言われて気付いたことだった。そして、それがただの搬送波としての役割に留まらない事を過去にイーグルが示唆していた。だが、今まではその実現方法が分からず、実行に移す事はできなかった。

しかし、振り返ってみれば、優は今までに完全なブラックボックスであるESPエネルギーを問題なく使っていた事に気付いた。恐ろしく曖昧な、感覚的な操作でESPエネルギーをコントロールする事が出来たし、光翼などの一見複雑な動きもただ願うだけで使う事ができた。ESP。超感覚的知覚という名称もそれほどの外れな訳ではないようだった。

雪降る夜空の向こうで閃光が走った。ホムンクルスが誘導弾を振り切れず、被弾したようだった。

「桜井くん、すごい！」

華の歓声。優は疲れた笑みを浮かべ、安堵の息をついた。

彼方で上がる爆炎からホムンクルスが飛び出してくる。誘導弾がある以上、どれだけ距離をとっても無駄だと判断し、近接戦に切り替えたのだろう。

最後の力を振りしぼって、再び突撃槍を作り出す。左腕で華を抱えている為、右手で突撃槍を構える。そこに華が左腕を差しだし、柄を掴んだ。僅かに穂先が安定する。

空の彼方からホムンクルスが迫る。それに対抗するように優は機械翼を広げ、ホムンクルス目がけて飛翔した。

優と華の構えた突撃槍が雪の中で煌めく。次いで、凄まじい衝撃音が轟いた。

衝突の衝撃で、意識が軽く飛ぶ。霞む視界の向こうで、ホムンクルスの胸元に突き刺さった突撃槍が見えた。

ホムンクルスの身体が、崩れ始める。穴の空いた胴体と失った片腕の断面からESPエネルギーが大気中に拡散していく。

消えゆく中、ホムンクルスは何かを求めるように残った片腕を虚空に延ばした。その瞳からは急速に色が失われ、夜の闇に染まって

いく。

不意に優はホムンクルスに同情の念を抱いた。虚空を彷徨うホムンクルスの手をとろうと、腕をのばす。しかし、優が延ばしかけた手は華に握られ、ホムンクルスには届かなかった。思わず華を見る。華は何も言わず、ギョツと優の手を握り、小さく首を振った。

華からホムンクルスへ視線を戻す。ホムンクルスは既にその原型を失い、ESPエネルギーの集合体として、紫色の発光体としてしか世界に存在していなかった。加速度的に霧散していくエネルギー体を、二人は静かに見守った。

「……終わったね」

冬の夜空に溶けゆく亡霊を見て、華が呟くように言った。

「……うん」

白い息を吐きながら、突撃槍を構成していたESPエネルギーを解放する。新たに大気中に拡散するESPエネルギーを見て、優は急に強い疲労感に包まれた。

冷たい風が頬を撫でる。腕の中で華が身じろぐ気配。

『ホムンクルスのロストを確認！ 白流島上空で待機していた他の亡霊群も白流島に戻り始めています』

通信機から電子オペレーターの報告が雑音混じりに届く。

それでようやく通信機の存在を思い出したように、華が通信機に向かって口を開いた。

「機動ヘリをこちらまでお願いします。私の機械翼破損しちゃって……。それと、桜井くんが怪我してます」

『了解しました』

華と電子オペレーターのやりとりをぼんやりと聞きながら、優は戦っているうちに遠ざかっていた白流島をじっと眺めた。

機動ヘリに入るなり、待機していた医師が肩の傷を診察し始めた。

診察されている間、優は強烈な眠気に襲われ、早く休みたいという一心で適当に質問に答えた。

機動ヘリには優の他に華と第三小隊の分隊長が二人、そして第一小隊・第二分隊長の川上沙耶がいた。診察を終え、壁際に背を預けて腰をおろすと沙耶が疲れた笑みを浮かべて喋りかけてきた。

「中隊長さんが頑張ってくれたおかげで随分と楽ができたよ」

優は何も言わず、笑みを返して目を瞑った。

ガタガタと心地良い振動とともに、ヘリのローター音が耳に入る。戦闘が終わって気の昂りが収まったせいか、急に右肩の傷が痛み始めた。

「桜井くん、大丈夫？」

近くに誰かが座る気配。同時に華の心配そうな声が聞こえた。

「うん。何とか」

目を瞑ったまま答えると、左手が誰かに優しく握られた。流れから考えて、この手は華のものだろう。

「おいおい。こんな所でいちやくくなよ。帰ってからにしてくれ」

沙耶の呆れたような声。そして誰かの笑い声が続く。

ぼんやりとそれを聞きながら、優はホムンクルスの事を考えた。

現在確認されている中で、最も強かった亡霊。それを殆ど負傷者を出さずに倒せたのは運が良かった。前回と違い、今回は分隊長格以上のみの構成で挑んだのが功を奏したのだろう、と思う。

高梨市の戦い以降、いつホムンクルスが現れるか不安で仕方がなかった。再びホムンクルスと戦うことになれば自分は死ぬ、という漠然とした予感がずっと頭の中にあった。しかし、これで自分の脅威は去った。

死の恐怖から解放され、優は久方ぶりに真の安らぎを得ることができた。強い疲労感に襲われながら、まどろみの中にゆっくりと落ちていく。

不意に、誰かに肩を揺さぶられた。重い瞼を開ける。目の前に華の顔があった。何かを叫んでいる。しかし、何も聞こえなかった。

華の口がパクパクと開かれても、音が全く聞き取れない。

それで、優は聴覚を失っていることによく気付いた。いつの間にか、ヘリのローター音も聞こえなくなっている。世界は、異様な静寂に包まれていた。

それでも、優は特に何ら危機感らしいものを抱かなかった。頭がぼんやりとして何も考えられず、ただ、華の顔を見つめ続けた。

華の顔に、陰が差す。混濁する意識の中、華を心配させまいと笑顔を浮かべる。そして、華の頬を撫でようと左腕を持ち上げようとして、すぐに断念した。腕はピクリとも動かなかった。腕だけではない。全身が動かなかった。

不意に左方向に軽い遠心力がかかった。バランスを崩し、華に向かって崩れ落ちる。床にぶつかった時、右肩が僅かに痛んだ。しかし、さつきまで感じていたような激痛ではない。痛覚も鈍ってきているようだった。

華が身体を抱き起こし、顔を覗きこんでくる。慌てたようにすぐ優から目を背け、誰かに何かを叫んだ。そして、すぐ優に向きなおり、泣きそうな表情を浮かべる。朦朧とする意識の中、視界に映る華の泣き顔を見て、チクリと心が痛んだ。

華が呼んだのか、医師が慌てたように駆けつけてきた。片目を無理矢理開かされ、ライトで照らされる。しかし、不思議と眩しいとは思わなかった。

何かを叫ぶ医師。頬を叩かれる感触。助手のような女性が医師に何かを渡す。注射器だった。医師が注射器を腕に突き刺すのを、優はぼんやりと眺め続けた。本来は苦手な注射に対する恐怖心はなく、痛みも感じなかった。

注射を終えた後、医師はすぐに通信機に向かって何かを叫び始めた。その間に、華が正面から身体を抱きしめ、どこか必死な様子で揺すってくる。僅かに右肩の傷が疼いた。

少し、痛いよ。心の中でそう言って、笑う。

視界が、色を失い始める。モノクロの音のない世界。詩的だな、

とぼんやりと思う。

へりの揺れが全く感じられない。振動も。自分がどこにいるのかを示す、全ての情報が失われていく。

寒かった。冬の寒さとは違う、身体の奥から凍っていく不思議な感覚。

霧がかかったように視界がぼやけ始める。

ふと、味覚と嗅覚は大丈夫なのだろうか、等とどうでもいい疑問が頭の中に浮かんだ。

凍えるような寒さの中、華にしっかりと握られた左手だけが温かった。

左手の温もりから何とも言えない安心感を覚え、ゆっくりと瞼を閉じる。

ただ眠りたかった。

深い、深いまどろみの中へ落ちていく。

真っ暗な闇の中へ、ゆっくりと沈んでいく。

全ての外的情報が死んでいく中、桜井優は最後まで左手の温もりを失うことなく、その意識を手放した。

登場人物まとめ4

桜井 優 主人公。特殊戦術中隊・中隊長

(さくらい ゆう) 特徴：16歳。身長145cm。琥珀色の髪

柊 沙織 人類史上初のESP能力覚醒者・覚醒者発見後初の戦死者

(ひいらぎ さおり) 特徴：享年16歳

上田 考義 陸上自衛軍・中将

(うえだ たかよし) 特徴：年齢不詳。中肉中背

神条 奈々 亡霊対策室司令

(しんじょう なな) 特徴：28歳。身長170cm。黒髪ロング

長井 加奈 亡霊対策室副司令

(ながい かな) 特徴：26歳。身長160cm。茶髪ボブ

山田 茂雄 亡霊対策室・広報部長

(やまだ しげお) 特徴：44歳。身長170cm。小太り

佐々木三蔵 亡霊対策室・防諜部長

(ささき さんぞう) 特徴：57歳。身長180cm。白髪

浜中 博人 亡霊対策室・保安部長

(はまなか ひろと) 特徴：52歳。身長185cm。黒髪短髪

中村 俊之 亡霊対策室・保安部所属

(なかむら としゆき) 特徴：30歳。身長180cm。

武井 瞳 亡霊対策室・総務部長

(たけい ひとみ) 特徴：49歳。身長150cm。黒髪セミロング

内山 隆司 亡霊対策室・情報部長

(うちやま たかし) 特徴：42歳。身長160cm。黒髪。黒縁

眼鏡

倉井 紀子 亡霊対策室・医療チームリーダー

(くらい のりこ) 特徴：46歳。身長155cm。黒髪ショート

秋山 明日香 亡霊対策室・医務医

(あきやま あすか) 特徴：31歳。身長170cm。黒髪セミウエーブ

斎藤 準 亡霊対策室・情報部主任

(さいとう じゅん) 特徴：32歳。身長170cm。黒髪ソフトウルフ

斎藤 幸枝 亡霊対策室・情報部所属。準の妻

(さいとう さちえ) 特徴：31歳。身長160cm。茶髪セミロング

斎藤 響 最年少ESP能力者

(さいとう ひびき) 特徴：9歳。身長125cm。黒髪セミロング

篠原 華 特殊戦術中隊・第一小隊・隊長

(しのはら はな) 特徴：16歳。身長150cm。茶髪セミロング

姫野 雪 特殊戦術中隊・第二小隊・隊長

(ひめの ゆき) 特徴：18歳。身長160cm。白亜のストレートロング。淡紅色の瞳。アルビノ

佐藤 詩織 特殊戦術中隊・第三小隊・隊長

(さとう しおり) 特徴：15歳。身長145cm。黒髪セミロング。男性恐怖症

黒木 舞 特殊戦術中隊・第四小隊・隊長

(くろき まい) 特徴：17歳。身長160cm。黒髪ロング。

ハスキーボイス

進藤 咲 特殊戦術中隊・第五小隊・隊長

(しんどう さき) 特徴：16歳。身長145cm。黒髪サイドポニー

白崎 凜 特殊戦術中隊・第六小隊・隊長

(しろざき りん) 特徴：19歳。身長160cm。黒髪ロング

長谷川 京子 特殊戦術中隊・第一小隊所属

(はせがわ きょうこ) 特徴：16歳。身長155cm。茶髪ショートカット

宮城 愛 特殊戦術中隊・第一小隊所属

(みやぎ あい) 特徴：16歳。身長150cm。黒髪セミロング

望月 麗 特殊戦術中隊・第一小隊所属

(もちづき れい) 特徴：14歳。身長135cm。金髪ツインテール

川上 沙耶

特殊戦術中隊・第一小隊所属

(かわかみ さや) 特徴：16歳。身長155cm。金髪ロング

藤宮 綾 特殊戦術中隊・第四小隊所属

(ふじみや あや) 特徴：17歳。身長165cm。茶髪セミロング

奥村 音々 特殊戦術中隊・第六小隊所属

(おくむら ねね) 特徴：22歳。身長170cm。黒髪に金色の

メッシュ

橋本 恵 フリーライター

(はしもと けい) 特徴：28歳。身長160cm。茶髪セミロング

広瀬 理沙 逃亡中のESP能力者

(ひろせ りさ) 特徴：18歳。身長160cm。黒髪ロング

4章 11話 秋山明日香(3)

「桜井は」

斎藤準の震えた声が亡霊対策室の医務室に響いた。

桜井は大丈夫なのか。

そう言いそうになり、大丈夫な訳がない、と思い直して言葉を呑みこむ。代わりに、準は別の言葉を探した。

「桜井の容体に変化は？」

「何も。何かあれば連絡がくるようになってはいるけど、何も連絡はない」

医務室の主である秋山明日香は、準の突然の訪問に動ずることなく、デスクの前でぐるりと椅子を回し、準に向き直った。

ホームクルス撃破後に倒れた優がそれから三日間意識を取り戻さない、という情報を準が耳にしたのが数時間前。仕事を切り上げた後、準は事態を把握すべく、医療関係に属する唯一の友人である明日香の元を訪れたのだった。

「……落ちついているな」

何ら焦燥の色を見せない明日香を見て落ち着きを取り戻し、準は明日香に勧められた椅子に腰を下ろした。

「十六。それが私が今まで触れあつた死神の数。良くも悪くも、こういう仕事していると麻痺するのよ」

それに、と明日香は言った。

「優君は意識が戻らないだけ。死ぬ訳じゃない」

「……俺には良く分からないんだが、桜井が倒れたのは一体何が原因なんだ？」

落ちついている、というよりも、あまり心配していない様子の明日香に準は眉を寄せた。

「確固たる原因は分かっているわけではないけれど、主要因はESPエネルギーの使い過ぎと言われている。解析オペレーターのとめあげた報

告書によれば、優君は亡霊群とホムンクルスを相手する為に何度も高密度のESPエネルギーを放出しているらしいの。どうもその和が優君の保持するESPエネルギーの量を超えているらしい」

「超えている？ それは計測の誤差の範囲を超えるものなのか？」

「それが微妙なところなんだけど……とにかく優君はESPエネルギーを使いすぎた。倒れたのはその反動と見られている。ESPエネルギーの回復と共に、優君は自然と目を覚ますと思うわ」

「そうか……」

命に別条はない、と判断して安堵の息をつく。そしていくつかの疑問を頭の中で整理して、準は再び口を開いた。

「桜井の他に、ESPエネルギーの使いすぎで倒れたという前例は？」

明日香の顔に陰りが落ちる。

「倒れた、という前例は一つもないわ。今までに確認されたものは眩暈、倦怠感、吐き気、失見当識。しかも、いずれも軽度のもの。失ったESPエネルギーが大きすぎて、その反動が大きいとも考えられているけど、結局は何も分かっていない。そもそも、生命科学の分野において、ESPエネルギーと生命活動の関連性については全く研究が進んでいないの。何が起ころしてもおかしくはない」

「……ナノマシンの副作用が原因の可能性は？」

「ナノマシンの発現機序を考えれば、その可能性は否定できない。けど、その可能性は低い。そもそも、優君が倒れたのはナノマシンを摂取する前だったと聞いているわ」

それを聞いて準は黙り込んだ。

ESP能力者は亡霊の身体を構成するESPエネルギーなどという得たいの知れないものを使っているのだ。何らかのデメリットとも呼べるものが存在してもおかしくはない。そして、どんなデメリットがあつたとしても、亡霊が現れ続ける限りESP能力者は力を行使続けなければならないのだ。準にはどうすることもできない。

「……そもそも、桜井の力はESP能力とは全くの別物なのかもし

れない」

「え？」

ポツリと漏れた呟きに、明日香が目を見開く。

「前から思ってたんだが……桜井だけがイレギュラーな存在だ。唯一の男性ESP能力、と言われているが……そもそもESP能力者の定義は何だ？」

「体内からESPエネルギーを生成し、出力することが可能な人間」
「そうだ。その点で言えば桜井はESP能力者と言える。だが、桜井の持つESPエネルギーの出力構造は他と大きく違う」

「……どういうこと？」

明日香の目が鋭くなる。準は考えを整理しながらポツポツと自分の考えを話し始めた。

「ソフトウェア工学において、情報隠蔽という考え方があ。名前の通り、不要な情報を隠すんだ。例えば」

準はポケットから携帯を取り出した。

「この携帯を見てくれ。携帯の内部構造は物理的に見えなくなっている。ユーザーにとって不要な情報だからだ。単純化し、必要な情報だけを公開する。これは物理レベルでの例だが、実際には論理レベルでの情報隠蔽が行われる」

「論理レベル？」

「大雑把に言えばソフトウェアレベル、という意味だ。 unnecessary機能やデータを極力隠蔽し、モジュールの独立性を高める」

そして、と準は携帯を軽く叩いた。

「内部構造が見えないだけじゃない。隠蔽された情報にアクセスできないようにカプセル化されている。例えば内部構造が剥き出しだったら配線をいじったりする馬鹿が出て故障の原因に繋がることがある。物理レベルでの例だと当たり前のことだが、論理レベルでは意識して設計しなければならぬ。で、カプセル化された情報には

準は携帯のキーを操作した。

「 それを操作する関数が存在する。携帯なら0から9のキーに加えて選択キーとかがそれに当たる。取り扱うデータに対してそのデータに固有な操作の集合も合わせて実装し、抽象化を図る。俺たちが普段使う家電製品はこうして高度に抽象化されているから、その製品の具体的なメカニズムを知らなくても簡単な操作で取り扱うことができるんだ」

「 …… ESP能力にも同様に高度な抽象化が存在する、ということかしら？」

明日香が恐る恐るといった様子で尋ねる。準は頷いた。

「 そうだ。彼女たちはESPエネルギーの事を全く知らない。だが、ブラックボックスであるはずのESPエネルギーをいとも容易く利用している。彼女たちは隠蔽されたESPエネルギーに対して操作関数を持っていると言える。そしてその操作関数こそがESP能力だと捉えると」

「 優くんを持つ操作関数は他と違う？ つまり、優くんは他とは全く別のESP能力を持っているということね？」

準の言葉を遮って、明日香は答え合わせをするように口を開いた。

「 より正確に言えば、桜井のそれはESP能力ではないことになる。彼女たちは出力という操作関数しか持たない。だが、桜井は違う。光翼、誘導弾、他にも細かな操作を行っている。桜井は、恐らく内部データ構造にアクセスし、ESPエネルギーに直接干渉している。もしくは、新たに操作関数を定義しているのかもしれない」

「 ちよつと待つて。情報隠蔽ができていないなら」

明日香は狼狽した様子で言葉を切った。準は頷いて、その言葉を引き継いだ。

「 操作関数、というのはフェールセーフ処理を実装する場所でもある。異常な操作があれば弾き出し、内部構造を守る。内部構造に直接アクセスすれば、もちろんフェールセーフ処理は働かない。異常な入力があればシステムは呆気なく崩壊するだろう」

4章 12話 秋山明日香(4)

「……ESP能力に抽象化という要素が入っているのは認めましょう。でも、フェールセーフ処理というのは工学的な手続きに過ぎない。比喻をそのまま当て嵌めても意味がないわ。優君のそれは精密なコントロールに由来するだけでも言える」

明日香は慎重な様子で反論を口にした。対して、準は首を振った。「精密さ、という点なら第五小隊の進藤が圧倒的に飛び抜けている。だが、彼女の力は精密な出力という方向性に留まっている。桜井だけが他と何かが根本的に違うんだ。彼女たちは何らかの関数を通してでしかESPエネルギーに干渉できない。桜井だけがその手続きを明らかに無視している。フェールセーフ処理は工学的な手続きに過ぎない、とお前は言った。だが、実際に何らかのフェールセーフ処理が働いているのは確かだ。例えば、ESPエネルギーが残り少ない時に大量のESPエネルギーを使えばどうなる？ その操作は実行されない筈だ」

「ESPエネルギーがない時にESP能力が使えないのは物理的な限界に過ぎない。特別に弾き出す処理があつた訳じゃない」

「……解析オペレーターの報告書では桜井のエネルギー出力量が保持量を上回っていた、と言つたな。物理的な結果、というならばエネルギー量は最低でも0にしかならん。だが、それを下回つた可能性がある」

「下回るですつて？ 準、あなたの言う事は観念的すぎる。物理的に不可能なのよ」

「解析オペレーターの計測したESPエネルギーが限定的であつた可能性がある。そして、別所からESPエネルギーを捻出した。つまり、仮想化だ。桜井は本来使つてはならないESPエネルギーを用いて仮想化を実現した可能性がある。これで理論上では所有ESPエネルギーを消費ESPエネルギーが上回る事ができる。もちろん

ん、上回るといふ表現はリソースの情報隠蔽が引き起こす齟齬に過ぎないが、これで全て説明がつく」

「……一体、どこからESPエネルギーを捻出したというの？」

「分からん。だが、そもそもESPエネルギーは彼女たちのどこから出てくる？ 俺たちの知らない領域があることは確かだ」

明日香は片手で顔を覆い、首を小さく振った。

「確証はない。あなたの言っていることは全て想像の話」

「物理屋がESPエネルギーに対して何ら研究成果をあげられていない以上、概念レベルから推察するしかない。ESP能力を分析する何らかのモデルが必要だ」

「……わかった。その視点が有用である事は認めましょう。けど、今は絶対にその事を他に漏らさないで」

僅かに興奮気味だった準は明日香の言葉に冷静さを取り戻し、眉を寄せた。

「どういう意味だ？」

「正確には奈々に今の事を知られないようにして欲しい。最近の奈々は少し危ういところがある」

「参ってる、という意味か？」

「そう。多分、今回の件で奈々はこれから優君を簡単に投入できなくなるでしょう。そんな状態の奈々が今の話を聞けば、今後優君が必要不可欠な場面でも投入を渋る可能性がある。それは、優君が最も望まない結果を生むでしょう」

準はその言葉の意味を考えながら、慎重に言葉を選んだ。

「つまり、あー……奈々は、桜井のことが……？」

「明確なそれではない。どちらかと言うと依存に近い」

「依存、か」

予想外の言葉に呻く。

「依存と言っても軽度のもの。それに、私はそれを批判するつもりはない。ずっと一人で先の見えない亡霊との闘争を続けて、ようやぐもたれかかる事の出来る相手を見つけた。そうならない方がおか

しい。でも、ある程度のコントロールが必要よ。だから、さっきの話は伝えないで」

「……コントロールか。お前は、どんな時でも医師としての立場を崩さないな」

準は付き合いの長い友人の横顔を眺め、特に深い意味もなく言った。しかし、明日香はその何気ない一言に表情を硬くした。

「……私が十二歳の時、父が狂った事がある」

てつきり、「貴方も常に機械オタクの立場でしょう」と軽口が返ってくるそばかり思っていた為、準は驚いて明日香の顔をじっと見つめた。明日香の瞳には強い苦悩の色が浮かんでいた。

「いつも通り仕事から帰ってきた父は元気がなくて、同じ話を私に何度も繰り返したの。それはさつき聞いたよ、と笑うと父は謝って数分後にまた同じ話を繰り返して。何度も何度も、その繰り返し。

本当に急だった。昨日まで普通だった父が、突然人形のように同じ言葉を繰り返すのよ。ああ、人はこんなに簡単に壊れるんだって理解して、私凄く怖かった」

準は何も言わず、明日香の話に耳を傾けた。

「どうしたらいいか分からなくて、泣く事しかできなかった。病院に連れていったら、それつきり会えなくなるんじゃないか、って想像して。結局、私は父を無理矢理寝かせる事にした。目が覚めれば全てが元通りになってるんじゃないかって。子供染みた現実逃避だけれど、結果的にその判断は正しかった。翌日、父はいつも通りに戻ってた。今思えば、あれは一過性全健忘だったんだと思う。多分、仕事のストレスが原因だったんでしょ」

そこまで話して、明日香は一度息を大きく吸った。

「人は本当に脆い。日常のちょっとしたことで壊れて、元通りにならなくなる。でも、私が医師である限り、目の届く範囲であれば防ぐ事ができる。これは、一種のコーピングなのよ」

「すまん。責めるつもりで言ったんじゃないが、軽率だった」

「とにかく、奈々には優君のESP能力が他と違う、あるいは危険

性がある事は伏せてほしい」

「……わかった。お前が最良の選択と言うならばそれに従おう」
そう言っつて、準は椅子から立ち上がった。

「桜井が目を覚ましたら連絡してくれると助かる。響が会いたがっつてな」

「ええ。それじゃあ」

ひらひらと手を振る明日香に背を向け、準は医務室から出ていった。

残された明日香はデスクに向き直り、ため息混じりにポツリと呟いた。

「困ったことに、依存し始めてるのは奈々だけじゃないのよね……」

4章 13話 宮城愛(6)

真っ白な病室に空調の音が静かに響く。亡霊対策室の医務室ではない。国内有数の大病院の一室。個室である為、ベッドは一つしか存在せず、その横に一人の少女が立っていた。

ベッドに横たわる少年が持つ鮮やかな琥珀色の髪を、篠原華はそつと梳いた。さらさらと指先から零れ、重力に従って舞い落ちる。

「桜井くん……」

名前を呼ぶも、返事はない。

静かに寝息をたてる桜井優の頬を、割れ物に触れるように優しく撫でる。まだ幼さの残る顔と華奢な身体は大人になりきれない不安定さ、あるいは一抹の儂さを感じさせた。

あれから四日が経過した。優はいまだに目を覚ます気配はない。命に別条はないと医師は言っていたが、目を覚ますという保証がある訳ではない。このまま目が覚めないのではないか、という漠然とした不安感に襲われ、華は無意識のうちに優の手を握った。微かな温もりを感じて落ち着きを取り戻すも、不安は拭いきれない。

華はベッドの横におかれた椅子に腰をおろし、考えに耽った。

ホムンクルス。過去に確認されている中で亡霊の持つ最大戦力。

高梨市の戦いにおいて、特殊戦術中隊の全てを投入しても勝てなかった相手に、優は殆ど一人で打ち勝った。

溜め息をつく。優が強くなった、という要素もあるが、それが主要因ではない事を華は理解していた。高梨市の戦いで、優はホムンクルスと直接戦っていない。エネルギー体に巻き込まれた他の中隊員を助ける為に、それどころではなかったのだ。今回優が勝てたのは、他にフォローすべき相手が存在せず、自由に戦えた為だと考えられる。つまり、他は足手まといでしかない、ということだ。そして、それは華も例外ではない。機械翼が破損した為に優の空戦機動を妨げる要因となってしまうた。

段々と、確実に距離が開いていく。しかし、どうすることも出来ない。

無力感に華が顔を伏せた時、控えめなノックの音が響いた。驚いて顔をあげると、ゆっくりと開いたドアから愛が顔を見せた。ドアを静かに閉め、華の元へやってくる。

「……時間」

愛が抑揚のない声で言う。華は掛け時計に視線をやった。午後四時。

「うん」

華は頷いて、椅子から立ち上がった。

優が目覚めた時に誰かが傍にいたほうが良い、と華・愛・京子の三人は結論づけて数時間おきに交代する事になっている。当初、三人で病室に固まっていたのだが、あなた達が倒れては意味がないと明日香に注意されてこの様な体制をとることになった。

「……何か変化は？」

愛が優の顔を覗きこみながら口を開く。

「十二時過ぎだったかな。詩織ちゃんがお見舞いにきたよ。それから、青葉さんと柚子ちゃんが一時過ぎに少し」

何も変化はない、と言う事に抵抗を覚え、華はお見舞いにきた人の名前を挙げた。四日間の中に第一小隊の殆どが顔を見せ、詩織も毎日のように来ている。恐らく、この病院の中で最も見舞客が多い部屋となっているだろう。

「……そう」

優の顔を覗きこんでいた愛が不意に顔を優に近付ける。ぼんやりとその光景を見ていた華は、愛の唇が優それに重なりそうになるのを見て、慌てて愛を優から引き離れた。

「だ、だめだつて！ いきなり何するの!？」

「……目が覚めるかもと思って」

愛が僅かに顔を赤く染めながら、何も問題ないといった様子で言う。恐らく白雪姫、もしくはそれに類する何かを意識しての行動だ

ろっ、と華は見当をつけた。

「あれは作り話だから！ 絶対に真似したらダメだよ！」

「……何もやらないよりは、出来る事を試す方がよっぽど有意義」
もっともらしい事を言う友人を後ろから抑えつけながら、華は叫んだ。

「絶対にだめ！ というか、もしかして私がない間に既に何度もやっつたりしないよね！」

「……今思いついたばかりだからまだやってない。早く試さないとだめだつて！」

「……何でダメなの？」

思わぬ愛の言葉に詰まる。華は咄嗟に考えついた代替案を口にした。

「……じゃ、じゃあ私がやる！ それで良いでしょ！」

「……それはダメ。発案者である私の役目」

「発案者はドイツ人の誰かだよ！ 最低でもグリム兄弟だよ！」

「……応用を発見した私の功績は大きい」

「キスで目覚めるなんて展開、そこら辺の恋愛小説でありふれてるよ！」

二人が騒いでいると、不意に第三者の声が響いた。

「二人とも、何を騒いでるの？」

華と愛の動きがピタリと止まる。

ゆっくりとベッドの方に視線を向けると、少し眠たそうな様子の優と目があった。いつも通りの柔らかい笑み。それを見て、愛を抑えつけていた手から力が抜ける。

「さくらい、くん」

思わず、名前を呼ぶ。優は小首を傾げて、無邪気な笑みを浮かべた。

「優！」

愛が華の手から逃れ、優に抱きつく。華は相変わらず、優の顔を見つめたまま動きがとれなかった。

「あ、愛ちゃん？」

優が愛を受け止めて、助けを求めるかのように困惑した視線を向けてくる。

「お水ないかな？ 喉カラカラで痛くって」

「ちよ、ちよつと待ってて！」

優に言葉を投げかけられ、華は慌てて自分の鞆を漁った。清涼飲料水の入ったペットボトルを取り出し、優に差し出す。

「ありがとう」

少し掠れた声で優がお礼を言い、華の差し出したペットボトルを受け取る。しかし、受け取った直後、ペットボトルは優の手から滑り落ち、鈍い音を立てて床に転がった。

「あ……ごめん」

落ちたペットボトルを拾おうと優がベッドから起き上がり、身を乗り出した時、その身体がふらりと傾いた。すぐに愛が横から支える。

「私が取るよ」

身をかがめ、ペットボトルを拾う。少し辛そうに顔を歪める優を見て、不安が募る。

「もしかして、力が入らない？」

「……うん。何だか、身体がまだ寝てる感じ」

手を握ったり、開いたりしながら優が答える。それを聞いて、愛が華からペットボトルを受け取った。

「……なら私が代わりに飲ませる」

愛がペットボトルのキャップを開ける。次いで、愛はそれを自分の口へ運んだ。それを見て、華の中である一つの嫌な想像が膨らむ。清涼飲料水を口に含んだ愛が優に向き直り、優の両肩に手を回した。そして、愛の顔が優に近づいていく。

「ダメだつてば！ 何で全部そっちに繋げるの！？」

再び愛を後ろから抑え込み、優から引き離す。その流れを見て優がクスリと笑った。

「華ちゃん、少しペットボトル支えてくれないかな」
「うん！」

僅かに不服そうな愛の横を通って、優の口元でペットボトルを支えた。優の手が華の手に重なり、僅かにペットボトルの口が下に傾く。

ほんの一口飲むと、優はすぐにペットボトルから手を離れた。ペットボトルを横の棚におき、優の顔を覗きこむ。

「大丈夫？」

「……ごめん、少し寝るね」

ベッドの中にもぐりこみ、眠そうな様子で優が言う。

「うん。おやすみ！」

華が答えた後、すぐに穏やかな寝息が聞こえ始めた。

優が目を覚ました事に安堵し、椅子に座りこむ。

「……とりあえず、ナースコール？」

愛の言葉でやるべき様々な事を思い出し、慌てたように携帯を取り出す。誰に連絡すれば良いか分からず、反射的に京子のメールアドレスを選択し、華は携帯を耳にあてた。

4章 14話 長谷川京子(7)

混濁した意識の中、誰かの話し声が聞こえた。

桜井優は深い眠りから覚醒し、重い瞼をゆっくりと開いた。蛍光灯の明かりが視界を覆い、思わず目を細める。

「あ、起きた？」

蛍光灯の明かりが遮られ、ぼやけた視界に誰かの影が映る。

「京子？」

「当たり前！ 気分はどう？」

気だるい身を起こし、室内を見渡す。ベッドの横に京子。少し離れた壁際に華と愛がいた。

「僕、どれくらい寝てた？」

「四時間くらいかな。身体、大丈夫？」

華がにつこりと笑って京子の横まで寄ってくる。優はぼんやりとする頭でコクリと頷いた。

「起きたって聞いて飛んできたなら寝てるんだもん。拍子抜けしちゃうたよ」

京子が笑う。

「凄く眠くって。体力落ちてるのかな」

軽く身体をのばすと、全身の筋肉が悲鳴をあげた。小さく呻き声が漏れ、ベッドに倒れこむ。

「ちよ、大丈夫？」

「ん……大丈夫。ただの筋肉痛だから」

心配そうな顔を見せる京子に笑って答える。壁際でじっとその様子を眺めていた愛が口を開いた。

「……お医者さん、呼んでくる」

「あ、私も行く」

愛が部屋から出ていき、華がそれに続く。ボタン、とドアが閉じ、部屋に優と京子だけが取り残された。

「喉、渴いてない？」

京子が柔らかい笑みを浮かべ、身を乗り出してくる。

「渴いてるかも」

頷くと、ベッドわきの棚に置かれていた紙パックに入った紅茶を京子が手に取り、差しだした。ストローがささり、飲みやすいようになっている。一時的に目を覚ました時の経験から、華か愛が予め用意していたのだろう。いまだ全身に力が入らず、独特の浮遊感のようなものが全身を包み込んでいる現状ではありがたい気遣いだっ

た。
二口ほど紅茶を口に含み、優はすぐにストローから口を外した。

「ありがとう」

「身体、動かないの？」

「ちよつと力が入らなくて」

答えると、京子は思案するように口元へ人差し指を持っていき、悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「ふーん。じゃあ、今なら何やっても抵抗できないんだ？」

同時に、京子が動く。ふわりと柔らかい感触が全身を包んだ。正面から抱きしめられる形となり、自然と顔が赤くなるのが自覚できた。

「きよ、京子？ 傷が痛むんだけど」

嘘だった。京子の抱擁は、事前の悪戯っぽい言い方とは裏腹に酷く優しいもので、痛みは一切感じない。京子も優が本気で痛がつている訳ではない事が分かっているのか、背中に回した腕を緩めようとはしなかった。

「本当、目を覚まして良かった。もう、目を覚まさないんじゃないかって……」

耳元で京子の震えた声が小さく響く。

「あー、えつと……もしかして、僕そんなに長いこと寝てたの？」

京子の大袈裟な表現に疑問を感じて首を傾げると、京子が肩に埋めていた顔をあげ、キョトンとした顔を見せた。

「聞いてなかったの？ 桜井、四日間意識不明だったんだよ」

「四日……」

「そう。本当に心配したんだからね」

京子はそう言っつて、一步後ろに下がった。抱擁が解かれ、温もりが失われる。

直後、部屋のドアが開いた。廊下から数人の看護師を連れ た高齢の医師が入ってくる。京子はそれをチラリと見てから再び優に目をやって、じゃあね、と言っつて医師たちと入れ替わるように部屋から出て行つた。

医師が優の顔を覗きこむように顔を中腰になる。

「気分はどうかかな？」

「少し、眩暈がします」

「右肩は痛むかい？」

そう言われ、優は初めて右肩の傷が全く痛まない事に気付いた。

眠っている間にナノマシンによる回復機序コントロ ールが行われたの だろう。

「大丈夫です」

「ESP能力に問題は？」

思わぬ質問に首を傾げ、右手にESPエネルギーを集める。問題なく使えそうだったが、その残量は亡霊との戦闘に耐えうるようなものではなかった。いまだに回復しきつてないらしい。

「戦闘に使える程のエネルギーは残ってないようです」

看護師が何かをメモするのが見えた。医師が質問を続ける。

「もうちょっと簡単な診察を続けても大丈夫かね？ 眠くなつたら言っつてほしい」

「眠気はないので大丈夫です。」

そう答えると、医師が背を向けて後ろで控えていた看護師から機材を受け取つた。オシロスコープに似た形をしている。保持するESPエネルギーを正確に計測する為の装置だったかな、と優は記憶を辿つた。特殊戦術中隊に入隊する前に一度この装置を使つた覚え

がある。

何やら慣れない手つきで装置の設定を始める医師を眺め、優は自分の右手に視線を落とした。拳を軽く握り、すぐに手を開く。力が入らない事に加え、僅かに痺れのようなものが走った。

優の目がすつつと鋭く細まる。

「さあ、出来たよ。右手をここに当てて」

医師が装置を差しだして言う。優は何も言わず、手を差しだした。「ESPエネルギーを右手に込めて。出力はしないように」

指示に従い、ESPエネルギーを右手に集める。翡翠の光が溢れ、優の右手を包んだ。

医師の後ろでその様子を見ていた看護師が息を呑む気配。対照的に医師は顔色一つ変えず、装置の操作を始めていた。

「そのまま動かないで。そう。もう少し」

医師がディスプレイをじっと睨み続けながら言う。

そのまま計測は十秒ほど続き、終わった時には医師が安堵の表情を浮かべていた。ESPエネルギーの回復については問題が見られなかったのだろう。

「特に問題は見られないようだね。とりあえず経過を見よう。暫く入院する事になるが、クリスマスまでには退院できるから安心しなさい」

医師が冗談っぽく笑いながら言う。優は曖昧な笑みを浮かべ、頷いた。

4章 15話 白崎凜(5)

『欧州に広がる急進的ポピュリズムは新たな段階に突入し
経過観察の為に入院生活に入り、時間を持って余した優はテレビか
ら流れるニュースを退屈そうに眺めていた。』

『 イギリスに次ぎ、オランダでは極右政党、自由党が支持を集
め、呼応するように反ユダヤを掲げる 』

周りに華たちの姿はなく、それなりの広さを持つ病室には優一人
しかない。第一小隊の訓練がある為、夕方以降は来れないと聞い
ていた。時刻はまだ13時。昼食も食べ終えたばかりで、何もやる
ことがなかった。

『 こうした動きは欧州に限ったものではありません。アメリカ
はその経済基盤であるラテンアメリカに広がる急進的ポピュリズム
を脅威とみなし 』

テレビからはひたすら世界情勢の暗雲を知らせる深刻なナレーシ
ョンが流れている。亡霊という明確な敵は最早日本固有の問題とし
て処理され、他国は以前のそれと変わらない摩擦を繰り返している。

『 加えて、ユーラシア連合の存在はアメリカの世界経済への支
配力を劇的に低下させる結果となり、これは特定シンクタンクの能
力に疑問の声を 』

チャンネルを変えるか迷っていると、不意にノックの音が響いた。
反射的に時計を確認するも、第一小隊の訓練が終わるには早すぎる。
優は首を傾げながら、答えを返した。

「どうぞ」

ドアが開き、まず目に入ったのは艶やかな黒髪だった。優の顔に
僅かに驚きの色が浮かぶ。

「お身体の具合はいかがですか？」

黒髪の持ち主である白崎凜はそう言って、見舞品が入っているで
あろう紙袋を片手で抱えてドアを後ろ手で閉めた。詩織か舞と当た

りをつけていたのだが、完全に予想外の来客に優は慌ててテレビを消して姿勢を正した。

「だ、大丈夫です。怪我也治って、今はただの様子見という状態です」

「それを聞いて安心しました。椅子をお借りしても構いませんか？」
「は、はい。どうぞ」

来客用の椅子に腰かける凧を眺めながら、優はどこかそわそわした様子で自らの服装にチラリと視線を向けた。パジャマ姿で、積極的に人に見せたい服装ではない。しかし、凧は気にした風もなく、その端正な顔を優に向けて口を開いた。

「何をお持ちすれば良いのか分からなかった為、定番であります。果物をお持ちしました。よろしければお召し上がりください」

「ありがとうございます！ あ、僕、リンゴ大好きなんです」

凧の差しだした紙袋を受け取り、中を覗きこんで無邪気な笑みを零す優に釣られるように凧が薄い笑みを浮かべる。

受け取った紙袋を脇におき、優は少し困ったような表情を浮かべて凧を見た。これまでに凧と二人っきりで雑談をした経験がない為、共通の話題というものが見つからない。振り返れば、凧と数回の訓練を経てその間に交わされた会話は実務的なものに留まり、雑談らしいものは一切なかった。

逡巡した結果、優はふとある言葉を思い出した。

「白崎さんって外国語とか詳しいですか？」

「詳しい訳ではありませんが、最低限の知識はおさえてあります」

凧が僅かに不思議そうな表情を浮かべる。優はそれを無視して携帯を取り出し、入力を開始した。

「これってどういう意味か分かりますか？」

Raisond'êtreと入力された携帯のディスプレイを凧に向ける。凧はすぐに頷いて、口を開いた。

「レゾンデートル。フランス語で存在理由、存在意義を意味します」

「フランス語、ですか」

「はい。実存主義が流行った時に根付いた言葉ですね」

聞き慣れない言葉に優は首を傾げた。

「実存主義って何ですか？」

「実存は本質に先立つ、という思想です。実存とは現実存在を指し、本質とは本質存在を意味します。後に構造主義の流行によって実存主義は廃れていきますが、現在もあらゆる分野においてその残滓とすべきものがあります」

「……よくわかりません」

素直に降参すると、凜はクスリと笑みを零した。

「そうですね。私たち平均的な日本人にとって、実存主義とは酷く曖昧で捉えどころのないものです。ですが、キリスト教圏に生きる者たちは神から本質とも呼ぶべきものを与えられ、支配されています。そして、そうした有神論的な本質主義は往々にして現実存在を無視する傾向があり、事実様々な社会問題に繋がりました。その支配から逃れる思想として、実存主義は人気を博したのです。つまるところ、神への反抗です。自立し、実存としての自我を獲得する。そうした意味で、多くの日本人は無神論的実存主義者であると言えますね」

神への反抗。あるいは自立。

凜の言う通り、そうした考え方は酷く曖昧で捉えどころのないものだった。現実存在はまだしも本質存在というものがピンとこない。考え込む優を見て、凜が言葉を続けた。

「例えば、人間にとつての本質とは人間性です。人間としての、普遍的な核心部分。それが本質と呼ばれるものです。宗教的な、もしくは道徳的な観点から考えれば人間性というべきものは確かに存在するでしょう。ただ、それに囚われる必然性はどこにもなく、突き止めればそれは幻でしかありません」

「……ものすごく簡略化すれば個人主義、ということですか？」

恐る恐る尋ねると、凜は柔らかい笑みを浮かべて頷いた。

「そうですね。それが実存主義の根底にあるものです」

実存主義に関連する存在理由。

柘沙織は何を思って *Raison d'être* の文字をノートに刻んだのだろう。凜の説明を聞きながら、優はノートについて考えを巡らせた。

「……亡霊にとつての本質とは何なんでしょうか」

ふと疑問が漏れる。凜が少し意外そうな顔を浮かべた。

「白崎さんは、亡霊をどういう風に捉えていますか？」

「どういう風、とは？」

「亡霊って何なんでしょうか？」

かつて姫野雪に尋ねた問い。その問いに、凜は迷わず答えた。

「敵です。少なくとも、亡霊は我々の敵になりたがっています」

得られた解は雪のそれと同様のものだった。ただし、雪のそれは観念的で冗談っぽいものだったのに反し、凜の言葉はより具体的な答えを示すものだった。

では、問い返しましょう。人間とは、一体何なのですか？

……わからないです。

そう、わかりません。何なのか、という疑問は人間的な価値観に対する懐疑に過ぎない。普遍的な価値観が根付いていない対象物に、その問いは無意味です。亡霊はただあるだけです。ただ、存在しているだけなのです。意味なんてありません。でも、私たち人間は時間を構造化し、事象を再構成して、離散的な空間を連続した意味のある情報として処理します。では、亡霊とは何なのでしょう。人がうたかたの時空の隙間に見た幻？ それとも、社会が産み出した共同幻想？ そして

亡霊は紛れもない敵です。

「敵になりたがっている？」

「そうです。亡霊は、侵略ではなく敵対を望んでいるのです」

「どういう意味ですか？」

断言する凜に優は上体を起こし、身を乗り出した。

「亡霊はホームンクルスを使って宣戦布告を成したのです。正確に言

えば、それはイーグルの時から始まっていたましたが、我々はそれに気付かなかつた。故に亡霊はより特異なホムンクルスを投入してきたと見るべきです」

「えっと……どういう意味ですか？」

凜の話す事の意味が分からず、思わず問い返す。

「ホムンクルスがペンフィールドのホムンクルスという学術的な人形を模したものだというのはご存じの筈です。ペンフィールドのホムンクルスは脳局在論における入力量などの比率をそのまま可視化した架空の存在であり、物理的な人の本質を示したものです。亡霊の姿とこれがたまたま似通っていたということは考えられません。亡霊は確かにペンフィールドのホムンクルスを真似たのです。この意味がわかりますか？」

4章 16話 白崎凜(6)

「えっと……そういう複雑な知識を理解できるほどの高度な知性を亡霊が有している事を示している、ということですか……？」

優が自信のなさそうに答えると、凜は小さく首を振った。

「ここで着目すべきは、ペンフィールドのホムンクルス、という模倣対象ではありません。模倣した、という行為そのものです」

「行為そのもの……」

「そう、模倣出来ると言う事です。ペンフィールドのホムンクルスという模倣対象がやや特殊だった為に注意がそちらに集中していますが、まずは模倣したという事に注目しましょう。ホムンクルスの出現以前に亡霊はイーグルという鳥型の亡霊を送り込んできています。ですが、私たちはそれをさほど重要視しなかった。恐らくそれはシニファイエ、記号内容とシニフィアン、記号表現の二つに於いて、私たちが自動的に関連性を見出した為でしょう。結果的に”高機動戦闘”という内容と”鳥型の亡霊”という見た目の組み合わせは私たちの中で一つの記号として処理され、無視された。いえ、より正確に言えば、そこに関連性は存在しません。空を飛ぶ為に鳥は物理的な制約を受けて一定のフォルムを形成せざるを得ない為です。ですが、亡霊は物理干渉を受けない。亡霊にとってそれは物理的な有利性や特性に一切関係しない意味のない記号表現に過ぎません。記号学に於いてそのシニファイエとシニフィアンに関連性は存在せず、二つは全く恣意的な関係にあります。ですが、私たちは日常生活に於いて必然性がないにも関わらず、暗黙的にそれを必然化する世界に生きている為に、直観的にシニファイエとシニフィアンの一致したイーグルに対しての懐疑を怠った。反対にホムンクルスが現れた時に、イーグルと違ってその存在性が重要視されたのは純粹な戦闘力に加えて、自然世界に存在しないペンフィールドのホムンクルスを模倣したという事実が直観的なシニファイエとシニフィアンの不一致を起

こし、強烈な違和感に繋がった為です。……話が逸れましたが、とにかくイーグルとホムンクルスの二種類の亡霊が意味する重要なものは本質的に同じです。模倣。まずはその一点のみに注目しましょう。」

そこまで一度に喋って凧は息をついた。優としては話半分しか理解できなかったが、とりあえず話の本筋が理解出来た為に頷く。

そもそも模倣という行為には模倣対象が必要不可欠であるから、模倣対象が特別に何かを意味するとは限らないな、とぼんやり思考を巡らせる。

それとも、と優は凧の鋭い漆黒の瞳を見つめた。凧は何故ホムンクルスが模倣対象に選ばれたのか、という疑問にも既にある程度の見当をつけているのだろうか。

たった三歳。その歳の差が優には信じられなかった。フランス語そして話に出てきた実存主義は哲学、あるいは神学。そして記号学。どれも高校以下で触れる類のものではない。聖翔院に在籍していた事は最早関係なく、全て凧が独学で吸収した事なのだろうと予測できる。何が凧をそこまで突き動かしたのか、優は再び説明を始めた。凧の理知的な黒い瞳を見ながらぼんやりと考えた。

「模倣が可能だったということは、亡霊の姿形が選択的であることを示します。恐らくは、亡霊にとって姿とは本当に記号表現、シニフィアンに過ぎないのです。そこには物理的な、生物学的な制約は存在しない。正確に言えば亡霊はESPエネルギーの塊である為にESPエネルギーの構造的な制約を受けている筈ですが、それは物理的な姿形にあまり関与しない、と考えられます。では、以上のように亡霊の姿形は完全に選択的であると考えて話を進めましょう。すると、一つの疑問が出てきます。イーグルやホムンクルス以外の”一般的な亡霊”の姿形はどういったロジックで決定されたのでしょうか？ 亡霊の姿形が完全に選択的である、といった仮定を踏まえれば、そこには亡霊の意図が何らかの形で現れているはずです。」

「意図……戦闘能力でしょうか？ 長い爪や巨大な翼は近接戦闘を

有利に進める要素になりえます」

亡霊の姿を思い出しながら、優は真つ先に思いついた事を言った。凜が穏やかな笑みを見せる。

「桜井中隊長らしいご意見です。そう、戦闘に身を投じる側として亡霊の姿形は脅威そのもの。そうですね、ではちよつと視点を變えてみましょう。その要素が役立つ前、つまり亡霊が初めに白流島から飛び立ち、観測された時。その時点で、亡霊と人間が戦う理由はありませんでした。長い爪は何の役にも立ちません。仮に、そこで亡霊がどこかのマスコットキャラクターのような愛くるしい姿をとっていたらどうなっていたでしょうか。警戒はされるでしょうが、軍 当時は自衛隊でしたが、彼らは亡霊に積極的な攻撃をとることができたでしょうか？」

「……えつと、亡霊に物理的な攻撃は意味を成しません。だから、亡霊は初めから反撃を厭わない、戦闘に特化した姿をとったんだと思います」

少し考えてから自分の考えを述べると、凜は僅かに楽しそうな表情を浮かべた。

「筋の通つた素晴らしい考え方です。ですが、わざわざあのような悪魔的な姿を取る必要があったのかは疑問が残ります。そう、亡霊の姿は悪魔的という一言に尽きます。もし亡霊がキリスト教圏に現れたならば、彼らは亡霊をサタンと呼称したでしょう。桜井中隊長もご存じの通り、亡霊という名はその醜い、恐ろしい姿に由来します。誰もがそれに本能的な嫌悪感、もしくは危機感を覚える姿形を亡霊は敢えて選んだ。亡霊は、敵対を望んでいたのだと私は考えます。そして、亡霊の姿が選択的であり、わざわざ敵対を望んでいる事を示唆したイーグルとホームンクルスの存在は亡霊の宣戦布告を意味しているのではないか、と予想しています」

「敵対、ですか」

「そうです。定量的に戦力を評価する方法として有名なランチエスターの第二法則では同性能を有する者が戦つた場合、戦力は投入さ

れた人数の二乗に匹敵すると言われています。戦力の集中・各個撃破が兵法の基本とされる所以ですが、亡霊はわざわざそれに反した戦術、つまり戦力一定の法則と呼ばれる戦力の逐次投入を行っていません。戦闘に特化した姿をとりながら、不合理な戦術をとる、というの筋が通りません。しかし、亡霊の至上目的は敵対する事にある、と考えればこれらの一見法則性が見えない亡霊の行動特性に一貫性が出てきます」

「でも」

優は思わず反論を試みた。

「でも、敵対する事に意味があるとは考えられません。亡霊が古代兵器とか、宇宙人、外国の秘密兵器であったとしても、さっさと侵略する方が良いに決まっています」

凜の言い方では、亡霊がわざと侵略行為を遅らせているように聞こえる。事実、そうなのだろう。戦力一定の法則については、反論の余地がない。しかし、それを認める事が優には出来なかった。それを認めれば、持てる限りのリソースを注ぐこみ亡霊に抗ってきたことが無駄になる。奈々のやってきた事が、無駄になる。亡霊にとつての侵略とは敵対する為の方法であつて、目的ではないなどと認められる訳がなかった。しかし凜の説明に明確な矛盾は見当たらず、口から飛び出した反論は自分でも嫌になるほど稚拙なものだった。

凜は優の胸中を察したように、諭すような優しい口調で残酷な事実を突き付けた。

「いえ、意味はあります。意味がある可能性が、存在します」

4章 17話 白崎凜（7）

「まずは観念的な視点から。戦闘自体に意味を見出す文化が存在する、もしくは戦闘行為が儀式である可能性。戦闘民族的な習性を持つ生物であれば、その可能性は捨てられません。そもそも亡霊が生物なのかどうかも怪しいですが、侵略を目的とせず不合理な戦闘を繰り返す理由にはなりません」

凜の話を聞いて、優は昔テレビで見た少数民族の事を思い出した。崖から飛び降りて成人を認められる風習。そうした勇氣、知性、実力を試す儀式は世界中のいたるところに存在する。しかし、優にはその解釈は無理があるように思えた。

「儀式的な意味があるとすれば、全滅しては意味がない気がします。基本的に亡霊は殲滅されますし、過去に生き残った亡霊は死んだ亡霊と比べれば本当に僅かです。儀式として成り立っていないと思うんですが……」

「そうですね。誰もが通過する形式的な儀式としては成り立ちづらいでしょう。ですが、選別が目的であれば別です」

「選別？」

首を傾げる優に凜は頷いた。

「そう、選別です。例えば妊娠。一億を超える精子は子宮に辿り付く前にその九九パーセントが死滅します。競争原理に従い、優れた個を選別する儀式であれば亡霊の行動特性は自然なものとして捉える事ができます」

妊娠。精子。子宮。凜の口から躊躇いもなく飛び出した言葉に優は顔が赤くなるのを感じた。しかし凜が別段恥ずかしがっている様子を見せない為、無理矢理平静を装う。気まずい気分を味わう優とは反対に、凜は淡々と話を続けた。

「儀式という考え方をとった場合、亡霊は王、もしくは將軍に類するものを選別していると考えられます。劣った個を落とす為の儀式

ではなく、優秀な個を一意に絞る過酷な試練。そう考えれば、イーグルやホムンクルスは王候補だったのかもしれないですね」

背筋が凍った。亡霊の王。もし選別が完了した場合、一体何が起こるのだろうか。王を中心とした亡霊の軍勢が白流島から飛び出すのだろうか。

「第二の視点として、亡霊にとって戦闘行為が必然的だった可能性が考えられます。例えば、捕食。戦闘行為によって生み出された何かが亡霊にとって必要なものだった。具体的には恐怖・興奮・哀愁といった感情。もちろん観念的な意味ではなく、そうした感情とともに分泌される物理的な特定のホルモンを何らかの方法で摂取する可能性が存在します。ホルモンの分泌に限らず恐怖という感情は大脳辺縁系の扁桃体の活動に密接な関わりがありますし、そうした脳活動における何かを亡霊が求めていれば、亡霊が大規模侵攻を行わずに不合理な戦闘を繰り返す理由になります。つまり、人間は亡霊の食料として生かされている、という考え方」

「でも、もしそうしたホルモンを摂取する方法があったとしても、やっぱり死んだら意味がない気がします。食べるという行為は生への執着ですよ。食事の為に殆どの亡霊が殲滅されるというのは……」

「確かに亡霊を個体群として考えれば違和感は拭えません。ですが、個々がただの道具に過ぎない、と考えれば筋は通ります。例えば、白流島のような巨大な本体が存在し、個々の亡霊は本体の腕やチャネルに過ぎない、と考えます。戦闘行為によって得た特定ホルモンは何らかの形で本体へ輸送され、不要になったチャネルは破壊される。一体何を、どうやって摂取し、どのように輸送するのか疑問が残りますが、こうした考え方をした場合、ホムンクルスを模倣した理由に説明がつきます。根源的なものへの恐怖心、そうしたものを煽る手段としてホムンクルスは非常に適した材料ですし、一般的な亡霊の姿も最も原始的な根源的な恐怖、つまり死を連想させるフォームとして最適です」

初めてホムンクルスを見た時、本能的な嫌悪感を抱いた事を思い出す。何らかの感情反応、つまりホルモン分泌を促す手段として亡霊の姿形が選択的であるとすれば、確かに亡霊のたった手段は効率的なものと言える。

「第三の可能性として……」

凜が僅かに躊躇するように言う。

「亡霊自身が死を望んでいる可能性。不合理な戦闘の結果として亡霊の多くは死滅します。ただ死にたいだけならば更に不合理な方法を取るべきですが、そこに何らかの美学、例えば同戦力の相手に全力で殺される、といったものが存在するならば亡霊の行動特性に納得がいきます」

三番目の考え方は凜自身、あまり信じていないようだった。可能性の話としてとりあえず喋ったのだろう。

「えっと、色んな可能性があるのは分かりました。白崎さん個人としてはどの可能性が一番高いと思っていますんですか？」

何気なく、好奇心から飛び出した疑問。しかし、その言葉を聞いた凜の目に何かが灯った。今までのような理知的な冷たい印象を受ける瞳ではなく、奇妙な熱を持った瞳が優を射抜く。

「全ては選別の為に存在するのだと私は考えています。全て、です。亡霊だけではない。亡霊に唯一抗う術を持ったESP能力者さえも、選別対象である可能性があります」

「白崎さん……？」

凜の纏う雰囲気が一変した。凜の瞳に宿った熱は優に真っすぐと向けられている。

「桜井様、上をお目指してください。遙かなる上を。貴方は、王になるべき存在です」

狂信の炎を轟々と燃やし、白崎凜は言い放った。無限の敬意と信頼の眼差しを受け、優は思わずベッドの上で凜から距離をとろうと後ろに手をついた。ベッドが軋む音。凜が身をかがめて優の瞳を覗くように顔を近づける。

「亡霊の出現に示し合わせたように現れたESP能力者。ESP能力者もまた、選別の対象にあると考えるのが自然です。人の理解を超えた力、ESP能力。それを授かった私たちESP能力者は王の候補として選ばれたのです。二つの陣営において最も優れた者が最後に戦い、王として君臨する。効率的な、優れた選別システム。ESP能力者において、貴方が王である事は間違いありません。後は、亡霊の王を倒すのみ。それで、貴方は王になる。全てを統べる王に」

凜がベッドの上に片膝を乗せた。優との距離が詰まる。凜の細い腕が伸びて、優の頬に触れた。優は自分を見つめる漆黒の瞳に魅入られ、動けなかった。全てを吸い込む、虚無の闇。そこに燃える炎は激しく、あまりにも純粹で、ただ美しかった。人形のように整った凜の顔がゆっくりと近づいてくる。漆黒の瞳に狂信の明かりを灯し、爛々とその整った顔を赤く染めていく。

「桜井様、私がお手伝いします。私の全てを貴方様に捧げ、覇道を妨げる者を全力で排除します。上を、お目指してください。遥かなる高みへ。私はその為に全てを懸ける覚悟があります。いえ、桜井様の為に全てを懸ける覚悟があります。もし、桜井様が望むのならば」

凜の熱い吐息が顔に触れる。

優の頬に触れていた指が離れ、凜の胸元に向かう。

漆黒の瞳に宿る炎の種類が変化した。

「桜井様」

その時、凜の囁きを阻害するようにノックの音が室内にこだました。凜が素早くベッドの上から降り、何事もなかったかのように傍に立つ。直後、開いたドアから準と響が姿を見せた。

「ああ、すまん。先客がいたか」

凜の姿を確認した準がバツの悪そうな顔をして引き返そうとする。しかし、横にいた響はそんな事を気にせず、優に向かって走り始めた。

「おい、響！」

準が慌てたように叫ぶが、響はそれさえも無視して優に抱きつくようにベッドの上に飛び込んだ。

「さくらいー！」

小動物のように身体を摺り寄せてくる響を受け止めながら、優は困ったように凜に視線を向けた。凜の瞳に灯った激しい炎はいつの間にか姿を隠し、いつもの冷え切った漆黒の闇が瞳を支配している。「長居しすぎました。そろそろ私はお暇します。お身体ご自愛下さいませ」

「あ、えつと、お見舞いありがとうございました！」

いきなりの言葉に優が反射的にお礼の言葉を述べると、凜は一度だけ響を一瞥してからドアの前に突っ立っている準の横を通り過ぎて部屋から出ていった。準は戸惑ったようにボタンと閉じたドアを見てから優の元へ足を運んだ。

「すまんな。邪魔したか？」

「いえ……逆に助かりました」

準が眉を寄せる。優は緊張の糸が切れたように深く息をつき、響を抱きかかえた。

「さくらい、びょうきななの？」

「大丈夫、僕は元気だよ。ちょっと休んでるだけ」

心配そうに尋ねてくる響に優は笑みを浮かべた。

準がベッドの横にある椅子に腰をおろし、響と優のやり取りを眺めて微笑む。

「怪我はもう治ったのか？」

「はい。起きた時にはほぼ完治していました。経過を見るだけなので、すぐに退院できるみたいです」

「それを聞いて安心した。何か欲しいもんないか？ 売店で売ってる物なら買ってきてやる」

準が立ちあがる。優は少し悩んでから屈託のない笑みを浮かべて口を開いた。

「アイスが欲しいです。できればバニラで」

「あいすー！」

響が優を真似て楽しそうに言う。準は僅かに顔をしかめた。

「風邪ひくぞ」

「ちよつと身体に悪いものが食べたいんです。健康的な病院食ばかりで、このままだと逆に身体壊しちゃうかも」

冗談っぽくそう言うと、準は呆れたように笑って何も言わずに背を向けた。

部屋から出ていく準の姿を見送ってから、優は何となく窓の外に目をやった。二階である為、枯れ木がいくつも見える。風に吹かれて僅かに残った木の葉が散っていくのを眺めながら、優は選別という言葉について考えた。

優秀な個を見出す為の選別。その可能性は大いにある。しかし、凜の言うような王を決める選別である保証はどこにもない。逆に、生贄に相応しい個を見出す為の選別である可能性もある。しかし、凜はその可能性について触れなかった。

凜の瞳に宿った漆黒の炎を思い出す。凜もまた

優は小さく息をつき、腕の中で心地良さそうに目を瞑る響を抱きしめた。

結局、全ては推測でしかない。凜の出した答えが全て違う可能性もあるし、その全てである可能性もある。

だけど、と優は窓の外で散りゆく木の葉を見ながら思った。亡霊の目的が選別であれば、その先に待つものは何なのだろうか。この長い闘争を経て、その先に相応しい対価が存在するのだろうか。優には、そんなものが存在するとは到底思えなかった。

4章 18話 神奈奈々(8)

『新改革党、自由党の二大政党の支持率が低下の一途を辿る一方、新党“不死鳥”が急激な支持を集め第三の』

目を覚ましてから三日が経過した。この日も桜井優はテレビから流れるニュースをぼんやりと眺めながら、大きく欠伸した。

そしてベッドの中にもぐりこみ、うーうーと意味もなく唸る。本当にやる事がなく、暇だった。

『社会党の平井代表はこの風潮に対して懸念を表し』

面白味のないニュースを聞き流しながら、優はベッドの中でもぞもぞと身を丸めた。何ともなしに、掛け布団を頭から被ったままゴロゴロと転がる。

ちよつと楽しいかも、と奇行に何かの突破口を見出しかけた時、ノックの音が響いた。バツと掛け布団を弾き飛ばし、慌てて態勢を立て直す。

直後、開いたドアから奈々が顔を覗かせた。

「し、神条司令!？」

慌てて弾き飛ばしたばかりの掛け布団を引きよせて、パジャマ姿を隠す。

「もしかして取り込み中だったかしら？」

慌ただしい優の様子を見て、奈々がクスリと笑う。優はブンブんと首を横に振った。

「いえ! どうぞどうぞ! 汚い病室ですみません!」

病院側に非常に失礼な事を言いながら椅子を勧める。奈々はクスクスと笑いながらベッドの横に置かれた来客用の椅子に腰かけた。

「身体の方はどう？」

「ちよつと体力が落ちてますが、怪我の方はもう大丈夫です」

「良かった。食欲ある? これ、良かったら食べて」

奈々は安心したように柔和な笑みを見せ、手にした紙袋を差し出

した。中身はいつものプリン。優は嬉しそうな表情を浮かべてから、ある事に気づいてすぐに困惑した表情を浮かべた。

「ありがとうございます。あの……今お仕事ですよ。こんな所に来て大丈夫なんですか？」

時刻はまだ午後二時。亡霊対策室の司令官である奈々がお見舞いに来るとは考えられない。何らかの報告があるのだろうか、と優は身を硬くした。

「優秀な副官を置いてきてるから大丈夫よ。それに、仕事よりも大事な事があるの」

「仕事よりも、大事なこと？」

首を傾げる優に奈々は頷いた。

「そう。君とお話したくて」

何故わざわざ話をする為に仕事を抜けてきたのだろうか、と優が疑問符を頭の上に浮かべた時、不意に瞳をじっと覗きこむように奈々が身をかがめた。全身が硬直する。

「前に君と二人っきりで話をしたのも病室だったわね」

「……はい」

奈々が何を言おうとしているのか図りかねて、優はただ素直に相槌を打った。

「覚えてる？ 初陣の時、華が亡霊に囲まれたのを助けようと、君は危険を顧みず亡霊の群れに飛び込んでいった。あの時は本当に血の気が引いたわ」

「……すみません」

顔を伏せる優をよそに、奈々の言葉が続く。

「イーグルの時も。詩織が危なくなった時、君は何処からともなくやってきて、誘導弾と詩織の間に自ら飛び込んだ」

自身の軽率な行動を続けて挙げられ、優は伏せた目をあげられなかった。

「その次は高梨市の戦い。君はエネルギー体に吞まれた子を助けようと、真っ先に中に突っ込んでいった」

全部、優の独断に基づくものだった。やはり、奈々は怒っているのだろうか。一人で戦っている訳ではないのだ。一人の軽率な行動が全体の被害に繋がる場合もある。そして、その責任は全て奈々が負う事になるのだ。今まで咎められなかった事が不思議なくらいだった。

「本部が襲撃を受けた時も、君は危険な状況にも関わらず状況把握も儘ならないまま一人で飛びだした」

「……はい」

「そして、今回のホムンクルス。前回に第一分隊以上の全員がホムンクルス単体に落とされているにも関わらず、君は足止めの為にたった一人で悪天候の中ホムンクルスに向かった」

そこで、奈々は一旦言葉を止め、優の肩を掴んだ。驚いて顔をあげると、厳しい顔をした奈々と目が合う。

「君は」

そこで、奈々は息を吸った。怒られると思い、反射的に目を瞑る。しかし、奈々の口から飛び出した言葉は優の予想と反対のものだった。

「死にたいの？」

「え？」

思わず意味をなさない言葉が口から飛び出した。

「君の行動からは生への執着が一切感じられない。私には、君が死にたがっているように見える」

奈々の声が震えている事に気付き、優は困惑の表情を浮かべた。

僕が死にたがっている？

自問し、すぐに棄却する。死にたいと思った事は、一度たりともなかった。

むしろ、死を回避する為にホムンクルスの戦闘に備えてあらゆる空戦機動を身に付けたし、基礎体力の向上も怠らなかった。

奈々の言葉を受けて深い思考の海に潜った時、不意に柔らかい感触に包まれた。すぐに抱き寄せられたのだと気づく。

「神条司令……?」

身長差がある為に優の頭は奈々の肩に当たり、奈々の顔をうかがい知る事はできなかった。

「よく聞きなさい。最も愚かな事は他者を軽んじる事だけど、二番目に愚かな事は自分を軽んじる事よ。少なくとも私には君が必要だし、他にも君を必要とする子がいる。自己犠牲で犠牲になるのは君だけではない」

「あ、あの、僕は」

死にたくありません、と口を挟もうとした時、背中に回された奈々の腕に力が込められた。

「もう一つ、大事な話があるの。過去にESPエネルギーの消耗が原因で意識障害に陥った前例は存在しない。つまり、君は他と何かが違う可能性が高く、経験的に確認されているESP能力の無害性は保証できない。それどころかESPエネルギーの消費が君の生体活動に何らかの悪影響を与えている可能性がある。よって、これより君に無期限の休暇を言い渡す」

無期限の休暇。その意味を悟って、優は思わず奈々の胸から離れて奈々の顔を見上げた。

「そんな」

「ESP能力の安全性が確認されるまでESPエネルギーを用いた訓練への参加も認めない」

有無を言わせない奈々の口調に優は奇妙な空虚感を感じた。

「安全性が確認されるって、いつまでですか?」

「具体的な数字は挙げられない」

「ESP能力の研究は凄く難しいって聞きました。安全性が確認できるなんて思えません」

「そう。安全性を確認する事は難しい。それまで、君には休暇が与えられる。除隊させる訳ではないから、給与はこれまで通り振り込まれ続ける。寮棟も引き続き利用が可能よ。悪い条件ではない」

淡々と事務的に条件を口にする奈々に、優は思わず声を荒げた。

「待つてください！ 僕、大丈夫です！ まだ戦えます！ これまで何も問題はありませんでした！ ESPエネルギーの使い過ぎにさえ注意すれば」

「優君」

奈々の静かな、しかし重みのある声が優の言葉を阻んだ。

「私は、はつきりとESP能力の危険について知らせた。君のESP能力は君を滅ぼす危険性が高い。なのに、君は戦うのを止めようとしない」

奈々の鋭い眼光が優を射抜いた。

「本当に君は 死を望んでいるの？」

4章 19話 神奈奈々(9) (前書き)

今までR a i s o n d ' e t r eに年齢制限はつけていませんでしたが、今回よりR15指定を入れることになりました。以降に限らず、これ以前にも15歳未満の閲覧に不適切な表現が使用されていた事をお詫びいたします。また、この物語はフィクションであり、実在の人物・団体等とは一切関係ありません。

4章 19話 神奈奈々(9)

「本当に君は 死を望んでいるの？」

「違います！ 僕、中隊長です。立場的にも」

「なら」

優が反論を奈々が遮る。

「君の中隊長権限を剥奪する」

思わぬ奈々の選択に、優は絶句した。奈々の眼は本気だった。脅しやブラフではない。それを悟って、優は全身の血の気が引いていくのを感じた。

「中隊長という立場が君を束縛しているなら、それを取り除く。君は、まだ十六歳よ。くだらない責任なんて考えなくていい。それは、君が考えるべき問題ではない。全ての責任は、私にある」

「違います！ そんな、束縛なんて、違うんです。そういうのじゃなくて、嫌なんです。皆、戦ってます。僕だけ休むなんて、そんなの出来ないです！」

「そう、皆戦っている。それは亡霊が危険な存在であっても、戦うという行為自体に危険がないから。でも、君は違う。戦闘行為自体が、君を蝕む危険がある。君には休暇を受ける正当な理由がある」

「そんな、でも、僕、貴重なESPエネルギーに恵まれました。もし、もしESP能力が危険なものだとしても、それを使えば多くの人が助かります。戦うのは、僕の義務です」

「力があるからその身を滅ぼしても弱者を救えというのは、弱者のエゴでしかない。そんな義務を課そうとする弱者など、見捨てればいい」

奈々は冷徹に言った。それで、優は今まで奈々に戦いを強要された覚えがない事に気付いた。毎年、特殊戦術中隊からは多くの離脱が出るという。多分、奈々はそれを引きとめたことがないのだろう。それが、ESP能力を持たない、亡霊戦における弱者である奈々の

スタンスであり、矜持なのかもしれない。

そして、ふと恵の言っていた言葉を思い出す。

でも、奈々は残った。当時はESP能力者なんて見つかったなかつたからさ、防衛大に残留するってことは自分で武器を手にとって得体の知れない化け物と戦う覚悟があつたってこと。

奈々は、全てに於いて割り切っている。奈々には、見捨てられる覚悟がある。しかし、全員がそれほどまでに大人な訳ではない。

「課されたんじゃないなくて、自分で課したいんです。僕は、その為に戦いたいんです」

奈々は、正面からじつと優を見つめた。

「もう一度聞きましょう。君は、戦闘の先にある死を望んでいるの？」

違う、と優は叫びたかつた。しかし、明確な理由が見当たらない平和の為？ 弱者の為？ 中隊長だから？ 全て、違う気がした。

それらはハリボテのように陳腐な、優の意思とは別の階層にある社会を形成する何かであり、優が奈々の提案に強く反発する根源的な理由ではない気がした。

社会生活によって培われてきた何か。フィクションに感化された崇高な何か。積み重なった思想の鎖。思春期特有の意味のない反発。それらは、恐らく奈々を説得する理由にはならない。明確な理由を示さなければ、奈々は納得しない。自分を突き動かす何かを、優は必死に探した。

Raisonnement d'etre.

不意に柘沙織の部屋にあったノートの表題を思い出した。

存在理由。実存は本質に先立つと凜は言っていたが、それこそが根源的な何かのように思えた。

しかし、奈々にそれを説明する事は難しい。酷く抽象的なこの衝動を他人が理解できるとは到底思えなかつた。

黙り込む優を見て、奈々は話はこれで終わりといった様子で立ちあがつた。

「中隊長権限を剥奪する事はしない。しかし、ESP能力の行使は認めない。戦えるのは君だけじゃないんだから、君が不要な危険を負う必要はない。他の子を信じなさい」

そう言つて、奈々は背を向けた。

足音とともに、奈々が遠ざかつていく。その後ろ姿を見て、優は幼い日の、遠い記憶を思い出した。

ちゃんと良い子にしててね。そう言つて、あの人は去つていった。すぐ帰ると言葉を残したあの人は未だに帰らない。

あの人と、奈々の後ろ姿が重なる。遠い過去の、酷く曖昧な記憶と現実が重なり合う。

冷水を浴びせられたように、ゾッ何かが背筋を駆け抜けた。優は根源的な何かに突き動かされて、ベッドから起き上がった。

「待つてください！」

追いかけてようとした次の瞬間、景色が反転した。体力が回復しきつていなかったせいか、突然身体から力抜けて、ベッドから転げ落ちる。肩から床に叩きつけられ、鈍い痛みが走った。しかし、優は広がる苦痛を無為して、顔をあげて叫んだ。

「お願いします！ 何でもします！ だから、捨てないてください！」

振り返つた奈々の顔が、何か致命的なミスに気付いたような後悔に彩られた。

「優君……」

優は立ちあがろうと右腕に力こめて、再び地面に突つ伏した。右腕に痺れが走り、体重を支えきれなかったのだ。その事が、優の不安に拍車をかけた。

「悪い所があれば直します。望む事は何でもします。給与もいりません。部屋も、戦闘支給品も、何もいらなです。だから、置いていかないでください」

ドアの前で止まっていた奈々が弾かれたように動いた。床に崩れていた優を抱え上げ、両手で力強く抱きしめる。

「私には、君が必要よ。だから、君を危険な戦闘から遠ざけたいの。ESP能力の安全性を証明するなんて出来る訳ない」

「神条司令……？」

先程までの冷徹な態度が嘘のような奈々の言葉に、優の口から自然と疑問の声が漏れた。

「本当はね、ずっと君を前線から外したかったの。怪我をして帰ってくる君を見る度に、不安だった。君の行動はあまりにも直情的で、死に急いでいるように見えて、凄く怖かった。いつか、突然居なくなってしまうそうで」

そこで奈々は言葉を切った。代わりに、背中に回された腕の力が強くなる。僅かに甘いコロンの香りが鼻につき、優は奇妙な安堵感に満たされた。

「もう一度言いましょう。私には、君が必要な。だから、今はゆっくりと休んで欲しい」

耳元で囁かされるストレートな言葉に優は顔を真っ赤にしながらコクリと小さく頷いた。直後、抱擁が緩む。

「優君」

奈々は僅かに身をかがめ、正面からじつと顔を覗きこむような態勢をとった。

「君が不安にならないように。私の言葉が本音である事を証明する為に。だから、少しごめんなさい」

奈々はそう言って、再び優を抱き寄せた。先程の強い抱擁とは違い、恐る恐るといった様子の、柔らかい抱擁。そして唇に触れる柔らかい感触に、優は驚いて目を見開いた。

優が抵抗しない事を確認した為か、抱擁が強くなる。同時に、塞がれた唇の間から何かが侵入を始めた。

「……んっ……」

驚いて小さく呻き声が漏れる。その瞬間、抱擁が弱まった。嫌がる事はしない、という意思表示だろう。優は抵抗することなく、それを受け入れた。再び抱擁が強くなり、口内で奈々の舌がゆっくり

と動き始める。

「……………」

奈々の動きが段々と激しくなり、小さな水音が静かな病室にこだました。

「……………っはあ、あ、……………っ……………！」

息が続かなくなり、無理矢理顔を離す。しかし、二度大きく息を吸ったところですぐに奈々に口を塞がれた。再び奈々の舌先が侵入を果たす。

「んっ……………」

奈々の手が後頭部に回り、強く引き寄せられる。これ以上ないほど身体が密着していても尚その距離を縮めようかとするように奈々の腕に力が込められた。

僅かに互いが離れた間に奈々の激しい息遣いが漏れ、息をする時間も勿体ないという様子で再びキスが始まる。奈々の貪るような激しい口付けを受けて、優は徐々に思考力が低下していくのを感じた。不意に奈々が後頭部と背中に回した両腕の力を緩めた。二人の顔が離れ、その間に唾液が糸を引いた。普段は落ちついた雰囲気をつう奈々が上気した顔で恥ずかしそうに口元を拭う。

「ごめんなさい。こうでもしないと、分かってもらえないと思って、奈々はそう言って、再び優を抱えた。今度は抱擁ではなく、支える目的を持ったものだった。

「し、司令？」

お姫様だっこのような形で持ち上げられ、優が慌てたように奈々の顔を見上げた。奈々はまだ赤い顔でクスクスと小さく声をたてて笑った。

「君、軽いわね。絶対に私よりも軽いわ。嫌になっちゃう」

「僕の身長がないだけです。身長が同じなら神条司令と変わらないと思います」

「そうだと良いんだけど、ね」

奈々はそう言って、優をベッドに運び込んだ。そっと優しくベッ

ドの上に下ろし、口を開く。

「まだ体力が回復しきってない。今はゆっくりと休みなさい。私は、君が寝るまで横にいるから」

「……はい」

「手、出して」

「……はい」

出した手が、優しく握られる。

優は静かに目を瞑った。

急速に眠気に襲われる。奈々の言う通り、体力が回復しきっていないようだった。

優の意識が落ちる寸前、奈々が何かを言った気がした。しかし、優はそれを言語として処理する事ができなかった。しかし、それが温かみを持った言葉である事がわかったし、優にはそれだけで十分だった。

その日、桜井優は久しぶりに悪い夢を見ることなく穏やかな眠りについた。

4章 20話 神奈奈々(10)

目が覚めると、傍には既に誰もいなかった。

カーテンから洩れる朝日に目を細めて、桜井優はゆっくりとベッドから起き上がった。喉がカラカラで、フラフラと小型冷蔵庫に向かい、中からお茶を取り出す。良く冷えたお茶が喉を通り、優の意識を一気に覚醒させた。

小さく息をつき、冷蔵庫を閉める。意識がはつきりとした途端に昨日の事が脳裏に蘇り、優は顔を両手で覆った。

やってしまった。

様々な後悔に襲われ、ベッドに倒れこむ。

自分の言動はもちろん、その後の行為を思い出して優は死にたい気分になった。

そもそも、奈々のあの行動の意図が掴めなかった。私には君が必要よ、と奈々は言った。そして、それを証明するとも。

じゃあ、ただ信頼を得る為に？

そう考えて、すぐに違うと首を振る。それなら、あそこまでやる必要はない。

なら、神条司令は僕を？

そこまで考えて、それこそまさか、と優は首を振った。自分と奈々ではつり合いが取れない。そもそも、奈々から見れば自分などまだまだ子どもだ。

それとも、慰めや、錯乱していた自分を落ちつかせる為に？それも違う気がした。どれも奈々のやり方ではないように思える。答えは、どれだけ考えてもわかりそうになかった。

亡霊対策室防諜部。その一室で奈々は真剣な顔で端末を操作して

いた。

奈々は省庁間の内部ネットワークにVPNと呼ばれる仮想的なプライベート・ネットワークを通して入り込んでいた。VPNはあくまでも論理的な専用回線であり、物理的な専用回線ではない。ランニングコストとその応用性から現在では物理的な専用回線の大半がVPNへの移行を開始している。

目標は総務省内部ネットワークの更に奥、総基ネット。e-JAPANプロジェクトの基幹システム。電子政府の実現を目指して立案された二〇〇一年から続く国家プロジェクトの一つだ。

ＣＵＩ端末に命令を打ちこみ、認証を済ませる。同時に”弱いAI”から応答メッセージが返ってくる。

『総合国民基本台帳ネットワークシステムへようこそ！』

簡素なメッセージ。GUI環境であれば総務省のシユールなマスコトキャラクターが表示される場面だが、奈々が利用している環境に余分な機能は付随していない為、キャラクター（文字）しか表示されない。

>名前検索を頼みたい<

プロンプトに演算式を放り込めばそのまま答えが返ってくるが、奈々は弱いAIとの対話を選択した。業務に必要な最低限度の要求なら弱いAIが誘導してくれる。もちろん、あくまでこれは人間が予め用意したプログラムに過ぎず、AIとの日常会話などは成立しない。

『誰を検索しますか？姓と名をスペースで区切って入力してください。どちらかが不明な場合は*を入力してください』

奈々は息を深く吸い込み、ゆっくりとキーボードを叩いた。

>桜井 優<

端末が一瞬固まる。そして、検索中の文字。

奈々は息を止めて、じっと画面を眺めた。

『十三件ヒットしました。絞り込みを行う場合は新たに検索を希望する属性を入力してください』

>全て表示して<

すぐに十三人の桜井優の名を持った人物がリストアップされる。奈々はその十三人に目をさすと通して、すぐに顔を両手で覆った。総基ネット上で”桜井優”は存在しない事になっている。十三人の桜井優は”桜井優”とは完全に別人だった。

こんな事は、有り得ない。桜井優は、情報的に死んでいる。

何が起こっている？

亡霊対策室の桜井優のパーソナルデータだけが消えていた事と何らかの関連性がある筈だった。

何者かが桜井優の存在を消そうとしている？

そこで、奈々は真つ先に斎藤響の件を思い出した。

戦略情報局は情報的に殺した子どもを利用して、医療用ナノマシンの過剰投与を行っていた。方法はどうであれ、人工的なESP能力者の製造を目指した戦略情報局の方針は理に叶ったものだ。国家は根源的な部分では功利的でなければならぬ。戦略情報局のような機関は必要不可欠なのだ。結局は誰かがやらなければならない。

では、桜井優も？

桜井優も、斎藤響と同様に何らかの実験で強制的にESP能力を発現させられた可能性も考えられる。本来、ESP能力は女性にしか確認されていないものだったのだ。その法則性を破る、何らかの特殊な過程があったとすれば納得がいく。

しかし、一体どこが？

戦略情報局はつい最近まで実験を繰り返してきたのだ。そして、そのコントロール・キャパシティを超えた斎藤響のESP能力発現によってプロジェクトは崩壊した。響以上のESP能力を持つ優が先に生まれていれば、既にプロジェクトは凍結されていたはずだ。

ならば、戦略情報局以外が？

しかし、それも考えづらい。防衛省関係でESP能力の研究に着手していそうな所は見当たらない。そもそも、日本はそうした研究に研究費が降りないのだ。恐慌の中心となった米国は今でも軍事研

究に多額の予算をつぎ込んでいるが、日本では同じ研究をする際に別の名目を考える必要がある。多額の資金を軍事研究に自由に運用できる所と言えば、亡霊対策室・戦略情報局・防衛研究所くらいだ。そして、自衛軍は独自で何らかの動きを見せているようだったが、防諜部の報告を聞いている限り、そうしたキナ臭い実験とは無縁のようだった。

奈々は溜め息を吐いて総基ネットとの接続を切った。結局、何もわからない。いつもそうだ。いつだって必要な事は何もわからない。端末をシャットダウンして席から立ち上がる。脳裏に昨日の優の言葉が蘇り、奈々は胸が締め付けられるような気分を味わった。

捨てないでください。

フラツシユバツク現象。何らかの事情で優が親から捨てられたと見て間違いない。その事が気にかかり今日はわざわざ総基ネットに接続したのだが、思いもしない結果となってしまった。

暗くなった画面を眺めながら、奈々は消えたデータの事について再びぼんやりと考えを巡らせた。これは、何らかの警告なのだろうか？ それとも、宣戦布告なのだろうか？ もしくは、何らかの支援活動なのだろうか？

分らない。分らないが、あらゆる優のデータが消えていく事に奈々は得体の知れない恐怖を感じた。いつかその侵食が桜井優自身に繋がるのではないか、と漠然とした不安感に襲われ、その考えを振り払うように奈々は席から勢いよく立ち上がり、沈黙する端末から逃げるようにその場を去った。

4章 21話 川上沙耶

十二月十六日。退院の日。

お世話になつた医師や看護師に感謝の言葉を述べて、優は病院の表玄関から外に出た。表の駐車場には亡霊対策室から迎えに来た大型のバスが待機し、その前に2ダースほどの少女と護衛の男達が立っていた。優の姿を確認した途端、そのうちの何人かが手を振る。優はその中に凜と奈々の姿がない事に安堵の息をつき、バスに向かった。

「退院おめでとうございます！」

駆け寄ってくる詩織に笑顔を返した時、バスの前で空気のように存在を掻き消していた男が動いた。保安部から派遣された護衛部隊長の中村俊之。長身で身体つきもよく、近くで見れば迫力がある。そんな男が音もなく滑るように接近してきた為、優は一瞬だけ変に身構えそうになった。

「周囲に不穏な動きが見られます。早くご乗車ください」

耳元で囁かされた言葉に、優は態度を一変に軟化させて小さく頷いた。詩織には中村の言葉が届かなかったようで、優と中村の様子を見て不思議そうに小さく首を傾げた。

「話は中でゆっくりしない？」

優は何でもない風を装い、詩織を含めた特殊戦術中隊の面々にバスの中へ入る事を急かした。提案通りにゾロゾロと部下の少女達が全員入った後、優は周囲を軽く見回した。しかし、中村の言った不穏な動きとやらはどこにも見当たらない。広い駐車場に数人の見舞客らしき者の姿が見えるだけだった。中村の勘違いだったのではないか、と首を傾げながらバスに乗り込む。その後ろで中村と保安部の者が何かを警戒するようにある方向をじっと見つめてからバスに乗り込んだ。外に残った数人の保安部の者たちが別の車に乗り込むのを窓からチラッと眺めてから、優はバス内の空いている席を探し

た。

「桜井、こつちこつち！」

後ろの方に座っていた京子が手を挙げて隣の空いてる席を示す。その後ろの席には華と愛がいた。呼ばれたままに京子たちの席へ向かおうと通路を進もうとしたところで突然横から伸びた手に腕を掴まれ、優はたたらを踏んだ。

「おいおい、せつかく迎えに来てやったんだから、こつちもちよつとは相手しろよ！」

第一小隊・第二分隊長の川上沙耶が鮮やかな金色に染められた長い髪をかきあげて笑いながら言う。優は困ったような表情を浮かべて、首を傾げた。

「えーと、ありがとう？」

「何で疑問系なんだよ。もつと感謝の形を示せつての」

沙耶が不満そうに言う。その後ろの席から同じく第一小隊の小山千夏ちなつがひよっこりと顔を出した。

「そうそう。桜井くんさあ、京子たちにべつたりしすぎ」

優は考える素振りを見せて、千夏から沙耶に顔を向けた。

「感謝の形つて何を示せばいいの？」

沙耶がにっこりと笑う。

「クリスマス付き合え。パーティーやるから来い」

「何言つてんの！ クリスマスは既に私達と予定あるつての！」

後方の席から京子の声。沙耶が面倒くさそうに吊り目がちな双眸を細めて京子の方を振り向いた。

「おいおい。男は桜井一人しかいないんだぞ。そりゃあ独占禁止法違反だろ」

沙耶の抗議に千夏が続く。

「私達に二年連続で男のいないクリスマスを過ごさせる気イ？」

「街で適当に引っかけるか、他部の男連れ込めばいいじゃん」

と京子。沙耶が露骨に顔をしかめる。

「他部はおっさんばっかじゃねーか！ 圏外だ、圏外」

その一言で前方の席に座る保安部の一人の肩が震えたのを優は視界の隅に捉えた。慌ててフォロワーに入る。

「いや、良い人も結構いるよ！ 斎藤さんとか理解力あるし！」

「それ確か妻子持ちだろ。良い男は総務部の女達が上から取っついてい
くからな、他部に良い男はもう残ってないって」

沙耶はそう言っつて、再び席から身を乗り出して後方の京子達に顔を向けた。

「っつーことで、桜井は借りてくぞー！」

「ダメだつて。っーか独占禁止とか言っつていて借りるってどういう
事よ」

京子の声に苛立ちが混じり始める。

「ほら、華も何か言っつてよ。小隊長でしょー！」

「ええ？ 私！？ わ、私は桜井君の意思を尊重したいなあ、つて」

華から遠慮がちな視線を受けて、優はますます困つたような表情を浮かべた。それを悟つたのか、沙耶達と反対の席から第四小隊の黒木舞が大きな声をあげた。

「もう面倒だからさ、第一小隊全体でクリスマスパーティーやれば良いんじゃないかな？」

「全員でパーティーできる場所なんてありませんか？」

千夏が疑問の声をあげる。舞は笑みを浮かべた。

「談話室とか結構良い感じの広さだと思っつよ。それか、予め申請すればどっかの部屋を簡単に借りられるんじゃない？」

「談話室か。それなら」

沙耶が乗り気で舞の提案に頷いた時、前方の運転席から遠慮がちな若い男の声が響いた。

「そろそろ出発したいので席についてください」

「あ、申し訳ないです！」

優が短く謝つて、急いで京子の方に向かおうとした時、再び沙耶の腕が優の腕に絡みついた。

「まあまあ。今日はこっちに付き合えよ」

無理矢理沙耶の隣の席に引きずり込まれ、優が抗議の声をあげようとした時、バスが動き出した。大きくバスが揺れ、立ちあがるのを諦めてそのまま席につく。

「で、川上さんは何が目的なの？」

不満そうに優が言うと、沙耶は小さく苦笑した。

「そうカツカすんなって。お前なあ、中隊唯一の男って自覚が足りなさすぎるぞ。こういうイベントの時は嫌でもそれが際立つんだから、とりあえず全員に笑顔を振りまいとけ。それだけで万事上手くいくんだからよ」

「……そうかなあ」

優が懐疑的に答えると、沙耶は苦笑を更に深くして、おどけるように言葉を続けた。

「女の嫉妬は怖いぞお」

優は何も言えず、黙り込んだ。

結局、沙耶と千夏、加えて他の数人の意見が採用されてクリスマスは第一小隊の面々と過ごす事に決定した。と言っても、第一小隊がパーティを主導するだけであり、第一小隊だけでパーティをする訳ではないようだった。その為、他部隊からどれだけ人が来るか分からないとして、早速沙耶が連絡網を作成し、おおよその出席者数を見積もり始めた。優はその行動力に内心呆れに近い感情を抱きながら、隣の席で忙しそうに携帯をいじる沙耶の姿を見やった。金色に染められた髪と、やや吊りがちな瞳からきつい印象を受けるが、沙耶が他者を軽んじるところは見た事がなかった。やや強引なところがあるが、悪い子ではないのだろう、と思う。

沙耶から視線を外し、窓の外に目をやると死んだ木々が目に入った。どうやら本部が存在する山中にバスが入ったらしい。暫く後ろへ流れていく景色をぼんやりと眺めていると、突然沙耶が口を開いた。

「神条の奴が言ってたんだけどさ」

沙耶は手元の携帯に目を落としたまま、言葉を重ねた。

「お前、暫く休暇を貰ったんだってな。どこか身体悪いのか？」

無期限の休暇を得た事を思い出し、優は僅かに不機嫌そうな表情を浮かべた。

「どこも悪くないよ。ESPエネルギーを使いすぎてたから、十分に回復するまで休むだけ」

僅かに真実をぼかして伝える。沙耶は携帯を操作しながら、そうか、とだけ答えた。

バスが本部の敷地内に入る。その時、ぼそつと沙耶が呟いた。

「すまなかつたな」

優が不思議そうな顔を作ると、沙耶はようやく顔をあげて補足した。

「ほら、ホムンクルス。殆どお前に押しつけちゃった」

優は沙耶の顔をまじまじと見つめてから、クスリと笑みを零した。

「もしかして、それを言う為にわざわざこの席に連れ込んだの？」

沙耶は、それもある、と小さく言った。

「それも？」

他に理由が思い当たらず、反射的に聞き返した時、バスが停車した。大きく車内が揺れて、前の席に頭を軽く打ち付ける。優は堪らず額を押さえながら小さく呻き声をあげた。それを見た沙耶が声をたてて笑いながら、通路側にいる優に早く出るように言った。

バスは正面玄関のすぐ前に停まっていた。比較的前の席に座っていた優はバスから出ると後方に座っていた華たちが出てくるのを待ちながら、バスの後ろに止まっている黒い護衛の車に視線を向けた。車の前で中村が携帯に向かって声を抑えながら怒鳴っている。気のせいか中村の表情が硬いように見えた。病院の駐車場で中村は「周囲に不穏な動きある」と言っていたが、何か良くないことがあったのだろうか。じつと中村の様子を眺めていると、突然後ろから肩を叩かれた。振り返ると華の姿があった。その後ろに京子、愛、詩織、舞。

「寒いし早く中入ろう」

華が言う。優は頷いて、五人とともに自動ドアをくぐって中に入った。

広いエントランスホールの中央に設置された四メートルほどのクリスマスツリーが視界を支配し、優は小さく感嘆の息をもらした。そして後ろから京子の声が届く。

「クリスマスはパーティーやることになったけどさ、イヴは空いてるよね？」

「空いてるよ」

「じゃあさ、私たちで予定通りイヴに遊ばない？」

「僕も同じこと提案しようと思ってたところ」

そう言っていると、京子は本当に嬉しそうな笑みを浮かべた。釣られて、自然と笑みが零れる。

背後に聳え立つクリスマスツリーが、エントランスホールに集う子どもたちを祝福するようにチカチカと鮮やかな光を放った。

4章 22話 姫野雪(2)

桜井優は懐かしさを噛みしめながら、暗い階段をゆっくりとのぼった。

休みたい、と言って華達と別れた後、優は真つすぐに寮棟の屋上に向かった。確かめたい事があった。薄暗い階段をのぼり切り、道を塞ぐ鉄製の扉に手をかける。鍵はかかっていたいなかった。扉が軋み、開いた隙間からオレンジ色の光と冷たい風が吹き込んだ。予想外の寒さに身を小さく震わせるも、扉を思い切つて引き抜く。朱に染まった空が視界を覆い、頬を冷たい風が撫でた。

「ご退院おめでとうございます」

屋上に足を踏み入れた瞬間、頭上から透き通った女性の声が響いた。驚いて顔をあげると、ペントハウスの上に佇む姫野雪の姿が視界に飛び込んできた。

「ひ、姫野さん？」

思わぬ先客の登場に声が上ずる。雪はクスリと笑みを零し、首を傾げた。

「涼みに来られた、という感じではなさそうですね。何かお悩みですか？」

「あの、別に目的とかはなくて、ただ風に当たりに
「嘘」

そう言つて、雪はふわりとペントハウスの屋根から飛び降りた。重力に逆らうように白亜の髪が空を舞い、音もなく綺麗に着地する。結構な高さがあった為に、雪の意外な身体能力に優は内心驚きを禁じ得なかった。

「貴方は用事があつてここにきた。それに、悩みもある」

ゆっくりと近づいてくる雪を見て、前も似たような事があつたな、
と思いだす。わざとあの時の状況を雪が再現しているように思えた。
「……はい。以前に姫野さんからESPエネルギーが情報を搬送す

るといふ事を聞いて、色々考えて、今日ようやくそれを試そうと

「ESP能力の行使は禁じられているのではないですか？」

雪がやや楽しそうに言う。優は困ったように頷いた。

「反抗期なんです」

「モラトリアムを謳歌するのは結構ですが、それを実行すれば屋上への立ち入りが禁止されてしまいますよ。もう少し上手く立ち回るべきです」

雪に優しく諭され、優は僅かに苦い顔をした。

「……そうですね。少し、場所に困って。正直なところ、あまり深く考えていませんでした」

「深く考えていなかったのは、他に考え事があつたからかしら？」

雪の言葉に思わず苦笑が漏れる。

「姫野さんって読心術か何か使えるんですか？」

何となしに放つた言葉だった。雪の端正な顔から表情が消える。赤い瞳が怪しげな光を放つた。

「ESPエネルギーは情報を搬送する、と言つた筈です」
寒気が走つた。

雪が一步前に踏み出す。元々近かつた距離がゼロになり、赤い瞳が眼前に迫つた。

「私は言つた筈です。ESPは情報体としての特性を持つ、と。そちらが本質だとも。情報を送るのですよ。ただのパターン信号を送るだけではありません。解釈プロトコルとしての振る舞いをも……
ふ、ふふ」

言葉の途中で雪が口を抑えて肩を震わせ始める。優は呆気にとられて、笑いをこらえているように見える雪に疑問の言葉を投げかけた。

「あの、姫野さん……？」

「ふふ、ふ、ふふふ。ああ、本当におかしい。桜井君は騙されやすすぎます。少しそれっぽい事を言つたら簡単に……ふふ」

「……姫野さんって結構良い性格してますよね」

「ええ。ミステリアスな女の子は古来より殿方に人気のおようですから努力しています」

雪はそう言つて、大人びた笑みを見せた。優は奇妙な脱力感に包まれ、そうですか、とだけ言葉を返した。

「それで、何に悩んでいるのですか？」

話が戻る。優は少し迷つた後、慎重に言葉を選んで、話を切り出した。

「以前、姫野さんに亡霊とは何なのか、と尋ねた事がありました」
雪が頷く。優は話を続けた。

「その時、姫野さんは先程のように茶化して答えました」

「ええ。私、難しいお話は苦手なの」

雪がうそぶく。優は小さく呆れた笑みを浮かべた。

「先日、白崎さんとも同じ話をしたんです。それで、白崎さんが言うには亡霊は選別をしているんじゃないかって。亡霊とESP能力者。両者から優れた個を見出す為に闘争が続いているんじゃないかって」

「筋は通っていますね」

「僕もそう思いました。でも、これが本当だったら終わりが見えないです。最後の一人になるまで、他が全員死ぬまで、闘争が続くんでしょうか。そして、最後の一人になった人はどうなるんでしょうか。白崎さんは最後の一人が王になるのだと言っていましたか、何だか違う気がするんです。何か、恐ろしい事が起こるんじゃないかって」

「怖いのですか？」

雪が静かに言う。優は素直に頷いた。

「負けたら、死にます。僕たちは、勝ち続けるしかない。でも、勝ち続けた先に救いがあるとは限りません。それどころか、死よりも恐ろしい何かがあるんじゃないかって。死刑台に向かつて、歩き続けるしかないです。漠然とした閉塞感があつて、どうしようもなく、凄く怖いです」

そう言って顔を伏せた時、陰が落ちた。次いで、柔らかい感触に包まれる。微かに甘い香りが鼻をついた。

「あ、あの」

「はい」

「何やってるんですか？」

突然抱きしめてきた雪の腕の中で身をよじり、その拘束から逃れようとする。拘束が更に厳しくなった。

「慰めているのです」

しれっと言う雪に優は抵抗を強めた。

「大丈夫です。離してください」

「あらあら。反抗期ですか」

軽く流されて、優はすぐに抵抗を諦めた。

「桜井くんの悩みを解決するのは簡単です」

雪が言う。優が顔をあげると、紅淡色の瞳と目が合った。

「自らを選別しようとするモノを破壊すれば良いのです。それで、全て解決です」

「……あまり簡単そうには思えません」

「いえ、簡単です。物事が複雑に見えるのは、私達が複雑な解釈を与えているから。難しく考える必要はありません。神は死に、私たちは自由の刑に処され続けている。それだけです。ならばせめて自由を謳歌しようではありませんか」

自由の刑というのは誰の言葉だったろう、と優が記憶を辿った時、雪の声が耳に響いた。

「サルトルの言葉ですよ」

突然の事にビクリと肩が震えた。雪がクスリと笑みを零す。

「姫野さんって、本当に読心術が使えたりしませんよね？」

「ご安心ください。ESPエネルギーにリード能力は存在しません。情報体同士のもつれを利用すれば相互的な通信が可能となりますが、一方的な読み取りは不可能の筈です」

「それなら安心です」

果たしてどこまで信じていいのか分からず、優は適当に相槌を打った。雪は気分を害した風もなく、極自然に抱擁を解いた。

「そろそろ夕食の時間ですね」

「あの、僕、戻りますね」

「ええ。その方がよろしいでしょう」

「えっと、色々ありがとうございますでしたっ！」

軽く頭を下げる。雪は何も言わず、静かに微笑んだ。

踵を返して、雪に背を向ける。その時、背後から声がかげられた。「また悩み事があればいらっしゃってください。貴方の事を真に理解できるのは、私だけ」

雪特有の気遣いと解釈して、優は首を捻って振り返り、曖昧な笑みを浮かべた。そして、ペントハウスの階段室に続く金属製の扉に手をかける。僅かな抵抗感とともに軋みをあげて扉が開き、階段室と屋上の温度差から我先にと空気が移動し、小さな風が巻き起こった。その風に乗って、どこか悲しげな声が耳に届いた。驚いて、雪の方を振り返る。しかし、雪は微笑を浮かべたままで、何かを喋った様子はない。空耳だったのだろうか。優は小さく首を傾げて、暗闇に続く階段を降りていった。

4章 23話 深海百合

屋上から出た直後、薄暗い踊り場で携帯を開くと18:12という数字が視界に飛び込んできた。少し逡巡した後、食堂へ向かう事にする。少し早い気がしたが、部屋に戻っても中途半端な時間をもてあましそうな気がした。

階段で一階に降りてから寮棟と中枢エリアを繋ぐ通路を通り、セキュリティゲートを抜けて食堂へ向かう。食堂の手前まで来た時、背後から声が投げかけられた。

「今から飯か？」

振り返ると、川上沙耶がこちらに向かってゆっくりと歩いてくるのが見えた。

「うん」

「なら丁度良い。一緒に食べようぜ」

優が頷くと同時に沙耶はそう言って腕をとった。

「ちょ、ちょっと、川上さん？」

抗議の声も虚しく、ぐいぐいと沙耶に引っ張られる形で食堂に入る。沙耶は優の腕を掴んだまま券売機に真っすぐ向かった。

「ほら、何食う？」

「えっと、鮭定食で」

反射的に答えると、沙耶は慣れた手つきで鮭定食のボタンを押し、ポケットから出した電子カードを認証ポイントにかざした。甲高い電子音が鳴り、食券が出てくる。沙耶はそれを無視して再び鮭定食のボタンを押し、先程と同じように電子カードをかざした。電子音とともに二枚目の食券が出てくると、沙耶は二枚の食券を取り出して一枚を優に手渡した。

「ほら」

「ん、ありがとう」

対策室内の食堂で電子カードが利用可能なのは一日三回までと決

められている。二人分まとめて買ったということは、朝か昼のどちらかを抜いたのだろう。ダイエツト中なのかな、と優が思考を巡らせた時、再び沙耶に腕を掴まれた。

「ほら、行こうぜ」

「待って。何でそんなに急いでるの？」

引つ張られながら疑問の声をあげる。沙耶は振り返らず、先に千夏と百合を待たせてるんだよ、と言った。反射的に席の方を見るが、まだ閑散とした様子の食堂内に二人の姿は見当たらなかった。

「おい、食券出せよ」

沙耶の声で視線を沙耶の方に戻す。よそ見してる内にカウンター前まで来ていたようだった。食券を出し、代わりにトレイにのった定食を受け取る。先に鮭定食を受け取っていた沙耶が、こつちだ、とカウンターから死角になっていた席に向かって歩き出した。八人がけの長机に小山千夏と深海百合しんかいゆりの二人の少女の姿があった。千夏が沙耶の後ろにいる優の姿に気づいて驚いたように立ち上がった。

「さ、桜井？」

「落ちてたから拾ってきたぞー」

沙耶はそう言っつて優を空いた席に押し出した。やや強引に座らされる。

不自然な沙耶の行動に、優は不審な目で沙耶の瞳を見つめた。

「今日は妙に絡んでくるけど、何かあったの？」

問うと、沙耶の隣にいた千夏が何故かバツの悪そうな顔をした。

逆に沙耶は特に表情を変えることなく、ただの気紛れだよ、と笑みを浮かべる。優はますます怪訝な顔で沙耶を見つめた。沙耶とは部屋が隣である事に加え、優が元々沙耶と同じ第一小隊に所属していた事もあつて、言葉を交わす機会が比較的多かった。しかし、これまで一緒に食事をするような事はなかったし、優の認識では「あまり気を遣わなくていい知り合い」といった関係だった。

「何か頼み事とか、相談？」

優が千夏の瞳を覗きこむと、千夏は居心地悪そうにすぐに視線を

逸らした。そんなに言いづらい事なのだろうか、と小首を傾げる。

「僕に出来る事なら何でもやるよ」

そう言つと、千夏の代わりに沙耶が口を開いた。

「じゃあ、一つ目の頼み事だ。飯一緒に食おうぜ」

結局話が一周してしまい、優は苦笑を浮かべた。

「良いけど、何か悪戯企んでるとかじゃないよね？」

「お前さ、あたしらの事、どんな風に見てる訳？」

沙耶が不服そうに言う。その時、先程から会話に入っていないかった深海百合が気怠けそうに会話を遮った。

「ご飯、冷めるよ」

その言葉でテーブルの上に飾られた鮭定食の存在をようやく思い出す。味噌汁からは既に湯気が消えていた。

「ああ……」

思わず小さな悲鳴が出る。

「少し冷めたくらいで大袈裟な奴だな」

沙耶が笑う。優は怨みがましそうな目で隣の沙耶を睨みつけた。

「病院食以外の食事久しぶりだから結構楽しみにしてたんだよ……」

小さくうなだれて、箸をのばす。その時、背後から聞きなれた声が届いた。

「桜井、何で沙耶たちと食べてんの？」

振り返ると案の定、不機嫌そうな京子の姿があった。華と愛の姿は見えない。恐らく、まだカウンターの前で待たされているのだろう。そろそろ食堂が混み始める時間だった。

「落ちてたから拾ったんだよ」

沙耶が言う。優は何も言わず、確実に冷め始めているご飯に箸をのばした。

「何それ。席取りしようと先に来てただけでしょ」

「先に食う約束してたのか？」

「……してないけど、習慣っていつか……」

「じゃあ」

何やら言い争いを始めた沙耶と京子を置いて、優はまだ温かさの残るご飯を口にした。特に特別な米でもない筈だが、病院で食べたご飯よりも格段に美味しく感じられた。小さな感動に浸りながら、味噌汁に手を延ばす。

「　　とうかさ、今日は何なの？　バスの時もいきなりだったし。発情期？」

「何怒ってんだよ。飯食うくらい良いだろ。なあ、桜井？」

急に話を振られ、優は温くなった味噌汁を再びトレイの上に戻した。

「えっと、席まだ空いてるしさ、もう一緒に食べたら？」

「そういう問題じゃなくてさ、沙耶の行動が問題なんだって。絶対何か企んでるじゃん。他の席行かない？」

「おい、何でそんなに嫌がるんだよ。独占欲強いと嫌われるぞ」

沙耶の言葉に、京子の顔が真っ赤に染まった。

優は二人のやりとりを聞きながら、温くなった味噌汁に視線を戻し、ESPエネルギーを使って何とか温め直せないかなあ、とぼんやりと考えを巡らせた。

「ねえ、新海さん。これ、ESP能力で温め直せると思う？」

正面の席ですつと静かに食事を続けていた百合に話を振る。百合は面倒くさそうに、頑張れば出来るんじゃないの、とだけ言うてすぐに食事に戻った。

うーん、と唸って具体的な方法を考え始めた時、再び京子が優に話を振った。

「桜井はどう思う？」

「ちょっと難しいよね。やっぱり食べ物にESPエネルギー使うのって怖いし」

「……もういいや。馬鹿らしくなってきた」

そう言って、京子は空いていた優の右側の席に腰をおろした。突然怒りの収まった京子を不思議そうに眺めてから、優は再び味噌汁を温め直す方法について考える為、思考の海に旅立った。

4章 24話 長井加奈(2)

「今日は大所帯だね」

背後から届いた華の声で優は思考の海から掬いあげられた。振り返ると、トレイを持った華と愛の姿が認められた。愛がじつと沙耶達の姿を見つめてから、何も言わず空いた席に座る。華もそれに続いた。

「ね、桜井くん休暇もらったんだよね。何か予定あるの？」

「んー、特にないかな。ゆっくりする予定だよ」

答えると、華が僅かに安心した表情を浮かべた。

「じゃ、じゃあ、この機会にどこか遠くに行かない？ ちょっとした旅行がしたいな、って愛達と話してて。私もね、申請してない休み貯まつてるからまとまつて時間とれるの」

思わぬ申し出に優は一瞬キョトンと反応に遅れたが、一拍おいて屈託のない笑みを浮かべた。

「旅行かあ。本部に籠りっぱなしだし、たまには遠出も良いかもね。どこか行きたい場所とかあるの？」

「えつとね、今一応五つくらい候補があつて、まだ選別中。あ、桜井くんが行きたい所とかあつたらどんどん言つてね！」

「行きたい所かあ。んー、ぱつと思いつかないから、後で候補地見せてくれる」

「うん！」

そこで、優は思い出したように視線を沙耶に戻した。

「そついえば何か話があるから、夕食誘ったんじゃないの？」

「……いや……気紛れで誘っただけだから何も話はないよ。身体、ゆっくり休めとけよ」

沙耶はそう言つて席から立ち上がった。良く見れば既にトレイに乗った皿は全て空になつていた。

「千夏、百合。もう食べたろ？ 行こうぜ」

「え？ あ、うん……」

千夏がどこかぼんやりとした様子で相槌を打つ。百合が気怠そうに立ち上がると、千夏も慌てて立ち上がった。それを確認した沙耶がトレイを持ってカウンターの方向に歩きだす。千夏と百合の二人がそれに続いた。

「あれ、結局何だったの？」

離れていく沙耶達の背中を見つめて京子が呟く。優は首を小さく傾げる事しかできなかった。

亡霊対策室副司令、長井加奈は笑顔を繕うのに必死だった。

目の前には同年代の男と見知った女が数人。友人に執拗に誘われて来てみればこれだ。何故古今東西には人の出会いにお節介を焼こうとする者が必ずいるのだろうか。

「お酒弱いのか？」

騒がしい店内。その一角に男三人。加奈を含めた女三人。計六人の集まったテーブル席で外向けの笑顔を振りまいていた加奈に正面の男が問いを投げかけた。

「ええ。明日お仕事があるから」

極力棘のない言葉を選択する。何が面白いのか、男は声を立てて笑った。

「仕事の出来る女性ってかっこいいよね」

加奈は何も言わず男の顔をじっと眺めた。どちらかと言えば整った顔をしている。服装は合格ラインだが、保守的な性格を窺わせる装い。髪は短めで、清潔感がある。悪くはない。それが加奈の評価だった。かと言って興味が持てるタイプでもない。

再び男が口を開く。喧騒に紛れて、その声は加奈には届かなかった。横から友人の笑い声。加奈の頭は妙に冷めていた。

どうして、と加奈は男の赤い顔を眺めた。アルコールに弱いのに、

どうしてこの男は先程からずっときついものを呑み続けているのだろう。そういうのが女に受けるとでも思っているのだろうか。

酵素を持ってきているだけで、もしくは舌の老化が早いだけで？ それは違うな、と加奈はすぐに自分の穿った見方を訂正した。多分、飲むのが良いと言うのではなく、飲まなければ場の雰囲気が悪くなると思いこんでいるから無理に飲んでるのだろう。涙苦しい努力だ、と加奈は男の事を僅かに見直した。

不思議なものだ。友人と飲む際は、飲めない人がいても誰も気にしない。防衛大のサークルの時もそうだった。初めに先輩が飲めない人は無理に飲まなくても良いとわざわざ宣言していたし、それはただの表向きの言葉でもなく、事実全くアルコールを摂取していない者が複数いた。研究室の飲み会も然り。誰も飲酒を強制したりしない。しかし、社会に出れば奇妙な同調圧力が存在して、酒の席では必ず飲酒を勧められる。一体誰が得しているのだろう。

ふと、アビリーンのパドックスというものを思い出した。概要はこうだ。暑い夏の日に家族の一人がアビリンへの旅行を提案する。そして家族一行は真夏であるにも関わらずアビリンへ旅行に行く。旅行から帰った後、彼らは企画者も含めて誰一人としてアビリンに初めから行きたい訳ではなかった事を知る。これは、全員がアビリンに行きたくはなかったけれど、他の家族が行きたがっているのと勝手に思い込み、誰一人として反対しなかった為に起きた現象だ。集団による意思決定は、必ずしも構成員の意志を反映するものではない、と言う事。大学という場所は加奈が知る限りポスト構造主義に最も近い場所だ。ほぼ全員が知識階級で構成されている為か、世代の移り変わりが早いせいかは分からないが、その雰囲気は社会のそれとは大きく異なる。社会というのは世代交代が起きづらいから、くだらない風習が残りやすいのだろう。そして、誰もがその風習の存続を望んでいると勘違いし、どうでも良い同調圧力が生まれる。そしてこれは飲酒に対する同調圧力だけに留まらない。恐らくは、社会全体がアビリンに向かっている。声の大きいもの

が聞こえの良い事を言えば自己検閲が働き、それに反対する事が難しくなる。反対する者がいなくなれば、誰もがそれを望んでいる、と勘違いしてアビリンに向かう。集団浅慮の典型例。集団による思考は構成員の総和ではなく、新たな個体としての性質を持つのだろう。細胞が集まって一つの人格を作り出すように。

男が再び何かを言う。加奈は曖昧な笑みを浮かべ、グラスに口をつけた。僅かな苦みとざくろの香り。

私は何故こんな益体もない事を考えているのだろう。

酔っているのかな、と加奈は小さく頭を振った。

「せつかくの休みだしさ、仕事の事なんて忘れてもつと飲んだら？」
男の言葉に加奈は、ああ、と思った。難しく考える必要なんてどこにもない。物事はいつだってシンプルだ。つまり、男が苦手であるうビールを飲み続けていたのはそういうことなのだろう。無益な同調圧力の被害者などではなかったらしい。加奈は安心して席から立ち上がった。友人の咎める声。加奈は極力棘のない言葉を選び、代金をテーブルに置いてその場から立ち去った。

4章 25話 長井加奈(3)

長井加奈が店から出ると、一人の女性が影のようにすうつと後に続いた。加奈は何も言わず、店の前に止まったタクシーに乗り込んだ。女もそれに続く。

「どうでした？」

女、保安部の小町美知子こまち みちこがどこか楽しそうに言う。加奈は不機嫌そうな雰囲気を感じそうともせず答えた。

「最低。貴重な休日を無駄にしちゃった」

「わあ。そう言われてられるのも後数年ですよ」

「うるさいなあ。中村、早く出して」

運転席に座る保安部の中村俊之が無言で頷く。直後、ゆっくりと加奈たちを乗せたタクシーが動き出した。

今頃お酒が回ってきたのか、眠気に襲われる。加奈は小さく目を擦って、ふと思いついたように口を開いた。

「中村って優君担当でしょう？ 私の運転手なんてやっていいの？」

「防諜部が動いていて、そちらに人手が割かれています。残った私がやるより他ありません」

それに、と中村は続けた。

「桜井中隊長を護衛する必要は当分なくなるでしょう」

「……神条司令がその必要をなくす、という意味？」

「ええ」

車内に沈黙が落ちる。加奈は窓の向こうに広がる鮮やかなネオンの光に目を向けた。

「人間対策室に改名した方が良さそうですね」

美知子が明るく言う。加奈も中村も笑わなかった。

加奈は身体にかかる強烈な遠心力で目を覚ました。いつの間にか眠ってしまったらしい。窓の外に目を向けると、深い闇が広がっていた。前方を見るとライトに照らされた山道がフロントガラス越しに確認できた。独特な道の形から亡霊対策室のすぐ近くということが分かる。

時計に目をやると、既に十一時半を超えていた。意味もなく溜め息が出る。ガタガタと緩い振動。正面ゲートを超えて加奈達を乗せた車は亡霊対策室の敷居に入った。

「ここで止めて。少し、風に当たりたい」

加奈の言葉に中村が頷く。車はすぐに停車した。

「このまま歩いて行くから、あなたたちはもう休みなさい」

言葉を残して、バッグを手に車外に出る。冬の冷たい風が頬を撫でた。

中村の運転するタクシーに偽装した装甲車が闇の中へ消えていくのを見送ってから、加奈はゆるりと歩き出した。

亡霊対策室の敷地は嫌になるほど広い。舗装されたアスファルトの上を歩いて、幹部宿舎へと向かう。なんだってこんなに広いのだろう。加奈がここに来た当時はまだ拡張工事が頻繁に行われていて、その騒音にげんなりとしたものだ。情報部の肥大化に伴い、総務部も大きくなっていった。全体の規模が大きくなるにつれ、防諜部や保安部も拡張が必要になった。ある何かを拡張しようとした場合、組織と言うのは加速度的に大きくなる。ひっそりと防衛庁の一室で始まった亡霊対策室は今や戦略情報局をも超える大組織となっている。

ぼんやりと昔を思い出していると、不意に強い風が吹いた。凍えるような冷風が全身に襲いかかる。思わず目を瞑り、自身の肩を抱く。酔いはすっかり醒めてしまっていた。

風はすぐ止んだ。白い息を吐き出し、目を開ける。途端、視界に信じられないものが飛び込んできた。

翡翠の蝶々。

ひらひらと夜の闇を舞うそれは、鮮やかな翡翠の光を放っていた。その美しさに、加奈は暫しの間魅入られて身動きをとれなかった。蝶々がひらひらとテニスコートの設置された方向へ向かう。加奈はフラフラとその後を追った。

じりじりとアスファルトを踏みならして蝶々の後を追うと、気付けば裏手の森に入っていた。死んだ木々が夜風に吹かれて不気味な音を立てる。頭の隅で冷静な自分が引き返すように警告を放っていたが、加奈はそれを無視した。

蝶々が木々の間に消える。加奈は草木をかき分けて、深い森の中に足を進めた。

その足が自然と止まる。深い森の中に琥珀の髪を風に揺らす少年の姿があった。蝶々がその肩にとまる。加奈は思わず息を呑んだ。

そこには何百という翡翠の蝶々が舞っていた。それらの放つ光がその場を明るく照らし、少年　桜井優の周りを飛び回っている。優が身体の前に出した腕に、蝶々たちがひらひらと舞い降りていく。その幻想的な光景に加奈は目を奪われた。

加奈の目は優の瞳へ真っすぐと向けられた。どこか遠くを見つめるように、優の瞳は虚空に向けられている。周囲を飛び交う幻想的な蝶々を眺めている訳ではないようだった。

何をしているのだろう。

疑問が沸き起こり、無意識のうちに足を踏み出す。その際、足元からパキリと小枝の折れる音が響いた。桜井優の肩がビクリと驚いたように震える。同時に、周囲を待っていた何百の蝶々が煙のように掻き消えた。周囲を照らしていた翡翠の光が消えて、その場が闇に包まれる。

強烈な後悔の念が加奈に襲いかかった。この場に満ちていた完成された光景を壊してしまったという後悔。今まで夢を見ていたのではないか、と疑うほど呆気なくそれは壊れてしまった。

「長井副司令？」

こちらを振り返った優が不思議そうに尋ねる。加奈は観念して、草木の間から優の方に足を進めた。

「ごめんね、邪魔するつもりはなかったんだけど、気になって。何やってたの？」

「えっと……隠れて自主訓練をやってました。ごめんなさい」

少し気まずそうに頭を下げる優に、加奈は微笑を浮かべた。

「気持ちは分かるけれど、ESPエネルギーを使うのは控えて欲しいな。司令が心配するから、ね？」

「……はい」

「風邪、引いちゃうよ。一緒に戻りましょう」

「はい」

手を差し出すと、優は素直にそれを掴んだ。二人並んで本部へ向かって歩き出す。

不思議だな、と思う。加奈は自分が潔癖症である事を自覚していた。だから、今日も相手に下心が見えた時点で我慢できなくて、あの場から抜けだしてしまった。多分、両親が過保護だった事も関連しているのだろう。歳を重ねれば鈍くなるだろうと思っていたのだが、いまだにこの潔癖症が治る傾向はない。もしかしたら、加奈の上に立つ者が奈々しかいないからかもしれない。それ以外の男というのは加奈の下の地位にあるから、無意識に見下している、というのはあり得る。けど、そんな簡単な事が原因ではない気がした。多分、意識にもあがらない些細な事が積み重なって、自分でも良く分からない性質を作り出していくのだ。

加奈は繋いだ手に視線を移した。嫌悪感はない。何故だろう。子どもだから、顔が女の子っぽいから、下心が感じられないから。いくつか理由が頭に浮かんだが、そのどれも違う気がした。恐らく、これも無数の些細な何かが積み重なって出来た桜井優の性質なのだろう。何かを分析する場合、人は分かりやすい大きな原因を探してしまうから、根本的な問題を解決するのはとても難しい。

思考の海を漂っていた加奈は、不意にある事を思い出して急浮上

した。

「そうだ。言い忘れてた事があった！」

「どうしたんですか？」

優が小首を傾げる。加奈は立ち止まって笑みを浮かべた。

「退院おめでとう。おかえりなさい」

一瞬キョトンとした表情を浮かべた桜井優は、一拍遅れて気恥ずかしそうに笑った。

「ただいま」

4章 25話 長井加奈(3) (後書き)

新しく「姉さんはサイコロを振らない」を連載しました。 Rais
on d'etreともどもよろしく願います。以上、宣伝で
した。

4章 26話 長井加奈(4)

桜井優を寮棟まで送り届け、長井加奈は本部の中核エリアへと足を向けた。幹部宿舎に直行するつもりだったが、奈々に優の事を知らせておいた方がいいだろう、と考えたのだ。

司令室に入ると、端末に向かい合ってる奈々の後ろ姿が見えた。ディスプレイに振る舞いモデリングの一つであるシーケンス図が映っているのがチラッと見えたが、奈々はすぐにそれを消して加奈の方に振り向いた。

「早かったわね。愚痴を吐きにきた訳じゃなさそうだけど、何か報告があるのかしら？」

「はい。つい先ほど、ESP探知器が反応していませんでしたか？」

「ええ。ESP波形の照合もやったわ。発信主は桜井優」

「映像は撮れましたか？」

加奈が尋ねると、奈々は無言でコンソールを叩いた。ディスプレイに監視カメラから送られた映像が映し出された。米国がテロ対策の為に巨額の資金を投入して開発されたVSAM-Dシステム。移動体検出の高信頼性を獲得し、自動で亡霊対策室内の不審者を発見する事が可能となっている。加えて、VSAM-SSシステムにはサイトモデルと呼ばれる地形データが利用されているから、ステレオカメラを利用せず三次元的な移動体の位置情報を得る事ができるようになっていた。そのVSAM-Dシステムの検出した移動体、桜井優が寮棟から出てくるのがディスプレイに映る。奈々が再びコンソールを叩くと問題の場面まで映像が早送りされた。森の中、優が掲げた両手からESPエネルギーと推測される翡翠の光が溢れだし、それらが蝶々の形をとって翡翠の領域を広げていく。

「ばっちり映っていますね。私から直に報告する事はないようですよ」
「逆に、私からあなたに報告する事がある」

予想していなかった奈々の言葉に加奈は僅かに眉を寄せた。奈々

が無言でコンソールを操作する。ディスプレイが二分割され、亡霊対策室の敷地を表す俯瞰図が現れた。

「これを見て。ESPエネルギーの探知された領域が徐々に広がって行っているでしょう?」

「ええ」

加奈が蝶々を初めて発見したのも優のいた位置から随分と離れた場所だった。別段おかしな事ではない。

「蝶々が拡散する事によって、VSAM-DシステムとESPLERダーの探知能力が徐々に追いつかなくなっている」

そう言われて、VSAM-Dシステムの移動体検出量が大きく触れている事に気付いた。カメラ台数が足りず、トラッキングに失敗しているのだ。

「更に」

奈々はそう言って、再びコンソールを操作する。俯瞰図の右下にESP波形が現れた。

「優君の放つESPエネルギー量が急上昇している。移動体の数は既にVSAM-Dシステムの許容量を超えているけど、肉眼で確認した限り、この間に蝶々の数が特段増えている訳ではない」

奈々が言わんとしている事が理解できず、加奈は奈々の顔をじつと見つめた。

「あの、これが何かを示しているのか私にはわかりません。訓練の為、出力量を徐々に上げていっているだけではないでしょうか?」

「そう、そう見えてしまう。特にESPエネルギーを用いた仮想的な蝶々の操作。とても興味深い。そちらに意識を持っていかれてしまう。これは攪乱よ。機械と人間に対して、優君は攪乱手段を用いている。十六歳とは思えないほど頭の回転が速い」

「攪乱? 私達に対してですか?」

奈々はどこか楽しそうに頷いた。

「ええ。彼にとって私達は絶対的な味方ではない、ということ。本当におもしろい」

「……よく、意味がわかりません」

加奈が正直に話すと、奈々はクスリと小さく笑った。

「そのままの意味よ。彼にとつて亡霊対策室は絶対的な味方ではない。攪乱手段をとる必要があったのだから、少なくとも彼にとつて亡霊対策室の存在が邪魔になる部分がある、ということ」

奈々はそう言って、ディスプレイに向き直った。画面には一人の少年を取り巻く無数の蝶々が映し出されている。

「この蝶をその場の思いつきで作ったとは思えない。前々からこれを実現するだけの力があつたと考えるのが自然だと思わない？　そして、優君はこうした能力を私達に隠していた。恐らくは、他にも私達に知らせていない何かがある」

建て前というのは面倒なものね。奈々はそう言って小さく溜め息を吐いた。

「私の話はこれでおしまい。疲れてるでしょう？　休んできなさい」

「はい。失礼します」

「ええ。おやすみなさい」

加奈は軽く頭を下げて奈々に背を向けた。司令室から出る直前、一度だけ振り返ると、奈々の背中が見えた。そこからは先程までのどこか楽しそうな様子は感じられず、別の感情が渦巻いているように思えた。加奈はそれに気付かなかつた振りをして、司令室を後にした。

4章 27話 神条奈々(11)

長井加奈が司令室から出て行った後、神条奈々はディスプレイに映る桜井優をじっと見つめた。ひらひらと舞う蝶々。幻想的な光景の中心に立つ少年。どこか現実離れた映像を何度も再生する。

救世主。

桜井優を初めて実戦に投入した時、自然とその単語が頭に浮かんだ。今一度その単語が頭を支配し、奈々はディスプレイを食い入るように眺めた。

本当に？

ESPエネルギーの消費による意識障害。あれさえなければ奈々は救世主と信じて疑わなかったかもしれない。しかし、それは起きてしまった。そして振り返ってみれば、ESPエネルギーの消費による意識障害はあの時だけではなかった。優を投入した二度目の戦闘。あの時、致命傷を負ったはずの優は最後に巨大なESPエネルギーを放ち、その後三日間目を覚まさなかった。今思えば、あの意識障害は外傷が引き起こしたのではなく、大量のESPエネルギーの消費が原因だったのではないか。もしくは複合的な結果。

しかし、と思う。ESPエネルギーの消費が意識障害を誘発するなど有り得るのだろうか。過去に一度物理屋からESPエネルギーに対しての見解を尋ねたことがあった。有力な説としてESPエネルギーを発生させる量子が存在するという話があるのだという。もちろん、現段階でその存在は観測されていない。この存在が仮定されている量子が壊れた時、エネルギーが発生し、やがて別の量子に変化するらしい。奈々は特別に物理を学んだ訳ではなかったから、どうしても専門的な話になると理解が追いつかなかった。ただ、その存在が証明されていなくても、その振る舞いから小銃のような攻撃媒体や、ESPエネルギーを用いた機械翼が実際に開発されたのだから信じられなくても信じるしかない。しかし、物理屋から聞いた

た話はそれだけだった。ある未知の量子があつて、その量子が壊れることでESPエネルギーが発生する。それが正しくても、優の意識障害には説明がつかない。

その未知の量子が人の意識を、自我を作り出しているということだろうか？

そこまで考えて、奈々は思考を放棄した。考えがオカルトに走り出している。素人が考えて何とかなる分野ではない。

奈々は思考を切り替えて、コンソールを操作した。画面に敷地内からESPエネルギーが検出された領域が表示される。それにVSDシステムの捉えた移動体の領域を重ねる。二つの領域は一致しなかった。ESPエネルギーの検出された領域の方が移動体の検出された領域から大きくはみ出している。この事から、蝶々がフイクである事は間違いない。具体的に何をやっているかまでは分からなかったが、いくつかの推測が奈々の頭に浮かんだ。そして、そのどれもが亡霊対策室の脅威となるものではない。奈々のすべき事は何もなさそうだった。

奈々はディスプレイを見たまま長い時間動かなかった。

「派手にやったものだ」

亡霊対策室防諜部長、佐々木三蔵は足もとに広がる瓦礫の山を見て小さく呟いた。深い森の中、暗闇を部下のライトが切り裂いている。

戦略情報局の残した残骸。その所在地を突き止めるのに随分と長い時間がかかってしまった。瓦礫の山はいまだに残っているが、佐々木の求めるものは何も残されていなかった。

足元の瓦礫をじりじりと踏みならして前に進む。これだけの被害を伊藤響一人が引き起こしたという事実は脅威だ。あのレベルでこれなら小隊長級のESP能力者が本気で暴ればどれほどの被

害が出るか想像もつかない。

だが、本当に伊藤響一人がこの事故を引き起こしたのだろうか。

佐々木は医療チームからの報告をふと思い出した。戦略情報局が伊藤響に埋め込んだ発信器。伊藤響を保護した時点でそれは既に無力化されていたという。つまり、伊藤響を逃がす為に内部の者が予め発信器に対して何らかの電磁手段を用いた可能性がある。

それとも、と佐々木は別の可能性を考えを巡らせた。

伊藤響の放ったESPエネルギーが発信器を破壊した？

ESPエネルギーは物理的な障害を容易に無力化する。身体の中に発信器があつたとしても、それだけをピンポイントに攻撃するのは可能な筈だつた。しかし、伊藤響は自身の身体に発信器が埋まっている事は知らないと聞いている。もしESPエネルギーによる無力化であれば、伊藤響のESP能力が自動で障害を取り除いた、ということになる。

いずれにしても、と佐々木は結論付けた。ESP能力者は脅威だ。戦略情報局が人工的にESP能力者を作り出そうとした事も理解できる。ESP能力者の不安定さを何とかしない限り、こつした動きは繰り返されるだろう。

「佐々木さん」

背後から名を呼ばれ、佐々木は振りかえつた。見慣れた部下の一人と目が合う。

「死体は全て片づけられているようです」

「撤収の準備を」

「はい」

慌ただしく去っていく部下を見送ってから佐々木は明るみの差した東の空を見つめ、立ち入り禁止の看板に向かって歩き始めた。看板があるだけで立ち入りを妨げる障害は何もない。本当にここには何も残されていないのだろう。気化したニンヒドリン反応性窒素は全く検出されなかった。つまり、ここに死体は存在しない。ESP

能力者を巡る実験の証拠は何も残らなかった。そして唯一の生存者、伊藤響は本部を襲撃した亡霊との戦闘に巻き込まれて死亡という形をとる。総基ネットの整合性については情報部が既に対応している筈だった。齟齬は解消された。防諜部がこの件に関わる事はもうないだろう。佐々木は煙草を取り出して、大きく息を吐きだした。

桜井優は久方ぶりの自室のベッドでとても快適とは言えない朝を迎えた。意識の覚醒とともに感じたのは酷い倦怠感だった。立ち上がろうとして軽い眩暈に襲われる。どうやら風邪をひいたらしかった。顔を洗うのを早々に断念して、再びベッドの中に潜り込む。退院したばかりで再びベッドのお世話になるとは思わなかった。体温計を買った覚えがなかったから、熱があるかも分からない。医務室に行けば何とかなるかもしれないが、医務室が開くのはもう少し時間を経てからだ。

二度、小さく咳き込む。優はベッドの横に置いていた充電器から携帯を取り出してメールを打ち始めた。特に約束している訳ではないが、華達と朝食をとるのが習慣となっていた為、念のために連絡しておかなければならない。メールを送信する段階で三人のうちの誰に送るか迷ったが、面倒になって全員に送る事にする。

メールを送信し終えた後、優はフラフラと立ち上がって冷蔵庫からスポーツドリンクを取り出した。水分をとって、再びベッドの上で横になる。

そのままウトウトしかけた時、玄関の方からノックの音が木霊した。

「鍵、開いてるよ」

ベッドの上から少し大きめの声を出す。外まで届いたか不安だったが、すぐにドアの開く音が聞こえた。

「桜井ー？」

京子の声。次いで廊下を歩く足音。すぐに部屋のドアが開いた。

「あ、本当にしんどそう」

部屋に入ってくるなり、京子はそう言ってベッドの横に立った。

上は薄いピンク色のパーカーに、下はジーンズといったラフな格好だった。

「どうしたの？」

「ん、大丈夫かなと思って見に来てみた」

「京子一人？」

「うん、まあ、ね。それより熱あるんじゃない？ 顔、赤いよ」

京子が額に手を伸ばしてくる。冷やりとして気持ちが悪かった。

「わ、マジで熱あるじゃん。薬飲んだ？」

「飲んでない」

優が小さく首を振った時、再び玄関の方からノックの音が木霊した。同時に京子の顔が引きつったように見えたが、優は気にせず先程と同じ言葉を玄関に向かって叫んだ。

「鍵、開いてるよー」

玄関ドアの開く音とともに足音。部屋のドアが開かれると優が姿を見せた。黒のブラウスにチェックのプリーツスカートといった格好。「愛も来たんだ」

京子がどこか気まずそうに言う。愛は京子の姿を認めて僅かに硬直した後、抑揚のない声で答えた。

「……体調が優れないって連絡が来たから心配で」

「あ、うん、私も」

「そう」

興味なさそうに相槌を打って、愛は京子と同じようにベッドの横まで足を進めた。

「熱、あるの？」

「うん、多分。体温計ないからはつきりと分からなくって」

優が答えると、愛は何も言わず廊下の方へ消えた。その間に京子がベッドの空いたスペースに腰かけ、声を潜めて口を開いた。

「ねえ、華にもメール送ったの？」

「え？ うん、三人に送ったよ」

「何でCC使ってなかったの？」

「しーしー？」

「……もう、何かね、私本当に馬鹿みたいじゃん」

「……えつと、何の話？」

いまいち京子の言う話が呑み込めない。優が不思議そうな表情を浮かべると、京子は、何でもないと不機嫌そうに呟いた。そうこうしている内にキッチンの方から愛が小さめのタオルと水の入った洗面器を手に戻ってきた。

「……これ、冷やしたから」

愛が優の前髪を掬いとって、額に濡れたタオルを乗せる。それだけで随分と気分がマシになった気がして、小さく笑みがもれた。

「ありがと」

「……他に」

愛が何か言いかけた時、それを遮るように玄関の方から再びノックの音が響いた。京子と愛が顔を見合わせる。

「鍵、開いてるよー」

本日三度目の台詞をベッドの上から叫ぶと、本日三度目の玄関ドアを開く音が聞こえた。

「桜井くん、入るよー？」

廊下から華の声。直後部屋のドアが開き、遠慮気味に華が顔を出した。寒色のカットソーにティアドスカートといった服装。華の視線が部屋の中にいる京子と愛に注がれる。

「え、何で！ 京子と愛がここにいるの？」

華が驚いた声をあげる。京子がどこか投げやりな口調でそれに答えた。

「メール、全員に送ってたらしいよ」

「え、あ、そうなんだ」

一瞬、華の顔に動揺と戸惑いの感情が走り、それはすぐにバツが悪そうな表情に塗り替えられた。

「京子と愛もお見舞い？」

「うん、まあ、華と同じ感じかな」

「そ、そうなんだ」

華は京子と少なめに言葉を交わしてから、思い出したように優の

方に振り向いた。

「桜井くん、ご飯食べた？」

「ううん、まだ。あまり食欲なくって」

「えっと、お粥とかなら食べられる？ 良かったら作るよ」

思わぬ申し出に優は頬を綻ばせた。手間をかけさせて悪い気がしたが、好意を無下にするほど思慮にかけているわけでもない。

「じゃあ、お願いしていいかな？ 本当に助かるよ」

「うん。ちよっと待っててね！」

華がにこりと笑みを浮かべてキッチンに向かう。

「……手伝う」

愛が華の後に続いた。お粥を作るのに手伝う事があるのか疑問が浮かんだが、優は素直に「ありがとう」と感謝を述べた。残された京子が慌てたように口を開く。

「あ、私も手伝う！」

「……京子に火を使わせると怖い」

「ちょ、それどういう意味!？」

愛と京子のやりとりを聞いて、優はクスリと小さく笑った。同時に小さく咳き込む。嫌な咳だった。

4章 29話 宮城愛(7)

結局、華と愛がキッチンに向かい、京子だけが部屋の中に取り残される形となった。ベッドに腰かけた京子は、所在なさに口を開いた。

「ねえ、何でいきなり体調崩したの？ 寝相悪いとか？」

後半は茶化す様な意味が含まれていた。

「んー、昨日の夜ちよつと散歩したから、多分それで……」

「うわ、この時期に夜の散歩とか……もしかして、誰かに誘われて？」

途中で何かに気付いたようにトーンが下がる。優は小さく首を振った。

「ううん、一人で。途中で長井副司令に見つかって連れ戻されたけど」

「ふーん……。桜井さ、あまり身体強そうに見えないし、この時期に出歩くのやめときなよ」

「それ、結構酷い事言ってるよね」

そう言っつて小さく笑った時、不意に嫌な予感に襲われた。直後、警報が響く。

「亡霊！」

京子の顔に緊張が走った。ベッドの横に置いていた端末を手に取り、ディスプレイには第一小隊と第三小隊への出撃命令が表示されていた。すぐにキッチンの方から華と愛が飛び出してくる。

「ごめん！ 出撃命令が出るから……」

「うん、気をつけてね」

華は頷いて、玄関の方へ走りだした。後に京子と愛が続く。

部屋に一人残された優は端末をもう一度眺めた。出撃命令は来ない。休暇、というのは本当らしい。

気怠い身体を起こし、優はキッチンに向かった。水が張られた鍋

がコンロにかけられている。火はちゃんと消えていた。それを確認して、再びベッドに潜り込む。亡霊の出現を知って気分が落ちつかなかったが、無理矢理ベッドの中で目を瞑っていると次第に眠気に襲われ、桜井優は意識を手放した。

次に優が目を覚めたのは陽が落ちる寸前だった。冬の昼は短いとは言え、寝すぎた感は否めない。もぞもぞと枕元の端末を掴み、新着通知を見る。亡霊の殲滅を知らせる知らせが新しく届いていた。死者ゼロ、負傷者八名。優は安堵の息をついて、凝り固まった身体をほぐす為に大きく背伸びした。全身の倦怠感が残っているが、睡眠を十分に取った為に幾分か気分はマシになっていた。

携帯を開いてメールをチェックする。新着メールが五件届いていた。一件は端末から転送された亡霊出現の通知メール。優はそれを無視して他の四件を流し読んだ。一件目は望月麗からのメール。よくわからないキャラクターの画像が添付され、『これ可愛くないですか！』と同意を求める本文があるだけ。恐らく、可愛いと返信すればこのキャラクターが出てくる訳の分からない映画を見に行く事になるのだろう。独創的なキャラクターだね、とだけ返すことにする。二件目は黒木舞からダーツの誘いのメール。風邪をひいている主旨を添えて断りのメールを返す。三件目は佐藤詩織からの雑談メール。適当な文面を考え、数回読み直してから送信する。四件目は華から。帰投後に送られたメールらしく、体調を気遣うものだった。朝の感謝の言葉と戦闘に対しての労いの言葉を添えたメールを返す。メールを整理し終えて再びベッドに横になった時、玄関からノックの音が響いた。立ち上がって、玄関ドアを開く。そこには愛の姿があった。朝と違い、今度はチュニツクを着ていた。

「……朝、作り損ねたから」

愛はそう言って、食材の入った袋を前に掲げた。その律儀さに思

わず感心してしまう。

「んー、そこまで気遣わなくても大丈夫だよ。体調、良くなってきたし」

「自炊する事になったから、そのついで。気にしなくて良い」

「自炊する事になったって？」

「華は疲れて熟睡中。京子は怪我して治療中。食べる人、いないから」

「京子、怪我したの？」

「軽い火傷だから大丈夫。ナノマシン打ったから、医務室から動けない」

納得して頷く。京子の事が気になったが、ひとまず愛を部屋にあげることにした。

「えっと、とりあえずあがって」

優が玄関の方に身を引くと、愛は無言で頷いて中に入った。そのまま優の横をすり抜けてキッチンの方に手際よく食材を広げ始める。

「……キッチン、借りる」

「えっと、何か手伝おうか？」

「……寝てた方が良い」

「気分大分良くなったから、大丈夫だよ」

「……手のかかるものじゃないからいい」

逡巡した後、素直に寝ている事にする。

「そっか。調味料とか、場所わからなかったら言っただけね」

愛が頷くのを確認して、優はベッドに戻った。

「優は……」

キッチンの方から愛の声。

「……嫌いなものとかある？」

「苺系がダメかも」

「わかった」

それつきり会話が途絶えた。ただ、愛と始終喋りっぱなしと言う事は少ない為、あまり気にならない。キッチンの方から響く調理の

音を聞きながら目を瞑る。静かだった。

穏やかな時間。昼にたつぷりと睡眠をとった為か、眠気はこなかった。

「できた」

じつとベッドの上で待っていた優の耳に、愛の声が届いた。いつもの抑揚のない声だったが、どこか弾んでいるように聞こえる。時計を見ると、愛が部屋を訪れてから既に三十分経っていた。

ベッドから起き上がる。テーブルに二人分の食器が並べられていた。その中に、黄色の液体に浸かった細かな直方体の入ったお皿があり、優は見慣れないそれに首を傾げた。

「これ、何？」

「……はちみつ大根。喉に良い」

近くで眺めると蜂蜜の甘い香りがした。

「へえ。いただきます」

そう言っただけで箸に手を伸ばした時、指の間から箸がすり抜けた。掴み損ねた箸がテーブルの上に転がる。慌てて拾い直す。しかし、再び箸は優の手から零れ落ち、テーブルの上に転がった。

「……優」

「ん？」

左手で拾いなおした時、愛が強張った表情で口を開いた。

「……握力、出ないの？」

「うん、ちよっと。ずっと寝てたからかな」

「……手、出して」

「え？ どうして」

「いいから」

愛が珍しく語気をあげた。有無を言わせぬ様子に、大人しく右手をテーブルの上に差し出す。向かいに座っていた愛は、それを両手で包むように掴んだ。

「……優」

鋭い視線が突き刺さり、優は気まずそうに目を背けた。右手は、

小さく痙攣していた。

「……いつから？」

「……多分、愛ちゃんが思ってる通り」

優は諦めて、素直に口を開いた。

「……秋山さんには報告した？」

「……退院する時、色々検査したけど右手に異常は見られなかったから、多分、治る物じゃないと思う」

「……神条司令には？」

僅かに躊躇した後、言っていない、と優は素直に答えた。愛の視線が更に鋭くなる。優は慌てて言葉を付け足した。

「大丈夫。戦闘に支障はないと思う。いつも握力を失ってる訳じゃなくて、極たまに痺れる程度だから」

「……戦闘中に痺れたら、引き金を引けなくなる」

「僕は小銃を使う必要がないから、大丈夫。手の痺れは全く戦闘に影響しない」

愛が何か言いたそうな顔をする。優はもう一度、大丈夫、という言葉を重ねた。

「……華と京子はこの事知ってるの？」

「言っていないよ。出来れば、言わないでほしいかな」

優の言葉に、愛はたっぷりと間をおいて小さく頷いた。

「…………わかった」

「痺れが酷くなるようなら、秋山さんに見てもらおう予定」

最後にそう付け加えると、愛の視線は幾分か柔らかくなった。

「ご飯、冷める」

話は終わり、といった様子で愛が言う。そして、手元のキャロットスープをスプーンで掬った。しかし、それは愛の口元へ運ばれることなく、テーブルの上　優の座る方に差しだされた。

「……何やってるの？」

「一人じゃ食べづらいと思って」

真顔で言われた為、冗談なのか本気なのか判断がつかない。恐ら

くは空気を持ち直す為に冗談で言っているのだろう。入院した時もこうした言動が多かった気がする。今までの付き合いから愛が周囲にかなり気を遣うタイプであると知っていたが、無表情である為にその真意を汲み取る事が難しい。

「スプーンを使えば左手で食べられるよ」

「……少し待ってて。スプーン全部捨ててくる」

真顔でそんな事を言う愛に、優はクスリと笑みを零した。そして愛の差しだしたスプーンに口をつける。想像以上に甘い味がした。

「甘くて凄く食べやすいよ。病院食もこんなのだったら毎日食事が楽しめたんだけど」

愛が微笑む。とても小さな表情の変化だったが、優は何とかそれを汲み取る事ができた。

それっきり何も言わず、二人は食事を続けた。普段は食堂で食べる事が多い為、こうして部屋の中で静かに夕食を食べるといのは随分と久しぶりだった。特に今日は京子と華がない為、それに拍車がかかっている。

「ごちそうさまでした！ 美味しかったよ」

素直な感想を口にする。体調を気遣ってか、全体的に量が少なめだったために無理なく食べ終える事が出来た。

「……お粗末さま」

愛がそう言って食器を片づけようとする。優は慌ててそれを止めた。

「後片付けくらいは流石に僕がやるよ」

「……わかった」

少し考える素振りを見せた後、愛が頷く。

「……じゃあ、私帰るね」

「あ、うん。今日は本当にありがとう」

夕食を食べただけですぐに帰す事に若干の抵抗を覚えたが、風邪をうつす訳にもいかない為、素直に見送る事にする。部屋のドアを開け、先に愛を廊下に通した。優もその後が続く。

玄関で靴を履く愛を見つめながら優は再度感謝の言葉を述べた。

「今日はわざわざごめんね、本当に助かったよ」

靴を履き終えた愛が顔をあげる。いつもの無表情な顔。

「……優。少しこっち来て」

「ん？ なに」

問いかけながら愛の方に一步近づいた時、愛の上半身が僅かに傾いた。次いで、唇に柔らかな感触。優の目が大きく見開かれる。ほんの一瞬の出来事だった。

「……風邪は、他人にうつしたほうが治りが早い」

一步下がり、愛がそう言う。優は銅像のように固まって動けなかった。

「じゃあね」

愛が玄関ドアから出ていく。ドアの閉まる音。玄関に残された優は軽い眩暈を感じた。それに、全身が燃えるように熱かった。早く治るどころか凄まじく症状が悪化してしまった気がする。優は暫くその場から動けなかった。

十二月十八日。篠原華は携帯のアラームで目を覚ました。昨日の戦闘の疲れが溜まっていてもう少し睡眠をとりたかったが、無理矢理ベッドから起きる。顔を洗い、軽く髪をいじってから、華は部屋の机に化粧品を広げた。ファンデーションとマスカラだけを使い、軽くメイクする。それが終わると、華はすぐに部屋を飛び出した。

人気のない廊下を急ぎ足で進む。華の記憶によれば、今日はどの小隊も訓練がないはずだった。その為か、華は誰とも顔を合わせることなく、目的地 桜井優の部屋に到着した。しかし、その部屋の扉には『留守中』のプレートが掛けられていた。予想外の事に思考が停止する。プレートを外し忘れたのではないか、と僅かな期待を込めてドアをノックしてみるも、全く反応がない。

華は小さく首を傾げた。昨日風邪をひいていたばかりだと言うのに、一体どこへ行ったのだろうか。食堂、医務室、談話室。いくつかの候補が頭の中に浮かび、華は最も近い談話室に向かった。談話室は寮棟の端、中枢エリアとは反対の方向に各階に一つずつある。近いところから順番に見てみたが、談話室には誰もいなかった。

目的地を医務室に変えて、中枢エリアまで来た時、廊下の先にふくよかな体格の男性の後ろ姿を発見した。見たこともない大きな機材を抱え、片脚を僅かに引きずっている。怪我をしているのだろうか。華は思わず駆け寄り、声をかけた。

「あの、大丈夫ですか？ 持ちます」

男が振りむき、小さく驚いた表情を見せる。それはすぐにニコニコとした笑顔に上書きされた。

「大変嬉しい申し出ですが、いやはや、女性に重い物を持たせるのは心苦しいものでして」

「大丈夫です。私、結構力持ちですよ？」

男の言葉を遮り、華は冗談っぽく右手で力コブを作ってみせた。

もちろん、自慢できるほどの力コブなどない。男がニコニコと笑みを深くする。

「では、お願いします。見た目より重いので気を付けてください」「はい」

男の持っていた機材の一部を手渡され、華は両手でしっかりとそれを抱えた。灰色の円錐で、華にはこれが何なのか判断できなかった。

「これ、何なんですか？」

「平たく言えばカメラですね。全方位カメラと呼ばれる特殊なものです」

「やっぱり高いものなんですか？」

「ええ。値段はそれなりに張ります」

「落とすと、上の人に怒られちゃいますね。気をつけないと」

「それは心配しなくても大丈夫です」

男が面白そうに笑う。華はその意味が良く分からなくて、首を傾げた。

「私がその上の人なんですよ。申し遅れました。広報部長の山田といます」

華は手に持った機材を思わず取り落としそうになった。

「ぶ、部長さんですか」

「それほど偉いものではないですけどね。亡対室は神条司令に権限が集中している。各部門の責任者に与えられた権限は大したものはないんです」

「神条司令、やっぱり凄い人なんですね」

歩きながら相槌を打つ。山田が足を引きずっている為、自然と歩幅は小さくなった。

「そうですね。それに加えてそういう演出が存在しますから」

「演出、ですか？」

そのニュアンスを図り損ねて、山田の言葉を反芻する。

「ええ。神条司令は確かに防衛大を首席で卒業した秀才でした。で

も、それだけです。亡対室発足当時、亡霊を相手にした軍事組織の運用ノウハウは蓄積されていませんでしたが、それでも既存の制服組を利用した方が遥かに効率が良い。彼女が突然司令の座についたのは、神条司令が女性だった為です」

「ESP能力者が女性しかいなかったからですか？」

山田は首を振った。

「違います。若い女性を起用すればメディアが好意的に組織全てを受け入れてくれるからです。物理的弱者は得てして社会的弱者としての地位を授かります。そうしたものを、マスメディアは批判できない。それに、大衆は救世主を望んでいた」

「救世主……」

ポツリと呟く。山田は頷いた。

「そう。大衆はいつだって都合の良い救世主を望んでいるんです。美貌、頭脳、若さ。そして、軍組織では稀有な女性と言う存在。神条司令は救世主としての地位を獲得する為に充分な下地を持っていた」

セキュリティゲートの前につき、山田は持っていた機材を一旦床において電子カードを認証ポイントにかざした。ゲートが開く。

「そうそう、知っていますか？ 普通は防衛大を卒業した後、陸・海・空の幹部候補生学校へ入校するんです。でも、神条司令はその手続きを飛ばした。だからですね、神条司令を補佐する為に参謀部が設けられたんですよ」

聞き慣れない部門だった。公開されていない組織なのだろうか。

「つまり神条司令は飾りでしかなかったんです。実権はずっと参謀部が握っていた。今は神条司令が全てを握っていますが」

「……参謀部と言うのは聞いた事がありません。それともうなくなっただけですか？」

気になって、華は小さい声で尋ねた。男がニコニコと表情を変えずに答える。

「ええ。四年前に神条司令が解体させたんです。ほら、亡霊の大規

模倣攻。あれに乗じて神条司令は実に上手くやりました。だから、今でも自衛軍の一部は神条司令と折り合いが悪い」

「折り合いが悪いって、上田中将とかですか？」

個人名を出すのは憚れたが、明確な敵というものを確認しておきたかった。山田は一瞬驚いた表情を浮かべたが、すぐにニコニコと取り繕う。

「いえ……上田中将は当初神条司令を目にかけていました。実の娘のように可愛がっていたと聞きます。今でもそれほど亡対室と対立している訳ではない。ただ、何を考えているかわからない人ですね」
エレベータの前まで辿りつき、山田が荷物を持ったまま器用にボタンを押す。

「まあ、それ以外でも表立って対立している人なんていません。亡対室も統幕の監督を受けている訳ですから、S I Aのように無茶が出来る訳ではありませんし、文民統制は守られている。軍部の肥大化などは起こらなかつた。その点、アメリカを見てください。軍産共同体の末路は悲惨ですよ。彼らは戦争を続けることでしか国を維持できなくなつた。そういう構造が、構造によって作られた。ある種の決定論的な世界です。その前には思想など無力でしかない。兵士を殺すか、労働者を餓死させるか。あるのはその究極的な二択だけ。でも、労働者は戦争を批判して、国家元首はその労働者を守る為に戦争を続けている。歪んだ世界だ。まともじゃない」

でも、と山田は続けた。

「でも、それはアメリカだけじゃない。アメリカは恐慌を耐え抜きました。小さな政府だからです。日本は違いました。亡霊と恐慌、二つの圧力によってその経済は破綻寸前まで追い込まれた。メタンハイドレートが底をつけば、日本は経済的に終わるんです。ナノテクノロジーというブレイクスルーがなければ、E S P能力者の不足を補えずに日本は物理的に終わっていました」

扉が開き、エレベータに乗り込む。ボタンを押しながら、山田は熱心に話し続けた。

「結局、神条司令は救世主にはなれなかった。亡霊の迎撃率は九割を超えましたが、不況という脅威は取り除けなかった。結果として、亡霊への関心が薄まっただけになってしまいました。神条司令は優秀な方ですが、大衆の望んだ救世主とは違った。その点、桜井くんは救世主として申し分ない下地を持っている」

突然山田の口から飛び出した思い人の名前に、華は小さく肩を震わせた。エレベーターが停止する。扉が開き、山田が先に出た。華もそれに続く。

「彼、花公院にいたらしいですね。神条司令ほどではありませんが、頭が良い。加えて、容姿も申し分ありません。マスメディアというものは重要度より反響を重視しますから、嬉々としてプロパガンダに加担してくれるでしょう。それに、子どもという社会的弱者の地位も持っている。誰も批判できない。極めつけは唯一の男性ESP能力者。誰もが彼を特別視せざるを得ない。神条司令の唯一の欠点は実際のな力を持たない事でした。統治者としての資質はありませんが、その役割には限界があります。でも、桜井くんは違う。実際に戦う力を持っている。そして中隊長という統治者としての資質も垣間見られる。彼、何だつてできますよ。何にでもなれる立場にあるんです。広報を司る者として、これだけの逸材を扱える事は至福です。戦略情報局の広報戦略は消極的なものでした。彼ら、恐れているんです。その立場が肥大化することを。コントロールできなくなる事を。やり方を間違えなければ、世論は桜井優に絶大な支持を示すでしょう。それを分かってるから、最低限の情報しか開示しなかった。出し惜しみして、その影響力を上げている訳ではない。恐れているんだ。私は、恐れない。大衆は救世主を望んでいる。そして、救世主は存在する。ならば、演出してやるのが我々の役目ではありませんか。日本は民主主義の国だ。大衆の望む事を果たすのが権力を持った者の責任です。だから」

話を聞いている内に、華は山田に本能的な嫌悪感を抱いた。男の愛想の良さそうな笑顔は仮面のようにねっとり固定され、その細

い目にはキラキラとどす黒い欲望の色が光っている。そしてペラペラと流れる言葉は虚構で飾られ、本音を隠す為に聞こえの良い言葉でコーティングされている。華は、これと同じタイプの人間を知っていた。母親だ。人をコントロールする事に愉悦を感じる人間。かつて、その矛先は幼い自分に向けられていた。そして、幼かった華はそうした攻撃を防ぐ術を知らなかった。建て前と本音に潜む矛盾を的確に見抜く事ができなかった。

まず初めにコントロール対象のあらゆる自主性を封じ込め、次に自分の望む行動特性を強化子によって強化していく。それが母親のとったコントロールパターン。山田はそれとは異なり、構造を利用するタイプの人間だ。既存の構造を利用して、人をコントロールする局所的な構造を作り出す。母より広域的なコントロールパターン。華はそれを抽象的に、直観的に感じ取り、寒気を覚えた。かつて自己に向けられた矛先が、今度は想い人に向けられている。気分が悪かった。

「着きました。ここです。いやはや、すみません。少し、話すぎましたね」

不意に山田が立ち止まり、振り返った。ニコニコと笑顔を浮かべたまま、機材を床におろす。

「あ、そこら辺に適当に置いておいてください。後は私がやりますから。いやはや、本当に助かりましたよ」
「……どういたしまして」

機材を床に下ろす。山田は部屋の扉を開け、ニコニコと笑顔を見せた。華は小さく頭を下げ、逃げるようにその場から去った。近くの階段を滑るように降りて、踊り場の壁に背を預けて座り込む。全身を得体の知れない寒気が渦巻いていた。

どうしよう。

山田が何か悪い事をしている訳ではない。これからの行動を示す明確な発言があった訳でもない。それでも、本能的に山田が危険な男だと言う確信を得ていた。しかし、その気持ちを他人に上手く伝

えられそうにない。それに、根拠のない噂を広めることに強い抵抗感を覚えた。結局、何もできないそうにない。

華は暫く考え込んだ後、静かに立ち上がった。山田が何か不穏な動きを見せれば奈々が黙っている筈がない。山田自身も奈々を優秀な人間だと評価していた。権限が奈々に集中している、とも言っていた。大丈夫、何も起きない、と自分に言い聞かせる。それでも、不安は拭えなかった。

救世主。

山田が言っていた事を思い出す。神条奈々に使った言葉を、山田は桜井優にも当てはめた。山田は、二人を同格に扱っているのだ。防衛大を首席で卒業した者と、僅か十六歳の子どもを。成績の良い子どもやスポーツのできる子どもを大人が褒めるようなものではなく、一人の人間としての評価。その評価が、華に重たく押し掛かった。遠いな、と思う。どんどん距離が出来てしまう。桜井優の歩む速度は他の追隨を許さない。そして、その隣を歩くのは自分ではない。かつて、そう思った。だから、せめて後ろに付き従いと願ったのだ。自分にやれる事は少ない。でも、やれる事がない訳ではない。華はふと当初の目的を思い出し、中枢エリアの医務室に向かった。

4章 31話 長谷川京子(8)

医務室のドアの前で桜井優は立ち止まった。CLOSEのプレートはかかっている。横開きの扉に手をかけると、扉はあっさりと開いた。控えめに中を覗いてみるが、明かりがついていない為にも見えなかった。

「京子？ いる？」

小さな声で呼びかけると、奥の方でゴソゴソと物音がした。

「桜井？」

暗闇から京子の声。

「入って良い？」

「ちよ、ちよと待って」

そう言つて、暗闇の向こうで誰かが動く気配。次いで、布の擦れる音が耳に入った。どうやら着替えているらしい。優は医務室の扉に背を預けて、着替えが終わるのを静かに待った。

物音はすぐに止んだ。一旦静寂を挟んで、京子の声が医務室の中から届く。

「もう入って良いよ」

再び中を覗くと、薄暗い医務室の奥に人影が見えた。

「明かりつけていい？」

「うん」

了承をとつてから戸口の横にあるスイッチを手探りで見つけ出し、スイッチを切り替える。室内の蛍光灯が一斉に明かりがつき、優は僅かに目を細めた。

「朝早くからどうしたの？」

ベッドの上に座り込んでいた京子が疑問を口にする。優は隣の空いているベッドに腰かけて、その質問に答えた。

「昨日怪我したって聞いたから。怪我、どう？」

「ん、痛みはないかな。ちよつと熱っぽくてしんどいけど」

そう言つて、京子は包帯を巻いた片手を軽くあげた。腕以外に怪我は見当たらず、優は安堵の息をついた。熱っぽいというのはナノマシンの副作用だろう。投与してから一日は微熱が続くと聞いた事がある。

「その様子だとすぐに復帰できそうだね」

「うん。朝早くからありがと」

そう言つて微笑む京子は普段よりどこかしおらしくった。朝といふこともあるかもしれないが、やはり精神的に参っているのだろう。戦闘による怪我は恐怖に直結する。例え軽症であっても「もし」を意識せざるをえない。優はそれを身を持って知っていたから、極力優しい言葉を選択した。

「お腹減つてない？ 希望があれば何か買つてくるよ」

「ううん、いい」

弱々しい笑みを浮かべたまま、京子が首を振る。場に沈黙が落ちそうになり、優はすぐに次の言葉を口にした。

「もしかして、体調かなり悪い？ 秋山さん呼んでこようか？」

「大丈夫。ちよつとしんどいだけだから」

ふるふると首を振る京子を見て、優は遠慮がちに言葉を続けた。

「本当に大丈夫？ ゆっくり休みたいなら、僕出てるね」

「待つて。暇してたから、全然迷惑じゃないよ」

ベッドから立ち上がるうとした時、京子の制止がかかった。その声にも覇気がない。

優が再びベッドに腰かけると、京子は、ねえ、と口を開いた。

「私さ、桜井が何であんなに訓練頑張つてるのか良く分かんなかったんだよね。白崎さんと二人で自主訓練とかもやってたじゃん。桜井つて今でも十分強いのに」

何の脈絡もなく話が始まる。京子の声は普段のものより控えめな、覇気のないものだったが、静かな医務室の中に大きく響いた。

「逆に私はあんまり真面目に訓練とかやってこなかったから尚更理解できなかつた。ここにいるのは別に愛国心とか正義感とかじゃな

くて、他に居場所がなかったからだし、もう二年目だけど華みたいに信頼されてる訳じゃない。そうなるつもりもなかった」

話の筋が見えない。優は黙って話に耳を傾けた。

「だからさ、中隊長っていう立場とか、唯一の男性ESP能力者って立場とか、そういうプレッシャーで嫌々頑張ってるのかな、って勝手に思ってたんだよね」

でも、と京子は続けた。

「ホームクルスがもう一回出てきた時、ようやく分かった。あの時、分隊長未満は戦力として投入されなくて、私ずっと戦闘区域外で待機してた。桜井たちだけ戦うことになって」

そこで京子の言葉が途切れた。顔を伏せて、泣きじゃくるような声が届く。優はベッドから立ち上がって、京子の傍に屈み込んだ。

「京子？」

そつと背中を撫でると、京子の肩が小さく震える。少し不安定になっっているようだった。

「誰も相手できないような強い亡霊が出てきたらさ、桜井真つ先に死んじゃうんだよね。私みたいな下級の隊員だと数合わせみたいなもんだしさ、勝てる訳ないから初めから投入されないけど、桜井たちは違う。勝ち目が無いような相手でも真つ先に投入されて、もし負けたら、それで終わりなんだよね」

何故、京子は急にこんな話を持ち出したのだろう。優は考えながら、京子の顔を覗きこんだ。

「嫌な夢でも見たの？」

京子がコクリと頷く。

「すっごいリアルな夢でさ、本当に最悪」

顔を伏せたまま京子が笑う。声が小さく震えていた。

「何か強い亡霊が出てきて、街が何個も消えて、そんなの絶対に止められる訳ないのに、小隊長以上に出撃命令が出て、桜井と華が出て行って、そのまま戻らなくて、愛とか沙耶とか、他の知り合いも次々死んでいって、それでさ、いつもみたいに突然その亡霊は引き

上げていって、残った人は喜んでんの。何それ。戦って死んだ人が馬鹿みたいじゃん。夢から覚めても気分最悪で、その夢が現実に起こらないって保証がないって気付いて

「京子……」

「それで！ 一番腹立たしかったのは、中隊を投入した奴！ 勝ち目ないの分かってるのに、桜井を投入しろって騒ぐ偉い人がいてさ、それが本当に最悪だった。それでもっと最悪なのがそんな奴を支持してるのが大多数だったこと！ 戦う力があるから戦えて。桜井とか華が死んだ後は上から他の強い人をどんどん投入してって、皆死んでいって、私みたいな訓練サボってたような下級隊員と、自分には戦う力がないからって中隊の投入を支持してたような奴らだけが生き残ったのが一番最悪だった！」

京子が叫ぶ。次いで、自らの肩を抱いて、泣きじゃくる。優は僅かに躊躇した後、その肩を軽く抱いた。京子の肩が一瞬驚いたようにビクンと小さく震える。

「全部夢だから大丈夫だよ」

「……うん、わかってる。でも、夢とか現実とか関係なくて、起こり得るんだよね。私、小さい頃に両親亡くして、その後、祖母に引き取られた。その祖母も死んじゃって、遠い親戚の家に預けられた。酷い事はされなかったけど、ずっと自分が場違いな気がして、ESP能力があるって分かったらすぐに家出たから、帰るところないんだよ。こういうのって多分、私だけじゃない。華とか虐待受けてたし、愛なんてもっと酷い目にあってる。皆、帰るところないんだよ。もしさ、夢みたいに訳のわからないくらい強い亡霊が出てきて、絶対勝てないって分かっているような戦いに出るって命令が来ても誰も断れない。それで、皆死んじゃう」

最後は消え入るような声だった。京子の跳ねっ気のある髪を梳いて、優は口を開いた。

「大丈夫。誰も死なないよ」

京子が顔を上げる。瞳から涙が伝い、頬を濡らしていた。

「僕が守るからって言えばたら良いんだけど、神条司令はそんな無茶なこと僕達にさせないから」

そう言つて、微笑む。京子は何も言わなかった。

「暫く近くにいるから、もう一回寝たほうが良いよ。今度は必ず良い夢見るから」

腕の中で京子が小さく頷く。そして、そのまま優の身体に寄りかかつて静かに目を瞑つた。この態勢のまま京子が眠るとは思わなかった為、僅かにバツが悪い思いをしたが、特に何も言うことなく優は京子の身体を抱えた。その際、右手に小さな痺れが走つたが、優はそれを無視した。

京子はすぐに寢息を立て始めた。いつから起きていたのか知らないが、精神的に疲れていたのかもしれない。

京子の身体をベッドに寝かせようとした時、医務室の扉が開く音がした。反射的に振りかえると、戸口に華が立っていた。その眼が大きく開かれる。優は京子を抱いた自分の態勢を思い出して、軽い眩暈を覚えた。

4章 32話 小山千夏

朝の静謐な医務室。優は腕に京子を抱いたまま、戸口に立つ華と気まずそうに目を合わせた。暫く呆けたように動かなかった華がわずおすと口を開く。

「あ、あのっ、桜井くと京子って」

華が言い終わる前に、優は人差し指を口の前で立てて、小さな声で、待つて、と遮った。氣勢を削がれた華が黙り込む。

「京子、今眠ったばかりだから静かにしてあげて」

一瞬キョトンとした表情を浮かべた華は、次に優の腕の中で眠る京子に視線を向け、すぐに納得とばかりに頷いた。優は京子の身体をゆっくりとベッドの上に寝かせ、上から毛布をかけた。

「怪我して少しナーバスになってるみたい」

「そ、そうなんだ。うん、一人でじつとしてると色々な事考えちゃうもんね」

京子に毛布をかけ終え、再び華の方に視線を向ける。そしてふと疑問に思った事を口にした。

「ところで華ちゃんはどうしたの？ 京子のお見舞い？」

「え？ あ、うん、そうだけど、その、桜井くんはもう大丈夫なの？」

「うん。一晩寝たらすっかり良くなったよ。昨日は本当にありがとう」
「結局何にも出来なかつたけどね」

そう言つて、華が戸口から医務室の中に足を踏み込む。華はそのまま京子の隣にあるベッドに向かって腰かけた。次いで、横の空いているスペースを軽く叩く。京子の横に立っていた優は華の隣に腰を下ろした。

「ねえ、桜井くんは対策室の広報部に知り合いとかいる？」

「広報部？ うーん、多分いないよ。どうして？」

突然の質問に首を傾げる。

「じゃあ、広報部の部長さんって知らない？」

「一回だけ会った事あるかも。少しだけ、その、太った人だよね？」
「うん。ちよっと危ない人かもしれないから、出来ればあまり関わらないほうが良いと思う」

「危ない人？」

その意味が分からずに反射的に聞き返した時、医務室の引き戸がガラガラと音を立てて開いた。

「あれ、桜井と篠原じゃん。何やってんの？」

川上沙耶が金色に染められた前髪をいじりながら中に入ってくる。その後ろから小山千夏と深海百合が続いて医務室の中に入ってきた。千夏は体調を崩している様子で、百合はいつものように気だるそうな様子だった。慌ててベッドから立ち上がる。隣で華も同じように立ち上がるのが見えた。

「僕たちは京子のお見舞い。川上さんたちは小山さんの付き添い？」

「そつ。明日香まだ来てねーの？」

答えながら沙耶がキョロキョロと周囲を見渡す。その間に百合の助けを借りて、千夏が京子の隣のベッドで横になった。

「秋山さんはまだ来てないみたいだよ。多分、もうちよっと時間かかると思う」

「あの人、重病の患者いないと適当だしなあ」

沙耶が愚痴をこぼす。優は何も言わず、ベッドでぐったりとする千夏に視線をやった。

「小山さんは風邪？」

「尋ねた途端、千夏の身体がピクリと反応した。」

「あー、千夏はな」

沙耶が困ったように言う。

「普通よりちよつとだけ重いんだよ」

「沙耶あ！ 一体何のつもりい!？」

沙耶が言い終わる前に千夏がベッドから立ち上がって怒る。体調不良の為か、怒りの為か、顔が真っ赤に染まっていた。

「重いつて？ 風邪が重いのか？」

「さあな。それより、篠原借りるぞ。ちょっと話があるんだ」

沙耶はそう言っつて、近くに立っつていた華の腕をとつた。

「え？ 私？」

華がキョトンとした様子で首を傾げる。沙耶は空いた手で前髪をいじりながら笑つた。

「そう。小隊長さんに相談したい事があるんだよ。こっち来てくれ」

「あの、え、ちょっと、私は」

「おい、百合も行くぞ！」

「オツケ」

華の腕を引つ張りながら、沙耶が百合を呼ぶ。百合が気だるそうに返事して、沙耶と華の二人と一緒に戸口に向かう。引き戸を開けた際に、沙耶は残された優の方を振り返つて口を開いた。

「ちよいと千夏の面倒見てやつてくれ」

それだけ言い残して、扉がピシヤリと閉められる。事情がよく分からなかつたが、優は沙耶の言葉に従う為に千夏の方を振り向いた。

「小山さん、熱ある？」

「……ない。腹痛と眩暈だけ」

千夏がどこか投げやりに言う。優にできそうな事は何もなさそうだった。どうしようかな、と優が小首を傾げた時、千夏が小さい声で呟いた。

「……桜井」

「んー？」

「今度沙耶が何か言っつても無視して。ほんと、相手する必要ないから」

「うん、わかつた」

千夏はそれだけ言っつとぐつたりとベッドに横たわつた。優も何も言わず医務室の壁に背を預けて、じつと沙耶達が帰つてくるのを待つた。

そのまま何分間が経過した時、ガラガラと引き戸の開く音がした。

見ると、手に黒い鞆を持った白衣姿の明日香の姿があった。明日香は一度優の方をチラッと見た後、ベッドで横になっている千夏に視線を移した。

「千夏ちゃん、具合は？」

「最悪う」

明日香の問いかけに千夏が呻く。

「薬出す？」

「お願いしまあす」

明日香は頷いて、戸棚の方に向かった。

「身体、冷やさないようにね。動物性食品の摂取にも気をつける事」
戸棚を漁りながら明日香が言う。次いで、戸棚から茶色の瓶を取り出すと真つすぐに千夏の元へ向かった。千夏に薬らしきものを渡しながら、明日香が優の方を振り向く。

「で、優君はどうしたの？ お見舞い？」

「はい」

優が頷いた時、再び引き戸がガラガラと激しい音を立てた。

「ちわー！」

元気な声とともに五人の女の子が入ってくる。その内の一人、第四小隊長の黒木舞が優を見つけて駆け寄ってきた。

「あれ、ユウくん朝からどうしたの？ もしかして、明日香さんを落とす為に健気に毎朝通つてるとか！？ きゃっ、そんなに年上好きならボクが相手してあげるのに！」

「黒木さん、朝からハイテンションですね。秋山さんから精神安定剤貰ったらバランス良くなると思います」

若干引き気味に優が答えると、舞の後ろの方からクスクスと小さく笑い声があがった。舞が大袈裟に頬を膨らませる。普段の言動のせいか、どこか演技染みているように見えた。

「アスカっちー、最近ユウくんが毒吐くようになってきたよー」

「どんなに可愛かった子も成長すると生意気になるものよ」

大袈裟な動きで泣きつく舞を明日香がさらっと流す。舞を含めた

女の子たちはそのまま明日香と雑談を始めた。さつきまで静かだった医務室が突然賑やかな雰囲気となる。優はベッドで寝ている千夏に視線を向けた。

「小山さん。秋山さん来たし、僕ちよつと外出しないといけないからもう行くね」

「わかった。篠原にはあたしから言つとくう」

ベッドの上でもぞもぞと動きながら千夏が答える。優は携帯で時刻を確認してから戸口に向かった。

「なになに、ユウくんデート？ 誰と誰と！？」

舞が食いついてくる。

「デートじゃないです。僕一人です」

「あ、クリスマスプレゼント買ってくるの！？ ボク、グランドピアノが欲しいなっ！」

「予算あるから大丈夫ですけど、それだと黒木さんの生活空間なくなっちゃいます」

苦笑して、引き戸を開ける。このまま話していたらずっと外に出れそうにない。何か言っている舞を無視して優は廊下に出た。

「あ、桜井君だ。おはよー」

「おはよ。後ろの髪、跳ねてるよ」

通りすがった第三小隊の女の子から声をかけられ、簡単に挨拶を返す。優はそのまま外出届を出す為にエントランス近くの事務室に向かった。

4章 33話 神奈奈々(12)

「随分と」

神奈奈々は眼前に広がる機材の山を目にして、慎重に言葉を選んだ。

「 エントロピーの高い部屋ね」

「 エントロピーはカオス化する傾向にありますから」

斎藤幸枝が特に気にした風もなく答える。奈々は返事に困って、曖昧に頷いた。それに気付いた幸枝が言葉を続ける。

「私も彼もこういうの好きだから、自然とこうなっちゃったんです」とても素敵だわ。その、とても実用的で」

奈々は斎藤夫妻の住む一般宿舎を訪れていた。世帯持ち用の部屋で、独身用の部屋より数段広い間取りをもっているが、奈々の通された一室の一角は良く分からない機材に埋もれている。その殆どが仕事とは関係ない趣味のものらしかった。

「これは何をする為のものなの？」

話題に困って、積み重なった機材の上にあつたものを手に取る。ヘッドマウントディスプレイのようだった。

「拡張現実を実装するためのものだ」

幸枝の代わりに三人分の紅茶を持って部屋に入ってきた斎藤準が答える。幸枝が黙って準から紅茶を受け取った。その光景を見て、奈々はこの若い夫婦の力関係を何となく理解した。

「拡張現実？」

「文字通り、現実を拡張する。もしくは現実を強化する。ヘッドマウントディスプレイの上に小さな二つのカメラがついてるだろ？」

二つのカメラが取得した動画からあらゆる検出物の三次元的な座標を割り出し、ヘッドマウントディスプレイに奥行のある仮想的な映像を映す事が出来る」

「奥行きを？」

「そつだ。視覚というレイヤーの上にディスプレイで映像を上書きするんじゃないくて、視覚というレイヤー自体に干渉する事が出来る。仮想物体の前に手をかざせば、手と仮想物体の奥行きを計算して必要があれば映像の一部分が隠れるし、本当に存在しているかのように見せる事ができる」

「聞いた限りでは地味な技術ね。SF映画のようにコンピュータにダイブできたらVR技術の凄さがよくわかるんだけど」

「……俺達には他の媒体にダイブできる魂のようなものがないからな。ダイブするのはいつも現実だよ。それで、入ってきた情報を俺達が機械みたいに処理する。フィクション上のVRとは全く正反対だ」

「同じ現実にはダイブするんじゃないくて、私達は現実と言う情報を分割して処理している、と？　そして分割した情報を現実と言うネットワークを通して他の計算機と交換する。本当に不合理だわ。神様は設計者アーキテクトに向いてないみたい」

「……で、今日は分割して処理した情報の統合をしにきたのか？　」
準が言う。奈々は頷いた。

「ええ。総基ネットについて聞きたい事があるの」
瞬間、幸枝と準の顔が強張った。

「単刀直入に聞きましょう。総基ネットは多重的に存在しているの？　つまり、本体ともいえるべきスタンドアロンのホストコンピュータ、もしくは分散データベースが存在する？」

「……何故、そう思った？」

「過去に私は情報部に響ちゃんの情報を改竄するように命じた。防諜部の報告から、総基ネット上から他にも同様に実験に利用された子どものデータが削除されたと聞いている。総基ネットへの書き込み権限を持つ者は多くはないけど、権限者を擁する組織は少なくない。亡対室、SIA、自衛軍、各幕僚本部に統幕、内閣府、各省庁、総務省から大量の天下りを受けている大手メディア群、特定政党に多額の献金を行っている企業群。これだけの組織が総基ネットへの

書き込み権限を有しているなら、既に総基ネットの内部データは破綻していると考えるのが普通でしょう？」

「……そうだ。総基ネットのそれは、既に本来の現実から大きく逸脱した架空の世界を構成している。データベースは現実のリレーシオンを丸映しできなければ意味を成さない。総基ネットは、更に言えばe - JAPAN計画は既に破綻している」

苦虫を潰したように、準は顔をしかめて言った。

「でも、それは”一般向けの総基ネット”なのね？」

「そうだ。そもそも改竄なんて不可能なんだ。データベースにおけるバックアップシステムというものは甘くない。定期的にデータを退避させるバックアップファイル以外に、ジャーナルファイルと呼ばれるログを逐次的にとっておくんだ。この逐次的というのはシステムを運用する上での最小単位であるトランザクション、つまり一連の処理をそのまま記録していく。だから手続きを無視した異常な入力、特殊なデバイスを用いた改竄が発生したとしてもバックアップファイルとジャーナルファイルから簡単に復元する事ができる。だが、正規の手続きを踏んだ場合、記録は残るが復元は起きない。機械的なチェックと人間的なチェック機構が存在しないからだ。改竄は不可能だが、権限者による書き換えは簡単にできる。これは、統治システムとして欠陥品だ。そして、その欠陥を最も邪魔に思うのが警察機構だ。もし総基ネット上のデータ、特に指紋データが書き換えられた場合、捜査を進めるのが難しくなる。特に警察機構の中でも特捜部、あるいは公安。この二つにとって総基ネットの持つ融通性は最悪だ」

「だから、総基ネットが多重的に創られた？」
準は頷いた。

「問題となった融通性を解決するのは簡単だった。機械的なチェックを施せば良い。だが、e - JAPAN計画の初期の段階で警察機構自体もまた総基ネットへの書き込み権限を持つ技術者を有していた。結果的に、e - JAPAN計画の根幹となった総基ネットは多

重的に存在する事になった」

「……書き換えられ続けた総基ネットだけがアクセス権限を持つ人に公開され、一般的な行政システムとして運用されている？　そして一般的な総基ネットのバックアップファイルとジャーナルファイルから同一のデータベースを作成し、何らかのマーケティングを受けていないデータだけを抽出しているのね？」

「そうだ」

奈々は大きく息を吐いた。

「総基ネットの本体を有しているのは公安と特捜部以外にどこ？」

「詳しくは俺もわからない。ただ、S I Aはその性質から確実にこれを保持しているだろうな」

「総基ネットは何重の構造をしているの？」

「それも分からない。あらゆる電力関連の施設と一緒にだよ。国家規模のセキュリティホールでもある訳だから、詳しくは一部のテクノラートしか知らない筈だ。それに、多分総基ネットに実体はない。一つのDBMS（データベース管理システム）がネットワーク上の不特定多数の記憶装置群を支配し、制御している。その全貌を掴む事は不可能だ。しかもWWワイルド・ワイド・ウェブのように広域なものではない。この分散データベースはエクストラネットの中にあるんだ」

「エクストラネット？」

「イントラネットを拡張したものだ。一般的なネットワークの接続にIPアドレスが使われているのは知っているよな？　現在利用されているIP v 6は2進数の128桁で構成されている。つまり、2の128乗の情報量があるわけだが」

「正確には340かん潤の情報量」

横から幸枝が補足する。潤という聞き慣れない数字の単位に奈々は軽い眩暈を感じた。

「その全てがホストの識別に使われる訳じゃない。一部にネットワークを特定するものがあるんだ。ある組織の持ちいるIPアドレスはこのネットワーク部が全て同じ数字を有している。IPアド

レスから組織ごとを識別できる訳だ。この同一ネットワーク部が構成するネットワークをイントラネットと呼ぶ。企業や大学の中の狭いネットワークだ。これを複数繋げたのがエクストラネット。閉鎖的だが、依存的でもある」

「警察機構の一部とSIAのエクストラネットで総基ネットの本体が共有されている、と？」

「いや、もっと広域的なネットワークを張っている筈だ。DBMSが警察機構とSIAだけにしか存在しないはずがない。普段稼働しているDBMSは一つだが、有事の際にはホットスタンバイしている別のDBMSに切り替わるようになっていてと考えるのが普通だし、クールスタンバイしている多数のDBMS群が分散して存在しているだろう。加えて、恐らくは省庁のエクストラネットにも”別の総基ネット”がある確率が高い」

「別の総基ネット？」

「そうだ。ただしそれは利用されず、ただ存在しているだけと思うが」

「DBMSが破壊された時の為のものじゃなく、総基ネットそのものが破壊された時の為の安全在庫ね？」

「準は頷いた。」

「奈々がさっき言ったように、総基ネットは多重的に存在している。全てのスケールにおいてフェールセーフ処理が働き、総基ネットは上位レイヤーへと浮上して生き延びる。これが総基ネットの持つ社会的信用性の裏付けだ」

「……私は、ずっと知らなかった」

奈々は疲れたように呟いた。幸枝がフォローするように口を開く。「統幕や内閣府ですら知らない人が大多数でしょうね。私達技術者も大多数がその詳細を知らない。ただ、こうしたアーキテクチャというものに革新性はないから、大雑把に予測する事は出来る」

「……少し話を戻しましょう。貴方はさっきデータベースのバックアップシステムは甘くない、と言ったわよね」

「ああ。バックアップシステムはDBMSの重要な商品価値の一つだ。甘い訳がない」

「以前に消失した優君のパーソナルデータは取り戻せないの？」

「……俺が復元作業に携わった訳じゃないが、聞いた話によればバックアップファイル自体に桜井のデータはなかったと聞いている。いつから消えていたかは分からない」

「跡形もなく消えるということはあるの？」

「普通はない。ただ、データというものは物理的な構造から解釈されたものだ。宇宙線がビットを破壊する事は珍しくないし、コンピュータは壊れた情報をすぐに自動で訂正するようになっていて。だが、この誤り訂正には限界がある。採用された方法によってその性能はピンキリだが、誤り訂正の許容量を超えれば訂正機能が逆に無事な情報を壊すこともある」

「……そう。じゃあ総基ネットの事だけど、本体にアクセスする事はできないのかしら？」

奈々の質問に準は顔をしかめた。

「不可能だ。それに、危険だ。総基ネットには多くの利権が絡んでいる。あのSIAがエクストラネットを利用しているのはそれを強化する為だ。無暗に触れればまずいことになる。そもそも総基ネットの本体を探してどうするつもりだ？」

「”一般的な総基ネット”から優君のデータが消えてたの。誰かが何らかの理由で消去した可能性がある」

準の表情が強張る。隣の幸枝も表情を硬くした。

「馬鹿な。桜井のデータに干渉すれば公安とSIAが、もつと言えば統幕も黙っている筈がない。すぐに復元される筈だ」

「でも、私が総基ネットにアクセスした際、優君のデータは確かに抜け落ちていた。SIAと公安は本当に総基ネットを掌握しているの？」

「それは確かだ。亡霊が何らかの干渉を施し、機械的なチエックをすり抜けて総基ネットのデータを改竄したと思えん。総基ネット

トの本体自体も既に亡霊の干渉を受けている可能性がある」

「そんなはずが……。総基ネットは物理的に存在しないのよ。複雑に分散したDBMS、記憶装置群の個々が高度な論理防御能力を備えているし、それを統合する手段がなければ総基ネットにはアクセスできない。亡霊が物理的な障壁を通りぬける事ができても、そんな事ができるとは考えられない」

幸枝が反論する。

「……そうだな。それに総基ネットは国家規模のセキュリティホールだ。もし亡霊が総基ネットの本体を見つけ出すことが出来ていたら既に総基ネットは破壊されている筈だ。フェールセーフが働いて”別の総基ネット”が電子の海から浮上したとしても、亡霊はすぐにそれらを全て破壊するだろう。結果的に日本の行政システムは呆気なく破綻する」

「いえ、侵入者がすぐに破壊行動に移るとは限らないわ。亡霊は既に侵入に成功し、バックドアを仕掛けた可能性がある。亡霊が本当に総基ネットを見つけているならね」

「それで、最も効率の良いタイミングで総基ネットを破壊する？もしくは、潜伏中に同一ネットワークに入っているあらゆるシステムのパーソナルファイアウォールを破り、その全てを掌握する、か」
場に沈黙が落ちる。奈々は紅茶の入ったカップに口をつけ、小さく息を吐いた。

「全ては想像の話。ただ、亡霊を甘く考えてはいけない。亡霊は明らかに私達よりも上位の存在だわ。何らかの対策を考えないと」

「対策なんて不可能だ。本当に総基ネットの多層防御システムが突破されたなら、どんな防御手段も意味を成さない」

「……頭が痛くなってきたわ。行政システムの中核である総基ネットの事を、私は今まで全く知らなかった。傀儡を抜け出したと思っていたけど、いまだにコントロールされているようね」

「貴女は文民じゃない。仕方ないわ」

幸枝が無表情に言い放つ。奈々は小さく首を振った。

「でも、同様に文民ではないS I Aは当然のように知っていたでしょう。亡霊を物理的な脅威と思い込んでいたから、私は今まで中隊の運用以外に注意を払ってこなかった。もっと早く気付くべきだった」「気づいても、何もできない。亡霊に真に対抗できるのはESP能力者だけだ。リソースの不足は解消できない」

「……ええ、全くその通り。今日は朝早くからありがとう。そろそろ戻る事にする」

奈々はそう言って立ち上がった。

「紅茶、美味しかったわ」

外出届を事務室に提出して、桜井優はエントランスから外に出た。雲一つない快晴だったが、凍てつくような風が身を切り裂いていく。堪らず、優はマフラーに口元を埋めた。

保安部の中村俊之が車を回すまで、こうしてエントランス前で待機しなければならぬ。寒い中で待っていていようかな、と考えた時、宿舎の方から歩いてい来る人影が視界の隅に映った。反射的に顔を向けると、風に舞う艶やかな黒髪が目飛び込んできた。神奈奈々。そう認識した途端、脳裏に入院中の出来事がフラッシュバックする。強い抱擁。長い口づけ。甘い香り。それらが一瞬にして頭の中に再生された。

「おはよう、優君。これからお出かけ？」

慌てる優とは反対に奈々が普通に話しかけてくる。顔が熱くなるのを感じながら、優は小さく頷いた。

「は、はい。ちょっと街の方へ」

最後の方は消え入るような声が出る。奈々は気にした風もなく、にっこりと微笑を浮かべた。

「良い休暇を」

そう言って、奈々は優の横を通り抜けてエントランスに入ってい

った。優は小さく息を吐き出して、胸を撫で下ろした。心臓の鼓動が早い。全身に妙な焦燥感が走った。

エンジン音とともに、駐車場の方から中村の運転する黒い乗用車が近づいてくる。優は一度だけエントランスを振り返った後、目の前で停止した乗用車に乗り込んだ。

4章 34話 広瀬理沙(6)

雑踏の中、広瀬理沙は警戒するように周囲を見回した。クリスマススイリユミネーションが街路樹や大通りに面する店舗の外観を飾り、辺りを歩く人々の顔は皆一様に笑顔に彩られている。若いカップル、家族連れ、数人の学生らしきグループ。それらを見て、理沙は今日が休日であることを思い出した。どこかへ置き忘れてしまった曜日感覚を久方ぶりに思い出し、憂鬱な気分になる。小さく溜め息を吐くと、白い吐息が都会の喧騒の中へ溶けていった。

理沙は既に契約が切れた携帯電話を取り出し、時刻を確認した。それから雑路の中を身を小さくして進んでいく。しかし、横断歩道の前に二人組の警官を発見して、理沙はすぐに足を止めた。逆方向に走りたくなる衝動を抑えつけて、警官の横を顔を伏せて横切る。変に警官を避ければ逆効果になる事をここ数ヶ月で学習していた。

無事に警官をやり過ぎし、横断歩道を渡り終わってから理沙は小さく息を吐いた。しかし、すぐに理沙の顔が強張る。前方数十メートル先にまた二人組の警官がいた。近場で何か事件があったのかも知れない。理沙は警官の集まる大通りを避けて路地に向かった。

誰もいない路地に入った途端、どこかで甲高い笑い声が響いた。理沙は小さく身体を震わせて、手にESPエネルギーを集めて注意深く辺りを見渡した。しかし、誰も見当たらない。再び笑い声。若い女の声だった。脳裏に血だまりに倒れる女の姿が蘇る。強い不快感を覚え、理沙は笑い声から逃げるように路地の奥へ入っていった。表通りから大分離れた時、どこからともなく目の前に光り輝く何かが現れた。翡翠の蝶々だった。陽の光を反射しているのではなく、それ自体が翡翠の光を放っている。蝶々は理沙の目の前でひらひらと円を描くように舞い、それからフラフラと裏路地の方に入ってしまった。理沙は僅かに躊躇った後、蝶々を追うように裏路地に向かった。

いくつかの狭い道を通り、人気のない寂れた公園に辿りつく。そこに、桜井優はいた。錆びた音をたてるブランコに腰かけ、公園の入り口に立つ理沙の姿を認めた優はにっこりと微笑を浮かべた。

「お久しぶりです」

ブランコから立ち上がり、こちらに向かってくる優を見て、理沙は不意に泣きだしそうになった。他人から真の笑顔を向けられたのは何ヶ月振りだろう。他人から友好的な言葉をかけてもらったのは何年振りだろう。思えば、逃亡する前からそんなものなど貰った事がなかった。母も、姉も、父も、誰も家にはいなかったし、学校では陰湿な嫌がらせを受け、周りの者たちは厄介事に関わらないように目を背けていた。

「ああ、久しぶり……」

喉から掠れた声が出る。

「中々連絡方法を見つけれなくてごめんなさい。これ、早いけどクリスマスプレゼントです」

申し訳なさそうに頭を下げる優から綺麗な袋を渡される。中を覗くと、丸まったマフラーが入っていた。思わず顔をあげると、僅かに緊張した様子の優の顔が瞳に映った。

「気にいらなかったらごめんなさい。女の子にこういうプレゼントあげるの初めてで、その、あまり上手く選べなかったかも」

理沙は何も言わずじっと優の瞳を見詰めた。優の瞳が揺らぐ。

「……ありがたく貰っておく」

そう言う、優は安堵したように小さく笑みを浮かべた。理沙は自身の汚れた服装を隠すように腕を組み、口を開いた。

「言いたい事がある」

「はい」

「あの連絡方法はなに？ ついに幻聴が聞こえるようになったかと勘違いしそうになった」

理沙はそう言って笑った。優も釣られたように小さく笑う。しかし、それは次の理沙の言葉ですぐに塗り替えられた。

「今後、あれで楽に連絡がとれるようになるのか？」

「……ごめんなさい、僕もちよつと微妙な立場にあつて、本当はESPエネルギーを勝手に使ったらダメなんです。今回は無理矢理誤魔化しましたが、簡単に連絡をとることは難しいです」

強い風が吹き、頬を切り裂く。ブランコが錆びた音をたてて小さく揺れた。

理沙は、そうか、とだけ呟いて小さく息を吐いた。

「あの、これ、今後の資金です」

そう言つてトートバッグから封筒を取り出す優を、理沙はじつと見つめた。差し出された封筒を受け取り、中を覗く。札束が入つていた。

「あなたは、それでいいのか」

「はい」

「正直、助かる」

既に所持金は底を尽いていた。理沙が封筒を大事そうに鞆にいれると、優が言いづらそうに話を切り出した。

「あの、僕、もう行きます」

「早いな」

本音が漏れる。理沙はすぐにそれを後悔した。

「……支援するなんて大きな事言つて、結局何もできませんでした。ごめんなさい」

「そういう意味じゃない。ただ、残念と思つただけ」

「また、連絡します。絶対に」

優はそう言つて背を向けた。理沙は何も言わず、その姿を見送つた。

一人公園に残された理沙は、手に持ったプレゼントを抱きしめた。

都内郊外にある総合ショッピングモールの殺風景な屋上に一つの

影があつた。影　桜井優は屋上に転がっていた端末を手にし、それをポケットに戻した。それから屋上の端へと歩いていく。下を覗くと、シヨップینگモールの敷地を埋め尽くす人混みが目に入った。優は少し考え込んだ後、屋上の反対側へ回った。そちらは社員用の小さな駐車場になっていて、殆ど人気がない。長時間タイミングを見計らつた後、優は屋上から飛び降りた。浮遊感の後に強烈な空気に抵抗に襲われる。地上まで数メートルを切った時、優の背中から光翼が出現した。光翼が力強く羽ばたき、落下速度が急速に弱まる。無事にコンクリートの上に降り立ち、優は安堵の息を吐いた。すぐに光翼を霧散させ、駐車場から出る。駐車場の入口に立っていた警備員が社員用の駐車場から出てきた優を見て一瞬怪訝な表情を浮かべたが、何も干渉してこなかった。

駐車場を出てから優はシヨップینگモール前の敷地に広がる人混みに紛れこみ、そのままシヨップینگモールのエントランスから中に入った。エスカレーターを使って二階に上がる。婦人服のフロアだった。あまり人はいない。だから、前方から歩いてくる背広姿の大男　中村俊之の姿がすぐに目にとまった。

「こちらにいらっしやいましたか。突然姿が見えなくなった為、心配しました」

「ごめんなさい。色々見て回っていました」

優が小さく頭を下げると、中村は首を小さく首を振った。

「いえ、こちらの不手際です。小町、二階だ。すぐに来い」

後半は襟元のマイクに向かって喋ったようだった。

「他の店を覗いても良いですか？」

尋ねると、中村は小さく頷いた。

「ええ。参りましょう」

一階に降りる為に先程昇ってきたエスカレーターの逆方向に回りこむ。その時、三階からスーツを着こんだ若い女　小町未知子が降りてきた。美知子は優の姿を認めると急いで駆け下りてきて、小さく安堵の息をついた。

「一階へ？」

「はい。他の店を見たくて」

「良いものが見つからないのでしたら、私が見繕いましょうか？」

美知子の言葉を受けて、優は少し考えてから首を縦に振った。

「お願いします。ちよつと何買えばいいのか分からなくて、困って
たんです」

「わかります。誰もが通る道ですからね」

美知子が先頭に立ち、下りのエスカレータに乗る。優と中村がそれに続いた。

中村と美知子に挟まれるようにしてショッピングモールから出ると、辺りに立つ警官が目にとまった。

「何か事件でもあったんですか？」

隣の中村に尋ねる。中村は一瞬だけ美知子と目配せし、首を振った。

「わかりません。ただ、何か大きな事があれば連絡がくるはずですからご心配なく」

中村は一瞬だけ辺りを見渡してから、言葉が続けた。

「車を出してきます。こちらで小町と一緒に待機をお願いします」

「はい」

優が頷くと、中村は駐車場の方へ走っていった。それを待っていたように横の美知子が口を開く。

「中村先輩は堅すぎていけない。そう思いませんか？」

「でも、格好いいです」

優がそう答えると、美知子は、確かに、と苦笑を浮かべた。

少しの間そうやって雑談をしていると、ショッピングモールの近く、地下鉄の駅ある付近から喧騒が届いてきた。歩行者が皆一様に足を止めて、そちらに目をやる。優たちもそれに倣って地下鉄の方を見やった。

「何だか騒がしいですね」

優がそう言うと、美知子が優を庇うように前に出て、人だかりの

方を見つめた。

「……デモのようですね」

「デモ、ですか？」

優の言葉に美知子が頷く。

「ほら、見えてきました」

人だかりの中からプラカードを持った集団が出てくる。周りの歩行者たちは物珍しそうにそれを見ていた。そして、遠くから警官たちとその様子を警戒しながら見守っている。

シユプレヒコールが響き、喧騒が大きくなる。どうやら雇用保障を訴えるデモのようだった。暫くそれを眺めていると、すぐ横の車道に黒い乗用車がついた。

「……行きましょう」

美知子が言う。優は頷いて、後部座席に乗り込んだ。続いて美知子が反対側から中に乗り込む。中村の運転する乗用車はゆっくりと動き出した。

4章 35話 上田孝義

亡霊対策室における広報部の役割は広報活動だけに留まらない。広報部には広報能力と同等程度の広聴能力が備わっている。故に、広報部のトップである山田茂雄が直々に司令部に現れたことに奈々は嫌な予感を覚えた。

「神条司令、こちらをご覧ください」

山田は奈々のもとに来て早々に一冊の週刊誌を差し出した。奈々は一拍置いてからそれを受け取った。

「五ページ目をご覧ください」

言われた通りにページを開く。視界に飛び込んできたものに奈々は眉を寄せた。

「……これは？」

「見ての通りです」

奈々は週刊誌に載った一つの記事を見つめた。『小さな恋人たち』と題され、病院の前で仲良く寄り添う優と詩織の写真とそれに対する簡素な説明が載っている。写真の背景から、この写真が優が退院した日に撮られたものだとすぐにわかった。当日、病院の周辺で不審な者を見たという報告が中村からあった事を思い出す。

「……内部にリークした者がいる」

奈々は小さく呟いた。通常、病院に入院している患者を外部の者が調べる手段は存在しない。退院の様子を撮られたということは、誰かがリークしたということだ。

「ええ。ですが、リークした者を特定する事は困難です。手続きを行った総務部、当然知らせが入っていたであろう防諜部、彼のESPエネルギーの測定を行った医療チーム、詳細を知らされていた特殊戦術中隊、病院内部の者。対象が多すぎます。そして今必要なのはリークした者の特定よりも、この情報的価値を無力化することではありませんか」

「強烈なプロパガンダを出せ、と？」

「そうです。それが彼らの為です。こうしたプライベートを公開できないよう、中隊の政治的重要性、その救世主性を強調するのです。このような馬鹿げた記事が出ないよう、徹底的に、です。それが、中隊に所属する子どもたちを害意から守ることに繋がるのではありませんか」

奈々は山田の細い目を睨みつけた。

「小さなドクトル」にでもなつたつもり？」

「そうなければいいですね。ドクタ・ゲッペルズは優秀な宣伝相でした。広報に携わる者として、彼を尊敬していない者はいないでしょう。でも、ゲッペルズと私の仕えるべき主君は違う。私は”太ったドクトル”にはなれないし、なるつもりもありません。何故なら私には政治的信条が全くないからです。それは私の経歴を知る貴女が一番ご存じの筈。私はただ必要だから申し上げているのです」

奈々はじつと山田の顔を眺めた。確かに山田の言う通り、山田には政治的信条が全く見えない。過去にいくつかの政治勢力でアジテーターとして活躍した経歴があるが、その全てがイデオロギーの相反するものだった。だからこそ奈々は山田を広報部のトップに添えたのだ。思想の上に知識を蓄えた者に広聴活動を任せる事は出来ない。知識の上に思想を築いた者でなければ、精度の高い広聴を行う事は難しい。

しかし、奈々はその評価を改め始めていた。山田には確かに政治的信条がないが、別の確固たる信条の元に特殊な指向性が存在するのではないか、という危惧が明確な根拠もなく湧き起こっていた。

奈々はもう一度週刊誌の記事に視線を落とし、写真を見つめた。

奈々は何かを我慢するようにゆっくりと目を瞑り、静かに口を開いた。

「……新たなプロパガンダは必要ない。S I Aの設定した広報戦略は妥当なものだった。そして、それを変更する理由は現段階で存在しない」

「子どもたちのプライベートごときは、広報戦略を変更するに値しない、ということでしょうか」

奈々の閉じていた瞼がゆっくりと開かれる。その双眸には、はっきりと怒りの色が宿っていた。

「あなたの提案する広報戦略は狭い防御効果しか生まない。そして、私は彼女たちのプライベートを守りたいのではない。私が保護を目的とするのは中隊の在り方そのものよ」

「では、中隊の在り方という貴女の理想の為に彼女たちのプライベートを犠牲にする、と。でも、それは、あまりにも理想に溺れているではありませんか」

「在り方を守る方法はいくらかでもある」

奈々はそう言って立ちあがった。

「すべき事ができた。私は行く。話を続けたいのであれば、後日また聞きましょう」

山田は一瞬考え込むような素振りを見せた後、すぐに頭を下げて、奈々に背中を向けた。そのまま片脚を引きずって司令室から出ていくのを見送ってから、奈々は隣で困惑した表情を浮かべる加奈に視線を向けた。

「優君はまだ外出中？」

「中村からはまだ帰還報告がありません。測位システムを利用しますか？」

「いえ。それならそれで良い。出来れば、延ばしたい」

「はい。帰ってきたらお知らせします」

「お願い。少し、外に出ている」

奈々はその言葉を残して、司令室から外に出た。

桜井優が亡霊対策室に戻ってきたのは午後五時を少し回った頃だった。エントランスの前に停車した乗用車からいくつかの買い物袋

を抱えて車外に出る。反対側のドアから外に出た小町美知子も同様に多数の荷物を抱えていた。

「小町、一人で持てるか？」

運転席のドアを開けて、中村俊之が確認の問いを投げかける。

「ええ、大丈夫です。中村先輩は先に帰還報告をお願いします」

「わかった」

運転席のドアが閉まり、車がゆっくりと発進する。それを見送ってから、美知子は優に向き直った。

「よし。じゃあ、行きましようか」

「はい」

二人は揃ってエントランスをくぐり、温かい本部の中に入った。

「荷物、持って頂いてすみません」

歩きながら、優は美知子に申し訳なさそうに頭を下げた。手が塞がっている為か、美知子がぶんぶん和大袈裟に頭を振る。

「これも仕事のうちです。もっとこき使っても大丈夫なくらいですよ」

そう言いながら、セキュリティゲートを通る。寮棟と中枢エリアを繋ぐ通路に入り、前方から望月麗が歩いてくるのが見えた。

「あ、先輩！ その荷物何ですか？」

「クリスマスプレゼントだよ。お世話になった人用に買ってたらこんな量になって」

「もしかして、中隊全員分買ったんですか？」

「うん。と言っても、小物だよ。第一小隊の人には一応別の物用意してるけど」

「二百個はやりすぎです」

「……僕もちよつとだけそう思ってた。ごめん、持ってもらってるから、また後でね」

後ろで荷物を両手に抱えて控える美知子に視線を向ける。麗はそこでようやく美知子の存在に気付いたようだった。

「あ、すみません。じゃ、先輩、また後で！」

そう言つて麗は中枢エリアの方に走つていく。優は一度荷物を抱え直して、寮棟と通路を遮るセキュリティゲートをくぐり抜けた。美知子がそれに続く。

「私、中隊の寮棟に入ったの初めてです」
美知子が物珍しそうに言う。

「造りは一般宿舎の方とあまり変わらないと聞きました」
「うん、そんな感じですよ。ただ、壁の色とかが違うから、結構印象違いますよ」

とりとめのない言葉を交わしながら、自室の位置する通路に入る。自室の前に華、京子、愛の三人の姿があつた。

「あ、ようやく帰ってきた」

京子が優の姿に気づき、声をあげる。それを合図に華と愛も優の方に向き直つた。優は軽く手を振つてにつこりと笑みを浮かべた後、隣を歩く美知子に顔を向けた。

「小町さん、荷物ここまでで大丈夫です。手伝つて頂いてありがとうございます」

「いえいえ。また何かあれば呼んでください」

小町はそう言つて、両手に持った荷物をそつと壁際に降ろした。

「それでは、失礼します」

「はい」

小さく頭を下げる。美知子は小さく、じゃあね、と言つてその場から去つていった。

「今の人誰？ つてか、その荷物何？」

美知子が優から離れたのを見計らつて京子が近づいてくる。

「保安部の小町さん。こつちはクリスマスプレゼント。京子たちはどうしたの？」

「イヴ、どこ行こうか決めようと思つて」

「そういえば全然決まつてなかつたね。ちよつと待つて。鍵開けるから」

荷物の半分を床に下ろし、玄関の扉に鍵を差し込む。そのままド

アを手前に引つ張り、優はドアを足で押さえた。

「中で適当に待つてて」

「うん。おじゃましまーす」

華が頷いて、一番に部屋の中に入る。その後、優が続く。ドアを押さえる優の前を通り過ぎる際に、愛はゆっくりと優に視線を向けた。

「……優、風邪は？」

昨日の別れ際の事が脳裏に蘇る。

「すっかり治ったよ。愛ちゃんのおかげかな」

愛が昨日の事を気にしている様子がない為か、優も特に動揺せず普通に返す事ができた。

「そう。良かった」

愛はその言葉を残して部屋の中に入っていった。

廊下に残った京子に目をやる。京子は美知子の置いていった紙袋を両手に持っていた。

「これ、中に運べばいいの？」

「あ、うん。ありがとう。助かるよ」

「それにしてもこれ大きすぎない？ 何買ったの？」

玄関の中に荷物を運びながら京子が言う。優も荷物を中に運びながらそれに答えた。

「んー、大きくはないんだけど、量が多くなって。約二百個分あるから」

「二百個？」

京子が声をあげる。優は頷いた。

「中隊全員の分だよ」

「あっきた……。分隊長レベルで留めとけばいいのに」

「荷物を運ぶ時、少しだけそう思ったよ」

そう言っ、二人で小さく笑う。

荷物を玄関に置いて、優と京子はそのまま部屋に入った。先に中に入っていた華と愛は部屋の中央に置かれた小さなテーブルの上に

いくつかの雑誌を広げていた。

「桜井くんは、どこか行きたいところとかある？」

部屋に入った途端、手前に座っていた華が顔だけ振り返ってそう尋ねてくる。優は華の横から雑誌を覗きこみながら、特にないかなと答えた。

「華ちゃんたちは？」

「えっと、私もあんまり希望はないかな」

「……私も」

「京子は？」

「……ない」

四人の間に苦笑が漏れる。

「まだまだ時間余ってるし、ゆっくり決めよっか」

「うんっ」

優の言葉に、華と京子が弾んだ声を出した。

東京都新宿区市ヶ谷駐屯地の一室に二人の男の姿があった。一人は陸上幕僚長の中崎一郎^{なかざき いちろう}。頭部を覆う白髪と穏やかな顔つき、そして小柄な身体から一見してどこにでもいる温和な老人に見えるが、彼こそが陸上幕僚監部トップを務める男である。そして、その老人と席を同じくしている男は陸上自衛軍中將の上田孝義だった。

「我に追いつく敵機無し^{グラマン}」

暗い室内のプロジェクターに映し出された一人の少年の姿を眺めて、中崎陸上幕僚長は一人呟いた。

「ホムンクルスに対抗できたのが、二百人近くいる中隊の内で彼一人。内局の者は内心穏やかではないだろうね」

「ええ。だからこそ動かざるをえなかったのでしょう」

上田中將は静かに相槌を打った。中崎陸上幕僚長がゆっくりと上田中將の方を振り返る。何かを躊躇うような様子を見せた後、中崎

陸上幕僚長は柔和な表情を一変させ、厳しい口調で上田中将に言い放った。

「そして、君もだ。私は君の真意を知りたい。内局から何を言われた？」

上田中将は何も答えなかった。中崎陸上幕僚長の鋭い視線が突き刺さる。

「医療用ナノマシンの流通に不審な点があると報告があった。調べてみれば、大量のナノマシンが中部方面隊に流れている。それも、一年以上前からだ。不思議な事にこれを監視している筈の内局はこの問題を全く取り上げていない。汚職の類かと思っただが、どうもきな臭い。これはS I Aの指示かね？」

上田中将が中崎陸上幕僚長の方にゆっくりと顔を向ける。ロボットのようどこか不自然な動きだった。

「……始まりは、内局の誘いでした。確かに今ではS I Aもこれに賛同していますが、全ては私自ら決定したものです」

あっさりと口を割った上田中将を見て、中崎陸上幕僚長は警戒するよ風に眉を寄せた。

「私には君が何を考えとるのか分からん。私と違って君には学があった。理想があった。熱意があった。そして、まだ若い。君には未来がある。若い先短い私とは違うのだ。悪い事は言わん。正道をいきなさい」

中崎陸上幕僚長は諭すようにそう言った。プロジエクターに移された映像には両腕に少女を抱えて急降下する少年の姿が映っていた。

「……ナノマシンが何なのか、中崎陸上幕僚長はご存知ですか」

上田中将は中崎陸上幕僚長から視線を外し、プロジエクターに映された映像を眺めながら呟いた。中崎陸上幕僚長は一瞬怪訝な表情を浮かべた後、小さく首を振った。

「先程言ったように、私には君のような学がない。それに、私のような年寄りにとって最先端技術というものは魔法ではないのだ」「その通りです。」高度な科学は魔法と区別がつかない”。ですが、

科学は魔法と違って理論が必ず存在します。元々ナノマシンは計算機科学と量子力学の集大成として作られました。突き止めればナノマシンはただの量子コンピュータでしかないのです。従来の計算機は0と1の単純な組み合わせで動いていました。つまり一ビット辺りに二つのパターンしか刻む事ができない。ですが量子コンピュータは電気の代わりに量子を用いることによって、無限に近い情報を刻めるようになりました」

「全ては確率的にしか存在しない、という訳だ。確かシュレディンガーの猫と言ったかね。箱に毒物と一緒に閉じ込められた猫を観測者が観測した途端、その生死が決定する。全く眉唾もの話だ」

「同感です。アインシュタインとシュレディンガーは古典物理学的な、全てが決定された世界を思い描いていました。二人がこれを受け入れられなかったのもわかります。しかし、”それでも地球は回る”のです。世界は確率に支配され、素粒子が観測され、世界は二種類の紐で構成されている事が推測されるまでになった」

中崎幕僚長は顔をしかめた。

「この歳になると、世界の真理とも言える話が怖くなるよ」

「すさまじ隙間に創られた神々は死につつあります。代わりにエレクトロニクスと量子力学の融合が日本の製造業を支えてきました」

「製造業、か。輝かしい時代だった。しかし今やメタンハイドレートトの輸出に頼る一海洋国家にまで落ちぶれてしまった」

中崎陸上幕僚長は一瞬遠くを見るように柔和な目を細めた。

「メタンハイドレートだけではありません。ナノマシンも日本が誇る技術の代表格です。小型機械と量子力学、これほど日本にあった分野は他にない。ところで、亡霊を構成するESPエネルギーが何なのか、中崎陸上幕僚長はご存知ですか？」

話題が飛ぶ。中崎陸上幕僚長は警戒するように目を細めた。

「……少し、話がずれてきているようだ。もしか、それで話を逸らしているつもりかね？」

上田中將は動じた様子もなく、ゆっくりと首を振った。

「先生、どうか静かにお聞きください。ナノマシンは量子の重なり合いを利用していますが、同様に亡霊を構成するESPエネルギーもナノマシンと同じように量子によって生成されているのです」

中崎陸上幕僚長が僅かに驚いた顔を浮かべる。

「現在の医療用ナノマシンは量子を電気信号の代わりに制御して、小型機械に精密な操作を施しているに過ぎません。しかし、これを機械の制御ではなく、量子操作自体に重点を置く事でESPエネルギーを生み出せる可能性が存在します。機械翼や小銃などはESPエネルギーの振る舞いを経験的に研究し、それに指向性を持たせているだけでしたが、これはすぐにそれらを乗り越える技術的ブレイクスルーとなるでしょう」

中崎陸上幕僚長は、信じられん、と呟いた。

「信じられん。君は、君たちは真の対亡霊兵器を作ろうとしているのだな？」

「はい。既に二年前からタスクフォースが動いています。リーダーは白崎欄。才覚溢れる若者で、彼女はこう言っています。亡霊は複雑な量子コンピュータに過ぎない、と」

一瞬呆けた様子を見せた中崎陸上幕僚長はすぐに意味を理解して、信じられん、と再び呟いた。

「闘争が、終わるのだな。それが完成すれば、終わりの見えなかった闘争がようやく終わるのだな」

「そうです。実を言えば一年以上前から人工的なESPエネルギー、正確にはESPエネルギーに干渉しうる量子構造体を生成する事に成功しました。後は医療用ナノマシンを用いたコスト削減、出力装置の小型化、冷却インターバルの短縮化など、実用化に向けて動いています。その中でも医療用ナノマシンを用いた新たな量子構造体の生成はほぼ完成した状態で、後は細かな調整を残すのみとなっています」

中崎陸上幕僚長は気を落ちつかせる為に大きく息を吐きだした後、時間を数えるように三回手を握った。

「……素晴らしい。だが、その資金はどこから出たのだ？」

「SIAです。元を辿れば経団連から流れてきたものでしょう。白流島周辺の輸送路の閉鎖は彼らにとって愉快なものではない」

「では、亡対室もこの事は？」

「ええ、知らないでしょう。これは背広組が中心として進めたプロジェクトです。神奈川は制服組にしかコネクションを持っていません」

中崎陸上幕僚長の身体から一気に緊張の色が抜ける。

「……中将、私は安心したよ。ここ最近の君は何を考えたのか分からなかった。何か良からぬ事を企てているのではないかと勘ぐってしまった事を謝りたい」

「良からぬ事に違いはありません。しかし、やらねばなりません。軍事・経済・政治、その全てが亡霊の創り出したイデオロギーに巻き込まれています。このうねりは次第に巨大な波となって全てを呑みこむでしょう」

中崎幕僚長は厳かに頷いた。

「秩序化イデオロギーだな？ 君の言う通りだ。失われた秩序を取り戻すための巨大な暴力が近いうちに必ずやってくる。リアクタンスは万物を支配する最も根源的なものの一つだからな。中将、君はそれをコントロールするつもりか」

上田中将は頷いた。

「既に一部の暴力が現実には現れ始めています。SIAは既に秩序化イデオロギーの波に呑まれ、連鎖的な秩序化イデオロギーの発動に手をかけました。我々は神の支配から逃れる事は出来ても、構造の支配から逃れる事はできない。このイデオロギーの持つ指向性を変える必要があります」

「もし、そのイデオロギーの設計に失敗した場合は」

「全てを上回る巨大な暴力が生まれ、秩序化イデオロギーをも呑みこむでしょう。そしてそれは次に最も原始的なイデオロギーを形成すると考えています」

プロジェクターに映し出された映像は既に動画の再生を終え、意味のない青い画面を延々と映写し続けている。中崎陸上幕僚長は無言でそれを切り、深呼吸した。

「最後に。中隊はどうなる？」

「いずれは解体されるでしょう。子どもが戦場に投入される異常な状態は終わりを迎えます」

上田中将の答えに中崎陸上幕僚長は柔和な笑みを浮かべた。

「私は君を全面的に支持する。この意味を君が正しく理解してくれることを期待しておるよ」

何の重さも感じさせない響で中崎陸上幕僚長が言う。上田中将は深く頭を下げ、感謝の言葉を述べた。

「ありがとうございます」

「身体に気をつけたまえ。君にはすべき事がたくさんある」

最後に、失礼するよ、と言葉を残して中崎陸上幕僚長は部屋から出ていった。

上田中将は小さく息を吐き、薄暗い室内の中、小さく呟いた。

「沙織。もうすぐだ。もうすぐ、闘争が終わる……」

「こことか良さそうじゃない？ 空いてそうじゃん」

雑誌を覗きこみながら京子が言う。それに対して、横から記事に目を通した華が、ダメ！ と声をあげた。

「ここ、落ちつき始めた夫婦が行く場所じゃない？ さっきから京子の挙げる場所絶対おかしいよ」

華、京子、愛の三人が優の部屋にあがってから既に二時間が経過していたが、いまだにイヴにどこを回るか全く決まっていない状態だった。一向に決まる気配がないのを見かねて、優は隣で大人しく座っている愛に視線を向けた。

「去年のイヴはどこ行ったの？」

「……カラオケで朝まで歌ってた」

それはそれで楽しいかもしれない、と優が思った時、京子が疲れた声を出した。

「大体さあ、時期的に無理なんだって。さっきから華が推すところ、絶対人の数やばいよ。店とか殆ど予約埋まってるし、少しづらさないと無理だって」

「でも、せっかくのイヴなんだし……」

華が頬を膨らませる。その仕草が妙に似合っていて、優は頬を緩ませた。

華の言葉に京子が何か言い返そうとした時、甲高い警報が響いた。全員の表情が硬くなる。次いで、個人端末からもアラームが鳴り響いた。四人は一斉に端末を取り出した。そしてすぐにお互いの顔を見合う。

「第一、第二、第三……第六？ これ、中隊全部だよ……？」

華が顔を蒼くして呟く。華の言う通り、端末には全小隊への出撃命令を示すものが映っていた。脳裏に高梨市の住民が消えた時の事が蘇る。嫌な予感がした。

「……早く行かないと」

愛が迷う素振りもなく立ちあがる。それに釣られるように華が立ちあがった。

「……話は帰ってからにしようか」

端末を見つめたまま固まっていた京子も立ちあがる。残された優はテーブルの上に散らばった雑誌を閉じて、慎重に口を開いた。

「気をつけてね」

結局気のきいた言葉が思いつかず、それだけ言う事にする。それを聞いた華、京子、愛の三人は暗さを感じさせない笑みを浮かべた。「うん。すぐ戻ってくるから待っててね」

華はそう言っただけで玄関に向かった。京子と愛もそれに続く。

玄関の扉が閉まる音。静かになった部屋で優は小さく溜め息を吐いた。そして、ふと窓に目をやる。立ちあがってカーテンを開けて

みるも、暗闇で窓の向こうは何も見えなかった。亡霊対策室の周囲は自然に囲まれている為、人工の光が殆ど見当たらない。

窓を開けると、冷たい風が吹きこんでくる。優は胸の奥から湧き上がってくる欲求をはっきりと自覚した。

飛びたい。

機械翼も、小銃も必要ない。亡霊対策室の支援も全てかなぐり捨てて、このまま華たちと合流したかった。しかし、残された理性がそれを完膚無きまでに否定する。奈々が何故休暇を言い渡したのか、何故そうしなければならなかったのか、それが理解できないほど優は子どもではなかったし、子どものままでいる事は許されなかった。奈々と自分では視点が違う。そして、まだ子どもでしかない自分と六年もの間司令官として実績を重ねてきた奈々のどちらの視点が正しいか、比べるまでもない。

優が窓を閉めようとした時、玄関からノックの音が響いた。次いで、ドアの開かれる音。優は驚いて振り返った。廊下から足音が響き、部屋の扉が開かれる。亡霊対策室副司令、長井加奈が姿を現し、硬い表情で告げた。

「優君。君の休暇を取り消します。今すぐに出撃準備室へ」

4章 36話 神奈奈々(13)

加奈に手を引かれて、優は廊下を走った。廊下には人影が全くない。戦闘態勢に入り、中枢エリアにいる殆どの者が支援行動に移った為だろう。

「早く着替えて！」

出撃準備室の近くにある小部屋に着くなり、優は加奈に押し込まれるようにして中に入った。すぐにロッカーから戦闘服を取り出して着替える。着替えには一分もかからなかった。

脱いだ服をロッカーの中へ丸めて投げ込み、すぐに部屋を出る。廊下に加奈の姿はなかった。恐らくは司令室に向かったのだろう。指示を待たずして優は近くの出撃準備室に入った。突然開いた扉に驚くように、機械翼をつけていた少女たちが視線が一斉に優に突き刺さる。

「桜井くん？」

奥の方に立っていた華がキョトンした様子で首を傾げる。優は周りにから突き刺さる視線に居心地の悪い思いをしながら壁際に掛けられた機械翼の元へ向かった。

『事態が変わった。現場指揮は優君にとってもらおう。尚、これは一時的なものとし、戦闘が終わり次第再び休暇を言い渡す』

部屋に取り付けられたスピーカーから奈々の声。それを聞いて、数人がホツとしたような様子を見せたが、大多数が不安そうな表情を見せた。中隊の全てが投入され、休暇中だった優も投入された事から、事態が芳しくない事を悟ったのだろう。

優は気を落ちつかせる為に小さく深呼吸してから、機械翼を取り付け始めた。そこに沙耶が笑いながら歩み寄ってくる。

「休暇取れとか働けとか、命令がコロコロ変わって中間管理職も大変だな。あまり無理すんなよ」

それに対して優は何も言わず、曖昧な笑みを見せた。遙か遠くか

ら巨大なESPエネルギーの塊が近づいてくるのを感じ取りながら。

第一小隊、第四小隊、第三小隊、第二小隊、第六小隊、第五小隊の順で優達は出撃ハッチから夜空に飛び立った。誰も喋らず、無言で冬の冷たい空気を切り裂いていく。

『各員へ通達。敵数は一九二。高度〇七〇〇。陣は偃月^{えんげつ}。その先頭に巨大な反応がある。ホームンクルスである可能性が高い。格闘戦に持ち込まれないように注意すること』

通信機の向こうから奈々の抑揚のない声が届く。しかし、伝えられた内容は奈々の淡々とした声色とは反対に寒気を感じさせるものだった。

敵数一九二。中隊と同等の戦力。果たしてこれは偶然の一致だろうか。

全ては選別の為に存在するのだと私は考えています。

凜の言葉が脳裏をよぎる。もし亡霊の目的が本当に選別であるとするれば、この事態は一体何を意味するのだろうか。中隊全員の選別を決行したということだろうか。では、これに負ければ？

通信機の向こうで奈々が何かを言っていた。奈々の声が妙に遠く聞こえる。どこかでESPエネルギーが膨張しているのが感じられた。遙か前方。亡霊。まだ視界に映っていないにも関わらず、その存在がはつきりと感じられた。

「……敵亡霊、偃月から魚鱗に移行。巨大な反応が一つありますが、それ以外に六つの大きな反応が隠れています」

通信機に向かって感じ取った事を報告する。すぐに奈々の困惑した声が返ってきた。

『優君……？』

夜空の向こう。フラッシュとともに、一瞬だけ巨大な何かが見えた。

「巨大な反応は……ホムンクルスじゃありません。凄く、大きい。ESPエネルギーの保有量ですが、物理的に大きいです。何メートルも、下手したら何十メートルも……」

「優君？　そこから相手が見えているの？」

「まだ見えません。でも、わかります。早い。凄い速さで向かってきています」

そう答えた時、通信機からオペレーターの報告が届いた。

『距離四〇〇〇を突破！』

『……各自、兵装チェック。高度維持。敵前方突出。敵陣……魚鱗』
兵装を確認しながら、優は夜空の向こうを睨みつけた。激しい風音に紛れて自身の呼吸音が耳に響く。

『……雲が出ている。視界不良。敵高度上昇』

奈々の声。確かに雲が出ていた。月が見えない。しかし、問題ない。優は亡霊の姿をはつきりと捉えていた。高速で接近してきている。

「……来ます！」

優が叫んだ時、雲間から無数の紫色の光が現れた。距離は依然として離れている。しかし、亡霊の姿は夜空にはつきりと浮かんでいた。

『何あれ……』

通信機から華の呆然とした声が届く。それに釣られて、沙耶の声が通信機から続いた。

『おいおい、冗談だろ……』

遙か遠方に見える紫色の発光群。その中央に居座る亡霊は異常なほどに巨大なものだった。周囲に纏わりつく発光体の何倍もある。少なくとも十メートルを超える巨体だった。

『絶対に隊列を乱さないで！　そして不用意に敵に近づかない事。イーグルのように特殊な能力を備えている可能性がある』

奈々が警戒するように言う。

『距離、一〇〇〇突破！』

『構え!』

号令と共に、中隊員の全員が小銃を構える。

『相手は魚鱗の陣。端と先頭の距離が著しく違う。両翼は目の前の敵に注意をとられて逃げ遅れないように注意しなさい』

『距離八〇〇……七〇〇……六〇〇……』

強く吹き付けていた風が止む。一瞬だけ、周囲が不気味なほどの無音の包まれた。

『三〇〇……二〇〇……』

亡霊の姿がはつきりと視界に映る。先頭を飛翔する亡霊は捉えどころのない形をしていた。スライムのように不規則に蠢き、その形を自由に作り替えていく。高梨市の戦いで最後に見たアメーバ状の亡霊に似ている気がした。

『撃て!』

奈々の叫び声とともに。無音に包まれていた空気が膨張する。それに伴い激しい耳鳴りが続いた後、周囲の空気を揺るがす轟音が響いた。総勢一九二名から放たれたESPエネルギーは正三角形の形に広がった亡霊群の中央。巨大なアメーバ状の亡霊に向かって吸い込まれていった。轟音と共に夜空の向こうで閃光が走る。

『命中!』

『単純後退! 敵に距離を詰めさせないで!』

命中報告と同時に後退の命令が出る。優は識別ライトをつけた右手を上げて単純後退命令を出した。一九二名の中隊員が一斉に後退を始める。

『構え!』

後退しながら、優は小銃にESPエネルギーを装填した。閃光の中から次々と飛び出してくる亡霊に狙いをつける。

攻撃を正面からまともに受けたアメーバ状の亡霊は身体が一部吹き飛んでいたが、それでも依然としてうねうねと蠢きながら、その巨体に似合わない速度で距離を詰めてくる。

『撃て!』

再び射撃命令。轟音とともに翡翠色の奔流が亡霊群を呑みこむように夜空を走る。亡霊群がESPエネルギーの本流から逃れる為に四方に分かれていく。

「敵、散開運動！ 側面をとられるな！ 後退、後退！」

密集していた亡霊群が一斉に広がる。その影響で亡霊群の全容を視界に全て捉える事が難しくなる。あまり良い兆候ではない。死角が増えればそれだけ闘いが複雑になってしまう。相手の散開を抑える為に、優は更に後退命令を出した。散発的な攻撃を繰り返しながら、後ろにゆっくりと下がっていく。

「距離七〇！」

亡霊群から一斉に紫弾が放たれる。中隊の動きが鈍り、その間に亡霊群が更に隊形を広げていく。四方を囲まれるのは時間の問題だった。焦りが生まれる。散開する事で急速に密度を失っていく亡霊群を見て、優は大きく息を吸って右手に突撃槍を作り出した。

「鋒矢運動！ 突撃用意！」

全中隊が密集し、縦長の隊形を作り出す。何度も訓練していた為か、後退中でもすぐに隊形を作り変える事ができた。しかし、その間に上下左右に大きく広がった二百近い亡霊の大群が四方から迫ってくる。

「突撃！」

優は突撃槍を構えて叫んだ。機械翼が大きく羽ばたき、前方から迫る亡霊に向かって突進する。密度を失った亡霊群を破ろうと、中隊は一団となって亡霊群の懐に飛び込んだ。

鋒矢の先頭に位置する優は突撃槍を構えて、前方を塞ぐ亡霊に突き刺した。優に続く第一小隊の面々は側面を取り囲む亡霊群に散発的な攻撃を行いながら、鋒矢の後部が囲まれないようにフォローストしていく。

亡霊群のど真ん中に突き刺さる中隊を止めようと、四方に散開していた亡霊群が再び中央に密集を始める。先頭に位置していた優はすぐに亡霊群を突破し終えたが、後部が挟まれそうになっている事

に気づくや否や、すぐに反転した。

「突破した人はそのまま亡霊と距離をとって！」

通信機に向かって叫ぶ。亡霊群を突破してきた少女たちが次々と前方から飛んでくる。それらの先、鋒矢の後部を取り巻く亡霊群に向かつて優は小銃を構えた。

「援護します！ 衝撃に備えてください！」

小銃に高密度のESPエネルギーを込め、引き金を引く。大きな反動と共に、翡翠の光条が密集し始めていた亡霊群に向かつて伸びていった。亡霊群が鋒矢後部への攻撃を諦めて、回避行動をとる。その隙に鋒矢の後部に位置していた第六小隊の少女たちが亡霊群の壁を次々と突破した。

「敵、十七体ロスト！」

解析オペレーターへの報告が通信機から届く。優は旋回して、乱れた隊形を直す為にくっつかの合図を送った。同様に亡霊群も攻撃を控え、隊形を整えていく。一〇〇メートルほどの距離をおいて、亡霊群と特殊戦術中隊は睨みあうようにその場に滞空した。

「……あの大きいのは、思ったより強くありませんね」

通信機から第三小隊長、佐藤詩織の声。アメーバ状の巨大な亡霊は亡霊群の中央でうねうねと蠢き続けている。

「何て言うか、本当に大きいだけって感じだね」

第四小隊の黒木舞もそれに賛同する。優は何も言わず、亡霊群を注意深く眺めた。鋒矢での突破を警戒しているのか、密集隊形をとっている。亡霊群の方が数が少なくなった為、迂闊に動けないのだろう。

暫くそのまま睨み合いが続いた後、先に動いたのは亡霊群だった。亡霊群の中央に位置していたアメーバ状の亡霊がゆっくりと前方に進んできたのだ。不気味な紫色の光を放ちながらゆっくりと蠢く姿は生理的嫌悪感を誘発するもので、奇妙な威圧感を受けた。

「神条司令、どうしますか」

指示を仰ぐ。

「……構え」

一九二名の小銃が一斉にアミーバ状の亡霊に向かって突き出される。しかし、アミーバ状の亡霊は動じる様子もなく遂に亡霊の群れから抜けだして、その巨体を誇示するように静止した。

「撃て！」

奈々の命令から一拍おいて、ESPエネルギーの嵐がアミーバ状の亡霊に向かって襲いかかる。亡霊は回避行動をとる様子を見せず、ESPエネルギーの塊がそのまま直撃した。閃光が走り、悲鳴染みた甲高い音がつんざく。その悲鳴のあまりのおぞましさに全身に寒気が走った。

陽炎の中からアミーバ状の亡霊がぬうつと姿を現す。優は反射的に小銃を構えた。

「……構え！」

奈々が命じた瞬間、アミーバ状の亡霊が動いた。先程までの緩慢な動きが嘘のように、信じられない速度で距離を詰めてくる。

「撃て！」

今日だけで何度も聞きなれた轟音とともにESPエネルギーの奔流が亡霊に向かって流れ込む。それが命中する直前、亡霊が”爆ぜた”。

「ッ！」

声にならない悲鳴があがる。口を開くように、亡霊の身体が大きく開いたのだ。元々十メートルほどだった体が三十メートルを超えるほどまでの巨体に膨らみ、中隊を呑みこもうとするように高速で迫ってくる。既に敵の射程に入っている事を優は悟った。

「全速反転！！」

撤退命令を出し、優は小銃を投げ捨てた。両手を亡霊に向かってかざし、ESPエネルギーを練り上げる。

「桜井、何してる！」

通信機から誰かの声。優はそれを無視して、ESPエネルギーの塊を亡霊に向かって放った。反動で姿勢が崩れ、上半身が後ろに九

十度傾く。直後、迫りくる亡霊の開いた口に翡翠の光条が吸い込まれていき、中央に風穴を開けるのが視界の隅に映った。

『早く下がれっ！』

亡霊との距離が十メートルを切る。優は中隊を庇うように亡霊の前に立ち、突撃槍を作り出してそれを両手で構えた。亡霊の姿は更に膨張し、横幅、高さともに五十メートル近いものとなっていた。視界が発光体で埋め尽くされる。前方に見える風穴が高速で修復されていくのが見えた。チラリと後ろを振り返ると、識別ライトの明かりが遠くに見えた。全員が無事に撤退できたのを確認して、再び亡霊に向き直る。眼前に迫る亡霊に向かって優は突撃槍を突き出した。亡霊が甲高い叫び声をあげる。空気が震え、耳鳴りがした。突撃槍が柔らかな抵抗とともに亡霊に突き刺さる。しかし、そこまでだった。亡霊の身体が不自然に蠢き、突き刺さった突撃槍が亡霊の身体の中に呑みこまれていく。

「ッ！」

身の危険を感じ、優はすぐに突撃槍から手を離れた。次いで、距離をとろうと反転する。しかし、上下左右に大きく広がった亡霊が優を呑みこもうとするように迫ってきていた。逃げられない。手を横に大きく広げ、指向性のないESPエネルギーを放つ。直後、四方から迫っていた亡霊の身体が吹き飛んだ。その隙に亡霊から逃れようと優は機械翼の出力を高めた。急加速に耐えきれず、頭がクラクラする。呑み込もうと巨体を大きく広げていた亡霊の中から弾丸のように夜空へ飛び出す。しかし、飛び出す直前、右足に何か絡まった。それが亡霊の身体の一部だと気づいた時には既に遅く、右手にも亡霊の身体が巻きついた。亡霊の身体はぞっとするほど冷たく、重たかった。反射的に亡霊を振り払おうと右手を大きく振る。しかし、絡みついた亡霊は離れない。そうやってもがいている内に、右腕に絡みついた亡霊の身体が腕を伝って優の顔に伸びてくる。あまりのおぞまさに、全身に鳥肌がたった。

『桜井中隊長！』

『桜井くん!』

通信機から凜と華の声。視界の端でいくつかの識別ライトが近づいてくるのが見えた。

『待ちなさい! 亡霊群が』

奈々の制止の声。次いで、悲鳴が轟く。全身を亡霊に絡み取られた優は、何が起こっているのか判断がつかなかった。何度も指向性を持たないESPエネルギーを放って亡霊の身体を吹き飛ばそうと試みるも、巨大な亡霊はその度に身体を自由に変形させて優を取り込もうとするように包み込んでくる。

視界が亡霊の放つ紫色の光で満たされ、両腕が拘束される。凍てつくような寒さが全身を包み込み、急速に体力を奪われていくのが分かった。

『第三 後退 すぐに』

通信にノイズが混じり始める。全身を包み込む亡霊の身体が、波打つように蠢き始めた。息ができない。眩暈がする。

朦朧とする意識の中、身体に何かが入り込んでくるのを感じた。恐ろしく冷たい、液体状の何か。それが亡霊である事に気付き、戦慄する。身体の中に染み込んでくる何かは徐々に頭に向かってきているように思えた。必死でもがくも、全身を亡霊に抑えられている為に上手く身動きがとれない。

冷たい何かが遂に頭に到達する。そして、それは優の更なる深層へと浸透していった。深い穴に落ちていくような不思議な感覚とともに桜井優の意識は失われ、名も知らない世界へ急速に浮上していった。

4章 37話 桜井優

桜井優の原初の記憶とも呼ぶべきものは暴力で彩られていた。

六畳半の部屋に男の怒声が轟き、その後には女の悲鳴と何かが壁に叩きつけられる音が部屋に響く。それは桜井優という人格が形作られてからずっと繰り返されてきた日常で、優はいつも部屋の隅でじっと座り、嵐が過ぎ去るのを待った。暴力の嵐が過ぎ去ると、多くの場合は部屋に泣き声が響いた。女のものではない。男が女に許しを乞うように縋りつき、泣き叫ぶのだ。そして傷だらけの女は聖母のように微笑み、男の懺悔を聞き入れる。それが常だった。しかし、常ではあったが、毎日それが行われていたかは定かではない。桜井優という存在は連続的なものではなく、フラフラと時空の狭間を彷徨うように漂っていた為、それがどれだけの頻度で行われていたのか確認のしようがなかったのだ。桜井優の意識は離散的にしか存在せず、それが自らの精神を守る為の防衛機制の一環である事を知らなかった為、優は世界が離散的にしか存在しえないものだと思いつ込んでいた。

その日、優の意識は闇の中から急速に浮上し、いつものように暴力で彩られた世界の中に放り込まれた。優は薄暗い六畳半の和室の隅で丸まるようにして横になっている自らの身体を確認し、ゆっくりと起き上がった。そこに低い男の声が響く。

「静かにしろって、いつも言ってるんだろっが！」

次の瞬間、わき腹に強い衝撃が走った。その場に崩れ落ち、打たれた腹部を両手で押さえる。

「人が気持ちよく飲んでる時くらい、じっとしてる！」

男の怒声が轟く。優は肩で息をしながら、男を見上げた。まだ若く、体格の良い男がこちらを見下しているのが視界に映る。

「何だ、その眼は」

男が腰を落とし、優と同じ目線に立つ。髪を掴まれ、優の顔が苦

痛に歪んだ。

「なあ、俺言ったよな」

男が顔を寄せて言う。口から強い刺激臭がした。

「うるさいと近所迷惑になるってよ！」

再び腹部に殴打が入る。優は苦悶に顔を歪めるも、悲鳴をあげようとはしなかった。感情を押し殺し、嵐が過ぎ去るのをじっと待つ。それが暴力から逃れる唯一の手段である事を経験的に理解していた。「おい、無視すんなよ。何か言ったらどうなんだよ！」

壁に投げつけられ、ぐったりとその場に倒れる。その時、玄関のドアが開く音がした。男が小さく舌打ちして、部屋から出ていく。玄関の方から男と女の言い争う声。すぐに争う声が止み、扉から誰かが出ていく音が響いた。その後、男と入れ替わるようにして買い物袋を持った一人の女が部屋に入ってきた。女は地に伏せた優を見るなり、黙って傍に歩み寄り、その幼い身体を抱き上げた。

「ごめんね」

女が耳元で囁く。そこで優の意識は途切れた。

桜井優の世界は連続的ではない。DVDのチャプターを進めるように、世界は離散的な振る舞いをする。

次に優が目覚まして初めに聞いた音は食器の割れる音だった。そしてダイニングから男の怒声。

いつもの六畳半の和室で壁に背を預けるようにして座っていた優はゆっくりと立ち上がり、ふらふらとダイニングに向かった。冷蔵庫の前に倒れている女の姿が真っ先に目に入る。次に女の前に立つ男の後ろ姿に注意を引かれ、最後に周辺に散らばるガラスの破片に視線が映った。

男が何かを叫ぶ。反射的に優の身体が小さく震えた。男がテーブルの上にあった平たい皿を手に取り、それを女に投げつける。鋭い

ガラス音ともに、破片が飛び散った。女の悲鳴。それに苛立ったように男が更に怒声をあげる。女は顔を押しさえ、何かを叫んだ。そこで優は手で覆われた女の顔に血が流れていることに気付いた。床に雫が落ち、血だまりを作っていく。それがとても綺麗な赤色をしていて、優は血だまりから目が離せなかった。

再び男の怒声。男は女を怒鳴りつけ続けている。その後ろ姿を見て、優は無意識にダイニングの中に入った。そして、床に落ちているガラス片の中で一番大きいものを拾い上げる。優は冷たいダイニングの床をゆつくりと進み、男の背後に回った。男が女を怒鳴りつける。女が悲鳴をあげる。優は叫び声をあげた。そこで、優の意識は失われた。

世界は離散的だ。コロコロと場面が変わる。優が気付いた時、目の前で男がうつ伏せで倒れていた。その後頭部には大きなガラス片が刺さり、そこから血が溢れ出している。優は暫くその様子を眺めた後、冷蔵庫の前で力なく座り込む女に視線を移した。女は呆然とした様子で男の死体を眺め、次に優に視線を移した。二人の目が合う。女は小さく何かを口にした。

女がゆつくりと立ち上がる。そして、うつ伏せで倒れる男の元にしゃがみ込み、後頭部から生えるガラス片を握りしめた。女の手から鮮血が流れる。女はそれを気にした風もなく引き抜き、首元に向かって振りおろした。何の音もなく静かにガラス片が突き刺さる。女は優の方を向いて笑った。しかし、その瞳からは一筋の赤い涙流れていた。女の右眼は、その機能を既に失っていた。優の意識はそこで奪われた。

再び世界が始まる。今日は特に離散的な一日だった。

身体が温かい。いつの間にか、優は和室で女に抱きしめられていた。窓からは血のように赤い夕陽が差しこみ、部屋を赤く染め上げていた。女は優を抱きしめながら何度も、大丈夫だから、と呟く。優は何も言わず女の胸に顔を埋めた。

遠くからサイレンの音。徐々に近づいてくる。

「ママ、少しお出かけしてくるね」

女はそう言っただけで抱擁を解いた。温もりが失われる。優は温もりを取り戻そうとするかのように女に向かって手を伸ばした。女はそれをやりわりと拒絶し、微笑する。

「ちゃんと良い子にしててね」

優は何も言わず、大きく頷いた。

「すぐ帰るから」

女はそう言っただけで優に背を向けた。優は思わず口を開いた。

「本当に？」

女が驚いたように振り返る。そして、にっこりと笑みを浮かべた。

「そう、約束。じゃあ 行くね」

サイレンの音が木霊する。女の後ろ姿がダイニングの影に隠れ、見えなくなる。優は泣き叫んだ。女は戻ってこない。

世界が闇に包まれる。世界が反転したような奇妙な感覚に襲われ、優の意識は更なる深淵を目指して墮ちていった。

4章 38話 柊沙織

「沙織」

落ちついた女性の声で、柊沙織はゆっくりと深い眠りから目を覚ました。とても長い夢を見ていた気がする。しかし、どんな夢だったのか思い出せない。ただ、怖い夢ではなかったと思う。長く、複雑な夢。今となっては何も思い出せない。大事な何かが抜け落ちたような喪失感だけが胸に強く残っていた。

沙織は両手で目を擦り、目の前に立つ人物を見上げた。腰まで届く黒い髪が印象的な長身の女性。亡霊対策室司令官、神奈奈々（しんじょう なな）だった。

「こんな所で寝ていると風邪をひく」

奈々が抑揚のない声で言う。沙織は背を預けていた樹から上半身を起こし、周囲を見渡した。テニスコートの近くにあるちよつとした原っぱ。沙織が気にいっている昼寝スポット。いつの間にか眠ってしまっていたようだ。

「風邪ひけば亡霊との闘いもサボれるかなって思ってた」

沙織は冗談っぽくそう言った。奈々は笑わない。代わりに、怒ることもなく。表情を押し殺したように無表情な顔でただ事実を述べていく。

「亡霊はサボる事を知らない。貴女はサボった事を必ず後悔することになる。貴女はそういう人間だ。下らない反抗心など早く捨てるが良い」

沙織は深く溜め息を吐いた。そこで、自身の膝に見知らぬコートがかかっている事に気づく。反射的に奈々を見上げると、彼女は相変わらず感情を殺したような抑揚のない声で言い放った。

「私のコートよ。必要がなくなったのなら返してもらおう」

そう言って、奈々は沙織の膝にかかったコートを拾い上げ、その場で羽織った。

「早く寮棟に戻りなさい。今日は夕方から冷えると聞く」
奈々はそれだけ言い残して、沙織に背を向けた。沙織はその後ろ姿を見送った後、ゆっくりと立ちあがった。大きく背伸びし、ゆっくりと寮棟に向かう。沙織の琥珀色の髪を秋風が優しく撫でた。

「沙織はさ」

寮棟の廊下。夕食を食べ終えて寮棟に戻る途中、隣を歩く同じ第一小隊に所属している奥村音々（おくむら ねね）が口を開いた。
「神条司令をどう思う？」

「どうって？」

沙織は小さく首を傾げた。僅かに苛立ったように音々が髪をかきあげる。黒いショートカットに金色の目立つメツシユが入っている為、そうした仕草からは微かに威圧的な印象を受ける。

「何て言えばいいかな、テレビで凄い騒がれてたたる？ 女性初の最年少の中佐だって。そうやって色々騒がれてるけどさ、私はいまいち信頼できない。能力と立場は必ずしも比例しないと思うんだ。お前はどう思う？」

「私、テレビ全然見ないもん」

沙織はそう言って小さく欠伸した。夕食を食べた後はいつも眠たくなる。

「でも、悪い人じゃないんじゃないかな」

「良い人とか悪い人とかじゃないんだよ。能力があるかないか、だ。無能な奴の命令なんて聞いてたら死んじまう」

思わず苦笑する。音々らしい考え方だった。

「んー、今までの戦果見る限り大丈夫じゃないかな。心配しても仕方ないよ。私、眠いから戻るね」

沙織はそう言って手をひらひらと振った。音々は、ああ、と短く返事して、考え込むような素振りを見せながら沙織の部屋とは別の

通路を進んでいった。沙織も自室が位置する通路を進む。自室につくなり、沙織はベッドに倒れ込んだ。昼間見た夢をもう一度見れたら良いな、と意識が落ちる前にぼんやりと思った。

朝がやってくる。いつもと変わらない平凡な朝。夢は見なかった。カーテンの間から差しこむ朝日が眩しくて、沙織はもぞもぞとベッドから這い出した。

「うー、眠い眠い」

呟いて、冷蔵庫に向かう。一人暮らしを始めると独り言が多くなって困る。冷蔵庫からお茶の入ったペットボトルを取り出しながら沙織は今日の予定に考えを巡らせていた。確か今日は訓練も何も無い、自由な日だ。

キッチンから取り出したコップにお茶を注ぐ。お茶を飲みながら、朝の散歩でもしよう、と沙織は珍しく健康的な事を考えた。最近、二の腕の贅肉が気になり始めていたのだ。

沙織は部屋に戻ってクローゼットから適当に数着の衣服を取り出した。そして、その中から適当に一枚を選ぶ。素早く着替えた後、沙織はすぐに部屋を出た。沙織は化粧をする習慣をまだ身につけていなかった為、ちょっとした外出に関して煩わさを感じる事もなく、こうしてフラフラと外を歩くのが彼女の日課となっている。

寮棟を出て、沙織は中枢エリアの中をゆっくりと散歩した。朝の冷んやりとした空気が気持ち良い。迷路のような中枢エリアをそのまま当てもなく歩き回っていると、曲がり角になっている先から唸るような男の声と、落ちついた女の話し声が聞こえた。

「君は牛を二頭持っている。しかし、彼らは」

男の声が途中で途切れる。その後、女の声が続いた。

「彼らは牛です」

どこかで聞いた声だった。すぐに神条奈々の声である事に気づく。

一体何の話をしているのだろう。気になって、沙織はそつと曲がり角の近くに歩み寄った。

「そうだ。牛を持っていてるだけでは経済闘争には勝てん。それを分かっていない輩が多すぎる」

「そもそも、牛を持っているという事実さえ把握していない人々が多くいます。彼らはこう考えているのです。彼らは牛で、私達はドラゴンを二頭持っている、と」

「反対にこう考えている者もいる。我々は狂牛病に感染した牛を二頭持っている、と」

「ノイズが発生しています。巨大なノイズです。これをキャンセルする事は難しい。長い時間と資本が必要です」

「同感だ。S I Aの広報戦略は失敗した。E S P能力者への間違った理解が次々と広まっておる。同一説など馬鹿馬鹿しいデマが最悪の事態に繋がる事もあり得るのだ」

そこで奈々と男の声が途切れた。短い空白。男が溜め息を吐く。「噂には聞いていたが、君は頭が切れる。ノイズ、か。言い得て妙だ。私はこれを秩序化イデオロギーの一種だと考えとる。ノイズ。なるほど。どちらとも言えるな」

「何とでも解釈できることです。敷居値は必要ありません」

「ほう、なるほど。いや、面白い。まだ若いのにすっかりしとる。

君は亡霊対策室の状態を、つまり参謀部の存在をどう考える？」

「……上田少将、お言葉ですが、それは貴方が軽々しく口にして良い問題ではないのではないのでしょうか」

再び沈黙。

「……そうだな。今度、ゆっくり話をしたい」

上田少将と呼ばれた男はそう言って話を切り上げた。足音がこちらに近づいてくる。沙織は慌ててゆっくりと元来た道を引き返した。通路の横にあった女子トイレに飛びこみ、身を隠す。沙織は汚れ一つない壁に背を預け、ふう、と深く息をついた。あまり聞いてはいけない話を聞いた気がする。

反対にこう考えている者もいる。我々は狂牛病に感染した牛を二頭持っている、と。

上田少将の言葉が頭をよぎり、沙織は自らの身体を抱きしめた。何とも言えない不安に押し潰されそうになり、息が苦しくなる。沙織は個室の中に入り、そこで胃の中のを吐きだした。まるで、そうすれば自身のESP能力も吐きだされるとでも思っているように、沙織は長い間その無意味な行動を繰り返した。

時は二〇一二年九月二十四日。亡霊対策室が正式に稼働してから四ヶ月後の事である。

4章 39話 柘沙織(2)

蛇口から流れる冷水で顔を洗う。凍てつくような冷たさを受けて、昂っていた気分が落ちつき始める。沙織は三回深呼吸して、何かを振り払うように勢いよくトイレから出た。

廊下に人影はない。夜勤の監視オペレータや一部の保安部の人以上はまだ眠っているのだろう。沙織は静かな通路を抜けて、エントランスから本部の外に出た。

風が冷たい。厚着してくれば良かった、と後悔する。今更着替えに戻るのも面倒で、沙織はそのままテニスコートのある方へと歩いていった。コートからはボールを打つ小気味良い音が定期的に響き、中に二人以上の経験者が入っている事が分かる。四方を囲むフェンスで良く見えないが、沙織には中で動きまわっている人物がすぐ推測できた。

「音ター？」

フェンスに駆け寄り、中で走り回っている人影に声をかける。フェンス越しに音々と目が合った。ボールがネットに引っ掛かり、気の抜ける音ともにコートへ落ちる。

「沙織か。珍しく朝早いな」

コートを転がるボールを無視して音々が沙織の方に歩み寄ってくる。音々とラリーをしていた第二小隊長の本田真紀ほんだまきも沙織の存在に気付き、沙織の方に駆けてきた。

「わっ。沙織ちゃんだ。こんな朝早くからどうしたの？ もしかして不眠症？ どこか体調悪いの？ 大丈夫？」

一体私は周りからどのように見られているのだろう、と一抹の不安を抱きながら沙織は、ただの散歩だよ、と答えた。

「沙織もやっついていくか？」

音々が右手に持ったテニスラケットを目の高さまで上げてみせる。沙織は首を横に振った。

「ん、気晴らしに出ただけだから。このまま裏手の方まで散歩してくるつもり」

「そうか。真紀、もう一回やるぞ」

興味を失ったように音々は沙織に背を向けてコートに戻っていた。

「さっきのネット、なし？」

「有りだ」

「えー！」

音々と真紀のやり取りを聞きながら沙織はフェンスから離れた。そして、亡霊対策室の裏手へと向かう。本部の裏手に小さな直方体の倉庫らしき建築物が複数並び、ちよつとした迷路のようになっている。沙織は倉庫の間を当てもなく進んだ。各倉庫には区別をつけるためのアルファベットと数字が割り振られている。E-02と表記された倉庫の前まで来た時、目の前を翡翠色の何かが横切った。アゲハチヨウだった。この時期には珍しい。ひらひらと頼りなく目の前を飛び回るアゲハチヨウを見て、沙織は昔の事を思い出した。遠い母との記憶。沙織は記憶を手繰り寄せるように、アゲハチヨウに手を伸ばした。アゲハチヨウが沙織の手から逃げるように入り組んだ倉庫群の奥へと飛んでいく。沙織はその後を追った。

脳裏に次々と過去の記憶が蘇る。昔、母と二人で山へ出かけた事があった。暑い夏の日。容赦なく照りつける太陽の下、沙織は母と一緒に遊べる事が嬉しくて随分とはしゃいだ。そんな沙織に釣られたのか、普段は大人しい母もよく笑っていた。綺麗な笑顔だった。今はもう、失われてしまったけれど。

Uと表記された倉庫群まで来た時、アゲハチヨウが不意に空高く舞い上がった。そのまま倉庫の影に隠れて見えなくなってしまう。沙織は溜め息をついて、周りを見渡した。区別のつかない同じような倉庫が四方に並んでいる。その内の一つ、U-05と表記された倉庫の扉が僅かに開いている事に気付いた。沙織は何かに吸い寄せられるようにU-05へと近づいた。

僅かに開いている扉に手をかけ、ゆっくりと手前に引く。錆びた音を立てて、軽い抵抗とともに扉は呆気なく開いた。真っ暗な倉庫に光が差し込む。

沙織は息を呑んだ。倉庫の中を照らした一条の光の中に、一人の子どもの姿があったのだ。倉庫内に敷き詰められた布の上で、丸まるようにして眠っている。女の子のようにも見えるし、男の子のようにも見えた。とても綺麗な顔をしている。

天使。

一瞬、そんな馬鹿げた考えが頭に浮かんだ。沙織は子どもから目を離す事ができず、そつと子どもの傍にしゃがみこんだ。近くで見ると、それほど歳が離れていない事にすぐ気づいた。ただ、丸まってすやすやと眠る様子がとても無防備で、年齢を上手く推察することが出来ない。

沙織の気配を感じたのか、子どもが小さく呻き声をあげる。沙織は慌てて飛び退いた。

「ごめん、起しちゃった？」

子どもが眠そうに目を擦りながら上半身を起こす。どこか焦点の合わない瞳が沙織に向けられた。

「君、こんなところで何してたの？」

「……ねむっていました」

亡霊対策室には既婚の女性も多くいる。誰かが子どもを本部に連れてきて、目を離れた隙にこんな所に入り込んだのだろうか。沙織は首を傾げながら、言葉を重ねた。

「君のお名前は？」

「ユー」

「ユウ？」

沙織が聞き返すと子どもは小さく頷いた。

「サクライ、ユウ」

『桜井中隊長!』

通信機から第六小隊長、白崎凜の叫び声が届く。篠原華は目の前に広がる光景を見て呆然としていた。

空を覆い尽くそうとするように広がるゲル状の亡霊。そして、それに呑みこまれていく桜井優。華は無意識のうちに機械翼の出力を高めた。

「桜井くん!」

一つの識別ライトが亡霊目指して突っ込んでいく。華もそれに続くように小銃を構えて巨大な亡霊へと立ち向かった。

『待ちなさい! 亡霊群が』

奈々の制止。ゲル状の亡霊の背後に控えていた発光群が一斉にこちらへ向かってくるのが見えた。

「第一分隊、着剣用意!」

叫ぶ。部下の準備を確認する間もなく、華は前方へ大きく飛び出した。

『華! 待ちなさい。隊列が』

『第六小隊、進め!』

奈々の制止の声に被るように、通信機から凜の命令が響いた。チラリと後ろを振り返ると、識別ライトの明かりがバラバラに前方に向かつてくるのが見えた。足並みが揃っていない。

『第五と第三、第一と第六を援護。第四レフトアップ。第二、ライトアップ』

奈々がすぐに新たな命令を出す。止める事ができないと判断したのだろう。華は着剣した小銃を構え、前方に見える巨大なアメーバと、その周囲から接近してくる亡霊群を睨みつけた。

「撃て!」

叫ぶ。夜空を光の流星群が駆け、亡霊群へと降り注いでいった。亡霊はそれをもろともせず、急速に距離を詰めてくる。華は銃剣を構え、亡霊群の懐へと飛び込んでいった。発光体としてしか認識で

きなかつた亡霊の姿がはつきりと認められる距離まで近づくと。前方から飛び込んできた亡霊に向かって銃剣を振り下ろす。呆気なく一体を片づけ、華は次の目標に向かって飛翔した。

『おい、突っ込みすぎだ！』

沙耶の声。同時に、第二、第三分隊から援護射撃が届く。華の周りを通り過ぎて、光の雨が次々と亡霊群に向かって降り注いだ。閃光と轟音が空気を支配する。亡霊群の動きが瞬く間に鈍り、華はその隙を狙って二体目の亡霊へ銃剣を突き刺した。亡霊があつという間に霧散する。すぐに銃剣を引き抜き、華は夜空に煌めく閃光の中に身を投じた。

第六小隊長、白崎凜は三十二名の部下を引き連れて亡霊群左翼の正面に部隊を展開していた。

「引きつける！」

通信機に向かって叫ぶ。凜は小銃を肩にかけ、両手を前方に広げた。第一小隊が敵右翼に突撃していくのが視界の端に映る。凜は大きく息を吸った。

「まだだ。もう少し」

前方から亡霊群が迫ってくる。五十はくだらない。先頭の亡霊との距離が三十メートルを切ったところでようやく凜は射撃命令を出した。

「撃て！」

命令とともに自身もESPエネルギーを両手に集め、前方に放つ。光の波が一齐に亡霊群に襲いかかり、衝撃を受けて何体かの亡霊が下方へ落ちていくが、大多数の亡霊は衝撃を堪えて第六小隊への距離を詰めてくる。

「行くぞ！」

叫び、凜は亡霊群の中へ飛び込んだ。前に出た凜を仕留めようと

亡霊が群がってくる。凜は右手をかざし、高出力のESPエネルギーを放った。轟音とともに五体の亡霊が吹き飛ぶ。

「第二分隊！ 援護しろ！」

戦闘音に掻き消されないように大きく叫んだ時、前方から一体の亡霊が接近してくるのが見えた。撃ち落とそうとして、すぐに異変に気づく。亡霊の翼が三対もあつたのだ。そして、身体が他の倍ほどもある。

「普通じゃない奴が混じってるぞ！ 気をつけろ！」

三対の翼を持った亡霊が凜を指して飛翔してくる。凜は両手をかざした。

「あいつは私がやる！」

ESPエネルギーを放つ。同時に亡霊が咆哮をあげた。

「優君はどうなっている？」

神奈奈々は解析オペレーターに向かって叫んだ。

「わかりません。呑み込まれた途端に反応が消えました。あの中で呼吸が出来るとは思えません。すぐに救出しないと」

『普通じゃない奴が混じってるぞ！ 気をつけろ！』

解析オペレーターの言葉を遮るようにして通信機から白崎凜の声が響く。奈々はメインディスプレイに目を向けた。機動ヘリから送られてくる中継映像には華に格闘戦を仕掛ける亡霊の姿があつた。

亡霊の背中から生える三対の翼と、その巨体から繰り広げられる暴力的な脅力を見て血の気が引いていく。華は何度も亡霊に向かってESPエネルギーを放っているが、亡霊がそれで損耗している様子が見られない。

「あれは何なの？」

「わかりません。見たこともないタイプです。同じようなタイプが六体あり、各小隊長に襲いかかっているようです」

奈々はコンソールを叩き、ディスプレイを他の機動ヘリのものに切り替えた。第六小隊の戦闘映像が映る。そこには、三対の翼をもつ亡霊と相對する凜の姿があった。同様に映像を切り変えていくと、全ての小隊長に対して三対の翼を持った亡霊が襲いかかっている事が判明した。

「……足止めのつもりかしら」

「各小隊の頭が抑えられて、統率が乱れ始めています。どうしますか？」

長井加奈がディスプレイを眺めながら指示を求めてくる。奈々は僅かに考え込んだ後、司令席に腰を下ろした。

「私が直々に各小隊の指揮とる。加奈、バックアップを」

「はい」

奈々はコンソールを操作し、俯瞰マップを拡大させた。挟撃の為に左右へ分かれた第二、第四小隊が遊んでいる。このまま亡霊群を挟撃しても良いが、亡霊群の後ろで蠢いているゲル状の巨大な亡霊の事が気にかかった。グズグズしていると中に取り込まれた優が危ない。

「これより、亡霊群の背後に構えるゲル状の亡霊をアメーバと呼称する。また、三対の翼を持った特異な亡霊をセラフィムと呼称する」

熾天使の名を与えられた三対の翼を持つ亡霊は、彼らの神とも言えるアメーバを守るように各小隊長を牽制し続けている。簡単には突破できそうにはない。中々厄介な存在だった。

「第二、第四の分隊長以下に通達。挟撃を中止し、アメーバへの攻撃に転換せよ」

奈々は逆に小隊長によってセラフィムを足止めして、分隊長以下を救出に向かわせる事を選択した。俯瞰マップ上で左右に突出した第二、第四小隊が敵後方へ流れていく。それに釣られて、第一、第六を相手していた亡霊群の後部が戦線から離脱を始めた。単に挟撃を恐れたのか、アメーバを庇う為に動いたのかは分からないが、予

想の範囲の動きだ。慌てる事はない。奈々は小さく息を吐きだした。

4章 40話 柘沙織(3)

「サクライ、ユウ……」

柘沙織は、子どもの名前を反芻した。ユウ。容姿だけでなく名前からも性別の判断がつかない。流石に尋ねる訳にもいかず、沙織は思っていた事とは別の言葉を口にした。

「君のお母さん、お父さんはどこ？」

「いません」

返ってきた答えに沙織は首を傾げた。敷地内に勝手に入ってきたということだろうか。

「どうやってここまで来たの？」

尋ねると、今度は逆にユウが首を傾げた。はらりとユウの琥珀色の髪が揺れる。

「わかりません」

「わからない？」

思わず聞き返してしまう。迷子ということだろうか。

「一体どこからここに」

沙織が質問を重ねようとした時、不意にポケットに入っていた端末からけたたましいアラームが鳴った。急いでポケットから端末を取り出す。全小隊に出撃命令が出ていた。沙織は唇を噛み、ユウに視線を戻した。

「ごめん、私用事ができたから行くね。迷子ならこの倉庫を出てまっすぐに左側へ行つて。本部のエントランスがあるから誰かが見つけてくれるはず」

沙織はそう言葉を残して、半開きになった倉庫の扉に手をかけた。後ろから温和な声がかけられる。

「きをつけてね」

沙織は驚いて後ろを振り返った。ユウの透き通った瞳と目が合う。全てを見透かされているような奇妙な錯覚に陥り、沙織はすぐに視

線を外した。

この子は、私がESP能力者である事に気づいているのかな。沙織はユウに背中を向け、倉庫から駆けだした。

島根県沿岸に一つの港町があった。一帯に避難命令が出され、既に住民の姿はない。県内の出雲駐屯地から治安維持の名目で陸上自衛軍が展開し、報道関係者や野次馬が立ち入れないように封鎖している。その港町にいくつもの機動ヘリが次々と降り立った。中から続々とESP能力者が飛び出し、予め与えられていた指示に従って着々と装備の点検を始める。一対の巨大な機械翼を背から広げた柊沙織は参謀部からの命令を待ちながら、前方に広がる蒼い海を眺めた。まだ敵の姿は見えない。潮の独特な香りが鼻をつく。

「沙織ちゃん」

名前を呼ばれて、沙織はゆっくりと後ろを振り返った。第二小隊長の本田真紀が心配しそうな顔をして立っていた。

「大丈夫？　ちゃんとお昼寝してきた？　緊張してない？」

「本当に緊張してるのは真紀でしょ？」

沙織が指摘すると、真紀は恥ずかしそうに頭を掻いた。

「バレちゃった。沙織ちゃんはいつも冷静だもんね」

沙織は何も言わず、空を見上げた。

「……来るよ」

「え？」

真紀が首を傾げる。それに重なるように通信機から低い男の音が響いた。

『目標が降下の準備を始めている。第一、横隊。第二、左右を固める』

沙織は大きく息を吸った。大空の果てから太陽の光に隠れて発光群が接近してくるのが辛うじて確認できる。沙織は小銃を構え、通信機に向かって叫んだ。

「構え！」

第一小隊長、篠原華は閃光の奥に巨大な三対の翼が広がるのを見た。セラフイム。咄嗟に位置エネルギーをロスして下方に加速する。セラフイムも同様に下降し、正面から接近してくるのが見えた。銃剣を構え、そのまま速度を落とすことなく突進する。間合いに入る瞬間、華は銃剣を前方に突き出した。セラフイムの翼が本体を守るように前方に広がり、華の攻撃を防ぐ。次いで、華の銃剣を受け止めた翼が大きく左右に広がった。圧倒的な脅力を受けて、華の華奢な身体が大空を舞う。急いで姿勢制御に移ろうとするも、それを阻止するようにセラフイムが接近してくる。華は態勢を崩したまま小銃をセラフイムに向けて引き金を引いた。三発の光弾がセラフイムに直撃する。爆音とともにセラフイムの身体が閃光に包まれる。しかし、止まらない。閃光を抜けてセラフイムが迫る。華は銃撃の反動で更に態勢を崩し、弧を描いて落下を始めていた。そこにセラフイムの巨大な腕が振り下ろされる。左肩に激痛が走り、視界が反転する。華は小さく悲鳴をあげた。セラフイムが更なる追撃を狙って再び距離を詰めてくる。

『衝撃に注意』

通信機から愛の声。直後、目の前まで迫っていたセラフイムに光の雨が降り注いだ。セラフイムの動きが鈍る。そこに一つの識別ライトの光が横から衝突した。セラフイムの態勢が僅かに傾く。しかし、傷を負ったようには見えなかった。セラフイムが腕を振り払い、識別ライトの明かりが吹き飛ばされる。同時に通信機から届いた苦悶の声で、識別ライトの主が京子である事に気づいた。

『篠原！ そいつばっか相手してる暇ねーぞ！ 上から来てる！』

沙耶の叫び声。華は姿勢制御を終えると同時に小銃を上空に向けた。十を超える影。それを抑えようとするかのように、横から識別ライトの明かりが複数近づいてくるのが見えた。

『篠原、さつさと戻って指揮を！』

第三分隊長、吉田葵よしだあおいの怒声とともに、識別ライト群が紫色の発光群と衝突する。冷静さを取り戻して隊列を整え直そうとした時、下方からセラフイムが再び華目かけて飛び込んでくるのが見えた。攻撃を受けた左肩が上がらない。近接戦闘は無理だと判断し、華は反転してセラフイムから逃げるように機械翼を展開させた。

「……川上さん、第一小隊の指揮をお願いっ！」

『何言って おい 』

「ごめんね。セラフイム、私じゃ無理かも。出来るだけ引きつけるから、そっちで桜井くんのことお願い」

左肩が燃えるような熱を持っている。痛みで頭がクラクラした。

『おい、冗談じゃないぞ。機動ヘリまで下がれ。お前腕が 』

「川上さん、お願い。誰かがセラフイムを止めないと、桜井くんのところまで誰も辿りつけないよ」

背後から、セラフイムが迫ってくる。華は右手に持った小銃を背後に向け、引き金を引いた。狙いが定まらず、光弾が散発して放たれる。命中したか確認する暇はなかった。セラフイムは止まらない。

遠くで閃光が走るのが見えた。一拍遅れて轟音が届く。恐らく、白崎凜の殲滅攻撃だろう。どうやら他の小隊長は上手く立ち回っているようだ。

夜空を飛び回りながら、背後をチラリと振り返る。依然としてセラフイムは後ろに張り付いたままだ。振りきれない。遠くに見えるアメーバにチラリと視線を向けてから、華は上方へ大きく反転し、セラフイムに向かって突撃を始めた。

第六小隊長、白崎凜は前方から飛び込んでくるセラフイムに対してESPエネルギーを放った。セラフイムが咆哮をあげる。直後、光の奔流がセラフイムの姿を呑みこんだ。咆哮が、悲鳴に変化する。

凜はどこか歪んだ笑みを浮かべた。

「第三分隊、アミーバをやれ。こいつらは第一分隊と第二分隊だけで十分だ。指揮は奥村に任せる」

『了解した』

通信機から第三分隊奥村音々の平坦な言葉が返ってくる。音々が最古参の一人である事を凛はよく知っていた為、指揮権を預ける事に不安はなかった。セラフィムは凛を警戒するように距離をとって羽ばたき続けている。凛はセラフィムの後方に展開する約五十の亡霊群を見つめ、叫んだ。

「撃て！」

第一、第二分隊、総勢二十三名からESPエネルギーが放たれる。それを合図にセラフィムを中心とした亡霊群が一斉に第六小隊に襲いかかってくる。そのうちの十体ほどが明らかに凛に狙いをつけて向かってきていた。再び両手にESPエネルギーを集め、迎撃準備を整える。そしてセラフィムが肉薄すると同時に、凛は収束した全てのエネルギーを解き放った。閃光が走り、亡霊群を一瞬で呑み込んでいく。セラフィムだけが直前に大きく高度をあげて攻撃を逃れたのが確認できた。凛は舌打ちして、セラフィム目指して飛翔した。第一・第二分隊が亡霊群と交戦している遙か上空で、螺旋軌道を描くようにセラフィムと共に高度を上げていく。牽制にいくつかの光弾をセラフィム目掛けて放つと、その内のいくつかがセラフィムに直撃し、その動きを大きく鈍らせる事に成功した。好機とばかりに機械翼の出力を瞬時的に高めて距離を詰める。十分な距離まで接近したところで、凛は右手をセラフィムに向けてかざした。ESPエネルギーが収束を開始し、翡翠の光が右手から溢れだす。危険を察知したようにセラフィムが急旋回を繰り返して凛を振り払おうとする。凛は背後に食らいについて、残忍な笑みを浮かべた。十分な量のESPエネルギーを練り終えたところで、凛は躊躇なくESPエネルギーをセラフィムに向けて放った。その瞬間、セラフィムが大きく吠えた。次いで、轟音とともにセラフィムの姿が閃光の中へ消え

る。凜が勝利を確信して下方の第一・第二分隊の様子を確認しようとした時、閃光の中から黒い影が飛び出したのが視界の隅に映った。翼が傷だらけになっていたが、致命傷らしいものは見当たらない。凜は舌打ちして、セラフイムに向かって二発の光弾を放った。一発がセラフイムの右肩に直撃して周辺部分を抉りとり、もう一発が亡霊の翼に着弾して小爆発を起こす。それでもセラフイムは怯んだ様子を見せずに速度を保って凜に突撃した。セラフイムの持つ爪が凜の腹部を大きく切り裂く。凜は苦痛に顔を歪ませながらも、すぐそばにあるセラフイムの頭部を右手で鷲掴みにし、小さく笑った。

第三小隊長、佐藤詩織は前方に広がる第一小隊と亡霊群の乱戦を眺め、慎重に前進命令を出した。ここまで第一小隊の隊列が乱れていると長距離からの援護は不可能だ。第一小隊が持ち直せるように時間を稼がなければならない。

「単純前進！ 衝突だけ注意して第一小隊を援護します！」

命令を出しながら遠くに見えるアメーバを眺める。桜井優の事が気になったが、救出は自分の役目ではない、と自らに言い聞かせる。奈々が他の小隊を上手く使って何とかする筈だった。今は第一小隊の援護が詩織にとって最優先課題となる。詩織は大きく息を吐いた。流れ弾に注意しながら前進していく。夜空に瞬く光芒群と爆音。

そこから、一体の発光体が近づいてくるのが見えた。

「……密集隊形！ あれは少しまずそうです！」

敵の姿を確認する前に小隊の密度を高め迎撃に備える。その姿を視認する前に、詩織は右手を大きく振りあげた。

「構え！」

亡霊の姿が、はつきりと認められる距離まで近づく。三対の翼を確認した途端、詩織は迷う様子を見せずに叫んだ。

「撃て！」

方陣を組んだ第三小隊の前列が一斉に引き金を引く。同時に、三対の翼を持つ亡霊、セラフイムは大きく下方へ加速した。第三小隊から放たれたESPエネルギーの波が夜空を虚しく切り裂く。詩織はすぐに次の命令を叫んだ。

「散発攻撃！ 相手と距離をとってください！」

第三小隊から放たれた無数の光弾がセラフイムに襲いかかる。セラフイムは旋回を繰り返しながら光弾の雨を掻い潜り、第三小隊の正面に位置する詩織に向かって突撃を開始した。速い。詩織は銃剣を構え、近づいてくるセラフイムに向けて大きく突き出した。

「つぁ！」

詩織の銃剣がセラフイムに直撃する瞬間、セラフイムの身体が弾けた。指向性を持たないESPエネルギーの波が空間を揺るがし、第三小隊の隊列を大きく乱す。セラフイムの正面にいた詩織はESPエネルギーの波を全身に受けて大きく吹き飛んだ。

「詩織！」

誰かの叫び声。回転する視界の向こうからセラフイムが追撃を仕掛けてくるのが見えた。姿勢制御は間に合わないそうにない。焦燥感が頭を駆け抜けた時、三つの識別ライトがセラフイムに衝突するのが見えた。セラフイムが大きく翼を広げ、接近戦を仕掛けた誰かを振り落とす。二つの識別ライトが漆黒の闇に落ちていき、一つの識別ライトが光を失った。機械翼が破損したのかもしれない。他の可能性は考えたくなかった。詩織は姿勢制御を終え、小銃をセラフイムに向けた。

「手の空いてる人、落ちた三人のフォローお願いします！」

叫び、引き金を引く。数発がセラフイムの頭部に命中し、小規模の閃光が走った。

「第一分隊、突撃！」

怯んだ隙をついて突撃命令を出す。詩織の後方から八つの識別ライトの明かりが前方へ飛んでいく。

「第二、第三分隊突撃用意！」

突出した第一分隊が次々とセラフィムにぶつかっていく。セラフィムの巨大な腕が振り回され、それに直撃した数人が弾き飛ばされるのが見えた。長くは持たない。

「第二、第三分隊突撃！」

詩織は銃剣を構え、第二、第三分隊とともにセラフィムに向かって飛翔した。

第五小隊長、進藤咲は第六小隊の後方に部隊を展開させて光学標準器越しに戦況を見守っていた。第六小隊は秩序正しい動きで亡霊群を迎え撃っている。比較的援護しやすい状況だった。手ごろな亡霊に狙いを定め、引き金に指をかける。

「……第一分隊、狙撃準備。それ以外は待機をお願いします」

通信機に向かって呟く。光学照準器から見える亡霊に狙いを定めたまま、咲は機械翼へのESPエネルギー供給量を増加させた。機械翼が空間に固定されたように音もなく静止する。光学照準器の先に見える亡霊を睨み、咲は引き金を引いた。乾いた音が夜空に響き、数百メートル先の亡霊の頭部が吹き飛ぶ。その後、咲の周囲から立て続けに発砲音が轟いた。第一分隊の全員が亡霊群に向けて発砲したのだ。遠目で見た限り、その殆どが外れたようだった。咲は大きく深呼吸し、再び光学照準器越しに次の目標を探し始めた。そこに、一体の亡霊の姿が映る。大きい。他の倍もある体躯に三対の巨大な翼。その怪物がゆっくりと咲の方に首を向けるのが見えた。照準器越しに目が合う。赤い、濁った瞳だった。そこに明確な殺意を感じとり、咲は反射的に引き金を引いた。小銃弾にESPエネルギーを纏った光弾が高速で発射される。それは普通であれば亡霊の頭部へ吸い込まれていく筈だった。

「ッ！」

光学照準器を通して、亡霊の頭部と体が巨大な二対の翼で覆われ

るのが見えた。不意に過去の記憶が意識野を掠める。

薄暗い協会

柔らかな笑みを浮かべる神父

叫び声をあげる母

翼で頭と体を隠した熾天使の像

咲は忌々しい記憶を振り払うように甲高い悲鳴をあげ、反射的に引き金を引いた。全てを受け入れるようにセラフィムを覆う翼が大きく広がり、光弾がセラフィム本体へ直撃する。閃光が走り、咆哮が響いた。その咆哮が更に咲の遠い記憶を掘り起こした。

女の声

聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、の

ち來りたまふ 主たる全知の神

聖なるかな、聖なるかな、

聖なるかな、のち來りたまふ万能の神

繰り返される賛美歌

繰り返される苦痛

聖なるかな、聖なるかな、聖な

るかな、幼子は神の御名をいただき

閃光の中からセラフィムが飛び出し、襲いかかってくるのが光学照準器ごしに見えた。引き金を引く。当たらない。ESPエネルギーのコントロールが上手くいかず、機械翼を制御しきれなかった。頭の中をグルグルと過去の出来事が回り、正常な判断力が徐々に奪われていく。もう光学照準器が不要な距離までセラフィムが迫っていた。無意識のうちに銃剣を構えてセラフィムに切っ先を向けた時、遠くから大気を揺るがすほどの悲鳴があがった。男の声。それが桜井優の悲鳴である事に気づき、咲は反射的に遠くに見えるアメーバの方に視線を向けた。悲鳴は終わらない。通信機の向こうで数人の切羽詰まった声が聞こえる。咲はそれを無視して、再びセラフィムに向き合った。既に数十メートルの距離まで迫っている。

『進藤、どうする？』

通信機から届く部下の声。咲は何も言わず銃剣をセラフィムに向けて振り下ろした。

4章 41話 柘沙織(4)

「撃て！」

柘沙織の号令を合図に埠頭に展開した第一小隊が一斉に上空へ攻撃を始める。それに呼応するように、亡霊群も港への攻撃を開始した。静かな港町が閃光と轟音に包まれ、一瞬で戦場へと姿を変えていく。

降り注ぐESPエネルギーの嵐が港のアスファルトを抉り取っていく。沙織は小銃を抱えて駆けだした。不思議と恐怖は感じない。頭の中は嫌になるほど冷静だった。

「第一分隊、第二分隊、着いてきて！」

通信機に向かって叫ぶ。しかし、誰も着いてこない。振り返ると倉庫のような港湾建設の影に数人が固まって動けなくなっているのが見えた。沙織は何も言わず、再び前を向いて戦火の渦中へ身を投じた。港に並ぶ漁船が次々と炎上していく。沙織はそれらに注意を向けることなく、上空を旋回する亡霊群に小銃を向けた。狙いをつけ、引き金を引く。光条が空に吸い込まれていき、爆音が轟く。上空の亡霊が爆ぜ、亡霊の身体を構成していたESPエネルギーが大気中へ拡散するのが見えた。それを合図に周囲の亡霊が一斉に沙織の元へ急降下を始める。沙織は襲いかかってくる亡霊に向かって銃撃を加えて動きを牽制し、大きく地を蹴った。同時に背中 of 機械翼が大きく横に広がる。重力から解き放たれた沙織は、小銃を手にして大空を駆けた。急降下してくる亡霊に向かって銃剣を突き刺す。亡霊の咆哮。銃剣を引き抜いて次の目標に移ろうとした時、わき腹に激痛が走った。声にならない悲鳴があがる。背後から撃たれたようだった。沙織は苦悶に呻きながら銃剣を引き抜き、小銃を背後の亡霊に向けた。引き金を引く。次の瞬間、亡霊の姿が跡形もなく吹き飛んだ。沙織はゆっくりと地上に降り立ち、傷口を抑えてその場にうずくまった。傷口が焼けているせいか、出血は幸い酷くない。

沙織はバツクバツクから注射器を取り出し、それを傷口の横に躊躇なく突き刺した。再び激痛。沙織はふらふらと立ち上がり、ゆつくりと歩き始めた。ナノマシンが活性化するまでまだ時間がかかる。歩く度に意識を刈り取られそうなほどの激痛が走った。しかし、死ぬ訳ではない。痛みは無意味な信号に過ぎない。そう必死に自分に言い聞かせて、沙織は再び駆けだした。

一二三〇、島根県沿岸の小さな港町に上陸した亡霊群の全滅が統合幕僚監部によって正式に確認された。直接対応に当たった特殊戦術中隊側の死者は〇名、負傷者十八名。一帯の封鎖に当たっていた陸上自衛軍中部方面隊の尉官一名が行方不明となった。

重傷を負っていた柵沙織は担架に乗せられ、すぐさま機動ヘリによって付近の軍病院へと搬送される事となった。出血とナノマシンの過剰摂取が引き起こした失見当識の影響で意識が朦朧とする中、誰かが怒声をあげるのを沙織は耳にした。

「信じられません！ 一体、貴方たちは何を考えているの！ 以前にナノマシンの投与制限について説明したばかりじゃありませんか！」

女の声。確か、医療チームの秋山明日香^{あきやま あすか}。不真面目な治療をする事で有名な医官の筈だった。そんな人が怒鳴っているのがおかしくて、沙織は小さく口を歪ませた。

「ナノマシンの投与制限については熟知している。ただ、今回は不幸な事故のせいで柵少尉の所持していたナノマシンの量が少し多くなっていた、と報告を受けている。担当していた需品科の人間には既に相応の処罰を与えた。今後、このような事故が起こらないように努めていくつもりだ」

激昂する明日香とは正反対に、事務的な女の声が続く。あまりにも淡々とした声色で、すぐに神条奈々のものだと分かった。

「白々しい！ それは神条司令のお考えですか？ S I Aの指示？
それとも、参謀部の」

「秋山少尉、下がるが良い」

「口先だけのエリートが！ 反吐が出る。お前たちのやっている事は」

「少尉、私は下がれと言っている」

全ての感情が抜け落ちたような、無機質な声が静かに響き渡る。大きな声ではなかったが、それには奇妙な威圧感が存在し、機動へリの中に沈黙が落ちた。

「秋山少尉、お前の仕事は柊少尉の治療だ。目的を忘れるな。考える必要はない。お前はただ命令に従うだけ良い」

「何を」

「秋山少尉、何度も言わせるな。命令に従え。柊少尉の治療をしろ」
「糞つたれ！」

明日香が小さく悪態をつく。誰かが近づいてくる気配。朦朧とする意識の中、誰かに手を握られたのがわかった。とても温かい。意識が失われる寸前、奈々の冷たい声が耳に届いた。

「秋山少尉、お前は防衛医科大出身ではないと聞いた。目的を見失うな。最良の手段を考えるが良い」

「知った風な口を」

再び明日香の怒鳴り声。そこで、沙織の意識は失われた。

沙織が次に意識を回復したのは、その日の夜だった。ぼんやりとした意識の中、ベッドの横から女の声。

「沙織ちゃん？ 起きた？」

医療チームの秋山明日香の声だとすぐにわかった。身体が重い。力が入らなかつた。沙織は奇妙なほど重たい顎を動かして、ええ、と小さく呟いた。自分で驚くほどしゃがれた声だった。喉が痛い。

水が欲しかった。

「お水いる？」

はい、と小さく囁く。ちゃんと伝わったか不安だったが、すぐに口元に何かを押しつけられた。形状からストローだと推測し、口に含む。まだ力が入らなかつたが、何とか水分を補給する事はできた。沙織はすぐにストローから口を離した。重い瞼を開ける。ぼやけた視界が映った。

「気分はどう？」

「最悪です」

呟いて、沙織は目を瞑った。ずっと寝ていた筈なのに睡眠をとった気がしない。酷く疲れていた。出来ればもう一度眠りたい、と思う。

「五感に異常は？ 記憶にあやふやな点は？」

「とりあえず味覚以外は大丈夫そうです。記憶は亡霊を殲滅したところで途切れています」

紙に何かを書く音。沙織は特に気にせず、目を開けようとはしなかった。

「オーケイ。二、三点質問に答えてもらいたんだけど、大丈夫かしら？」

「ええ。早く済ませてください」

沙織は投げやりに答えた。早く眠りたい。

「貴女に投与された医療用ナノマシン、DA-Fと呼ばれる種類の投与量が投与制限を超えたものとなっていた。DA-Fの過剰投与は免疫機能を司る細胞を癌化させる危険があるとして知られている。つまり、血液癌、多発性骨髄腫になる可能性がある」

明日香の声は震えていた。それが怒りによるものなのか他の感情に起因するものなのか、沙織には判断がつかなかった。目を瞑りながら、気になった事を単刀直入に尋ねる。

「私、死ぬんですか？」

「貴女は、死なない。既にDA-Fは体外に排出され、複数の画像

診断でも異常は見られなかった。現段階で、貴女はまだ発癌していない。でも、D A - Fの異常投与を続ければ貴女は間違いなく命を落とす。多発性骨髄腫の治療はとても難しいの。発癌すれば助かる見込みは少ない」

「ナノマシンの利用を控える、ということですか？」

「違う。今日、神条中佐という人格と接して確信した。あの人は危険だわ。生粋のマキャベリストよ。このままでは貴女は近いうちに殺されてしまう」

「殺される？ 私が、ですか？」

「そう。彼女、貴女を兵器としか捉えていない。危険だわ。今日所持していた医療用ナノマシンは誰が用意したもの？」

「装備を用意したのは需品科の人ですが、その人がナノマシンも用意しているかはわかりません」

眠気と戦いながら記憶を掘り起こす。

「貴女がD A - Fの過剰投与による意識障害に陥っていた事に気づいてすぐ、私は他の中隊員の装備を確認した。結果は白だった。貴女のナノマシンの量だけが他よりも突出していた、ということ。今日、撃墜数のデータを見せてもらった。貴女の数值だけが突出している。優秀な兵士だわ。神条中佐は効率を求めて貴女を戦場に縛りつけようとしている」

「そつみたいですね」

沙織は小さく相槌を打った。眠い。早く話を終わらせてほしかった。

「沙織ちゃん、よく聞きなさい。神条司令の、いえ、参謀部、S I A、あるいは統合幕僚監部の先軍的なやり方は日本国憲法の下に保障される身体的自由を著しく侵害している。これは人権屋の持ちだすような拡大解釈なんかじゃない。正当な権利よ」

「あの、何を仰りたいのか良く分かりません。結論だけお願いします」

沈黙。明日香の戸惑った様子が伝わってきた。

「……軍を、亡霊対策室を抜けなさい。貴女は近いうちに潰される」
沙織は重い瞼を開けた。ベッドの横に立っていた明日香と目が合う。沙織は明日香の黒い瞳を睨みつけるようにじっと見つめた。そこに神条奈々への憎悪は認められなかった。純粹な心配の色。沙織は薄い笑みを浮かべた。顔の筋肉が、妙に重たかった。

「あなたは良い人です。でも、現実をわかってない。私は優秀な兵士なんだ。兵士は国を守る為に戦います。優秀な兵士が戦うのをやめたら、他の弱い兵士が代わりに戦うだけです。そもそも戦えないかも。それが現状です」

明日香の表情が強張ったものになる。

「馬鹿な。大衆の犠牲になると言うの？ それは、あまりにも全体主義的過ぎる」

「そうですね。でも、全体主義じゃありませんよ。私は特にナノマシンを異常投与されても特に文句言うつもりがないんです。神条司令、多分それをわかってます。秋山先生よりも、あのの方がよっぽど現実を理解してるんじゃないかな」

「違う。貴女は閉鎖環境下における抑圧で正常な判断力を喪失しているだけ。こんな事が正しい筈がない」

明日香は退かない。どうやら説得するつもりのようにだった。本当に良い人だな、と思う。しかし、今はそれが煩わしく感じた。

「秋山先生。もう一度言います。あなたは良い人です。でも、あなたは現実を理解しようとしていない。社会通念上の正しさを説かれても私には迷惑なだけです。全体主義であろうとなかろうと、怪物と戦う存在が必要です。そして、その負担が極大化する事に私は納得しているんです」

「それは後付けの理由だわ。貴女は自らの意志でそれに納得した訳じゃない」

沙織はクスリと笑みを零した。

「先生が先程から仰っている事も後付けでしょう。先生、これ以上のお話は無駄です。出て行ってください」

「沙織ちゃん……」

「お願いだから、出て行ってください」

明日香は一瞬迷った素振りを見せた後、小さく、ごめんなさい、と呟いた。

「気が変わったらいつでも言っつて。貴女が亡対室を抜ける手続きを簡略化させる事ができる」

明日香はそう言っつて部屋から出て行つた。静寂が訪れる。沙織は目を瞑り、小さく息を吐いた。眠気はもう吹き飛んでしまっていた。それでも、沙織は睡眠をとる為に瞼を閉じ続けた。

朝が来た。身体がだるい。ナノマシンの影響かな、と沙織はぼんやりと考えた。

のそのそとベッドから起き上がり、小さく欠伸する。そのままスリッパを履いて部屋の外に出た。無機質な白い廊下。照明は明るいのにも、不思議と暗い印象を受ける。誰もいない。微かな消毒液の香り。沙織は近くの女子トイレに入り、個室の鍵を閉めた。そして、胃の中のものを吐き戻す。しかし、昨日ロクに物を食べなかつた為に吐きだすべきものがなく、奇妙な嘔吐感だけが繰り返された。何度か試して吐けない事が分かると、嘔吐感が急速に収まっていく。

いつからだろう、と沙織は思った。強いストレスを感じる度に胃の中のものを吐きだす癖が昔からあった。最近は特に酷い。徐々に悪化しているようだった。

脳裏に昨日の出来事が蘇る。上陸してくる魔の軍団。炎上する漁船。倒壊する倉庫。

ナノマシンが無ければ死んでいた。

沙織は小さく身震いした。引き金を引いた時に訪れる独特の反動と衝撃が頭から離れない。フラフラと個室から出て、鏡の前に立つ。酷い顔をしていた。顔を冷水で洗い、徐々に気持ちを落ち着かせて

いく。吐き気が完全に収まったところで沙織は蛇口の水を止めた。小さく息をついてトイレから出る。その時、透き通った声がすぐ傍から聞こえた。

「おはようございます」

沙織は驚いて小さく飛びあがった。廊下の五メートル先にサクライ・ユウが立っていた。にっこりと微笑を浮かべている。沙織は警戒するようにユウから距離をとり、その姿を注意深く見つめた。病院服のような、白い服を来ている。何故か裸足だった。しかし、不思議と気にならない。むしろ、それが自然であるような根拠もない肯定感が湧き起こってくる。

「君も、ここで入院してるの？」

ユウは答えない。じつと微笑を浮かべたまま、小さく首を傾げた。沙織はもう一度ユウの身体に注視し、怪我らしいものがない事を確認した。

「君は何か病気を患ってるの？」

「はい。生まれた時から、ずっと治らなくて」

ユウは淡々と答えた。そこに絶望感は認められない。

「柊さんは怪我したんですか？」

「ちよつとね。今は殆ど治ったよ」

答えると、ユウは花が咲いたような笑みを見せた。無機質な廊下が明るくなったかのような錯覚を起こす。

「よかったですね！」

「うん。ありがと」

純粹に祝福を示すユウの態度を見て、沙織は頬を緩ませた。

「……ユウ君」

「はい」

「君、何の用でここへ来たの？」

ユウは首を傾げた。答えるつもりがないようだった。沙織は小さく息をついて、まあいいや、と呟いた。

「ここら一带を彷徨ってる幽霊ってオチじゃないよね」

沙織がそう言うと、ユウはクスクスと笑いながら答えた。

「試してみますか？」

「何を？」

「僕が幽霊かどうか、です」

僕、という自称でユウが男である事に初めて気づいた。本当に性別の区別がつきづらい子だ、とぼんやりと考えていると、ユウが沙織に歩み寄ってきた。ユウの手が、沙織の頬に触れる。温かった。「これで僕が生者ってこと、信じてもらえましたか？」

ユウは再びクスクスと笑った。沙織の頬に触れていたユウの手がすつと離れる。沙織は自身の頬が熱くなるのを感じ、髪を払う仕草でそれを誤魔化した。

「どうか。幽霊に触ったことないから、幽霊に実体がないのか知らないよ」

沙織が冗談っぽく言うと、ユウは困ったような表情を浮かべた。

「じゃあ、どうやったら証明できるんですか？」

「本物の幽霊と会った事ないから知らないよ」

そう言った時、ユウの肩越しに見知った人影が廊下の向こうからこちらに歩いてくるのが見えた。第二小隊長の本田真紀。沙織は真紀に向かって小さく手を振った。それを見たユウが後ろを振り向く。「僕、邪魔みたいだからいきます」

「え？ あ、うん」

沙織が別れの言葉を探す前にユウはすぐ横を通って真紀とは反対の方向に消えて行った。入れ替わりに真紀が声をかけてくる。腕に包帯が巻かれていた。恐らく、ナノマシンを殆ど利用していないのだろう。

「沙織ちゃん、おはよう！ 怪我、大丈夫？ 痛くない？ ちゃんと眠れた？ 枕固くなかった？ 私、枕高すぎて眠れなかったよ」「ぐっすり眠れたよ」

「本当に？ 沙織ちゃんってどこでも普通に寝ちゃうし、サバイバルとか向いてそうだね。あ、でも、夜に何か怖い動物に襲われて

も起きなさそうだからちよつと危ない！」

「そうだね」

「ところで沙織ちゃんこんな所で何やってたの？」

「んー、友達の、というか知り合いの男の子に話しかけられて、足止めくらつてただけで特に何もしてないよ」

真紀の顔が輝く。

「男の子！？ 沙織ちゃんが男の子！？」

「いや、私は女の子だよ」

「カレシ！？ 沙織ちゃんにカレシができたの！？ それ大丈夫？

悪い人じゃない？ 男の人は皆野獣だよ！？」

「ただの知り合いだよ。落ちついて」

沙織は小さく笑って、ポケットから携帯を取り出そうとした。しかし、携帯が見当たらない。携帯を本部の自室に置いたままだった事を思い出して、小さく溜め息をつく。

「今何時？」

真紀は首を傾げた。

「ごめん。私も時計持ってないや。見てこよつか？」

「いや、いいよ。朝食の時間が来たら看護師さん来るだろうし。私、部屋戻ってるね」

「あ、うん。寝すぎないようにね！」

真紀の言葉に沙織は、努力します、とだけ返して部屋に戻った。

そのままベッドに直行する。眠くはなかったが、起きていたくなかった。ベッドに身を投げ、沙織は強く目を瞑った。

五日後、沙織の退院が決まった。既に中隊のメンバーは全員退院し、沙織の復帰をもって中隊は平常通りの姿を取り戻すことになっている。

少ない荷物をまとめて、沙織は病室から廊下に出た。廊下には誰

もない。恐らく、入院患者自体が少ないのだろう。軍関係者を受け入れる為に極力一般患者を入れない事になっている、と聞いた事があった。

エレベータを利用して一階に辿りつく。そこでようやく数人の看護師と患者の姿を見つけた。沙織は雑談をしている看護師の横を通り過ぎ、ロビーに向かった。僅かな喧騒。一般の患者がばらけてソファに座っている。天井から吊り下げられたテレビからはニュースキャスターのはきはきとした声が響き渡っていた。沙織はそれを用意的に無視するように努め、窓口で素早く手続きを済ませた。必要な処理は総務部が既に済ませていた為、必要な書類にサインするだけだった。

荷物を抱え、病院の外に出る。冷たい風。駐車場に停まっている黒い乗用車に向かい、ドアを開けた。運転席に座る女がチラリと後部座席に目をやる。沙織は小さく頭を下げて後部座席に乗り込んだ。ドアが音を立てて閉まる。

「出してください」

「はい」

女が頷く。次いで、車がゆっくりと動き初めた。小さな加速感。

沙織は目を瞑った。

「着いたら起こしますね」

前から女の声。

「お願いします」

沙織は目を瞑ったまま言った。ガタガタと車が揺れる。心地良い振動だった。しかし、眠気は来ない。沙織はじっとそのまま目を瞑り続けた。

ようやく沙織がウトウトとし始めた時、車が亡霊対策室に到着した。

「柘さん、着きましたよ」

女の声。沙織は目を開けた。運転席からこちらを覗きこむ女の顔

がまず視界に入った。それからキョロキョロを辺りを見渡す。エン
トランスの前のようだった。

「ありがとう」

お礼を言っで、沙織は車から降りた。冷たい空気と共に騒音が耳
に届く。沙織は眉を寄せた。

「この音、何ですか？」

運転席の女に向かって尋ねる。

「情報部の拡大に伴い、本部の増築工事をしているらしいです」

沙織は溜め息をつき、ありがとう、と言葉を残してドアを閉めた。
本部の中には入らず、テニスコートの方向へ向かう。後ろで車の出
る音。沙織は振り返らなかった。

4章 42話 柊沙織(5)

テニスコートの横にある木陰で眠ろうと考えていたのだが、周囲が騒音に包まれてとても昼寝できそうになかった。お気に入りの場所を潰され、沙織は小さく溜め息をついた。ふと、テニスコートに目をやる。コート内にはいつも通り、真紀と音々がいた。コートの対角に立って延々とラリーをしている。後々の球拾いが面倒だからという理由で音々達は殆ど試合をしない。フェンス越しにその様子を眺めていると、音々が沙織の存在に気づいて、ボールをネットに向かって打ちこんだ。ラリーを強制的に止めた音々が沙織の立つ方へ向かってくる。

「退院したのか」

「うん」

頷く。沈黙が落ちた。音々の後ろから真紀が駆けよってくる。

「沙織ちゃん！ 退院おめでとう！」

「ありがとう」

素直に礼を述べる。音々が一度だけチラリと真紀に視線を向け、次いで口を開いた。

「今から昼寝か？」

「うん。ちよっとうるさいけど」

本部の増築工事の騒音がここまで届いていた。

「こんな状況で眠れるのか？」

音々が呆れたような表情を浮かべる。沙織は小さく笑った。

「んー、ちよっときついな……」

部屋に戻って寝ようかな、と考えた時に、すぐにある事を思い出す。以前にサクライ・ユウと出会った本部裏の倉庫群。よく考えれば、あそこは昼寝にぴったりの場所だ。

「でも、昼寝にぴったりの場所を新しく見つけたから、そっちに行くつもり」

じゃあね、と言葉を残して沙織はコートに背を向けた。背後から、ああ、と音々の気のない言葉が返ってくる。沙織は本部裏に向かつて歩き出した。

風が冷たいせいか、自然と歩く速度が上がった。すぐに倉庫群が見えてくる。A-01と表記された倉庫を通り過ぎ、沙織は倉庫群の奥へと入り込んでいった。

Uと表記された倉庫が見えてくる。沙織はそれらを順番に見ていった。そして、U-05と書かれた倉庫の前で立ち止まる。扉は閉まっていた。取っ手を横に引くと、扉はあっさりと左右に開いた。真っ暗な倉庫の中に、細い光条が差し込む。

「また、来たんですか」

中からどこか幼さの残る中性的な声が響く。沙織は小さく笑った。「また、ここにいたんだ」

扉を全開まで開ける。中には案の定、サクライ・ユウがいた。

「君、もしかしてここに住んでるの？」

率直に尋ねてみる。ユウはただ曖昧な笑みを浮かべるだけで、何も答えなかった。半ば予想していた反応だった為、沙織はすぐに話題を変えた。

「ここ、借りても良い？ お気に入りの昼寝場所、潰されちゃって」
「どうぞ。でも、怒られても知らないです」

沙織は安堵の笑みを浮かべ、倉庫の中に足を踏み入れた。中は冷んやりとしているが、風がない為にそれほど寒くは感じなかった。暗い事も相まって昼寝に打ってつけの場所と言える。沙織は優の横に座り込んだ。後ろに丸まったマットのようなものがあって、楽に背を預ける事ができた。近接戦闘訓練用のマットかな、と考えを巡らせる。

「君、いつもこんな所で何をしてるの？」

「待ってるんです」

どうせ答えが返ってこないだろう、と踏んでいた為に沙織は僅かに驚いた。

「誰を？」

「お母さんです」

やはり、親が総務部かどこかで働いているらしい。しかし、この年齢なら家で留守番していた方がいいのではないかと微かな違和感を覚える。

「じゃあ、いつもこの時間帯は暇してるの？」

「はい。大体寝て過ごしています」

「私と同じだね」

親近感を覚え、沙織は小さく笑った。その時、倉庫の外から声が届いた。若い男の声。

「力学式で表せても、長期的なシミュレーションが難しいのは確かです。でも、それだけではありません。例えば、チンパジー。チンパンジーは複雑な離合集散を繰り返す事で有名でした。規模が定まらない群れを作るんです。これには個体差が影響しているのではないかと、などと言われていましたが、実際には違いました。メスは餌を得ることに最適な分布をさせて、オスには餌とメスを効率的に得られる所に分布するように設定し、性と年齢を実際の集団と同じ構成にする。すると、計算機上のシミュレーションが実際の離合集散のパターンと同じものを得る事が出来た。チンパンジーの一見カオス的な離合集散については食欲と性欲だけで大半が説明できるとされたんです」

「つまり、亡霊も基本的な目的さえ押さえられれば、その動きを予測できる、と？」

神奈奈々の声。沙織は無意識のうちに呼吸を止めた。何故か、ここにいるのを知られなくなかった。

「局地的な、つまり戦闘の動きに対してその可能性があります」

「それは、既存のランチェスタ・モデル、あるいはその亜種とどう違う？」

「数値シミュレーションだけでなく、実際のESPリーダー上のようなGUIで戦闘をシミュレートできます」

「ゲームのように？」

「ええ」

「ESP能力者の動きはどうする？ 人間の動きには個性が大きな影響を及ぼすだろう？」

「シミュレーションを重ねて、行動誤差を消します」

「消えるのはランダム性だけだ。系統的なノイズは消えない」

「ええ、でも」

「必要ない。それと、その案は参謀部には絶対提出するな」

「何故ですか？」

僅かな沈黙。次いで、抑揚のない奈々の声。

「不要な盾を与える必要はない。参謀部はお前が考えているよりも余程狡猾ということだ」

「不要な盾などありません」

熱の籠った男の声。それに反して、奈々の声は冷え切ったものだった。

「勘違いするな。盾とはお前の事だ。そのモデルが動けば、お前は参謀部の弾避けとして利用される。この意味がわかるか？」

沙織は思わず息を呑んだ。これは明らかに盗み聞きして良い話ではない。沙織は隣のユウに目を向けた。暗闇でよく表情が分からないかったが、聞き耳を立てているのはわかった。

「馬鹿な。あなたは、あなたは参謀部を掌握しきれていないのですか？」

男の震えた声。沙織は両手で耳を塞いだ。聞いてはいけない。

「私は象徴でしかない。そもそも、担当能力がない。全て茶番だ。統合幕僚監部の監督下にあり、陸上幕僚監部の幹部から選出された参謀部。亡対室なんて構造がどこにある？ そんなものは、ないんだ。そして、私はそれらの隙間を広げて新たな構造を創るつもりもない。繰り返すが、亡対室という組織はどこにもないのだ。幻に気をつけるが良い」

「そんな……」

「焦るな。時間が必要だ。近い内、秩序化イデオロギーが発動する。発動元は、陸上自衛軍の上田少将。その時、あらゆるノイズが取り除かれる」

「司令、それはどういう」

「行け。職務に戻れ。時を待つがいい。それまで、参謀部に利用されるような事はするな」

「……はい」

掠れた男の声。一つの足音が離れて行く。沙織は無意識のうちに止めてた息を大きく吐きだした。その時、背を預けていたマットの塊がゴトリと大きくずれた。ズツと低い音が響く。沙織は顔を強張らせた。

「誰かいるのか？」

奈々の声。足音が近づいてくる。沙織は咄嗟に横にいたユウの口を塞いだ。

「むぐつ！」

ユウが呻く。沙織はそれを無視して、ユウの身体を抱え上げた。驚くほど軽い。そのまま後ろのマットと壁の間にユウを隠す。丁度その作業が終わった時、中途半端に開いていた扉が大きく横に開いた。暗い倉庫内に陽の光が差し込む。

「柵か。こんな所で何をやっている？」

奈々の声。沙織はユウがちゃんとマットで隠れてるか確認した後、扉の方を振り返った。

「ちよ、ちよつと昼寝を……。ここ、暖かくって」

沈黙。逆光で奈々の表情がよく見えない為に不安が増長される。たっぷり三秒ほど間をおいて、奈々が口を開いた。

「増築工事は今月いっぱい続く。今冬は冷えると聞いた。素直に部屋で寝たほうが良い」

それだけ言って、奈々は背を向けた。そのまま戸口から離れて行く。沙織は再び息をついた。

背後からゴソゴソと物音。丸まったマットと壁の間に挟まってい

たユウがひよっこりと顔を出す。

「いきなり酷いです」

不機嫌そうにユウが呟く。しかたないでしょ、と沙織は唇を尖らせた。

「こんな所で男女一緒にいるところ見られたら大問題になっちゃうもん」

もぞもぞとユウが這い出して来る。沙織はマットを持ち上げて、ユウが出てくるのを手伝った。

「うー、埃っぽい」

ユウが呻く。沙織は小さく咳き込んだ。確かに埃っぽい。あまりマットを動かさないほうが良さそうだった。

ユウがマットから抜けだした後、二人は再びマットに背を預けて横になった。場に沈黙が落ちる。しかし、嫌な空気ではなかった。

沙織はゆっくりと瞳を閉じた。そして、ふと疑問が浮かぶ。

「君、学校とかないの？」

「……ごめんなさい、もう寝ます。少し、疲れました」
本当に眠そうな声。

「あ、うん。おやすみ」

沙織は寝返りを打って、先程の奈々の話を忘れようとするかのよう
に深いまどろみの中に落ちていった。

4章 43話 柊沙織(6)

沙織が眠りから目を覚ました時、倉庫の中は真つ暗になっていた。手探りで携帯を取り出し、時刻を確認する。午後七時。携帯のディスプレイが放つ明かりを頼りに、周囲を見渡す。隣でユウがすやすやと眠っている事をまず初めに確認し、次に扉に明かりを向ける。僅かに開いた扉からは深い闇が覗いていた。沙織は溜め息を吐いた。「ちよつと、ユウくん。起きて」

辺りが静かなせいで、自然と沙織の声も控えめなものとなった。隣のユウの身体を揺する。しかし、ユウはすやすやと寝息をたてていて、一向に起きる様子はない。沙織は携帯から漏れる明かりをユウに向けた。穏やかな寝顔が暗闇に浮かぶ。その寝顔があまりにも気持ちよさそうで、沙織は揺すっていた手を止めた。

綺麗なな、とユウの無垢な寝顔を眺めながら考える。さぞかし学校ではモテるのだろう。ただ、同学年の女の子からは人気がなさそうだった。どちらかと言うと、先輩から可愛がられるタイプだろう。そんな事を考えながら、ふと自身の高校 花公院の事を思い出す。特待生として入学したばかりなのに、亡霊対策室に入る為にすぐに辞めてしまった。ただ、後悔はしていない。花公院にはそれほど思い入れがなかった。ただ、金銭的に最善の進路だった、というだけ中隊に入隊してからはお金に困ることも、育ての親に負い目を感じることもなくなった。運が良かった、とさえ思う。沙織は、そこで思考を止めた。

「ねえ、起きてよ」

意識的に音量をあげて、ユウの身体を強く揺する。何度か耳元で声をあげたところで、ようやくユウは目を覚ました。

「ひいらぎさん？」

眠そうに目を擦りながら、ユウがゆっくりと起き上がる。

「やっと起きた」

沙織は小さく笑った。

「私そろそろ寮の方に戻るけど、君はどうする？ 送っていいんか？」

「……僕は、ここで待ってます」

「わかった。風邪、ひかないようにね」

沙織はそう言って立ち上がった。携帯の明かりを頼りに戸口へと近づき、扉を横に開く。冷たい風が吹いた。倉庫内と気温差が激しい。沙織は一步外へ踏み出し、倉庫の扉をゆっくりと閉めた。そして、倉庫群の隙間を縫って、本部へと歩き出す。

倉庫間の細い道を歩きながら、ここは夏だと雑草が凄そうだな、とぼんやりと考えた。虫なんかも大量に出るかもしれない。夏になったら他の昼寝場所を探そう。

倉庫群を抜け、本部の裏手にある広い空間に出た。前方にテニスコートが見えてくる。照明で明るく照らされているが、中に人影は見えなかった。音々と真紀はもう帰ったらしい。

沙織はそのままエントランスの自動ドアをくぐり、本部内に足を踏み入れた。暖かい。出入り口に立つ警備員が小さく頭を下げるのが視界の隅に映った。反射的に頭を下げ返す。

エレベータに向かい、ボタンを押す。すぐに電子音が鳴り、扉が開いた。そして、中から三人の男が出てくる。沙織は反射的に身を硬くした。出てきた男達は全員陸上自衛軍の制服を着ていた。先頭を歩いてきた男と目が合う。男の瞳が大きく見開かれた。沙織は咄嗟に肩の階級章に視線を向けた。星が二つ。少将。

三人の男が沙織の横を通り過ぎる。沙織は振り返った。少将の階級章をつけた男もこちらを振り返っていた。再び目が合う。

「少将？ いかがでしたか？」

後ろの男が不思議そうな顔をする。こちらは大尉だった。少将は大尉の言葉を無視して、沙織の方に一步足を進めた。沙織は男の顔をじっと見つめたまま動けなかった。

どこかで会った気がする。

少将は迷うような素振りを見せてから、唸るような低い声をあげた。

「君は……君は」

そこで、言葉が途切れた。男は小さく頭を振り、深く息を吸った。先ほどとは打って変わって、穏やかな声が発せられる。

「君は……この生活が楽しいかい？」

小さな子どもの体調を気遣うような、そんな声色だった。沙織は一瞬戸惑ったものの、すぐに平静を取り返した。

「気にいっています」

答えると、少将は何度も深く頷いた。

「そうか……それは、良かった」

少将はそれだけ言って、沙織に背を向けた。部下らしき二人が戸惑ったように顔を見合わせる。少将がエントランスの出口へと歩き出し、遅れて部下が続いた。沙織はそれをチラリと見てから、エレベーターに入り込んだ。今のは何だったのだろう。考えるも、わからない。欠伸が出た。昼寝したばかりだというのに不思議と眠い。また明日も倉庫で寝よう、と沙織は思った。

第一小隊・第二分隊長、川上沙耶は自らが預かる分隊の隊形を保つ事に全神経を注いでいた。

前方ではセラフィムと格闘戦を繰り広げる華の姿。そして、その上方には数十体の亡霊群。

「横隊！ 構えろ」

小銃を構え、叫ぶ。引きつける余裕などなく、沙耶はすぐに射撃命令を出した。

「撃てえ！」

散発的な攻撃が亡霊群に降り注ぐ。亡霊が回避行動に移り、散開を始める。夜空の中、紫色に煌めく発光体が上下左右に散らばった。

思わず舌打ちする。その時、前方で華がセラフィムの攻撃を受けて、大きく吹き飛ぶのが見えた。腕を強打したようだった。

『衝撃に注意』

愛の声。同時に、下方から光の雨がセラフィムに届いた。セラフィムの動きが大きく鈍る。それを見計らったように、一つの識別ライトが下方からセラフィムに突進した。しかし、セラフィムが外傷を受けた様子はない。すぐにセラフィムが腕を大きく振り払い、識別ライトの主が下方へ落とされる。その際、沙耶の元まで鈍い衝撃音が届いた。

「おい、今落とされたのは誰だ！」

叫ぶ。

『第一分隊か？ 柚子！ 京子！ 青葉？ 誰だ！ 返事しろ』
片っぱしから第一分隊に所属する友人の名を呼ぶ。次々と通信機から返事が届くが、京子からの返事がなかった。

「おい、誰か手が空いてる奴、拾いに行つて」
誰が堕ちたのか明確に特定する暇も、救助命令を出す暇もなく、上方に散開した亡霊群が一斉に襲い掛かってくる。

「糞ッ！」

沙耶は小さく悪態をついた。

「篠原あ！ そいつばっか相手してる暇ねーぞ！ 上から来てる！」

『篠原、さっさと戻つて指揮を！』

沙耶の怒声に続いて、第三分隊長、吉田葵の怒号が響く。次いで、識別ライトの明かりが多数、亡霊群と衝突した。亡霊群の進軍が止まる。第三分隊が近接戦闘に持ち込んだようだった。

第三分隊から大きく離れた所で何かが煌めく。早い。二体の亡霊が第三分隊を大きく迂回して、沙耶達に向かってきてきているようだった。反射的に小銃を向ける。近い。照準が定まらなまま、沙耶は引き金を引いた。当たらない。二体が更に左右に別れる。

「一班、左をやれ！ 二班、右！」

すぐに命令を出し、右に回った亡霊に向かって小銃を向ける。そ

の時、通信機から華の声が届いた。

『川上さん、第一小隊の指揮をお願いっ』

「何言って おい」

攻撃を中止し、反射的に振り返る。遠くでセラフイムに追いかけるられる識別ライトの明かりが一つ確認できた。

『ごめんね。セラフイム、私じゃ無理かも。出来るだけ引きつけるから、そっちで桜井くんのことお願い』

「おい、冗談じゃないぞ！ 無理なら機動へりまで下がれ。お前腕が」

『川上さん、お願い。誰かがセラフイムを止めないと、桜井くんのところまで誰も辿りつけないよ』

言い返そうとしたところで、爆音が轟いた。続いて、右頬に熱風が届く。振り返ると、亡霊の身体が腹部から爆発しているところだった。

『二班、迎撃完了』

通信機から深海百合の報告が届く。沙耶はすぐに左側を見た。一体の亡霊が一班からの攻撃を受けて急旋回を繰り返しているところだった。沙耶は小銃を構えた。照準を合わせ、引き金を引く。銃声とともに亡霊の頭部が吹き飛んだ。すぐに周囲を見渡す。他に敵影はない。第三分隊が亡霊群を上手く抑え込んでいるようだった。

「よし、第三分隊の援護に回るぞ！」

『了解』

数人の返事が届く。沙耶は第二分隊が全員揃っている事を確認してから、機械翼を広げて、前方上空で交戦している第三分隊の元に向かった。

「葵！ そのまま引きつけてくれ！ 横から叩く！」

『出来るだけ早くやれよ』

通信機から葵の声が届いた直後、巨大な何かが目の前の第三分隊の陣に突っ込んだ。第三分隊の隊列が乱れ、いくつかの識別ライトが下方へ落ちていく。

『セラフイム……』

誰かの眩きが通信機から聞こえた。反射的に下方を見る。青い識別ライト　華が真つ逆さまに落ちていく光景が視界に映った。

長谷川京子は暗闇の中を重力に従って落ちていた。機械翼が展開できない。致命的な損傷を受けたようだった。上空でいくつかの識別ライトと紫色の発光体がぶつかっているのが見えた。次いで、視界が反転する。真つ暗な海が見えた。近い。京子は大きく息を吸い込み、目を瞑った。

激しい衝撃とともに着水する。突然冷水に全身を包まれ、パニックを起こしそうになった。上下感覚を喪失したまま、無我夢中で手足を動かす。僅かに水面が煌めいているのが見えた。急いで浮上する。海面から顔を出し、京子は大きく息を吸った。戦闘服についたベルトを力いっぱい引つ張る。肩口に装着されていた救命具が膨張し、京子は安定した浮力を得る事に成功した。幸い、大きな波はない。何度か咳き込みながら、通信機に向かって叫ぶ。

「第一小隊、第二分隊、長谷川、着水。目立った外傷はなし。機械翼、完全に動作停止。救助を求む！」

『付近に哨戒艦艇を待たせています。少し、お待ちください』
『哨戒艦艇？』

辺りを見渡した時、少し離れたところに船らしき姿が見えた。いくつかの強烈な光を放っている。京子はそちらに向かって泳ぎ出した。凍てつくような海水で体力が奪われていく。京子は出来るだけ下を見ないように泳いだ。足元は真つ暗で、覗きこむと得体の知れない不安感に襲われるのだ。

暫く泳ぐと、前方から重低音が轟いた。同時に、照明を前方に取り付けた小型のモーターボートが接近してくるのが見える。京子は右手をあげて、ESPエネルギーを放った。上手く出力できなかった

だが、一瞬だけ翡翠の光が灯った。もう一度ESPエネルギーを放つ。今度は上手くできた。淡い光条が空へと放たれる。モーターボートが一直線に京子へ接近し、数メートル先で停止した。

「大丈夫か！」

低い男の声。同時に、ロープのついた浮輪が目の前に投げられた。京子は浮輪を抱きしめ、大きく息を吐いた。ロープが引つ張られ、ボートの上に引つ張り上げられる。

「死ぬかと思つた……」

渡されたタオルを身体に巻きつけ、京子はボートの上に倒れ込んだ。寒い。歯がガタガタと震えた。

「怪我は？ 大丈夫か？」

青いジャンパーに白いヘルメットを被った男が新しいタオルを持ってきてくれる。京子はタオルを受け取りながら首を振った。

「大丈夫。怪我はないです」

上空を見上げる。いくつもの発光体が高速で動いていた。たまに轟音と閃光が走る。肩で息をしながら、南方の夜空に目を向ける。

そこには、巨大なゲル状の亡霊が闘いを観賞するかのように浮かんでいる。京子は濡れた前髪を払い、アメーバを睨みつけた。

「予備の機械翼、ありますか？」

「ああ、哨戒艦艇の方にあつたはずだが……」

後ろで男が戸惑った声をあげる。

「少し、本艦の方でちゃんと診察してもらつよ。そうじゃないと、再出撃は許可できない」

「はい」

京子は頷いて、数十メートル先に浮かぶ哨戒艦艇に目を向けた。照明が強く、夜の海で一際目立っている。京子は寒さで震える身をタオルで包み、小さく息を吐いた。

篠原華は銃剣を構え、セラフイムに向かって突撃を始めていた。セラフイムの三対の翼が巨大な刃物のように、前方へと横薙ぎに振るわれる。華は寸前で急旋回し、空いた背中に回り込んだ。痛む左肩を無視して、両手で銃剣を突き刺す。確かな手ごたえと共に、セラフイムが大きな叫び声をあげた。同時に、周囲の空間が歪む。セラフイムが全方位にESPエネルギーの波を放ったのだと気づいた時には既に遅く、華の華奢な身体は不可視の力によって大きく吹き飛ばされた。

反撃しなきゃ。そう思うも、身体が上手く動かない。視界が霞む。『おい!』

通信機から誰かの怒声。次の瞬間、腹部に衝撃が走った。セラフイムの追撃を受けたのだと、遅れて認識する。態勢を整える事も出来ず、華はそのまま漆黒の海に向かって落下した。

海面に衝突し、黒い水柱があがる。

気泡に包まれ、視界が塞がれる。華は反射的にベルト引張った。救命具が膨れ上がる。海流に揉まれながら、華の身体はゆっくりと海面に浮上した。呑み込んだ海水を吐きだし、負傷した左肩を抑える。意識が朦朧とした。

「華!」

上空から愛の声。見上げると、機械翼を広げてこちらを見下ろす愛の姿があった。

「動かないで」

愛に言われた通り、華はじっとした。愛がゆっくりと着水し、華の横につく。

「力抜いて」

愛の手が背中に回される。次いで、愛の腰についたベルトが引き伸ばされ、華の身体に固定される。訓練通りの、スムーズな動きだった。

「苦しくない?」

「……うん、大丈夫」

愛の淡々とした声を聞いて、華は小さく笑った。

「飛ぶ。気をつけて」

宣言とともに、華の身体は愛とともに空中へ浮かび上がった。全身に纏わりついていていた海水が音をたてて海に落ちていく。

「第一小隊長、篠原が負傷。救援を」

通信機に向かって愛が淡々と報告する。その落ち着き具合を見て、華は妙な安堵感を得た。

『九時の方向に哨戒艦艇が二隻待機しています。そちらに搬送をお願いします』

華は目を瞑った。酷く疲れていた。

強い風の音が聞こえる。それと、機械翼の低い駆動音。遠くで銃声もしている。闘いが、遠い出来事のように思えた。

ふと、それらの音が混ざって、一瞬だけ子守り歌のように聞こえた。昔、寝る前に祖父が歌ってくれたな、と過去を思い出す。幼稚園の頃だったろうか。母と父が大声で喧嘩をしている時、華は祖父の部屋で嵐が過ぎ去るのを待った。思えば、祖父の存在が父と母の喧嘩の原因だったのかもしれない。もともと、祖父がいなくても母と父は別の理由を作り出して喧嘩に明け暮れていたのではないか、とも思う。

祖父は感情を正直に表す事が苦手な人だった。いつも仏頂面で、あまり笑ったところを見た事が無かった。かと言って、怒られたり、邪険に扱われた事もなかった。華が部屋に行くと、決まって煎餅を出して華の話を黙って聞くような、寡黙な人だったと記憶している。祖父は、母と違って華を縛りつけようとはしなかった。父のように、無関心でもなかった。華は、祖父が大好きだった。けれど、華が小学校に上がる前に他界してしまった。脳梗塞だった。母の行動が酷くなったのは、それからだった。

華は目を開けた。ゆっくりと首を回す。遠くにアメーバが見えた。本当に大きい。

あの中に想い人がいる。そう考えると、胸を締め付けられるかの

ような感覚に襲われた。葬式で見た祖父の死顔が頭の中に浮かぶ。死んだ人は永遠に戻らない。早く、連れ戻さなければ。

「降りる。気をつけて」

不意に愛が言う。直後、小さな振動が愛越しに伝わった。哨戒艦艇の甲板に降りたのだと遅れて気付く。愛の身体と繋がったベルトが外され、華はゆっくりと床に下ろされた。

「大丈夫か！」

女の声。甲板の上に足音が響く。仰向けになった華の視界に、若い女の顔が入り込んだ。

「折れてるな……ちよつと待て。絶対動くなよ」

周囲に複数の気配。首を持ち上げると、ヘルメットを被った男達が周りに並んでいた。その中の数人が通信機に向かって何かを叫んでいる。どうやら、負傷者は華だけではないようだった。

「少し我慢して」

女の声。次いで、腕にチクリと痛みが走った。恐らく、痛み止めだろう。

「着水したのか。早くタオル持ってこい！」

女が叫ぶ。左腕が熱い。自然と息が荒くなった。

「華、私はもう行く。無理しないで」

愛の声。声のした方に首を向けると、愛が飛び立つところが見えた。真つすぐと、夜空に消えていく。華は無言でそれを見送った。

第四小隊長、黒木舞は目の前に浮かぶ三対の翼を持った亡霊をじつくりと眺めた。大きい。舞はチラリと後ろを振り返った。第四小隊はアミーバを攻撃する為に移動を始めている。第二小隊も亡霊群を迂回してアミーバの撃破に向かっていているようだった。舞の仕事はこの大型の亡霊、セラフィムを足止めする事。必ずしも撃破する必要はない。

舞は再びセラフイムに視線を向けた。襲ってくる気配はない。相手の目的もまた、小隊長格の足止めらしかった。都合が良い。舞は小銃を下ろし、辺りを見渡した。

敵陣の最も奥にアメーバが配置され、そこから離れたところで第一小隊、第六小隊が敵亡霊と交戦している。第三、第五小隊は第一、第六の背後から援護しているようだった。第四、第二小隊は亡霊群を避ける為に大きく左右に迂回してアメーバに向かっている。上手くいけば、アメーバはすぐに撃破できそうだった。

舞はじつと、遠くに走る部下達の識別ライトの動きを目で追った。指揮をとっているのは友人の藤宮綾^{ふじみやあや}。不安はない。第四小隊は着実にアメーバに向かって移動を続けている。舞はセラフイムに視線を戻した。

「ハロー！」

元氣よく声をかけてみる。しかし、セラフイムは何も反応しない。舞は顔をしかめた。

「ねえ、君達さ、日本語話せないの？ 何かさ、前に本部のコンピュータに入ったりしたんでしょ？ 実は日本語ぺらぺらなんじゃないの？」

セラフイムはじつと動かない。舞は溜め息を吐いた。

もう一度、遠くに見える部下の動きを観察する。第一小隊が相手していた亡霊群の後部が、第四小隊に襲いかかっていた。逡巡した後、愛用のコンバットナイフを取り出し、小銃に着剣する。

「やっぱり撃破しないとまずい雰囲気みたいだね」

銃剣を向け、機械翼を広げる。深く息を吸った後、舞の機械翼から高出力のESPエネルギーが吐きだされた。亡霊に向かって銃剣を突き出し、正面から突進する。それを防ごうと、セラフイムの翼が鋭い刃のように大きく振り下ろされた。銃剣と翼が衝突し、甲高い金属音が響く。すぐに銃剣を引きぬいて、横に薙ぐ。セラフイムの別の翼がそれを受け止めた。硬い。舞は舌打ちして、大きく後ろに飛んだ。直後、セラフイムの最後の翼が直前まで舞がいた空間を

縦に切り裂いた。

「本当にだるい戦い方するなあ……」

思わず愚痴がもれる。相手の三対の翼は巨大な盾にも、武器にもなるのだ。やりづらい。

舞は深く息を吐きだし、セラフィムの横に回るように飛翔した。通りすぎ様に銃剣を横に振るう。すぐに翼で弾かれるも、舞はそのまま速度を緩めず、背後に回り込んだ。先程と同様に銃剣を横に振るう。再び、翼で銃剣が弾かれた。残った翼が舞に向かって突き出される。舞は、それを避けなかった。軽く体を捻り、軸をずらす。翼が舞の腹部を大きく切り裂いた。その瞬間、セラフィムの胴体を守るものがなくなる。舞は銃剣を力任せに振り下ろした。ドス、と低い音が響く。舞の振り下ろした銃剣は、セラフィムの頭部に突き刺さっていた。セラフィムの動きが止まる。舞は静かに引き金を引いた。セミ・オートで発射された小銃弾がセラフィムの頭部へ次々と撃ち込まれる。バチバチツと何かが弾けた音が響いた。セラフィムの姿が揺らぐ。次に、セラフィムを構成していたESPエネルギーが一斉に霧散した。ガラスの割れるような音が響き、セラフィムだった物が虚無の中に消えていく。舞は腹部を抑え、通信機に向かって呟いた。

「セラフィム一体撃破。同時に、こっちも戦闘継続能力を喪失。これじゃあ、睨み合いしてた方が良かったなあ……」

第二小隊長、姫野雪の前には、他の小隊長同様にセラフィムが立ち塞がっていた。分隊長以下は既に先へ進ませている為、周囲には雪とセラフィムしかない。

雪は興味なさそうにセラフィムから視線を外し、第一、第六小隊が戦っている光景を遠くから眺めた。じっと目を凝らす。第一小隊の隊列が崩壊しているようだった。珍しい、と思う。

次に、中隊の後部に視線を向ける。海上に四隻の艦艇がいるようだった。代わりに機動ヘリの姿が見えない。神条奈々の命令だろう、と雪は検討をつけた。相変わらず手配が早い。

小さく息をつき、セラフィムの方に視線を戻す。三対の翼を持った醜悪な怪物と目が合った。雪は少し考えるような素振りを見せた後、小銃を肩に下げ、戦意がない事を示した。無暗に戦う必要はない。

チラリ、とセラフィムの向こう側に見える巨大な発光体に目を向ける。桜井優がアメーバに取り込まれてから十分経った。そろそろ何らかのアクションがあってもおかしくない。雪はじつとアメーバを見つめた。

4章 44話 柘沙織(7)

柘沙織はそれから毎日のように本部裏の倉庫に通った。ユウに会いに行っていた、という表現の方が正しいかもしれない。

ユウはいつも倉庫の中にいた。ユウはいつもウトウトとしていた。ユウはいつも沙織が来ると優しい笑みを浮かべた。

ユウは、ずっと暗い倉庫の中にいた。まるで、何かに閉じ込められているようだ、と沙織は思った。

ある日、ユウはこう言った。

「柘さんは、ずっと寝てますね」

沙織は閉じていた瞼をゆっくりと開き、ユウの方を向いた。

「それは君もじゃない？」

「確かに、そうかも」

沈黙が落ちる。しかし、嫌な沈黙ではなかった。心地良い雰囲気
に身を委ね、目を瞑る。穏やかに時間だけが過ぎていく。

「ねえ」

ふとある事を思い出して、沙織は口を開いた。

「ユウくんはさ、私がESP能力者ってこと、知ってるの？」

ユウは答えなかった。肯定と受け取り、小さく息をつく。

「怖く、ないの？」

「何がですか？」

今度は逆に返事が早かった。わからない振りをしていることにす
ぐ気付く。

「君は変わってるね」

沙織は小さく笑った。

「私自身、怖いのに」

「ESP能力が、ですか？」

そう、と沙織は頷いた。

「ESP能力ってさ、魔法みたいな呪文とかがないんだよね。ちょ

つとさ、攻撃的な意志を見せれば攻撃できるし、飛ばうと思えば機械翼にESPエネルギーが供給される。凄く、感覚的なものなんだよ。明確なトリガーがないの。でね、このコントロールに意識を集中した時、何て言うか、本当に自分がコントロールしてるのか分からなくなってる事があって、それが凄く怖い」

「そういつの、ESP能力じゃなくてもありますね。呼吸を意識的にやると苦しくなったり、何かを意識的に見ると、対象を対象として見れなくなったり」

「……そうだね。特にESP能力なんて後天的に得たものだったから、本当に自分がコントロールしてるのか、突然あやふやになる事が多くって、戦闘の時は必死だから気にならないんだけど、訓練の時とか、ふとした時に違和感を覚えて、本当に、怖い」
溜め息をつく。

「時々さ、こう思うんだよね。亡霊も、ESP能力者も、ESPエネルギーに操られてるんじゃないかって。コントロールしてると思っ込んでるだけで、実は逆なんじゃないかって」

「だから、よく寝てるんですか？」
「え？」

優の言葉の意図が掴めず、沙織は聞き返した。

「寝てる間は何のコントロールも受けないから、いつも寝てるんですか？」

ようやく意味を理解して、沙織は声をあげて笑った。

「まさか。私、そこまで深刻に思っただけ。ただ、時々そう思うだけ。でも、うん、寝てる間は確かに何のコントロールも受けないね。全てのノイズがクリアされて、凄く楽になる。嫌な事なんて何もなくなるし、亡霊と戦う事もない」

「それは、睡眠に限らないです」

「うん。例えば死とか？」

「他にも記憶喪失なんかもあります。嫌な事がクリアされます」

そうだね、と沙織は頷いた。人の持つ防御手段はとても豊富だ。

ただ、そのどれもが何らかの欠点を抱いている。そして、その多くは病として扱われる。防御手段自体が、自らへの攻撃手段に転じる事さえある。

「君もよく眠ってるけど、君は何か理由でもあるの？」

「ちよつと疲れやすい体質で、すぐ眠ってしまうんです」

そういえば前に病院で会ったつけ、と思う。身体も女の子のように華奢で、あまり体力があるようには見えない。

不意に、アラームが鳴る。またか、と思いながら沙織はポケットから端末を取り出した。第一・第二の両方に出撃命令が出ている。沙織は立ち上がった。

「私、行くね」

「はい。気を付けてください」

沙織は何も言わず、半開きになっていた扉から外に出た。冷たい風が吹く。沙織は深く息を吸って、駆けだした。

出撃準備室。沙織は戦闘服に着替え、兵装のチェックをしていた。全ての装備に異常が無い事を確認してから、部屋の外に出ようとした時、ふとある事を思い出す。沙織は自身の持つバックパックから、医療用ナノマシンの入った黒いケースを取り出した。ケースを開き、注射器と医療用ナノマシンが入っている事を確認する。沙織は薄く笑い、ケースを閉じた。

「ねえ、真紀」

近くにいた真紀に声をかける。

「んっ、どうしたの？」

「ちよつとの間バックパック交換してくれない？」

「え、何で？」

「お願い。出撃前に返すから」

真紀は不思議そうな表情を浮かべた後、床に置いていたバックパ

ツクを沙織に差し出した。沙織はケースをバックパックの中に放り込み、真紀のバックパックと交換した。

「ありがとう」

感謝の言葉を述べ、沙織は出撃準備室から外に出た。扉を開けた先には、秋山明日香が立っていた。

「こんにちは、沙織ちゃん」

明日香はニコリともせず、そう言った。对象的に沙織はにこやかな笑みを浮かべた。

「センセ、どうしたんですか？」

「そのバックパックを見せて貰えないかしら？」

「これですか？」

右手に持っていたバックパックを掲げてみせる。明日香は、ええ、と頷いた。沙織は少しだけ考える素振りを見せた後、素直にバックパックを明日香に預けた。

「どうぞ」

「協力、ありがとう」

明日香はバックパックを受け取ると、素早く中から黒いケースを取り出した。続いて、ケースの蓋を開ける。次の瞬間、明日香の動きが一瞬止まった。

「何をしている？」

横から抑揚のない女の声が届く。振り返ると、こちらを見据える神奈奈々の姿があった。

「先日のように不幸な事故がないかチェックしていました」

横の明日香が言う。奈々は表情を変えず、それで、と言った。

「それで、不幸な手違いはあったのか？」

「いえ、ありませんでした。改善されたようで何よりです」

明日香はそれだけ言って、失礼します、とその場から立ち去っていった。残された沙織は、奈々に視線を移した。奈々はじっと何かを探るように沙織を見つめた後、薄く笑った。

「上出来だ」

沙織は何も言わず、小さく頭を下げた。奈々が背を向け、去っていく。その直後、準備室から真紀が出てきた。沙織はバックパックを真紀に差し出した。

「これ、返すよ。ありがとね」

「何でいきなり交換しようって話になったの？」

真紀が不思議そうに首を傾げる。

「ん、手荷物検査に引つかからない為、かな」

「え？ 検査？ そんなものあるの？ 何それ何それ！ 聞いてない！」

「んー、ちよつと私だけね」

沙織は苦笑を浮かべて、誤魔化した。

「見られたらマズいのもあったの？」

真紀が沙織のバックパックを興味深そうに見る。

「うん。ちよつと、大事なお守りを入れてて」

そう言って、沙織は肩を竦めた。

その日の戦場は石川県の北西に位置する能登半島だった。外浦付近にある県道に自衛軍の輸送ヘリが次々と降り立ち、戦闘準備を整えて行く。特殊戦術中隊も同様に戦闘の準備の為、小隊ごとに固まって最期の点検を始めていた。

点検を終えた沙織は周囲を見渡した。周囲には水田が広がり、その背後には穏やかな山が聳え立っている。全体的に足場が悪い。戦いづらそうだった。

『亡霊群が到着するまで後五分だ。急げ』

通信機から低い男の声。沙織は、はい、と短く返事した。

中隊の準備が終わった頃、周囲に展開していた自衛軍の輸送ヘリが順番に上空へ飛び立ち始めた。戦闘状況を記録する為の無人機だけがその場に残される。沙織は機械翼を広げ、西の空を見上げた。

『後三分』

通信機から奈々の声。場に緊張が走る。

「構え！」

沙織の命令で、周囲に散開していた第一小隊のメンバーが一斉に小銃を蒼い海に向かって構えた。直後、空の向こうから発光体群が現れる。まだ辺りは明るい、紫色の光を放っている為、遠くからでも目立つ。

『目標数、十二』

随分少ないな、と思う。もしかしたら、亡霊の戦力は殆ど残っていないのかもしれない、などと希望的な考えが頭に浮かぶ。

十二の亡霊が視界にはつきりと映った時、沙織は叫んだ。

「撃て！」

強い風とともに、光条が一斉に上空へと吸い込まれていく。次いで轟音と共に爆発が起こる。膨張した空気が唸り声をあげ、熱風が地上まで降り注いだ。沙織は思わず腕で顔を庇った。

『三体がロスト』

腕を下げ、空を見上げると、陽炎の向こうに九体の亡霊がいた。

沙織はもう一度小銃を構え、叫んだ。

「構え」

それを合図に、亡霊が一斉に地上へ舞い降りてくる。奥に海に見える県道に降り立ち、九体の亡霊が空を仰いで咆哮をあげた。大気が震える。足が竦みそうになるのを必死に耐え、沙織は二回目の射撃命令を出した。

「撃て！」

いくつもの光条が空気を切り裂き、亡霊群の元へと殺到する。次いで爆音と爆炎があがった。そして、爆炎の中から亡霊群が飛び出してくる。

「散開！」

叫び、駆けだす。迫りくる亡霊を牽制しながら、沙織は地を蹴った。同時に機械翼を展開する。陸から飛び立ち、沙織は急速に高度

をあげていった。それを追うように三体の亡霊が羽を広げて上空へと舞い上がっていく。

沙織は空中でぐるりと振り返り、引き金を引いた。セミ・オートで放たれた光弾が亡霊群へと降り注ぐ。次いで、一体の亡霊の身体が弾けるのが見えた。そのまま、次の亡霊に向かって引き金を引く。呆気なく二体目の亡霊の頭部が吹き飛んだ。

最後の亡霊が距離を詰め、下方から襲ってくる。沙織は攻撃を諦め、更に高度をあげた。亡霊が追いかけてくる。上体を捻り、試しに三発ほど銃撃を加えてみるも、亡霊の動きは止まらない。沙織は深く息を吐き、上体を大きく仰け反らせた。瞬間、機械翼の出力ベクトルが外に向く。沙織の身体はその場で大きな円を描くようにループした。沙織の急激な空戦機動に着いていけなかった亡霊が沙織を追い越す。その直後、ループを終えた沙織が亡霊の後ろに張り付いた。僅かな眩暈を我慢し、小銃を構え、引き金を引く。銃声が轟き、亡霊の翼が吹き飛んだ。もう一度引き金を引く。亡霊の胴体が真っ二つに吹き飛ぶ。無力化した事を確認し、沙織は地上に目を向けた。高度を上げすぎたせいで、山と水田が広がっている様子しか見えない。周囲に敵がいない事を確認してから、ゆっくりと高度を下げていく。

まず、小道が炎上しているのが見えた。次に、一部の水田が抉り取られたかのように穴が空いているのが確認できる。中隊員の姿がばらばらと見えたが、どこにも亡霊の姿は見えなかった。

『亡霊の殲滅を確認した。今から医療チームを送る。待機せよ』

通信機から奈々の声。沙織は地上に降り立ち、友人の姿を探した。そして、すぐに異変に気づく。ある水田の横にある小道に第二小隊のメンバーが集まっていた。沙織はすぐに走り出した。

「誰か怪我したの？」

近くにいた少女に尋ねる。少女は動揺した様子で頷いた。

「うん、真紀ちゃんが……」

沙織は急いで人だかりの中に身を滑りこませた。中心でぐったり

と倒れる真紀の姿を視界に飛び込んでくる。傍には音々が座り込み、真紀の傷を抑えていた。出血が酷い。真紀の周りに血だまりが出来ていた。

「沙織！ 手、貸してくれ！」

沙織の存在気付いた音々が叫ぶ。沙織は弾かれたように真紀の傍へ駆け寄った。

「ナノマシンは？」

「打った。だけど、出血が酷い。抑えててくれ」

沙織は音々に言われた通り、傷口に当てられた布を音々の代わりに上から抑えた。真紀が小さく呻く。その間に音々が銃剣を取り出し、戦闘服の腹部を切りだす。そして、切り取った布を真紀の腹部に器用に巻きつけて行く。応急措置を施している間に、上空から機動ヘリのローター音が響き始めた。上空を見上げると、全部で八機の機動ヘリが降りてきているところだった。強い風が吹く。沙織は真紀を庇うように優しく抱きしめた。

一機の機動ヘリが少し離れた県道に降り立つ。すぐに中からオレンジのジャンパーに白いヘルメットを被った医官が三人飛び出してきた。沙織達を囲んでいた中隊のメンバーが道を開けるように広がる。

「こりゃあ、出血が酷いな…… D A - F は投与したかえ？」

医官が沙織の横に座り込み、声をかけてくる。沙織は頷いた。医官がゆっくりと制止するように手を出す。沙織は抑えていた手を離し、急いで医官に場所を譲った。

「この子、大丈夫ですか？」

「おいね。心配するこつたない」

医官は笑みを浮かべ、慣れた手つきで下に担架を潜り込ませた。二人の医官が担架を持ち上げる。残った一人の医官が通信機に向かって何かを喋り続けていた。

「他に負傷者はいねえか？」

医官が声を張り上げる。しかし、誰も名乗り出なかった。その間

に真紀が機動ヘリまで運ばれる。沙織はその様子をじっと眺めた。その間に上空で待機していた次々と機動ヘリが舞い降り始める。

『これより自衛軍が復興作業に入る。すぐに帰投せよ』
通信機から奈々の声。

「行こう」

不意に肩が叩かれる。振り返ると、疲れた表情を浮かべる音々がいた。

「うん」

沙織は小さく頷き、二人は並んで輸送ヘリに乗り込んだ。

ガタガタと揺れる輸送ヘリの中、沙織はじっと目を瞑って時が立つのを待った。駆動音に紛れて、ひそひそと喋り声が聞こえてくる。確か、第二小隊に所属している人の声。時折、笑い声が混じる。その声が酷く不快だった。

脳裏に血だまりの中でぐったりとする真紀の姿がフラッシュバックする。医官は心配ないと言っていたが、沙織の目には出血が酷すぎるように見えた。奇妙な無力感に苛まれる。

「お前ら、ちよつと黙れよ」

不意に、隣から音々の低い声が響いた。沙織は反射的に隣に目を向けた。そこには、前方を睨む音々の姿があった。今にも殴りかかりそうな雰囲気だった。音々の視線を辿ると、煩わしそうな表情を浮かべる二人の少女の姿があった。険悪な空気が流れる。沙織は心の中で時間を数えた。一秒、二秒、三秒。誰もアクションを起こさずとはしない。結局、二人が何も言い返さずとはしなかった為に、音々もそれ以上口を開く事はなかった。場に沈黙が落ちる。沙織は静かに目を瞑った。不快な笑い声は、もう聞こえなかった。

沙織達を乗せた輸送ヘリはそのまま亡霊対策室の本部に舞い降りた。沙織はタップを伝って、駐車場の一角に降り立った。その後から続々と中隊員が降りてくる。音々は沙織の横を通り過ぎて、無言

で本部に向かつて歩き始めた。そのまま黙って見送る。次いで、沙織は空を見上げた。他の輸送ヘリが次々と降りてくるところだった。強い風が巻き起こる。沙織は髪を押さえ、ゆっくりとその場から離れた。そして、通信機に向かつて口を開く。

「負傷者の容体はどうなっていますか？」

「先程病院へ搬送されたばかりです。詳しい事はまだ知らされていません」

僅かなラグを置いて、若いオペレーターの声が返ってくる。そうですか、とだけ返して沙織は通信を切った。

輸送ヘリから全員が降りた後、佐官が点呼を取り始める。すぐに音々がいない事が発覚したが、同じヘリに乗っていた数人が無事に帰投した事を告げ、小隊長の沙織がそれを肯定した為、すぐに音々の帰投が確認された。

点呼が終わり、ようやく解放される。沙織は早足で本部のエントランスへと向かった。

今日の戦闘は楽だった。それにも関わらず、酷く疲れが溜まっていた。とにかく眠りたい、と強く願う。

ロッカールームに向かう途中、沙織はトイレに立ち寄った。個室に入り、鍵を閉める。次いでバックパックから黒いケースを取り出し、中の注射器を床に叩きつける。小さな破裂音とともに透明な液体が床に散った。トイレトペーパーを乱暴に引き取り、それらをつき取る。沙織は最後にそれらを便器の中に放り込み、流した。深く息を吐き出し、トイレから外に出た。

そのまま当初の目的通り、ロッカールームに入り、戦闘服を脱ぎ捨てる。素早く私服に着替え、バックパックをロッカーに放り込む。そこで、沙織の意識は途切れた。

気付けば、沙織は自室のベッドで横になっていた。どうやってこ

ここまで辿りついたのか全く記憶が無い。上半身だけ起こす。酷い眩暈がした。そして軽い失見当識。自分が誰なのか、ここは何なのか、全てが曖昧になり、良く分からなくなる。

沙織は小さく首を振った。徐々に意識がはつきりとしてくる。

ふと、昔にもこんな事があったな、と思う。確か、本当にまだ小さかった頃。

沙織が生まれた時には既に父親がいなかった。母に説明を求めた事もなかった為、どういう経緯でそういう境遇に生まれたのかも分からない。ただ、母は一度だけこう言った。

『パパはね、ずっと遠くの国で頑張ってるの』

それで、少なくとも死別した訳ではない事が分かった。それに母が父を怨んでいる様子が全くなかった為に、捨てられたという訳でもなさそうだった。父親の事は今でも良く分からない。しかし、幼かった頃の沙織はそれに頓着しなかった。母は優しく、幸せな幼少期を送る事ができたから。

ただ、母の優しさというのは限度を超えていた。甘かった、とも言える。汚いところから目を逸らし、綺麗で優しい現実だけを見ようとするとする人だった。だから、母が連れてきた新しい父親が真正銘のクズであった時も、それほど驚かなかった。母には人を見る目がなかったのだろう。沙織の幸せな幼少期は、早くにして終わりを迎えてしまった。

新しい父親は酒癖が悪かった。慢性的に肉体的な苦痛を強いられる日々が続いた。そんな生活が何年か続いた後、父親が突然いなくなった。母も、いなくなった。沙織は一人になった。

何があったのか、沙織はよく覚えていない。記憶が、ぼつかりと抜けている。今のように。

まさか。私、そこまで深刻に思っただけ。ただ、時々そう思うだけ。でも、うん、寝てる間は確かに何のコントロールも受けないね。全てのノイズがクリアされて、凄く楽になる。嫌な事なん

て何もなくなるし、亡霊と戦う事もない。

それは、睡眠に限らないです。

うん。例えば死とか？

他にも記憶喪失なんかもあります。嫌な事がクリアされます。

ふと、今朝の優との会話が脳裏をよぎる。沙織は首を振った。そして携帯を取り出す。アドレス帳から総務部のアドレスを選択し、僅かに躊躇してから発信した。

三コール目で女が出た。沙織が真紀の容体について尋ねると、意識不明の重体であるという趣旨が説明された。そして、暫く面会はできないとの説明も。沙織はすぐに通話を切った。ベッドに倒れ込む。沙織は目を瞑った。深い暗闇に身を落としていく。その中に安息があると信じ、沙織は意識を手放した。

次の朝、沙織の世界に小さな異変が起こっていた。

ベッドから起きようと思っても、身体が動かなかった。身体が鉛のように重い。身体だけでなく、頭も上手く働かなかった。考えるのが酷く億劫で、何もしたくない。

サイドテーブルに手を伸ばし、携帯を手取る。時刻は十一時三十七分。後二十分程で訓練が始まる。起きなくちゃ、と思うも、一向に倦怠感が取れる様子はなかった。

サボろうかな。そう思った次の瞬間、沙織の意識は現実から急速に遠のいていった。

気付けば、廊下に立っていた。強い頭痛が走り、頭がクラクラする。沙織はゆっくりと周囲を見渡した。寮棟の二階の廊下。少し離れたところに音々が立ち、こちらを見ていた。

「それじゃあ、私は部屋に戻るから」

音々が言う。

「え、あ、うん」

沙織が反射的に頷くと、音々は背を向けて自室に戻っていった。それを最後まで見送る余裕もなく、沙織はもう一度辺りを見渡した。見慣れた廊下。反射的にポケットに手を伸ばし、携帯を取り出す。時刻は十六時十二分。軽い眩暈を覚えた。

額に手を当てる。その時、自身の髪が濡れている事に気付いた。髪だけではない。全身が冷え切っている。大量の汗をかいているようだ。どうやら、訓練を終えた後らしい。しかし、そんな記憶はない。

沙織はゆっくりと目を瞑った。ストレス性の健忘症の一種かもしれない。医務室に行くべきだろう。しかし、どうも行く気がしない。沙織は溜め息を吐き、自室へ向かった。

部屋の扉を開けると、埃っぽい香りがした。そういえば最近掃除をしていないな、と思う。

トイレと洗面所を通りすぎ、寝室に入る。沙織は一つの異変に気付いた。普段利用していない勉強机の上に一冊のノートが開かれている。沙織はゆっくりと机に近づいた。そしてノートを覗きこむ。

”きみは、死にたい？”

背筋を寒気が走った。反射的に背後を振り返る。暗い廊下が見えた。寝室を出て、洗面所の明かりをつける。誰もいない。念の為に奥の浴室を確認してから、沙織はもう一度寝室に戻った。特に荒らされた形跡は見当たらない。沙織は勉強机の上に開かれたノートに再び目をやった。

”きみは、死にたい？”

簡素な一文。子どもが描いたかのような乱れた筆跡だった。誰が、一体何の目的で描いたのだろう。気持ちが悪い。沙織はノート手に取り、奥の本棚に押しやった。

ベッドに倒れ込む。そして思い出したように携帯を取り出した。総務部のアドレスを選択し、発信する。今回も三コール目で女が出た。真紀の容体を尋ねると、まだ意識が戻らないとの説明を受けた。そうですか、と言葉を残して通話を切る。

何もやる気が起きない。沙織はベッドで横になったまま目を瞑った。

”きみは、死にたい？”

ノートに描かれたメッセージが頭をよぎる。次いで、血だまりの中に倒れる真紀の姿が浮かんだ。

寝がえりを打ち、掛け布団を頭までしっかりと被る。そこで、急速に吐き気が込み上げてきた。掛け布団を跳ね飛ばし、急いで洗面所に駆け込む。沙織はそこで胃の中の物を全て戻した。

吐きながら、ふと思う。この身体は死を求めているのではないか。そして、今更か、と思う。ナノマシンの投与制限を無視してまで戦場に身を投じてきたのだ。この身は死を求め続けている。精神は、安息を求め続けている。

いつからだろう、と思った。

義父に暴力を振るわれた時？ 両親がいなくなつて、突然一人になった時？ 孤児院に入れられて、いじめに遭った時？ 毎日門の前で母を待ち続けて、もう来ないと悟った時？ 知らない人に引き取られて、作り笑いを浮かべる習慣がついた時？ 心許せる人がいない事に気付いた時？

詳しい事は、最早覚えていなかった。ただ、気付いた時には沙織の人格は最早自分のものではなくなつていて、生に執着する必要もなくなつていた。

そこに、鎖が巻きついた。致命的な鎖だった。ESP能力。いつか憧れた奇跡の力は、何の価値も持たないものだった。まず、居場所が失われた。沙織がESP能力に目覚めた事を知った育ての親の瞳には確かな恐怖の色が宿っているのを見つけてしまった。致命的な色合いだった。沙織は家を出ざるを得なかった。そして社会的な

檻の中に放り込まれ、白い防具服を着用した研究者達に恐ろしい怪物のように扱われた。表面的には手厚い保護を受けたが、沙織を見る瞳には一様に恐怖や好奇心の色が宿り、それは大凡同じ人間に向けられるべきものではなかった。

そして重りが取り付けられた。致命的な重りだった。沙織が得たESP能力は、後続的に発見されたESP能力者の力よりも幾分か価値があるものだったのだ。結果として第一小隊長としての立場を渡され、不安定な中隊と軍産機構を結ぶ為のインターフェースとしての機能が求められ始めた。それは結果的に沙織を更なる孤独へと追いやる事になった。沙織と同様に、ESP能力者の多くは軍産機構を信用していなかったのだ。更に言えば、その矛先は軍産機構だけでなく社会全体に向けられていた。彼女達は、社会を憎悪していたとも言える。インターフェースとしての役割を持っていた沙織は彼女たちに歓迎されなかった。恐らくは、司令部の手駒のように見られていたのだろう。表面的な協力は得られても、沙織が真の意味で信用される事はなかった。

ただ、二番目に発見されたESP能力者である第二小隊長の真紀と、三番目に発見された音々だけは他の中隊員と違い、沙織を良く助けてくれた。

沙織が二人と出会ったのは亡霊対策室が設立される一年半前の事だった。稀有なESP能力者として病院で様々な検査を受けていた時、待合室で真紀に出会った。その時の真紀は今ほど表情豊かではなく、死人のような顔をしていた事が強く印象に残っている。逆に奥村音々は初めて対面した時は恐ろしく好戦的な性格をしていた。

世界中の人間を敵と認識しているのではないか、と思った程だった。そんな三人はすぐにお互いを同類のだと認識し、意気投合した。ただし、それは一般的な仲良し三人組とは違った。それは、ある種のシニカルな一面を持っていた。ESP能力者としての立場を守る為の、武力の発動をも辞さない三人だけのコミュニティ。みなしごととして、残された唯一の居場所を守る為の最後の砦。三人の間には

普通とは違った確かな絆があった。口に出した事はなかったが、沙織は二人が好きだった。多少お節介であっても、暴力的であっても、それすらも奪われていく。全部、壊されていく。

沙織の頬を涙が伝った。いつだって、そうだった。両親がいなくなつて、沙織は居場所を失った。いじめという行為で、沙織は居場所を失った。ESP能力の発現で、居場所を失った。

構造だ、と沙織は思った。構造が、全てを支配している。構造によって全てが奪われ、壊されていく。辺りを包み込む構造の全てがあらゆるものを残さず摘み取っていく。柊沙織という人格は構造によって作り出され、構造によって動かされている。そこには、沙織という実在存在が道を切り開く余地など残されていなかった。沙織のあらゆる行動は何の影響も持たない。沙織の行動に関係なく、構造は沙織を孤児にし、居場所を奪う。構造は沙織にESP能力を発現させ、亡霊対策室という鎖を巻きつける。構造はESP能力の優れた沙織にインターフェイスという重りを取り付ける。誰が”柊沙織”という役割を演じてても、そう転ぶように仕向けられている。構造が、全てに先立っている。その後、柊沙織という人格が作り上げられる。構造が、柊沙織という存在を作り上げていく。

沙織は気付いた。自らの存在が、構造が作り上げた虚構である事に。自由意思は大いなる構造の前には意味を持たないのだ、と。

沙織は目を瞑った。

私には現実が見えない。現実を作り出す構造が見えない。

私には現実が分からない。観測にはノイズが混じる。真の構造は認知し得ない。

私は

洗面台に手をつき、沙織は大きく息を吐きだした。そして、ゆっくり顔をあげる。ふと、ユウに会いたい、と思った。鏡に映る自分の顔を睨みつけ、沙織は洗面所から飛び出した。

暦は十月。寒空の下、沙織は本部裏の倉庫群に辿りついた。倉庫

群の間を冷たい風が吹き抜ける。沙織は乱れる髪を押さえながらU・05と表記された倉庫の扉を開けた。差しこんだ光の向こうで、マットに背を預けたユウがこちらに顔を向けるのが見えた。

「こんばんは」

ユウはそう言うてにっこりと笑った。無邪気な笑み。一瞬、沙織はその笑みに見惚れた。

「……こんばんは」

遅れて言葉を返し、ユウの隣に座り込む。ユウは首を傾げて、沙織の顔を覗きこむように身を屈めた。

「泣いてるんですか？」

「え？」

慌てて目を擦る。

「何か、あつたんですか？」

何故か顔を直視できなくて、沙織は目を逸らした。

「……友達が怪我をして、意識が戻らない」

「大事な、お友達だったんですか？」

「とても」

沙織は目を伏せた。

「柊さん」

ユウが名前を呼ぶ。とても優しい声色だった。沙織が顔を上げた途端、ふわりと全身が温もりに包まれた。遅れて、ユウに抱きしめられたのだと気づく。

「ユウくん？」

ユウは何も言わなかった。沙織は目を瞑り、無限に広がる温もりに身を委ねた。ふと、昔の記憶が蘇る。全てが壊れる前の、母と二人で暮らしていた頃の記憶。沙織はギュッとユウの身体を抱き返した。今にも折れてしまいそうなほど華奢な身体で、沙織はほんの少し驚いた。

暫くそうしていた後、不意にユウが口を開いた。

「覚えていますか？」

何が、とは聞かず、沙織は無言で先を促した。

「昔、僕と柘さんは何回か出会ってるんです」

「え？」

思わぬ言葉に、小さく声が漏れる。

「ずっと昔です。凄く、遠い時。柘さんは、助けを求めています。だから、僕は手を差し伸べました」

背中に回されていたユウの腕がゆっくりと解かれる。ユウの穏やかな双眸が沙織の瞳を覗きこむ。

「今も、柘さんは助けを求めています。僕は今一度柘さんの願いに応えたいと思っています。手を、出してください」

そう言つて、ユウは右手を軽く前に差し出した。その手が、淡い翡翠の光を放つ。

「ESP、能力……なんで……」

沙織はユウをじつと見つめた。ユウの身体から溢れる光は正真正銘のESPエネルギーだった。倉庫内が明るく照らし出される。

「うそ。何で、きみは、何を……？」

「柘さんのESP能力を僕が全て継ぎます。これからは僕が柘さんの代わりに戦います」

ユウが何を言っているのか理解できなかった。ただ、ユウがESP能力者である事だけは確かなようだった。

「君は、何なの？」

疑問が自然と口に出る。ユウは屈託のない笑みを浮かべ、口を開いた。

「貴女の救済が、僕の唯一の存在理由です。手を、出してください」

沙織は黙ってユウの端正な顔を見つめた。

「手を出したら、どうなるの？」

「柘さんのESP能力は失われ、僕がそれを受け継ぎます。柘さんは、闘いから解放されます」

馬鹿な、と頭の片隅で思った。しかし、眼前で淡い翡翠の光を放つユウを見ると、何故か事実として受け入れる事ができた。ユ

ユウは本当にESP能力を引き継ごうとしている。それが如何なる口ジックで行われるかは分からないが、恐らくユウは本当にそれを実行するだろう。ならば、と沙織は思った。

「君は、ESP能力を持っているの？」

はつきりとユウが頷く。沙織は大きく息を吸った。視界が開けるような、奇妙な幻が視界を掠める。

「私と肩を並べて、戦ってほしい」

言った瞬間、何かに亀裂が走った。それは全てに先立っていた構造に対して、柊沙織という存在が初めて影響を与えた瞬間だった。

「……柊さんが、それを望むなら」

ユウはにっこりと笑った。

構造は壊れない。しかし、確かな亀裂が走った。ユウという実在存在は近い将来、構造を先立つ存在になるかもしれない、と沙織はふと思った。

「でも、僕は今動ける状態にありません。少し時間をください」

「動けない？」

沙織が聞き返しても、ユウは答えようとはしなかった。仕方が無く、別の質問を重ねる。

「ねえ、君、男の子だよな？」

ユウは一瞬キョトンとした顔を見せた後、ムスツとした表情を浮かべた。

「当たり前です」

「男の子のESP能力者って、いないんじゃないの？」

ユウは答えない。今度は質問を変えようとはせず、更に疑問を重ねた。

「もしかして君がここにいるのは、君の意思じゃないの？」

ユウは何も喋ろうとはしなかった。沙織は負けじと更に口を開いた。

「君以外にも、男の子のESP能力者がいるの？」

ユウは首を振った。

「少し、疲れしました。もう寝ます」

ユウはそう言って顔を伏せた。そして、もぞもぞとマットの上で丸くなる。沙織は思い切って口を開いた。

「ねえ、今日は私もここで眠って良い？」

「どうぞ」

すぐに眠たそうな声が返ってくる。本当に疲れているようだった。沙織はゆっくりとユウの隣に移動し、横になった。ユウの寝顔を少しだけ見てから目を瞑る。全てのノイズがキャンセルされ、沙織の意識は虚無の中に落ちていった。

その日、沙織は夢を見た。

長いレールの上に沙織は立っていた。沙織だけでなく、知らない人も大勢いる。その全員がレールの上を真つすぐに歩いていた。沙織だけが、ポツリと立ち止まっている。沙織は辺りを見渡した。周りの人たちは一人で笑ったり、泣いたりしている。そして、一人でレールを歩き続けている。沙織は立ち尽くしまま動けなかった。

どれくらいそうしていただろう。不意に沙織の手が握られた。見ると、男の子が立っていた。男の子が沙織の手を取り、歩き出す。沙織は黙ってその後に着いていった。

男の子がレールから外れ、両サイドに聳えるフェンスを昇り始める。沙織は下から心配そうにその様子を眺めた。男の子がフェンスを昇り終え、頂点でこちらに向かって笑みを浮かべる。そして手がさしのばされた。沙織は、男の子の手を取ろうと手をさしのばした。

朝。目覚めと共に、沙織は何かを掴もうと手を伸ばした。虚しく手が空を切る。

沙織は上半身を起こし、目を擦った。そして、辺りを見渡す。ユウの姿が無かった。

「ユウくん？」

小さな声で名前を呼ぶ。返ってきたのは耳が痛くなるほどの静寂。どうやらユウはもう家に帰ったらしい。

沙織は立ち上がって小さく背伸びした。そして、倉庫の扉を力いっぱい開く。途端に鮮やかなオレンジ色の光が目覚めたばかりの目に飛び込んできた。沙織は目を細め、倉庫の外に出た。見事な朝焼けで、まるで空が燃えているようだった。ポケットから携帯を取り出して時間を確認しようとする、着信が三件ある事に気付いた。一番上にあつた奥村音々のアドレスに掛け直す。音々はすぐに電話に出た。

『沙織か？ 真紀が目覚めました』

飛び込んできた第一声とともに沙織は駆け始めた。

「今、病院？ すぐ行く！」

『ああ、一応怪我の方がもう大丈夫らしい。少し戦闘時の記憶が曖昧なようだが、それ以外は問題なさそうだ』

『沙織ちゃん！ 聞こえてるー？』

電話口から真紀の声が漏れてくる。次いで音々が苦笑する様子が伝わってきた。

『……聞こえたか？ この通り、何も心配する必要がないほど元気だ』

「うん……うん。待ってて。一時間くらいでそっち行くから！」

『そんなに急がなくても』

音々が何か言いかけたのが分かったが、沙織は電話を切った。間髪置かず、総務部に電話御かける。今度も三コール目で若い女が出た。

「もしもし！ 外出許可をください！」

4章 45話 柘沙織(8)

沙織が保安部の運転手を駆り出して病院に到着したのは沙織が宣言した通りの一時間後の事だった。受付で真紀の病室を聞きだし、誰もいない廊下を走る。早朝である為か、他の人と出会う事はなかった。個室が並ぶフロアへ辿りつき、真紀の部屋の扉を勢いよく開けると、ベッドの上で横になった真紀と傍に立つ音々が一斉にこちらを向いた。

「あ、沙織ちゃんだ」

「随分と早かったな」

二人が同時に口を開く。拍子抜けするほど真紀は元気そうだった。沙織は肩で息をしながら、部屋の中へゆっくりと足を進めた。

「良かった……」

ポツリと言葉が漏れる。真紀は一瞬キョトンとした後、恥ずかしそうに笑った。

「心配掛けてごめんね」

「傷は？」

沙織はそう言って真紀の傍にある椅子に座った。真紀は、大丈夫大丈夫、と言って腹部が見えるように白いシャツを捲った。申し訳程度に包帯が巻いてあるだけで、どうやら心配する必要はなさそうだった。

「痛みは？」

「動くとちよっと。暫く入院する事になるみたい」

真紀はおどけるように肩を竦めた。

「休暇と思ってゆっくり休みなよ。暫くは音々が代わりに頑張ってくれるから」

「おい。人に押しつけんなよ」

音々が不機嫌そうに言う。真紀はクスリと笑った。

「そうだね。暫くはゆっくり休もうかな。でも、やる事がなさすぎ

て暇なんだよね」

「本部の方から何か持ってこようか？」

沙織が提案すると、真紀は顔を輝かせた。

「うーん、そうだね。私の部屋にある本を持ってきてほしいな。まだ読んでないのがいっぱいあって」

「わかった。今から取ってくるね」

「え、ちょっと！ 沙織ちゃん？ そんなに急がなくても」

真紀が何か言っているのが聞こえたが、沙織はそれを無視して病室を飛び出した。気分が軽かった。誰もいない廊下を駆け、エレベータに乗りこむ。扉が閉まる寸前、廊下の向こうから走ってきた音が滑りこんできた。

「お前、少しは他人の話を聞け」

「何が？」

沙織が首を傾げると、音々は呆れたような表情を浮かべた。

「いや、良い。私も行く。真紀も体力が回復してないみたいだしな。少し一人で休んでた方が良さだろう」

「そうだね。ちょっと、ゆっくり行こうか」

エレベーターが一階に着き、扉が開く。二人はエレベーターから降りて、薄暗い廊下を並んで歩いた。そのまま誰もいない待合室を通って外に出る。表の駐車場に停まった白い乗用車の中から若い女が手を振って合図するのが見えた。沙織と音々は真つすぐと乗用車に乗り込んだ。

「出してください」

沙織が言うと、保安部から派遣された運転手は黙ってアクセルを踏んだ。乗用車がゆっくりと動き出す。

「何か、良い事でもあったのか？」

何でも無い風を装って音々が突然そう言った。沙織は思い当たる節が見つからず、思わず音々を見た。

「んー、良い事？」

「いつもより明るく見える」

「そうかな」

沙織が首を傾げると、音々は目の前で親指を立てた。

「真紀から聞いたぞ。男が出来たって」

ようやく音々の言いたい事が分かって、ああ、と沙織は納得した。

「そういうのじゃなくて、ただの知り合いだよ。それに、そういう対象でもない。素直で良い子だけだね。ユウ君って言ってね、どちらかと言うと真紀の好みかも」

「年下か？」

多分、と沙織は言った。続けてユウがESP能力者である事を言おうかと思つたが、寸前で踏みとどまった。公式的には、男性のESP能力者は存在していない事になっている。ユウがどういった立場にあるのか分からない状態で不用意に話を広げるべきではない。

「今度、機会があつたら紹介するね」

「……そいつは、沙織がESP能力者である事を知っているのか？」

音々が言いづらそうに口を開く。何が言いたいのか察し、沙織は柔らかい笑みを浮かべた。

「知ってるよ。でも、それに関連した問題は特にないな」

「そうか……」

音々はそれつきり窓の方を向いて口を開こうとはしなかった。沙織も無理に会話を続けようとはせず、目を瞑って心地良い振動に身を委ねた。

「着いたぞ」

音々の声で沙織は慌てて目を覚ました。窓のすぐ外にエントランスの入り口が見える。沙織はすぐにシートベルトを外し、車外に出た。音々も反対側のドアから外に出るのが見えた。ドアを閉め、最後に運転席に向かって軽く頭を下げる。運転手の女も軽く会釈を返し、そのまま車が駐車場の方へ出ていった。それを見送ってから、沙織と音々はどちらからともなくエントランスに入った。そこで、音々が小さく舌打ちした。

「……真紀の部屋の鍵持ってきたか？」

「あー……持ってきてないや。でも、開いてるんじゃない？ わざわざ出撃時に鍵閉めないでしょ？」

「それもそうか」

音々は納得したように頷いた。エントランスのエレベータを利用して、二階に昇る。そのまま長い廊下を渡り、寮棟と本部を繋ぐ通路を通って寮棟に辿りつく。人影は殆どない。携帯を開くと午前八時半という表記が目飛び込んできた。今日は訓練もない為、まだ寝ている人が多いのだろう。

真紀の部屋につき、ドアノブを回す。ドアはあっさりと開いた。

「おじゃましてーす」

小さく呟いて、沙織は中に入った。音々が後から続く。

短い廊下を通り、唯一の洋室の扉を開ける。綺麗に整理された本棚が真つ先に目に飛び込んできた。沙織は本棚の前に進み、後ろの音々に問いかけた。

「どれ持っていけば良いのかな？」

「電話してみるか」

音々はそう言って携帯を取り出した。その間に沙織は本棚を眺めた。漫画が大半を占めているが、一角に難しそうな本が固まっている。洋書も混ざっていた。意外だな、と思う。

「すまん、寝てたか？ ……いや、どの本持っていけばいいのか分からなくて。ああ……、分かった。沙織、氷の華って漫画取ってくれ」

沙織は本棚に視線を走らせた。背表紙が水色であった為、『氷の華』はすぐに見つけた。

「全部で六巻あるけど、どれから持っていくの？」

「五、六巻の二つだけで良いらしい。それと……私が取った方が早いな」

音々はそう言って、本棚から本を次々と抜き取っていった。

第六小隊長、白崎凜は右手で鷲掴みにしたセラフィムの頭部を見つめ、小さく笑った。右手にESPエネルギーが収束し、発散する放たれたESPエネルギーによってセラフィムの頭部が跡形もなく吹き飛び、一瞬で塵と化した。

凜は切り裂かれた腹部を押さえ、下方を見た。第一分隊と第二分隊は既に亡霊群を殲滅し終えたようだった。

「司令部、他の小隊はどうなっている？」

通信機に向かって尋ねると、一瞬の空白を置いて電子オペレーターの声が返ってきた。

『第一小隊、壊滅。第二小隊、負傷者〇。第三小隊、詳細不明。現在交戦中。第四小隊、負傷者一名。黒木さん戦線離脱。第五小隊、詳細不明。現在交戦中』

凜は一瞬、耳を疑った。

「第一小隊が壊滅？」

『セラフィムの執拗な攻撃を受け、指揮系統が破綻しました。物理的な戦力は残っている為、現在再編中です』

「自由に動ける小隊長級は私と姫野だけか？」

『いえ、姫野さんはセラフィムを引きつける事に集中しているように、自由に動ける状態ではありません』

どうやら予想以上に戦力を削られているようだった。凜は静かに目を瞑った。

「損耗率は？」

『二十七パーセントです』

中隊全体の戦闘継続能力に支障が出始めているようだった。こうなると秩序立った機動を取る事は難しい。再編の為に一度退くのが定石だが、今はそれを実行に移す余裕が無い。

凜は第一分隊と第二分隊の元まで高度を下げ、その消耗具合を確認した。全体的に疲労の色が漂っているが、士気は保たれている。

「これよりアメーバに攻撃を仕掛ける！ 体力と気力の余っている者は着いてこい！」

凜はそう叫んで、遠方の空に浮かぶアメーバに向かって飛翔した。

沙織と音々が本を詰めた鞆を持って真紀の滞在する病院に戻ったのは午前十時過ぎの事だった。真紀はベッドの上ですやすやと寝息を立てて眠っていた。沙織は音々と顔を見合わせ、黙ってベッド脇に設置されている椅子に腰かけた。それから持ってきた本を鞆から適当に漫画を取り出し、読み始める。音々も同じように漫画を静かに読み始めた。

二人が暫くそうやって時間を潰していると、十二時を過ぎた辺りで真紀が目を覚ました。

「ごめん、ぐっすり寝ちゃってた」

真紀は目を擦りながらそう言った。音々が漫画から目を離さず、気にするな、と返す。

「とりあえず、持ってきたよ。こんなんで良い？」

沙織は読んでいた本を閉じて、本の詰まった鞆を差し出した。真紀が、ありがと、と言って受け取り、中の本を順番に取り出していく。それを眺めていた沙織は、不意に一つの本に目を奪われた。

「真紀。それ、何て読むの？」

R a i s o n d e t r e と題された赤い表紙の本。真紀は一瞬キョトンとした表情を浮かべた後、恥ずかしそうに首を振った。

「んー、私も読み方は知らない。中身は海外の翻訳小説だよ」

「小説かあ。読んで良い？」

「うん。持っていて良いよ」

真紀の了承を得て、沙織は本を手に取った。パラパラと目次を飛ばし、序章と題されたページに目を通す。翻訳小説特有の違和感があるが、読書に支障をきたす程ではなかった。

その物語は病室から始まった。一人の少女が癌の宣告を受け、残り少ない生を後悔しないように生きていく、というものだった。粗筋だけ見れば、ありきたりな物語。しかし、沙織はその物語に強く引き込まれた。物語中の少女の姿が、自分に被った。緩やかに死にゆく運命にある自分と、急速に死にゆく少女。決定的に違うのは、死の時期が明確か、そうでないか、だろう。物語中の少女は定められた死が訪れるまで、ノートに自らの存在理由を記し、今後の指針を明確に打ち出していた。少女は、死に対して覚悟を決めていた。自分は違う、と思う。確実に訪れるだろう死を不明瞭なものとして扱い、安息だけを求めてきた。

私が生き続ける理由。生を選択している理由。私の指針はどこにある？

「沙織」

名前を呼ばれ、沙織は慌てて顔を上げた。音々と真紀がじつとこちらを見ていた。

「そろそろ帰ろう」

「え？ あ、もうこんな時間……」

窓の外が暗くなっていた。壁に掛った時計は午後五時を指している。

「沙織ちゃん、良かったらそれ持っていく？」

真紀が顔を覗きこんでくる。沙織は素直に、うん、と頷いた。

「私、それ読んじゃってるから、ゆっくり読んで大丈夫だよ」

「ありがと」

真紀の気遣いに感謝し、沙織は立ち上がった。

「また、明日来るね」

「風邪、引くなよ」

「うん、今日は二人ともありがとね」

軽い挨拶を交え、沙織と音々は病室から出た。廊下の冷たい空気が二人を包む。辺りには相変わらず人影がない。沙織たちの足音が静かな廊下に響いた。

「随分と熱心に読んでたが、あの本そんなに面白かったのか？」

「まあ、面白かったよ」

「読み終わったら私にも貸してくれ」

沙織は曖昧に頷いた。

帰りの車内で沙織はずっと小説の事を考えていた。作中で少女は自らの指針を明確に打ち出していた。私の指針は何だろう。何だったのだろう、と思いを巡らせる。

幼かった頃は幸せだった。父はいなかったが、母がいればそれで十分だった。それがいつしか、壊れてしまった。何だって壊れていく。巨大な構造に巻き込まれ、全てを破壊していく。

私は今も母を待ち続けているのかもしれない、と思った。ある日突然目の前に現れ、ここから連れ出してくれるのを待ち続けているのかもしれない。幼かった頃の存在理由は母そのものだった、と思う。そこから全く成長していない気がした。

今の存在理由は何だろう。真つ先に音々と真紀の顔が浮かんだ。

唯一の心許せる友人。この二人がいなければ、とうの昔に自分は死んでいた気がする。それから、サクライ・ユウの顔が思い浮かんだ。知り合ってまだ間もないにも関わらず、不思議と信用できた。彼は危害を加える存在ではない、と直感的に感じ取る事ができた。

沙織はそこで思考を止め、靴に入れていた本を取り出した。読みかけていたページを開き、目を通す。後もう少して読み終える事が出来る。

「酔うぞ」

横から音々の声。沙織は、うん、と返事したが、本から目を離そうとはしなかった。

物語は少女の死で締めくくられていた。少女の幼い身体は癌によって支配され、壊された。自らの身体を構成する筈の細胞が、目的を見失って増殖だけを行く病。皮肉な事に、癌細胞には通常の細胞とは違って”系統的な寿命”が存在しない。無限に増殖する

仕組みになっている。それが、マクロな命を破壊していく。そして、少女の若い身体という構造自体が癌の侵食を速めていく。生を象徴するそれらが、死を象徴する何かに書き換えられていく。

それは、ESP能力にも言える事だな、と沙織は思った。自らの武器とも言えるESP能力の刃は沙織自身に向かっている。自らの命を守る筈のそれが、自らの命を削る要因になっている。上手くない、と首を振った。

沙織はエピソードの後にあつた翻訳者による解説に目を通した。少女が実在する人物をモデルに造られた事、次に現在の癌の治療法について長々と書いてあつた。それから最後にタイトルの *Raisond'être* はレゾネーターと読み、存在理由を意味するフランス語である事が記載されていた。翻訳者の恩師が記号論をやつていて、よく口にしていたというエピソードも。

沙織は本を閉じ、目を瞑った。何故か、無性に泣きたくなつた。

車が本部に着き、沙織と音々はエントランスの前に降り立った。

すっかり辺りは暗くなつていて、風が冷たかつた。早足でエントランスをくぐり、吹きぬけになつた階段を上る。廊下で三人の女が大声で雑談してるのが目に入った。その内の一人は髪を団子に結つていて、ちよつとした雪だるまみたいだな、と思つた。

「沙織、ちよつとジュース買って来てくれないか。もちろんホットのを」

不意に音々が五百円玉を投げて、そう言つた。沙織は五百円玉を慌ててキャッチして、良いよ、と了承した。音々に背を向け、近くの自販機に向かう。自販機の周りには二つのベンチがあつたが、誰もいなかった。

販売機に五百円玉を入れ、何を買おうかな、と悩んだ時、背後から怒声が届いた。驚いて振り返る。吹きぬけになつた反対側の通路で、音々が先程見た団子に結つた女に殴りかかっているのが見えた。音々が何か叫んでいるのが聞こえたが、具体的な内容までは聞き取

れなかった。

「ちよつと！ 音々！」

沙織が駆けだした時、揉み合う音々達の方から閃光が走った。反射的に足を止めて目を背く。次いで、それがESP能力によってもたらされた閃光である事に気づき、沙織はすぐに駆けだした。

沙織が音々達の元に着いた時、音々は一人の女を組み伏して、馬乗りになっていた。その周りで二人の少女が顔を蒼くして立ち尽くしている。音々は息を荒くし、拳を振り上げたまま固まっていた。

「いいか。お前は私にすら勝てないんだ。私より上の真紀や沙織がお前らみたいな態度をとってる奴を何故締め上げないか、わかるか？」

音々の振りあげた拳に翡翠の光が宿る。沙織は咄嗟に叫んだ。

「音々！」

音々はこちらを見ようとはしなかった。その代わり、翡翠の光が四散する。その直後、階下から自動小銃を構えた男達が雪崩れ込んだ。エントランスを警備していた保安部が総出で出てきたのだろう。

「動くな！」

男達の内、誰かがそう叫ぶ。音々は舌打ちして、女の上から降りた。女が小さく咳き込む。よく見ると、第二小隊に所属している子だった。

場に沈黙が落ちる。音々は気怠そうに両手を上げ、音々に組み伏せられていた少女はその場で荒い息を繰り返していた。小銃を構えた男達は動かない。処分に困っているようだった。ESP能力者のこうした扱いについて前例がないのだろう。一人が迷うように通信機に向かって報告を始める。沙織はその場から動けなかった。

約五分後、神条奈々が数人の男を引き連れて現れた。奈々は到着早々、音々に目を向けて溜め息を吐いた。

「やってくれたな」

音々は何も言わない。奈々はゆっくりと目を瞑り、小さく息を吸った。

「何が原因だ？」

「八つ当たりです。無能な部下と無能な上司に挟まれた者の境遇に腹が立って」

音々がはつきりと言い放つ。奈々は首をゆっくりと横に振った。

「ESP能力を使用した事に対する弁明は？」

「ありません」

音々が即答する。奈々は暫く黙りこんだ後、無表情に口を開いた。「ESP能力者の立場が危うい事は理解している筈だ。もう一度聞こう。ESP能力を使用した事に対する弁明は？」

「ありません」

音々の答えは変わらなかった。奈々は既に小銃を下ろしている保安部の者に視線を向けた。

「奥村を部屋まで連れて行け。処分は保留だ。詳しい事が決まるまで謹慎を言い渡す」

「はい」

二人の男が前に出て音々の両手を拘束する。音々は抵抗しなかった。

「お前、怪我は？」

倒れていた少女に奈々が声をかける。髪を団子に結びあげた少女は黙って奈々を睨み、首を振った。奈々はすぐに興味を失くしたように視線を外し、再び音々に目を向けた。

「残念だ」

それだけ言い残し、奈々は背を向けた。同時に周りの男達もそれに追随する。最後に奈々の周りの男達が何かを囁き合うのが見えた。その場に残された沙織は、ゆっくりと髪を団子に結った少女を見た。隣にいた少女の友人らしき二人と目が合う。誰も何も言わなかった。沙織は背を向け、エレベーターに向かって歩き始めた。

部屋に戻ると、沙織はベッドに倒れ込んだ。携帯を開き「私は気にしていない。音々が怒る必要はない」という旨のメールを送る。

すぐに返信が届いた。

『私是我慢できなかった。迷惑をかけてすまなかった』

簡素な文。沙織は、ありがとう、とシンプルなメールを返した。それからベッドの上で、ぐったりと横になる。音々があれほど怒っている所を沙織は見た事がなかった。少し、嬉しかった。同時に羨ましいとも思った。ああいう風に自分の意志をはっきりと表現する事は難しい。音々は明確な指針を持っている。自分には、ない。

ふと、ある事を思い出して沙織はベッドから起き上がった。そして、机の上にある本棚からノートを取り出す。表紙を捲ると、”きみは、死にたい？”という一文が視界に飛び込んできた。沙織はペンを手にとつて、深く息を吸った。

”私は、死にたくない”

それから、沙織はペンを走らせた。R a i s o n d e t r e と題された物語の中で死にゆく少女がやっていたように、ペンを動かしていく。書き終えると、沙織はノートを閉じた。それから味気ないノートの表紙を見て少し考える。僅かな間において、沙織は再びペンを走らせた。

「第一小隊の再編が完了しました」

副司令である長井加奈から報告を受けた神条奈々は小さく頷いた。

「既に第二、第四小隊が包囲を始めている。向かわせなさい」

「わかりました」

奈々はESPレーダーに映った中隊の動きを注意深く眺めた。

第一小隊は洋上に浮かぶ艦艇で再編を終えたばかり。中央で敵亡霊群を相手していた第六小隊は敵の本体を破り、敵陣深くに位置するアミーバに向かっている。また、第六小隊の第三分隊は先行して既にアミーバの包囲に取りかかっている。第六小隊の後部で敵の別働隊を相手していた第三小隊は被害を受けながらも、これを殲滅。

多大な被害を受け、現在再編に移っている。両翼から敵本隊を抜けた第二、第四小隊は敵本隊から別れた別働隊を破り、殆ど無傷でアミーバに辿りついている。大方は順調だ。

しかし、と奈々は画面下部を見やった。第五小隊だけが依然としてセラフイムを突破出来ていない。小隊長の進藤咲は各分隊を動かそうとはせず、セラフイムと長い格闘戦を続けていた。より正しく言うならば、咲は回避行動を取り続けている。早くに撃墜を諦めているようだった。

また、第二小隊長の姫野雪も同様にセラフイムを撃墜する意思がないようだった。先程からセラフイムと向かい合ったままピクリとも動かない。ただし、第五小隊とは違って、各分隊をアミーバの元に先行させている為、戦力が必要以上に遊ぶような事はなかった。

第五小隊を直接動かすべきか迷い、中継映像に映るアミーバを見ずぐに考えを改める。

今は戦力の強化より、可及的速やかな目標の撃破が先決だ。桜井優がアミーバに取りこまれて約二十分。焦るべきではないが、完全な態勢を整える余裕もない。叩ける内に叩かなければ、と奈々は判断した。

「総員に通達。これよりアミーバへの攻撃を開始する。先行している者はアミーバへの攻撃準備を始めなさい」

アミーバへの包囲を完了した第二、第四、第六小隊の一部が小銃を構える。洋上に浮かぶ哨戒艦艇の望遠がその様子を捉え、奈々の元へ映像として流れた。

「撃て！」

一瞬の間を置いて、閃光が迸った。全方位から加えられたESPエネルギーの嵐がアミーバを包み込む。アミーバの身体が大きく飛び散るのが見えた。

「有効のようですね」

隣から加奈の安心したような声。奈々は黙って映像を眺めた。

爆炎の中からアミーバの巨体が現れる。アミーバは動かない。沈

黙を貫くアメーバを見て、奈々は再び攻撃準備命令を出した。

「構え！」

その瞬間、アメーバの身体から無数の何かが飛び出した。ひゅつと空気を切り裂く幻聴。奈々は反射的に叫んだ。

「攻撃中止！ 全速反転！」

アメーバから飛び出した物体は腕のようだった。鞭のようになり、周囲を包囲した中隊員達目がけて恐るべき速度で振り回される。中隊の隊列が崩れ、数人がアメーバから伸びた腕に捕まるのが見えた。悲鳴。回避に成功した少女達が反撃を試みようとして小銃を構える。奈々は叫んだ。

「攻撃を解除しなさい！ 同士討ちの危険性が高い！」

アメーバから伸びた腕は数人の少女を捉え、そのまま離す様子を見せなかった。何らかの追撃を加える様子もない。弾避けに利用される危険性が高かった。中隊からの攻撃が完全に収まる。アメーバは無数の腕をうねうねと蠢かせながら、その場で静止した。重い沈黙が訪れる。

奈々はモニターを睨み、大きく息を吸った。そして、隣に加奈に視線を向ける。加奈は蒼白な顔でモニターをじっと眺めていた。奈々は視線を更に後ろに移した。端末の前に座る電子・解析オペレーターの全てが奈々をじっと見つめていた。全員が事態を正確に把握している事に感謝し、奈々は目を瞑ってもう一度息を吸った。

呆気なかった、と思う。中隊の特性を考えれば、下手に動く事はできない。それは、戦略的な問題にも繋がりが得る。奈々の手からは全ての選択肢が消え去った。中隊が戦術的な主導権を完全に失った瞬間だった。

朝。部屋に響き渡る目覚まし時計の音で柊沙織は目を覚ました。

欠伸を噛み殺しながら、上半身だけ起こし、朝の涼やかな空気を吸

い込む。サイドテーブルに置いていた携帯を開くと、一件のメールが届いていた。真紀からだった。

『今日は検査がたくさんあるみたいだから、お見舞いは明日にしてくれると嬉しいかも。ごめんねっ!』

ふう、と息を吐く。沙織は、了解、と短く返信した。

ベッドから降りて、洗面所に向かう。顔を洗い、髪を整え、歯を磨き、部屋に戻って簡単に身だしなみを整える。それから沙織は部屋を出た。

廊下には誰もいなかった。良かった、と安堵の息をつく。昨日、音々と揉めていた少女達とは顔を合わせたくなかった。

音々の部屋はすぐ隣だ。ドアをノックする。中から音々の誰何の声。インターフォンがあれば便利なのに、と思った。

「私だけど」

沙織だけど、と自身の名前を自分で使う事に抵抗を覚え、言葉を濁す。幸い、沙織である事が伝わったらしく、すぐにドアが開いた。「何だ？ お見舞いはお流れって聞いたが」

音々は面倒そうに顔をしかめた。沙織は気にせず、頷いた。

「外、行かない？」

「外？」

「そ。テニス、しない？」

音々は一瞬呆けた顔をし、次に警戒するような素振りを見せた。

「構わないが……」

「じゃ、決まり」

沙織は弾むように身を翻した。後ろから音々がばやき声が届いた。「頭でも打ったのか」

エントランスの受付でラケットと籠に入った大量のボールを借り、沙織と音々は外に出た。風が強かったが、陽が出ていた為にそこまで寒くはなかった。無言でテニスコートに入り、どちらからともなく二つに別れる。

「私からで良い？」

声を張り上げると、ネットの向こうで音々が頷くのが見えた。ラインまで下がり、軽く素振りをする。ラケットを持つのは約半年ぶりだった。朝露でキラキラと光る芝を嫌そうに見てから、ボールを持った左腕を真つすぐ延ばし、右手のラケットを構える。緩く膝を曲げ、沙織はボールを上には振り投げた。同時に身体を上には延ばし、ラケットを振り被る。ボールが頂点に達した瞬間、上から叩きつける事を意識して、沙織はラケットを振り下ろした。小気味良い音とともにボールが相手コートへと吸い込まれていく。音々が少し後ろに下がってストロークするのが見えた。音々が打つ前にコートの反対側へ走り始める。予想通り、音々の打った球は沙織のサーブ位置とは反対の方へと飛んできた。余裕を持ってボールに追いつき、ボールが緩やかな放物線の頂点に来た所をラケットで思いきり叩く。小さな反動とともに、ボールが音々のコートへと飛んでいく。しかし、それは些か高すぎた。コートラインを越え、後ろのフェンスに衝突する。音々が笑うのが見えた。

「ラヴ、ファイフティー。秘密の特訓でもしてきたのかと思ったが、違ったらしいな」

沙織はラインまで下がり、籠から予備のボールを取り出した。間髪置かず、ボールを上空に放り投げ、ラケットを振り下ろす。ボールがネットに衝突し、音を立てて転がる。ブランドが予想以上に厳しかった。籠からボールを取って、再びサーブする。今度は綺麗に相手コートに入った。音々が難なく打ち返し、右斜め手前に落ちる。ボールがバウンドした瞬間に水滴が飛び散るのが見えたが、沙織は気にせず前方に駆けだし、ボールを拾った。相手コートの奥深くまで飛び込んでいったボールを音々がボレーする。沙織はネット付近まで駆け上がり、コーナーに向かってラケットを振り抜いた。全身を爽快感が駆け巡り、ボールが音々を抜く。

「ファイフティー、オール！」

沙織は笑顔を浮かべ、叫んだ。向こうで音々が苦笑を浮かべる。

沙織は次のボールを籠から取り出した。

ゲームは終始、音々がリードする形で進行した。ほぼ毎日真紀と打ちあっていた音々に対し、沙織には半年間のブランクがあり、両者の習熟度には決定的な差があった。それでも、沙織はゲームを楽しみながらプレイする事ができた。身体が何かの呪縛から解き放たれたかのように軽かった。

「思ったより鈍ってなかったな」

ゲームを終えた後、散らばった球を拾いながら音々が言った。沙織は音々が放り投げたボールを籠に戻しながら頷いた。

「才能ってやつだね」

「良く言う」

沈黙が落ち、暫く黙って球拾いに集中する。

球拾いが終わりがけた時、不意に音々が口を開いた。

「昨日はすまなかった」

沙織は手を止め、顔を上げた。

「どうしたの？ 私気にしてないよ」

「……沙織の立場を悪くした」

「大丈夫。代わりに怒ってくれてありがとうって言いたいくらい」
そう言って、立ち上がる。

「うわっ、服泥だらけ。芝に朝露落ちすぎだよね」

小さく呻き、顔をしかめる。

「さっ、戻ろう」

「……ああ」

籠とラケットを持って、沙織は本部のエントランスに向かって歩き始めた。

エントランスの中に入ると、警備員が警戒するように沙織と音々に視線を向けた。昨日の事が伝わっているのだろう。受付にラケットとボールを返し、音々に一言声をかけてから別れる。熱いシャワーが浴びたかった。

部屋に戻ると、沙織は真つすぐ浴室に向かった。泥を被った服を脱ぎ捨て、頭からシャワーを被る。汗とともに疲労感が流れていく。身体が温まると沙織はすぐにシャワーを止め、浴室から出た。タオルで水分を拭き、部屋着に着替える。その後、沙織は自室に戻った。その時、ふと本棚に目が止まった。

暫く使つてなかつた本棚から数学の教科書を取り出す。花公院を自主退学してから教科書を手に取るのは初めてだった。パラパラとページを捲りながら、懐かしいな、と思う。

沙織は椅子に腰を下ろし、転がっていたペンを取った。そして、未使用のノートを開き、問題を解いていく。

記号を操作していると頭の中が、すうっと冴えていくのが分かった。昔は毎日こうしていた。そうする必要があつた。そうした構造の中にいた。

振り返れば、沙織には確固たる何かがなかつた。幼い時に親を失い、何度も居場所が変わつていった。外ではなく、内に自らを保障する術を作り出す事が必要だった。

テニスを始めたのも、それが原因だった。沙織は孤児院での暮らしを通して、一方向に自らの能力を突出させる事が非常に危うい事を理解していた。また、才覚があるかのように振る舞う事が最大の防御になる事を理解していた。成熟していない世界において、努力ほど憎まれる事はない。過程を見せる事には多大な危険を孕んでいる。そこに、人は可能性を見る。自らが進んだかもしれない可能性を。結果だけを見せ、その可能性を摘んでやる事で彼らは持つ者と持たない者という境界を作つて勝手に諦めてくれる。沙織はそうやって自らを守り続けた。

花公院の高等部に特待生として迎えられた時、育ての親は我が事のように喜んでくれた。沙織は冷めた目でそれを眺めていた。ここまで辿りついたのは、自らをどこにも依存させない為だった。育ての親に学費を負担させる事は、自らの足枷にしかならない。沙織は何も信じていなかった。沙織にとって、全ては手段だった。故に、

ESP能力の発現に伴って、沙織は躊躇せず全てを捨てた。花公院も、親も、テニスも。

今、私は何故こんな無意味な問題を解いているのだろう。手を止め、数式を眺める。

捨てたと思いこみたかっただけなのかもしれない。捨てられる前に、捨てようと思っただけなのかもしれない。

沙織は長い間、手元の数式をじっと眺めた。

ゆっくりと目を瞑る。何故か、ユウの笑顔が脳裏に浮かんだ。暗い倉庫の中で母親を待ち続けている少年。彼も自らが捨てられたと思いたくないが為に、来る筈のない者を待ち続けているのではないか、と思った。彼は何かを探し、待ち続けている。何を？

不意に、警報が鳴る。沙織はペンを放りだし、立ち上がった。そして、ふと思いつく。遙か昔の夢。いつの間にか忘れ去ってしまった。一体いつ忘れたのだろう。忘れた時期も忘れてしまった。

部屋から出る寸前、沙織は机に開かれたノートを眺め、小さく笑った。

神条奈々は黙ってモニターを眺めていた。

アミーバの腕に絡み取られた中隊員は八人。その全員が気を失っているようだった。何も変化がないまま、時間だけが流れていく。

「司令、第六小隊の本隊が追いついたようです」

不意に加奈が沈黙が破った。セラフィムと亡霊群を撃破した第六小隊がアミーバに接近している。第六小隊を統率する白崎凜は腹部を負傷しているようだったが、戦闘に支障はないようだった。

「第六小隊、そこで停止しなさい。それ以上近づくと、アミーバを刺激する恐れがある」

奈々が命令すると、すぐに識別反応の集団が停止した。しかし、

先頭に位置する識別反応だけが、そのままアミーバに向かって接近していく。

「凜。聞こえないの？ 今すぐに停止しなさい。それ以上の接近は中隊を危険に晒す事になる」

『同士討ちを避ける為に近接攻撃を仕掛けます』

通信機から凜の無感動な声が届く。奈々は表情を硬くした。

「許可できない。捉われた中隊員に危害が及ぶ危険が高い。貴女も補足される危険がある」

『では、桜井中隊長を見捨てると？』

奈々は舌打ちしそうになった。視界の隅で、加奈が素早く通信の範囲を制御する姿が見えた。

『神条司令、桜井中隊長の戦略的な価値は貴女が最もよく知っている筈です。亡霊との闘いに於いて、彼が欠かす事が出来ない存在である事は明らかではありませんか。多少の犠牲は覚悟すべきです』

「そんな事をすれば、中隊が崩壊する」

『本当にそう思っているらっしゃるのですか？』

凜の言葉に、奈々は答えられなかった。

『分かりました。問題を分かりやすくしましょう。既に通信は制限していますね？ 神条司令は私を止めた。私は命令を破った。あるいは、通信機が壊れていたのかもしれませんが』

横で加奈が小さく呻いた。

「何を」

「待ちなさい。過去の動きを考えれば、亡霊の目的が桜井優の殺害とは考えづらい。不必要な犠牲を出すリスクは侵せない」

奈々がそう言うのと、すぐに凜の反論が返ってきた。

『そう、殺害が目的とは考えづらい。では、桜井中隊長のESP能力の奪取が目的であった場合はどうしますか？ 桜井中隊長の精神に対して何らかの操作が行われた場合はどうなるのです？ 殺害は最悪のパターンではない。それを神条司令は理解している筈です』

奈々は目を瞑った。

「あれだけの戦力を投入してきた亡霊が無事に桜井中隊長を返すなどど本気で考えているのではないでしょう。もう一度言います。亡霊との闘争を続ける上で、桜井中隊長の存在は必要不可欠です。答えは初めから決まっています。何を迷っているのですか。」

「ああ。自らの指揮で人が死ぬのを恐れているのですか。」

柘沙織は出撃前に受けた簡素な説明に顔を強張らせた。

白流島から現れた亡霊群の数は五十七。平均より多いが、問題のある数ではない。問題はその針路にあった。亡霊群が取った針路には観光地として有名な有沖島があったのだ。本部からは比較的近い位置にあるが、白流島からも距離が近い。既に夏が過ぎていく為に観光客は少なかったが、元々の住民が多い為、亡霊が到達するまでに全住民を避難させる事が困難だと言うのだ。

住民の命を最優先に行動しろ、との命令を受けた後、沙織達は本部から輸送ヘリによって現場へと運ばれた。沙織はヘリの中で、信じられない、と思った。

何故、白流島からあれほど近い島に人が住んでいるのだろう。何故、住民達は他に住居を構えようとしないのであるだろう。何故、そんな所で観光業が成り立つのだろうか。

彼らにとって、亡霊とはその程度の存在でしかないのだ。

沙織はその事に気づき、愕然とした。恐らく、彼らにとって亡霊とは自然災害のようなものでしかないのだ。

何故、君は地震が多発する日本なんかに住んでいるんだ？

彼らにとつては、それと同様の認識に違いない。何万人が亡くなる事も、所詮それはマスメディアの向こうの話でしかないのだ。当事者になるまでは、誰もがそつに違いない。

私の持つ亡霊への恐怖感は職業倫理によって作られた特別なもの

なのかもしれない、と沙織は思った。歯科医は赤ちゃんにキスする親を信じられない、といった風に見るだろう。ネットワークエンジニアはネットワークにパソコンを繋いだままにするユーザーを信じられない、といった風に見るだろう。消防士は、煙草のポイ捨てを信じられない、といった風に見るだろう。

専門家から見れば信じられない行為を、大衆は特に意味もなく実行してしまう。きっと、そうした危機意識の欠如が重なり合って毎年膨大な死者を生みだしているのだろう、と沙織は思った。

ヘリが有沖島に着いた時、既に沿岸近くの建造物の大半が倒壊していた。沙織はヘリの中からその光景をじっと眺めた。自衛軍の輸送ヘリが数えきれないほど降りたち、住民らしき人達を逃がし続けている。映画のワンシーンを見ているようだった。

ヘリが着陸し、沙織は有沖島の地に足を着いた。自衛軍の佐官が中隊の前まで進み、中隊の役目を説明し始める。どうやら、自衛軍が主導権を握っているようだった。

作戦の説明が終わると、沙織達はすぐに作戦に就いた。生存者の救出を進める自衛軍の護衛が任務だった。瓦礫の山を掘り起こす自衛軍達の周りに立ち、上空を黙って警戒し続ける。

じつと上空を眺めていると、島の中心部の方に飛行物体が見えた。亡霊。

小銃を握る手に自然と力が籠った。

「中心部の住民の避難は完了しているんですか？」

通信機に向かって尋ねると、すぐに奈々の言葉が返ってきた。

「人口の多い沿岸部の救出が先決だ。中心部へ自衛軍を展開する余裕はない」

問いから微妙にずれた答。沙織は空の向こうに浮かぶ亡霊群を見つめた。

「中心部の住民は、まだあそこに残ってるんですか？」

「二次災害だけは避けねばならない。輸送ヘリを損失すれば、沿岸部の住民の救出にも悪影響を及ぼす」

沙織は背後を振り返った。沿岸部のホテルやレストラン、商店の従業員達や観光客が次々と自衛軍の輸送ヘリに乗り込み、島から離脱していく。救護班に担架で搬送される負傷者の姿もあった。その周囲では、自衛軍の隊員達が必死に瓦礫の山を掻き分けていた。

その光景を見て、奈々の言う事は正しい、と思う。より多くの者を助ける為には中心部の住民の救助を後回しにせざるをえない。そして、中隊の役目は自衛軍の救出活動を円滑に進める為、その障害を取り除く事だった。

でも、と沙織は中心部の青空に目を向けた。

「司令、亡霊の殲滅の為に部隊を中心部に回すべきです」

『自衛軍を危険に晒す事はできない』

「守備に影響が出ないだけの人数を、です」

『できない。本田も、奥村もいない。少数の部隊を中心部に送る事など不可能だ』

「私が！」

沙織は反射的に叫んだ。

「私が単独で行きます！ 他を全て残せば守備には問題ない筈です」

『それは、本気か』

「もちろん、一人で殲滅出来るとは考えていません。亡霊の注意を逸らし、避難を支援する事に集中します。どうか、許可をお願いします」

沈黙が落ちる。

『どうやら、感情的になっただけではないらしい。良いだろう。』

記録の為に無人機を飛ばす。機械翼の点検をしておく』

その時、轟音が響き渡った。中心部に巨大な粉塵が舞いあがっているのが沿岸部から確認できた。建造物が倒壊したのだろう。沙織は目を瞑り、白い息を吐いた。

機械翼を広げ、沙織は有沖島の上空に飛び立った。沿岸部の平地には観光用の施設が立ち並んでいるが、その背後には緩やかな山岳

が聳え立ち、強い上昇気流を作り上げていた。髪が乱れ、少し鬱陶しい。

眼下に広がる緑の間から覗く山道にいくつかの乗用車の影が見えた。沿岸部へ向かっているようだった。亡霊の到着からこれだけ時間が経過しても、まだ避難は続いているらしい。中心部に取り残されている人は想像以上に多いのかもしれない、と思った。

山の向こうからは黒煙が上がっていた。そして、上空を飛翔する亡霊群。沙織は前方を睨みつけた。そして、小銃を構える。照準を合わせる事を放棄し、沙織は引き金を引いた。

銃声が轟き、沙織の存在に気付いた亡霊群が弾かれたように接近してくる。その数、四体。沙織は機械翼の出力を弱め、その場で射撃姿勢を取った。向かってくる亡霊に照準を合わせ、引き金を引く。断続的な四発の銃声とともに、亡霊が吹き飛ぶ。

弱いな、と思った。戦力一定の法則という言葉が頭に浮かぶ。数が多ければ多いほど、個体の性能が落ちると聞いた事があった。

小銃を下ろし、沙織は下降を始めた。県道に降り立ち、辺りを見渡す。まるで廃墟のようだった。近くの崩れかけた建造物の中を覗く。郵便局のようだった。奥で女がうつ伏せで倒れているのが見えた。慌てて駆け寄る。

「大丈夫ですか！」

途中で沙織は足を止めた。頭部に瓦礫が突き刺さり、頭が割れていた。確認するまでもなく、女が既に絶命している事を悟る。

沙織はゆっくりと後退した。その途中、視界に別の死体が映る。待合用のソファの下。まだ幼稚園児くらいの幼い子ども。無数のガラス片が小さな体に刺さり、辺りが血に濡れていた。そこで初めて咽返るほどの血の匂いが充満している事に気づいた。

口を抑え、その場にうずくまる。沙織はその場で吐いた。

「生存者は？」

通信機から奈々の声。何度も呼吸を繰り返した後、いません、とだけ返した。

よろよると郵便局から出る。上空から無人ヘリのローター音。沙織は街を見渡した。

遠くで火の手が上がっているのが見えた。建造物の外壁の多くは黒く煤け、崩れ落ちている。沙織がこれまで経験した闘いが、ただの戦闘でしかなかった事を悟る。この島で起きているのは紛いようのない戦争だった。多くの民間人が血を流す、本物の争い。

眩暈がした。まるで現実感が湧かない。映画のセットの中を歩いているようだ、と思った。

人影が全く見当たらない。生存者の姿を探しながら、柊沙織ついでいん けいさつはその華奢な身体に不釣り合いな小銃を抱え、半壊した街を駆けた。

「私しか、いない。私が、やらなくちゃ」

荒い息の中、呪文のように同じ言葉が繰り返される。真紀も、音々もない。他の中隊員も。

不意に沙織は足を止め、上空を見上げた。粉塵で霞む青空に浮かんだ数多の影が瞳に映る。

沙織は湧きあがる恐怖に耐えて、天を駆ける影の群れに小銃を向けた。銃声とともに翠の光条が空に吸い込まれていく。沙織は着弾を確認せず、再び死んだ街を駆け始めた。

前方に見える瓦礫の影で何かが動く。

生存者。

沙織は上空を旋回する影のことも忘れ、無我夢中でその場に向かった。瓦礫の山を登り、息を切らせながら叫ぶ。

「大丈夫ですか！」

影はまだ若い女と、煤だらけの赤ん坊だった。

「あ………」

女の疲れ切った瞳が、沙織の姿を認めた途端恐怖に揺れる。それを見て、沙織は差し伸ばかけた手をゆっくりと下ろした。ESP能力を持っている事が発覚した時、育ての親の目にも同じ色が浮かんでいたな、と思う。

「このまま南へ真っすぐ行けば、展開中の自衛軍と合流できます。」

早く避難してください」

拒絶されたことに耐えられなくて、沙織は事務的な口調で告げ、背中に装着した機械翼を展開させた。足が地を離れ、重力から解き放たれる。

『感傷に浸っている場合ではない』

通信機から、奈々の冷淡な言葉が届く。沙織は涙をこらえて頷いた。

「はい」

脳裏に先程の死体が浮かぶ。脳裏に先程の女性の怯えた瞳が蘇る。沙織は震える体を無理矢理抑えつけ、空を支配する侵略者たちに向かって飛び立った。

亡霊群が沙織の元へ向かって急降下を始める。沙織は小銃を構え、速度を緩めずにそのまま飛翔した。距離がゼロになる瞬間、引き金を引く。右腕を大きく振りあげた亡霊の腹部がすれ違い様に弾け飛ぶのが見えた。次の亡霊が目前に迫る。銃剣を振るい、頭部に突き刺す。その際、反動で沙織の姿勢が僅かに崩れた。失速。姿勢制御に移行したところに新たな亡霊が襲いかかってくる。沙織は無理な姿勢のまま引き金を引いた。まず亡霊の右肩が大きく弾け、次に左胸にも風穴が開き、最後に胴体が千切れるのが見えた。

姿勢制御を放棄した為に、沙織の身体が地に向かって落下を始め。視界が反転し、状況が掴めなくなった瞬間、腹部に衝撃が走った。激痛が走り、意識が遠のく。落下は止まらない。

薄れゆく意識の中、地面が迫ってきているのが分かった。苦痛に顔を歪め、機械翼の制御に意識を集中する。しかし、間に合わない。沙織は目を瞑った。

轟音とともに、沙織はアスファルトの地面に背中から落ちた。衝撃で呼吸が止まる。沙織は体を丸め、大きく咳き込んだ。それに重なるように爆発音が轟く。遅れて熱風が頬を撫でた。見上げると、無人ヘリが炎上していた。亡霊の攻撃を受けたらしい。制御能力を失ったヘリが緩やかに墜落していく。建造物でヘリの姿が隠れた直

後、破裂音のようなものが聞こえた。

『状況を報告しろ』

通信機から奈々の声。沙織は肩で息をしながら自らの身体を眺めた。腹部に火傷を負っているようだったが、それほど酷いものではなさそうだった。

「攻撃を受けて、墜落しました。直前に機械翼を展開したせいか、大した怪我はありません。腹部に軽い火傷。他は、特に何も」

『上空に二体亡霊が残っている。やれるか？』

沙織はゆつくりと立ちあがった。ふと、バツクパツクに注意が向かう。

『沙織？』

沙織はバツクパツクを下ろし、中を覗いた。黒いケースが砕け、中に入っていた注射器が割れているのが見えた。撤退しなければ、と考えた時、遠くから子どもの泣き声が聞こえた。それも一人ではない。複数の泣き声。沙織は驚いて顔を上げた。遠くに淡いピンク色の扉が見えた。

幼稚園。

『何かあったなら報告しろ』

通信機から奈々の声。沙織はバツクパツクに目を向け、それを躊躇なく捨てた。

「いえ、何もありません。生存者を発見しました。保護に向かいます」

『目』を失った。こちらからの積極的なナビゲートが難しい。音声による記録を心掛ける』

「はい。前方の幼稚園から複数の泣き声が聞こえます。恐らくは、五、六人。」

通信機に向かって報告しながら道を進む。そこはあったのは、沙織の予想通り幼稚園だった。ピンク色の門を抜け、園内に入る。門付近には花壇が並んでいたが、その内の半分が焼けていた。花壇の奥には校舎が聳え、昇降口が見える。右手には空き地が広がり、遊

具が並んでいた。沙織は庭に誰もいない事を確認してから校舎の中に入った。泣き声が大きくなる。

「校舎に入りました。ここは大した攻撃を受けなかったようで、原型が残っています」

通信機に見た事をそのまま報告する。小銃を構え、沙織は薄暗い廊下を慎重に進んだ。

ふと、自身の幼少時代を思い出す。孤児院で母が来るのをずっと待っていた。結局、母は来なかった。捨てられた事に気付いた時、全てが崩壊していくような感覚を味わった。あれは、人が体験するべきものではない。

沙織は恐怖に震えて親の迎えを待ち続けているであろう子ども達を探し、廊下を歩き続けた。泣き声がどこから聞こえているのか把握できる程まで接近する。

沙織は一つの教室の前で立ち止まった。扉を開ける。そこに、彼らはいた。校庭に面した窓際の外壁が崩れ落ち、その場に若い女が倒れていた。その周りに、五人の子ども達が集まっている。沙織は息を呑んだ。

子ども達は動かない女を必死に揺すっていた。せんせい、と誰かが泣きじゃくりながら呼ぶのが聞こえた。沙織は彼らの傍にそっと近づいた。

「こんにちは。君達を迎えに来ました」

子どもたちが沙織の存在に気付き、振り返る。沙織はにっこりと笑った。

「先生が動かないんだよ」

一人の女の子が沙織の服にしがみつき、何かを訴えるように死体を指差した。沙織は目を瞑り、首を振った。

「先生はお休み中です。少し、疲れたんだと思います。今は、ゆっくりと休ませてあげて」

「先生、怪我してた！ すっごい痛そう」

男の子が大声を上げる。

彼らは、死を理解しているのだろうか。概念は理解していても、これが死と認識できていないのだろうか。多分、後者だろうと思っ
た。

「うん、凄く痛いと思う。だから、先生は眠ってるの。起こしちゃ、
ダメだよ」

「先生！ 起きて！」

沙織の言葉を見無視して、別の男の子がどこか必死な様子で叫ぶ。
沙織は一步踏み出し、女の子の手を握った。

「今から私が君達の新しい先生になります。だから、先生はゆっくり休ませてあげてください。君達の親が、心配しています。早く帰るわ」

親、という言葉を使った瞬間、子ども達の視線が沙織に集まった。
沙織は小銃を肩にかけ、空いた手で男の子の手をとった。

「さあ、行こう」

二人の手を引き、廊下に足を向ける。振り返ると、他の三人も後から着いてくるのが見えた。

『確保できたか？』

通信機から奈々の声。沙織は声を潜めて答えた。

「五人の安全を確保しました。これより沿岸部に戻ります」

報告を終えた瞬間、薄暗い廊下の先で閃光が走った。続いて、爆音。沙織は咄嗟に子ども達を庇うように前に出た。握っていた手を離し、小銃を構える。廊下の先で粉塵が舞い、昇降口から流れていた光が遮られる。沙織は息を止め、じつと粉塵を睨み続けた。

粉塵の奥から、ぬうつと一体の亡霊が姿を現す。沙織はすぐに引き金を引いた。それを合図に亡霊が狭い廊下の中を飛翔してくる。一発の光弾が亡霊の右翼をもぎ取るのが見えたが、亡霊の動きを止めるには至らなかった。距離が詰められ、亡霊の鋭利な爪が突き出される。沙織は咄嗟に小銃で亡霊の攻撃を塞いだ。小銃の破片が飛散する。

「逃げて！ 早く！」

後ろにいる子ども達に向かって叫ぶ。沙織は銃剣を亡霊に向かって突き刺した。亡霊の動きが止まる。沙織は銃剣を引き抜き、再び頭部に振り下ろした。鈍い手応えとともに、亡霊の身体が霧散する。沙織は肩で息をしながら、背後を振り返った。逃げる子ども達の背中が見えた。

『反応が三体！』

通信機から鋭い声が飛ぶ。遅い、と思った。振り返り、粉塵の中から新たに飛び出してくる二体に小銃を構える。引き金が動かない。沙織は舌打ちした。先程の打撃を受け、小銃の内部機構が著しく損傷しているようだった。亡霊が迫る。

沙織は銃剣を正面に構え、亡霊に向かって突き出した。確かな手ごたえと共に、銃剣が亡霊の肩部に突き刺さる。同時に、亡霊の鋭利な爪が沙織の腹部に突き刺さる。

沙織は目を大きく見開いた。

目の前で、亡霊が咆哮をあげる。

沙織は銃剣を離し、右手を亡霊に向かって広げた。

血に濡れた指先が、亡霊の身体を撃ち抜く。

亡霊の身体が霧散するとともに、沙織は崩れ落ちた。

残ったもう一体の亡霊がゆっくりと近づいてくる。

沙織は荒い呼吸を繰り返し、ゆっくりと目を瞑った。途端、強い風が吹いた。懐かしい風だった。

目を開けると、亡霊が吹き飛んでいた。そして、沙織の横にはユウが立っていた。目が合う。沙織は咄嗟に通信を切った。

「……本当に、ESP能力者だったんだ」

「喋らないでください」

ユウが屈みこみ、沙織の腹部に手を当てる。沙織は小さく首を振った。流れる血が止まらない。不思議と痛みはなかった。代わりに、虚脱感に襲われる。自らの身体から流れ出る血の量に言いようのない恐怖を覚えた。

「まあ、いつかは、死ぬと思ってたけど、こんなに早く死ぬなんて

思ってたなかつたな」

沙織は薄く笑った。

「喋らないで！」

ユウが叫ぶ。

「無理だよ。分かるでしょ？ 手、出して」

ユウが困惑した顔を向けてくる。沙織は目を瞑り、手を上に上げた。

「ESP能力の継承、出来るんでしょ。お願い。やって」

沈黙が落ちる。沙織は荒い息を繰り返した。

「ねえ、お願い。私は、普通の人間として死にたい」

手が握られる感触。次いで、手先から熱が広がっていく。一瞬の出来事だった。手が、離される。

「……できた？」

「……はい」

沙織は笑おうとして、途中で諦めた。

「五人の、子ども。向こうに行つたから、お願い。助けて、あげて」

「柊さん……」

目を開ける。瞼がどうしようもない程重たかった。

「行って、あげて。きつと、親が、待つてる」

ユウが立ちあがる。

「……ありがとう」

ユウは何も言わず走り出した。それを見送り、沙織は再び目を瞑った。全身が冷たい。

戦場とは思えないほど、辺りは静寂に満ちていた。強い孤独を感じ、沙織は通信機の電源を入れた。すぐに奈々の声が飛び込んでくる。

『突然どうした？ 何があつたのか報告しろ』

沙織は荒い呼吸を繰り返し、言葉を探した。何を言えば良いのか、分からない。最期はどんな言葉が相応しいだろう？

『負傷したのか？ ナノマシンを撃つて、じつとしている。すぐに

救護班を寄こす』

思いつくままに喋ろうと思って、すぐに顎が動かない事に気づく。最早、喋る程の力も残されていないようだった。

誰もいない幼稚園の中、沙織は暗い廊下で通信機から流れてくる奈々の声を聞きながら、寒さに震えた。

ここはあまりにも冷たすぎる。そう、沙織は思った。

『何故、応答しない。話す事が困難な状態であれば、マイクを一度叩け』

腕も、動かなかった。目も、開かない。血の匂いもしなかった。痛みもない。聴覚だけが生きていた。

『沙織……。沙織、応答しろ！ 命令だ！』

通信機から、奈々の声。いつもは冷淡な奈々の声が震えていた。珍しいな、と思う。少し、嬉しかった。

意識が、朦朧とし始める。

『沙織……。』

自らの名前を呼ばれ、ふと幼少期の事が蘇った。

遠い昔、母に自身の名の由来を尋ねた事がある。

七夕に生まれたから、織姫のように素敵な男性と会おうように願いを込めたの、と母は答えた。

脳裏にユウの顔が浮かぶ。少し幼い気がしたが、最後の最後で母の願いは達成されたのかもしれない。

ただし、と沙織は思った。彼と自分を別つのは天の川ではなく、死、だ。物語のように再会する事は叶わない。もう一度会いたいな、と残念に思う。

呼吸を繰り返す事すら、辛くなってきた。生きる事自体が苦痛だった。いつしか、聴覚も失われていた。

ごめんね。沙織は最後に心の中で呟いた。

柊沙織は、ゆっくりと死の闇へ堕ちていった。

4章 46話 桜井優（2）

『 ああ。自らの指揮で人が死ぬのを恐れているのですか』
神条奈々は、息を止めた。

『 中隊を自らの意思で動かす事に強い抵抗を覚えている。あるいは、桜井中隊長に甘えている。そうではありませんか？』

奈々は目を瞑り、大きく息を吸った。

『 繰り返す。中隊は動かせない。勝手な行動は許可できない。頭を冷やせ』

凜は何も言わなかった。沈黙が落ちる。奈々は言葉を続けた。

『 通信をオープンにする。士気を左右する軽率な言動は控えなさい』
奈々は隣の加奈に目をやった。加奈がコンソールを操作する。

再び沈黙が落ちた。

奈々は司令席に背を預け、艦艇群からの中継映像に目を向けた。
再編を完了した第一小隊の残存部隊がアメーバに向かっていくところだった。じっと、その光景を眺める。

『 司令……』

不意に、加奈が前に身を乗りだした。次に、通信機から断続的な重低音が届く。奈々は眉を寄せた。

第一小隊が映る画面の向こう。そこで、アメーバの形が崩れ始めていた。奈々はゆっくりと立ち上がり、中継カメラを切り替えた。アメーバの姿がアップで映される。確かな形を保持していたアメーバの身体が溶けるように崩れ始めている。アメーバから伸びた腕も同様に形を失くし始め、捕えられていた中隊員が落ちるのが見えた。
『 第六小隊、救出に向かつて！』

最もアメーバに接近していた第六小隊が、落ちた中隊を救出に向かう。その間にもアメーバの身体はどろどろと溶け始め、滝のように下方に流れていく。下方へ流れたアメーバの身体は大気中に霧散し、紫色の粒子が闇夜に広がっていった。空が紫色に染まっていく。

奈々は映像を凝視した。中に取り込まれた筈の桜井優が見当たらない。まさか、優を巻き込んで自壊したのではないか、と最悪の考えが頭をよぎる。

巨大なアメーバの身体が完全に崩れ、後には大気中を照らす粒子の領域だけが残された。その中を一つの小柄な影が落下しているのが視界に入る。意識がないようだった。頭から真つすぐに落下している。そこに一つの識別ライトが接近し、拾い上げるのが見えた。

『桜井中隊長の安全を確保しました。意識を失っているようですが、特に外傷は見当たりません』

凜の報告。奈々は安堵の息をついた。

「……哨戒艦艇ゆづきに搬送を。後は機動ヘリで陸地まで運ぶ」
『了解しました』

凜の無感動な返事。次いで、優を抱えた凜が哨戒艦艇に向かって降下を始める。

「医療チーム、準備を始めなさい。加奈、本土の方に通達を」
「はい」

加奈が立ちあがり、司令室から出て行く。

『神条司令、セラフィルムも同様に自壊を始めたようです。如何いたしますか？』

通信機から雪の落ちついた声。奈々が画面を切り替えると、セラフィルムの姿が消えかかっていた。砂のように大気中へと溶けていく。「放っておきなさい。追撃の必要はない」

『仰せのままに』

雪がどこか楽しそうに答える。奈々は一瞬動きを止めたが、すぐにESPリーダーに視線を向けた。亡霊の反応が全て消えている。少し考える素振りを見せた後、奈々はマイクに向かって口を開いた。「亡霊の殲滅を確認した。これより帰投を命じる」

言ってから、呆気ない、と思う。

全てが、亡霊にコントロールされてる。

闘争が続けば続くほど、亡霊の特異さだけが際立っていく。

闘争が長引けば長引くほど、亡霊対策室の脆弱さが露わになっていく。

奈々には、闘争の果てに待つ勝利の文字を思い描く事がどうしてもできなかった。

深淵から意識が急速に浮上し、桜井優はベッドから飛び起きた。

清潔な病室が視界に飛び込んでくる。優は咄嗟に腹部を抑えた。そして、何の怪我もしていない事に気づき、辺りをゆっくりと見渡す。壁際に明日香が立っていた。

「気がついた？」

「え？ あ、私、いえ、僕」

強い眩暈を覚え、優は頭を抑えて塞ぎこんだ。明日香が近づいてくる気配。

「どこか、痛む？」

優は小さく頭を横に振った。自らの身体を抱きしめ、顔を上げる。心配そうな表情を浮かべる明日香と目が合った。

「先生。私は、生きてるんですか？」

「……優君？」

明日香の顔が強張る。優は再び強い眩暈を覚え、額を抑えた。

「鏡を、見せてください」

明日香は何も言わず、優の手を手に取った。強く引っ張られ、病室の中にあつた洗面台の前まで連れられる。優はそこで自身の顔を確認し、目を瞑った。

「僕は、桜井優」

小さく呟く。不意に後ろから手が肩に回され、抱きしめられた。

「そう、君は桜井優。混乱してるのね。大丈夫、すぐに良くなる」

優は額を抑え、混乱する記憶を辿った。

「自分は、死んだ筈だった。」

違う、と思う。すぐに死んだのは柘沙織である事を思い出す。桜井優は死んでいない。

「僕は、生きている」

「ええ、君は生きている」

後ろから肯定の言葉。優は必死に記憶を漁った。

そう。柘沙織は死んだ。あれは、自分ではない。

そういう情報を、見せられた。誰に？ 亡霊に。

まるで、自らが柘沙織になったかのような体験だった。

どうやって、見せられたのだろうか。そこで、巨大な亡霊の中に呑みこまれた事を思い出す。

「ごめんなさい、もう、大丈夫です」

優は後ろから回された明日香の腕にそっと触れ、優は抱擁からスルリと抜けた。

ベッドに戻り、毛布を握りしめる。まだ頭の中が整理できていなかったが、大方の流れを思い出す事に成功した。

「あれから、僕、どうなったんですか？」

「……君を取りこんだ亡霊が、突然自壊した」

「高梨市の時も、そうでした。ホームクルスが突然自壊して、いなくなりしました。その次の本部襲撃も」

明日香は何も言わず、頷いた。優はベッドに倒れ込み、目を閉じた。

「お腹、減っていない？ 喉も。望むなら、すぐに用意できるわ」

「いえ、いらないます」

「そう……必要になったら、いつでも言っ」

優は曖昧に頷き、曖昧な記憶を辿った。

柘沙織。初めに観測されたESP能力者。優が追体験したのは、間違いなく彼女の記憶そのものだった。

何故、亡霊はそんなものを見せたのだろうか。何故、亡霊は彼女の記憶を保持してるのだろうか。

優はある一つの答えに辿りつき、恐怖した。もしかしたら、死ん

だ後の沙織の身体を亡霊は捕食したのかもしれない。それで、柊沙織の記憶を手に入れた。そして、警告の為に沙織の記憶を見せ付けた。このまま亡霊に齒向かい続けられれば、お前もいずれは同じように死ぬぞ、と。

そこまで考えて、優はある事に気づいた。

「秋山さん、他の人はどうなりました？」

「大丈夫、死人はいない。負傷者は大勢いるけど、後遺症が残るようなレベルじゃない。君が気にする事じゃないわ」

それを聞き、優は安堵の笑みを浮かべた。

「水、いただけますか？」

「元気が出てきたようね。少し待ってて」

サイドテーブルに置いてあったコップを手に取り、明日香は戸口の近くにある台車に向かった。薬缶からお茶を注ぐのが見える。

「神条司令はいますか？」

お茶の入ったコップを運んできた明日香に問いかける。明日香はチラリと戸口に目をやった。

「ええ、外で待機してるわ」

優はコップに口をつけてから、明日香の顔をじつと見つめた。

「神条司令を呼んでいただいて構いませんか？ お話しすべき事があります」

「無理しないで。今はゆっくり休んだ方が良いわ」

「大丈夫です。記憶が薄れないうちに話しておきたいんです」

明日香は少し迷うような素振りを見せた後、分かった、と言って背を向けた。

明日香が部屋から出て行くのを見送った後、優は曖昧な記憶の整理を始めた。

柊沙織。彼女は死んだ。幼稚園の中、孤独に死んだ。その直前、誰かが現れた。誰が？ ユウ。自分と同じ名前だったが、それは明らかに別人だった。六年前の出来事なら、優はまだ十歳。ユウは少なくとも十四歳を超えているように思えた。そして、彼は紛れもな

いESP能力者だった。

僕は、唯一の男性ESP能力者じゃない？

とくん、と心臓が跳ねる。その時、扉の開く音が響いた。顔を上げると、奈々が部屋に入ってくる場所だった。

「体調は、大丈夫？」

「はい」

奈々はベッドの隣にあった椅子に腰かけ、優の顔を覗きこむように前屈みになった。

「話って？」

「亡霊に取りこまれた後、完全に身動きを抑えられ、何かが身体の中に入ってきました」

すぐに本題に入る。長引きさせたくなかった。

「中に？」

奈々の双眸が鋭く細まる。優は頷いた。

「多分、亡霊が身体の中に入ってきたんだと思います。それで、多分、記憶を見られました」

奈々の瞳が大きく見開かれる。

「どんな記憶を見られたの？」

「……ごめんなさい、あまり、言いたくありません。でも、確かに記憶を見られました。それで、次に別の人の記憶を見せられました」

「別の人？」

「多分、柘沙織の記憶です。彼女が死ぬ寸前の一週間分くらいの記憶を見せられました」

奈々の顔が強張る。優は少し迷った上で、言葉を続けた。

「その、柘さんが死ぬまでの映像が延々と。映像だけじゃなく、痛覚とかもありました。柘さんが亡くなった後は何も覚えていません。多分、その時点で亡霊が自壊を始めたんだと思います」

「どんな……」

奈々が口を開く。その声は僅かに震えていた。

「どんな、記憶だった？」

「彼女がテニスコート横の樹で昼寝している所から始まりました。それで、彼女の友人の奥村さんと本田さんが仲良くしている所。本田さんが怪我をするところ。えっと、後は奥村さんが他の人と喧嘩しているところ。最後に有沖島の幼稚園で、その、柊さんが亡くなるところまで」

「……どうやら、本物のようね」

奈々は目を瞑り、首を振った。混乱しているようだった。

「あの、それで、その記憶の中に、一人のESP能力者が出てきました」

奈々が顔を上げる。

「ユウって言って、男性のESP能力者でした」

「優くん？」

「いえ、多分僕じゃないです。でも、確かにその人はESP能力者でした。よく分からないんですけど、最後に柊さんのESP能力を貰ってて……」

「ESP能力を、貰う？」

「はい。死ぬ直前に、柊さんはESP能力をその方に渡していました。でも、本当に渡したのかは分かりません。柊さんは、ESP能力が本当に無くなったのか確認しようとはしませんでした」

「……わからない事だらけね。事実と虚偽を混ぜて、君をコントロールしようとしているのかもしれない。亡霊に見せられた記憶は忘れた方がいいわ。もちろん、無理に忘れる必要はない。少し、時間が必要かもしれない。あまり気にしないようにしなさい」

「はい」

報告すべき事を全て報告し終わると、突然強い疲労が襲ってきた。優は顔を下に向け、小さく目を擦った。

「多分、これで全部です。あの、少し眠っても良いですか？」

「ええ、もちろん。話してくれてありがとう」

にっこりと微笑みを浮かべ、奈々は立ちあがった。途端、優は言い残していた事実を思い出した。

「あの、亡霊に見られた僕の記憶。あれ……僕が小さい頃の記憶でした……僕が」

そこで、言葉に詰まった。

見られてしまった。

一番他人に見られたくなかった過去。知られたくなかった過去。それを無理矢理引きずり出され、何の準備もないまま、亡霊に見られてしまった。

悔しさと悲しさで涙が溢れてきた。抑えようと思っても、止まらなかった。優は奈々から目を逸らし、嗚咽を必死に抑えた。

「……僕が、つ……母に、捨てられた時の、記憶、でした……」
ふわり、と甘い香りに突然包まれる。次いで、背後から腰に腕が回された。抱きしめられたのだと気づく。

「ごめんなさい」

耳元に吐息がかかった。優は顔を伏せ、嗚咽をあげた。

「すみません、少し、一人に……っ……してください」
懇願した瞬間、強い力で引き寄せられた。次に、唇に柔らかいものが押しつけられる。

「ッ」

目の前に広がる端正な顔を見て、優は目を見開いた。腰に回された腕の力が強くなる。

優は目を瞑り、全身の力を抜いた。抱擁が更に強まり、ゆっくりとベッドの上に押し倒される。

そこで、抱擁が解かれた。ゆっくりと唇が離れる。優は止めていた呼吸を再開し、目を開けた。何故か、奈々も涙を流していた。

「実はね、優君に言わなくちゃいけない事があるの。君の外出許可を、出せなくなっただ」

優はベッドに横たわったまま、上に覆いかぶさるような姿勢の奈々を見上げ、小さく笑みを浮かべた。

「理由が、あるんですよね。大丈夫です。信じています」

「いつも、辛い思いをさせてごめんなさい。私、君に甘えているの

かも」

奈々はそう言って、目を瞑った。そして、優の額に軽いキスを落とす。

「おやすみなさい」

そう言って、奈々は背を向けた。優は涙を拭い、頷いた。

「おやすみなさい」

4章 47話 川上沙耶(2)

桜井優が病室から出ると、ドアの前に立っていた保安部の中村俊之に勢いよく衝突した。

「わ、ごめんなさいっ!」

「大丈夫ですか?」

がっしりと受け止められ、優は上を見上げた。相変わらず大きい。少し身長を分けて欲しい、と無理な事を考える。

「はい、本当にすみません」

後ろに下がり、頭を下げる。

「どこかに出かけられるのですか?」

「えっと、友人が入院してる部屋に行こうと思って」

中村は表情を変えず、お気をつけて、と言った。はい、と頷いて、廊下を進む。

戦闘から一日が経過し、優は病院内であれば自由に動ける許可を得ていた。本来なら入院する必要もないのだが、様子見の為に一週間ほど病院で過ごす事になっている。ただし、中隊員の多くも同じ病院で入院している為、本部で過ごすのと変わらない暮らしになりそうだった。

女子病棟に足を踏み入れると、各部屋の前にスーツ姿の女性が数人立っているのが見えた。その中に保安部の小町美知子の姿を認め、優は美知子の元へ向かった。途中、美知子が優の来訪に気付いて、にっこりと笑みを浮かべた。

「どなたのお部屋をお探ですか?」

「えっと、華ちゃ　篠原さん、宮城さん、長谷川さんのお部屋です」

「第一小隊は奥のお部屋に固まっています。確か、篠原さんは奥から二番目のお部屋にいらっしやいますよ」

優は頭を下げ、美知子の前を通り抜けた。各部屋から話し声が漏

れ、廊下まで届いてくる。奥の方に行くと、その傾向はより顕著になつた。

美知子に教えられた通り、奥から奥から二つ目の扉をノックする。間髪おかず、中から複数の声が届いた。ドアノブを回し、扉を開ける。途端、喧騒に包まれた。

「お、桜井じゃん。全然無事みたいだな！」

優はパチパチと目を瞬いた。ベッドが六つある事から六人部屋である事が分かったが、部屋の中にはどう見ても二十人近い中隊員が入っている。中央にいた川上沙耶が優の方を見て、にい、と笑みを浮かべた。

「丁度いいや。入ってこい！」

「皆集まって何やってるの？」

言われるがまま、部屋の中央に進む。その際、戸口付近にいた望月麗が道を開けてくれた。

「クリスマスパーティーの事でね、色々変更しなくちゃいけないつたんだって」

華の声。キョロキョロと辺りを見渡すと、奥のベッドの上で上半身だけを起こしていた。ベッドの横には京子と愛の姿もあった。

変更というのは多分、場所の問題だろう。中隊の半分が入院する事態になつた為、本部でパーティーする訳にはいかない上、病院内部で騒ぐ訳にもいかない。

「変更つて？ 日程ずらすの？」

首を傾げると、沙耶は不敵な笑みを浮かべた。

「クリスマスにやらなきゃ、クリスマスパーティーじゃねーだろ」

沙耶の後ろで深海百合が気怠そうに、もう忘年会とセットにすればいいんじゃない、と呟く。優もそう思ったが、どうやら流利的にクリスマスパーティーを執行するつもりの方だった。

「それで、具体的にどうするの？ 病院のどこかの部屋を借りるの？」

尋ねると、何故か全員の視線が優に集まった。

十二月二十五日。クリスマス当日、優は自室の扉を開け、そつと外の様子を窺った。

「どうなさいましたか？」

廊下にいた中村に声をかけられ、優はビクツと肩を震わせた。

「な、何でもありません！ 今から寝ようと思うので、誰か来ても通さないようお願いしますっ！」

中村は一瞬怪訝な表情を浮かべ、腕時計に目をやった。まだ十七時。寝るには些か早すぎる、と考えたのだろう。

「どこか、具合が悪いのですか？」

「いえ、その、ちよつと疲れてるだけです！」

「わかりました。ごゆっくりお休みください！」

「はい。おやすみなさい！」

そう言つて、優は逃げるように自室の扉を閉めた。扉に背を預け、ふう、と息をつく。

「よし！」

一人呟いて、優はベッドに向かった。サイドテーブルに積んであった本を数冊適当に取つて、ベッドの上に敷き詰める。その後、着替えの服を次々とベッドの上に並べ、その上から毛布を被せた。毛布がこんもりと膨らみ、まるで誰かが中で寝ているようになる。優はその具合を確認した後、用意していた大きな紙袋を二つ手に取り、部屋の明かりを消した。

真つ暗になつた部屋の中、優は外の光が差し込む窓を全開にした。強い風が吹き込む。優は小さく身を震わせ、ベッドの中に入れていたカーディガンを手探りで取り出し、上から羽織つた。次に開いた窓に片足を掛け、意識を背中に集中する。一瞬で光翼が背中に現れ、優は窓から飛び降りた。同時に大きく光翼を羽ばたかせる。優はそのままゆっくりと職員用の駐車場に舞い降りた。緊急外患用の入り

口も近くにあるが、一般病院ではない為、人影は全く見当たらない。殆ど車が止まっていない駐車場を、優は外壁に沿って駆けた。女子病棟の下まで辿りつくと、優は持っていた紙袋を地面に下ろし、再び光翼を羽ばたかせた。そのまま、四階の窓まで高度をあげる。そこが病棟の端から二番目の部屋である事を念入りに確認してから、優は窓を小さくノックした。すぐにカーテンが開き、華が顔を見せた。目が合い、優と華はどちらからともなく笑った。窓が開く。

「ちよつと、ドキドキするなあ」

華が言う。優は、そうだね、と言って窓枠に両足をかけ、華に向かって両手を広げた。華が恥ずかしそうに優の胸に飛び込む。優はしっかりと抱きかかえて、窓枠を蹴った。後ろ向きに羽ばたき、ゆつくりと高度を下げていく。

「ちよつと寒いね」

そう言つて、華は腕の中で控えめに身を寄せてきた。

「大丈夫？」

「うん。大丈夫大丈夫」

地に足がつく。華は名残惜しそうに優から離れ、一步後ろに下がった。

「先輩、次お願いしまーす！」

上空から麗の声。見上げると、先程の窓から麗が顔を出して手を振っていた。

「僕、タクシーじゃないんだけど」

そう呟くと、隣で華がクスリと笑った。

五部屋に散らばっていた三十人の中隊員を全員裏手の駐車場に下ろす作業が終わると、優達は暗闇の中を駆けた。人数が多い為、嫌でも目立ってしまう。病院の塀を超えて、優達は出来るだけ暗い路

地を走った。幸い、病院が郊外に位置していた為、大通りを通らずとも目的の地まで誰とも会う事はなかった。

「先輩先輩！ これって映画みたいな大脱走ですよねっ！」
後ろから麗の弾んだ声。

「仮釈放は確実になくなるね」

舞が楽しそうに言う。優はクスリと笑った。

細い路地を抜け、一行は河川敷に繋がる階段まで辿りついた。足を止め、息を整える。

「この先だよな？」

優は振り返って、一向に尋ねた。全員が頷く。優は階段を見上げ、ゆっくりと上り始めた。

強い風が吹く。マフラーが大きく靡いた。

階段を上り終わると、河川敷から大量の煙が上がっているのが見えた。そして、煙の根元には多くの人影。すぐに本部から集まった中隊の女の子達だと分かった。優は河川敷に繋がる階段を下り始めた。食欲をそそる香りが鼻をつく。

階段を最後まで下りると、河川敷に集まっている女の子達が優達の存在に気付き、手を振った。

「さつさと来いよ！ もう始めてんぞ！」

遠くから沙耶の声。優は苦笑して、傍まで駆け寄った。

「煙、出すぎじゃない？」

「良いんだよ。下手に上手く隠れるより、こつやつた方が大目に見てもらえるかもしれないしな。あ、これ、いるか？」

沙耶はそう言っ、肉の乗った紙皿を優に手渡した。素直に受け取り、辺りを見渡す。バーベキュー用の足つきコンロがいくつも並び、その周りに人が密集していた。

「これ、運ぶの大変だったんじゃない？」

「まあ、それなりに。あ、これ、箸な」

未使用の箸が差し込まれる。それを受け取った時、後ろから京子の声が響いた。

「華！ 桜井！ こっち場所とつてるよ！」

振り返ると、京子の横に愛もいた。他に第一小隊の数人。

「少し寒いが、まあ、たまには良いだろ。雪が降れば良かったんだけどな」

沙耶がそう言っつて、空を見上げる。優も同じように空を見上げた。まだ十八時過ぎの筈だったが、空は真つ黒に染まっていた。

「んー、降らしてみよっか？」

「はあ？ 何を？」

沙耶が怪訝な顔を浮かべる。優は悪戯っぽい笑みを浮かべ、右手を真上に向けた。ESPエネルギーを練り、指先から上空に向けて撃つ。

「あ、おい」

沙耶の焦つた声。直後、上空に向けて撃たれたESPエネルギーの塊が弾けた。粉々になった光の粒子がゆっくりと空から舞い降り始める。辺りから静かな歓声があがった。

「そついうのは、忘年会まで取つとけ」

沙耶が降ってくる光の粒子を見上げながら苦笑する。

「隠し芸は絶対にやらないよ」

そつ言っつて、優は京子達が待つ場所へと歩き始めた。

賑やかな喧騒が優を包んだ。

お腹が小さく鳴る。

優の琥珀色の髪を冬風が優しく撫でた。

第四章 あとがき 人気投票結果

第四章、『死の記憶』完結です。

気付けば、四章だけで六ヶ月も使っていました。Raison d'êtreを掲載し始めてから半分以上は四章を書いていた事になります。プロット時点ではここまで長くなるとは思ってなかったのですが、三章の時と同様、構成能力の低さが露呈する結果となつてしまいました。大変申し訳ないです。

物語の折り返し地点を終え、次章は序破急の破の続きとなります。ただし、五章に入る前に人気投票で一位を獲得したキャラクタの番外編を恒例通り挟む事に致しました。以下、その結果となります。

最も好きなキャラクタは？ の票数

1位	白崎凜	77票	30.4%
2位	桜井優	53票	20.9%
3位	宮城愛	31票	12.3%
・長谷川京子	26票	10.3%	
・神条奈々	18票	7.1%	
・姫野雪	12票	4.7%	
・佐藤詩織	10票	4.0%	
・篠原華	9票	3.6%	
・斎藤響	7票	2.8%	
・斎藤準	3票	1.2%	
・進藤咲	2票	0.8%	
・広瀬理沙	2票	0.8%	
・黒木舞	1票	0.4%	
・望月麗	1票	0.4%	
・上田孝義(中将)	1票	0.4%	

・長居加奈	0票	0	0%
・川上沙耶	0票	0	0%
・藤宮綾	0票	0	0%
・奥村音々	0票	0	0%
・斎藤幸枝	0票	0	0%
・秋山明日香	0票	0	0%
・橋本恵	0票	0	0%

好きなキャラクターは？（複数回答可） の票数

1位	白崎凜	157票	62.1%
2位	神条奈々	145票	57.3%
3位	桜井優	140票	55.3%

・宮城愛	120票	47.4%
・姫野雪	106票	41.9%
・長谷川京子	100票	39.5%
・黒木舞	89票	35.2%
・篠原華	88票	34.8%
・佐藤詩織	82票	32.4%
・斎藤響	65票	25.7%
・秋山明日香	41票	16.2%
・斎藤準	40票	15.8%
・橋本恵	40票	15.8%
・望月麗	39票	15.4%
・進藤咲	37票	14.6%
・広瀬理沙	35票	13.8%
・川上沙耶	24票	9.5%
・長居加奈	23票	9.1%
・奥村音々	15票	5.9%

・ 上田孝義（中将）	14票	5.5%
・ 斎藤幸枝	13票	5.1%
・ 藤宮綾	11票	4.3%

回答合計253票。

二つのランキングで共に一位を獲得したのは白崎凜でした。前回一位の愛と二位の優を突き放してぶっちぎりです。こんなに他を突き放すとは思ってなかったので、ちょっと驚いています。

番外編に登用するのは一位の凜だけですが、他の票数を見て、今後の参考にさせて頂きます。

また、多くのコメントありがとうございます。ここでお返事は致しませんが、全て目を通しています。可能な限り、要望の方はお応えしていくつもりです。たくさんのご投票ありがとうございます！

番外編 神の力の下に（白崎凜）

お家のバルコニーで小さな電子キーボードを弾いていると、真っ赤に染まったお空が突然気になった。

「姉さま、何故、お空は夕方になると赤くなるの？」

私は夕焼けを見上げ、隣に座る姉さまに問いかける。姉さまはぼんやりとお空を見上げ、小さく首を傾げた。

「太陽が真上に来る正午は一日の中で最も熱くなるでしょう？ 逆に、夕方になると気温が下がる。つまり、時間帯によって太陽との距離が違ってくるってこと。太陽との距離が遠くなると、青い光は波長が短いから、届かなくなる。でも、赤い光は波長が長いから、太陽が離れても地表まで光が届く。だから、空が赤くなったように見えるってわけ」

「お日様は青い光と赤い光を出しているの？」

「他にもいっぱい出してる。波長つてのは、つまり周波数。それを私達が勝手に赤色とか青色とかに分けてるだけ。凜の好きな音楽と一緒にだよ。あれも音の周波数を勝手にドレミに分けてる。そうした方が都合が良い訳。一旦記号化すると、その記号を操作する事でコードとかを簡単に定義できるから。でも、間の情報は失われる。巨大な情動的損失だよ。そうやって情報をわざと落とさないと人間は現実が理解できないんだ。メモリが圧倒的に足りない」

私には、姉さまが何を言っているのか理解できなかった。けれど、重要な事を言っている気がして、必死にその言葉を理解しようと努めた。

「話を戻そう。夕焼けと同じで、日中に空が青いのは中くらいの光、つまり青波が窒素とかで散乱してるから。それで、空が青く染まる朝焼けとか、そういうのも光の波長によって色ごとに散乱するから起こる訳。後は、同じような現象に分散するというのがあるかな。物質中を走る光の速さつてのは同一じゃないんだよ。周波数……光の

場合は波長かな。波長つてのはさっき言った所謂色に当たるんだけど、実は色ごとに進む早さが違う。だから、白色の光を発すると、ある地点で光は色ごとに時間軸に分散して到達する。って事はさ、光を信号として利用した場合、これがノイズになる訳。信号がさ、太くなっちゃうんだよ。物質を通る以上、こういうノイズは必ず混ざっちゃう。有名なのは、そう、熱雑音。熱があるとと言う事は、細かく震えてる訳じゃない？ だから、あらゆる通信系には必ず雑音が混じる。さっきの話に戻ると、人は常にこういう雑音の影響を受けてる訳。だから、絶対に現実を理解できない。物質的な問題と、認知的な問題。極端に言えば、私と凜は違う世界にいるってこと」

姉さまの言っている事が、私には半分も理解できなかった。ただ、ノイズという何かが悪さをしている事だけは分かった。

「そのノイズがなくなればどうなるの？」

「ノイズがなくなれば、か。そうだね、もし、あらゆる物質的な影響を受けない何かがあれば
するかもしれないね」

「本当に？」

「そう、多分、そうなる」

姉さまが珍しく言葉を濁す。姉さまにも分からない事があるなんて。びっくり。

「いや、この話はやめよう」

姉さまは口を閉じ、私の膝に乗っていたキーボードをそっと手に取った。そして、そのままキーボードを弾き始める。それを見て、私はある事に気付いた。

「姉さま、さっき、音楽は周波数がどうのこうのって言うてたけど、間違ってると思う。音楽はね、和音だけじゃなくて、リズムとか大ききさんなんかも大事なんだよ！」

私がそう言っていると、姉さまは手を止めて、じっと私の顔を見つめた。「そう、かもしれないね。確かに記号の操作だけじゃない。なるほど、凜の言う通りだ。凜は将来良いピアニストになるだろう」

姉さまはそう言っていて、私の頭をくしゃりと撫でてくれた。私はと

ても誇らしい気分になった。

姉がピアノのコンクールで金賞をとったのは、それから一年後の事だった。私は優秀賞止まりだった。母と父は、我が事のように姉の入賞を喜んでいた。私は、離れたところでその様子を眺めていた。何故、と思った。私は幼少期からピアノを続けていた為に、絶対音感を獲得していた。それだけ、反復した訓練を積み重ねてきた、ということ。対して、姉は相対音感さえ持っていなかった。それどころか、姉は両親の勧めでピアノを始めたばかりだった。それほど経験の差があったにも関わらず、私は姉に勝てなかった。私は愛用の小さな電子キーボードを床に叩きつけ、夢を諦めた。生まれて初めての挫折だった。

算盤も、習字も、勝てなかった。入賞すれば母と父は褒めてくれたが、入賞して当たり前前、という空気を子供ながらに感じていた。私は、全てに於いて姉に劣っていた。

父は代議士だった。まだ小さかった私と姉は自然と選挙活動に連れて行かれるようになり、そこでも私と姉の扱いの差は浮き彫りになった。周囲の大人の注意はいつも姉に向けられ、私はひっそりと影のように後ろに着いていくだけ。まるで姉の存在が私という存在を覆い隠しているようだった。そんな私をよそに、姉はいつもぼんやりと虚空を見つめていた。

私には姉が何を考えているのか、わからなかった。いつしか私は学力の向上に全てを注ぎ始めた。学問の習熟には才能が必要ない。成長曲線の係数に僅かな違いが見られるだけ。ずっと、そう思っていた。

でも、聖翔院の中等部に入学してから数日経過した時、私は見失ってしまった。

その日、私は姉の部屋に辞書を借りに向かった。幸い、姉はいな

かった。部屋に入ると、机の上に広げられたノートに目が止まった。中を覗くと、知らない記号の列が長々と展開されていた。私は、机に積み重ねられた古いノートを開き、目を通した。そこには、私が知っている公理系からいくらかの定理が不思議な記号とともに導かれていた。私は、そこで悟った。

全て、勘違いだった。姉は、習熟などしていなかった。恐らく、初めからそうだったのだろう。

人間離れた演繹的思考能力。それに基づいた帰納的思考能力。それが全てだった。私はずっと姉の後を追っているつもりだったが、違っていた。私は、誰かが舗装していた道を走っていただけ。姉は違う。姉は、自らが辿りついたそれと、他のそれとの整合性を確かめる為にプロトコルの調整をしていただけ。

私は、姉に似た一人の人物を知っていた。ガウス。カール・フリードリヒ・ガウス。私が知り得る、唯一の天才。

結論から言えば、私は初めから負けていた。多分、気づいていなかったのは私だけなのだろう。父も母も、周りの大人たちも、学友も、誰もが知っていたに違いない。私だけが知らなかった。私だけが理解しようとしていなかった。

姉が正式に修士の学位を得たのは、私が特殊戦術中隊に入隊してから一年後の事だった。

私は病室の窓の向こうに広がる空を見上げた。空は蒼く、澄んでいる。青波の散乱が引き起こすノイズ。それは時に思わぬ結果をもたらす。それに魅了され、追い求める人も多いと聞いた。逆に、キヤンセルする方法を追い求め続ける者もいる。

そのノイズがなくなればどうなるの？

ノイズがなくなれば、か。そうだね、もし、あらゆる物質的な影響を受けない何かがあれば
するかもしれない
ね。

不意に、あの時の姉の言葉が頭をよぎった。あの時、姉は何と言

ったのだろう。どうしても、思い出せない。もう、思い出す必要もない。

私はベッドから起き上がり、廊下に出た。静謐な朝の空気が清々しい。

回廊を渡り、散歩を続けていると、前から見知った顔が近づいてくるのが見えた。

「桜井中隊長、おはようございます」

「おはようございます」

彼は無邪気な笑みを浮かべ、私の横を通り抜けていった。その時、確かなESPエネルギーの波を感じる。散乱せず、分散もしない力。全ての物理的影響をすり抜けて、ノイズの影響を無視する神の力。

顔が喜悦に歪むのが分かる。私は、勝った。姉は、負けた。

この意味を、証明してみせよう。この公理から、新たな定理を導いてやろう。神の力の下に、私は私を得た。

彼とは逆の方に足を進め、薄暗い廊下を進む。静かな廊下に、私と彼の足音が響いた。

5章 1話 中崎一郎

「全く……」

病院裏の静かな駐車場に奈々の呆れた声が響く。

「クリスマスパーティーの為に集団脱走？ 後少し発見が遅れていたら地元の警察も巻き込んで大事になっていたかもしれないのよ」

対して、奈々の前に整列する六十人あまりの中隊員、特に分隊長以上には反省の色があまり見られない。最前列にいた舞が楽しそうに口を開く。

「まあまあ。ユークンがさ、ESP能力で知らせたおかげで大事にはならなかったじゃないですか！ 一件落着！」

奈々がジロリと優を睨む。とぼつちりで注意を向けられた優は、恨めしそうな視線を舞に向けた。

「それも連絡を意図したものじゃなく、余興の意味を込めてやったんでしょう」

奈々はそう言って深く溜め息を吐いた。吐いた息が白く濁る。

「まあ、良い。これだけに処罰を下せば中隊が崩壊する。ただし、次はない。もし、次に何か問題を起こせば、訓練カリキュラムを一ヶ月間倍にするから覚悟しておくように」

「さすが神条！ 話がわかる！」

沙耶が称賛の声をあげる。奈々はゆっくりと沙耶の方に顔を向け、薄い笑みを浮かべた。

「ただし、沙耶には扇動した責任を取ってもらおう。二度と悪さをしないようにしっかりと矯正するから、覚悟しておきなさい」

沙耶の動きが固まる。奈々はそれを満足そうに眺めてから叫んだ。「これで解散しましょう。もう遅い。本部組はさつさとバスに乗り込みなさい。入院組はさつさと自室へ。門限は既に過ぎているのだから、職員に迷惑をかけないように。以上！」

それを合図に場が騒がしくなる。沙耶に対して数人が次々とお悔

みの言葉を述べて、駐車場の端に停まっている大型バスに次々と乗り込んでいく。優はバスに乗り込んでいく京子と愛に一言声をかけた。

「あ、そうだ。退院の日、決まったよ。華ちゃんは明日。僕は明後日」

「オツケー。またメールするから、じゃあね」

「……また、来る」

「うん、またね」

京子と愛と別れ、バスから離れる。その時、駐車場の入り口からヘッドライトの明かりが差し込んだ。

「迷惑にならないように端へ移って！」

奈々の叫び声。エンジン音とともに、五台の黒い車両が次々と駐車場に進入してくる。優は他の少女たちと同様に邪魔にならない位置まで下がった。

一台の車両が突然優たちの前で停車する。他の四台もそれに倣うようにゆっくりと停車した。先頭の車両から一人の男がにこやかな笑顔を浮かべながら姿を現す。白髪の混じった小柄な初老の男だった。ただし、その身に纏うのは陸上自衛軍の制服であり、階級章には桜星が四つある。優は思わず小柄な老人をじっと見つめてしまった。

「中崎陸上大将……？」

奈々の戸惑った声。

陸上大将。

今の慣習では、大将の位を持つのは幕僚長クラスに限定されているはずだった。つまり、この老人は陸上幕僚監部のトップと言うことになる。優は敬礼するべきか迷った後、結局普通に頭を下げた。

「久しぶりだね、准将。元気そうで何よりだ」

中崎陸上幕僚長は温和な笑みを浮かべながら、奈々に向かって小さく右手を上げた。次いで、唸るような低い声が続く。

「准将、こんな所で何をやっている。学芸会でもやるつもりか？」

中崎陸上幕僚長が出てきたドアとは反対側のドアから上田中将がゆつくりと姿を現した。奈々の表情が硬くなる。

「……クリスマススのレクリエーションに訪れていた中隊員の送迎をしていました」

上田中将は動きを止め、上空を見上げた。

「そうか、今日はクリスマスだったか」

そう呟いた上田中将の後ろから、背広姿の男達が姿を現す。若い者もいたが、大半が四十を超えているように見えた。そんな男達の中に、一人だけ二十前後の女がいた。彼女は優達中隊員の方を順番に眺め、優に視線を向けた途端に視線を固定し、にっこりと笑った。優がぎこちない笑みを返すと、彼女は興味を失ったようにすぐ視線を外した。

「失礼、少し急いでいるんだ。積もる話はまた今度にしよう」

中崎陸上幕僚長はそう言って、裏口へと歩き始めた。その後ろを続々と男達が着いていく。上田中将は優の前を通り過ぎる瞬間、チラリと優に視線を向けた。

黙って睨み返すと、上田中将は何も言わず、笑った。

5章 2つの霸道

一団が裏口の向こうに消えていくと、再び喧騒が周囲を包んだ。

「何あれ。感じ悪うう」

後ろで小山千夏が愚痴る声。優はじっと裏口を見つめたまま、動けなかった。

「桜井も、そう思わないい？」

千夏が肩に手をかけ、同意を求めてくる。優は振り返らず、小さく頷いた。

残された車両が動き出し、駐車スペースに入っていく。それを合図に、京子や愛達を乗せたバスがゆっくりと動き出した。窓から何人かが手を振っているのが見える。優は小さく手を振った。

「さあ、戻って。廊下で騒がないようにね」

奈々が解散を促す。小学生かよ、と沙耶が毒づくのが聞こえた。

「桜井くん、早く戻る。風邪、引いちゃうよ？」

不意に右手を握られる。振り返ると、マフラーに口元を埋めた華がいた。ほんのりと頬が赤く染まっている。

「うん。戻ろっか」

頷いて、優は華と手を繋いだまま、裏口へと向かった。

「中将」

先頭を歩いていた中崎陸上幕僚長が口を開く。上田中将は、なんでしょうかと言葉を返した。

「欧州で移民に対する弾圧が始まった事は知っているね？」

「ええ。ポピュリズムの機運は極限まで高まり、広がり続けています。近いうち、ラテンアメリカでも同様の現象が起きるでしょう」

「そう、なるだろうな………経済が安定している内は良い。だが、景気というものは必ず循環する。彼らは、甘く見過ぎていた。自身の価値観が経済的な安定によってもたらされ、その不合理な継続をも生み出している事を忘れてしまったのだろう」

上田中将は頷いた。

「高級たる思想には高級たる所以があります。高級な思想を持つ者が高級な資質を持つ訳ではない。彼らいまだに前世紀的な考え方を捨てきれなかったのではないでしょう」

「大きな物語」は終わりません。彼らは巨大な何かによって自身が肯定される事を望んでいる」

後ろから声。上田中将が振り返ると、技術団の伏見敬一ふしみ けいいちが厳しい

顔を浮かべていた。

「多くの技術者が欧州から逃げ出し始めています。上手くやれば、我々は優秀な技術者を安価で手に入れる事ができます」

それを聞き、男の後ろを歩く若い女　白崎蘭しらかきらんがクスリと笑った。

「解せないな。日本は欧州を上回る技術者流出大国だ。彼らはどこに吸い込まれていくのだろうか？」

その言葉で、場に静かな笑いが巻き起こった。

「隣の芝は青い、とは良く言ったものだ。どこかにユートピアがあると誰もが信じているんだろう。欧州の崩壊も、それが始まりだった。我々も、気をつけなければなるまい」

中崎陸幕僚長はそう言って、目の前の扉を開けた。

5章 2話 神条奈々(14)

神条奈々は全員が駐車場から去った後、小さく息を吐いて駐車場から出た。病院の表に国道が走っている為に騒音が途切れる事はないが、裏はその反動を受けたかのような静寂と暗さに包まれている。街灯の明かりが暗闇を余計に際立たせているように思えた。

駐車場から僅かに離れた路肩に、その車はあった。奈々が接近すると、それを察知したようにロツクの外れる音が小さく響く。奈々は素早く後部座席に滑り込んだ。

「先程、五台の車両が駐車場に入っていました」

運転席から保安部長の浜中博人が身を乗り出して報告してくる。

奈々は静かに頷いた。

「把握している。出てきたのは中崎陸上大将と上田中将。他にも大勢いたけど、いずれも制服組ではない」

「久しぶりに外に出てきた甲斐がありました。集団でお見舞いに来たとは到底思えない。例の異常な発注と関係しているに決まってる」

「不要な詮索は必要ない。中崎陸上大将が関与しているとすれば、上田中将も下手な手は打たないでしょう。私達の脅威ではない」

「……防衛上の計画、ということですか。何か、それらしい事が？」

「私には何も知らされていない。でも、四幕会議の方で新しい見通しが立った可能性が高い。米国に続き、欧州の力が弱まれば、中国が何をしでかすか分からない。彼らはずっと太平洋に出たがっている。こんな時に列島線を押上げられれば堪ったものじゃない」

奈々がそう言うと、浜中は怪訝な顔を見せた。

「列島線？ まさか。亡霊の注意を大陸に引きつける危険を侵すとは思えません」

「私も中国が列島線を突破してくるとは本気で考えていない。可能性の話。それでも統幕が動くには十分すぎる理由だわ。私達は政治家みたいにヒューリスティックなアプローチをとれないし、そんな

ものを採択する積極的な理由もない。徹底的にモデル化して、シミュレーションを重ねて、それを突き合わせて動いていくしかない。それが国防じゃない？」

「いえ、ええ、それは理解しているつもりです。ええ……どうも、私はたまたま組織をブラックボックスとして捉えてしまっ。アウトプットされた情報だけで、その組織の効率を図ってしまう。少し、常識をコレクションしすぎたのかもしれない」

「保安部という特色を考えれば、そちらの方が都合が良い。保安という行為に懐疑的になられても困る」

浜中は弱々しく笑った。その顔は暗闇の中で酷く老けて見えた。

「そうだ。神条司令、知っていますか。今日はクリスマスなんです」「それが原因で病院まで飛んでくる事になったと記憶しているんだけど」

「違います。そういう意味ではありません。クリスマスに仕事ばかりしてて良いんですか？」

奈々は何も言わず、浜中の顔を見つめた。浜中の瞳には強い意思の光が宿っていた。

「以前の定例会議。あれで、わかりました。彼の事が好きなんですよう？」

奈々は溜め息を吐いた。

「彼って？」

「桜井優です。彼、特定の相手はいないみたいですよ」

「お願い。やめて」

奈々は手を前に出し、言葉を続けようとする浜中を制した。それから、額を押さえ、顔を伏せる。

たっぷり間をおいてから、奈々はゆっくりと顔をあげた。

「……もう少し、待ってて貰える？」

「ええ、そういう楽な仕事は好きです。ごゆっくりどうぞ」

浜中はそう言ってカーオーディオのスイッチを入れた。大音量で一世代前の音楽が車内に流れる。奈々は、ありがとう、と言葉を残

して車を出た。

桜井優は病室のベッドで横になり、考え事をしていた。

結局、亡霊が何をしたかったのか分からないままだった。奈々にアメーバの中で起こった事を報告した後、いくつかの検査を受けさせられたが、その結果も返ってきていない。

上の方は、今回の件についてどのような見解を持っているのだろうか？ 何故、下には何も知らされないのだろう。少なくとも、戦術レベルで役に立つような事は何も分かっていない、ということだろうか。

優は寝返りを打ち、白い天井を見つめた。それが、沙織の最後に見た幼稚園の天井と被る。優は小さく息を吐いた。柊沙織の記憶は時間が経つ度に深く刻まれ、鮮明に思い出せるようになってきた。そして、ある事が急速に不安を生みだしつつあった。

花公院。六年前、女性初のESP能力者が通っていた高校。そして、男性初のESP能力者である自らが通っていた高校。この一致は果たして偶然なのか。

花公院には何か、ESP能力の起源とも呼べるものがあるのではないか。地理的要因、あるいは構造自体が何らかの原因になっているのではないか。

そこまで考えた時、ドアをノックする音が響いた。

「どうぞー」

身を起こし、ドアに向かって言葉を投げかける。直後、ドアがゆっくりと開き、奈々が顔を覗かせた。

「し、し、し、神条司令！」

咄嗟に毛布でパジャマを隠す。僅かな既視感。

「こんばんは。元気そうで何より」

「こ、こんばんはっ。何かあったんですか？」

反射的にサイドテーブルに置かれた時計に目をやると、二十一時を過ぎていた。

「いいえ。何も。ただ、私が来たかっただけ」

奈々はそう言って、ベッドの傍までゆつくりと歩んだ。

「ここ、良い？」

ベッドの空いたスペースを優しく叩き、奈々は首を小さく傾げた。「はい、どうぞっ」

奈々が腰を下ろす。思いのほか距離が近い。

数日前の記憶が蘇り、優は奈々にどんな顔を向ければ良いのか分からなかった。顔が赤くなるのを自覚し、視線を逸らす。

「そんなに硬くなられると、少し困る」

クスリと奈々が笑う。優は釣られるように小さく笑みを浮かべ、奈々に目を向けた。

「退院は明後日だったかしら？」

「はい。年内には戻れるようです」

そこまで口にして、ある事を思い出す。

「あの、僕の休暇はまだ解けないんでしょうか？」

「君のESP能力の安全性が確認されるまでは、少し難しい」

「じゃあ、訓練もまだお預けですか？」

「ええ。ゆつくり休みなさい」

その答えを聞き、優は短く考えを巡らせた。

「あの、僕には良く分かりません。無期限の休暇というのは、戦力として扱われないと言う事ですよ。それなのに、対策室の配下においたまま、しかも外出を禁止するって事は、えっと、僕が危険な対象として扱われているということですか？ 率直に言えば、戦力から監視対象に変わった、と言う事ですか？」

奈々の瞳が大きく見開かれる。優は大きく息を吸って、言葉を続けた。

「昔、同一説というのがあったと聞きました。亡霊とESP能力者は本質的に同一なものだって。ESP能力は感染症のようなもので、

最終的に亡霊のような存在になるって」

「違う。それはただの噂よ。通説も政府見解も、それを全面的に否定している」

すぐに奈々が否定する。優は頷いた。

「わかってます。神条司令がそうした考えを持っていない事も理解しているつもりです。でも、その可能性を危惧している方がいて、そちらに配慮しているように思えます。可能であれば、教えてください。自身の置かれた状況を正確に理解しておきたい、と思っています。僕は、対策室にとって脅威ですか？」

奈々の瞳を正面から覗きこむ。奈々はじつと優の瞳を見つめ返した後、ゆっくりと目を閉じた。そして、諦めたような笑みを浮かべる。

「……そう捉えられてもおかしくない状況かもしれない。ごめんなさい。初めから、全て説明しておくべきだった」

奈々の左手が優の右頬に添えられる。少し、冷たかった。

「全部、戦略上の判断とは独立したものだ。君を蝕む可能性があるから、ESP能力を封じようと思った。外に不審な動きが見られるから、君の外出を禁じた。本当に、それだけ。だから、君は何も心配しなくて良い」

「外に不審な動きって、どういう事ですか？」

優が不安そうな様子を見せると、奈々はクスリと笑った。

「別に危険な組織が動いてるとかじゃなくて、ただのゴシップ好きがいるだけ。君の外出を禁じれば、君が利用されなくなると思った。本当に、それだけ。監視の意図は欠片もなかった」

そこで一度言葉を切り、優の頬を優しく撫でた。

「でも、そうね。君の言う通り、勘ぐられても仕方ない状態だね。周囲も、そう思つかもしれない。近い内に何とかしましょう」

奈々の手が頬から離れる。

「私の釈明はこれで終わり。今度は君に質問して良い？」

「はい」

頷くと、奈々はにこりと首を傾げた。

「嫌だった？」

「何がですか？」

「前に会った時、最後にした事」

ふと、柊沙織から見た奈々の姿が脳裏に浮かぶ。表情と感情を押し殺したような奈々の姿。その姿が、優の脳裏に強烈に焼きつけられていた。

そう。奈々はね、昔から他とは違ってた。全てから独立していた。

次いで、恵の言っていた言葉を思い出す。そして、その話を聞いた時の自らの心情を思い出す。

優はじつと奈々の瞳を見つめ、躊躇なく首を振った。

「嫌じゃありません。僕は、神条司令の事が好きです」

口にした瞬間、正面から奈々に抱きしめられ、顔を引き寄せられた。次に唇が塞がれる。一瞬の出来事だった。

背中に回された腕が痛いほど力強く締め付けられる。正面から奈々の豊富な胸が押しつけられ、優は動けなくなった。その隙に、奈々の舌が侵入してくる感覚。

優が小さく身じろぐと、奈々がゆっくりと唇を離し、クスリと笑った。

「良い？」

何に対しての問いなのか確認するまでもなく、優はコクリと頷いた。

「……はい」

奈々の腕に背中を支えられ、優しくベッドに押し倒される。直後、再び唇が塞がれた。

優が遠慮気味に奈々の背中に手を回した途端、奈々の舌使いが荒くなる。同時に、奈々の全身が押しつけられ、密着する形になる。

長い間、そうやってお互いの気持ちを確認するように唇を重ねた後、奈々がゆっくりと上体を起こし、優の顔の横に両手をついた。

お互いの荒い息遣いが響く。

「前から聞こうと思ってたんだけど、優君、私に隠し事していない？」

予想外の問いに、優はキョトンとした表情を浮かべた。

「翡翠の蝶々。あれは何から目を逸らす為に放ったの？」

それで、奈々の言葉の意図をようやく理解する事ができた。

「あれは、広瀬さんとの連絡手段を隠すためにやりました」

「連絡手段？」

「はい。ESPエネルギーで言葉を搬送する事ができるみたいです。言葉というよりも、思考そのものかも」

奈々が上体を落とし、顔を近づける。

「他には？」

「……右腕に、軽い後遺症があります。検査には引っ掛からなかったのですが、少し、普通とは違つかも」

奈々の瞳が大きく見開かれる。直後、再び唇が軽く重なり合う。今度は一瞬だけだった。

「話してくれて、ありがとう」

奈々の熱っぽい視線を向けられた後、何度目かの接吻が始まる。すぐに温かいものが唇を割って入り、奈々の片手がパジャマの中をまさぐり始めた。胸部に冷やりとした感触。くすぐったくて身をよじようとすると、上から覆いかぶさる奈々が更に体重を預け、身動きが取れなくなる。

パジャマの中をまさぐる動きが激しくなった時、静かな室内にノックの音が響いた。突然の事に驚いて動きが止まる。对象的に、奈々は弾かれたように飛びのき、ベッドの傍に降り立った。直後、ドアが開く。

「ケーキ持ってきたよー！」

現れたのは、白い箱を持った華だった。その後ろには沙耶、千夏、舞の姿がある。優は慌てて乱れたパジャマの裾を下に下ろし、近くの毛布を手繰り寄せた。

「げ、神条じゃん」

沙耶が上ずった声をあげる。華と千夏も奈々の姿を確認した途端にキョトンとした表情を浮かべた。

「貴方たち、何やっているの？ もう就寝時間でしょう」

奈々が何事もなかったように、呆れた声を出す。対して、舞は悪びれる様子もなくニヤニヤと笑みを浮かべた。

「質問です！ シレーは何やってたんですか？ 秘密の逢引ってやつですか！」

「つまらない人事上の相談よ」

奈々はそう言うてから、時計に目を向けた。

「もう戻らないと。優君、続きはまた今度ね」

奈々は優に微笑を向け、戸口に向かって歩き始めた。沙耶達の前を通る際、夜更かしはほどほどにね、と言ってから、部屋から去っていく。それを見送ってから、華達はベッドの傍まで足を進めた。

「はい。これ。葵ちゃんが皆の分を買ってきてくれたんだって」

華が嬉しそうに笑いながら、ケーキの入った箱を差し出す。

ありがとう、と微笑んで、優はそれをサイドテーブルに置いた。

「開けていい？」

「うん。あ、フォークも」

続いて使い捨てのフォークを受け取ってから、優は箱に手を伸ばした。白い箱には控えめなクリスマス用の装飾が施されている。箱を開けると、甘い香りとともに、モンブランが姿を現した。

「神条の奴と何話してたんだ？ 人事って事は、給料アップとか？」

沙耶が戸口を気にしながら口を開く。優は困ったように沙耶を見上げ、違うよ、と言った。

「えっと、当分外出許可を出せなくなるって話」

咄嗟に、数日前に奈々から聞かされた話を口にする。幸い、この話はまだ誰にも言っていないかった。

「え？ 外出できなくなるの？」

「何それえ！ 聞いてないって！」

華と千夏が驚きの声をあげる。優は慌てて訂正した。

「あ、全員じゃないよ。僕だけ、ちよつと外出禁止になるみたい」

「はあ？ 何で桜井だけ、そんな処置がされるんだよ。代わりに文句言ってきてやるのか？」

沙耶が少し怒ったような表情を浮かべる。優はクスリと笑い、首を振った。

「ううん。大丈夫。納得してるから。怒ってくれてありがとう」

「いやいや、絶対におかしいだろ。勝手に休暇だの何だの言って、拳句の果てに外出禁止って、そんなの……都合の良い兵器みたいな扱われ方じゃねえか」

後半は躊躇うような調子で、沙耶は言葉を吐きだした。それを聞いた華が表情を硬くする。優はもう一度首を振った。

「大丈夫。そういう意図じゃないよ」

「何でそう言いきれるんだよ？」

沙耶が噛みつく。優は僅かに考えこんだ後、じつと沙耶の瞳を見つめた。

「神条司令はそういう人じゃないから」

その三日後、優の言葉を肯定するように、周囲が抱いた不安を払拭するように、ある通達が出された。保安部の一部、情報部の一部に対する戦術指揮権の譲渡。桜井優は特殊戦術中隊に加えて、二つの新たな部隊によって構成された特殊戦術大隊を統率する事になり、大隊長としての位を得る事になる。

それは、優に対する奈々の信頼を確かな形として周囲に示す形となった。与えられたのは外への力ではなく、内に対する力。それが装飾的な意味しか持たないとしても、その意図は誰もが無視できない。特殊戦術中隊の在り方は変わらないまま、ESP能力者の在り方が確実に変わり始めていた。

紫色の煙が立ち昇る中、異形の者達が統率された動きで行進していく。

彼らが向かうは、島の中央部。小高い丘になった地点に色褪せた鳥居が立ち、その外に異形の者たちが整然と並んでいる。古びた社殿の前には、ドロドロに溶けたアメーバの残骸があった。

異形の者達はそれに向けて、喜悦の咆哮をあげた。正しくは、その残骸の向こうに広がる可能性に向けて。

異形の者たちは何も語らない。彼らには語る必要がない。彼らの意志は常に統一され、高度に分裂し続けている。彼らはただ喜悦の咆哮をあげ、来る祝福の日を待ち続ける。彼らはそういう存在だった。

打ち捨てられた本殿の古びた扉が何かを知らせるようにガタガタと風に揺れた。異形の者達が敬意を向けるその中には、本来安置されているはずの神体がない。ただ、何者かを待つように一脚の古びた椅子がひっそりと安置されているだけだった。

白流島を亡霊の咆哮が包む。彼らの咆哮は、未だ終わる様子を見せない。

5章 3話 華秋院彰

「優君が、大隊長？」

秋山明日香は思わず甲高い声をあげた。斎藤準が頷く。

「ああ。本当に突然の編成だった。最も、業務に支障はないから特に困ってる訳でもないんだが」

準は小さく息を吐いた。

場所は医務室。全小隊の合同訓練が行われている為、いつも医務室で時間を潰している少女たちの姿はない。

準は声を潜め、デスクに座る明日香に囁いた。

「保安部にも確認を取ったが、向こうにも事前説明がなかったようだ。上の方の独断と見て良い」

「業務に支障がないっていうのは、編成が実務に反映されていない、と言う事？」

明日香は考え事をするように何も無いデスクを見つめ、慎重に言葉を発する。準は、そうだ、と即答した。

「桜井に与えられた大隊長という肩書は虚飾だ。何も中身が伴っていない」

「特殊戦術大隊と同じね？」

「そんなものは記録上にしか存在しない」

沈黙が落ちる。明日香は逡巡した後、一人頷いた。

「でも、悪くはない。優君をよくわからない地位で飾ったのは、彼を守る為でしょう？ 自衛軍か内局がちよっかいを掛けてきそうだから、それを牽制したんじゃないかしら？」

「どうか。桜井が未成年にも関わらず中隊長という立場に就く事が出来たのは、桜井の部下が全員ESP能力者だったからだ。他に代わりがいなくて、制服組に関係ないから許されただけだろ？ それも、今回は桜井の下に保安部の護衛一課、情報部の電子運用課まで配下に置く事になった。桜井の影響力は、ESP能力者の中だけ

に留まらなくなった訳だ。これまでとは全く事情が違う。これにS
IA 辺りが過剰反応したらどうする？」

明日香の眼が鋭く細まる。

「準、貴方、勘違いしてる。内部から優君に物理的な害意を向ける
事なんて不可能なの。彼が持っている力は装飾的なものじゃなく、
確かな力」

「なら、桜井を守るために大隊長なんて位を渡す必要なんてなかつ
たんじゃないか」

「違う。物理的な害意は簡単に退ける事ができても、組織的な害意
を逸らす事は難しい。だから、奈々は優君の立場を再び強調させよ
うとしたと言う事」

「組織的な害意？」

準の疑問に答えようと明日香が口を開きかけた時、医務室の扉が
ガラガラと音を立てて横に開いた。そこから、ひよっこりと桜井優
が顔を出す。

「こんにちはっ」

明日香と準を交互に見つめた後、優はにっこりと笑って軽く頭を
下げた。明日香と準は一度だけ顔を見合わせた後、優に向き直った。
「そういえば、今日が退院の日だったな」

「はい」

準の言葉に優が頷く。明日香は一步踏み出し、優の目線に合わせ
るように身を前に屈めた。

「まずは、大隊長への昇格おめでとう」

「あの、はい、ありがとうございます」

困ったような顔を浮かべる優を見て、明日香は一抹の不安を覚え
た。

「もしかして、君にも事前説明がなかったの？」

「はい、突然の事で何がどうなっているのか……」

明日香はチラリを準を見た。準は穏やかな笑みを浮かべ、優の前
までゆっくりと歩んだ。

「気にするな。つまらない事務上の出来事だよ。実際に桜井の負担が増える訳じゃない」

「はい、でも、あの、電子運用一課って斎藤さんのチームですよね？」

「ああ、幸枝も一緒だ」

「護衛一課の方には、以前からお世話になっっている中村さんが所属しています。大隊の創設には、少なからず僕と関係があった方が選ばれてみたいで、その、巻き込む形になってすみません」

準は小さく笑った。

「お前が気にする事じゃないよ。給料が上がるかもしれないし、感謝したいくらいだ」

その言葉に優はキョトンとした顔を見せた。

「給料が上がるって、何かあったんですか？」

準の顔が強張る。

「それも聞いてないのか？ 新しく創設された対電子小隊の隊長に俺が選ばれたんだ」

「え？ ええ！？ えっと、おめでとございますっ！」

優が驚いたように声を上げる。明日香は小さく顔をしかめた。

「もしかして、特殊普通科小隊の方の隊長が中村さんだって事も知らなかったりする？」

「……それも初耳です。護衛一課と電子運用課の一部から選抜された、としか聞いていませんでした」

優が困ったような笑みを浮かべる。明日香は大きく溜め息を吐いた。

「まあ、奈々にも何か考えがあるんでしょう。優君が心配する必要はないわ」

「はい……そうですね」

優は素直に頷いた後、思い出したように当初の目的であろう要件を口にした。

「あ、えっと、風邪のお薬いただけませんか？ ちょっとしんどく

って」

明日香は反射的に優の顔をじっと眺めた。少し、顔が赤い。

「熱は？」

「わかりません。体温計持ってないんです」

明日香はデスクの上に転がっていた電子体温計を手にとって、立ち上がった。

「一応、これで計っておいて」

「はい」

優に体温計を渡してから、明日香はデスクを漁って熱冷まし用の冷却シートを取り出した。顔を上げると、優が体温計を服の下に潜り込ませ終えたところだった。

「倦怠感以外に頭痛とか喉の痛みはない？」

「少し身体が重いだけです」

「入院してたから、身体が鈍ってるのかも。暖かくして、身体を冷やさないようにね」

「はい」

素直に頷く優を見て、明日香は頬を緩めた。

「斎藤さん。響ちゃんの様子はどうですか？」

優が準の方を向く。

「至って健康だよ。最近は簡単な算数ができるようになった。好奇心が旺盛で素直だから、呑み込みが早い」

「順調そうで良かったです」

嬉しそうな笑みを浮かべる優。明日香はふと、ある事を思い出した。

「そつだ。優君、手、見せて」

「手、ですか？」

「そう。右手」

優は僅かに顔を強張らせた後、ゆっくりと右手を差し出した。

「奈々から聞いたわ。痛みはある？」

「いえ、ないです」

「感覚は？」

「あります」

「痺れは？」

「……たまに」

明日香は優の顔をじっと見つめた。そして、優の腕を軽く抓る。途端、優の身体が小さく跳ねた。

「……あの、凄い痛いです」

「痛みは感じるようね」

明日香は小さく笑って、優の腕を離した。横から準の困惑した声が飛び込んでくる。

「何の話だ？」

「腕に痺れが走るらしくて。確か、準が亡霊の攻撃を受けた時も痺れが残ってたわね」

「ああ。一週間ほどで良くなったが」

そう言って、準は手をひらひらと振ってみせる。明日香は首を傾げた。

ESPエネルギーが何らかの悪影響を与えているのだろうか。もしそうなら、準と違って優の痺れが一向に治らないのは、優個人が持つESPエネルギーが亡霊から受けた影響を増幅させている、ということなのだろうか。

そこまで考えた時、電子体温計の測定が正常に終わった事を伝える電子音が響いた。優が服の中から体温計を取り出し、液晶画面を覗きこむ。

「三十七度二分です」

「少し高いわね。酷くなるかもしれないから、しっかりと休むように」

冷却シートと市販薬を渡しながら、明日香は言葉を続けた。

「それから。今度腕の方をしっかりと調べましょう。良いわね？」

「……はい。ありがとうございます」

ペコリと優が頭を下げる。明日香は、お大事に、と言って優の後

る姿を見送った。

優が出ていった後、明日香は準に顔を向けた。

「……話を戻しましょう。優君が大隊長に就任する直前の闘いで、亡霊がかつてない程の戦力を投入してきた事は知ってる？」

「ああ、戦闘の規模くらいは知ってるよ」

「じゃあ、その中に数十メートル級の亡霊がいた事。その亡霊の中に優君が取りこまれた事。中隊の敗北が決まった後に、亡霊が撤退を図った事は？」

みるみるうちに準の顔が強張る。

「待て。お前は、その情報をどこから得た？」

「奈々からよ」

明日香は警戒するように戸口の方を見てから、声を潜めた。

「戦闘後に優君が目覚ました時、私が傍にいたの。彼、酷く混乱してた。何があつたのか奈々に問い詰めたら、亡霊が優君を呑みこんで記憶を漁った可能性があるって」

「記憶を？」

「そう。それと、別の誰かの記憶を見せ付けられたらしいの。だから、彼は目を覚ました直後、自分が誰なのか理解できず、混乱してた。あれだけの戦力を投入して、亡霊がやった事はそれだけ」

準は先を促すように何も言わなかった。

「私には亡霊の行動が全く読めない。優君は中隊の中核だけど、亡霊がここまで執拗に優君だけを狙うなんて有り得る？ 十六歳の子どものよ」

「年齢なんて、俺達が統計的に導き出した評価基準でしかない」

「そうかもしれない。でも、亡霊が優君を脅威と判断しているなら、今回は楽に葬る事が出来た訳でしょう？ きつと亡霊は優君を物理的脅威とは見なしていないんだわ。もつと言えば中隊だってそう。対策室だって、亡霊にとっては何の意味も持たない些細な障害なのかも」

明日香は溜め息をつき、薄く笑った。

「覚えてる？ 貴方は前に、優君の持つESP能力は他の中隊員とは別の能力かもしれないって言ったわ。本当にそうなのかもしれない。私達は何か大きな思い違いをしているんじゃないかしら」

準は明日香の言葉に深く頷いた。

「俺達は、ESPエネルギーを操る力にESP能力というラベルを貼ってしまった。そのラベルには、大した意味がない。ESP能力に対しての理解がなかったから、ブラックボックス化してアウトプットの振る舞いだけに注目してラベルをつけただけだ。これがそもそも間違いないのかもしれない。例えば、出産とクローンという別のプロセスをアウトプットだけに注目して、”子どもを作る能力”と一つにまとめていれば、クローン体の成長過程だけに興味を注ぐ学者の行動は奇妙に映るだろう。亡霊にとって、桜井の持つプロセスが酷く特異なものとして、あるいは価値の高いものとして映っている可能性が高い」

「私もそう思う。初めから、視点が全然違うんだわ。それを考えてないから、ややこしくなる。亡霊の目的は、一貫して優君だったんじゃないかしら。優君を探す為に、侵略を開始した。もしくは、優君のようなESP能力者を探し出す為に。そして八年経った今、ようやく優君が亡霊の前に姿を現した。亡霊は侵略する必要性を失って、優君に固執するようになった。私達は、ただ巻き込まれただけなのかも」

沈黙が落ちる。

明日香は深く息を吐き、奈々の事を考えた。

奈々は、どこまで考えているのだろう。少なくとも、今話しあっていた程度の事は既に考えているだろう、と思った。だからこそその戦術大隊なのだろう。その矛先が外に向いてようと内に向いてようと、あるいは両方に向けられていようと、大隊の創設は全ての面において合理的であるように見える。

ただし、一度動き出したものを止める事は難しい。十六歳の子どもを象徴として祭り上げた後、奈々は後処理をどうするつもりなの

だろう、と明日香は憂鬱な気分になった。

桜井優は医務室から出た後、寮棟とは反対のエントランスに通じる方へ足を進めた。

熱のせいか、僅かに頭がぼうつとする。

優はフラフラとエントランスを通って、外に出た。

冷たい風が吹く。優は小さく咳き込んで、テニスコートの前を通って本部裏に向かった。

亡霊の見せられた記憶の中で、沙織とユウが出会った倉庫群。そこに辿りつくと、記憶の中にはなかった建造物が本部から突き出るように聳え立っていた。そして、倉庫の影はどこにも見当たらない。どうやら、取り壊されたらしい。優は暫くそこに立ったまま、呆然と建造物を見上げた。

風が、冷たい。

記憶の中でも、冷たい風が吹いていた。

優は目を瞑り、柊沙織の記憶を手繰った。

沙織は、ここでユウと出会った。

優以外の、男性ESP能力者。

既に記憶が薄れ、ユウの顔を思いだす事ができない。

彼は、どこに行ってしまったのだろう。

何故、いつも倉庫の中にいたのだろう。

何故、最後は有沖島にいたのだろう。

考えても、わからない。

あれは、亡霊が作りだした幻だったのだろうか？

そこまで考えた時、背後から鈴を転がしたような声が届いた。

「何か、お探し物ですか？」

驚いて振り返ると、裏手の森の中から姫野雪が姿を現した。いつもの赤い瞳が、すうつと細められる。優は僅かに警戒するように、

身を硬くした。

「ただの散歩です」

「こんな寒い日にですか？」

クスクスと雪が笑う。優は何も答えず、本部から突き出した建造物を見つめた。

「広報部に、何か御用があるのですか？」

雪が言う。優は再び雪の方を振り向いた。

「え？」

「そこ、広報部がお仕事をされてるところです。数年前まで倉庫があつたんですが、今はこの通り」

優は何も言わず、じつと雪を見つめた。

雪はクスクスと笑って、言葉が続ける。

「昔は、小さな倉庫がいっぱい並んでたんです。ちよつとした迷路のようでした」

「……姫野さんは、ここに来て長いんですか？」

「それなり、ですね」

取り壊された倉庫の事について深く尋ねようとした時、横から声が届いた。

「桜井様」

振り返ると、優が元来た道から白崎凜がこちらに向かってくるどころだった。優が口を開く前に、凜は小さな笑みを浮かべた。

「大隊長へのご就任、おめでとうございます」

「はい、あの、ありがとうございます」

素直に喜べないものの、優は当たり障りのない言葉を返した。凜は恭しく頭を下げた後、優から少し離れた位置にいる雪に視線を向けた。

「姫野さんも一緒にでしたか。随分と、珍しい組み合わせですね」

先程とは違う、どこか無感動な声色。

「ついさつき、たまたま会ったんです」

優が説明すると、凜は納得したとばかりに頷いた。そして、再び

雪に視線を向ける。

「ところで、先日の闘い。アメーバとの戦闘で、第二小队だけが負傷者〇。その手腕、訓練でも発揮していただきたいものだ」

「運が良かった。それだけです。桜井くんや白崎さんのように強くはありませんから、私のような未熟者は時の運に左右されてしまうのです」

雪は微笑をたずさえて、小首を傾げた。凧はじっと雪を見つめた後、優の方に足を進めた。

「本部に戻りましょう。このままでは冷えてしまいます」

凧の手が恭しく差し出される。優が困惑した視線を送ると、凧は一步踏み出して自ら優の手を取った。

「参りましょう」

凧が歩き出す。優は一瞬足を取られて、踏鞴を踏んだ。途端、身体が引き寄せられる。

「大丈夫ですか？」

抱きかかえられるような格好になり、凧が顔を覗きこんでくる。

「ごめんなさい、大丈夫です」

慌てて凧から離れようとするも、凧にしっかりと抱き寄せられている為、抜け出せない。

「あの……？」

困惑した声をあげると、覗きこむように固まっていた凧がゆっくりと抱擁を解いた。

「随分とお仲がよろしいですね」

背後から雪のクスクス声。凧は何も言わず、再び優の手を取って歩き始める。優は一度だけ雪の方を振り返った後、何も言わずに凧に視線を向けた。凧は前を向いたまま、何も話さない。

凧に手を引かれるままに、舗装された道を進む。外には人影がなく、本部の周りに何も無い為、酷く静かだった。足音だけが冬の澄んだ空気に木霊する。

「今日は、何故あんな所にいらっしやっただのですか？」

不意に凜が立ち止まり、振り返る。握られた手はそのままに。優も足を止めて、困ったような表情を浮かべた。

「少し、気になった事がある。白崎さんは、どうしてあそこに？」
「散歩です。考え事をする時に昔から歩き回る癖がありました」

凜が、一步踏み出す。そして、繋いでいない方の左手が優の頬に触れた。温かった。優の身体が小さく震える。

「先程から足元がすっかりしていませんが、体調が優れないのですか？」

「少し、熱があつて」

「……もう少し、ご自愛ください」

凜はそう言つて、頬に当てた手を下ろした。そして、再び足を進める。

「部屋までお送りいたします」

「あの、お気遣いは嬉しいですが大丈夫です。司令室に寄らないといけなくつて」

「ご自愛ください」

凜が繰り返す。優は諦めて、はい、と返した。そして、ある事が頭に引つかかる。

「そういえば、姫野さんが裏の森から出てきたんですが、あの奥に何かあるんですか？」

凜は足を止めず、チラリと視線だけを優に向けた。

「ESP能力者のお墓があります」

「そんなことで」

神条奈々は目の前に座る男に冷たい視線を投げかけた。

「本部に侵入したと？」

亡霊対策室本部の一室。そこには拘束された一人の男を囲むように奈々と保安部の面々が並んでいた。男は余裕のある笑みを浮かべ、

頷いた。

「そんな事、ではありませんよ。桜井優への取材は今まで軍や亡対室を通してしか行われてこなかった。国民は彼の生の声を聞きたがっているんです」

奈々は男を睨みつけた。男がおどけたように声を上げて笑う。

「冗談です。そんな怖い顔しないでください」

「以前、週刊誌に桜井優の写真を送りつけたのはお前か？」

「違います、違います。私はただ彼の奇跡の力をこの目で見たいだけなんですよ。私の身元は既に調べがついているんでしょう？ 私はお金なんてどうでもいい。奇跡が、見たいんです」

奈々はチラリと周りの保安部の男達に視線を向けた。

「少し、外してくれない？ 個人的にこの男と話がしたい」

「わかりました。部屋の前で待機しています」

ゾロゾロと保安部の者たちが部屋から出ていく。男はそれを見て、子どものような笑みを浮かべた。

「ええ、貴女は話がわかる人だ」

最後の者が部屋から出ていき、扉が閉まる。奈々は警戒するように立ち上がり、男を見下ろした。

「もう一度聞こう。何故、本部に侵入した？」

「貴女と、話してみたかった」

男は笑みを引っ込め、真剣な顔でそう呟いた。

「商談か？」

奈々は単刀直入に、そう尋ねた。男が笑う。

男の名前は華秋院彰かしゅういん あきひと言った。大資産家の三男に当たる。聖翔院において修士の学位を得た後、博士課程を中途退学し、ジャーナリストの道に進んだ。奈々が理解している男の経歴はそれだけだ。以前に一度、桜井優の取材について許可を求めてきた事がある。資産家の息子である事とオカルトマニアである事が奈々の興味を引いて保留の返答を出した筈だったのだが、今回、男は亡霊対策室の敷地に無断で侵入し、こうして拘束されている。

「いえいえ、勘違いしないでください。華秋院のリエゾンとしての役割は私に与えられていません。いえ、そうしたお話もありますが、それは主目的ではありません」

奈々はじつと男の顔を睨みつけた。

「本当に取材が目的な訳でもないでしょう」

「ええ。ええ。理解が早くて助かります。今回は華秋院の都合ではなく、私の都合でこうして貴女と対話すべき場をセッティングしたのです」

ヘラヘラと華秋院彰は笑みを浮かべた。

「私が俗世から離れた事象に興味を持つている事はご存じですね？

ええ、あれは偽りではありません。私はそうした奇跡を求めている。取材などは、どうでもいいんです。彼に会わせていただけませんか？」

「会って、どうする？」

男は笑った。

「どうもしません。二、三個、尋ねたい事があるんです。本当に、それだけです。変に勘ぐらないでください」

奈々は黙ったまま、男の瞳を見詰めた。男はおどけたように両目を大きく開き、小首を傾げた。

「私の修論、ご覧になりましたか？」

「セルオートマトンによる三次元ネットワークの構成モデル」

男は満足そうに頷いた。

「素晴らしい。何か、聞きたい事はありますか？」

「亡霊との関連性について」

「ええ、ええ。それをお話する為に、今日は参ったのです。素晴らしい。私が研究していたのは、セル・オートマトンと呼ばれる計算モデルです。コンピュータというものは有限制御部と呼ばれる演算装置と無限に広がるテープからなるチューリング・マシンと呼ばれる計算機モデルと同様の計算能力を持ちます。セル・オートマトンはテープではなく、格子状の空間を計算領域として利用するも

のだ、とお考えください。私はこれを立体的に、つまり三次元的に構成する為のネットワーク・モデルについてまとめていました」

「それは私でも分かった。解せないのは、亡霊との関連性」

「ええ、ええ。このセル・オートマトンは空間的にも時間的にも離散的で、計算能力を、持っているのです。私が言いたいのは、これが現実の時空と非常に似通っているということなのです」

「セル・オートマトン上で起きうる現象は、現実でも起きうる。もしくは、その反対もありうる、と？」

「話が早い。セル・オートマトンは人工生命の研究に用いられてきました。計算機内部で、人工的な生命を作ろうというものです」

奈々は、自らの興味が男から遠のいていくのを感じた。

「話が見えてきた。三次元的なセル・オートマトン上でそういった振る舞いが見られ、それを亡霊の正体であると考えているのか」

「ええ。ええ。以前、イーグルと呼ばれる亡霊が出現したとお聞きしました。同様の形を保持した仮想生物が、存在するのです」

奈々は首を振った。

「計算機上における振る舞いは、ただの構文シンタックスによってもたらされたものだ。パターンそのものに意味はない。セマンティクスそれは、後天的に観測者が与えただけの情報に過ぎない。情報的に死んだ世界において、ある種のパターンが保持されるのは当然だ」

「ええ。ええ。貴女は聡明だ。しかし、それは現実にも言える事なのです。亡霊は、構文によって作られただけの存在に過ぎない。亡霊を亡霊とたらしめているのは、我々の認知的な問題に過ぎません」
奈々は僅かに驚きの表情を見せた。予想以上に筋が通った考えだ。少なくとも、神秘主義者の考え方にしては珍しい。

「……貴方の言う通り、空間が計算能力を持っていたとしましょう。あるいは、白流島自体がそうした能力を保持し、亡霊を撃ちだしている。そう仮定したところで、何ら現実は変わらない」

「ええ。仰る通りです。ですが、私は知りただけなのです。現実など、どうでも良い。私の目的は、探求にあります。そして、貴方

の関心は問題の解決にある。どうです。お互いの欲求を満たしてみませんか。私は、桜井優と話をするだけで良い。それで、華秋院との関係を持てる。貴女は若い。今後、必要になると思いませんか」
奈々は息を止めた。男の言う言葉が、どこまで本当なのか分からない。何が目的なのか、確定できない。

黙り込む奈々に追い打ちをかけるように男は言葉を続けた。

「自衛軍が活発に動いているそうじゃないですか。特に、中部方面総監を中心とした派閥が妙な動きを見せている。何をやっているか、知っていますか？」

奈々は顔を強張らせた。

「私、華秋院と彼らとのリエゾンを務めているんです。どうです。興味ありませんか？」

奈々は小さく息を吐いて、口を開いた。

「後日、こちらから連絡する」

男は満足そうな笑みを浮かべ、頭を深々と下げた。

「良い返事を、お待ちしております」

5章 4話 神条奈々(15)

「ESP能力の、お墓……？」

尋ね返すと、凜は小さく頷いた。

「ええ。ESP能力者の多くには、遺体の引き取り先がありません。ですから、対策本部の裏手に墓場が作られているのです」

とくん、と心臓が跳ねた。

ESP能力者の特性を考えれば、有り得ない話ではない。ただ、今まで死んだ後の事は考えた事がなかった。

「……柘沙織のお墓も、あるんですか？」

凜が足を止め、振り返る。

「ええ。彼女が死亡した時点で実の父親は他界し、母親は蒸発していたと聞きます。育ての親も、柘沙織の遺体を引き取るうとはしなかった。当時は同一説が広がっていましたから、当然かもしれません」

「……そうですか」

記憶の中の沙織の事を思い出し、優はやりきれない気持ちになった。

最後の最後まで救われなかったESP能力者。

でも、これで良かったのかもしれない、とも思う。彼女の居場所は亡霊対策室にしか残されていなかった。音々たちの残るここで眠り続ける事は、沙織にとって悪い事ではなかっただろう。

「桜井様」

不意に、凜に名前を呼ばれる。視線を向けると、凜が一步こちらに踏み込んだ。

「これが、ESP能力者の立場です」

真剣な瞳で、凜が言う。何の事を言っているのか分からなくて、優は戸惑いの視線を向けた。

「我々は望まれない存在です。我々の力は、社会秩序にとって脅威

でしかない。限定的に与えられた力は、ある種の階級を生みだします。私達は、最早司法の加護を受ける事ができません。先軍的な思想がSIAを中心とした各機関に広まりつつある今、私達は社会というものから剥離している。私達と社会を繋ぐものは、亡霊しか存在しません。その役割が果たせなくなれば、それで終わりです。この状態は、あまりにも不安定すぎる。そう、思いませんか？」

優は、黙って凜の瞳を見つめた。そして、その双眸の向こうで轟々と炎が煌めいている事を確認する。全てを焼き尽くすかのような強い輝き。優はその炎に魅入られたかのように、視線を外す事ができなかつた。

「柊さんの事は、残念に思います。でも、全ての人が、そういう考えを持っている訳ではないと思います」

「そう、全ての人はそういう考えを持っていない。どうでも、良いからです。関係ないから、どうでもいい。我々にとつても、そうした者はどうでもいい。我々と、そうした者たちは互いに無関係です。大事なのは、それらを繋ぐ国家がESP能力者に対してそうした見解を持っている、ということですよ」

国家が、ESP能力者に対してそうした見解を持っている。

凜の言葉で、広瀬理沙の件が頭に浮かぶ。

正当防衛としての殺人。それは、過剰防衛であつたかもしれない。それを判断するのは司法だ。しかし、広瀬理沙に対して公正な裁判が開かれるとは到底考えられなかつた。だから、優は理沙を逃がした。ESP能力者は司法の外にいる。それは、紛れもない事実だろう。

「桜井様。ESP能力の持つ社会的脅威ともいうべきものが、どこにあるのかご存じですか？ ESP能力者における真の脅威は物理的な脅威ではなく、既存の処理を適用できないという点にあります。破壊など、火器を使えば誰にでもできる。しかし、悪意を持ったESP能力者をテロリストのように武装解除して拘束する事ができない。殺す事でしか、本当の意味で抑える事ができない。司法を中心

とした統治装置が、無効化される。S I AがESP能力者に対して過剰な態度を見せている所以が、これです」

凜はそう言って、もう一步前に足を進めた。距離が、ゼロになる。

凜の瞳に灯った炎が、ゆらりと揺らめくのが見えた。

「桜井様。ESP能力者がこれ以上不当な扱い受けられない為には、力を示すしかありません。何者にも抑えつける事のできない力を、示すのです」

そこでふと、凜は薄い笑みを浮かべた。途端、凜の双眸に燃え盛っていた蒼の煌めきが消え去る。

「どうか、更なる高みへ。貴方の影響力の増大こそが、ESP能力者を守る傘となります。」

凜はそう言って、視線を優から外した。

「申し訳ありません。長話が過ぎました。寮棟へ参りましょう。このままでは冷えてしまいます」

優の手をとって、凜が再び足を進める。優は黙って、それに続いた。

冷たい風が頬を撫でる。熱のせいか、それがとても心地よく思えた。

凜の背中を追いながら、先程の凜の言葉について考えを巡らせる。司法からの逸脱。統治装置の懸念。広がる先軍的思想。どれも、仕方がない事のように思えた。ESP能力者の存在自体が、組み上がったシステムにとってノイズとなっている。ノイズをキャンセルして精度を最大にするのは、当然だ。

斎藤響の泣き顔が、頭に浮かぶ。優は目を瞑った。

ESP能力者をコントロールする術はない。だから、S I AをESP能力者の影響力をコントロールしようとした。それを脅威に感じた凜のような者は、ESP能力者の影響力を増大させようとする。全て、当然の流れ。まるで軍拡競争だ、と優は思った。誰が悪い訳ではない。局所的な利益を最大化しようとした結果、全体の利益が

損なわれる。何度も、歴史が辿ってきた道。

妥協点はどこにあるのだろう。そこまで考えた時にはいつの間にかエントランスの前まで来ていた。エントランスをくぐり、本部に入る。空調の効いた中はとても暖かかった。

セキュリティゲートを通ったところで、何人かの中隊員とすれ違った。凜に手を引かれている為か、奇妙な視線を投げかけられる。しかし、熱で頭がぼうつとしていている為か、全く気にならなかった。寮棟につき、凜が足を止めて振り返る。

「お部屋は、どちらですか？」

「このまま真つすぐです」

答えると、凜が無言で歩きはじめる。

微かな眠気。

後で司令室に行く予定だったが、明日にしようかな、と優はぼんやりと考えた。

部屋につく。優は財布から鍵を取り出して、それを鍵穴に差し込んだ。鍵の開く音。

「私はこれで失礼します。ご静養ください」

後ろから凜の声。優は振り返って軽く頭を下げた。

「送って下さってありがとうございます」

凜と別れ、扉を開ける。廊下を進み、部屋に入ると優はマフラーとコートをベッドの端へ放り投げた。そして、ベッドに倒れこむ。

考えるべき事がたくさんありすぎた。目を瞑って、寝返りを打つ。身体が熱い。明日香から貰った冷却シートを額に貼り、優はそのまま深い眠りに落ちていった。

「父親が元財務官僚のようです。その後、政界入りし、参議院議員に。長男も同様に政界入りしています。次男は十二年前に総務省へ入省。他に詳しい情報は失われていますが、祖父が防衛族だったよ

うです。恐らく、その時から背広組と何らかの繋がりが保たれていたのでしょうか」

加奈が手元の資料を読み上げる。

華秋院彰を部下に送らせた後、奈々はすぐさま加奈に華秋院家の情報を求めた。幸い、以前に一度向こうからコンタクトを求めてきた時に簡単な調べがについている。概略を知るだけならば時間はかからなかった。

「……総基ネットへのアクセス権限は？」

「持っているのを見て間違いありません。少なくとも、間接的な経路が存在するでしょう」

奈々は少し考え込んだ後、小さく笑った。

「米国のそれとは違うけれど、これはまさしく軍産複合体だわ。華秋院彰は驚くほど交渉に慣れていた。きっと、華秋院が接触してるのは私や中部方面隊だけじゃないでしょう。それに、華秋院だけじゃない。他の多くが、そうした動きを見せているに違いない」

「如何いたしますか？」

加奈が緊張した面持ちで尋ねてくる。奈々は弱々しい笑みを見せた。

「加奈。この汚染はどこまで広がっていると思う？」

「想像もつきません。ただ、そうした動きは今後、より強くなるでしょう。不死鳥の台頭は彼らにとって脅威でしかありません。それまでに打てる手は全て打つ気です」

「それは体制側である私達にとっても同じでしょう。だから、彼は最後に『今後、必要になるとは思いませんか』と言ったの。引きずり込むつもりなんだわ」

奈々はデスクに肘をつき、額を抑えた。

欧州では限度を超えた経済的疲弊がレイシズムに転化し、不安定な状態を作り出している。兆候はずつと前からあった。ユーラシア連合による強制的な小国の経済的併合によって、黒いものが世界中に広がり始めていた。

経済統合体が生み出したものは、統合体間によるリソースの奪い合いでしかなかった。国家という形が、統合体へ巧妙にすり替わっただけに過ぎなかった。国家という形を残したまま、経済的な統合が図られていく。それは紛れもない侵略の一形態であったが、それを公然と指摘できる存在は最早いないに等しかった。

欧州は戦争に負けたのだ。弾丸も爆薬も使われない静かな戦争に。日本は亡霊の影響で、ユーラシア連合による経済的な抑圧は最小限に抑えられている。しかし、欧州のそれと状況はさほど変わらない。むしろ、欧州より悪い状況かもしれない。欧州において、物理的な併合というものは行われない。侵略されている、という認識さえ持たせないままユーラシア連合によるリソースの吸い上げが続くだろう。しかし、日本は違う。日本は、中国が太平洋に出る上での拠点になりうるのだ。

既に、多くの者が政治的な混乱を予想し始めている。華秋院は、その内の一つに過ぎない。同様の活動が至る所で繰り広げられている事だろう。奈々はその事を思い、暗い気分になった。

「……返答は、五日後に出しましょう。防諜部を經由させる。それまでに華秋院について出来る限りの情報を集めてくれる？」

「はい」

加々が頷く。

奈々は加奈から視線を外し、深く息を吐いた。

華秋院のやり方というものを、奈々は知らない。華秋院が今後何を要求してくるかを、奈々は予想できない。

それでも、既に返すべき答えは決まっていた。

構造を作り上げるのは、既存の構造だ。奈々の意志は介入できない。

奈々はゆっくりと立ち上がり、司令室を後にした。休みたい、と強く思った。

携帯のアラーム音で桜井優は目を覚ました。

上体を起こし、目を擦る。倦怠感がなくなっていた。熱も治っているように思えた。すっかり役割を終えた冷却シートを額から剥がし、サイドテーブルに放り投げる。それから、優は大きく背伸びした。

携帯を開くと、三件のメールが届いていた。どうやら、寝ている間に届いたらしい。中身は全て京子からだった。退院したなら連絡しろ、という旨のメールだった。軽い謝罪の言葉を打ちこみ、送信する。それから優は身支度を整えて部屋を出た。

午前八時半。年末である為、訓練もない。人気のない寮棟を抜け、優は中枢エリアへ降りた。そして、迷わず司令室に向かう。

「神条司令いますか？」

司令室の入り口から遠慮気味に声をかけると、奥でコンソールを操作していた加奈がすぐに駆け寄ってきた。

「司令は部屋の方でお休み中。何か大事なお話？」

「はい、あの、特殊戦術大隊の件についてお聞きしたい事がいくつかあって」

加奈はそれを聞くと少し迷うような素振りを見せた。

「うーん、そうだね。うん、ちょっと着いてきてくれる？」

「はい」

加奈が手招きしてから司令室を出る。優もそれに続いた。そして、司令室の隣の扉を何度かノックする。中から奈々の声。

「何？」

「優君がお会いしたいらしくて」

加奈が答えると、僅かな沈黙を置いて扉が開いた。タンクトップにジーンズといったラフな私服姿の奈々が姿を現す。制服姿しか見た事がなかった為、優は微かに驚いた。

「中で話しましょう」

奈々は優を見るなり、視線で部屋に入るよう催促した。優は僅かに躊躇した後、素直に中に入った。

「重要な案件が入り次第、お伝えします」

加奈がそう言っただアを閉める。残された優は、奈々にもう一度頭を下げた。

「朝早くからすみません」

「いえ。大隊長の件でしょう？ さ、中に入って」

奈々に促されるまま、優は靴を脱いで廊下にあがった。どうやら奈々はここで暮らしているらしかった。本部とは別の幹部宿舎に住んでいるとばかり思っていた為、少し意外に感じる。そして、奈々の事を何も知らない事に気づく。

「座って待ってて」

奥の部屋に通すと、奈々はそう言ってキッチンに向かった。

優は言われた通りソファに腰をおろして、遠慮気味に周りを見渡した。大きな本棚が隅を占拠し、古そうな本が並んでいる。大半は安全保障に関する類のものだった。

「紅茶しかなかったんだけど、大丈夫？」

奈々が二つのカップがのったトレイを運んでくる。優は、大丈夫です、と頷いた。

奈々が対面ではなく、優の隣に腰を下ろす。そして、突然頭を下げた。

「ごめんなさい。突然大隊長に昇任して驚いたでしょう？」

「はい、あの、斎藤さんが言うには、事務上の出来事ではないです。何でそんな事になったんですか？」

尋ねると、奈々は微笑んだ。

「数え切れないくらい理由があるんだけど、そう、最も大きな理由は先日君が言った事。まるで君を監視しているみたいに見える状況は、中隊からの信用を落とす事になる。だから、わかりやすい形で君への信頼を示した」

「じゃあ、大隊というのはやはり架空の存在ということですか？」

首を傾げると、奈々は首を横に振った。

「いえ。今は存在しないに等しいけれど、今後はしつかりした形で整備していくつもり。君にも色々勉強してもらおう予定よ」

「勉強、ですか？」

「ええ。対電子中隊と特殊普通科中隊の能力と運用について。年明けから本格的に、事務的な事も君に担当してもらおう」

それに、と奈々は言葉を続けた。

「そうすれば、それを口実に君と会えるしね」

突然、奈々に抱き寄せられる。優は身を硬くして、はい、と消え入りそうな声で答えた。

抱きしめられたまま、沈黙が落ちる。いつもと違って、奈々の身体が露出している為、目のやり場に困った。

「今日は、邪魔が入らないから」

不意に、奈々が耳元で囁く。優は小さく肩を震わせた。

「あの……お仕事は大丈夫なんですか？」

「ええ。加奈が代わりに務めてくれる」

背中に回された奈々の腕が、首に絡みつくように移動する。

「顔、あげて」

言われた通りに伏せていた顔をあげると、奈々はにっこりと笑ってからキスを落とした。全身から力が抜けていく。それを支えるように奈々の抱きしめる力が強くなった。タンクトップごしに奈々の豊富な身体が強調され、優は顔から火が出そうなほど熱くなるのを感じた。それを何か勘違いしたらしい奈々がクスリと笑う。

「君のそういう仕草、すごく、かわいい……」

奈々が耳元で囁いてから、再び唇を押しつけてくる。今度は、すぐに舌が入ってきた。優は、奈々が好きにやりやすいように唇を開いた。途端、奈々の唾液が流れてくる。微かに驚いて目を開くと、首に回された奈々の腕が優を捉えるように強くなった。苦しくなると、奈々が流しこんでくる唾液を呑みこむと、満足したように奈々の唇が離れた。奈々の荒い息遣いが耳元に響く。

「神条司令……」

名前を呼ぶと、奈々は微かに不服そうな表情を浮かべた。

「……その司令っていつの、やめない？」

優は僅かに困惑した表情を浮かべた後、怖々と口を開いた。

「神条、さん……」

「もう一步」

「……奈々、さん……」

奈々はにっこりと笑って、後ろに回した腕にギュツと力を込めた。

「それで、何を話そうとしていたの？」

「あの、前も言いましたが、しん……奈々さんのことが好きです。

そのお答えを、聞いていませんでした」

そう言っていると、奈々は一瞬キョトンとした表情を浮かべ、次にクスクスと笑った。

「ええ。私も、君が好き」

奈々が再び顔を近づけてくる。一瞬だけ唇が触れあっただけの、軽いキスだった。優は僅かに身体を硬くして、奈々の瞳を覗きこんだ。

「あの、それは、お付き合いますと、捉えても……？」

奈々が薄い笑みを浮かべる。

「……君と私の関係に、名前をつけるのは止めましょう。何か別の形に近似化して、ノイズを混ぜたくない」

奈々の曖昧な答えに、優は顔を曇らせた。それに気付いた奈々が慌てたように言葉を続ける。

「私は君が好き。君のそういう律儀なところも、好ましく思う。でも、私は君を独占するつもりはないの」

「独占、ですか……？」

奇妙な言葉に首を傾げると、奈々はゆっくりと頷いた。

「そう、独占。そういう形で君を独占すると、悲しむ人が多すぎる。だから、やめましょう」

脳裏に京子と華、愛の顔が浮かぶ。

優は顔を伏せ、目を瞑った。

「あの、でも、それは仕方がないと思います。すぐに割り切る事はできないと、思いますが、でも、納得することは……」

「あの子たち、とても不安定なの。だから、わかって」

奈々が諭すように言う。優は消え入りそうな声で、はい、と頷いた。

頭に奈々の手が置かれる。

「だから、君との関係に名前をつけるのはやめましょう」

直後、唇が塞がれる。優は驚いて、目を大きく見開いた。すぐに唇が離される。

「これは、付き合つという形に限定されるものじゃないでしょう？」

私はただ、君を独占しないだけ。君は、私を気にする必要がない。ただ、それだけ」

奈々はそう言って、再び唇を押しつけるように優をソファに押し倒した。優はようやく奈々が言いたい事を理解して、目を瞑った。

奈々の手が、優の着ていたパーカーの中へ滑り込んだ。口内で奈々の舌が何かを求めるように揺れる。優はそれに答えようと、奈々の背中に腕を回した。

奈々の右手が、胸部をまさぐるように動く。上から奈々の柔らかい身体が押しつけられている為、逃げる事ができない。優は微かに身をよじって、くすぐったそうにした。

「優君……、ベッド、いきましよう」

奈々が荒い息とともに言う。酷く甘い香りがした。

優はコクリと頷き、今度は自分から奈々にキスした。

薄暗い部屋の中で、上でくったりと倒れる奈々が何度も荒い息を吐くのが耳に届く。

優は上に心地良い重みを感じながら、奈々の長い髪を梳いた。奈々から甘い吐息が漏れる。

強い倦怠感。優は瞼を閉じて、ウトウトとした浮遊感に身を任せた。

漠然とした幸福感。

全身を包む無限の温もり。

「優君」

不意に、奈々が口を開く。優は重い頭を動かして、はい、と答えた。

「柊沙織の記憶は、どこまで鮮明なものだった？」

予想外の話題に優はキョトンとした様子を見せた後、まるで自分が柊沙織になったようでした、と答えた。上で奈々がもぞもぞと動き、ぴつたりと身体を重ねてくる。

「じゃあ、私の指揮で彼女が死んだ事は知ってる？」

「神条、司令……？」

奈々の思いもしない呟きに、優は暗がりの中で目を凝らした。

「彼女は、私が殺した」

奈々の言葉は妙に澄んだ響きを持っていた。優は何も言わず、先を促した。

「当時の医療用ナノマシンは、D A - Fと呼ばれる旧型だった。使い方によっては免疫細胞を破壊する事が知られていて、投与制限が設けられていた。私は、その投与制限を破って柊沙織に多量のD A - Fを持たせ、戦闘の効率化を図った事がある」

「……一部を、見ました」

優は目を瞑って、奈々の身体を抱きしめた。

「当時の中隊には二つの小隊しかなくて、システムとしては使い物にならなかった。ただ、その中で三人だけESP能力が安定していて、そのうちの一人である柊沙織は戦闘時でも冷静さを保つ事ができていた。貴重なESP能力者を戦闘で何人も亡くすリスクを一人の優秀な兵士の負担に置き換える方が理にかなっているように思えた」

「……はい」

「柊沙織が死んだ時もそう。多数の人間を救うために、彼女一人を中心地まで送った。彼女は冷静だったし、危険は少ないように思えた。私は彼女の命を秤にかけて、リターンに見合つと考えて許可を出した」

「……それは、神条司令の立場を考えれば当然の事だと思います」
「そう。そういう役割を与えられ、期待されていた。私は、それを懷疑しなかった。同じような事があれば、君も同じように殺してしまつかもしれない。それが、たまに怖い」

奈々の声が小さく震えている事に気づいて、優は奈々の身体をギリッと強く抱きしめた。

「柊沙織は、その事に納得していました。ナノマシンの事にも、有沖島の事も、彼女には選ぶ機会が与えられていました。でも、彼女は司令と同じ選択肢を選びました。それが、最善だったんだと思います。僕も、きっと同じ事を望みました」

司令、と優は奈々の手を握った。

「無理に、お互いの背中を守って戦う必要はないと思います。僕は、神条司令が目指している所と同じところを見て、戦っていたいです。必要であれば、殺してください。後悔は、しません。死ぬ時は、神条司令の指揮の下に」

全て、お預けします。

囁くような声で、優は誓った。

奈々が何も言わず、肩に顔を埋める。優はそつと背中に腕を回した。

「愛してる」

奈々が言う。

「はい」

優は小さくはにかんで、そう答えた。

その時、奈々の背中に回した手が微かに痙攣する。優は、そつと腕を隠すように横に広げ、何もなかったように奈々にキスをした。

5章 5話 白崎蘭

桜井優は、フライパンの上で音を立てて踊る野菜たちを眺めながら、頬を緩ませた。

背後から、小さくシャワーの音が耳に届く。心地良い音だった。野菜を炒める手を止めて、いくらかの調味料を加える。それから強火にした時、先程から響いていたシャワーの音がピタリと止んだ。次いで、浴室のドアが開く音。

優は一瞬動きを止めてから、すぐに横に置いていたもやしをフライパンに加えた。軽く炒めてから、火を止める。その時、背後から奈々の手が優の腰に絡みついた。優はビクリと小さく肩を震わせて、困ったような笑みを浮かべて後ろを振り返った。

「驚かさないでください」

「とても、良い香り」

優の抗議の声を無視して、奈々が嬉しそうに言う。柑橘系のシャンプーの香りがほのかに漂う。

「はい。今、出来たばかりです」

「料理の事じゃなくて、君のこと」

腰に回された奈々の腕に力が込められる。優は僅かにくすぐったそうな様子を見せた後、そっと奈々の腕を解いた。

「あの、冷めちゃいます」

「そう言つと、奈々は何も言わず、優の隣に並んだ。」

「何か、手伝う事ある？」

「後はお皿に移すだけです」

答えると、奈々が手際よく食器を取り出した。優はそれを受け取って、料理を食器の上に盛り付けた。

「それ、持っていた後は座つて。後は私がやるから」

「はい」

奈々の言葉に優は頷いて、野菜炒めを載せた食器を部屋の方に持

つていった。小さなテーブルの上に置いて、腰を下ろす。その後、すぐに奈々がキッチンから飲み物を持ってやってきた。髪がしつとりと濡れている為か、いつもとは随分と違う印象を受ける。

「もう三時過ぎか」

奈々は時計を見てポツリと呟いてから、優の隣に腰をおろした。

そして、遠慮気味にしなだれかかってくる。

「ずっと、こうしていたい」

「……僕もです」

ゆっくりと目を瞑り、優は答えた。奈々がクスリと笑う。

「顔、あげて」

言われた通りに奈々の顔を見上げた途端、唇が重なり、捻じ込むように奈々の舌が入ってくる。優は奈々に体重を預けて、静かに目を閉じた。

二つの影は、そのまま長い間寄り添い合うように動かなかった。

華秋院彰は目の前に座る白崎蘭を見て、にこやかに口を開いた。

「こうして会談が叶った事に感謝いたします。まるで魔女のような方だ。とても美しい」

「あまり、褒められている気がしないな」

蘭は興味がなさそうに呟いて、それで、と先を促した。

「本題は？」

「ええ。貴女に無駄な時間を過ごさせるのは人類の損失だ。ですが、その前に、後ろの仏頂面な方々に席を外して欲しいんですよ」

華秋院彰はそう言って、蘭の後ろに控える上田中将と数人の佐官に目を向けた。上田中将の無機質な瞳がゆっくりと華秋院彰の瞳と交差する。

「我々がどこにいようと、君が蘭君と話をするのに問題はあるまい」
「雰囲気の問題ですよ。私個人が出した条件は、彼女との話合いだ」

けです。あれだけの機会を提供したんですから、それくらいは取り計らってくれても良いんじゃないですか」

上田中將はじつと華秋院彰を見つめた後、蘭に何か耳打ちした。それから、部下を連れて部屋から出ていく。華秋院彰はホツとしたような笑みを浮かべ、蘭に視線を向けた。

「軍人は苦手なんですよ。暴力に関連する事全てが、嫌いなんです」
蘭は、何も答えない。華秋院彰は残念そうに首を振って、手元のカップに口をつけた。

「まず、ESPエネルギーについてお尋ねしたい事があります。ESPエネルギーの特異性というものについて、どう思われますか？
つまり、物質を通り抜けるという特性について」

「世界は稠密ちゆうみつではない。それを問題にするならば、まずは物体が互いに衝突する力が存在する事自体に疑問を投げかけるべきだ。少なくとも、ミクロな世界においては類似した現象が以前より確認されている」

蘭は淡々とそう答える。華秋院彰は一瞬だけ動きを止めて、カップに視線を落とした。

「ええ、ええ。では、ESP能力について。人がESPエネルギーを操るといふ行動に、何らかの説明をつけることは可能ですか？」
「納得する事は可能だ。ありのままを受け入れれば良い。何故、それを別の何かに置き換えたがる？」

蘭は興味がなさそうに視線を外に外した。反対に華秋院彰は目を細めて蘭の横顔をじつと見つめた。

「誤魔化さないでください。私は、そういう答えを聞きたいんじゃない」

「だろうね。君の意図通りに答えるならば、そもそもESPエネルギーを人が操るといふ仮定がおかしい。そんな現象は、確認されていない。君が勝手にそう思い込んでいるだけだ」

華秋院彰の顔に険が混じる。

「では、貴女はESP能力自体が存在しないとでもいうのですか」

「そんなこと、私は知らないよ」

華秋院彰の顔から色が消える。対象的に、蘭は興味がなさそうに華秋院彰を見やるだけだった。

「ああ。君が言いたい事はわかるよ。でも、君の視点はブレてる。常に自らに都合が良い視点で物事を評価し、ある思想を強化する物事だけを取り出しているようじゃないか。すまないけど、私は君の記者ごっこに付き合うつもりはないんだ」

蘭はそう言っ、カップに口をつけた。華秋院彰はそれを見ながら何かを抑えるように何度も深呼吸を繰り返し、小さく震えた。そして、仮面のような笑みを浮かべる。

「ええ。ええ。確かに私の仮定がおかしいかもしれない。ESP能力の定義については議論の余地が大いにあるでしょう。では、亡霊について。貴女は以前、亡霊を量子コンピュータの一種であると評価しました。だから、私は貴女に興味を持ったんです。その推論について、詳しくお聞かせ願えませんか？」

蘭は目を瞑り、首を横に振る。

「解釈によっては、そう取れると述べただけだ。本物の量子コンピュータとは思ってないよ」

「その解釈について、お聞きしたいのです」

蘭の瞳がゆっくりと開かれる。

「特に理由はないよ」

「は？」

華秋院彰の口から、意味を持たない言葉が漏れる。

一瞬の沈黙。

華秋院彰はゆっくりと立ち上がり、身を乗り出した。

「理由がない？」

「そう。そう言えば君が興味を引くだろうから、そう表現しただけだ。強いて理由をつけるなら、そうだね、亡霊の計算能力について、そう表現できるかな。亡霊対策室のネットワークに侵入するには、RSA暗号を高速で解く必要がある。この暗号はね、解くのに時間

がかかるだけなんだ。つまり、時間があれば誰にでも復号できる。これが暗号として実用に耐えているのは、今の計算機の性能が低いからだ。故に既存の暗号群にとって最も脅威なのは次世代型のアーキテクチャそのもの、ということになる。フォン・ノイマン・ボトルネットワークが解消された量子コンピュータが実用化されれば、あらゆる暗号が無効化されてしまうだろう。だから多くの先進国は量子コンピュータの研究の動向に注視している訳だけど、亡霊の能力は既にそれと同じと言えるね。亡霊の前には、演算の難解さというものが意味を成さない」

華秋院彰の瞳に、怒りの色が宿る。

「待て。貴女は何を言っている。私の興味を、引くから？」

「ああ。だから、たった今それらしい解釈を考えてあげたんだよ」

「……騙して、いたのか」

華秋院の顔が怒りに歪む。蘭は無表情に首を傾げた。

「君はそういう答えを望んでいたんだろう。だから、望む答えを提示しただけだよ。おかしな人だ。望まぬ答えを出せば、そんな答えが聞きたい訳じゃないと言う。望む答えを出せば、騙していると言う。私にどうして欲しい？」

「ふざけるな。計算能力だと？ 亡霊には、そんなものは必要ない。彼らは、物理的な障害を無視する事ができるんだ。暗号を解く必要が初めからない。彼らは、そうした奇跡の力を」

「君は随分と破滅的な人格をしているな。自らの作り上げた幻に食われないよう、気をつけるが良い」

蘭が、椅子から立ち上がる。それを見た華秋院彰は声を荒げた。

「待て。どこに行く」

「まだ分からないのかい。私が今日、こうやって君に付き合っている理由は君との関係に終わりを告げる為なんだ」

「華秋院との繋がりを断つ気か？ そんな事は」

「勘違いしないでほしい。華秋院との繋がりを断つつもりはないよ。断つのは、君との繋がりが」

華秋院彰の瞳に怯えが走る。

「……私個人との問題だけでは済まない、本家が黙っているとしても」

「黙っているよ。華秋院にも、利益がある。皆、君みたいに感情的な訳じゃない。君がいなくても、華秋院との経路は確保できる。華秋院との関係は今後も続くだろう。だけど、君個人はどうも信用に値しない。それは君が一番理解してるだろう？ 面倒な芽は早めに摘んでおきたいんだ」

華秋院彰は動揺したようにビクリと身体を震わせた。

「良い年を」

蘭は最後にそう呟いて、背中を向けた。華秋院彰が何度叫んでも、彼女は一度も振り返らず、部屋から出て行った。扉が閉まる。残された華秋院彰は呆然とその場に立ち尽くした。

秋山明日香は、僅かに片足を引きずるように医務室に入ってきた神条奈々を見て目を鋭く細めた。

「……やったの？」

咄嗟に責めるような言葉が口から飛び出す。奈々は何も答えず、空いたベッドに腰かけた。それを見た明日香は小さく溜め息を吐き、デスクに肘をつけて額を抑えた。

「……相手は？」

「……わかっているでしょう？」

奈々が小さな声で答える。明日香は小さく首を振った。

「彼、未成年よ。それも、部下」

「わかってる。でも、後悔はしてない」

沈黙が落ちる。明日香は顔をあげて、チラリと奈々を見やった。

「……周りには、どう説明する気？」

「隠すつもり。それに、私は彼を縛る気もない」

明日香は少し考えてから、頷いた。

「それが良い。閉鎖環境下における極端な男女比の偏りは、多くの場合は良からぬ結果に繋がってしまう。不要に刺激しない方が良いでしょう」

「ええ。私もそう思った」

奈々が弱々しく笑う。明日香は奈々から視線を外し、再び小さく息をついた。

「あまり寄りかかりすぎないようにね」

「……ええ」

僅かな沈黙の後に、奈々が頷く。それを見た明日香はわざと明るく笑った。

「まあ、それほど気にする必要はないでしょう。立場上の問題はあっても、些細なこと。ただ、避妊だけはしっかりね」

奈々の顔が微かに引きつる。明日香はそれを満足そうに眺めてから中隊の事を考えて、面倒な事になりそうだな、とぼんやりと思っ

た。

5章 6話 宮城愛(8)

桜井優が寮棟に戻ると、部屋の前に京子が立っていた。思わず、足を止める。同時に京子も優の存在に気付いたようで、小さく笑みを浮かべて優の元へ歩み寄ってくる。

「退院おめでとう」

「……うん、ありがと。今日はどうしたの？」

尋ねると、京子是不機嫌そうに唇を尖らせた。

「やっぱり、メール見てなかったんだ」

その言葉に嫌な予感を覚えて、優は慌ててポケットから携帯を取り出した。三時頃に部屋に行く、という旨のメールが一通届いている事を確認し、どっと冷や汗を流す。

「ご、ごめん。全然気づかなかった。一時間くらい待ってた？」

「まさか。ずっと返事がないからさつき様子見に来たばかり」

優の狼狽ぶりに、京子はおかしそうに笑った。次いで、視線でドアを示す。

「熱出たって聞いたから心配したけど、大丈夫そうじゃん。上がった良い？」

「うん。ちょっと待って」

鍵を取り出し、京子の前を通って鍵穴に差し込む。ドアを開けて京子に入るように促すと、京子は慣れた様子で、おじゃましまし、と部屋の中に入っていった。遅れて、優も玄関に入り、鍵を閉める。

「何かさ、埃っぽくない？」
奥から京子の声。注意してみると、京子の言う通り確かに埃っぽい気がした。

優は冷蔵庫から適当に清涼飲料水の入ったペットボトルとコップを取り出し、部屋に向かった。

「結構な間、病院にいたからかな」

テーブルにコップとペットボトルを置きながら、軽く部屋を見渡

して溜め息をつく。

「掃除しないとね。あ、私がしてあげよっか？」

京子が身を乗り出す。優は苦笑して首を振った。

「それはちよっと……」

「なに？ 見られたらマズいもんでもあるとか？」

京子がニヤニヤと笑う。優は僅かに不服そうな表情を浮かべ、違
うよ、と抗議の声をあげた。

「京子ってあまり掃除とか得意そうに見えないし、任せたら余計時
間かかりそう」

「……否定できないのが悔しいなあ」

そう言って口を尖らせる京子を見て、優はクスリと笑った。それ
から、先程から気になっていた疑問を口にする。

「今日は京子一人？ 珍しいね」

「……そう？」

コップにジュースを注ぎながら、京子が気のない言葉を返す。

「それよりさ、熱、大丈夫なの？」

「うん。一晩寝たらすっかり良くなったよ」

「ふーん。退院したてで弱ってるんじゃないの。訓練もしてないし、
最近身体全然動かしてないでしょ？」

「確かに運動不足かも……」

あー、と項垂れた時、ドアをノックする音が聞こえた。

「今日、誰か来る予定だったの？」

「ううん、特に予定はなかったはずだけど……」

立ち上がり、玄関に向かう。

ドアを開けると、愛がいた。いつものブラウスにプリーツスカ
ト。

「遊びに来た」

無表情に愛が言う。

「入って。京子もいるよ」

身体を脇に寄せ、愛の通り道を作る。愛はチラリと廊下の奥を見

た後、無言で優の横を通り抜けた。

「あれ？ 愛じゃん」

奥から京子がひよっこりと顔を出す。

「遊びに来た」

先程と同じ言葉を繰り返し、愛が部屋に入っていく。優は玄関ドアの鍵を閉めてから、愛の後を追って部屋に戻った。

「さっきまで、何話してたんだっけ？」

優と愛が座ると同時に、京子は手に持っていたコップをテーブルに置いて首を傾げた。

「運動不足って話だったかな」

優はそう言つて、コップに口をつけた。

「あー、それぞれ。寒いから、外出たくないしね。室内で何か手軽なスポーツとかあったっけ？」

京子はそう言つて隣の愛に視線を向けた。愛は僅かに考え込んだ後、無表情に口を開いた。

「……男と女のラブゲーム」

「ストップ。愛に聞くんじゃなかった」

京子が呆れた風と言う。優は小さくむせ込んだ後、バツが悪そうに視線を外した。

「愛つて、内角高め狙ってくるよね」

「……奪三振王目指してる」

「いや、キャッチャーも取りこぼしそうな勢いなんだけど。あ、そうだ。桜井、明日空いてる？」

突然、何かを思い出したように京子が優の方を振り向く。優は少し考えた後、空いてるよ、と頷いた。

「明日の十八時からさ、二階の談話室で忘年会だつて」

「それつて中隊の？」

「第一小隊と第三小隊の。あそこ狭いから、小隊ごとに三つに分けてやるんだつて。別に他の階に行っても良いらしいけど、一応第一小隊は二階に集合だつてさ」

「年越しもそこでやる予定？」

「そうらしいよ。適当に途中で抜けたりしても良いし、そんなに面倒くさいもんじゃないと思う」

「そっか。愛ちゃんも行くの？」

視線を京子の横に向けると、愛はコクリと頷いた。

「じゃあ僕も行くのかな。でも、明日の十七時かぁ。今日中に掃除とかしておかないと、明日忙しくなるね」

「やっぱり、手伝おっか？」

「いや、いいよ。というか、京子は自室の掃除やったの？」

「……やってない」

「……だと思った」

優はそう言ってから、ふと愛の分のコップを出していない事に気づいて立ち上がった。キッチンに行つて、コップと炭酸飲料の入ったペットボトルを取り出す。

「ごめんね、愛ちゃんのコップ出し忘れてた。確か、炭酸好きだったよね？」

はい、と愛の前にコップとペットボトルを置く。その時、愛が何かに気付いたように顔をあげる。

「……優、シャンプーかリンス変えた？」

優は一瞬、息を止めた。そして、うん、と視線を外す。

「……ちよっと、気分転換に」

「……そう。前の方が優しい香りだった」

愛が微かに残念そうな様子を見せる。優は言葉に詰まった後、微かに申し訳なさそうに頷いた。

「そう、かな。新しいのは、あまり使わないようにするよ」

「それがいい」

無表情に肯定する愛を見て、優は複雑そうな表情で、うん、と呟いた。

5章 7話 長谷川京子（9）

「……そろそろ帰る」

時刻が午後七時を回った頃、愛は時計を確認しながら帰宅の意志を口にした。

「あ、もうこんな時間」

京子も愛に釣られるように時計に視線を向け、驚いた声をあげる。

「……京子はどうする？」

立ち上がった愛が京子に視線を向ける。京子は少し考えた後、優に目を向けた。

「もうちよつと居ても良い？」

「うん。特に用とかないし、大丈夫」

「じゃ、私はもうちよつとゆつくりする」

京子の答えを聞いた愛が小さく頷き、廊下に向かう。

「……また明日」

「おつかれー」

「うん。またね」

別れの挨拶を交わし、愛が部屋から出て行くのを部屋から見送る。愛が出て行った後、残った優と京子はテーブルに置かれたお菓子をつまみながら、ゆつくりと過ごした。

「夕食どうする？」

ふと気になって尋ねる。年末である為、食堂は開いていない。その代わり、総務部の方から希望者に弁当が配布される事になっている。

「ん、桜井はどうするの？」

「僕は自分で何か軽く作るつもりだけど、二人分作っても良いよ。」

そんなに手間増えないし」

「じゃあ、甘えよっかな」

京子の返答に優は、少し待っててね、と言葉を残してキッチンに

向かった。

冷蔵庫を開けて、いくらかの食材を取り出す。その後、まな板の上で人参のスライスを始める。

「何作ってるの？」

部屋の方から京子の声。

「ん、寒いしクリームシチューにしようかなって。後は適当にサラダとパン」

「シチューかあ。食堂になかったし、凄く新鮮な感じがする」

京子が微かに弾んだ声をあげる。優は頬を緩ませ、鍋にバターを熱し、スライスした人参や玉ねぎ、じゃがいもを放り込んだ。

「……ねえ、ベッド借りて良い？ 少し横になりたくって」

「良いよ」

チラリと部屋の方を見て、頷く。それから優は鍋に視線を戻し、薄力粉を入れた。バターの香りが鼻腔をくすぐる。炒めながら再び部屋の方に目を向けると、ベッドで横になった京子の姿があった。頭まで毛布を被っている。寒いのだろうか。男女によって体感温度が違うとどこかで聞いた事を思い出す。

「京子？ 寒いのか？ 暖房強くしようか？」

呼びかけた途端、京子の身体が驚いたようにビクンと震えたのがわかった。

「い、いい。大丈夫だから」

京子のくぐもった声。優は少し考え込んだ後、結局何もせず料理に戻った。

鍋に水を注いでかき混ぜた後、ミルクを投入し、そのまま煮込む。手持無沙汰になった優は冷蔵庫からいくつかの野菜を取り出し、サラダの準備を始めた。

「うわ、良い香り」

ベッドの方から京子が起きる気配。

「後もう少しだから待ってて」

「もう出来てるんじゃないの？」

「ん、もう少し煮込まないと」

急かすように部屋から顔を覗かせる京子に思わず苦笑する。

その時、微かに視界が揺れた。

異常を知覚する前に、身体から力が抜ける。

まずい、と思った瞬間には膝が身体を支えきれなくなり、優はその場に崩れ落ちた。

「桜井？」

京子の声。

視界が大きく揺れた。

視界から色が消える。

ふっと意識が遠のきそうになるのを必死に抑え込み、優は床に両手をついた。

「ちよつと、桜井？」

京子が焦ったように駆けつけてくる。途端、視界に色が戻った。

眩暈が収まり、脱力感が消える。優は額を押さえ、間近で心配そうな表情を浮かべる京子に視線を向けた。

「ごめん、ただの立眩み。貧血かな」

微かに気分が悪かったが、心配そうな顔をする京子を安心させようと笑みを浮かべる。しかし、あまり効果がないようだった。

「本当に大丈夫？ 医務室行く？」

「……ううん、いいよ。大丈夫。もう少しで料理出来るし、夕食ちゃんと食べて寝たら問題ないと思う」

そう言っつて、ゆっくりと立ち上がる。眩暈はもう収まっていた。

「部屋でゆっくりと待ってて。ごめんね、変に心配かけて」

鍋に目を向ける。もう煮込む必要はなさそうだった。火を止め、食器を用意する。

「後は私がやる。桜井は休んでて」

横から京子の手が伸び、手に取ったばかりの食器が奪われる。

「後はお皿に移してサラダ盛り付けるだけでしょ？ 私でも出来るから」

半ば強引に、京子が優とキッチンの間に割り込む。優は素直に後ろに下がった。

「うん……じゃあ、後、お願い。向こうでちょっと休んでくる。優はそう言っただけ、部屋に向かった。」

ベッドに倒れ込み、目を瞑る。既に気分は良くなっていた。眩暈もない。やはり、ただの貧血だったようだ。

「できたよ」

京子の声。目を開くと、シチューとサラダをテーブルに並べてるところだった。起き上がり、小さく背伸びする。

「大丈夫？」

京子が心配そうに顔を覗きこんでくる。優は微笑を浮かべて、大丈夫だよ、と答えた。そして、ゆっくりと立ち上がる。

「待ってて。パン持ってくるね」

キッチンに向かい、以前に買ったフランスパンをカットして部屋に戻る。京子は一瞬不思議そうな顔をした後、すぐに納得した様子を見せた。

「あ、そっか……シチューとパンって組み合わせるもんなんだっけ。私の家、シチューでもご飯と一緒に食べてたよ」

「こういうのって、家によって結構違うよね」

テーブルに二人分のフランスパンの載った食器を置き、京子の対面に座る。

「だね。地域差つてのものもあるのかな。私、小さい頃は関西の田舎の方で育ったから、何がおかずでもご飯があつた気がする。よく言われる、お好み焼きにご飯とかはなかつたけど」

京子はそう言って、シチューを口に運んだ。

「ん、おいしい」

「良かった。そのパン、凄く高かったんだよ。ここで暮らしているとあまり実感ないけど、小麦粉とかの値段、本当に高騰してるんだね」

「ふーん。でも、私達にはあまり関係ないよね。五年戦ったら、特別年金も出るし」

京子が興味なさそうに言って、再びシチューをおいしそうに食べる。優は苦笑して、だね、と頷いた。

「でもインフレが起こったら、公務員の立場としては辛いかも」

「……インフレって何だっけ。室内友達の略？」

「……」

優は何も言わず、シチューを口に運んだ。ほのかな甘みが口腔に広がり、身体が温まる。

暫くの間、二人はそのまま静かに夕食を続けた。

「昔さ、お婆ちゃんがよくシチュー作ってくれたんだよね。食べてたら、懐かしくなってきた」

二人が殆ど食べ終わった時、京子は懐かしむようにポツリと言葉を零した。それを、優は意外そうに見つめた。ESP能力者が家族の事を話すのは珍しい。少なくとも、優は華や愛の家庭環境を一度も聞いた事がなかったし、逆に言った事もなかった。

しかし、京子だけは以前に一度、彼女の家族に関する話を直接聞いた事があった。両親と祖母が死に、それから親戚の家に預けられた事を。京子はそうした家庭環境において特に嫌な思いをした事がなかったのだろうか。

そこまで考えて、変に詮索するべきではない、と思いとどまる。

優は適当に相槌を打って、残り少ないシチューを呑みほした。

「ごちそうさま」

京子も同様に食べ終えたようで、笑顔で口を開く。

「おそまつさま」

食器を片づけようと手を伸ばした途端、京子が慌てたように身を乗り出す。

「待って。後片付けは私がやる。桜井は休んでて」

「もう大丈夫だよ」

「良いから」

押し切る形で、京子が食器をキッチンに運んでいく。優はその後ろ姿を見て、僅かに考え込んだ。

「んー、洗わなくていいよ。大晦日だし、明日まとめてやるから」
「じゃ、浸けとくよ」

水道から水が流れる音。そして、すぐに京子が部屋に戻ってくる。
「ね。桜井、今日はここに泊っていい？」

突然そんな事を京子が言いだし、優はキョトンとした顔を浮かべた。

「え？ 何で？」

「桜井、さっき急に倒れたじゃん。誰も見てない時にまた倒れたらやばいでしょ」

「そうだけど……もう大丈夫だよ」

「そういう自己診断が一番危険だって」

京子は優の言い分を一蹴して、当然のようにベッドに腰かけた。

優は困ったように京子を見てから、呆れたように溜め息をついた。

「……うーん、じゃあ、僕は適当に下で寝るよ」

「何言ってるの。風邪引くじゃん。詰めれば二人分いけるでしょ」

ベッドの空いたスペースをポンポンと叩いて、あっけらかんと京子が言う。对象的に優は顔を曇らせた。

「流石にそれは……」

「なに変に意識してるの。ほら」

優が逡巡している間に、京子の手が優の手を掴む。そのまま引っ張られるようにベッドの上まで引きずられ、優は遂に抵抗を諦めた。

「ほら、病人はさっさと寝る」

「ちよつと寝るのには早すぎない？」

「良いから」

京子が急かすように毛布を優に押しつける。

時計に目を向けると、まだ九時前だった。

京子が立ちあがり、明かりのスイッチに手を伸ばす。パチンと小さな音が鳴った直後、部屋が暗闇に包まれた。

「はい。消灯時間。患者さんはもう休みましょう」

悪戯っぽく京子が笑う。あまりの強引さに優は微かに呆れながら

も、心配してくれているのだろう、と考えて頬を緩めた。

「……うん、もう寝よっか」

もそもそと毛布を被り、横になる。京子から出来るだけ距離を取ろうとするも、それほど大きなベッドではない為、殆ど意味がなかった。

「もうちよい詰めなよ。落ちるでしょ」

肩を掴まれ、引き寄せられる。暗闇の中で、京子の身体と密着する形になり、優は全身を硬直させた。

「ねえ。やっぱり僕は下で寝るよ」

「私は気にしないから良いって」

「でも……やっぱり、これは色々と駄目な気がする」

「桜井が何もしなければ別に問題ないじゃん。どうせ、何もしないし。それにさ、誰かと一緒にベッドで寝るのって幼少期以来なんだよね。何かさ、ワクワクしない？」

邪気のない京子の言葉に、優は困ったように笑った。

「うん……」

寝がえりを打ち、京子から顔を背ける。

奈々の事が頭に浮かび、優は毛布に顔を埋めた。

「おやすみ」

「うん。おやすみ」

朝。

桜井優は、ベッドの隣で寝息を立てる京子を見て溜め息をついた。本当に何もなかったとは言え、こういう行為は奈々に対して不義理だろう。今回は流されてしまったが、次からははっきりと断ろう、と寝不足気味で上手く回らない頭で考える。

優は小さく欠伸して、隣の京子の身体を優しく揺すった。

「朝だよ」

「……………」

可愛らしい呻き声をあげて、京子が寝がえりを打つ。どうやら、朝に弱いようだった。

「京子」

何度か呼びかけると、京子は目を瞑ったまま上半身だけを起こした。

「起きた？ もう朝だよ」

京子は暫くぼうつと動きを止めた後、くったりと優に抱きつくようにもたれかかってくる。優は抱きついてくる京子の身体を受け止め、小さく苦笑した。

「寝ぼけてるの？」

「……………」

完全に寝ぼけているようだった。優は困った顔を浮かべて暫く考え込んだ後、ゆっくりと京子の身体をベッドに寝かしつけた。今日は訓練がない為、無理に起こす必要がない。

「……………」

背中に回された腕を解こうとすると、京子が再び呻き声をあげる。その仕草が酷く幼く見えて、優は動きを止めた。

何故か頭に斎藤響の姿が浮かび上がり、京子の仕草と被る。

「京子？」

再度呼びかけた時、玄関の方からノックの音がこだました。優はそつと京子の腕を解いて、ぱたぱたと玄関に向かった。

「今開けますー」

ドアを開けると、華が立っていた。

「おはようー！」

華がにこりと笑う。

「おはよう。朝からどうしたの？」

「えっとね、食堂閉まってるし自炊しようと思ったんだけど、一人分だけ作るのもあれだから、桜井くんの方も作るのかなと思って、桜井くん、朝ごはん食べた？」

華はそう言って、食材が入っているであろう袋を掲げてみせた。

「ただだけど」

「良かった！ 上がって良い？」

「え、あ、うん」

「昨夜も桜井くんと一緒に食べようと思ってたんだけど、川上さん達に捕まっちゃって」

楽しそうに喋りながら、華が玄関に入る。

「あ、そうだ。今日の六時から忘年会あるの聞いてる？」

「うん。京子から聞いたよ」

「そのの買いだしに昨日一日中付き合わされちゃった。小隊長だから着いてこい、って」

華はそう言いながら、靴を脱いで玄関に上がった。その時、不意に華の動きが止まる。

「……これ、誰の靴？」

「え？」

釣られるようにして華の視線を追うと、京子の靴があった。

「あ、今、京子が遊びに来てて」

華は微かに動揺したように視線を彷徨させた後、そのまま無言で奥に向かって進みだした。そして、部屋の前で華が再び立ち止まる。華の肩越しに京子がベッドの上で丸まって寝息を立てているのが見えて、優は諦めたように目を瞑った。

5章 8話 広瀬理沙(7)

「……京子？」

小さく、華が呟く。

それに反応するようにベッドの上で京子が小さく身じろぎした。

華は暫くベッドの上の京子を見て動きを止めた後、ゆっくりと優の方へ振り返った。

「ご、ごめん……わ、私、邪魔だよな」

今にも泣きそうな笑みを浮かべて、華が言う。優は慌てて、華の手を取った。

「待って！ 京子はただ看病してくれる為に泊っただけだから！」

華は何も言わず、ベッドに視線を戻す。優は小さく息をついて、華の視線を追うように京子に視線を移した。

「京子。起きて」

呼びかけるも、京子は目を覚まそうとはしない。どうやら、深く寝入っているらしい。

優は京子を起こす事を諦めて、再び華に視線を戻した。

「……朝ごはん、作りに来たんだよね。少し待ってて」

そう言っ、浸けていた食器類を手早く荒い始める。華は何度か優と京子を交互に見つめた後、結局無言で優の隣に佇んだ。それを見た優は小さく笑みを浮かべて、本当に何もなかったから、と口を開いた。

「ご、ごめんね。その、へ、変な勘違いしちゃって……」

華がおおずおおずと言う。優の落ちついた態度に釣られたのか、華も次第に冷静さを取り戻したようだった。

優は食器を洗いながら振り返って、困ったような表情を浮かべた。

「……うん。仕方ないよ」

そう言っ、ベッドで眠る京子に視線を向ける。規則的な寝息がキッチンまで聞こえた。ぐっすりと熟睡しているらしい。

視線を戻し、再び無言で食器を洗う。

全ての食器を洗い終わり、水を切った後、優は一步後ろに下がった。

「待たせちゃってごめん。空いたよ」

華は戸惑った様子を見せながらも、おろおろとキッチンに一步踏み出す。優はそれを確認してから、京子が眠るベッドに向かった。

「京子。起きて」

強く揺ると、ようやく京子は眠たそうに瞼を開けた。

「……んー……今、何時い？」

「九時半。起きて」

再び強く揺する。京子はぼんやりとした様子でのそのそと上半身を起こした後、キッチンに目を向けて小さく首を傾げた。

「あれ？……華？」

「……おはよう」

少し間をおいて、華が口を開く。対して京子は大きく欠伸びながら、おはよう、と特に気にした風もなく言った。それを見た華が微かに安堵した表情を浮かべる。

「京子、泊ってんだ」

「うん、桜井、体調悪そうだったから。華はどうしたの？」

目を擦りながら、京子が言う。

「……私は、朝ごはん一緒に食べようと思って」

「ふーん。私はもうちょっと寝てる」

興味なさそうにベッドに倒れこむ京子を見て華が慌てたように一步踏み出す。

「きよ、京子も朝ごはん食べる？」

「後でー」

「……うん、じゃあ、京子の分も作っておくね」

華はそう言って、ゆっくりと準備にとりかかった。

優はベッドのわきに立ったまま華の様子を眺めた後、チラリと京子を一瞥して、とりあえず大きな誤解を受けなかった事に安堵の息

をついた。

「できたよ」

華が出来上がった朝食を部屋に運んでくる。それを察知した京子がベッドからもぞもぞと起き上がり、大きく欠伸した。

「んー、良い匂い」

京子が僅かに眠たそうな様子を残したまま席につく。華と京子が向かい合う形で座った為、優はその間の一辺に腰をおろした。

「いただきますーす」

軽く両手を合わせた後、京子が食べ始める。優もそれに続く形で、いただきます、と小さく口にした。

暫くの間、三人は無言のまま食事を続けた。華はどこか元気がなく、京子も眠たそうに食べるだけで、優も無理に沈黙を破ろうとはしなかった。

そのまま三分程沈黙が続いた時、不意に華が伏せていた顔をあげた。

「ね、ねえ。京子が看病しに来たって事は、桜井くん体調悪かったんだよね？ 風邪ひいたの？」

「少しふらつとして軽く倒れちゃって。貧血かな。ずっと入院してたから、体力さがってるみたい」

「そ、そうなんだ。じゃ、じゃあ、また倒れちゃうかもしれないし、今日は私が一緒にいるよっ」

華が一気に捲し立てる。優は何度か目を瞬いた後、小さく笑った。

「ありがと。でも、もう大丈夫だよ」

「で、でも」

華が言葉が続けようとした途端、今まで黙っていた京子がどうでも良さそうな声色で横から口を挟んだ。

「……桜井が大丈夫って言ってるんだから、大丈夫なんじゃない？ 昨日のはただの貧血でしょ。そんな大袈裟に心配する必要ないっ
て」

「そ、そうかな」

華がしゅんと顔を伏せる。京子はそれを一瞥してから、箸をおいた。

「ごちそうさま。ごめん、まだ眠いから部屋に戻ってる」

そう言って立ち上がる京子を見て、華が慌てたように口を開く。

「え、あ、うん。じゃあね」

「じゃ、また六時に」

欠伸をしながら、京子が部屋から出て行く。その後ろ姿を見て、優は思い出したように声をかけた。

「昨夜は心配してくれてありがとう。またね」

その言葉に京子がちらりと振り返り、ひらひらと手を振る。すぐに姿が見えなくなり、ドアの開く音と閉じる音が響いた。

部屋に微かな沈黙が落ちた後、優は黙って食事は再開した。同様に、華もおおずおおずと食事を始める。優はチラリとその様子を見て、極力普段と変わらない様子で話しかけた。

「今年も今日で終わりだね」

「……うん」

「初詣、良かったら一緒に行かない？ 愛ちゃんたちも誘って」

「……うん」

どこかうわの空で、華が小さく頷く。優は困ったような笑みを浮かべ、僅かに視線を外した。

「あまり乗り気じゃないかな？」

「え？ あ、ごめんね、少し、ぼうつとしてて」

華が慌てたように両手を顔の前で振る。優は少し考え込む素振りを見せた後、何も言わず残り少ない食器の中身を口に運んだ。

「ごちそうさま」

お箸を置いて、軽く手を合わせる。それを見た華も慌てたように残り少ない朝食を食べ始める。その姿を見て、優はクスリと笑った。

「そんなに急がなくても大丈夫だよ」

「う、うん」

華は頷きながらも、一向にペースを落とそうはしない。優は苦笑を零して、華の食べる様子を微笑ましく眺めた。

すぐに華が残りを食べ終える。無理に詰め込んだ為か、華の頬はハムスターのように膨らんでいた。それを華が全て飲みこむのを待ってから、口を開く。

「……僕は後少ししたらちよつと出かせないといけなただけど、華ちゃんはどうする？」

「お出かせするの？」

「うん。出かけると言っても本部内なんだけど、ちよつと用事があつて」

華の顔に僅かな陰が差す。しかし、優がそれに気づく前に華は普段通りの笑みを浮かべた。

「わかった。じゃあ、私は部屋に戻ってるね」

「せつかく来てくれたのにごめんね」

優が申し訳なさそうな様子を見せると、華は立ちあがって胸の前で両手を横に振った。

「仕方ないよ。桜井くんは忙しいもん。じゃあ、また六時に！」

そう言つて、ぱたぱたと逃げるように玄関へ走っていく。部屋に残された優は慌てて、声を上げた。

「うん。また後でね」

直後に玄関ドアの閉まる音。残された優はゆっくりと瞼を閉じて、小さく溜め息を吐いた。

それから、思い出したように食器を重ねて流し台へと運ぶ。蛇口を捻ると冷たい水が飛び出し、瞬く間に食器を満たしていった。そのまま洗おうとするも、すぐに水を止め、部屋に戻る。今日は何より優先すべき事があつた。

服を着替え、コートを着込んでから優は迷わず部屋を飛び出した。歩きながら、時計に目を向ける。午前十時。彼女は起きているだろうか、と優はぼんやりと考えを巡らせた。

エントランスを抜けて外に出る。風が弱く、思いのほか寒くはな

かった。黙々と舗装された道を進み、正面ゲート付近の広大な駐車場に到着する。それから道を逸れて本部敷地の周辺に広がる林に足を踏み入れた。

枯れ木が擦れる音と優の足音だけが木霊する。辺りに人影がない事を確認してから、優は立ち止まってゆっくりと瞼を閉じた。それから、意識を集中し、周囲のESPエネルギーを探る。すぐに大きな反応が一つ感じられた。白崎凜のものだろう。それから、比較的大きい五つの反応。他の小隊長のものだとすぐにわかった。更に意識を集中すると、他の中隊員の大まかな位置が感じられるようになる。徐々に視界が開けていくような開放感に包まれ、本部外の反応がいくつも頭の中へ入っていく。数えきれない程のESPエネルギーを感知した後、優は一つの反応に辿りつき、それに向かって慎重にESPエネルギーを放った。

> 広瀬さん、起きていますか？<

風の音が消える。直後、奇妙な浮遊感に包まれると同時に頭の中に若い女性の声が響き渡った。

> 桜井か？<

広瀬理沙の声。優は理沙が無事であった事に安堵し、全身の力を抜いた。

> 桜井です。お久しぶりです。お元気ですか？<

> ちよつと前に風邪を引いた。病院に行く訳にもいかないから随分と困ったよ。インフルエンザや肺炎にかかるとまずいかもしいかない。予想外の言葉に、優は息を詰まらせた。病气。そんな事は考えた事がなかった。その事実に啞然とした後、もし病気になったら、という想像が頭をよぎり、優は暫くの間無言で立ち尽くした。

> 桜井？ そっちはどうだった？<

優の返答がないのを訝しく思ったのか、怪訝そうな理沙の思考が直接届く。

> あ、うん。こっちは……ちよつと強い亡霊が出て、暫く入院してました<

> ああ……それで、暫く連絡がなかったわけ。具合は？<

> 今はもう大丈夫です<

> それは良かった。ところで、良かったらまた会えないか？ 本当
に桜井が暇な時で良いんだけど。今、東京にいるんだ<

> ごめんなさい。暫く、外に出られない事になっているんです。お
金の方、余裕ないんですか？<

> いや……そっちは大丈夫だよ。おかげで当分は持つ。ただ、ちょ
っと直接話したいな、と思ったただけだ。あ、いや、別に大事な話と
かはなから気にしなくていい<

向こうで、理沙が寂しそうに笑った気がした。優は何も言えず、
黙り込んだ。

> そうだ。さつき小さい蕎麦屋に行ったんだ。夜は人目が多いから、
今のうちに年越し蕎麦を食べようと思って。そしたらさ <

理沙が楽しそうに話す内容に、優は黙って耳を傾けた。

理沙が話す事は、全て日常のちよつとした出来事だった。恐らく、
ずっと話相手がいなかったのだろう。しかし、理沙の話を最後まで
聞いている余裕は、今の優には残されていない。

> 広瀬さん、そろそろ切ります。あまり長い間ESPエネルギー使
つてると、自衛軍に……<

そう切り出した途端に理沙の反応が途絶えた為、優は咄嗟に言葉
を繋げた。

> また、お正月に連絡します<

> ……わかった。また、お正月に<

理沙との繋がりが切れ、全身を覆っていた浮遊感が消える。妙に
身体が重たく感じられた。

優は微かにふらついた後、ゆっくりと辺りを見渡した。ひと気は
ない。理沙との連絡に使用したESPエネルギーは少量だったが、
恐らく本部には探知されているはずだ。場合によっては保安部が駆
けつけてくるかもしれないと身構えていたのだが、どうやらお咎め
はないらしい。帰ってから何か言われるかもしれないが、それほど

大事にはならないだろう。

小さく息をついて、近くの枯れ木に背中を預けた時、ふと柊沙織の事が頭に浮かんだ。亡霊に見せられた記憶の中で、彼女はこうして木に背中を預けてよく昼寝をしていた。沙織がいつもそうしていた理由が今は何となくわかる気がした。

木にもたれかかったままずると座り込み、優は空を見上げた。冬の白い空と枯れ枝が視界に広がる。暫くその光景をぼうつと眺めた後、ゆっくりと目を閉じて広瀬理沙の事を考えた。

軽率だった、と思う。彼女の置かれた状況があまりにも理不尽に思えて、軽々支援するなんて宣言して、結局、何もできなかった。

中隊に入ったおかげで、銀行には充分なお金があった。それだけで、彼女一人くらいなら助ける事ができると信じ込んでいた。あまりにも子ども染みた考えつきだった。

逃がして、その後はどうする？

優は両手で顔を覆い、大きく息をついた。

彼女は、一生逃げ続けなければならなくなったのだ。終わりは、ない。彼女が年老いて様々な機能障害を抱えることになって、普通の暮らしを送る事はできない。重い病気を患っても重傷を負っても、公の機関に助けを求める事ができない。彼女は全ての庇護を受ける事ができなくなってしまった。そうした立場に、追いやられてしまった。

でも、と優は思った。理沙を自衛軍に、あるいはSIAに引き渡す事が正解だったとも思えない。もし引き渡していれば以前に白崎凜が言っていた通り、理沙は公正な裁判にかけられることなく、何らかの措置を受ける事になっていただろう。

今となつては何が正解だったか分からない。ただ、無力感だけが残っていた。

少なくとも、と優は再び小さく息をついた。少なくとも、SIAの方針は一貫している。功利主義的な彼らのやり方は多くの批判を生んでいるが、その存在が必要不可欠である事も周知の事実だ。例

えそれが日本国憲法の第三章に抵触している可能性があるろうと、多くの者はそれが限定的であれば許容するであろうし、司法もまた多分な政治的解釈を持つてその存在を許容するだろう。それが人道的であるかは別の問題であつて、ただ必要なのだ。故に彼らは過去に何万もの死者を出した生命体の侵略に対抗する為、数十人の児童に強力な苦痛を与えて戦力を増強しようとするし、人を殺めた超能力者を不要な社会的混乱を招かない為に秘密裏に処分しようとする。

SIAには、確固たる方針がある。何を切り捨て、何を守るのかそれが明確化されている。ところが自分はどうだろう、と優は思った。ただ感情に流されて、その場で思いついた事を軽々しく実行に移して。結局、理沙が優に攻撃を仕掛けたというシナリオになって理沙の立場を悪化させただけ。誰も、何も救えていない。

優は唇を噛んで、ゆっくりと立ち上がった。冬の冷たい風が頬を撫でる。優は元来た道を再び歩き始めた。

「お？ 桜井じゃねーか。何やつてんだ？」

林から駐車場に出た途端、横から声をかけられる。振り返ると、正面ゲートから歩いてくる川上沙耶の姿が見えた。沙耶の後ろには深海百合と小山千夏の二人。

「三人ともおはよう。どこか遊びに行つてたの？」

優が首を傾げると、沙耶が、ああ、頷いた。

「正月はゆっくりしたいから、色々と買いだめしてきたんだよ。お前はこんな所でどうしたんだ？」

「僕は……散歩かな。少し、涼みたくて」

「ふーん。丁度いいや。中まで荷物持つてくれない？ こいつ、ちよつと肩痛めててさ」

沙耶はそう言つて、後ろの千夏を顎で指した。指名された千夏は、へ、と一瞬キョトンとした様子を見せた後、慌てたように荷物を地面に置いて両手をぶんぶんと振り回した。

「え、でもお、それは桜井に悪いしい」

千夏が言葉を続ける前に、沙耶がひよいと千夏の荷物を持ち上げ

る。次いで、沙耶はそれを優に向かって放り投げた。

「ほら」

「わっ、いきなりっ」

優が慌ててキャッチすると、沙耶はにんまりとした笑みを浮かべた。

「じゃあ、後は頼んだ。私と百合は先に本部行ってるから」

そう言っつて、沙耶は百合に、行くぞ、と呟いて走り始めた。百合が面倒くさそうな表情を浮かべた後、嫌々といった様子で沙耶の後を追ってゆっくりと駆け始める。

「……あの二人、何か急ぎの用でもあるの？」

突然走り始めた二人の後ろ姿を見ながら、優は隣の千夏に苦笑混じりに問いかけた。千夏は引きつった笑みで、さあ？ と呟いた後、大きく溜め息を吐いた。

「ごめんねえ。無理やり持たせちゃってえ」

一転して申し訳なさそうにする千夏に優は微笑を浮かべた。

「あまり重くないし、大丈夫だよ。じゃ、行こっか」

優がそう言っつて足を進めると千夏は、うん、と頷いて隣に並んで歩きはじめ。優はチラリと千夏に視線を向け、首を傾げた。

「肩痛めたっつて言っつたけど、どうしたの？」

「え、あ、ううん。ちょっとお……ね」

言い淀む千夏を見て、優はそれ以上深く聞こうとはしなかった。無言で本部に向かって歩き続ける。

「……桜井、元気ないみたいだけど大丈夫う？」

千夏がおずおずと口を開く。優は苦笑して、朝はいつもこんな感じだよ、と首を振った。

それから何も話す事なく、二人は本部に着いた。隣で千夏が居心地悪そうにしていたが、何も話す気にはなれなかった。頭の中で広瀬理沙の事がぐるぐると回り、後悔だけが募っていく。

エントランスホールでエレベーターが来るのを待っていると、千夏が痺れを切らしたように口を開いた。

「さ、桜井ってそういえば特殊戦術大隊長になっただってえ？普通に凄くないい？そのまま総理大臣まで行けそうな勢いだよねえ！」

「……たぶん、やる事はあまり変わらないよ」

「で、でもお、軍隊にも命令したりできるんじゃないの？」

「うーん、それは指揮系統が違うから関係ないと思う」

そこでふと、このまま昇格を続ければいつかは広瀬理沙の処分に対して何らかの決定権を持つ事ができるかもしれない、という漠然とした考えが浮かんだ。しかし、優はすぐにそれを打ち消した。何の現実味もない妄想だ。たった一人の子どもが重要な案件を左右できるほどの力を持つなどありえない。

エレベーターが到着し、扉が開く。優と千夏は黙ってそれに乗り込んだ。

「小山さんの部屋って何階だっけ？」

「三階い」

優は言われた通りに三階のボタンを押した。ドアが閉まり、エレベーターが動き出す。

「さ、桜井って、ボーリングとか結構やる？」

「んー、たまに。あまり上手くないよ」

優がそう答えると千夏は少し迷った素振りを見せて、何か大事な事を伝えるかのように一歩踏み出した。

「来月の四日に沙耶たちとボーリング行くんだけど、人数合わなくてえ。さ、桜井が良ければ」

そこでエレベーターが停止し、ドアが開いた。途端、千夏が出入り口を見て黙り込む。優も釣られてそちらに目を向けると、出入り口の向こうに立つ神奈奈々と目が合った。奈々は優と千夏を交互に見て微かに驚いた表情を浮かべた後、にこりと笑みを浮かべた。

「珍しい組み合わせね。ちょうど良かったわ。優君に用事があったの。千夏ちゃん、優君ちょっと借り良いかしら？」

奈々はそう言って千夏の返事を待たずに優の手を掴んだ。

「神条司令……?」

奈々は優の疑問の声を無視して、千夏に申し訳なさそうな視線を送った。

「ごめんなさい。ちょっと大事な話があるから」

奈々が歩き始め、優の手がぐい、と強く引つ張られる。優は慌てて千夏の荷物をエレベーターの前に置いて、千夏を目を向けた。

「ごめん、これここに置いておくれ」

「え、あ」

千夏が何か言いかけたのが聞こえたが、奈々の手を握る力があまりにも強い為、優は千夏から視線を外して奈々の顔を見上げた。

「あの……?」

優が疑問の声を上げた時、奈々は突然立ち止まってすぐそばにあった扉に近づき、制服の内ポケットから一枚の電子カードを取り出してロックを解除した。扉が開き、暗い室内が戸口から覗く。

「さ、入って」

奈々が小声で言う。優は不思議そうに首を傾げた後、言われた通りに部屋に足を踏み入れた。冷やりとした空気に包まれると同時に中の照明が点灯する。どうやらサーバー室のようだった。柵のようなものが並び、いくつもの機械が低い唸り声をあげている。

「神条司令、ここは……?」

優が疑問の声を上げた時、不意に背後から奈々の腕が腰に巻き付いた。次いで、クスリと耳元で奈々が笑う気配。

「二人つきりの時は別の呼び方にしてって言ったでしょう?」

「……奈々、さん?」

「よくできました」

奈々が満足そうに笑う。優は戸惑った様子を隠せず、身をよじって背後の奈々に目を向けた。

「あの、用事って……?」

「お昼、一緒に食べない? 千夏ちゃんに先を越される前に連れ出そうと思って」

奈々が悪戯つぽく言う。優はキョトンと目を瞬いた後、小さく笑った。

「是非、ご一緒させてください」

「私の部屋で良い？」

「はい」

頷き、奈々の抱擁が解かれるのを待つ。しかし、一向に抱擁が解かれる様子がない為、優は怪訝な視線を奈々に送った。

「あの、奈々さん？」

「……もう少し、こうしていても良い？」

腰に回された腕に力が込める。優は目を瞑って、遠慮気味に身体を預けた。

「……はい」

サーバーが立てる重低音が響くだけで、辺りは酷く静かだった。暫くしてから、ゆっくりと瞼を開ける。奈々の階級章が近くに見えた。准将の章。優は少し考え込んだ後、じっと奈々の顔を見上げた。

「あの……少し、変な事をうかがってもいいですか？」

「……なあに？」

奈々が首を傾げる。その時、奈々の髪がさらりと頬に落ちた。

「広瀬理沙さんの事なんですけど、彼女がもしSIAなどに身柄を拘束された場合はどうなるんでしょうか？」

微かな沈黙が落ちる。奈々は無表情に優を見つめた後、ふう、と小さく息をついた。

「君は、どうなると思う？」

「……わかりません。でも、殺されたりは……しませんよね？」

「ええ。少し、質問を変えましょう。中隊から離脱する子が年に何人かいる事は知ってる？」

「はい。実際に会った事はありませんが、そうした事があるのは知っています」

「どうして、離脱すると思う？」

「……怪我をしたり、その、精神的な限界が来るから、ですか？」
「ええ。精神的な問題を抱える子が一番多いの。精神的な問題を抱えると、そう、たまに私達の価値基準から逸脱した行動をしてしまっ子もいるわ。もちろん、それは彼女たちにとって何らかの目的がある、あるいは何らかの理由を伴う合理的な行動である場合が殆どだけど、私達がそれを理解することは難しいし、それが社会的な脅威である可能性もある。そうになると、そうした問題を抱えて中隊から離脱した子は広瀬理沙と同じような危険分子と見なす事もできる。そうした子は、どうやって管理されると思う？」

奈々の声が妙に淡々としていて、優は背中に冷たいものを感じた。
「……わかりません」

「お薬を使つて、大人しくさせるの。いわゆる精神病院に行つてみると、多くの患者は一見すると異常が見られなかったりする。それは、そうした措置を受けているから。強制的な身体拘束というものは、今はあまり必要がないの。最近は医療用ナノマシンを使って、より精度の高い措置を与える事もできる。だから、広瀬理沙が身柄を拘束されればそうやって管理されることになるでしょう」

優はベッドの上でぐったりとする広瀬理沙の姿を想像し、唇を噛んだ。
「後悔、しているの？」

奈々が優しく言う。優は、はい、と小さく呟いた。

「優君は広瀬さんの意思を無視して、勝手に彼女を逃がしたの？」
首を振る。奈々は小さく息をついた。

「なら、優君が考えるべき事じゃないでしょう。あなたは選択肢を与えただけ。彼女は彼女自身の手で道を選ぶべきだし、その結果についても外野が評価すべきじゃない。何でも人のせいにするのは許されない事だけど、何でも自分のせいにするのも許されない事よ。彼女が得た結果はベストじゃなかったかもしれないけど、少なくとも来るべき最悪の結果は免れた。彼女には、未来が与えられた。それだけで十分だと思う。一個人が全てを思い通りに運べるなんて、

傲慢な考えよ」

優はじつと奈々の言葉に耳を傾けた後、ゆっくりと目を瞑った。傲慢。多分、その一言に尽きるのだろう、と思う。

「僕は、どうすれば良かったんでしょうか？ どうすれば、良いんでしょうか？」

問いかけると、奈々は一拍の間をおいた後、諭すように言った。

「君が何かする前に、広瀬さんが何かするかもそれない。一人で考え込むのは、やめなさい。君は広瀬さんの置かれた状況を悲観しているけれど、彼女は違うかもしれない。下手をすれば、押しつけにしかないわ。決定は、君がすることじゃない」

優は弱々しく笑った。

「そうかも、しれないです。そうですね。広瀬さんと、すっかり今後の事について話してみます」

「ええ。それがいいわ。一人で考えても何にもならないからやめなさい」

奈々はそう言って、そつと優の頭を撫でた。それから悪戯っぽく笑う。

「あまり、私が偉そうに言える事じゃないんだけどね。職権乱用して、こんな所に未成年を連れ込んでる身だから」

そこに含まれた微かな自嘲的な響に、そんなことは、と優が言いかけた時、腰に回された奈々の手が、さわり、と蠢いた。

「今日の予定は？」

耳元で奈々が囁く。優は身体を強張らせ、あの？ と奈々を見上げた。

「六時から、行かないといけないでしょう？ それまでは大丈夫？」

「……はい」

優が小さく頷くと、奈々はにこりと微笑んだ。

「私の部屋に行きましょう」

奈々の吐息が頬にかかる。次いで、奈々は抱擁を解いて優の手を取った。

優は先程の奈々の言葉に含まれていた自嘲の響を忘れる事が出来ず、何度もそれについて考えを巡らしながら奈々に手を引かれてサイバー室を後にした。

5章 9話 神条奈々(16)

「……ところで、我々が普段使っている時間とは何だろうか。時間という概念を正確に説明できる者はいるかな？」

遠くで声が聞こえる。酷く懐かしい声。誰の声だっただろう。父の声だ。何故、懐かしいのだろうか？ 父は既に四年前に他界したからだ。脳梗塞だった。そこまで考えて、神条奈々は自らが夢を見ている事に気付いた。

うつすらと視界が開ける。広い講堂が見えた。前方の教壇に立った父が学生の反応を観察するように辺りを見渡す。そして、まだ幼い奈々が講堂の後ろで隠れるようにその姿を見つめている光景を、奈々は監視カメラから覗くかのように斜め上から眺めていた。

「ふむ。では、話を進める為に全員に共通の前提条件を与えよう。時間はあらゆる物質的な変化を認識する為の概念であるとする。概念。つまり、我々が創りだした幻想だ。では、時間の流れとは何だろうか。時間は一体どう流れる？」

父は質問の意味が学生達に浸透するのを待つかのように、三秒間の沈黙を置いてから言葉を続けた。

「分からなくて当然だ。正解は、ない。ある種の宗教的な考えでは未来から過去に時間が流れているという説もあるし、哲学的に考えるならば、様々な解答が存在するだろう。だが、君達はそこまで難しく考える必要はない。これは哲学の講義ではないからね」

父はそこでふつと小さく笑みを浮かべ、黒板に「時間」という文字と簡単な人の絵を描いた。

「ここで重要なのは、時間というものが酷く曖昧なものである、という点だ。私達はしばしば時間というものを固定的に捉えがちだけど、それは誤った認識だ。少なくとも、それは普遍的ではない。この講義を受ける以上、君達は時間というものについて少し理解を深める必要がある」

父はそこで言葉を切り、手元のノートに視線を落とした。

「さて、ここでレジユメの内容に入ろう。前回の講義では、人の眼について学んだね。私達はレンズを通してものを見るけど、そのせいで網膜に映る映像というものは逆さまに映ってしまっている。しかし、君達が見ている私という像は逆さまではないはずだ。それは、そうした処理が施されている為で、いわば偽物に過ぎない。いや、偽物という言い方は適切ではないけど、つまり、本物の映像をそのまま見ている訳ではない。私達は加工された映像を見ている訳だ。これは中学か高校で既に知っている人も多いだろう。さて、ここから今日の内容に入る訳だけど、時間というものも我々が得ている視覚と同様に何らかの加工が行われた情報だ。すなわち、その時間の加工方法が我々と異なる者が存在する。その分かりやすい例が幼児や自閉症者だ。自閉症と一言で言っても、その症状は個々によってバラバラで、包括的に語れるものでないが、彼らの多くは私達と別の時間感覚を保持していると言われている。例えば、私達は過去と現在を明確に区別できる。それは何故だろうか？ 様々な要因があるが、簡単に言えば記憶の濃度が違うから過去と現実を区別できる。過去の記憶は曖昧で、新しい記憶ほど鮮明だ。しかし、自閉症者はその濃度に大きな違いが見られない、と言われている。つまり過去というものが、非常に近しく感じるということだ。故に、ある作業の時間が永遠に感じられてパニックを起こしたり、困った事があれば何時間もその場に立ち尽くしてしまったりする事がある。周囲から見れば不可解に見える行動も、彼らにとっては理由のある事なのだ。このように、時間というものは私達が社会生活を送る上で重要な指針となる」

奈々は、この話をぼんやりと知っていた。小学二年生の頃、母とともに大学で外部講師をしていた父の様子を見に行った時の事だ。今まで忘れていた記憶。それが、夢を通して鮮明に蘇り始めていた。「さて、時間感覚というものについて説明したところで、その働きについて考えてみよう。私達は記憶という時間軸を頼りに、あらゆる

る時間に移る事ができる。過去に親に連れて行ってもらった動物園を容易に思いだす事ができるし、逆に今後起こり得る事を想像で補充することもできる。私達はいとも容易く現実を離れ、虚構の世界を泳ぐ事ができる。いま、ここ、の世界の上に新たな世界を築き、二つの世界を渡り歩いていくと考えると中々幻想的だね」

父はそう言いながら、黒板に描かれた人の絵の頭内に二つの現実という文字を描きこんだ。

「逆に、私達はこの多重化された世界から逃れる事はできない、とも言える。この世界の多重化を引き起こすのが三歳。それ以降は皆世界がずれているんだ。多重化した世界のうち、いま・この世界を捨てて、自らが作り上げた世界に籠る者もいるけど、それは一般的に病気と呼ばれるね。あまり、健康的ではない。そういう訳で、私達が純粋な現在のみを生きる、ということは難しい。皆、自らの表象世界を孤独に生きている、というのは少しセンチメンタルすぎるかな？」

父は笑いながらそう言って、黒板に描かれた人の絵を消した。まだ幼い奈々はその光景をじっと見つめたまま動かなかった。

「さて、講義を進めよう。レジュメにある通り時間感覚の獲得は発達段階のうち」

父が講義を再開する。途端に、光景が滲み始める。

暗転。

意識が急速に浮上していく。

奈々はまどろみから醒めると同時に、腕に何か温かいものを抱いている事に気づいて、はっと目を開いた。眼前ですやすやと眠る優の寝顔が真っ先に視界に飛び込み、それから反射的に自らの身体に視線を移す。何も衣服を纏っていない事を確認してから、ああ、と奇妙な納得を覚えて、ぐったりと枕に頭を落とした。

幼少期の夢を見るのは珍しい事だった。特に父の夢を見るのは。

奈々は父と折り合いが良くなかった。明確なきっかけがあった訳ではないが、高校を出た時点でお互いに言葉を交わす機会は殆ど失わ

れていた。しかし、憎しみ合っていた訳ではない。ただ、お互いに積極的に関わり合おうとしなかった結果、そうなった。そのまま、父は突然他界した。

奈々は夢の中の父の言葉について考えを巡らせた後、小さく息をついた。今でもよく覚えていて。その後の奈々の生き方そのものに大きく影響を与えた言葉だった。そして、当時の幼かった奈々に強い孤独感を植え付けた言葉でもある。何故あんなとりとめのない話が自らにそれほどの影響を与えたのか奈々自身も分からなかったが、それは確かに奈々を変えるには十分すぎるほどの致命的な何かを持っていた。

奈々は何かを整理しようと努めるように深く瞼を閉じて、じつと動きを止めた。それから、ゆっくりと起き上がり、隣で眠る優に目を向ける。

穏やかな寝顔だった。こうして見てみると、普段より更に幼く見える。半ば無意識のうちに頬を撫でようと手が伸びたが、起こしてしまうかもしれない、と奈々は寸でのところでその衝動を抑えた。

奈々は暫くそのまま優の寝顔をじつと眺めた後、ふとテーブルの上に転がるいくつかの空き缶と軽食の後に目をやり、我ながら用意が良かったな、と自らの学習能力を評価した。それから行為に至る経緯を思い出し、奈々は軽い自己嫌悪に陥った。

元々、昼は一人で食べる予定だった。それ自体は別段、珍しい事ではない。その前に所用を済ませてしまおうと向かったエレベーターで優と千夏とたまたま出会った途端、殆ど反射的に優を千夏から引き離していた。奈々の目には、一緒にいた千夏が優を意識しているようにしか見えなかったのだ。

奈々はまだ寝ている優に視線を戻し、私はこれほど嫉妬深かっただろうか、と自問自答した。少なくとも、自分ではそちら方面に対しては非常に淡泊だと思っていた。だからこそ、優に告白された時も、明確な関係になる事を避けてたのだ。

桜井優と、自分はそうなるべきではない。桜井優が特定のパート

ナーを持たない方が、中隊を統率する上で都合が良い。恋慕は、尊敬心や友情よりも強い信用・忠誠心を生む。あるいは、盲目的な。

そうしたいくらいかの打算的な考えを持って、奈々は今の関係を選んだ。奈々の仕事は亡霊の迎撃であって、唯一の対抗手段である中隊の生存率を上げる為なら、大方の事は許容できる。桜井優が中隊の誰かと結ばれる必要性があるならば、奈々は当然のように身を引くつもりだった。自らの欲求の優先度は限りなく低く設定すべきで、中隊に影響を与えるような事があってはならない。そう考えていた筈なのだが。

奈々は優の顔を見つめて、小さく溜め息を吐いた。自分は、淡泊などではなかったのかもしれない。ただ、随分と年齢差の開いた相手にしか興味がなかっただけだったのではないかと、嫌な想像が頭をよぎり、奈々は頭を抑えた。それからすぐに、メディアを通して見る機会が多い少年アイドルグループを特に意識した事がない事に気づき、安堵する。やはり年齢は関係ないだろう、と結論付け、奈々は大きく伸びをした。

心地良い疲労感が全身を覆っていた。先にシャワーを浴びようか、優が起きるのを待とうか迷った時、視界の隅で優が寝がえりを打つのが見えた。無意識のうちに視線を向けると、肩までかかっていたブランケットがゆるりとずれ、痣のようなものが点々と広がる背中が覗いているのを見つけた。奈々はすうっと目を細め、そっとブランケットをわきにどけた。

痣のようなものは、古い火傷の痕のようだった。規則的な大きさで、何箇所かに点在している。すぐに煙草を押しつけられた痕だとわかった。頭の中がすうっと冷え切っていく。

入隊時に行った身体検査で、優にそうした痕跡があること事は報告を受けていた。昨日も、暗闇の中で微かにそれらしいものは確認できた。しかし、明かりのある中でこうして明確に痕跡を確認した事はなかった。

奈々はそっとブランケットをかけなおし、優に寄り添うようにべ

ツドへ身体を倒した。目を瞑ると、以前に優を前線メンバーから外そうとした時に取り乱した優の顔が瞼の裏に浮かび、奇妙なざわめきに襲われた。

何でもします。だから、捨てないでください。あの時、優は確かにそう言った。親に捨てられた事を、今でも気にしているのだろうか。身体的虐待を繰り返していたであろう親が相手でも？

奈々は暫く考え込んだ後、一つの疑問に辿りついた。

もし、優の両親がいまだに生きていたのであれば、優は再会を望むのだろうか？ それは、優にとって何らかの前進になるのだろうか？

優が望む望まないにしても、調べる事は不可能ではない。総基ネット上から桜井優のデータが消えていたとはいえ、S I A や公安が保持する”本物の”総基ネット”にはデータが残されているはずだ。近いうちに繋がりを持つであろう華秋院から、そうしたりソースにアクセスすることは容易くなるだろう。

奈々は暫く考え込んだ後、優の意思に関わらず、彼の両親について調べておくべきだ、という結論に達した。喪失したパーソナルデータの行方はいまだにわからない。近いうちに再調査が必要だ。

そこまで考えたところで、隣の優が小さく蠢くのが見えて、奈々は思考を止めた。

「起きた？」

声をかけると、優はもぞもぞと起き上がり、眠たそうに目を擦り始める。奈々はクスリと笑って、優をそっと抱きしめた。

「まだ眠い？」

「……はい、少し」

「じゃあ、もう少し寝てよっか」

奈々はそう言って、優を抱いたままベッドに、ぼふん、と倒れ込んだ。下敷きになった優から、ふぎゃ、と小さな悲鳴が上がる。奈々はクスクスと笑いながら、そのままぎゅっと強く優を抱きしめた。「あの、これ、どう考えても寝る姿勢じゃないです」

「じゃあ、何の姿勢だと思う?」

そう言って、優が何か言う前に奈々は口づけを落とした。すぐに離し、優の反応を楽しそうに見つめる。奈々の頭からは既に夢の事や優の両親の事など抜け落ちていた。

「ねえ、まだできる?」

優の顔が軽く引きつる。奈々は返事を待たずして先程とは異なる深い口づけを落とした。

胸の奥から珍しい感情が急速に湧き起こる。征服欲が満たされ、奇妙な全能感が広がっていく。

普段なら嫌悪を抱くような自身の感情が不思議と気にならず、奈々はそれを抑え込もうとしなかった。

今だけ。頭のどこかで冷静な自分がそう言い訳する。

そして、この考え方は危険だな、ぼんやりと考えながら奈々は思考を手放した。

「これは、風や重力、空気抵抗等のあらゆる障害が全く発生しないということかね?」

中崎陸上幕僚長は、スクリーンに映し出された映像を見て、隣の白崎蘭に戸惑いの視線を向けた。

「はい。ESPエネルギーは物理的な影響を完全に無視します。逆に、選択的に物理的な影響を与える事も可能です。過去に観測されたいくつかの結果から、その選択性にはESP能力者の認識が影響を与えていると考えられますが、厳密な事は未だに良く分かっていません」

スクリーンには特殊戦術中隊の第五小隊長、進藤咲の戦闘記録が映し出されている。四百メートル先の亡霊へ狙撃を成功させたところだった。

「彼女たちは中軌道以上の衛星に対しても同様の攻撃をすることが

できる、と？」

「ええ、例外はありません。ただ、彼女たちのこうした使い方は、あまり実用的ではない。進藤咲の他にも第五小隊を中心に狙撃手の育成を図った事があるようですが、いまだに成果が出ていません。これは、彼女固有の素質と評価すべきです」

中崎陸上幕僚長は興味深そうにスクリーンに視線を戻し、視線をスクリーンに固定したまま思い出したように口を開いた。

「しかし、それは生身の人間の話、だね？ 例えば、あれが完成した場合は何だけ離れた目標に対しても精密な攻撃が可能になる訳だ。白流島を直接攻撃することも可能に思えるが」

中崎陸上幕僚長の言葉に蘭は首を横に振った。

「高度三メートルほどに砲身があると仮定すれば、有効射程はおよそ六キロメートル程度にしかありません。地球は、閣下が考えているより遥かに丸い。そうした意味で、純粋なESPエネルギーというものは対亡霊戦略以外には利用価値が薄いと考えられています。白流島を直接攻撃する為には弾道ミサイルにESPエネルギーを付与するなどの工夫が必要でしょう。しかし、閣下がご存じのように亡霊はESPエネルギー以外の物理的な影響を無視する為、弾道ミサイルはESPエネルギーを運ぶためのキャリアとしての役割しか果たさず、亡霊に対して一切の打撃能力を發揮しません。些細なESPエネルギーを運ぶために弾道ミサイルを利用するにはコストがかかりすぎる。白流島を直接攻撃するという考えは、あまり現実的ではありません」

「ふむ……ESPエネルギーの事となると随分と幻想的な印象を受けるが、君と話していると突然現実に引っ張り戻されるようで心臓に悪いな」

中崎陸上幕僚長はそう言って、朗らかに笑った。蘭は、笑わなかった。

「全て、現実の問題です。ファンタジーではない。先程閣下が仰ったようなESPエネルギーの軍事利用についても防衛研で踏み込ん

だ議論が幾度か行われた事がありますが、有用ではないとの結論が既に出ています」

中崎陸上幕僚長は微かに楽しそうな表情を浮かべ、暗い室内の端に並ぶ男達に視線を向けた。

「対亡霊戦略の根本的な見直しについても既に話合ったのかね？」

「プロマネは……伏見さんはこれからの工学的な進歩を見据えて対策室の廃止を唱えています。指揮系統を一元化し、ESP能力者の代わりに自衛軍が工学的な手段を持って亡霊に対抗すべきだと。亡対室の成り立ちには多くの政治的な事情が絡んでいました。その規模と不釣り合いな名称から司令官の選抜、組織構造、独立性。全てが、その影響を受けた。機能的な判断に基づいた訳ではない。当時はそうした婉曲が必要だったのは分かりますが、今やその必要性の大部分が失われています。徐々に合理化していく必要があります」

中崎陸上幕僚長は難しい表情を浮かべ、小さく息をついた。

「経緯はそうだったかもしれないが、結果的にそれは上手くいった。下手な再編は混乱を生むばかりか、その機能を奪う事にもなりかねんかね？」

「リスクは承知です。ですが、今の構造は長期的な展望に基づいて創られたものではない。闘争を終わらせるための戦略が何もなければならぬことになる。その長い間に、必ず綻びが生まれます。巨大な災害が起こるかもしれないし、ユーラシア連合が他の大陸を呑みこむかもしれない。もしくは、ESP能力者の供給が突然遮断されるかもしれない。そうなれば、我々は戦闘継続能力を完全に失うことになる。そうなる前に、工学的な対抗手段へ徐々にシフトし、戦力の増強に努めていかなければならない。防衛研の見積もりでは、後二十年で対抗手段を艦船に搭載できるほど小型化できるとし、更に十五年で白流島を完全に制圧できるほどの戦力を保持できるとの見解が出ています。三十五年。それが、闘争終了までの最短ルート。その間に、亡対室の改革と予算を抑える必要があります。資金につ

いては、上田中将が」

「少し、話の腰を折るよ。君は何故、このような話を私にしているのかね？ 私の役目はただ一つだ。そうだろう？」

蘭は僅かに口を噤んだ後、ゆっくりと口を開いた。

「あなたに、理解していただきたかったです」

「それは、君の考えではないね。誰の望みかな」

「……中将は、あなたを捨て駒として見ていません」

「それは、些か感情的すぎるのではないかな。何の犠牲も厭わず、事を進められると思っっている訳ではあるまい」

「……全てが終わった後、陸上戦力の削減は避けられない事になる。それを抑え込むだけの、求心力が必要です。中将は、自らにそれだけの求心力がない事を理解している。閣下、あなたが必要なのです」

「その話は初耳だね。ああ、いや、責めている訳ではないよ。終わった後の事は、私には最早関係ない話だ。君達が決めなさい。新しい体制には、新しい象徴が必要だ。私の出番は、もうないよ。潮時だ」

中崎陸上幕僚長はにこりと笑って、席を立った。白崎蘭が微かに引きとめようとする動作を見せたが、結局、彼女は何も言わなかった。

「なかなか、おもしろい話だった。歳をとったら若者と話せ、とはよく言ったものだ」

そう言って、コートを羽織る。蘭はじつと中崎陸上幕僚長を見つめた後、残念です、と呟くように言った。

「実を言えば、我々は深刻な人材不足に悩まされているのです。各ポストを埋められるだけの計画が、まだ出来ていない」

「なら、まだ猶予はあるのかな。それまでゆっくりさせてもらおうよ」

中崎陸上幕僚長は手をひらひらと振って、良い年を、と朗らかに笑いながら言った。

5章 10話 奥村音々(2)

午後五時四十分。

桜井優は奈々の部屋を出た直後、六時まではまだ余裕がある事を確認し、ゆつくりと寮棟に向かつて歩き始めた。

大晦日である為か、本部の廊下は静かだった。休暇を得ている職員が多いのだろう。電子オペレーターのような三交代制で配置から外れる事が許されない職員とたまにすれ違う程度だった。

寮棟に着くと、途端に騒がしさが増した。いくらかの制限以内なら休暇を申請する事も可能だが、休暇を申請した者は殆どいなかったようだ。

中隊員とすれ違う度に短い言葉を交わしながら廊下を抜け、突き当たりの談話室の前まで来た時、中から調理用のプレートを抱えた沙耶が出てきた。優の姿を確認した途端、にいつと笑みを浮かべる。「おう。丁度良かった。これ、屋上まで運んでくれ」

そう言って、沙耶がプレートを押しつけてくる。優は反射的にそれを受け取りながら、屋上？ と聞き返した。

「ああ。ここ、予想以上に狭かったんだ。さつき無理矢理許可として屋上でやることにしたんだよ。初日の出も見れるしな」

「初日の出って、そんなに長くやるの？」

「騒ぎたい奴はそれくらいまで残るんじゃないの。大方はすぐに帰るだろうけど」

沙耶はそれだけ言うと、じゃあ頼んだぞ、と言葉を残して再び談話室に戻っていった。優は両腕に抱えたプレートを一度見てから、廊下を引き返して階段を目指し始めた。

歩きながら、珍しいな、と思う。随分と前から忘年会をすると決めていた筈なのに、場所選びで今更ゴタゴタするのは沙耶らしくない。アメ・バヤセラフイムとの戦闘でゴタゴタしていた為、調整がうまくいっていなかったのだろうか。

階段に辿りつくくと、上の方からガヤガヤと数人の女の子達が下りてきた。特に沙耶や千夏と仲が良い、一つ年上のグループ。どうやら、優と同じように搬送を手伝っているようだった。

「桜井くんも沙耶にこき使われてるの？」

すれ違つ寸前、一人の少女がからかうような口調で尋ねてくる。

優は、はい、と苦笑しながら答えた。

「もう運ぶものも少ないからさ、それ運び終わったらそのまま屋上で待機してて良いよ」

「わかりましたー」

軽く頭を下げて、優はそのまま階段を昇った。

鉄製のドアの前まで来ると、優は膝でプレートを支えながら、片手をドアノブを回した。僅かな抵抗とともに、ギイ、と嫌な音がする。直後、隙間から冷たい風が吹き込んだ。次いで、開いたドアから黒く染まった空が見えた。その下にはいくらかの人影。まだ殆ど集まっていないようだった。

優は扉をくぐって、プレートを持ったまま人影の一人に近づいた。

「これ、どこに置いたらいいかな？」

「え、あ、あ、えつと、どこでもいいと思うっ」

人影が驚いたように振り返る。暗闇で良く分からなかったが、間延びした声で小山千夏だとすぐにわかった。

「ここ、夜になると本当に真っ暗だね」

優はそう言つて、辺りを見渡した。本部自体が山奥にある為、周囲に人工的な光が殆ど見られない。山の向こうの空が微かに白みを帯びているだけだった。

「……うん、それに静かだよねえ。ちょっと、怖いくらい」

千夏が同意の言葉をあげる。

優はプレートを置いて、屋上の周囲に張られたフェンスへゆつくりと近づいた。ひゅうつつという風切り音が耳を叩く。ぶるり、と身体を震わせながら、優はフェンスに手をついた。カシャン、とフェンスが小さく悲鳴をあげる。

優はぼんやりと遠くの黒い山を見つめた後、眼下に目を向けた。遠くに、正面ゲートの明かりが見える。それから、手前にテニスコートの明かりが見えた。他に、明かりは見えない。すぐに見るものがなくなつて、優はフェンスから離れた。何となしに振り返ると、こちらをじつと見つめる千夏と目が合った。強い風が吹き、千夏の髪が大きく乱れる。何か声をかけようかと優が迷つた時、ギイ、と金属音が響いた。目を向けると、数人の人影が屋上上がったところだった。その内の一人が特徴的な髪型をしていた為、すぐに望月麗だとわかった。向こうも優に気付いたようで、ツインテールをゆさゆさと揺らしながら駆け寄ってくる。

「先輩、先輩！ これ、どう思いますかっ！」

眼前で止まつた麗が、嬉しそうに両手を見せてくる。良く見ると、細かいネイルアートが施されているようだった。

「わ、自分でやったの？」

「黒木先輩にやってもらつたんです！」

そう言つて、麗は後ろを指差した。麗と共に屋上上がったきた集団の中で、背の高い人影が優の元へ近づいてくる。

「ばっわー！ ユウ君、来るの早いね。腹ペコなパターン？」

第四小隊長、黒木舞は無邪気な笑みを浮かべながら、からかうようにそう言つた。黒のジャケットに、ショートデニム、それからブーツといった格好だった。露出した太股が寒そうだな、と優はぼんやりと思つた。

「黒木さん、第四小隊の方にいなくて良いんですか？」

「んー？ うちも、屋上使用おうかなつて。第一小隊が色々申請してくれてたみたいだから、楽し」

舞らしい、と優が思つた直後、再び屋上の扉が開く音が届いた。振り向くと、そろそろと五人ほどが扉から現れたところだった。階段ですれ違つた一つ年上の少女達で、全員がバーベキュー用の鉄板やライトを持っていた。

「ちよいと予定より開始遅れるかもー」

一人が全員に聞こえるように叫び、準備を始める。手伝おうと思つて優が動くと、ぐい、と後ろから腕を引っ張られた。

「人数が多すぎると逆に邪魔になるって。さぼってようよ」

どちらが本心か分からない事を言う舞に優は小さく笑つて、フェンスに背中を預けるようにもたれかけた。

「ちよつと、寒くないですか？」

「うんうん。寒いねー。ユウくん、こういう時は女の子に上着をそつと渡すものだよ」

舞は両手を優に向けて差しだしながら、真顔でそう言った。優は呆れたように笑つて、それくらい凶太かったら寒さも感じないんじゃないですか、と横の麗に目を向けた。

「麗ちゃんは大丈夫？」

「凍えそうです。先輩の肌で温めてください！」

「大丈夫そうで安心したよ」

優がそう言った時、再び屋上のドアが開いて数人が出てきた。開いた扉から漏れる光で、その内の一人が華である事が分かった。

「華ちゃん！」

優が呼ぶと、華は微かにキョロキョロと辺りを見渡してから、落ちついた足取りでやつてくる。

「華ちゃん一人？ 京子とかは？」

「え？ あ、うん……後から来るんじゃないかな」

そう話している間に、扉から次々と中隊員が出てくる。喋り声が風の音を掻き消し、いたる所で携帯の明かりが暗闇を切り裂き始めていた。優も釣られるように携帯を開き、時刻を確認した。午後六時五分。僅かに開始が遅れているようだった。

「ライト頼む」

僅かに離れたところから、沙耶の声。一拍遅れて、至るところでライトが点いた。臆気だった華や舞、麗の顔がはつきりと照らし出される。

「飲み物欲しい奴、こつち来てくれ。酒もあるぞ」

再び沙耶の声。優は微かに眉をひそめ、隣の舞に声を抑えて尋ねた。

「こんなに堂々とアルコール摂取するのはまずくないですか？」

「別に、大丈夫だよ。いわゆるガス抜きってやつかな。上って、こういうのには結構甘いよ」

舞がどこか冷めた声で答える。優は反射的に舞の顔を見上げた。

普段のおどけた様子とは異なる、無表情な横顔が暗闇に浮かんでいた。

「ガス抜き？」

優が舞の言葉を繰り返した時、人混みの向こうで屋上の扉が開いた。京子と愛が慌てたように飛び出してくる。

「セーフ！」

「あつと」

京子が開口一番に叫び、その後ろで愛が腕時計を見て小さく呟いた。優はその様子を見てクスリと笑ってから、二人に向かって声を張り上げた。

「京子と愛ちゃん、ジュースとかお酒欲しい場合は川上さんの方だつて！」

京子はそれを聞くと、優の方に駆け寄ってくる。

「桜井はジュース？」

「ん、まだとってないよ」

「じゃあ、せっかくだしお酒いこうよ」

そう言って、京子は優の腕をぐい、と引っ張った。優は踏鞴を踏みながら、反射的に後ろの華たちを見た。

「黒木さんと華ちゃんは飲み物、何が良い？」

「キミのと同じでいいよ」

「私も、桜井くんと同じのお願い」

「わかった。取ってくるね」

その言葉を残して、優は京子に引っ張られるままに人混みをかき分けて、沙耶の元まで近づいた。希望を言って、人数分の缶を沙耶

から受け取る。その際、沙耶が耳元で囁くようにボソリと口を開いた。

「後でちょっと付き合ってくれ。少し、話したい事がある」

優は何度か目を瞬いて、沙耶の顔をじっと見つめた。沙耶は、真面目な表情を崩そうとはしなかった。

「わかった。後でね」

優は少し不思議そうな表情を浮かべた後、小さく頷いて華たちの元へ向かった。ちらりと途中で振り返ると、いつも通り深海百合や小山千夏と楽しそうに喋る沙耶の姿があった。

「桜井？」

怪訝そうな京子の声。優は慌てて視線を沙耶から外し、少し先を行く京子の後を追った。

『エントランスまで来てくれ』

沙耶から簡素なメールが送られてきたのは午後十一時の事だった。優はトイレに行くと言って屋上から抜けだし、指定されたエントランス・ホールに向かった。辿りつくまでに別の小隊の少女たちと何度かすれ違ったが、短い言葉を交わすだけで、すぐにエントランス・ホールに辿りつく事ができた。

エントランスホールには暇そうな警備員と沙耶、そして百合がいた。百合はいつものようにどこか気怠そうな雰囲気纏っている。

優は意外そうな視線を百合に向けた後、呼びだした本人である沙耶に説明を求めるように視線を戻した。

「急に呼び出して悪いな。ちょっと、こっち来てくれ」

沙耶は無愛想にそれだけ言って、表玄関とは逆の野外射撃場に続く裏口に向かって歩き始めた。

「鍵、閉まってるんじゃないの？」

優がそう尋ねると、隣の百合が面倒くさそうに答えた。

「この時間帯の利用許可とってるから」

それだけ言つて、百合はさっさと野外射撃場に向かって歩き始めた。残された優はそれを見て、慌ててその後を追った。

野外射撃場に出ると、一瞬にして冷気が優を包んだ。左右の上部に設置された大型ライトが少し眩しい。優は微かに目を細めながら沙耶に向き直った。

「それで、話つてなに？」

沙耶が一瞬だけ百合に視線を向ける。百合は何の反応も示さない。それを見た沙耶は小さく息をついて、バツが悪そうに髪をかきあげた。

「あー、なんだ。いきなり呼び出した拳句、いきなり変な事聞いて悪いんだけどさ……」

そこで僅かに言い淀んだ後、沙耶は深く息を吸つて言葉を続けた。「お前、好きな奴とかいるか？」

空気が固まる。予想外の言葉に、優の思考は完全に停止した。

場に沈黙が落ちる。沙耶の隣に立つ百合が呆れたような表情を浮かべ、あーあ、と呟いた。

「待つて。これだと勘違いされそうだけど、別に、沙耶が桜井に告白とかする訳じゃないから。ただの質問」

百合が面倒くさそうに訂正する。沙耶が肯定するように慌てて頷いた。

「お、おう。ややこしい言い方して悪いな。ちょっと、誤魔化さずに真面目に答えてくれ」

沙耶は少し気まずそうにそう言った後、真剣な表情で優の瞳を真つすぐ射抜いた。優はじつと沙耶の瞳を見返した後、小さく微笑んだ。

「いるよ」

それを聞いた沙耶と百合が一瞬だけ顔を見合わせる。その後、沙耶が諦めたように口を開いた。

「あー、それは割と本気か？ 例えば、ただそいつの顔が良いから

とかじゃなくて？」

「本気だよ。尊敬してる」

迷いなく優が言うと、沙耶は一拍おいて、そうか、と呟いた。

「……なあ。それは、私と結構仲がいいやつか？」

「……多分、川上さんとは、それほど親しくないと思う」

それを聞いた沙耶が何かを考え込むように黙り込む。優は何も言わず、ただ沙耶が何かの答えを出すのを待った。

やがて、沙耶が微かに迷った様子を見せながら、口を開いた。

「あー、私が勝手にこんな事言うのはおかしいんだけどさ。……近いうちに、なんか、お前の事好きだって奴が……告白するかもしれない。それで、その、それまでによく考えて欲しいんだ。私がこんなこと頼むのは本当にお間違いだろうけど、何となくで断つたりとかして欲しくない。だから、頼む」

優はそれを聞いて、頬を緩ませた。

「わかった。ちゃんと考えとくよ。川上さんの頼みだしね」

沙耶が微かに不思議そうな顔をする。優はいくらか確信めいた質問を投げかけた。

「今日、本当はどこかのお店で忘年会する予定だったんだよね？」

「……誰かから聞いたのか？」

「ううん。ただ、そうかな、って思っただけ。今日、何かドタバタしてたから、数日前に僕だけ外出許可が出ない事話した後、急遽予定を変えたのかなって。ありがと」

「……ちゆうた……大隊長抜きでやるのは流石にまずいだろ」

沙耶はバツが悪そうにそう言った後、クルリと背を向けた。

「先に戻ってるわ。百合、行こうぜ」

そう言って、沙耶がエントランスに入っていく。その後続いた百合は、一度だけ優の方を振り返って「悪い子じゃないから」と言葉を残して去っていった。

野外射撃場に取り残された優は、自動扉の向こうに見える沙耶と百合の後ろ姿を眺めながら、小さく息をついた。

川上沙耶、小山千夏、深海百合。よく一緒にいる三人のうち、小山千夏だけがこの場にいなかった。沙耶が言っていたのは、小山千夏のことなのだろう。

沙耶には悪いが、既に答えは決まっていた。考え直しても、答えは変わらない。せめて、極力尾を引かないような答えを考えておかないと。そう思いながら、優は野外射撃場を出た。

エントランスにいる警備員に野外射撃場の利用が終わった事を告げてから、吹き抜けになった二階に繋がる階段をのぼる。それから寮棟に繋がる廊下を渡ろうとした時、不意に嘔吐感が込み上げ、優は口を抑えて壁にもたれかかった。

トイレに駆け込もうとするより先に嘔吐感が限界を超え、優はその場に蹲った。微かな眩暈が加わり、視界がぐるりと反転する。冷やりとしたリノリウムの床に額をつけながら、優は口を両手で抑えて必死に嘔吐感に抗った。

「あら」

背後で鈴を転がしたような声が響く。直後、背中を誰かの手が優しく撫でた。途端、嘔吐感が急速に収まっていく。

優は何度も大きく呼吸を繰り返してから、背後へ首を向けた。赤い瞳でこちらを見下ろす姫野雪の姿と目が合う。雪は優に視線を合わせるようにしゃがみ込み、にこりと笑った。

「気分はましになりましたか？」

「……はい……楽になりました。ありがとうございます」

優はそう言つて、ゆっくりと立ち上がった。眩暈も、嘔吐感もない。先程の体調が嘘のようだった。

「お酒の飲みすぎですか？ 気をつけないといけませんよ」

「……はい」

今日は最低限の量しか摂取していなかったが、優は素直に頷いた。「今日は早くお休みになられた方がいいです。あなたの身体は、あなただけのものではありません」

「……そうします。ご心配かけてすみません」

優は小さく頭を下げてから、寮棟に向けて歩き始めた。直後、ポケットの中で携帯が震える。取り出すと、京子からメールが来た。た。

『今どこにいるの？』

トイレに行くと言って抜けてきた事を思い出し、優は慌てて返信を送った。

『ごめん。少し気分が悪いから、今日はもう寝るね』

送信を確認してから、優は再び寮棟に向かって足を進めた。そして、ふと後ろを振り返る。優が蹲った先程の場所で、こちらをじつと見つめる雪と目が合った。廊下の向こうで、雪が小さく笑うのが見える。

「おやすみなさい」

雪はよく通る声でそう言って、背中を見せた。優はその後ろ姿を見送ってから、再び寮棟に向かって歩き始めた。

ゲートを抜けて、誰もいない寮棟に辿りつく。廊下の角を曲がった時、正面から長身の女性が歩いてくるのが見えた。奥村音々。亡霊に見せられた柘沙織の記憶がフラッシュバックし、優はその場に立ち止まった。柘沙織の記憶の中の音々よりも随分と大人っぽくなっていたが、髪型や雰囲気はそのまま、優は酷く懐かしい友人に会ったような奇妙な感覚に包まれる。

「どうした？」

優が立ち止まってじつと見ていたのが気になったのか、音々も足を止めて怪訝そうに優を見つめ返してくる。優は慌てて首を振った。

「いえ、何でもありません。おやすみなさい」

「ああ。おやすみ」

音々はそれだけ言って、優の横を通り過ぎた。優にとって音々は旧知の知り合いのような気がしても、音々にとってはそうではない。優は奇妙な寂しさを感じながら、音々とは反対の方向に歩き始めた。

年が暮れる。どこかで鐘の音が鳴った気がした。

5章 11話 華秋院彰(2)

「昔、同じ事があつたね」

カーラジオから流れる欧州の金融危機についてのニュースを聞きながら、華秋院彰は隣の席に座るセキュリティの男に向かって楽しそうに語った。

「IMFを通じて破綻寸前の国に対して融資と同時に介入を開始し、外国資本に対して国内市場を全面開放させたんだよ。デフォルトは避けられたけど、結果的に主要銀行をはじめとした金融機関が全て外資に乗っ取られた。事実上の、植民地化だ。今度は、中国がそれを真似した訳だ。どこまでも米国のコピーを続ける気みたいだね」

セキュリティの男は反応に困ったように硬い笑顔を浮かべた。華秋院彰はそれを見てつまらなさそうに窓に目を向けた。

カーラジオからはニュースが流れ続けている。ユーラシア連合、特に中国系金融資本による乗っ取りに堪えられなくなった欧州の各地で暴動が多発し、武力鎮圧が拡大している、と深刻な声色が車内にこだまする。増大する社会不安からナシヨナリズムに走り始めた国では、排外的な法案が通り始めていた。

華秋院彰は窓の外を流れる郊外の景色を眺めながら、当然だ、と呟いた。欧州諸国のGDPは伸び続けているが、それは実体を伴わない成長だった。産業構造が一部企業によって支配され、それを活かす為に政治経済の全てがコントロールされていく。そうして集中的に増大した収益は中国系資本によって吸い取られ、国内には何も残らない。

全て、数字には残らない。数字は現実と剥離した記録を弾き出していくだけだ。その社会構造の異常性は簡単には分からない。

データなんてそんなものだ、と華秋院彰は心の中で毒づいた。形式が出来上がれば、形式を守った上で攻撃を仕掛ける者が必ず出てくる。

私は違う。私は、データなど信じない。再現性や普遍性など何の価値もない。

華秋院彰は前方のフロントガラスを眺めた。山道の奥に亡霊対策室本部の正面ゲートが見える。華秋院彰は口元を釣りあげた。

桜井優は携帯の着信音で目を覚ました。もそもそとベッドから這い出ようと試みるも、寒さに耐えかねて何事もなかったのよう布団の中に戻る。その直後に着信が一度切れ、数秒後に再び着信音が響いた。優は溜め息をついて、布団を頭からかぶったまま、もぞもぞとテーブルの上に置いた携帯の近くまで這った。そして携帯のディスプレイに「神奈奈々」の文字が見えた途端、慌てて電話に出る。「もしもし。おはようございます」

「おはよう。それと、あけましておめでとう」

奈々の言葉で、今日が正月である事を思い出す。

「あけましておめでとうございます。初夢とか見ましたか？」

「いえ。今、時間空いてるかしら？　少し、時間を作って欲しいんだけど」

奈々のどこか切羽詰まった様子を感じとり、眠気が吹き飛ぶ。

「はい。大丈夫です。あの、何かあったんですか？」

「ええ。少し。今自室？　今からそっちに行っても良い？」

「え？　今からですか？」

「そう。あまり、時間的に余裕がなくなってます」

「はい、大丈夫ですけど……」

「じゃあ、すぐに向かうから。突然でごめんなさい」

通話が切れる。携帯に目を落とすとまだ八時過ぎである事に気づき、嫌な予感を覚えた。何かまずい事があったのは間違いない。

優は携帯を持ったまま暫く考え込んだ後、何も知らされていない段階からあれこれ考えても無駄である事に気づき、寝癖を整える為

に洗面所に向かった。

髪を整えた直後、ドアをノックする音が響く。優は慌てて服を着替え、ドアを開けた。

「おはよう。少し話があつて」

開口一番に奈々はそう言つて、その身の中に滑り込ませた。次いで、微かに身を落とし、声を抑えて言う。

「今、記者の人が来ていて、君の話を聞きたいって言ってるの」「え?」

予想外の言葉に、優は何度か目を瞬いた。

「取材ですか? こんな時間から?」

「ええ。それで、取材よりもその記者自体に少し問題があるの。つまり、あまり信用できないタイプ。取材にかこつけて、何か探りを入れてくるかもしれない」

「どこかと繋がりがあつた記者なんですか?」

「そう。華秋院という資産家の三男なの。真偽は不確かだけど、自衛軍とも繋がりがあつるとも仄めかしてたわ。それに、本人も厄介な性質を持つてゐる。あまり関わりたくない相手だけど、事情があつて強く反発できない。あまり大事な情報は出さないように取材を受けて欲しいんだけど、できる?」

「やります。配置やスケジュールみたいな何かに利用されそうな質問に気をつければいいんですよね?」

「ええ。正直、相手が何の目的で君と話をしたいつて交渉してきたのか、よくわからない。本人は君と話す事自体が目的だ、なんて言つてる。変な方向に向かいそうなら、途中で部屋を出てもいいわ」「はい」

優が頷くと、奈々は腕時計に目を向けてから、玄関ドアを開けた。「ついてきて」

奈々が部屋から出ていく。優もその後を追つて部屋を出た後、思ひ出したように部屋に鍵を掛け、奈々の後ろに続いた。

「その記者の方つて、どんな人ですか?」

歩きながら尋ねる。奈々はちらりと振り返って、少し考えるような素振りを見せた。

「頭が切れる半面、不安定なところがある。油断できないタイプかしら」

それと、と奈々は付け加えるように言った。

「それと、オカルトマニアらしいの。だから、ESP能力自体にも興味を持っているみたい。どこまで本当か分からないけど」

「オカルトマニア、ですか」

「そう。記者という仕事も、半分は娯楽みたいなものなのかも。心霊特集とか、そういうくならない出版の企画に何度も関わってる事が確認できてるわ。ガチガチのジャーナリストとは違う」

一階のエントランスホールまで降りて寮棟とは反対の通路に少し進んだところで不意に奈々が足を止めた。前の扉には応接室というプレートがある。奈々は一瞬優に目配せした後、その扉を開けた。落ちついた色調の部屋に、ソファと立派なテーブルが置いてあり、その奥に中肉中背の若い男と、ダークスーツに身を包んだ大男が腰かけていた。

「やあ、随分と早かったですね。こんな時間に押し掛けたものだから、もうしばらくかかるかと思っていました」

中肉中背の男が立ちあがり、にこにここと友好的に話しかけてくる。若い、というのが優の抱いた第一印象だった。まだ二十代後半といった容姿で、髪は短く切りそろえられ、シャツに赤いネクタイをしている。

「この時間は本来なら中隊員に休息が与えられている。取材が長引けば、こちらで取材を中断する場合がある事を先に伝えておく」

奈々が無感動に言う。男はにこにここと笑いながら何度も頷いた。

「どれくらいの時間で抑えればいいですか？」

「こちらで適宜判断する」

「ええ。ええ。なるほど。貴女は用意周到な方だ。もちろん、良いですとも。それでは、早速……構いませんか？」

「ええ。優君。こちらが華秋院さん。これから彼とこの部屋で取材に応じてもらう事になるけど、途中で気分が悪くなったりしたらこれを押して」

奈々は牽制するようにわざとらしくそう言って、端末を優に差し出した。コール用の簡素な機械のようだった。優は黙ってそれを受け取り、ボタンを押さないよう慎重に両手で持ち直した。

「そちらのセキュリティの方には席を外してもらおう事になるけれど、構わない？」

「ええ。ええ。渡辺、席を外せ」

華秋院の言葉を受けて、ダークスーツの大男がテーブルを迂回して部屋から出ていく。

「では、私も」

奈々はそう言って、最後に優にチラリと目を向けてから部屋を出ていった。扉が閉まり、応接室に優と華秋院だけが残される。

「さて、改めて自己紹介いたしました。私、ジャーナリストの華秋院彰と申します」

華秋院はそう言って、恭しく頭を下げた。優も慌てて、頭を下げる。

「特殊戦術中隊、隊長の桜井優です」

今まで外部の者に自己紹介などした事がなかった為、華秋院を真似て簡素な所属と氏名だけを伝える。華秋院はにこりと笑って、座りましょうか、と自ら率先して席についた。優もコール用の端末をテーブルの上に置いてから腰をおろした。

「さて、こちらのレコーダを利用して構いませんか？ 後で文字起こす時に便利なのですが」

華秋院が懐からICレコーダを取り出す。優は少し迷った後、どうぞ、と頷いた。華秋院がスイッチを入れ、それをテーブルの上に置く。

「緊張されていますね。こうした取材は初めてですか？」

「いえ、これで二回目です」

「なるほど。どこかの出版社が代表でいらつしやったのですか？」

「いえ、神条司令の」

神条司令の友人の方が。そう言いかけて、途中で口を噤む。この情報は、外部に話すべきではないのではないか、という危惧を覚え、優は無難な表現に言いなおした。

「……神条司令が無所属のジャーナリストの方を連れてきて、各社から預かっていた質問などに答える形でした」

「なるほど。では、あまり取材慣れされていないようですね。ご安心ください。大したことはありませんよ。ただ、素直に質問に答え下さればいいのです」

華秋院はにこにこ笑いながら、では、と言葉を続けた。

「では、ええ、簡単なお話しから。ここでの暮らしは楽しいですか？」

優は少し考えた後、素直に頷いた。

「はい。とても」

「なるほど。では、楽しいと感じるのは相対的に？　つまり、以前の暮らしが酷かったとか」

優は一瞬、何を言われたのか理解できなかった。その意味が徐々に脳に浸透し、微かな寒気を感じる。

華秋院は自らの放った言葉が優にどういった影響を与えるかを観察するかのようになり、にこにこ笑みを浮かべたまま動かない。

「まずい、と直感的に思う。この男は相手すべきではない、と頭の奥で警鐘が鳴る。優はチラリと奈々から渡されたコール用の端末に目を向けた。中断するなら、早い方が良い。」

でも、と思う。奈々がこの男の取材に応じたのは、奈々が立場上強く反発できないからだ。取材として成立していないこの段階で中断するのはまずいかもしれない。

優は深く息を吸って、自らを落ちつかせるようにゆっくりと言葉を放った。

「よく下調べされたようですね。ですが、あまりプライベートな事

にはお答えしたくありません」

華秋院は、ええ。そうでしょうとも、と頷いて、ですが、と言葉を続けた。

「ですが、それはあなただけではいい。恥ずかしながら、特殊戦術中隊のメンバーについて、調べさせていただきました。正直なところ、驚きましたよ。特殊戦術中隊の皆様は全員、その生活環境に何らかの大きな問題を抱えていました。警察や児童相談所が動いた例も少なくない。もちろん、外部には徹底的に隠されている例も多くありましたが、実際の近隣の方に尋ねると、何らかの問題があった事がすぐにわかりました。つまり、そうした問題を抱えている子どもがESP能力者として選択的に選ばれているとは思えないのです。これは、どういうことでしょうか」

優はじつと華秋院を睨みつけた。

「何を仰りたいのか、よくわかりません」

沈黙が落ちた。狭い応接室に空調の音が響く。優は華秋院が口を開くの静かに待った。

「正直に申しましょう」

そう言つて、華秋院は僅かに身を乗り出した。

「私には、何かが起こったとは思えないのです。何らかの救いを求めていた子どもだけに何かが接触した。そして、あなたたちは力を授かった。あなたは、これを馬鹿げた考えだと思いませんか？ ですが、そこからは選択的な、人為的なものを感じざるをえません。あなたが力を得た時、何があつたのですか？」

オカルトマニア。奈々が華秋院をそう評価していた事を思い出す。あるいは、それを装っているだけか。

「きっかけはよく覚えていません。ですが、華秋院さんが考えているようなことは、何もありませんでした」

「何も？ では、ある時突然、超感覚的能力が宿つたと？」

「そうです」

その答えに、華秋院彰は明らかに落胆の様子を見せた。演技には

見えない。本当にこの男はそうした神秘的な事に興味を持っているのかもしれない。

「華秋院さんは、何か奇跡的な事があったとお考えだったんですか？」

尋ねると、華秋院は弱々しく笑った。先程、優が脅威を感じた男と同一人物とは思えないほど、顔に疲労の色が滲み出ていた。

「ええ。その通りです。だから、私は以前よりESP能力者という存在に非常に興味が　失礼な言い方ですが　ありました。では、もう一つ質問を」

「はい」

「あなたの名前は、桜井優で合っていますか？」

優はその質問の意図をよく理解できず、一呼吸置いてから口を開いた。

「はい」

「私は特殊戦術中隊だけでなく、それ以外で判明した限りのESP能力者全ての過去を洗いました。もちろん、桜井さんもです」

華秋院はそこで一旦言葉を切り、深く息を吸い込んだ。

「桜井さん。あなたの情報だけが存在しないのです。何も、です。戸籍にも載っていない。あなたの存在した過去を示す全てのデータが見えない。情報的に、あなたは生きていないと言えます。これは、こんな事は有り得ない。あなたは過去から連続的に存在した桜井優で間違いありませんか？」

「それは」

反射的に言葉が口から飛び出す。しかし、後の言葉が続かず、優は口ごもった。

その話は優も初耳だった。情報的に生きていない。華秋院の表現が、優に生理的な嫌悪感を与えた。

「それは、情報部が干渉したんだと思います」

華秋院はその答えに納得した様子ではなかったが、小さく頷いた。「それならば、確かにありえない話ではありません。過去というの

は、特にESP能力者の持つ過去というものは、それ自体が弱点となりえます」

華秋院はそう言ってから、思い出したようににこりと笑った。

「話が随分と逸れましたね。取材に戻りましょう」

優は無言で頷いた。話題を変えてくれるのはありがたかった。

「ESPエネルギーとは、一体なんでしょうか？」

優は少し考えた。科学的な意見ではなく、優の考えを聞いているのだろう。それでも、難しい質問だった。

思考がまとまる前に、自然と口から勝手に言葉が飛び出す。

「願いを叶える力です」

「願いを？」

華秋院は意外そうに尋ね返した。優も自分の口から飛び出た言葉に微かな驚きを覚えながらも、その答えについて考えを巡らせた。それは、意外にも正しく思えた。

「ESPエネルギーは僕たちの望んだことを実現します。想うだけで、それが実現されます。戦闘以外にも、使い道は無限にあります」

「では、亡霊は闘いを望んでいると？ 亡霊は戦うためだけにESPエネルギーを消費しています」

「亡霊は明らかに力を抑えています。何か、戦略的な目的を踏まえ、戦闘を引き起こしているんだと思います。戦闘自体が目的とは思えないです」

華秋院は黙って、ICレコーダが機能しているかを確認してから次の質問に移った。

「ESP能力を、ここで使うことはできますか？」

「ここで、ですか？」

思わず聞き返す。華秋院は、ええ、と頷いた。

「そうです。使って、それを私が確認することができますか？」

「……できると思います」

「使っていただけませんか？ 私の為に」

華秋院が言う。優は少し迷った後、ソファから立ち上がった。

「少し、離れていてください」

念の為に距離をとるようにお願いする。華秋院は頷いて、ソファから立ち上がった優から距離をとった。

「電気を消した方がわかりやすいかも」

そう言うと、華秋院が室内の明かりをすぐに消した。窓から差し込む光だけになり、微かに室内が暗くなる。

「いきます」

少し迷った後、一番派手であろう光翼を創りだす。両肩から光の翼が飛び出し、室内いっぱいに広がっていく。それを見た華秋院の顔が一瞬で歓喜に彩られた。

「まさしく奇跡だ……」

華秋院が小さく呟くのが聞こえる。優はそれを冷めた目で見ながら、次に両腕を胸の前で掲げ、ESPエネルギーを練り上げた。

ESPエネルギーで創られた翡翠の蝶々が現れる。一匹、二匹、三匹。それらが室内を自由に飛び始めると、華秋院は興奮したように靴からカメラを取り出し、それを撮影し始めた。

光翼が微かに羽ばたき、優の足が床から離れる。優は上から華秋院の姿を眺めながら、本物なのかな、とぼんやりと考えた。

今、何かが乗り移ったかのような演技をすれば簡単に騙せるかもしれない。そんな馬鹿げた考えが頭に浮かぶほど、華秋院は興奮しきっていた。

「命だ。信じられない。人工的な命」

室内を漂う蝶々を見て、華秋院が呟く。実際は優によってコントロールされた人形に過ぎないのだが、優はそれを指摘しようとは思わなかった。

ふと、華秋院を哀れだと思う。何がこの男をここまで盲目にしたのかは分からないが、理知的な人間が何かに縋りつく様は、見ていて哀しかった。

「ESPエネルギーは、命をも創りだせるのか。信じられない……本物だ」

蝶々を両手で包むように抱きかかえ、華秋院は恍惚とした表情を浮かべている。優は微かに迷った後、感づかれる前に蝶々を消滅させた。細かな粒子となって、空气中に霧散していく。華秋院は、あと小さく呟いた後、それを未練がましく見つめていた。

優は光翼も解いて、そのまま床に着地した。途端、華秋院が駆け寄ってくる。その顔には歡喜の色が広がっていた。

「私は、ずっと本物を探し続けてきました。あなたは、本物だ」

仕事は終わった。華秋院はその後すぐに退室した。連絡先の描かれた名刺と、ある言葉を残して。

「私は、あなたがこれから引き起こすであろう奇跡の数々を間近で見たい」

頭が切れる半面、不安定なところがある。奈々の評価は正しかった、と思う。華秋院彰という人物像が、優にはよくわからなかった。優はエントランスに出て、隅に置かれていた休憩用のテーブルに腰を下ろした。奈々は華秋院と何やら話をする為にどこかへ行ってしまった。

エントランスに飾られた門松をぼんやりと見ながら、暇をつぶす。「何やってるのぉ？」

背後から間延びした声が投げかけられる。振り返ると、両手に紙コップを持った小山千夏がいた。

「んー。ぼーっとしてた」

優が素直に答えると、なにそれえ、と笑いながら千夏は優の正面に座った。

「はい。これえ。ココア。眠そうだねえ？」

「ありがと。ちよっと、朝早かったから」

「初詣でも行ったのぉ？」

「ううん。他に仕事があって」

「うっわあ。大変だねえ。あ、そうだあ。メール見たあ？」

「メール？」

言われて、反射的に携帯を開く。メール五十七件という表示が見え、優は動きを止めた。

「あ、その様子だと見てなかったんだあ。無視されてるかと思ってたあ」

千夏がコロコロと笑う。

おそろおそろメールを開くと、差出人はバラバラで、その大半が所謂あけおめメールだった。千夏が五十七件も送ってきた訳ではない事を理解して安堵する。

適当にいくつかメールを開いていると、「今どこにいるの？」という文面が視界に飛び込んできた。差出人は長谷川京子。時刻は十分前。おそらく、朝食と一緒に食べようと思っただけで部屋を訪ねてきたのだろう。次のメールでは「先に食堂行ってるから」とあった。

「ごめん。ちよつと行くね」

「え？ え？」

優は急いで立ち上がって、それから思い出したように振り返った。

「ココア、ありがとっ！」

それだけ言い残して、食堂に向かって走る。

食堂から何人が出てくるのが見える。京子たちも既に食べ終わっているかもしれない。優が食堂に入ると同時に、奥から声が投げかけられた。

「おそーい！」

叫び声の主は京子だった。同じテーブルには華と愛と一緒にいる。

優はそのまま、そちらに向かった。

「ごめん！ ちよつとゴタゴタしてて」

「いいって。それより、食べなよ。私たち、もう半分くらい食べ終わってるし」

京子が黒い箱を優に向かって差し出す。おせち料理の入った弁当箱のようだった。辺りを見ると、全員が同じものを食べている。今

日は厨房は利用せず、どこから仕入れた弁当を配っているだけのようだった。

「……正直、あまりおいしくない」

愛がポツリと不満を言う。横の華が苦笑を浮かべた。

いつも通りの光景。

そこに、頭のどこかに華秋院彰の縋るような、偏執的な姿がちらりと浮かぶ。優はそれを振り払うように、朝食に手をつけた。

思ったよりも、まずくはなかった。

5章 12話 華秋院彰(3)

「約束です。お聞きしたい事があれば、あるいは要望があればお聞きしましょう」

桜井優が応接室から出ていった後、神奈奈々は飄々とした態度でソファに座る華秋院彰を睨みつけていた。

「約束が違う。私は返事を出していなかった」

「でも、結果的に貴女は承諾した。私、まどろっこしい事が嫌いなんですよ。何事も、早い方が良い。そうでしょう?」

華秋院彰は悪びれた様子もなくそう言っつて、ソファに深く背を預けた。

「私は今最高に機嫌が良い。文句を言うよりも、要求があれば先に出した方がいいとおもいますよ」

奈々はじつと華秋院彰を見下ろした後、机の上に置かれたICレコーダに目を向けた。

「しまえ」

華秋院彰は、ええ、と頷いた後、ICレコーダを奈々に向かって放り投げた。

「差し上げます。それで、今日の事が全てわかる。貴女とは長い付き合いになりそうだ。どうせなら良い信頼関係を築きあげましょう」

奈々は無言でICレコーダの電源を落とした後、華秋院彰を静かに見下ろした。

「中部方面隊総監は、上田中将は何を考えている?」

「そうでした。それが、約束でしたね」

華秋院彰はそう言っつて、鞆から銀色の筒を取り出した。

「これが何かわかりますか?」

奈々の顔に緊張が走る。

「……医療用ナノマシン。中部方面隊に不審な流通があることは聞いていた。横流しか?」

「違います。正規品とは別に生産拠点とルートを持っているんです」
「……読めない。影でユーラシア連合に売っているとも?」

華秋院彰がにこりと笑う。

「そういう直接的な利益がある訳ではありません」

華秋院彰は医療用ナノマシンの入った筒を丁寧に鞆にしまいこみ、
楽しそうに笑った。

「さっきの医療用ナノマシン。あれは開発中の対亡霊用の道具なんです。従来の機械翼のようにエネルギーを動力に利用したりするのではなく、これは大気中のESPエネルギーを減衰させたり拡散させる事ができる。中将は、本気で亡霊を叩き潰そうとしているようです」

「……そんな対亡霊戦略があるなら堂々と公表すればいい。筋が通っていない」

「防衛関係費の問題です。専守防衛論議の繋がりで国内総生産に対する一・二パーセントが防衛関係費の指針になっています。医療用ナノマシンは高価な技術だ。それを撃ちだす装置も規模が大きく、研究段階で多額の資金が必要になりました。通常の前算には到底収まりきらない。数年前の金融危機の影響をいまだに受けている日本で、対亡霊戦略の大規模な路線変更なんて許されるはずがない。そうでしょう?」

「だから、秘密裏に動いていると? そんな話では納得できない。隠し通せるものではないし、明るみになれば全てを失う事になる。なにより、中将が積極的に動く動機が無い。他に裏が?」

「……この世界で、最も価値があるものは何だと思えますか?」
不意に、華秋院が話題を変える。奈々は黙って、先を促した。
「家族です」

瞬間、華秋院彰の顔に歪みが走った。泣いているとも笑っているとも、怒っているとも取れる、全てが混ざったかのような色。

「家族?」

「そう。中将にはESP能力者の娘がいたんですよ」

予想外の言葉に、奈々は動揺を隠す事ができなかった。そんな事実は、知らされていない。入隊時に中隊員の周辺関係は徹底的に洗われ、特異点があれば奈々に伝わるようになっていた。ならば、と奈々は一つの答えに辿りついた。

「亡対室を参謀部が取り仕切っていた時の話か？」

亡霊対策室が設立された当初は奈々は傀儡でしかなく、その実権は参謀部が握っていた。奈々が亡対室を掌握した後、過去に死亡した中隊員について特にデータを洗い直すような事はしなかった為、空白期間が存在する。

「そうです。そして、その娘の名は」

華秋院の唇がっり上がる。

「柊沙織といました」

気分が悪い。

朝食を食べた後、優はそう言って自室に戻った。

それからの記憶がない。

気付けば、玄関で倒れていた。

身体に力が入らない。意識が朦朧とし、危機感を抱く事もなかった。頭のどこかで冷静な誰かが、これは重症だな、と言う。

優は這うように玄関ドアのノブに手を伸ばし、無理矢理ドアを開いた。それから、腕を挟みこんでドアを開いた状態に固定する。それだけの動作に信じられないほどの気力が必要だった。

ゆっくりと、廊下に這い出る。息が荒い。自分の息遣いが他人のもののように感じられた。

「桜井さん？」

頭上から、声かけられる。優は答えようとして、必死に荒い息を繰り返した。声が、出ない。

「桜井さん！ ちょっと、どうしたんですか！」

遅れて詩織の声だと理解する。続いて、足音。

「わ、私、秋山さん呼んできます！」

足音が離れていく。

優は冷たい床に身体を預け、抵抗を諦めた。何も考えたくない。

何もしたくない。

「桜井くん？」

再び誰かの声。

「ちよっと！ 大丈夫？」

「触るな！ 揺らすとやばいって！」

複数のざわめき。

うるさい、と思う。静かにしてほしかった。入力がわずらわしい。

「どうしょ。ねえ、これ、救急車？ それとも、医務室に運ぶ？」

「馬鹿。両方やれって。柚子、医務室行ってきて。私が電話する」

「わ、わかった」

また足音。振動が頭に響き、辛い。

「桜井？ 意識ある？」

耳元で声。続いて、頬を軽く叩かれる。優は抵抗するように小さく

く頭を動かした。気配が耳元から離れる。

「……もしもし。亡霊対策室の本部で人が倒れてて。え？ ぼ、う、

れ、い、です。……住所なんてわかりません。都内の端っこにある

山です……ああ、もう、防衛省かどこかに聞いてください。あ、ち

よっと

「もしもし。変わりました。本部は大岳三山にあります。救急

車だと時間かかるのでへり出してくれと助かります。いくつかへ

リポートがあるんです。倒れてる人が、あの……中尉階級を持った

人なんです。早くお願いします……意識はあるようです。でも、し

っかりしてません……はい

やりとりをぼんやりと聞いているうちに、遠くから複数の足音が

届いた。続いて、明日香の叫び声。

「どいてー！」

「秋山、早く！」

別の女性の鋭い命令。おそらく、医療チームリーダーの倉井紀子だろう。

手首を掴まれる。続いて、誰かの髪の毛が鼻元に触れた。

「誰かが何かを言う。聞き取れない。意識がふっと遠のき、くらくらする。」

最後に誰かに抱きかかえられるのがわかった。安心した為か、それで桜井優の意識は途切れた

「義理か？」

奈々は反射的にそう尋ねた。華秋院がゆっくりと首を横に振る。

「実の娘です。柊というのは母親、つまり上田中将の妻の姓で、柊沙織が生まれてからすぐに二人は離婚し、母親が親権を得ています」

奈々は柊沙織についてよく知らなかった。その事に、初めて気づいた。

「どうです。動機として充分ではありませんか？ ああ、これは本人が言っていた訳ではありませんよ。私が勝手に調べただけです。」

しかし、納得できる事情だ。若くして殉職した娘の為に亡霊の殲滅を願う父。素晴らしいではありませんか」

「……上田中将は対策室設立以前から様々な協議に関わっていた。」

しかし、柊沙織を守るような動きは見せなかった」

「ええ。でも、設立以降、上田中将は貴女を支援している。恐らく、初めは柊沙織が実の娘である事に気づいていなかったのでしょう。しかし、全てが動き出してから気づいてしまった。だから、参謀部を片づけて、貴女をトップに据えようとした。柊沙織が亡くなった直後、中将と貴女の親交はパタリと止んでいる。つまり、貴女を支援する理由がなくなったからだ。どうです？」

奈々の瞳に動揺の色が広がる。

「その数年後、亡霊の大規模侵攻がありました。中隊が半壊し、それで参謀部が消滅した。中將が積極的に働きかけた、という噂です。この頃には、ナノマシンを用いたESPエネルギーに対する干渉技術の研究が既に始まっています。権力を貴女に集中させることで、後の奪取が楽になると考えたのでしょうか。似たような構造改革が、各所で推し進められています」

「……それらは全て想像だ。多額の資金が必要ならどうやって捻出した？」

「神条さん。ねえ、もう分かっているでしょうか？ これは、中將が主導しただけで、もうそういう段階じゃないんです。亡霊を殲滅して、はい、終わりという訳じゃない。経済活動なんです。不死鳥の躍進は、我々にとって有益ではない。背広組の殆どが既に取り込まれています。中部方面隊の大部分も中將に追隨するでしょう。陸上幕僚長の姿も、見ました。S I Aはもちろん、テクノラートの多くが既に中將側です。規模が大きすぎて、掴みきれない。資金なんて何とでもなる。不死鳥が政権をとれば、かつてない抵抗が見られるでしょう。構造的な、拘束が行われるんです」

「……クーデターか？」

「近いところまではいくでしょう。ですが、規模が大きすぎる。不死鳥が死ぬまでは歩調を合わせるでしょうが、不死鳥が倒れてから具体的にどう転ぶか、私には予測が付きません」

「……万が一成功したとしても、長続きするはずがない。夢物語だ」
「私も初めはそう思いました。でも、考えてもみてください。低迷する経済に、ユーラシア連合の増長。大衆は強い国家を望んでいる。だから、不死鳥が大きな支持を集めてるんです。その不死鳥が転んだ時の反動がどれだけのものかわかりますか？ 大義の下に大衆の支持を受けて新政権を樹立し、安定してから民政に形だけ移行して、後は影から操れば良い。中將は運が良かった。少し転がしただけで、軌道にのる。そういう環境が用意されていました。強力なブレーン

もいる。成功する確率は低くない」

奈々は首を振った。

中将の率いる中部方面隊に加えて、陸上幕僚監部が動けば、他の方面隊も追隨するかもしれない。特に北部方面隊、東北方面隊の総監は陸上大将と近い仲にある。既に引きずり込んでいる可能性は高い。

残りの海自と空自が問題になるが、同調も反撃もないだろう、と奈々は思った。静観を決め込むはずだ。そもそも、背広組が内閣の中継をストップさせるだろう。無関係な部隊は身動きをとる事ができなくなる。華秋院の言う通り、自衛軍だけなら成功する可能性が高い。奈々はそう確信した。

しかし、一方で馬鹿馬鹿しい、とも思った。クーデターなど、ありえない。成功するはずがない。規模が大きくなれば、防諜にも限界が出てくる。計画段階で露見して、終わりだ。内乱罪が適用されれば極刑は避けられない。成功しても、後処理を行いながら政策を実行し、効果を得る事がどれだけ難しい事か。大衆の気は短い。速度が落ちれば、効果がすぐに出なければ政権はすぐに倒れる。あまりに無謀な計画だ。

奈々はいくらかの思考を巡らせた後、一つの結論に辿りついた。

「もう良い。それは、私の欲しい情報とは異なった。それより、総基ネットへのアクセス方法を教えてもらおうか」

一瞬、華秋院の動きが止まる。奈々の真意を測るようにじっと視線を固定した後、華秋院は微かに困惑した様子を見せた。

「総基ネット？ 亡対室からもVPNを通じてアクセスする事が可能なはずですが」

「違う。私が言っているのは本物の総基ネットのこと。華秋院なら、ルートを持っているはずだ」

華秋院の顔が強張る。

「……どこで、それを知ったのですか？」

「もう一度言う。総基ネットへのアクセス方法を教えてもらいたい。」

もしくは、指定した人物を調べてもらいたい」

華秋院は警戒するように目を細め、ゆっくりと立ち上がった。

「……総基ネットはデリケートな構造をしています。私も容易くアクセスできる訳ではない。相応の時間が必要になります」

「承知している。桜井優の両親について知りたい」

「桜井優？ ああ、それなら既に調べた事があります。彼のデータは入ってませんよ。どこかが干渉したようでした」

今度は奈々の顔が強張った。

「総基ネットは多重構造になっていると聞いた。公安やSIAが表の総基ネットと照合する為に創られたと。そちらの総基ネットは干渉が不可能な筈だ」

「ええ。私もよくわからない。向こうの総基ネットが弄られたという話なんて聞いた事がありませんでした。どうやって消したのか、見当もつかない。あるいは、始めからデータがなかったのかもしれない」

奈々の背筋を得体の知れない悪寒が走った。

亡霊。真っ先に、その可能性に思い当たる。

不可能を可能にする存在。亡霊なら、できるだろう。以前に対策室のシステムを落としたように、いとも容易く。

もし、亡霊が既に総基ネットに干渉しているなら、行政システムに深刻なダメージを受けることもありうる。

「まあ、総基ネットに誰がどうやって細工したのかは良くわかりませんが、これはどう考えても桜井優を守る為の動きです。害意は感じられない。大した問題ではないでしょう」

華秋院が特に気にした風もなく言う。奈々は、ええ……、と適当に相づちを打った。

「他に何か」

華秋院が口を開いた時、廊下からけたたましいサイレンが轟いた。反射的に扉の方に目を向ける。

「亡霊ですか」

華秋院の弾んだ声。奈々は舌打ちしたくなるのを堪えて、華秋院を睨み付けた。

「ここで待っている。別の者に送らせる」

「さすがに観戦は無理ですか。残念です。ええ、御武運を祈ります」

華秋院が言い終わる前に奈々は駆け出し、応接室を飛び出した。嫌な予感がした。

5章 13話 篠原華（9）

規則的に響く小さな振動で桜井優は目を覚ました。

頭が冷やりとして気持ち良い。額に何かが乗っているようだった。目を開ける。こちらを覗きこむ明日香の顔が見えた。

「気がついた？」

「はい」

反射的に答えると、喉から掠れた声が出た。

「ここは……」

不安に駆られ、起き上がるうとしたところで明日香に制止される。

「機動ヘリの中よ。病院に着くまで安静にしていなさい」

言われた通り、大人しく横になる。

頭の中に霧がかかったようで、思考がうまくまとまらない。酷く疲れていた。目を瞑り、床から伝わる振動にじっと耐える。

「気分はどう？」

「最悪です」

率直に答えると、クスリと笑う気配が伝わってきた。

「意外と大丈夫そうね」

「はい。ご心配をおかけして、申し訳ありません」

そう答えた時、全身が寒気に包まれた。

全ての音が遠のいていく。

無音。

遙か遠くで、何かが飛び立ったのが分かった。

「亡霊……っ！」

遠のいていた聴覚が元に戻る。

優は反射的に上半身を起こした。

「優君？」

明日香の驚いた声。優はそれを無視して、後ろを振り返った。亡霊の存在がはっきりと感じられる。飛び立った数は少ない。し

かし、嫌な予感がした。

「亡霊が出ました。数は二十七。白流島内にも大勢。援軍が来るかもしれません」

明日香の顔に戸惑いの色が広がる。

「本当です。本部に連絡をとって確認してください」

明日香は一瞬迷った素振りを見せた後、腕時計に目を向けた。

「十一時三十七分。二十七体の亡霊。援軍の可能性有り。記録したから、今は休んでなさい。連絡は君を送ってからやっておくから」

「……はい」

頭がクラクラする。

優は頭を抑えて、再び横になった。そこで初めて、熱があることに気づく。身体が熱い。

「無理はしないように」

明日香が釘をさすように言う。優は力なく頷く事しかできなかった。

「司令、配置の変更を進言します」

奈々が司令室に入った途端、副司令官である長井加奈は切迫した様子でそう言い放った。司令席に向かいながら、何故、と簡潔に尋ねる。

「優くんが倒れました。発見した第一小隊全体に動揺が走っています。戦闘に支障が出るかもしれません。第一小隊への出撃命令を保留し、予定されていた第三小隊のみに出撃命令を送りました。亡霊数は二十六体、いずれも反応は大きくありません。いかがされますか？」

思わぬ言葉に奈々は足を止め、加奈の方に目を向けた。

「優くんが？」

「いかがされますか？」

加奈が窘めるように繰り返す。奈々は僅かに視線を泳がせてから、諦めたように答えた。

「第四小隊の第二分隊までを追加投入しなさい」

「了解いたしました」

加奈がコンソールに駆け寄り、第四小隊へ伝達を開始する。奈々はそれをチラリと見やっってから司令席につき、第三小隊の準備状況を確認した。

「詩織、準備はどれくらいかかる？」

「後三十秒ください」

「準備が完了次第、出撃を。第四小隊の一部を追加投入する予定だけど、それを待つ必要はないわ」

「わかりました」

コンソールを操作し、ディスプレイを切り替える。機動ヘリが飛び立つ映像。遅延が見られない事を確認し、再びコンソールを叩いて亡霊の確認に移る。

「敵勢力、二十六。このまま直進すれば、長崎に。第三小隊との衝突予測地点は約六十キロメートル離れた洋上」

脅威ではない、と判断する。奈々はいつも通り、敵勢力以上の戦力をぶつけ、事態の鎮圧にのりだした。

その行動は、奈々の経験から導き出された妥当なものだった。

ESPエネルギーによって創りだされる大気中の異常。そして、異常現象の中から抽出された波形による亡霊の分別。それらの過程を経て、司令室の計器は確かに二十六の亡霊を検出し、その動きをマップ上に映し出している。

計算機はミスを起こさない。事前に与えられた処理を実行し、それを出力する。そして、二十六体の亡霊は確かに存在した。

ただ、奈々はその検出条件というものを失念していたし、計算機が個体数を導出する過程というものを理解していなかった。

何を持って二十六とするのか。人間が事前に条件を与えていなければ、司令室の機械はこう答えていただろう。

『測定不可能』

奈々が異常に気付いたのは、二十六体の亡霊が観測されてから二時間後の事だった。

亡霊群の殲滅が完了した後、司令室をサイレンの音が支配したのだ。

初めは計器の故障だと全員が考えた。しかし、マップ上に亡霊群の姿がはつきりと映ったことにより、電子オペレーターたちは不安そうに顔を合わせる事となった。

神奈奈々は帰路についていた第三小隊と第四小隊を呼び戻し、再投入をする事を決定した。検出された亡霊の数は十八。疲弊した二個小隊でも十分に対応する事が可能だと思われた。

奈々のその判断は、間違っていないかった。第三小隊と第四小隊は少数の負傷者と引き換えに、十八体の亡霊を殲滅することに成功した。そしてその直後、再び司令室にサイレンの音が満ちた。司令室に嫌な空気が流れ始める。

「……加奈。仮眠をとっておきなさい」

加奈は強張った顔で小さく頷き、すぐに司令室を出ていった。

それを確認してから奈々は第三小隊と第四小隊に帰投を命じ、第五小隊と第六小隊に出撃命令を与える。

額を嫌な汗が伝った。

判断は間違っていないはずだ。しかし、正解でもないだろう。

奈々は振り返り、電子オペレーター達に向かって声を張り上げた。

「実行部隊の再編成を行う。手が空いている者はこちらへ」

廊下中に響くサイレンに、篠原華を不安そうに天井を見上げた。

「今日、三回目じゃない？」

後ろから京子の声。驚いて振り返ると、腕組みした京子と目が合

った。昼食は京子と時間をずらしてとった為、こんな所で出会うとは思っていなかった。

「うん。どうしたのかな」

「どうしたのって、亡霊がこういう変な動き見せる時って桜井目当てな時だけでしょ」

突き放すような口調。華は目を伏せて、そうだね、と相槌を打った。

「聞いた？ 桜井、倒れたって」

「うん……」

サイレンが止む。二人の間に沈黙が落ちた。

ギクシャクした空気。出来れば、会いたくなかった。

華はチラリと京子の様子をうかがった。怒っている。

理由はわかっていた。ここ数日、故意的に避けていたからだろう。

京子が優の部屋に泊っているところに鉢合わせしてしまった時から、京子と会うのが嫌だった。

怒りはない。ただ、裏切られたような喪失感だけがあった。暫く顔を見たくなかった。

部屋戻るから、と言葉を残して華は逃げるように京子に背を向けた。直後、背後から言葉が投げかけられる。

「ねえ」

京子の苛立った声。華は反射的に足を止めた。

「いつまで他人の顔色うかがってんの？」

「え？」

「何か言いたい事あるなら、言ったら？」

華は困惑した表情を浮かべ、おずおずと京子に目を向けた。

「な、なにが？」

「私のこと、避けてるでしょ」

「そんなこと」

「はつきり言えば？」

否定しようとした矢先、京子の鋭い言葉がそれを遮った。華は一

度口を噤んでから、そんなことないよ、と小さく繰り返した。

「私が桜井の部屋に泊ってから、変に距離とってるよね。そんなに悔しかったの？」

華は唇を噛んで、目を伏せた。

沈黙。

コツリ、と京子が足を進め、近づいてくる。華は身を強張らせた。

「ごめんね」

不意に、京子が咳くように言う。

「え？」

「ちよつと、焦つてて。なんか、自分でも意味わかんない」

聞き間違いかと思うほど弱々しい声。華は京子の真意を測りかねて、じつとその瞳を見つめた。

「ほんと、ごめん。戦闘始まる前に、謝るところと思って」

「え、あ……」

「なんか、またやばそうな感じだし、ね」

決まりが悪そうに京子が付け加える。それで、京子の考えている事がよくわかった。そして、途端に自分がひどく子どものように思えてくる。

華は、うん……、と相槌を打つ事しかできなかった。

「ねえ、談話室行かない？」

「え？」

「ちよつと、話したい事があって」

「うん……いいよ」

「じゃあ、行こっか」

そう言つて、京子が華の横を通り過ぎて歩き出す。華はその斜め後ろを歩くように後を追った。

無言のまま談話室につく。中には誰もいなかった。京子が手持ちの電子カードを自販機に向かってかざして、缶コーヒーを二つ選ぶ。出てきた缶の一つを華は受け取つて、京子に促されるままにベンチに腰をおろした。一拍おいて、京子がその隣に座る。

「ねえ、華は、桜井のこと好きなの？」

何の前触れもなく、京子が言う。華はチラリと京子を見やっ
て、缶のプルタブを開けた。

「……好き、だよ」

「私も」

間髪置かず、京子が言葉を重ねる。華は何と言えば良いのか分
らず、黙って話の続きを促した。

「……私達だけじゃなくて、他にも、桜井のこと好きな人いるよ
ね。多分、愛とか詩織ちゃんとか」

「……うん。それくらい、わかってるよ」

「華は、勝てる自信ある？」

その質問に、華は答えられなかった。

その沈黙から何かを汲み取ったのか、京子は小さく頷いて言葉
を続ける。

「例え勝てたとしてもそれがゴールじゃないよね。周りにこれだけ
女の子いるんだから、すぐにとられるかも」

華は唇を噛んだ。言われなくても、わかっている。何度も考えた
こと。

「私、絶対にとられたくない」

驚くほど低い声で京子が言う。華は驚いて顔をあげた。声とは裏
腹に、京子は今にも泣き出しそうな顔をしていた。

「私達を本当に理解できるのって、桜井だけだよ。少なくとも、
私は代わりなんて考えられない。それを取られるなんて、絶対我慢
できない」

京子の言う事が、華にはよく理解できた。中隊に入隊してから、
異性に興味を持つ事がなくなっていた。街で見かける同世代の異性
がまるで別世界の人のようにしか感じられなくなっていた。

「でも、私が本当に勝てる確率なんてすごい低くてさ。もう、無
理じゃん」

諦めたように京子が顔を伏せる。

「考えてるうちに焦って。なんか、きつついなって。華は、たまに不安になったりしない？ 誰かがいきなり告ってさ、それで取られるかも、とか」

「……なるよ」

「だよ。ねえ、華はどうしたい？ 付き合いたい？ 私、別に今のままでも良いんだよ。ただ、人に完全にとられるのが無理。そういうの、本当に、きつい」

「……私も、別に今のままでいいよ。でも、やっぱり、桜井くんが他の人と仲良くしてるのを見ると……嫌だよ」

「うん。今、楽しいし、一緒にいられるなら付き合えなくても良いや、って感じ。でも、いつまでもそういうのが出来ないって分かってるし、ね」

沈黙が落ちる。華は両手で持った缶コーヒーに口をつけた。微かに苦い味が口腔に広がっていく。

「……ねえ、一緒に告白しない？」

不意に、京子が言う。思いがけない言葉に華はじっと京子を見やうた。

「一緒に？」

「そう。文字通り、一緒に。どっちかを選ぶとかじゃくて、両方と、その、付き合ってもらおうかなって」

華の頭にある単語が浮かぶ。

「二股？」

「……そういうのじゃなくて、何て言うか、グループ交際？」

華は思わず眉を寄せた。

「だって、そんなの、おかしいよ。その、寝る時とかどうするの？」

「……順番に、とか。おかしいって言っても、何年も二股してる男とかいっぱいいるじゃん。奥さんと浮気相手が承知の上とかさ」

「他に中東の一夫多妻とか？ でも、そんなの……。ここ、日本だよ。結婚は一人しかできないんだよ？」

「結婚って言ったって、書面上の話じゃん。そんなのなくても、ほ

ら、認知もできるし。そういう形式がそんなに大事？」

「だって、やっぱり、おかしいよ」

「じゃあ、華はどうするの？ 誰かに取られるの黙って見てるの？」

「……そういうわけじゃないけど……」

「もし、成功したら、今の関係崩さないままで、たまに、その、甘えたりもできるしさ。そりゃ、独り占めとかは無理だけど」

「そうだけど……抵抗あるよ。普通じゃないもん」

華は目を逸らして、そう言った。

「じゃあさ、普通ってなに？」

「え？」

京子の声が一段と低くなる。

「結婚は男と女一人ずつしか許しません。誠実に付き合うのが常識です。それが幸せです。そんなの、普通の人の話でしょ。男女の割合がバランスとれてるから、そんな事が言えるんだよ。私達、普通じゃないじゃん。一人が付き合ったら、他どうすんの。じゃあ他探しましよって訳にはいかないんだよ？ この状況で、普通の話を持ちそうだとする方がよっぽどおかしいって。全然現実的じゃないじゃん」

「でも……」

「華がやらないなら、いいよ。私、愛にも同じ話する予定だから」とどめの一言。

脳裏に、一つの映像が浮かぶ。優と京子、愛の三人が楽しそうに喋り、それを遠くから見ている自分。

華はぎゅっと目を瞑り、その嫌な想像追い払うように首を振った。

「わかった。やる」

京子はうれしそうに、本当に？ と聞き返してくる。華は、はっきりと頷いた。

「うん。とられたくないから」

「良かった……」

心底安心したように京子は姿勢を崩し、手に持っていた缶コーヒ

―を開けた。それに釣られて、華も残ったコーヒーを口に含んだ。灰かに甘い味がした。

「ねえ、愛も誘うんだよね？」

「そのつもり。ってか、そうしないと意味ないし」

「そっか……うまくいったら、今のままでいられるね」

「今よりも、ちょっと前進かな」

「うん」

二人してにこりと笑いあった時、今日四度目のサイレンが響いた。けたたましい不快な音が鼓膜をつんざく。コーヒーの香りに混じって、灰かな死の香りがした。

5章 14話 それが呪いにしかならないなら

神条奈々は五度目のサイレンが鳴った時、亡霊の波状攻撃が長期に渡ると予測して二つの大きな対策を立てた。

一つは、隊の再編成である。各分隊間の戦力差が激しかった為、新たに三十六の飛行隊を創設し、波状攻撃が行われている間はこの単位を持って中隊を運用する事を決定した。

二つ目は、一時的な戦術の見直しである。波状攻撃が行われている間は、残りの亡霊が一体になった時点で攻撃を中止し、一定時間引きつけるといったものだった。

細かく分けられた飛行隊によって迎撃に必要な最低限の人数だけを送り出し、戦闘を長引かせている間に他の飛行隊が休息をとる。至極シンプルな考え方だったが、隊の再編には多大な時間を必要とした。協議の結果、元の分隊を基にした細かな戦力調整を行う事で不要な混乱を防ぐ方針となった。

二つの方針を発表し、新たに編成された隊を送りだした後、加奈が奇妙な事を言いだした。

「司令、秋山医務医から少し気になる報告があります」

「明日香から？」

「はい。優君を機動ヘリで搬送中、亡霊の出現を言い当てたそうです。それで、優君が言うには亡霊の個体数は二十七。他に、白流島の中に多数と」

桜井優は以前にも、イーグルやホムンクルスの出現を察知している。奈々は少し考えた後、加奈に目を向けた。

「優君は今どうしてる？」

「検査中です。高熱が出ているようで、彼の戦線復帰は遅くなりそうです」

「……彼は、白流島の中の亡霊も”視る”事ができるのかしら？」

「どうやら、そのようです。この波状攻撃がどのくらい続くか、見

当をつける事も可能かもしれませんが」

「……回復すれば、こちらに呼び戻しましょう」

加奈が何か言いたそうな素振りを見せる。それを見て、奈々は言葉を重ねた。

「戦える必要はない。彼の感知能力は、役に立つ」

それだけ言って、奈々は画面上に映る少女たちに目を向けた。衝突予測地点が近い。

「各員、武装確認………姿勢制御。構え」

結論から言えば、奈々の対応は間違っていないかった。

亡霊の波状攻撃を二十六回に渡り防ぐ事に成功し、三日と半日に渡って一人の死者も出さなかった。

しかし、どれだけ優れた指揮官であっても、圧倒的な兵力の差を覆す事は難しい。そもそも、兵力差が出ないように準備を進め、不利な闘いを避けるのが指揮官の務めなのだ。奈々の対応が間違っていないくとも、中隊の疲弊は抑えようがない。

三時間から四時間間隔で響き続けるサイレン。度重なる出撃に、長時間の飛行。中隊員の顔色には、はつきりと疲労の色が広がり始めている。

二十七回目のサイレンが鳴る。神条奈々は僅かに疲れた様子でマップ上に表示された亡霊群を睨みつけた。

「司令、交代の時間です」

背後から加奈の声。

奈々は司令席から立ち上がって、加奈に何も変化がなかった事を伝えた後、司令室を後にした。そして、休息をとるために自室へ向かおうとした時、前方に白亜の髪が舞った。

「こんばんは。ご機嫌いかがですか？」

第二小隊長、姫野雪がにこやかな笑みを浮かべて、前に立ちほだかる。奈々は赤い瞳をじっと見つめて、何か提案や報告？ と簡素に尋ねた。

「ええ。この亡霊の波状攻撃は中隊そのものへの攻撃ではなく、中隊を疲弊させ、桜井優を引きずりだす事が目的と考えられます。桜井優の投入を進言いたします」

「根拠はない」

「ばつさりと切り捨てる。しかし、雪は涼しそうな顔色を変えず、言葉を続けた。

「桜井さんは、この状況に胸を痛めるでしょう。彼には自罰的などころがあります。もし、このまま無意味な消耗戦を続けて死者が出れば、彼はもう立ち直れないかもしれません」

その言葉に、奈々は息を止めた。

「中隊が疲弊しきる前であれば、彼に他の全戦力を預ける事もできるのです。余裕がなくなつた後では、彼一人を送り出す事になります。是非、ご一考ください」

雪はそれだけ言うと、小さく頭を下げ、白亜の髪を翻した。

残された奈々は小さく首を振って、そのまま自室に向かった。休みたかった。

終わりが見えない。

亡霊の波状攻撃が始まってから六日間が経過し、亡霊との戦闘は既に五十回を超えていた。桜井優の意識も失われたままだった。

この頃になると、中隊の限界が目に見えて明らかになってきた。

心身の疲れだけが原因ではない。ESPエネルギーの残量が問題になり始めていたのだ。

ESPエネルギーは無限ではない。使えば使う程、その回復に時間が必要となる。中隊員のESPエネルギー消費量が回復量を上回っていた為、このまま消耗戦を続ければ後五日でESPエネルギーが枯渇する中隊員が現れることが早くに予測された。

奈々は少しでも消費量を抑える為、陸上での戦闘を検討し始めなければならなかった。機械翼のESPエネルギー消費量は少くない。陸上戦に切り替える事によって、ESPエネルギー消費量は格

段に抑えられるはずだった。

しかし、亡霊を本土まで引き寄せるには、相応のリスクが伴う。中隊全体の機動力が低下するのはもちろん、避難地域を大幅に拡大する必要が出てくるのだ。いつものように戦闘が数時間で終わる時ならまだしも、いつまで波状攻撃が続くか分からない状況で陸上戦に切り替えれば、国内に様々な混乱を引き起こしてしまう危険性もある。簡単な話ではない。

桜井優の投入を進言いたします

脳裏に姫野雪の涼しい顔が浮かぶ。

奈々は小さく首を振った。不可能だ。桜井優の意識レベルが大幅に低下した状態という報告を二日前に受けている。投入など、できるはずがない。

そう考えた時、司令室の扉が開き、明日香が駆け寄ってきた。

「優君が目を覚ましたって連絡が。随分と体力が落ちてるけど、意識レベルは問題ないレベルまで回復しきったみたい。予定通り、こちらに呼び戻す?」

奈々は少し考えた後、明日香の質問には答えずに別の質問を重ねた。

「検査の結果は?」

「どこにも異常は見られなかった。もう少し様子を見たいところだけど、彼の探知能力が必要なら、そちらを気にする必要はないと思う。」

「あなた個人的には病院で安静にしている方が良いと思う?」

「原因が分からないんじゃないじゃ、病院にいたって何も手が打てない。点滴だけなら、この設備でもできる。無理をさせなければ、こちらに運んでも何も問題はないでしょう。」

「……わかった。なら、こちらに呼び寄せて。」

明日香が頷いて、背を向ける。奈々は思い出したように、その後ろ姿に向かって声を張り上げた。

「もちろん、優君の意思は無視しないように!」

明日香が意外そうな表情で振り返る。ええ、と明日香は優しい笑みを浮かべて、部屋を出ていった。

桜井優は朦朧とした意識の中で、亡霊が何度も白流島から飛び立つのを感じ取っていた。

そして、数えきれないほどの亡霊が死んでいく。

仲間の屍を越えて、執拗に波状攻撃を繰り返す亡霊。その様子に、優は奇妙な哀愁を覚えた。

病室のベッドで上半身を起こし、フラフラと立ち上がる。眩暈が激しく、視界が霞んで見えた。立ち上がった拍子に手首から何かが抜け落ちたのが分かったが、優はそれを無視して窓際に近づいた。

ぼんやりとした夜空の向こう。何百キロメートルも離れた孤島。そこで、何かか叫び声をあげたのが鮮明に視えた。

「呼んでる……？」

不意に、そんな気がした。

窓を開ける。冷たい風で優の髪がふわりと舞った。

窓によりかかり、じっと白流島がある方向を見つめる。突然、視界に光が走った。

立ち昇る霧。数多の影。古びた社。それらの映像が視界を走り抜けた後、再び咆哮が響く。

そこで優は強い眩暈を覚え、その場に崩れ落ちた。

意識が朦朧とする。荒い息を繰り返しながら、目を瞑って意識を集中した。

背中から光翼が広がる。

自身の身体よりも、ESPエネルギーを操る事の方が遙かに楽だった。光翼の力を使って、自らの身体を支える。自らの足を使わなければ、移動に支障はなさそうだった。

熱っぽい額を押さえながら、光翼を羽ばたかせてゆっくりと扉に

向かう。両手に力が入らず、横開きの扉を開けるのに少してこずりながら、優は廊下に出た。

「どうなさいました」

途端、扉の外に立っていた大男、保安部の中村が厳しい表情を浮かべて駆け寄ってくる。

「ここは亡対室ではありません。ESP能力の使用はお控えください」

素直に光翼を霧散させる。着地がおぼつかず、ふらついたところを中村に支えられる形になった。

中村に抱えられたまま、ベッドの上に戻される。

「すぐに係の者を呼んでまいります」

中村がそう言って、部屋を出ていく。残された優はベッドの上で丸まって、楽な姿勢をとった。

段々と意識がはつきりとしてくる。仰向けになって、優は両手を天井に向かって上げた。そして、指先にESPエネルギーを送り込む。一匹の蝶々が指先から現れ、部屋を舞い始めた。ESP能力の問題は見られない。新たにESPエネルギーを練り、次々と撃ち出す。部屋の中を蝶々が覆い付くようにして、加速度的に増えていく。大丈夫。そう確信した直後、廊下から複数の足音が聞こえた。慌てて全てのESPエネルギーを霧散させる。その直後、部屋の扉が開き、白衣を着た男と看護師が中に入ってきた。

「気分はどうだね？」

白衣の男がにこりと愛想の良い笑みを浮かべ、優と目線を合わせるように屈みこむ。優は、大分よくなりました、と素直に答えた。

「本部の方から、あー、つまり、亡霊対策室という意味だが、あちらから君を渡して欲しいという連絡があった。私としてはもう少し様子を見るべきだと思うのだが、君はどうしたい？」

「戻ります」

即答する。白衣の男は警戒するように目を細めた。

「無理をする必要はないよ。何なら、君の状態を実際より酷く伝え

ておくこともできる。君はもうたくさん頑張った。休んでも、誰も文句は言わないだろう」

「お氣遣いに感謝します。でも、本当に大丈夫です」
にこりと笑う。それを見た白衣の男は酷く悲しそうな表情を浮かべた。

何か、勘違いされているのかもしれない。そんな気がしたが、優はそれを無視して立ち上がった。微かにふわふわとした浮遊感を覚えたが、目を覚ました当初よりも格段に状態が良くなっているようだった。

「大丈夫ですか？」

中村に横から体を支えられる。

「大丈夫です」

「では、こちらへ。屋上にヘリを用意しています」

中村に誘導される形で、白衣の男の前を通る際に優は小さく頭を下げた。白衣の男が何か言いたそうな顔をする。優はそれを遮るように、にこりと笑いかけた。

「お世話になりました」

それから、廊下に出る。思ったよりも気分が良く、優は中村の手をそつと押して自分の足で廊下を歩いた。

薄暗い階段をのぼり、屋上に出る。扉を開けた途端に強い風が吹き、優は思わず身を丸めた。

「大丈夫ですか？」

中村がそう言つて、脱いだ上着を優の肩からそつとかける。

「あ、ありがとうございます」

優は微かに驚いたように中村を見た後、バツが悪そうにお礼を言つて、十メートル先で待機しているヘリに向かう。操縦席と後部に四人の人影が見えた。パイロットと医療関係者だろう。

中村に支えられながら、ヘリに乗り込む。その時、遠くで再び亡霊が飛び立つのがわかった。捨て駒になつた亡霊が。

本部に降り立つと、ちょうど帰投してきた集団が夜空の向こうに見えた。チラリとその光景を見てから、エントランスをくぐる。何故か、懐かしい感じがした。

中村に先導されて、司令室に向かう。途中で何人かの中隊員とすれ違つと、全員が疲れた表情を浮かべながら、体調を気遣う言葉をかけてくれた。

司令室に辿りつき、扉をくぐる。奥の司令席にいた奈々が振り返り、先程すれ違つた中隊員と同じように疲れた笑みを浮かべ、立ち上がった。

「こつちに来て」

言われた通り、電子オペレーター達の間を縫って奈々の下まで進む。いつの間にか、中村の姿は見えなくなっていた。

「体調は大丈夫？」

「はい。少しフラフラしますが、ESP能力の使用には問題ありません」

「……あのね、出撃をさせる為に君を呼び戻したんじゃないの」

その言葉に、優は不思議そうな表情を浮かべた。

「今、ここから亡霊を感知することはできる？」

「できます。二十八体の亡霊がいます」

奈々は微かに目を細め、頷いた。

「大体合ってる。正確には二十七。白流島の亡霊を感知することは？」

「……できます。大勢。多すぎて、数えられません」

「これから、白流島の様子をモニタリングすることはできる？ 亡霊残存戦力の推移を大雑把にでも良いから掴みたいの」

その言葉で、何故本部に呼び戻されたのかをようやく理解する。

「やってみます」

頷くと、奈々はにこりと笑って、司令席の隣にある副司令席を指差した。

「さ、座って」

「……あの、僕が座っても……？」

周りを見渡しながら、小声で尋ねる。奈々は特に気にした風もなく、ええ、と軽く流して司令席に腰を下ろした。それを見て、優もおずおずと普段は加奈が座っているであろう席につく。前方にいくつかのボタンやランプが並び、優はそれらに触らないように両手を膝の上においた。

「衝突予測地点まで後十分」

奈々がヘッドセットに向かって事務的に告げるのを聞きながら、キヨロキヨロと辺りを見渡す。コンソールの奥にはモニタがあり、機動ヘリから送られてくる映像が映っていた。暗闇に包まれた洋上を三十ほどの発光体が編隊を組んで進んでいる。顔が確認できない為、誰が誰なのかよくわからない。ただ、先頭を飛んでいる発光体だけが僅かに色が違う為、それが佐藤詩織であることが辛うじてわかった。

視線を中継映像の隣に映るマップに移す。二十七の反応が中隊に向かって進行しているところだった。二次元的な陣は密集陣形をとっている。立体的な陣容はマップだけでは分らないが、恐らく立方体のような形をとっているのだろう、と予測できる。

「衝突予測地点まで後五分。各自、兵装チェック」

隣から奈々の淡々とした声。それに合わせて、中継映像の向こうで中隊員が次々と姿勢制御に移り、小銃の確認を始めるのがわかった。

「敵陣形、方陣。いずれも反応は大きくない。隊形移動、鶴翼」

中隊と亡霊の距離がぐんぐんと縮まっていく。

「構え。こちらから進む必要はない。充分引きつけたところで攻撃合図を出す」

後方で電子オペレーターがカウントを始める。

「五〇〇……四〇〇……三〇〇」

「まだ。もう少し」

「二〇〇……」

「撃て！」

中継映像が白く染まる。奈々のヘッドセットから重低音が聞こえた。ESPレーダーに中隊から放たれたESPエネルギーが映し出され、それが亡霊群を呑みこんでいくのが見える。

「第二射用意！ 構え！」

閃光の中から亡霊群が飛び出してくる映像。後方でオペレーターが叫ぶ。

「距離六〇！」

「撃て！」

再び発光。直後、マップ上から複数の反応が消える。

「単純後退！」

中隊が散発的な攻撃を行いながら後退を始める。夜空に閃光が走り、暗闇を切り裂いていく。

「距離三〇！」

「銃剣、構え！」

隊形が崩れ、乱戦に突入する。

その時点で、中隊の勝利が決定した。鶴翼の形をとっている中隊は両翼が大きく左右に広がり、前方に突き出ている。乱戦になれば亡霊群の接敵面積は広大になり、逆に中隊員の接敵面積は縮小する。死角の大きさに無視できないほどの差が生じるのである。

瞬く間に亡霊の隊形が崩壊していく。優は興味を失って、ESPエネルギーの動きに意識を集中した。

周囲の音が離れていく。微かな眩暈。白流島が見える。そして、交戦中の亡霊の存在が確かに感じられた。そこから更に意識を白流島に集中し、中の亡霊の動きを探る。

それは、虫のように蠢いていた。数えきれないほどの反応が、白流島の崖に沿うように並んでいる。そのうちの一体が、こちらに気付いたような拳動を見せる。優は反射的に意識を離し、両目を開けた。全ての音が近づいてくるような錯覚と眩暈。優は軽く首を振って、前方のモニタに目を移した。

戦闘は既に終わりを迎えかけていた。バラバラに散った亡霊を中隊員たちが各個撃破していく。

「……亡霊の殲滅を確認。これより帰投」
マップ上から反応が全ての反応が消え、奈々がヘッドセットに向かって帰投を告げようとした瞬間、全身の毛がぞわりと逆立つような寒気に襲われた。直後、司令室にサイレンが響く。

「また……」
サイレンに混じって奈々の咳きが聞こえる。優は咄嗟にマップに目を移した。新たな亡霊が白流島から確かに飛び立っているらしい。その数、三十一。

「優君、白流島の亡霊の数に変化は？」
尋ねられ、急いで意識を集中する。

「……数が多すぎて、三十くらいの亡霊が飛び立っただけだと変化がわからないです。全体の数は、多分、千を……」
奈々は特に落胆した様子を見せず、一度だけ頷いて再びヘッドセットに向かって声をあげた。

「次の飛行隊を投入する。予定通り、帰投を」
攻撃が終わる様子は、未だ見えない。

桜井優はそのまま二回の戦闘を見守る事になったが、白流島の亡霊の数に大きな変化を感じ取る事はできなかった。それだけ、分母が多いということなのだろう。引き続きモニタリングを続けようとしたが、途中で司令室に入ってきた長井加奈が奈々に交代を告げ、その間優も休息をとるように促された。

奈々と一緒に司令室を出る。奈々は一言も喋らなかった。疲れているのだろう。そう思って、優も何も話さなかった。

「あの、それじゃあ、おやすみなさい」
それだけ言って、部屋に戻ろうとする。しかし、背後から奈々の制止の声が響いた。

「待って」

振り返ると、疲れた笑みを浮かべた奈々と目が合った。

「一緒にいてくれない？」

優は微かに驚いた様子を見せた後、何も言わず頷いた。奈々が無言で背中を見せ、歩きはじめる。優はその後追った。

誘導されるままに奈々の部屋に入る。奈々は一直線にキッチンに向かった。

「シャワー、先に入ってきて。その間に、簡単なもの作っておくから」

「わかりました」

言われた通り、浴室に向かう。

熱いシャワーを浴びると、幾分か気分が良くなった。ただ、同時に微かな眩暈を覚える。やはり、体調は回復しきっていないようだった。

髪を洗い終わり、シャワーを止めて浴室から出る。奈々が用意してくれたタオルで水気を落とし、もう一度同じ服を着て優は脱衣所から出た。

「向こうに食事用意したから、ちゃんと食べてね」

奈々がそう言い残して、入れ替わるように浴室に入っていく。優は頷いて、奈々が用意した食事に向かった。

食欲が湧かない。それでも、優は食事を無理矢理お腹の中に詰め込んだ。先は長い。食事を抜く訳にはいかなかった。

殆ど機械的に食事を終え、食器を洗いに席を立つ。キッチンには奈々が使ったであろう食器が水に浸けられていた。一緒に洗って、適当なところに置いておく。

時間が余り、優はテレビの電源をつけた。そして、チャンネルを順番に回していく。どこの放送局も亡霊の波状攻撃に関する情報は大きく取り扱っていないかった。ただ、分割された画面に亡霊の進行ルートと警戒区域が映し出されているだけ。普段通りの措置だ。国は亡霊の波状攻撃を重く受け止めていないのだろうか。それとも、優が眠っている間に何らかの放送が行われたのか、混乱を防ぐため

に抑えられているのか。事情はよくわからないが、現段階では亡霊の侵攻を大事として扱いたくないようだった。

テレビの電源を落とす。そこで、再び眩暈を覚え、優はその場に蹲った。

ぐるぐると世界が回る。額を抑えた腕が小さく痙攣した。全身から嫌な汗が吹き出る。

暫くそのまま蹲っていると、次第に眩暈が収まり始めた。安堵の息について、深く息をつく。

優は先程まで痙攣していた腕を見つめ、優は諦めたような笑みを浮かべた。

この体の異常は、恐らく治るものではないのだろう。ただ、悪化していくだけ。

悲しみはない。以前から、そんな予感がしていた。ただ、諦めのようなものだけが心の中に募っていた。これが、奇跡の代償なのだろうか。

浴室の扉が開く音。優は腕を軽く撫でながら、奈々が出てくるのを待った。

「待たせてごめんなさい」

脱衣所から奈々が顔を出す。

「髪、乾かすからもうちょっと待っててね」

「はい」

脱衣所からドライヤーの音。優は目を瞑って、じっとその音に耳を傾けた。

心地が良い。自然と眠気に襲われる。

「優君？」

声をかけられ、優は顔をあげた。いつの間にかドライヤーの音は止んでいて、こちらを覗きこむ奈々が目の前にいた。

「うつうつとしました」

「疲れてる？ 早く寝ましよう」

そう言っつて、奈々が手を差し出す。優は反射的にその手を取った。

奈々が繋いだ手を引っ張ってベッドに向かう。

先に奈々がベッドに潜り込み、その後で優がおずおずとベッドに入ると奈々の胸に抱き寄せられるように引っ張りこまれた。

「電気点けたままで良い？」

奈々が少し躊躇した様子で言う。優は意外そうに奈々を見てから、はい、と頷いた。

「おやすみなさい」

「ええ。おやすみ」

目を瞑る。どこかでサイレンの鳴る音。肩に回された奈々の腕に力が籠もる。柔らかい香りがした。そして、まどろみの中へ落ちていく。

翌日、目を覚ますと同時に微かな頭痛を覚え、桜井優は小さく顔をしかめた。奈々に抱きしめられたまま器用に寝がえりを打ち、額を抑える。どうやら、微熱もあるようだった。

「……………っ……………」

奈々が小さく呻き声をあげ、身じろぎする。優は奈々の腕をほどいて、上半身を起こした。奈々の顔をのぞきこむと、ちよつと目を開けるところだった。

「おはようございます」

眠そうな奈々と目が合う。奈々は少し不思議そうな表情を浮かべた後、ぱたりと枕に顔を埋めた。

「……………今何時？」

部屋の時計に目を向けると、既に昼を回っていた。

「十三時十分です」

時刻を伝えると、奈々は憂鬱そうに起き上がり、眠たそうに目を擦った。その仕草が普段の奈々から考えられないほど幼く見えて、優は頬を緩ませた。そして、すぐに頬を引き締める。

「神条司令、お話があります」

奈々が顔をあげる。優は深く息を吸った。

「僕を出撃させてください」

途端、奈々の瞳が鋭く細まる。

「君はまだ体調が整っていないでしょう」

「今後、良くなるとも限りません」

予想通りの反応に、予め用意していた言葉を口にする。奈々の瞳に明らかな動揺が走った。

「それは、どういう意味？」

「そのままの意味です。時間が経てば、更に悪くなる可能性の方が高いです。これは、治るものじゃないんです」

「医者に何か言われたの？」

「違います。前から、前兆はありました。どんどん、酷くなっていきます。検査にも引つ掛かりませんでした。多分、これからも酷くなつていきます。せめて何も出来なくなる前に、できることをやっておきたいんです」

喋りながら、随分と我儘な事を言っている、と自覚する。出撃命令を出すのは奈々だ。体調が整わないまま出撃して何かが起これば責任を負うのは奈々であるし、長くに渡って後悔の念を背負う事になるだろう。

「許可できない」

「我儘なのはわかってます。でも」

「今は許可できない。白流島の全戦力を測る機会は今だけ。君には引き続き、モニタリングを続けてもらおう。大体の見当をつけることができれば、君を出撃させる」

優は目を大きく開いた後、深々と頭を下げた。

「ありがとうございますっ」

「君は意外と頑固だしね」

優が顔をあげると、奈々は呆れたように苦笑して首を振った。

「じゃあ、準備を始めましょうか」

「はい」

ベッドから下りて、身支度を始める。

準備はものの五分で終わり、優と奈々は揃って部屋を出て、司令室に向かった。その途中でサイレンが鳴る。優と奈々はチラリと顔を見合わせた後、司令室の扉をくぐった。

「加奈。交代の時間よ」

奈々の声に、司令席でコンソールを操作していた加奈が微笑を浮かべて振り返る。

「少し待ってください。残った作業を終わらせてから」

加奈の言葉が言い終わらないうちに、司令室の扉が開く。反射的に振り返ると、第五小隊長の進藤咲が立っていた。

「咲ちゃん？」

加奈が戸惑った声をあげる。

咲は司令室を静かに見渡した後、奈々の方に視線を止めて、ゆっくりと歩き始めた。その姿からは普段のおどおどとした様子は認められない。

「神条司令」

数メートルほど先で足を止め、咲は震える声で口を開いた。

「中隊を辞めさせてください。お願いします」

予想外の言葉に優は驚いて、咲をじっと見つめた。咲はゆっくりと頭を下げ、動かない。周囲の電子オペレーターたちが怪訝な表情でこちらに顔を向けるのが視界の隅に映った。

「……理由は？ 入隊の時に説明したはずだけど、有事の際は基本的に退職が認められない。特別な理由があるなら、他でゆっくり聞くけれど」

奈々の冷淡な声。咲は頭を下げたままで、動かない。

優は自らが酷く場違いなように思えて、チラリと司令室の扉に目を向けた。出ていくべきか迷った時、咲の震えた声が耳に届いた。

「お願いします。向いて、なかつたんです」

「……あなたは、後一年続ければ特別年金を受け取る事もできる。辞めるなら、それからにすれば良い」

「……もう無理です。お願いします」

微かにすすり泣くような音が顔を伏せた咲から届く。優は咲から視線を離し、奈々を見やった。

「神条司令……」

「中隊員には高額な給与の上に特別年金が用意されて、生涯の生活が保障されてる。それだけの契約を一方的に破棄するのは筋が通らない。亡霊対策法第五七条。有事の際に退職するには特別な事由が必要で、それは当該隊員が退職しなければ配偶者または民法第八七七条の規定によって扶養すべき親族を扶養する事ができないと認められる事由がある旨を公的に証明する事ができた場合のみ。咲ちゃん、あなたには配偶者も、扶養すべき家族もない。退職は認められない」

淡々と説明する奈々を見て、奈々が防衛大出身であることを優は今更のように思いだした。奈々は軍人だ。亡霊が出現して防衛大を辞める者が続出した中で、残留を決意したのだ。奈々の元同級生だった橋本恵の言葉を思い出す。ESP能力者がいなかった当時に残留を決意するということは、自らが直接亡霊と戦うつもりだったということ。奈々は一般人ではない。彼女の価値観は軍人のそれだ。優とは全く異なる価値観を持っている。

優はチラリと咲を見つめた。咲の小さな肩は小刻みに震え、しゃくりあげる声が聞こえる。優には咲が戦えるようにはとても見えなかった。

「脱走すれば、三年の懲役か禁固に処せられる」

奈々がポツリと言う。咲は肩を震わせ、顔をあげた。その瞳には、微かな希望の光が宿っていた。

それが奈々の優しさだったのか、優にはわからない。ただ、咲は救われたように奈々を見上げ、ありがとうございます、と小さく呟いた。そして、優達に背を向けて司令室から出ていく。優は困惑したように奈々を見つめた。

「あの、いいんですか？」

「何が？」

奈々が振り返る。

「脱走って……」

「実行すれば、彼女はそれを償う必要がある。それが交換に値するものなら、好きに実行すればいい」

そう言って、奈々は咲が出ていった扉をじっと見つめた。優も釣られて扉に目を向ける。

その時、脳裏にある一つの言葉が蘇った。

私達は、最早司法の加護を受ける事ができません。

かつて、白崎凜が口にした言葉。

優は反射的に奈々を見上げた。

ESP能力者の脱走に対して、公正な裁判が開かれる事が果たしてあるのだろうか？

一度脱走を試みた超能力者を懲役に処する事など、ありうるのだろうか？

ESP能力者を本当の意味で武装解除することはできない。一度脱走した超能力者を閉じ込めたところで、問題の解決にはならない。背筋を冷たいものが駆け抜けた。

以前に奈々が言っていたではないか。精神に問題をきたしたESP能力者は薬によって大人しくさせ、管理するのだと。

「神条司令……もし、進藤さんが脱走した場合、三年の懲役か禁固になるんですか？」

「そう定められてる」

奈々が淡々と答える。その答えに、優は顔を強張らせた。

「実際には、どうなると考えていますか？」

その問いに、奈々は答えなかった。疑惑が確信に変わる。

「……っ……神条司令、何で、あんな事、進藤さんに伝えたんですか……」

「少なくとも、それで彼女が命を落とすことはなくなる。彼女は保護される」

優は反射的に駆けだした。後ろで奈々の声がしたが、無視して司

令室を飛び出す。左右を見渡すと、廊下の向こうに進藤咲の後ろ姿が見えた。迷わずその後を追う。

「進藤さん！ 待って！」

咲が振り返る。その瞳には怯えのようなものが走っていた。咲の前で立ち止まり、息を整える。

「ここを辞めてどうするの？ 住む所とか、働く所とか、決めてるの？」

「……説教でもしにきたの？」

咲が冷たい声で言う。優は大きく首を振った。

「ごめん。そんなつもりじゃ……でも、特別年金だって下りないなら、生活が」

「貯金があるから数年は問題ないです」

ピシヤリと咲が言い放つ。

「家を借りるのだって、保証人がいないと」

「カラオケとかカプセルホテル使うから」

「でも、そんな生活じゃあ何年も持たない」

そう言いかけた途端、咲が感情の抜け落ちた顔で静かに遮った。

「何年も生きられると思ってるの？」

言われた意味がわからず、優は咲の瞳をじっと見つめた。黒い瞳の向こうで濁ったものが小さく蠢く。

「あの、それって、どういう意味……？」

「私、知ってるよ。君、ESP能力の影響で身体壊してるんでしょ」

「え？」

「ずっと見てたもん。君の身体、壊れていってる。皆、そうなるんだ」

「何を言って」

「私はまだ死にたくない！」

不意に咲は叫んで、近くにあった戦闘準備室に向かって駆けだした。機械翼をとりによくつもりなのかもしれない。優はすぐに床を蹴って後を追った。

「待つて！」

咲が部屋に入る前にその肩を掴む。その瞬間、触れたところから強烈な光が迸った。

ESPエネルギー。

そう気付くと同時に、桜井優の意識は光の奔流の中に呑みこまれていった。

進藤咲の精神と身体は、生まれた時から彼女のものではなかった。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、幼子は神の御名をいただきます」

繰り返される祝福。それが、彼女の持つ最古の記憶だった。

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、のち來りたまふ万能の神」
物心ついた時には既に彼女は新興宗教団体に入信していた。両親は熱心な信心者で、月に何度かある集会の為に教会と呼ばれる小さな家に連れていかれた事を覚えている。後で知ったことだが、入信者以外との関係を築くのは推奨されていないらしく、大人たちにとってそれは貴重なコミュニケーションの場だったらしい。ただ、そこは咲にとって酷く退屈な場で、集会は苦痛以外の何物でもなかった。しかし、両親の強い意向で咲は幼少期を閉じたコミュニケーションで過ごす事になる。

咲が八歳になった時、亡霊が記録上に初めて現れた。大人達はそれを魔鬼と呼んだ。害悪を撒き散らす存在。全師様の加護によって彼の害悪から護られるのだと強く教えられた。それまで信仰心らしきものを持っていなかった咲も、神話に語られるような怪物の存在を目の当たりにして、考えを改めていくことになった。後に咲は、団体の教えが俗に言う同一説に近いものだを知る事になる。

魔鬼は悪しき存在だ。この世のものではない力によって構成され、

その力を抑え込む事ができるのは全師様だけである。そうした教えが、団体の中を駆け巡った。団体にしてみれば、亡霊の存在は信仰心を得る為の道具でしかなく、特に深い考えがあったわけではないのだろう。だから、綻びができてしまった。致命的な綻びだった。ESP能力者の発見である。

亡霊の出現から数カ月後に発見された一人の少女は、魔鬼と同じこの世のものではない力を保持していた。団体は辻褄を合わせる為、この少女を呪われた存在と呼ぶようになっていく。命を亡くした時、彼女は魔鬼となるのだと。

進藤咲は、その教えを特別信じていた訳ではなかった。そういう考え方もあるだろう。その程度の認識。魔鬼は教義の一部でしかなく、咲の関心を誘うものではなかった。その時点では。

更に数ヶ月経過すると、ESP能力者が亡霊の対抗手段になりうる事が公になった。この時には柘沙織以外にも数人のESP能力者が確認され、ESPという固有名詞が一般化し、いくつかの科学的な見地からアプローチが試みられるようになり始める。工学的な利用も検討されるようになり、それまでの漠然とした神秘性が揺らぎ始めた時期だった。

その時期に、母親が死んだ。交通事故だった。乗用車が歩道に乗りだし、隣を歩いていた母親の身体を巻き込んだ。数日後、咲は信仰を捨てた。

神など、いない。母親を見捨てた神などいない。咲は強くそう思った。しかし、父はそうではなかった。父は母を失った悲しみを埋めようとするかのように信仰に溺れた。まるで、そうすれば母親が生き返るとでも思っているかのように。

馬鹿みたい。

咲は祈りを捧げる父を見て、鼻でそう笑った。神などいない。傲慢な神などいない。

そう、思おうとした。しかし、咲が信仰を完全に捨てきる事はできなかつた。

幼少期から培われた漠然とした信仰心は強烈な倫理観となつて進藤咲という人格の根本的な部分を蝕み、捕えていた。

コミュニケーションから外れた孤独感。コミュニケーション外の人間と交流を持つことに対する罪悪感。

閉鎖的なコミュニケーションで育った咲が普通の暮らしに戻る事は簡単な事ではなかったし、母を亡くした直後の精神状態では信仰心を完全に捨て去る事は不可能だった。

咲自身は信仰を捨てたつもりでも、危機的な状況に陥り、心の余裕がなくなれば心の中で「全師様、どうかお助け下さい」と無意識のうちに何度も祈りを捧げ、自らの神に縋る事が何度もあった。

こうした境遇は、特別珍しいものではない。信仰を捨てた後に不安定な精神状態となり、カウンセリングを受けるケースは少なくない。咲もそれを理解していて、割り切っていた。ただ不幸だったのは、団体と彼女の繋がりが完全に切れることがなかったことに集約される。

咲とは反対に信仰にのめり込んでいった父は、勤めていた会社を辞めて、団体の職員として働き始めた。生活水準は大幅に落ち、毎日のようにコミュニケーション内の人間を家にとって談笑する父の姿に咲は団体の事を忘れ去る事ができなかったし、その存在を全否定することができなかった。ただ、父の稼ぎは急激に落ちたし、団体の会費という名目で支払われる金額は小さくはなく、家計を預かっていた咲はやり場のない何かを溜め込んでいく事になる。

咲が鬱屈した歪みを抱えながら十四歳になった時、再び転機が訪れた。ESP能力の発現。ある日突然、自衛軍を名乗る男達が家に来て、ESP能力が発現している事を告げ、指紋・血液の採取をしたいと頭を下げた。一緒に話を聞いていた父は何も言わず、ただ悲しい顔をするだけだった。

呪われた存在。魔鬼を払い、自らも魔鬼となる永遠の安息を失った悲しい存在。教義に忠実だった父は咲を見つめ、ただ静かに涙を流し、呟いた。

「全師様、どうか娘にも安息を……」

その日、進藤咲は人間ではない別の何かになった。

「待つて！」

後ろから桜井優の声が響く。

進藤咲はその声を無視して戦闘準備室に駆け込もうと地を蹴った。扉をくぐる前に肩を掴まれ、直後に何かが弾ける。

ESPエネルギー。

気付いた時には既に遅く、膨張していくESPエネルギーに咲は一瞬で呑み込まれていった。

視界がスパークし、直後、身体に巨大な穴が開くような奇妙な感覚が迸った。次いで、頭の中を無理矢理こじ開けられるような苦痛そして、断片的な記憶が外に向かって放出されるのが分かった。

咲は光の奔流の中で、顔を苦痛に歪めながら片目を無理矢理開いた。溢れる光の向こうで、咲と繋がるようにESPエネルギーを吸収する桜井優の姿が映った。脳裏を次々と幼少期の記憶が駆け抜けていく。反射的に、記憶を見られている事に気付いた。

「止めて！」

叫ぶ。その声が桜井優に届いたのか、咲にはわからなかった。記憶の再生は終わらない。咲は声にならない叫び声をあげた。

ESP能力が発現してすぐに進藤咲は特殊戦術中隊に入隊を果たした。

ESP能力。この世のものではない呪われた力。咲は実際にESP能力を間近で見て、行使することによって、団体の教えを否定することができなくなった。

この莫大なエネルギーはどこからやってくる？ この強大なエネルギーを私はどうやって操っている？

知れば知るほど、ESP能力は咲の知る現実からかけ離れた力を見せつけた。この力はおよそ人が使って良いものではない。

咲は次第に、自らが得た力に恐怖するようになった。いつか、この強大な力が自らを呑みこみ、ESPエネルギーだけで構成された怪物、亡霊となり果てるのではないか。

これが全師様の加護を捨てた罰なのだろうか？

違う。神は母を捨てた。全師様などいない。

でも、父は全師様に救われた。神の御心など、私にはわからない。

父を救ったのは団体の人間だ。神は無力だ。

そう、神の使徒が救ったんだ。

違う。神は無力だ。神は傲慢だ。そんな神、いらぬ。

繰り返される相克。

信仰は、求める者を救うだろう。力は、持たざる者を救うだろう。ただ、咲の場合、その二つは重い鎖でしかなかった。

信仰の残滓は悪夢となって咲を襲う。

否定と肯定の相克には終わりが見えず、それは魔鬼となって咲の精神を貪り食い始めた。

「全師様、どうか、お助けください」

自然と眩きが漏れる。

自身に付与された強大な力が怖かった。

ESP能力を持つ周囲の仲間が怖かった。

亡霊が怖かった。

死にたくなかった。

ただ、生きてなかった。普通の、一人の人間としての生を全うしたかった。

だから、ESPエネルギーを完全に扱おう為、死に物狂いで訓練に励んだ。

ESP能力を完全に制御できれば、全てうまくいくのではないか。そんな予感があった。

「でも、結局」

咲は光の向こうに見える桜井優の姿を見て、全てを諦めた笑みを浮かべた。

ずっと見ていた。膨大なESPエネルギーを持つ彼が最も初めにその力に呑みこまれるだろう。そう考え、ずっと見ていた。

「無駄になっちゃった」

桜井優の身体は、確かに崩壊を始めていた。いずれ、自分もそうなるのだろう。少し前から、桜井優の身体からESPエネルギーが漏れだしている。まるで、入れ物に穴が開いたように。

誰も、気づいていない。あるいは、司令部によって秘匿されているのか。ESPエネルギーの扱いに長けていた咲だけが感じ取れる異常のようだった。皆、そうなる。皆、死んでいく。きっと、この力は呪いなのだ。

「それが呪いにしかならないなら」

不意に、光の向こうから声が聞こえた。慈愛に満ちた声。何故か、幼少期に教会で見た熾天使の像を思い出した。

「僕が」

光の向こうから、桜井優が近づいてくる。全てを慈しむような微笑をたずさえ、ゆっくりと手を差し出す。進藤咲は吸い込まれるようにその手を取った。

咲の肩を掴んだ途端、周囲に迸ったESPエネルギーは衝撃となつて桜井優を貫いた。

まずい。そう考えるより早く、視界がESPエネルギーの放つ光に覆われ、全ての音が遠のいていく。

意識を失いそうになる中、流れ込んでくるESPエネルギーの中に断片的な何かが見えた。

進藤咲の記憶だとすぐに気付く。柊沙織の記憶をアメーバに見せつけられた時のように、それは桜井優の意識野へ強引に滑り込んで

きた。ただ、柊沙織の時とは違って、進藤咲の記憶を客観的な立場から覗きこんでいるかのようだった。

教会。

祈りを捧げる母。

熾天使の像。

優しい笑みを浮かべる神父。

悲鳴をあげる母と、肉が潰れる音。

一人呟き続ける父。

神に救いを求める父を憐れむ咲。

自衛軍。

凄まじいまでの情報量が桜井優の頭を貫き、どこかへ消えていく。その記憶を辿りながら、同じだ、とふと思う。

進藤咲は、柊沙織と同じだ。

進藤咲の記憶とは別の、柊沙織の記憶が鮮明に蘇る。

ESP能力の継承、出来るんですよ。お願い。やって。

ねえ、お願い。私は、普通の人間として死にたい。

とくん、と心臓が跳ねた。吸い寄せられるように咲へ向かって足を進める。

「全師様、どうか、お助けください」

小さな呟きが聞こえる。

ユウが沙織のESP能力を消し去った事を思い出しながら、優は微笑を浮かべ、口を開いた。

「それが呪いにしかないなら」

光の向こうで咲が顔をあげる。優は咲の前で立ち止まり、手を差し伸ばした。

「僕が」

柊沙織がそうしたように、咲の手が優の手と重なる。

その瞬間、周囲を取り巻いていたESPエネルギーが優の手元へ収束を始めた。強い風が吹き荒れ、咲が小さな悲鳴をあげる。優は繋がれた手が離れないよう、強く咲の手を握った。

手元に微かな熱。作業は二秒ほどで終わった。周囲を覆っていたESPエネルギーが跡形もなく消え去り、あれほど強く吹きつけていた風が止む。

繋いでいた手から、するりと咲の手が抜け落ちた。次いで、咲の身体がぐったりと床に崩れ落ちる。優は咄嗟に咲の小柄な身体を抱きかかえ、そつと床に下ろした。

「何をやってるの！」

遠くから奈々の鋭い声。優は咲からESPエネルギーの反応が感じられない事を確認してから、声のした方向を振り返った。

「動くな！」

廊下の向こうから奈々と自動小銃を構えた男が二人やってくる。

優はぐったり倒れたまま動かない咲をチラリと見て、それから先程吹き荒れていたESPエネルギーを思い出し、事の成り行きを悟った。

「何があつたの？」

奈々が自動小銃を構えた男たちを制して、咲に駆け寄る。優は両手をあげて、敵意がないことを示しながら口を開いた。

「進藤さんのESP能力、多分、なくなりました」

奈々が怪訝な顔で振り返る。

「今、何って？」

「進藤さんのESP能力を、僕のESP能力で無くしました」

奈々の瞳が鋭く細まる。

「何があつたのか、詳しく教えて」

「脱走を止めようと、進藤さんを追ってここまで来ました。僕が肩を掴んだ瞬間、進藤さんの記憶が、あの、前の柊沙織の時のように流れてきて、それで、ESP能力を消そうと」

「待って。本当に、ESP能力がなくなったの？」

「進藤さんからはもうESPエネルギーは感じられないです」

奈々はそれを聞くと、ゆっくりと咲から離れ、後ろに控える男達に目を向けた。

「彼女を医務室に運んで。それから、ESPエネルギーの測定を」
二人の男は顔を見合わせた後、一人が二つの自動小銃を預かり、残った一人が咲を両手で抱きかかえ、優達に背を向けて歩き始めた。奈々はそれを見送ってから再び優に向き直り、来なさい、と小さく言った。

「君はいつからそんな事が、いえ、君は、何でそんなことを？」

司令室に向かって歩きながら、奈々が言う。優はその後を追って、限界でした、と短く答えた。

「限界？」

「進藤さんは限界でした。進藤さんは、ESP能力を快く思っていないませんでした。だから、叶えました」

「君は」

奈々が立ち止まる。優も立ち止まり、奈々の顔を見上げた。

「進藤さんだけじゃありません。これ以上波状攻撃が続けば、皆持たないです。出撃させてください」

「……それは、君もでしょう。君の身体も限界で、これ以上出せば君も持たないかもしれない。頭を冷やしなさい」

「多分、僕が出るまで波状攻撃は終わらないです。神条司令も、わかってはいるはずですよ」

沈黙が落ちる。優は大きく息を吸って、言葉を続けた。

「亡霊は、僕を殺しはしないはずですよ。何が目的なのか分かりませんが、死ぬ事はありません。大丈夫です。今まで通り、何とかありません」

奈々は答えない。優は頭を深々と下げた。奈々から諦めたような溜め息の音。

「私は君みたいに樂觀できない。余力の全てを君に預ける」

優は頭を上げた。奈々の苦悩に歪んだ瞳と目が合う。

「桜井優に出撃を命ずる。出撃準備を」

日は高く、海は蒼い。

桜井優は一三四名の中隊員を引き連れ、青空を飛翔していた。

頭痛や眩暈はいつの間にか感じなくなっている。ここ数日で最も体調が良い。天候も問題なく、視界も良好。優は久しぶりの大空を十分に満喫することができた。

『敵勢力三四。衝突予測地点まで後五分。兵装チェック』

通信機から奈々の声。優は小銃と機械翼をマニュアル通りに点検し、異常がない事を確認した。同様に通信機から次々と各飛行隊の返答が届く。

『姿勢制御。構え』

微かに前屈みになり、風の影響を出来るだけ受けないようにする。次いで、優は小銃を前方に向かって構えた。青空の向こうに紫色の集団が見える。

優はじつと照準を合わせながら、ふと違和感を覚え、小銃を下ろした。奈々から伝えられた亡霊の個体数は三十四。しかし、優が感じ取った亡霊の数は三十五。数が合わない。

計器が間違っているのかもしれない。そう思って、納得する。亡霊対策室の探知精度は、それほど高くない。それに一体程度の誤差なら問題ない、と判断した。

再び、小銃を亡霊群に向かって構える。亡霊の姿が遠目でもはっきり分かるほど距離が縮まっていた。

『もう少し引きつけて』

『……一〇〇！』

『撃てー！』

号令とともに、引き金を引く。風が唸り、次いで銃口から光の奔流が亡霊群に向かって放たれた。同様に、周囲からも強烈なESエネルギーが放たれ、優の周囲を横切って亡霊群へと吸い込まれていく。チリチリと肌が焼きつくような感覚とともに、機械翼が衝撃で微かに震えるのが感じられる。直後、青空の向こうで閃光が走

り、優は微かに視線を外した。

『十七体口スト!』

『第二射用意! 構え!』

『構え!』

復唱し、再び小銃を構える。直後、閃光の中から亡霊が四方に飛び散るのが見えた。

『散開! 単純前進!』

『前進!』

亡霊の密度に合わせるように、中隊も両翼を広げ、亡霊群に向かって詰め寄っていく。半数まで減った亡霊と一〇〇を超える中隊の戦力差は明らかだが、亡霊は撤退する素振りを見せず、中隊の中に呑みこまれるようにして消えていった。

『亡霊の殲滅を確認。その場で待機せよ』

いつものように帰投命令は出なかった。

ひとまず中隊の隊形を整えようと、後ろを振り返り、サインを送る。

『隊形移動! 横隊!』

ゆっくりと中隊全体が移動を始める。その光景を眺めていた時、全身の毛が逆立つような嫌な空気を感じ、優は咄嗟に白流島がある方向に目を向けた。肌にかが突き刺さるような圧力。どこかで咆哮がぶんざく。海の遙か向こう。そこで、何百もの影が蠢くのがわかった。

『 新たな亡霊が飛び立ちましたっ』

『数、二〇〇……四〇〇……っ……五〇〇、まだ……』

電子オペレーターの絶句する様子が通信機から届く。

『六〇〇……七〇〇……七三六、七三六! 敵勢力、七三六!』

『敵、密集隊形! 衝突まで二十分!』

全身に嫌な空気がまとわりついてくるような感覚。

優は背後の中隊を振り返って、咄嗟に後退命令を出そうとし、寸前で思いとどまった。

「司令、どうしたら！」

『……最大射程から攻撃を加えた後、全力転進を繰り返す。上手くやれば、上陸は阻止できる。まず、距離を稼がないと。前進して！』
「前進！」

叫び、優は機械翼へのエネルギー供給を増大させた。まだ亡霊の姿は見えないが、前方から強力なESPエネルギーの存在を感じ取り、寒気を覚える。

『敵高度、低下。海上ギリギリを飛んでいます』

『こちらも高度を下げて。差がつきすぎると、距離を見誤りやすい』
「ダウン！」

後方にサインを送って、自らも高度を徐々に下げていく。潮の香りがした。

『まだ余裕はあるけど、兵装チェックを』

中隊を止めて、兵装の確認を始める。それから、チラリと後方の海上に浮かぶ三隻の哨戒艦艇に目を向けた。負傷者が出た時に搬送する必要がある為、しっかりと位置を覚えておかなければならない。
『連結ベルトに異常がありました。外れます』

通信機から、一人の少女の声が届く。他は装備に問題がないようだった。背後の艦艇に装備を取り替えにいく姿を見送ってから、亡霊が接近してくるであろう方向に目を向ける。まだ目視はできないが、数えきれないほどのESPエネルギーが急接近してくるのが感じられる。

『目的は殲滅ではなく、削る事。本土への上陸はやむをえない。無理に留まって中隊の動きを阻害しないように』

奈々が釘を差すように言う。

優はぼんやりとそれを聞きながら、前方の亡霊に意識を集中した。数が多すぎて、それぞれの個体を識別できない。まるで一つの生命体のように密集しているようだった。

『構え！』

命令通りに、小銃を構える。まだ、亡霊の姿は見えない。いつも

より高度が低い為か、風が弱い気がした。

「……亡霊群、目視」

水平線の向こうから、亡霊の軍団が現れる。まだ中隊の射程ではない。しかし、自らの攻撃なら当たると確信する。

「司令、攻撃許可をください。ここからなら一方的に攻撃を加える事ができます」

「……許可する」

返答を聞いてから優は小銃を肩にかけ、空いた両手を前方に向かつてかざした。亡霊の姿がはつきりと視え、頭の中が冷えていく。

それに逆らうように両手が熱を持ち、光の粒子が膨れ上がっていく。

『距離七〇〇』

電子オペレーターの声を合図に、今まで一度に使ったことがないほどのESPエネルギーを放つ。空間が歪むように波打ち、前方に広がっていくのが見えた。不可視の攻撃が壁のように広がり、亡霊を呑みこむように膨れ上がっていく。

『距離六〇〇！』

優の視力ではない別の何かが亡霊群の姿をはつきりと捉え、自らの放った波が届くのが確認できた。空間のうねりが亡霊群に衝突し、その力に亡霊群が押し出されていく。攻撃を逃れようと亡霊群が高度を上げていくのが視えた。

『有効！ 回避行動をとり始めています。一部の高度が上昇』

『距離、五五〇！』

大量のESPエネルギーを一度に失った為か、酷い頭痛がした。

苦痛に顔を歪めながら、次の攻撃の準備を始める。前方にかざした両手が再び熱を持ち、全身のESPエネルギーが吸いだされるように両手へ集まっていく。

『距離、四〇〇！』

再びESPエネルギーを放つ。空間が波打ち、津波のように亡霊群へと雪崩れ込んでいく。頭が割れるような激痛が走り、自然と喉から呻き声があがった。

『有効！ 二七体の亡霊がロスト！ 速度低下！ 更に上部が高度上昇。挟撃の可能性があります』

壁のように広がっていた亡霊群が上下に分かれるのが目視でもわかった。

『距離、三〇〇』

上部の亡霊群がぐんぐんと高度をあげていく。優は直進してくる海上付近の亡霊に向かって三度目の攻撃準備を始めた。頭がクラクラする。

『距離二〇〇！』

放つ。海面が割けるように波打ち、空間のうねりが亡霊群を呑みこむように直進していく。

『距離一五〇』

『撃て！』

優の攻撃が亡霊群に命中すると同時に、周囲の大气が膨張したように轟音が響き、大量のESPエネルギーが後方から放たれ、優の横を通り過ぎていった。

ESPエネルギーを使いすぎたせいか、視界が霞む。周囲を取り巻く轟音に、前方で煌めく閃光。その一瞬において、桜井優の知覚能力は著しく低下していた。故に

『命中！ 三〇、四、六七の亡霊がロスト！』

『全力転進！ 上空の亡霊群に気をつけて』

その存在に気づくのが遅れてしまった。

『っ　　！！』

通信機の向こうで誰かが叫ぶ。直後、強烈な圧力を感じ、優は下に目を向けた。海面が盛り上がり、裂けた海水の間から一体の亡霊が飛び込んでくる。

咄嗟に迎撃態勢をとり、下方に片手を向け、ESPエネルギーを撃つ。亡霊は回避行動を選択せず、鋭利な爪を優に向けて突き出した。光弾が亡霊の左上半身を抉り飛ばすが、亡霊の速度は緩まない。

強い衝撃。

周囲を覆っていた轟音が止む。

優は目を見開き、自らの胸部に突き刺さった亡霊の腕を見つめた。喉から生ぬるい何かが吐きだされる。

吐息がかかるほどの距離で、赤い瞳がこちらを覗きこんでいた。その瞬間、全てを悟る。

焼けるような痛み。

亡霊の爪が引き抜かれ、信じられないほどの鮮血が溢れだした。ぐらりと身体が傾き、頭から海に堕ちていく。

桜井優が最後に見たのは、どこまでも広がる黒い海だった。

何が起こったのか、わからなかった。

突然、計器が示していた亡霊の個体数が上昇し、マップ上に亡霊の反応が現れた。

加奈が何かを叫んだ後、亡霊が海面から飛び出し、上空にいた桜井優を串刺しにした。

つい先程まで何百という亡霊に対して凄まじい攻撃を加えていた少年は、その一撃を受けて動きを止めた。

神条奈々はスクリーンに映し出されたその光景を見て、目を見開いた。

艦艇上から撮影した映像は粗く、細かいところまでは見えない。それでも、桜井優の胸を亡霊の爪が貫いたのは確認できた。

亡霊が爪を引き抜いた後、桜井優の身体が重力に身を任せるようにして、海面に堕ちていく。突き刺した亡霊は追撃を仕掛けようとするかのように、その後を追って急降下を始めた。

水柱があがり、桜井優の姿が見えなくなる。奈々はただ呆然とスクリーンを眺める事しかできなかった。

「……あ……桜井優、ロスト」

呆けたような電子オペレーターの声。機械翼の識別信号も、ES

Pエネルギーの反応も消え去り、亡霊対策室で定められた生存条件から桜井優の存在が脱落する。

奈々はスクリーンに映し出された海面をじっと眺め続けた。今に先程の亡霊を倒し、何事もなかったかのように海面から飛び出してくるのではないか。そんな予感が、奈々にはあった。しかし、いつまで経っても桜井優は浮かんでこない。

「司令！ 司令！ 命令を！」

加奈の声。何かを言っているのはわかったが、奈々の頭はその意味を理解できなかった。

スクリーンが切り替わり、一つの影が優の沈んだ場所に潜るのが見えた。

「凜ちゃんか！ 司令、撤退命令を！ 隊列が」

カメラがパンし、戦闘区域全体が映し出される。後退する中隊から何人かが前方に飛び込んでいくのが見えた。中隊の後退速度が落ち、それに逆らうように数人が集団から飛び出して逃走を始める。奈々はその光景をじっと眺める事しかできなかった。

「司令！ 司令！ 中隊が！」

乾いた音が響き、一拍遅れて頬を叩かれたのだと気づく。奈々はぼんやりと加奈に目を向けた。

「司令、命令を！ 優君は死んだんです。もう、無理なんです。今は中隊を撤退させることだけに集中してください！」

そう言つて、加奈はマイクに向かって声を張り上げた。

「全力後退！ 全力後退！ 前に出た人の援護は必要ない！ 下がれええっ！」

加奈の言葉を見捨てるように、更に数人が亡霊群に向かって飛び込んでいく。残った集団は迷ったように動きを止めた後、命令通りに後退を始めた。

亡霊の波が飛び出した中隊員を呑みこむように前進していく。

カメラがズームし、その様子が鮮明になった。

「避難区域の拡大を！ 警戒レベルを最大に！ 本土上陸は避けら

れない！」

加奈の悲鳴のような叫び声を聞きながら、ぼんやりとした奈々の視界の隅で誰かの腕が千切れるのが見えた。

5章 15話 その正当性を理解することは難しい

「桜井様……？」

第六小隊長、白崎凜は僅か二十メートルほど先で起きた事態に、著しく思考力が低下していくのを感じた。

亡霊の鋭利な爪が桜井優の胸に突き刺さり、優の口から鮮血が零れ落ちるのが鮮明に見えた。

ゆっくりと爪が引き抜かれ、優の身体が海に向かって落下を始め、それを追うように亡霊が降下を始め、数秒後には二つの影が水柱とともに海中へ消えていった。

何が起きたのか、理解できない。ただ、漠然とした焦燥感だけが急速に募り始めていた。

「うそ……」

誰かの呟きが通信機から届く。次いで、致命的な報告が司令部から届いた。

「……あ……桜井優、ロスト……」

前方から亡霊の群れが迫る。

凜は機械翼を大きく広げ、弾かれたように前方に飛びだした。

「っ……おい……！」

「し、白崎さん！」

複数の制止の声。凜はそれを振り払って、前方から迫りくる亡霊群にESPエネルギー放ち、亡霊群の動きが鈍った事を確認してから優が沈んだ場所に降下を始めた。海面に衝突する寸前に息を吸い、そのまま突入する。

凍てつくような海水に全身が包まれ、全身の筋肉が委縮するのが分かった。身体の悲鳴を無視して、周囲を見渡す。桜井優の姿も、亡霊の姿も見えない。潜る場所を誤ったか、既に沈んでしまったのか。

凜は焦燥感に突き動かされ、あてもなく周囲を泳ぎ始めた。一向

に人影は見えない。息が続かず、一度海面に浮上する。

「桜井様！」

海面から顔を出し、周囲を見渡す。波が高く、見通しが悪い。懸命に目をこらすも、波間に人影は見当たらない。

上空から閃光と轟音が断続的に発生するが、今は桜井優の安否にしか気が回らなかった。

「桜井様！」

広大な海原に、凜の叫び声が虚しく響き渡った。

『っ……おい……！』

『し、白崎さん！』

呆然としていた篠原華の視界を一つの影が走る。

白崎凜。矢のように飛び出した凜は迫りくる亡霊を牽制した後、一直線に海面へ急降下を始めた。それで、凜の目的を理解する。華はそれを援護する為、一人前方に飛びだした。

『華っ！』

小銃を構え、亡霊群に向かって引き金を引く。光の雨が亡霊群に降り注ぎ、亡霊が回避行動をとりながら接近してくる。

『ダメ！ 篠原さん、抑えきれない！』

詩織の声。気がつけば、華の隣で詩織も亡霊に向かって小銃を構えていた。

『数が多すぎます。切り込まないと！』

華は頷いて、銃剣を構えた。亡霊群との距離がみるみる縮まってくる。

「いくよ！」

叫び、華は亡霊群に向かって突撃を開始した。隣で同様に詩織が銃剣を構えて疾駆するのが見える。

亡霊の咆哮。目の前に立ちふさがった亡霊の頭を跳ね飛ばし、進

行ルートを確保しようと次の亡霊を探す。その時、近くで爆炎があがった。熱風が吹き荒れ、咄嗟に隣を見やる。詩織の機械翼が炎上し、落ちていくのが視界に入った。

「詩織ちゃん！」

拾いに向かおうと姿勢制御に移ると、上方から亡霊が接近してくるのが見えた。銃剣で亡霊の爪をいなし、至近距離で銃撃を加える。亡霊の上半身が吹き飛び、その身体が大気中に溶けていく。

「詩織ちゃんっ！」

下方に目を向けると、詩織が着水するのが見えた。救助に向かおうと降下を始める。直後、華のわき腹に光弾が直撃した。

「」

息が詰まり、身体が反転する。回転する視界の向こうで、一体の亡霊がこちらを見下ろしているのが見えた。機械翼のコントロールを失い、篠原華の身体はゆっくりと墜落を始めた。

「ちょっと！ 君達が飛び出したら、他どうすんの」

前方に飛び出していく篠原華と佐藤詩織の姿を見て、第四小隊長、黒木舞はポツリと呟いた。

前方には亡霊の軍団。これでは自殺するようなものだ。

そう思った舞の視界に、更に飛び出していく影が映る。桜井優が死んだ事で、正常な判断能力を失っているのだろうか。

「ああ、仕方ないなあ、もう」

舞は銃剣を構え、集団から飛び出した。

『黒木、お前まで』

誰かの制止。舞はチラリと振り返って、叫んだ。

「ボクは後輩のお守してくるから、そっちは後退を続けて！」

前方で華と詩織が亡霊に向かって攻撃するのが見える。舞はそこから少し離れた白崎凜が潜った地点に向かって飛翔し、その上空を

守るように銃剣を構えた。やや上空から三体の亡霊が迫ってくる。充分に引きつけてから、片翼の出力を高めて半身を前に出し、銃剣を突き出す。あっさりと亡霊の首が落ちるのを見届けてから、舞は更に片翼の出力を高めて、銃剣を振りまわした。突っ込んできた残りの二体がそれで消滅する。

三体をあっさりと片づけ終わった舞は上空に広がる亡霊の群れに目を向けた。

「うわ、これ、結構やばいな」

少し離れた地点で詩織が落ちていくのが見える。機械翼が破損しているようだった。それを助けようとした華も死角から攻撃を受け、堕ちていく。既に亡霊群の中に入っていたらしい。大多数の亡霊は舞を無視して前進を続けているが、そのうちのいくらかが舞のもとへ飛んでくる。

舞は無表情に銃剣を構え、突撃してくる亡霊を順番にいなした。いくらかの余裕が出来た時に刺突を繰り返し、確実に亡霊の首元を狙う。

亡霊の攻撃には無駄が多い。型もなく、個体によって動きが大きく異なるが、おおよそ一対一なら負ける気はしなかった。

しかし、今は一対一ではない。四体の攻撃を捌きながら、舞の澄ました表情に焦りの色が滲み始めた。

埒が明かない。そう考えて、攻撃に転ずる。亡霊の爪を弾いた直後、そのまま機械翼の出力を強め、上半身から倒れこむようにして亡霊に切り込む。首元を突き刺してからすぐに引き抜き、次の亡霊に向かって突撃する。

亡霊の断末魔が響き、次々と亡霊の身体が霧散していく。最後の亡霊を片づけようとした時、背筋に嫌な気配を感じ、舞は振り返った。数メートル離れた地点から飛び込んでくる亡霊と目が合う。舞はその攻撃を捌こうと銃剣を構えた直後、上空からも亡霊が迫ってくるのが見えた。

挟まれた。そう気付いた時には既に遅く、亡霊の鋭利な爪が左腕

霊の数をチラリを確認してから、沙耶は背後の部隊を振り返った。あまりにも数が違いすぎる。同じように全員が突っ込めば、中隊の壊滅は避けられない。

「神条！ 神条！」

『前に出ても犬死にしろ。下がれ。』

司令部からの返答の代わりに、葵の罵声が響く。

『待つて。見捨てる気？』

『このまま下がったら、篠原とか黒木もまずいって』

数人が反発の声をあげる。中隊の後退が緩慢になり、みるみるうちに亡霊群との距離が縮み始める。

『馬鹿か。お前らが前に出たところで何ができるんだよ。あたし、下がるから。第一八飛行隊はついてこい』

吉田葵の言葉とともに、数人が後退速度を速めて集団から抜けていく。

沙耶は舌打ちして、司令部から事前に与えられていた命令通りに後退をゆっくりと続けながら通信機に向かって叫んだ。

「糞ッ！ 桜井！ 桜井、生きてるか！」

『無理だ……胸に刺さった……』

第四小隊の藤宮綾の震えた声。直後、ようやく司令部からの命令が届いた。

『全力後退！ 全力後退！ 前に出た人の援護は必要ない！ 下がれええっ！』

その言葉に反発するように、更に数人が前方に飛び出していく。

華や詩織が亡霊と交戦を始めるのが沙耶の位置からでもわかった。

「おい！ 死ぬ気か！」

叫ぶ。誰も戻ってこようとはしない。

『とりあえず引くなら速度あげない？ どっちつかずは勘弁』

深海百合の苛立った声。沙耶は舌打ちして、右手でサインを送った。

「第二六飛行隊、全速後退！ 態勢を立て直すぞ！」

他の飛行隊も次々と後退を始め、残った中隊の全てが後退を始める。その数、およそ一〇〇。いまだ六〇〇以上の戦力を誇る亡霊とは圧倒的な戦力差があった。

『追いつかれる！ 速度上げろよ。このままじゃ』

先頭を走る葵の声。直後、距離を詰めてくる亡霊群から無数の光弾が放たれた。悲鳴があがり、隊列が乱れていく。

「散発攻撃！ 余裕がある奴は撃ち返せええ！」

沙耶は上半身を捻り、ろくに狙いもつけずに引き金を引き絞った。亡霊群の中へESPエネルギーが吸い込まれていく。しかし、亡霊の数が多すぎる為か、効果は見られない。

「篠原ア！ 生きてるか！ 返事しろ！」

牽制を繰り返しながら、叫ぶ。

返事はない。

「佐藤！ 黒木！ おい！ 冗談だろ！」

響き渡る轟音に沙耶の叫び声が掻き消されていく。

光の嵐が吹き荒れる中、沙耶は何度も通信機に向かって呼びかけた。

黒木舞の腕が千切れる映像をぼんやりと眺めながら、神条奈々は桜井優と初めて出会った時の事を思い出していた。

本部の正面ゲートで彼を出迎えた時、予想以上に幼く見える容姿に動揺した事を覚えている。これほど華奢な少年が、亡霊との激しい戦闘に耐えられるのだろうか、と。

中隊に入隊してからも彼は暫く周りに上手く溶け込まなかったよ。うで、奈々は数少ない男性の友人である斎藤準を優に紹介することにした。その時に彼が浮かべた安堵したような表情は今でも鮮明に覚えている。

彼にはどこか危うい雰囲気があり、放っておく事ができなかった。

もしかしたら、既にその頃から特殊な感情を抱いていたのかもしれない、と思う。

そうしたいいくつかの不安要素があったものの、桜井優は瞬く間に中隊に馴染み、亡霊との戦闘でその力の片鱗を見せ始めた。彼は奈々が考えていたほど脆弱ではなかったし、機転がきいた。どこか危なっかしいところがあっても、最後には上手く物事を進める事ができた。

救世主。いつしかその言葉が、奈々の頭から離れなくなった。彼の持つ特殊性と力は本物だった。

夢を見ていた。うたかたの夢。

その夢があまりにも心地良すぎて、それが夢である事を忘れていた。

夢はいつか覚める。

同じ夢は二度と見れない。

終わったのだ。全て。

奈々は大きく息を吐いた。

恐らく、彼は一度たりとも夢など見ていなかったのだろう。

私も、いつまでも心地良い夢の世界にはいられない。

「……凜、状況を説明しなさい」

奈々は中継映像から既に姿が確認できなくなった凜に対し、静かに声を投げかけた。すぐに返答が届く。

『桜井大隊長の行方は確認できません。現在、負傷した黒木小隊長を連結ベルトで固定し、海上にいます。失った左腕からの出血が酷かったため、患部を熱して無理矢理止血した。亡霊はこちらに気づいていないのか、攻撃してきません。ただちに機動ヘリを亡霊群から迂回させ、黒木小隊長を回収しなければまずいことになる』

「意識は？」

『失っています』

「五分以内に送る。それまで、そこを動かないように」

『了解した』

奈々は機動ヘリに新たな命令を送るため、コンソールを操作し始めた。横から加奈が遠慮がちに声をかけてくる。

「司令、気分が優れないようならお休みください。後は私が……」
「……いい。私が、やる」

奈々は短くそう答えて、再びスクリーンを見つめた。中隊と亡霊の距離が安定し、遠距離攻撃による応酬が行われている。撤退に問題は見られない。

中継映像からマップに目を移すと、ESPエネルギーの反応が亡霊の去った後に点々と散らばっているのが確認できた。撃墜された中隊員だろう。少なくとも、死んではいない。

「機動ヘリの全てを亡霊群の後方へ送る。暫くは艦艇からの映像しか映らない。異常があれば、音声にて速やかに報告しなさい」

通信機に向けて告げてから、艦艇から送られてくる映像を見つめる。

「避難は間に合いそう？」

「残念ながら、間に合いません。空自が攪乱を行うとのことですが、どれだけ効果があるか……」

加奈の答えに、奈々は小さく頷いた。

「このままいけば、亡霊の射程から逃げ切れるかもしれない」

「亡霊の動き、何だか鈍いですね」

「はじめに優君が……攻撃を加えたから」

亡霊の全てが手負いのようだった。圧倒的な数は脅威だが、個体ごとの戦闘能力はさほど高くはないだろう。

桜井優の遺した一つの勝機。

奈々はゆっくりと目を瞑り、息を吐きだした。

頬を一筋の涙が伝う。

「各員に告ぐ。後退しながら高度をあげなさい」

命令を受けて、中隊が高度を上げ始める。亡霊群も中隊の後を追うように高度を上げ始めた。

「散発攻撃。無理に攻撃する必要はない」

「高度四〇〇……………五〇〇……………六〇〇」

「……………高度を下げた」

中隊全体が高度を下げ始める。亡霊も同様に高度を下げしていく。少なくとも、これで平面的な亡霊の速度は著しく低下する。ただ、追う側はルートを短縮する事が出来る為、これを長期に渡って続ければ中隊が亡霊に追いつかれる事になる。慎重に様子を見ながら、ルートを変更していかねばならない。

亡霊が本土に上陸するまでにどれだけ時間を稼げるかによって、本土が受ける被害に大きな違いが出てくる。殲滅が不可能な以上、奈々がとるべき選択肢は限られていた。

「これがいつまで持つか……………」

スクリーン上に映る亡霊群を見つめながら、奈々はポツリと呟いた。

篠原華は横腹に攻撃を受けて墜落する中、無意識のうちに姿勢制御に移って機械翼の出力を高めた。微かに落下速度が落ちる。直後、華の身体は凍てつくような海水の中に突入し、全身が強い衝撃に包まれた。

訓練通りにベルトを引き抜き、救命具を膨張させる。強烈な浮遊感とともに頭が海中から飛び出し、華は何度も咳き込みながら息を吸った。

「篠原さん！」

詩織の声。

周囲を見渡すと、十数メートル離れた波間に詩織の姿があった。華は濡れて目元に張り付いた髪を手で払って、詩織の元に向かって泳ぎ始めた。しかし、機械翼のせいで重心が後ろに傾き、上手く泳ぐ事ができない。

「詩織ちゃん、大丈夫！」

「大丈夫です！ 機械翼が破損しただけでした！」

叫び返してくる詩織に安堵して、ふと上空を見上げと無数の亡霊が上空を通りすぎていくのが見えた。どうやら、華たちには関心がないらしい。

華は詩織に背を向ける形をとって、背泳ぎのように腕と足を動かしながら、懸命に詩織の元に向かった。戦闘服の下に着用したウエツトスーツのおかげで、すぐに体感温度は上昇したが、頭部が露出している為に、急激に体力が奪われていくのがわかった。

頭部は血行量が多く、着水した際は体温損失の主要因となる為、極力潜水は避けなければならない。中隊に入ってから叩きこまれた基礎知識を思い出しながら、華は極力頭部が濡れないように注意して、詩織の元に辿りついた。

「篠原さん、怪我は！」

詩織がそう言っって手を伸ばしてくる。その時、詩織が機械翼を外している事に初めて気づいた。

「お腹をちよつと。でも、大丈夫」

華はそう言っって、連結ベルトを詩織に繋げ、身体を固定した。次に詩織の身体を抱きしめ、怪我がないかを確認する。

「機械翼は？」

「放棄しました。小銃も落としてしまっ……っい！」

詩織の背中に手を回した時、詩織が小さく悲鳴をあげた。

「火傷してるの？」

「機械翼が炎上した時に。でも、大丈夫です」

華は頷いて、上空を見上げた。六〇〇を超える亡霊群は既に二人の頭上を通りすぎて、遙か向こうに遠のいていた。

「あがるよ」

告げてから、機械翼の出力を高める。

微かな抵抗感の後、身体がゆっくりと浮き上がり、海水が落ちていく音が響いた。

高度を上げながら、周囲を見渡す。艦艇の姿は見えない。孤立し

てしまったようだった。

「篠原さん、あれ！」

耳元で詩織が何かに気付いたように声をあげる。詩織の視線の先を辿ると、機動ヘリらしき影が亡霊群を迂回してこちらに向かつてくるのが見えた。

華は詩織を抱えなおして、機動ヘリに向かって飛行を始めた。すぐに距離が縮まり、機動ヘリからワイヤーが吊り下げられる。華は慎重に接近して、それに自らの連結ベルトを繋げた。連結が完了したサインを送るとホイストが巻きあげを開始し、機動ヘリの中に引っ張り込まれる。

「怪我は？」

医師が駆け寄ってくる。華は詩織と繋がった連結ベルトを外しながら、詩織を目で指した。

「彼女の背中、診てください」

医師が詩織を診ている間に、華は全ての連結ベルトを切り離して、息をついた。

腹部に負った火傷に目を向ける。それほど酷いものではない。

詩織が治療を受けている光景をぼんやりと見つめる。脳裏に桜井優が串刺しになった映像が浮かび、華はそれを振り払うように首を振った。

「桜井くんは……」

ポツリと言葉が漏れ、医師が振り返る。

「桜井くんは、見つかりましたか？」

「いや、見つかっていない」

医師はそれだけ言って、再び詩織の治療を再開した。重い沈黙が機内に充満する。

機内の隅でじっとしていたメカニックが立ちあがってホイストの操作を始め、ワイヤーが吊り下げられていく。誰かを引き上げるらしかった。

医師が詩織の治療を中断し、ナノマシンと輸血製剤の用意を始め

る。直後、ぐったりとした舞を抱えた凜が機内に引き上げられた。

舞の片腕がなくなっている事にすぐ気づき、華は顔を強張らせた。医師が駆け寄り、ナノマシンを打った後に輸血を開始する。華はその光景を呆然と傍観する事しかできなかった。

凜は機外に目を向け、必死に何かを探そうとしている。その様子で、優が見つからなかった事がわかった。

「四人の小隊長の安全を確保しました」

メカニツクが通信機に向かって報告するのが耳に届く。

華は自らの膝を抱えて、顔を伏せた。

何も考えたくない。

「華ちゃん、詩織ちゃん、聞こえる？」

通信機から奈々の声。

華は小さく、はい、と答えた。

「まだ戦える？」

「……はい」

「舞を除いた三人で後方から亡霊群に対して攻撃を仕掛けてほしい」

「……後ろから？」

「そう。殲滅を目的とした攻撃ではなく、攪乱する為の攻撃。本土に上陸するまでの時間を稼ぎたい」

「……やります」

そう言っつて、華は立ち上がった。医師が制止するような目を向けてくるが、華はそれを無視してへりから飛び出した。

浮遊感。機械翼の出力を高めると、すぐに加速感がやってきて、全身が後方に引っ張られるような奇妙な感覚に包まれる。

振り返ると、凜が同様に機動へりから飛び出したところだった。

その後ろから新しい機械翼を装備した詩織が続く。

「後ろにつけ」

通信機から凜の声。直後、凜が華を追い抜いて、前に出た。空気抵抗が弱まり、瞬間に速度が上昇する。衝突の恐れがある為に普段は推奨されない行為だが、亡霊群に追いつく為には有効な手段で

ある為、華は何も言わずに凜の後を追った。その背後に詩織がつく。直列に並びながら、無言で前方の亡霊群との距離を詰めていく。亡霊群が何度も高度を上げ下げしている為に、三人が亡霊群を射程に捉えるまで、それほど長い時間はかからなかった。

亡霊群を捉えた瞬間、三人は無言で横隊を組み、散発的な攻撃を開始した。亡霊群の後方が微かに崩れ始める。

『有効』

凜の声。

亡霊群から八体の亡霊が離脱し、華達へ向かってくる。

『私がやる。二人は引き続き、本隊に攻撃を加える』

そう言って、凜が前方に飛び出していく。華は言われた通りに亡霊群に向かって攻撃を続けながら、凜の様子を見守った。

凜の放ったESPエネルギーが三体の亡霊を瞬く間に呑みこみ、残った五体の亡霊が散開したところに凜が突入して、その動きを乱していく。

どうやら、心配する必要はなさそうだった。

攻撃に専念しようと照準を亡霊群に合わせた時、一体の亡霊の翼がなくなっているのが遠目に確認できた。

目を凝らせば、他の亡霊も大半が手負이었다った。

隊の先頭に立ち、凄まじい攻撃を加えていた桜井優の後ろ姿が華の脳裏に蘇った。

胸の奥から言いようのない何かが入り込み、視界が霞む。

「桜井くん……」

機動ヘリの中で呟いたように、再び想い人の名が口から零れた。

振り返り、広大な海原を見下ろす。

どこまでも続く蒼い海。

陽が傾き始めた赤い空。

その光景に、華は強い孤独を覚えた。

「桜井くん……」

名を呼んでも、答える者はいない。

遠くから戦闘の音。

それさえなければ、信じられないほどの静寂が辺り一帯を包むの
だろう。

自然と涙が溢れた。

考えたくない。

理解したくない。

想像したくない。

戦闘服の袖で涙を拭い、亡霊群に視線を戻す。

華は小銃を構え、ゆっくりと引き金を引いた。

反動。

セミ・オートで発射された光弾が亡霊群へと注ぐ。

遠くで亡霊の頭が吹き飛ぶのが見えた。

大きく息を吸う。

何かに集中していなければ、どうにかなりそうだった。

よく狙いもせずに引き金を引いて、亡霊群にESPエネルギーを
放つ。

何度も、何度も。

我慢できなくなった後方の亡霊が集団から離れ、向かってくるの
が見えた。

銃剣を構え、声にならない叫び声をあげる。

篠原華は生まれて初めて戦闘に恐怖せず、亡霊に向かって真つす
ぐに飛翔した。

後方からの猛烈な攻撃を受けて、亡霊群の動きが段々と緩慢にな
っていく様子を神奈奈々は慎重に観察した。

そろそろ何らかの手を打ってくる頃だ。そう考えた時、亡霊群が
二つの群に分かれ始めた。亡霊群の六割ほどが群れから飛び出し、
中隊を無視するように本土に向かって飛行を始める。残った四割は

これまでと同様に撤退する中隊を追跡したままだ。

「飛び出した集団を相手する必要はない。これより、残った集団に対し、攻撃を開始する」

本土上陸は避けられない上に、これ以上時間を稼ぐ事も難しい。

奈々は一部の亡霊の上陸を許してでも、ここで四割の亡霊を殲滅した方が長期的な被害を抑える事に繋がるかと判断し、現状の全戦力を残った亡霊にぶつけた。

残留した亡霊数はおよそ二〇〇。中隊は一〇〇。数の上では中隊に勝ち目はないが、これまでの撤退戦から、亡霊の全てが桜井優の遺した攻撃の影響を大きく受けている事が確認できていた。

負けることは、ない。

奈々は優が加えた凄まじい攻撃を思い出しながら、大きく叫んだ。
「撃てえ！」

号令とともに、中隊からESPエネルギーの嵐が吐きだされ、同時に亡霊群が中隊に向かって次々と突撃を開始する。

轟音と閃光が走る中、電子オペレーターの叫び声が耳に届いた。

「三十体の亡霊がロスト！」

やはり、亡霊の全てが弱っている。

亡霊と中隊の距離が詰まり、混戦に入る。それを見届けてから、奈々は加奈に目を向けた。

「本土への連絡は？」

「統幕には既に連絡済です。先行した亡霊の追跡を向こうも独自に始めました。こちらの哨戒艦艇を動かす必要はありません」

奈々は頷いて、スクリーンに視線を戻した。凜が後方から亡霊群に対して殲滅攻撃を仕掛けているところだった。

亡霊群が散開を始め、中隊に対する接敵面積を広げていく。数の上で大きな利を有する亡霊にとっては当然の動きだ。

「……本隊、後退」

散開した亡霊群に囲まれる前に、中隊が後退を始める。反対に、大きく広がった亡霊群は中隊を囲もうと前進していく。

「各小隊長は、各員の判断に従って亡霊に攻撃を」

そこに、華と詩織、凜の三人が後方から切り込んだ。

「三体ロスト！」

電子オペレーターの声。

三人の小隊長を抑えようと、密度を失った亡霊群の後方から数体が飛び出していく。

「四体ロスト！」

質の違いを理解したのか、亡霊群の後方がごっそりと切り離され、三人に襲いかかる。その数、およそ三〇。その瞬間、残った亡霊の数は一三〇体を割りこんだ。

「転進！」

圧倒的だった数の利を失った亡霊の本隊に、中隊が突撃を始める。挟撃による、敵戦力の一時的な分断。

通常なら相応のリスクを負う戦術ではあるが、亡霊の全てが手負いである事に加え、三人の小隊長格が揃っている特殊なケースであった為、亡霊の数はみるみるうちに減少を始めた。

三〇の亡霊を引きつけた凜と華、詩織の三人は上手く亡霊を引きつけながら巧妙に後退を始めている。そのうち、三人を仕留めきれないと判断した亡霊たちが、本隊同士の戦闘区域へ戻り始めた時、奈々は迷わず中隊に後退命令を出した。

「全速転進！」

スクリーンには、亡霊群が崩壊していく映像が映っていた。

冬の太陽は落ちるのが早い。

一七〇〇。特殊戦術中隊が二〇〇の亡霊を相手にしている間に、先行していた四〇〇の亡霊群が闇夜の中、島根県沿岸に上陸を果たし、攻撃を開始した。

避難が間に合わず、多くの死者が出た事が予測されたが、正確な

被害状況を確認する術はなく、夜空に浮かぶ紫色の亡霊群と、闇を切り裂く閃光と轟音が映像として記録されるだけとなった。

また、航空自衛軍が亡霊の足を止める為、何度か亡霊に攻撃を試みたが効果は得られなかった。亡霊群の攻撃が本土に大きく食い込む事が予測され、早くも交通の麻痺が始まった。

一八三〇。特殊戦術中隊が日本海上に残っていた二〇〇の亡霊を破り、本部へ帰投した。中隊全体の損耗率は六〇パーセントを超え、最早中隊の戦闘継続能力は完全に失われていた。

亡霊対策室司令官、神奈奈々は中隊の投入が不可能であると判断し、四幕一室による緊急協議を行い、これにより中隊の投入を見送る方針が決定した。

二二二〇。奈々は緊急会見に出た後、そのまま本部に戻って三時間の仮眠をとった。

その後、医官から渡された二日以内に復帰が可能な者のリストを手に、隊の再編を行っていく。

「司令。もう少し、お休みになられた方が……」

加奈から休むように何度も言われたが、奈々はそれを無視して仕事に没頭した。忙しいうちは良い。何も考えなくて済む。

再編には多大な時間を要し、朝日が昇るまで作業は続いた。それから軽い食事をとり、本土の被害状況を確認する。

亡霊の侵攻は中部地方を中心に広がり、既に確認された死者は一五〇を超えていた。亡霊の攻撃を記録した映像を見ると、上空から地上に向かってESPエネルギーを放ち、無差別的な攻撃を行っているようだった。インフラ施設や軍事施設、経済の要所を狙っている訳ではない。人工物も自然物の拘りもなく、ただ破壊を繰り返しながら侵攻していくだけ。

通常の戦争であれば、攻撃は何らかの目的を持って行われる。攻撃に用いられる兵器は高価で、攻撃を行う上で入念な下調べと話し合いが繰り返される。亡霊には、それが無い。まるで攻撃そのものが

目的であるかのようだった。

何の目的で白流島から飛び立ち、多くの同胞を失いながら、死の行軍を続けるのか。

過去の行動から、亡霊は非常に高い知能を有している事がわかる。しかし、今回の行動からは知性を感じられない。まるで幼子が完成したパズルをぐちゃぐちゃにするように、あるいは完成した砂の城を潰すように、ただ無意味な破壊が行われていく。

意味がない、ということに亡霊は価値を覚えているのだろうか？
少なくとも、意味がない、ということは人間にとっても高級な価値観になりうる。

戦略や損得からかけ離れた何かによって、亡霊は無意味な攻撃を繰り返しているのかもしれない。

「司令、統幕から連絡です」

奈々は映像から視線を外し、立ち上がった。

通信機から低い男の声が響く。

「中部方面隊総監、上田だ」

思わぬ相手からの連絡に、奈々は身を硬くした。

「統合幕僚監部にて、新たな方針が決定した。特殊戦術中隊を投入しろ」

統合幕僚監部が何をするつもりなのか、奈々には知らされなかった。

ただ、中隊を投入し、亡霊を新潟県の沿岸部まで引きつける事を要求され、奈々はそれを実行した。引きつける場所には細かな指定を受け、統幕が何をするつもりなのかは臆気ながらに予想できた。

呆気ないと思う。

四〇〇を超える亡霊を引き連れて、約一〇〇の中隊が新潟入りし、統幕の指定した場所に誘き寄せた時、全てが決まった。

何の前触れもなく亡霊群が崩壊を始め、大気中に溶けるようにその姿を消していき、二割ほどの亡霊は異常に気付いてすぐにその場を退いたものの、中隊によって殲滅されていく。

一瞬の出来事だった。

周りの電子オペレーターは何が起こったのか理解できず、騒然としていた。

いつからそれが完成していたのか、奈々にはわからない。

華秋院彰が言ったように、防衛関係費の都合上、それが表に出る事がなかったのか、それも今となっては確かめようがない。

ただ、未成年のESP能力者を投入する必要性はずっと昔に失われていて、何らかの政治的判断でその技術は秘匿されてきたのだろう。

政治的判断というものは、それを行ったものでなければその正当性を理解することは難しい。

統幕がとった政治的判断というものを奈々は理解することはできなかったし、理解しようとも思わなかった。

ただ、もしも奈々がその事を知っていれば、別の結末が待っていたかもしれない。

桜井優が死ぬことも、なかったのかも知れない。

中央にとって、戦略は政略のための道具で、神条奈々は傀儡でしかなかったのだろう。

「亡霊の殲滅を確認」

電子オペレーターの声。

騒音の中、神条奈々はじっと司令席に座ったまま、動くことができなかった。

何かが崩れる音。

何かが転げ始める音。

神条奈々の世界は呆気なく崩壊した。

亡霊の殲滅が終了した直後、奈々は中央に呼び戻され、報道陣に

向かって事態の終了を伝えた。

統幕が示した動きについては、触れなかった。隠し切れるものではない。そのうち、明るみになるだろう。しかし、奈々にとってそれは最早どうでも良い事で、関係がないことだった。

その会場で、奈々は一人の少年が命を落とした事を初めて伝えた。享年十六歳。

早すぎる死に対して形式的な黙祷が捧げられ、会見が終了した。

奈々は何も考える気力がなく、保安部の者に連れられるようにして、その場を後にした。

本部に戻ると、駐車場に見慣れない乗用車が止まっていた。

奈々が車を降りると、中から一人の医官が姿を現し、詰め寄ってくる。同乗していた保安部の二人がすぐにそれを取り押さえた。

「先程の会見で、あの少年が死んだ事を知りました」
医官が叫ぶ。

奈々はぼんやりとその姿を見つめた。桜井優が倒れた時に搬送した先の医官だと遅れて気づく。

「少年は戦える状況ではなく、明らかに衰弱していた！なのに、あなたはそれを無理矢理呼び戻し、国防という大義の下に少年を殺した！」

保安部の二人が医官を地面に抑えつける。

医官は苦痛に顔を歪めながらも、その瞳を真っすぐと奈々へ向けてくる。

彼はまだ若く、その瞳には熱意があった。

「ESP能力という特異な力を持っていても、彼はその前に一人の子どもです！あなたのやり方は、許されざるものではない！」

奈々はじつと医官を見下ろした。

この男は医学に精通し、社会的地位が高い。

優れた道徳的観念も持ち、それなりの行動力を有している。

ただ、それだけだ。

この男には力がない。

理不尽な現実を変えるだけの力がない。

理不尽な現実を撃ち砕くだけの力がない。

何かを成し得る為には、力が必要だ。それも、政治的な力だ。介入を防ぎ、逆に介入する力。

それが無ければ、奪われ続ける。

疲れきって何も考える気力が湧かなかった奈々の思考が、途端にクリアになった。

「私には、力がない」

奈々の口から自然と言葉が零れる。

医官が怪訝な表情を浮かべるのが見えた。

「お前にも力がない。だから、喚くことしかできない。私を怨んでいるなら、力をつけるがいい」

奈々は男から視線を外し、その横を通り過ぎて本部へと歩き始めた。

医官が何かを叫ぶ。

奈々はそれを無視して、暗闇の中に消えていった。

5章 16話 ずっと待っていました

強い潮の匂いと定期的に降りかかる水飛沫で、桜井優は目を覚ました。

ゆっくりと目を開き、自らが倒れている岩礁に手をつけて身を起こし、周囲を見渡す。

辺り一面に広がる紫色の濃霧。次に自らが立つ岩礁に目を向け、それからその先に広がる海に目を向けた。波は高く、荒い。岩礁に打ちつけられた波が水飛沫となつて、優のもとに何度も降りかかる。「生きてる……？」

ポツリと言葉が漏れ、反射的に亡霊に刺された胸部に目を向ける。そこにはポツカリと大きな穴が空いていた。思わず目を背け、両手で胸を抑える。

急に気分が悪くなり、優はその場に膝をついた。

お前はもう人間ではない。胸に空いた穴がそう告げているような気がして、吐き気が込み上げてくる。

優はよろよろと立ちあがり、海とは反対の方向に視線を向けた。濃霧の先に林のようなものが見える。人の気配はない。

「白流島……」

呟いて、胸を押さえながら林に向かって足を進める。

枯れた草木を縫って、優は当てもなくフラフラと彷徨い始めた。粗悪な小道らしきものを見つけ、それに沿って林を歩き続ける。

次第に緩やかな丘に辿りつき、小さな階段をいくつも越えながら、丘を登っていく。

丘を登り終えると、集落のようなものが広がっていた。

古い民家の間を縫いながら、辺りを散策する。

畑のようなものがいくつか広がっていたが、荒れ果て、ここの住民が何年も前にいなくなったことを示している。納屋のようなものも長い間使われている様子がなかった。

「誰か……」

控えめに声をあげるも、声は返ってこない。
酷く静かだった。

閑散とした集落を風が吹き抜けていく音だけが耳に届く。
突然得体の知れない不安が湧き起こり、優は何度も辺りを見渡した。足元からじりじりと砂を踏み鳴らす音が妙に大きく響く。

「誰か、いませんか！」

声をあげ、集落の奥に足を進める。

霧の向こうに人影が浮かびあがり、優は微かに立ち止まった。

影が揺らめき、霧の中からその姿を露わにする。

一対の翼。赤い瞳。鋭利な爪。

優は微かに後ずさった。

それに合わせるように、霧の中から現れた亡霊が優のもとにゆっくりと近づいてくる。

息が乱れ、心拍数が急速に上昇していくのがわかった。

右手を亡霊に向けて、いつでもESPエネルギーを撃てるように準備する。

反対に亡霊はじつと優を見つめるように足を止めた。

暫くそのままの状態で時間が過ぎていく。

亡霊は何もしてこない。まるで、敵意がないことを示そうとしているようだった。

優は息を殺してじつと亡霊を睨みつけた後、ゆっくりと右手を下ろした。

それを合図に、亡霊が背を向けてゆっくりと集落の奥に向かって歩き始める。ついてこい、と促しているようだった。

警戒しながら、亡霊の後を追って集落を横断する。

集落を外れると、再び林が広がっていた。道らしいものはなかったが、草木が枯れていた為に、林の中を進むのは難しくなかった。

林を抜け、開けた場所に出る。先に鳥居らしきものが見えた。傾き、色が落ちている。亡霊はすうっとその中に消えていった。微か

に躊躇した後、亡霊の後を追って、鳥居をくぐる。

古い神社のようだった。左右にはずらりと亡霊が並んでいる。軍隊のように整列し、ピクリとも動かない。優は足を止め、警戒するように亡霊を見つめた。左右に並んだ亡霊は動かない。優を誘導していた亡霊が足を止め、優がついてくるのを待つように振り返る。

優は朽ちた石畳を踏みしめ、ゆっくりと前に進んだ。先行していた亡霊が再び歩き始める。

古い社の影が霧の中に浮かび上がる。その社の前に、一つの小柄な人影があった。亡霊ではなく、明らかな人の形。

先行していた亡霊が優に道を譲るように、左右に並ぶ亡霊の中に消えていく。

優は人影をじっと見つめ、ゆっくりと近づいた。次第に女の姿がはつきりと浮かび上がる。

女の齢は三十ほど。黒く伸びた髪は後ろで束ねられ、微かに痩せこけた顔には聖母のような笑顔が広がっている。着物のような布を纏い、その細身が強調されていた。

とくん、と心臓が跳ねた。

頭が真っ白になり、優は女を見て大きく目を見開いた。

「おかあ、さん？」

自然と漏れた言葉に、女はにこりと笑った。

記憶の中の母親の笑顔と、目の前の女の笑みが一致する。

「なんで……」

女は何も答えない。

代わりに女の手がゆっくりと胸の位置まで上がり、手招きするよ
うに指が動く。

優は吸い寄せられるようにして、女の方へ一歩、二歩と足を進めた。

話したいことが、山ほどあった。

聞きたいことが、山ほどあった。

「お母さん……」

女が小さく頷く。

「どうして、僕を置いていったんですか」

女が悲しそうに顔を伏せる。

「ずっと、待ってた。迎えに来るのを……」

<私も、ずっと待っていました>

脳裏に、女の声の木霊する。ESPエネルギーを使って情報を伝達した時のように、意味そのものが直接脳へ叩きこまれる感覚。

優は足を止めて、女をじっと見つめた。

<ずっと、待っていました。ずっと、ずっと、気が遠くなるほどの時を>

記憶の中の母と、目の前の女の悲しそうな顔が完全に一致する。

その瞬間、優は後ずさった。

記憶の中の母と、目の前の母はあまりにも似すぎている。あの時から、年齢が変わっていない。

「……あなたは、誰ですか？」

声が震えた。

女が首を傾げる。機械のように、ゆっくりと。

「あなたは、僕の母親じゃない」

<お母さんの顔を忘れてしまったの？>

女が悲しそうな顔をする。それだけで、優は胸が締め付けられるような痛みに襲われた。

「あなたは、僕の母親とは違う」

震える声で繰り返す。

<いいえ。あなたは私が産んだの。あなたは、私の子。ほんとうに忘れてしまったの？>

そう言っ、女が距離を詰めてくる。

優は身動きがとれず、女が近づいてくるのを見つめる事しかできなかった。

<ずっと待たせて、ごめんなさい。これからは、一緒にここで暮らしましょう。話したいことが、山ほどあるでしょう？>

女の腕が優の肩に回され、抱きしめられる。
温かった。

幼い頃から何度も夢に見た、母の抱擁。

全てが肯定されたかのような幸福。

全てが救われたかのような錯覚。

<がんばったね。辛かったね。もう、無理に戦わなくてもいいんだよ>

胸の奥から何かが込み上げ、優は子どものように泣きじゃくった。
もう、これが夢でも良かった。

目の前の母親は、温かく、全てを受け入れてくれる。

「何で、僕の事、捨てたんですか」

嗚咽とともに、長年の思いが口から零れる。

<ごめんなさい>

女は質問には答えず、悲しそうな声でそう言って、肩に回した腕に力を込めた。

「良い子にしててね、って約束、ちゃんと、っ、守りました」

<ごめんなさい>

「何で、っ、ずっと、待って、たのに……っ……」

<ごめんなさい>

「何で、僕が、ひぐっ、人じゃないから……っ……ですか？」

優は女の肩を押して、抱擁を解いた。そして、穴の空いた胸を見せる。

「どんどん……っ、戦うたびに人じゃなくなって……もう、僕は……」

<大丈夫。お母さんもだから>

女はそう言って、微笑む。

不意に女の胸部に穴が空き、広がっていく。

<お母さんと一緒だね>

女は何事もなかったように、笑う。

その光景に優はぞっとした。

魔法が解けたように優は突然現実に戻され、後ずさった。
<どうしたの？>

機械仕掛けの人形のように女が首を傾げる。

<お母さんとここで一緒に暮らしましょう。ここなら、誰もあなたを傷つけない>

優は首を振った。

戦闘服の袖で涙を拭い、女に向かって叫ぶ。

「来ないでください」

<どうして？>

女が一步、足を踏み出す。

「お願いだから、来ないでください！」

<何を怖がってるの？ 大丈夫。何も心配することはないのよ>

女の腕が優を抱きしめようとするように開く。

優は身を強張らせ、更に一步後ずさった。

この女は人間ではない。

しかし、それすらどうでもよくなるほどの魔力が女にはあった。

「あなたとは一緒にいれません。あの頃と違って、今は帰らないといけない場所があります」

<お母さんを置いていくの？ こんな寂しいところで、一人で暮らしていけないの？>

徐々に女が距離を詰めてくる。

<あなたを置いて出ていったことを怨んでいるの？>

「違います、そうじゃ、ないんです」

<お願い。置いていかないで>

女の手が優の右腕を掴む。その瞬間、優は左腕を女に向けた。

「ごめんなさい」

左手から放たれたESPエネルギーの波が女を呑みこむ。

何かが割れる音。

同時に、桜井優の意識は何か吸い込まれるように暗闇の中に落ちていった。

5章 16話 ずっと待っていました(後書き)

アンケートとキャラクタ人気投票、次回更新時に回収いたします
改稿と今後の参考にさせていただきますので、よろしければご協力
ください

5章 17話 死ぬ時は

「久しぶりやな。嬢ちゃん」

奈々がホテルの一室に入ると、刈り上げた黒髪に黒く焼けた肌をした五十過ぎと思われる男が笑いながら出迎えた。中部航空方面隊司令官、やまおか山岡忠^{ただし}。

奈々は、お久しぶりです、と言って頭を深く下げた。

「何や、相変わらず堅いな。仕事やないんやから、もっと楽しんでいよ」

山岡はそう言って、座るように促した。奈々は一礼して、ソファに腰かけた。

「三年ぶりやったか？ 何か疲れてるように見えるけど、ちゃんと休んどるか？」

「最近忙しくて。やるべきことが、山ほどあります」

奈々の言葉に、山岡は微かに顔をしかめた。

「色々、活字にもなっとるな。どこもかしこもキナ臭くてかなわん」

山岡は煙草に火をつけて、鋭い瞳でじつと奈々を見つめた。

「神条。お前さんも、絡んどるんか？」

「いえ、そういう意味ではありません。ただ、関係がなくとも関係があると捉えられます」

山岡は静かに頷いた。

「そうやるうな。嬢ちゃんはクリーンや。でも、周りはそうは思わん。僕かて、そうや。こうして会うまで、嬢ちゃんも絡んでる思ってたわ」

山岡はそこで言葉を切って、身を乗り出した。

「中崎さんが暴走しとるんか？ そういう人やないと思ってたんやけどな」

「誰が中心なのか、私にはわかりません。ただ、絡んでいる事は間違いないです」

「それは間違いないな。で、いきなり呼び出して何なんや？ てつきり、嬢ちゃんが絡んでて、そっちの話かと思つてたわ」

奈々は微かに顔を強張らせ、息を吸った。

「山岡中将は、陸自の一部が事を起こした場合、どういたしますか？」

山岡が怪訝な表情を浮かべる。

「事、つて何や？ 中崎さんが起訴されたら、ボイコットでもするんかいな？」

奈々は答えなかった。ただ、じつと山岡の瞳を観察する。

山岡は本当に知らないのだろう。混乱したような様子を見せ、声のトーンが落ちる。

「どういうことや？ それ以上の事が起きるとでも思ってるんか？」

「……山岡中将は、どこまでご存じですか？」

「報道されてる事しか知らん。一週間前に亡霊を消滅させた映像から、対抗装置ができてるつて噂されてるやろ。それが秘匿されてたんは、防衛関係費の上限が原因やって事くらいや。それが本当なら、えらいことになる。僕らは政治屋やない。他の領分侵すんはあかん」

「そうです。本当なら、上が調整すべきでしょう。ですが、防衛関係費の上限を動かす事は、現実的ではありません」

「わかつとる。でも、物事には手順があるやろ。それは政治屋のやることや。僕らがそんなやつたらあかん」

「……陸自が単独でやった訳ではないでしょう。対抗装置を作る為には資金が必要です」

山岡の顔に緊張が走った。

「……嬢ちゃんは本当に関わってないんか？」

「私は、関係者から話を聞いただけです。どこまでが本当なのかはわかりません」

「……何でや。何で、そんなに急ぐ必要あるんや。嬢ちゃんは上手くやつてるやろ。亡霊は日本海から滅多に出てこられへん」

「それだけです。問題が解決する見通しは全く立っていません」

「そりゃ、高望みや。亡霊以外にも、解決する見通しが無い問題なんていっぱいある。僕は軍人やからそういう問題に目がいきやすくなるけど、経済だって全く立ちなおる気配がない。そっちのほうはずっと問題や」

「亡霊の影響を最も受けているのは経済界です。今回も、随分と振り切れました。始まりは、向こうの提案だったのかも知れません。発端は確かではありませんが、陸自の一部、恐らくは上田中将がその話に乗って、膨れ上がっていったのでしょう」

山岡は口を噤み、煙草の火を灰皿に押しつけた。

「……既にえげつない金が動いてもうたんやったら、そりゃ、何か起こるんやろうな……話、逸れたな。陸自が事を起こしたら、僕がどうするかやったか？」

「はい」

「何でそんなこと聞くんや？」

鋭い眼光が奈々を射抜く。奈々は動じず、正面から山岡の鋭い視線を受け止めた。

「参考に、したいのです。私は、自分がどう動くべきなのかわかりません」

両者の間に沈黙が落ちる。

山岡は根負けたように視線を外し、ポツリと口を開いた。

「……総隊の連中が何て言うかにもよるけど、そうやな、多分、僕やったら静観するな。それで、有利な方につく」

「有利な方に？」

「そうや。理想とか思想とか、そんなんはどうでもええ。負ける方について、ぐだぐだと身内同士の争いを引き延ばして国力落とすのは一番あかん」

奈々は頷いて、小さな笑みを浮かべた。

「安心いたしました。もし、私が上手く事を起こせば、山岡中将が力になってくれるのですね」

奈々は冗談っぽく、そう言った。

「そういう冗談は言うもんじゃない」
答めるように山岡が言う。奈々は微笑を浮かべたまま、何も答えない。

山岡の瞳に警戒の色が宿る。

「嬢ちゃん、まさか、本当に」

山岡が何か言いかけた時、奈々の懐から甲高い電子音が響いた。プライベート用ではなく、仕事用の端末からの呼び出し音。

「緊急の連絡のようです。少し、失礼します」

奈々はそう言って、立ちあがった。

山岡から距離をとり、通話をオンにする。

『司令！ 優君が、優君が見つかりました！』

加奈の切迫した声。

「加奈？」

『海保が見つけたんです。信じられないかもしれませんが、優君、生きてます！ 今から映像をそちらに送ります』

通話が切れる。

奈々はぼんやりと端末に目を向けた。

生きてる？

立ち尽くしている間に、端末に映像が送られてきた。

上空から撮影された海。ノイズが酷く、音声はよくわからない。

カメラが何度もぶれる。画面の端に何かが見えた。

音声ノイズが大きくなり、画面が乱れる。

ブレが収まり、ある一カ所にカメラが固定される。

奈々は息を呑んだ。

海の中に、翡翠の光を放つ何かがあった。大きい。

光が強くなる。撮影者が警戒するように高度を上げ、海面が遠のいていく。

「反応……注意……！」

ノイズに混じり、男の低い声がかろうじて聞き取れた。

海面が盛り上がり、翡翠の光を放つ何かが海中から浮かび上がる。

それは、巨大な繭のようだった。全長五メートルほどの繭が眩い光を放ち、空中に浮かび上がっていく。中に横たわる人影のようなものがあつた。

そこで、プツン、と映像が終わる。

再生中に別の映像が届いていたようで、それを再生する。今度は甲板の上に引き上げられた繭の周囲を海保の男達を取り囲んでいるところだった。

さっきの映像よりも繭の光が弱まり、繭の中の人影がはっきりと確認できた。小柄で、子どものようだった。

繭の中で、人影が小さく身じろぎするのが見える。

とくん、と心臓が跳ねた。

「生きてる……?」

自然と言葉が零れる。

それから、奈々は顔をあげて、山岡に目を向けた。

「申し訳ありません。急用ができたため、失礼します」

そう言つて、弾かれたように奈々は走り出した。山岡が何かを言っていたが、気にならなかつた。

奈々は廊下を駆けながら、端末を 통화モードにして耳に押し当てた。

「加奈！ 優君は今どこ！」

「以前に使つた駐屯地前の軍病院です。意識は戻りませんが、バイタルに問題はありません」

「生きてる?」

「はい、ちゃんと生きてます」

「生きてる……」

「はい。生きています」

エレベーターを待つのが面倒で、階段を飛ぶように降りる。身体が軽い。

顔が自然と綻ぶのがわかる。

その日、奈々は数年ぶりに名も知らない神へ感謝を捧げた。

「おじさん、だあれ？」

マンシヨンの玄関先で、まだ幼い子供は訪ねてきた男を見上げて首を傾げた。

「ちゃんに用があるの？」

子どもを見下ろす男は微かに怪訝そうな表情を浮かべた後、頷いた。

「そう。ちゃんに用があるんだよ」

「ちゃんは、奥で休んでるよ」

男の顔が強張る。幼い子供はそれに気がつかないように、言葉を続けた。

「だから、ちゃんには、暫く会えないかも」

「……君は誰だ？」

「だよ」

男の震えた声に、子どもは無邪気な笑みを浮かべて答えた。

男が切羽詰まったように子どもの両肩を掴む。

「を出してくれ」

子どもは首を横に振る。

「だめだよ。おじさんが ちゃんを傷つけるかもしれない」

子どもはそう言っつて、強い意思の込められた双眸で男を睨みつけた。

「絶対に ちゃんには会わせない。 ちゃんを守るのが、僕の

存在理由なんだもん」

何度も経験したような、意識が急浮上する感覚。

重い瞼を無理矢理開くと、眩い光が視界を覆った。思わず、手を目の前にかざして桜井優は光を遮った。

「起きた？」

女性の声。

優は目を細めて、声のした方向に目を向けた。眩しすぎてぼんやりとした輪郭しか見えない。

「明かり、落としてください」

要求通り、すぐに明かりが消える。

「身体に異常はない？」

明日香の顔が見えた。他にも、医師らしき者が三人横に並んでいる。その後ろに奈々の姿があった。

優は周りをぼんやりと見渡しながら、頭を抑えた。

酷く懐かしい夢を見ていた気がする。

男と子どもの短い会話。

うまく思い出せない。

「優君？」

明日香の心配するような声。

優は顔を上げて、それから自らの胸を右手で撫でた。穴がない。何度もそれを確認してから、ポツリと言葉が零れた。

「夢？」

「気分は、どう？」

明日香が覗きこむようにして顔を近づけてくる。優はぼんやりと明日香を見返して、頷いた。

「最近、気が付いたらいつも病院にいる気がします」

そう言うと、明日香は笑みを浮かべた。

「意外と大丈夫そうね。痛いところはない？」

「大丈夫です。あの、胸の傷はどうなったんですか？」

尋ねると、明日香は首を横に振った。

「わからない。君を発見した時には既に外傷はなくなってた」

優はもう一度顔を下に向け、胸を撫でた。確かな心臓の鼓動。

「……亡霊は、どうなりましたか？」

「一週間前に殲滅した。中隊に死者は出なかったから安心して」
明日香の後ろから奈々の声。優は動揺した瞳を奈々に向けた。

「一週間前？ いえ、あの、中隊以外は……？」

「君はここ一週間の間行方不明で、今日見つかったばかりなの。中隊以外の死者は、確認できてるだけで三四〇〇人。これから更に増えるかもしれない」

奈々はそう言っつて、明日香の横に並ぶ三人の医師をチラリと見やっつた。

「問題がなさそうなら、彼と暫く二人だけにしてほしい。安全保障上の話がある」

三人の医師と明日香は顔を見合わせた後、頷いて部屋から出ていった。奈々はそれを見届けた後、つかつかと距離を詰めてくる。

「無事で良かった」

突然奈々の腕が肩に回され、強く抱きしめられる。

奈々の声が震えている事に気づき、優は何と言えればいいか分からず、おずおずと奈々の腰に腕を回した。

「本当に、死んだのかと……」

「この通り、生きています」

言葉に困っつてそう言っつと、背中に回された奈々の腕に力が込められた。

「本当に良かった……」

その言葉に優は頬を緩ませた。そして、微かに迷っつた後、口を開く。

「白流島に行きました」

奈々の身体が離れ、正面から見つめ合う形になる。優はそのまま言葉を続けた。

「亡霊に刺された後、白流島に打ち上げられたようでした。刺された場所には大きな穴が空いていて、でも何故か生きていて、そのまま島の奥にある集落に向かいました」

奈々は何も言わない。

「そこで一体の亡霊と出会っつて、でも、向こうには敵意がないみたいで、その亡霊についていくと、集落の先にある古い神社みたいな

ところまで案内されました。そこに、母親がいました」

奈々の瞳が動揺したように小さく揺れる。

「君の母親は……」

「僕が小さい頃に出ていきました。その頃の姿と、母親は全く変わっていませんでした。多分、前に記憶を見られた時に母親の存在を知って、亡霊がそれを利用したんだと思います。本物の母親ではなさそうでした」

「亡霊が君の母親を装って接触してきたの？ 何か重要な要求が？」

「いえ、あの、一緒に白流島で暮らそう、と。それだけです。亡霊が何をしたいのか、僕にはよくわかりませんでした。怖くなってESPエネルギーを撃ちこんだ瞬間、意識が飛んで気がつけばここに……」

「一緒に暮らす？ それが、亡霊の要求？」

「はい。覚えてる限りは、それだけしか……」

奈々は微かに考え込むような素振りを見せた後、諦めたように息をついた。

「亡霊の思惑はよくわからない。でも、君に対して執着心を持っている事は確かなようね。身柄を返すだけじゃなく、傷も治したみたいだし」

奈々の指先が優の胸元に触れる。優はくすぐったそうに小さく身じろぎした。

「……進藤咲はESP能力を完全に失った」

不意に、ポツリと奈々が言う。

優は一瞬何の事か分からず、一拍遅れてから、ああ、と思い出した。何故か、酷く遠い出来事のように思えた。

「ESPエネルギーを失っただけではなく、新たなESPエネルギーの生成も確認されていない。彼女は、普通の人になった」

普通の人。

奈々が無意識のうちに使ったであろう表現に、優は目を逸らした。「彼女が目を覚ました後、事情を聞いた。彼女はESPエネルギー

を呪いだと考えていた。でも、君の場合はその逆かもしれない」

「逆？」

尋ね返すと、奈々は頷いて真剣な表情で言葉を続けた。

「君は、ESPエネルギーに祝福されているように見える。あるいは、加護を受けているのか。今日、君が発見された時、君は繭のようなESPエネルギーに包まれて海中に沈んでいた。ESP能力が君を守るように勝手に発動したのか、亡霊が君を守るためにESPエネルギーを使ったのかはわからないけれど、君はESPエネルギーに守られている。君のESP能力だけが他と明らかに違う。君個人に限っては、亡霊は敵じゃないのかもしれない」

敵ではない。

ならば、亡霊にとっての自分は何なのだろう、と優はぼんやりと考えた。

どうでもいい存在？ 利用価値のある道具？ 同胞？

どれもしつくりこない。

逆に、自分にとって亡霊は何なのだろう。

「優君？」

「え、あ、はい。あの、それで進藤さんはどうなるんですか？」

「ESP能力がない以上、中隊には籍を残せない。彼女の希望もあって、既に脱隊が決まった。それで、最後に君と話がしたいって」

「話、ですか？」

「そう。君が目を覚ました事はまだ話してない。君の都合がつけば、向こうに連絡するつもり」

「じゃあ、今から進藤さんと会うことはできますか？」

「そう言うと、奈々は困惑したような反応を見せた。

「今から？ 身体は、大丈夫なの？」

「はい。どこも問題ないです」

「……そんなに、私と二人つきりなのが嫌？」

拗ねたように奈々が言う。すぐに優は両手を胸の前でぶんぶんと振った。

「いえっ！　そういうわけじゃなくってっ！　ただ、ESP能力勝手に消しちゃったので」

「冗談。わかってる。二時間くらい待ってて。連れてくるから」
笑いながらそう言って、奈々が立ちあがる。

「それと……」

思い出したように奈々は言って、身をかがめた。
ふわりと甘い香り。

ほんの一瞬、唇同士が触れ合い、すぐに離れる。

「君が生きてて、本当に良かった。白流島の詳しい話は、また今度にね」

最後に悪戯っぽく笑って、奈々が部屋から出ていく。

病室に残された優は放心した状態で奈々の背中を見送った後、ぱたりとベッドに倒れ込んだ。

考えるべき事が数えきれないほどあったはずなのに、奈々の最後の行為で全てどこかへ飛んでしまった。敵わないな、と思う。

優は、ごろん、と転がって目を瞑った。

そこでふと、体調がいいことに気づく。

頭痛も、眩暈も、痙攣も起きない。

優は両腕を目の前に上げて、じっとその手を見つめた。

それから、上半身を起こす。

左手に小さなESPエネルギーを収束させると、微光が指先に纏わりついた。ESP能力にも問題はない。

優はベッドから立ちあがって、軽いストレッチを始めた。一週間意識がなかったにも関わらず、筋肉の衰えは殆ど感じ取れない。

得体の知れない微かな不安が湧き起こり、優は服を捲りあげて、自らの胸元を確認した。傷跡らしきものは何もない。亡霊に突き刺された事など初めからなかったように感じられる。

神奈々はこれを祝福と呼んだ。

進藤咲はこれを呪いと呼んだ。

優はじっと胸元を見つめた後、捲り上げていた服をおろして部屋

を見渡した。それから、ゆっくりと指先を口元に持っていていき、端を強く噛んだ。

激痛とともに、血が流れる。

優は顔をしかめてそれを見つめた後、反対の手を傷口に当ててESPエネルギーを収束させた。微光が傷口を覆い隠す。それから、傷が回復するように願った。

十分な時間を置いた後、傷口から手を離す。傷は治っていないかった。

優はじんじんと痛む指先を見つめながら、安堵の息をついた。

少なくとも、自分はまだ人間だ。

怪物ではない。

今は、その事実だけで十分だった。

立ちあがり、部屋を出る。廊下には案の定、保安部の中村がいた。大男は無愛想な表情を浮かべたまま、優を見下ろすように視線を向けてくる。

「如何いたしましたか？」

「この病院、他に中隊の人はいますか？」

「現在、二十四名の中隊員がいます」

「どこにいるか分かりますか？」

「同じ階の女子病棟と、上の階に散らばっています。この先に小町があるので、詳しくは彼女から聞くと良いでしょう」

「ありがとうございますっ」

頭を下げて、優は中村の横を通り過ぎた。その際、中村が思い出したように言う。

「桜井さん。あなたは私の上官です。外では相応の振る舞いを見せていただければ、他に示しがつきません」

優は驚いて振り返った。中村が深々と頭を下げたところが視界に入る。

「出過ぎた真似をお許してください」

「……いい。気にする必要はありません」

微かに迷った後、優はそう言い切って中村に背中を向けた。

誰もいない廊下を歩んで、病棟を移動する。

女子病棟に着くと、中村が言った通り、保安部の小町美知子がい
た。向こうがこちらに気づき、歩み寄ってくる。

「やっぱり、生きてたんだ」

「結構、しぶといんです」

クスリと美知子は笑って、それで、と言った。

「それで、誰に会いに来たの？」

「誰って訳じゃありません。ここ、誰がいるのかなって」

美知子は納得したとばかりに頷いて、一番近い病室を指差した。

「あそこに第六小隊の子が集められています。それから、向こうに第
五小隊、第四小隊と続きます。その次は第四小隊の隊長さん。上の
階に第三から第一小隊の部屋」

「ありがとうございます！」

優は礼を言って、廊下を進んだ。

第四小隊長と個別に呼ばれていた事を考えれば、他の小隊長はこ
こにいないのだろう。まずは舞に挨拶しようと、美知子に教えても
らった部屋に向かった。

「開けていいですか？」

扉をノックする。

「誰？ いいけど」

扉の向こうから返答が届き、優は横開きの扉をゆっくりと横にず
らした。

「ユウくん？」

舞の驚いたような声。

扉の向こうにはベッドに横たわる舞と、その横に佇む第四小隊の
藤宮綾の姿があった。

「おじやまします」

そう言って、部屋に入る。

「具合はどうで」

そう言いかけた時、舞の左腕が目に入った。肩から先が、ない。

包帯が巻かれよく見えないが、腕の形はどこにも確認できなかった。

「無事、だったんだ。ボクは左腕落としちゃったよ」

舞はおどけたようにそう言っつて、肩を竦めた。

優は言葉を失つて、舞の左肩を見つめる事しかできなかった。

「そんな顔しないでよ。そりゃ、腕がなくなれば多少は不自由だけど、最近の義手は凄いいみただし、そんな大したもんじゃないよ。

あ、ロケットパンチとかもできるかもね」

舞は屈託がない笑みを浮かべて、本当に何でもない風に言っつ。

無理をしているようには見えない。

本当にそれほど気にしていないようだった。

「桜井。こいつに気を遣う必要はない。馬鹿なんだ」

舞のそばにいた藤宮綾が言っつ。優の記憶によれば、綾は舞と最も仲が良く、第四小隊の第二分隊長を務めているはずだった。

「義手ができたら、あやつちにロケットパンチの試し撃ちするよ？」
舞が首を捻り、綾に対して拗ねたように言っつ。

その光景を眺めながら、優はぼんやりと立ち尽くす事しかできなかった。

「ユウくん、本当にさ、変な気遣う必要ないよ。中隊に入った以上、四肢がなくなる覚悟なんて遠の昔にしてんでしょ？ 命があるだけ貰いもんだって」

そう軽く言っつ舞は、先程のおどけた様子と違って酷く危うく映っつた。

子どものような純粹さに、どこか擦り切れきつた大人の顔。

強制的に精神的な成長を促されたような、アンバランスさ。

優はその様子を単純に、怖い、と思っつた。

「用途によつて腕付け変えたりできんのかな」

綾が面白そうに言っつ。

舞は嫌そうな表情を浮かべて、首を横に振っつた。

「うへえ。それはボク嫌だ。便利屋さんみたいになるし」

二人の会話を聞きながら、優は舞の元に一步踏み出した。

「……義手つて、もう手配されてるんですか？」

二人の会話に割って入る。舞が振り返り、にこりと笑った。

「そのはずだよ。傷口がまだ完全に治ってないから、暫くはお預けだけ」

「中隊は、どうするんですか？」

「続けるつもり。ちょっと動き方変えないといけないけど、まあ、問題ないかな。ところで、君の方はどうしたの？ 胸、貫かれてなかったっけ？」

「……気づいたら治ってました」

その言葉に、舞が怪訝な表情を浮かべる。

「それ、ESP能力？ 何か危ない治験でもやったとか？」

「……僕もよくわかりません」

「よくわかんない何かで、一命をとりとめたってこと？ それ、結構やばいパターンじゃない？ 運が悪かったら死んでたってことでしょ」

「そう、なります」

「うへえ。ってか、君が助かってること、皆知らないよ。ハナっちとか、しおりん、凄く泣いてたから早く連絡してあげなよ」

「携帯がなかったから直接伝えようと思ってここに来たんです。小隊長は黒木さんしかいないようだったので、先に黒木さんに挨拶しようかなって」

「うわあ。他の小隊長がいたらボクのところは後回しにするつもりだったんだ！」

「……ご、ごめんなさい！」

「いいよ、いいよ。どこも先輩の扱いなんてこんなもんだよね。早く、他の子に顔見せてあげなよ。綾、本部の子にメール送っというあげて」

「うつつす」

綾が携帯を操作し始める。

優は二人を交互に見つめた後、頭を下げた。

「あの、じゃあお言葉に甘えて失礼します」

「はいはい。いつてらっしゃい！」

舞の言葉に背中を押され、そのまま部屋を出る。

廊下に出て扉を閉めた後、壁に背を預けて優は小さく息をついた。腕の切断。

中隊員が重傷を負う事態は何度も経験していた。誰かが命を落とす事は、覚悟していた。しかし、四肢をなくすという事態は得体の知れない生々しさを持っていて、優の覚悟をいとも容易くすり抜けてしまった。

そうした事態も起こりうるだろう、と予想はしていた。しかし、心のどこかで甘く見ていたのだろう。今も動揺が収まらない。

奈々は、舞の事を伝えなかった。

恐らく、意識が戻ったばかりである為に配慮したのだろう。

ならば、他にも伝えられていない事実があるかもしれない。

例えば、誰かが死んだとか。

そこまで考えて、無理矢理思考を切り替える。

そろそろ、奈々が咲を連れて戻ってくる頃だ。それに、他の中隊員に顔を会わせる気分でもない。優は元来た道を戻り始めた。

女子病棟を出たところで、前方から一人の医師が駆けよってくるのが見える。

「ここにいましたか。念の為、今日はあまり歩き回らないようにお願いします」

目の前で立ち止まった医師は、息を切らせながらそう言った。随分と探し回ったのだろう。悪戯を見つけられたような気持になり、優は慌てて頭を下げた。

「あ、すみませんっ！ すぐに戻りますっ！」

そう言って、医師の横を走って通り抜けようとする。直後、医師が慌てた様子で優の腕を掴んだ。

「走る事も自粛してください」

「は、はい」

大人しく足を止めると、医師の手が腕から離れた。一礼して、ゆつくりと歩き始める。その時、背後から声が投げかけられた。

「無事で本当によかった」

振り返ると、医師と目が合った。そこでようやく以前にお世話になった医師である事に気づく。

「あの時、君を本部へ送り返した事をずっと後悔していたんです」

「僕、結構頑丈です」

反応に困って冗談めかして答える。

それなら安心です、と医師は小さく笑った。

「困った事があれば、ご相談ください。私に可能な事であれば、お力になります」

医師はそう言って、背を向けて去っていった。よくわからないが、良い人のようだった。優はその後ろ姿を見送ってから、再び部屋に向かって歩き始めた。

部屋に戻ると、中で神奈奈々と進藤咲が待っていた。二人はベッド前の椅子に腰かけていて、優が部屋に入った途端、二人同時に立ちあがった。

「それじゃ、私は席を外してるから」

奈々がそう言って、部屋を出ていく。その間、咲は落ちついた様子で何も喋らなかつた。その姿は以前と違いつてどこか堂々としていて、晴れやかな表情を浮かべていた。

奈々が出ていった途端、咲が一步前に出る。

「こんにちは。今まであまりちゃんと話をしたことがなかつたですね」

「避けられてたから」

笑ってそう言うと、咲は真剣な表情で頷いた。

「はい。ずっと避けていました。怖かつたんです」

そこまで言って、咲はにこりと笑った。

「居場所がなくて、中隊に來ました。父は私を人として見てくれな

くて、それが嫌でここに来たのに、いつの間にか私が皆さんを人として見ていられなくなりました。私が、弱かったんです。都合の良い神にいつまで経っても縋って、一人立ちできてなかったんです。馬鹿でした」

優は何も言わず、咲の独白に耳を傾けた。

「私は、人間です。中隊の皆さんも、人間です。私が中隊にいる理由はなくなりました。もしかしたら、初めからそんな必要なかったのかもしれない。ただ逃げてきたただけでした。だから、中隊を辞めようと思ってます。実は、既に届を出しました」

「中隊を辞めてから、どうするの？」

「準看護師学校に行こうと思ってます。それから実務経験を積みながらお金を貯めて、いずれ看護学校に行けたらいいなって」

咲は迷いのない目で言った。

「……看護師さんかあ」

「はい。だから、さようならを言いにきました」

「……ESP能力、勝手に消しちゃったけど、良かったの？」

「桜井さん、多分、私の記憶見ましたよね。私にとって、あれは足枷にしかありませんでした。脱走しようとした私の事、真剣に止められて嬉しかったです。言葉では表せないほど、桜井さんには感謝しています」

そう言っつて、咲は思い出したように片膝を床についた。

「私が昔信仰していた全師様は、魔鬼の災厄から守って下さるそうです。無償の愛を持って、救済を与えると。桜井さんは、全師様と同じ事をしてくださいました。人にそれが可能であるなら、もう私に神は必要ありません。それでも、最後に祈らせていただけませんか？ 虚構の神を完全に追い出す為に」

「進藤さんが、それを望むなら」

そう言っつと、咲はにこりと笑い、次に目を閉じて両手を胸の前で組んだ。そのまま、動かなくなる。

優は咲の祈りを見つめながら、綺麗だな、と思った。その姿には、

彼女がこれまで培ってきた全てが詰まっているのだろう。

祈りはすぐに終わった。立ちあがって、咲は恥ずかしそうに笑う。
「桜井さんに出会えて、本当に良かったです。そして、ありがとうございます」

深々と頭を下げる咲を見て、優は慌てて頭を上げるように言った。
咲が渋々と頭を上げる。

「それでは、これで失礼します」

「うん。頑張つてね」

「はい！ ありがとうございます」

くるりと背中を向けて、咲が部屋から出ていく。

それを見送りながら、優は頬を綻ばせた。いつもどこか怯えた様子を見せていた少女が明るく振る舞っていた事が、単純に嬉しかった。

そして、もつと早く話し合っていたれば、仲良くなれていたかもしれない、とも思つて寂しい気持ちになった。

ベッドに腰を下ろし、目を瞑る。

中隊を離れた咲がどうなるかは分からない。しかし、絶望から這いあがった彼女なら、よほどのことがない限り挫折することはないだろう、と思つた。

「お疲れ様」

戸口から、奈々の声。

目を開けると、笑みを浮かべる奈々と目が合った。優はじつと奈々を見つめて、微かに迷つた後、疑問を投げかけた。

「司令。黒木さんの腕、どうして教えてくれなかったんですか？」

奈々は特に動揺した素振りは見えず、困つたような表情を浮かべて一歩、二歩と優に近づいた。

「意識が戻ったばかりの君に伝えるべきではないと思つた」

「それでも、教えてほしかったです。実は死者が出たんじゃないかって、不安になります」

「……ええ。君の言う通り、伝えるべきだった。私が、伝えたくない

「かつただけ」

奈々はそう言って、優の前で身をかがめた。

「他にも伝ええないといけないことがある。聞いて。君は確かに咲ちやんのESP能力を消し去った。戦力を、削り取った。そう捉える人だって、いる。私はこの事実をまだ他に伝えてないけど、近いうちに統幕やSIAに報告しなければならぬ。これから君の影響力は、大きくなっていく」

真剣な表情で話す奈々に、優はこくりと頷いた。

「君のその力を欲しがる人達が、大勢いる。私は、それを利用する。君の事も、道具として何度も政治的に利用するかもしれない。でも、信じて欲しい」

「司令……？」

「私は、君の味方。それだけ、分かっている欲しい」

「あの、仰ってる意味が、よくわかりません」

「ESP能力者が、必要なくなるかもしれない。亡霊への対抗手段になりうる技術が、ある。実戦に耐えうるものかはわからないけど、今後、徐々にそちらにシフトしていくでしょう。そうなれば、色々な変化が訪れる。君たちが戦う必要がなくなるのはいいことだわ。でも、良い変化だけじゃない。それまでに私達は、いえ、君たちは誰にとっても価値を生み出す存在になる必要がある」

優は、奈々が何を言おうとしているのか、臆気にしか分からなかった。

「あの、僕は何をすれば？」

「いい。君は、何も心配する必要はない。ただ、私はこれから君の不信感を買うような行動をとるかもしれない。でも信じて欲しい」

それを聞いて、優はにこりと笑った。そして、いつか交した言葉を繰り返す。

「死ぬ時は、神条司令の指揮の下に」

5章 二つの覇道 完

6章に続く

人気投票結果

第三回キャラクター人気投票結果です。

最も好きなキャラクターを一人選択してくださいの結果

・ 神条奈々	35票	22.7%		
・ 長谷川京子	27票	17.5%		
・ 桜井優	18票	11.7%		
・ 篠原華	14票	9.1%		
・ 黒木舞	14票	9.1%		
・ 佐藤詩織	13票	8.4%		
・ 宮城愛	11票	7.1%		
・ 川上沙耶	4票	2.6%		
・ 白崎蘭	4票	2.6%		
・ 長居加奈	3票	1.9%		
・ 広瀬理沙	3票	1.9%		
・ 柊沙織	3票	1.9%		
・ 進藤咲	2票	1.3%		
・ 斎藤響	2票	1.3%		
・ 中崎一郎(陸上幕僚長・陸上大将)	1票	0.6%		
・ 望月麗	0票	0.0%		
・ 小山千夏	0票	0.0%		
・ 深海百合	0票	0.0%		
・ 藤宮綾	0票	0.0%		
・ 斎藤準	0票	0.0%		
・ 斎藤幸枝	0票	0.0%		
・ 秋山明日香	0票	0.0%		
・ 橋本恵	0票	0.0%		
・ 奥村音々	0票	0.0%		

・本田真紀 0票 0.0%
 ・上田孝義（中部方面隊総監・陸上中将） 0票 0.0%
 ・華秋院彰 0票 0.0%

好きなキャラクターを全て選択してください（複数回答可）の投票結果

・桜井優 93票 60.4%
 ・神条奈々 80票 51.9%
 ・長谷川京子 69票 44.8%
 ・篠原華 63票 40.9%
 ・宮城愛 61票 39.6%
 ・黒木舞 60票 39.0%
 ・佐藤詩織 53票 34.4%
 ・斎藤響 37票 24.0%
 ・柊沙織 34票 22.1%
 ・広瀬理沙 30票 19.5%
 ・望月麗 23票 14.9%
 ・川上沙耶 23票 14.9%
 ・長居加奈 18票 11.7%
 ・白崎蘭 18票 11.7%
 ・秋山明日香 16票 10.4%
 ・進藤咲 14票 9.1%
 ・斎藤準 13票 8.4%
 ・奥村音々 10票 6.5%
 ・小山千夏 8票 5.2%
 ・上田孝義（中部方面隊総監・陸上中将） 4票 2.6%
 ・深海百合 3票 1.9%

- ・本田真紀 3票 1・9%
- ・橋本恵 2票 1・3%
- ・中崎一郎（陸上幕僚長・陸上大将） 2票 1・3%
- ・華秋院彰 2票 1・3%
- ・藤宮綾 1票 0・6%
- ・齋藤幸枝 1票 0・6%

154の投票ありがとうございました！

一部キャラについては、連続投票がひどかった為、途中から選択自体を消させて頂きました。

比較の出番の多かった沙耶が意外と人気なくてちょっとビックリです。奈々はやっぱり上昇が凄い！

投票内容については改稿や、今後にご利用させていただきます。ご協力ありがとうございました！

6章 1話 篠原華（10）

「実におもしろい」

鈴を転がしたような女の声が響く。

「人間はお前達を亡霊と呼称した。これ以上適切な名前を、私は知らない。こうした偶然の一致というものは、私にとっては非常に面白いものなんだよ」

その言葉に答える者は誰もいない。

「この偶然を、誰かに話したくて仕方がなかった。私は、そういう欲求を保持している。それが、人間なんだ。そう、お前が予想したようにシミュレートが難しい。いや、乱数のようなものだよ。傾向と類型をまとめるだけで良い。ああ、それは私が判断することだ。お前の機能ではない。対抗手段も公開された。フェイズの維持は必要ない」

女は、楽しそうに話し続ける。

「それで、桜井優は完全なイレギュラーで決定したんだろう？ 道理で、ユニットの数が合わない訳だ。初めは、お前のミスかと思っただよ。ああ、エネルギーの総量は、変わらない。彼は、限られたリソースを徐々に支配していつている訳だ。このままお前がユニットの投下を続ければ、彼はお前という存在そのものを支配するだろう。別の存在になるわけだ」

僅かな沈黙を置いて、女はクスリと笑った。

「そう。人間の細胞は時間をかけて全て入れ替わる。それでも、人はそれを同一個体とみなす。連続性の問題だ。前のは、違ったな。離散的な考え方だった。世代という概念があれば、社会形成に大きな影響を与えるようだ。この国にはそれを発端にした家制度というものがあった、個体群はそれに支配されていた。人は家という生物の生殖細胞でしかなかった。ああ、明確な敷居値はない。お前には理解できないだろう。人の考えはあまりにも曖昧だ。状況によって、

意味が決定する。シミュレートは難しい」

また沈黙。

「ああ。そう。私は、つい外れてしまう。それが、人間であるということだ。ああ。フェイズの移行は問題ない。もう、充分だろう。ただ、それほど長くは耐えられないだろうね。そう、ユニットの問題に左右されるが、耐える事は難しい。ユニットの消費が激しくなるのは確実だ」

女は白亜の髪をかきあげて、赤い瞳をすうつと細めた。

「予想しよう。フェイズが移行すれば、この社会は一年と持たない」

6章 反逆の

「おじさん、だあれ？」

マンションの玄関先で、まだ幼い子供は訪ねてきた男を見上げて首を傾げた。

「ちゃんに用があるの？」

子どもを見下ろす男は微かに怪訝そうな表情を浮かべた後、頷いた。

「そう。ちゃんに用があるんだよ」

「ちゃんは、奥で休んでるよ」

男の顔が強張る。幼い子供はそれに気がつかないように、言葉を続けた。

「だから、ちゃんには、暫く会えないかも」

「……君は誰だ？」

「だよ」

男の震えた声に、子どもは無邪気な笑みを浮かべて答えた。

男が切羽詰まったように子どもの両肩を掴む。

「を出してくれ」

子どもは首を横に振る。

「だめだよ。おじさんが　ちゃんを傷つけるかもしれない」

子どもはそう言っつて、強い意思の込められた双眸で男を睨みつけた。

「絶対に　ちゃんには会わせない。　ちゃんを守るのが、僕の

存在理由なんだもん」

そこで、桜井優は目を覚ました。

白流島に流れ着いた日から、毎日のように同じ夢を見る。

夢を見た直後は酷く懐かしい感情を覚えるものの、その夢が何なのか優にはよくわからなかった。

古い記憶なのか。あるいは、亡霊に何か妙な細工を受けたのか。

優はゆっくりと上半身を起こして、目を擦った。直後、全身に衝撃が走る。

「桜井くん！」

声とともに横からぶつかってきた物体によって、優はバランスを崩してベッドに倒れた。その上から、柔らかい感触が覆いかぶさってくる。

「桜井くん……ひぐっ……生き、てる」

「華ちゃん？」

上から抱きついて泣きじゃくる華を見上げて、優は顔を傾げた。

「結構元気そうじゃん」

華の後ろから京子の声。

肩越しに目を向けると、京子がかつかつかとベッドの横に移動し、顔を覗き込んでくる。

「気分どう？」

「良好だよ。それより、あの、華ちゃん？」

胸元に抱きついていた華が肩を震わせ、顔をあげる。目が充血し

ていて、目尻に涙が溜まっているのを見て、優は言葉に困って首を傾げた。

「その、大丈夫？」

「……それは私の言葉！」

華がぐすつと鼻を噉って、声をあげる。

「本当に死んだのかと……だって、大きいお葬式だって予定されて、もう、本当に……」

途中で言葉を切り、華は顔を伏せて肩を震わせる。優は身を起し、華の背中を撫でた。

「大丈夫。もう、二日後には退院できるみたいだから」

優がその声をかけた時、病室の扉が開いた。直後、いくつかの缶ジュースを抱えた愛が姿を現す。

「優……」

優と目が合った瞬間、愛の動きが止まる。

「愛ちゃん、おはよう」

優が口を開くと、愛は小さく笑った。

「……良かった」

それだけ言って、華の様子を眺めるように壁際に移る。華は依然として泣きじゃくったまま顔を伏せている。

「華、いい加減、泣きやみなって。生きてんだから」

横から京子が呆れた様子で言う。華はぐすつと顔をあげ、ジト目で京子を見つめた。

「……京子だって泣き崩れてたくせに」

「あ、あれは、本当に死んだと思ってたから。今はこうして生きてるんだから、そんなに泣く必要ないでしょ」

そう言って、京子はバツが悪そうに視線を外した。

「泣いたの？」

優がからかうように尋ねると、京子は、そりゃあね、と言葉を濁した。そんな京子の様子にクスリと笑みがこぼれる。

「ごめんね。それに、心配してくれてありがとう」

直後、華が立ちあがり、そのまま顔を背けるように、戸口の方へ歩き始める。

「ちょっと、顔洗ってくるね」

「うん。いつてらっしゃい」

華が出ていくのを見送ってから、壁際でじっと立っていた愛が近づいてくる。

「……傷は？」

「もう大丈夫。完全に治ったよ」

優の言葉を無視するように、愛はベッド近くまで接近して持っていたジューズを戸棚の上に置いて、それから優の腹部をそっと撫でた。

「……痛みは？」

「ないよ。というか、刺されたのはもつと上の方」

訂正すると、愛の瞳が鋭くなった。

「……傷口を確認したい」

そう言つて、優の着ているパジャマのボタンを外し始める。

「愛ちゃん？」

疑問に思つて呼びかけるも、愛は優の言葉を無視してボタンを外し終え、そつとパジャマを払いのけた。

「……ナノマシン？」

傷跡がない綺麗な胸部を見て、愛は不思議そうに呟いてから、そつと右手で撫で始める。

「……痛い？」

「……痛くはないけど、あの、愛ちゃん、ちょっと……本当に、待つて、これ、ちょっと、おかしい……本当に、待って……」

次第にさわさわと撫でまわし始めた愛に優が慌てて抗議の声を上げると、それまで何も言わなかった京子が愛のもとにつかつかと歩み寄り、その頭を軽くはたいた。

「ちよ、あんた、本当に真面目な顔して何やってんの！」

「……傷口がない」

愛は撫でまわしていた手を離して、京子の言葉を無視するようにポツリと言う。

「……亡霊の腕が貫いてたはず。過剰投与？」

愛の瞳が、ちらりと優に向けられる。優は少し迷った後、素直に口を開いた。

「……ナノマシンは使っていないよ。海に浮かんだのを海上保安庁に引っ張り上げてもらったんだけど、その時には既に傷がなくなっていたんだって。自分でも何で生きてるのか、よくわかってないから納得のいく説明はできないかも」

愛が考え込むように口を閉ざす。沈黙が落ちそうになったところで扉が開き、目を赤くした華が戻ってきた。京子が話を打ち切ろうとするように声をあげる。

「ま、細かい事はいいじゃん。それより、喉渴いてない？ 愛がジュース買ってきてるからさ、飲もうよ」

京子が戸棚の上に置いてあった缶をこそごと取り出す。その間に華がベッドの前まで近づいて、不思議そうな顔をした。

「桜井くん、何で服脱ぎかけてるの？」

「……京子が嫌がる優を無理矢理……」

しれっと嘘を吐く愛に、京子が呆れた様子で首を振った。

「愛、本当、良い性格してるよね」

二人のやりとりにクスリと笑った時、ふと華と目が合った。

妙な熱さを持った視線と、濡れた瞳。

優は反射的に視線を外して、パジャマのボタンを直し始めた。その間も、華の絡みつくような強い視線は消える事がなかった。

「ねえ、桜井くん」

ボタンを最後までかけ終えた時、華がにこにここと笑みを浮かべながら口を開いた。

「身体、拭いてあげよっか？」

「え？ あの、昨日、看護師さんにやってもらったから大丈夫だよ」

「そっか。うん、病院だもんね」

うんうん、と華は何事もなかったように頷く。

ただ、その瞳には依然として妙な熱が宿っている。

優はそれに気がつかなかったように、再び視線を外した。

友人として付き合っていていく上で、見てはいけないものを見てしまったような気がする。

後ろめたさのようなものを感じていると、それを破るように部屋の扉が開いた。そして、神奈奈々が姿を現す。

「あら。三人ともお見舞い？」

奈々がにこやかに三人に笑いかける。

「はい。神奈司令はどうしたんですか？」

「調書の為に色々と彼から話を聞かないといけなくって」

奈々はそう言っていて、優の枕元まで足を進めた。それまで近くにいた愛が場所を譲るように一歩下がる。

「体調はどう？」

「問題ないです」

頷くと、視界の隅で京子が扉に向かって足を進めるのが見えた。

「あの、それじゃあ、私達失礼します」

「ええ。気をつけてね」

奈々は振り返って、部屋から出ていく三人に向かって小さく手を振る。扉が閉まり、足音が遠のいていってから、奈々は優の方に向き直り、それまでの凜とした態度とは打って変わって、恋人に甘えるようにしなだれかかってきた。

「目、閉じて」

言われた通りに目を閉じた直後、柔らかい唇が押しつけられ、奈々の体重がゆっくりと預けられてくる。それほどの時間を置かずに唇を割って熱い舌が侵入を果たし、奈々の右手が優の胸をまさぐり始める。

会って早々に過剰なスキンシップを求める奈々に、優はくぐもった声を上げた。奈々はそれを無視するように強く体重を預け、強引に唾液を流しこんでくる。

優が軽く奈々の肩を押すと、ようやく奈々は唇を離した。その間に、優は顔を赤くしながら強く息を吸った。

「あの、奈々さん、何かあったんですか？」

息を整えながら単刀直入に聞くと、奈々は困ったように笑みを浮かべ、頷いた。

「進藤咲の事を、S I Aに報告した。三日後、検証が行われる」

「検証？」

復唱すると、奈々は頷いた。

「そう。向こうが中隊以外のESP能力者を用意するから、その能力を消して欲しい」

奈々はそこまで言うてから、優の顔を覗き込むようにして囁いた。
「嫌？」

「……大丈夫です」

「これが成功したら、S I Aは君に別の意義を見出すかもしれない。君は、君のままじゃいられなくなる」

「奈々さんは味方なんですよね？」

確認するように言って、それから優は屈託のない笑みを浮かべた。
「それなら、大丈夫です。全て、お任せします」

奈々は何も言わずに優の瞳を覗きこんだ後、そのまま再び唇を押しつけた。それからすぐに離し、にこりと笑う。

「その時は本部の外に出るから、帰りにどこか寄りませうか。もちろん、二人きりで」

その言葉に、優は目を輝かせた。

「はいっ！」

「色々、順番がおかしいかもしれないけど」

奈々が苦笑して、そう付け加える。優も同じように苦笑して、二人は小さく笑い合った。

6章 2話 白崎凜（8）

「桜井くん、おかえり！」

廊下ですれ違った三人組の少女が、笑みを浮かべて声をかけてくる。

病院から戻ったばかりの優は、着替えて膨らんだ鞆を両手で引きずりながら、ただいま、と返事して、そのまま寮棟に向かった。

「桜井、持ってやろうか？」

後ろから声をかけられ、振り返る。ジャージ姿の沙耶が親しみの込められた笑みを浮かべて立っていた。

「お前、一応怪我人だろ」

そう言つて、優が何か言う前に鞆を強引に奪われる。

「ありがと。でも、大丈夫だよ」

「いいから、いいから。部屋まで運べばいいのか？」

既に運ぶ気満々の沙耶を見て、素直に沙耶の好意に甘えることにする。

「うん。じゃあ、お願い」

「お。今日は素直だな」

沙耶がそう言つて、歩き始める。優もその隣を歩きながら、今日とは？ と聞き返した。

「お前、いつも周りに頼らないだろ。特に、戦闘中。そんなに信用できないか？」

沙耶は前方を見つめたまま、特に怒る様子でもなく言う。

優はじつと沙耶の横顔を見つめて、ついと視線を外した。

「そんなこと、ないよ」

「じゃあ、もつと他人に頼っとけ。遠慮なんて必要ねーからな」

「……うん。次から、弾避けに使うね」

「調子乗んなっ」

頭を軽く叩かれる。優は、いたっ、と小さく呻いて沙耶を睨んだ。

「そんな顔しても怖くねーぞ」

「川上さんは、普通の顔でも怖……」

「ぶん殴るぞ」

「ごめんなさい」

そこで、部屋についた。礼を言って、沙耶から荷物を受け取り、扉を開ける。

「じゃあな。安静にしとけよ」

後ろから沙耶の声。

優は玄関に荷物を置きながら、振り返った。

「うん。荷物、ありがと」

「おう。またな」

ドアが閉まり、沙耶の姿が見えなくなる。

優はそれを確認してから靴を脱いで、部屋に上がった。

暫く留守にしていたせいで埃臭い。

病院から運んだ荷物の中から服を取り出して、洗濯籠に放り込む。それから、優は服を脱いで、シャワーを浴びた。

汗を流してから部屋を出て、食堂に向かう。その途中、角から出てきた詩織とばったり出会った。

「おはよ、詩織ちゃん」

優が声をかけると、詩織は優の顔を見つめたまま動きを止めた。

「詩織ちゃん？」

固まったまま動かない詩織を見て、優は首を傾げた。琥珀の前髪がはらりと目にかかる。

「は、はい！ おはようございますっ！」

詩織は我に帰ったように遅れて声をあげ、それからペコリと頭を下げた。

「どうしたの？ ぼーっとしてた？」

優が笑いながら言うと、詩織は微かに顔を赤くしながら、いえ、と小さく呟く。

「あの、桜井さんを久しぶりに見たら、安心して。本当に無事だっ

たんですね」

「うん。すぐにでも戦える状態だよ。詩織ちゃんは怪我しなかった？」

「軽い火傷だけでした。痕も残ってないです。あの、でも、黒木さんが……」

詩織が言いづらそうに視線を逸らす。優は、詩織の言葉を遮った。「……うん。知ってる」

「あの、他にも進藤さんが抜けちゃったみたいで……空いた二つ分の小隊長を決めてみたいですよ」

優はじつと詩織を見つめた。

「どうやら、進藤咲が脱退した理由について知らないらしい。」

「二つ分？」

「はい。黒木さん、当分は戦闘が難しいそうなので、復帰してもどれくらい戦えるか……」

それについては初耳だった。詩織が補足するように言う。

「あの、それで、多分、第六小隊の奥村さんが適任じゃないかって話になってます。もう一人は、まだよくわかりません」

「奥村さんって確か、最古参だよ。三番目のESP能力者だったかな」

「はい。過去に一度小隊長を務めていたこともあって、経験も実力も凄いです」

詩織はそこまで言って、何かに気付いたように優の顔を見た。

「あ、時間とつてごめんなさい。どこかへ行く予定だったんですよ？」

「ん、これから昼食。詩織ちゃん、良かったら一緒に食べない？」

「さつき食べたばかりで……せつかくのお誘い、ごめんなさい。あの、また誘ってください！」

詩織は本当に残念そうに頂垂れた後、ペコリと頭を下げ、優の横を抜けていく。

「うん、またね」

優は最後にそう言って、食堂に向かった。

その途中、詩織の言っていた二つの空席の事が頭の中をぐるぐると回った。

進藤咲と黒木舞。狙撃と近接攻撃に長けた二人が離脱した今、中隊の戦力は著しく落ちている。咲については、優自らが戦力を削り取ってしまった。

「その分、頑張らないとっ！」

優は痺れの取れた手を握りしめて、一人頷いた。

そして、食堂に入り、適当に食券を買ってからトレイを受け取る。

「桜井！」

テーブル席の一角から、京子の声。振り返ると、華が小さく手を振っていて、その横に京子と愛がいた。優はトレイを持ったまま、三人のテーブルに近づいた。

「昼食、病院で食べなかつたんだ？ 一緒に食べようよ」

京子が隣の空いた席をぼんぼんと軽く叩く。優は少し迷ってから、首を振った。

「ごめん。今日は他の人と一緒に食べようかなくて。また、夕食の時に！」

優はそれだけ言って、三人のテーブルから離れた。

「え？ さ、桜井？」

京子の戸惑った声。優は一度だけ振り返って、ごめん！ と繰り返してから辺りを見渡した。そして、一つのテーブルで視線を止める。優は笑顔を浮かべて、そのテーブルに向かった。

「こんにちわつ。昼食、ご一緒してもいいですか？」

声をかけた先で、一人で食事をとっていた白崎凜が顔を上げる。

「……ええ。どうぞ」

凜は何かを探るように優を見上げた後、短くそう言った。

「ありがとうございますっ」

優は安堵の笑みを浮かべて、凜の対面に座った。

亡霊対策室には、一人で過ごす事を好む者が少なくない。今まで

は、優もそういった少女に対して無理に関わるうとはしなかった。しかし、進藤咲の件で、微かに考え方が変わった。根気強く接触していれば、仲良くなれたかもしれない、と。それに現時点で四人しかない小隊長なのだから、親睦を深めた方が良い。

「新たな小隊長の事で話が？」

凜が食事を中断して、鋭い眼差しを向けてくる。優は苦笑して、首を振った。

「いえ。ただ、白崎さんと食事を一緒にした事がなかったのので、一度、ゆっくり話したいなって」

凜は少し意外そうな表情を浮かべた後、何も言わずに食事を再開した。

「白崎さんは、いつも食堂使ってるんですか？」

「ええ。そちらの方が、時間がかかりません」

凜は食べながら、短く言う。

その様子に、優はおずおずと凜の顔をうかがった。

「あの、もしかして僕お邪魔ですか？ 食事中は喋りたくないとかなら、静かにしています」

「いえ、そんなことはありません。ただ、私あまり喋る事が得意ではないだけ」

凜が僅かに顔を上げて、そう言う。

優はにこりと笑った。

「邪魔じゃないようで安心しました。今まで白崎さんとあまり話した事なかったから、嫌な事とかよくわからないです。嫌だったらすぐ言ってください」

凜は静かに優を見つめた後、小さく笑って口を拭いた。

「桜井大隊長と話すのは、嫌ではありません。あなたが望むのなら、私は全てを拒絶しません」

その大袈裟な答えに優はクスリと笑って首を傾げた。

「白崎さんって、余暇はどうやって過ごしているんですか？」

「読書が多いです。他は音楽鑑賞に……そうですね。今夜、お暇で

すか？」

「今夜ですか？ はい。暇してます」

「よろしければ、夕食を終えた後、屋上にお越しく下さい。楽しんでいただけるかはわかりませんが、是非お見せしたいものがあります」

「見せたいもの？」

聞き返す。

凜はただ穏やかな笑みを浮かべるだけで、答えようとはしなかった。

夜。

優は凜に誘われた通り、寮棟の階段を上って屋上の扉を開けた。

冷たい風とともに、暗闇の中に立つ白崎凜の姿が正面に見えた。

凜の横には大きな機材らしきものがあり、その下にはシートが敷かれている。

「桜井様。こちらです」

凜に呼ばれて、優はそつと扉を閉めた。中から漏れていた光が消え、闇が一層濃くなる。頭上に瞬く星空が唯一の明かりだった。

「こんばんはー」

声をかけて、凜のもとに足を進める。凜のそばにある機材は、どうやら望遠鏡のようだった。三脚で支えられ、そのレンズは天上を見上げている。

「天体観測、ですか？」

優が首を傾げると、暗闇の中で凜は頷いて、シートの上にあった電気ランタンの明かりをつけた。淡い光が辺りを照らし、幾分か視界がよくなる。

「ええ。この辺りは人家がありませんから、光害が比較的抑えられています。今日は既朔で、邪魔な月もない」

凜はそう言って、天体望遠鏡に目を向けた。

「暇な夜は、こうして屋上に出ている事が多いです。覗いてみます

か？」

「いいんですか？」

「ええ。その為に、お呼びしたのです」

優はおずおずと、天体望遠鏡の接眼レンズに目を近づけた。

「……環？」

レンズの先で一つの星を取り巻く環を見て、自然と呟きが漏れた。

「土星です」

「土星？」

思わず聞き返してから、再びレンズを覗く。環に囲まれた本体に薄い縞模様が走っているのが見えた。レンズから外し、凜に目を向ける。

「土星の環って、ここからでも見えるんですか？」

「ええ。それなりの性能を持つ望遠鏡なら難しい事ではありません。月が出ていれば、クレーターなども見えます」

凜はそう言って、優の肩にそっとカーディガンをかけた。

「土星の周りにも注意を向ければ、衛星も確認できます。恐らく、タイタンが見えるはずですよ」

言われた通りに、土星の周囲に目を向けると、それらしいものが確認できた。

「……随分と小さいですね」

「ええ。月の一・五倍の大きさがありますが、些か遠すぎる」

凜の説明を聞きながら、じつと土星を眺める。小学校か中学校の教科書で見たような天体がレンズの向こうに広がっているという事実が、とても奇妙に思えた。

レンズから目を離し、直接星空を眺める。どれが土星なのか、優にはよくわからなかった。じつと目を凝らしていると、隣で凜がふつと笑うのが分かった。

「少しでも、興味を持って頂けたようなら嬉しいです。ホットコーヒーはいかがですか？」

振り返ると、シートの上でポットからコーヒーを注ぐ凜の姿があ

った。

「随分と慣れてる感じがします。毎日、屋上に来ているんですか？」

「最近は来ていませんが、以前は頻繁に。はい、どうぞ」

「わ、ありがとうございます」

凧から湯気があがるカップを受け取り、シートの上に座りこむ。

その隣で、凧が同様に腰を下ろした。

「いただきますっ！」

凧に向かって笑みを向けてからカップに口をつける。温かい。次いで、苦みが口いっぱいに広がった。

「……に、苦いです」

優が涙目で隣に目を向けると、凧は小さく笑った。

「やはり、ブラックは苦手ですか？」

「苦手です。あの、やはり、ってどういうことですか」

「そのままの意味です。一度、あなたのそういう顔を見てみたかった」

凧はそう言って、ミルクと砂糖を差しだした。それを受け取りながら、ジト目で凧を睨む。

「白崎さんって、思ってたより意地悪です」

「もつとつまらない女だと思っていましたか？」

凧は微笑みながらそう言って、カップに口をつけた。

「あ、いえ、あの、そういう意味じゃないです」

「わかっています。また、意地悪な事を言ってしまった」

凧は笑みを濃くする。優も微笑んで、残りのコーヒーを飲み干した。そして、空を見上げる。冷たい風が気持ち良い。それに、恐ろしい程静かだった。

暫く黙って星を見つめた後、再び隣の凧に目を向ける。電気ランタンの淡い明かりで照らされた凧の横顔は人形のように精巧で、陶器のような白い肌が闇夜に映えていた。

誰もいない真っ暗な屋上。見渡す限りは山で、どこにも人の気配もない。ただ、冷たい風が気紛れに音を立てるだけ。優がじっと凧

の横顔を眺めていると、不意に凜が立ちあがった。

「冬の大三角形はご存知ですか？」

そう言って、天体望遠鏡の架台を回転させ始める。

「名前の通り、三つの星が三角形になっているやつですか？」

「そうです。他のそれよりも、わかりやすい。ご覧になりますか？」

「是非！」

優はカップを横において、凜のもとに向かった。

「このまま覗いてみてください」

言われた通り、接眼レンズに目を当てる。三つの星が三角形を構成しているのが見えた。

「赤色の星がオリオン座のベテルギウス。黄色の星がこいぬ座のプロキオン。白色の星がおおいぬ座のシリウスです」

「白いのが一番目立ってます」

「ええ。シリウスは全天で最も明るい恒星です。その明るさは一等星の六倍にもなる」

昔中学校で習ったであろう内容を、凜が淡々と説明していく。優はその説明を聞きながら、じっと天体を眺め続けた。

「……桜井様は、どのようにあの状況から生還なさったのですか？」
いくつかの天体を観測し終えた時、不意に凜が疑問を口にした。

優はレンズから目を離し、ちらりと凜に視線を向けた。

「覚えていないんです。でも、白流島に流れついた事は覚えています」

「白流島？」

「はい。刺された後、白流島の岩礁で目を覚ましました。周りは深い霧に包まれていて、島の中央部分にある神社に大勢の亡霊がいました。その一番奥に、母親に扮した亡霊がいて、一緒に暮らそうって。それだけです。起きたら、病院にいました。もしかしたら、これも夢だったのかもしれないです」

優はそう言って、再びレンズを覗いた。ふたご座が見える。

「どこで発見されたのですか？」

「海中です。発見された時は繭のような光るものに包まれていたら

しいです。人から聞いたただけで、映像とかは見えてないから、どこまでが本当なのかわからないです」

「神条司令から、口止めされていたのですか？」

「いえ。特には何も」

優がそう言った時、じやり、とコンクリートを踏み鳴らす音が近くから響いた。レンズから視線を外すと、すぐそばに立った凜と目が合った。

「亡霊が母君に扮していた、と先程仰いました。お母様は、どうなさっているのですか？」

「僕が小さかった頃に家を出てきました」

短く答える。

凜は何も言わずにじっと優を見下ろした後、不意に屈みこんで優の身体を抱きしめた。微かな甘い香りに包まれ、冷たい風が遮られる。優が何か言おうとする前に、凜の低い声が静かな屋上にこだました。

「寂しかったのですか？」

「……小さかった頃は」

再び、短い答えを口にする。

凜は何も言わない。

「あの？」

抱きしめたまま動かない凜に、おずおずと声をかけるも、抱擁が解かれる様子はない。

「桜井様。貴方が望むのなら、私は貴方に永劫付き従います」

耳元で凜が囁く。その声は、どこか弱々しいものだった。

「ですから、桜井様は私を裏切らないでください。見捨てないでください。それが私の望みです」

「白崎さん……？」

「ESP能力について私は、神から授けられた才覚だと解釈していました。しかし、人の手は、その領域にまで届いてしまった。これからの対亡霊戦略に於いて、我々の価値は低下の一途を辿るでしょ

う。それが、怖い」

何故か、今は凜の事が迷子の子どものように見えた。道標を失い、広い道にポツンと取り残されたかのような、幼い子供。

「私達は帰る場所を持ちません。だからどうか、お導きを。貴方なら、それが出来ます」

縋るように、凜は言う。

優は凜をじっと見つめた後、小さく微笑んだ。

「僕は、何もできません。白崎さんが求めているような事は、多分、何もできません。でも、裏切るとか、見捨てるとか、そういうことは絶対にしないです」

凜が安心したように、弱々しく微笑む。

「それだけで、私は救われます。貴方のESP能力だけが明らかに他と違う。対亡霊戦略としての価値が薄れても、桜井様だけは他に価値を見出すでしょう」

凜は抱擁を解いて立ちあがった。風で、凜の黒髪がたなびく。

「ここは冷えます。そろそろ、戻りましょうか」

優は頷いて立ちあがった。

「桜井様」

立ちあがったところに、後ろから再び凜の腕が絡みつく。優の方が身長が低い為、包み込まれるような格好になった。首元に、凜の長い黒髪が落ちる。

「どうかもう暫く、このまま……」

微かに震えた声。

優は振り払う事ができず、何も言わずにされるがまま頷いた。

強い風が吹く。

光も音もない屋上で、優はじっと凜の震える腕に抱かれたまま、長い間動かなかった。

6章 3話 山田茂雄

「これから向かうのはSIAの本部ではなくて、ある病院なの」

凜と天体観測を行った翌日。戦略情報局の”検証”に向かう為に、本部の車へ乗り込んだ優に、隣に座った奈々が言う。

「病院？」

優が聞き返すと同時に、運転席の中村がちらりと振り返った後、アクセルを踏む。ゆっくりと加速する中、奈々が頷いた。

「病院というよりは、研究施設という表現の方が適切かもしれない。精神疾患を持ったESP能力者を保護している場所なの」

「隔離、ということですか？」

「目的はそれに近い。ESP能力が人体にどういった影響を与えるのか、観測し続ける場でもある」

奈々はそう言うってから優の瞳を覗きこむように上体を屈みこんだ。

「腕の痺れはどう？」

「病院で目を覚ましてから、痺れは一度もないです」

「白流島に入った事で、何らかの影響を受けたのか。あるいは、精神的なものだったのか。いずれにしても、何か身体の異変を覚えたらすぐに報告すること。いい？」

「はい」

頷くと、奈々はにこりと笑ってから窓の外へ視線を外した。

奈々は他人がいる所では基本的に素っ気ない。話しかけても無駄だろう、と思つて優も窓の外に視線を向けた。

枯れた木々が後方へと流れていく。本部の周りは山しかない為、暫くは変わり映えのない風景が続くだろう。

優は目を瞑つて、心地良い振動に身を委ねた。そして、これから出会うであろう戦略情報局の人間について考える。映画で見ると、な、筋肉隆々のエージェントみたいな感じなのだろうか。あるいは、事務処理ばかりでやつれた中年かもしれない。

そうした想像を膨らませながら、桜井優は意識を暗闇の中に手放した。

夢を見る。

それほど大きくないマンションがあった。

その廊下に、一人の男がいる。歳は三十代の中頃だろう。同年代と比べて肩幅が広く、よく鍛えられている事が覗える。そして、男はあるドアの前に立ち尽くしていた。

男の前には、ドアから顔を覗かせる幼い女の子。

「おじさん、だあれ？」

女兒は可愛らしく小首を傾げ、男を見上げながら問う。

男は一瞬何かを言おうとして、言葉に詰まったようにそのまま動きを止めた。

「ちゃんに用があるの？」

男を助けるように、女兒が要件を尋ねる。

男は一瞬怪訝そうな表情を浮かべた後、ゆっくりと頷いた。

「そう。ちゃんに用があるんだよ」

「ちゃんは、奥で休んでるよ」

女兒は申し訳なさそうに言う。

「だから、ちゃんには暫く会えないかも」

それを聞いた男の顔が、崩れた。

女兒の言葉が理解できないとばかりに、男の瞳が女兒の瞳へと真つすぐ注がれる。

「……君は誰だ？」

男の言葉に、女兒は無邪気な笑みで答える。

「だよ」

女兒の名前を聞いた途端、男の瞳が同様に揺れる。そして、男は切羽詰まったように女兒の両肩を掴んだ。

「を出してくれ」

屈強な男に両肩を強く掴まれても女兒は怯えた様子一つ見せず、

にこりと笑った。そして、首を横に振る。

「だめだよ。おじさんが　ちゃんを傷つけるかもしれない」

女兒はそう言っつて、強い意思の込められた双眸で男を睨みつけた。

「絶対に　ちゃんには会わせない。　ちゃんを守るのが、僕の

存在理由なんだもん」

「優君くん」

誰かに名前を呼ばれ、桜井優はパチリと目を覚ました。そして、車内で寝てしまった事に気付く。慌てて上半身を起こすと、どこかの駐車場に停車しているようだった。

「着いたから、降りて」

開いた扉の外から奈々が言う。

「はい」

頷いて、車から降りる

「眠いの？」

「いえ。大丈夫です」

優はそう言っつて、周囲をキョロキョロと見渡した。それほど広くない駐車場に、五階建てほどの白い建築物。ここがS I Aの関連施設なのだろうか。

「中村、待機してなさい。その間、出入りを監視する事」

優が周囲を見渡している間に、奈々が車内の中村に向かって指示を飛ばす。中村が頷くのを確認してから、奈々は建物に向かって歩き始めた。優もその後が続く。

「君は特に何もしなくて良い。私の指示通りに行動しなさい」

奈々がチラリと優に目を向けて言う。

「はい」

頷く。

そして、優と奈々は並んで自動ドアをくぐった。中には小さな口ビーがあり、警備員と受付の女、そして一人の男がソファに座っていた。

奈々が受付に向かおうとしたところで、ソファに座っていた男が立ちあがる。奈々は足を止めて、そちらに向き直った。男が近づいてくる。四十代後半と思わしき細身の男で、大きな瞳が何かを警戒するようにギョロギョロと奈々と優に向けられる。

「神条奈々様、そして、桜井優様ですね？」

「そう」

奈々が短く肯定する。

「私、戦略情報局の金田志郎かねだ しろうと申します。二階に検証の場を用意しております。どうぞ、こちらへ」

金田は詳しい所属は明かさず、早々にエレベータの方に向かって歩き始めた。奈々がそれに続いた為、優も後を追う。

金田がボタンを押すと、すぐに扉が開いた。金田、奈々、優の順番にエレベータに乗り込み、そのまま扉が閉まる。

「今日は、寒かったでしょう？」

金田は大きな瞳をギョロリと奈々に向けて、小さく笑いながら二階のボタンを押した。

「ええ」

奈々は短く答えるだけで、話を続けようとはしない。男はそれで役割を果たしたとばかりに視線を外し、そのまま黙り込んだ。

すぐに二階につき、エレベーターの扉が開く。金田がボタンを押さえたまま、奈々と優に出るよう促した為、優は奈々と同時に廊下に出た。後から、金田がエレベーターから降りてくる。

「こちらです」

金田が足を進め、廊下を進み始める。優はその後を追いつながら、きよろきよろと辺りを見渡した。白い壁に、リノリウムの床。とても静かで、廊下はそれほど長くない。すぐに目的地に辿りつき、金田が足を止めた。

「中へどうぞ」

奈々が扉を開け、中に入る。優も続いて、部屋の中に入った。

白い。それが、その部屋に対する第一印象だった。

白い天井、白い壁、白いタイル、白いベッド。

そして、そのベッドに一人の少女が腰かけていた。

黒い髪と、穏やかな笑みが印象的な少女は、突然部屋に入ってきた優と奈々にゆっくりと視線を向けて、それからどこか遠くを見つめるようにぼんやりとした表情を浮かべる。

優は、その少女を知っていた。

「本田真紀。二番目に発見されたESP能力者。特殊戦術中隊の元第二小隊長でもあります。今ではこの通り、正常な認知能力を有していません」

後ろから金田の声。

柘沙織の記憶を通して見た姿とは違い、どこか大人っぽくなった真紀を、優は呆然と見つめる事しかできなかった。

「ああ、こんな良い数字とれるとは思ってなかった」

薄暗い部屋に、男の笑い声が響く。

「小さい救世主。良いなあ、これ。お前、こっという表現好きだよなあ」

男は嗤いながら、なあ、と隣の小太りの男に目を向けた。

「大衆は、いつでも望んでいるんです。彼らは支配されたがっている。簡単です。夢を見せれば良い。いつも、言っているでしょう」

小太りの男、亡霊対策室広報部長、山田茂雄はニコニコと張り付いたような笑みを浮かべながら、楽しそうにモニタに目を向けた。

そこには、原稿を読み上げる若い女アナウンサの姿がある。

『あの惨劇から、早くも一週間が立ちました。死者は三四〇〇を超え、いまだに多くの行方不明者がいます。その中に、亡霊との戦闘で命を落とした一人の少年がいました』

映像が切り替わり、一人の少年の顔写真が映る。斜めから撮られた写真で、誰かと楽しそうに喋っているところだった。

『桜井優。享年十六歳。特殊戦術中隊に所属する唯一の男性ESP能力者で、隊をまとめる中隊長でもありました』

映像がスタジオに戻り、男性アナウンサーが深刻な表情で口を開く。『特殊戦術中隊には僅か二〇〇名ほどの隊員しかいません。七〇〇を超える亡霊の軍団を前に、彼は最前線で亡霊と戦い、命を落としました。まだ一六歳の子どもが、国を懸けて戦った訳です。そんな中、国に不自然な動きがありました。こちらをご覧ください』

また映像が変わり、地上から撮影された街の様子が映し出される。『新潟県で撮影された映像です』

男性アナウンサーの声。

空の向こうに亡霊群が映る。

亡霊の前には中隊らしき影。亡霊から逃げているような映像。

そこに、閃光が走った。そして、亡霊群の動きが鈍り、次第にその姿が消えていく。

『亡霊群が不自然な消滅を始めているのがお分かりいただけただでしょうか。スローでもう一度。このように、手前の建物の影から、亡霊に向かって何かが発射されています。そして、その何か亡霊群に吸い込まれた直後、亡霊が崩壊を始めています。これは、一体何なんでしょうか。ESP能力者以外に、亡霊に対抗する為の手段があるのではないかと波紋を広げて』

そこで、男はモニタの電源を切った。アナウンサーの声が途切れ

る。『いいよなあ、これ。マジで、いいって。話題性も悲劇性も抜群だわ。生還してた時のやつとき、この二日後に、お前から貰った戦闘記録流したのよ。それも数字良くてさあ。ほんっと、ヤバイわあ』

随分と、浮かれていますね」
山田はニコニコと男を見つめる。男は獰猛な笑みを返し、ああ、と頷いた。

「マジで想像していた以上だわ。なあ、件の戦闘記録も頼む。お前が上手い事言えば、簡単に引き出せるんだろ？ その分、弾むから

さ」

男はそう言っつて、部屋の隅でじっと静かに座る女に目を向けた。女は、先程の映像に映っていたアナウンサーだった。

「な。サービスしてやれよ。お前も数字とれていいだろ。なあ。お前にも弾んでやるつて。そんな顔すんなよお」

「……はい」

女が小さな声で言う。男はその様子を気にもせず、小さく嗤った。「冴えてるわあ。また亡霊こねえかな。誰か死んだらさ、次は深く掘り下げていくか。な。中の人間関係とかさ。絶対いけるつて。な、そう思うだろ？」

「ええ。いけるでしょうね」

山田は、ニコニコと笑みを浮かべたまま頷く。

その細い瞳に蔑視の色が浮かんでいる事に、男は気付かない。

「そろそろ私は失礼します」

「あ？ おう、お疲れちゃん。大田、送ってやれよ。な、わかるだろ？」

「……はい」

大田、と呼ばれた女アナウンサーが立ちあがる。しかし、山田はそれを手で制した。

「ああ。別にいいですよ。今日は早く帰りたいんです」

「おう、そうか？ 悪いな。今度弾むからな」

「ええ。お願いします」

山田はそう言っつて、片足を引きずりながら扉に向かった。

ニコニコとした仮面を外し、後ろの男以上に獰猛な笑みを浮かべて。

6章 4話 金田志郎

「本田、真紀……さん……」

優の口から、自然と言葉が零れた。

「準備は整っています。彼女のESP能力の消去をお願いします」

金田が隣に並び、前方を指差す。そこには三脚で固定されたカメラがあつた。ESP能力が消える過程を記録するつもりなのだろう。「さあ。お願いします」

扉の前から動かない優に、金田が言葉を繰り返す。

優は金田にゆっくりと視線を移し、それから口を開いた。

「ESP能力が失われれば、本田さんはどうなるんですか？」

「あの状態では自立して生活する事が難しい。ここから普通の病院へ移動し、引き続き保護されるでしょう。もちろん資金は国が負担します。何も心配する必要はありません」

ギョロリと金田の瞳が優を射抜き、笑うように枯れた唇が吊りあげられる。優は大きく息を吸って、真紀の元へ歩き始めた。

静かな部屋に足音が響く。

その音に反応するように、真紀が優の方に目を向ける。

優は真紀の前で足を止めて、視線を合わせるように前かがみになった。

「本田さん、はじめまして」

「ふー？」

真紀は愛嬌のある笑みを浮かべながら首を傾げて、意味を持たない言葉を放つ。

優はじつと真紀を見つめてから、その痩せ細った身体を抱きしめた。

「真紀ちゃん」

沙織が言っていたように、耳元で真紀の名前を呼ぶ。ピクリと小さく真紀の身体が震えたが、それ以上の反応はなかった。

「今、楽にします」

そう言って、真紀のESP能力の喪失を願う。

緩やかな風が吹いた。

真紀の身体が薄い光に包まれ、周囲の空気が渦を巻くように音を立て始める。

不意に目の前で何かが弾け、視界が白く染まった。

そこに、真紀の記憶らしきものが流れ始める。

血。

不器用に真紀をあやす父。

父の遺影。

線香。

知らない男女。

罵声。

誰もいないブランコ。

夕暮れの公園。

夜の駅。

カラオケで一人眠る真紀。

別の公園。

ベンチ。

誰もいない駅。

流れる風景。

知らない土地。

驚いた祖母の顔。

警察。

村。

教室の隅でじっとする真紀。

軍。

白い防護服を着た大人たち。

繰り返される注射。

待合室で出会った乱暴な少女と、どこか諦観した雰囲気を持つ少

女。

小銃。

亡霊。

本。

テニスコート。

燃える街。

棺と、沙織の遺影。

怒鳴り声。

誰もいないお墓。

薬。

そこで、真紀の記憶は途切れていた。

「本田さん……」

流れ込んでくる凄まじい情報の波に気を失いそうになりながら、優は真紀の身体をぎゅっと抱きしめた。

周囲を覆っていたESPエネルギーの奔流が収まり始め、同時に真紀の身体がぐったりと崩れ落ちる。

優は真紀をベッドにそっと横たわして、その前髪を梳いた。そして、後ろに振り向く。

「終わりました」

宣言と同時に、扉の向こうから白衣を着た男が現れ、一礼した後真紀のもとへ歩み寄っていく。そして、オシロスコープのような端末を真紀の枕元に置き、ESPエネルギーの測定を始めるのを優はじっと眺めた。

「結果は？」

後ろから金田が急かすように言う。

白衣の男はじっと端末を見つめた後、感知不能です、と短く言った。

「一〇六。本田真紀の持つESPエネルギーが完全に消失した事を確認した。ESPエネルギーの生成能力についてはこのまま実験を続行する」

部屋の隅に設置されたカメラに向かって、金田が声をあげる。

「成功です。確かに、ESPエネルギーが消失した。失われたESPエネルギーがどこへ向かったのかは不明ですが、あなたには確かにESP能力を消す力があるようです」

真紀の近くに立ったままの優に、金田が両目をギョロギョロと動かしながら、嬉しそうに両手を広げる。

「この能力について、お話があります。ここでは何ですから、ゆっくりと出来る部屋を用意しています。こちらへどうぞ」

そう言って、金田が戸口に向かって歩き始める。

優は壁際に立つ奈々と顔を見合わせてから、金田の後に続いた。

「奇妙な風が吹き荒れていましたね。翡翠の色がついていました。体内のESPエネルギーをああいいう無害な風に変換して、拡散させたんですか？」

金田、優、奈々の順番に廊下に出た直後、金田が興奮したように捲し立てる。

優は対照的に小さく首を振って、短く否定した。

「僕もどうやって消したのか、よくわかっていません」

廊下に三人の足音が響く。

「三階へ」

エレベーターホールまで戻り、金田がボタンを押すとすぐに扉が開いた。無言で乗り込んで、扉が閉まるのを待つ。それから、エレベーターが動きだし、微かな振動が響いた。

優は脳裏に高速で流れ込んだ本田真紀の記憶をぼんやりと掘り起こしながら、微かな眩暈を覚えて壁に手をついた。支えるように、奈々の手がすぐに肩へ添えられる。優は一度だけ奈々の無表情な顔を見上げた後、無言で額を抑えた。

エレベーターの扉が開き、金田がボタンを抑えたまま出るように促す。優は小さく頭を下げて、三階に降りた。その後に奈々と金田が続く。

「こちらへ」

そう言って、金田が正面の扉に向かう。

「どうぞ」

中に入ると、会議室のように机が四角形に並べられ、椅子が六つあった。それほど大きくない部屋で、空調の音だけが静かに響き渡っている。

金田に勧められるままに、奈々と一緒に近くの椅子に腰かける。

金田は斜め向かいの席に腰かけ、さて、と口を開いた。

「本日は実験にご協力ありがとうございました。本田真紀のESPエネルギー生成能力の喪失については後日連絡することになります。そして、この稀有な能力を持った桜井様に戦略情報局としてのお願いがございました」

優はぼんやりと金田を見つめた。

「お願い、ですか？」

「左様でございます。一つは、この能力を不用意に行使しないこと。もう一つは、これから定期的に私どもが指定するESP能力者の生成能力を消去して欲しいのです」

「交通費などの経費は？」

隣の奈々が言う。すぐに金田の大きな瞳がギョロリと奈々へ注がれた。

「もちろん、私どもが負担いたします」

「では、時間拘束に対する対価は？」

「……非公式に謝礼を用意いたします」

「それは、戦略情報局の総意か？」

奈々の声が低くなる。それに合わせるように金田の瞳がギョロギョロと動いた。

「SIAは大きな組織です。各部門の独立性も高い。SIAにおいて総意というものは」

「良い。ならば、この案件について、お前はどの程度の裁量権を持っている？」

奈々が金田の話の遮って、新たに言葉を重ねていく。

「多少の無理は押し通せるほど、です」

「よし。定期的なESP能力の消去について、同意する。その代わり、今後の対亡霊戦略についての見解を示せ」

金田が一瞬意外そうな表情を見せ、次に納得したとばかりに頷く。「……ご存じの通り、対抗装置があります。私もそれがどれほどのものか把握していませんが、どうも現時点では実用に耐えるものではない。当分は何も変わりません。ただ、将来的には桜井様の能力によって不要なESP能力を削っていきながら、徐々に対抗装置へシフトしていくことになるでしょう」

「対抗装置の所有権はどこにある？」

金田はギョロギョロと目玉を動かしながら、にいつと笑うだけで答えない。

優は少し思案した後、にっこりと笑って、話に割って入った。

「ESP能力の消去について同意します。その代わり、見解を示せ、と神条司令は仰っています」

金田のギョロリとした瞳が優を射抜く。優はそれを受け流すように小さく首を傾げ、立ちあがった。

「お話ししたくないようでしたら、無理強いはいたしません。ここでの事はお互いの為、なかつたことにしましょう」

奈々が察したように立ち上がる。金田はギョロギョロと優と奈々を交互に見つめた後、静かに口を開いた。

「わかりません。私は、そちらの担当ではない。私は、ESP能力者の管理についてしか」

奈々は金田を見下ろし、ゆっくりと首を横に振った。

「我々には我々の業務がある。そちらにも、そちらの業務がある。もし、お互いに業務を速やかに遂行できる共通の何かが存在するならば、私には手を結ぶ用意がある。そちらの用意が出来たら、連絡が欲しい」

奈々は最後に、失礼する、と言葉を残して、部屋から出ていった。優はチラリと続いて扉の前まで進んでから、思い出したように金

田の方に視線を向けて、にっこりと完璧な笑みを浮かべた。

「良いお返事、お待ちしています」

そう言っつて、金田を一人残し、優は廊下に出た。待っていた奈々と目が合う。

奈々は何も言わずに頷いた後、ゆっくりと手を差し出した。

優はその手をとって、にっこりと笑った。

誰もいない廊下の空気は冷え切り、繋いだ奈々の手のほっこりと温かく感じられる。

そして、道を確かめるように、二つの足音がゆっくりと響いた。

6章 5話 神条奈々(17)

建物から出て、桜井優は小さく息をついた。

「お疲れ様」

奈々が劣いの言葉をかけ、そのまま中村が待機している乗用車へ向かう。優もそれに続いた。

「出入りはありませんでした」

運転席の窓が下りて、中村が報告する。奈々は何も言わずに頷いて、後部座席に乗り込んだ。優も反対から回り込み、中に乗り込む。「まだ確実ではないけど、対抗装置へのシフトは緩やかになりそうですね。中隊の解体まで余裕がある。当初考えていたほど、大きな混乱は起きないでしょう」

奈々はそう言って、シートベルトを締めた。

「対抗装置の露出を控えるように要求するつもりだったけど、その後の中隊員の扱いに最大限の保障を引きだすように方針を変更しましょう」

「保障、ですか？」

「そう。君たちの多くは安全保障上の理由から高校の中途退学を余儀なくされている。特別年金が出なかった中隊員の保障を引きださないといけない。中隊員を受け入れる何らかの教育機関の設立か、防衛大学等の公的機関への受け入れ。あるいは、三種相当への異動。君達は特殊公務員だから解雇される事は基本的にないけれど、十八歳未満がどうなるか分からない。現状でも離脱後の精神的なケアも不完全だから、そっちも力を入れないと。解体後にも出来るだけの予算を引きださないといけない」

優は何度か瞬きした後、じつと奈々を見つめた。

「……そこまで、考えていませんでした」

「未成年を大勢預かったからには、最後まで全員の面倒を見るつもり。恐らく、解体には随分と時間がかかる。その間に各所と交渉を

進めるから、最後まで価値を示し続けるように努力しなさい」

「はい」

「中村、出して」

低いエンジンの音が響き、車が動き出す。

「運が良かった」

ポツリと奈々が言う。優はじつと奈々を見上げた。

「運？」

「対抗装置が既に実用段階にあつて、君にESP能力を消去する力がなければ、不要になったESP能力に対してSIAが何らかの圧力をかけたかもしれない。対抗装置がまだ実用段階になく、君にESP能力を消去する力がなければ、私は中隊を守る為に少し過激な事をしていたかもしれない。でも、そんな必要はなくなった」

そう言つて、奈々は優に視線を向け、微笑んだ。

「君はいつも私を救ってくれる」

奈々の手が、優の頭に添えられ、そつと撫でるように動く。優は抗議するように中村の方へ視線をチラリと向けたが、奈々はそれに気づかないように頭を撫で続け、それから満足したように窓の外へ視線を向けた。

優もそれにならうように、窓の外へ目を向ける。

そして、ふと思つた。

全てが終われば、広瀬理沙のESP能力を消去し、自首してもらおう、と。

ESP能力者という存在の必要性がなくなり、彼女にその力がなくなれば、正当な司法の裁きを受ける事ができるだろう。

その事実が公表されるか、優にはわからない。隠匿されるかもしれないし、数年経過してから発表されるかもしれない。それでも、広瀬理沙は不当な扱いを受ける事なく、その罪を償う事ができる。

ESP能力者を取り巻く問題は、全て綺麗に終わる。

それに気付いた途端、吹き抜けるような解放感を覚え、優は微笑んだ。

不意に、車が停まる。

窓から外の様子を窺うと、人通りの多い街中のようだった。

「さあ、出ましよう」

「あの、どこに行くんですか？」

「帰りにどこかに寄ろうって、言ってたでしょう？」

「忘れたの？」

そう言いたげな目で見つめられ、優は慌てて頷いた。

「は、はい！ あの、今からですか？」

「ええ。さあ」

奈々が手を差し出す。優はその手を握って、車の外に出た。

「中村、待機」

「はい」

奈々の命令に、中村が静かに頷く。

それを確認した奈々は優の手を握ったまま、歩道を歩き始めた。

「あの、中村さん、いいんですか？」

「どっちの意味か分からないけど、両方大丈夫よ。中村に君との関係が知られても構わないし、あそこで放っておいても大丈夫。それより、どうする？ まず、お昼にしましょうか」

「賛成です。少し、お腹すきました」

「何か食べたいのある？ と言っても、この辺りにどういうお店があるのか知らないんだけど」

そう言っただけで人混みの中で穏やかに笑う奈々に見惚れて、優は一瞬言葉を失った。スーツ姿だが、外で見るだけで普段とは随分と違う印象を受ける。

「優君？」

「え？ あ、はい。神条司令は、嫌いなものとかありませんか？」

「名前」

「あ、えっと……奈々さんは、嫌いなものとかありませんか？」

ジト目で睨まれ、すぐに訂正する。

「エスカルゴとか、そういうちょっと変わったもの以外は大丈夫」

「じゃあ……あのお店とかどうですか？」

そう言って、通りの先に見える飲食店を指差す。どこか民族的な装いのレストラン。

「インド料理？」

少し歩いて看板を確認した奈々が不思議そうな声を出す。

「カレーの専門店かしら？」

「みたいです。あ、辛さを選べるみたいです」

小さく駆けて、店頭のボードを覗きこむ。その時、店内からふわりと美味しそうな香辛料の香りがした。

「日本人向けにアレンジしてるみたいね。ここにする？」

「はい！」

頷く。

そのまま揃って中に入ると、照明を抑えた落ちついた内装が目を引いた。壁際には民族的な装飾が施され、中東風の楽曲が響き渡っている。二人を出迎えた店員も中東風の顔立ちをしていて、優は目を輝かせた。華たちと遊ぶ時は大抵ファミリーストランやファストフード店などを利用していた為、優は物珍しそうに店内を見渡した。女性客が多く、会社員らしき一組が窓際で話している以外に男性の姿は見当たらない。

そのまま奥の席に案内され、腰を下ろす。メニューを開く奈々に、優は弾んだ声で話しかけた。

「雰囲気いいですね」

「いつもはどういうところで食事をとってるの？」

「えっと、ファミレスが多いです。後は、ハンバーガーとか。あ、やっぱりカレーばかりですね」

メニューを見て、声をあげる。その少しはしゃいだ様子がおかしかったのか、奈々がクスリと笑った。

「カレーはライスとナン選べるみたい」

「ナンって、このパンみたいなやつですか？」

メニューについた写真を眺めながら首を傾げる。

「そう。多分、手で食べるのかな」

「じゃあ、僕、ナンにします」

「私も。セットで良い？」

「はい。あ、飲み物どうしますか？」

メニューを見ながら、優はにっこりと問いかけた。奈々とこうして外で雑談した事がなかった為、自然と声が弾む。

「んー、じゃあ、チャイにする」

「チャイ？」

尋ね返して、メニューを見つめる。ソフトドリンクの他に聞きなれない名前がいくつか並んでいた。

「インドの紅茶ね。ミルクティーに似てる感じ」

「紅茶……じゃあ、下のラッシーもお茶ですか？」

「それはヨーグルト。かなり甘い飲み物だったと思う」

「じゃあ、ラッシーにします」

「あ、忘れてたけど、辛さは？」

「一番低いあまあまにします。普通はちょっと辛そうです」

「確かに、普通でも辛そうね。私は甘辛にしようかしら」

そこまで話した時、タイミングよく店員が水を持ってきた。奈々がまとめて注文を言う。それが終わってから、優は疑問に思っていた事を口にした。

「奈々さん、飲み物とかに詳しいです。向こうに旅行とかしたんですか？」

「旅行では行ってない。でも昔ね、防衛大時代の時に恵とこういうお店に来た事があったの。私はあまり遊ぶタイプじゃなかったから、恵に色々な事教えてもらったわ」

奈々は懐かしむように小さく笑った。

「防衛大時代の奈々さんって、どんな感じだったんですか？」

「今とそう変わらない。けど、もっと堅かったかもしれない。恵や加奈のおかげで少し丸くなれた」

「一度、写真見てみたいです」

奈々は首を振って小さく笑った。

「もう残ってないかも。それより、君の昔の写真の方が見てみたい。特に小学校の時とか」

「写真、ですか。うーん。持ってきてないかも」

中隊に入る前の事を思い出す。そこで、奇妙な頭痛を覚え、優は額を抑えた。記憶の海に霧がかかったようで、何も思い出せない。

「優君？」

奈々の声。

優は額を抑えたまま目を瞑って、小さく息を吐いた。考える事を止めた途端、頭痛が収まっていく。

「ごめんなさい。ちょっと頭痛が」

「……実験後から少しぼんやりとしてるようだけど、大丈夫？」

奈々が心配そうに顔を覗きこんでくる。優は大丈夫です、と笑みを向けた。

「ちよつと、記憶が混乱してるだけです。すぐ収まります」

「そう……」

沈黙が落ちる。優は水の入ったコップに手を伸ばした。その時、料理を運んできた店員がテーブルの横についた。

「お待たせしました」

そう言って、料理が並べられていく。

役割を終えた店員が戻っていくと、優は先程の空気を払拭するように弾んだ声を出した。

「ナン、凄く大きいですね。食べきれるか心配ですっ」

「中の密度が小さいから、見た目ほど量はないと思う」

そう言って、奈々はナンをちぎり、カレーにつけてから、はい、と優に差し出す。

「さ、口開けて」

「あの……それは……」

「一回くらい、こういうこともやっておかないとね」

奈々は微かに頬を赤く染めながら、そう言った。僅かに躊躇した

後、奈々の差し出したナンをぱくりと食べる。

「何だか、ハムスターに餌をあげてるみたい」

もぐもぐと口を動かす優を見て、クスクスと奈々が笑う。

「ちよつと辛いです」

「その分、甘く、ね？」

奈々はそう言って、またナンをちぎる。優と奈々は同時にクスッと笑った。

店を出て、優と奈々は大通りを手を繋いで歩いた。

「お腹いっぱいです」

「ええ。良いお店だった」

顔を見合わせ、にこりと笑い合う。

それから、ブラブラと街を歩く。

「優君は、どこか行きたいところある？」

「んー。えつと、あまり思いつかないです」

「私も。少し、歩こっか」

「はい」

「寒くない？」

握られた手に力が込められる。優は隣の奈々を見上げて、大丈夫です、と言った。

風が少し冷たいが、繋いだ手から温かい。

賑やかな通りを眺めながら、優はそつと奈々との距離を詰めた。

途端、奈々も擦り寄るように、身体を密着させる。

そのまま、無言で暫く大通りを歩く。

いくつかの場所でバレンタインデーの宣伝がなされ、もうそんな時期か、と優は寒空を見上げた。灰色の雲が広がり、太陽が見えない。

「優君」

不意に、隣を歩く奈々が立ち止まった。優も釣られるようにして立ち止まる。

「帰ろっか」

「え？」

聞き返すと同時に、奈々は懐から携帯を取り出し、それを耳に当てた。

「回収して」

それだけ言って、すぐに携帯をしまう。

「あの、奈々さん……？」

「なに？」

短い返事。

「用事、ですか？」

「違う」

そう言っている間に、中村の乗用車が横につく。奈々は何も言わずに後部座席に乗り込み、催促するように手招きした。わけがわからないまま、後部座席に乗り込む。

「出して」

すぐに車が発進する。優はおずおずと奈々を見上げた。

「あの……？」

「なに？」

「怒ってますか？」

「怒ってない」

それを証明するように、奈々の手が優の手に絡みつく。そして、手を繋いだまま奈々は窓の外に視線を向けた。

何故急に帰ると言い出したのか理解できず、優は困惑した様子で奈々を見上げた。

怒っている訳ではない。用事でもない。優には他に理由が思いつかなかつた。

話しかけても無駄な気がして、奈々から視線を外し、窓の外を見る。それから、優は目を瞑った。

心地良い振動。

そして、夢を見る。

それほど大きくないマンションがある。

その廊下に、一人の男がいた。歳は三十代の中頃だろう。同年代と比べて肩幅が広く、よく鍛えられている事が覗える。そして、男はあるドアの前に立ち尽くしていた。

男の前には、ドアから顔を覗かせる幼い女の子。

「おじさん、だあれ？」

女兒は可愛らしく小首を傾げ、男を見上げながら問う。

男は一瞬何かを言おうとして、言葉に詰まったようにそのまま動きを止めた。

「ちゃんに用があるの？」

男を助けるように、女兒が要件を尋ねる。

男は一瞬怪訝そうな表情を浮かべた後、ゆっくりと頷いた。

「そう。ちゃんに用があるんだよ」

「ちゃんは、奥で休んでるよ」

女兒は申し訳なさそうに言う。

「だから、ちゃんには暫く会えないかも」

それを聞いた男の顔が、崩れた。

女兒の言葉が理解できないとばかりに、男の瞳が女兒の瞳へと真つすぐ注がれる。

「……君は誰だ？」

男の言葉に、女兒は無邪気な笑みで答える。

「だよ」

女兒の名前を聞いた途端、男の瞳が同様に揺れる。そして、男は切羽詰まったように女兒の両肩を掴んだ。

「を出してくれ」

屈強な男に両肩を強く掴まれても女兒は怯えた様子一つ見せず、にこりと笑った。そして、首を横に振る。

「だめだよ。おじさんが ちゃんを傷つけるかもしれない」

女兒はそう言って、強い意思の込められた双眸で男を睨みつけた。

「絶対に　ちゃんには会わせない。　　ちゃんを守るのが、僕の存在理由なんだもん」

そこで、いつものように目を覚ます。

優は目を擦って、窓の外を見た。本部近くの山道のようだった。

急なカーブが続き、強い遠心力が車内に働く。

優は揺られながら、夢について考えた。

あれは、誰の夢だろう、と。

桜井優。柊沙織。進藤咲。三つの記憶が混ざり合い、どの記憶が元になっているのかわからない。あの夢を見るようになったのは、進藤咲の記憶を見てからだ。彼女の幼い頃の記憶が元になっているのだろうか。あるいは、記憶とは無関係な意味のない夢なのか。

車が本部のゲートを通過し、奥のエントランス前で停車した。奈々が待ちわびたように扉を開け、車から出ていく。優もそれに続くと、反対から回ってきた奈々がその手をとった。

「来て」

そう言うや否や、優の手を引っ張るようにしてエントランス・ホールに入る。そのままずっと奈々の部屋がある方に歩き始める。「司令？」

呼んでも、奈々は振り向かない。

そのまま奈々の部屋につき、中へ押し込まれる。

優は何が何だかわからず、手を掴んだままの奈々を見上げた。

「司令、あの、どうし」

言葉が終わる前に、奈々の唇が、優の唇に押しつけられる。それから、壁際まで押され、両腕が抑えつけられた。

「……………っ……………」

状況を理解して、力を抜く。

直後、満足したように唇が離れた。奈々の荒い吐息が妙に大きく聞こえる。

「急にごめんなさい。本当は、もうちょっと遊ぶ予定だったんだけど

ど」

そう言って、優の両手を抑えていた奈々の手が離れ、するすると腰に回される。

「段々我慢できなくなってきた」

奈々の身体が密着するように押しつけられ、再び唇が塞がれる。全身から力が抜け、優はぐったりと奈々に体を預けた。

ゆっくりと、奈々の顔が離れる。奈々の濡れた瞳と目が合った。

「最近、おかしい。君といると性欲を抑えられなくなる。それもESP能力？」

「……………あの、それは……………」

否定しようとした瞬間、奈々の足が絡まるように動いた。そして、荒い息を吐きながら、奈々は妖艶に笑う。

「冗談。今度からは、済ませてから遊びに行きましょう」
優はコクリと頷いた。

綺麗に整えられた校門の前に、華秋院彰の姿があった。

「こんにちは」

華秋院彰は愛想よく笑って、校門から出てきた三人組の女生徒に声をかけた。二人が怪訝な表情を浮かべてそのまま通り過ぎようとするも、そのうちの一人が興味を持ったように足を止めた。

「人探しをしているんです。この方をご存じありませんか？」

華秋院彰はそう言って、一枚の写真を見せた。後ろで見ていた二人が、写真に目を奪われたように近づいてくる。

「綺麗……………」

一人がポツリと呟いた。

「名前は桜井優といます。ご存じ、ありませんか？」

「あの、すみません、知らないです」

女生徒の一人が首を横に振る。その時、別の少女が何かに気付い

たよりに声をあげた。

「あ、自衛軍の？」

「え？ 自衛軍？」

「亡霊が上陸した時に、死んだって報道された人」

そのやりとりに、華秋院彰は苦笑した。

「正確には、自衛軍ではなく亡霊対策室の特殊戦術大隊をまとめている者です」

「へえ……私達より随分と年下じゃない？」

「確か十六歳だつて」

「うそ、同年？」

それを聞いた華秋院彰の瞳が、すうつと鋭くなる。

「失礼ですが、あなたたちは一年生ですか？ 彼、昨年の秋ほどまでここに通っていたそうなんです。ご存じありませんか？」

その言葉に、三人が顔を見合わせる。

「知ってる？」

「知らない。つてか、これだけ目立つ容姿してたら、噂になってるでしょ。男子自体少ないし」

「病気でずっと休んでたとか？」

華秋院彰を無害と認識したらしく、三人の女生徒が賑やかに言葉を交わし始める。それを華秋院彰は観察するように眺めてから、諦めたよりに写真を懐にしまった。

「お時間、割いていただいてありがとうございます」

「いえいえ！ がんばってください！」

「あ、明日クラスの皆に聞いてみましようか？」

「……では、お願いします。こちらが電話番号になります」

そう言つて、写真とともに携帯の番号を手渡す。写真を受け取った少女は、写真を食い入るようにつめて動かない。

華秋院彰は最後に一礼してから、花公院と示された校門に背を向けた。

桜井優の過去が途切れている？

華秋院彰は胸に奇妙な焦燥感が広がっていくのを感じながら、手帳を広げた。

花公院の名簿にも、生徒の記憶にも桜井優の存在が残っていない。表の総基ネットにも、エクストラネット上に創られた裏の総基ネットにもない。亡霊対策室のパーソナルデータも消失している。家族もいないようだった。

桜井優の過去を示す何かが、見つからない。

この時間軸上に突然現れたかのように、桜井優が特殊戦術中隊に入隊してからの記録しか見当たらない。

「何が起きてる？ どうなっている？」

華秋院彰は呟きながら、焦燥感とともに奇妙な高揚感を感じた。

過去に取材してきた心霊スポットや、超常現象のどれよりも奇妙な事がすぐそばで起きている。その事に、華秋院彰は強い興奮を覚え始めていた。

「本物だ。彼は、本物だ」

絶対に真相を掴んでやる。そう決心する。

桜井優のESP能力が確認された時、SIAが自衛軍が指紋と血液を登録したはずだった。その時の記録を調べれば、当時の住所や環境がわかるだろう。そこから、掘り起こしていけば良い。

「心……」

興奮した華秋院彰は、うわごとのように一人の女性の名を呼びながら、花公院を後にした。

6章 6話 広瀬理沙（7）

『本日、一連の騒動に対する責任をとるという形で、陸上幕僚長の辞任が発表されました。また、中崎元陸上幕僚長は対抗装置の存在を認め、カルネアデスの舟板という正式名称を明かしました。現在、中崎元陸上幕僚長はこれ以上の事について黙秘を続け』

広瀬理沙は、街角の巨大モニターに流れるニュースを見て、足を止めた。

『近く証人喚問が行われ 求心力の低下は深刻で、事実上の破綻を意味し 不死鳥幹部はこれについて』

雑踏の中、立ち尽くしていた理沙の肩を誰かの手が叩く。慌てて振り返ると、制服に身を包んだ警官の姿があった。

「君、学校は？」

「……学校やめたばかりで、アルバイト探してるところなんです」

「ああ。不景気だから大変だろう？ あ、何か身元を証明できるものがある？」

「……ないです」

「あー、じゃあ名前と住所は？」

とくん、と心臓が跳ねる。

偽名を使うか、堂々と本名と住所を名乗るか迷った時、背後から轟音が響いた。

振り返ると、通りに止められた車が炎上しているのが見えた。

「事故か？」

警官が理沙から視線を外し、車の方に歩き始める。

『カルネアデスの舟板の資金源や、計画に関わった者について東京地検特捜部も捜査に乗り出し』

アナウンサーの声が喧騒の中に響く中、警官が車の前で足を止める。

その時、嫌な予感がした。

「逃げる！」

反射的に叫ぶ。

瞬間、全ての音が消えた。

周囲の人々が、突然叫んだ理沙に驚いたようにゆっくりと振り向く。

不気味な静寂の中、理沙は本能に従い、警官から離れるように駆けだした。

閃光。

炎上している車の窓が大きく膨らみ、耐えきれなくなったようにガラスが弾け飛ぶ。そして、車の中から爆炎が広がった。

爆音。

それを合図に、遠のいていた音が一斉に戻ってくる。

轟音が鼓膜を叩く中、理沙はその身をアスファルトの上に投げ出した。

頭上を熱風が通り過ぎていく。

悲鳴。

振り返ると、焼け焦げた警官の死体が見えた。それから、倒れて動かない人影がいくつか。

「引火？」

人が集まり始め、騒がしくなる。

理沙は立ちあがって、ゆっくりと警官の死体から離れた。

そして、人混みの中に身を隠す。その時、アスファルトで擦りむいたのか、腕から血が流れている事に気付いた。

傷口を抑え、人混みをかき分けていく。早く離れたかった。

人の輪から飛び出した時、背後から再び轟音が響いた。そして、悲鳴。

振り返ると、反対の通りに聳えるビルの二階から煙が出ていた。

何が起きているのか理解できず、その場に立ち尽くす。

そこに、再び轟音が轟いた。通りに並ぶビルの窓が次々と吹き飛び、爆炎が飛び出していく。そして、そこから燃え上がる人影が落

下するのが見えた。

遠くからサイレンが近づいてくる。それに重なるように、再び爆音が響いた。

『では、もし防衛省が対抗装置開発に着手していなければ、上陸した亡霊によって、どれほど被害が拡大していたと思いますか？』

『それは、結果論ではありません。対抗装置開発の必要があったなら、国会で話し合う必要があったのではないですか。日本は、民主主義の国です。官僚が勝手に予算を組み替えていいはずがない。我々不死鳥党は、与党の深刻な求心力低下について追及していく方針です』

神条奈々はテレビから流れる音声に耳を傾けながら、各紙に目を通していた。

『ですが、私にはカルネアデスの舟板という名称が全てを表しているように思えます。生き残る為には、他者を突き飛ばして水死させても罪には問われない。同様に、我々は生き残る為に亡霊を突き飛ばさなければならぬし、冗長な民主的手続きを律儀にとっている場合ではなかったのだ、と』

『待ってください。その為に、官僚の暴走を許す、とうのはおかしい。官僚が暴走する必要なんてなかったんです。予算の割り振りは国会の仕事です。そう決められているんです。それが、日本なんです。各個人が己の正義を信じて行動に出たら無茶苦茶になりますよ。それをまとめる為に、国民に選ばれた我々がいるんですから』

『しかし、それが機能していないから、こういう事態になったと』

『そうです。与党は既に機能を失っているとしか思えない。だから、官僚も勝手に動いた。我々不死鳥党は』

そこで、奇妙な電子音が響いた。そして、画面上部に緊急テロツ

ブが流れる。

「都内で無差別連続爆破事件？」

奈々は新聞を放りだして、怪訝な表情を浮かべた。

直後、携帯端末が咆哮をあげる。それを手にとった奈々の動きが固まった。

都内にて、ESPエネルギーの確認。

それを知らせる字面を見つめてから、テレビ画面の上部に流れるテロップに目を向ける。

奈々は立ちあがって、玄関に向かった。同時に扉が開かれ、加奈が飛び込んできた。

「司令！ ESP能力による無差別爆破が確認されました！ 抽出された波形は無登録のもので、特定できません！」

「無登録？ 逃亡中の広瀬理沙ではない、と？」

「全くの別ものです。警察が一带の封鎖を始めました。SIAは探知作業に入っています」

「……桜井優君を投入する。彼の探知能力の方が精度が高い。中村を呼び出して！」

「はい！」

加奈が駆けていく。

残された奈々はスーツに着替える為、服を脱いだ。そして、舌打ちする。

「こんなタイミングで……」

全て、緩やかに終わる。対抗装置が正式に配備されれば、亡霊の脅威も収まる。

そう思っていた矢先に無差別殺傷か、と奈々は忌々しげに顔を歪めた。

「こんな時に……」

上田中将は呟いて、一緒に食事をとっていた白崎蘭に目を向けた。
「カルネアデスの舟板の露見が早すぎた。おまけに、またもやESP能力による事件。これも露見すれば、引き継ぎに深刻な影響を与える可能性が高い」

「そうかな。カルネアデスの舟板の存在を正当化できる。そんなに悪い事じゃない。プロパガンダを見直せば修正可能だ。桜井優によるESP能力の消去について公表し、社会不安さえ払拭すれば大事にはならないよ」

蘭はそう言っつて、口を拭った。

「そもそも、ここまで上手くいきすぎたんだ。これくらいのトラブル、起きて当然だ」

「……中央官庁に対する根回しも終わっていない。内閣がハリボテであることが露見した以上、解散は避けられないだろう。ここで不死鳥が出るには早すぎる」

「確かに準備不足は否めない。場合によっては、不死鳥への攻撃を遅らせて、その間に編成を済ませよう」

蘭の言葉に、上田中将は頷いた。

「……それしかあるまい。中崎陸上大将を早期に失ったのが痛手だ。私だけでは、あれほどの求心力を得る事ができない」

「求心力など、後からついてくるものだよ。不死鳥への拘束が成功すれば、大多数の勢力を取り込む事ができる」

蘭がそう言っつて、食事を再開した時、上田中将の携帯が鳴った。立ち上がり、蘭から少し離れる。

「誰だ？」

『金田です。爆破事件と関係ない無登録のESP波形が続々と確認されています。現在、三十六。我々はこれからも増え続けると予想を立てています』

上田中将は、一瞬向こうが何を言っているのか理解できなかった。「どういうことだ？ ESP能力の発現が一斉に？」

『探知が間に合っていないません。全体でどれほどの発現が起こったの

か、想像もできない。現在、登録の為に接触を繰り返していますが、追いついていません。現在、各所に応援を 』
「桜井優を出せ。登録は必要ない。片っぱしからESP能力を消去しろ」

『それが、桜井優は爆破事件の容疑者を探知する為、既に現場へ向かっているようです。それに、彼一人だけでは間に合わない。大きな混乱が起きる可能性があります』

「人手が足りないなら亡対室の保安部に出動を要請しろ。それと、ESP能力が発現した者は全て女か？」

『確認されているのは全て女性です。私もこれから登録の為に回らなければなりません。失礼します』

「ああ。異常があればまた報告してくれ」
通話が切れる。

「何だっただんだ？」

後ろから蘭の平坦な声。

上田中将は振り返って、唸るように口を開いた。

「爆破事件とは別に、無登録のESP波形が次々と見つかっているらしい。現在、三十六」

「オーバードローアタックか。処理能力そのものへ攻撃し、溢れた任意のコードを強制的に実行させる」

蘭の目に鋭い光が宿る。上田中将は怪訝な表情で蘭を見つめた。

「何が言いたい？」

「そういう情報的な攻撃手段が存在する。恐らく、亡霊の仕業だろう」

蘭はそう言って、立ちあがる。

「亡霊の天敵であるESP能力者を、逆に攻撃に利用しようとしているのかもしれない。あるいは、初めから脅威とも思っていないのか」

「亡霊が、ESP能力者を大量に創りあげた、と？」

「そういう方法に辿りついたのかもしれない。これから発見される

ESP能力者は中隊に入れない方が賢明だろう。時限爆弾かもしれない」

「それが本当なら、攻撃のレベルが変わった事になる」

「過去に、亡霊は一度だけ対策室の中枢システムを落としている。そうした攻撃は以前から続いていたにも関わらず、我々が気づいてなかっただけなのかもしれない」

「……亡霊は一体何を企んでいる？」

上田中将の問いに、蘭は考えるように黙り込んだ。そして、ポツリと言葉を零す。

「まるで、負荷実験だ。我々は、試されているのかもしれない」

その例えに、上田中将は黙り込んだ。

6章 7話 オーティン

「えと、反応がいつぱいありすぎて分かりません」

亡霊対策室の正面ゲートから黒い乗用車が出ていく。その狭い乗用車の中に桜井優の戸惑った声が響いた。

「反応が？」

後部座席で、優の隣に位置する奈々が不審げな顔を向けてくる。

「小さい反応が、いつぱいあるんです。亡霊ではなく、ESP能力者みたいです」

奈々は考え込むように口を閉ざし、それから首を横に振った。

「現場に着いたら、封鎖地域一帯の中にいる反応だけを追う事は可能？」

「多分、可能です」

「なら、現場に着いてから探知して。小さい反応はいくつくらいある？」

「三〇〇を超えています」

「……三〇〇？」

奈々の動きが止まり、それから珍しく上擦った声をあげる。

「はい。関東近辺で三〇〇です。遠くにもいつぱい反応があって、全体の数は掴めません」

奈々は何も言わずに携帯を取り出し、それから素早く番号を押して携帯を耳に当てる。

「こちら亡霊対策室、神条。ESP能力の発現状況に異常は？」

直後、奈々の表情がみるみるうちに硬くなった。

「四〇？ 違う。関東だけでも三〇〇を超えている可能性が高い。探知手段を見直せ……今すぐだ！」

奈々はそう叫んで、通話を切った。そして、疲れたようにシートへ体重を預ける。

「神条司令？」

心配になって問いかけると、奈々はゆっくりと優のもとへ振り返った。

「ESP能力の異常な発現が確認されてる。全部、崩れるかもしれない。中隊を解体するまでのプランも、カルネアデスの舟板への緩やかな移行も、全部」

ようやく一つの終わりが来ると思ったのに。奈々の口からポツリと零れた言葉が、狭い車内に重く響き渡った。

優は口を開きかけて、寸でのところで口を噤んだ。安易な慰めの言葉を口にしたところで、何にもならない。それどころか、奈々を傷つける気がした。

顔を伏せた奈々の手を黙ってそっと握る。奈々はゆっくりと顔を上げて、弱々しい笑みを浮かべた。それから、緩やかに抱きしめられる。奈々の身体が小刻みに震えるのを感じながら、優は遠くで新たなESPエネルギーの爆発を確認した。

周囲に建ち並ぶ建造物の窓から次々と爆炎が飛び出し、ガラスの破片が歩道に降り注ぐ。悲鳴が響き渡る中、逃げるように発進した乗用車の内部に閃光が走り、中から火柱が現れる。

轟音に包まれながら、理沙は無意識のうちに駆けだした。

爆発が起きる度、直前に奇妙な胸騒ぎが起こる。理沙はこの感覚を知っていた。過去に桜井優が理沙の前で全方位に無数のESPエネルギーを放った時に感じた奇妙な共鳴。この連続爆破の原因がESPエネルギーであることを頭の奥で理解し、理沙は走った。周囲にESPエネルギーの探知が行われれば、巻き添えを受けてすぐにSIAに捕捉されてしまう。

角を抜けて、走り続ける。その通りには何故か、人が一人もいなかった。都合が良い。後方を確認しながら駆ける。空に黒い煙があがっていた。いまだ爆発は続いているようだった。

「こんにちは」

不意に、頭上から声がかげられた。胸の奥にすうっと染み込むような、低く落ちついた声。その声は理沙に奇妙なほどの安堵感をもたらし、自然と足が止まった。

「はじめまして、広瀬理沙。随分と探したよ」

上空を見上げた理沙は、思わず目を見開いた。

そこには、翡翠の翼を広げた一人の若い男の姿があった。日本人離れた白髪に、毒々しい赤い瞳。そして、嘘みたいに整った顔立ちをした男は、理沙に向けて柔和な笑みを浮かべ、口を開いた。

「何故、逃げる？ 君には力がある。逃げる必要なんてどこにもない」

男はそう言つて、理沙の前に降りたつた。理沙は男の背中から広がる翡翠の翼に目を奪われ、動く事ができなかった。

男の、ESP能力者？

「もう、逃げる必要なんてない。君には、大勢の仲間がいる。君は一人じゃない。もう、逃げる必要はなくなったんだ。誰も、不幸にならない世界。私は、それを作る。ねえ、私達ESP能力者にはそれが出来るんだよ。私達には、それだけの力があるんだ」

男は演説でもするように両手を広げながらそう言つて、理沙の方へゆっくりと歩み寄つた。理沙は男が何を言おうとしているのか理解できなかつたが、抗いがたい奇妙な魅力を感じ、男の赤い瞳をじつと見つめた。

「私は、全てのESP能力者に無償の愛を捧げよう。だから、私に従つて欲しい。私には君が必要なんだ」

男の右手が、ゆらりと理沙に向かって差し出される。

「いこう。君の居場所を用意してる。封鎖が完了する前に、ここから出ないと。私には、それができる」

理沙は男の赤い瞳に魅せられたようにコクリと頷き、その手をとつた。

「そういえば、自己紹介がまだだったね。私は、そう、オーディン。」

我が名は、オーディン。君達ESP能力者を勝利に導く者だよ」
オーディンと名乗った男はそう言って、光翼を大きく広げた。
その姿は神の如く。その双眸は亡霊の瞳と同様に、血の如く。
そして、人を魅了するどこか人間離れた容姿と声に、理沙は何
故か桜井優を思い出した。

検問を抜けて封鎖地域に入ると、ビル群の向こうに黒煙が見えた。
桜井優は車内から外を眺め、ESPエネルギーの出所を探った。
しかし、封鎖地域内にESPエネルギーの反応が一向に確認できな
い。

「容疑者は確認できる？」

奈々の緊張した声に、優は首を横に振った。

「中には何もありません。逃走した可能性が高いです」

奈々は頷いて、携帯に目を向けた。

「最後の爆破が二〇分前。それから動きがない。既に逃げたようね」
「どうしますか？」

「……待機しましょう。SIAが問題のESP波形を記録して、そ
れをもとに探知に入ってる。すぐに出れるよう、近辺のホテルを手
配するから少し待ってて」

奈々はそう言って端末を操作する。優はその間、目を閉じて周囲
のESPエネルギーを探った。

やはり、封鎖地域内にESPエネルギーは確認できない。しかし、
その外には数えきれないほどのESPエネルギーが確認できた。そ
れに、先程調べた時よりも反応が増加している気がする。

サイレンの音。

目を開けると、回転灯の赤い光が前方から接近していた。

「死人、出たんですか？」

「まだ連絡は来てない。けど、恐らくは少くない数の死者が出て

いるでしょう」

奈々は端末を操作しながら、淡々と言う。

優は救急車両が横を通過していくのを見て、目を伏せた。

そこで、微かな頭痛を覚え、額を抑える。

「優君？」

隣の奈々が端末の操作を中断して、心配そうに顔を覗きこんでくる。

優は奇妙な寒気を感じて、身を震わせた。

「……僕の中のESPエネルギーが増えた気がします」

それを聞いた奈々は顔を強張らせて、携帯を耳に当てた。

「亡霊対策室の神条だ。今からそちらに向かう。ESPエネルギーの測定を頼みたい……そう。緊急性が高い」

すぐに通話を切って、奈々は新たにボタンを押し、耳に当てる。

「加奈？ 今から小隊長の四人を、いえ、音々と葵も含めた六人のESPエネルギーを測定し、変化がないか確認して……わかった。

そう、お願い」

通話を終えた奈々はすぐ運転席の中村に視線を移した。

「前に行ったSIAの施設に向かって」

「はい」

停車していた車が動き出し、微かな加速感が全身にかかる。

「優君。大丈夫？」

「はい。少し気分が悪いだけです」

優は自分の中で何かが膨れ上がっていくのを感じ取りながら額を抑え、ふと思った。

この莫大なエネルギーはどこからやってきているのだろうか？

「オーディンは北欧神話と呼ばれる作り話に出てきた一人の神の名前だ。この場合の神とは、そう、高き者のこと。オーディンは知を

得る為に、自らの身体を犠牲にする。彼にはある婉曲な呼び名が用意されていた。それは、”旅路に疲れたもの（ガングレリ）”

ころころと笑うような女の声が林の中に響く。

「自覚がないのか？ 私には疲労の色が見える。間違はなく、お前は疲れている。だから、こんな回りくどい事をしているんだ」

そう言つて、白髪を掻きあげながら、姫野雪は凶悪な笑みを木の枝に止まるカラスに向けた。

「当分の間、私がオーデインを動かす。お前はダメだ。お前は人にはなれない。前の件でそれがよくわかった」

木の枝から雪を見下ろすカラスの瞳は、血のように赤かった。

「そうだ。こちらで面白い奴を見つけた。広報部をとりまとめる山田茂雄という男。それなりの地位にいて、なおかつ利用しやすい。

オーデインではなく、私がオーデインの窓口として接触するつもりだ。奴は放送局と繋がりを持っている。必要があればユニットとして運用しても良い。その方が、支配も容易になる」

それと、と雪が何かを言いかけた時、ガサリ、と草木を踏み鳴らす音が響いた。口を噤んで、物音のした方に目を向ける。

小道の先に、四十半ばの痩せた女がいた。女は雪と目が合うと小さく頭を下げ、そのまま小道を歩いてくる。雪も小さく頭を下げ、女が通りすぎていくのを見送った。

「桜井優はどうする？ そう問うつもりだったが、良い。すんなりと自覚させる方法を思いついた。やはり、人のコントロールは容易い。そうだろう？ 私自身、自覚してるんだ」

雪はクスリと笑い、ゆらりと空を見上げた。

「恐ろしい程までに、寒い。嘘みたいに、怖い。悠久の時も、終わりの時も、全てが怖い。人は成長過程に於いて、こうした恐怖への耐性を自然に身につけると聞いた。だが私は、それを身につける事が叶わなかった。お前とリンクすると、孤独感に苛まれて仕方ない。お前には、この感情が理解できないだろう？」

カラスは何も言わずに羽ばたいていく。

林の中に一人残された雪は、寒さに凍えるように自らを抱きしめ、
白い息を吐いた。

その姿は、途方に暮れている子どものようで、あるいは神に祈る
信徒のようでもあった。

6章 8話 オーティン(2)

神条奈々はゆっくりと目を覚まし、それからすぐに強い自己嫌悪に陥った。

場所はホテルの一室。戦略情報局が探知に成功すれば、すぐに現場に駆けつけられるように、と手配してから三日が経過したが、未だに爆破を起こしたESP能力者は発見されていなかった。

奈々が上体を起こすと、はらりとブランケットが落ちて、裸体が露わになった。途方もない後悔に襲われながら、隣ですやすやと眠る優に目を向け、それから奈々は諦めたように目を瞑った。

こんな時にまで一体何をやっているのだろう。これでは、本当に病気だ。そう考えながら、奈々はベッドに倒れ込んだ。そして、爆破事件当日の事を思い出す。

身体の異常を訴えた桜井優のESPエネルギーを測定したところ、保有するESPエネルギーの量が二倍までに膨れ上がっていることが確認された。そして他の中隊員には異常が見られなかった。

その結果に不安そうな様子を見せた優を安心させようと、強く抱きしめ、それから。

振り返れば、自分の不安を誤魔化したかっただけのように思えてきて、奈々は更に憂鬱な気分になった。無差別連続爆破の犯行声明はまだ出ていない。あるいは、出てきているにも関わらず、SIAによって握りつぶされているのか。政治的な意図があるにせよ、無差別殺傷であるにせよ、今後同様の無差別爆破が繰り返される可能性が高い。そうなれば、ESP能力者による犯行である事も露見する可能性が高くなってくる。先のことは、考えたくなかった。

もう一度、隣で眠る優に目を向ける。微かに捲れ上がったブランケットからは華奢な体躯が覗き、自然と視線が釘付けになった。

胸の奥で、黒い炎が燃え上がる。この幼い身体を支配したいと思っ

無意識のうちに、手が伸びる。

ベッドの軋む音。

ブランケットを払いのけ、ぐっすりと眠る優を抱き寄せる。
温かい。

人の肌がこれほど熱を持っている事を、奈々はつい最近まで知らなかった。

そして、底抜けの優越感が胸の中を満たしていく。

中隊の少女たちは、この温もりを知らない。

自分だけが、知っている。

自分だけが、選ばれた。

連続爆破事件による不安や迷いが払拭され、幸福感だけが全身に広がっていく。

抱き寄せた身体をゆっくりとベッドに寝かせ、上から覆いかぶさるように両腕を抑えつける。

自然と、息が荒くなるのがわかった。

先程まで自身を苛んでいた自己嫌悪や罪悪感はどこかへ消え去り、代わりに黒い感情だけが募っていく。

「……奈々さん？」

ぱちり、と優が目を覚ます。それから、抑えつけられた両腕を見て、困ったように、あの？ と疑問の目を投げかけてくる。その瞳に、恐怖の色はない。

その少女のような愛らしい容姿に、天使という単語がふと頭に浮かぶ。

それから、そういえば天使は両性具有だと聞いた覚えがある、とぼんやりととどうでも良い事を考えながらキスを落とす。

優は拒否しない。恐らくは、奈々が何をしようとも優は全てを受け入れるだろう。

奈々はその事実に例えようのない満足感を覚え、唇を離した。

そして、その事に気づいて、再び自己嫌悪に陥る。

「おはようございます。無差別爆破の容疑者はまだ特定されてませ

んか？」

両腕を組み伏せられた優が、奈々を見上げて首を傾げる。

「まだ特定されていない。随分と遠くへ逃げたのかしら。もう一度爆破が起らないと、特定は無理かもしれない」

奈々はそう言って、優の身体を抱きしめた。

全ての不安感や焦燥感が払拭され、信じられないほどの安堵感と心地良い満足感が全身を支配する。思考が緩慢になり、奈々は思わず目を瞑った。

「……一緒にシャワー浴びましょうか」

「あの、でも、昨日はそれで、また……」

「いや？」

「いやでは、ないです。でも、今は一人で入りたいです」

奈々は抱きしめる腕にぎゅうつと力を入れ、じつと優の瞳を覗きこんだ。

「考え事？ それも、仕事のことじゃなくて？」

「……はい」

優が言いづらそうに頷くのを見て、奈々はすうつと瞳を細めた。

「嫌じゃないなら、話して」

「あの、でも、本当に亡霊とか関係なくて」

「嫌じゃないなら、話して」

首に腕を絡め、耳元で囁くように奈々は繰り返した。

少し躊躇するように優が口を開く。

「奈々さんと少し街を歩いてる時、バレンタインデーの飾りとか広告みたいなのがあって、それで、あの、以前に誰かが近いうちに告白するかも、って友達に言われた事を思い出して、それで、えっと、どう断ろうかになって」

胸の奥で燃え上がるような何かが蠢くのを感じながら、それとは反対に奇妙なほど冷え切った頭で奈々は優の言葉を反芻した。

「断るの？」

「はい。だって、あの、奈々さんが……」

「初めに、言ったでしょう。君と私は付き合っている訳でも、それに準ずるような形でもない。私の事を気にする必要はない」

突き放すような言い方をしたせいか、優の瞳に動揺が走る。

その反応に、奈々は冷え切った頭の片隅で安堵感を覚えながら、にこりと作り笑いを浮かべた。

「価値を示しなさい、と言ったでしょう。君は、あらゆる面において価値を示し続けなさい」

「人をコントロールする為に最も適した感情は、恐怖でございます」
広い事務所で、小太りの男、山田茂雄が跪いたまま進言する。オーデインはそれを黙って見下ろしていた。

「それくらいは私も理解しているよ。恐怖に逆らえる者は少ない」
「そうではありません。恐怖によって支配するのではなく、恐怖に抗うように支配することが最も効率的なのです」

オーデインは片眉を持ちあげて、続ける、と短く言った。

「ルワンダ虐殺、と呼ばれた例があります。ラジオによる情報的な操作を行い、僅か一〇〇日にして八〇万以上の人間が民間人によって殺害されました。ここで注目すべきは、政府や軍による武力行使ではなく、民間人同士での虐殺が行われた点です」

「民間人同士が？」

「はい。ルワンダには過去にフツ族とツチ族と呼ばれる二つの民族が存在しました。ツチ族は元々支配階級でしたが、混血が進み、一般人は民族的な要素を気にする必要はありませんでした。恐怖による統制の第一段階として、まず民族の記載が行われ、二つの陣営が記号化されました。フツとツチ。明確化された記号に、人は帰属心を持ちます。後は簡単でした。当時の大統領はフツ族で、大統領が乗った飛行機を人為的に墜落させ、これをツチ族の陰謀だとしました。そして、民間のラジオ局を創設し、有名なDJを招き、当時の

硬い国営ラジオが放送していなかったジャズなどを放送して、娯楽に飢えていた若者を中心に支持層を広げ、それからツチ族に対するヘイトスピーチを開始する。ツチ族による支配が行われる、と恐怖を煽ったのです。隣人を疑え、我々は味方だ、と。若者を中心に、ツチ族への迫害が始まりました。ラジオを通じたプロパガンダは加熱していき、検問を作るように、などと具体的な指示を出すようになり、村でツチ族を匿っていたフツ族に対しても攻撃が始まりました。次第にルワンダ全体を狂気が蝕み、フツ族とツチ族による家族間の殺し合いも始まったんです。たった一〇〇日。それで、国民の一割が死んだ。軍を動かすよりスマートです。ナチス・ドイツだってそうでした。様々な要因によって疲弊していたドイツに於いて危機を訴え、恐怖を煽った。そして大衆は、指導者を求めます。オーデイン様。あなたは、ESP能力者の危機を訴え、指導者として君臨すべきです」

山田はそう言って、顔を上げた。その脂ぎった顔には歪んだ笑みが浮かび、その細い瞳にはキラキラとした欲望の光が渦巻いている。「そう、私は王となる」

オーデインは山田に微笑を向け、小さく頷いた。

そして、椅子から立ち上がる。

「成功すれば、相応の地位を用意してやる。それと、亡霊対策室に妙な動きがあれば知らせろ」

言い残して、オーデインは別室に繋がる扉を開いた。

広い部屋には、三〇人のESP能力者がいた。オーデインが入室した途端、少女たちの視線が一齐にオーデインに注がれる。

オーデインはゆっくりと片手を上げて、少女たちに手を振った。

そして、その背中に光翼の広げ、淡い翡翠の光を放つ。それだけで少女たちから感嘆の息が漏れた。

容易い、とオーデインは思った。この少女たちはオーデインが支配者になると確信している。そう思い込まされている。特異な容姿と、特異な能力を見せるだけで、人はそう思い込む。

オーデインは自信に満ちた顔でゆつくりと少女たちの顔を見渡し、それから口を開いた。

「昨日はよく眠れましたか？」

一人がコクリと頷き、それが伝染したように次々と少女たちが頷き始める。オーデインは微笑んで、頷き返した。

「ここは安全です。私の力が届く範囲であれば、S I AによるESPエネルギーの探知を避ける事ができる。君達を害する事は何者にも叶わない。ここが、君達の居場所です。ですが、君達と違って居場所を持たないESP能力者が大勢いる。私は、それを救いたい」

オーデインは慈しむように両手を広げ、目を瞑った。

「その為に、力を貸してください。私達には、それだけの力がある。さあ、理想郷を作りましょう」

陶醉しきつたように数人の少女が跪き、それが伝染していく。

オーデインはそれを見渡し、満足そうに頷いた。

しかし、その赤い瞳の先には虚無が広がるだけで、そこに何ら感情らしいものは存在していない。

彼は、そういう存在だった。

「ESP能力者の数が従来の四倍以上に膨れ上がった？」

「桜井優の言を信じるならば、そうなります。桜井優自身が保有するESPエネルギーも現段階で三倍まで膨れ上がりました」

神経質そうに視線を彷徨わせながら報告する金田に、上田中將は顔を硬くし、暫しの間黙り込んだ。

「過去にESPエネルギーの量が膨れ上がった事例は？」

「桜井優が初めて出撃した直後、異常なESPエネルギーの出力が観測されています。他に、類似ケースは存在しません。彼のESPエネルギーだけが跳ね上がり続けています」

金田が早口で捲し立てる。

上田中将は額を抑え、ぽつりと呟いた。

「……小僧の力は、本当にESP能力なのか？ 奴のESP能力だけが異常だ。それだけのエネルギーがどこからやってきて、どこに保有されている？ 何故、女にしか発現しなかったESP能力を小僧が持っている？」

「わかりません。私には、その」

「大出力のリーダーサイトを用いても、奴のESPエネルギー感知能力には及ばない。長年試行を重ねてきた機械翼も、奴の奇妙な光の翼には及ばない。指向を安定させるための小銃も、奴には必要がない。今の奴なら、カルネアデスの舟板の出力量をも上回る火力を誇るだろう。何がこれほどの芸当を可能にしている？」

「わかりません。わからないんです。本当に何も、わからない。彼は最早、人間ではない」

上田中将の剣幕に汗をかきながら、金田の口からポツリと言葉が漏れた。

人間ではない。

上田中将も、そう思った。

ESP能力者は、人間ではない。

そして、ならば、とも思う。

ならば、我々は人から遠のいていつているのだろうか？

そのうち、全ての人間がESP能力者という人間ではない何かになるのだろうか？

ふと、そんな考えが頭に浮かんだ時、携帯電話から着信音が響いた。

『戦略情報局、管理課より報告します。桜井優のESP波形登録経緯について、他から報告を求められたのですが、ケース記録を見なおしたところ、桜井優の登録作業を行った経緯が全て抹消されています。日付、担当者名及び備考等のフォーマット上の全ての記録が参照できません。全ての者に連絡をとったのですが、担当した者が誰かはいまだに判明しません。当時、陸上自衛軍も登録作業に携わ

つていたはずですが、そちらに桜井優のケース記録が残っていますか？」

「ケース記録が喪失？ 総基ネット上から当時の住所等を調べて適当に補完しておけ」

『それが、総基ネット上にも桜井優のデータがないんです。補完のしようが……』

「……待て。そもそも、桜井優のケース記録について問い合わせてきたのはどこだ？」

『それが、総務事務次官から直接……』

「……事実をそのまま報告しろ。ケース記録が喪失し、補完も不可能だ、と。裏にいる奴にはそれで十分伝わるはずだ」

『はい。では失礼いたします』
通話が切れる。

上田中将は携帯を呆然と見つめた後、金田に目を向けた。

「管理課が保有していた桜井優のケース記録が紛失している事が発覚したらしい。どうということだ？」

「ケース記録が？ 馬鹿な、しかし、モニタリングがしっかりと」
┌

うるたえた様子を見せる金田を見て、上田中将は目を瞑った。

「亡霊対策室の防諜部、あるいは情報部が何らかの細工をしたのか。念入りな准将のことだ。桜井優の弱点となりうるものを全て消しにかかっているのかもしれない」

「しかし、ケース記録に触れる事は簡単ではありません。我々は」
┌

「良い。これは、お前の落ち度ではない」

そう言って、上田中将は疲れたように息をついた。

「恐らく、これは防げるものではない。亡霊がやったように、桜井優もシステムに対して何らかの干渉を行う事ができるかもしれない」
奴は、人間ではないのだから。

そして、我々もそうなっていく。

徐々に、人間ではない何かになっていく。
そんな気が、した。

6章 9話 長谷川京子（10）

「五倍……」

連続無差別爆破事件から五日後。

再び爆破事件が起こる様子はなく、亡霊対策室の司令部に戻ってきた後、医務室で桜井優のESPエネルギーを測定していた秋山明日香が顔を強張らせて呟いた。

「五倍？」

優に付き添っていた奈々が怪訝な顔をする。明日香は測定装置を慎重に優から取り外し、頷いた。

「そう、五倍。以前に比べて、五倍以上の保有量にまで膨れ上がってる。優君。身体に異常は？」

「少し、熱っぽいです」

素直に答えると、明日香の冷たい手が額に当てられた。

「微熱ね。他に異常は？」

「身体の中で何かが大きくなってるとるような、奇妙な圧力があります。でも緩やかで、それほど怖い感じはしません」

明日香は考え込むように目を閉じて、それからすぐに首を横に振った。

「私には何もできないし、他の医療機関でも何らかの対応をとることは難しい。これ以上熱が上がるようならコーリングを行うけど、今のままなら安静にする必要もないでしょう。いつも通りに暮らして問題ないわ」

明日香はそう言って、診察は終わり、と優の背中を軽く叩いた。

優は微熱でぼんやりとする意識の中、明日香に笑顔を向け、ありがとございました、と言って立ち上がった。

「大丈夫？」

奈々が心配そうに顔を覗きこんでくる。優は、はい、と頷いて戸口の方に向かって足を進めた。

扉を開け、廊下に出る。そこで、優は足を止めた。

「あ、本当に戻ってきたんだ」

扉を開けた先に、京子、華、愛の三人がいた。華と目が合った途端、顔を綻ばせて走り寄ってくる。

「いきなり四日間も帰ってこなかったから、ビックリしちゃった。何かあったの？」

連続無差別爆破事件がESP能力者によるものだと知らされていない事を思い出し、優は答えに詰まった。それをフォローするように、背後から奈々の声が届く。

「防衛省の幹部と食事をしていたの。優君の紹介を兼ねてね」

奈々の存在に気付いた華が慌てて頭を下げる。京子は特に何の反応も見せず、そうだ、と思い出したように口を開いた。

「桜井の外出許可もらえませんか？ ゴタゴタがあって行けなかった初詣に皆で行きたいんですけど」

「ええ、行ってらっしゃい。私から総務部に伝えておくから。ただし、門限は守るようにね」

奈々は抑揚のない声でそう言うてから、優の横を通り過て廊下に出た。

「気をつけて」

最後に奈々は優の方をちらりと見やって、そのまま去っていった。「ってことで初詣行きたいんだけど、桜井今から大丈夫？」

三人の視線が優に集中する。

優は少し考えから、うん、と頷いた。

「じゃあ、中村さん呼んでこないと」

「あ、私行ってくるよ」

華が廊下を走っていく。

それを見送ってから、優は残された京子と愛に目を向けた。

「四人で出かけるの久しぶりだね」

「最近色々あったし、忙しかったからね。今日は思いきり羽伸ばそうよ」

笑いながら京子が身体を伸ばす。その横で、愛が思い出したように口を開いた。

「……トイレ」

「いってらっしゃい」

優の言葉を受けて、愛がゆっくりとトイレに向かって歩き始める。それを眺めながら壁に背中を預け、京子に向き直った。そして、あの事に気づく。

「京子、髪伸ばしてるの？」

「ちよっとね」

京子はそう言って、前髪を軽くいじった。

以前より髪が長くなり、少し大人びて見える。

じっと京子を見つめていると、それに気付いたように京子が振り向き、微笑を浮かべた。

そして、ゆっくりと唇が開く。

「桜井は、こういう方が好きでしょ？」

「え？」

思わぬ返答に、意味を成さない呟きが漏れる。

くす、と京子は笑いながら、優の顔を覗くように腰を折って前かがみになった。

「私、まだ諦めてないから」

京子の視線が優を射抜く。

「京子……？」

「絶対に、諦めないから」

微笑を浮かべながら宣言する京子を、優は見つめる事しか出来なかった。

「お待たせー」

遠くから華の声。

京子が声の方に振り返って、おかえり、と笑顔で言う。

その際、少し伸びた京子の髪が優に絡みつくように、ふわりと空を舞った。

「……ボロい」

中村の案内で神社に着くなり、愛がそう評した。

確かに人気がなく、どこか暗い雰囲気か漂っていた為、優は否定することも出来ず、その方がご利益がありそうだよ、と曖昧な言葉を返した。

「小さいですが、由緒ある神社です。大きい所がよろしいのであればそういったしますが、些か時間がかかります。いかがいたしますか？」

運転席から出てきた中村が平坦な声を投げかけてくる。優は他の三人に目を向けた。

「どうする？」

「私はこのままでもいいよ」

「私も。移動するのめんどいし」

「……このままで良い」

三人の言葉に頷いて、じゃあ行こっか、と優は鳥居をくぐった。高い木に囲まれている為、日が遮られて薄暗い。

入ってすぐ左に手水舎が見え、一行はそちらに向かって足を進めた。

「これ、手洗えばいいんだっけ？」

京子が柄杓でばしゃばしゃと水を汲み、それで手を洗う。その隣で華がゆつくりと水を汲みながら、考えるように言う。

「その後、飲むんじゃないかな？」

「……これを？」

水を見つめて、愛が嫌そうに言う。

覗きこむと虫の死骸が浮かんでいるのが見えて、それはやめた方がいいかも、と言いながら優は両手を洗った。

その後、手水舎を離れて参道を進む。ステップの先に社が見え、その前に大木が聳え立っていた。

「うわ、この木、凄くない？」

先を歩いていた京子が声を上げる。

大木をよく見ると、奇妙な形をしていた。枝が大きすぎて自重に耐えきれないのか、幹から分かれた太い枝が地面に向かって曲がり、それから更に上へ曲がっている為にトンネルのようになっていた。枝と言ってもその太さは一般的な幹よりも太く、いくつもの木が溶接されたオブジェのようにも見えた。

木の前に看板が設置されて説明書きのようなものがあつたが、興味がなかった為に、看板を無視してそのまま大木に近づく。

「こつこのよくテレビとか雑誌で見ると、実際に見ると凄い迫力あるなあ」

京子が感心したように言いながら、携帯を木に向けて写真を撮り始める。

その横で優は大木に近づいて、そつと表面を撫でた。冷たい。

「なんか、木って感じがしないね。別の何かみたい」

後ろで華が小さく呟くのが耳に届く。

その時、ポツリと優の頬に水が落ちた。

空を見上げる。枝の間から見える灰色の空。そして、再びポツリと水が落ちてくる。

「雨？」

「本ただ、降ってきたみたい。早く終わらせちゃおうよ」

京子がそう言つて、社殿に向かって駆けだす。他の三人もそれに続いた。

「いくら投げる？」

財布を取り出しながら、華が言う。

「百円くらい？」

「……五円。ご縁がありますように」

「うわ、なにそれ寒い」

騒ぎながら、それぞれ小銭を賽銭箱に投げ入れる。そして手を叩き、願い事を心の中で呟いた。

最後に一礼してから、優は他の三人に向き直つた。

「終わった？」

「終わった。桜井、何て願ったの？」

京子が尋ねてくる。優は少し迷った後、冗談っぽく笑って答えた。「世界が平和になりますように」

祈祷を終え、一行は社殿に背を向け、鳥居に向かって歩き始めた。最後に足を止め、振り返って大木を見上げる。

大木の枝の間から、しとしとと雨が落ちてくる。

まるで、大きくなりすぎて木ではない別の何かになった大木が泣いているように見えた。

「それで、話とは？」

神条奈々はそう言って、優が出ていった直後に突然訪問してきた華秋院彰をじっと眺めた。

この男の訪問はいつも唐突だ。しかし、有益な情報を持ってくることも多いため、無下に扱う事もできない。

「桜井優のことです。本物の総基ネット上から桜井優の情報が消えている、と以前お話ししたはずです。私、彼以外のESP能力者全てについても色々調べていたんですよ。でも、異常があるのは桜井優だけだった。だから、あの後桜井優について調べたんです」

華秋院彰はそう言って、いくつかの資料を取り出し、奈々に向けて差し出した。

「総基ネット以外に、桜井優の情報が登録されているであろう場所のリストです。考えつく限りの場所をしらみ潰しに調べましたが、いずれも桜井優の情報だけが消えている。あるいは、初めからそんなデータがなかったことになっています。しかも、記録上の問題だけではない。花公院の生徒に桜井優の写真を見せても、誰も知らないと言われます。数人の教師にも接触しましたが、そちらも桜井優の存在を知らなかった。彼の存在がなかったことになっている」

「……彼が花公院出身と嘘をついていた、と？」

「私もそう思いました。あるいは、どこかが欺瞞工作をしているのだ、と。ならば、何故花公院が選ばれたのか？ ふとそう思って花公院について少し調べたんです。そうしたら、少し気になる点が出てきました。女性初のESP能力者である柘沙織も花公院出身だったんです。以前に話した通り、柘沙織が上田中将の娘であることは知っていましたが、あの時は上田中将を探ることが目的だった為、もう何年も前に亡くなっている彼女のことは詳しく調べていませんでした。それで、念の為に彼女についても色々調べたんですよ」

そう言って、華秋院彰は鞆から一枚の資料を取り出した。

「総基ネット上のデータです。柘沙織の父は上田孝義。そして母は柘秋穂ひぐいおほと言いました。この二人が離婚した後、柘沙織は柘秋穂おほに引き取られています。そして、柘秋穂はその後に桜井正樹さくらい まさきという男と再婚していたんです」

「桜井？」

まさか、と奈々は顔を上げた。

華秋院彰が興奮したように捲し立てる。

「そして、柘秋穂は桜井秋穂となった。ですが、すぐに桜井正樹は死亡し、以降、桜井秋穂は柘秋穂と名乗り続けています。この二人の間に子どもはいません。少なくとも、記録上はそうなっています」

「桜井優の記録自体が消えている以上、そんなものは信頼できない。桜井正樹は初婚だったのか？」

「ええ、初婚です。桜井優という連れ子がいた訳ではない」

「だが、戸籍に載っていない子どもを連れていた、あるいは桜井秋穂が産んでいた可能性がある」

奈々の言葉に華秋院彰は満足そうに頷き、ふう、と息をついた。

「桜井、という名字などありふれています。全くの偶然である可能性も高い。ですが、女性初のESP能力者と男性初のESP能力者である柘沙織と桜井優が姉弟であった場合、何らかの答えが得られるかもしれない」

「答え？」

「ESP能力者による出産はいくつか事例がありますが、ESP能力の遺伝は確認されませんでした。ただ、特定条件下における出産では、遺伝が起こるのかもしれない。それが分かれば、ESP能力の出自が明らかになる。ある遺伝子構造上にESPエネルギーが発生し、撃ちだされ続けるのかもしれない、と」

「前に言っていたセル・オートマトンか」

「そうです。情報的に死んだ世界では、ある種のパターンが保持されて当然だ。あなたはそう言った。奇跡の構造が存在するのかもしれない」

「奇跡の構造があつたとして、他のESP能力者についてどう説明する？ 例えば、白崎凜。彼女の姉はESP能力者ではない」

奈々の言葉に、華秋院彰は勢いよく首を横に振った。

「わかりません。わからないんです。でも、桜井優と柊沙織が姉弟であつた場合、これを全くの偶然として片づけられますか？ そう、これは私の願望です。我々は、幻想の中に生きている。そうでしょう？」

華秋院彰はそう言って、興奮したように奈々に向かって詰め寄った。

「オカルトライターとして、色々な取材をこなしてきました。その度に、思うんです。こいつらは、フィクションを作るんだって。例えば心霊写真。誰かの背中から、白い手が出ている。それだけの事実から、皆想像を膨らませるんです。これは幽霊だって。元々生きていた人が死んで、写真に移りこんだんだって。馬鹿げてる。白い手だけの未確認生物がいるのかもしれない。宇宙人かもしれない。何かの兵器かもしれない。何故か、白い手が背中から生えていただけかもしれない。でも、皆そう思わない。フィクションを作り出し、それを選ぶんです。死んだ人が、写り込んだんだって。そんな突拍子もないことを考え、何故か納得する。何故ですか？ 信じたいからです。自分で作りだした幻想の中に生きていたいんです。私も真

実なんてどうでもいい。ただ、ESP能力という存在が、私の考えを裏付ける何かになるか確かめただけなんです」

必死に説明する華秋院彰をじっと観察しながら、似ている、と奈々は思った。

逆に、私達はこの多重化された世界から逃れる事はできない、とも言える。この世界の多重化を引き起こすのが三歳。それ以降は皆、世界がずれているんだ。

私達が純粹な現在ののみを生きる、ということは難しい。皆、自らの表象世界を孤独に生きている

父の言葉を思い出し、そして気づく。

奈々は、その考え方が嫌いだった。

世界がずれていく。解釈がずれていく。

ノイズ。

それが幼かった奈々にはとても恐ろしく思えて、世界がずれないように、孤独にならないようにと

「桜井優と柊沙織が姉弟であると発覚したところで、私には何ら利益がない」

自分でも驚くほど冷たい声が口から飛び出した。

華秋院彰が口を閉ざし、ゆっくりと首を横に振る。

「花公院に通っていたと虚偽の報告をしていた理由。貴女は、それを知りたくないのか？」

「桜井優との面会は許可しない。相応の理由があつたならば、彼の精神的な傷を掘り起こす事にも繋がりがかねない」

華秋院の顔に憤怒の色が広がる。奈々はそれを無視して言葉を続けた。

「彼は優秀な部下だ。信頼を損なうような行動をとるわけにはいかない」

「……どこまでも亡霊対策室司令官という立場に拘るならば、相応の対価を払いましょう」

そう言い放つ華秋院彰に、奈々は怪訝な視線を向けた。

「何故、そこまで桜井優に拘る？」

「本物だからです。少なくとも、私が知る中で、彼が最も本物に近い。私は、私の中に存在する学問に対する信仰を壊したい」

「何故？」

「信じたいからです。皆、信じた。同時に人は支配を求めます。私は、学問に対して支配を求めました。今一度、その支配を解き、新たな支配を受けたい。私は、新しい幻想体に取り込まれたい」

華秋院彰はそう言って、正面から奈々を真つすぐ見つめた。

「お願いします。最後にもう一度桜井優に会わせてください。貴女が望む全てをくれてやる。華秋院という、全てを」

6章 10話 オーディン(3)

「十日が経過しました。爆破事件の報道において、ESP能力者が絡んでいる事は明らかにされていない。何故、真実を公開しないのだろうか？」

広い事務所に、オーディンの声が響く。

広瀬理沙は同年代の少女たちに囲まれながら、前方で演説するオーディンを見つめていた。

「その真実が広まるのを、彼らが恐れているからだ。だから都合の良い情報だけを公開し、大衆を操作しようとする。私達には紛れもない優位性があり、それに全てのESP能力者が気づくことを、恐れているんです。私達は人間よりも、優れている」

オーディンはそう言つて、にこりと笑った。

「多くのESP能力者が、亡霊との闘争に投入されてきました。戦う力がある。それだけの理由で、君達と同じ、まだ未成年の、あるいは年下の女の子たちが銃を渡され、戦え、と命じられてきました。人間の大人たちは、安全な場所で、頭ごなしに命令を飛ばすだけ。おかしい、とは誰も言えない。何故ですか？ ESP能力者が、圧倒的小数だからです。逆らえず、戦わされる」

オーディンはそこで一旦言葉を切つて、ふと遠くを見つめるように動きを止めた。

「……そもそも、法というものがそうでした。奪われるのは、怖い。殺されるのは、怖い。だから、大多数が取り決めを作った。身を守る為に全員が団結し、取り決めを破るものに対し、集団で一方的なペナルティを与えた。法そのものに同意していない者に対しても、罰則を与えた。自分たちの利益を守る為に大多数が団結し、強制的な契約を迫った。歴史において、司法というものは少数民族を弾圧する正当な裏付けに利用されてきたことも、あった。それが、法。だから、私はこれを破ります。我々の要求を通す為に、罪を犯しま

す。私はこれから、正しいことをするのは決してない。私達に、正義はない。それを、理解しておいてください。そして、願わくば納得して欲しい。私は、全てのESP能力者の保護に全てを注ぎ、全てのESP能力者の自由に全てを捧げます。子ども達に、無償の愛を」

周囲の少女たちが、一斉に歓声をあげる。それに呼応するように、オーデインの背中から光翼が広がる。

理沙はそれを眺めながら、怖いと思った。

呆れるほどの、馬鹿げた理想。

正義を捨てた、飾らない理想。

この美しい男には本当にそれを実現する力があるのではないか、と根拠なく思わせるほどの何かをオーデインは確かに持っていて、理沙はそれに強く惹かれるのを感じた。

一方で、それを怖いと、と思う。

この男は、あまりにも綺麗すぎる。

オーデインの容姿、あるいは声、その雰囲気そのものが美しすぎる為に、その理想に追従するであろうあらゆる泥臭さが消え去ってしまっている。

この男がやっているのは、ただの大量殺戮だ。

その恐ろしさが、払拭されてしまっている。

感覚が麻痺したように、高揚感だけが広がっていく。

「私は、ESP能力者に特権を与えようというわけではない。ただ、自由と、司法における保護を求めます。先人たちが少ない犠牲とともに勝ち取ってきたように、私も血塗られた自由を求めます」
司法における保護と自由、という言葉が理沙の胸にゆっくりと広がっていく。

話を聞いていた限りでは、正当防衛に思えます。過剰防衛かもしれません。でも、それを判断する司法は、多分正常に働かないです。そんな状況で広瀬さんが捕まって、不当に裁かれるのは納得できないです。正しくないのはわかっていますが、状況が変わるまで

逃走を支援したいです。それで、いつか今の体制が良くなったら、自首して、ちゃんと裁かれるべきです。

かつて桜井優はそう言っつて、逃走を手伝った。

彼は、子どもだ。

オーディンのように理想を能動的に叶えようとするのではなく、いつか誰かが体制を変えるだろう、という希望的観測のもと、理沙を逃がした。

その後も、彼は迷っていた。

逃走後に再び会った時、彼の瞳には強い後悔の色が浮かんでいた。

彼は、オーディンのように救世主じみた存在ではない。

でも、と理沙は思った。

理想だけを見つめ続ける救世主よりは、そっちの方がよっぽど良い。

前に立つ指導者がオーディンではなく桜井優であったなら、理沙は迷わずその理想に付き従ったかもしれない。

そう思い、だからこそ広瀬理沙はオーディンによる支配を完全に受けることはなかった。

オーディンの掲げた理想が巨大なうねりとなって場を呑みこんでいく中、彼女だけが取り残され、別の理想に支配されていた。

「内閣不信任決議案が否決された？」

長い廊下を進みながら、山中少佐は前を歩く上田中將に疑問を投げかけた。

「そう。最早解散は秒読みだ」

「不死鳥に勝てる、と？」

「まさか。負ける為に、否決させたのだ」

上田中將は興味なさそうに言っつて、ある扉の前で足を止めた。そして、扉が開かれる。

そこは、それほど広くない研究室だった。壁際に機材が乱雑に積み、数人の男が個別にディスプレイと睨み合いをしている。

山中少佐はさっと辺りを見渡してから、一步踏み出した。そこに、横から声が投げかけられる。

「こんにちは」

振り向くと、若い女が立っていた。上田中將が山中少佐の隣に進み、唸るように声を発する。

「彼女は白崎蘭。チームの協力者だ」

「よろしく」

女が手を差し出す。山中少佐は一拍遅れて、その手を握った。

「陸上自衛軍中部方面隊、例の機甲中隊に属している山中と申します」

「ああ。カルネアデスの舟板を実際に動かしたのは君か。どうだった？」

握っていた手が離れる。

山中少佐は思っていた事をそのまま口にした。

「扱いが楽でした。準備に人の手を割く必要がない上に、殆どの作業を機械が補助してくれる。正直、驚きました」

蘭がクスリと笑う。

「システムを人が統合するのではなく、システムをシステムによって統合する。プロジェクトリーダーである伏見さんの考えなんだ。

このままカルネアデスの舟板へ移行が進めば、ESP能力者の緊急処置や回収を担っていた機動ヘリや哨戒艦艇を無人機に差し替えることもできる。そうなれば、戦術データリンクによってあらゆる情報共有化され、発見から識別、進行ルートの推定、迎撃、その流れ全てが自動化されることになるだろう。ヒューマンエラーの排除はもちろん、これによって意思決定による応答時間の短縮が可能になる」

「応答時間の短縮？ 今でも、それほど応答に時間がかかっているように思えません」

山中少佐が尋ねると、蘭は頷いた。

「そう。現状では問題ない。だが、我々は白流島への攻撃も視野に入れていいる。敵の本拠地近くで冗長な応答時間を確保することは不可能だ。だから、索敵能力、それに基づく判断能力、迎撃能力を統合し、機械による速やかな意思決定を行わなければならない。人は保守作業やモニタリングのみに集中することができ、前線に出る必要は完全になくなるだろう」

「機械が、自動で戦うと？」

「完全には無理だろうが、その方向性をとっている。今考えているのは、戦術データの蓄積と分析だ。亡霊の細かな動きを全て記録し、意思決定能力そのものへフィードバックを行う。全てが、統合される。時間はかかるが」

山中少佐は不意に得体の知れない寒気に襲われた。

ESPエネルギーに似た何かを用いて、敵を自動で索敵し、攻撃する。

それはまるで

「亡霊みたいですね」

一瞬、白崎蘭の動きが固まった。

奇妙な沈黙が場を支配する。

蘭はゆっくりと顔を上げ、小さな笑みを浮かべた。

「これはそんな高度なものじゃないよ。戦術データリンクを通して情報が蓄積されていき、そこから統計的な推定を行いながら攻撃する。それだけの機械だ。もちろん、それを実現するのが大変なんだけど」

最後に蘭は苦笑しながら、そう締めくくった。

山中少佐の胸に広がった得体の知れない不安感は、一向に払拭されなかった。

桜井優のESPエネルギー保有量は、その後も増え続けた。

ただ、上昇量は初めの頃のように急速なものではなく、それに伴う体調不良も鳴りを潜め、生活の上で特に支障をきたすこともなかった。

「ねえ」

食堂で昼食を食べていた時、京子が何気なく話を切り出した為、優は食事を中断して顔を上げた。

「明日ってさ、バレンタインだよね」

「……うん」

優が頷くと、横にいた愛が身を乗り出した。

「明日、朝一番に談話室に来て」

「談話室？」

「皆で作ったチョコ渡す」

愛の言葉に、優は小さく驚いた。

「皆で作ったの？ 楽しみにしてるね。でも、朝一じゃなくても」

「

「朝一番に、起きたら談話室に真っすぐ来て」

真剣な顔で、愛が繰り返す。

困って京子と華に目を向けると、二人とも愛と同様に真剣な顔で優を見つめていた。

「……うん、わかった」

雰囲気を押されて承諾すると、三人はあからさまにホツとした様子を見せた。何かドッキリでも用意しているのだろうか、と想像する。

「そういう訳で、絶対に忘れないでね」

「うん。ちゃんとアラームセットしておく」

念を押してくる京子に苦笑し、優は食事を再開した。

「そっいえば」

華が思い出したように言う。

「最近、亡霊見ないね」

「あれだけ大規模な攻撃してきたんだから、暫く充電が必要なんじゃない？」

「うーん。かなあ」

京子の返答に、華は納得しない様子を見せる。

二人の会話を聞きながら、母に扮した亡霊のことを思い出し、不快感と不安感が湧き起こる。それを悟られたくなくて、優は何も言わず黙々と昼食をとった。

「まあ、亡霊が出てきても、私達には関係ないかも。何とかの舟板とかが出来たみたいだし、前みたいに誘導するだけになるとか」

「そうになると、私達クビになるかも……」

「ああいうのって、量産されたりするまでは時間かかるでしょ。予備として、暫くは残されるんじゃない？ その間に特別年金の受給条件満たせる事が出来たら最高なんだけどなあ」

昼食を食べ終えた優は無言で箸をおいた。それに気付いた華が優に視線に移す。

「あ、お茶とつてこようか？」

いつの間にか、優以外の三人は食べ終わっているようだった。

「それくらい自分でとつてくるよ」

優は笑って、立ちあがった。

そして、食堂の隅にあるコップを取りに行く途中、食堂に入ってきた詩織と目が合った。

「桜井さん、こんにちはー！」

詩織が駆けよってくる。

「おはよ。今から昼食？」

「はい。ちよつと図書室寄ってたたら、時間忘れちゃって」

「勉強？」

「いえ、あの、小説見せて……」

「また面白いのがあったら、教えてね」

「はい！」

話しながら、コップにお茶を注ぐ。それから三人の待つテーブル

へ向かおうとした時、詩織が静かに口を開いた。

「そうだ。桜井さん。明日、楽しみにしててくださいね」

「明日？ バレンタインデー絡み？」

振り返ると、詩織は微笑を浮かべて頷いた。

詩織の柔らかかな黒い瞳が、優の瞳を正面から射抜く。

何故か、その笑みを怖いと思った。

「皆で、チョコを用意したんです。きつと気に言ってもらえると思います」

「皆で？」

「はい。皆です。本当は一人で作って渡す予定だったんですが、皆で作る事になったんです」

「そうなんだ。楽しみにしてるね」

「はい」

詩織の柔らかい笑みから視線を外し、テーブルに戻る。

その途中。奥のテーブルから視線を感じ、優は何気なくそちらを見つめた。

小山千夏と、目が合う。

ほんの一瞬、千夏は深い笑みを浮かべ、それから何事もなく千夏は隣の沙耶たちと話を始める。

そこで再び視線を感じ、優は辺りを見渡した。

何人かと目が合う。

絡みつくような視線。

薄い寒気を覚え、優は視線を無視してそのまま席に戻った。

二月十三日、昼。

明日のイベントに一抹の不安を覚えながら、優は不穏な空気を無視して一日をいつも通りに過ごした。

6章 11話 オーディン(4)

二月の朝は冷え込む。

冷たい空気に身を震わせながら、桜井優はブランケットをどけてベッドから起き上がった。

優はどちらかと言えば寒さに弱い。もぞもぞと筆筒からカーディガンを取り出し、それを羽織ってから洗面所に向かい、冷水で顔を洗った。

すうつと意識がクリアになる。

タオルで水気を落としていた途中、ふと鏡に映る自分の瞳が亡霊の扮していた母の瞳と似ている事に気づいて、優は動きを止めた。

目の周りをゆっくりとなぞりながら、母の姿を思い出そうとする。しかし、霧がかかったように、母の顔が思い出せない。

小さく息をついて、軽く髪を梳かす。

それから服を着替え、優は早々と部屋から飛び出した。

その時、扉の前にストーン、と何かが落ちる。綺麗にラッピングされた四角形の箱が三つ。どうやら、ドアノブに紐で引っかけていたようだった。

拾い上げて、一度玄関の中に入ってから包装を解く。その途中、中に可愛いデザインの写真が入っている事に気付いた。

『日ごろの感謝を込めて。藤宮綾』

第四小隊の藤宮綾からのようだった。それとは別に市販のチョコレートが入っていて、優はそれを横にそっと置いた。それから、二つ目の箱を手取る。今度は包装の外に、殴り書いたような文字が躍っていた。

『ホワイトデーは三倍返しな 川上』

今度は川上沙耶からのようだった。文面に小さく笑って、三つ目の箱の包装を外しにかかる。

『ずっと好きでした』

間に挟まれたメモ用紙を見て優は一瞬動きを止めた後、差出人の名前がどこにも書かれていない事に気づいて奇妙な安堵感を覚えた。中に入っていた箱も念の為に開けてみるも、手作りと思わしき小さなチョコレートが綺麗に並べられているだけで、どこにも差出人を示すものは入っていない。返事はいらぬ、ということなのだろう。一度部屋に戻り、そつとテーブルの上に三つのチョコレートを置いておく。それから、優は再び廊下に出て、その通路の奥にある談話室へ向かった。

優の部屋から談話室までの距離はそれほど遠くない。すぐに辿りつき、扉を開ける。

登り切っていない朝日が対面の窓の向こうから差し込み、少し眩しかった。

目を細めて、談話室の中に入る。そこに、彼女たちはいた。

「おはよう」

京子の声。

戸口から少し横へ目を向けた優は、怪訝な表情を浮かべた。

「何だか、珍しい組み合わせだね」

そこには、篠原華、長谷川京子、宮城愛といたいつもの三人に加え、第三小隊長の佐藤詩織、第六小隊長の白崎凜。そして第一小隊長の望月麗、小山千夏の七人がいた。

「そう思うよね。ほんと、珍しい組み合わせでしょ。どういう関係のメンバーだと思う？」

京子が笑いながら声をかけてくる。何故か、硬い笑顔を浮かべていた。

「えと、空いた小隊長席の候補、とか？」

凜や華、麗を見て反射的にそう尋ねてみるも、言うてから京子や千夏がそれほどESPエネルギーに恵まれていない事に気づく。案の定、京子の用意した答えとは違ったようで、彼女はわざとらしく腕をバツの形にした。

「不正解。正解は、この前に桜井が刺されてロストした時、命令を

無視して撤退しなかったメンバーでした」

ねえ、と京子は言葉を続けた。

「皆、何で命令に逆らって、危険な場所に留まったと思う？」

京子はそこで言葉を切って、一瞬迷うように後ろの少女たちを振り返った。それからもう一度優に向き直り、大きく息を吸う。

「今日はバレンタインデーだし、ここまで言えば、わかるよね？」

京子の様子を窺うような視線を受け、コクリと頷く。

言いたい事は、臆けながらに察する事ができた。

しかし、全員が揃っている場でそれを告げる意図が理解できず、優は困惑した顔を少女たちに向けた。

「えっと、でも、何で」

「これ！」

優の声を遮るように、京子が大声を出して一つの箱を差し出す。部屋を出る時に見つけたチョコレートのように、綺麗にラッピングされた小箱。

優はチラリと少女たちを見やった。全員が、真つすぐと優を見つめている。

奇妙な圧迫感を覚え、優はすぐに目を逸らした。この中から、一人を選べ、ということなのだろうか。ならば誰も選ぶべきではないだろう、と考えた時、京子の口から予想外の言葉が飛び出した。「ここにいる皆の分。誰かを選べ、なんて言わないからさ。逆に、全員の分として受け取って欲しいの」

「え？」

京子の言っている事が理解できず、優は小首を傾げた。京子が自虐的な笑みを浮かべ、笑う。

「意味わかんないよね。でも、全員の分、まとめて受け取って欲しい。じゃなきゃ、まとめて断って」

「待って。ねえ、それって、どういうこと？ 気持ちだけ受け取って欲しいっていうこと？」

優が困惑の声をあげると、それまで後ろで黙って控えていた白崎

凜が一步前に出た。

「説明が不明瞭なようなので補足いたします。私たちが望んでいることは、桜井様にこの場にいる全員と交際していただくことです。代わりに、桜井様が特定の誰かとの交際だけを拒否することを認めない。この場にいる者以外との交際も認めない。それだけです」

凜の黒い瞳が、優に注がれる。

彼女の言っている事がよく呑み込めず、優はただ困惑の視線を凜に向けた。

そんな優を見かねたのか、凜の横にいた華が一步前に出て、口を開く。

「ねえ、普通じゃないって思う？ 私もね、初めはそう思ったの。でも、普通の答えって、普通の環境があるから導き出されるものだと思う。私達の環境とか前提って、全然普通じゃない。私達を理解してくれる人って、桜井くんしかいないもん。もちろん、中隊外の男の人と付き合ってる子だっているけど、私はそういうの、想像できない。ねえ。当事者の桜井くんには想像できないかもしれないけど、桜井くん一人に対して、周りが女の子だらけなのって凄く不安なの。いつか誰かにとられるんじゃないかって。もし桜井くんが私を受け入れてくれても、誰かに横取りされるんじゃないかって。しかも、そうなるって普通の女の子みたいに次の人探しましょう、なんてできないんだよ？ そうやってビクビクするくらいなら、私は一番じゃなくても良いよ。その代わりに、誰かが桜井くんが一番になるのもいやだ」

不安を吐き出すように華が言う。

それに続くように、愛が前が出る。

「……初めは嫌だった。でも京子と華がやるって言う。私もやらなと負けるって思った。お願い。受け入れて」

段々と、彼女たちの言っている意味が頭に浸透していく。

優は強い眩暈を覚えながら、先程から黙ったまま何も言わない詩織に目を向けた。

「……本気なの？」

「本気です。もちろん、普通のお付き合いがしたかったです。でも、無理だつてわかってました。桜井さんが私のことをそういう目線で意識してないことくらい知ってます。だから、長谷川さんたちからこの話を持ちかけられた時、迷わなかったです。打算的で、嫌な女ですよ。でも、何でも良いから桜井さんとの繋がりを失いたくなくなりました」

詩織はそこで息を吐き、優から視線を外した。

「誰かから聞いたことがあるかもしれませんが、私、男性恐怖症だったんです。でも、桜井さんだけは大丈夫でした。ESP能力者とか、同じ中隊にいる理解者とじゃなくて、桜井さんはそれだけで私にとって特別でした。ずっと、見てました。そして触れて欲しかったです。お願いします」

詩織が本気であることを理解し、優は他の少女たちに目を走らせた。

「待つて。本気なのはわかったけど、全員と付き合うつてどういうこと？」

「そのままの意味ですよ、先輩。デートして、キスとかもして。難しく考える必要なんてないです」

麗が笑いながら言う。

優は狼狽した様子を隠しきれず、小さく首を振った。

「本当にそれでいいの？ そんなの、絶対こじれるよ」

「だから！ 良いつて言うてるじゃん！ 桜井、何か嫌そう。もしかして、この中以外で好きな人がいるの？」

京子がイライラした様子で口を開く。

優は言葉に詰まって、何も言えなかった。

「初めは私と華、愛の三人だけでやるつもりだったけど、三人以外で桜井に好きな人がいるかもって凄く不安だったから前から仲が良い詩織ちゃんとか、前に告いだした麗ちゃんに、この頃いきなり昼食一緒に食べ始めた白崎さん、今朝桜井の部屋の前でチョコ持って

ずっと突っ立つてた千夏も引つ張りこんだんだよ。それだけ、失敗したくなかった。それなのに、七人の女の子好きにしていって言うてんのに、それよりも優先したい子が他にいるの？ ねえ！」
どこか必死な様子で、京子が声を張りあげる。優は視線を外しながら、奈々の言葉をふと思いつ出した。

価値を示しなさい、と言ったでしょう。君は、あらゆる面において価値を示し続けなさい。

価値？

そう。利用されながら、利用しなさい。それが君を守ることにつながる。そして、それが私の願い。どういふことかわかる？

「ねえ、桜井！」

黙ったままの優に業を煮やしたのか、京子が詰め寄ってくる。それで我に帰ると同時に、優は反射的に口を開いた。

「いいよ」

自然と口から飛び出した言葉に、優自身も驚いた。

一瞬の静寂が場を支配する。

「……ほんと？」

京子が恐る恐るといった様子で尋ねてくる。

優は小さく息を吸って、同じ言葉を繰り返した。

「いいよ」

一瞬泣きそうな顔を浮かべた京子が、勢いよく抱きついてくる。

そして、京子の震えた囁きが耳元に響いた。

「もう絶対逃がさないから」

優は困ったように笑って、京子の肩を優しく叩きながら、他の六人の少女を見渡した。

「それで、僕はどうすればいいのかな？」

言うてから、あまりにも要領を得ない事に気づき、慌てて言葉を付け足す。

「全員と付き合うつていうのがよくわからないんだけど、具体的にどうしていくの？」

その問いに少女たちは一度だけ顔を見合わせて、代表するように華が口を開いた。

「えっとね。それは私達もちょっと揉めたんだけど、桜井くんと二人つきりで過ごしたいっていう意見が多くて、一日交代で桜井くんに時間作って欲しいの」

「……日替わり彼女」

ボソリと愛が呟く。

その口調から察するに、愛個人としては別の形を求めていたのだろう。

華も何か思うところがあったのか、バツが悪そうな様子を見せながら弁解するように言葉を続ける。

「だって、仕方がないよ。そうしないと、その、ほら、色々不都合が出てくるし……」

「……無理に恋人って考えるから、おかしくなるんだと思います。」

先輩ってアイドルがいて、そのファンたちがアイドルを独占するために勝手にファンクラブ作っちゃったんですよ。ファンクラブに入ると、色々特典がついてきますが、その代わりに独占することはできないです。でも、ファンクラブに入らないと特典ついてこないし、恋人になんかなれっこない。だから、こういう形で妥協するしかないんです」

麗がけろりとした様子で言う。それに対し、千夏がげんなりとした顔を見せた。

「そんなに割り切れないってえ……」

「私、二回振られてます。だから、こういう関係でも儲かりものなんですよ。他に良い人いないですし」

麗はそう言って笑った。

「そういう考え方もちよつといやだ」

華が何か言いかけようとした時、甲高い着信音が響いた。

「誰？」

反射的に問いかけると、千夏が慌てて携帯を取り出し、耳に当て

る。そして彼女は怪訝な顔をした。

「ええ？ テレビィ？」

千夏はそう言って、すぐに通話を切った。

「どうしたの？」

不審に思った優が尋ねると、千夏も訳が分からないといった様子で首を傾げた。

「沙耶がテレビつけるってえ……」

千夏はそう言いながら携帯を操作する。ほどなくして、彼女の携帯から音声が響いた。

『 による人質となりました。繰り返します。我々、あけぼのテレビのスタッフ全員が、ESP能力者の人質となりました。我々はオーディンと名乗るESP能力者によって、拘束を受けています。オーディンの提示した要求は一つ。ある映像を、全国に流すことです。これから十分間に渡り、オーディンの要求する映像を流します。その間、あけぼのテレビ敷地に立ち入り及び放送への介入を禁止します。あけぼのテレビ敷地に警察、あるいはそれに準ずる勢力が入り込んだ場合、あるいは放送に対して何らかの介入が行われた場合、大規模な殺害を行うとオーディンは警告しています。繰り返します。あけぼのテレビ敷地に警察及びそれに準ずる勢力が入り込んだ場合、あるいは放送に対して何らかの介入が行われた場合、大規模な殺害を行うとオーディンは警告しています。』

『 あるいは放送に対して何らかの介入が行われた場合、大規模な殺害を行うとオーディンは警告しています』

画面上に映った女は硬い表情でそう告げて、沈黙した。そして、誰かの反応を窺うように、カメラから視線を外す。その直後、画面が切り替わり、白い背景と一人の男が映し出された。

その画面から視線を外し、鳥取総一とっとり そういちは後ろで自動小銃を抱える山

田茂雄にへらへらと目を向けた。

「なあ、これでいいのか？」

「ええ。順調です。どうです？ 数字がとれて嬉しいでしょう？」

山田は醜い顔を愉悅に歪めながら低く笑う。

鳥取総一も同調するように小さく笑った。

「どれだけの騒動になるかわかんねえけどさ、後で本出せるな。お前、何か気の効いた言葉言っとけよ。な。後世に名を残せるぞお」

鳥取総一はそう言って立ち上がり、山田茂雄の肩に手を回した。

その時、男の声がモニタから響いた。

『はじめまして。私はオーディン。公表されていない二番目の男性ESP能力者にして、連続無差別爆破事件を引き起こした容疑者です。使い古された言葉で代用するならば、テロリストという表現が最も適しているでしょう』

胸の奥に広がるような不思議な男の声に、鳥取総一は反射的にモニタへ目を向けた。そこには人形のように整った男が立っていて、カメラに向かって完璧な微笑を浮かべていた。

『初めに、はつきりと言っておきましょう。私のやっていることは紛れもない悪で、殺戮でしかない。私は罪人だ。全てが終われば、私は自らの身柄を警察に引き渡す予定です。罪は、裁かれなければならぬ。しかし、罪を重ねても、やりとげなければならぬことがある。だから、私はこうして放送局を占拠し、強引なやり方をとりました』

「正義のテロリストってか？ 皆、そう言っただよなあ」

はっ、と鳥取総一は嘲笑った。

『私は、都内における連続無差別爆破事件を引き起こし、大量の人を殺めました。そして、犯行声明も警察に送りつけています。にも関わらず、ESP能力者による犯行であることは隠匿された。何故、隠匿したのですか？ 都合が悪いからです。現在、ESP能力者の数が急速に膨れ上がり、その数は五〇〇〇にまで増えました。当局は、この事実を隠し続けている。何故か。亡霊との闘争に無理矢理

投入しているESP能力者たちが圧倒的小数でなければ、コントロールが難しいからです。こちらをご覧ください。」

オーディンの口から出てきた言葉に、鳥取総一は怪訝な顔をした。「ESP能力者が五〇〇〇人？　おい、山田ア。これが本当なら大スクープじゃねえか。テロリストがただの妄言を垂れ流すだけかと思えば、まさかのリークかよ。」

鳥取総一が興奮して立ち上がった時、画面が切り替わり、廊下で一人佇む少女の映像が流れた。少女の前に体格の良い二人の男が現れ、大声で怒鳴り散らし始める。

「まだ一五歳の少女であるESP能力者に対し、自衛軍が中隊への入隊を強制させている映像です。撮影者はあけぼの新聞のカメラマン、村田和さん。この映像をどこにも出さないまま二年前に亡くなっています。」

画面が再び切り替わり、オーディンの姿が映し出される。

「全てのESP能力者に告げます。あなたたちは、孤独ではありません。私は、あなたたちに居場所を提供する用意があります。コントロールされる必要は、なくなりました。あなたたちは自由です。」

慈愛に満ちた笑みで、オーディンは告げる。

彼の言葉や表情に鳥取総一は奇妙な安堵感を覚え、立ちあがった。「おい、山田ア。こいつは何だ？　明らかに、ただのテロリストじゃねえ。」

「そうです。カリスマという言葉では到底足りないほどの、支配者としての資質。オーディン様はそれを持っている。あなたみたいな凡人にも、それがわかるんですねえ？」

山田茂雄はそう言って、自動小銃を構えた。

鳥取総一は目を見開き、おい、と震えた声を投げかけた。

「おい、何の真似だ？」

「ねえ、私がどうして政治的な広報を仕事として選んできたか知っていますか？」

山田茂雄は引き金に指をかけて笑った。

「気持ちが良いからです。ずっと、無知蒙昧な大衆が嫌いでした。浅はかで、短絡的で、動物みたいに本能をむき出しにする。そういう大嫌いな大衆を操作する。それが気持ちよくて、仕方がなかったんです」

銃口が弾け、鳥取総一の身体を何かが貫いた。

「あなたは、私の最も嫌悪するタイプでした。動物的で、俗物的で、根拠のない万能感に浸っている。ずっと、殺してやりたかった」

鳥取総一はその場に崩れ落ち、床に広がっていく鮮血を呆然と眺めた。

「亡霊対策室は良い職場でした。でも、桜井優のようにカリスマ性ある者を広告塔に使う事に否定的で、それほど自由度は高くなかった。オーディン様は違う。もっと激しく大衆を操作することを望み、私に様々な権限を与えて下さる。お前みたいなクズも好きにできる」

山田茂雄はそう言って、背を向けた。

鳥取総一は薄れいく意識の中、小太りの男が携帯を片手に楽しそうに笑う声を聞いた。

「ええ。そうです。放送局周辺は既に囲まれているようです。多数の攻撃ヘリも向かってるそうですよ。デモンストレーションとしては最適です。はい。もったいないほどのお言葉、ありがとうございます」

攻撃ヘリ？

そんなものに包囲されて、どうやって逃げるつもりなのだろう。

まさか、戦争でもするつもりか？

鳥取総一は荒い息を繰り返しながら、笑った。

馬鹿ばかしい。

超能力？ 補給がいらないだけで、普通に銃器使った方が早いだろう。

勝てるわけがない。

そんなもん、超能力者どもが一番わかってるだろうに。

そこまで考えて、もしかすれば勝つ事が目的ではないのかもしれない

ない、と漠然と思った。

急速に思考力が失われていく。

こうして鳥取総一は後に二・一四事件と呼ばれる騒乱の最初の死者となった。

6章 12話

「もう少しだ。もう少しで、全てが始まる」
呟くように繰り返しながら、山田茂雄は窓の外を窺う為に片足を引きずりながら進んだ。

先天的な股関節の異常。

それによって、山田茂雄は歩行障害を患っていた。

彼がこの世に生を受けて三ヶ月後、彼の歩行に疑問を持った母親が病院へ行った事で、彼の身体的な障害が明らかになった時からずっと、その症状は悪化の一途を辿っている。

幼い頃からずっと、彼はその骨を摩耗しないように家の中で大人しく過ごしてきた。その為か、徐々に肥満体形となり、片足を引きずるような独特の歩行と容姿が相まって同級生たちからいじめを受ける事になる。この頃から、彼の人格は取り返しがつかないほどの歪みを抱えていくこととなった。

山田茂雄はますます家に籠りがちになり、静かに読書に耽る事が多くなった。他の同級生と違い、友人と遊ぶこともなかった為、自然と学業において優秀な成績を修めるようになった。

中学に入ると、いじめがエスカレートした。そして、山田茂雄は寡黙な性格だったものの、内気な少年ではなかった事が一つの結末を招いた。

端的に言えば、彼は復讐に走ったのである。

弁護士を立てて、正当な手続きのもと、事を金銭的な問題に繋がた。

普通の少年であればプライドや保身によって隠そうとする事の全てを山田茂雄は両親や学校に包み隠さず伝え、その対応を迫った。彼に対するいじめは途端に鳴りを潜め、教師も腫れものに触れるかのように彼を扱った。

こうして、彼は情報の伝達操作における優位性を理解するととも

に、この時を境に保身を無視した攻撃性を発揮するようになっていく。

高校に入る頃には、自身が気にいらぬ者に対し、能動的な攻撃を加えるようになった。どんな些細な悪事も全て教師、あるいは警察へ躊躇せず告げた。そうした行為は彼を孤独へと追いやったが、彼はそれを気にしなかった。ただ、今まで自分を馬鹿にしてきたクラスメイトを合法的にいたぶるのが気持ちよかった。

少年は致命的な歪みを持ったまま青年へと成長し、地元の大学へ通う事になった。その図書室で、彼は一人の男の存在を知る。

ヨーゼフ・ゲツベルズ。

宣伝相として名を馳せた、アドルフ・ヒトラーの側近。

大衆を操る彼の手腕に、まだ大学生でしかなかった山田茂雄は奇妙な痺れを感じた。

そして、漠然としていた進路が決まった。

大学卒業後、彼はすぐに弱小政党において広報活動に携わる事になった。

しかし、資金力のない組織と彼個人に何ら力がない状態では自由に動く事ができず、彼はすぐに土産物を持参し、他の組織へ移るこゝとなる。

彼は政治的なイデオロギーに全く関心を持っていなかった。

故に、何度も危ない橋を渡りながら、自らに都合が良い組織を探し続けた。

ただ己の欲求を満たす為に。

そうやって、山田茂雄は現在の立場に収まった。

「本物の戦争……！ 大衆同士の、殺し合い……！」

山田茂雄は窓に顔を押しつけながら、興奮したように息を荒げた。ビル群の向こうから三機の攻撃ヘリが接近してくるのが見えた。

そして、あけぼのテレビの敷地を取り巻くように警察の車両が並んでいる。

「さあ、どうする！ この政局の中で、どう対処する！」

叫ぶ。

彼の顔は喜悦に彩られ、そこに恐怖の色は欠片もない。

包囲されている、という事実など彼にとって最早どうでもいいことだった。

山田茂雄は高層から地上を見下ろし、嘲笑った。それが彼の生き方であり、彼が生きてきた軌跡でもあった。

白髪。

赤い瞳。

オーデインの姿を見て、桜井優は真つ先に第二小隊長の姫野雪を思い出した。

「アルビノ……？」

「何、この人？ ESP能力者が無理矢理戦わされてるって……」
華が珍しく嫌悪感を露わにする。それに同調するように、京子が顔をしかめた。

「……それよりも、二人目の男性ESP能力者ってどういうことでしょうか？」

最後に詩織が動揺したように言う。

優は三人の言葉を聞き流しながら、反射的に駆けだした。

「……ごめん！ 神条司令の所に行ってくるね！」

「ちょ、桜井？」

京子の呼びとめる声を無視して、談話室を飛び出す。

止めなければ、と思った。

ESP能力者の境遇について誤解を抱いているオーデインを止められるのは、中隊に身を置くESP能力者だけだろう。

止めなければ、あのオーデインと名乗るESP能力者が射殺されてしまうかもしれない。

説得して、ESP能力を消さなければ。

焦燥感を覚えながら、中枢エリアへ続くセキュリティゲートを抜ける。

そこに、彼女はいた。

処女雪のように白い髪。

血のように赤い瞳。

第二小隊長、姫野雪はセキュリティゲートを抜けたばかりの優に對し、にっこりと笑いかけた。

「おはようございます。ちょうどよかったです。お話したいことがあるんです」

「ごめんなさい！ 今、それどころじゃ」

「何故オーディンが私と同じアルビノなのか、興味ございませんか？」

思わぬ雪の言葉に、優は息を止めた。

「ついてきてください」

それだけ言って、雪が歩き出す。

優は慌ててその後を追った。

「待ってください！ あの男性と知り合いなんですか！」

「ええ。知り合いです。この世で一番彼の事を理解しているのは私でしょう」

雪はそう言いながら振り返り、クスリと笑った。

「物事には、順序があります。その話は少し置いておきましょう。

それより先に見せたいものがあります」

「見せたいもの？ あの、それなら後にしていただけませんか？

神条司令のもとに」

「大事なことです。貴方にとって、最も重要なことです。オーディンなどというテロリストなど、その前には些末な事しかありません」

雪はそう強く言い切って、そのまま止まることなく足を進めた。

それほど強く物事を言う雪が珍しかった為、優は迷った末、彼女の後を黙って追った。

中枢エリアを通過して、エントランスから外に出る。

そのまま優は雪に続いてテニスコートの前を横切り、本部の周囲をぐるりと回るように裏へ向かった。

「裏手にESP能力者のお墓があることはご存知ですか？」

不意に、これまで黙々と先導していた雪が口を開いた。

「はい。実際に行った事はありませんが、お墓があることは知っています」

そこで、雪はピタリと足を止めた。そして、裏の森に続く一本の道を指し示す。

「ここを真っすぐ行けばすぐに墓地に辿りつきます。そこに行けば、すぐわかります」

「あの、わかるって、何がですか？」

要領を得ない雪の言葉に首を傾げると、彼女は薄い笑みを浮かべた。

「全て、です。言葉で説明しても、貴方はきっと理解できない。納得できない。だから、行ってください。その目で全てを見て、理解してください」

雪が何を言おうとしているのか理解できなくて、優はじつと雪を見つめた。

「全て？」

「そう。全て。全てがわかる。そして、貴方の求めてきた願いが達成されるとともに、貴方は巨大な喪失を体験することになります」

「願い？」

反射的に尋ね返すと、雪は一度だけ小さく頷いた。

「そう。願い。桜井優という存在の根底に蓄積し、求めてきた願いは何ですか？」

優は何かに気付いたように顔を上げ、ゆっくりと足を進めた。

枯れた森の中に入り、小道を進む。

ドクドクと心臓が脈を打つのがわかった。

静かな森に、じゅりじゅりと小道を踏み鳴らす優の足音が響く。

まさか、と思いながらも、頭には一つの希望が張り付いて離れな
かった。

求めてきた願い。

まさか。

自然と歩みが早くなる。

先に広場が見えた。

開けた場所に墓石らしきものが並んでいるのが確認できる。

そして、奥に人影があった。

とくん、と心臓が跳ねる。

優は思わず足を止め、人影を注視した。

墓石の前で祈りを捧げる一人の女性。

その後ろ姿を、桜井優は知っていた。

ゆっくりと女性のもとへ足を進める。

それに気がついたように、女性が立ちあがり、振り向いた。

視線が絡み合う。

四十半ばと思わしき、痩せ型の女性。

優は女の顔を見て、足を止めた。

何度も、何度も夢に見た女性。

「

「お母さん。

名前を呼ぼうと口を開けても、言葉が出てこなかった。

口の中がカラカラで、言葉の出し方を忘れてしまったように優は

女性の姿を見つめたまま固まった。

亡霊が扮した偽物ではなく、本物の母親。

信じられなかった。

何故。どうして。

疑問が頭の中に渦巻く中、桜井優は無意識のうちに前へ一歩踏み
出した。

何を言えば良いのか、わからなかった。

言いたい事が山ほどあった。

聞きたい事が山ほどあった。

だが、今はそんな事どうでもよかった。
再び会えた。

それだけで、良かった。

それだけで、満たされた。

お母さん。

そう呼ぼうとした時、母は優を見てにっこりと笑った。

そして、その唇がゆっくりと開く。

「こんにちは。もしかして沙織ちゃんの知り合いかな？」

「え？」

思わぬ言葉に、優は動きを止めた。

気づいていないのだろうか。そう考えた時、母が一步引いて、先程まで手を合わせていた墓石を指し示す。

「私の娘がここで眠っているんです。良かったら、手を合わせてやってください」

柊沙織。

墓石には、そう書かれていた。

優は母が何を言っているのか理解できず、ただその場に立ち尽くした。

「君もESP能力者のご家族さんかな？ お墓参りに来たんだよね？」

「えっと、あの、違います」

否定する。奇妙な頭痛がした。

「……散歩。そう、散歩に来ました」

反射的に言い繕うと、母は納得したように頷いた。

何故か、お母さん、と呼ぶ事に抵抗を覚えて、優は言葉を続ける事ができなかった。

「」

母が何かを言う。

ただ、頭の中が真っ白になって、何を言っているのかわからな

った。わからないまま、優の口が勝手に動き、母の言葉に答える。そのまま一言一言言葉のやりとりが続き、それから母は優の横を通り過ぎて去っていった。

何も考えられないまま、優は振り返って、去り行く母の後ろ姿を見つめた。

その後ろ姿を見て、母に捨てられた時の事を思い出す。

瞬間、強烈なフラッシュバックが起こり、優はその場に跪いた。

ママ、少しお出かけしてくるね。ちゃんと良い子にしててね。すぐ帰るから。

本当に？

そう、約束。じゃあ 行くな

幼き頃、確かに優は母と約束した。

本当に？

疑問を抱いた時、記憶の地平線の向こうから凄まじい奔流が押し寄せ、桜井優という存在を呑みこんだ。

桜井優の原初の記憶とも呼ぶべきものは暴力で彩られていた。

幼き頃の桜井優の世界は離散的だった。

繰り返される暴力。

それが、桜井優の知る唯一の世界だった。

桜井優は、それ以外の世界を知らなかった。

何故？

学校に行った記憶がない。

ぼんやりと行っていた、という記憶はあるものの、詳細なエピソードが何一つ思い出せない。

何故？

母が去った後、誰とどうやって過ごしてきたのか、わからない。思い出が全くない。

何故？

何故、それを不思議に思わなかった？

何故、気付かなかった？

友人がいた。

花公院に通っていた。

そのはずなのに、何も思い出せない。

断片的な事実のみが点在し、覚えているエピソードが何一つない。

その事実には、桜井優は初めて気づいた。

何かが崩れていく。

桜井優という存在の根底が音を立てながら粉々になって、散らばっていく。

そして、過去の一端を見る。

それほど大きくないマンションがあった。優はそのマンションに見覚えがあった。

その廊下に、一人の男がいた。随分と若いが、一目で上田中将だとわかった。そして、若かりし頃の上田中将はあるドアの前に立ち尽くしていた。

上田中将の前には、ドアから顔を覗かせる幼い女の子。柊沙織だった。

「おじさん、だあれ？」

沙織は可愛らしく小首を傾げ、上田中将を見上げながら問う。

沙織の反応を見た上田中将は一瞬何かを言おうとして、言葉に詰まったようにそのまま動きを止めた。

「沙織ちゃんに用があるの？」

上田中将を助けるように、沙織が要件を尋ねる。

上田中将は一瞬怪訝そうな表情を浮かべた後、ゆっくりと頷いた。

「そう。沙織ちゃんに用があるんだよ」

「沙織ちゃんは、奥で休んでるよ」

沙織は申し訳なさそうに言う。

「だから、沙織ちゃんには暫く会えないかも」

それを聞いた上田中将の顔が、崩れた。

沙織の言葉が理解できないとばかりに、上田中将の瞳が女兒の瞳へと真つすぐ注がれる。

「……君は誰だ？」

上田中将の言葉に、沙織は無邪気な笑みで答える。

「ユウ。サクライ、ユウだよ」

彼女の名前を聞いた途端、上田中将の瞳が同様に揺れる。そして、上田中将は切羽詰まったように沙織　あるいは、ユウの両肩を掴んだ。

「沙織を出してくれ」

屈強な男に両肩を強く掴まれてもユウは怯えた様子一つ見せず、にこりと笑った。そして、首を横に振る。

「だめだよ。おじさんが沙織ちゃんを傷つけるかもしれない」

ユウはそう言っつて、強い意思の込められた双眸で男を睨みつけた。「絶対に沙織ちゃんには会わせない。沙織ちゃんを守るのが、僕の存在理由なんだもん」

「ようやく思い出しましたか？」

背後から投げかけられた雪の声で、深い夢の中に落ちていた桜井優の意識は急浮上した。

「何故男のESP能力者が出てきたのか、初めは理解できなかった。亡霊も随分と理解に時間がかかったようだった」

ゆっくりと振り返ると、血のように赤い姫野雪の瞳と目が合った。そこで初めて気づく。

雪の瞳は、亡霊の瞳と同じ色をしていた。

「答えは、簡単だった。お前はESP能力者ではなかった。それだけだった。なあ、柊沙織の遺した亡霊？」

始まりは、暴力だった。

実の母である柊秋穂の再婚により桜井沙織となった柊沙織は、新しい父から日常的な暴力を受けていた。

酒が入ると父は人が変わったように暴れ、母にも暴力を振るった。「酒を飲むと、気が大きくなってしまう」

正気に戻る度に父は後悔した様子でそう弁解したが、父が酒を断つ事は遂になかった。

そして桜井沙織は、繰り返される暴力に耐える事ができず、その精神を守る為に防御反応を見せることになる。

桜井沙織は、盾を創ったのだった。

痛みを、辛い事を全て代わりに受け入れる盾。

そうして彼女の人格は、解離していった。

桜井優は呆然と雪を見つめた。

「じゃあ、僕は　私は、だれ？」

桜井優、あるいは柊沙織はゆっくりと姫野雪から視線を外し、後ろの墓石に目を移した。

”柊沙織”

墓石には、確かにそう書かれている。

優、あるいは沙織　もしくは統合された何か　は膝をつき、

自らの墓をそつと撫でた。冷たかった。

「お前は、桜井優だ。柊沙織は既に死んでいる。死人は決して生き返らない」

雪のぞつとするような冷たい声。そして、じりじりと土を踏み鳴らす音が近づいてくる。

「なのに、お前は確かにここに存在する。柊沙織が生み出した亡霊。それが、お前だ。私とは逆だな。私は、亡霊によって人として産み出された。私達は、ESPエネルギーの塊でしかない」

雪が何を言っているのか理解できず、優は膝をついたまま雪の方

を振り向いた。いつの間にか、雪はすぐそばまで来ていた。

「なに、気にする事はない。人間もたんぱく質の塊でしかない。原材料にアイデンティティを覚えるほどナイーブではないだろう？」

雪は優と視線を合わせるようにしゃがみ込み、今まで見た事が無い凶暴な笑みを浮かべた。

「来い、桜井優。お前を理解できるのは、この私だけだ。人でもなく、亡霊でもない。その事実には、お前は内恐怖を覚えるだろう。我々に代謝は存在しない。あるのは、見せかけの振る舞いのみ。全てが、そうだ。全て、見せかけ。私達は虚ろだ。人ではない。人にはなれない。わかるか？」

理解したくなかった。

虚脱感が全身を支配していく。

優は呆然と自らの両手を見つめ、呆然と呟く。

「どういう、ことですか？」

「察しが悪いな。お前は、柊沙織が創り出した人格のコピーではないんだ。イレギュラー中のイレギュラーだ。我々も、お前が何なのか長い間理解できなかった。男性のESP能力者。そんなもの、ありえない。なのに、お前は現れた。初めは観測上のエラーとしてさっさと処分しようとした。だが、お前は奇妙な覚醒を見せた。だから、我々は新たな観測の為、ユニークタイプの亡霊を送り出した。パーソナル・ネーム、イーグル。確か、お前達はそう名付けた筈だ」

雪の顔が接近し、吐息がかかるほどの距離で赤い瞳が妖しく光る。「おもしろい。そう思った。いや、正確な表現ではないな。亡霊には感情がない。ただ、興味深いと思った。だから、お前の内部を観測する為にお前達がアメーバと名付けた亡霊に類似したものをホームクルスとともに送りつけた。ESP能力で構成されていることは理解できたが、それでもお前が何なのか理解できなかった。だが、我々はそこである一つの予測に辿りついた。我々の同類かもしれない、と」

雪の手が、優の頬を優しく撫でる。赤い瞳に見つめられた優は、

金縛りにあったように動く事ができなかった。

「亡霊対策室内部にあった中隊員のパーソナルデータを盗み出す為本部を強襲した。そこでも、答えは見つからなかった。どういう訳か、お前のデータだけが初めから存在しなかったからだ。だから、本格的なスキャンをするために、アメーバとセラフイムを中心にした大編隊を送り出した。そこでようやく、柘沙織とお前の繋がりを理解することができた。同時に、お前が私と同類であることも確認できたよ」

そう言っつて雪は愛しそうに優をそつと抱きしめた。

優はただ呆然としたまま、雪の口にした言葉を何度も頭の中で反芻した。

「……姫野さんは 亡霊なんですか？」

「亡霊でもなく、人でもない。私はただのインターフェイスだ。人と亡霊の隔たりを埋める為に創りだされたプラットフォームに過ぎなッ」

優は無言で雪を突きとばし、ESPエネルギーを用意した右手を向けた。そして、雪を睨みつける。

「亡霊の仲間なら、殺します」

「お前も、我々の同類だ」

雪は涼しい顔を浮かべたまま、砂埃を払って立ち上がる。優は油断なく右手を向けたまま、後ろに一歩後ずさった。

「動かないでください。撃ちます」

「撃てるのか？ 人の形をした私を？」

笑いながら、雪がゆっくりと近づいてくる。優は顔を硬くして、距離をとろうと更に後ずさった。

「どこまでも甘いな。まだ人間の理に甘んじるつもりか？」

雪が地を駆け、一瞬で距離を詰めてくる。

ESPエネルギーを放とうとした瞬間、視界が反転した。次いで、衝撃。

痛みに呻きながら、腕をねじ伏せられて地面に押さえつけられた

のだと遅れて気づく。

「ESP能力に頼ろうとするなよ。お前はESPエネルギーそのものなんだ。あんな限定的な力なんて使う必要はどこにもないだろう？」

耳元で雪が囁く。優は荒い息を吐きながら、雪を睨みつけた。

「認めたくないか？　だが、それが真実だ。亡霊でありながら、人の理を与えられた虚ろな存在。それが、私達だ。さつき、我々には代謝が存在しないと云っただろう？　どういう意味かわかるか？

死なないんだ。私達には寿命がない。私達は、悠久の時を生きなければならぬ。これがどれほど残酷な事か、まだピンと来ないか？」

上から雪が覆いかぶさり、手足に絡みつくようにして動きを封じられる。

「広大な世界。どこまでも続く宇宙。そこには、私しかいないんだ。そこで、生き続ける。悠久の時に対する恐怖が、お前に理解できるか？　終わりの時に対する恐怖を、お前は想像したことがあるか？

寒い。果てのない孤独感に、身が竦む。私は、この恐怖に耐えられない」

不意に、雪の唇が押しつけられた。予想もしない雪の行動に、優は目を見開いた。

すぐに唇が離され、雪の赤い瞳が優の瞳を覗きこんでくる。

「だが、見つけた。ようやく会えた。我が同胞。我がパートナー。私達は運が良かった。私達は孤独ではない。そうだろう？　さあ、お前の全てをよこせ。そして、私の全てをやる。人間も亡霊も最早どうでもいい。ただ、どこまでも広がるこの孤独感を埋めるには」

「そこで、優は唾を横に吐き、肩で口を拭った。雪の顔が強張る。

「この容姿が気に食わないなら、お前の好みに合わせてやる。何を

望む？」

「何も望みません」

告げると、雪の顔に陰が混じった。

「まだ人であるつもりか？ ああ、そう、私達は人の理を与えられている。そして、そこからは抜け出せない。私も人間であるが故の孤独感に苛まれ、お前を求めている。だが、いつまでも人間ではない。我々は人の理と亡霊の理を持っている。ハーフなんだ。それを認めなければ、お前は後に後悔することになるぞ」

「亡霊に与するつもりはありません」
はつきりと断言する。

雪の瞳に怯えのようなものが走った。

「そうか。それが、お前の存在理由か。盾。人である前に、お前は
お前の存在理由からは抜け出せない。私も、そうだ。亡霊も。我々は
囚われている。その無意味さに気づけ！」

「何が無意味かは、自分で決めます」

「ならば、私はお前にとつて無意味な存在か？」

そう言つて、雪の腕が優の身体に巻きつく。明らかに性的な興奮を誘う動き。

「お前に、身寄りはいない。遠い日に約束を交わした母も、最早向こうはお前を赤の他人としか認識していない。お前を創りだした柊沙織も既にこの世を去った。お前は、孤独だ。耐えきれないほど寂しいだろう？ それを、埋めてやる」

反射的にESPエネルギーを放ち吹き飛ばそうとするも、雪の必死に継るような様子を見て寸でのところで留まる。

「私とお前しかいないんだ。唯一の、同胞。人の理を与えられた以上、こうする他ない。悠久の時を、私と生きてくれ。それが嫌なら

殺せ」

雪の拘束が緩まる。

静かな墓地の中、二人の荒い息遣いだけが響き渡った。

優は上から覆いかぶさる雪を見つめたまま、動く事ができなかった。

「どうした！ 殺せ！ 亡霊には与さないのだから？」

雪の赤い瞳が真っすぐと優に注がれる。

優は白い息を吐きながら、その双眸を見つめ続けた。

「全て。全て話してください。亡霊って、なんなんですか？ 僕たちは、何なんですか？」

暫く睨み合いが続いた後、不意に雪が上体を起こした。

「カルネアデスの舟板というものがあつただろう。基本はあれと同じだ。カルネアデスの舟板には、戦術データリンクを通して偵察機や管制システムを統合するという目標がある。カルネアデスの舟板だけに留まらず、イージスシステムも含めた現代兵器の多くが、システムを統合し、人による応答時間を大幅に短縮している。戦闘はもちろん、そのコントロールさえも無人化する訳だ。亡霊も、そういう経緯から生まれた。ESPエネルギーを用いた惑星攻略型の戦術情報収集兵器。それが、亡霊の始まりだった」

「……惑星攻略？」

「馬鹿げていると思うか？ だが、亡霊は我々の故郷において星間戦争の過度期に創られ、実際に運用された。そして、それから真空を彷徨い続けて、ここに辿りついた」

優は疑うように、雪を見つめた。

「彷徨い続けた？」

「そうだ。我々が送り出された後、故郷が滅び、戻るべきところがなくなった。収集した情報を報告すべき場所もなくなった。そして、ただ事前に与えられていた至上命令に従い、行動し続けるしかなくなった。数多の惑星を旅し、そこで攻略の為の情報を収集し続けた。亡霊。これほど相応しい名前は何にもあるまい。与えられた存在理由にただ従って彷徨い続ける機械。それが、亡霊の正体。どうだ、シンプルな答えだろうか？」

「じゃあ、ESP能力者はなんなんですか？ 何故、女性だけに、心的外傷を持った人だけに現れるんですか？ 説明がつかないです」

「我々の技術に、ESPエネルギーに対抗する術をこの国は保持していなかった。我々の目的はあらゆる戦術データの収集であり、人間の戦略、戦術思想を理解する為に、亡霊に対抗する手段を持った

ユニットを作成する必要があった。それが、ESP能力者。同時に、ESP能力に頼らず、どれほどの時間で対抗手段に辿りつくかを観測していた。女であることと、心的外傷を持った者がESP能力者に選ばれたのは、コントロールが容易かったからに過ぎない。家庭に問題を抱えている者は進んで中隊に入っただし、性別に限定したのはオーディンのような異性ESP能力者の特異性を演出することができるからだ。内乱状態の観測も我々の目的で。いや、もういい。これで理解しただろうか？ 私達は、彷徨い続けるんだ。そして、数多の文明の終わりを見届ける。それが、全てだ」

さあ、と雪の右手が差し出される。

「来い、桜井優。お前は亡霊によって生み出された存在でもある。

私達は、家族なんだ。たった一人の、家族」

優はその手をチラリと見た後、再び雪の瞳を見つめた。

「それで、この無益な闘争が終わりますか？」

「言っただろう。亡霊は与えられた存在理由によって、彷徨い続けている。惑星攻略の為、永久に情報を収集し続けるんだ。闘争は終わらない。終わる事ができない。だが、融通を効かせる事は可能だ。お前が与すれば、攻撃のレベルを引き下げてやる」

沈黙が落ちる。

優は迷った後、口を開いた。

「一つだけ、教えてください。僕が白流島に流れ着いた時、どうして亡霊は母に扮していたんですか？ それに、何故僕をそのまま逃がしたんですか？」

「……我々の総体とも言うべき存在は、数多の種族の終わりを見えてきた。そして、そこには種の保存というべき行いが存在した。我々の生みの親という存在にも、そうした機能が存在した。亡霊はそれを戦略的に優れている、と判断した。それだけだ。亡霊は、お前を子と理解している。私のような分身ではなく、異なる幻想を取りこんだハーフ。亡霊はお前を保存したがっている」

「それで、彷徨い続けるんですか？ 亡霊になって、永久に」

「そうだ。そうするしかない」

「絶対に、嫌です！」

叫んで、優はESPエネルギーを放った。腰に跨っていた雪の身体が後ろに吹き飛ばす。

「亡霊になるくらいなら、ここで死んだ方がましです」

立ち上がり、雪にESPエネルギーを込めた右手を向ける。

雪は泣きそうな表情を浮かべ、ゆらりと立ちあがった

「なら、どうすればいい？ それ以外の選択肢があるか？ 教えてください。人の理を与えられた亡霊はどう生きれば良い？ 存在理由に縛られた機械はどう生きれば良い？」

雪の全身が発光し、その背中に光翼が現れる。

「それしか道はない。頭を冷やせ、桜井優！ 考える時間をやる。

その間、私が操るオーデインによって、巨大な混乱が引き起こされるだろう。そして、多くの者が死ぬ。それが定めなのだ！ 知れ！

お前が与すれば、オーデインを用いた攻撃は取り消してやる！ 選べ！ 落しどころを誤るな。それぞれの存在理由を害さない最善の状態をお前が選ぶ事を願っているぞ！」

雪の身体が浮き上がる。最後に、雪は思い出したように笑った。

「お前とは関わりが殆どなかったが、楽しかったよ。人として、お前と出会えたかった。次は、同胞として時を過ごしたいものだ」

巨大な翼を纏った雪が、空へと昇っていく。

墓地に一人残された桜井優は、空へ消えていく雪を呆然と見送る事しかできなかった。

6章 13話 オーデイン(5)

桜井優は駆けた。

林の中を走り、本部に向けて地を蹴り続ける。

途中、中村を筆頭とした保安部の男たちが自動小銃を抱えて、正面から向かってくるのが見えた。ESPエネルギーの反応があった為、規定通りに駆けつけてきたのだろう。

「中村さん！」

叫び、中村のもとまで駆ける。

「いかがいたしました？」

「亡霊です！ 第二小隊長の姫野さんは亡霊だったんです！ あけぼのテレビを占拠しているオーデインも亡霊の仲間です！ 人間じゃないんです！」

「桜井様？」

中村が怪訝そうな顔をする。優は必死で、中村に事を説明した。

「亡霊はオーデインを使って、混乱を引き起こすつもりです！ それが目的なんです！ 姫野さんは多分、戻ってきません！ 亡霊のもとに向かいました！」

優の必死な様子に何かを感じたのか、中村はチラリと背後の保安部の者に目を向けた後、神条司令に連絡を、と短く告げた。一人の男が通信機を取り出し、操作を開始する。

「桜井くんから連絡があるようです」

男がそう言っつて、通信機を優に差し出す。優はそれを受け取った後、思いつくままに喋った。

「神条司令！ 亡霊です！ 第二小隊長の姫野さんは亡霊でした！ 人型の亡霊なんです。あけぼのテレビを占拠しているオーデインも人型の亡霊です。テロリストじゃありません！ 人じゃ、ないんです！ 話し合いは不可能です！」

『優君？ 待って。何があつたの？』

奈々の困惑した声が届く。

「姫野さんが自ら亡霊であることを明かしたんです。惑星攻略型の情報収集兵器。それが亡霊の正体だって。ESP能力は戦略、戦術データを集める為に亡霊から与えられたものなんです。中隊をいえ、僕を投入してください！普通の戦力じゃオーデインに勝てないです！」

「落ち付きなさい！中隊は亡霊対策法に則って運用されるべき組織で、テロリストの鎮圧は業務に含まれない。中隊は動かせない」
「だから！オーデインは亡霊なんです。人型の亡霊です。オーデイン以外にも複数そういう存在が混ざっているかもしれません！」
「君がそう説明したところで、オーデインを亡霊と証明することはできない！中隊は、いえ、亡霊対策室は当案件について中立を守る」

奈々の冷たい声。

「良い？良く聞きなさい。オーデインは先程人質の解放を宣言したの。そして、そのままあげばのテレビに立て籠り続けている。このまま膠着状態が続けばSITとSATが突入をかけるでしょう。中隊の出番はない」

「でも、警察が亡霊に対抗するなんて不可能です！」

「オーデインの他に、複数のESP能力者も点在していると報告を受けている。亡霊みたいに、片っぱしから吹きとばせば良いという訳にはいかないの！君は慣れない地上の作戦で、どうやってESP能力者を無力化するつもり？それに、今君が動けば話がややこしくなる。亡霊であることが証明されない限り身動きがとれない！」

奈々の叱責に、優は黙り込んだ。

中隊員に人を撃つ権限はない。

優は当たり前前の事実によく気付き、そして強い眩暈を覚えた。
「それに、君には君の仕事がある。華秋院彰が君ともう一度会いたいと言っている」

奈々の淡々とした声。

その奥で何を思っているのか、読めない。

「華秋院さんが、ですか？」

『そう。随分と君に傾倒している。可能であれば、彼の望みを満たして欲しい』

「……わかりました」

『じゃあ、前の応接室に』

通信が切れる。

優は黙って通信機を男に返した。

そして、本部に向かって黙って歩き始める。

その後、中村が続いた。

ふと、空を見上げる。

自分は特殊戦術中隊の戦力でしかない。

権限の及ばない事件には、何もできない。

空に舞い上がっていった姫野雪が少し羨ましかった。

存在理由に縛られていると彼女は言っていたが、彼女は自由だ。

彼女がいつか言っていた、自由の刑という言葉を出す。

我々は自由の刑に処され続けている。ならば、せめて自由を

謳歌しようではありませんか。

その意味を臆げながらに理解し、優は白い息を吐いた。

二月の朝は冷たく、寒い。

風が吹き、柊沙織から受け継いだ琥珀の髪がはらりと揺れる。

「寒くありませんか」

後ろから中村の声。

「少し」

答えた時、遠くでESPエネルギーが爆発するのがはっきりと分かった。

オーディンとの戦闘が始まった事を悟りながらも、優は足を止めることなく小道を進んだ。

『全職員とゲストは静かにエントランスから退出し、警察の指示に従ってください。繰り返します。オーディンは人質の解放を宣言しました。全職員とゲストは静かにエントランスから退出し、警察の指示に従ってください。内部に残った者について、命の保障はできません。繰り返します。内部に残った者について、命の保障はできません』

あけぼのテレビ内部に、放送が響く。

やしまだいち 矢島大地は人質の集団に混じり、階段をゆっくりと下りていた。

大地は、あけぼのテレビのスタッフとして今回の事件に巻き込まれた。しかし、仕事中に突如館内放送でESP能力者に占拠された事を知り、そのまま職場で待機していた為、まだESP能力者の姿を見たことがなかった。故に、事件に巻き込まれたという実感が薄い。携帯で外の家族と連絡をとり、そこで初めて人質になっているという事実を受け入れた程だった。

銃を突きつけられ、常に監視される。人質とは、そういうものだと思います。だが、あけぼのテレビの規模を考えれば、全フロアを掌握することは難しい。故に、館内放送で最低限度の釘を打った後は、要所を守る事だけに徹しているのだろう。

あるいは、と大地はそろそろと一緒に階段を下りる周りの人質に視線を移した。

この中に紛れ、監視しているのか？

ESP能力者は武装する必要がない。一般人とテロリストの区別など、大地にはつきようがなかった。

全体の様子がわからないまま、一階に辿りつく。エントランスに五人の少女が並んでいるのが見えた。

ESP能力者。

すぐにそれを悟り、大地は全身を硬くした。

超能力というものがどれほどの威力を秘めているのか、大地は知らない。

このどこにでもいそうな少女たちがどれほどの力を秘めているのか、大地には察する事ができない。

だが、キー局の本社を占拠するなどという暴挙に出た以上、それなりの威力があるのだろう。

「ここを出れば、警察がお前達を保護する」

ESP能力者の一人が乱雑に言う。

大地はちらりとエントランスを眺めた後、黙って自動扉をくぐり、外に出た。

ESP能力者が要となるエントランスに五人しかいないということとは、テロリストの数はそれほど多くないのだろう。

そう考えながら、ゆっくりとエントランスを離れる。

向こうに警察の車両が並び、数人の警官が駆けつけてくるのが見える。

上空には三機のヘリ。他局のヘリか警察の攻撃ヘリなのか、大地には区別がつかなかった。

ローター音が響く中、周囲の人間が走るように警察のもとへ向かっていく。大地はその中で足を止め、あけぼのテレビ局を振り返った。

何故オーデインと名乗るESP能力者が人質を逃がす事にしたのか、大地にはわからなかった。警察と何らかの交渉が行われたのか、人質が多すぎる為にそのリスクを抑えたかったのか。

考えても、わからない。

大地はあけぼのテレビから視線を外し、警察のもとへ向かった。

数人の警官が駆けよってくる。そして、大地は保護されることになった。

警察関係者に囲まれながら、あけぼのテレビのもとを離れていく。その途中で、爆音が轟いた。

驚いて振り返る。

上空を飛行するヘリが炎上しているところだった。

見えない力に押し出されるように、炎上するヘリが横方向へ奇妙

な進み方を見せ、その態勢が崩れていく。

サイコキネシス。

理解とともに、巨大な悲鳴が湧き起こった。

どよめきの中、バランスを崩したヘリが墜落を始める。

誰かの叫び声。

轟音と衝撃。

大地は人混みを押しつけて、墜落するヘリの行方を見つめた。

パイロットは出てこない。

数人の救急隊員が現場に駆け付けるが、その途中で一人の頭が弾け飛ぶ。

何が起こったのか、大地には理解できなかった。

状況を把握できないまま、銃声が響く。

悲鳴。

大地は咄嗟に頭を低くした。

射撃命令が下ったのだらう。至るところから銃声が轟く。

頭を低くしたまま周囲を見渡すも、周囲を囲む人のせいでESP能力者がどこにいるのかわからない。

空に浮かぶヘリが激しい対地攻撃を開始するのが見えた。

爆発音。

混乱の中、周囲の人々が逃げ出そうと一斉に動き始める。

その一瞬、人混みの向こうに一つの人影が見えた。

あけぼのテレビのエントランス前。そこに、一人の男が無防備に立ち尽くしている。

顔は大地の距離からはよく見えないが、白銀の髪が風になびくのが確かに見えた。

男の周囲に銃弾が着弾するものの、何かを守られているように男は傷一つ負う事がない。

予想を遥か上回る超能力の脅威を目の当たりに、大地は一瞬啞然として動きを止めた。

その瞬間、男の赤い瞳と目が合った気がした。

ゾクリ、と寒気が走る。

大地は反射的に男に背を向け、駆けだした。

爆発音。

最後に一度振り返ると、残った二機のヘリが墜ちていくのが見えた。

化け物。

理解するとともに、背後から熱風が襲いかかる。大地は反射的にその場に伏せた。

悲鳴。

誰かが燃えているのが見えた。

黒煙がくすぶる中、その向こうで激しい閃光が瞬く。

何が起こってるのかわからないまま、よろよると立ちあがり、再び走り出す。

> 攻撃を止める。さもなければ、この場にいる敵を殲滅しなければならなくなる。私の目的は達成された。これ以上、不法にあげぼのテレビを占拠することも、人質を害する意思もない。害意を向けられれば、私も黙ってはられない。攻撃を止め、そして包囲を解け。それで、ここに不要な血が流れる事態は避けられる<

頭の中に、落ちついた男の声が響く。

テレパシー、という言葉が頭に浮かんだ。

一帯の人間全てに同様のメッセージが届けられたのだろう。それを境に、銃声が止む。

上がどういふ判断を下すかはともかく、現場の警官は動きがとれなくなったのだろう。

そして、炎の中、オーデインが歩いてくるのが見えた。その後ろには十数人の少女たち。

黒煙が蔓延する中、堂々と彼らはエントランスから包囲を抜けていく。

大地は、それを見つめることしかできなかった。

ずっと昔、同じようなことを考えた事がある。

社会制度の根本におけるものは、暴力による支配だ。

暴力というものがあるから、全ての者が社会契約に従順になる。

どれだけ高度な社会であろうと、どれだけ取り繕っても暴力が無ければ多様な価値観を持つ人間をまとめあげるのは難しい。

だから、その根源的な暴力を上回る者が現れた場合、その者は一体どうなるのだろうか？

何者も抑えつけられない絶対者。

誰もが当たり前に抱いている社会契約という幻想を破壊し続ける者が現れた時、その幻想の中に生きる人々はどう思うのだろうか？

答えは、恐怖だ。

全ての足場が壊れていくような、途方もない恐怖。

大地はその場に立ち尽くし、去っていくESP能力者たちを呆然と見送るしかなかった。

6章 14話 華秋院彰（4）

「貴方は誰だ？」

応接室に入るなり、奥のソファに腰かけていた華秋院彰がそう言った。

桜井優は何も言わず華秋院彰の前に立ち、彼を見つめた。

「花公院の生徒に桜井優の写真を見せたところ、誰もその顔を知りませんでした。桜井優という人物を示す公式データがどこにも見当たらない。桜井優というのは、架空の人物で間違いないですか？」

優は無言で頷いた。

「ならば、貴方は誰なんですか？」

華秋院彰が身を乗り出し、真つすぐと見つめてくる。

優はそれを無感動に見つめ返してから、ちらりと視線を外した。

「僕も、よくわかりません。でも、多分、これが正解なんだと思います」

優はそう言つて、目を瞑った。

その姿が光に包まれる。

次の瞬間、華秋院彰は目を大きく見開いた。

そこには、琥珀の髪を揺らす一人の少女が立っていた。

そして、少女 柊沙織は華秋院彰の対面に腰を下ろした。

「これが、答えです。少なくとも、僕はそう考えています」

「……柊、沙織？ 馬鹿な……生きて、いたのか……」

「彼女は既に死んでいます。でも、始まりは彼女でした。彼女が幼少期に創りだした架空の存在が、過酷な中隊の生活を送るにつれて蘇り、それが更に解離していった。僕は、彼女の一部でしかありませんでした」

でも、と柊沙織は続けた。

「でも、私は死んだ。だから、私が創りだした彼の中に残された私という存在だけが、私となった。最早私は彼の一部でしかない。私

は彼のように独立した存在にはなれない」

そして、桜井優は言う。

「僕と彼女は、相互に内包し合っているんです。僕の中に彼女が私の中に彼がいる。言っている意味がわかりますか？」

不意に華秋院彰立ちあがり、震えた声で言う。

「生者の中に、死者があるというのか」

「少し、違うかな。現実の私は死んでる。ここに居る私は、私が創りだした桜井優という人格の中に残された私に過ぎない。それが、私」

柊沙織は薄い笑みを浮かべ、華秋院彰を見つめた。

「本当のところは誰にもわからないよ。彼の中で変化が起きている。私という存在、つまり記憶が急速に蘇り、統合が始まっている。私と言う経験と彼という経験によって新たな人格が生まれるかもしれない。それに、進藤咲。真紀の記憶も、統合されていく。私達は別の何かに変わっていくのかもしれない」

「それは、ESP能力ですか？ 死者の存在が重なり合っていていくと？」

「そう、多分、ESP能力だと思う。でも、そうじゃないかもしれない。別の力かも。そんなの、私には分かりっこないよ」

沙織は肩を竦め、小さく息をついた。

「どつという訳か、他にも色々混ざってる。ESPは願いを叶える。彼は前にそう表現していたけど、本当にそうなのかもしれない。少なくとも、私は彼のような人の出現をずっと望んでた。私の横で一緒に戦ってくれる男の子。すっごく強くて、守ってくれる。そういう都合が良い存在を、ずっと望んでた。多分、私だけじゃなかったんじゃないかな。だから、彼は生まれたのかもしれない」

沙織はそこで言葉を切り、思い出したように笑った。

「死者が生者について憶測を語るのはあまり良い事じゃないね。華秋院さん、だったかな。話はこれくらいでいい？」

華秋院彰は呆けたように、ああ、と短く頷いた。

「確かな死者と、今、私は接触しているのか……」

「死者から分離した魂の一部、かな」

沙織は最後に訂正して、目を瞑った。

「私はそろそろ引っ込むよ。この身体は、彼のものだしね」

柊沙織の身体が発光する。

そして光の中から現れた桜井優は華秋院彰をじっと見つめた。

華秋院は呆然とした様子で優を見つめ返した後、穏やかに目を瞑った。そして、そのまま天井を仰ぐ。

「ずっと、探していました」

ポツリ、と彼は言った。

「貴方は、本物だった。それだけで良い。私は救われた」

それっきり、彼は黙り込んだ。

沈黙の中、華秋院彰が静かに涙を流している事に気づき、優は少し驚いた表情を浮かべた。

「ここに確かな死者がいた。死者には無以外にも還るべきところがあるのかもしれない。貴方は、その可能性を示唆してくださいました。それだけで結構です。私は、救われた」

華秋院彰はそう言って、優に視線を戻した。赤くなった瞳を、優は静かに眺めた。

「ずっと前に、婚約者を亡くしました。それからずっと探してたんです。彼女の魂が永遠に失われたのかどうか、確認したかった。オカルトスポット。そういうところを回ってきた。霊能力者、超能力者。そういう者に会ってきた。ですが、いずれも紛い物でしかありませんでした。信じたい。支配されたい。人々は、それに救いを求めます。ですが、私は信じ切れなかった。支配されきれなかった。人の世を理を逸脱した奇跡など、そうあるものではない。だから、ESP能力者、それもイレギュラーである貴方に興味を持った」

華秋院彰はそこで、涙を拭いた。

「あなたは、本物だった。超常的な力だけではない。本物の、奇跡を見せてくれた。死者の顕現。本物の救いを、与えて下さった」

そう言つて、華秋院彰は深々と頭を下げた。優は困惑したように、口を開いた。

「あの、頭を上げてください」

華秋院彰はじつと頭を下げたまま動かない。

そして、そのままポツリと漏らした。

「何年も、彼女の魂の行方を追う事だけに費やしてきました。そうする事で、胸の奥に空いた巨大な虚ろを誤魔化す事ができた。私はそうする事でしか、悲しみに耐える事ができなかった」

華秋院彰の頭がゆっくりと上がる。

そこには、憑き物が取れたような、清々しい表情が浮かんでいた。「ようやく、終わった。一つの終着点。どれだけ進んでも見えなかった終わりを、あなたはいとも容易く与えて下さった。私の旅は終わったのです」

そして、華秋院彰は言った。

「正直に申し上げれば、私はこれからどうすればいいのか分からない。ずっと彼女の魂の行方だけを求めてきた。私はからっぽだ。私は探求にしか意味を見出す事ができない。それが、私の生き方でした。だから、私は、貴方の終わりを見届けたい。一人のジャーナリストとして、その行方を見届けたい。強く、そう思います」

「ESP。超感覚的知覚、か。言い得て妙だ」

上空で翼を広げる姫野雪はそう言つて、地上を見下ろした。

「いつ桜井優が完全に柀沙織から分離し、どうやって人間社会に溶け込んだのかは不明だ。だが、その困難な現象を引き起こしながらも桜井優が自身の特異性に無自覚だったことを考えれば、初期に大規模な改竄が行われたのだろう。他人の知覚を乗っ取ったのかもしれない」

なあ、と雪は肩にとまるカラスに目を向けた。

「お前はこのケースを予測していたか？　あるいは、明確な説明をつけられるか？」

カラスは何も言わない。雪は息をつき、小さく笑った。

「そうだな。その為の、私だ。だが、私にも理解できない」

そして、雪は思い出したように言った。

「ああ、違うな。柊沙織から解離したのは恐らく今の桜井優ではない。別の何かだ。それをベースに、複数のESP能力者から解離した何か混ざり込んでいる。お前と同じだよ。お前が数多の種族に出会い、その情報を取りこんできたように、桜井優もまた数多の人間を取りこんできている。そして、お前さえも」

カラスが羽ばたき、雪の肩から離れる。雪はそれを静かに見つめた。

「ユニットの数に比例し、桜井優の力が大きくなっている。桜井優の力なのか、ユニットの力なのか判断はつかないが、徐々に取りこまれているぞ。超感覚的知覚。我々の想定した概念とは異なる性質を持ち始めているようだ」

あるいは、と雪は去り行くカラスを静かに見つめた。

「お前はこれを想定していたのか？　これが、お前の望みか？」

カラスは答えない。

そして、カラスは白流島のある方へ消えていく。

雪は最後にチラリと地上の亡霊対策室本部を見やってから、カラスに背を向けて大きく羽ばたいた。

優が応接室を出ると、部屋の外にいた神条奈々とぶつかりそうになった。

奈々はチラリと優を見下ろした後、優の後ろに立つ華秋院に視線を向けた。

「話は終わった？」

「ええ。終わりました」

華秋院彰はそう言って優の隣に立ち、チラリと優を見た。

「そうだ。彼女は先程の事について知っているんですか？」

「……まだ言っていないません」

優がそう答えると、奈々が怪訝な顔をした。

「何の話？」

「……後でお話しします」

奈々は納得した様子を見せると、再び華秋院彰に目を向けた。

「それで」

「わかっていきます。私は華秋院の持つ全てを桜井優に捧げましょう。この私の持つコネクション、知識、知恵。その全てを。それで満足でしょうか？」

華秋院彰は薄い笑みを浮かべ、そう言った。奈々が探るように華秋院彰を見る。

「随分と潔い」

「新たな幻想に取りこまれたい。そう言ったでしょう？　それが、彼なんです。他は、必要がなくなりました」

華秋院彰が肩を竦め、言う。その様子が酷く演技染みていたせいか、奈々は警戒するように目を細めた。そして、少し迷ったように間を置いてから口を開く。

「そう。なら、ついでに貴方にも聞いてもらいましょう。つい先ほど、オーデインを中心としたESP能力者の集団が警察の包囲を脱し、そのまま姿を晦ましたそうよ」

優は思わず息を止めた。

「どうやって、包囲を脱したんですか？」

「強行突破したと聞いている。攻撃ヘリ三機を落とす、恐慌状態を作り出した後、危害を加えない事を約束してそのまま警察の包囲を素通りした」

「素通り？」

「そう。オーデインは攻撃ヘリの対地攻撃をも無力化したそうよ。」

君の言った通り、警察では止める事ができなかった」

「オーデイン？ 何の話です？」

華秋院彰が何度も瞬きする。優は隣の華秋院彰を見上げて、説明した。

「あけぼのテレビがオーデインと名乗る男のESP能力者に占拠されたんです。でも、オーデインは人間じゃありません。人型の亡霊なんです」

「人型の、亡霊？」

華秋院彰が興味を持ったように尋ね返す。

「なるほど。それで、中隊が動かせないと？」

「そう。我々が動くことは難しい。オーデインが亡霊であることを示す客観的な情報が必要よ」

奈々の言葉に、華秋院彰はにいつと笑みを浮かべた。

「必要ありませんよ。きつと、中將が動く。中將にとって、こうしたイレギュラーは望ましくない。そうでしょうか？」

優は不思議そうに華秋院彰を見上げた。

「中將？ 上田中將ですか？ SIAの後ろ盾があると言っても、どうしようもないと思うんですが」

「SIAだけではありませんよ。背広組に加え、制服組の一部だって彼が掌握している。中央にもどれだけ侵食しているのか知りませんが、彼なら力ずくでもオーデインとやらを止め」

途中で華秋院彰は言葉を止め、ああ、と納得したように頷き、奈々に目を向けた。

「桜井さんには、まだ言つてなかったんですね？ 上田中將は、政変を望んでいるんです。より過激な表現を使うなら、クーデターを起こそうとしている。馬鹿らしいと思いませんか？ でも、時代は彼に味方している。成功条件がことごとく揃っている。彼はオーデインのような異分子を認めないでしょう。そして、必ず排除しようとする。その為には、桜井さん、貴方が必要です。私達は、待っているだけでいい。上田中將は必ず貴方を迎えに来る。必ずです」

華秋院彰は自信に満ちた顔で断言した。
その八時間後、彼の予言は的中することになる。

6章 15話 広瀬理沙（8）

「華秋院彰の全てを貴方に」
寒空の下。

エントランス前で華秋院彰は微笑を浮かべながらその言葉を残し、黒い乗用車に乗り込んだ。

優は何も言わず、華秋院彰が去っていくのを見送った。

そして、優の後ろで同じように無言を貫いていた奈々が口を開く。
「雪とオーデインが人型の亡霊と言っていたわね。どうやって、その情報を？」

「姫野さんが自ら明かしたんです」

「なら何故、君にそれを明かしたの？」

返答に詰まり、優は黙り込んだ。

沈黙の中、奈々の視線が優に突き刺さる。

優は迷うように瞳を泳がせた後、絞り出すように答えた。

「……僕も、人間じゃないからです」

「……どうということ？」

奈々の感情の籠らない声。

優は深く息を吸って、ゆっくりと説明を始めた。

「僕、人じゃないんです。柊沙織が創り出した架空の存在なんです。亡霊と一緒にです。ESPエネルギーで創られた怪物でしかありません」

「優君？」

奈々の瞳に動揺が走る。

理解できない。そう言っているように、奈々は一步踏み出し、更なる説明を求めるようにじっと見つめてくる。

「言葉で説明しても、納得できないと思います。姫野さんも、そう考えたようでした。だから、僕が自発的に全てを理解できるよう、お母さんに会わせたのだと思います」

優はそう言つて、ESPエネルギーを練つた。優が経験した情報をそのまま乗せて、搬送波として、奈々に向ける。

大気がうねり、不可視の力が奈々を包み込んだ。瞬間、桜井優と神奈奈々の精神はESPエネルギーを通して、確かな繋がりを持つた。

優が経験し、理解した事の全てが奈々に流れ込んでいく。言葉のように標準化、量子化された情報が届くのではなく、ノイズを含まない膨大な情報群が一瞬で奈々を呑み込んでいくのがわかつた。

「ッ」

奈々が苦痛に呻く。

それでも、優はESPエネルギーを用いた通信行為を止めようとはしなかつた。

誤解が生じないよう、優が知る全ての情報が奈々へ注ぎこまれる。耐えかねたように、奈々はその場で膝をつき、両手を地面についた。

そこでようやく、奈々を包み込んでいた不可視の力が霧散を始めた。

優は何も言わず、奈々を見下ろした。

どうしようもなく、怖かつた。

人でない事を知つた奈々の反応が、怖かつた。

何も言えないまま、時間だけが過ぎていく。

奈々は何度も大きく肩で息をして、それからゆっくりと立ち上がった。

そして、信じられないといった様子で優を見つめ、力なく優のもとへ足を進める。

奈々の手が優の頬にそつと触れた。冷たくて、気持ち良かった。

「君は、どうしたい？」

「え？」

言葉の意味が、理解できなかつた。

戸惑つた様子で優を無視して、奈々は驚くほど優しい笑みを浮か

べ、問うた。

「私達は、負けたのよ。こんな闘争、初めから意味なんてなかった。全て、亡霊の手のひらで踊っていただけ。でも、君は違う。亡霊は、君を求めている。負けが決定した私達につく必要なんて、ない。でも、君は亡霊には与さない、と言っている。本当に、それで良いの？」

それでようやく、奈々の言いたい事が理解できた。

「君には選択肢が与えられている。初めから勝利が決定している亡霊と、初めから敗北が決定している私達。君は、どうしたい？」

ああ、と優は胸の奥が苦しくなるのを感じた。

そして、同時に馬鹿らしくなる。人ではないことを奈々に知られるのが、怖かった。拒絶されることが、怖かった。

しかし、現実の奈々はそんな事全く気にせず、自分の事を心配し、その意思を尊重しようとしてくれている。

果てが見えなかった闘争の敗北も、亡霊の正体も、亡霊の目的も、姫野雪の正体も、全てありのままを受け入れようとして、その上で奈々は酷く優しい笑みを浮かべ、他者の心配をしている。

「神条司令の下で、何も変わらないまま、亡霊と戦い続けたいです。嗚咽を抑え、震える声で迷う事なく言う。」

奈々は少し困ったような笑みを浮かべ、優の頬に当てた手をゆっくりと離れた。

「それが、負けるとわかっていても？ 中隊は、亡霊が用意した駒でしかなかった。初めから、闘争なんてなかった。そんな状況でも、抗い続けるの？」

「亡霊は、完璧な存在じゃないです。僕が存在も予測できていませんでした。戦況を覆す事だって、きつと不可能ではありません」

「……君が自分でそう決めたなら良い。義理や役割に殉ずるつもりじゃないことも分かって、安心した」

奈々は酷く優しい笑みを浮かべ、優の手を取った。

「ここは冷える。私の部屋に行きましょう」

そう言って、エントランス・ホールの中に入る。

奈々に掴まれた手は強く繋がっている。

優も、それを強く握り返した。

離れないように。

離さないように。

温かいエントランスホールから、中枢エリアの二階へ階段を使つて上がる。

途中で数人の中隊員とすれ違い、奈々と手を繋いだ優を見て怪訝そうな表情を浮かべたが、誰も何も言わなかった。

そして、奈々の部屋に辿りく。

奈々が鍵を開けるのを眺めながらじっと待つ。その間も、奈々は繋いだ手を離そうとはしなかった。

ドアが開き、奈々に引つ張られるようにして中に入る。

それから、靴を脱ぐ暇もなく、奈々に抱きしめられた。

「君は、怖くないの？」

「なにが、ですか？」

「負ける事に」

「怖いです。だから、負けない為に頑張ります」

優の言葉に、奈々は何も言わなかった。

じつと玄関で抱き合いながら、時間が過ぎていく。

「……さっきの、あれ、もう一度できる？」

不意に、奈々がポツリと言った。

「アレ？」

聞き返すと、奈々は言葉に迷ったように、少しだけ間を置いた。

「……さっきの、テレパシー、みたいな力。一瞬だけだったけど、君と繋がって、凄く不思議な感じだった。言葉みたいなまどろっこしいものじゃなくて、本当に直接、繋がった。何も混ざらなくて、凄く、綺麗だった。何も、ノイズがなかった。お願い。もう一度やっつて」

優は目を瞑り、再びESPエネルギーを練った。

眩暈。

周囲の音が遠のいていく。

そして、真つ暗な視界の先に、何かが煌めいた。

全てが、繋がる。

自己と他者の境界が曖昧になるような、不思議な感覚。

全てが混ざり合っっていくような錯覚。

「凄く、綺麗」

現実には奈々が呟いたのか、奈々の思考がESPエネルギーを通して伝わったのか、優には良く分からなかった。

「いつそ。全ての人がESP能力者になったら良いのに。そうすれば、皆こうやって、誤解のないコミュニケーションをとることができる。言葉なんて不完全なもの、使う必要がなくなる」

奈々は呟いて、そつと抱擁を解いた。

同時に、奈々との繋がりが切れる。

その瞬間、胸の奥が張り裂けるような感覚を覚えた。

温もりが消え、無性に周囲を包む空気が冷たく思えてくる。

「靴、脱ごっか」

奈々はそう言って、玄関から上がるうとした。

そこで優は大事な事を思い出し、奈々の手を掴んだ。

「あの、言わないといけないことがあります」

「なに？」

奈々が振り返る。

優は迷った末、はつきりと口を開いた。

「今日、バレンタインデーです」

奈々は何も言わない。

優は反射的に視線を外したくなるのを我慢し、奈々の瞳を正面から見つめた。

「それで、えと、他の方からチョコ、貰いました」

「ええ、君はモテるもの」

奈々は特に気にした風もなく、言う。

優は慌てたように言葉を続けた。

「あの、そうじゃなくて、チヨコ貰うと同時に、告白されたんです。一人からじゃなくて、七人から、同時に、その、付き合っただけでいいって」

奈々は何も言わない。

奇妙な圧力を感じ、段々と言葉尻が小さくなっていく。

それでも、優は何とか最後まで言葉を絞り出した。

「あの、誰かを選ぶんじゃないで、全員と付き合っただけでいいって。それで、了解、しました……」

「そう。元々私が言った事だから、何も言っつもりはない」

奈々はそう言っ、優の手を引っ張る。優は靴を脱いで、奈々に引っ張られる前に部屋に上がった。

「あの、奈々さん、何であんな事、言ったんですか？」

問うと、奈々はチラリと優を見た。そして、大した事でもない風に言っ。

「周囲の援護があれば、沙織は多分死ななかつた」

「え？」

「沙織は、中隊内部で孤立していた。そして、私はそれを特に問題視しなかつた。君にはそうなつて欲しくない。君を命がけで守つてくれる存在が必要だと思つた」

奈々はそう言っ、寝室に優を引っ張りこんだ。そして、寂しそうに言っ。

「私には、君と並んで戦う力がないから」

「司令」

優が口を開くと同時に、奈々はそれを塞ぐように身を寄せた。甘い香り。

優はそつと奈々の身体を押し、唇を離した。

そして、じつと奈々の瞳を見つめる。

「司令、柊沙織の事、まだ気にしているんですか？」

奈々は今にも泣きそうな顔で静かに笑う。

優は少し迷った後、ゆっくりと目を瞑った。

そして、優の身体が光に包まれる。

直後、そこには柊沙織が立っていた。

奈々は一瞬驚いた表情を浮かべた後、顔を伏せて小さく肩を震わせた。

「司令。島の中心部に向かうと言い出したのは私だよ。ナノマシンが割れたのを隠して作戦を続行したのも私。貴女には判断材料そのものがなかった」

「ずっとナノマシンの過剰投与を続けていた。それが正しいと、思っていた。中隊内部での貴女たちと他の確執も無視していた」

奈々の震えた声が響く。沙織は薄い笑みを浮かべ、首を横に振った。

「知ってるよ。その件で秋山センセが一度、中隊を辞めるように言ってきた事もあった。でも、私は自分の意思でそれを蹴った。強い兵士が抜ければ、弱い兵士が戦うだけだと思った。中隊内部の確執も、多分、司令じゃ何も出来なかったと思うよ。ああいう問題は、外から解決することなんてできっこない」

沙織はそれから、迷うように言葉を続けた。

「知ってる？ 私、神条司令のこと、結構好きだったんだよ。初めは冷たそうな人だなんて、そう思った。でも、私が外で昼寝していると、黙ってコートかぶせてくれた事があったよね。私ができる素っ気ない言い方でコート返せ、なんて言ってたけど、根は優しい人なんだなって思った。ただ、司令も余裕がない状態だったんだよ。あんな若さで、偶像に祭り上げられちゃって。参謀部だった。部下に、亡霊対策室なんて構造はどこにもない、って言いきってることもあったから、難しい立場に放り込まれたんだなって思った。何の力も与えられてないってことも、理解してた。だから、司令。私は、司令のこと、何とも思ってたよ」

沙織は捲し立てるように言い切って、小さく笑った。

「実体化すると、疲れるなあ。昔、彼が良く眠っていた理由がよう

やくわかったよ」

「沙織……」

奈々は顔を伏せたまま袖口で目を拭い、それから沙織の琥珀の髪をそつと撫でた。

「疲れたし、もう私は戻るよ」

「沙織！」

奈々が叫ぶ。沙織はそれを無視するように、目を瞑った。

沙織の身体が光に包まれる。

そして、代わりに桜井優の姿が現れる。

優はゆっくりと目を開け、目の前で泣いている奈々を優しく抱きしめた。

「私は……っ、……いつも、っ、君達に救われ続けて、る……」
奈々が嗚咽混じりに言う。

優は何も言わず、奈々が泣きやむのを待った。

「優君、私は」

奈々が何か言おうとした時、着信音が寝室に響いた。

奈々は涙を拭くと、優の抱擁を抜けて、携帯を取り出した。そして、何事もなかったように、いつも通りの様子で通話を始める。

その様子を見て、ふと思う。

いつも、奈々はこうして泣いていたのかもしれない。

優が思っている程、強く、かつこい存在ではないのかもしれない。
い。

折れそうになって、泣いて、それでも人前では気丈に振る舞って。ずっと、そうやってきたのかもしれない。

ならば

「わかった。では、六時間後………優君」

その生き方を変える事はできなくても、泣いている時間を少しでも減らしてみせよう。

桜井優は、そう思った。

「華秋院彰が言っていた通り、中將が接触してきた。六時間後、こ

ちらに到着するそうよ」

「三か所でESPエネルギーの使用が確認された」

上田中将は応接室に入るなり、そう告げた。

ソファで待っていた桜井優は何も言わず、ただ上田中将をじっと見上げた。

「同所にて、民間人七人の死亡が確認されている」

上田中将の言葉に、戸口の横に立っていた奈々が小さく顔をしかめる。

「これからもオーディンに呼応するように、至る所でESP能力者関係の事件が起きるだろう。これを防ぐには、オーディンの主張を覆す必要がある」

優は小さく頷いた。

「オーディンの言うESP能力者への圧力はどこにも存在しません。僕は、このオーディンの主張に同意できません」

上田中将は満足そうに頷き、そこでだ、と言葉を続けた。

「あけぼのテレビを通じ、訴えて欲しい。現職の特殊戦術中隊員失礼。特殊戦術大隊長として、オーディンの主張が出鱈目であることを示して欲しい」

同時に、と上田中将は奈々に視線を向けた。

「ESP能力を無力化する力を持っている事も公表する。非ESP能力者を安心させる為に、だ」

「ご依頼に異存はありませんが、それは陸上自衛軍とは何ら関係ありません」

優は淡々と、そう言い放った。上田中将の顔に微かな動揺が走る。

「もし、それが後の指導者としてのお言葉なのでしたら、今後の亡霊対策室の独立性、及びESP能力者の法的な保護を要求します」

室内に沈黙が落ちた。

上田中将は自らの顎髭をゆつくりと撫で、考えるように目を瞑った。

そして、切りだす。

「少し、話を変えよう。最も優れた政体は何だと思う？」

上田中将は疲れた顔で問うた。その表情は酷く老けて見えた。

「優れた君主による君主制かね？ エリートによる貴族制かね？

民衆による民主制かね？ どれも、違う。君主制は専制へ。貴族制は寡頭制に。民主制は衆愚制へと堕ちていく。どのような政体も時間の経過とともに権力機構の腐敗と社会制度の老朽化を迎え、ただの癌となり果てる」

優は怪訝な顔で中将を見つめた。上田中将の意図が見えない。

「私を理想主義者だと言う者がたまにいる。だが、それは間違いだ。私は絶望しているのだ。人はあまりにも愚か過ぎる。それ故に、どれだけ優れた君主がいようと、その空席にはいずれ愚かな王が君臨する事になる。どれだけ優れたエリート集団がいようと、いずれ個や群の利益追求が始まる。どれだけ情熱に溢れた市民もいずれ怠惰で遊興な思考に流され始める。そしてどれだけ優れた社会制度も次第に老朽化し、現実に合わなくなっていく。私は、絶望しているのだ」

上田中将は静かに告げて、無気力な瞳を優に向けた。

「政体は循環せねばならぬ。循環し続けなければならぬ。停滞した水が不純物の混入と分解によって腐るように、循環することでは腐敗を防ぐ事はできないのだ。見るが良い。不死鳥の主張を。強い国家。結構。だが、その手段はどうだ。官僚組織の縮小？ 行政部が肥大化してきた原因を忘れたか。軍拡？ 自主防衛を前提にした机上の空論をどうやって現実に移す？ 手厚い福祉？ 生産力のあがる所から生産力のない所にリソースを何も考えず移す事が福祉かね？ そして綺麗な言葉や豪快な言葉に扇動される大衆。この国は既に墮落に向かい始めている。停滞した水に蓄積した不純物が分解され、異臭を放ち始めている。政権の問題ではない。政体の問題なの

だ」

上田中将はそう言って、視線を落とした。

「理想を追い求めた訳ではない。妥協を重ね、私は政変を望むようになったのだ。遠くないうちに民主主義は民主主義によって否定される事になるだろう。ならば、この手で。そして、速やかに民政へ戻してみせよう。その為の準備を、ずっとやってきた」

上田中将の顔がゆっくりと上がる。暗く、疲れた表情。

「桜井優。こちらに着け。そうすれば、不必要な混乱を避けられる。正直に話せば、人出が足りん。事が上手くいけば、それなりのポストを用意する事を約束しよう。ESP能力者や亡霊に対する権限を強化してやる」

とくん、と心臓が跳ねる。

優は小さく息を吸った。

「それと、神条司令への権限強化を。僕は、神条司令の指揮下でしか動く気がありません」

一瞬、上田中将は意外そうな表情を浮かべた。戸口で立っていた奈々も驚いた顔を浮かべるのが見えた。

「望むなら、叶えてやる。私としても彼女を引き込みたい。優秀な人材が不足し続けている」

「それと、もう一つ。オーデインの殺害権限をください」

上田中将の顔が強張る。優はそれを無視して言葉を続けた。

「オーデインは人型の亡霊です。警察組織では対抗できません。殺害許可を」

「そんな説明では誰も納得しないだろう」

半信半疑な様子で、中將が言う。本気にしていない。あるいは、そういう方便だと認識しているのか。それでも、構わなかった。優の目的はオーデインの正体を周囲に認めさせる事ではない。

「そうです。だから、あなたの持てる全てを使って隠蔽してください」

「例え許可したとして、どうやって殺す？ 不可解な事に、オーデ

インと取り巻きのESP能力者たちを探知することができん」

上田中将が苦々しそうに言う。

反対に、優はにっこりと笑った。

「確かに、オーデインは探知を防ぐ欺瞞手段を保持しているようです。ですが、僕は先程オーデインの位置を特定することに成功しました。僕がオーデインを害しても問題が起きないよう、手配してください。そうすれば、オーデインとその取り巻きのESP能力者をまとめて処分してみせます」

そして、桜井優は立ちあがった。

この瞬間。

明確な境界線を引くとするならば、この瞬間からだろう。

彼が亡霊対策室直属の一戦力という地位から、それ以上の力を求め、行使を望むようになったのは。

巨大な倉庫の中に、何百という人影があつた。

「同胞がこれだけいる」

その中でオーデインは配下の少女たちを見渡し、口を開いた。

「君たちには居場所がない。そういう存在が、まだ全国に散らばっている。それを思うと胸が痛い」

あけぼのテレビ占拠事件から一週間が経過していた。その間に、オーデインの元には百を超えるESP能力者が集っていた。

活動拠点を郊外の倉庫に移し、集団生活を送る為、構成員には均等に仕事が割り振られるようになっていた。中には腕章をつけた監督官の地位を得た少女たちも存在し、組織としての骨組みが早くも出来上がり始めていた。

「大量のESP能力者を受け入れ続ける事によって、大小の混乱が生じるでしょう。全てを私が管理する訳にはいきません。私の代理である監督官の言う事を良く聞いてください」

オーデインの声が響く。

白い髪に、赤い瞳。

黒い布に身を包んだオーデインは少女たちの前をゆっくりと歩きながら、透き通るような声をあげる。

「組織の規模拡大は避けられません。統治する構造が必要です。そして、私の手足となる人手が必要です。その為に皆さんの日々の働きを見て」

オーデインはそこで言葉を切った。

彼の視界の隅を光り輝く一匹の蝶々が舞ったのだ。

オーデインだけでなく、他の少女たちも蝶々に気付いて不思議な顔を浮かべる。

「翡翠の蝶々？」

誰かの呟く声。

それに合わせるように、二匹目の蝶々が上空から舞い降りた。

オーデインは弾かれたように上空を見上げ、叫んだ。

「強襲です！ 敵が来ました！」

天井に空いた小さな隙間から無数の蝶々が中に入り込み始めていた。それに気付いた少女達が悲鳴をあげる。

瞬く間に天井から入り込んだ無数の蝶々が少女たちを囲むように広がり始める。オーデインが迎撃命令を飛ばそうとした瞬間、頭の中に透き通った桜井優の声が響いた。

> 下手な動きを見せれば、その蝶々を爆発させます。動かないでください。誰も殺したくありません<

その間にも翡翠の蝶々が倉庫を満たしていく。そして、そのうちの一匹がオーデインの首に止まった。

> 降伏してください。同じESP能力者として、出来る限りの交渉はします。中隊への斡旋も行います。中にはオーデインが主張しているような圧力も存在しません。特殊戦術大隊長、桜井優が皆さんの安全を約束します<

オーデインは優の言葉を聞きながら、周囲を油断なく見渡した。

倉庫内に優の姿は見えない。

そこでようやく、反撃が不可能な、一方的な攻撃を受けている事を理解する。

「騙されてはいけません！ 政府や軍はESP能力者を道具としてしか見ていません！」

反論している間に、翡翠の蝶々が少女たちの首元に止まっていく。みるみるうちに、オーデインの配下である少女たちの戦意が失われ始めた。

オーデインは油断なく周囲を見渡しながら、大きく叫んだ。

「桜井優！ どうやってここを突きとめた！ 私の欺瞞手段を破る事など」

>オーデイン。貴方には精神感应が使えるはずです。僕も、ずっと前から使えていました<

優の淡々とした言葉に、オーデインは動きを止めた。そして、ゆつくりと少女たちの方へ眼を向ける。

無数の蝶々が舞う中、オーデインの視線の先に一人の少女が立っていた。他の少女たちと違い、その首元には蝶々がいない。そして、周囲の蝶々を怖がる素振りも見せない。

「広瀬理沙！ お前か！」

オーデインが叫ぶと、広瀬理沙はすぐに視線を外した。

「あなたの言葉は桜井の言葉と違って、うわべの理想ばっかだった。私達を道具と思ってるのは、あなたの方だろう」

その言葉と同時に、倉庫の巨大な扉が開いた。そして、強烈な光が降り注ぐ。

「動くな」

叫び声と同時に、武装した男達が雪崩れ込んでくる。

オーデインは舌打ちし、右手を広瀬理沙に向けた。その瞬間、彼の首元に纏わりついていた蝶々が爆発する。

悲鳴。

オーデインの頭が消し飛び、残された胴体が崩れ落ちる。

同時に天井が爆発し、そこから翡翠の翼を広げた桜井優が舞い降りた。

琥珀色の髪がふわりと舞う。

彼は天使のような微笑を浮かべ、少女たちを見下ろした。

>動かないでください。抵抗すれば、僕も庇いきれません<

直後、優の足がすとんと床につく。そして、彼はオーデインの亡骸を静かに見下ろした。

それからすぐに興味を失ったように視線を上げ、無数の蝶々が舞う中をゆっくりと歩き、広瀬理沙のもとへ向かう。

突入の騒音と悲鳴が響く中、桜井優と広瀬理沙は無言で向きあい、小さく笑みを交わした。

「潮時か」

理沙は諦めたように言っつて、次々と雪崩れ込んでくる突入部隊を見つめた。

優は、少し迷うような素振りを見せた後、一歩前に進んだ。

「いつか、今の体制が良くなったら自首してくださいって約束、守りませんでした。まだ、何も良くなってない。何も変わってない。

でも、今なら広瀬さんは正当な裁きを受けることができます」

優はそう言っつて、理沙の手をとった。

「これから広瀬さんのESP能力を消します。それで、広瀬さんは普通に拘束されるようになる」

「……ああ、やってくれ」

理沙は疲れた笑みを浮かべ、短く言う。

繋がれた手に、光が灯った。

優しい風が吹く中、ゆっくりと理沙の身体が崩れ落ち、優がそれを受け止める。

「もう逃げる必要はなくなりました。ゆっくりと、眠っていてください」

喧騒の中、優の静かな声が響き、ぐったりと優にもたれかかる理沙は小さく満足そうな笑みを浮かべた。そして、理沙はゆっくりと

目を瞑り、そのまま穏やかな寝息を立て始める。

優は自らよりも大きい理沙の身体を抱きかかえ、そのまま突入部隊の間を縫って倉庫の外に向かった。

後ろでESP能力者の少女たちが次々と拘束されていく。

出入り口から届く強烈な照明の中、無数の人々が駆け抜け、黒い影が視界を瞬く。

遠くからサイレンの音。

優は一度だけ立ち止まって、後ろを振り返った。

姫野雪の姿はどこにも見られない。

「拘束した中に白髪、赤い瞳の女性がいたら、亡霊対策室に引き渡してください」

優はそう言っ、回転灯の明かりで赤く染まる倉庫の外に向かった。

「オーディンは囿でしかありません。本体は別にあります。そして、見つけ次第」

優は、酷く抑揚のない声で言葉を続けた。

「 僕が処理します」

六章 反逆の 完
最終章へ続く

外伝1 影の双翼と光の一翼(前書き)

6章最中に投稿するのを躊躇し、本編外で公開していた外伝1です。時間軸としては5章終了後のお話となります。

外伝1 影の双翼と光の一翼

機械翼の構造は、極めて原始的なものだ。

航空機における高度なアビオニクスのようなものは存在せず、E SP エネルギーの供給機構と出力機構だけで構成されていると言っても過言ではない。

しかし、その内部では異常動作を抑える為のフェールセーフが何重にも用意され、ハード、ソフトの両面の異常に対応できる構造になっている。

最低限のニーズを満たし、その安全を保障する。それが機械翼開発の立役者となった伏見敬一ふしみ けいいちの設計思想であり、それは早期に特殊戦術中隊の運用方法を確立する事に繋がった。

機械翼が運用されてから六年。その間に幾度か中隊の装備について見直しが行われたが、クオリティコントロールと保守性、ユーザビリティに人的な習熟の問題から、細かな改良を受ける事はあっても、大規模な仕様変更が起こる事は遂になかった。そして機械翼による死亡事故件数は、〇件という驚異的な記録を更新し続けている。その記録の更新を影ながら支える少女が二人いた。決して表には出ない、影の立役者。

寺谷和葉てらたに かずは。上月希うづみきのぞみ。

二人は、機械翼のテストパイロットだった。

「うわ、これやばくない？」

広い整備室に、上月希の上擦った声が響く。その声があまりにも大きかった為、隅でメカニックの作業を見ていた寺谷和葉は思わず振り返った。

「希？ どうしたの？」

「ほら。これこれ！」

片手で壁際に置かれた機械翼を指しながら騒ぐ希に、和葉は首を

傾げて足を踏み出した。

「ほら！ こんな壊れ方見た事ない！」

「ひどい……」

思わず、和葉の口から眩きが零れた。

希の下に転がる機械翼は、鋭利な何かによって貫かれ、その機能を完全に停止させていた。

「これを使つてた人、どうなったの？」

「生きてるよ。でも、片腕を失つた。この機械翼が盾にならなければ、死んでたかもしれない」

後ろからメカニツクの声。

振り返ると、ちょうど作業を終えたメカニツクが立ちあがり、和葉たちに顔を向けたところだった。

「片腕を失つた？」

「そう。第四小隊長の黒木舞。療養の為に既に中隊を離れているが、本人は復帰を希望しているようだ」

「へえ……」

和葉はもう一度機械翼を見て、顔をしかめた。

「こんな攻撃を受けても、まだ復帰を希望するなんて信じられない」「君も、何度墜落してもテストパイロットを続けてる。俺には、そちらの方が信じられないよ」

メカニツクはそう言つて、調整の終わった機械翼を和葉に差し出した。

他に居場所がないから、ここに居続けているだけ。特別年金が保障されれば

和葉は内心でそう思いながら、機械翼を受け取った。彼女の命を保障する機械翼は重く、冷たかった。

幼い頃は、よく空を眺めた。

雲の形を眺めたり、夕焼けを眺めたり、空を見ている事が多かった。

それがいつしか機会を失って、雲の形など見ることがなくなった。空模様建構っている余裕などなくなったからだろうか、と和葉はぼんやりと考えながら、空を駆けた。

『フライトテストプログラムの正常な終了を確認した。格闘戦に移れ』

通信機から低い男の声。

地上から機械翼を広げた希が高度を上げてくる。

そういえば、ここに来てからは空を眺めてばかりだ、とふと思いつながら、和葉は小銃を希に向け、引き金を引いた。ESPエネルギーの代わりに信号が地上のフライトシミュレータに送信され、結果が通信機から届く。

『ノーダメージ』

和葉は舌打ちして、上方へ宙返りした。視界が反転する中、下方から希が高速で迫ってきているのが見える。和葉は少し迷った後、稼いだ位置エネルギーを一気に消費し、そのまま落下するように速度を上げた。

『被弾。右翼損傷。フライトに支障なし』

通信機から被弾判定が通知され、和葉は顔をしかめた。

高度が入れ替わり、上方から希が追ってくる。咄嗟に螺旋を描くような空戦機動をとり、和葉は回避を試みた。

『ノーダメージ』

判定に安堵した時、機械翼から不可解な振動が伝わった。

バレルロールでダメージを受けたのか、と後ろを振り返った時、小さな影が落下していくのが見えた。

カラス。

ああ、機械翼の出力部分に偶然衝突したのか、とぼんやりと考えた時、機械翼の振動が増し、出力制御が困難になった。

「出力異常！ 希！」

叫ぶ。同時に、姿勢が大きく崩れた。

身体が錐もみする。

回転する視界の中、和葉は反射的に肩部のベルトを引き抜いた。瞬時にドロッグシートが開かれ、微かな抵抗とともに視界の回転が幾分か小さくなる。しかし、異常な出力のせいで姿勢制御が間に合わず、速度を殺しきれない。

『和葉！』

希の叫び声。

振り返ると、上方から希が迫ってくるのが見えた。しかし、距離が遠すぎて間に合わない、と和葉は他人事のようにぼんやりと思っ

た。

地面が迫る。

反射的に目を瞑った時、ふわりと何かが全身を包んだ。

風が徐々に弱まり、落下が止まったのがわかった。

「大丈夫ですか？」

柔らかい声。

目を開けると、心配そうに顔を覗く一人の少女の姿があった。少女は和葉を抱きかかえるように支え、そのままゆっくりと高度を落としていく。

和葉は少女を見つめたまま動く事ができず、地上に着地してからようやく我に帰った。

「あ、ほ、本当にありがとうございます」

急いで礼を言っていると、少女は、間に合って良かったです、とにこりと笑った。

そこで初めて、少女の背中から無機質な機械翼ではなく鮮やかな光の翼が広がっている事に気づく。

天使、という単語が頭の中に自然と浮かび、和葉は少女の姿に目を奪われた。そして、少女が右手首を痛そうに押さえている事に遅れて気づく。

「あの、もしかして、右手、痛めたんですか？」

「少しだけ。でも、医務医の方が優秀なのですぐ治ります」

少女は何でもない風に言って、それからくるりと背中を向けた。

いつの間にか、光の翼は消えていた。

幻覚？

和葉が首を傾げた時、上から希の叫び声が届いた。

「和葉！ 大丈夫！」

上空を見上げると、希が降りてくるところだった。

「怪我は！」

「ん、大丈夫。あの人が助けてくれて」

遠ざかる背中を指差すと、希が微かに驚いた表情を見せた。

「あれって」

「凄く綺麗な女の子でね、一瞬天使かと思った。何か、光の翼みたいな幻も見えたし」

和葉が少し興奮気味に話すと、希は、いや、と何か言いかけて、途中で言葉を濁し、相槌を打った。

「うん、まあ、綺麗な子だよね」

「うん、本当に……」

和葉は頷いて、遠くから駆けつけてくるメカニックと医療チームに目を向けた。

そこで、ふと思う。

特別年金が出て、自分はここに居続けるかもしれない。

何故か、そう思った。

愛国心や、義務感からではない。ただ、何となくそう思った。

そして願わくば、もう一度あの少女に会えれば良いな、と和葉はぼんやりと考えながら、背中から機械翼を外し、希と並んでメカニックたちの方へ歩き始めた。

両手で抱えた機械翼は熱を持ち、温かかった。

7章 1話 桜井優(3)

あらゆる情報が遮断された世界。

外界との繋がりが断たれ、全てから独立した世界。

桜井優は、埃の積もった柊沙織の部屋にいた。

薄暗い部屋の中を見渡しながら、ゆっくりと部屋の奥に進んでいく。

全てが懐かしかった。

テレビも、ラジオも、パソコンもない。

外界を拒絶した世界。

優は目を瞑り、自分の中に沈む柊沙織を探した。

柊沙織は、見当たらない。

個としての彼女は既に消えてしまった。

優が、取りこんでしまった。

ゆっくりと瞼を開け、勉強机を見下ろす。

R a i s o n d e t r e 。

そう題されたノートが、あった。

そつと、表紙を捲る。

壊れないように、破れないように。

そつと、ノートを開く。

きみは、死にたい？

私は、死にたくない。

あまりにも短い、文字でのやりとり。

優はそのページをじっと眺め、それから耐えきれなくなったように次のページを開いた。

そこには、彼女がこれからやりたいことがリストになって、ずら

りと連なっていた。

いつか彼女が友人から借りた *Raison d'être* という本。その主人公を模倣するように、生きる指針が文字となって優の前に広がっていた。

優は、ごめんね、と小さく呟いて、優しくノートを閉じた、

そして、踵を返す。

出口に向かって、真つすぐと。

迷うことなく、進んでいく。

振り返る事なく、進んでいく。

そして閉ざされた玄関ドアを幽霊のように通り抜け、優は彼女の部屋から姿を消した。

怪物と戦う者は怪物にならないよう、気をつけなければならない。しかし、彼はあまりにも多くの怪物を殺し、そして、それ以上の力を望んだ。

人がゆっくりと死へ向かうように、少年はゆっくりと人の理を失い、そして本物の怪物になる事を選んだのだった。

最終章 存在理由

「全滅？」

狭い事務室に山田茂雄の呆然とした呟きが響き渡った。それに対し、姫野雪の鈴を転がす様な声が響き渡る。

「ああ、桜井優だ。奴の襲撃によって、拠点に集合していた全てのESP能力者が捕縛された。オーディンも、奴の手によって処理された。生き残っているのは、まだ合流していなかった私達だけだよ」
「馬鹿な！ 警察組織をたった一人であれだけ圧倒したオーディン

に加え、百を超えるESP能力者を無力化するなど不可能だ！ 第一、何故拠点割れた！ 軍やSIAの探知を防ぐ方法があると言っていたらどう！ 物資の搬入だってあれほど慎重に事を……！」

山田茂雄の怒鳴り声に、壁際に寄り合っていた七人のESP能力者たちが怯えた様子を見せる。

しかし、ただ一人、姫野雪だけは涼しい顔をして、正面から山田茂雄を眺めていた。

「確かに、オーデインの持つESPエネルギーは莫大なものだったが、それも目標に当たらなければ意味がない。桜井優は姿を見せないまま、ESPエネルギーで構成された人形を拠点内に次々と送り込み、一方的な制圧攻撃を行った。オーデインの持つ莫大な力も百を超えるESP能力者も、その攻撃の前には無意味でしかなかった」

「だから、何故桜井優は拠点を強襲することができた！ 欺瞞手段があると言っていたらどう！ 聞いていた話と違うぞ！」

「欺瞞手段は、無効化されなかった。ジャミングは正常に働いていた。だが、内通者がいたらしい。オーデインが用いていた精神感應能力。あれと同様の能力を桜井優も保持し、そして我々の拠点を割り出した。組織の規模が大きくなると、やはり防諜に限界が出てくるのか。それに、権力の一極集中にも限界があるらしい。頭を叩かれれば、それだけで組織全てが崩壊してしまう。幹部へ権力の委譲を行うべきだった。なるほど。いくつかのデータだけで組織運営を行う事は難しい」

楽しそうな雪の言葉に、山田茂雄がますます怒鳴り声をあげる。

「冷静に状況を分析している場合ではないだろう！ オーデインを失った以上、次の手は潰えた！ 終わりだ！ 全て、終わってしまった！」

雪は少し考えるように首を傾げて、山田茂雄を見つめた。

「強力な求心力によって、全てを呑み込んでいく。そういう方法はあまりにも原始的だったようだ。良いだろう。お前に、力を授けて

やる」

雪はそう言って、山田茂雄に右手をかざした。

「三番目の男性ESP能力。その役割を果たし、望むがままの混乱を起こすがいい」

閃光が走る。

そして、雪は言った。

「その堆積した悪意をばら撒くが良い。合理性を凌駕した感情の暴風雨を見せつけてみる」

山田茂雄の姿が閃光の中に消えていく。壁際に集まる少女たちが悲鳴をあげる。

雪はつまらなさそうにそれを眺めてから、恋焦がれる少女のように窓の向こうを見つめた。

「桜井優。どうしても我々には与さないつもりか。良いだろう。小細工は、終わりだ。圧倒的な暴力を前に、必ずお前をこちらに引きずり出してやるう」

ミルク色の透き通るような肌。

さらさらと揺れる琥珀色の髪。

どこか憂いを帯びた瞳。

黒い正装に包まれた驚くほど華奢な身体。

ふわりと全てを包むように大きく広がる翡翠の翼。

周囲を泳ぐ翡翠の蝶々たち。

酷く現実離れた幻想的な姿をした美少年は、幼さを残しながらもどこか大人びた微笑を湛え、驚くほど透き通る落ちついた声で語り始めた。

『はじめまして。私は特殊戦術大隊長、桜井優です』

あけぼのテレビのスタジオで撮影されたその映像と音声が、全国に流れていく。

『ご存じの通り、特殊戦術中隊は亡霊に対抗する為に、ESP能力者だけで構成された部隊です。私、そして特殊戦術中隊はESP能力者の権利を守るため、独自の自治組織を保持しています。つまり、オーデインの言う弾圧は、今現在、存在しません。私達には力があり、私達は亡霊と戦うために、必要とされている。私達は、弾圧を受けるほど弱い存在ではありません』

優はそれから、目を瞑った。

『オーデインの主張に私は同意することができません。彼のやり方は、不要な犠牲と混乱を招くだけでした。多くの罪なき人々、そして警察関係者が亡くなり、後には何も残らない。そこに、救いはありません』

優は祈るように両手を組み、そしてその身体を守るように翼を丸めた。

『今現在、ESP能力者が爆発的に増えています。原因は、わかりません。大きな混乱を覚えている方も、たくさんいらっしゃるでしょう。私はそうした混乱を覚えている方を、救う事が出来ます。私は、ESP能力を消去する事ができる。ESP能力を不要だと考える方がいれば、戦略情報局の特殊案件管理課までご連絡ください。連絡方法については後ほど別の方から説明があります』

そこで、僅かな沈黙が落ちた。

優の瞼がゆっくりと開き、鋭い光を放つ。

『同様に、ESP能力を悪用しようとする方がいれば、私はその力を強制的に奪いさります。私はESP能力によって、混乱が引き起こされる事を望みません。そして、ESP能力者が差別されることを許しません。私はESP能力が平和をもたらすことを望みます』

そして、優はゆっくりと言葉を続ける。

『私たちは、あらゆる政治的イデオロギーの干渉を受け付けません。現在の政治的空白期間はもちろん、今後どのような政党が現れたとしても、ESP能力者の権利を侵害することを許しません。全てのESP能力者が不当な扱いを受けないよう、私、桜井優は尽力いた

します。そして、それを願います』
そして、画面が切り替わる。

「これで構いませんか？」

優は撮影が終わった後、奥に控える上田中将に目を向けた。

「ええ、上出来です」

戦略情報局の金田はそう言って、笑う。

二・一四事件と名付けられた、あけぼのテレビ占拠事件から既に十日が経過していた。

少数の超能力者だけで警察の包囲が突破し、警察関係者だけでも死者七名、負傷者三十四名という莫大な被害を出し、日本中を震撼させたオーディン。

そのオーディンは一週間後、桜井優の手によって呆気なく葬られる事となった。

未曾有の事態にESP能力者を取り巻く状況がピックアップされ、連日オーディンやESP能力者の事が全国に流れた。

オーディンが死んでからは、その偶像化を防ぐため、SIAの意向を汲んだいくつかのシナリオが実行される事になった。造られたオーディンの過去、人間性、職業。あらゆる現実じみた情報が、オーディンの持つ奇妙な幻想性を打ち壊す為に、全国に流され続けた。そして、オーディンが人型の亡霊である、という事実は闇の中に消えた。

そして、今日。ほとぼりが冷める間を置かず、桜井優はオーディンの後継者が現れる事を防ぐため、メディアの前に姿を出したのだった。

「もう、休んで構いませんよ」

金田の言葉に頷いて、優はゆったりとスタジオを後にした。

長い通路を真っすぐ進む。

その先に、七人の少女たちが待っていた。

「意外と早かったじゃん！」

そのうちの一人、京子が声をあげる。

「僕の出番、短かったから」

優はそう言つて、背伸びした。

「ねええ、何か食べたいものあるう？」

間延びした声で、千夏が言う。優はチラリと他の少女達を見た。

「僕は特に。華ちゃんと詩織ちゃんは何かある？」

中でも特に自己主張が弱い華と詩織に目を向けると、二人は揃つて首を横に振つた。

「私は何でもいいかな」

「私も、特にこれといったものは……」

割り込むように、麗が一步前が出る。

「近くにすいてる喫茶店ありましたよ！」

「では、そこになさいますか？」

と、凜が優に目を向けてくる。

「うん。じゃ、そこで良い？」

優の問いに全員が縦に頷く。愛だけが斜めに首を振っていたが、全員がそれを無視する。その反応に愛が少し口を尖らせて、優を含めた数人がクスリと笑つた。

そして、八人はそろそろと移動を始めた。

優と七人の少女の奇妙な関係は、今のところ順調に続いている。

そして、バレンタインデー以降、優が奈々と身体を重ねる事はなくなつた。

明確な言葉のやりとりがあつて、そうなつたのではない。ただ、自然とそうなつた。

「全員一緒にエレベーター乗れるかな？」

歩きながら、華が不安そうに言う。

「階段で行く？」

「はい。いっぺんに乗ると迷惑になりそうです」

そろそろと移動しながら話していると、不意に優は嫌な気配を覚えて立ち止まつた。

「亡霊」

咄くと同時に、全員の小型端末からアラームが鳴る。

「うわ、だるう」

千夏が呟き、他のメンバーも同様に嫌そうな顔をしながら端末を取り出す。

「あ、ラッキー。出るの、第四小隊と第五小隊だけじゃん」と京子。

黒木舞が負傷した為に空席となっていた第四小隊長には元第一小隊の吉田葵が収まる事になった。同様に進藤咲が抜けた第五小隊長は元第六小隊の奥村音々が務める事になった。優以外には何も言わず姿を消した第二小隊長、姫野雪の代わりはまだ選定中で、空席となっている。

「じゃ、行こっか」

優はそう言って、歩き出した。それを囲むように、七人の少女たちも歩き始める。

二月二十四日。冬の終わりが近づいていた。

7章 2話 佐藤詩織(6)

人が壊れる瞬間を見た。

窓から見える夕焼け。

その夕焼けを隠すように、一つの影が天井から吊り下げられていた。

不気味なほどの静寂。

少女は、ただ立ち尽くす事しかできなかった。

ゆらりと、人影が揺れる。

少女は息を荒くして、後ずさった。

床が軋みをあげる。

少女は悲鳴をあげ、駆けだした。

薄暗い廊下を、全力で走り抜ける。

出口が、見えない。

どこまでも続く暗闇をただ走る。

そして少女は、一つの死の在り方を初めて知る事になった。

桜井優は勢いよく跳ねあがり、そして大きく息を吸った。

「桜井？」

不意に肩を掴まれ、身を引き寄せられる。目の前に、京子の顔があった。

「桜井？ どうしたの？」

優は荒い息を繰り返しながら、周囲を見渡した。

走行中のバス。ガラガラの前方の席で、保安部の男たちがこちらを見ている。

あけぼのテレビから本部に戻る途中だった事を思い出し、優はシートに背中を預け、深い溜め息をついた。

「ごめん。変な夢見て」

「ちよ、ほんとに大丈夫？ 変な汗かいてるよ」

「桜井くん？」

後ろから、華の声。優は、大丈夫、と小さく繰り返して息を整えた。

妙にリアルな夢だった。

まるで誰かの記憶を覗いたかのような、生々しい感覚。

しかし、柊沙織も、進藤咲も、そして本田真紀の記憶にも、あんなシーンはなかった。

優が今まで取りこんだ記憶とは違う情報。

優は小さく首を振って、額を抑えた。

「先輩？」

前の席から、麗が心配そうに顔を出す。優は、大丈夫、と同じように繰り返した。

ガタン、と小さな衝撃とともに、バスが亡霊対策室本部の正面ゲートを抜け、その敷地内に侵入する。

既に窓の外は暗く、本部前に広がるテニスコートの夜間照明が酷く目立っていた。

バスがエントランス前で停車する。

「わ、すっかり暗くなっちゃったなあ」

華が席から立ちあがり、前方の降口へ向かう。優も席から立ち上がろうとするが、通路側の席にいる京子が座ったままである為、出れない。

「京子？」

呼びかけると、京子は緩慢な動きで立ちあがった。

「帰ろっか」

呟くように言って、通路を歩いていく。

優は無言でそれに続いた。

バスを降りると、冷たい空気が優を包んだ。

さむっ、と後から下りてきた麗が悲鳴をあげる。

「さっさと中、入ろっよ」

どこか投げやりな様子で京子が言う。

その意見に誰も反対することなく、一行は空調の効いたエントランス・ホールへ入った。

「もうすぐ七時半」

抑揚のない声で愛が言う。

その言葉で、八人の間に奇妙な沈黙が広がった。

チラリと詩織に目を向ける。詩織はどこか落ち付かない様子でそわそわしていた。

「じゃ、私、部屋戻る」

京子が切りだし、それにならうように他の少女たちもパラパラと散っていく。

そして、最後に残された優は詩織をチラリと見やった。

「えっと、どうする……?」

「……お部屋で、ゆっくりしたいです」

詩織は表情を隠すように少し俯き加減になりながら、消え入るような声で言った。

優は少し考えるように間を置いて、それから口を開く。

「どっちの部屋が良い?」

「……桜井さんの……」

「じゃ、行こっか」

優は詩織の手をとって、歩き始めた。

これが、優と七人の少女の間で取り決められた事だった。

七時半から、毎日順番に一人と過ごす。

ずっと全員で固まっていたり、優が特定の誰かとばかり過ごす事がないように、という事で創られた決まりだったが、優にはあまり良い方法とは思えなかった。ただ、優はこれに代わる別の方法を知らない。

セキュリティゲートを抜け、寮棟に辿りつく。無言のまま部屋の前に向かい、優は鍵を開けた。

「はい、どうぞ」

ドアを開け、先に中へ入るように促す。

「……おじやまします」

詩織は緊張した様子でゆっくりと玄関に上がり、そして照明のスイッチを押した。真つ暗だった部屋に明かりが灯る。詩織が靴を脱ぐのを見ながら、優も玄関に入り、ドアを閉めた。

ドアの閉まる重い音が鳴り響いた後、部屋の中に静寂が訪れた。ゴソゴソと靴を脱ぐ音が妙に大きく響き渡る。

「まだ、チョコ残ってるんですね」

靴を脱いで部屋に上がるなり、詩織は部屋の隅に積まれたチョコを見て、どこか冷たい声で言った。

優がバレンタインに受け取ったチョコは、約一五〇個にもなった。約二〇〇人いる中隊に優一人しか男がいないという事実と、そのトップである事を考えれば妥当な数であるが、義理にしては些か凝ったチョコレートが多い事は否めない。毎日少しずつ消費しているものの、いまだ一向になくなる気配がなかった。

「……全部食べ終わる頃には、虫歯になるかも」

優はそう言っ、テーブルの前に腰を下ろした。チョコの山を見つめていた詩織も、釣られたように優の向かいに座る。

「桜井さん」

不意に詩織はテーブルの上に手を差し出した。

「……手、握っていただけませんか？」

「手？」

問い返して、詩織の手をそつと握る。同時に詩織の肩が小さく震えた。

「前にも言った通り、ずっと男性のことを怖いと思っていました」

突然の言葉に、優は詩織の顔を真つすぐ見つめた。

「桜井さんの事を初めて見た時も怖いと感じました。でも、そのうち、この人は私を傷つけない人だ、この人なら大丈夫だって、思えるようになりました。そう思えたのは、桜井さんが初めてでした」

詩織の余っていた手が、優の手を包み込む。そして詩織は微笑を浮かべた。

「桜井さんのこと、好きです。どうしようもないくらい、好きです。こうしてずっと触れていたいと、身勝手な事を考えてしまいます」
詩織はゆるりと立ちあがって、優に寄り添うように隣へ移動した。

「桜井さん……」

耳元に温かい吐息がかかる。

詩織の細い腕がおずおずと躊躇するように背中に回され、その小柄な身体が密着する。

「詩織ちゃん？」

「ギョってしてください」

甘えるように、どこか媚びた声で詩織が囁いた。

「一番じゃなくていいです。何番でも、良いです。だから、ギョってしてください。ずっとこうやって桜井さんと触れあっていたいです」

優は少し迷った後、詩織の背中に手を回した。詩織の身体から力が抜け、優にしなだれかかってくる。

「あつたかい……」

詩織はそう呟いて、瞳を閉じた。

優も何も言わず、目を瞑った。

そして、思う。

自分が人ではない事を知ったら、詩織はどう思うだろう、と。

姫野雪やオーデイン、そして亡霊と自身の正体。

その全てを、優は奈々以外に伝える事ができなかった。

この事実を中隊員に伝えるのはあまりにも残酷だと思った。

ESP能力は、亡霊から与えられたものに過ぎず、全ては亡霊の手のひらで踊っていただけ。

この闘争に、未来はない。

そんな事実など、伝えるべきではない、と思った。

「……桜井さん。このまま眠ってしまったても構いませんか？」

詩織が目を瞑ったまま言う。

優は、おやすみ、とだけ口にした。

その後、すぐに小さな寝息が静かな部屋に響き渡った。
疲れていたのだろうか。

詩織の身体をそっとベッドに運ぼうとするも、背中に回された腕が予想以上に固かった為、上手く詩織の身体を抱きかかえる事が出来ず、優は足でテーブルを無理矢理移動させ、空いたスペースに詩織を横たわらせた。

詩織に抱きつかれたまま、優もその隣で横になる。

詩織の腕が下敷きになりそうだった為、そっと片方の腕をどける。今度は簡単にほぐってきた。

そして、ベッドの上のブランケットに手を伸ばし、上からかける。そこで優の意識は途切れた。

猛暑日だった。

誰もいない公園で、少女は母と手を繋ぎ、ベンチに座っていた。

その日の母は、いつもより優しい笑みを浮かべていた。少女はそれが嬉しくて、ずっとニコニコしていた。

「ちゃん、のど乾かない？」

母はジュースを買いに行くと言って、ベンチから立ち上がった。

そして、少女を残して公園から出ていく。

残された少女は、ふと上空を見上げた。

鳥の群れが、上空を回っていた。

餌を探しているのだろうか。

あるいは、長い旅をしているのか。

ぼんやりと鳥を眺めていると、公園の前を犬連れの老婦人が通り、少女を見て不思議そうな顔をした。何となく少女は、ペコリと小さく頭を下げた。

老婦人が去ってから、再び空を見上げる。鳥の群れは、いなくなっていた。

暑い。

滑り台の影に移り、太陽光から逃れようとする。

母は戻ってこない。

喉が渴き、頭がぼんやりとした。

そのまま、時が過ぎるのを待つ。

いつしか強い日差しが弱まり、気温が僅かに下がり始めた。

酷く気分が悪く、少女はその場から動く事ができなくなっていた。

公園の街灯に明かりが灯る。

そして、霞む視界の向こうで、昏間に見た犬連れの老婦人が駆けよってくるのが見えた。

そのまま抱えられ、ペットボトルに入ったお茶を無理矢理口に流される。

上手く飲めなくて、口からお茶が溢れ、服を濡らした。

服を汚したら怒られる、と思った。

また、殴られる。

ごめんなさい。

老婦人が何かを言う。

聞こえない。

老婦人が、何かを叫ぶのがわかった。

公園の前を通りかかった数人が、駆けつけてくる。

一番来て欲しかった母の姿は、なかった。

優は目を覚ますと同時に、軽い頭痛を覚えて小さく呻いた。

「また、夢……」

部屋の明かりが点けっぱなしだった事にまず意識が向き、それから隣で詩織が寝息を立てている事に気づく。

床で寝たせいも、少し身体が痛い。

優は上半身を起こして、そっと詩織の腕をほどいた。

そして、トイレに行こうと立ち上がる。

その時、視界がゆらいだ。

全ての感覚が遠のいていくような、奇妙な感覚。

そして、遙か遠く、白流島から五つの影が飛び出したのがわかつ

た。

ゾクリ、と背筋に寒気が走る。

優は、白流島から飛び出したその気配に覚えがあった。

詩織を起こそうとした時、廊下から警報が響く。

そして、個人端末からもアラームが響き渡った。

視界の隅で詩織が驚いたように飛び起きる。

優は端末を開いて、顔を強張らせた。

端末は桜井優と各小隊長に対する招集命令。そして、パーソナル・

ネーム「イーグル」に類似した五体の亡霊の出現確認を告げていた。

7章 3話 神条奈々（18）

亡霊対策法に則り、亡霊対策室の為に特定の空域が譲られていく。そして、その静かな夜の空域を、四つの光が直進する。

特殊戦術大隊長、桜井優。加えて、第一小隊長、篠原華。第三小隊長、佐藤詩織。第六小隊長、白崎凜。

今回の出撃は、イーグルとの戦闘を経験した事があるこの四名に絞られている。

神条奈々は機動ヘリから送られてくる映像を見ながら、ヘッドセットに向けて口を開いた。

「イーグルは依然として五体が編隊を組んだまま秋田方面へ向かっている。予測衝突地点まで、後一〇分」

闇夜を四つの光が切り裂いていく。暗闇に捕まらないよう、高速で進んでいく。

奈々は目を奪われたように、その光景から目を離す事ができなかった。

「イーグルが五体とはいえ、優君の保有するESPエネルギーは既にあの頃の一〇倍以上になっています。頼りになりますが、高すぎる出力は彼の負担になるかもしれません」

隣から加奈の不安そうな声。奈々はチラリと加奈に目を向け、首を横に振った。

「勝てるか分からない戦いで、力を抑える訳にはいかない。彼の裁量に委ねるしかないわ」

そう言って、再び画面に目を戻す。

「イーグル、進路変更！こちらに向かっています」

電子オペレーターの報告。奈々は小さく息をつき、告げた。

「総員、兵装確認」

優達の動きが止まり、マニュアル通りの点検が始まる。

その間にも五体のイーグルは休むことなく直進を続ける。

「イーグル、加速。速度六〇〇！」

『対抗する為、高度を稼ぎます』

優の声とともに、四つの光が夜空に舞いあがっていく。

「衝突まで後三分！」

「構え」

「イーグル高度上昇！」

機動ヘリからの映像に、はっきりとイーグルの姿が浮かびあがる。
「撃て！」

奈々の叫び声とともに、翡翠の光が暗闇を切り裂く。同時に、五体のイーグルが散開し、回避するのが見えた。

「高エネルギー反応！」

「来ます！」

イーグルから閃光が走り、光球が飛び出す。同時に奇妙な放物線を描いて、華へと進路を変える。

「優君！ デコイを！」

叫ぶ。

同時に、優の身体から翡翠の光が拡散した。デコイは、出なかった。

「え？」

隣から加奈の上擦った声。奈々も、何が起きたのかわからなかった。

優の身体から、凄まじい勢いで翡翠の霧のようなものが広がっていく。そして、誘導弾に追いかけられていた華は、逃げるようにその霧の中へ突入した。直後、華を追って霧の中に突入した誘導弾が目標を見失ったようにフラフラと回転を始め、消滅する。

何が起こったのか、わからなかった。

奈々の理解が追いつかないまま、イーグルから第二の誘導弾が放たれる。しかし、それも優が放った霧の中に突入すると同時に、コントロールを失ったようにフラフラと彷徨った後、消滅した。

「……ESPエネルギーを用いた欺瞞防御！ あの霧がチャフの役

割を果たしているんですね」

加奈が納得したように言うのを聞きながら、奈々は息を呑んだ。

「……チャフ回廊だわ。いえ、もっと巨大な、チャフ領域を築いている。なるほど。フレアのような使い捨てのデコイを持ちいるよりは、エネルギーが許す限りこちらの方が効率が良い」

かつて、優はESPエネルギーの塊を打ちだすことで、誘導弾の狙いをデコイにずらす事に成功した。赤外線誘導ミサイルを特殊な燃焼物によって逸らす、フレアと呼ばれるデコイと同様の原理である。

対してチャフはフレアと同様にリーダー照射型の敵ミサイルを回避する為の罠に用いられるが、極小の金属片で構成されている為、雲のようにその場に残り続ける。

イーグルの放った誘導弾は、イーグル以外のESP波形を持つ一定以上のESPエネルギーを狙う、という簡単な追尾条件しか設定されていないのだろう。密度が薄いものの、巨大なESPエネルギーの塊となった翡翠の霧自体を目標と定めているようだった。

「これなら……！」

興奮した様子で加奈が呟く間にも、優を中心とした翡翠の霧が空域を呑み込んでいく。

その霧の中から何の前触れもなく凜と詩織が飛び出した。そして付近を旋回していたイーグルに向かって集中攻撃を始める。他のイーグルがそれを援護しようと動き出すと、霧の中から華が飛び出した。

統率のとれた良い動きだ。そう思いながら、ある事に気付く。

先程から、優達は通信機で連絡を取り合っていない。

恐らく、優が以前に見せた精神感應能力を用いているのだろう。

彼らは、最早言葉を必要としない。

それ以上の意思疎通能力を有している。

特殊戦術中隊の持つポテンシャルは、奈々にも正確にわからなくなってきた。

「凄い……」

加奈の感嘆の声。

優達は、高度に統率された有機的な動きを見せていた。

まるで一つの生物のような無駄のない連携で、五体のイーグルを圧倒している。

奈々は啞然とディスプレイを眺めた。

翡翠色の巨大なESPエネルギーの回廊が、夜明け前の夜空を照らし、そして切り裂いていく。

夜明けさえもねじ伏せるように、それ以上の輝きが闇を吹き飛ばしていく。

奈々は息をするのも忘れて、その光景に見入った。

激しい閃光とともに、一体のイーグルが堕ちていく。

その瞬間、奈々は全てを忘れて歓声をあげた。

亡霊の強大さも、ESP能力のルーツも、絶望的な状況の全てがどうでもよくなった。

彼は、希望そのものだ。

駒も、盤も、ルールも。例えその全てを亡霊が用意したのだとしても、彼はそれら全てを吹き飛ばし、その手で勝利を掴み取る事になるだろう。

無条件でそう信じてしまうほど、今の桜井優の動きは圧倒的なものだった。

二体目のイーグルが墮ちる。

「敵、ロスト！」

夜明けの明かりが、霞んで見えた。

狭い事務所。

その窓に赤い目をしたカラスがとまっている。

姫野雪はカラスを見下ろし、警戒するように目を細めた。

「何を考えている？」

カラスは何も答えない。

「桜井優のESPエネルギー保有量は上がり続けている。パーソナル・ネーム、イーグル五体では相手にならない。あれでは、奴を屈服させる事はできない。それくらい、理解しているだろう？」

外から、子どもが遊ぶ声が聞こえる。

雪は苛ついたように、髪をかきあげた。

「そもそも、何故いまだにユニットの数を増やし続けている？ オーデインを失った以上、内乱を引き起こす事は不可能だ。これ以上ユニットを増やしても、桜井優の力が増大するだけだろうに」

カラスは身じろぎ一つせず、雪を見つめて動かない。

「何を企んでいる？ もしや、私の行動データをとるつもりか？」

いや、お前はそこまで存在理由に忠実ではあるまい」

雪は額を抑え、そしてカラスを睨みつけた。

「良い。お前がそのつもりなら、私は勝手に動くぞ。私がプールしていた全てをここで使う。力づくで桜井優を引きずりこみ、その後、終わりの時まで観測を続ける。何を企んでいるか知らないが、これならお前も異論はないだろう？」

カラスはじつと雪を見つめた後、無言で飛び去った。

残された雪はカラスが向かった朝焼けが広がる空を睨み、唇を噛んだ。

「化け物め」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7324j/>

Raison d'etre

2012年1月1日01時12分発行